北埋調報115

千歳市

キウス５遺跡(３)

—北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成８年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

北埋調報115

千歳市

キウス5遺跡（3）

北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

平成8年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター



1．Ⅳ群ｂ類土器（1）



2．Ⅳ群ｂ類土器（2）



1．Ⅴ群c類土器



2．Ⅵ群土器

例　言

1　本書は、財団法人北海道埋蔵文化財センターが、平成7年度に実施した北海道横断自動車道（千歳～夕張）建設用地内における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。

2　本書の執筆は高橋和樹、皆川洋一、藤原秀樹、澤田　健、中山昭大、佐藤　剛、編集は皆川洋一が行った。

整理作業の担当者は下記のとおりである。

土器－皆川洋一
石器・木製品・鉄製品－澤田　健
石製品・土製品－皆川洋一、澤田　健
遺構－皆川洋一、澤田　健、佐藤　剛
写真－皆川洋一、中山昭大
火山灰分析－花岡正光

文責者は文末に記した。

3　各種分析等は下記に依頼した。

螢光X線分析　京都大学原子炉実験所　藁科哲男
^{14}C年代測定　京都産業大学　山田　治
テフラEPMA分析　ジオサイエンス株式会社
テフラの鉱物屈折率測定　古環境研究所株式会社

4　赤色顔料の分析については、北海道開拓記念館の小林幸雄氏にお願いした。
動物遺存体の同定については、千歳市教育委員会の高橋　理氏にお願いした。
鉄器の金属学的解析は岩手県立博物館の赤沼英男氏にお願いした。
UP-138出土の人骨については、札幌医科大学の石田　肇氏にお願いした。
UP-138出土の刀は（財）日本美術刀剣保存協会評議員の佐藤矩康氏に執筆をお願いした。

5　調査にあたっては、下記の諸機関、各氏から指導・助言をいただいた。（順不同・敬称略）
文化庁、北海道教育委員会、奈良県河合町教育委員会　吉村公男、大阪府文化財調査センター山本建、北海道開拓記念館　野村崇・平川善祥・山田悟郎・右代啓視、千歳市埋蔵文化財センター大谷敏三・田村俊之・高橋理・豊田宏良・久原直利・遠藤昭浩・松田淳子、恵庭市教育員会　上屋真一・松谷純一・森秀之・佐藤幾子、北広島町教育委員会　遠藤龍畝、苫小牧市教育委員会　佐藤一夫・宮夫靖夫・工藤肇・渡辺俊一・二階堂啓也・鈴木耕栄・赤石慎三、札幌市教育委員会加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久、由仁町教育委員会　土肥研晶、平取町教育委員会　森岡健治、余市町教育委員会　宮宏明、倶知安町教育委員会　矢吹俊男、富良野市教育委員会　杉浦重信、芦屋市星の降る里百年記念館　長谷山隆博・畠山英二、釧路市立郷土博物館石川朗、札幌市横山英介、長沼町文化財保護委員長　伊藤兼平、北海道文化財保護協会　竹田輝雄・長谷川徹、スイス　ヌーシャテル大学　フィリップダレー

記号等の説明

1. 遺構の表記には以下に示す記号を用いた。
   H:住居跡　HP:住居跡に伴うピット　HF:住居跡に伴う焼土もしくは炉　P:土壙
   SP:小ピット　TP:Tピット　F:焼土　C:炭化物集中　S:集石　FC:フレイク・チップ集中
   なおTa-c火山灰より上位の遺構はU、またTa-cより下位の遺構にはLの文字を遺構記号に冠して遺構の形成された層位を区別した。
2. 遺構図中の細数字は標高(単位m)である。
3. 平面図の方位記号は真北を示す。遺構や遺物出土状況の平面図は調査方格(グリッド)を縦横の基準としてAラインが図の天、1ラインが図の左に来るように作成した。従って、方位のない平面図はグリッド設定図（1章）の方位による。
4. 平面図中の＋は調査方格(グリッド)の交点を示す。交点の傍らに記した記号(M-273、G-275-a、S-271-b-4など)はその交点の右下に位置する区画の名称に一致している。
5. 図の縮尺は次のように統一した。また例外なくスケールバーを添えて縮尺を明らかにしてある。
   土層断面図:50分の1他　遺構図:40分の1　遺物出土状況詳細図:10分の1　土器実測図:3分の1
   土器拓影:3分の1　剥片石器類・土製品・石製品実測図:2分の1　礫石器類実測図:3分の1または4分の1
6. 遺構図・遺物出土状況図では次のような記号によって遺物の出土位置を示している。
   ●:土器　★:剥片石器　▲:その他の剥片石器類
   :礫石器　■:礫・礫片　▼:その他の遺物
   なお必要に応じて白抜き記号を併用したが遺物の内容は同じである。また、この記号以外のものに関しては図中に説明を加えている。
7. 文中での遺構の規模は「確認面での長軸長×短軸長／床(底)面での長軸長×短軸長／確認面からの最大深」の要領で記した。一部壊されているものは現存長を( )で示し、不明の場合は－の記号もしくは無数値で示した。
8. 土層の色調は『新版標準土色帳』(小山・竹原　1967)に従って記載した。
9. 土層の記述には下記の記号、略称を用いた場合がある。
   樽前a降下軽石堆積物:Ta-a、白頭山-苫小牧火山灰:B-Tm、樽前c降下火砕堆積物:Ta-c、恵庭a降下軽石堆積物:En-a、恵庭a降下軽石堆積物起源のローム層:En-L、恵庭a降下軽石堆積物のうち未風化の軽石礫:En-P
10. 遺構覆土等における土壌・堆積物の混在状態を下記のように表現した場合がある。
    A＋B:AとBがほぼ等量に混じる。A＞B:AにBが少量混じる。A≫B:AにBが微量混じる。
11. 土器の掲載番号は整理番号と共通のものを使用し、本書のⅢ、Ⅳ、Ⅵ章、写真図版やその他写真台帳、収納台帳にある土器番号は全て共通のものを示している。
    0001～の百番台が復元されたⅠ～Ⅶ群土器、1001～の一千番台が破片のⅠ群土器、2001～の二千番台が破片のⅡ群土器、3001～の三千番台が破片のⅢ群土器、4001～の四千番台と40001～の四万番台が破片のⅣ群土器、5001～の五千番台が破片のⅤ群土器、6001～の六千番台が破片のⅥ群土器に各々に当てた整理番号である。
12. 土器の大きさは最大高、最大幅、最大径、石器・土製品・石製品等の大きさは最大長、最大幅、最大厚の順で記し、破損しているものについてはその数値を( )で括ってある。

目　次

口絵（カラー写真）
例言
記号等の説明
Ⅰ　調査の概要 1
1　調査要項 1
2　調査体制 1
3　調査の経緯 1
4　調査区の設定 3
5　遺物の分類 6
(1) 土器 6
(2) 石器・石製品 7
(3) 土製品 9
(4) 木製品 9
(5) 自然遺物 9
Ⅱ　地形と地層 15
1　立地と環境 15
2　土層 15
Ⅲ　Ta-c上位の遺構 27
1　竪穴住居跡 27
2　土壙 29
3　小ピット 73
4　焼土 76
5　炭化物集中 84
6　集石 86
Ⅳ　Ta-c下位の遺構 93
1　竪穴住居跡 93
2　土壙 115
3　Tピット 191
4　小ピット 197
5　焼土 201
6　炭化物集中 264
7　集石 267
8　フレイク・チップ集中 267
Ⅴ　低位段丘の調査 271
1　「東の沢」の調査 271
2　「西の沢」の調査 283
Ⅵ　包含層の遺物 285
1　土器 285
(1) Ⅰ群土器 290
(2) Ⅱ群土器 290
(3) Ⅲ群土器 290
(4) Ⅳ群土器 291
(5) Ⅴ群土器 298
(6) Ⅵ群土器 305
(7) Ⅶ群土器 308
2　石器・石製品 413
(1) Ⅲ・Ⅳ層 413
(2) Ⅴ・Ⅵ層 415
3　土製品 448
4　包含層出土の鉄製品 450
5　木製品 451
Ⅶ　自然科学分析 457
1　液体シンチュレーション14C年代測定 457
2　キウス5遺跡出土の勾玉の産地分析 459
3　テフラEPMA分析委託報告書 469
4　北海道、キウス5遺跡のテフラの鉱物屈折率測定 482
5　キウス5遺跡出土の赤色顔料 485
6　キウス5遺跡A地点出土の動物遺存体 487
7　キウス5・7遺跡のテフラについて 491
8　千歳市キウス5遺跡　UP-138　出土人骨について 497
9　千歳市キウス5遺跡出土刀 499
10　キウス5遺跡出土鉄器の金属学的解析 503
Ⅷ　各種一覧資料 519
Ⅸ　成果と問題点 619
写真図版
報告書抄録

挿図目次

Ⅰ　調査の概要 1

図Ⅰ－1　遺跡の位置 2
図Ⅰ－2　遺跡周辺の地形 4
図Ⅰ－3　調査区の設定 5
図Ⅰ－4　Ⅲ層の地形と遺構 10
図Ⅰ－5　Ⅲ層で調査された遺構の名称 11
図Ⅰ－6　Ⅴ層の地形と遺構 12
図Ⅰ－7　Ⅴ層で調査された遺構の名称 13

Ⅱ　地形と地層 13

図Ⅱ-8　南北メインセクション図（1） 17
図Ⅱ-9　南北メインセクション図（2） 19
図Ⅱ-10　南北メインセクション図（3） 20
図Ⅱ-11　南北メインセクション図（4） 21
図Ⅱ-12　東西メインセクション図（1） 22
図Ⅱ-13　東西メインセクション図（2） 23
図Ⅱ-14　東西メインセクション図（3） 24
図Ⅱ-15　東西メインセクション図（4） 25
図Ⅱ-16　西区セクション図 26

Ⅲ　Ta-c 上位の遺構 27

図Ⅲ-1　UH-101 27
図Ⅲ-2　UH-101 の遺物 28
図Ⅲ-3　UP-101・102・103 30
図Ⅲ-4　UP-103 の遺物 31
図Ⅲ-5　UP-104 と遺物 32
図Ⅲ-6　UP-104 の遺物 33
図Ⅲ-7　UP-105 と遺物 35
図Ⅲ-8　UP-105 の遺物 36
図Ⅲ-9　UP-106 と遺物 37
図Ⅲ-10　UP-107 と遺物 38
図Ⅲ-11　UP-108・109・110 39
図Ⅲ-12　UP-111 と遺物 41
図Ⅲ-13　UP-112 42
図Ⅲ-14　UP-112 の遺物 43
図Ⅲ-15　UP-113・114 と遺物 44
図Ⅲ-16　UP-115 と遺物 46
図Ⅲ-17　UP-115 の遺物 47
図Ⅲ-18　UP-116 と遺物 48
図Ⅲ-19　UP-117・118 と遺物 49
図Ⅲ-20　UP-119 と遺物 50
図Ⅲ-21　UP-120 と遺物 53
図Ⅲ-22　UP-121・123・124 と遺物 54
図Ⅲ-23　UP-126 と遺物 55
図Ⅲ-24　UP-125・127・128 57
図Ⅲ-25　UP-129・130 58
図Ⅲ-26　UP-131・132 と遺物 60
図Ⅲ-27　UP-131 の遺物 61
図Ⅲ-28　UP-133・134・135 と遺物 62
図Ⅲ-29　UP-136・137 と遺物 63
図Ⅲ-30　UP-138・140 と遺物 65
図Ⅲ-31　UP-139 と遺物 67
図Ⅲ-32　UP-142 ～ 148 69
図Ⅲ-33　UP-142 ～ 148 と遺物 70
図Ⅲ-34　UP-149・150・151 と遺物 71
図Ⅲ-35　USP-101 ～ 104 73
図Ⅲ-36　USP-105 ～ 109 74
図Ⅲ-37　USP-110・111・112 75
図Ⅲ-38　UF-101・102・103 77
図Ⅲ-39　UF-104・105・106・107 78
図Ⅲ-40　UF-108・109 80
図Ⅲ-41　UF-110・111・112 と遺物 81
図Ⅲ-42　UF-113・114・115・116 83
図Ⅲ-43　Ⅲ層の炭化物集中（UC） 85
図Ⅲ-44　US-101 ～ 103 87
図Ⅲ-45　US-104・105・106 と遺物 89
図Ⅲ-46　US-107・108・109 と遺物 90
図Ⅲ-47　US-110・111・113・114 と遺物 91

Ⅳ　Ta-c 下位の遺構 93

図Ⅳ-1　LH-001 の遺物 93
図Ⅳ-2　LH-001 94
図Ⅳ-3　LH-002 95
図Ⅳ-4　LH-002 の遺物（1） 96

図Ⅳ-5　LH-002の遺物（2）…… 97
図Ⅳ-6　LH-002の遺物（3）…… 98
図Ⅳ-7　LH-006…… 100
図Ⅳ-8　LH-006の遺物…… 101
図Ⅳ-9　LH-101…… 102
図Ⅳ-10　LH-101と遺物…… 103
図Ⅳ-11　LH-102…… 104
図Ⅳ-12　LH-102の遺物（1）…… 106
図Ⅳ-13　LH-102の遺物（2）…… 107
図Ⅳ-14　LH-103と遺物…… 108
図Ⅳ-15　LH-104…… 110
図Ⅳ-16　LH-104の遺物…… 111
図Ⅳ-17　LH-106…… 112
図Ⅳ-18　LH-106の遺物…… 113
図Ⅳ-19　LH-107と遺物…… 114
図Ⅳ-20　LP-101・102・103・104と遺物…… 116
図Ⅳ-21　LP-105と遺物…… 118
図Ⅳ-22　LP-106・107と遺物…… 119
図Ⅳ-23　LP-109・110…… 120
図Ⅳ-24　LP-109の遺物…… 121
図Ⅳ-25　LP-111と遺物…… 122
図Ⅳ-26　LP-112と遺物…… 123
図Ⅳ-27　LP-114・116と遺物…… 124
図Ⅳ-28　LP-117と遺物…… 126
図Ⅳ-29　LP-118…… 127
図Ⅳ-30　LP-118の遺物…… 128
図Ⅳ-31　LP-119…… 129
図Ⅳ-32　LP-119・120・121と遺物…… 130
図Ⅳ-33　LP-122と遺物…… 132
図Ⅳ-34　LP-123・124・125と遺物…… 133
図Ⅳ-35　LP-128・129・130・135…… 135
図Ⅳ-36　LP-133・134と遺物…… 136
図Ⅳ-37　LP-138・139と遺物…… 138
図Ⅳ-38　LP-140・141と遺物…… 140
図Ⅳ-39　LP-142と遺物…… 141
図Ⅳ-40　LP-143・145…… 143
図Ⅳ-41　LP-146と遺物…… 144
図Ⅳ-42　LP-147…… 145
図Ⅳ-43　LP-150・151・154・155と遺物…… 147
図Ⅳ-44　LP-156・157と遺物…… 149
図Ⅳ-45　LP-158・159・162と遺物…… 150
図Ⅳ-46　LP-163・164・165・166と遺物…… 152
図Ⅳ-47　LP-167と遺物…… 154
図Ⅳ-48　LP-168・169・170と遺物…… 155
図Ⅳ-49　LP-171・172・173…… 157
図Ⅳ-50　LP-171・172の遺物…… 158
図Ⅳ-51　LP-174・176と遺物…… 160
図Ⅳ-52　LP-175と遺物…… 161
図Ⅳ-53　LP-177・179・180と遺物…… 162
図Ⅳ-54　LP-181・182と遺物…… 164
図Ⅳ-55　LP-183・184と遺物…… 166
図Ⅳ-56　LP-185と遺物…… 167
図Ⅳ-57　LP-186・187・188・189・190…… 168
図Ⅳ-58　LP-191と遺物…… 170
図Ⅳ-59　LP-191の遺物…… 171
図Ⅳ-60　LP-193・194・196と遺物…… 173
図Ⅳ-61　LP-197・198と遺物…… 175
図Ⅳ-62　LP-199・200・201～203…… 177
図Ⅳ-63　LP-199・200の遺物…… 178
図Ⅳ-64　LP-204～207…… 179
図Ⅳ-65　LP-208・210と遺物…… 181
図Ⅳ-66　LP-211と遺物…… 183
図Ⅳ-67　LP-212・213・214・217・218と遺物…… 184
図Ⅳ-68　LP-215・216・220と遺物…… 187
図Ⅳ-69　LP-219・223と遺物…… 189
図Ⅳ-70　LP-224・225…… 190
図Ⅳ-71　TP-101…… 191
図Ⅳ-72　TP-102・103…… 192
図Ⅳ-73　TP-104…… 193
図Ⅳ-74　TP-105と遺物…… 194
図Ⅳ-74　TP-106と遺物…… 195
図Ⅳ-76　TP-107と遺物…… 196
図Ⅳ-77　Ⅴ層の小ピット（1）と遺物…… 198
図Ⅳ-78　Ⅴ層の小ピット（2）…… 200
図Ⅳ-79　Ⅴ層の焼土（1）…… 201
図Ⅳ-80　Ⅴ層の焼土（2）…… 202

図Ⅳ-81　Ⅴ層の焼土（3）…… 204
図Ⅳ-82　Ⅴ層の焼土（4）…… 205
図Ⅳ-83　Ⅴ層の焼土（5）…… 206
図Ⅳ-84　Ⅴ層の焼土（6）…… 208
図Ⅳ-85　Ⅴ層の焼土（7）…… 209
図Ⅳ-86　Ⅴ層の焼土（8）…… 210
図Ⅳ-87　Ⅴ層の焼土（9）…… 211
図Ⅳ-88　Ⅴ層の焼土（10）…… 212
図Ⅳ-89　Ⅴ層の焼土（11）…… 214
図Ⅳ-90　Ⅴ層の焼土（12）…… 215
図Ⅳ-91　Ⅴ層の焼土（13）…… 216
図Ⅳ-92　Ⅴ層の焼土（14）…… 217
図Ⅳ-93　Ⅴ層の焼土（15）…… 220
図Ⅳ-94　Ⅴ層の焼土（16）…… 221
図Ⅳ-95　Ⅴ層の焼土（17）…… 222
図Ⅳ-96　Ⅴ層の焼土（18）…… 223
図Ⅳ-97　Ⅴ層の焼土（19）…… 225
図Ⅳ-98　Ⅴ層の焼土（20）…… 227
図Ⅳ-99　Ⅴ層の焼土（21）…… 228
図Ⅳ-100　Ⅴ層の焼土（22）…… 229
図Ⅳ-101　Ⅴ層の焼土（23）…… 230
図Ⅳ-102　Ⅴ層の焼土（24）…… 232
図Ⅳ-103　Ⅴ層の焼土（25）…… 234
図Ⅳ-104　Ⅴ層の焼土（26）…… 235
図Ⅳ-105　Ⅴ層の焼土（27）…… 238
図Ⅳ-106　Ⅴ層の焼土（28）…… 239
図Ⅳ-107　Ⅴ層の焼土（29）…… 242
図Ⅳ-108　Ⅴ層の焼土（30）…… 244
図Ⅳ-109　Ⅴ層の焼土（31）…… 246
図Ⅳ-110　Ⅴ層の焼土（32）…… 247
図Ⅳ-111　Ⅴ層の焼土（33）…… 249
図Ⅳ-112　Ⅴ層の焼土（34）…… 250
図Ⅳ-113　Ⅴ層の焼土（35）…… 253
図Ⅳ-115　Ⅴ層の焼土（37）…… 257
図Ⅳ-116　Ⅴ層の焼土（38）…… 259
図Ⅳ-117　Ⅴ層の焼土（39）…… 260
図Ⅳ-118　Ⅴ層の焼土（40）…… 262
図Ⅳ-119　LC-101,102,103,105,106…… 265
図Ⅳ-120　LC-107・108・109と遺物…… 266
図Ⅳ-121　LS-101・102と遺物…… 268
図Ⅳ-122　LS-101・102と遺物…… 269

Ⅴ　低位段丘の調査…… 271
図Ⅴ-1　東の沢Ⅲ層上面の地形と遺構位置図…… 274
図Ⅴ-2　平成8年度調査区域南北土層断面図…… 275
図Ⅴ-3　旧河道位置図図…… 275
図Ⅴ-4　Ⅲ-3c層旧河道焼け材・流木出土状況図…… 277
図Ⅴ-5　Ⅴ-3層下面の地形…… 278
図Ⅴ-6　平成7年度調査区域
Ⅴ-3層旧河道木製品出土状況図…… 279
図Ⅴ-7　平成8年度調査区域Ⅴ-3層旧河道
木製品・焼け材・流木出土状況図…… 280
図Ⅴ-8　平成8年度調査区域最終面の地形…… 281
図Ⅴ-9　平成8年度調査東西土層断面図…… 282
図Ⅴ-10　炭化材集中の出土状況…… 283
図Ⅴ-11「西の沢」の地形と土層断面の位置…… 283
図Ⅴ-12「西の沢」土層断面図…… 284

Ⅵ　包含層の遺物…… 285
1　土器…… 285
図Ⅵ-1-1　Ⅰ群土器分布図…… 286
図Ⅵ-1-2　Ⅱ・Ⅲ群土器分布図…… 287
図Ⅵ-1-3　Ⅳ・Ⅴ群土器分布図…… 288
図Ⅵ-1-4　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ群土器分布図…… 289
図Ⅵ-1-5　Ⅰ群土器（1）…… 309
図Ⅵ-1-6　Ⅰ群土器（2）…… 310
図Ⅵ-1-7　Ⅱ群土器…… 311
図Ⅵ-1-8　Ⅲ群土器（1）…… 311
図Ⅵ-1-9　Ⅲ群土器（2）…… 312
図Ⅵ-1-10　Ⅳ群a類・Ⅳ群b類土器（1）…… 313
図Ⅵ-1-11　Ⅳ群b類土器（2）…… 314
図Ⅵ-1-12　Ⅳ群b類土器（3）…… 315
図Ⅵ-1-13　Ⅳ群b類土器（4）…… 316
図Ⅵ-1-14　Ⅳ群b類土器（5）…… 317
図Ⅵ-1-15　Ⅳ群b類土器（6）…… 318
図Ⅵ-1-16　Ⅳ群b類土器（7）…… 319
図Ⅵ-1-17　Ⅳ群b類土器（8）…… 320
図Ⅵ-1-18　Ⅳ群b類土器（9）…… 321
図Ⅵ-1-19　Ⅳ群b類土器（10）…… 322

図Ⅵ-1-20　Ⅳ群ｂ類土器（11）……323
図Ⅵ-1-21　Ⅳ群ｂ類土器（12）……324
図Ⅵ-1-22　Ⅳ群ｂ類土器（13）……325
図Ⅵ-1-23　Ⅳ群ｂ類土器（14）……326
図Ⅵ-1-24　Ⅳ群ｂ類土器（15）……327
図Ⅵ-1-25　Ⅳ群ｂ類土器（16）……328
図Ⅵ-1-26　Ⅳ群ｂ類土器（17）……329
図Ⅵ-1-27　Ⅳ群ｂ類土器（18）……330
図Ⅵ-1-28　Ⅳ群ｂ類土器（19）……331
図Ⅵ-1-29　Ⅳ群ｂ類土器（20）……332
図Ⅵ-1-30　Ⅳ群ｂ類土器（21）……333
図Ⅵ-1-31　Ⅳ群ｂ類土器（22）……334
図Ⅵ-1-32　Ⅳ群ｂ類土器（23）……335
図Ⅵ-1-33　Ⅳ群ｂ類土器（24）……336
図Ⅵ-1-34　Ⅳ群ｂ類土器（25）……337
図Ⅵ-1-35　Ⅳ群ｂ類土器（26）……338
図Ⅵ-1-36　Ⅳ群ｂ類土器（27）……339
図Ⅵ-1-37　Ⅳ群ｂ類土器（28）……340
図Ⅵ-1-38　Ⅳ群ｂ類土器（29）……341
図Ⅵ-1-39　Ⅳ群ｃ類土器（1）……342
図Ⅵ-1-40　Ⅳ群ｃ類土器（2）……343
図Ⅵ-1-41　Ⅳ群ｃ類土器（3）……344
図Ⅵ-1-42　Ⅳ群ｃ類土器（4）……345
図Ⅵ-1-43　Ⅳ群ｃ類土器（5）……346
図Ⅵ-1-44　Ⅳ群ｃ類土器（6）……347
図Ⅵ-1-45　Ⅳ群ｃ類土器（7）……348
図Ⅵ-1-46　Ⅳ群ｃ類土器（8）……349
図Ⅵ-1-47　Ⅳ群ｃ類土器（9）……350
図Ⅵ-1-48　Ⅳ群ｃ類土器（10）……351
図Ⅵ-1-49　Ⅳ群ｃ類土器（11）……352
図Ⅵ-1-50　Ⅴ群ｃ類土器（1）……353
図Ⅵ-1-51　Ⅴ群ｃ類土器（2）……354
図Ⅵ-1-52　Ⅴ群ｃ類土器（3）……355
図Ⅵ-1-53　Ⅴ群ｃ類土器（4）……356
図Ⅵ-1-54　Ⅴ群ｃ類土器（5）……357
図Ⅵ-1-55　Ⅴ群ｃ類土器（6）……358
図Ⅵ-1-56　Ⅴ群ｃ類土器（7）……359
図Ⅵ-1-57　Ⅴ群ｃ類土器（8）……360
図Ⅵ-1-58　Ⅴ群ｃ類土器（9）……361
図Ⅵ-1-59　Ⅴ群ｃ類土器（10）……362
図Ⅵ-1-60　Ⅴ群ｃ類土器（11）……363
図Ⅵ-1-61　Ⅴ群ｃ類土器（12）……364
図Ⅵ-1-62　Ⅴ群ｃ類土器（13）……365
図Ⅵ-1-63　Ⅴ群ｃ類土器（14）……366
図Ⅵ-1-64　Ⅴ群ｃ類土器（15）……367
図Ⅵ-1-65　Ⅴ群ｃ類土器（16）……368
図Ⅵ-1-66　Ⅴ群ｃ類土器（17）……369
図Ⅵ-1-67　Ⅴ群ｃ類土器（18）……370
図Ⅵ-1-68　Ⅴ群ｃ類土器（19）……371
図Ⅵ-1-69　Ⅴ群ｃ類土器（20）……372
図Ⅵ-1-70　Ⅴ群ｃ類土器（21）……373
図Ⅵ-1-71　Ⅴ群ｃ類土器（22）……374
図Ⅵ-1-72　Ⅴ群ｃ類土器（23）……375
図Ⅵ-1-73　Ⅴ群ｃ類土器（24）……376
図Ⅵ-1-74　Ⅴ群ｃ類土器（25）……377
図Ⅵ-1-75　Ⅴ群ｃ類土器（26）……378
図Ⅵ-1-76　Ⅴ群ｃ類土器（27）……379
図Ⅵ-1-77　Ⅴ群ｃ類土器（28）……380
図Ⅵ-1-78　Ⅴ群ｃ類土器（29）……381
図Ⅵ-1-79　Ⅴ群ｃ類土器（30）……382
図Ⅵ-1-80　Ⅴ群ｃ類土器（31）……383
図Ⅵ-1-87　Ⅴ群ｃ類土器（32）……384
図Ⅵ-1-82　Ⅴ群ｃ類土器（33）……385
図Ⅵ-1-83　Ⅴ群ｃ類土器（34）……386
図Ⅵ-1-84　Ⅴ群ｃ類土器（35）……387
図Ⅵ-1-85　Ⅴ群ｃ類土器（36）……388
図Ⅵ-1-86　Ⅴ群ｃ類土器（37）……389
図Ⅵ-1-87　Ⅵ群深鉢型土器（1）……390
図Ⅵ-1-88　Ⅵ群土器（2）……391
図Ⅵ-1-89　Ⅵ群土器（3）……392
図Ⅵ-1-90　Ⅵ群土器（4）……393
図Ⅵ-1-91　Ⅵ群土器（5）……394
図Ⅵ-1-92　Ⅵ群土器（6）……395
図Ⅵ-1-93　Ⅵ群土器（7）……396
図Ⅵ-1-94　Ⅵ群土器（8）……397
図Ⅵ-1-95　Ⅵ群土器（9）……398
図Ⅵ-1-96　Ⅵ群土器（10）……399
図Ⅵ-1-97　Ⅵ群土器（11）……400
図Ⅵ-1-98　Ⅵ群土器（12）……401
図Ⅵ-1-99　Ⅵ群土器（13）……402

図Ⅵ-1-100　Ⅵ群土器（14）…… 403
図Ⅵ-1-101　Ⅵ群土器（15）…… 404
図Ⅵ-1-102　Ⅵ群土器（16）…… 405
図Ⅵ-1-103　Ⅵ群土器（17）…… 406
図Ⅵ-1-104　Ⅵ群土器（18）…… 407
図Ⅵ-1-105　Ⅵ群深土器（19）…… 408
図Ⅵ-1-106　Ⅵ群土器（20）…… 409
図Ⅵ-1-107　Ⅵ群土器（21）…… 410
図Ⅵ-1-108　Ⅵ土器（22）…… 411
図Ⅵ-1-109　Ⅶ群土器 …… 412

2　石器・石製品 …… 413
図Ⅵ-2-1　Ⅲ・Ⅳ層の石器（1）　…… 420
図Ⅵ-2-2　Ⅲ・Ⅳ層の石器（2）…… 421
図Ⅵ-2-3　Ⅲ・Ⅳ層の石器（3）・石製品 …… 422
図Ⅵ-2-4　Ⅴ・Ⅵ層の石器（1）…… 423
図Ⅵ-2-5　Ⅴ・Ⅵ層の石器（2）…… 424
図Ⅵ-2-6　Ⅴ・Ⅵ層の石器（3）…… 425
図Ⅵ-2-7　Ⅴ・Ⅵ層の石器（4）…… 426
図Ⅵ-2-8　Ⅴ・Ⅵ層の石器（5）…… 427
図Ⅵ-2-9　Ⅴ・Ⅵ層の石器（6）…… 428
図Ⅵ-2-10　Ⅴ・Ⅵ層の石器（7）…… 429
図Ⅵ-2-11　Ⅴ・Ⅵ層の石器（8）…… 430
図Ⅵ-2-12　Ⅴ・Ⅵ層の石器（9）…… 431
図Ⅵ-2-13　Ⅴ・Ⅵ層の石器（10）…… 432
図Ⅵ-2-13　Ⅴ・Ⅵ層の石器（11）…… 433
図Ⅵ-2-15　Ⅴ・Ⅵ層の石器（12）・石製品（1）…… 434
図Ⅵ-2-16　Ⅴ・Ⅵ層の石器（13）・石製品（2）…… 435
図Ⅵ-2-17　Ⅲ層の石器分布図（1）…… 436
図Ⅵ-2-18　Ⅲ層の石器分布図（2）…… 437
図Ⅵ-2-19　Ⅲ層の石器分布図（3）…… 438
図Ⅵ-2-20　Ⅲ層の石器分布図（4）…… 439
図Ⅵ-2-21　Ⅳ層の石器分布図（1）…… 440
図Ⅵ-2-22　Ⅳ層の石器分布図（2）…… 441
図Ⅵ-2-23　Ⅳ層の石器分布図（3）…… 442
図Ⅵ-2-24　Ⅳ層の石器分布図（4）…… 443
図Ⅵ-2-25　Ⅴ層の石器分布図（1）…… 444
図Ⅵ-2-26　Ⅴ層の石器分布図（2）…… 445
図Ⅵ-2-27　Ⅴ層の石器分布図（3）…… 446
図Ⅵ-2-28　Ⅴ層の石器分布図（3）…… 447

3　土製品 …… 448
図Ⅵ-3-1　土製品（1）…… 448
図Ⅵ-3-2　土製品（2）…… 449

4　包含層出土の鉄製品 …… 450
図Ⅵ-4-1　鉄製品 …… 450

5　木製品 …… 451
図Ⅵ-5-1　Ⅴ-3層旧河道出土の木製品（1）…… 452
図Ⅵ-5-2　Ⅴ-3層旧河道出土の木製品（2）…… 453
図Ⅵ-5-3　Ⅴ-3相当層・Ⅴ-3層旧河道出土の
木製品（3）…… 454
図Ⅵ-5-4　Ⅴ-3相当層・Ⅴ-3層旧河道出土の
木製品（4）…… 455

表目次

Ⅰ章　概要

表Ⅰ－1 検出遺構一覧 3
表Ⅰ－2 出土遺物一覧 3
表Ⅰ－3 包含層出土遺物一覧 14

Ⅵ章　包含層の遺物

表Ⅵ－1 包含層土器一覧 285
表Ⅵ－2 包含層石器等一覧 413
表Ⅵ－3 包含層石製品・土製品一覧 449
表Ⅵ－4 掲載土製品一覧 449
表Ⅵ－5 包含層掲載鉄製品一覧 450
表Ⅵ－6 包含層掲載木製品一覧 451

Ⅷ章　各種一覧資料

表Ⅷ－1 遺構規模一覧 519
表Ⅷ－2 遺構出土遺物一覧 526
表Ⅷ－3 遺構・包含層出土掲載土器一覧 541
表Ⅷ－4 遺構・包含層出土掲載土器一覧 517
表Ⅷ－5 復元土器規模一覧 607
表Ⅷ－6　遺構出土掲載石器等一覧 610
表Ⅷ－7　包含層出土掲載石器
　　・石製品一覧 613

口絵目次

口絵1－1　Ⅳ群b類土器（1）
口絵1－2　Ⅳ群b類土器（2）
口絵2－1　Ⅴ群c類土器
口絵2－2　Ⅵ群土器

図版目次

図版－1
　1　調査前風景 ..... E→
　2　南北メイントレンチセクション ..... SW→
図版－2
　1　東西メインセクション（296ライン）
　　..... NE→
　2　西の沢セクション ..... S→
　3　282ラインセクション ..... SW→
図版－3
　1　UH－101完掘状況 ..... SW→
　2　Ⅲ層土壙群検出状況 ..... E→
図版－4
　1　UP－103完掘状況 ..... SE→
　2　UP－103セクション ..... S→
　3　UP－104完掘状況 ..... SE→
　4　UP－104セクション ..... SE→
　5　UP－106完掘状況 ..... SE→
　6　UP－106セクション ..... S→
図版－5
　1　UP－109完掘状況 ..... S→
　2　UP－111完掘状況 ..... S→
　3　UP－112完掘状況 ..... S→
　4　UP－112セクション ..... S→
図版－6
　1　UP－119完掘状況 ..... S→
　2　UP－119鍬先出土状況 ..... S→
　3　UP－119確認状況 ..... S→
図版－7
　1　UP－138完掘状況 ..... S→
　2　UP－138セクション ..... E→
　3　UP－138遺物出土状況 ..... W→
　4　UP－138人骨出土状況 ..... W→

図版－８
1　ＵＰ－１３９完掘状況 ..... Ｓ→
2　ＵＰ－１３９遺物出土状況 ..... Ｓ→
3　土壙群（ＵＰ－１４２～１４９）完掘状況 ..... Ｅ→
4　ＵＰ－１４２完掘状況 ..... Ｓ→
5　ＵＰ－１４２遺物出土状況 ..... Ｓ→
図版－９
1　ＵＳＰ－１０１～１０４完掘状況 ..... Ｎ→
2　ＵＳＰ－１０１セクション ..... Ｎ→
3　ＵＳＰ－１０１完掘状況 ..... Ｎ→
4　ＵＳＰ－１０４セクション ..... ＳＥ→
5　ＵＳＰ－１０４完掘状況 ..... ＳＥ→
図版－１０
1　ＵＦ－１１１検出状況 ..... ＳＥ→
2　ＵＦ－１１１セクション ..... ＮＥ→
3　ＵＦ－１１２検出状況 ..... Ｓ→
4　ＵＦ－１１２セクション ..... Ｗ→
5　ＵＦ－１０１～１０２検出状況 ..... Ｓ→
6　ＵＳ－１０７検出状況 ..... Ｅ→
図版－１１
1　Ｗ０－３００Ⅲ層遺物出土状況 ..... Ｓ→
2　Ｚ０－２９８Ⅲ層遺物出土状況 ..... Ｓ→
3　Ｗ０－２９９Ⅲ層遺物出土状況 ..... Ｗ→
図版－１２
1　ＬＨ－００６完掘状況 ..... Ｎ→
2　ＬＨ－１０１完掘状況 ..... Ｓ→
図版－１２
1　ＬＨ－００６翡翠大珠出土状況 ..... ＳＷ→
2　ＬＨ－１０２完掘状況 ..... Ｓ→
3　ＬＨ－１０２覆土ベンガラ入り土器出土状況 Ｗ→
4　ＬＨ－１０２覆土玉出土状況 ..... ＳＥ→
図版－１４
1　ＬＨ－１０３完掘状況 ..... ＳＷ→
2　ＬＨ－１０３柱穴確認状況 ..... ＳＥ→
3　ＬＨ－１０３・ＨＰ－１セクション ..... Ｗ→
4　ＬＨ－１０３炉跡検出状況 ..... Ｓ→
図版－１５
1　ＬＨ－１０４完掘状況 ..... Ｓ→
2　ＬＨ－１０４検出状況 ..... ＳＷ→
図版－１６
1　ＬＨ－１０６完掘状況 ..... ＳＷ→
2　ＬＨ－１０７完掘状況 ..... ＳＷ→
図版－１７
1　ＬＰ－１０６完掘状況 ..... ＳＷ→
2　ＬＰ－１１２完掘状況 ..... Ｓ→
3　ＬＰ－１１４完掘状況 ..... Ｗ→
図版－１８
1　ＬＰ－１１８完掘状況 ..... Ｓ→
2　ＬＰ－１１８遺物出土状況 ..... ＮＥ→
3　ＬＰ－１１９セクション ..... ＳＷ→
4　ＬＰ－１１９遺物出土状況 ..... Ｓ→
5　ＬＰ－１２２完掘状況 ..... ＮＷ→
6　ＬＰ－１２２遺物出土状況 ..... ＮＥ→
図版－１９
1　ＬＰ－１３３セクション ..... ＳＷ→
2　ＬＰ－１３３完掘状況 ..... Ｓ→
3　ＬＰ－１３４遺物出土状況 ..... Ｗ→
4　ＬＰ－１３４セクション ..... ＮＥ→
5　ＬＰ－１４２完掘状況 ..... ＳＷ→
6　ＬＰ－１４２セクション ..... ＳＥ→
図版－２０
1　ＬＰ－１４４完掘状況 ..... Ｗ→
2　ＬＰ－１４４セクション ..... ＳＷ→
3　ＬＰ－１６５完掘状況 ..... Ｗ→
4　ＬＰ－１６５遺物出土状況 ..... Ｗ→
5　ＬＰ－１６５完掘状況 ..... Ｓ→
6　ＬＰ－１６７遺物出土状況 ..... Ｓ→
図版－２１
1　ＬＰ－１７１完掘状況 ..... ＳＥ→
2　ＬＰ－１７１遺物出土状況 ..... ＳＥ→
3　ＬＰ－１７５完掘状況 ..... ＳＷ→
4　ＬＰ－１８２完掘状況 ..... ＳＥ→
5　ＬＰ－１８５完掘状況 ..... Ｓ→
6　ＬＰ－１８５セクション ..... Ｓ→
図版－２２
1　ＬＰ－１９６完掘状況 ..... Ｓ→
2　ＬＰ－１９６セクション ..... Ｓ→
3　ＬＰ－１９８完掘状況 ..... Ｗ→
4　ＬＰ－２１８完掘状況 ..... Ｓ→

5　ＬＰ－２００完掘状況 ..... S→
図版－２３
1　ＬＰ－２０１完掘状況 ..... S→
2　ＬＰ－２０１セクション ..... S→
3　ＬＰ－２０２完掘状況 ..... S→
4　ＬＰ－２０２セクション ..... S→
5　ＬＰ－２０３完掘状況 ..... S→
6　ＬＰ－２０３セクション ..... S→
図版－２４
1　２１４・２１７・２１８完掘状況 ..... E→
2　ＴＰ－１０３完掘状況 ..... W→
3　ＴＰ－１０７完掘状況 ..... W→
4　ＴＰ－１０６完掘状況 ..... NW→
5　ＴＰ－１０６セクション ..... ＳＥ→
図版－２５
1　ＬＳＰ－１０１～１０４完掘状況 ..... S→
2　ＬＳＰ－１１２～１１４完掘状況 ..... S→
3　ＬＳＰ－１０９～１１１完掘状況 ..... N→
4　ＬＳＰ－１０９～１１１セクション ..... N→
5　ＬＦ－１０６検出状況 ..... ＳＷ→
図版－２６
1　ＬＦ－１０７～１０９セクション ..... S→
2　ＬＦ－１０７～１０９遺物出土状況 ..... W→
3　ＬＦ－１２２～１２４検出状況 ..... NW→
4　ＬＦ－１２２～１２３セクション ..... S→
図版－２７
1　ＬＦ－１３１検出状況 ..... ＳＷ→
2　ＬＦ－１９９検出状況 ..... S→
3　ＬＦ－２１３検出状況 ..... ＳＥ→
4　ＬＦ－２５４検出状況 ..... E→
5　ＬＳ－１０１検出状況 ..... S→
6　ＬＳ－１０２検出状況 ..... ＳＥ→
図版－２８
1　東区作業状況 ..... S→
2　東区完掘状況 ..... ＳＷ→
図版－２９
1　Ｖ０－２９９Ｖ層上面遺物出土状況 ..... S→
2　Ｘ０－２９７Ｖ層遺物出土状況（1） ..... W→
3　Ｘ０－２９７Ｖ層遺物出土状況（2） ..... W→
図版－３０
1　Ｗ０－２９８Ｖ層遺物出土状況 ..... NW→
2　オロシガネ状石製品出土状況 ..... ＳＥ→
3　Ｖ層遺物出土状況 ..... S→
図版－３１
1　北海道式石冠出土状況 ..... ＳＷ→
2　石製品など出土状況 ..... S→
3　土偶出土状況 ..... S→
4　土偶（表） ..... S→
5　Ｖ層遺物出土状況 ..... E→
6　Ｖ層遺物出土状況 ..... N→
図版－３２
1　東の沢調査状況 ..... ＳＷ→
2　東の沢北壁セクション ..... ＳＷ→
3　段丘崖下北壁セクション ..... S→
4　段丘崖下Ⅲ－２層集石検出状況 ..... ＮＥ→
図版－３３　平成７年度調査（2）
1　段丘崖下Ｖ－３層遺物出土状況 ..... W→
2　Ｖ－３層旧河道槌状木製品出土状況 ..... E→
3　Ｖ－３層旧河道舟形容器出土状況 ..... W→
4　平成７年度調査区域完掘状況 ..... ＳＥ→
図版－３４　平成８年度調査（1）
1　調査状況 ..... W→
2　Ⅲ－３ｃ層旧河道流木出土状況 ..... ＳＷ→
3　Ｖ－３層旧河道材木出土状況 ..... ＳＥ→
図版－３５　平成８年度調査（2）
1　Ｖ－３層旧河道尖頭加工棒出土状況 ..... S→
2　貝化石検出トレンチ ..... ＳＷ→
3　断層および貝化石層検出状況 ..... S→
4　完掘状況 ..... ＳＥ→
図版－３６
1　西の沢作業状況 ..... ＳＷ→
2　西の沢玉出土状況 ..... W→
3　西の沢流木出土状況 ..... ＳＷ→
4　西の沢スクレイパー出土状況 ..... W→
5　西の沢焼材出土状況 ..... NW→
6　西の沢遺物出土状況 ..... N→
図版－３７－１　Ⅰ群土器（1）
図版－３８－１　Ⅰ群土器（2）
図版－３９－１　Ⅱ群・Ⅲ群土器（1）

図版－４０－１　Ⅲ群土器（２）
図版－４１－１　Ⅳ群ａ類・Ⅳ群ｂ類土器（１）
図版－４２－１　Ⅳ群ｂ類土器（２）
図版－４３－１　Ⅳ群ｂ類土器（３）
図版－４４－１　Ⅳ群ｂ類土器（４）
図版－４５－１　Ⅳ群ｂ類土器（５）
図版－４６－１　Ⅳ群ｂ類土器（６）
図版－４７－１　Ⅳ群ｂ類土器（７）
図版－４８－１　Ⅳ群ｂ類土器（８）
図版－４９－１　Ⅳ群ｂ類土器（９）
図版－５０－１　Ⅳ群ｂ類土器（１０）
図版－５１－１　Ⅳ群ｂ類土器（１１）
図版－５２－１　Ⅳ群ｂ類土器（１２）
図版－５３－１　Ⅳ群ｂ類土器（１３）
図版－５４－１　Ⅳ群ｂ類土器（１４）
図版－５５－１　Ⅳ群ｂ類土器（１５）
図版－５６－１　Ⅳ群ｂ類土器（１６）
図版－５７－１　Ⅳ群ｂ類土器（１７・１８）
図版－５８－１　Ⅳ群ｂ類土器（１９）
図版－５９－１　Ⅳ群ｂ類土器（２０）
図版－６０－１　Ⅳ群ｂ類土器（２１）
図版－６１－１　Ⅳ群ｂ類土器（２２）
図版－６２－１　Ⅳ群ｂ類土器（２３）
図版－６３－１　Ⅳ群ｂ類土器（２４）
図版－６４－１　Ⅳ群ｂ類土器（２５）
図版－６５－１　Ⅳ群ｂ類土器（２６）
図版－６６－１　Ⅳ群ｂ類土器（２７）
図版－６７－１　Ⅳ群ｂ類土器（２８）
図版－６８－１　Ⅳ群ｂ類土器（２９）
図版－６９－１　Ⅳ群ｃ類土器（１）
図版－７０－１　Ⅳ群ｃ類土器（２）
図版－７１－１　Ⅳ群ｃ類土器（５）
図版－７２－１　Ⅳ群ｃ類土器（６）
図版－７３－１　Ⅳ群ｃ類土器（７）
図版－７４－１　Ⅳ群ｃ類土器（８）
図版－７５－１　Ⅳ群ｃ類土器（９）
図版－７６－１　Ⅳ群ｃ類土器（３・４）
図版－７７－１　Ⅳ群ｃ類土器（４・１１）
図版－７８－１　Ⅳ群ｃ類土器（１０）
図版－７９－１　Ⅴ群ｃ類土器（１）
図版－８０－１　Ⅴ群ｃ類土器（２・３）
図版－８１－１　Ⅴ群ｃ類土器（４）
図版－８２－１　Ⅴ群ｃ類土器（５）
図版－８３－１　Ⅴ群ｃ類土器（６）
図版－８４－１　Ⅴ群ｃ類土器（７）
図版－８５－１　Ⅴ群ｃ類土器（８）
図版－８６－１　Ⅴ群ｃ類土器（９）
図版－８７－１　Ⅴ群ｃ類土器（１０）
図版－８８－１　Ⅴ群ｃ類土器（１１）
図版－８９－１　Ⅴ群ｃ類土器（１２）
図版－９０－１　Ⅴ群ｃ類土器（１３）
図版－９１－１　Ⅴ群ｃ類土器（１４）
図版－９２－１　Ⅴ群ｃ類土器（１５）
図版－９３－１　Ⅴ群ｃ類土器（１６）
図版－９４－１　Ⅴ群ｃ類土器（１７・１８）
図版－９５－１　Ⅴ群ｃ類土器（１８・１９）
図版－９６－１　Ⅴ群ｃ類土器（２０・２１）
図版－９７－１　Ⅴ群ｃ類土器（２２）
図版－９８－１　Ⅴ群ｃ類土器（２３・２４）
図版－９９－１　Ⅴ群ｃ類土器（２５・２６・２７）
図版－１００－１　Ⅴ群ｃ類土器（２７・２８）
図版－１０１－１　Ⅴ群ｃ類土器（２９・３０）
図版－１０２－１　Ⅴ群ｃ類土器（３０・３１）
図版－１０３－１　Ⅴ群ｃ類土器（３２）
図版－１０４－１　Ⅴ群ｃ類土器（３３・３４・３５）
図版－１０５－１　Ⅴ群ｃ類土器（３６）
図版－１０６－１　Ⅴ群ｃ類土器（３７）
図版－１０７－１　Ⅵ群土器（１・２）
図版－１０８－１　Ⅵ群土器（２・３）
図版－１０９－１　Ⅵ群土器（４・５）
図版－１１０－１　Ⅵ群土器（６）
図版－１１１－１　Ⅵ群土器（７）
図版－１１２－１　Ⅵ群土器（８）
図版－１１３－１　Ⅵ群土器（９）
図版－１１４－１　Ⅵ群土器（１０・１１）
図版－１１５－１　Ⅵ群土器（１２・１３）
図版－１１６－１　Ⅵ群土器（１３・１４）
図版－１１７－１　Ⅵ群土器（１５）

図版－１１８－１　Ⅵ群土器（１６）

図版－１１９－１　Ⅵ群土器（１７・１８）

図版－１２０－１　Ⅵ群土器（１８・１９）

図版－１２１－１　Ⅵ群土器（２０）

図版－１２２－１　Ⅵ群土器（２１・２２）

図版－１２３－１　Ⅵ群土器（２２）・Ⅶ群土器

図版－１２４－１　遺構石器（１）

図版－１２５－１　遺構石器（２）

図版－１２６－１　遺構石器（３）

図版－１２７－１　遺構石器（４）

図版－１２８－１　遺構石器（５）

図版－１２９－１　遺構石器（６）

図版－１３０－１　遺構石器（７）

図版－１３１

1　Ⅲ・Ⅳ層出土の石鏃

2　Ⅲ・Ⅳ層出土のポイント

3　Ⅲ・Ⅳ層出土のドリル

図版－１３２

1　Ⅲ・Ⅳ層出土のスクレイパー

2　Ⅲ・Ⅳ出土のつまみ付ナイフ

3　Ⅲ・Ⅳ層出土のくさび形石器・石核

4　Ⅲ・Ⅳ層出土の石斧

図版－１３３

1　Ⅲ・Ⅳ層出土の砥石

2　Ⅲ・Ⅳ層出土のすり石

3　Ⅲ・Ⅳ層出土のたたき石

4　Ⅲ・Ⅳ層出土の台石

図版－１３４

1　Ⅲ・Ⅳ層出土の石製品

2　Ⅴ・Ⅵ層出土の石鏃

図版－１３５

1　Ⅴ・Ⅵ層出土のポイント

2　Ⅴ・Ⅵ層出土のポイント

3　Ⅴ・Ⅵ層出土のドリル

4　Ⅴ層出土のつまみ付ナイフ（１）

図版－１３６

1　Ⅴ層出土のつまみ付ナイフ（２）

2　Ⅴ・Ⅵ層出土のスクレイパー（１）

図版－１３７

1　Ⅴ・Ⅵ層出土のスクレイパー（２）

2　Ⅴ・Ⅵ層出土のくさび形石器・石核

3　Ⅴ・Ⅵ層出土の石斧（１）

図版－１３８

1　Ⅴ・Ⅵ層出土の石斧（２）

2　Ⅴ・Ⅵ層出土の石斧（３）・石斧原材・擦切残片

図版－１３９

1　Ⅴ・Ⅵ層出土の砥石（１）

2　Ⅴ・Ⅵ層出土の砥石（２）

図版－１４０

1　Ⅴ・層出土の砥石（３）

2　Ⅴ・層出土のすり石

図版－１４１

1　Ⅴ・Ⅵ層出土のたたき石（１）

2　Ⅴ・Ⅵ層出土のたたき石（２）

図版－１４２

1　Ⅴ・Ⅵ層出土の石皿

2　Ⅴ・Ⅵ層出土の台石

図版－１４３

1　土偶

2　土偶Ｘ線写真

3　土製品

図版－１４４

1　オロシガネ状土製品

2　スタンプ状土製品

3　環状土製品

図版－１４５

1　Ⅴ・Ⅵ層出土の石製品（玉類）

2　Ⅴ・Ⅵ層出土の石製品

3　Ⅴ・Ⅵ層出土のオロシガネ状石製品

図版－１４６

1　UP-１１９出土の鍬先

図版－１４７

1　UP－１３８出土の刀

2　同上Ｘ線写真

図版－１４８

1　US－１１０出土の刀子

2　Ⅲ層出土の刀子

3　Ⅲ層出土の鉄鍋

図版－１４９

1　舟形容器（保存処理後）

2　同上

図版－１５０

1　舟形容器（保存処理前）

2　舟形容器（保存処理後）

図版－１５１

1　舟形容器部分拡大

2　同左

3　舟形容器（保存処理前）

図版－１５２

1　槌状木製品

図版－１５３

1　尖頭加工棒

2　加工材

3　加工材

4　加工材

図版－１５４

1　板

2　割材

3　泥炭製品

Ⅰ　調査の概要

1．調査要項

事業名　：　北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査
委託者　：　日本道路公団北海道支社
受託者　：　財団法人 北海道埋蔵文化財センター
調査期間　：　平成７年度 18,470 ㎡（A-1 地区 4,100 ㎡、B 地区 14,370 ㎡）
　　平成８年度　9,500 ㎡（A-1 地区　300 ㎡、A-2 地区 9,200 ㎡）
遺跡名　：　キウス５遺跡（北海道教育委員会登載番号 A-03-93）
登載番号　：　A-03-093
所在地　：　千歳市中央 852 － 18 ほか
調査面積　：　4,400 ㎡・・・平成７年度／4,100 ㎡
　　平成８年度／300 ㎡
発掘期間　：　平成７年４月 10 日～ 平成８年３月 25 日（現地調査５月８日～ 10 月 26 日）
　　平成８年４月 15 日～ 平成９年３月 25 日（現地調査５月７日～ 10 月 26 日）

2．調査体制

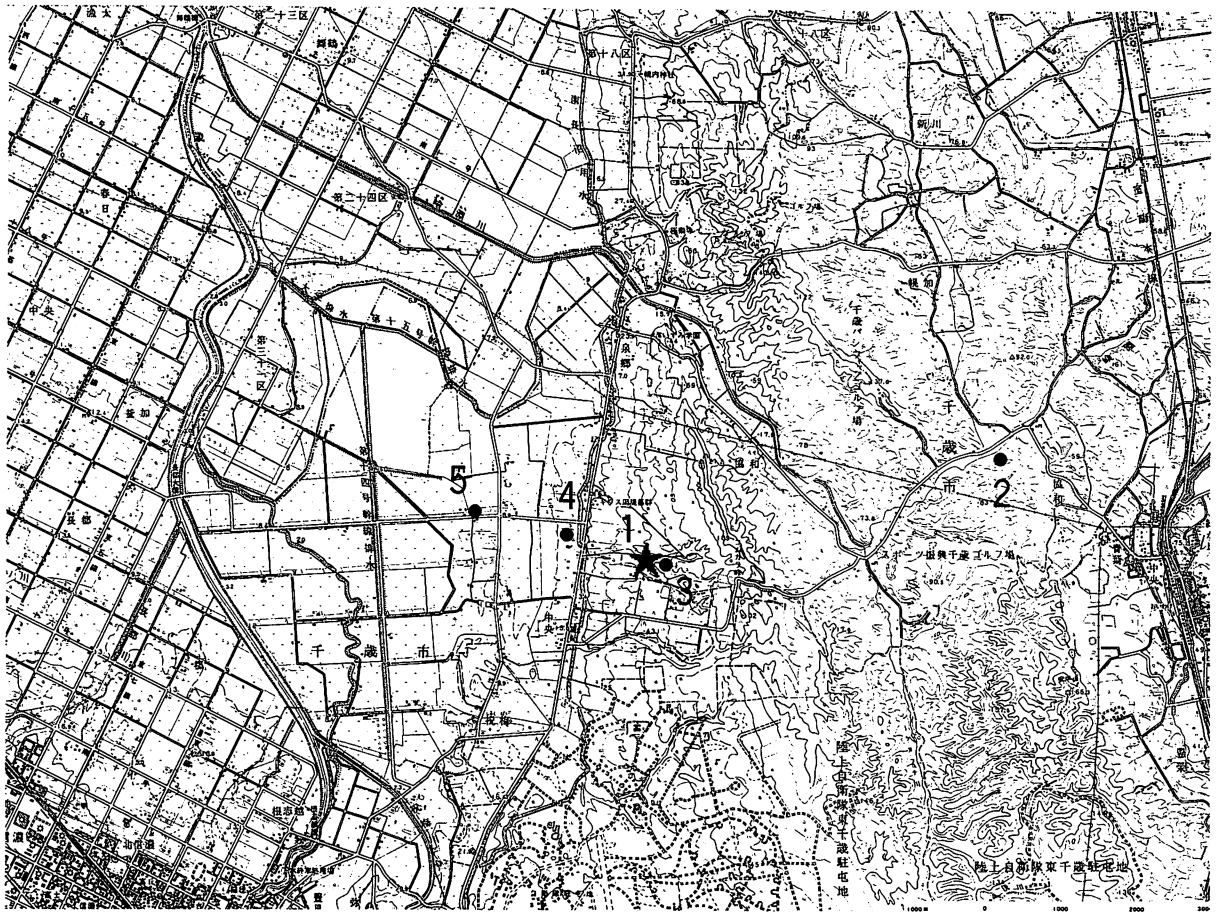
（平成７・８年度）

理　事　長	伊藤　一夫
専務理事	佐藤　哲人
常務理事	柴田　忠昭
業務部長	山内　清志
第１調査部長	畑　　宏明
第２調査部長	鬼柳　　彰
第２部調査第１調査課長	高橋和樹（発掘担当者）
主　　査	谷島由貴（発掘担当者）
主　　任	皆川　洋一（発掘担当者・編集）
文化財保護主事	藤原　秀樹
〃	澤田　健
〃	中山　昭大
〃	佐藤　剛

3　調査の経緯

北海道横断自動車道（千歳～夕張）建設工事に伴う、千歳市キウス５遺跡の発掘調査は、平成６年度に開始された。この年度の調査では、STA. １３８付近より東の仮称Ａ地区のうち2,700㎡を発掘する予定であったが、予想外の低湿地性遺跡の出現により当初計画を変更、調査実施範囲をＡ地区に絞ることにした。その調査面積は当初予定の2,700㎡に、低湿部における遺物包含層300㎡の拡大を加えて計3,000㎡となり、最終的には、そのうちのボックスカルバート工事に伴う切土範囲付近を主とする1,270㎡の調査を完了、報告した。（北埋調報　92）。

平成７年度には、STA, １４０付近より東の仮称A-１地区3,300㎡と、A-２地区と仮称したＡ地区の西端部880㎡、さらに西側のＢ地区の一帯18,230㎡を対象に発掘調査を計画したが、途中から橋脚、橋



図Ⅰ－1　遺跡の位置

（これらの地図は、上段が国土地理院の発行した5万分の1地形図「恵庭」・「追分」、下段が北海道仮製五万分一図「長都」（明治29年発行）を使用したものである。）

台部分の工事を特に急ぐというキウス4遺跡の調査が加わるなど、大きな計画変更があり、最終的には、A地区ではキウス川の切り替え工事に係るA－1地区を優先的に調査、東側の低湿地の一部300㎡を残したA-1地区4,100㎡と、当初計画のB地区から用地買収が未了であったり、工事用道路として利用されているために外された部分を除く14,370㎡の計18,470㎡を調査し、B地区について報告書を刊行した（北埋調報　104）。

平成8年度のキウス5遺跡の調査については、総面積17,290㎡に及ぶ要請があり、第2調査部第1調査課がA地区の残りすべて、すなわちA－1地区のうち、平成7年度に残した東側の低湿地の一部300㎡と、A－2地区の9,200㎡、計9,500㎡の調査を分担し、B地区のうち工事用道路や側道の造成予定地と、STA.１３５付近より西の仮称C地区の一部を合わせた計7,790㎡については、第2調査部第2調査課が分担、調査を実施した。これらの調査のうち、本報告書には、平成7年度に調査したA-1地区4,100㎡と、平成8年度調査の東側の低湿地の一部300㎡の調査結果を掲載した。

4　調査区の設定

(1) 方格設定と測量の基準

キウス5遺跡では調査範囲の区画と平面位置の測量のために高速道路のセンターラインを基準とする方格（グリッド）割りをおこなっている。センター杭STA.135＋00から138＋00付近まで道路のセンターラインは完全な直線である。これとこれに直交しSTA.137＋00を通る直線とを基線として4m間隔の方格を設定した。方格の区画線には建設予定の道路の下り車線側から上り車線側へ向かってアルファベット、千歳市側から夕張市側へ向かってアラビア数字による呼称を与え、STA.137＋00を通る区画線をMラインおよび200ラインとした。センター杭SAT.137＋00・138＋00の座標値とSTA.137＋00からSTA.138＋00へ向かう方向角は次の通りで（日本道路公団札幌建設局提供）、各座標値は平面直角座標系第ⅩⅡ系（建設省告示第952号）中の数値である。

STA.137＋00　　X=－124,606.2818　　Y=－42,806.8008
STA.138＋00　　X=－124,638.9318　　Y=－42,712.2811
STA.137＋00からSTA.138＋00への方向角　　109° 03′ 23.23″

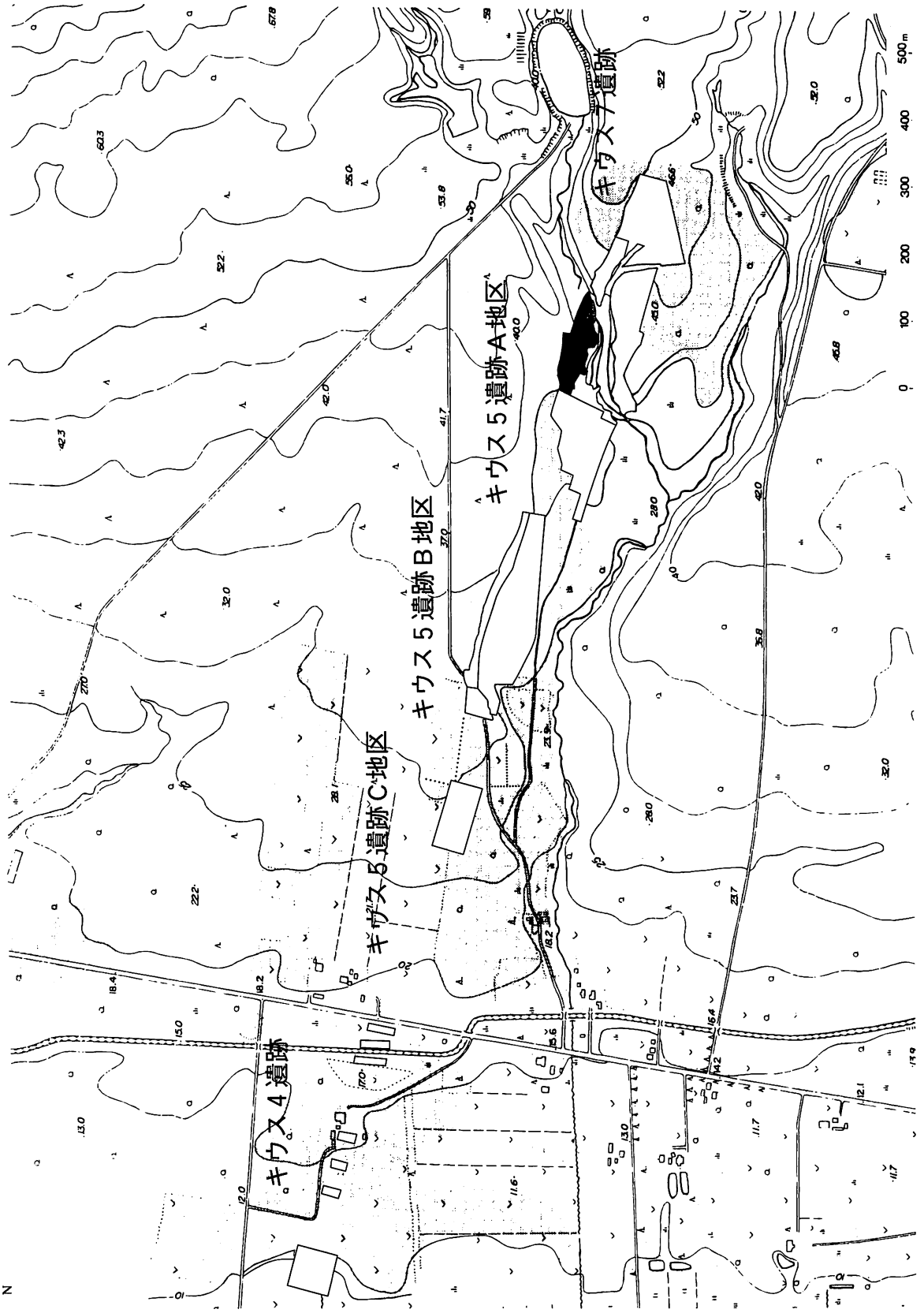
方格の交点に設置した杭には区画線名の組み合わせによって「M200」のように呼称し、4m四方の各グリッドにも下り車線側と千歳市側を画する区画線の名称よって杭と同様の呼称を与えた。従ってM200のグリッドの下り車線側・千歳市側の隅にある杭がM200杭と呼ばれることになる。さらに必要に応じて各グリッドを2m四方のグリッドに区画し、反時計回りにa・b・c・dの呼称を与えた（図Ⅰ-3）。

表Ⅰ－1　検出遺構一覧

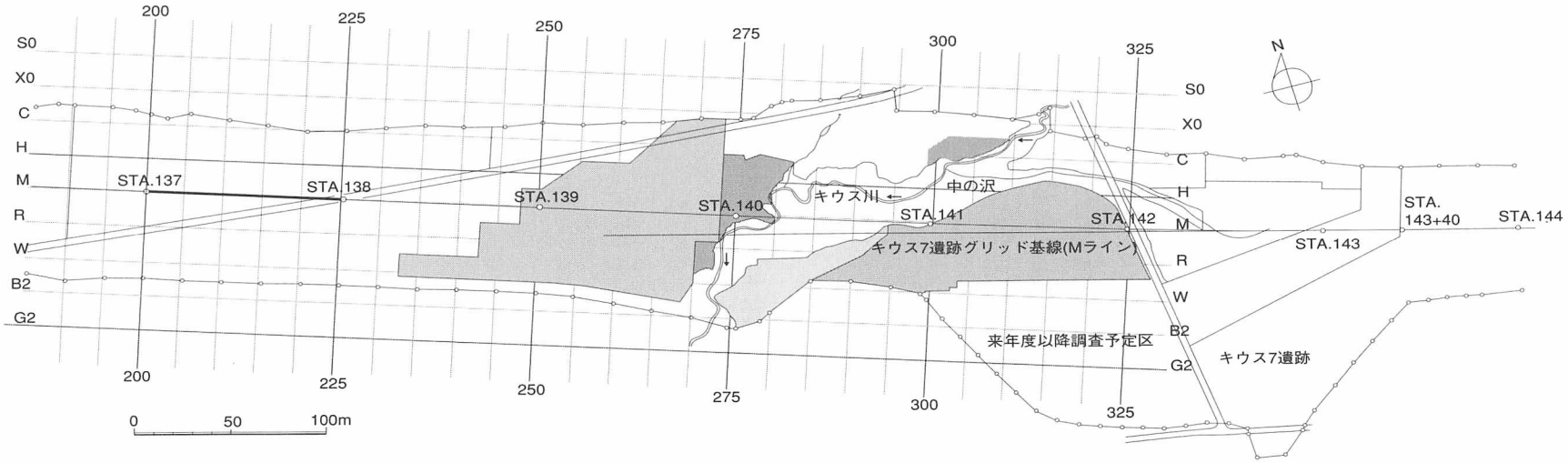
層位	遺構名	遺構記号	遺構数
Ⅳ層上位	住居跡	UH	1
	土壙	UP	49
	小ピット	USP	12
	焼土	UF	16
	炭化物集中	UC	9
	集石	US	14
Ⅳ層下位	住居跡	LH	7
	土壙	LP	108
	Tピット	TP	6
	小ピット	LSP	13
	焼土	LF	149
	炭化物集中	LC	9
	集石	LS	2
	フレイク・チップ集中	LFC	2
計			497

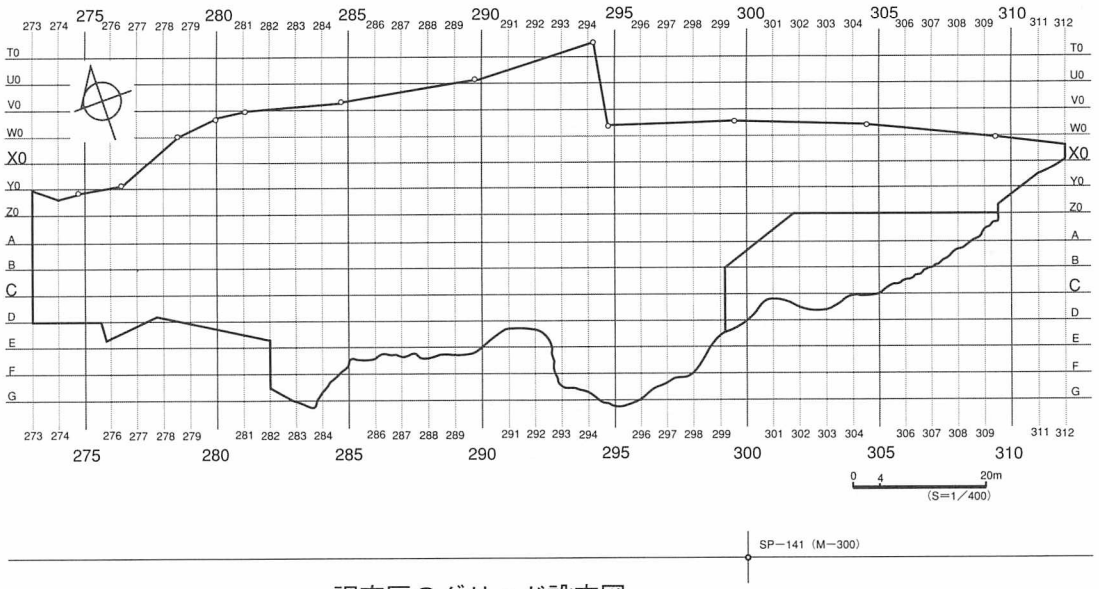
表Ⅰ－2　出土遺物一覧

	遺構	包含層
土器	10,271	96,748
石器等	5,195	17,990
礫・礫片	998	9,834
土製品	12	62
石製品	6	27
金属製品	3	2
木製品	0	0
自然遺物	22	2
現代の遺物他	0	3
計	16,507	124,668
総計	141,175	

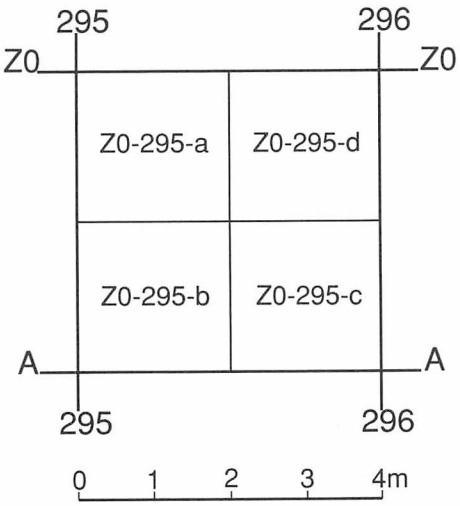

キウス４遺跡
キウス５遺跡Ｃ地区
キウス５遺跡Ｂ地区
キウス５遺跡Ａ地区
キウス７遺跡
N
500m
400
300
200
100
0

図Ⅰ－２　遺跡周辺の地形





調査区のグリッド設定図



グリッドの呼称

図Ⅰ−3　調査区の設定

5　遺物の分類

（1）土器

Ⅰ群　縄文時代早期に属するもの。

a類　貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。

b類　縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施される土器群。

b－1類　東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式に相当するもの。

b－2類　コッタロ式に相当するもの。

b－3類　中茶路式に相当するもの。

b－4類　東釧路Ⅳ式に相当するもの。

Ⅱ群　縄文時代前期に属するもの。

a類　縄文の施された丸底、尖底を特色とする土器群。

a－1類　綱文式土器に相当するものと、結束のない羽状縄文の施された丸底を特色とするの。

a－2類　春日町式、中野式など、縄文の施された尖底を特色とするもの。

b類　円筒土器下層式、植苗式に相当するもの（今回は出土していない）。

Ⅲ群　縄文時代中期に属するもの。

a類　円筒土器上層式に相当するもの。

b類　a類以外のもの。

b－1類　天神山式に相当するもの。

b－2類　柏木川式に相当するもの。

b－3類　北筒式（トコロ6類）、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

Ⅳ群　縄文時代後期に属するもの。

a類　余市式、入江式に相当するもの。

b類　船泊上層式、手稲式、ホッケマ澗式、エリモB式に相当するもの。

c類　堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。

Ⅴ群　縄文時代晩期に属するもの。

a類　大洞B式、上ノ国式に相当するもの。

b類　大洞C_1式、大洞C_2式に相当するもの。

c類　大洞A式、大洞A´式、タンネトウL式に相当するもの。

Ⅵ群　続縄文時代に属するもの。

Ⅶ群　擦文時代に属するもの。

（2）石器・石製品

大分類として剥片石器群、磨製石器群、礫石器群を設定し、群ごとに以下の順で器種別に並べた。さらに大まかな傾向をつかむため、器種ごとに本遺跡出土遺物で特徴的と思われた要素によって細分した。細分の基準は特徴的な形態、加工状況、素材の形態等による。また道具とは認められないような、素材（石核、原石）、加工および使用によって生じた剥片類は石材および加工痕等から判断して、それぞれの群に含めた。ただし次年度以降出土する可能性を考えて、今年度は出土していない分類も一部含めている。

なお、分類の方法および遺物の名称等については、これまで北海道埋蔵文化財センターによって刊行された報告書におよそならったものである。

剥片石器群

石鏃（平面の形態による分類）

1類　石刃鏃

2類　柳葉形

3類　五角形

4類　三角形鏃

　a類：凹基　b類：平基

5類　菱形

6類　木葉形

　a類：尖基　b類：円基

7類　有茎のもの

　a類：凹基　b類：平基　c類：凸基

8類　形態不明

ポイントまたは両面加工のナイフ（平面の形態による分類）

1類　有茎

2類　菱形

3類　木葉形

4類　形態不明

ドリル（平面の形態による分類）

1類　素材の一部に刺突部が作り出されたもの

2類　棒状のものにつまみ部が作り出されたもの

3類　棒状のもの

4類　周辺加工のもの

5類　形態不明

つまみ付ナイフ（加工状況による分類）

1類　片面全面加工のもの（裏面の一側縁に刃部をもつもの）

2類　片面全面加工のもの

3類　片面周縁加工のもの

4類　両面加工のもの
5類　加工状況不明のもの
スクレイパー（平面の形態および加工状況による分類）
1類　篦状石器
2類　エンドスクレイパー
3類　ラウンドスクレイパー
4類　不定形のもの
a類：刃部が外湾するもの
b類：刃部が直線的なもの
c類：刃部が内湾するもの
d類：刃部が抉れているもの
e類：刃部が鋸歯状のもの
5類　形態不明
加工痕のみられる剥片（Rフレイク）
楔形石器
石核
剥片、砕片
原石

磨製石器群
石斧（刃部の形態による分類。のみ形のものも含める。）
1類　片刃
2類　両刃
3類　形態不明（破損品、未成品）
石斧原石
擦切残片
剥片

礫石器群
砥石（すり面の形状による分類。明確ではないがすり石とはすり面の形状でおよそ分けられる。ただし5cm以下の小破片については、記号を付さなかった）
1類　細長い溝状のくぼみをもつもの
2類　すり面がU字状のもの
3類　すり面が凹状～平坦なもの
すり石（定形的なものと不定形なものに分けられる。不定形のものは素材の形状によって分類した。すり面が凸状のものに限る。）
1類　北海道式石冠と称されるもの
2類　半円状偏平打製石器と称されるもの
3類　断面三角形の礫の縁辺にすり面をもつもの
4類　不定形のもの

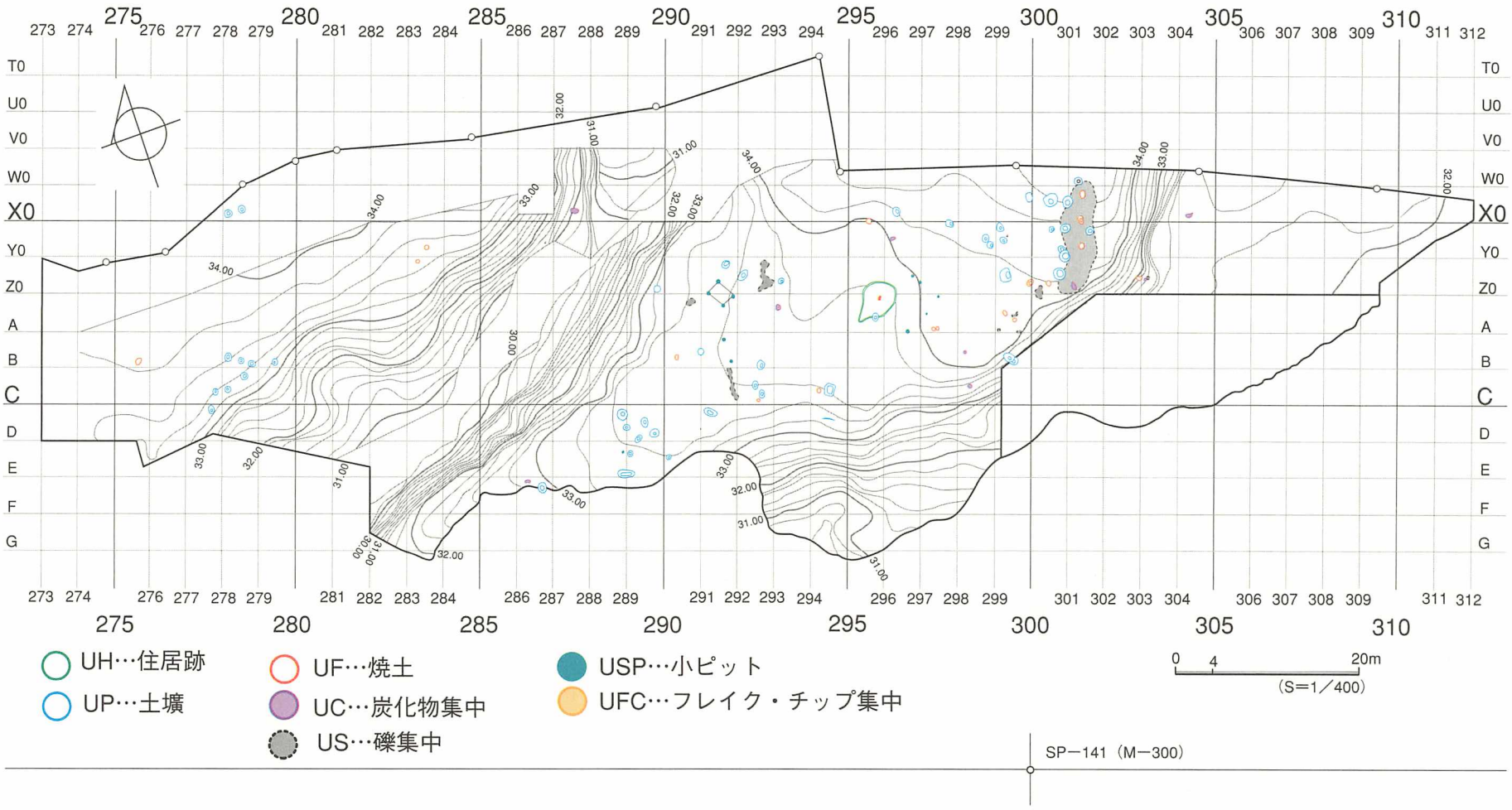
a類：円～楕円礫を素材とするもの
b類：球状礫を素材とするもの
c類：角礫を素材とするもの
5類　形態および素材形状とも不明
たたき石（素材の形状による分類。いわゆるくぼみ石も含めている。）
1類　球状礫を素材とするもの
2類　円～楕円礫を素材とするもの
3類　棒状礫を素材とするもの
4類　角礫を素材とするもの
5類　形状不明
石皿（直径20㎝以上の偏平礫を素材とするもの。平坦もしくは凹んだすり面をもつ。）
台石（直径20㎝以上の偏平礫を素材とするもの。敲打痕もしくはくぼみをもつ。）
加工痕のみられる礫
礫、礫片
石製品

（3）土製品
土玉類、オロシガネ状土製品などがある。

（4）木製品
槌状・櫂状の木製品のほか少数の加工材がある。これらはすべて、旧河道跡で出土したものである。

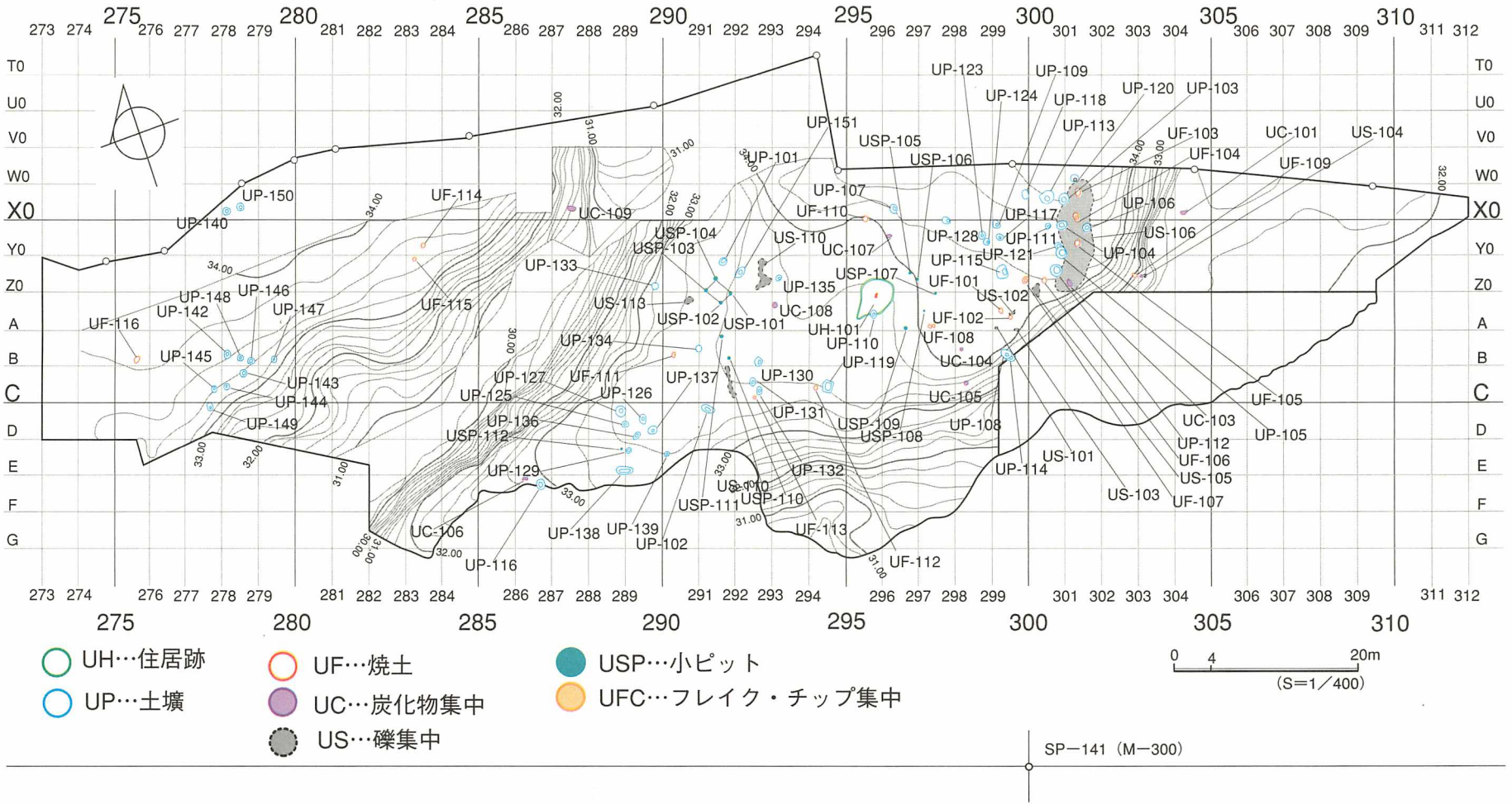
（5）自然遺物
明瞭な加工の見られない生物遺体を自然遺物とした。動物遺体・植物遺体が見られる。

キウス５遺跡Ａ地区95・96年度 Ⅲ層の地形と遺構の配置



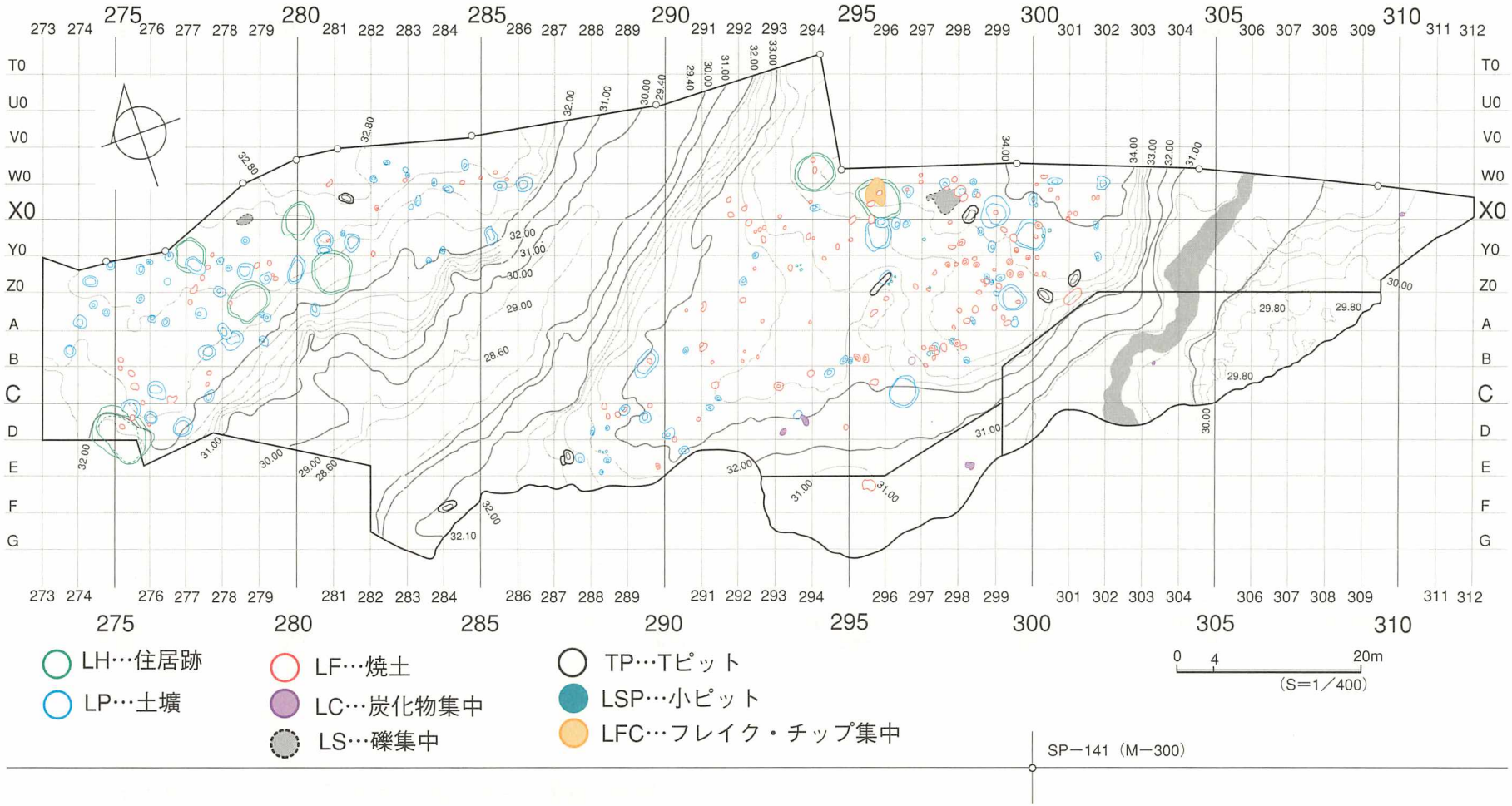
図Ⅰ−4　Ⅲ層の地形と遺構

キウス５遺跡Ａ地区95・96年度 Ⅲ層の地形と遺構の配置



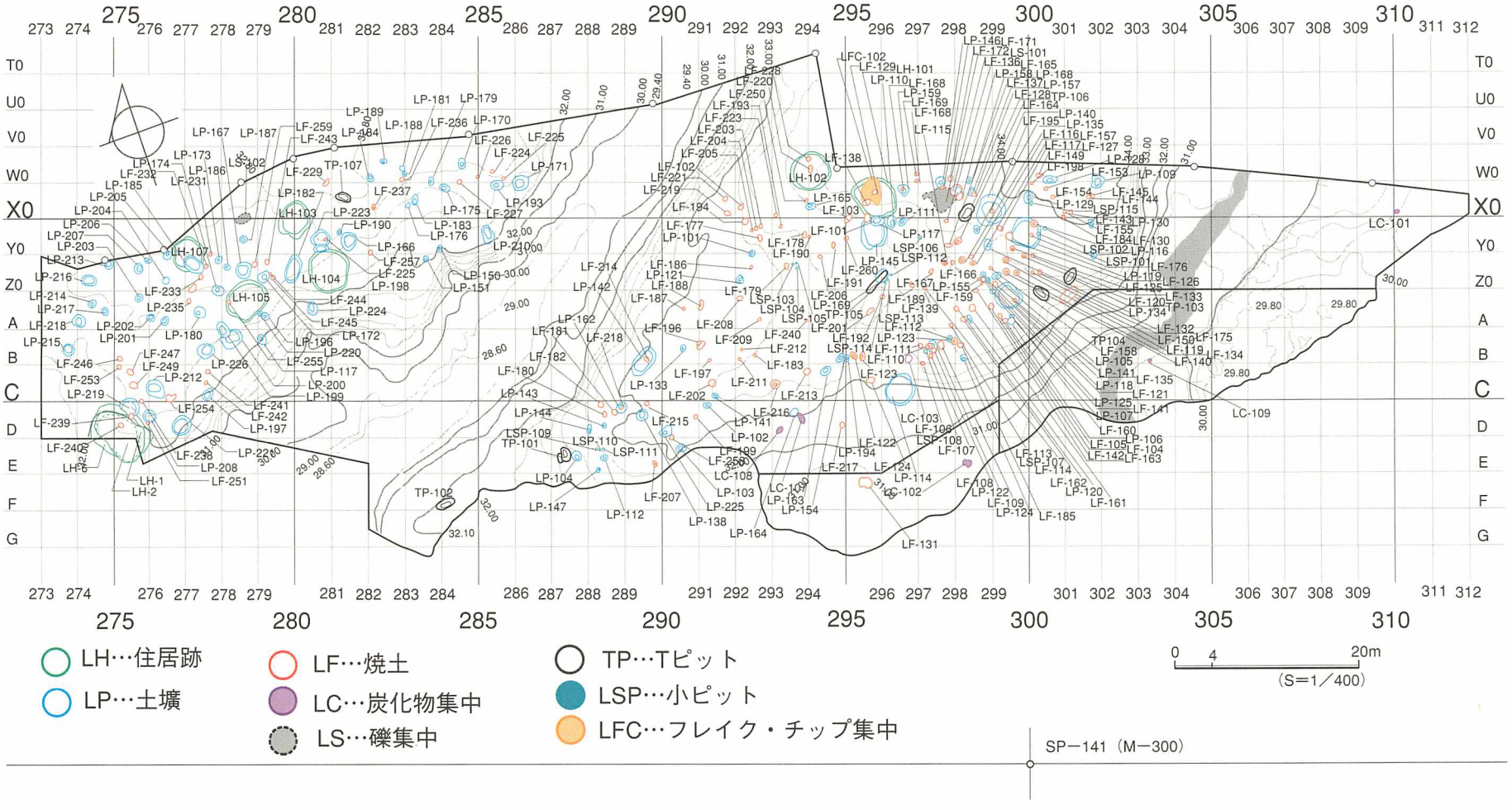
図Ⅰ－5　Ⅲ層で調査された遺構名

キウス５遺跡Ａ地区95・96年度　Ｖ層の地形と遺構の配置調査範囲



図Ⅰ−6　Ｖ層の地形と遺構

キウス５遺跡Ａ地区95・96年度　Ｖ層の地形と遺構の配置調査範囲



図Ⅰ－7　Ｖ層で調査された遺構名

表Ⅰ-3　包含層出土遺物一覧

	土器類									
	縄文早期土器	縄文前期土器	縄文中期土器	縄文後期土器	縄文晩期土器	続縄文土器	擦文土器	陶磁器	分類不明土器	計
Ⅲ層	99	3	84	2,561	3,199	6,953	161	1	40	13,101
Ⅲ-2層	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
Ⅲ-3c層	0	1	1	91	4	0	0	0	0	97
Ⅳ層	10	25	99	2,272	1,847	239	0	0	6	4,498
Ⅴ層	1,428	315	2,013	45,872	17,283	1,603	0	1	126	68,641
Ⅴ-1層	0	0	1	17	62	2	0	0	1	83
Ⅴ-2層	0	0	5	514	2	0	0	0	0	521
Ⅴ-3層	12	0	58	3,089	29	0	0	0	1	3,189
Ⅴ-3層-1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
Ⅴ-3c層	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
Ⅴ-4層	0	0	1	31	0	0	0	0	0	32
Ⅴ-5層	51	5	435	2,705	24	1	0	0	5	3,226
Ⅴ-6層	0	1	4	0	0	0	0	0	0	5
Ⅴ-7層	0	0	72	0	0	0	0	0	0	72
Ⅵ層	130	34	46	517	117	20	0	0	8	872
Ⅶ層	0	0	3	6	0	0	0	0	0	9
表採・排土	4	0	14	138	25	83	0	0	4	268
攪乱	59	7	92	696	282	127	0	0	2	1,265
層不明	3	13	8	503	297	45	0	1	0	870
	1,796	404	2,936	59,014	23,171	9,074	161	3	193	96,752

	石器類					石製品	土製品	金属製品	木製品	自然遺物	計
	剥片石器	礫石器	剥片石屑等	石核類	礫・礫片等						
Ⅲ層	222	78	1,675	6	816	3	4	0	0	有	2,804
Ⅲ-2層	0	1	0	0	20	0	0	0	0	無	21
Ⅲ-3c層	3	4	4	0	9	0	0	0	0	有	20
Ⅳ層	65	35	629	2	284	10	2	0	0	有	1,027
Ⅴ層	854	728	12,490	26	4,985	9	49	0	0	有	19,141
Ⅴ-1層	2	2	6	0	55	0	0	0	0	有	65
Ⅴ-2層	0	2	11	0	34	0	0	0	0	有	47
Ⅴ-3層	25	48	194	1	1,296	0	2	0	9	有	1,575
Ⅴ-3層-1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	無	0
Ⅴ-3c層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	無	0
Ⅴ-4層	0	0	5	0	1	0	0	0	0	無	6
Ⅴ-5層	34	40	201	0	1,267	2	3	0	0	有	1,547
Ⅴ-6層	0	1	1	0	155	0	0	0	0	無	157
Ⅴ-7層	0	0	3	0	11	0	0	0	0	有	14
Ⅵ層	27	37	223	2	73	0	1	0	0	無	363
Ⅶ層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	無	0
表採・排土	4	7	67	1	14	0	0	1	0	有	94
攪乱	23	13	109	1	77	3	1	0	0	有	227
層不明	9	30	40	0	737	0	0	1	0	有	817
											0
	1,268	1,026	15,658	39	9,834	27	62	2	9		27,925

Ⅱ　地形と土層

1　立地と環境

北海道島の西部およそ東経141°から142°の間には石狩湾から勇払平野に至る札幌―苫小牧低地帯が広がり、島の主部と南西部の境界をなしている。この低地帯は支笏火山の形成した火砕岩台地によって千歳市南部を分水嶺に日本海側と太平洋側とに分かたれているが、日本海斜面のうち特に扇状地の発達しないその南東部では分水嶺近くまで非常に低平であって、千歳川から東方にはかつて広大な湿地帯が形成されていた。戦後干拓事業が本格化するまでは千歳川に接して長都沼、その東に馬追沼が連なり、東方に連なる馬追丘陵の麓近くまで湛水地帯が広がっていた。キウス川は丘陵の西斜面からこの湿原へ注ぐ小河川の一つで、丘陵の前縁から谷筋に沿って、上流近くまで遺跡の分布が確認されている。今回の調査地点はキウス川の谷を約1㎞東方へ入った右岸にあって、北緯42°52′30″、東経141°43′40″付近、地籍は千歳市字中央852-18ほかである。

「キウス」は現在の字中央付近に当たる旧字名である。明治29年の北海道假製五万分一圖には現在のキウス川に「キウシ」とあり(図Ⅰ-1)、アイヌ語ki-ush-i（茅-多く生える-所）のカナ表記とみられている。この図ではキウシの川尻は丘陵の前縁を出た所で消えており、湿原の中に明瞭な流路をなしていなかったらしい。近代以前においても、おそらく一時的な増水時を除いて千歳川方面から舟によってキウス川を遡ることは不可能であったと思われる。假製五分一圖で「キウシ」の南隣に川に「チプエ」とあるのは、あるいはchip-e（舟を-そこで）という言葉で始まる地名の下略形であって、その後に例えばyanke-ush-i（陸に揚げるのが-常である-所）のような言葉が続いたのかもしれない。キウス川とその北の無名川との間に広がる緩斜面には古くから国指定史跡キウス周堤墓群の存在が知られており、横断自動車道の路線決定にともなって道教委と道路公団との間で協議がおこなわれた経緯がある。結果的に自動車道は周堤墓群南のキウス川の谷筋を通過することとなり、平成5年度から右岸のキウス5遺跡の発掘に着手する運びとなった。

2　土層

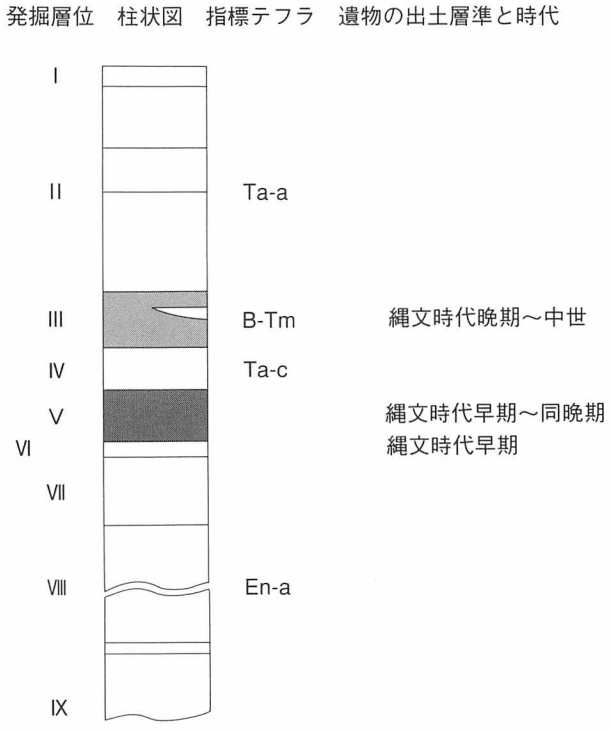
(1) 基本層序

遺跡の主体となる縄文時代から中世にかけての遺物包含層に関しては、昨年度の土層の区分を踏襲した。

Ⅰ層：黒褐(5YR 2/1)色細～中礫混じり粘土質砂。層厚10～30㎝で下限は曖昧。現表土。Ⅱ層が上位から土壌化したもので礫・砂は降下軽石である。稀に近代以降の陶磁器や鉄・ガラス製品を含む。

Ⅱ層：灰白(10YR 7/1)色細～中礫混じり砂。層厚20～50㎝、下限は画然。1739年降下の樽前a降下軽石堆積物(曽屋・佐藤1980、Ta-a層)である。無遺物。

Ⅲ層：黒(7.5YR 1.7/1)色細礫・砂混じり粘土質シルト。層厚10㎝前後、下限判然。主にⅣ層が土壌化したものと考えられ礫・



砂の多くは角張った岩片である。層の上部にB-Tm火山灰が1～3㎝の層厚で認められる場合があるが連続性は悪い。新千歳空港工事用地内の遺跡に見られる第1黒色土層(Ⅰ B層)に対比される。縄文時代晩期から続縄文時代、中世までの遺物を含む。

Ⅳ層：褐(7.5YR 4/4)色粘土質細礫～砂。層厚5～10㎝、下限は判然。樽前c降下火砕堆積物(曽屋・佐藤　1980、Ta-c層)である。礫・砂は主に角張った岩片で、花岡(本書Ⅱ章)はTa-c1に対比している。稀に縄文時代の遺物を含む。

Ⅴ層：黒褐(7.5YR 2/2)色細礫・砂混じり粘土質シルト。層厚20～40㎝、下限は曖昧である。細礫は上部に多く、主にⅣ層から落ち込んだ岩片とみられる。新千歳空港工事用地内の遺跡に見られる第2黒色土層(Ⅱ B層)に対比される。縄文時代早期から晩期までの遺物を含む。

Ⅵ層：黄褐(10YR.5/6)色細～中礫・砂混じり粘土質シルト。層厚10～30㎝、下限は曖昧である。稀に縄文時代早期の遺物を含む。丘陵斜面に位置するキウス7遺跡ではⅥ層より下位にⅧ層(曽屋・佐藤　1980の「恵庭a降下軽石堆積物」、En-a)・X層(曽屋・佐藤　1980の「支笏降下火砕堆積物1・2」、Spfa 1・Spfa 2)などの降下堆積物層が認められるが、段丘面Ⅰの範囲では今のところこれらを確認していない。Ⅵ層の下位にはⅧあるいはX層に由来すると思われる軽石礫を含んだ堆積物があり、これを仮にⅦ/Ⅸ層と呼んでおく。Ⅶ/Ⅸ層の下位にはさらにⅫ・ⅩⅢ層が認められる。

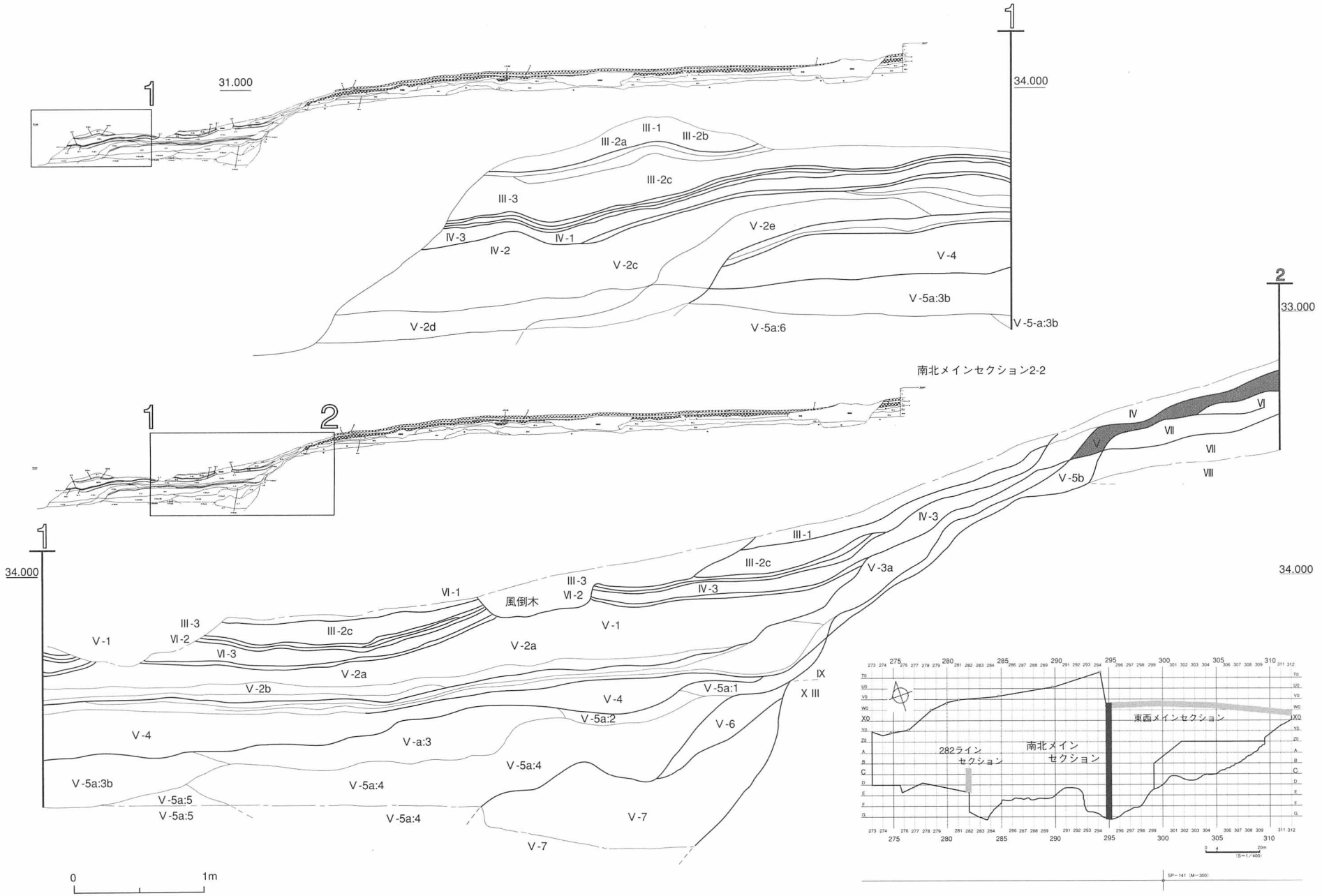
Ⅶ/Ⅸ層：色調・粒度には幅があり、にぶい黄褐(10YR 5/4)色砂混じり粘土質シルト(上部)、淡黄(5Y 8/3)色粘土と灰黄(2.5Y 6/2)色砂の互層(中部)、にぶい黄橙(10YR.6/4)色細～中礫(軽石)質砂・オリーブ灰(2.5GY 5/1)色砂混じり粘土質シルト・灰(5Y 4/1)色粘土混じり砂の乱雑な堆積(下部)などが観察される。層厚は確認できないが、段丘崖部分での観察から2m程度かそれ以上あるとみられる。下限の状況未確認。人工遺物は出土していない。段丘面Ⅰを構成する段丘堆積物である可能性がある。

ⅩⅡ層：黒褐(2.5Y 3/1)色粘土質シルト(泥炭質)・緑灰(5G 5/1)色砂質粘土～シルトなどの互層。層厚は未確認、下限の状況も明確ではない。曽屋・佐藤(1980)の「千歳泥炭層」、あるいは次のⅩⅢ層とともに「伏在海成更新統」に相当する可能性がある。

ⅩⅢ層：オリーブ灰(2.5GY 5/1)色シルト質粘土～粘土質砂。砂で満たされた断面円形、径3㎝ほどの竪穴状の構造が多く見られる。生痕化石であろう。隣接地の工事による断面では層厚4ｍ以上あり、下限の状況は不明である。佐々・森谷(1956)の「野幌層」、曽屋・佐藤(1980)の「伏在海成更新統」などに相当するものとみられる。

(2) メインセクション

平成5年度の調査に準じ、確認された段丘面Ⅰ及び段丘面Ⅱ（Ⅲ？）（花岡　1995）の部分での各層を分類した。西側の本遺跡Ｂ地区の斜面部や対岸の丘陵斜面に位置するキウス7遺跡ではⅥ層より下位にⅧ層（Ⅷ層起源と考えられるローム質土）、Ⅷ層（曽根・佐藤　1980の「恵庭a降下軽石堆積物」、En-a）、X層（曽根・佐藤　1980の「支笏降下火砕堆積物１・２」、Spfa-１・Spfa-２）などが認められる。が、今回調査した段丘面Ⅰの範囲でも平成6年度同様Ⅷ層以下X層までは確認されなかった。平成6年度Ⅶ／Ⅸ層と呼んでいた層は想定された段丘面Ⅰを構成する段丘堆積物(西脇　1995)であることが平成7年度の調査及び平成8年度の工事であきらかになった。平成7年度はⅦ／Ⅸ層と仮称した部分をⅦ層、Ⅸ層相当とした。ⅩⅡ層は調査区内では確認出来なかった。



図II-8　南北メインセクション図（1）

（1）段丘上（段丘面Ⅰ）の層序

Ⅰ層：黒褐色(Hue5YR2/1)細～中礫混じり粘土質砂。粘性ややあり。しまりあまりなし。層厚10～30㎝で下限は曖昧である。現表土である。Ⅱ層が上位から土壌化したもので、礫砂は降下軽石起源のものである。稀に近代以降の陶磁器や鉄・ガラス製品を含む。

Ⅱ層：灰白色(Hue10YR7/1)細～中礫混じり砂。粘性なし。しまりなし。層厚20～50㎝、下限はかなりはっきりしている。1739年降下の樽前a降下軽石堆積物（曽根・佐藤　1980、Ta-a層）である。無遺物層と考えられる。

Ⅲ層：黒色(Hue7.5YR1.7/1)細礫・砂混じり粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。層厚10㎝前後。下限ははっきりしている。主にⅥ層が土壌化したものと考えられ、礫・砂の多くは角張った岩片である。昨年度確認されたB-Tm火山灰はほとんどみられなかった。新千歳空港工事地内の遺跡に見られる第1黒色土層（ⅠB層）に対比される。縄文時代晩期から続縄文時代、アイヌ文化期までの遺物を含む。

Ⅳ層：褐色(Hue7.5YR4/4)細礫～砂混じり粘土質シルト。粘性ほとんどなし。しまりなし。層厚5～10㎝で、部分的にⅢ層、Ⅴ層と混じる。下限ははっきりしている。礫・砂は主に角張った岩片で、花岡（花岡　1995）はTa-cに対比している。稀に縄文時代の遺物を含み、上面に焼土が見られる場合がある。

Ⅴ層：黒褐色(Hue7.5YR2/2)細礫・砂まじり粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。層厚15～40㎝、下限は曖昧である。細礫は上部に多く、主にⅣ層から混じった岩片とみられる。新千歳空港工事地内に見られる第2黒色土層（ⅡB層）に対比される。縄文時代早期から晩期までの遺物を含む。

Ⅵ層：黄褐色(Hue10YR5/6)細～中礫・砂混じり粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。層厚10～30㎝、下限はやや はっきりしている。縄文時代早期の遺物を含む場合がある。

Ⅶ層：褐色(Hue10YR4/4)～黄褐色(Hue10YR5/6)砂混じり粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。層厚20～60㎝、下限ははっきりしている。下部は砂質が強くしまりも強い。段丘堆積物である。

Ⅸ層相当：淡黄色(Hue5YR8/3)粘土と灰黄色(Hue2.5YR6/2)砂の互層、にぶい黄褐色(Hue10YR6/4)細礫～中礫（軽石）質砂・オリーブ灰色(Hue2.5Y5/1)砂まじり粘土質シルト・灰色(Hue5Y4/1)粘土混じり砂の乱雑な堆積などが観察される。層厚

（2）低位の段丘（段丘面Ⅱ（Ⅲ？））部分の層序

今年度の調査範囲では縄文時代にはキウス川の氾濫原であったと見られる（西脇　1995)段丘面Ⅱ（Ⅲ？）ではⅢ～Ⅴ層に相当する295ラインのトレンチでの確認のみとなっている。そのためⅤ－4層以下は同様の名称であるが、調査区も離れており明らかではない。

Ⅲ-1層：黒褐色(Hue7.5YR2/2)～極暗褐色(Hue7.5YR2/3)砂質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。下限はあまりはっきりしない。層厚3～20㎝、河成の堆積物とも考えられる。平成5年度の調査で確認されたB-Tm火山灰は確認出来なかった。

Ⅲ-2-a層：褐色(Hue7.5YR4/4)細礫まじり砂。粘性なし。しまりややあり。礫は主に軽石質である。

Ⅲ-2-b層：にぶい褐色(Hue7.5YR5/3)粘土質シルト。粘性あり。しまりややあり。

Ⅲ-2-c層：にぶい橙色(Hue7.5YR6/4)細礫混じり砂、粘性なし、しまりありとにぶい黄褐色(Hue10YR5/3)シルト質粘土、粘性あり、しまりありとの互層。

Ⅲ-3層：黒色(Hue5YR2/1)シルト質粘土。粘性あり。しまりややあり。

Ⅳ-1層：暗褐色(Hue10YR4/4)細礫（主に軽石)。粘性なし。しまりなし。

Ⅳ-2層：にぶい黄褐色(Hue10YR4/4)シルト質砂混じり暗赤褐色(Hue5YR3/6)細礫質砂。粘性あまりなし。しまりあまりなし。

Ⅴ-1層：暗灰黄色(Hue2.5Y4/2)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあまりなし。

Ⅴ-2-a層：灰黄褐色(Hue10YR4/2)シルト質砂。粘性ほとんどなし。しまりややあり。

Ⅴ-2-b層：灰褐色(Hue10YR4/2)シルト質砂、粘性ほとんどなし、しまりややありに灰褐色(Hue7.5YR4/2)シルト質粘土、粘性あり、しまりあまりなしがラミナを形成。

Ⅴ-2-c層：灰黄褐色(Hue10YR4/2)シルト質砂。粘性ほとんどなし。しまりややあり。aと同様。

Ⅴ-2-d層：灰黄褐色(Hue10YR4/2)砂混じりシルト質砂。粘性ほとんどなし。しまりややあり。

Ⅴ-2-e層：灰黄褐色(Hue10YR5/2）細礫混じり砂。粘性ほとんどなし。しまりややあり。ラミナは形成していない。自然堤防の可能性が高い。

Ⅴ-2-f層：灰黄褐色(Hue2.5Y6/2）砂混じり粘土。粘性あり。しまりややあり。

Ⅴ-3-a層：極暗赤褐色(Hue2.5YR2/2～2/3)粘土。粘性あり。しまりあり。木質多く含む。

Ⅴ-3-b層：赤黒色(Hue2.5YR2/1)粘土。粘性あり。しまりあり。木質・炭化物やや含む。

Ⅴ-3-c層：灰褐色(Hue7.5YR5/2)粘土。粘性強。しまりあり。木質少量含む。

Ⅴ-4層：灰黄褐色(Hue10YR5/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。

Ⅴ-5-a-1層：黒色(Hue2.5Y2/1)粘土。粘性あり。しまりややあり。

Ⅴ-5-a-2層：黒色(Hue2.5Y2/1)粘土、粘性あり、しまりややありに青灰色(Hue10G5/1)シルト質砂。

Ⅴ-5-a-3-a層：灰オリーブ色(Hue5Y4/2)粘土。粘性あり。しまりあり。

Ⅴ-5-a-3-b層：緑灰色(Hue7.5GY5/1)粘土、粘性あまりなし、しまりややありに灰色(Hue5Y4/1)粘土、粘性あり、しまりややありがラミナを形成。

Ⅴ-5-a-4層：暗青灰色(Hue5B4/1)シルト、砂、粘土、細礫の互層。粘性ほとんどなし。しまりあり。En-Pを含む。

Ⅴ-5-a-5層：暗緑色(Hue5G4/1)砂、粘性あまりなし、しまりありに黒褐色(Hue10YR3/2)シルト質粘土、粘性あり、しまりややありがラミナを形成。En-Pを含む。

Ⅴ-5-a-6層：暗緑灰色(Hue10G4/1)シルト、粘性ややあり、しまりありに黒褐色(Hue2.5Y3/2)シルト質粘土、粘性あり、しまりありがラミナを形成。En-Pを含む。

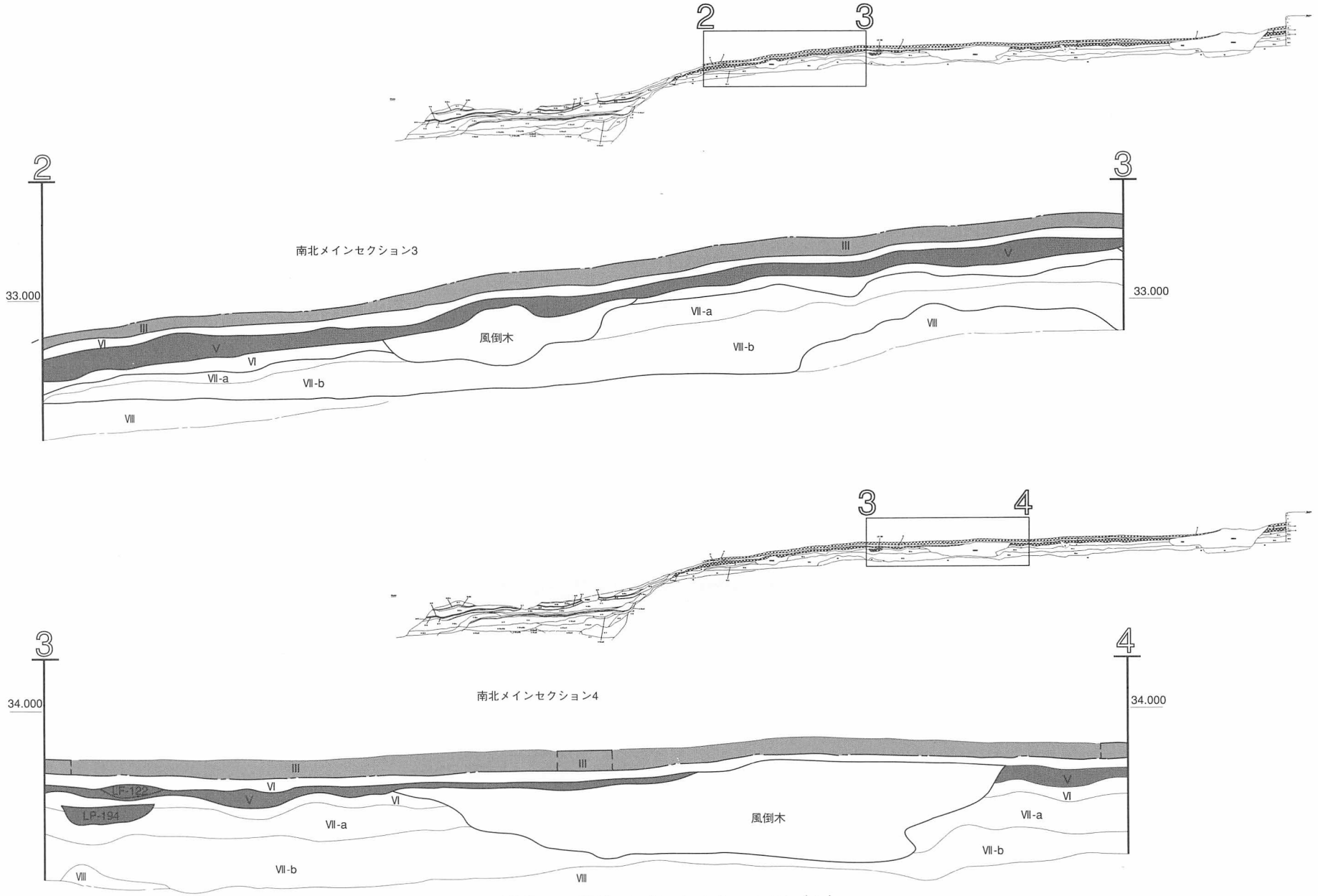
Ⅴ-5-b層：黒褐色(Hue2.5Y3/1)砂混じり粘土。粘性あり。しまりややあり。

Ⅴ-6層：灰オリーブ色(Hue7.5Y5/2)～緑灰色(Hue7.5GY5/1)粘土。粘性あり。しまり強。

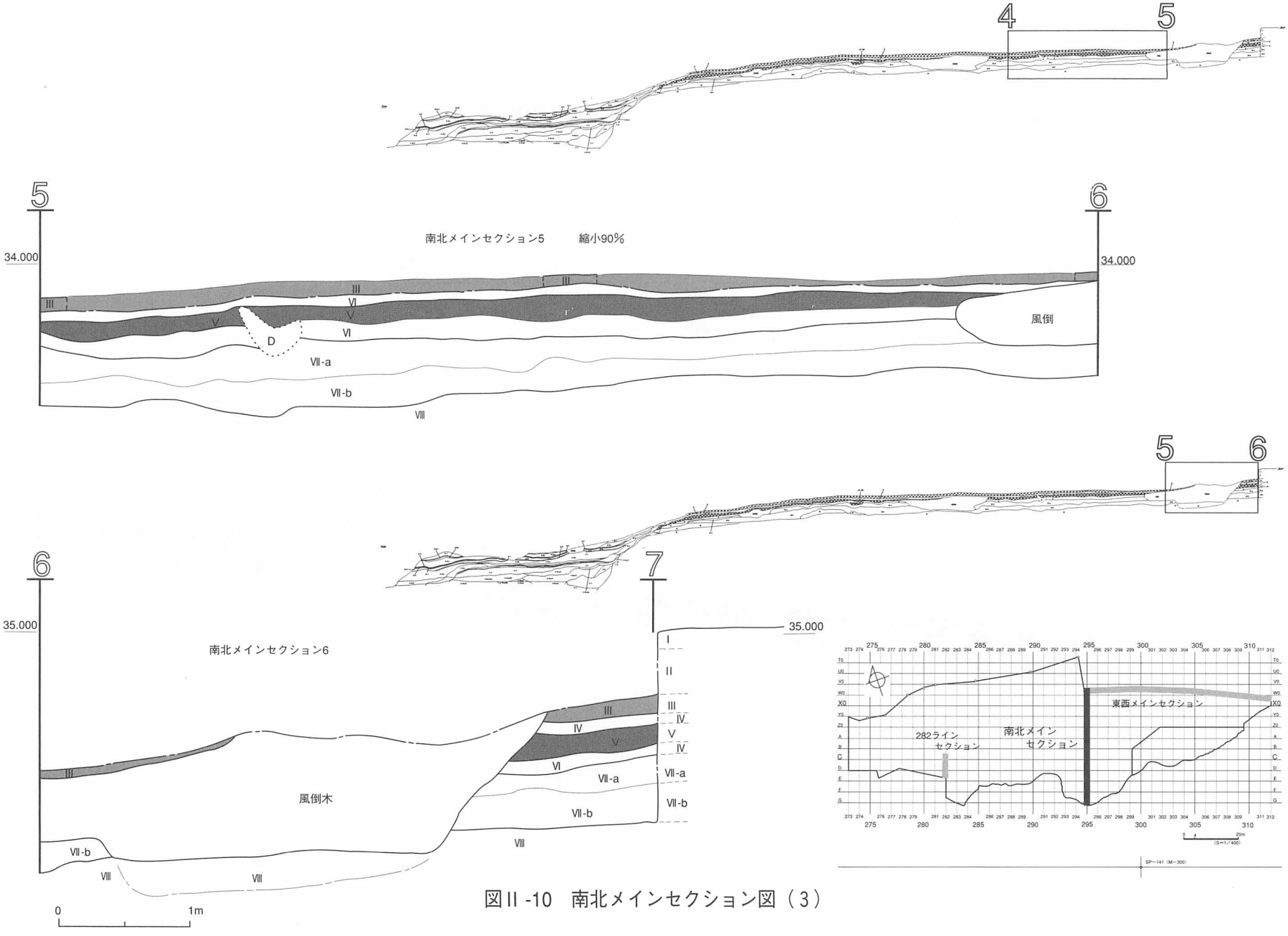
参考・引用文献

曽根龍典・佐藤博之　1980」『千歳地域の地質』地域地質研究報告（5万分の1図幅）　地質調査所

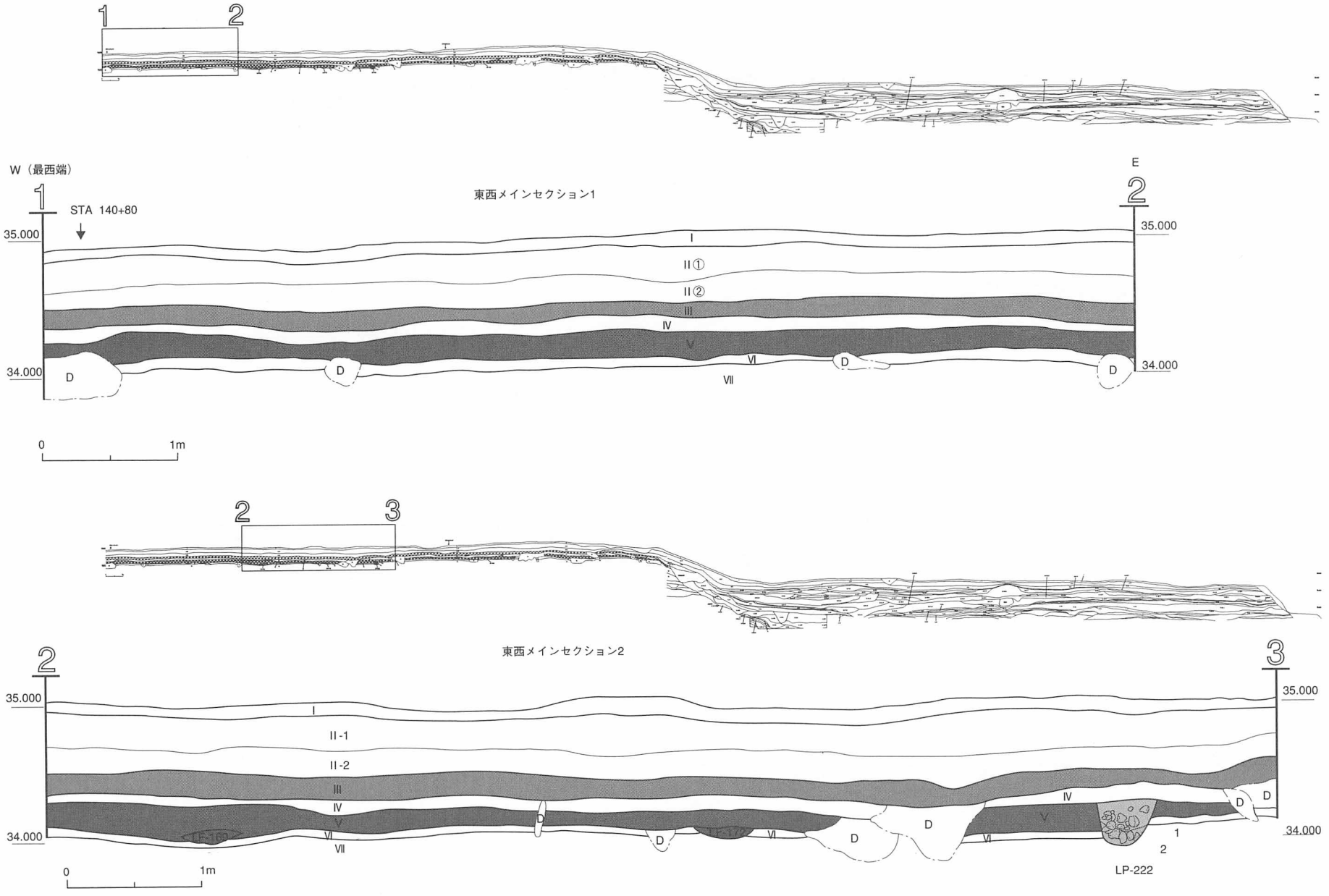
皆川洋一・西脇対名夫・花岡正光他　1995「千歳市　キウス5遺跡・キウス7遺跡（2）ケネフチ8遺跡　北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書」『⑲北海道埋蔵文化財センター調査報告書第92集』



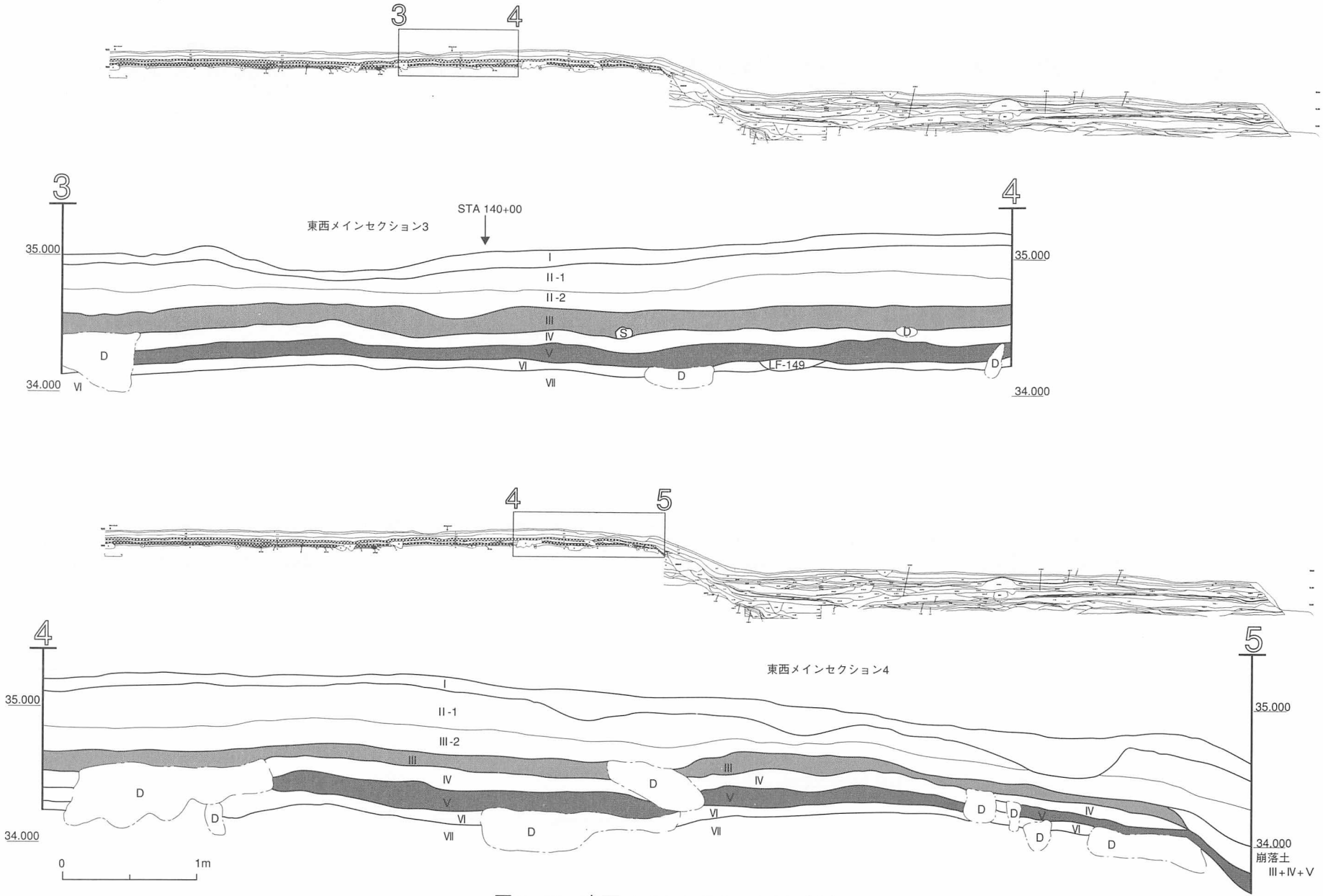
図II-9　南北メインセクション図（2）



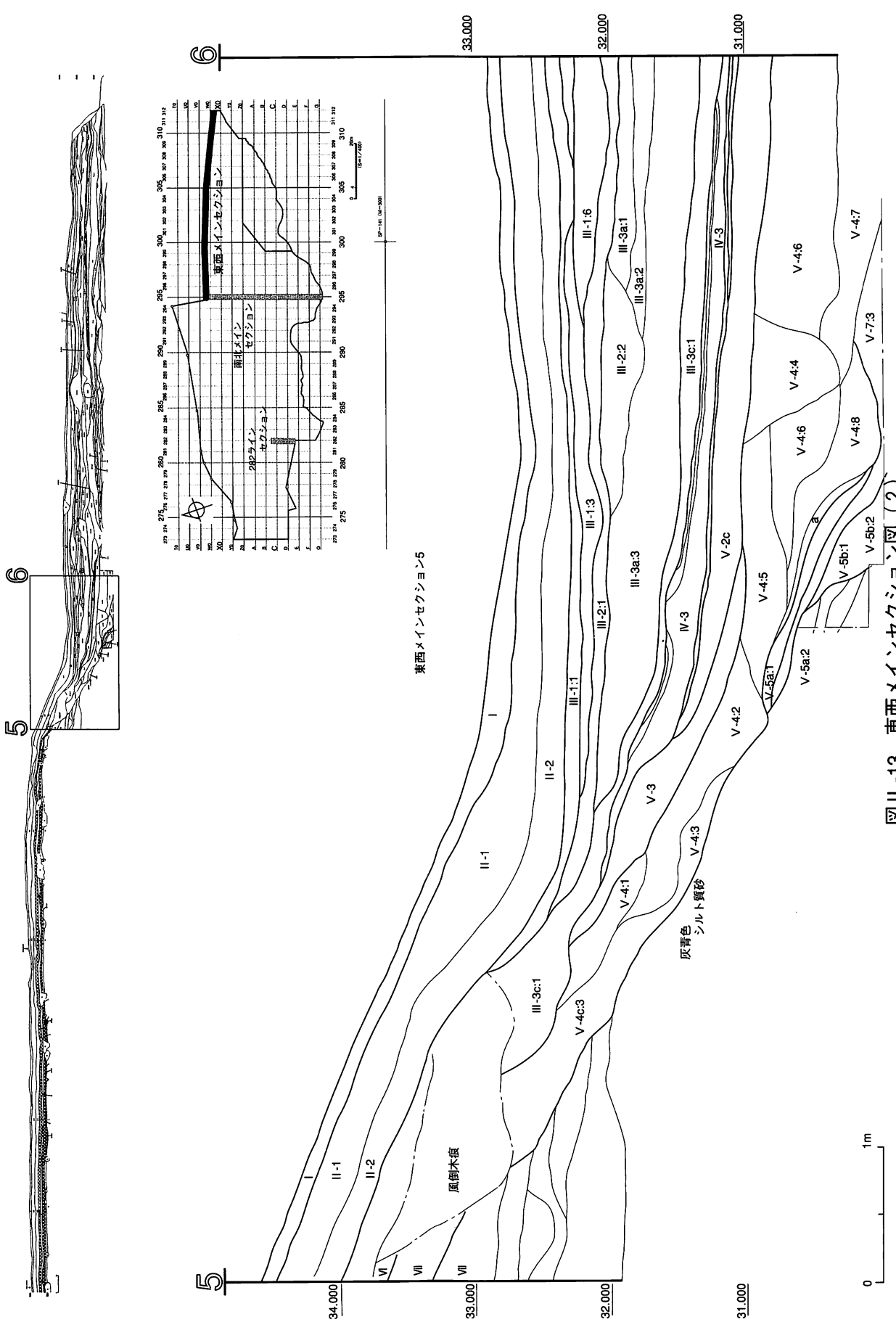
図II-10　南北メインセクション図（3）



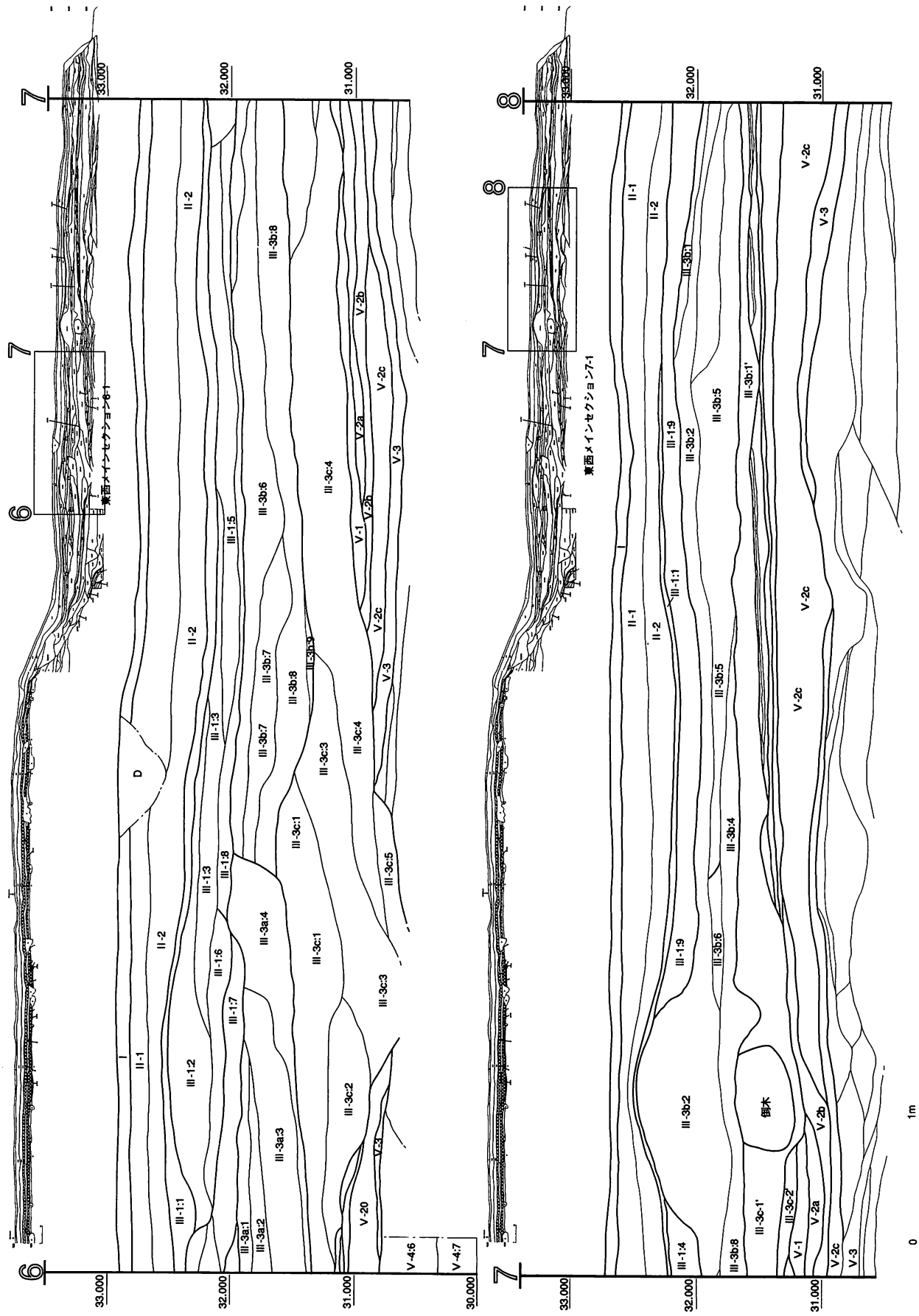
図II-11　南北メインセクション図（4）



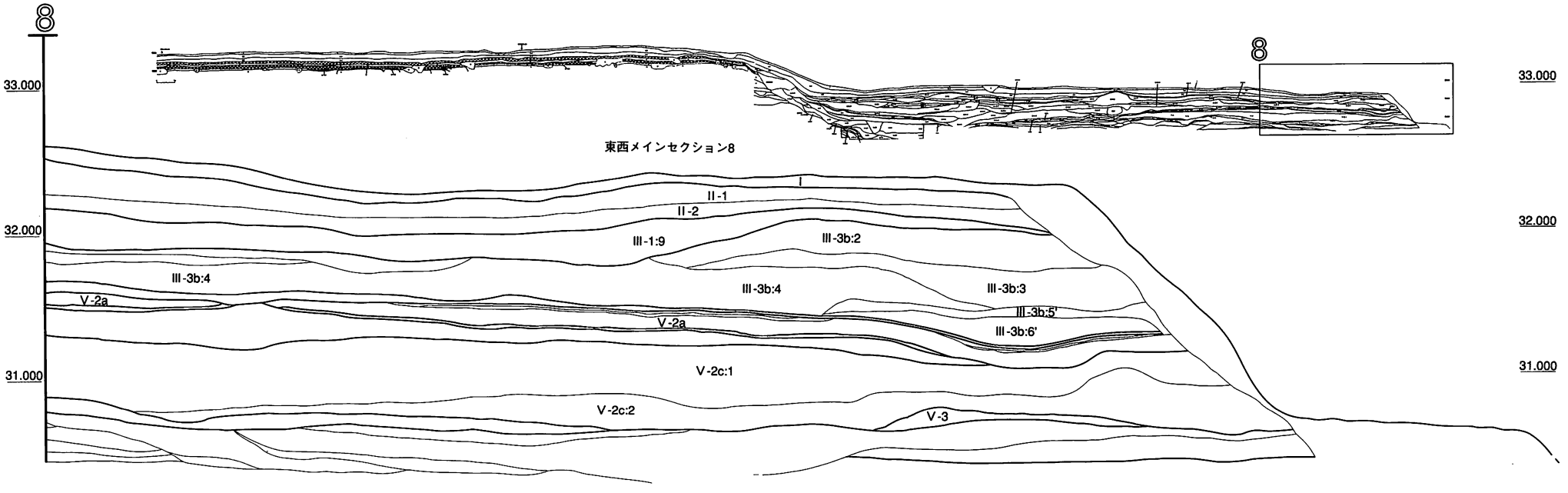
図II-12　東西メインセクション図（1）



図Ⅱ-13　東西メインセクション図（2）



図II-14　東西メインセクション図（3）

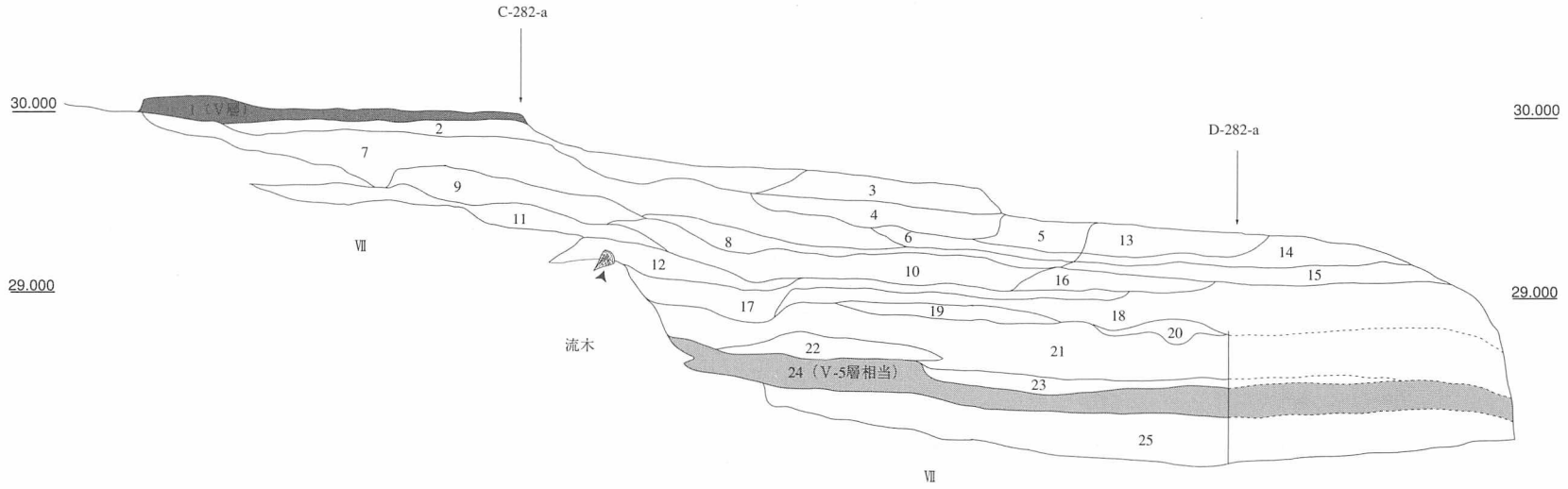


III-1：1　暗褐色（7.5YR3/3）シルト質粘土　縄縄文時代の遺物（VI群）若干出土
　：2　暗褐色（7.5YR3/4）細砂
　：3　暗褐色（7.5YR3/3）シルト
　：4　暗褐色（7.5YR3/3）シルト質砂
　：5　黒褐色（10YR 3/2）シルト
　：6　暗褐色（7.5YR3/3）細礫　粒径２～３mm大
　：7　褐　色（7.5YR4/3）シルト
　：8　黒褐色（10YR 3/2）シルト質砂
　：9　褐　色（7.5YR4/3）粘土
III-2：1　黒褐色（5YR 2/1）粘土　縄縄文時代の遺物（VI群）若干出土
　：2　暗褐色（10YR 3/3）粗砂　粒径１mm大
III-3a：1　灰褐色（7.5YR4/2）粘土
　：2　暗褐色（7.5YR3/3）細礫
　：3　黒褐色（5YR3/3）腐植泥
　：4　暗褐色（7.5YR3/3）細砂
III-3b：1　灰黄褐色（10YR5/2）シルト質粘土
　：2　にぶい褐色（7.5YR5/3）極粗砂　粒径1～2mm大　シルト混ざる
　：3　灰褐色（5YR4/2）粘土
　：4　にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト
　：5　暗赤褐色（5YR 3/4）極粗砂　粒径1～2mm大　酸化鉄付着
　：6　黒褐色（7.5YR2/2）シルト質粘土
　：7　黒褐色（7.5YR3/2）シルト質粘土　シルトと粘土のラミナ
　：8　暗褐色（7.5YR 3/4）粗砂　粒径1mm大
　：9　黒褐色（10YR3/2）シルト質粘土
　：5'　にぶい黄褐色（5YR 2/1）シルト～細砂

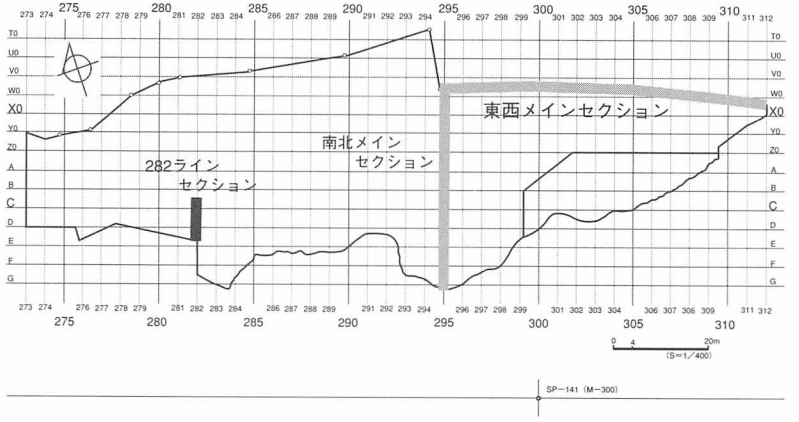
0　1m

III-3c：1　黒褐色（10YR3/2）シルト質粘土
　：2　灰色（10Y4/1）シルト+オリーブ黒色（5Y3/1）粘土
　：3　暗褐色（10YR3/3）細礫～粗砂　粒径1～4mm大
　：4　黒褐色（7.5YR3/2）腐植泥　流木を多量に含む
　：5　灰黄褐色（10YR 5/2）粘質シルト
　：1'　黒褐色（7.5YR3/1）シルト質粘土　泥炭質　流木を多量に含む　類）
　：2'　極暗褐色（7.5YR2/3）細砂+Ta-c2
IV-1　にぶい黄褐色（10YR 5/4）軽石　Ta-c1
IV-2　灰褐色（7.5YR4/2）砂質シルト
IV-3　赤褐色～褐色岩片　Ta-c2
V-1　オリーブ黒色（5Y3/1）粘土　縄文時代晩期の遺物（V群c類）若干出土
V-2a　暗オリーブ灰色（5Y3/1）シルト
V-2b　オリーブ黒色（5Y3/1）シルト質粘土
V-2c：1　暗赤褐色（5YR3/3）シルト質粘土　泥炭質　流木を多量に含む
　：2　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト
V-3：1　黒色～黒褐色（10YR1.7/1～7.5YR3/1）腐植泥　縄文時代後期の遺物（IV群b類、c類）出土
　：2　暗オリーブ灰色（5Y3/1）シルト　V-３層の旧河道　縄文時代後期の遺物（IV群b類、c類）および木製品、流木、焼け材出土
　：3　暗褐色（10YR3/3）中礫（0.5~2cm）　V-３層の旧河道　縄文時代後期の遺物（IV群b類、c類）および木製品、流木、焼け材出土
V-4：1　灰黄褐色（10YR5/2）シルト質粘土
　：2　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質粘土
　：3　暗オリーブ灰（2.5GY3/1）シルト質粘土
　：4　暗オリーブ灰（5GY3/1）細礫
　：5　オリーブ黒（7.5Y3/1）シルト質粘土
　：6　暗オリーブ灰（5GY4/1）シルト十黒褐色（10YR3/1）シルト質粘土のラミナ
　：7　暗緑灰（10GY3/1）細礫
　：8　オリーブ黒（5Y3/1）粘質シルト
V-4：9　黒褐色（2.5Y3/1）シルト質粘土
V-5a：1　黒色（10YR2/1）粘土　縄文時代前期・中期の遺物（II群a類、III群b類）を若干出土
　：2　黒色（10YR2/1）粘土
　：3　オリーブ黒（7.5Y3/1）シルト質粘土
V-5b：1　黒褐色（2.5Y3/1）シルト質粘土　縄文時代前期・中期の遺物（II群a類、III群bを若干含む
V-5b：2　暗オリーブ灰（2.5GY3/1）細礫　2～3mm大

図II-15　東西メインセクション図（4）



1. 極暗褐（Hue 7,5YR 2/3）V層に相当する腐植泥
2. 黒　褐（ Hue 10YR3/1） 腐植泥に多数の軽石が混入する
   この軽石はEn-aか？
3. 黒　（Hue 10YR 2/1）腐植土
4. 極暗褐（Hue 7,5YR2/3）植物センイ・小さな流木が混入する腐植泥層
5. 灰（Hue 10Y 4/1）細砂層に流木が混じるさらに小径の軽石も入る
6. 黒　褐（Hue 7,5YR 2/2）腐植泥>シルト
7. 黒　褐（Hue 7,5YR 3/2）腐植泥層
8. 黒　褐（ Hue 10YR3/2）腐植泥+シルト
9. 緑灰（ Hue 10YR5/1）粘土層
10. 極暗赤褐（Hue 5YR2/4）腐植泥層しまりがなくやわい
11. 褐灰（Hue 5YR4/1）V+シルト
12. 極暗赤褐（Hue 5YR2/4）腐植泥>シルト 流木(大型)含む
13. 黄褐（Hue 2,5YR 5/3）細に軽石が少量混じる
14. 黒　褐（Hue 7,5YR 2/2）腐植泥>軽石
15. 暗オリーブ褐（Hue 2,5YR3/3）砂>シルト>腐植泥
16. 黒　褐（ Hue 10YR2/2）腐植泥+シルト
17. 極暗褐（Hue 7,5YR2/3）腐植泥+シルト>軽石(小粒) 植物センイを多く含む
18. 黒　（Hue 7,5YR 2/1）腐植泥
19. 極暗褐（Hue 7,5YR2/3）腐植泥+シルト>軽石(小粒) 植物センイを多く含む
20. 極暗褐（Hue 7,5YR2/3）腐植泥+シルト>軽石(小粒) 植物センイを多く含む





図Ⅱ-16　西区セクション図

Ⅲ Ta-c 上位の遺構

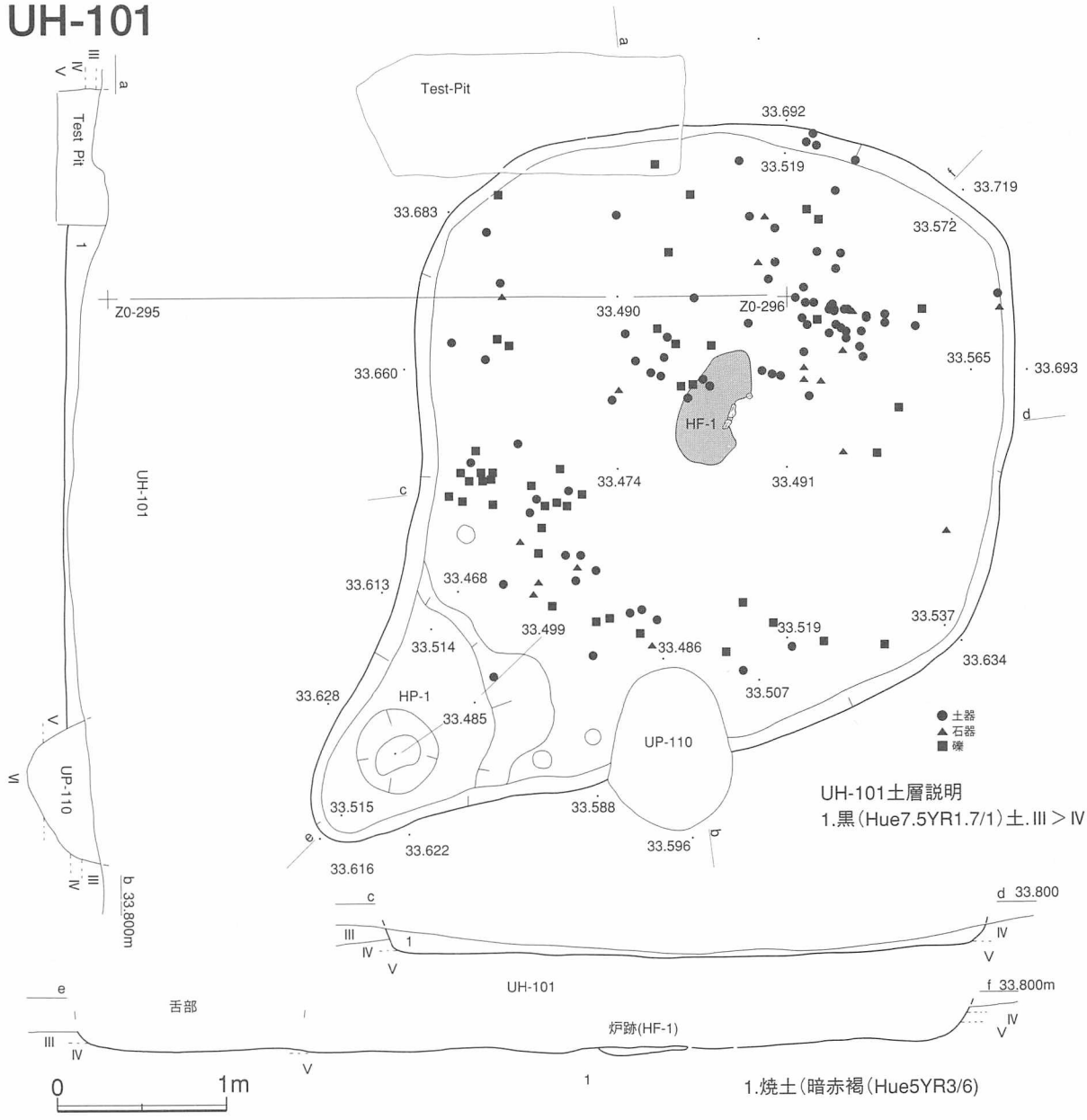
1．竪穴住居跡

UH-101（図 Ⅲ-1・2／図版 －3・79～106，107～123，123－125）

位置：V0-295-,Y0-296,Z0-295　　規模：5.31×3.80／3.67×5.14／0.22m

長軸方向：N-67°-E

特徴　河岸段丘上に作られた、平面形が手鏡の形を呈する住居跡である。基盤のⅦ層に認められる大きな窪地を利用して作られたと考えられ、Ⅲ層中から掘込みⅣ層下位～Ⅴ層上位までを床とする掘込みの浅いものである。主体部の平面形は不整の円形か多角形を想定させ、ほぼ中央には炉跡と考えられる明瞭な焼土（HF-1）が位置している。平面主体部の南西側に備わるキウス川の川下を向いた手鏡の柄の形状部分は、先端が丸みを帯びた先細りの形状で、住居の床面より一段高くその ほぼ中央には円形の浅い掘込み（HP-1）を有する住居の入り口部とみなされる。このHP-1覆土はこの住居跡のそれと同質であったが、埋め戻されていた可能性がある。柱穴は住居の内外面を



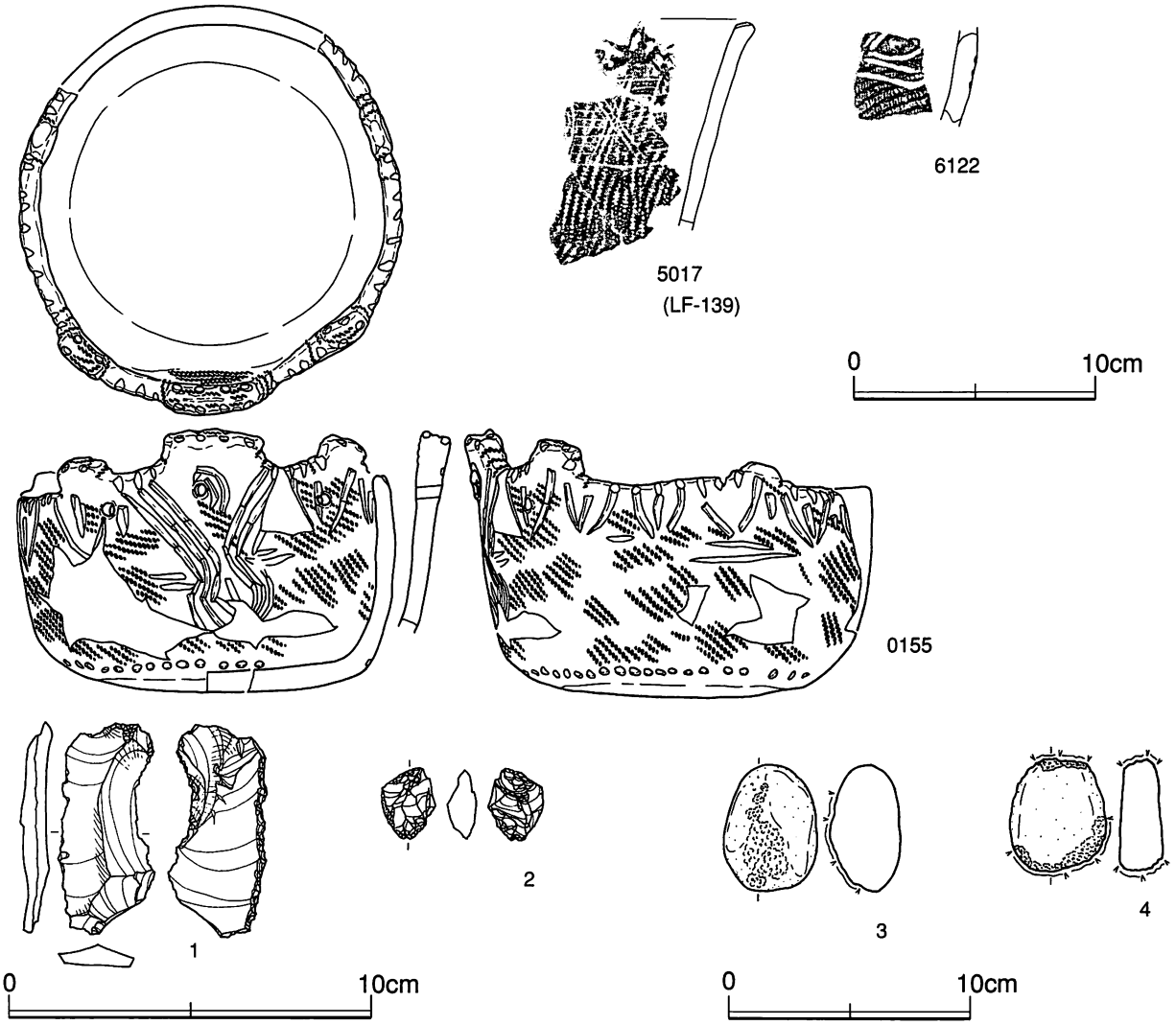
図Ⅲ-1　UH-101

細かく探索したが、手鏡の柄の付け根部分に三箇所の小ピットの輪郭のみを検出するにとどまった。これらは、立ち割りなどの調査を行ったが断面は不明瞭であった。炉跡（HF-1）は住居のほぼ中央に位置し、形状は長軸が東北ー南西を向く不整の楕円形である。平面形の右側に弧を描いてえぐれた部分が見られることから、この部分に何らかの物体が据え置かれた可能性がある。また周囲の床面や覆土中には大小の炭化物が顕著に検出されている。本住居跡から出土した遺物点数は覆土で203点、床面で123点である。ともなう可能性のあるⅤ群c類、Ⅵ群土器のうち図のⅤ群c類土器が炉跡周辺の覆土～床で出土しており、これ以外はⅥ群土器も含めて小破片が散点的に出土している。なお、Ⅳ群の土器も多数出土したが、これは下位層のⅤ層やこの時期の遺構を切って掘込んでいるためである。

遺物　0155は炉跡周辺から出土したⅤ群c類の鉢型土器である。器壁は厚く、口唇部には刺突文と縄線文の施された大小の突起状の装飾がつく。文様は地紋が縄文でその上に沈線による特徴的な文様が描かれる。5017はⅤ群c類、6122はⅥ群a類である。どちらも深鉢型土器である。2はスクレイパー。一側縁に直線的な刃部をもつ。1は楔形石器。黒曜石製。3、4はたたき石。3は礫の稜にたたき痕が認められる。4は偏平礫を素材とし、上下端にたたき痕をもつ。3、4は砂岩製。

時期　覆土及床面の遺物から縄文時代晩期末～続縄文時代初頭と考えられる。（皆川洋一）

UH-101



図Ⅲ-2　UH-101の遺物

2．土壙

UP-101（図Ⅲ-3）

位置：Y0-291-d　規模：0.98×0.75／0.33×0.55／0.43m

長軸方向：N-82°-E

特徴　Ⅳ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は卵形で、壁はやや急に立ち上がる。底面は、平らである。堆積状況はレンズ状を呈し、自然堆積と考えられる。しかし、覆土2層のしまりが強く、人為的な埋め戻しの可能性もある。堆積状況と覆土中にⅢ層が混じっていることから掘込み面はⅢ層中と考えられる。覆土4層中から続縄文時代の土器片が出土している。Ⅲ層上面では約1m離れたところから後北式土器の集中がある。

遺物　出土していない。

時期　明らかに遺構に伴う遺物はないが、覆土出土の遺物から続縄文時代の遺構の可能性が高い。（佐藤　剛）

UP-102（図Ⅲ-3）

位置：C-291-a　規模：1.56×0.75／0.25×0.95／0.17m

長軸方向：N-54°-W

特徴　Ⅲ層中位で黒色土のプランを確認した。平面は不整長楕円形で、壁は底面からなだらかに立ち上がり、浅い皿状である。3/4を掘り飛ばしてしまった。堆積状況はレンズ状を呈し、自然堆積と考えられる。

遺物　遺物は出土していない。

時期　遺物が出土していないため不明であるが、縄文時代晩期～続縄文時代にかけての遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UP-103（図Ⅲ-3・4／図版-4・107～123，123～125）

位置：W0-300-d,W0-300-c,W0-301-a,W0-301-b　規模：1.28×1.21／0.80×0.78／0.74m

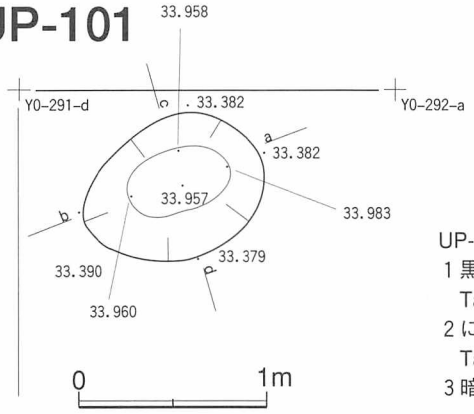
長軸方向：N-53.5°-E

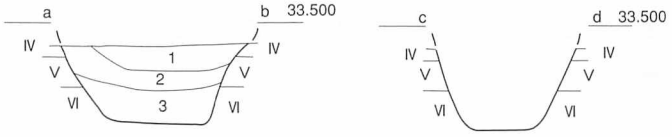
特徴　遺跡調査区東側の低湿部に面した台地縁辺部で検出された土壙群の内の一つで、Ⅲ層上面の窪みと色調の異なる土の広がりによって所在を推定し調査を行った。平面は円形を呈し平坦に掘られた底部からは崩落で中段のやや膨らむ壁が開き気味に立ち上がっている。覆土は2層より下方が埋め戻されており、覆土下位にはⅦ層のローム質土が含まれる割合が高い。掘り込み面はⅢ層中である。掘り込みの北方向に見つかった色調の異なる土の広がりは土壙の掘り上げ土の影響によるものである。この掘り上げ土は隣に位置するUP-113の掘り込み面上位に存在しており、両者の新旧関係か確認できる。遺物は底面と覆土中から見つかっており、底面のⅥ群土器と円礫はこの土壙に伴うものである。覆土中からはⅠ、Ⅳ、Ⅵ群土器、石斧、フレイク・チップ、礫などが出土しているが、この内のⅥ群土器は土壙の掘り込み時に包含されていたものと考えられ、本遺構の時期より古い時期のものと思われる。 土壙の形態と覆土の状況から墓の可能性がある。

遺物　0003,0133,0141が深鉢形、0161,6123が鉢形を呈するⅥ群a類土器である。1は石斧。刃部を欠損している。敲打調整後に剥離・研磨によって整形されている。裏面に原石面を残す。泥岩製。

時期　遺物と遺構の新旧関係から、続縄文時代前葉の可能性が高い。また、各特徴の類例から同じく後葉の後北C2-D式土器の時期まで新しくなる可能性もある。（皆川洋一）

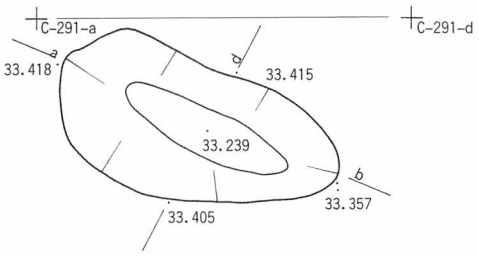
UP-101

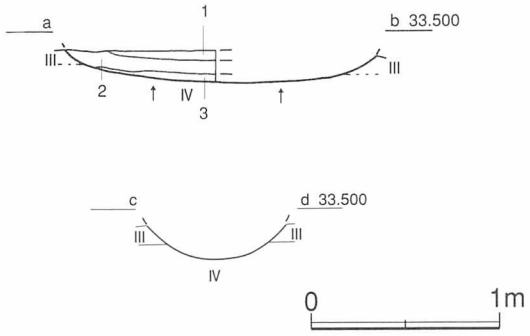




UP-101土層説明
1 黒色(Hue10YR2/1)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。III＞IV
Ta-cが少量混じる。
2 にぶい黄褐色(Hue10YR4/3)砂質シルト。粘性あまりなし。しまり強い。IV＞V
Ta-cが多く混じる。
3 暗褐色(Hue10YR3/4)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V＋VI

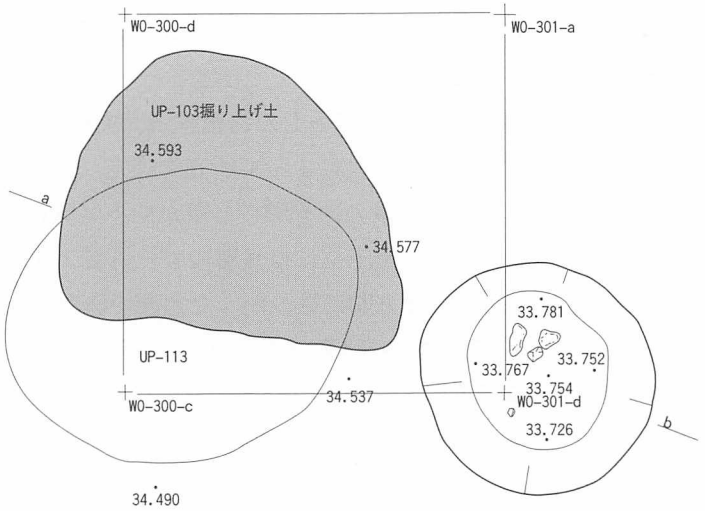
UP-102

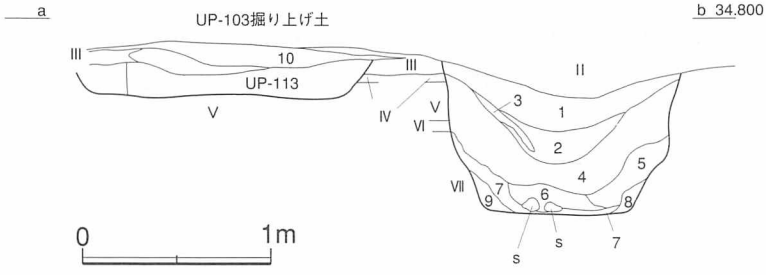




UP-102土層説明
1 黒色(Hue7.5YR1.7/1)砂質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。III＞IV
Ta-cが少量混じる。
2 にぶい赤褐色(Hue5YR4/3)砂質シルト。粘性ほとんどなし。しまりややあり。IV＞III
Ta-cが多く混じる。
3 黒色(Hue5YR1.7/1)砂質シルト。粘性ややあり。しまりなし。III
ふかふかしている。

UP-103

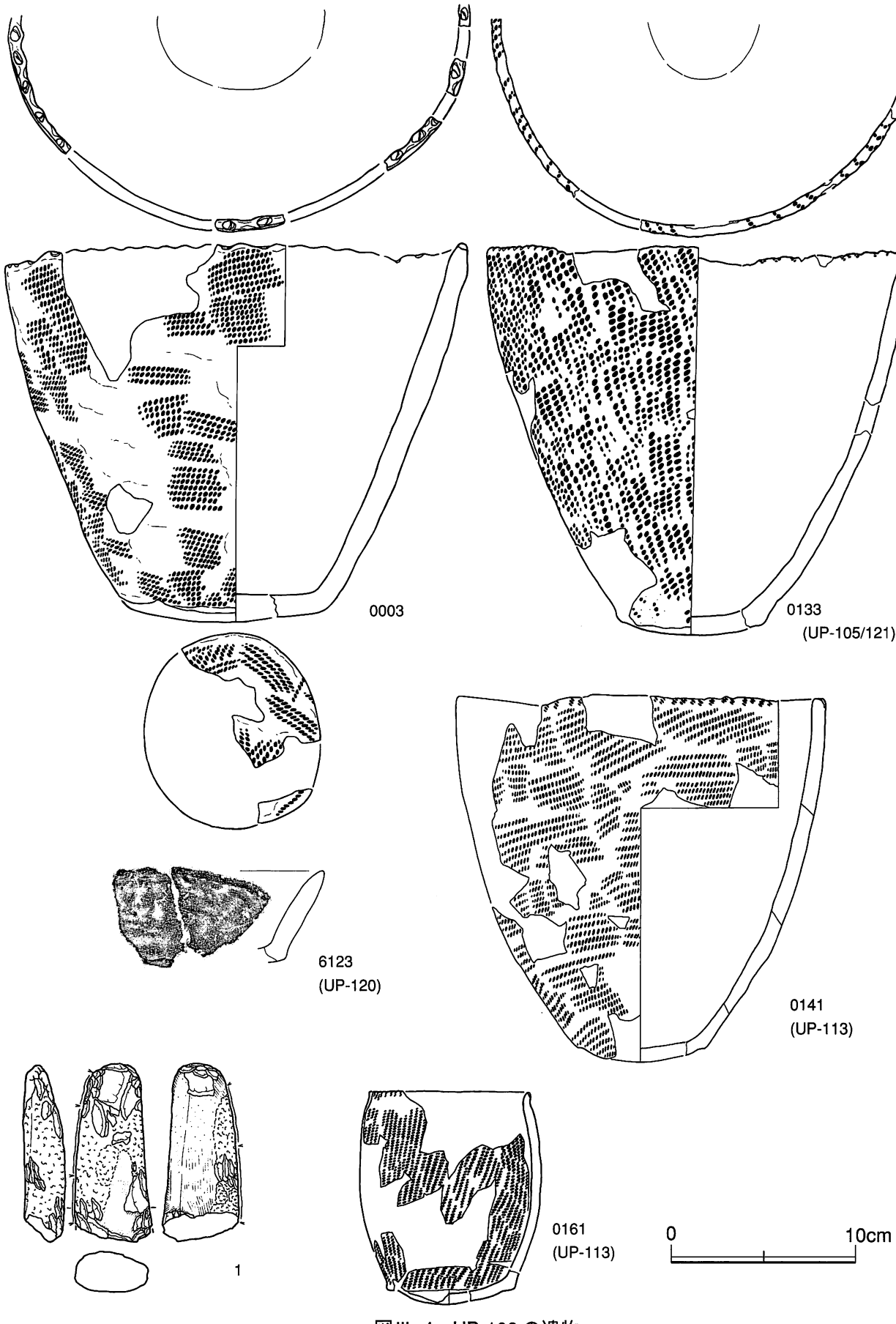




UP-103土層説明
1.黒　（H ue7.5YR1.7/1）III層
流れ込み
2.黒褐（Hue10YR2/2）III＋IV
流れ込み
3.暗褐（Hue10YR3/3）V＋VII
埋め戻し？
4.黒褐（Hue7.5YR2/2）IV＋V
埋め戻し？
5.黒　（Hue7.5YR2/1）V≫VII
6.黒褐（Hue10YR2/2）VII＞V
7.黒　（Hue7.5YR2/1）V≫IV
8.褐　（Hue10YR4/6）VII
9.褐　（Hue10Y R 4/6）VII
10.褐　（Hue10YR4/6）VII　　掘り上げ土

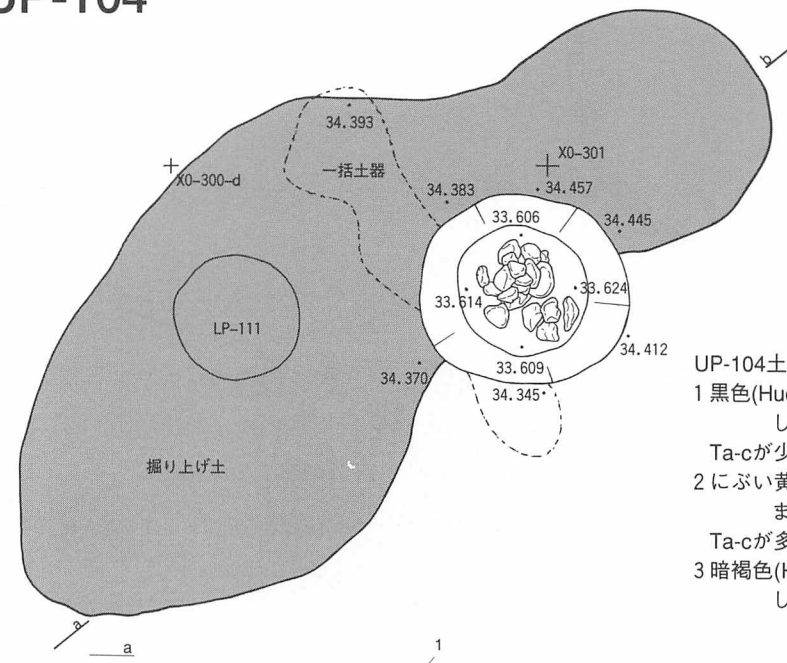
図III -3　UP-101・102・103

UP-103



図Ⅲ-4　UP-103 の遺物

UP-104

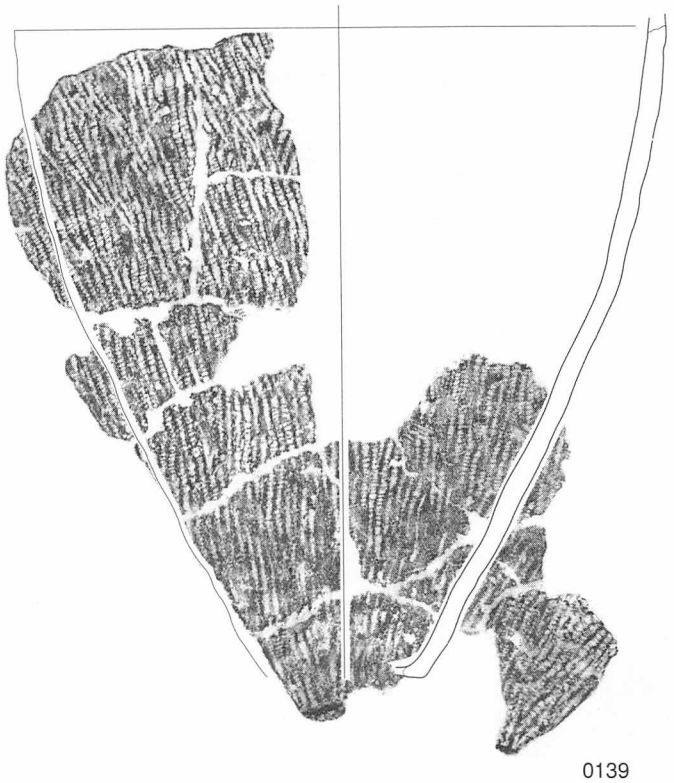


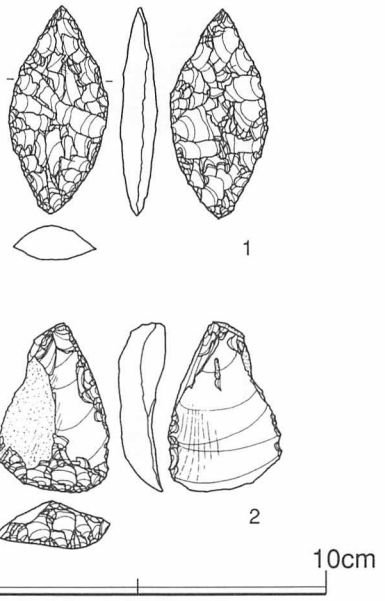
UP-104土層説明

1 黒色(Hue10YR2/1)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。III＞IV
Ta-cが少量混じる。

2 にぶい黄褐色(Hue10YR4/3)砂質シルト。粘性あまりなし。しまり強い。IV＞V
Ta-cが多く混じる。

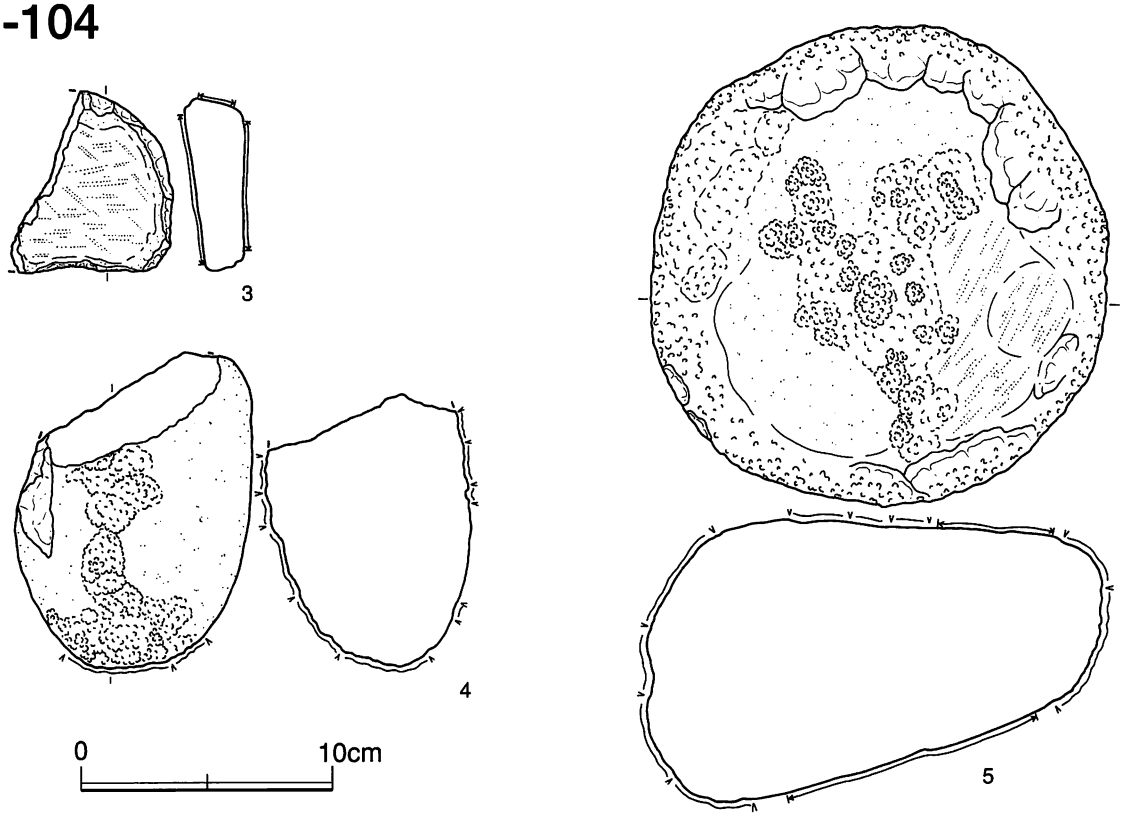
3 暗褐色(Hue10YR3/4)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V＋VI





図III -5　UP-104 と遺物

UP-104



図Ⅲ-6　UP-104 の遺物

UP-104（図Ⅲ-5・6 ／ 図版-4・107 ～ 123，123 ～ 125）

位置：X0-300-d,X0-301-a　　規模：1.12 × 0.99 ／ 0.65 × 0.71 ／ 0.74m

長軸方向：N-46.5° -E

特徴　遺跡調査区東側の低湿部に面した台地縁辺部で検出された土壙群の内の一つで、Ⅲ層を 1 回掘り込んだ面で窪みと色調の異なる土の広がり見つけ調査を行った。平面は円形を呈し平坦に掘られた底部からは崩落で中段のやや膨らむ壁が開き気味に立ち上がっている。覆土は 2 層より下方が埋め戻されており、覆土下位にはⅦ層のローム質土が含まれる割合が高い。掘り込み面はⅢ層中である。掘り込みの北側に広がる色調の異なる土は土壙の掘り上げ土の影響による。この掘り上げ土はすぐ隣で出土したⅥ群一括土器の上位に広がるもので、両者の新旧関係は明瞭である。

遺物の出土状況は、底部から覆土下位にかけて土壙に伴う積み石状に重ねられた多数の円礫が出土している。覆土からはⅠ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ群土器、ポイント、スクレイパー、たたき石、砥石、台石等が出土しているが縄文時代後期の包含層を掘り抜いていることから、大半はその時代に所属するものと思われる。　土壙の形態と覆土の状況から墓の可能性がある。

遺物　0139 は深鉢形のⅥ群 a 類土器である。1 は木葉形を呈する両面加工のポイント。2 はスクレイパー。下端に急角度の刃部をもつ。1・2 は黒曜石製。3 は砥石。表裏面および側面に若干凹んだ形状のすり面をもつ。砂岩製。4 はたたき石。表裏面の凸状部および下端部にあばた状のたたき痕をもつ。5 は台石。周縁が打ち欠き・敲打によっておよそ円形状に整形されている。表裏面にはあばた状のたたき痕およびすり面が部分的に認められる。凝灰岩製。

時期　遺物との新旧関係から、続縄文時代前葉以降の可能性が高い。また、各特徴の類例から同じく後葉の後北 C2-D 式土器の時期まで新しくなる可能性もある。（皆川洋一）

UP-105（図Ⅲ-7・8／図版-107～123，79～106）

位置：X0-300-c,X0-301-b,Z0-300-d,Z0-301-a　　規模：1.32×1.23／0.82×0.86／0.66m

長軸方向：N-10°　-E

特徴　遺跡調査区東側の低湿部に面した台地縁辺部で検出された土壙群の内の一つで、Ⅲ層を1回掘り込んだ面で窪みと色調の異なる土の広がり見つけ調査を行った。平面は円形を呈し平坦に掘られた底部からは壁が開き気味に立ち上がっている。覆土は3層より下方が埋め戻されたものと考えられ、掘り込み面はⅢ層中である。掘り込みの南側に広がる色調の異なる土は土壙の掘り上げ土の影響による。覆土にⅥ群土器を持つUP-121を切って掘り込んでおり、両者の新旧は明瞭である。

遺物の出土状況は、底部に近い覆土中から土壙に伴う円礫が出土している。他はⅠ～Ⅵ群土器、ポイント、スクレイパー、Rフレイク、たたき石等が出土しているがⅥ群土器以外は縄文時代後・晩期の包含層を掘り抜いていることから、多くがその時代に所属するものと思われる。　土壙の形態と覆土の状況から墓の可能性がある。

遺物　0133は深鉢型、0174は小型の鉢を呈するⅥ群a類土器である。5012は深鉢形、0190が浅鉢形を呈するⅤ群c類土器である。1・2はスクレイパー。1は下端に長軸方向に斜向する急角度の刃部をもつ。2は両側縁に直線的な刃部をもつ。3は楔形石器。1～3は黒曜石製。4はたたき石。下端の凸部にたたき痕をもつ。泥岩製。

時期　遺物と遺構の新旧関係から、続縄文時代前葉の可能性が高い。また、各特徴の類例から同じく後葉の後北C2-D式土器の時期まで新しくなる可能性もある。（皆川洋一）

UP-106（図Ⅲ-9／図版-4・123～125）

位置：X0-301-a,X0-301-d　　規模：1.10×1.10／0.65×0.75／0.54m

長軸方向：N-78°　-E

特徴　遺跡調査区東側の低湿部に面した台地縁辺部で検出された土壙群の内の一つで、Ⅲ層上面の窪みと色調の異なる土の広がりによって所在を推定し調査を行った。平面は円形を呈し平坦に掘られた底部からはわずかに開きながら立ち上がる。掘り込み面はⅢ層中で、覆土は2層より下方が埋め戻されている。掘り込みの北から東方向に見つかった色調の異なる土の広がりは土壙の掘り上げ土によるものである。掘り上げ土の下位からはⅥ群の大狩部式土器の破片が出土している。

遺物は底面と覆土中から見つかっており、底面から覆土下位に積み石状に検出された多くの円礫はこの土壙に伴うものである。覆土中からはⅣ～Ⅵ群土器、くさび形石器、Rフレイク、礫などが出土しているが、この内、この遺構に関わると考えられるⅥ群土器には続縄文時代前葉の大狩部式土器と後葉の後北C2－D式土器があり、土壙の掘り込み時に包含されたものと考えられる。

土壙の形態と覆土の状況から墓の可能性がある。

遺物　1は楔形石器。2はたたき石。礫の稜部分および下端部にたたき痕をもつ。

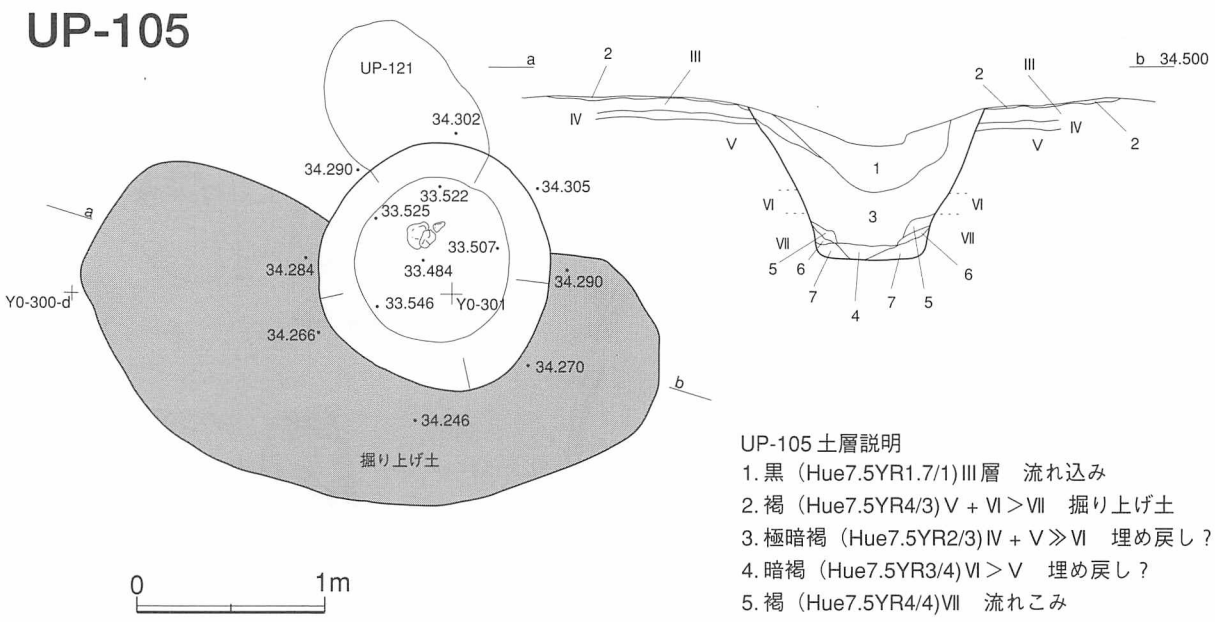
時期　遺物と遺構の新旧関係から、続縄文時代前葉の可能性が高い。また、各特徴の類例から同じく後葉の後北C2-D式土器の時期まで新しくなる可能性もある。（皆川洋一）

UP-107（図Ⅲ-10／図版-79～106）

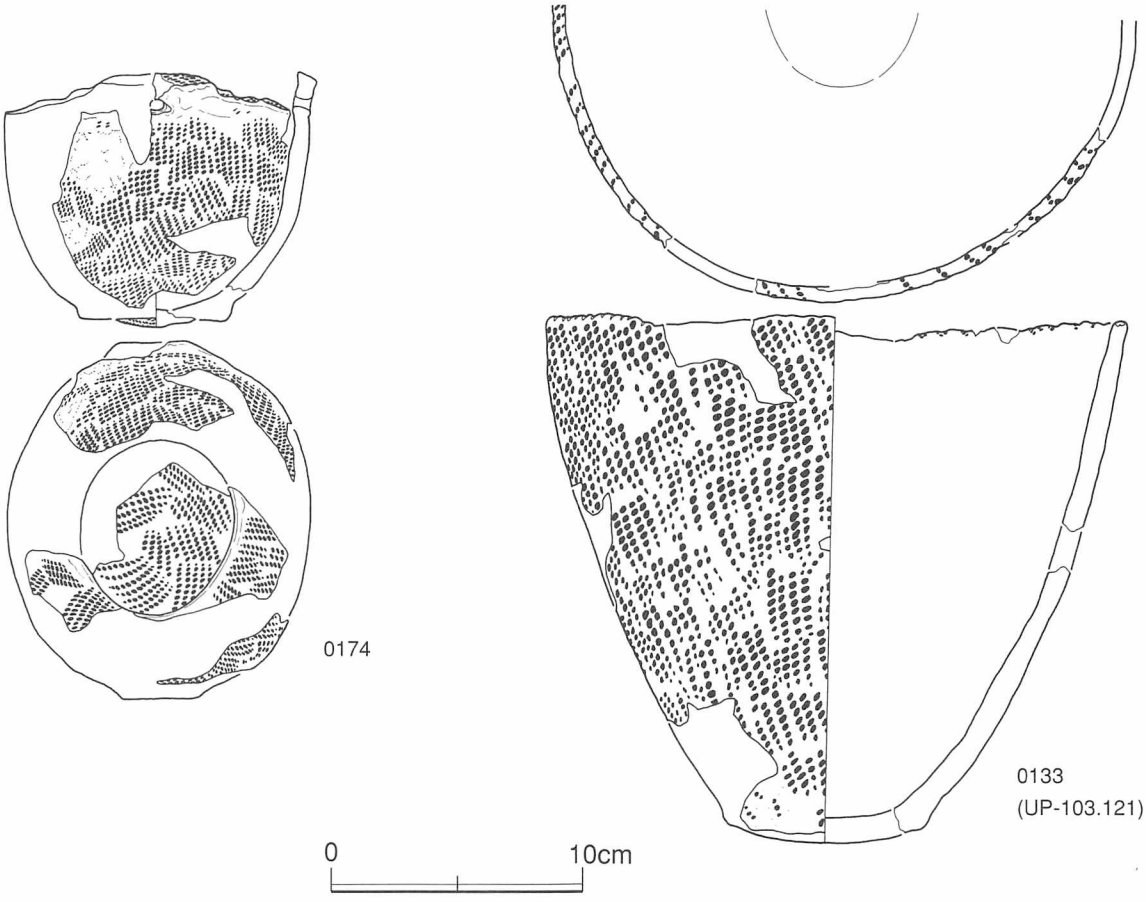
位置：W0-296-b　規模：0.80×0..69／0.24×0.40／0.34m

長軸方向：N-19°　-W

特徴　Ⅲ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は不整な小判形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は長軸北東側で浅く全体的に丸みを帯びる。堆積状況は埋め戻しと考えられ、掘込み面は確認面と同じⅢ層上面と考えられる。　遺物　0181は台付の浅鉢でⅤ群c類併行の大洞A式土器であ

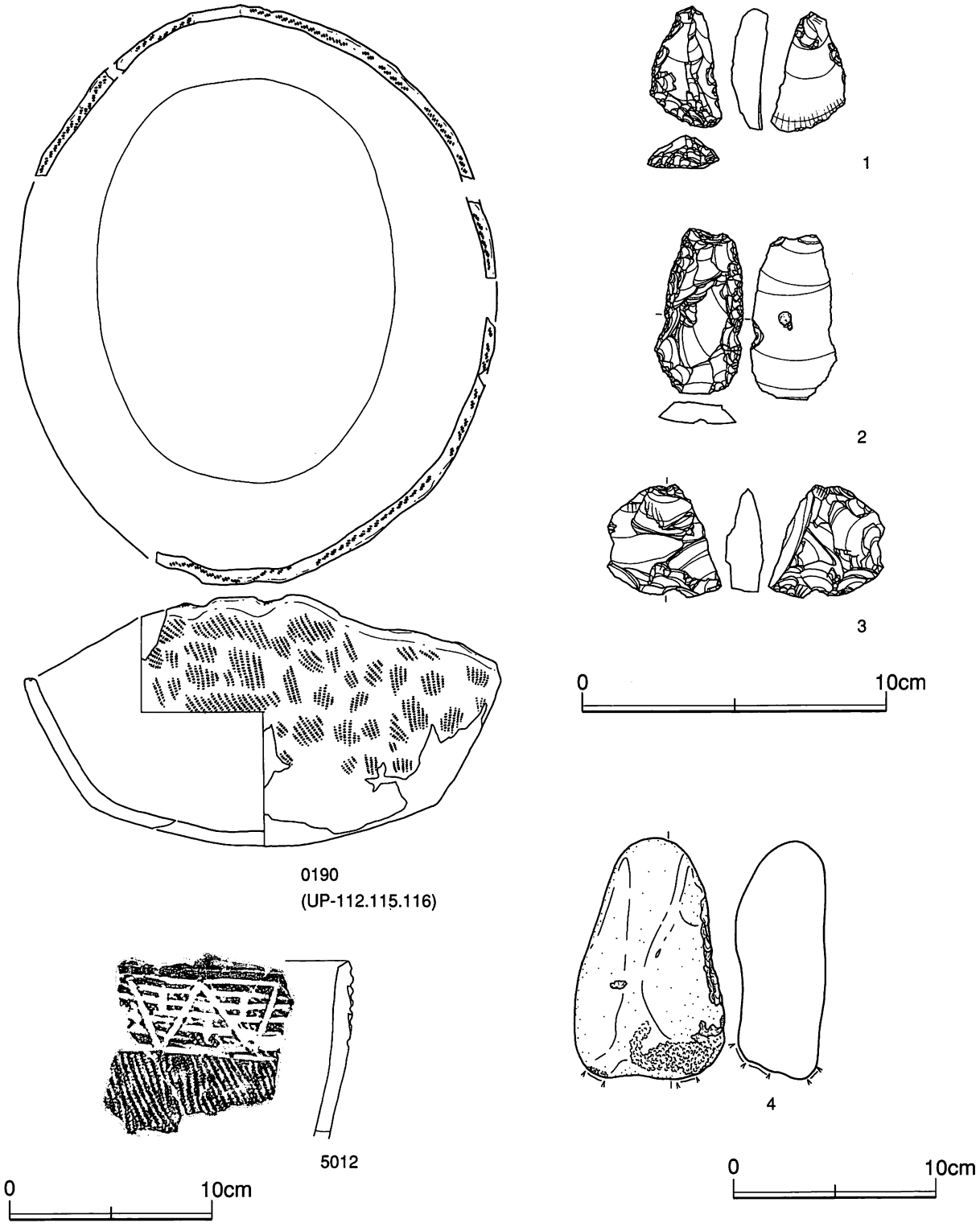


UP-105 土層説明
1. 黒（Hue7.5YR1.7/1）Ⅲ層　流れ込み
2. 褐（Hue7.5YR4/3）Ⅴ＋Ⅵ＞Ⅶ　掘り上げ土
3. 極暗褐（Hue7.5YR2/3）Ⅳ＋Ⅴ≫Ⅵ　埋め戻し？
4. 暗褐（Hue7.5YR3/4）Ⅵ＞Ⅴ　埋め戻し？
5. 褐（Hue7.5YR4/4）Ⅶ　流れこみ
6. 暗褐（Hue10YR3/2）Ⅴ＋Ⅵ
7. 褐（Hue7.5YR4/4）Ⅶ　流れ込み
＊2～7層は．しまりがなく．やわらかい



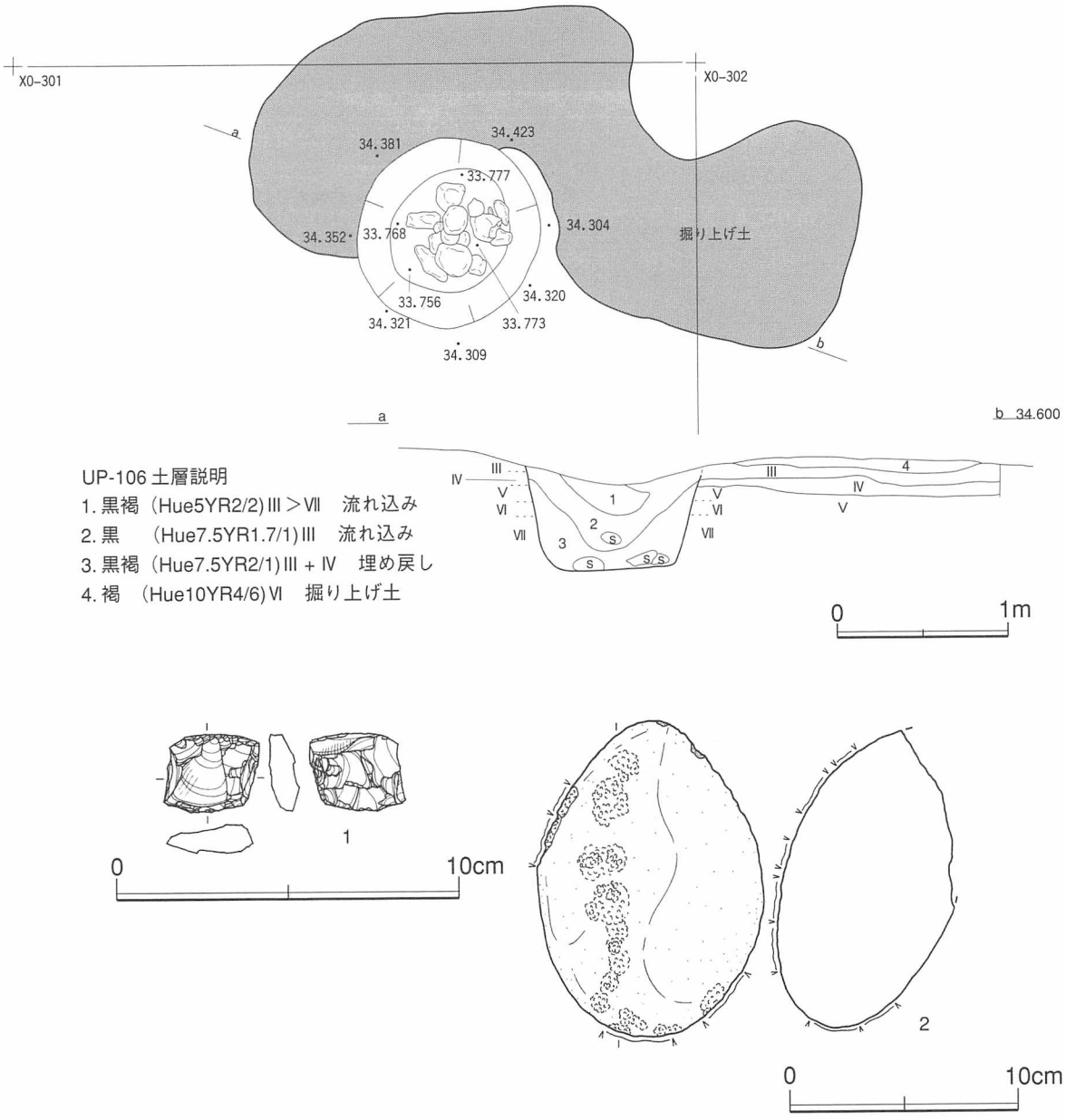
図Ⅲ-7　UP-105 と遺物

UP-105



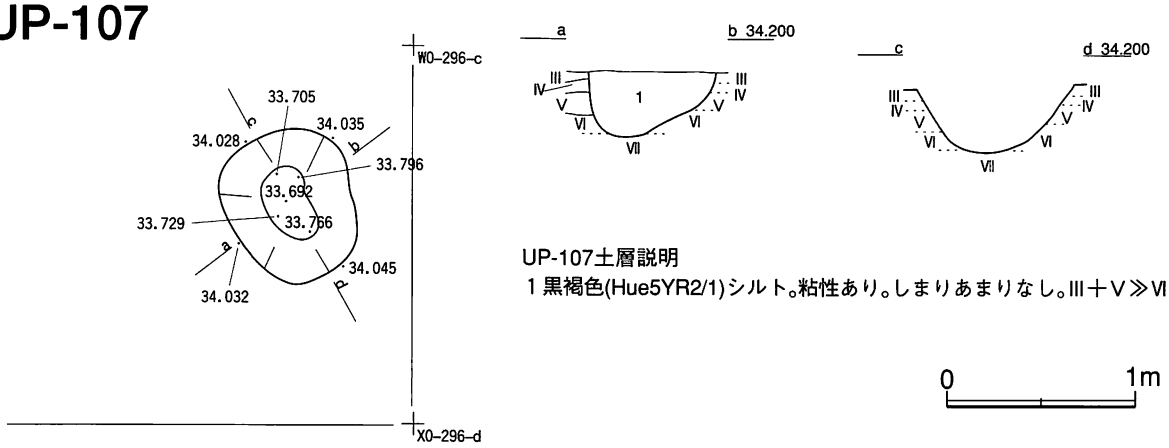
図Ⅲ-8　UP-105の遺物

UP-106

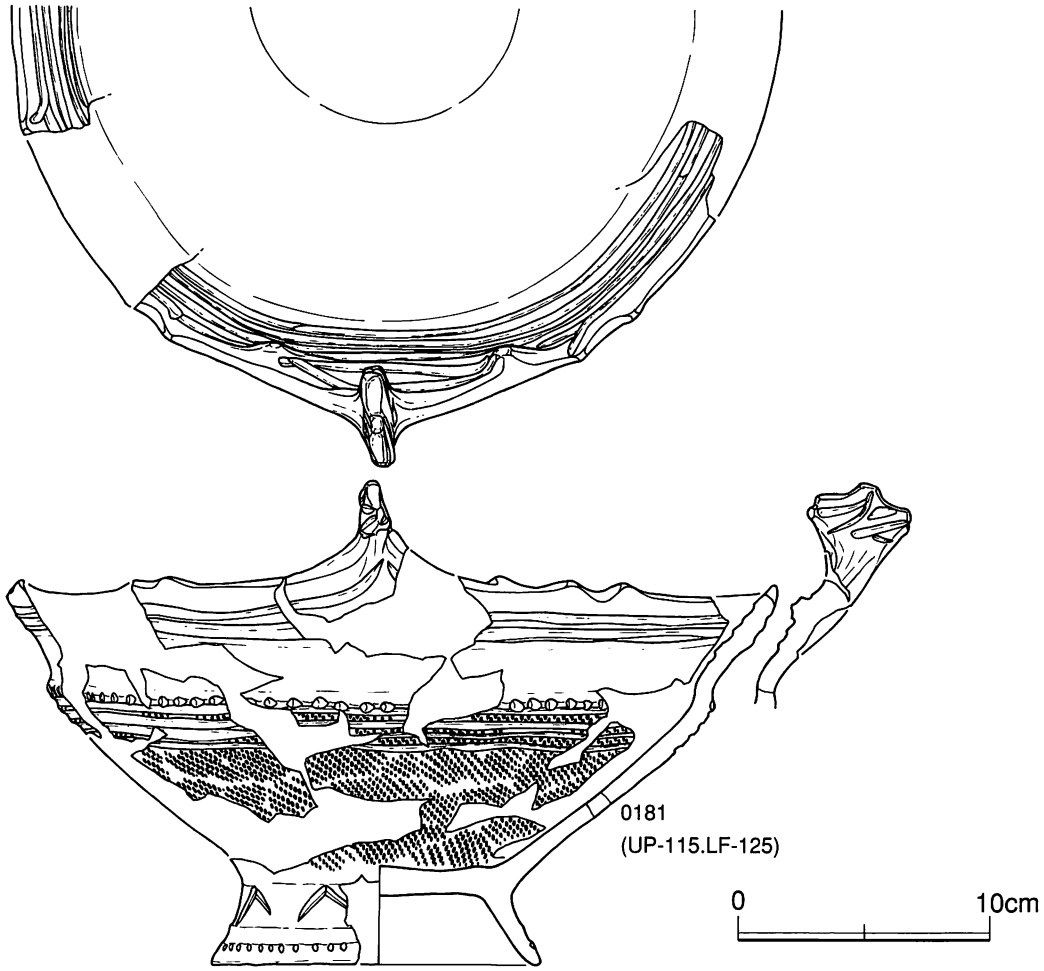


図Ⅲ-9　UP-106 と遺物

UP-107

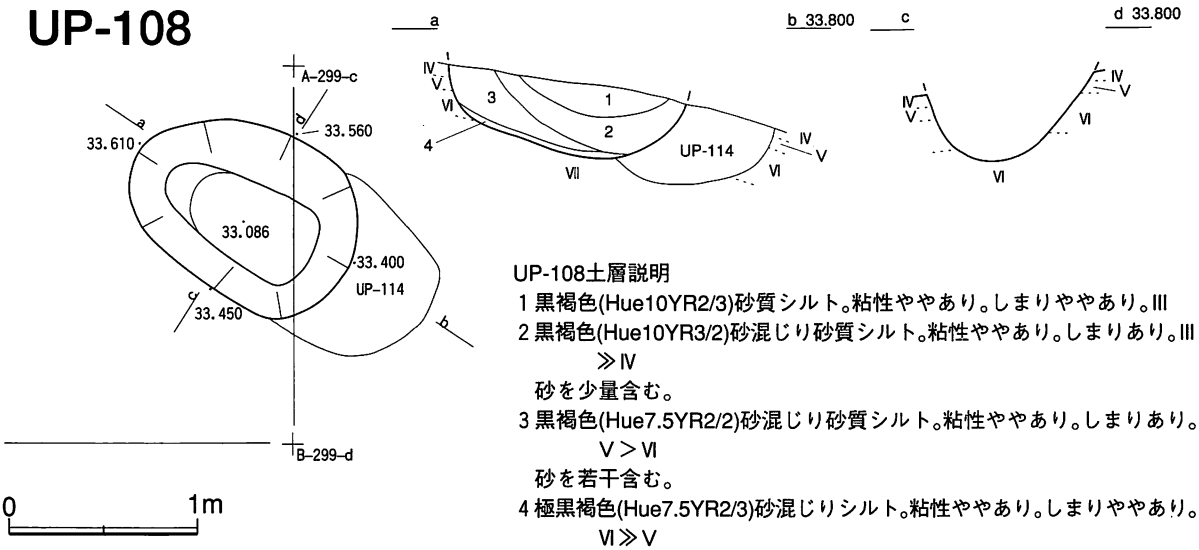


UP-107土層説明
1 黒褐色(Hue5YR2/1)シルト。粘性あり。しまりあまりなし。III＋V≫VI



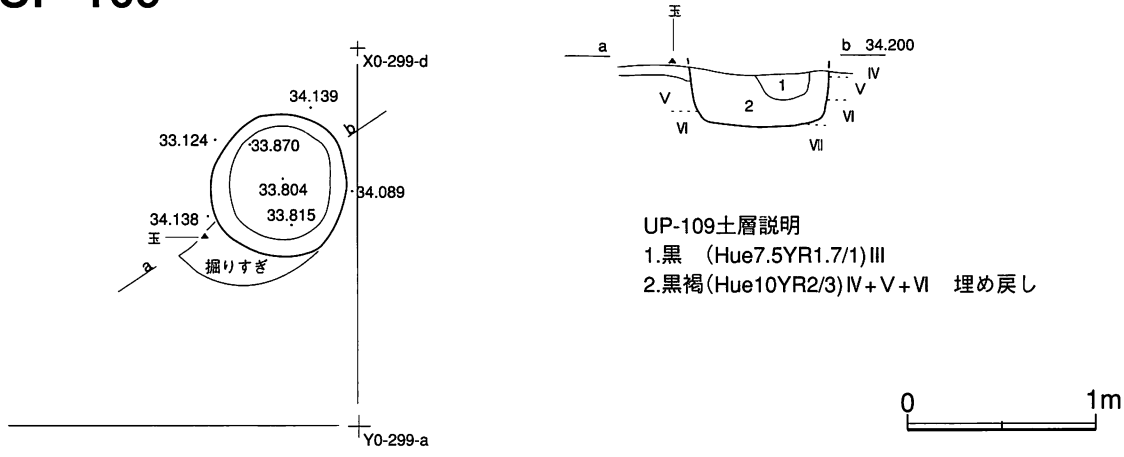
図III -10　UP-107 と遺物

UP-108



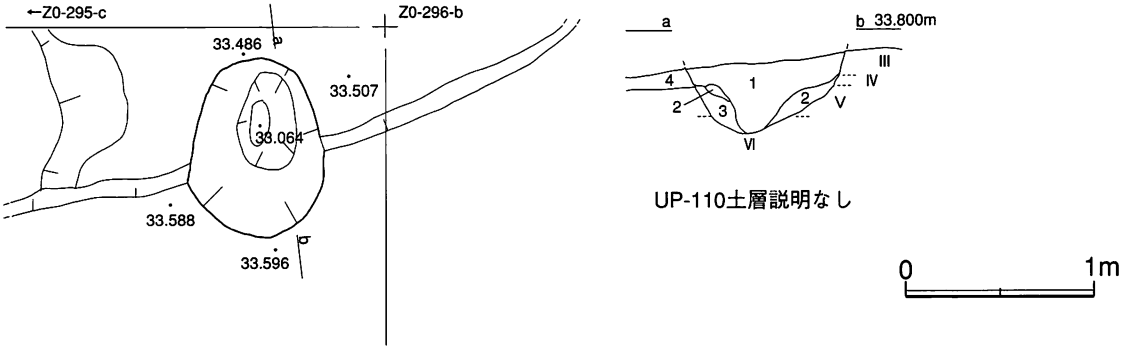
UP-108土層説明
1 黒褐色(Hue10YR2/3)砂質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ
2 黒褐色(Hue10YR3/2)砂混じり砂質シルト。粘性ややあり。しまりあり。Ⅲ≫Ⅳ
　砂を少量含む。
3 黒褐色(Hue7.5YR2/2)砂混じり砂質シルト。粘性ややあり。しまりあり。Ⅴ＞Ⅵ
　砂を若干含む。
4 極黒褐色(Hue7.5YR2/3)砂混じりシルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅵ≫Ⅴ
　砂を微量含む。

UP-109



UP-109土層説明
1.黒　(Hue7.5YR1.7/1)Ⅲ
2.黒褐(Hue10YR2/3)Ⅳ＋Ⅴ＋Ⅵ　埋め戻し

UP-110



UP-110土層説明なし

図Ⅲ-11　UP-108・109・110

る。これはUP-115やⅤ層上面で検出されたLF-125でも出土している。

時期　量的には少ないが遺物から、縄文時代晩期以後の遺構である。（佐藤　剛）

UP-108（図Ⅲ-11）

位置：A-299-b,A-299-c　規模：1.27×0.89／0.43×0.71／0.61m

長軸方向：N-52°-W

特徴　Ⅳ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は卵形で、壁は底面からやや急に立ち上がる。底面は傾斜に沿って平らである。堆積状況はレンズ状を呈し自然堆積と考えられる。堆積状況から掘込み面はⅢ層中と考えられる。UP-114を切って作られている。

遺物　掲載遺物なし

時期　明らかに遺構に伴う遺物はないが、覆土出土の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UP-109（図Ⅲ-11／図版-5）

位置：X0-298-c　規模：0.76×0.74／0.57×0.59／0.28m

長軸方向：N-4°-E

特徴　Ⅳ層上面で確認した平面が円形の土壙である。平らに作られた底面の隅は丸味を持ち壁はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。掘り込み面はⅢ層中で、覆土はそれより下位の土層が一体となって埋め戻されている。本遺構を含むUP-117・123・124は近接して掘り込まれたもので良く似た形状と近い規模を有し一つの群をなすと考えられる。　遺物は覆土からⅣ・Ⅴ群土器が出土しているが、これらは埋め戻しの際に混入したものとであろう。なお、本遺構上位のⅢ層包含層で図の玉が出土しているが、これはⅣ層上面より約2㎝上のⅢ層中で出土したもので、その位置関係から本遺構に伴うものと推定される。　玉を副葬品とするなら覆土の堆積状況と併せて墓的な性格を有す土壙といえる。

遺物　1は覆土の上位包含層から出土した石製品である。

時期　推定される掘込み面と周囲の遺物の高さから続縄文時代前葉と考えられる。（皆川洋一）

UP-110（図Ⅲ-11）

位置：Z0-295-c,Z0-296-b　規模：0.94×0.72／×／0.36m

長軸方向：N-21.5°-E

特徴　Ⅲ層を2回目に掘り下げた面で確認したUH-101と重複する土壙である。平面は不整の楕円形で底部は丸みを持つ。覆土は流れ込みとと考えられるⅢ層の腐植土で、層中には炭化物の粒が僅かに認められる。遺物は覆土からⅥ群土器が出土しているがこれも流れ込みであろう。関連する遺構・遺物も無く、性格不明の土壙ある。

遺物　掲載遺物なし

時期　UH-101を切って掘り込んでいることから、縄文時代晩期末以降と考えられる。（皆川洋一）

UP-111（図Ⅲ-12／図版-5・107～123）

位置：X0-300-d　規模：0.71×0.65／0.55×0.53／0.12m

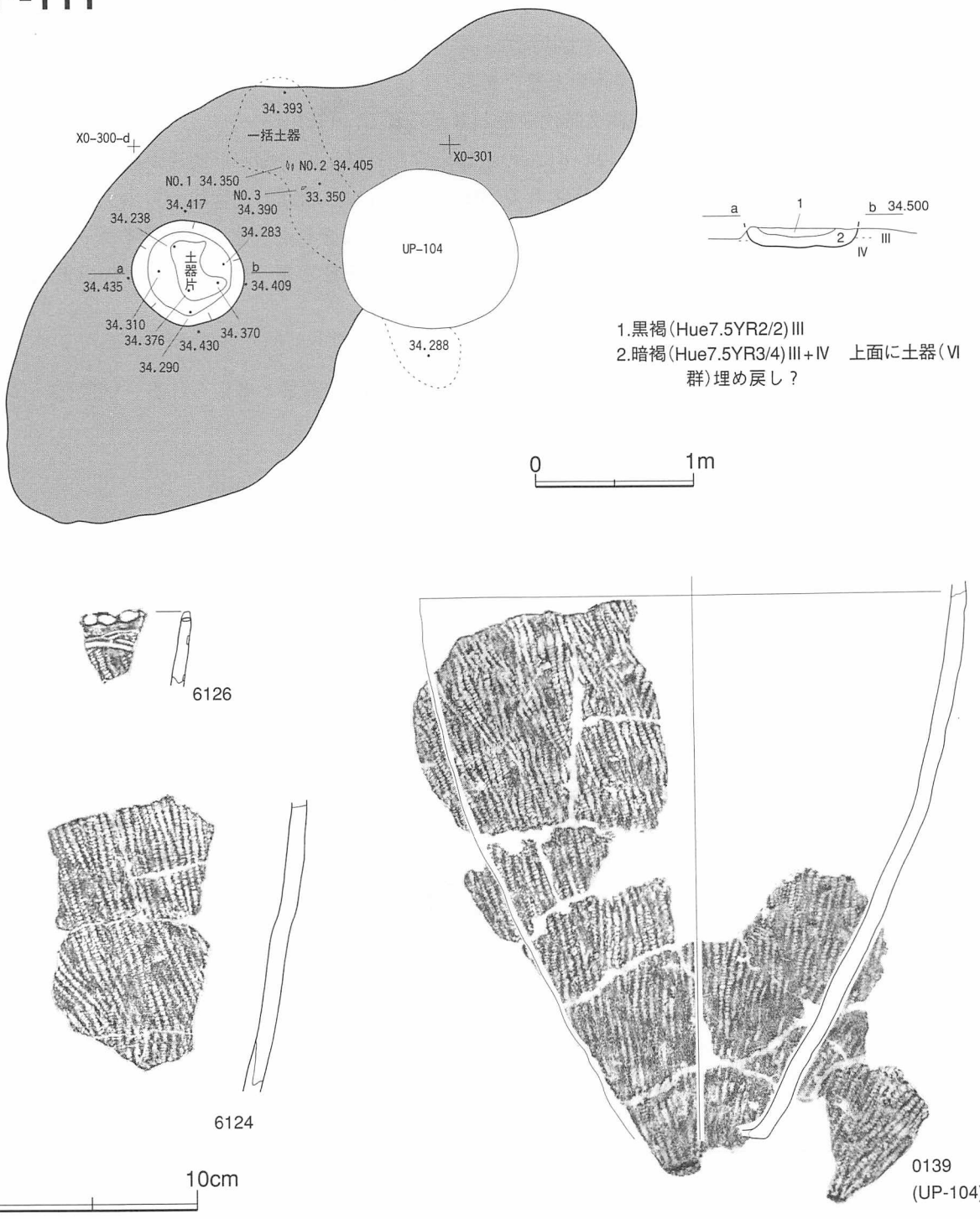
長軸方向：N-64°-W

特徴　遺跡調査区東側の低湿部に面した台地縁辺部で検出された土壙の一つである。UP-104の掘り上げ土を調査中に平面プランを確認した。平面は円形を呈し平坦な底部はきわめて浅い位置に作られている。掘り込み面はⅢ層中のUP-104掘り上げ土より上位で、覆土は2層が埋め戻されていると考えられる。遺物は、覆土2層の上面から0139・6124・6126の土器を含むⅥ群土器の細かい破

片が図の波線範囲から出土しており、意図的なものと考えられる。0139はUP-104と周囲の包含層から出土したものが接合した。6124・6126は周囲の包含層から出土したものが接合した。他にはフレイク・チップが覆土中から出土している。　性格は不明であるが、土壙の形態と覆土の状況、遺物の出土状況に墓的なものを見いだせる。

遺物　0139,6124,6126はⅥ群a類の深鉢形土器である。

時期　重複関係と遺物から、UP-104よりもやや新しい続縄文時代前葉と考えられる。（皆川洋一）



図Ⅲ-12　UP-111と遺物

UP-112（図III -13 ／ 図版 -5・107 ～ 123，79 ～ 106）

位置：Y0-300-c,Y0-300-d　規模：1.31 × 1.19 ／ 0.81 × 0.88 ／ 0.56m

長軸方向：N-85.5° W

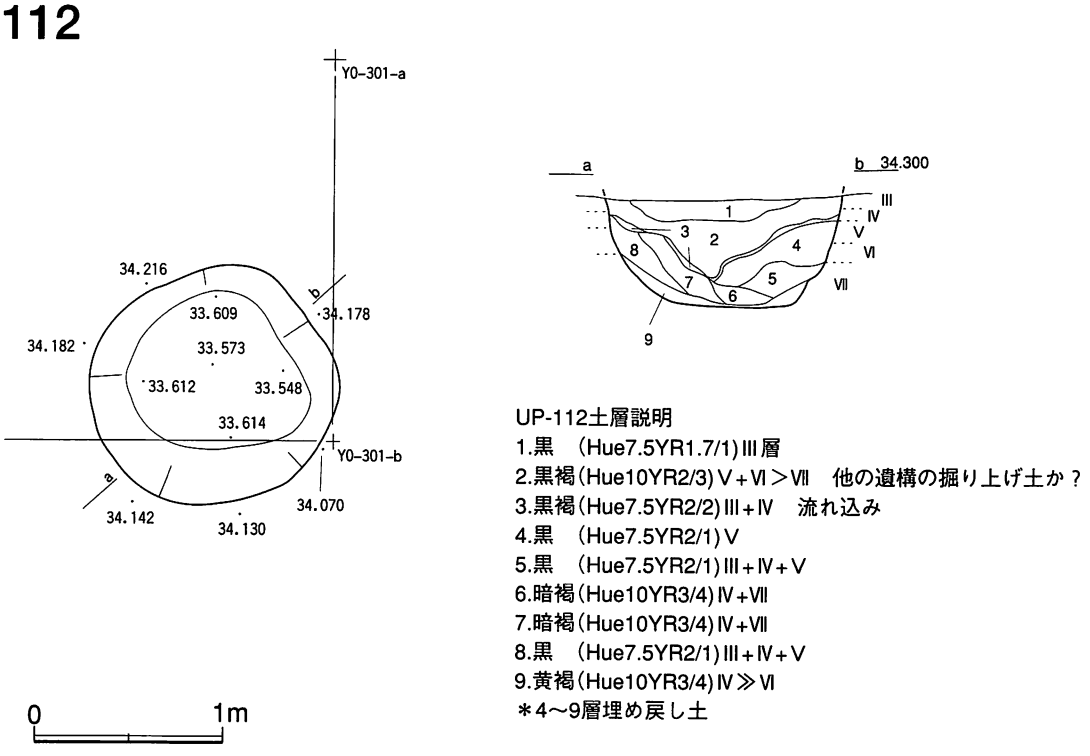
特徴　遺跡調査区東側の低湿部に面した台地縁辺部で検出された土壙群の内の一つで、Ⅳ層上面で黒色土の円形プランを見つけ調査を行った。平面は円形を呈し平坦に掘られた底部からは壁が開き気味に立ち上がっている。覆土は４層より下方が埋め戻されたものと考えられ、これらは大きく陥没している。また、覆土２層には他遺構の掘り上げ土と考えられる明るい黒褐色の土が入る。覆土中の土層から掘り込み面はⅢ層中と考えられる。遺物は覆土から0132・6125の土器と石鏃・礫などが出土している。礫は底部付近からの出土が多く、群の土壙と特徴を同じく考えられる。

土壙の形態と覆土の状況と礫の出土状況から墓の可能性がある。遺物　0132,6125はⅥ群a類の深鉢形土器、0190はⅤ群c類の浅鉢形土器である。１は無茎凹基の三角形鏃。黒曜石製。 時期　形態と規模、覆土、遺物から続縄文時代前葉と考えられる。（皆川洋一）

遺物は、覆土２層の上面から0139・6124・6126の土器を含むⅥ群土器の細かい破片が図の波線範囲から出土しており、意図的なものと考えられる。0139はUP-104と周囲の包含層から出土したものが接合した。6124・6126は周囲の包含層から出土したものが接合した。他にはフレイク・チップが覆土中から出土している。　性格は不明であるが、土壙の形態と覆土の状況、遺物の出土状況に墓的なものを見いだせる。

遺物　0139,6124,6126はⅥ群ａ類の深鉢形土器である。

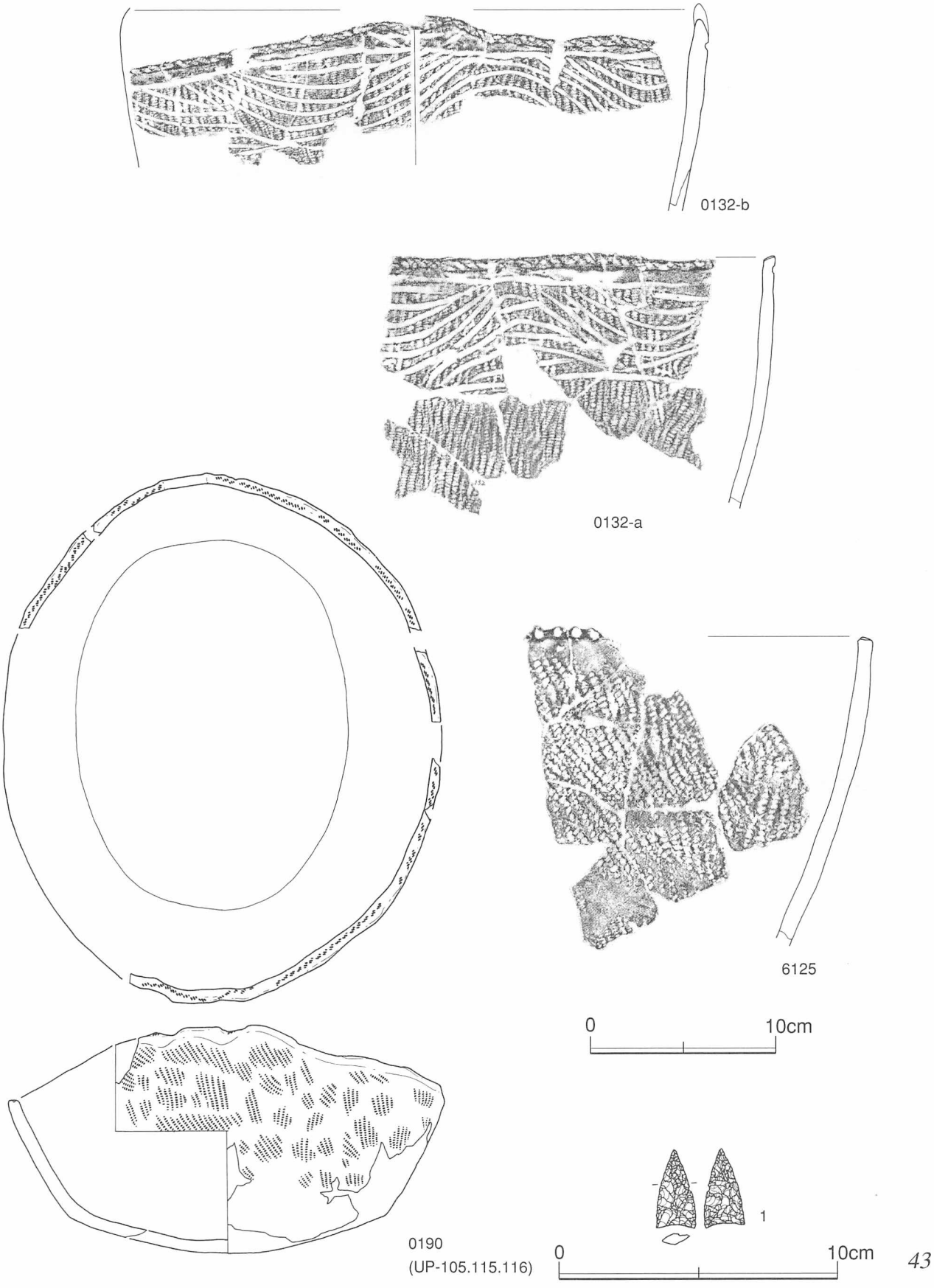
時期　重複関係と遺物から、UP-104よりもやや新しい続縄文時代前葉と考えられる。（皆川洋一）



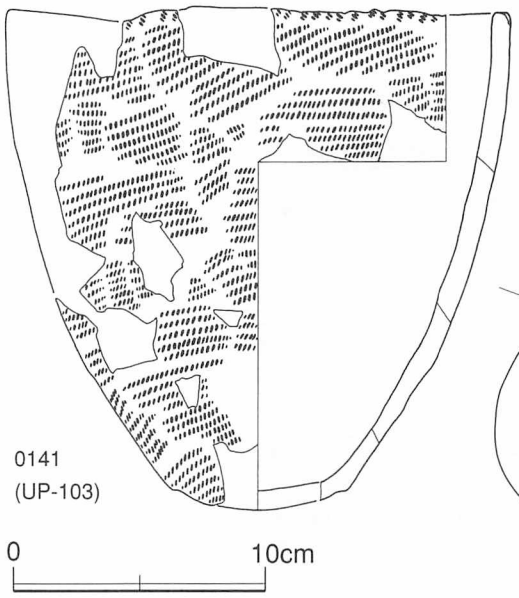
UP-112土層説明
1.黒　(Hue7.5YR1.7/1)Ⅲ層
2.黒褐(Hue10YR2/3)Ⅴ+Ⅵ>Ⅶ　他の遺構の掘り上げ土か？
3.黒褐(Hue7.5YR2/2)Ⅲ+Ⅳ　流れ込み
4.黒　(Hue7.5YR2/1)Ⅴ
5.黒　(Hue7.5YR2/1)Ⅲ+Ⅳ+Ⅴ
6.暗褐(Hue10YR3/4)Ⅳ+Ⅶ
7.暗褐(Hue10YR3/4)Ⅳ+Ⅶ
8.黒　(Hue7.5YR2/1)Ⅲ+Ⅳ+Ⅴ
9.黄褐(Hue10YR3/4)Ⅳ≫Ⅵ
＊4～9層埋め戻し土

図III -13　UP-112

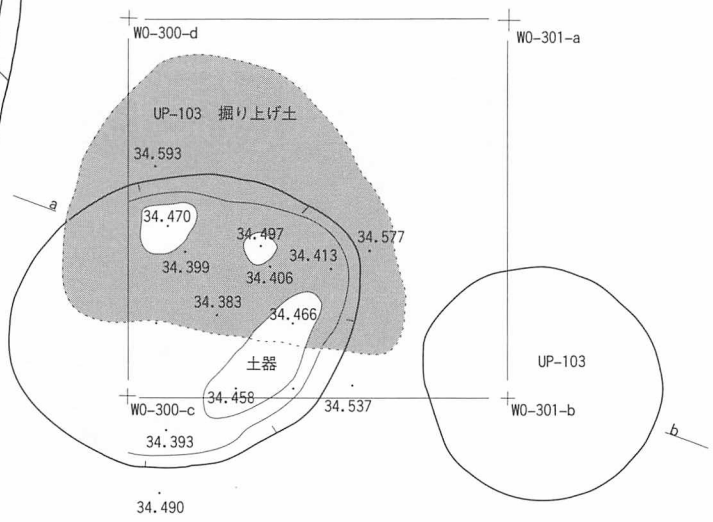
UP-112



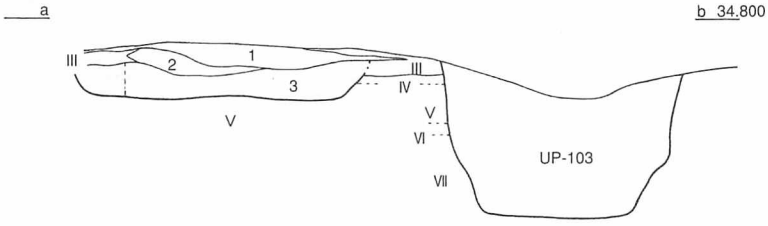
図Ⅲ -14　UP-112 の遺物



UP-113

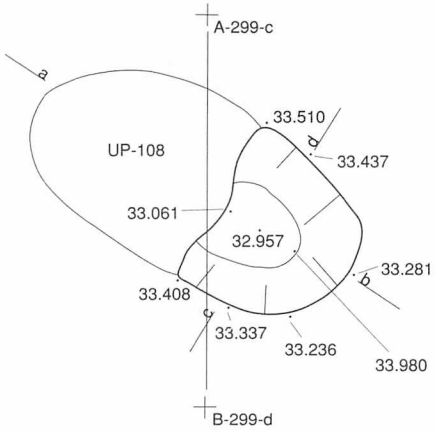


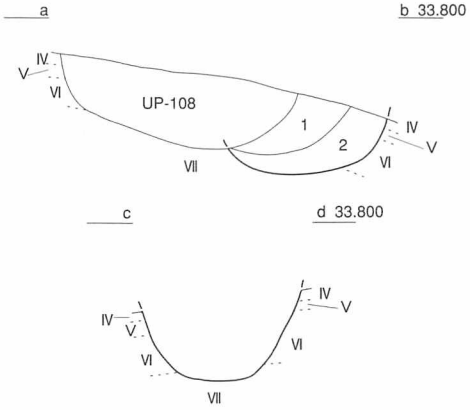
1.褐　(Hue10YR4/6)Ⅶ　up-103掘り上げ土
2.暗褐(Hue10YR3/4)Ⅳ
3.黒　(Hue7.5YR1.7/1)Ⅲ＋Ⅳ　埋め戻し



0　1m

UP-114





0　1m

UP-114土層説明
1 暗褐色(Hue7.5YR3/3)砂質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ＋Ⅵ
2 暗褐色(Hue7.5YR3/4)砂質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ＋Ⅵ＞Ⅶ

図Ⅲ-15　UP-113・114と遺物

UP-113（図Ⅲ-15／図版-107～123）

位置：W0-300-a,W0-300-b,W0-300-c,W0-300-d　規模：1.92×1.52／1.37×1.84／0.28m

長軸方向：N-89.5°-E

特徴　UP-103の掘り上げ土を調査中に見つけたもので、平面が楕円形を呈する浅い土壙である。平坦な底部からは壁が開き気味に立ち上がっており、埋め戻しと考えられる覆土3層中段にはほぼ同じ高さから三カ所分かれてⅥ群土器が出土している。掘り込み面はUP-103の掘り上げ土より下位のⅢ層中である。出土した0141、0161の土器はいずれもUP-103と周囲の包含層出土のものと接合しており、両者は比較的近い時期のものの可能性がある。　性格は不明であるが、覆土と遺物の出土状況に墓的な性格が伺える。

遺物　0141はⅥ群a類の深鉢形土器である。

時期　重複関係と遺物から、UP-103より古い続縄文時代前葉である。（皆川洋一）

UP-114（図Ⅲ-15）

位置：A-299-c　規模：(0.69)×0.88／0.42×(0.45)／(0.44)m

長軸方向：N-52°

特徴　Ⅳ層上面で褐色土のプランを確認した。平面はLP-108に切られて不明であるが不整多角形と考えられ、壁は底面からやや急に立ち上がる。底面は丸みを帯びボウル状である。堆積状況はレンズ状を呈し自然堆積と考えられる。堆積状況から掘込み面はⅢ層中と考えられる。UP-108に切られている。

遺物　掲載遺物なし

時期　遺物が出土していないため不明であるが、UP-108に切られていることから縄文時代晩期以前と考えられる。（佐藤　剛）

UP-115（図Ⅲ-16・17／図版-107～123，79～106，123～125）

位置：Y0-299-a,Y0-299-b　規模：1.34×1.27／0.51×0.86／0.13m

長軸方向：N-7°-E

特徴　Ⅴ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は隅丸方形で、壁はなだらかに立ち上がる。底面はほぼ平らである。堆積状況はレンズ状を呈し自然堆積と考えられる。堆積状況から掘込み面はⅢ層中と考えられる。LF-119を切っている。

遺物　0102,5002,5645は深鉢、0190,0181は浅鉢形のⅤ群c類土器である。0181は平行する時期の大洞A式土器である。0161はⅥ群a類の小型の鉢形土器である。1はスクレイパー。下端に外湾した急角度の刃部をもつ。黒曜石製。

時期　底面出土土器から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UP-116（図Ⅲ-18／図版-107～123，79～106）

位置：E-285-d　規模：(0.91)×(0.74)／0.48×0.56／(0.51)m　長軸方向：N-3.5°-E

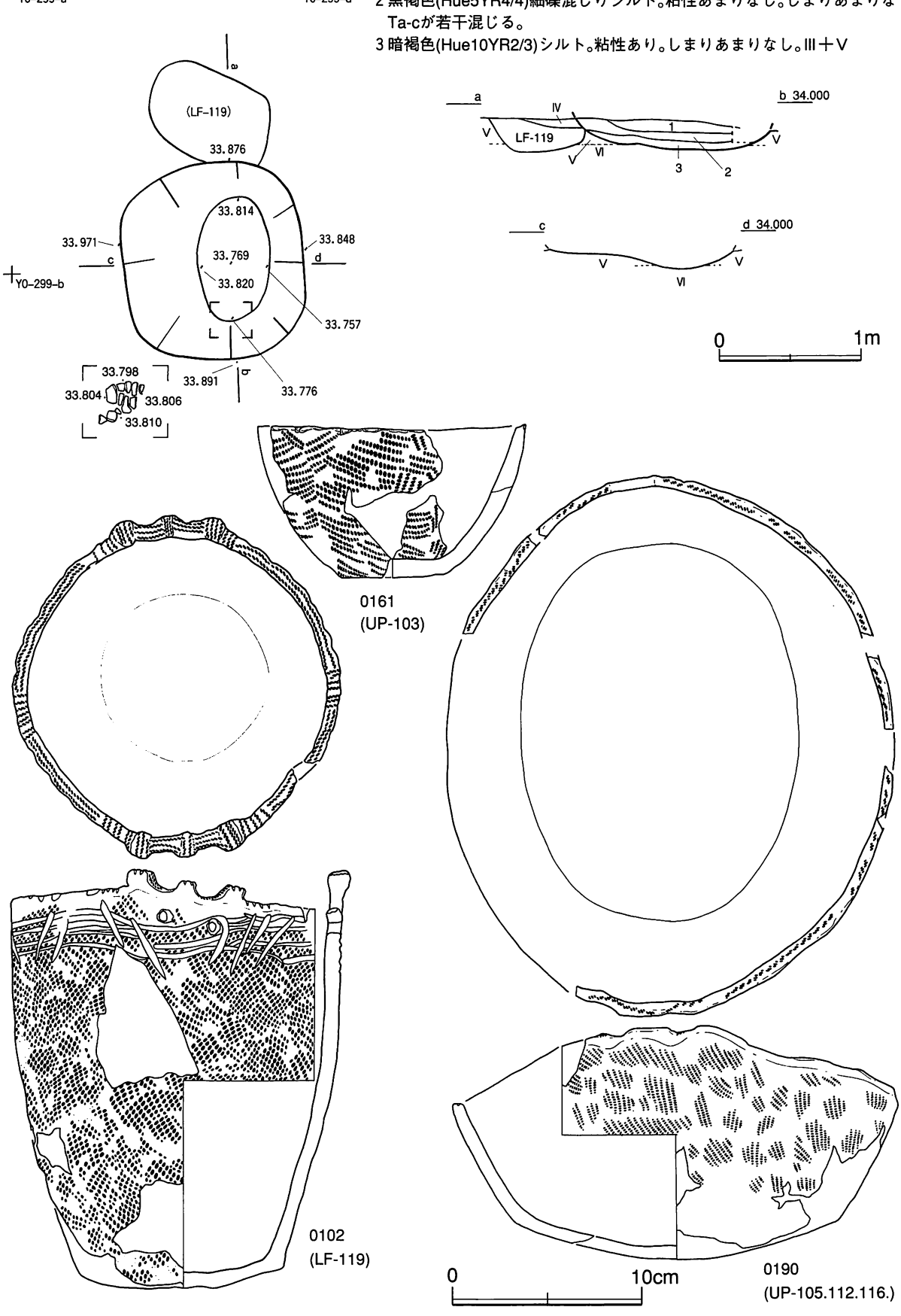
特徴　Ⅳ層上面で黒色土のまとまりを確認した。平面プランは長円形で、床面からやや斜めに壁が立ち上がった。人為的な埋め戻しと思われる堆積状況である。西側の壙口部に割れた礫の集中（US-114）がある。また、東側に離れて炭化物集中（UC-106）があるが、この土壙と関連するかは不明である。検出状況や堆積状況から土壙墓の可能性もあると考えられる。

遺物　0191は浅鉢形のⅤ群c類土器である。この浅鉢は約50m離れたUP-105,112,115からも出土している。0147はⅥ群a類の深鉢形土器である。

時期　床面出土の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

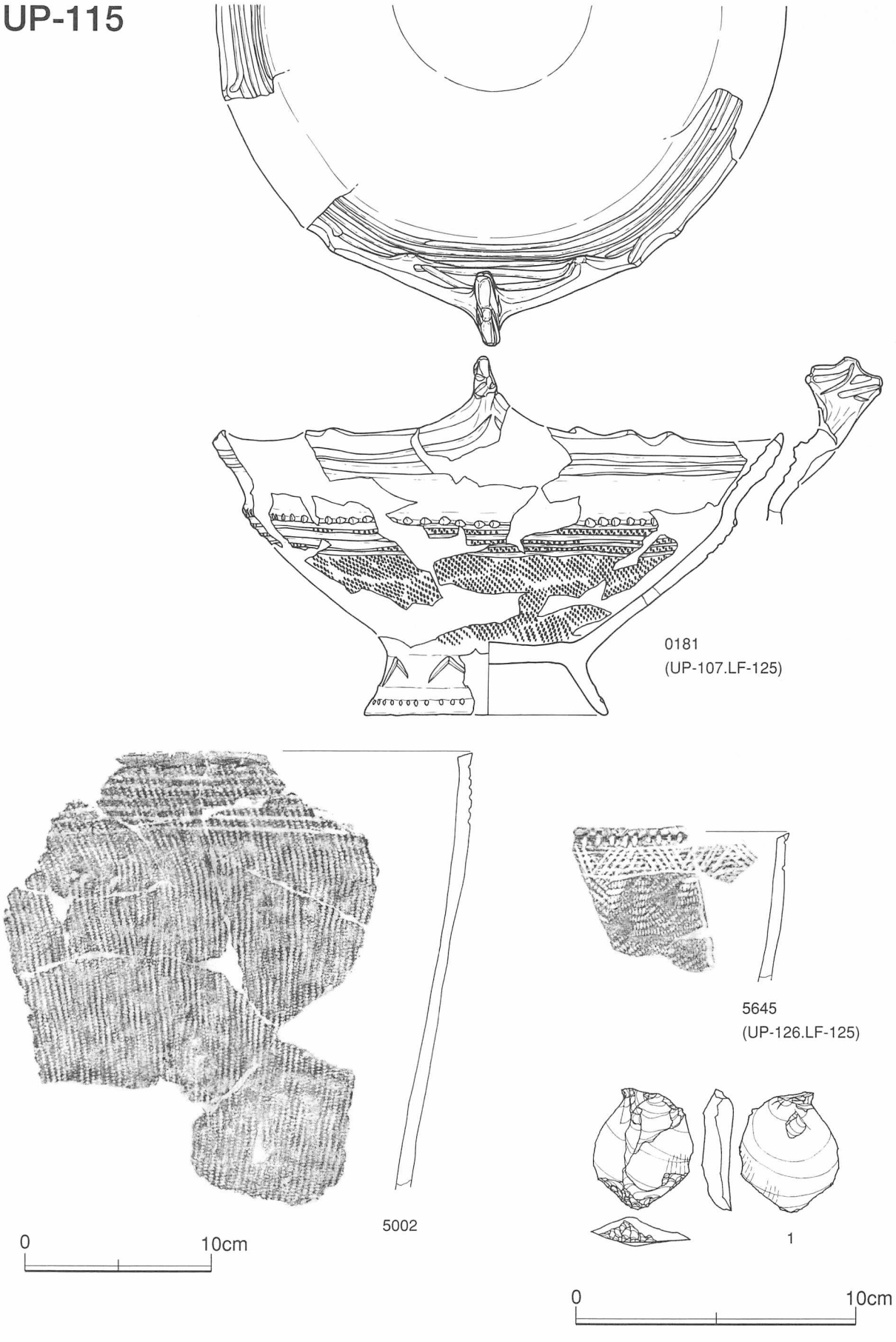
UP-115

UP-115土層説明
1 黒褐色(Hue10YR2/2)シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。III
2 黒褐色(Hue5YR4/4)細礫混じりシルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。III≫VI
Ta-cが若干混じる。
3 暗褐色(Hue10YR2/3)シルト。粘性あり。しまりあまりなし。III＋V



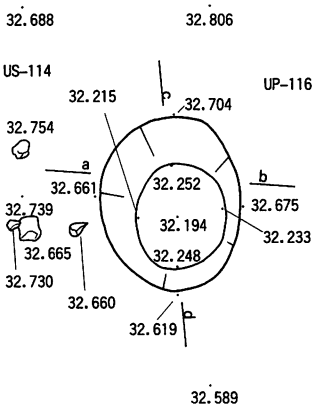
図III -16 UP-115と遺物

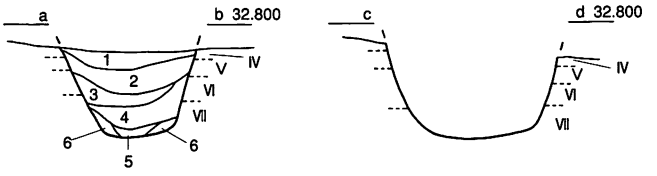
UP-115



図Ⅲ-17　UP-115 の遺物

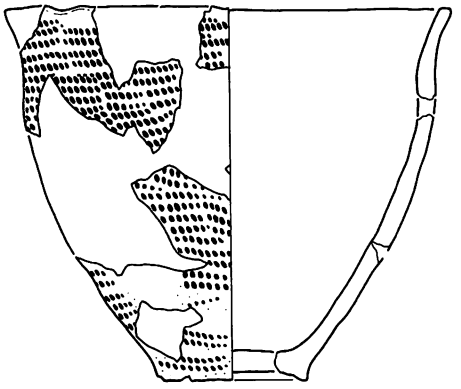
UP-116



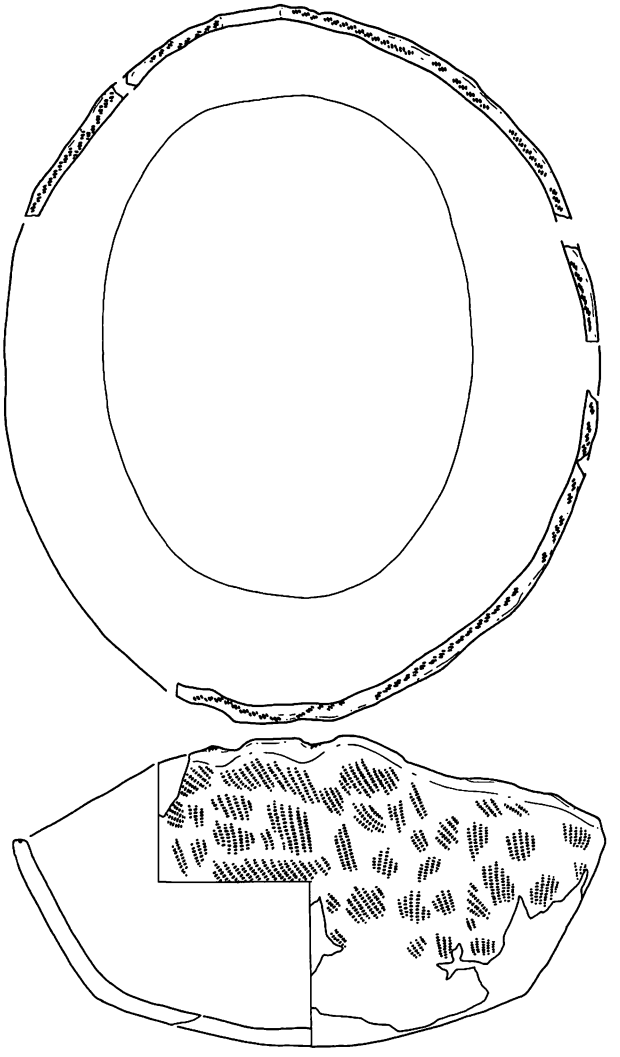


UP-116土層説明
1黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cが少量混じる。III＞IV
2黒褐色土(Hue7.5YR3/2)Ta-cが混じる。III＋IV
3黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cがごく少量混じる。V≫IV
4黒褐色土(Hue7.5YR3/2)シルト質。ロームが少量混じる。V＞VI VII
5黒褐色土(Hue7.5YR2/2)シルト質。4よりも黒みが強い。V≫VI VII
6暗褐色土(Hue7.5YR3/3)シルト質。ロームブロックが混じる。V＋VII

0 1m



0147

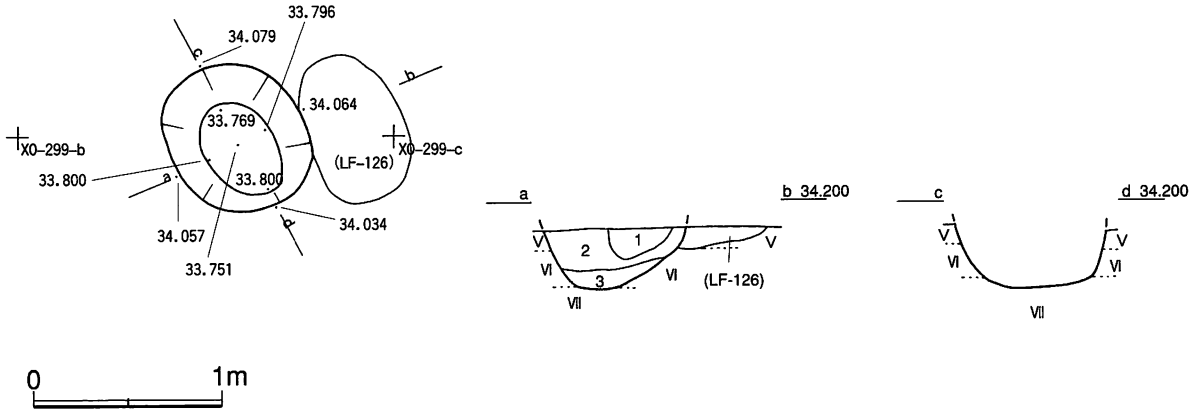


0 10cm

0190
(UP-105.112.115)

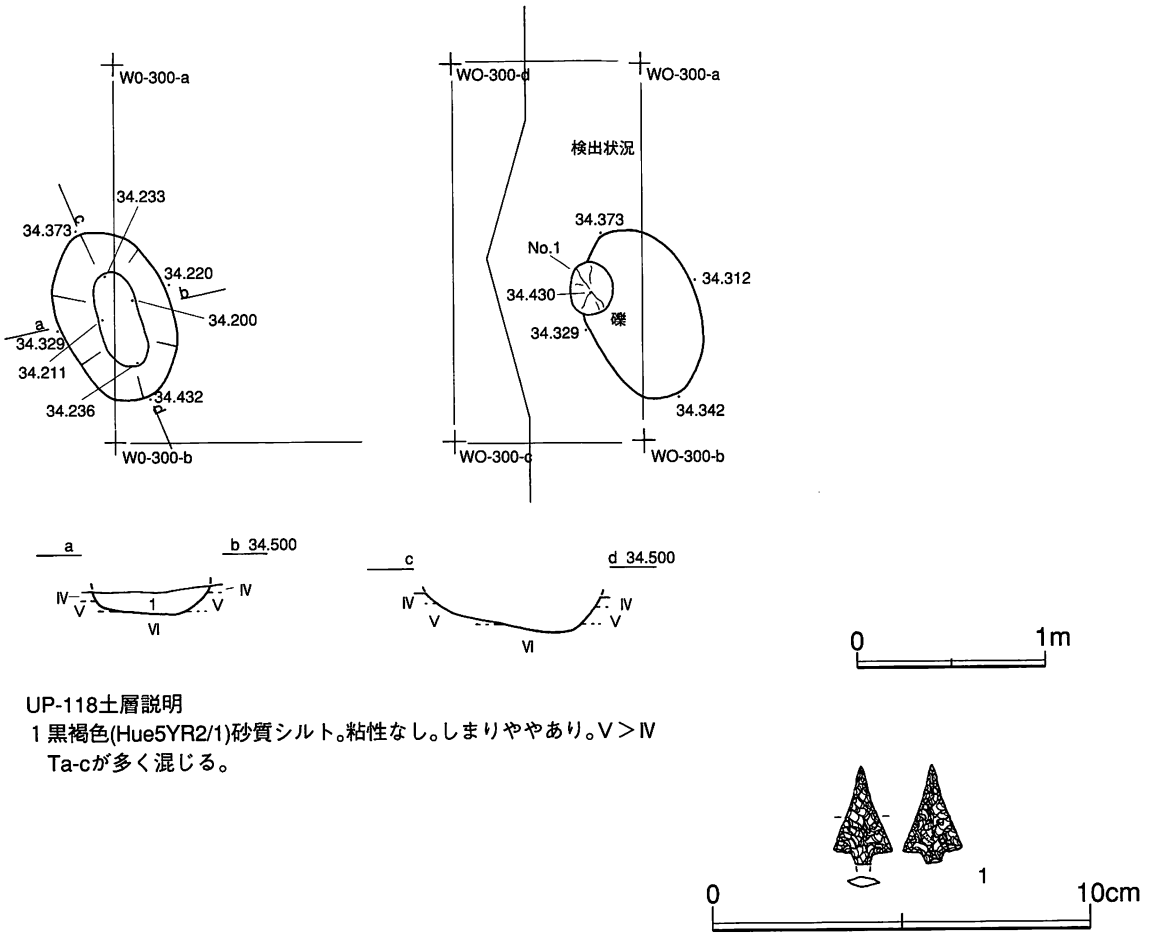
図III -18 UP-116と遺物

UP-117



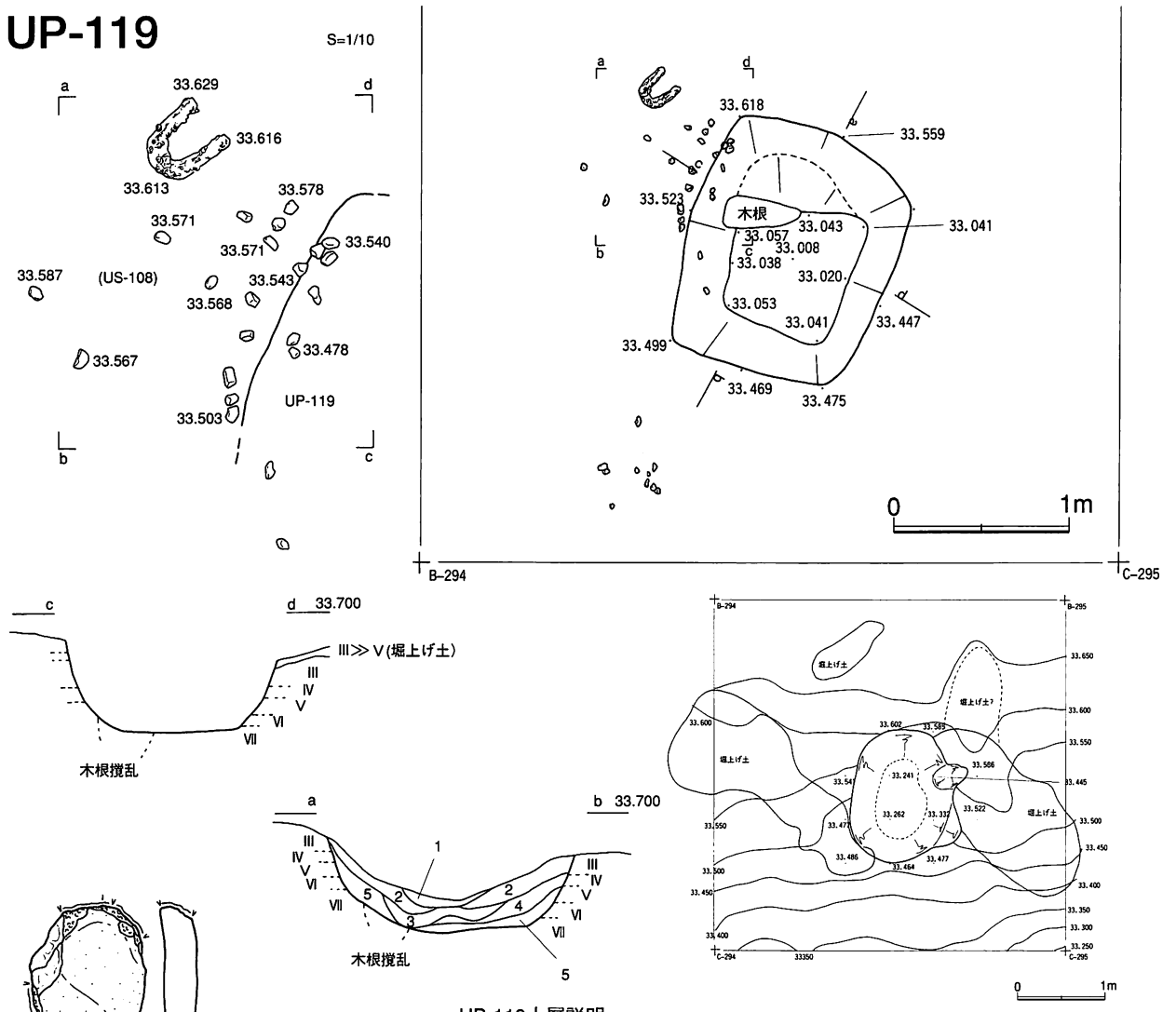
UP-117土層説明
1 黒褐色(Hue5YR2/1)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ≫Ⅳ
Ta-cが若干混じる。
2 黒褐色(Hue7.5YR3/2)細礫混じり砂質シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。
Ⅲ＋Ⅵ
3 にぶい褐色(Hue7.5YR5/4)シルト。粘性あり。しまりなし。Ⅵ＞Ⅲ
Ⅵをブロック状に含む。

UP-118

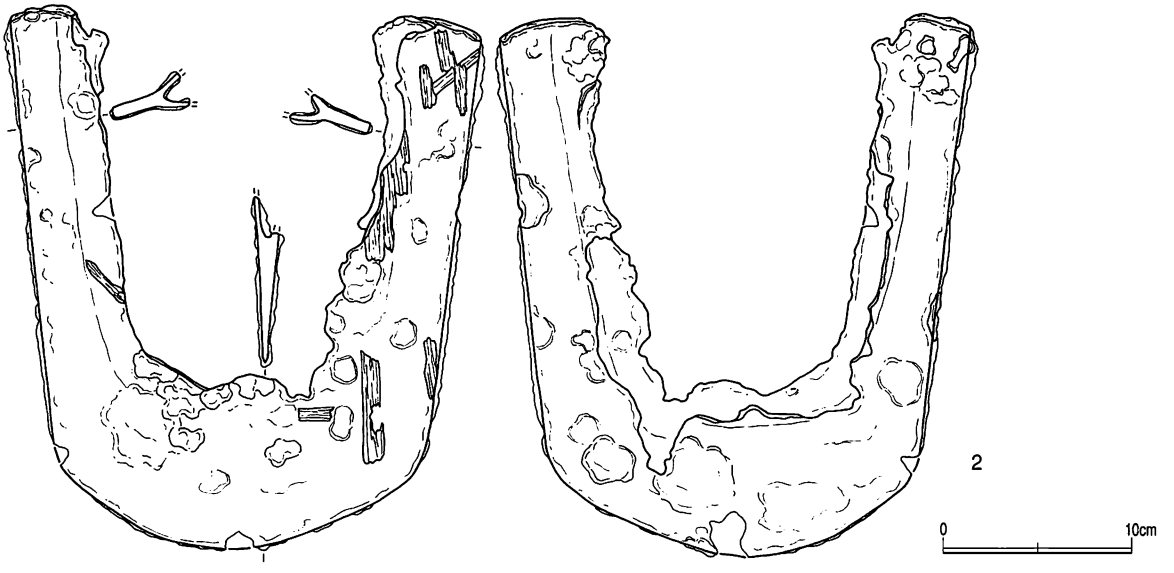


UP-118土層説明
1 黒褐色(Hue5YR2/1)砂質シルト。粘性なし。しまりややあり。Ⅴ＞Ⅳ
Ta-cが多く混じる。

図Ⅲ-19　UP-117・118と遺物



UP-119土層説明
1黒色土(Hue7.5YR2/1)シルト質。III
2黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cが混じる。III≫IV
3黒色土(Hue7.5YR1.7/1)少量のTa-cが混じる。ボソボソしている。V＞III IV
4黒色土(Hue7.5YR2/1)少量のTa-cが混じる。弱い粘性あり。V
5暗褐色土(Hue7.5YR3/4)少量のTa-cが混じる。V＋VII



図III -20　UP-119と遺物

UP-117（図Ⅲ-19）

位置：X0-299-a,X0-299-b　規模：0.82×0.72／0.37×0.54／0.33m

特徴　Ⅴ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は円形で、壁はやや急に立ち上がる。底面はやや丸みを帯びるが平らである。堆積状況は自然堆積と考えられるが、人為的な埋め戻しの可能性もある。堆積状況から掘込み面はⅢ層中と考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　明らかに遺構に伴う遺物はないが、覆土出土の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UP-118（図Ⅲ-19／図版-123～125）

位置：W0-299-d,W0-300-a　規模：0.92×0.60／0.22×0.52／0.21m

長軸方向：N-9°-W

特徴　Ⅳ層上面で大型で円形の礫と黒色土のプランを確認した。平面は楕円形で、壁はなだらかに立ち上がる。底面は傾斜するがほぼ平らである。堆積状況は人為的な埋め戻しの可能性が高いと考えられる。大型で円形の礫がⅣ層と覆土上面に乗っていたことから、掘込み面はⅥ層上面もしくはⅢ層中でも最も下位の可能性が高いと考えられる。土壙墓の可能性がある。

遺物　1は有茎平基の石鏃。黒曜石製。

時期　床面出土の遺物と覆土中の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UP-119（図Ⅲ-20／図版-6・123～125）

位置：B-294-　規模：1.42×1.20／0.73×(0.95)／0.54m

長軸方向：N-29.5°-E

特徴　Ta-aを除去したさいに、楕円形にTa-aがたまった状態で検出された。周辺には堀上げ土と思われるローム質土の混じった土が確認できた。また、壙口部には鉄製の鍬先があり、やや偏平な小円礫の集中（US-108）も見られた。Ta-aを取り除くと大きく窪んでおり、壁は木根の撹乱を受けている北側以外はなだらかに立ち上がった。平面プランは五角形気味の長方形である。人骨は確認できなかったものの、検出状況から土壙墓と考えられる。

遺物　1はたたき石。偏平礫を素材とし、周縁にたたき痕をもつ。泥岩製。2はU字形の鍬先。刃部には片減りがみられる。表面の風呂受け部周辺に部分的に木質が付着しているが、破損した柄の一部かどうかは不明である。頭部にはたたかれた痕があり、つぶれて端部断面形が肥厚している。

時期　覆土中からは、時期を特定する遺物は見られなかった。しかし、壙口部にある鉄製の鍬先やTa-aが大量にたまった検出状況、および平面プラン等から擦文時代の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

UP-120（図Ⅲ-21／図版-107～123，123～125）

位置：V0-300-b　規模：1.02×0.76／0.56×0.83／0.21m

長軸方向：N-62°-E

特徴　Ⅴ層上面で、Ⅳ層の混ざった黒色土の落ち込みとして確認した。平面形は不整楕円形を呈する。壙底は凹凸があり、壁面の傾斜は東西方向が緩く、南北方向はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は褐色土とTa-cの混合で、埋め戻したものと考えられる。また検出面から土器、台石等が出土している。これらの状況から本遺構は土壙墓の可能性がある。

遺物　すべて検出面及び覆土上部から出土したものである。0140は深鉢形、6123は小型の鉢形を呈するⅥ群a類土器である。1はスクレイパー。下端に外湾した急角度の刃部をもつ。黒曜石製。2は台石。大型の長楕円礫を素材とし、両面にあばた状に窪んだたたき痕をもつ。凝灰岩製。

時期　出土した土器から続縄文時代後半と考えられる。（澤田　健）

UP-121（図III -22 ／ 図版 -107 ～ 123 ）

位置：X0-300-c　規模：0.99 × 0.71 ／ 0.49 × 0.65 ／ m

長軸方向：N-36.5° -W

特徴　UP-105と重複する不整楕円形をていする小型の土壙である。底面は不明瞭で、壁は広がりながら立ち上がる。Ⅲ層黒色土の流れ込みと考えられる覆土の上位からは0133のⅥ群土器が多数出土している。UP-105から出土した同土器は本土壙を切って掘り込んだ際に混じった物と考えられる。性格不明の小型土壙である。

遺物　0133はⅥ群a類の深鉢形土器である。

時期　土器の特徴から続縄文時代前葉と考えられる。（皆川洋一）

UP-122　欠番

UP-123（図III -22 ）

位置：X0-298-d　規模：(0.88)×(0.80)／ 0.48 × 0.46 ／ 0.29m

長軸方向：N-13 ° -E

特徴　Ⅴ層中位で黒色土のプランを確認した。平面はやや不整な隅丸方形で、壁は底面からやや急に立ち上がる。底面はやや丸みを帯びる。堆積状況は人為的な埋め戻しの可能性も考えられる。堆積状況から掘込み面はⅢ層中と考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　堆積状況と覆土中の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UP-124（図III -22 ）

位置：X0-299-a　規模：0.71 × 0.72 ／ 0.32 × 0.43 ／ 0.17m

長軸方向：N-14 ° -W

特徴　Ⅴ層中位で礫と黒色土のプランを確認した。平面は円形もしくは隅丸方形で、壁は底面からやや急に立ち上がる。底面はやや丸みを帯びる。堆積状況から人為的な埋め戻しの可能性が高いと考えられる。堆積状況から、掘込み面はⅢ層中と考えられる。土壙墓の可能性がある。

遺物　掲載遺物なし。

時期　堆積状況と遺物の出土状況から縄文時代晩期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

UP-125（図III -24 ）

位置：C-288-c,C-288-d,C-289-a,C-289-b　規模：(0.81)×(0.70)／ 0.50 × 0.67 ／(0.37)m

長軸方向：N-12.5° -E

特徴　Ⅳ層上面において黒色土のまとまりを確認した。平面プランは卵形である。床面はほぼ平坦で壁は垂直気味に立ち上がった。周辺にはUP-126・127およびUS-109がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土の土器から続縄文時代の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

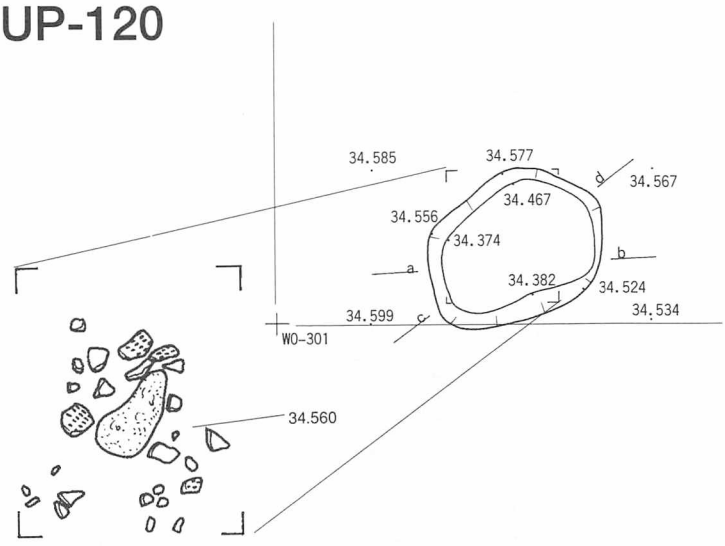
UP-126（図III -23 ／ 図版 -79 ～ 106 ）

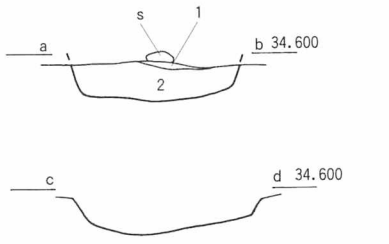
位置：C-289-a,C-289-b,C-289-c,C-289-d　規模：(0.93)×(0.80)／ 0.43 × 0.45 ／(0.46)m

長軸方向：N-4.5° -W

特徴　Ⅳ層上面で黒色土のまとまりを確認した。周辺には礫の集中（US-109）が見られた。木根の撹乱があり、壁の一部は判然としなかった。堆積状況は人為的な埋め戻しと考えられる。Ⅴ層中のやや大きい皿状のピットLP-138と重複している。近くにはUP125・127がある。

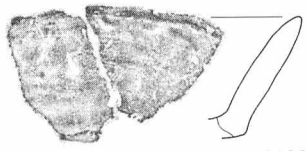
UP-120



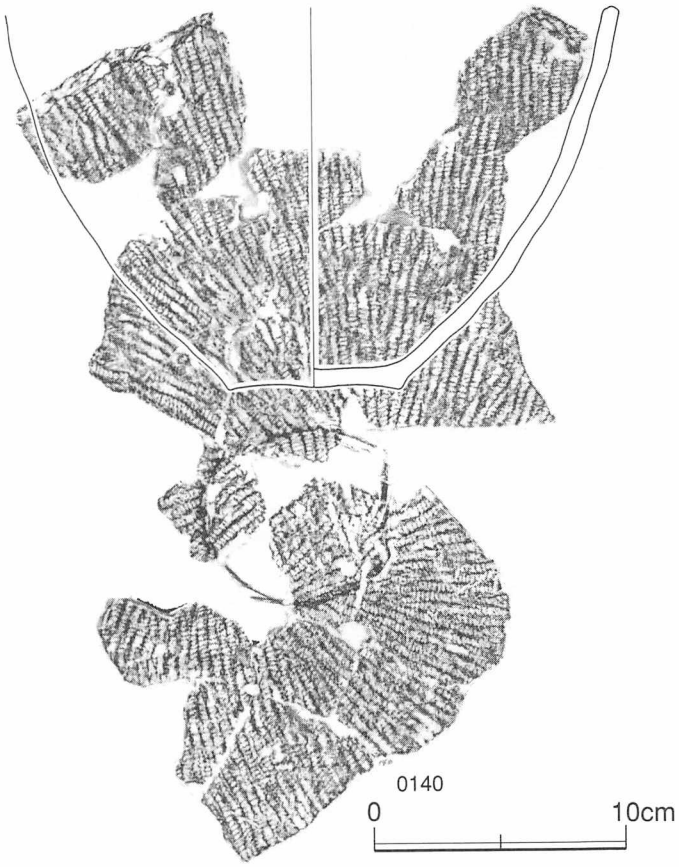


UP-120土層説明
1　黒褐色(7.5YR2/2)土　Ⅳ層混ざる
2　極暗褐色(7.5YR2/3)土　Ⅳ層混ざる

0　1m

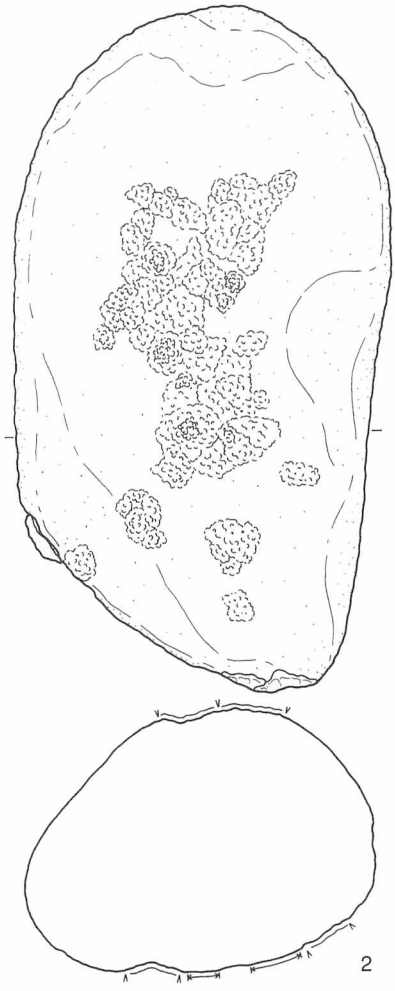


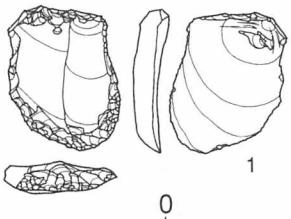
6123



0140

0　10cm





1

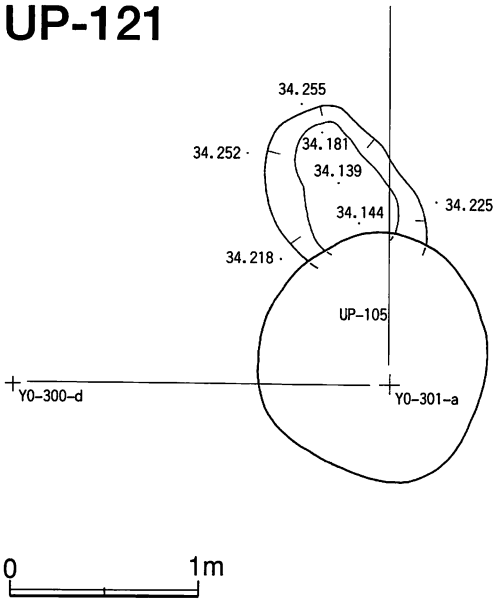
0　10cm

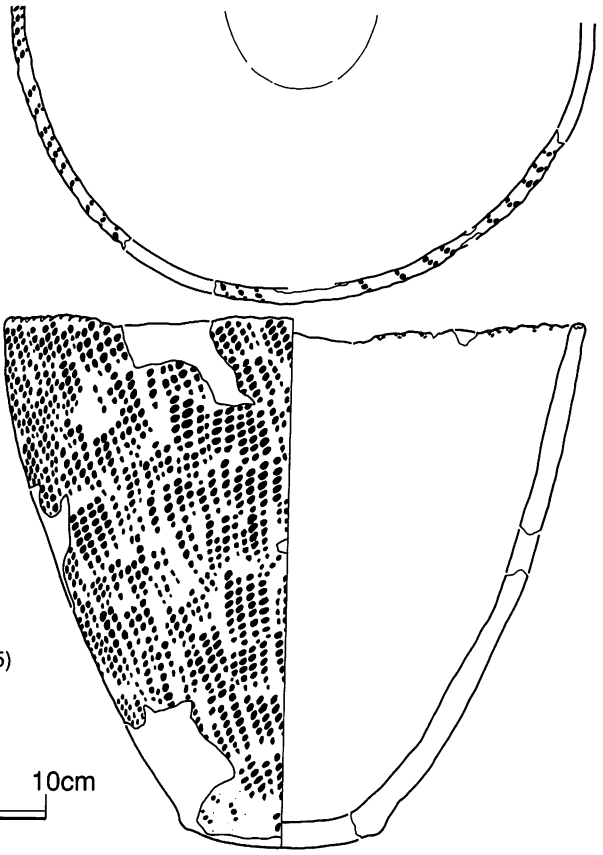
2

0　10cm

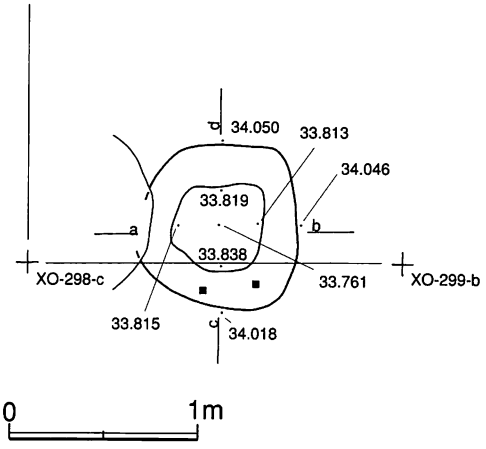
図Ⅲ-21　UP-120 と遺物

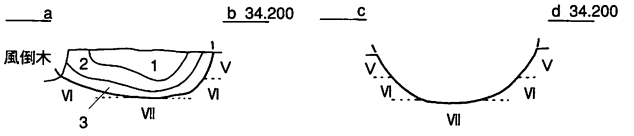
UP-121





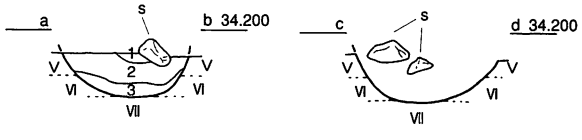
UP-123

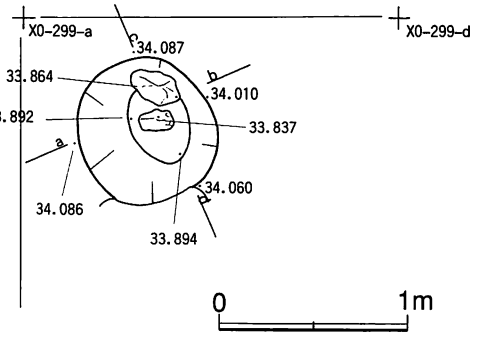




UP-123土層説明
1 黒褐色(Hue7.5YR2/2)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。III＋IV
2 極暗褐色土(Hue7.5YR2/3)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。IV＞III
3 極暗褐色土(Hue7.5YR2/3)シルト。粘性あり。しまりあり。III＋IV＋V

UP124

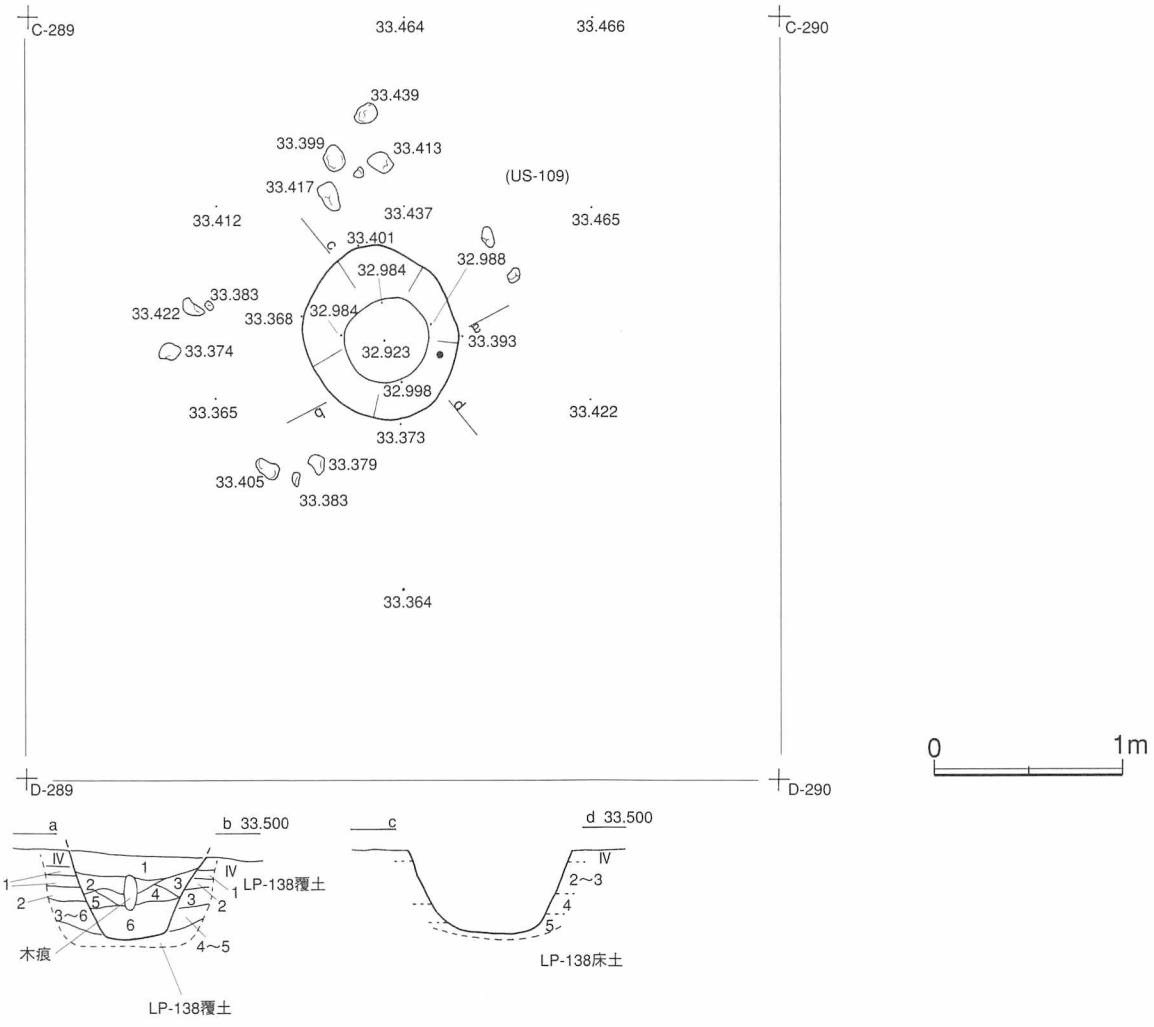




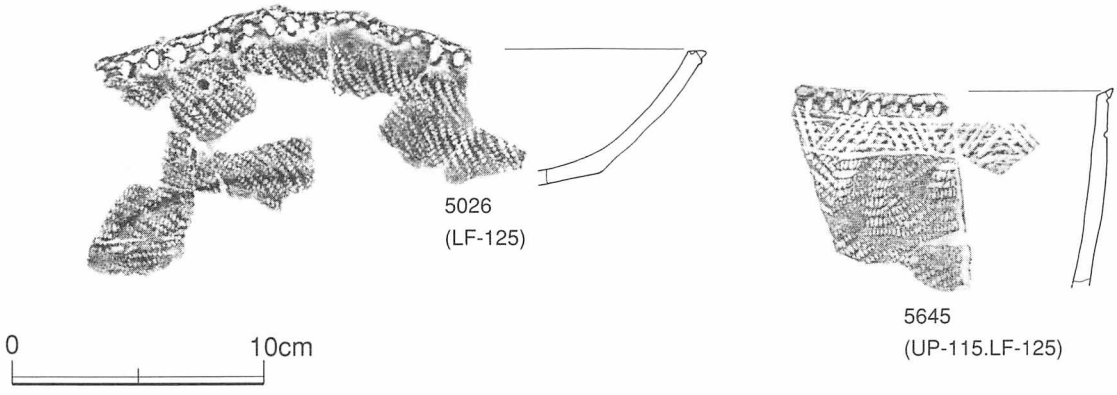
UP-124土層説明
1 黒褐色(Hue7.5YR2/2)砂質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。III
2 黒褐色(Hue7.5YR3/2)粘土質シルト。粘性あり。しまりあり。III＋IV
炭化物t直径 5 ～10㎜、焼土粒直径 2 ～ 3 ㎜多く含む。
3 暗褐色(Hue7.5YR3/3)シルト。粘性ややあり。しまりあり。III＞IV

図III -22　UP-121・123・124と遺物

UP-126



UP-126土層説明
1黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cが多く混じる。Ⅲ＋Ⅳ
2黒色土(Hue7.5YR2/1)シルト質、少量のローム、炭化物が混じる。Ⅲ≫Ⅵ
3黒褐色土(Hue7.5YR2/2)Ta-cが多く混じる。Ⅲ＋Ⅳ
4黒褐色土(Hue7.5YR2/2)Ta-cが少量混じる。Ⅲ≫Ⅳ
5黒褐色土(Hue10YR2/2)Ta-cが少量混じる。Ⅲ？Ⅴ？＋Ⅵ≫Ⅳ
6黒褐色土(Hue7.5YR2/2)小さいロームブロックが混じる。Ⅲ？Ⅴ？＞Ⅵ



図Ⅲ-23　UP-126 と遺物

遺物　5645は深鉢形、5026は浅鉢形を呈するV群c類土器である。

時期　覆土出土の遺物は早期の土器であり、時期は不明である。あるいは、周辺の遺物から続縄文時代の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

UP-127（図III -24）

位置：C-288-d,C-289-a　規模：(1.17)×(1.09)／(0.58)×(0.58)／(0.28)m

特徴　Ⅳ層上面において、黒色土のまとまりを確認した。Ta-cの混じっている土を取り除くと、円形で皿状の土壙となった。なお、直下にV層中の遺構であるLP-162が確認された。覆土の状態を見ると混じりの少ないTa-cがあるので、LP-162の覆土を誤認した可能性も高い。周辺にはUP-125・126およびUS-109がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　LP-162の覆土ではないとすると、覆土中から後北式土器が出土しているので、あるいは続縄文時代の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

UP-128（図III -24）

位置：X0-299-d　規模：0.61×0.74／0.21×0.16／0.41m

長軸方向：N-15°-W

特徴　V層上位で黒色土と褐色土のプランを確認した。平面は不整多角形もしくは不整楕円形で、壁は底面から急に立ち上がった後、開きながら上方に立ち上がる。堆積状況から人為的な埋め戻しの可能性が高いと考えられる。堆積状況から、掘込み面はⅢ層中と考えられる。掘り方のある柱穴の可能性が高い。

遺物　掲載遺物なし

時期　遺物が出土しておらず、周囲にも伴う遺物がないため不明であるが、縄文時代晩期から擦文時代の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UP-129（図III -25）

位置：D-289-a　規模：(0.67)×(0.66)／(0.42)×(0.45)／(0.29)m

長軸方向：N-6.5°-E

特徴　Ⅳ層上面において黒色土のまとまりを確認した。平面プランは卵形である。堆積状況は人為的に埋め戻されたと考えられる。南東方向にやや離れて集石（US-112）があるが、土壙との関連は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土中から土器片が一点出土したが、摩耗が著しく、この土壙の時期は不明である。あるいは周辺の遺物から縄文時代晩期末葉もしくは続縄文時代の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

UP-130（図III -25）

位置：A-292-c,B-292-d　規模：(0.86)×(0.62)／0.36×0.51／(0.32)m

長軸方向：N-22°-W

特徴　Ⅳ層上面において、黒色土のまとまりを確認した。平面プランは楕円形で、浅い皿状の土壙である。

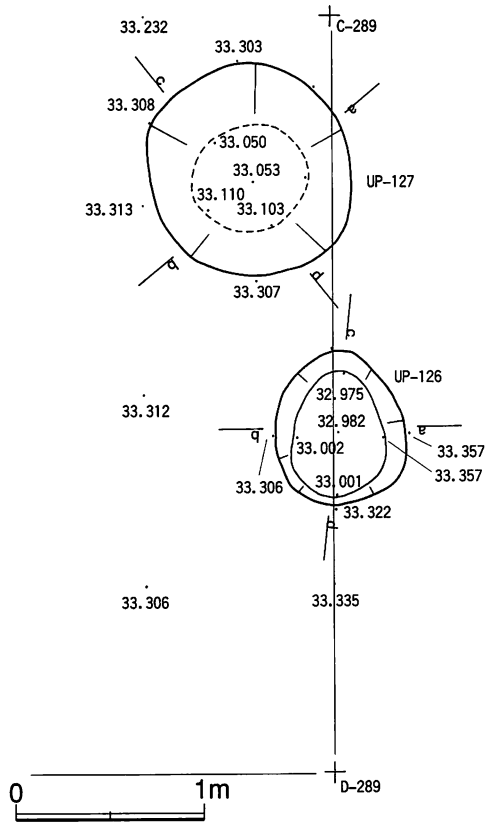
遺物　掲載遺物なし

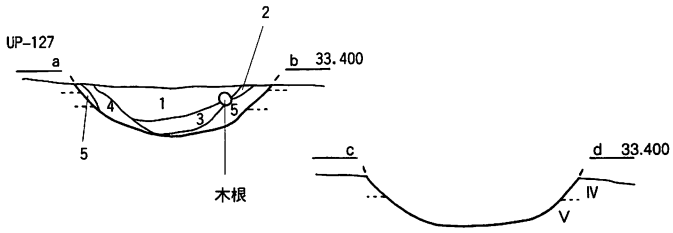
時期　床面近くから後北式土器が出土していることから続縄文時代の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

UP-131（図III -26／図版-107～123，123～125）

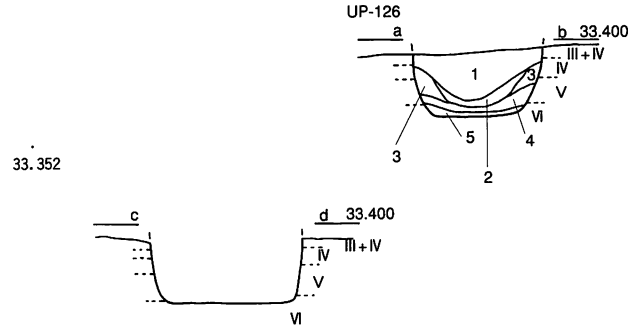
位置：B-292-a,B-292-d　規模：(0.71)×(0.62)／0.47×0.52／(0.29)m

UP-125,127



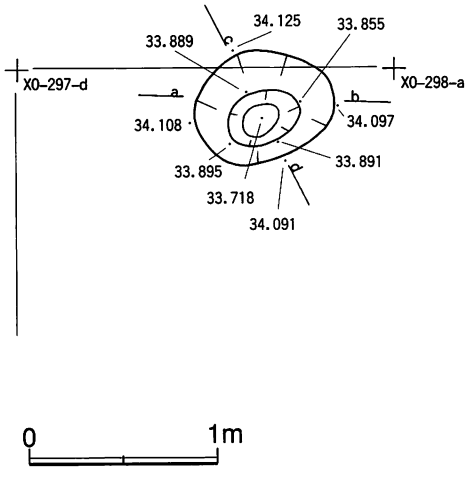


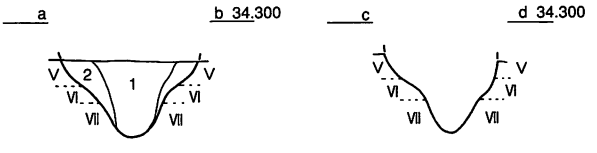
UP-127土層説明
1黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cが少量混じる。Ⅲ≫Ⅳ
2黒褐色土(Hue5YR2/2)Ta-cに黒色土が少量混じる。Ⅲ≪Ⅳ
3黒色土(Hue7.5YR2/1)Ⅲ＞Ⅳ
4黒褐色土(Hue7.5YR2/2)Ⅲ＜Ⅳ



UP-125土層説明
1黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cがごく少量混じる。Ⅲ
2黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cが少量混じる。Ⅲ≫Ⅳ
3極褐色土(Hue7.5YR2/3)Ta-cが多く混じる。Ⅲ＋Ⅳ
4黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cがごく少量混じる。Ⅴ
5暗褐色土(Hue7.5YR3/3)シルト質。Ⅴ＋Ⅵ

UP-128

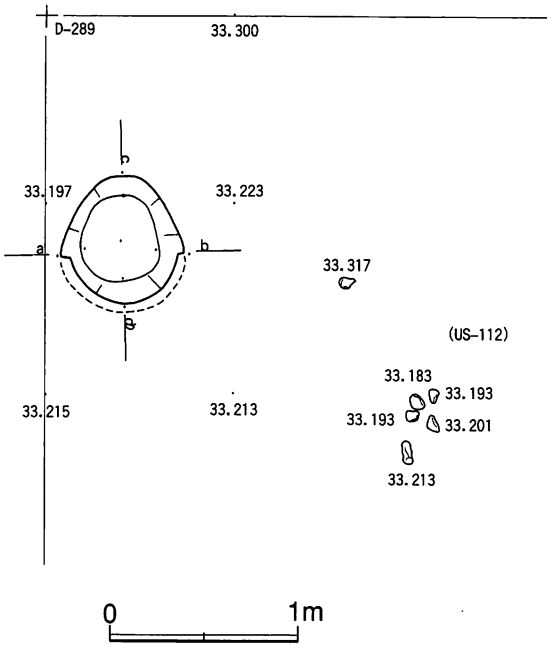


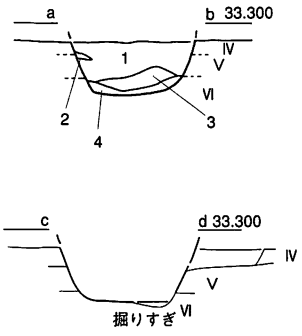


UP-128土層説明
1黒褐色(Hue7.5YR2/2)シルト。粘性あまりなし。しまりあり。Ⅲ＋Ⅳ
Ta-cを均一に含む。柱痕？
2暗褐色(Hue7.5YR3/4)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅲ＋Ⅴ＋Ⅶ
ローム質土をブロック状に含む。

図Ⅲ-24　UP-125・127・128

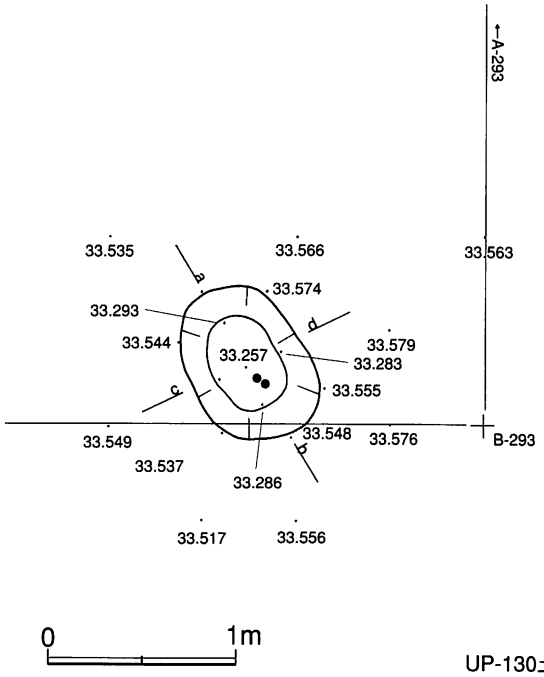
UP-129

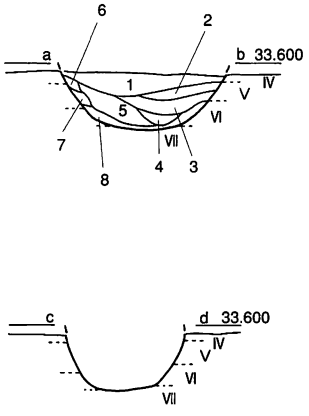




UP-129土層説明
1黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cが多く混じる。III＜IV
2暗褐色土(Hue7.5YR3/3)Ta-c。しまりは弱い。IV
3極暗褐色土(Hue7.5YR2/3)Ta-cが多く混じる。V≪IV
4黒褐色土(Hue7.5YR2/2)シルト質、しまりは弱く、少量のTa-cが混じる。V＞IV

UP-130





UP-130土層説明
1黒色土(Hue7.5YR1.7/1)シルト質。III
2黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cが少量混じる。III＞IV
3黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cが2よりも多く混じる。III＋IV
4黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cが3よりも多く混じる。III＜IV
5黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cがごく少量混じる。III≫IV
6極暗褐色土(Hue7.5YR2/3)Ta-c。しまりは弱い。IV
7黒色土(Hue7.5YR1.7/1)シルト質。V
8黒褐色土(Hue10YR2/2)シルト質。ロームブロックが混じる。V＞VI VII

図III-25　UP-129・130

長軸方向：N-12°-E

特徴　Ⅳ層上面において黒色土のまとまりを確認した。平面プランは隅丸方形に近く、平坦な床面からなだらかに壁が立ち上がった。南東側に隣接して UP-132 がある。

遺物　0135 はⅥ群 a 類の深鉢形土器である。1 はたたき石。角礫を素材とし、周縁にたたき痕をもつ。珪岩製。

時期　覆土出土の土器から、続縄文時代の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

UP-132（図Ⅲ-26 ／ 図版-79 ～ 106，123 ～ 125）

位置：B-292-c　規模：(0.76)×(0.72)／ 0.52 × 0.54 ／(0.32)m

長軸方向：N-4.5°-E

特徴　Ⅳ層上面において黒色土のまとまりを確認した。平面プランは円形で、平坦な床面からなだらかに壁が立ち上がる。床面に近い覆土 3 層上面において石斧が出土した。北西方向に隣接して UP-131 がある。

遺物　0105 はⅤ群 c 類の深鉢形土器底部である。1 は石斧。偏平礫を素材とし、刃部周辺のみ打ち欠き・研磨により整形されている。片岩製。

時期　床面に近い遺物から、続縄文時代の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

UP-133（図Ⅲ-28）

位置：Y0-289-c　規模：(0.60)×(0.48)／ 0.20 × 0.24 ／(0.36)m

長軸方向：N-89°-E

特徴　東側台地の端で、黒みが弱いⅤ層を少し掘り下げたさいにTa-cの混じった黒色土がまとまっているのを確認した。上部には礫が 2 個あった。壁・床ともやや不明瞭である。木根の撹乱があり、堆積状況もやや不自然なことから遺構ではない可能性もある。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。あるいは周辺の遺物から続縄文時代の遺構であると推測できる。（藤原秀樹）

UP-134（図Ⅲ-28 ／ 図版-79 ～ 106）

位置：A-290-c,A-290-d,A-291-a,A-291-b　規模：(0.58)×(0.53)／ 0.32 × 0.43 ／(0.32)m

長軸方向：N-33°-W

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに、Ta-c の混じった黒褐色土のまとまりを確認した。焼土（LF-196）を切っていた。平面プランは楕円形で、平坦な床面から壁がやや斜めに立ち上がった。堆積状況は人為的な埋め戻しと考えられる。床面から少し浮いて縄文時代晩期の土器が出土した。

遺物　5647 はⅤ群 c 類の浅鉢形土器である。

時期　覆土出土の遺物から、縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

UP-135（図Ⅲ-28）

位置：Y0-293-b　規模：0.57 × 0.42 ／ 0.13 × 0.34 ／ 0.26m 長軸方向：N-79°-E

特徴　Ⅴ層上面で、Ⅳ層の混ざった黒色土の落ち込みとして確認した。平面形は卵形を呈し、壙底は西側に深く傾斜し、壁面は緩やかである。覆土は流れ込みによる自然堆積と考えられる。　覆土上部から土器片が 2 点出土している。性格は不明である。

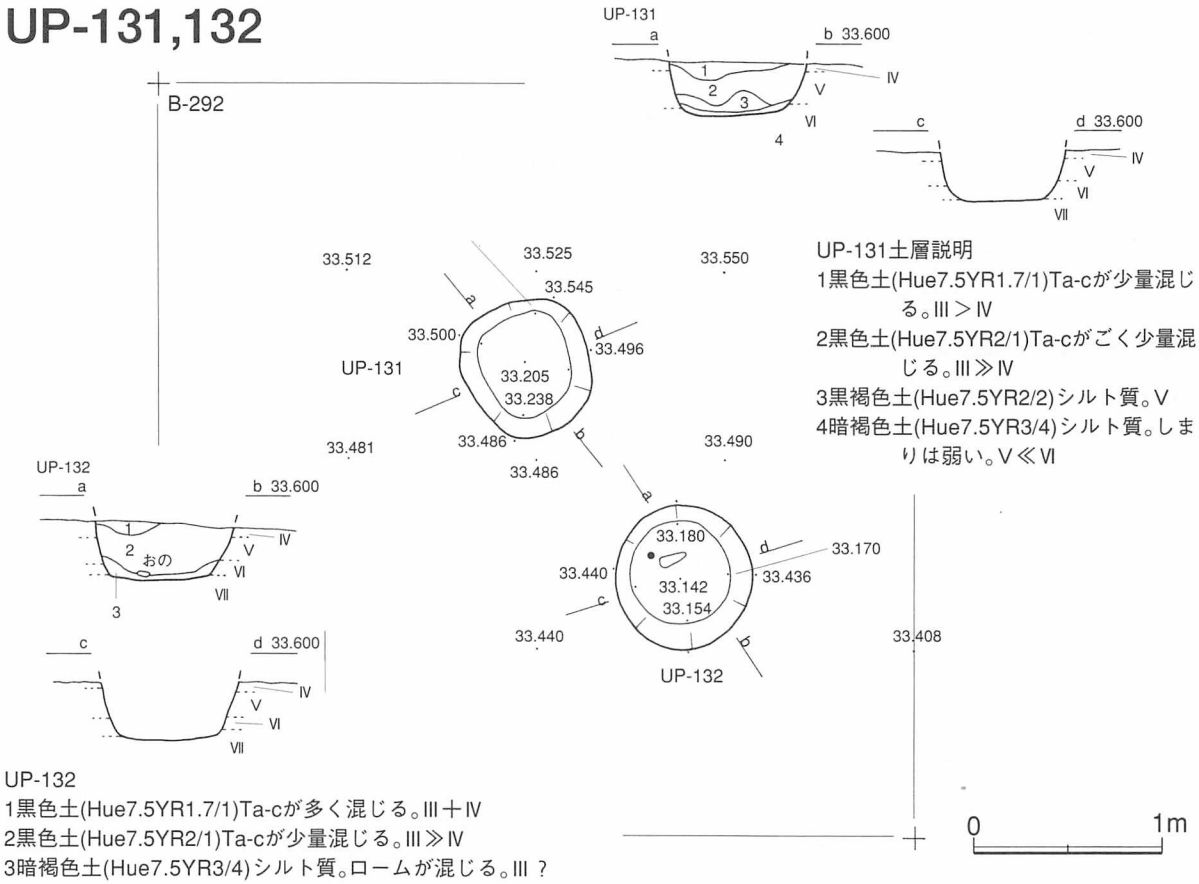
遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土の土器から、縄文時代晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

UP-136（図Ⅲ-29）

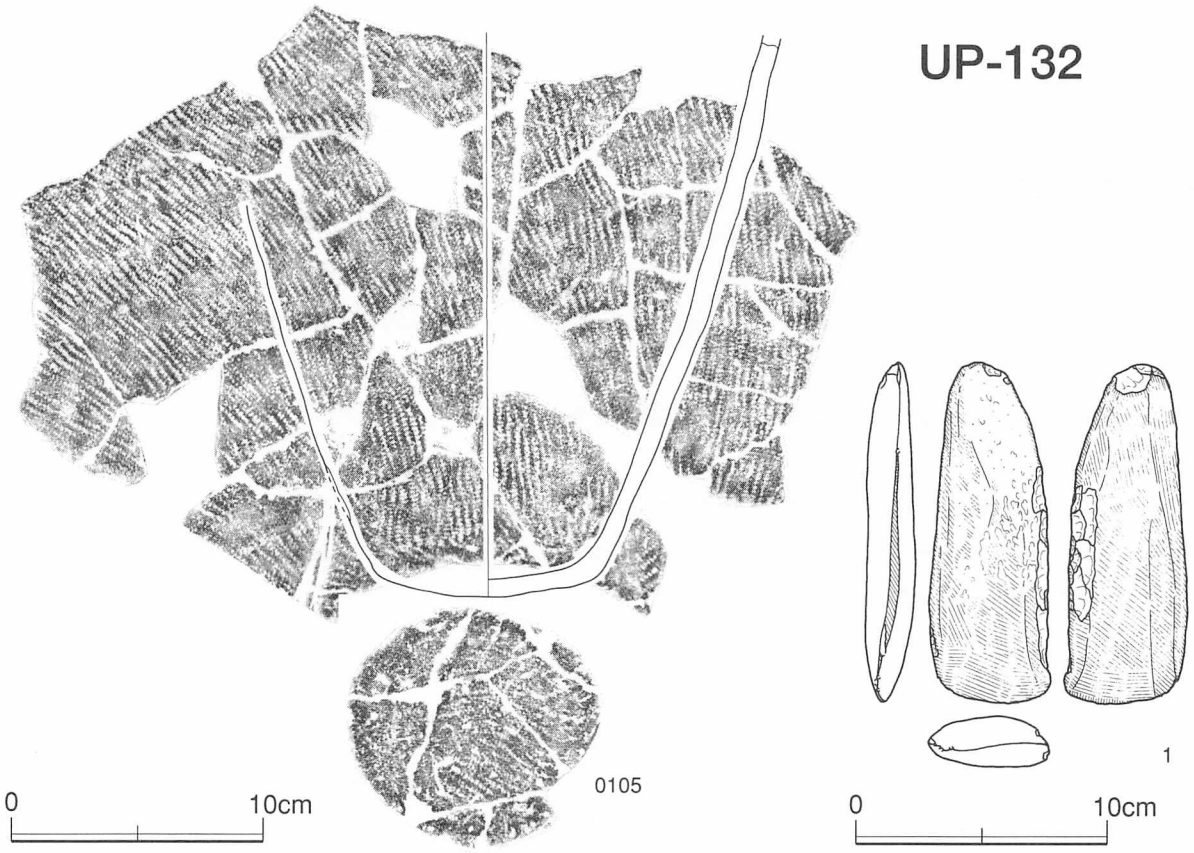
位置：C-289-b　規模：(0.83)×(0.54)／ 0.40 × 0.70 ／(0.22)m

UP-131,132



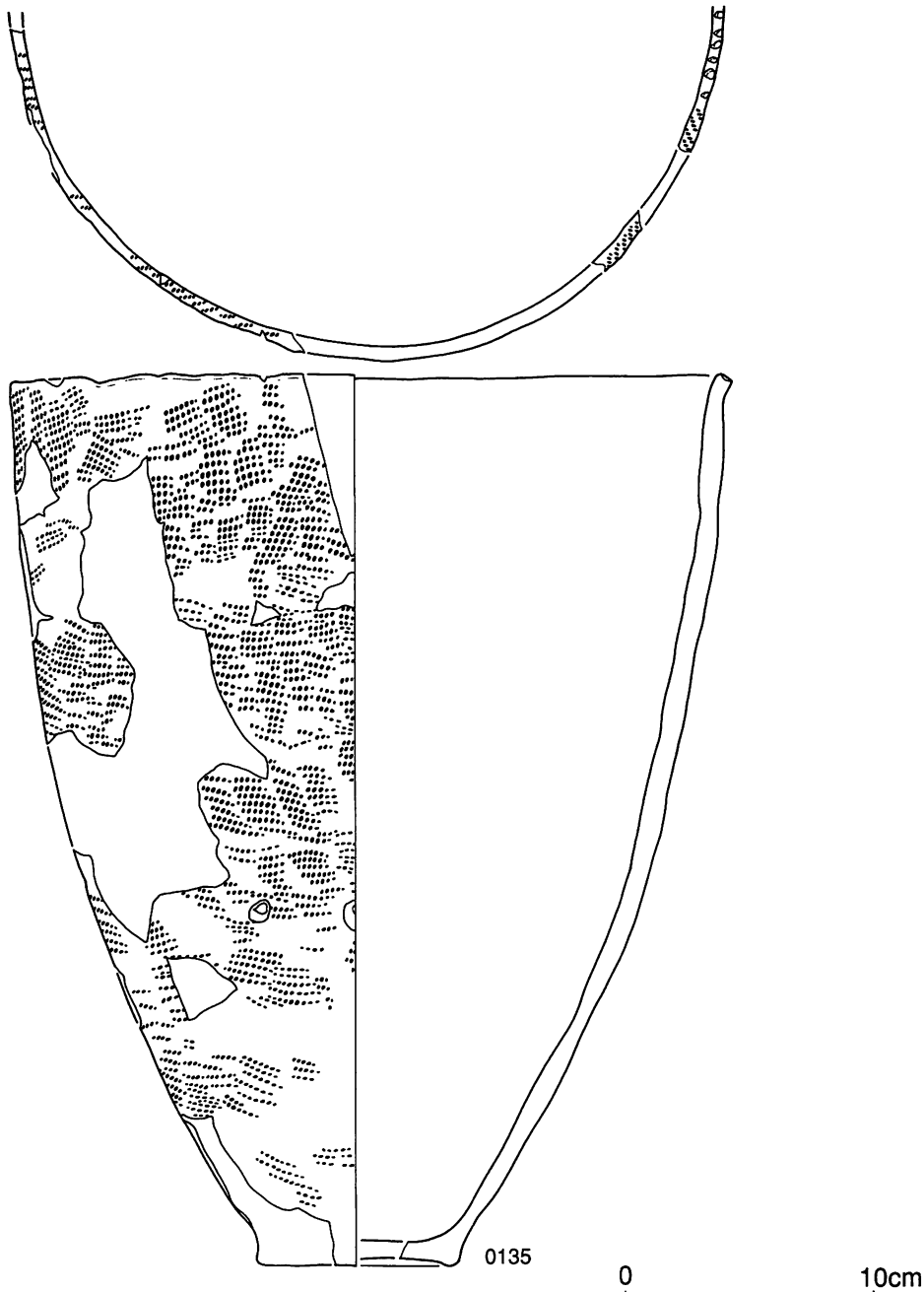
UP-131土層説明
1黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cが少量混じる。Ⅲ＞Ⅳ
2黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cがごく少量混じる。Ⅲ≫Ⅳ
3黒褐色土(Hue7.5YR2/2)シルト質。Ⅴ
4暗褐色土(Hue7.5YR3/4)シルト質。しまりは弱い。Ⅴ≪Ⅵ

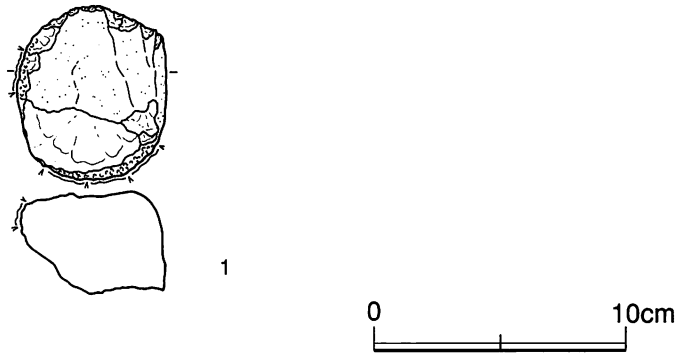
UP-132
1黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cが多く混じる。Ⅲ＋Ⅳ
2黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cが少量混じる。Ⅲ≫Ⅳ
3暗褐色土(Hue7.5YR3/4)シルト質。ロームが混じる。Ⅲ？Ⅴ？≪Ⅵ



図Ⅲ-26　UP-131・132と遺物

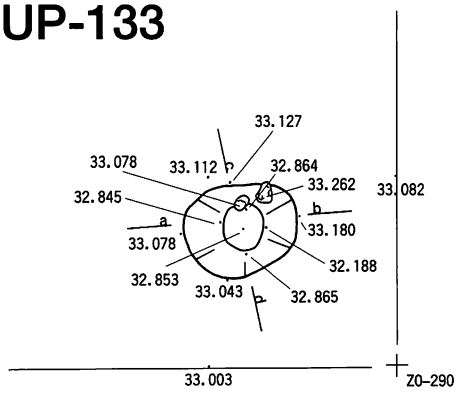
UP-131

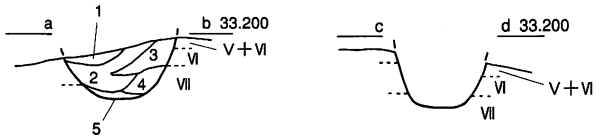




図Ⅲ-27　UP-131 の遺物

UP-133

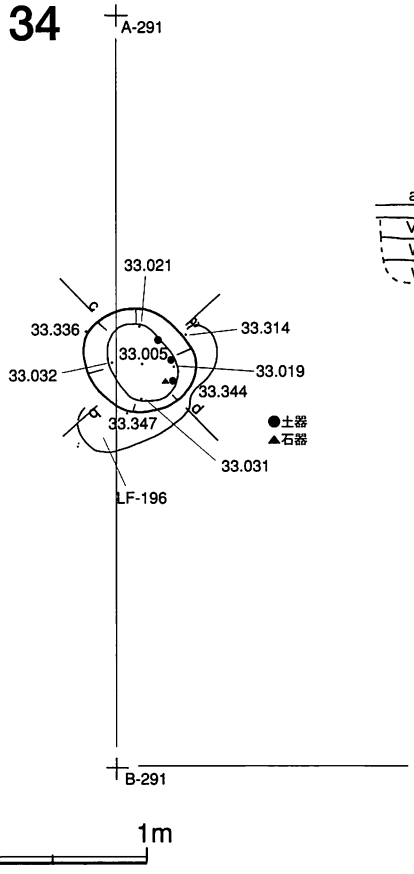


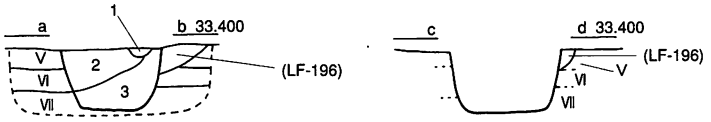


UP-133土層説明
1黒色土(Hue7.5YR1.7/1)炭化物を多く含む。Ta-cがごく少量混じる。III≫IV
2黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cを少量含む。III＞IV
3暗褐色土(Hue7.5YR3/3)ロームが少量、Ta-cがごく少量混じる。V VII＞IV
4暗褐色土(Hue7.5YR3/4)ロームが多く混じる。VI
5暗褐色土(Hue7.5YR3/3)3と4の中間ぐらいのロームが混じる。V≪VI

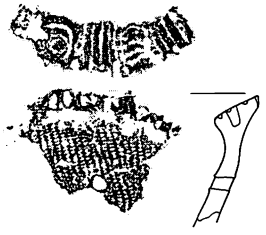
0　1m

UP-134





UP-134土層説明
1暗褐色土(Hue7.5YR3/4)Ta-cが多く混じる。III＋IV
2黒褐色土(Hue7.5YR2/2)少量のTa-cが混じる。III？＞IV
3黒褐色土(Hue7.5YR2/2)2よりもTa-cが多く混じり、黒みが強い。
III？＞IV

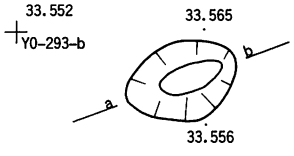


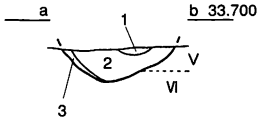
5647

0　1m

0　10cm

UP-135





UP-135土層説明
1　黒色(10YR1.7/1)土　IV層混ざる
2　黒色(7.5YR2/1)土　IV層混ざる
3　褐色(7.5YR4/4)土　IV層混ざる

0　1m

図III -28　UP-133・134・135と遺物

長軸方向：N-43°-E

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいにTa-cの混じった土が楕円形にまとまっているのを確認した。壙口部および長軸方向に少しはなれて礫があった。掘り下げると床面はやや不明瞭で、壁はなだらかに立ち上がった。浅い皿状の土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。（藤原秀樹）

UP-137（図Ⅲ-29／図版-107～123）

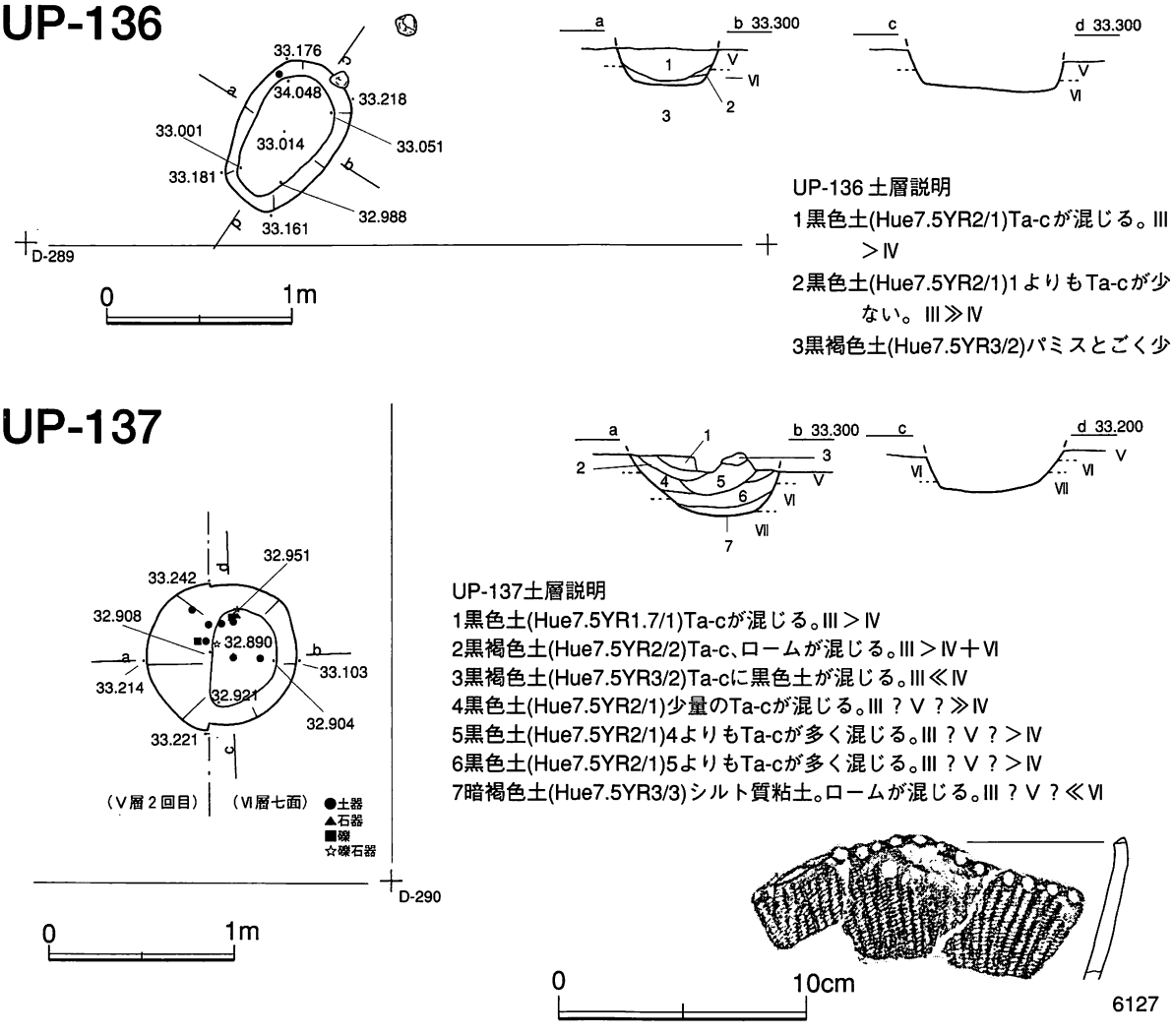
位置：C-289-c　規模：(0.84)×(0.80)／0.34×0.52／(0.33)m

長軸方向：

特徴　Ⅴ層を約10㎝程掘り下げたさいに礫を確認した。その周りを注意して見るとTa-cの混じった黒色土がまとまっていた。掘り下げると、東半は壁床ともに明瞭に検出できたが、西半はなだらかに壁が立ち上がった。平面プランはほぼ円形である。

遺物　6127はⅥ群a類の小型の鉢形土器である。

時期　床面に近い位置の土器から縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）



図Ⅲ-29　UP-136・137と遺物

UP-138（図Ⅲ-30／図版-7・147）

位置：D-288-c,D-289-b　規模：(2.08)×(0.63)／0.49×1.78／(0.42)m

長軸方向：E-3.5°-S

特徴　Ⅴ層上面で細長いTa-cの混じった黒色土のまとまりが確認できた。当初は撹乱とも思われたので、とりあえず東半分を掘り下げると明瞭な輪郭が捉えられた。そのため遺構として調査を開始した。更に、半裁して掘り下げるとアイヌ刀と頭蓋骨が検出された。その他の副葬品は見つけられなかった。平面プランは長楕円形で長軸の両壁は平坦な床面からほぼ垂直に立ち上がる。周辺を精査したが墓標に相当するかと思われる小土壙は検出できなかった。　頭蓋骨は床面からやや浮いた状態である。アイヌ刀は床面を向いていた側に人骨かと思われる多孔質の白い物質が付着していた。出土位置などを勘案すると胸の上に位置していたと思われる。また、西半からはやや粘性の強い土が2列になって検出された。両足に相当するかと思われる。　さて、掘込み面であるが覆土中にTa-aを含まないことからTa-a降下以前で、Ⅲ層中からの掘込みであると言える。そこで、すぐ近くにあるE-289の杭山を参考にしてみると、Ta-cの上に約3㎝程の厚さでⅢ層があり、その上に約7㎝程のローム質土が混じった黒色土がある。位置的には段丘の縁でありもともと黄みの強い土が多い場所ではあるが、このローム質土の混じった土を堀上げ土と考えることができるならば、掘込みはⅢ層の上位でTa-a降下からあまり時代が下らない時期の面であると推測できる。

遺物　1は刀。全長61.8cm、刃部長49.2cm、元幅3.2cm、全反り1.9cm、刃反り1.8cmをはかる。鞘および柄の木質が残存付着している。刀本体は平棟平造りで、刃身は切先、茎両方向とも反り返った形状を呈する。X線写真から、明瞭な棟区が認められる。茎には目釘孔が1孔あり、木釘が挿入された状態で一部残存している。鞘は白木で、剥落によって部分的に鞘の合わせ目が認められる。切先から約10cm、26cm、36cmの部位および合口部分には、幅約1cmの樹皮巻きをもつ。残存状態の良い合口部分は、鞘、柄部とも2段認められ、2巻き半程巻かれる。巻き締めは、樹皮に刻まれた孔に差し込んで固定される。差し込み側はY字状もしくは2巻き目から細く加工されている（模式図参照）。他は残りが悪いが、1段巻きと思われる。樹皮巻きは二次的に付加されたものと考えられる。鞘および樹皮の樹種は不明である。なお、詳細については、（財）日本美術刀剣保存協会　佐藤矩康氏に性格等の分析を依頼し、玉稿を得ているので、そちらをご覧いただきたい（Ⅶ－9）。

時期　検出された層位および副葬品からアイヌ文化期の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

UP-139（図Ⅲ-31／図版-8・79～106，123～125）

位置：D-290-a　規模：(0.44)×(0.39)／(0.17)×(0.18)／(0.24)m

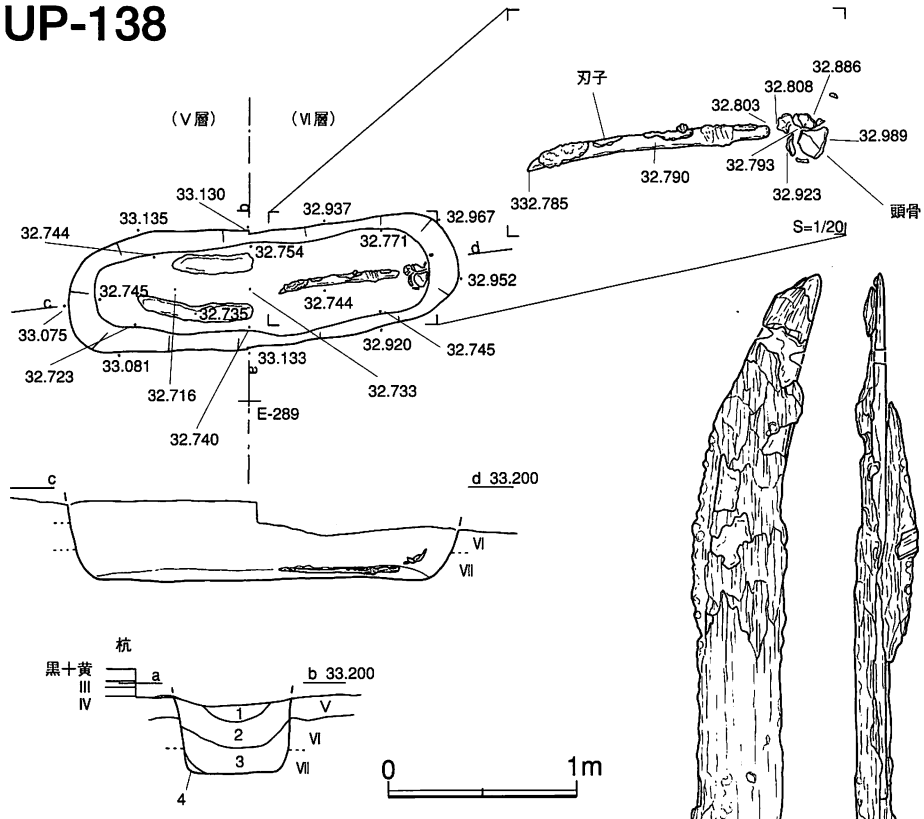
長軸方向：N-6.5°-E

特徴　Ⅵ層まで掘り下げたさいにTa-cの混じった土が円形にまとまっているのが確認された。掘り下げると土器が大きく4層に折り重なって検出された。土器は埋設されていたとも考えられるが、器面を上にしている破片は少なく、口縁部も3方向を向いていた。また、土器集中のすぐ脇から石鏃、黒曜石の原石も出土した。床面は丸く、壁はなだらかに立ち上がった。堆積状況は人為的な埋め戻しと推測できる。

遺物　0157はⅤ群c類の深鉢形土器である。大洞A式併行と考えられる。1は有茎凸基の石鏃。尖頭部および基部を欠損している。黒曜石製。

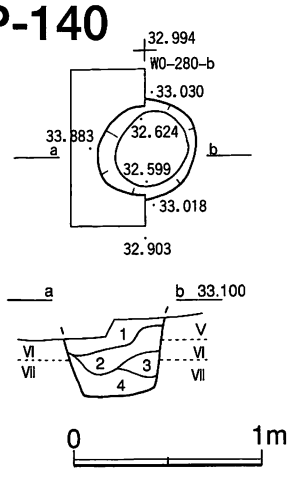
時期　覆土出土の土器から縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

UP-138

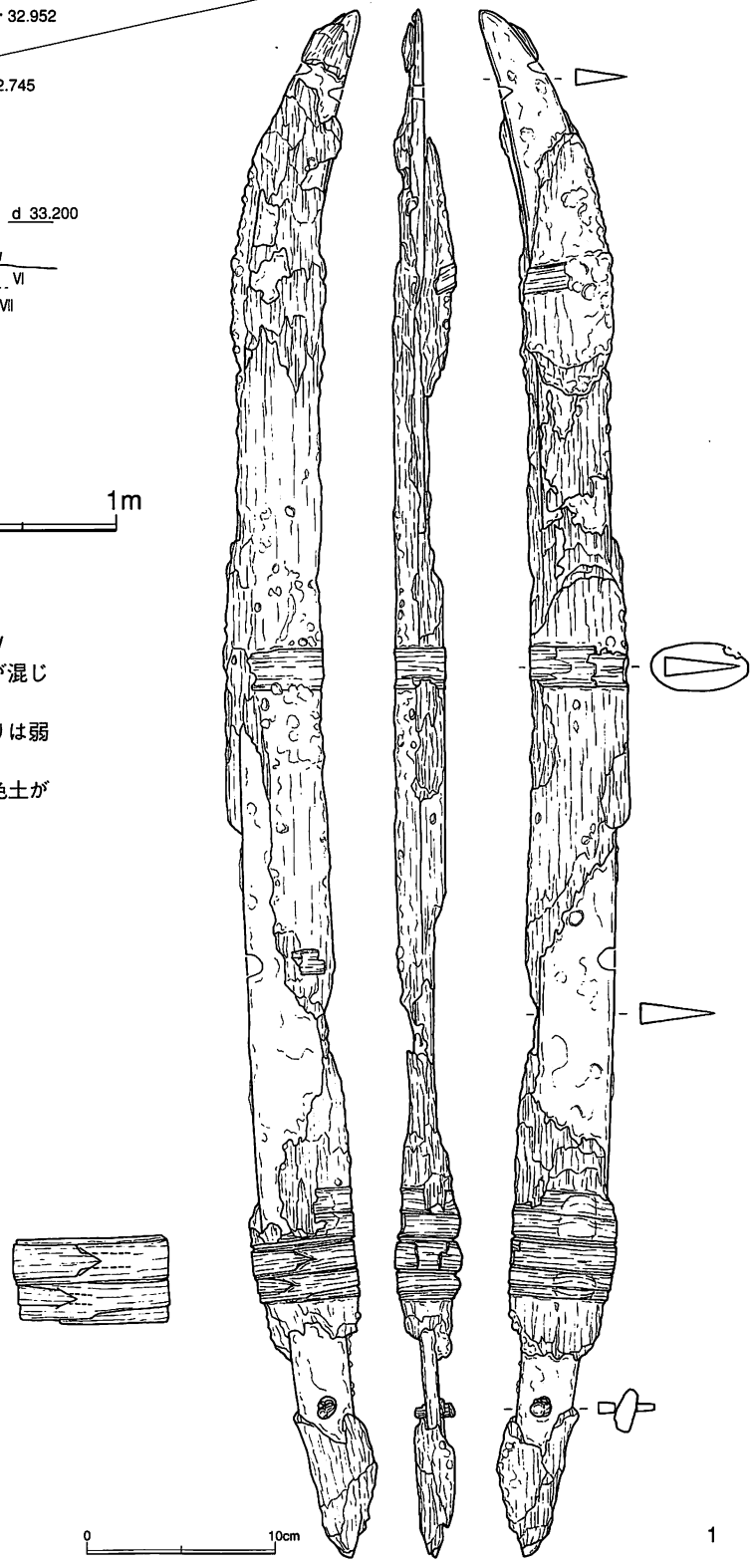


UP-138土層説明
1黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cが少量混じる。Ⅲ＞Ⅳ
2黒褐色土(Hue7.5YR3/2)ロームブロック、Ta-cが混じる。Ⅲ＞Ⅳ Ⅵ Ⅶ
3黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cが少量混じる。しまりは弱い。Ⅴ＞Ⅳ
4暗褐色土(Hue7.5YR3/4)ローム質土に少量の黒色土が混じる。Ⅴ＜Ⅵ Ⅶ

UP-140



UP-140土層説明
1　黒色(10YR2/1)土　Ⅳ層混ざる
2　黒色(10YR1.7/1)土　Ⅳ層混ざる
3　黒褐色(10YR2/2)土
4　黒色(7.5YR2/1)土



図Ⅲ-30　UP-138・140と遺物

UP-140（図Ⅲ-30）

位置：W0-279-c,W0-280-b　規模：0.56×0.47／0.34×0.40／0.40m

長軸方向：N-63°-E

特徴　W0-279区域調査時にⅥ層上面を精査したところ、半円形のⅣ層の混ざった黒色土の落ち込みを検出した。なおW0-280区域のⅤ層は未調査であったため、東側半分とは検出面にずれが生じている。平面形は円形で、壙底はおよそ平坦、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土の上半部にはⅣ層が混ざっている。堆積状況は流れ込みによる自然堆積と考えられる。覆土上部から土器片が2点出土している。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土の土器から、縄文時代晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

UP-142（図Ⅲ-42／図版-8・123～125）

位置：Z0-277-c,Z0-278-b　規模：0.83×0.65／0.41×0.96／m

長軸方向：N-20°-W

特徴　中の沢右岸に位置する土壙群を構成する平面が楕円の土壙である。覆土の主体は埋め戻し土でその上面には表裏に平坦な面のある大型で厚手の扁平円礫が置かれている。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。上記の大型礫以外の遺物は覆土中からⅥ群土器の小破片とスクレイパーが出土している。性格は埋め戻しの覆土とその上面の礫から墓としてのものが強いと考えられるが、規模の面でやや難がある。

遺物　1はスクレイパー。両側縁に直線的な刃部をもつ。黒曜石製。

時期　遺物から続縄文時代前葉と考えられる。（皆川洋一）

UP-143（図Ⅲ-42／図版-8）

位置：B-278-a,B-278-d　規模：0.80×0.77／0.54×0.52／0.53m

長軸方向：N-29°-E

特徴　中の沢右岸に位置する土壙群を構成する平面が楕円の土壙である。壙底は丁寧に作出された平坦なもので、そこから壁は角を持って立ち上がり、壁上位でやや広がる。覆土の3層以下が埋め戻し土と考えられ、その中央は大きく陥没している。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。遺物は覆土中からⅥ群土器の小破片と礫が出土している。性格は埋め戻しの覆土から墓の可能性考えられるが、規模の面でやや難がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出層位と、覆土中の遺物から続縄文時代前葉の可能性がある。（皆川洋一）

UP-144（図Ⅲ-42／図版-8）

位置：B-277-c,B-277-d,B-278-a,B-278-b　規模：0.80×0.64／0.36×0.45／0.47m

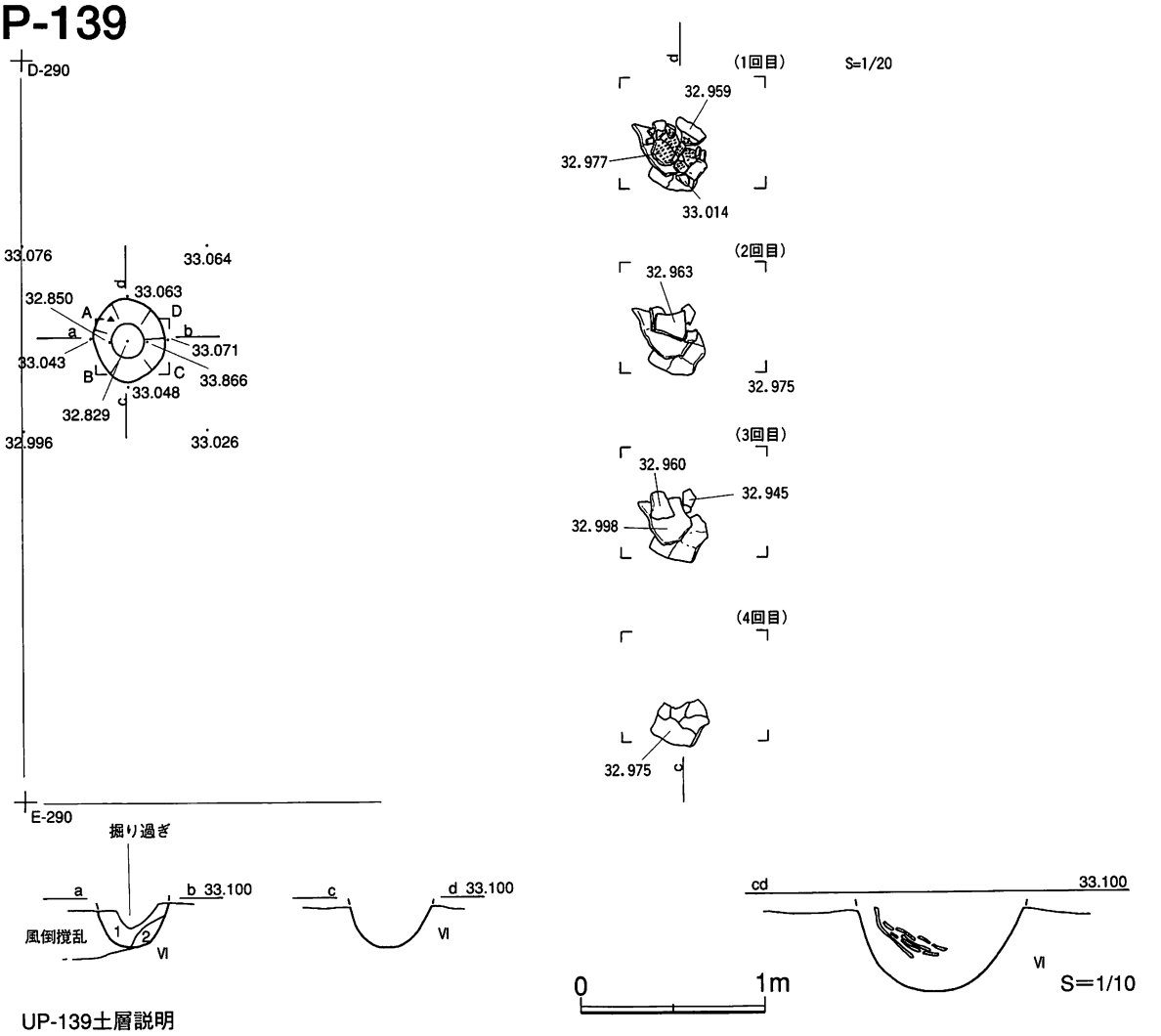
長軸方向：N-22°-E

特徴　中の沢右岸に位置する土壙群を構成する平面が円形の土壙である。壙底は丁寧に作出された平坦なもので、そこから壁は角を持って立ち上がり、壁上位でやや広がる。覆土の2層が埋め戻し土でその中央は大きく陥没している。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。遺物は覆土中からⅤ群c類の浅鉢型土器と考えられる小破片が出土している。性格は埋め戻しの覆土から墓の可能性考えられるが、規模の面でやや難がある。

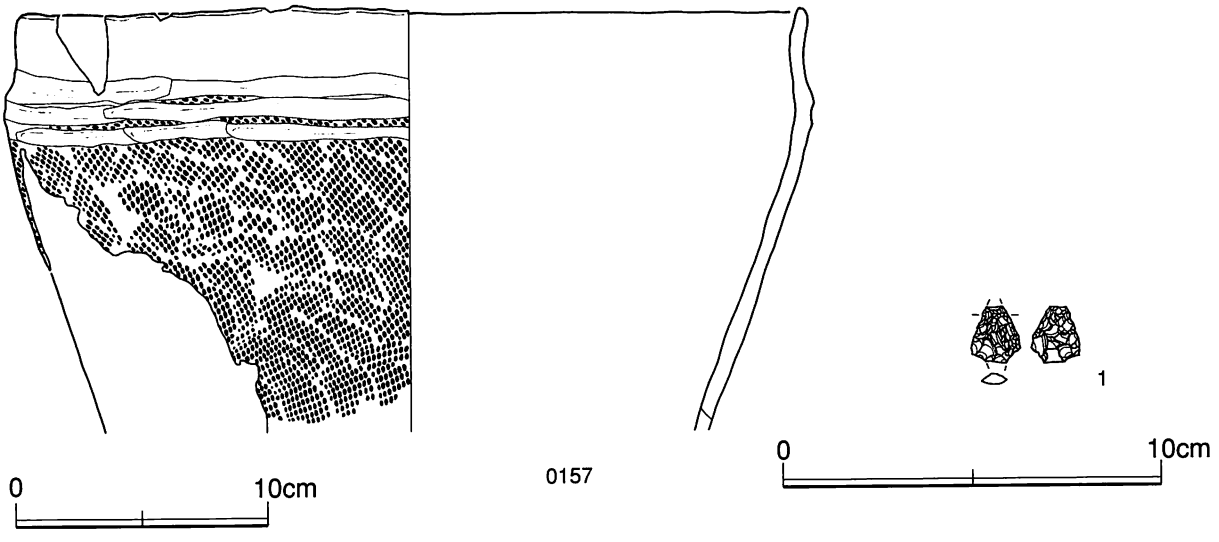
遺物　掲載遺物なし

時期　検出層位と、覆土中の遺物から続縄文時代前葉の可能性がある。（皆川洋一）

UP-139



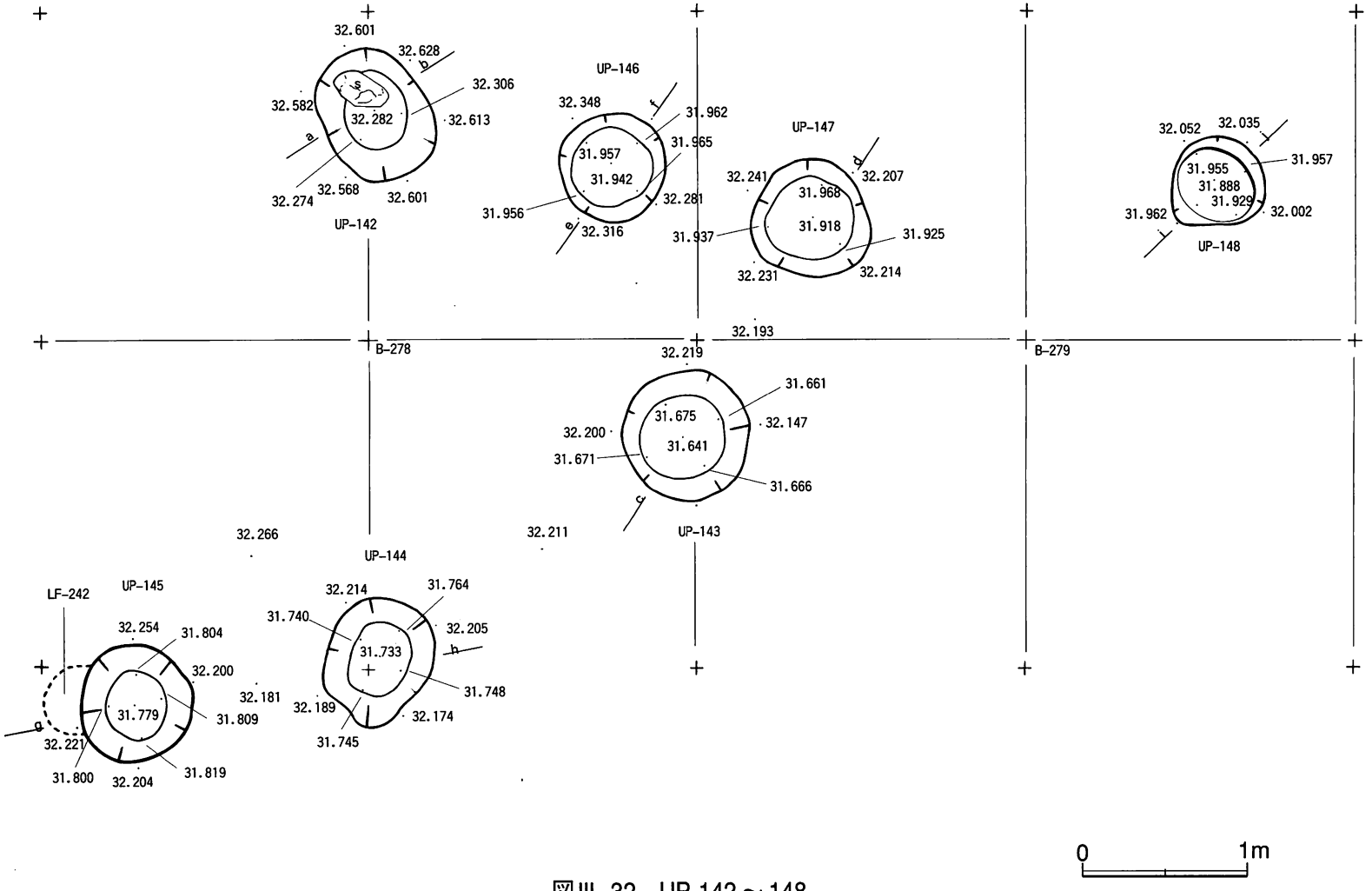
UP-139土層説明
1黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cが少量混じる。Ⅲ＞Ⅳ
2黒褐色土(Hue7.5YR3/1)ロームブロックが混じる。Ⅲ＋ⅥⅦ



図Ⅲ-31　UP-139 と遺物

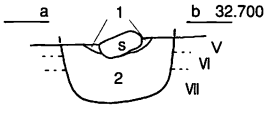
UP-145（図III -32 ／ 図版 -8）
位置：B-277-a,B-277-d　規模：0.72 × 0.69 ／ 0.38 × 0.39 ／ 0.43m
長軸方向：N-56.5° -E
特徴　中の沢右岸に位置する土壙群を構成する平面が円形の土壙である。壙底は丸く壁は開き気味に立ち上がる。これは群をなす他の土壙とはやや異なる形態である。覆土の２層が埋め戻し土でその中央は大きく陥没している。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。遺物は出土しなかった。性格は埋め戻しの覆土から墓的なものが考えられるが、規模の面でやや難がある。
遺物　掲載遺物なし
時期　検出層位と、覆土中の遺物から続縄文時代前葉の可能性がある。（皆川洋一）
UP-146（図III -32 ／ 図版 -8 ）
位置：A-278-b　規模：0.67 × 0.65 ／ 0.49 × 0.47 ／ 0.38m
長軸方向：N-32° -E
特徴　中の沢右岸に位置する土壙群を構成する平面が円形の土壙である。壙底はやや丸みを帯びた平坦なもので壁は開き気味に立ち上がる。覆土の３層以下が埋め戻し土と考えられ、覆土の中央は小さく陥没し、底面に薄く入る覆土が特徴となっている。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。遺物は出土していない。性格は埋め戻しの覆土から墓的なものが考えられるが、規模の面でやや難がある。
遺物　掲載遺物なし
時期　検出層位と、覆土中の遺物から続縄文時代前葉の可能性がある。（皆川洋一）
UP-147（図III -32 ／ 図版 -8）
位置：A-278-c　規模：0.73 × 0.71 ／ 0.53 × 0.50 ／ 0.32m
長軸方向：N-18.5° -W
特徴　中の沢右岸に位置する土壙群を構成する平面が円形の土壙である。壙底はやや丸みを帯びた平坦なもので壁は開き気味に立ち上がる。覆土の２層以下が埋め戻し土、掘り込み面はⅢ層中と考えられる。遺物は壙底面からⅤ群ｃ類の深鉢型と考えられる胴部片の土器が出土している。性格は埋め戻しの覆土から墓的なものが考えられるが、規模の面でやや難がある。
遺物　掲載遺物なし
時期　検出層位と、覆土中の遺物から続縄文時代前葉の可能性がある。（皆川洋一）
UP-148（図III 32 ／ 図版 -8 ）
位置：A-279-b　規模：0.61 × 0.57 ／ 0.50 × 0.42 ／ 0.15m
長軸方向：N-60.5° -E
特徴　中の沢右岸に位置する土壙群を構成する平面が不整の円形を呈する土壙である。壙底はやや丸みを帯びた平坦なもので壁は開き気味に立ち上がり検出時の深さは浅い。覆土の性質は不明であるが、掘り込み面はⅢ層中と考えられる。性格不明の土壙である。形態が他とやや異なるため群の一部を構成しない可能性もある。
遺物　掲載遺物なし
時期　検出層位と、覆土中の遺物から続縄文時代前葉の可能性がある。（皆川洋一）
UP-149（図III 34 ／ 図版 -8 ）
位置：C-277-a,C-277-d　規模：0.68 × 0.66 ／ 0.54 × 0.47 ／ 0.33m
長軸方向：N-28° -E

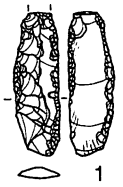
UP142～148

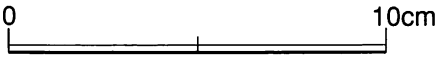


図III -32　UP-142～148

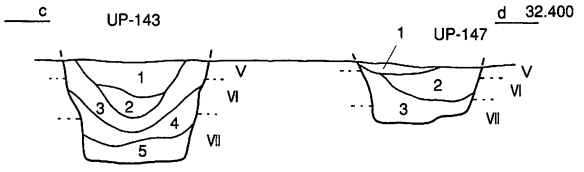
UP-142～148





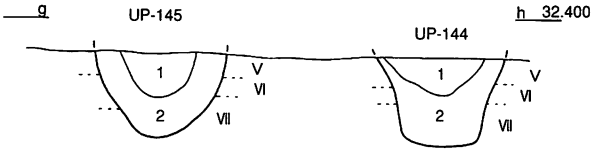


UP-142土層説明
1.黒(Hue7.5YR1.7/1)III層
2.黒(Hur7.5YR2/1)IV+V＞III
埋め戻し



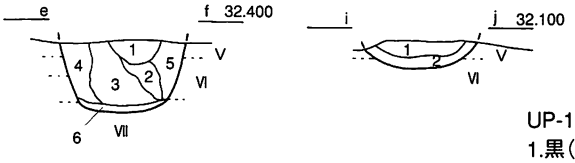
UP-143土層説明
1.黒　(Hue7.5YR1.7/1)III層
2.黒　(Hue7.5YR2/1)III＞IV
3.黒　(Hue7.5YR1.7/1)III＞IV
4.黒褐(Hue10YR2/2)III＞VI≫IV
5.黒褐(Hue10YR2/2)III＞VI≫IV
酸化鉄を含む
＊3～5は.埋め戻されていると考えられる。

UP-147土層説明
1.黒褐(Hue10YR3/3)VI＞VII
2.黒褐(Hue10YR2/2)V+IV+VI
3.黒褐(Hue10YR2/1)III+IV+V＞VI.
＊2.3は.埋め戻されたと考えられる。



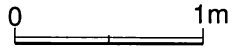
UP-145土層説明
1.黒(Hue7.5YR1.7/1)III
2.黒(Hue7.5YR2/1)IV+V≫VI
≫III
＊埋め戻されたと考える。

UP-144土層説明
1.黒(Hue7.5YR1.7/1)III
≫IV
2.黒(Hue7.5YR2/1)IV+
V＞III≫VI
＊埋め戻されたと考えられる。



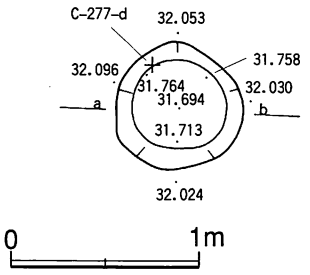
UP-148土層説明
1.黒(Hue7.5YR1.7/1)III
2.黒(Hue7.5YR2/1)IV+V

UP-146土層説明
1.黒　(Hue7.5YR1.7/1)III層
2.黒褐(Hue10YR3/1)III+IV+V　しまりなくボツボツ
3.黒褐(Hue10YR2/2)III+IV+V
4.黒褐(Hue10YR3/1)IV+V
5.黒褐(Hue10YR3/1)IV+V
6.黒褐(Hue10YR3/1)IV+V　かたくしまっている
＊3～6は.埋め戻されたと考えられる。

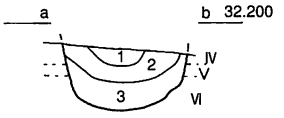


図III-33　UP-142～148と遺物

UP-149

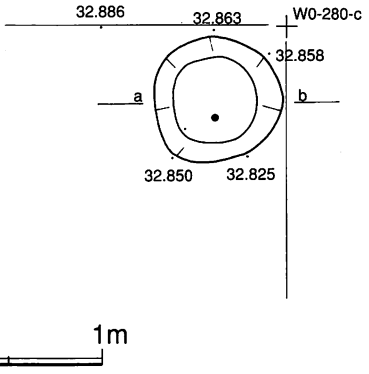


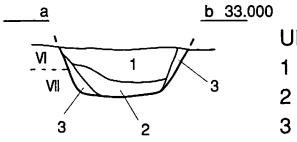




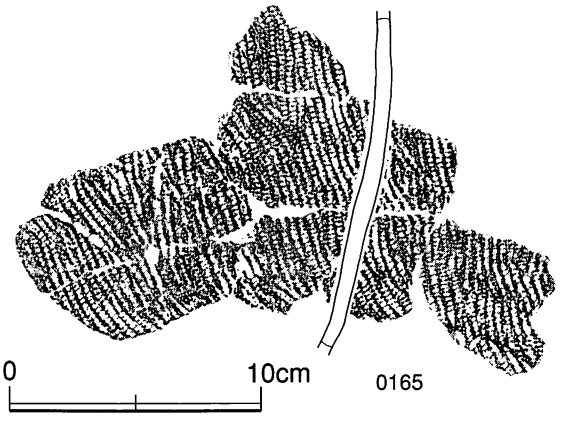
UP-149土層説明
1.黒(Hue7.5YR1.7/1)Ⅲ
2.黒(Hue10YR2/2)Ⅴ＞Ⅳ
3.黒(Hue10YR2/2)Ⅳ+Ⅴ
＊2.3層は.埋め戻されたと考えられる。

UP-150

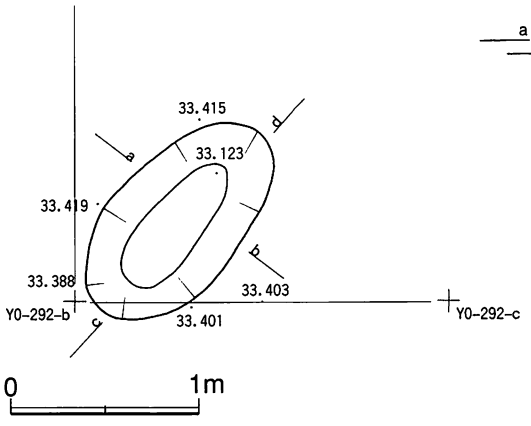


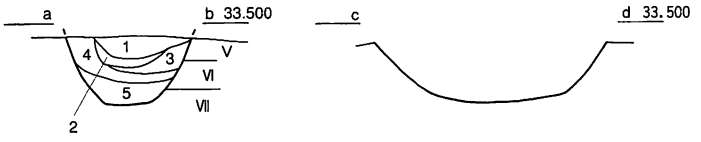


UP-150土巣説明
1　黒色(10YR2/1)土　Ⅳ層混ざる
2　黒色(10YR1.7/1)土　Ⅳ層混ざる
3　暗褐色(10YR3/3)土



UP-151





UP-151土層説明
1　黒色(7.5YR2/1)土　Ⅳ層混ざる
2　黒色(10YR1.7/1)土　Ⅳ層混ざる
3　黒褐色(7.5YR3/1)土　Ⅳ層混ざる
4　黒色(7.5YR2/1)土　Ⅳ層細かいブロック状にみられる
5　黒色(7.5YR2/1)土　粘性に富む

図Ⅲ-34　UP-149・150・151と遺物

特徴　中の沢右岸に位置する土壙群を構成する平面が円形の土壙である。壙底はやや丸みを帯びた平坦なもので壁は開き気味に立ち上がる。覆土の2層以下が埋め戻し土、掘り込み面はⅢ層中と考えられる。遺物は覆土中から礫が出土している。性格は埋め戻しの覆土から墓的なものが考えられるが、規模の面でやや難がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出層位と、覆土中の遺物から続縄文時代前葉の可能性がある。（皆川洋一）

UP-150（図Ⅲ-34／図版-79～106）

位置：W0-280-b　規模：0.68×0.65／0.44×0.45／0.26m

長軸方向：N-81°-E

特徴　Ⅵ層上面でⅣ層の混ざった黒色土の落ち込みとして確認した。平面形は円形で壙底はおよそ平坦、壁面の傾斜は急である。覆土は壁面付近を除いて、黒色土とⅣ層が混合している。流れ込みによる自然堆積と考えられる。覆土上部からⅣc類の土器片が1点出土している。性格は不明である。

遺物　0165はⅤ群c類と考えられる深鉢形土器の胴部である。

時期　覆土出土の土器から、縄文時代晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

UP-151（図Ⅲ-34）

位置：Y0-292-a,Y0-292-b　規模：1.23×0.69／0.29×0.76／0.36m

長軸方向：N-52°-W

特徴　Ⅴ層を5cm程掘り下げたところでⅣ層と黒色土の混ざった落ち込みとして確認した。平面形は長楕円形で、壙底は比較的平坦、壁面の傾斜は長軸方向が緩やかなのに対して、短軸方向はやや急である。覆土上半部はⅣ層が混在しており、部分的に細かいブロックがみられた。また覆土5層は糊状で粘性に富んでいた。人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

3．小ピット

USP-101（図Ⅲ-35／図版-9）

位置：Y0-291-c,Z0-291-d　規模：(0.12)×(0.12)／×／(0.59)m

特徴　Z0ライン沿いに入れたトレンチによりⅣ層上面において確認した。先端が尖った杭状のものを差し込んだ跡と推測できる。後に検出したUSP-102～104との四本で歪んだ四角形を形成する。そのため、やや径が小さいものの何らかの堀立柱建物があったことも想定できる。

時期　USP-101～104は、検出した層位からTa-c降下より後の遺構ではあるが、明確な時期は特定できなかった。（藤原秀樹）

USP-102（図Ⅲ-35／図版-9）

位置：Z0-291-d　規模：(0.15)×(0.15)／×／(0.47)m

特徴　Ⅴ層上面において、Ta-cの混じった黒色土が小さく円形にまとまっているのを確認した。半裁すると、先端の尖った杭状のものを差し込んだ跡であると推測できた。

遺物　掲載遺物なし

USP-103（図Ⅲ-35／図版-9）

位置：Y0-291-b　規模：(0.12)×(0.12)／×／(0.36)m

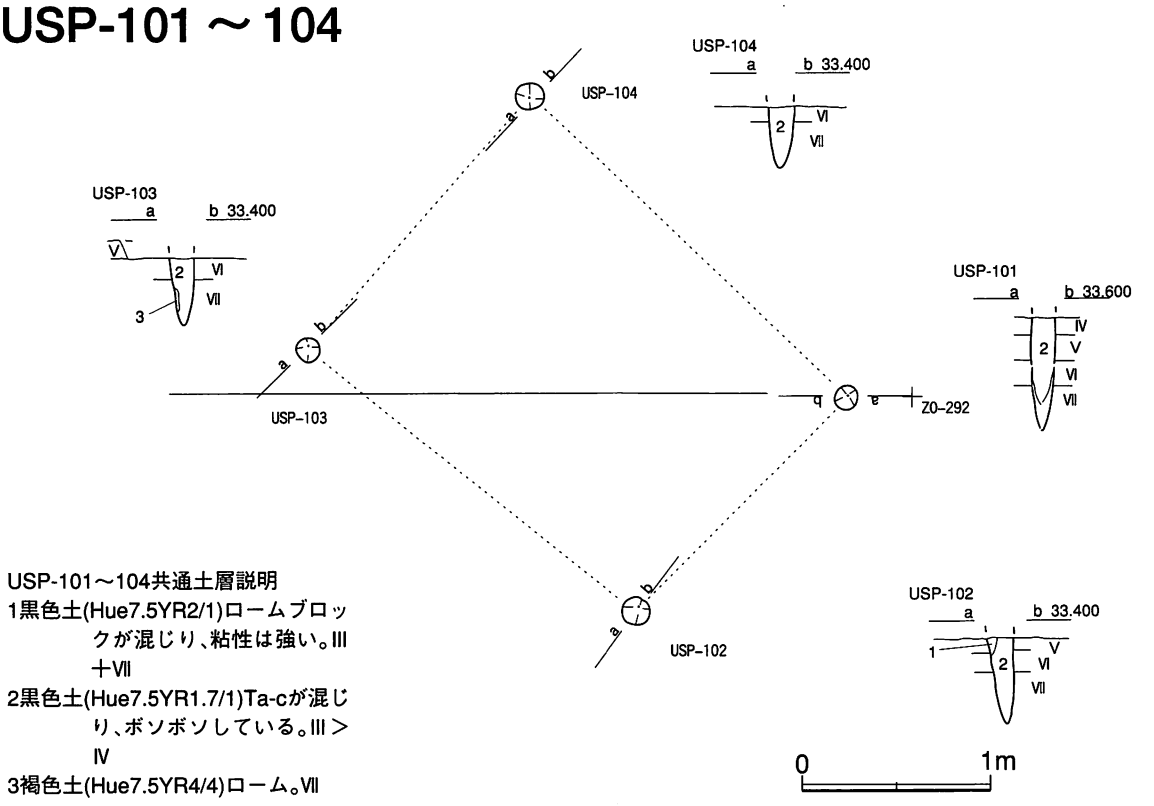
特徴　Ⅵ層上面において、Ta-cの混じった黒色土が小さく円形にまとまっているのを確認した。半裁すると、先端の尖った杭状のものを差し込んだ跡であると推測できた。

USP-104（図Ⅲ-35／図版-9）

位置：Y0-291-b,Y0-291-c　規模：(0.14)×(0.14)／×／(0.32)m

特徴　Ⅵ層上面において、Ta-cの混じった黒色土が小さく円形にまとまっているのを確認した。半裁すると先端の尖った杭状のものを差し込んだ跡であると推測できた。

USP-101～104



USP-101～104共通土層説明

1黒色土(Hue7.5YR2/1)ロームブロックが混じり、粘性は強い。Ⅲ十Ⅶ

2黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cが混じり、ボソボソしている。Ⅲ＞Ⅳ

3褐色土(Hue7.5YR4/4)ローム。Ⅶ

図Ⅲ-35　USP-101～104

USP-105～109（図III-36）

USP-105位置：Y0-296-d　規模：0.18×0.18／×／0.05m

USP-106 位置：Y0-296-c　規模：0.2×0.2／×／0.08m

USP-107位置：Z0-297-d　規模：0.22×0.22／×／0.12m

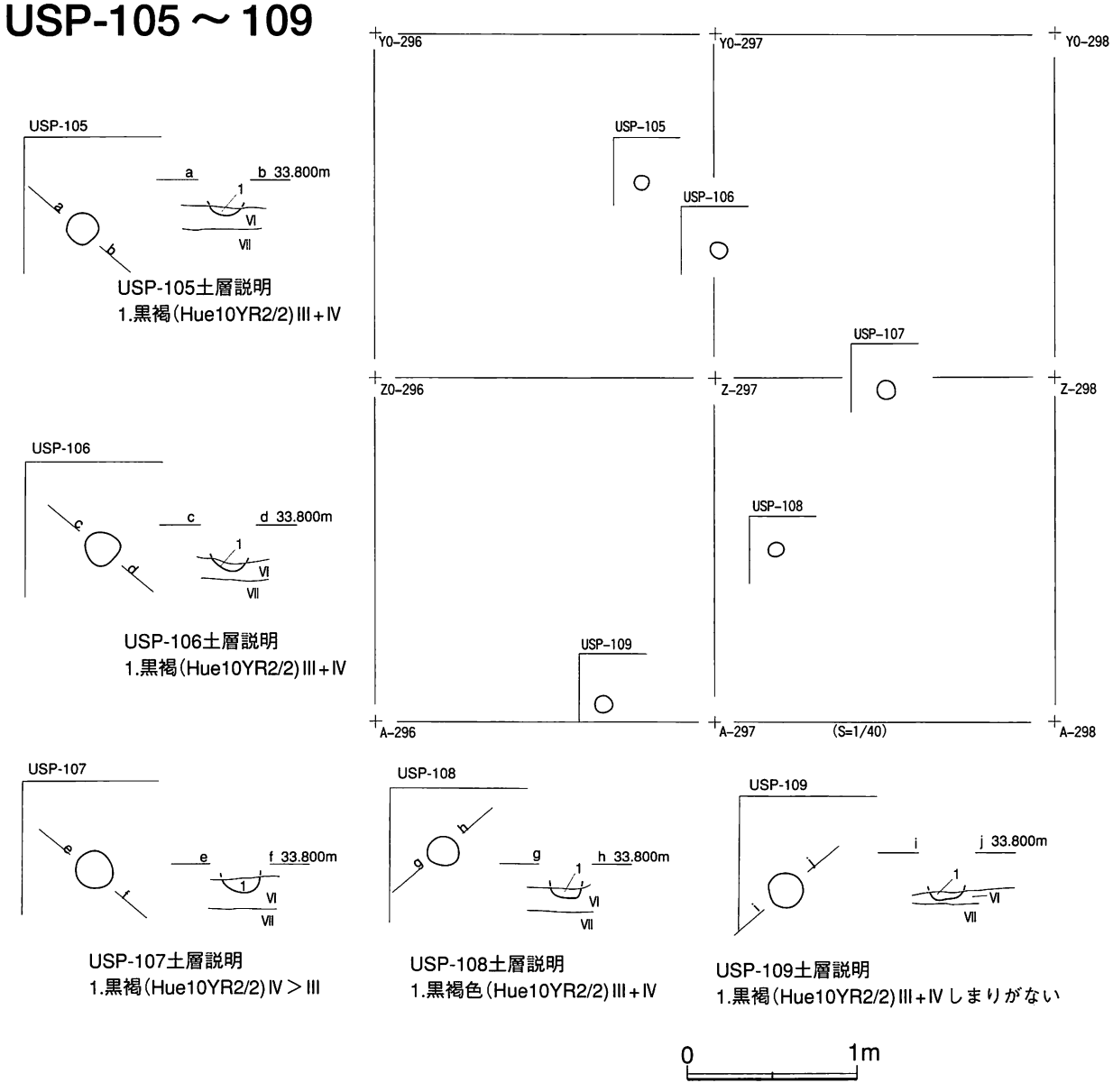
USP-108 位置：B-294-a,B-294-b　規模：0.18×0.18／×／0.06m

USP-109 位置：C-289-a,C-289-b　規模：0.21×0.21／×／0.07m

特徴　USP-105～109は直線的な配列を持つ柱穴用の小ピットである。検出面はVI層上面で、掘り込み面は覆土からIII層中と考えられることからその大半を削失した後に調査を行っている。平面は円形で壙底の断面は緩くカーブを描く形である。105～109に共通するこの特徴は、これらが打ち込みの柱穴ではなく掘り込み柱穴である可能性を示していると考えられる。掘り込み面のIII層ではやや西の位置にUH-101が検出されており何らかの関連が考えられる。

遺物　掲載遺物なし。

時期　掘り込み層位から縄文時代晩期末～中世の可能性が考えられる。（皆川洋一）



図III-36　USP-105～109

USP-110（図Ⅲ-37）

位置：A-291-d　規模：(0.10)×(0.10)／×／(0.29)m

特徴　Ⅵ層上面においてTa-cが混じった黒色土が小さな円形にまとまっているのを確認した。半裁すると先端の尖った杭状のものを差し込んだ跡であると推測できた。2.5メートル程南にUSP-111がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。（藤原秀樹）

USP-111（図Ⅲ-37）

位置：A-291-c　規模：(0.13)×(0.13)／×／(0.24)m

特徴　Ⅵ層上面においてTa-cの混じった黒色土が小さな円形にまとまっているのを確認した。掘り下げると先端の尖った杭状のものを差し込んだ跡であると推測できた。北側にはUSP-110がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。（藤原秀樹）

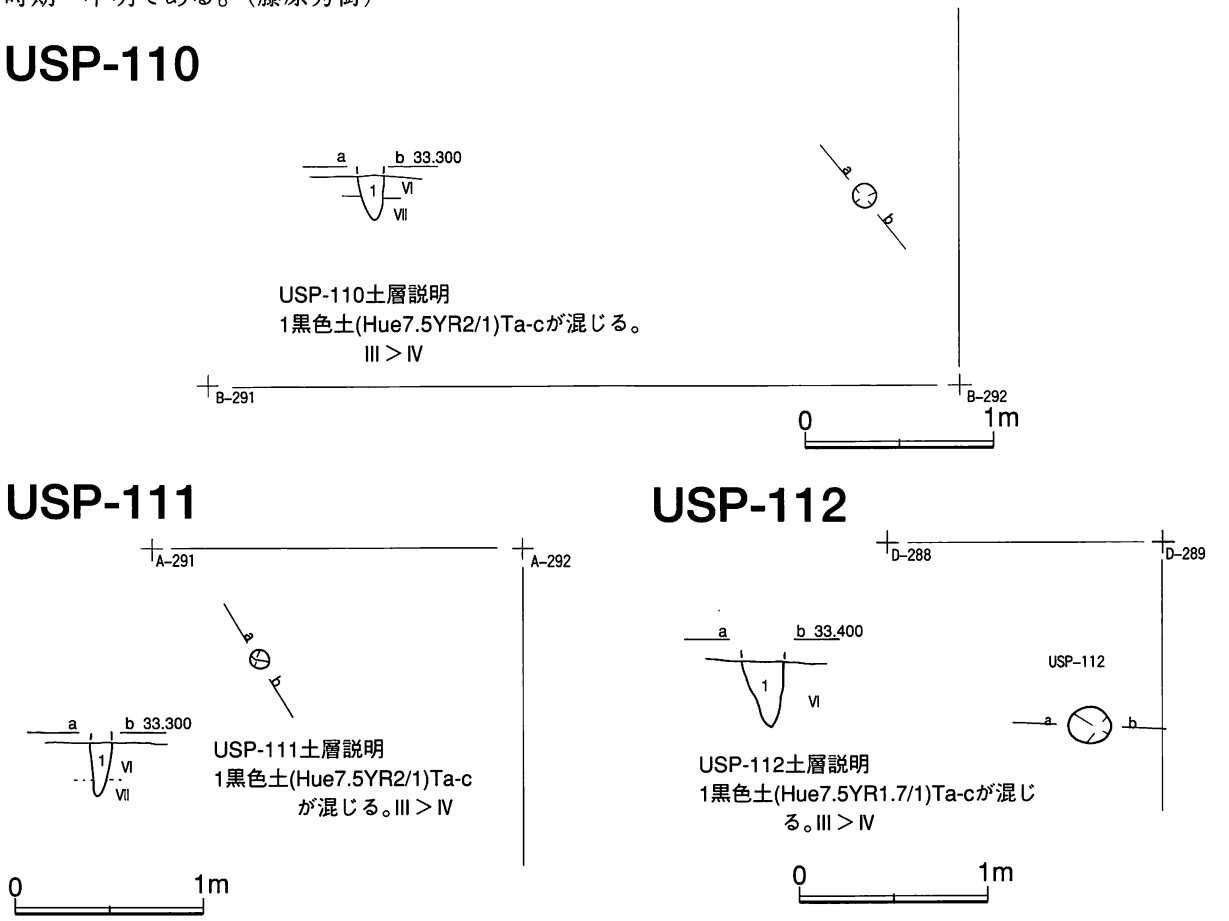
USP-112（図Ⅲ-37）

位置：D-288-d　規模：(0.22)×(0.20)／×／(0.35)m

特徴　Ⅵ層上面においてTa-cの混じった黒色土のまとまりを確認した。半裁すると先端の尖った杭状のものを差し込んだ跡であると推測できた。しかし、やや斜めであることから人為的なものでない可能性もある。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。（藤原秀樹）



図Ⅲ-37　USP-110・111・112

4．焼土

UF-101（図Ⅲ-38／図版-10）

位置：Z0-299-a　規模：0.64×0.33／×／0.04m

長軸方向：N-20.0°-W

特徴　遺跡東の台地縁辺にUF-102と並んで検出された不整形の焼土である。比較的しっかりと焼成されており、焼土内には動物遺体と考えられる白色の微粒子が混じる。集石（US-101～103）は、焼土よりも数センチ高い位置から検出されており、やや新しいと考えられる。遺物は焼土内から沈線の施されたⅤ群c類の深鉢形土器胴部小片ち黒曜石のチップが出土している。周囲の同一レベルではⅤ群c類・Ⅵ群a類土器の小片が出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　関連する遺物と集石の出土状況から、縄文時代晩期末と考えられる。（皆川洋一）

UF-102（図Ⅲ-38／図版-10）

位置：Z0-299-c　規模：0.52×0.24／×／0.04m

長軸方向：N-28.0°-W

特徴　遺跡東の台地縁辺にUF-101と並んで検出された不整形の焼土である。比較的しっかりと焼成されており、焼土内には動物遺体と考えられる白色の微粒子が混じる。集石（US-101～103）は、焼土よりも数センチ高い位置から検出されておりやや新しいと考えられる。遺物は伴わないが、周囲の同一レベルではⅤ群c類・Ⅵ群a類土器の小片が出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　関連する遺物と集石の出土状況から、縄文時代晩期末と考えられる。（皆川洋一）

UF-103（図Ⅲ-38）

位置：W0-301-a　規模：0.82×0.46／×／0.04m

長軸方向：N-34.0°-E

特徴　遺跡東の台地縁辺部で検出された不整形の焼土である。比較的しっかりと焼成されたもので、広い範囲に位置する集石（US-106）の合間に、ほぼ同じ面で形成されている。同じか極近い時期の可能性が高く、周囲の土壙群の確認面より低いレベルなため、これらよりももやや古いと考えられる。明らかに伴う遺物は出土していない。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物から縄文晩期末葉～続縄文時代前葉の可能性が高い。（皆川洋一）

UF-104（図Ⅲ-38）

位置：X0-301-a,W0-301-b　規模：0.78×0.54／×／0.02m

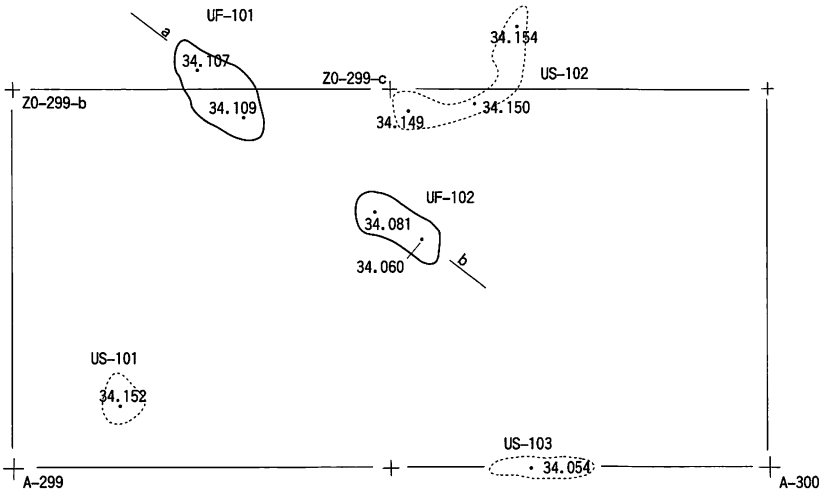
長軸方向：N-24,0°-E

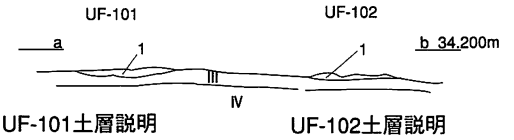
特徴　遺跡東の台地縁辺部で検出された不整形の焼土である。比較的しっかりと焼成されたもので、上面からは炭化粒の薄い広がりが、焼土内からは動物遺体0.1ｇが検出されている。広い範囲に位置する集石（US-106）の合間に、ほぼ同じ面で形成されており。同じか極近い時期の可能性が高い。また、周囲の土壙群の確認面より低いレベルなため、これらよりももやや古いと考えられる。明らかに伴う遺物は出土していない。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物から縄文晩期末葉～続縄文時代前葉の可能性が高い。（皆川洋一）

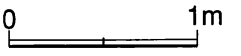
UF-101,102



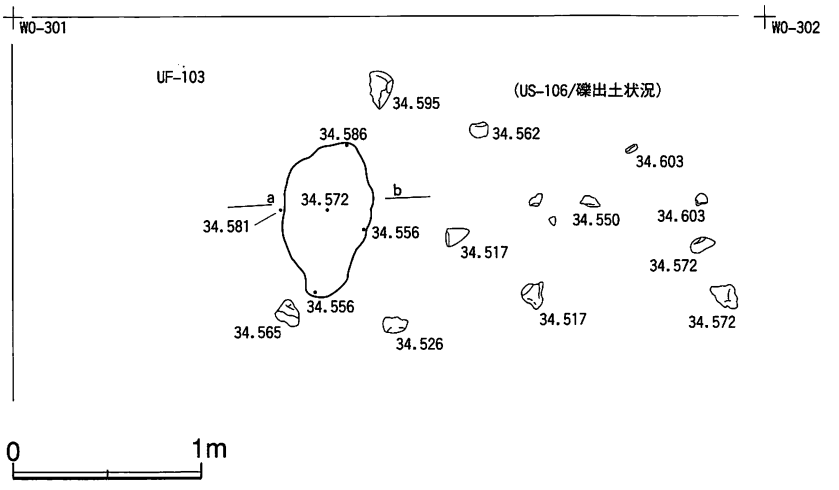


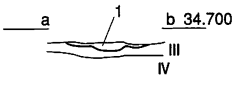
UF-101土層説明
1.焼土　赤褐(Hue5YR4/8)

UF-102土層説明
1.焼土　赤褐(Hur5YR4/8)



UF-103

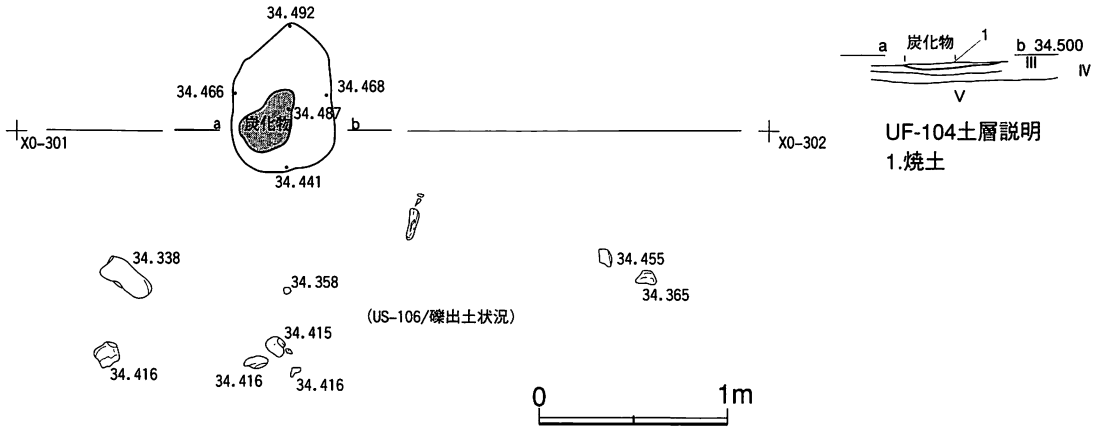




UF-103土層説明
1.焼土

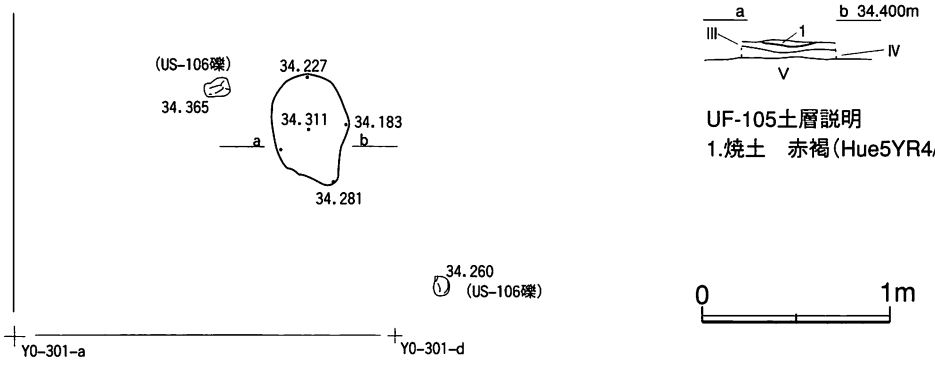
図Ⅲ-38　UF-101・102・103

UF-104



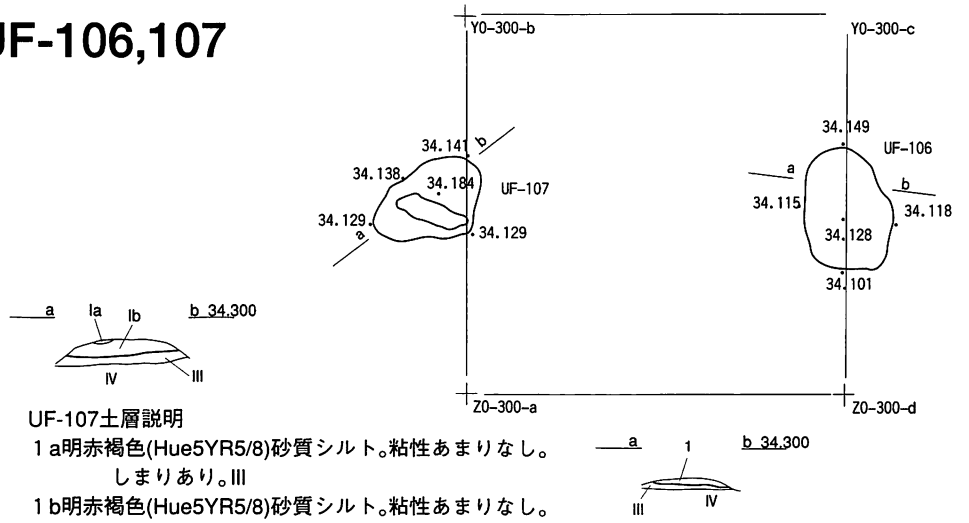
UF-104土層説明
1.焼土

UF-105



UF-105土層説明
1.焼土　赤褐(Hue5YR4/8)

UF-106,107



UF-107土層説明
1 a明赤褐色(Hue5YR5/8)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりあり。III
1 b明赤褐色(Hue5YR5/8)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりあり。III
骨片、炭化物直径2～4㎜含む。

UF-106土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/8)砂質シルト。粘性なし。しまりあり。III
骨片、炭化物含む。

図III -39　UF-104・105・106・107

UF-105（図Ⅲ-39）

位置：X0-301-b　規模：0.60×0.46／×／0.10m

長軸方向：N-4.0°-E

特徴　遺跡東の台地縁辺部で検出された不整形の焼土である。比較的しっかりと焼成されたもので、広い範囲に位置する集石（US-106）の合間に、ほぼ同じ面で形成されており、同じか極近い時期の可能性が高い。また、UF-103,104の検出状況は類似点が大きくこれも同時期と考えられる。周囲の土壙群の確認面は高いレベルに位置するため、これらよりももやや古いと考えられる。明らかに伴う遺物は出土していない。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物から縄文晩期末葉～続縄文時代前葉の可能性が高い。（皆川洋一）

UF-106（図Ⅲ-39）

位置：Y0-300-b,Y0-300-c　規模：0.62×0.42／×／0.09m

特徴　Ⅲ層下位で確認した。近くにUF-107がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　縄文時代晩期以降の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UF-107（図Ⅲ-39）

位置：Y0-299-c,Y0-300-b　規模：0.65×0.47／×／0.09m

特徴　Ⅲ層下位で確認した。近くにUF-106がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　縄文時代晩期以降の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UF-108（図Ⅲ-40）

位置：Z0-297-b　規模：0.69×0.69／×／0.02m

長軸方向：(N-30°-W)

特徴　Ⅳ層上面で骨片、炭化物の集中したプランを確認した。平面は楕円形で掘込みは持たない。Ⅳ層上面もしくはⅢ層中でも最も下位の可能性が高い。

遺物　掲載遺物なし

時期　遺物が出土しておらず、周囲にも伴う遺物がないため不明であるが、縄文時代晩期から擦文時代の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UF-109（図Ⅲ-40）

位置：Y0-302-c,Y0-303-b　規模：0.58×0.30／×／0.04m

長軸方向：N-65°-E

特徴　東側の低湿部で検出されたもので、東向きの段丘崖下に位置する。Ⅰ・Ⅱ層の重機による掘削後にⅢ-1層上面を精査したところ、炭化物が覆い被さった状態で確認された。精査中に部分的に掘り下げてしまったため、東側の広がりは不明である。焼土中からはわずかに骨片が出土している。東側に0.5m程離れたところにUS-104及び土器の集中が検出されている。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土した土器から、続縄文時代以降の可能性がある。（澤田　健）

UF-110（図III -41）

位置：W0-295-b,W0-295-c　規模：(0.66)×(0.38)／(0.23)×(0.41)／(0.19)m

長軸方向：(N-81°　-E)

特徴　Ⅳ層上面で赤褐色土のプランを確認した。4％調査時のトレンチで壊されていたが、平面は長楕円形と推定され、掘込みを持つ可能性もある。Ⅳ層上面もしくはⅢ層中でも最も下位の遺構の可能性が高い。

遺物　掲載遺物なし

時期　遺物の出土状況から縄文時代晩期の遺構の可能性が高い。

UF-111（図III -41 ／ 図版 -10）

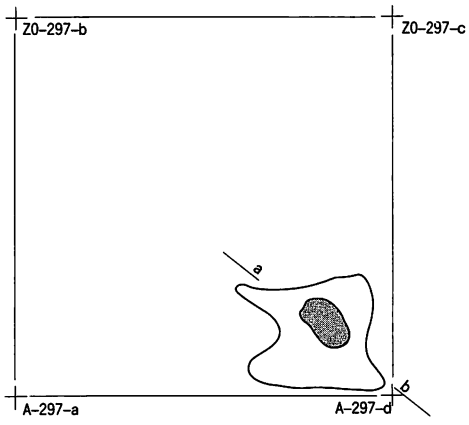
位置：A-290-b　規模：0.50 × 0.27 ／×／ 0.07m

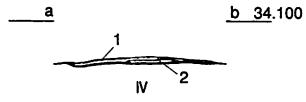
特徴　Ⅲ層を少し掘り下げた段階で確認した。焼土中には炭化物が見られた。約1m程離れてややまとまった続縄文時代の土器が検出されている。

遺物　0149は出土状況を図示したⅥ群a類の深鉢形土器である。

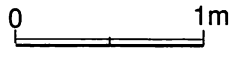
時期　周辺の遺物から続縄文時代の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

UF-108

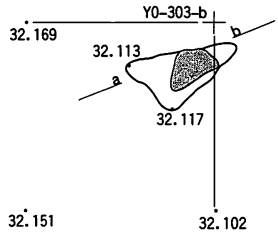


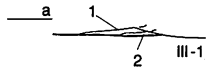


UF-108土層説明
1 黒褐色(Hue7.5YR3/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。III十IV
骨片、炭化物粒直径2～5㎜含む。
2 赤褐色(Hue5YR4/8)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。III十IV

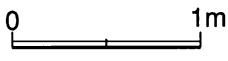


UF-109



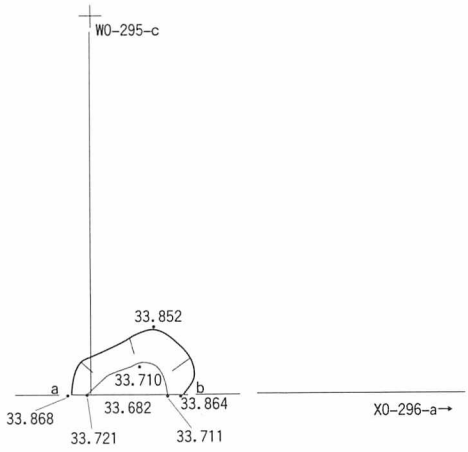


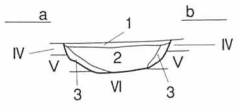
UF-109土層説明
1　炭化物
2　暗褐色(5YR3/3)土　骨片含む



図III -40　UF-108・109

UF-110

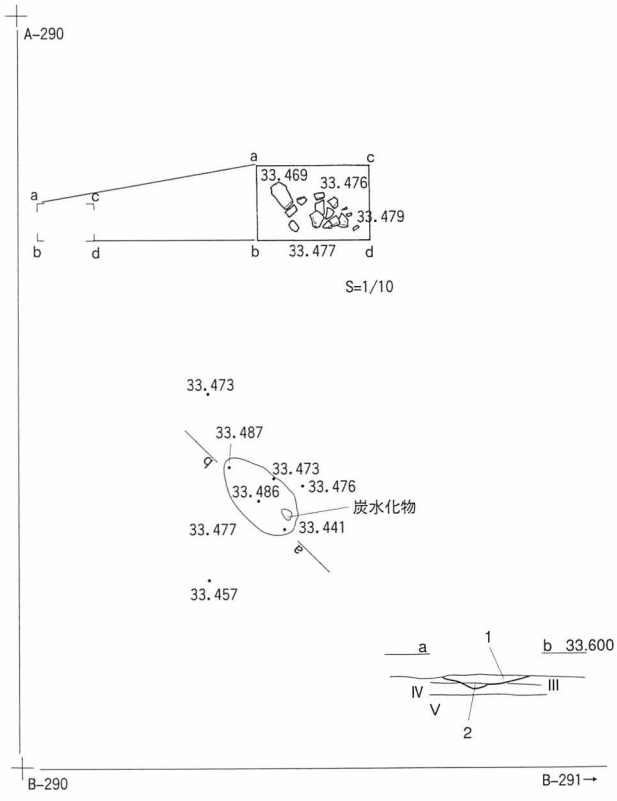




UF-110土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/8)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅲ＋Ⅳ
　焼土粒直径１～２㎜含む。
2 明赤褐色(Hue5YR5/8)粘土質シルト。粘性あり。しまりややあり。Ⅲ
3 褐色(Hue7.5YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅲ＋Ⅴ



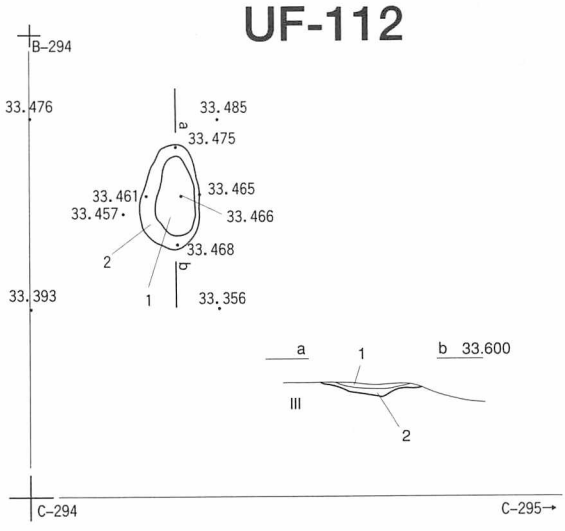
UF-111



UF-111土層説明
1焼土、暗赤褐色土(Hue5YR3/6)
2焼土、極暗赤褐色土(Hue5YR2/4)Ta-cが混じる。

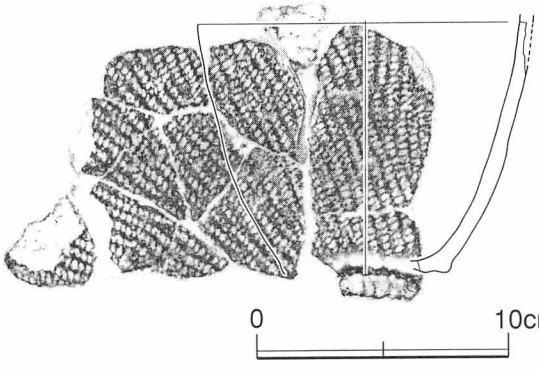


UF-112



UF-112土層説明
1焼土、黒褐色土(Hue5YR2/1)獣骨を多く含む。
2焼土、暗赤褐色土(Hue5YR3/6)





図Ⅲ-41　UF-110・111・112と遺物

UF-112（図Ⅲ-41／図版-10）

位置：B-294-b　規模：0.54×0.32／×／0.06m

特徴　UP-119の周辺を調査し、Ⅲ層を少し掘り下げた際に確認した。獣骨が肉眼でも確認できる程含まれていた。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。UP-119よりも古く、検出された層位および周辺の遺物からあるいは続縄文時代の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

UF-113（図Ⅲ-42）

位置：B-293-b,B-292-c　規模：0.48×0.31／×／0.16m

特徴　Ⅳ層上面において確認した。断面から判断してTa-cを切っていることから、掘込みを持つ焼土と思われる。北側に隣接してUP-131・132があるが、関連を有するかは不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および焼土中の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

UF-114（図Ⅲ-42）

位置：X0-283-b　規模：0.48×0.27／×／0.02m

長軸方向：N-7.5°-E

特徴　遺跡西側の西の沢右岸台地上にUF-115と並んで検出された不整形の焼土である。焼成の及んだ範囲や深度は狭く、極小規模な使用で形成されたと考えられる。伴う遺物は認められないが、周囲にはⅤ群c類の土器が比較的濃くその時代に形成された可能性が高いと考えられる。また、擦文式の一括土器2個体が近い位置から出土しており、やや検出レベルが下であるが関連する可能性もある。

遺物　掲載遺物なし

時期　焼土と周囲の遺物から縄文時代晩期末の可能性が高い。（皆川洋一）

UF-115（図Ⅲ-42）

位置：X0-283-b,Y0-283-a　規模：0.38×0.26／×／0.03m

長軸方向：N-83.0°-E

特徴　遺跡西側の西の沢右岸台地上にUF-114と並んで検出された不整形の焼土である。焼成の及んだ範囲や深度は狭く、極小規模な使用で形成されたと考えられる。遺物はⅤ群c類土器の胴部小破片が出土している、また、焼土中からは動物遺体約1.5gが出土しており、鑑定を行っている。周囲にはⅤ群c類の土器が比較的濃くその時代に形成された可能性が高いと考えられる。また、擦文式の一括土器2個体が近い位置から出土しており、やや検出レベルが下であるが関連する可能性もある。

遺物　掲載遺物なし

時期　焼土と周囲の遺物から縄文時代晩期末の可能性が高い。（皆川洋一）

UF-116（図Ⅲ-42）

位置：A-275-b,A-275-c　規模：0.65×0.35／×／0.08m

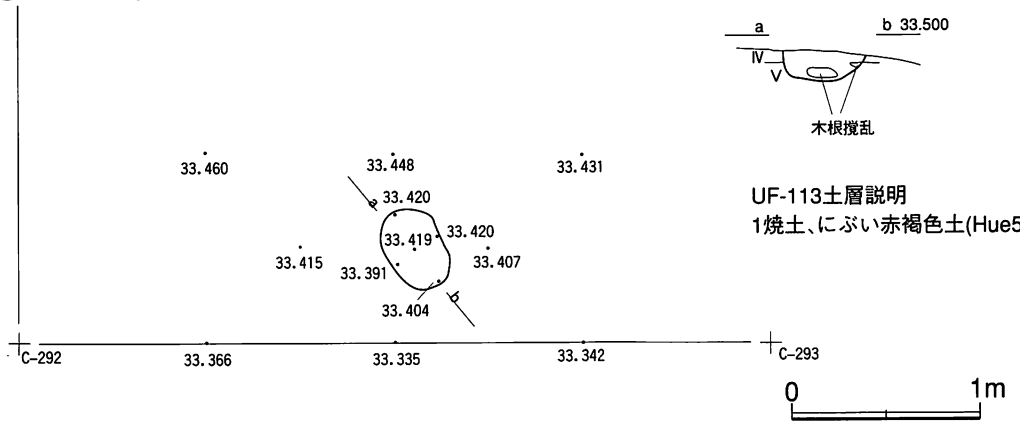
長軸方向：N-84.0°-W

特徴　調査区西側から検出された赤化の弱い焼土である。

遺物　掲載遺物なし

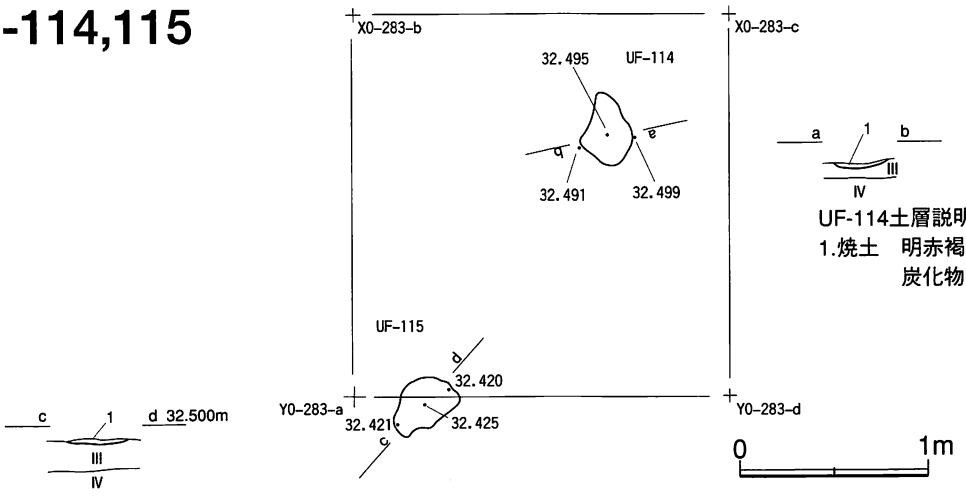
時期　不明（皆川洋一）

UF-113



UF-113土層説明
1焼土、にぶい赤褐色土(Hue5YR4/4)

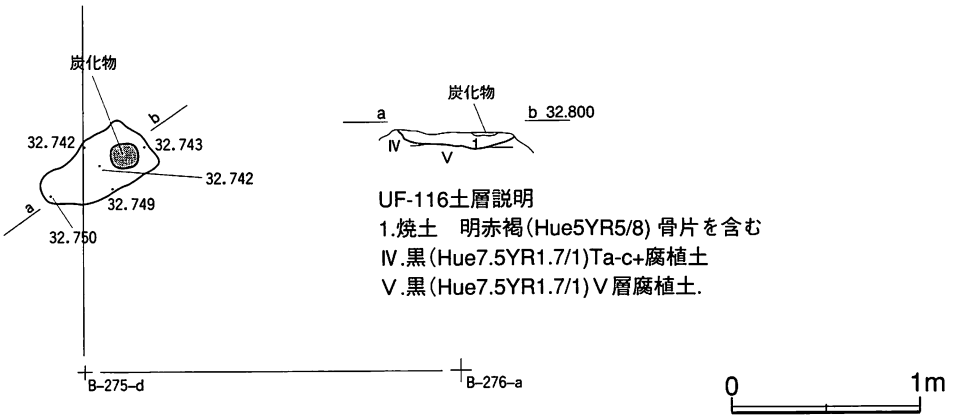
UF-114,115



UF-114土層説明
1.焼土　明赤褐(Hue5YR5/8) 骨片.
炭化物を含む。

UF-115土層説明
1.焼土　明赤褐(Hue5YR5/8)骨片炭
化物を含む。

UF-116



UF-116土層説明
1.焼土　明赤褐(Hue5YR5/8) 骨片を含む
Ⅳ.黒(Hue7.5YR1.7/1)Ta-c+腐植土
Ⅴ.黒(Hue7.5YR1.7/1)Ⅴ層腐植土.

図Ⅲ-42　UF-113・114・115・116

5 . 炭化物集中

UC-101（図Ⅲ-43）

位置：W0-304-b　規模：(0.54)×(0.20)／×／0.03m

長軸方向：N-89°-E

特徴　東側の低湿部で検出したもので、東向きの段丘崖下に位置する。Ⅲ-2層中で確認した。南側は掘り下げてしまったため、全体の広がりは不明である。

遺物　なし

時期　周辺から集中して出土した土器から、続縄文時代以降の可能性がある。（澤田　健）

UC-102（図Ⅲ-43）

位置：Y0-303-d　規模：0.14×0.06／×／不明m

長軸方向：N-66°-W

特徴　UC-102と同じ段丘崖下でⅢ-1層精査中に確認した。

遺物　なし

時期　周辺から集中して出土した土器から、続縄文時代以降の可能性がある。（澤田　健）

UC-103（図Ⅲ-43）

位置：Y0-301-b　規模：0.91×0.68／×／0.14m

長軸方向：N-5°-W

特徴　Ⅲ層中で検出した、薄い炭化物の範囲である。

遺物　なし

時期　不明（皆川洋一）

UC-104（図Ⅲ-43）

位置：A-298-b　規模：0.37×0.19／×／0.03m

長軸方向：(N-49°-W)

特徴　Ⅲ層上面で炭化物の集中を確認した。長楕円形に分布していた。炭化材の破片が多く含まれており、原形はとどめていなかった。

遺物　なし

時期　周囲に伴う遺物がないため不明であるが、縄文時代晩期から擦文時代の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

UC-105（図Ⅲ-43）

位置：B-298-a　規模：0.54×0.42／×／0.02m

長軸方向：N-0°-W

特徴　Ⅲ層上面で炭化物の集中を確認した。不整な楕円形に分布していた。炭化材の破片が含まれており、原形はとどめていなかった。骨片を含んでいる。

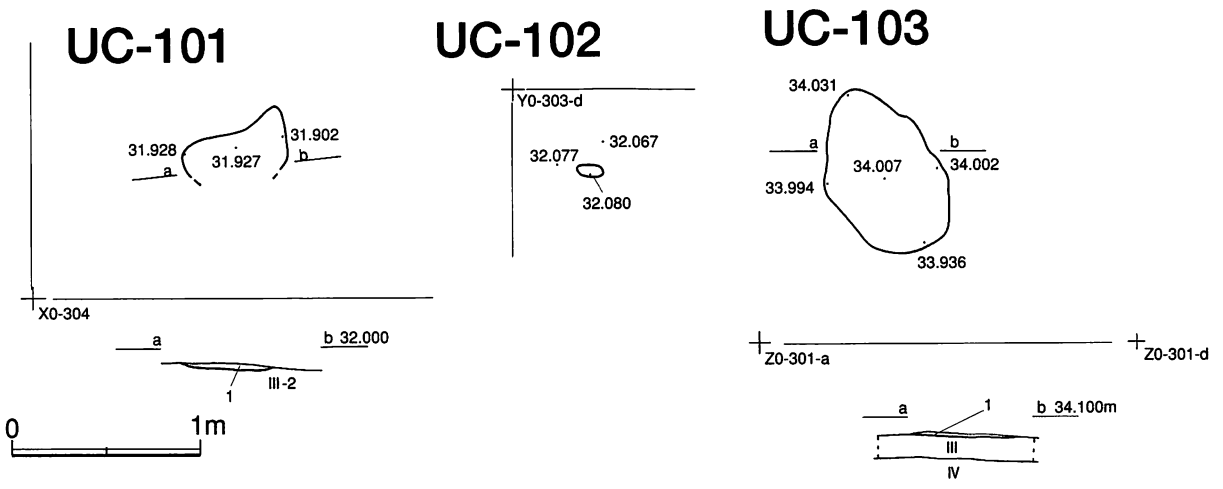
遺物　なし

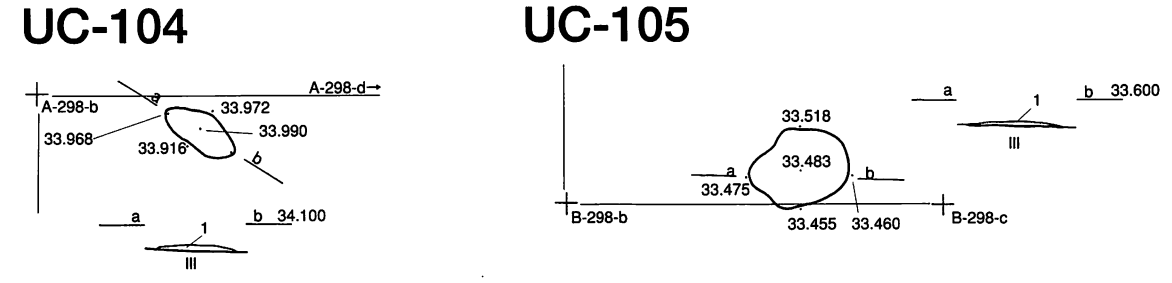
時期　周囲に伴う遺物がないため不明であるが、縄文時代晩期から擦文時代の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

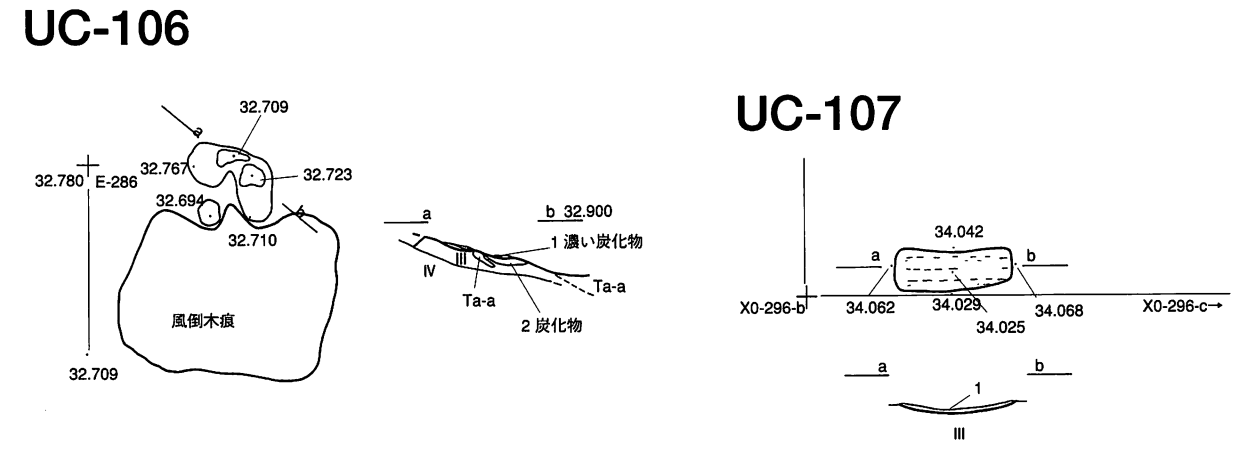
UC-106（図Ⅲ-43）

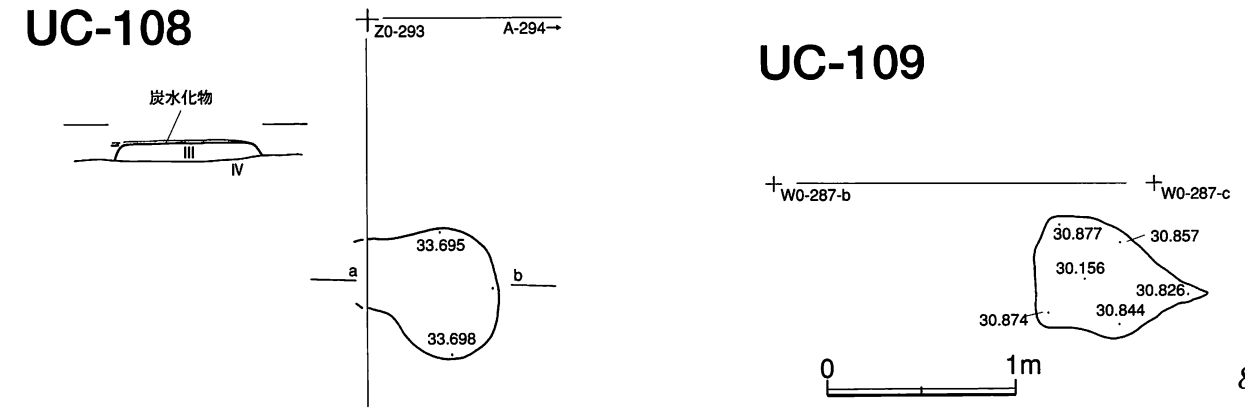
位置：D-286-a,E-286-a　規模：0.14×0.12／×／0.02m

特徴　Ⅲ層の上位において確認した。すぐ近くに風倒木痕があり、正確な規模は不明である。北側に隣接して続縄文時代の後北式土器があった。









図Ⅲ-43　Ⅲ層の炭化物集中（UC）

遺物　なし

時期　隣接して後北式土器の集中があったことから、続縄文時代の遺構と考えられる。(藤原秀樹)

UC-107（図III -43）

位置：X0-296-a　規模：0.61×0.22／×／0.02m

長軸方向：(N-81°-W)

特徴　Ⅲ層上面で炭化物の集中を確認した。そのまま取り上げることは出来なかった。板状の材が炭化したものの可能性が考えられる。

遺物　なし

時期　周囲に伴う遺物がないため不明であるが、縄文時代晩期から擦文時代の遺構と考えられる。(佐藤　剛)

UC-108（図III -43）

位置：Z0-293-a　規模：(0.68)×0.68／×／0.02m

特徴　Ⅲ層を約10㎝程掘り下げたさいに確認した。西半は調査時に削平してしまい、正確な規模は捉えられなかった。炭化物はさほど集中しているわけではなく、散在気味である。

遺物　なし

時期　不明である。検出された層位から縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。(藤原秀樹)

UC-109（図III -43）

位置：W0-287-b,W0-287-c　規模：0.94×0.60／×／m

長軸方向：N-58°-W

特徴　西の沢内の右岸側で検出された不整形の炭化物集中である。沢内右岸部の中段に崩落もしくは埋没土で形成された平坦面に位置しており、炭化物は径1cm以下のものが僅かな厚さをもって集中していた。関連する遺構・遺物はないが、地形と状況から短期間に火を使用した痕跡と思われる。

遺物　ともなっていない。

時期　縄文時代晩期末葉以降と考えられる。(皆川洋一)

6. 集石

US-101（図III -44）

位置：Z0-299-b　規模：0.26×0.22／×／m

長軸方向：N-16.0°-E

特徴　遺跡東側段丘縁辺部で検出された三カ所の集石（US-101～103）の一つである。Ⅱ層除去作業で原位置を損なったものが多く、主に範囲の記録に止めた。三角を描く配置の左下頂部に位置するこの集石は、径が7cm以下の長楕円～楕円形を呈する円礫15点を0.26×0.22mの範囲に置いたものである。観察では意図的な配列など読みとれなかったが、近接する他二カ所の集石も同じレベルと特徴を持つため、同じ時期に同じ目的をもっていたと考えられる。地点を同じくするUF-101,102は検出レベルがやや下方になるのだが、各配置から何らかの関連性が推定される。遺物は、礫以外にⅥ群c類の小破片が出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出層位から縄文時代晩期末～近世の時期に絞られるが、周辺で遺物が出土しているⅥ群a類とⅥ群c類の時期に可能性がある。(皆川洋一)

US-102（図Ⅲ-44）

位置：Z0-299-c,Z0-299-d　規模：0.92×0.25／×／m

長軸方向：N-65.0°-E

特徴　遺跡東側段丘縁辺部で検出された三カ所の集石（US-101～103）の一つである。Ⅱ層除去作業で原位置を損なったものが多く、主に範囲の記録に止めた。三角を描く配置の左下頂部に位置するこの集石は、径が7cm以下の長楕円～楕円形を呈する円礫14点を細長い0.92×0.25mの範囲に置いたものである。観察では意図的な配列など読みとれなかったが、近接する他二カ所の集石も同じレベルと特徴を持つため、同じ時期に同じ目的をもっていたと考えられる。地点を同じくするUF-101,102は検出レベルがやや下方になるのだが、各配置から何らかの関連性が推定される。礫以外の遺物はみられない。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出層位から縄文時代晩期末～近世の時期に絞られるが、周辺で遺物が出土しているⅥ群a類とⅥ群c類の時期に可能性がある。（皆川洋一）

US-103（図Ⅲ-44）

位置：Z0-299-c　規模：0.55×0.11／×／m

長軸方向：N-74.0°-W

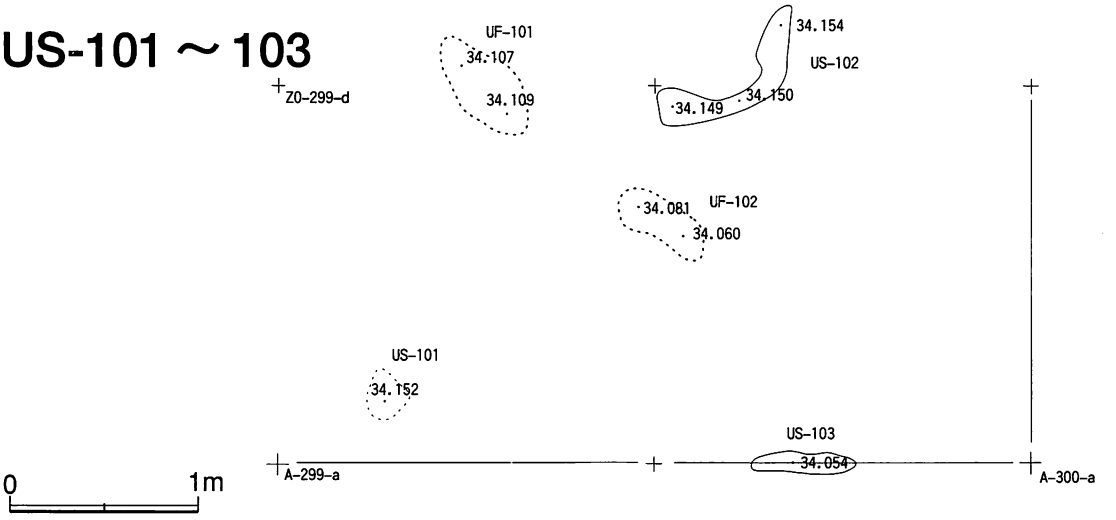
特徴　遺跡東側段丘縁辺部で検出された三カ所の集石（US-101～103）の一つである。Ⅱ層除去作業で原位置を損なったものが一番多くそれゆえ本遺構に伴う礫の点数も少なくなっている。これも主に範囲の記録に止めた。三角を描く配置の左下頂部に位置するこの集石は、径が7cm以下の長楕円～楕円形を呈する円礫4点以上をを細長い0.55×0.11mの範囲に置いたものである。観察では意図的な配列など読みとれなかったが、近接する他二カ所の集石も同じレベルと特徴を持つため、同じ時期に同じ目的をもっていたと考えられる。地点を同じくするUF-101,102は検出レベルがやや下方になるのだが、各配置から何らかの関連性が推定される。礫以外の遺物はみられない。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出層位から縄文時代晩期末～近世の時期に絞られるが、周辺で遺物が出土しているⅥ群a類とⅥ群c類の時期に可能性がある。（皆川洋一）

US-104（図Ⅲ-45）

位置：Y0-303-b　規模：0.66×0.35／×／m



図Ⅲ-44　US-101～103

6　集石

特徴　東側低湿部の段丘崖下で検出されたものである。東向きの段丘崖に沿って、北側にも拳大以上の大きさの礫が点在している。そのなかでも集中した状態で出土したため、集石の可能性があるものとして扱った。また周囲には、石器等のほか数個体分のつぶれた状態の土器が出土している。本遺構も含めこれらの遺物が原位置を保ったものかどうかは、不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から集中して出土した土器から、続縄文時代以降の可能性がある。（澤田　健）

US-105（図III -45）

位置：Y0-300-b,Z0-300-a　規模：0.5×0.3／×／m

特徴　遺跡東側段丘縁辺部で検出された集石の一つである。径が10cm程からそれ以下の不整の楕円形を呈する円礫21点を0.5×0.3mの範囲に置いたものである。観察では意図的な配列など読みとれなかったが、近接するUF-106,107とは検出レベルがほぼ同じなことから何らかの関連性があると考えられる。遺物は礫以外にみられないが周囲からは、V群c類、VI群a類土器が多数、VI群c類土器が少量出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から集中して出土した土器から、続縄文時代以降の可能性がある。（皆川洋一）

US-106（図III -45／図版 -123～125）

位置：W0-301-a,W0-301-b,W0-301-c,W0-301-d　規模：11.76×4.00／×／m

特徴　遺跡東側段丘縁辺部で検出された広い範囲を持つ集石である。三角を描く配置の左下頂部に位置するこの集石は、径が人頭大以下の不整楕円形を呈する円礫44点（石器を含む）を11.76×4.00mの範囲に置いたものである。観察では意図的な配列など読みとれなかったが、近接する土壙群やUF-103～105は検出レベルが近いことから、何らかの関連性があると考えられる。礫にはたたき石、台石が含まれている。それ以外ではドリル、Rフレイク、石核が出土している。

遺物　1はドリル。先端部を欠損している。2は石核。両面に、長軸方向上下を主体とする剥離痕が認められる。石英岩製。3は台石。表面の中央部付近にたたき痕をもつ。また長軸方向に斜交する擦痕が若干認められる。砂岩製。

時期　周囲の包含層からはVI群a類土器が多数出土しており、この時期に配置された可能性が高い。（皆川洋一）

US-107（図III -46／図版 -10）

位置：A-295-c,A-295-d　規模：0.20×0.15／×／m

特徴　遺跡東側の台地中央で検出された集石で、長楕円の円礫が極小範囲に積み重なっていた。性格は不明である。同じ形態の円礫が散点的にではあるがすぐ近くのUH-101覆土上面で出土している。

遺物　掲載遺物なし

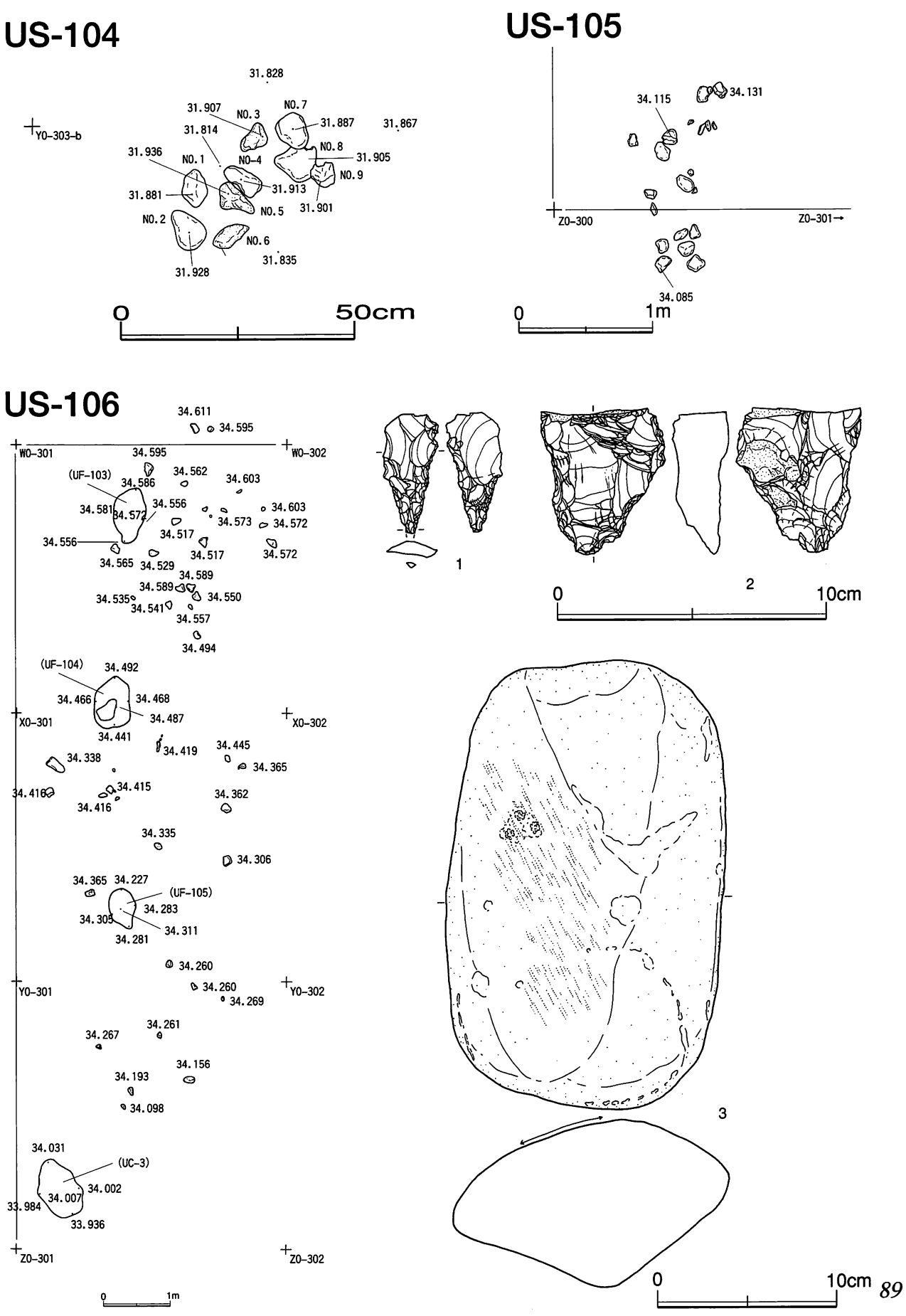
時期　VI群c類土器とほぼ同じレベルなためこれらと同じ時期と考えられる。（皆川洋一）

US-108（図III -46）

位置：B-294-a,B-294-d　規模：1.15×0.46／×／m

特徴　Ta-aを除去したさいに、UP-119の壙口部において、鉄製の鍬先とともに検出された。偏平な小円礫を主体とする礫集中である。一部はUP-119の覆土中からも出土した。検出状況からUP-119に伴うものと考えられる。

遺物　掲載遺物なし



図Ⅲ-45　US-104・105・106 と遺物

時期　UP-119 に伴うものとすると、擦文時代の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

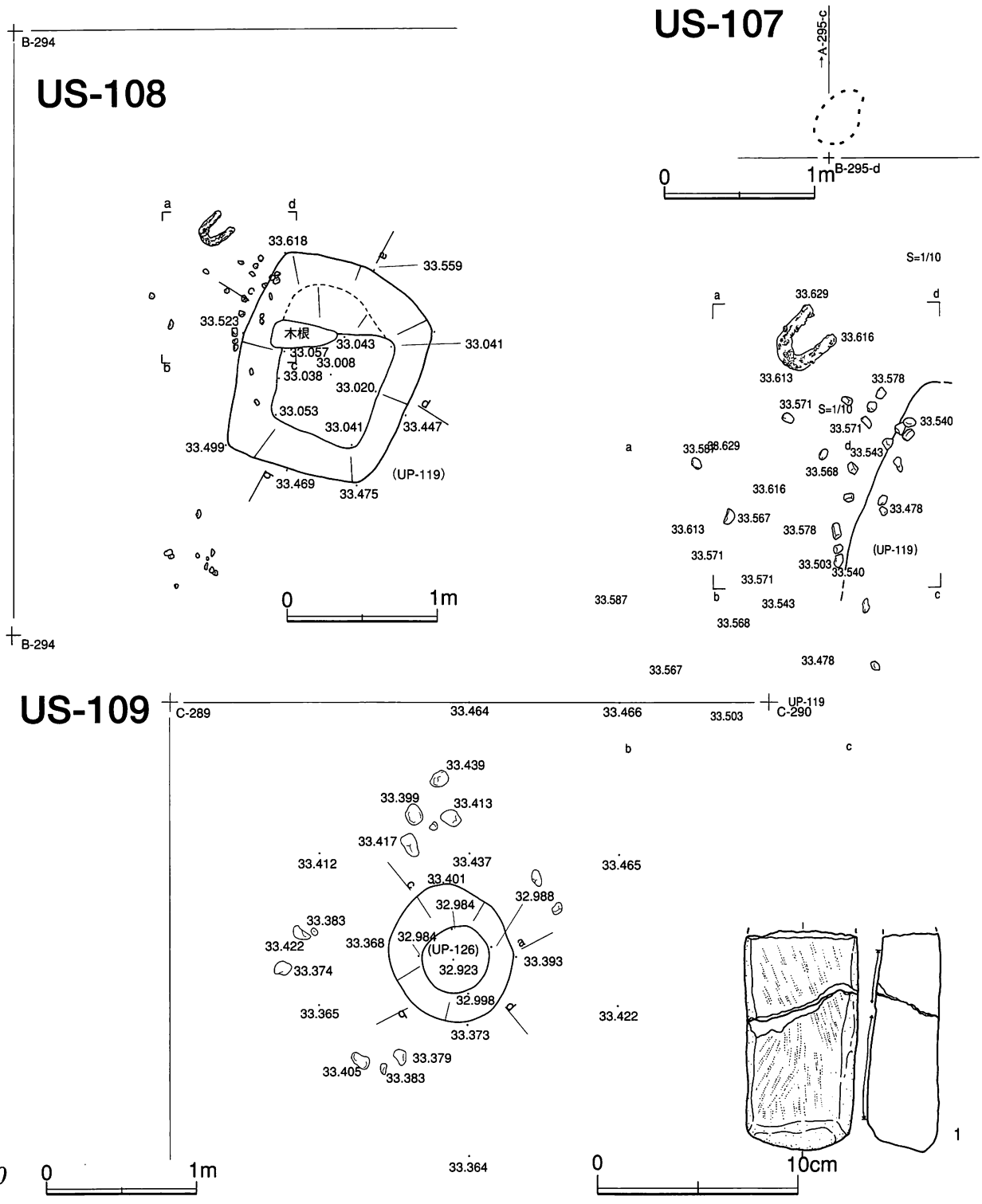
US-109（図Ⅲ -46 ／ 図版 -123 ～ 125 ）

位置：C-289-　規模：2.50 × 1.97 ／ × ／ m

特徴　Ⅲ層中で確認した。UP-126 の周囲に散在しており UP-126 に伴うものと思われる。

遺物　1 は砥石。角礫を素材とし、表面におよそ平坦なすり面をもつ。擦痕は長軸方向に認められる。欠損しており、2 点が接合している。砂岩製。

時期　検出された層位および周辺の遺物から続縄文時代の遺構と推測できる。（藤原秀樹）



図Ⅲ -46　US-107・108・109 と遺物

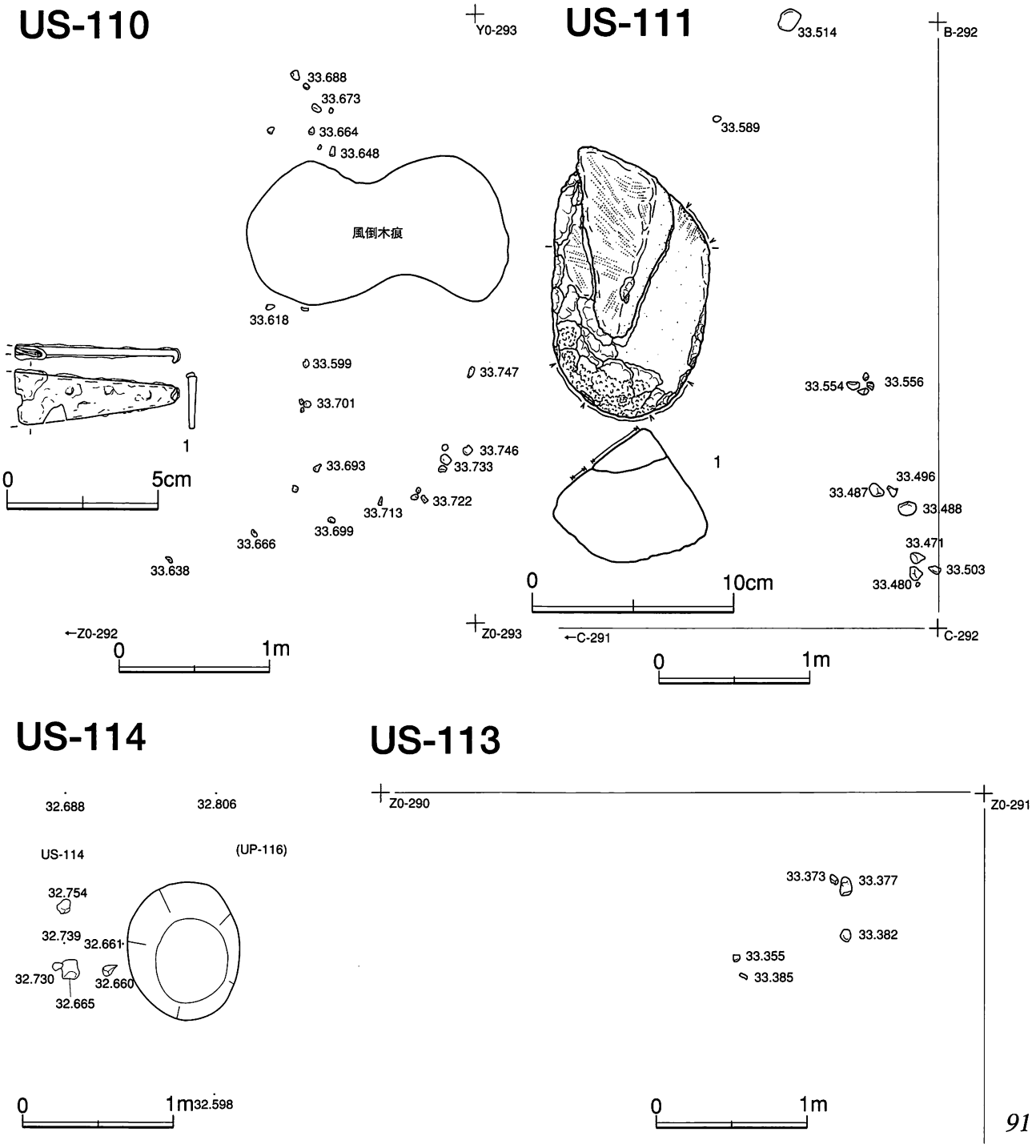
US-110（図Ⅲ-47 ／図版-148）

位置：Y0-292-c,Y0-292-d　規模：3.20 × 1.13 ／×／ m

特徴　Ⅲ層を少し掘り下げたさいに、偏平な小円礫を主体とした礫が散在しているのを確認した。その中に、マキリの柄の部分があった。近くに風倒木痕があり、大きく２分されるが、本来は一連の集石であろう。周辺を精査したが、土壙等は検出できなかった。

遺物　１は平棟の刀子。目釘孔部分から刃部方向が欠損している。茎先端がおよそ直角に折れ曲がっている。

時期　マキリの柄が集石と一体のものと考えると、アイヌ文化期の遺構と推測できる。（藤原秀樹）



図Ⅲ-47　US-110・111・113・114と遺物

US-111（図III -47 ／ 図版 -1123 ～ 125 ）

位置：B-291-c,B-291-d　規模：3.38 × 0.21 ／×／ m

特徴　Ⅲ層を少し掘り下げたさいに確認した。やや大きめの礫で、焼成を受け割れていると思われるものもあった。周辺を精査したが、土壙等は検出できなかった。

遺物　1は砥石。角礫を素材とし、およそ平坦なすり面をもつ。また下端部にたたき痕をもつ。 砂岩製。

時期　不明である。検出された層位および周辺の遺物から縄文時代晩期末葉もしくは続縄文時代の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

US-112（図III -25 ）

位置：D-289-　規模：1.01 × 0.41 ／×／ m

特徴　Ⅲ層を少し掘り下げた際に確認した。円礫で割れているものもある。北西方向に約 1 m程離れてUP-129 がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。あるいは検出された層位および周辺の遺物から縄文時代晩期末葉もしくは続縄文時代の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

US-113（図III -47 ）

位置：Z0-290-d　規模：0.45 × 0.18 ／×／ m

特徴　Ⅲ層を少し掘り下げたさいに確認した。礫は 3 個がまとまっているだけで、周辺に他の遺構は確認できなかった。あるいは、人為的な集石ではないかもしれない。

遺物　掲載遺物なし

時期　人為的な集石とすると、その検出された層位および周辺の遺物から続縄文時代の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

US-114（図III -47 ）

位置：E-285-d　規模：0.59 × 0.44 ／×／ m

特徴　Ⅲ層の下位において、割れた円礫のまとまりを確認した。東側のすぐそばにUP-116 があり、関連するものと考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。UP-116 に関連するものと考えられるならば続縄文時代の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

Ⅳ Ta-c 下位の遺構

1．竪穴住居跡

LH-001（図Ⅳ-2 ／ 図版 -79 ～ 106，126 ～ 130）

位置：C-274,C-275,D-274,D-275　規模：6.58 × 4.16 ／ 3.94 × 5.92 ／ 0.42m

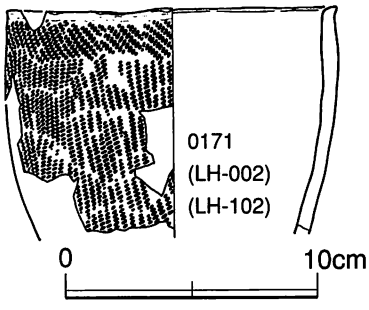
長軸方向：N-23.0° -W

特徴　94年度の調査で一部が報告されたものの全体調査を行った。LH-002が上位に、LH-006が下位に位置しており、三軒の住居跡が重複している。本遺構はLH-002とともに埋没過程にあるLH-006の窪みに浅く掘り込んだもので、壁は脆弱で立ち上がりや平面形はやや不明瞭である。平面形は不整の楕円形を呈し床と判断される面にはやや凹凸が認められるが、中央から右よりの位置に炉跡と考えられる焼土が検出されている。特徴的なのは炉跡を取り巻く様子で検出された盛り土である。Ⅶ層の恵庭ローム質土を主体に盛られたもので、堅く締まりもあり床面に盛り土されたと判断した。用途・目的は不明である。柱穴は床面に検出された小径プランが相当すると考えられるが、床がLH-006覆土の黒色土であり断ち割りの断面が不明瞭なため確かな検出とならなかった。遺物は覆土と床面から出土している。

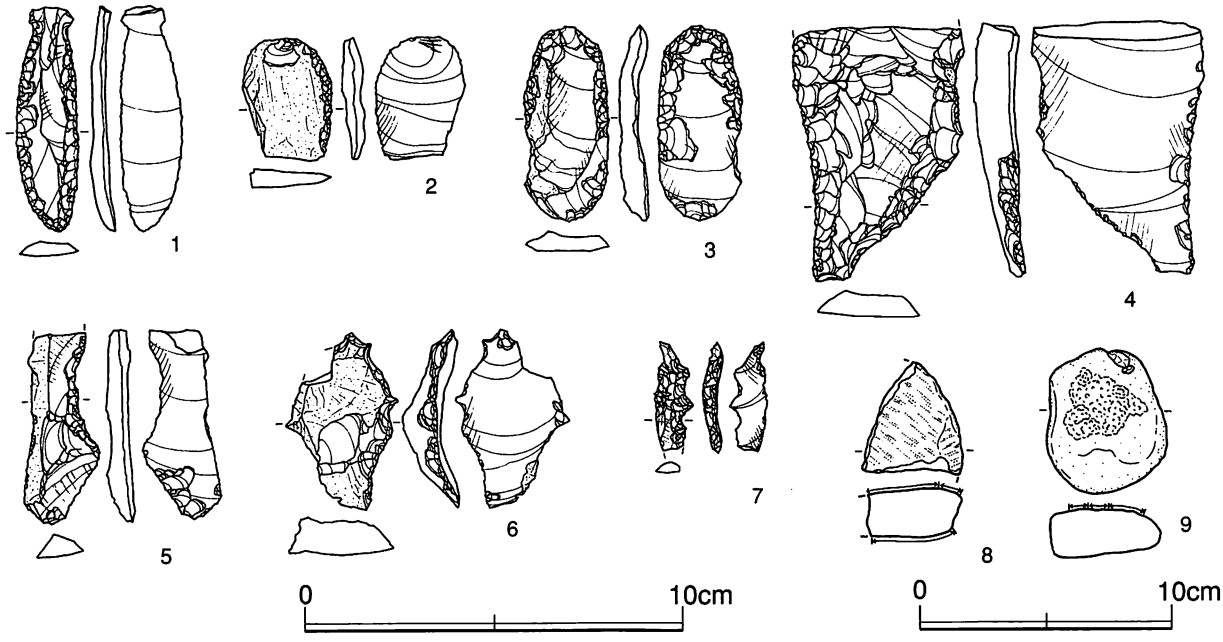
遺物　0171はⅤ群c類のそれぞれ深鉢形土器である。1はつまみ付ナイフ。片面周縁加工のもの。頁岩製。2 ～ 7はスクレイパー。黒曜石製でる。2は側縁のみ加工され、礫表皮を残す。刃部は外湾している。3は右側縁に直線的な刃部をもつ。4 ～ 6は内湾した刃部をもつ。4は下部に若干外湾した急角度の刃部も認められる。7は一側縁に抉りのある刃部をもつ。8は砥石。両面に平坦なすり面をもつ。欠損している。9はたたき石。片面中心部にたたき痕が認められる。8、9は砂岩製。

時期　重複関係と床面の遺物から縄文時代晩期末葉と考えられる。

（皆川洋一）

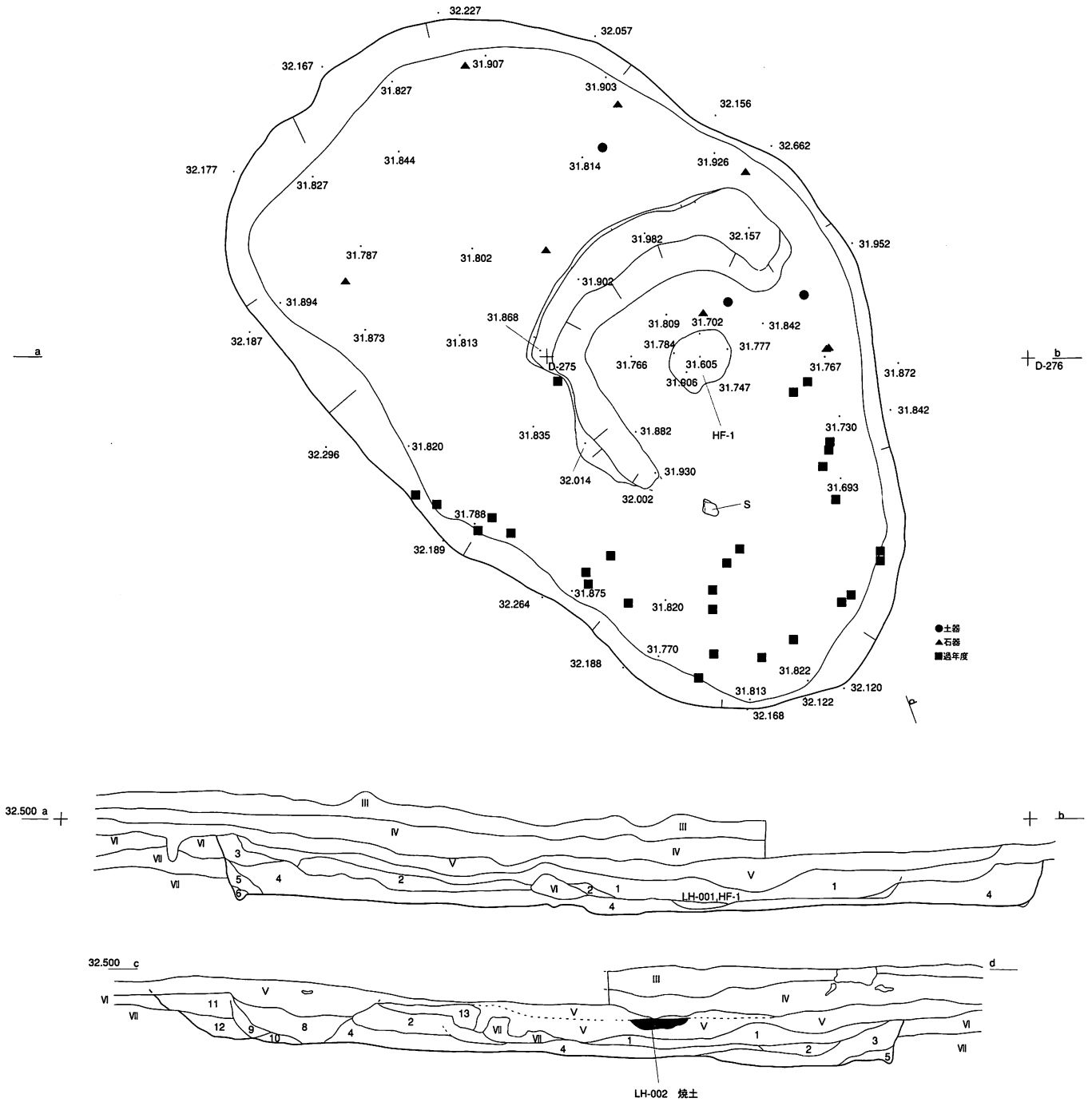


LH-001



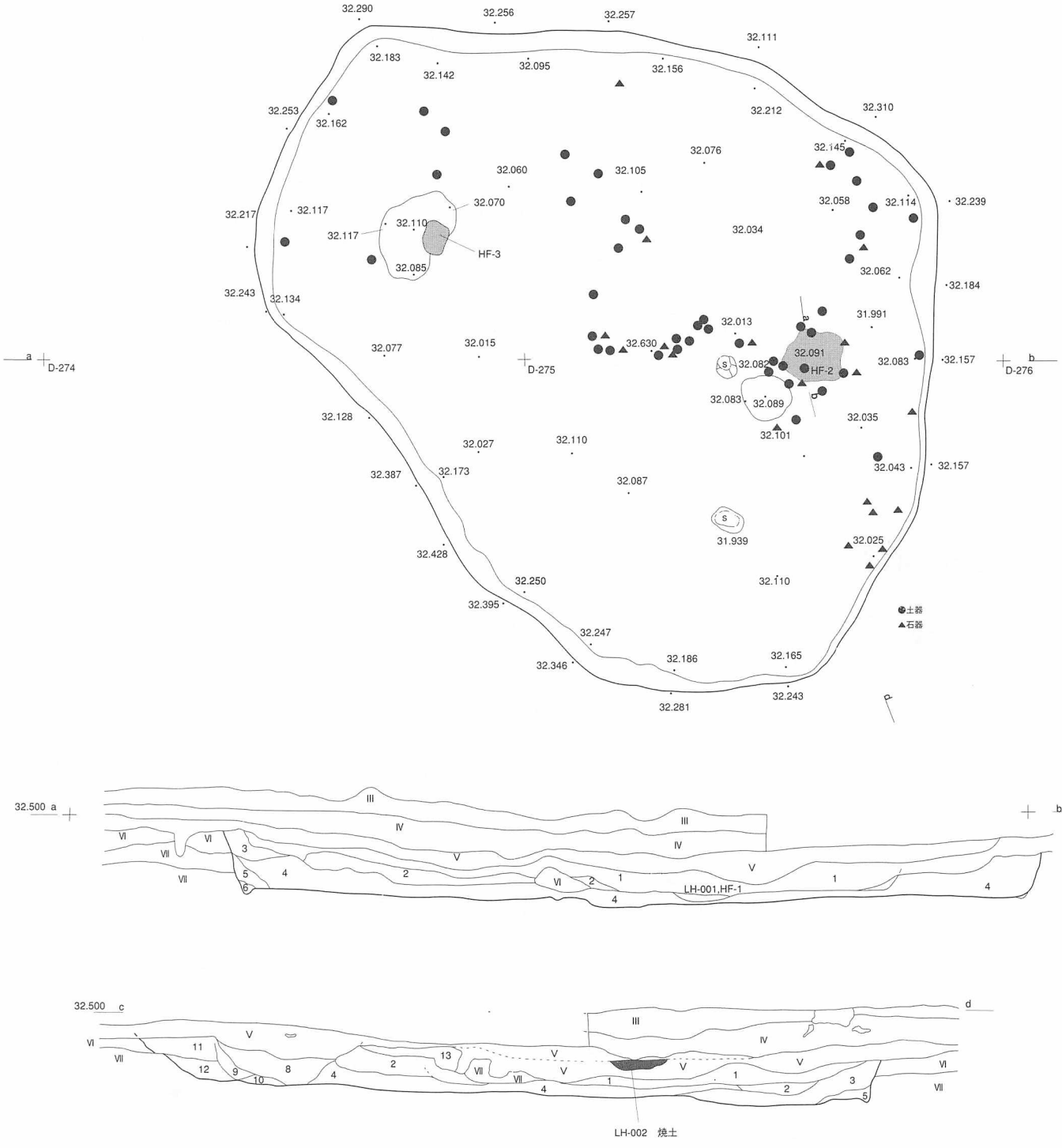
図Ⅳ-1　LH-001の遺物

LH-001



LH-001,002,006土層説明
1.暗褐(Hue10YR3/4)Ⅳ
2.黒　(Hue10YR1,7/1)Ⅴ
3.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅵ＞Ⅴ≫Ⅵ
4.黒褐(HueYR2/2)Ⅴ＞Ⅴ＞Ⅵ
*3.4層は埋め戻されていると考えられる。

図Ⅳ-2　LH-001



LH-001,002,006土層説明
1.暗褐(Hue10YR3/4)Ⅳ
2.黒　(Hue10YR1,7/1)Ⅴ
3.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅵ＞Ⅴ≫Ⅵ
4.黒褐(HueYR2/2)Ⅴ＞Ⅴ＞Ⅵ
*3.4層は埋め戻されていると考えられる

図Ⅳ-3　LH-002

LH-002（図 Ⅳ-3／図版 -79～106，126～130）

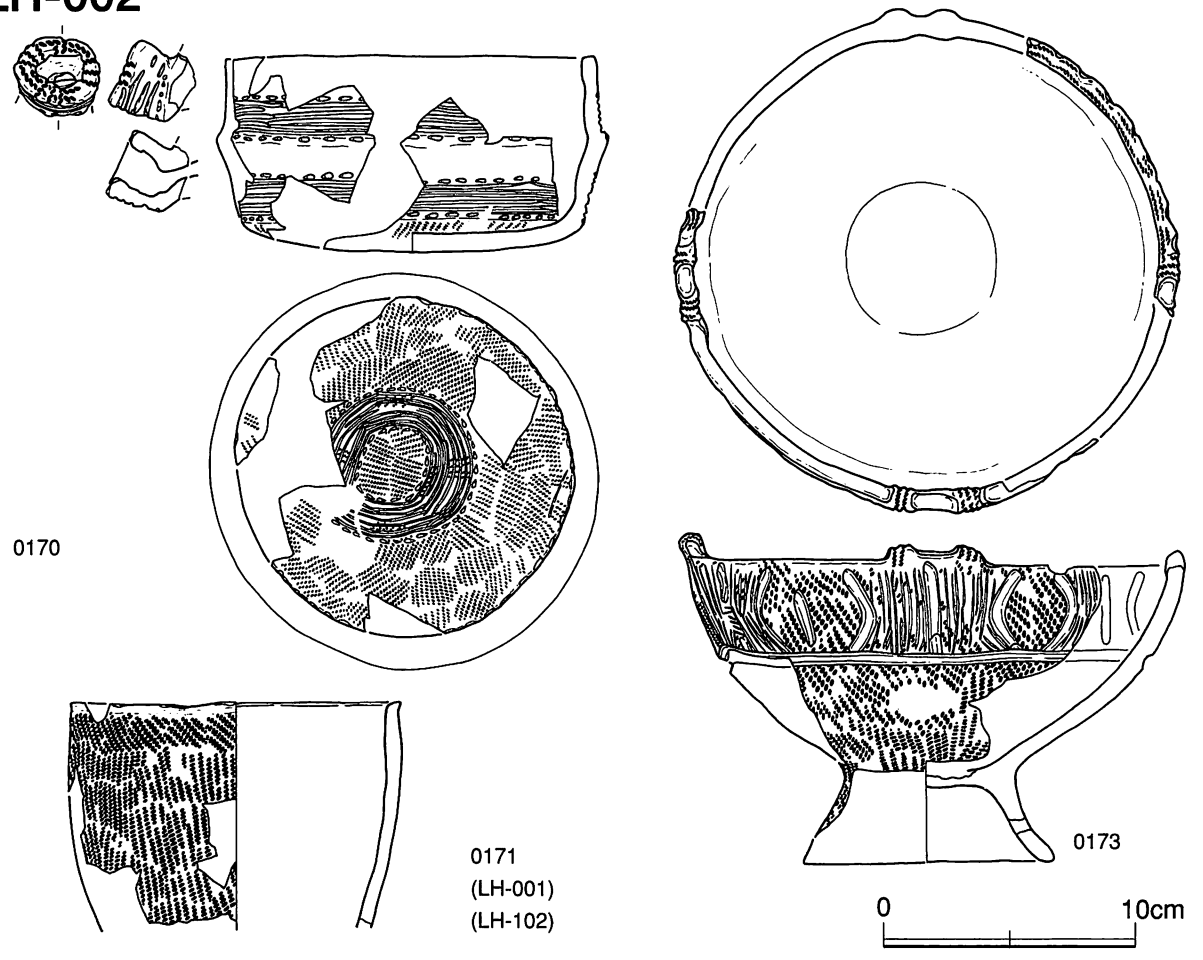
位置：C-274,C-275,D-274,D-275　規模：6.54×4.96／4.68×6.38／0.14m

長軸方向：N-16.5°-W

特徴　94年度の調査で一部が報告されたものの全体調査を行った。下位にLH-001とLH-006が位置しており、三軒の住居跡が重複している。本遺構はLH-001とともに埋没過程にあるLH-006の窪みに浅く掘り込んだもので、壁は脆弱で立ち上がりや平面形はやや不明瞭である。平面形は南側が膨らむ不整の楕円形を呈し床と判断される面にはやや凹凸が認められる。床面からは炉跡と考えられる焼土が中央部を挟んで三カ所が検出されている。図の右側に位置に検出されたHF-101、102の周辺には94年度報告の大型礫を使用した台石、砥石が位置している。左側のHF-3に方は周辺と一部重複してチップ・フレイク集中が検出されている。柱穴は床面に検出された小径プランが相当すると考えられるが、床がLH-006覆土の黒色土であり断ち割りの断面が不明瞭なため確かな検出とならなかった。遺物は覆土と床面から出土している。

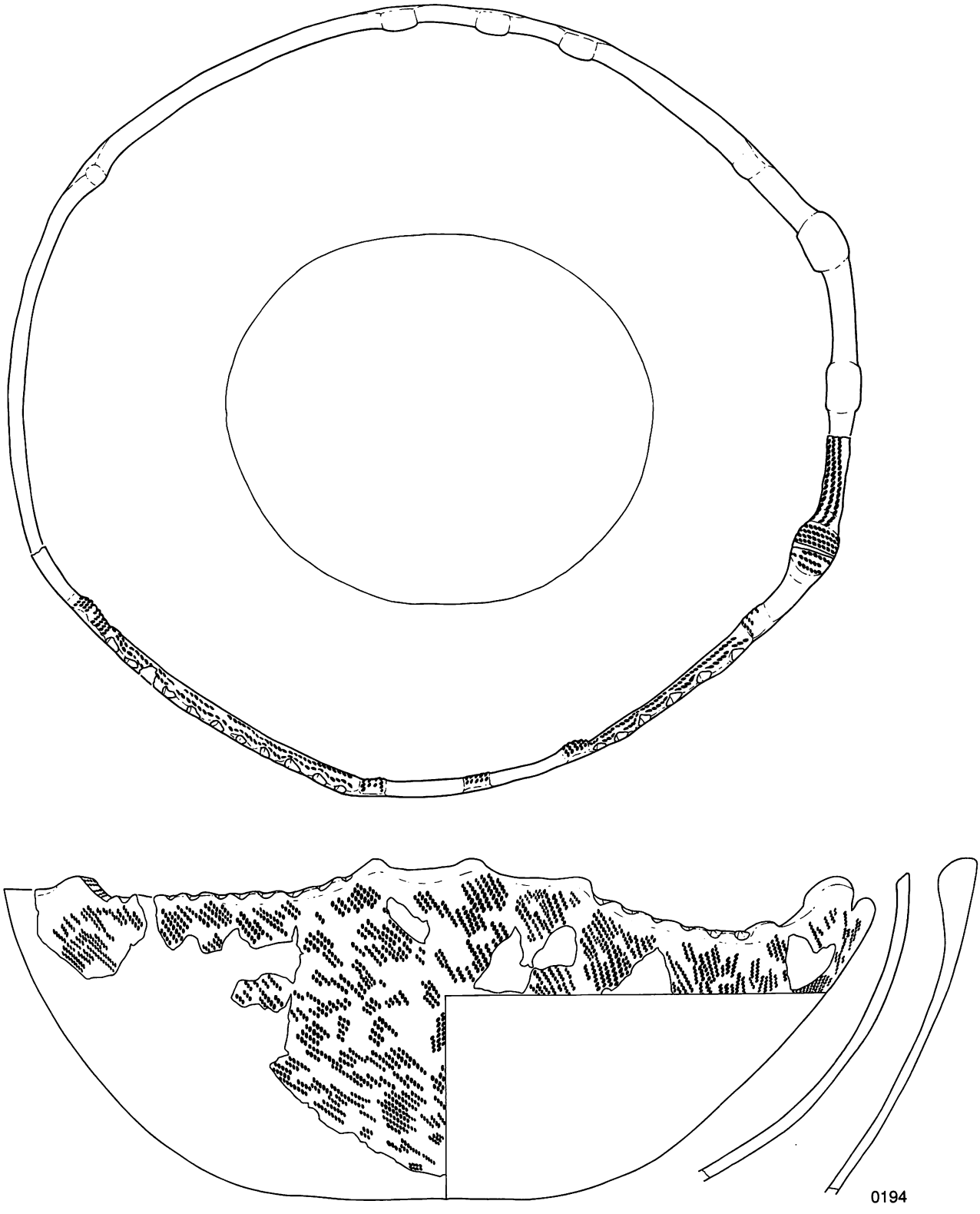
遺物　0171,5006,5009,5029は深鉢形、0173,0194,5036,5013,5027,5031は浅鉢形、0170は注口土器である。全てⅤ群c類である。1・2は有茎凸基の石鏃。3はスクレイパー。側縁に直線的な刃部をもつ。いずれも黒曜石製。

時期　重複関係と床面の遺物から縄文時代晩期末葉と考えられる。（皆川洋一）



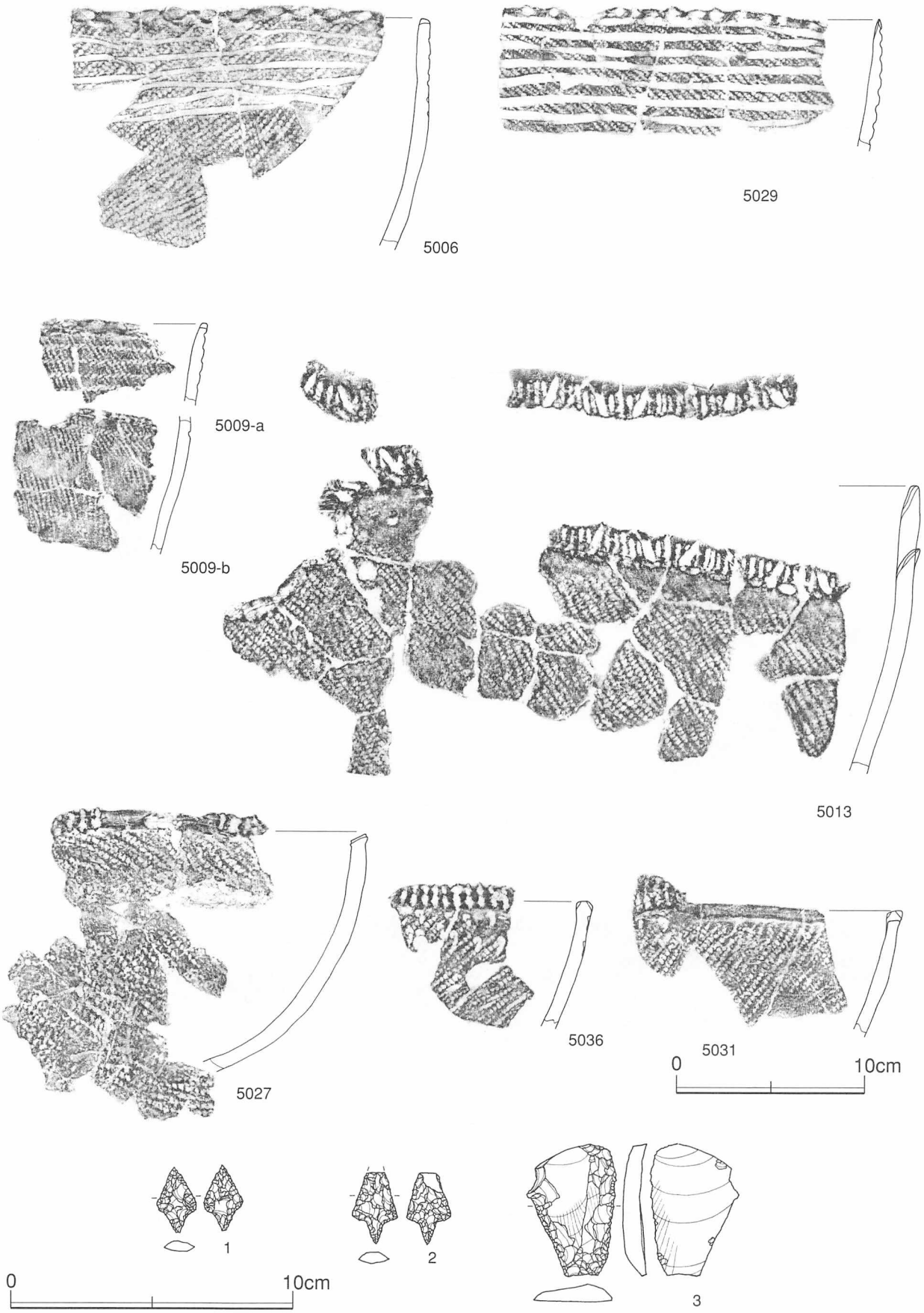
図Ⅳ-4　LH-002の遺物（1）

LH-002



図Ⅳ-5　LH-002 の遺物（2）

LH-002



図Ⅳ-6　LH-002 の遺物（3）

LH-006（図Ⅳ-7／図版-12・13・37，38，107～123，126～130）

位置：C-274,C-275,D-274,D-275　規模：7.04×5.36／4.90×6.48／0.54m

長軸方向：N-11.7°-W

特徴　UH-101、102、LP-219と重複する最も下位の住居跡である。平面は大型の隅丸長方形を呈し、深く掘込んだ平坦な床面から、壁は鋭角に立ち上がる。床と壁の変換部分には平均5㎝程の深さを持つ周溝が巡らされている。床面中央からやや南側よりの位置に炉跡と考えられる赤褐色のローム質土が確認されている。11箇所の柱穴のうち、HP-1,2,4,11は径が15～20㎝、深さが40㎝前後あり配置から主柱穴と考えられる。床面から出土した遺物の多くはフレイク類で炉跡周辺から南東側で集中する様子がうかがえる。また、翡翠製の大珠がやはり南東側の壁際床面から出土している。土器は先回の調査と同様に少なく、Ⅰ群a類、Ⅳ群a類が少量出土している。

遺物　1002～1005は深鉢形と考えられるⅠ群a類土器、1030は深鉢形のⅠ群b-1類土器、3047,40594は深鉢形のⅣ群a類土器である。1は石鏃。周縁のみ加工された未製品と思われるもの。湾曲した剥片を素材とする。2～5はスクレイパー。2～4は外湾した刃部をもつ。2は上下端にやや急角度の刃部をもつ。5は内湾および抉りのある刃部をもつ。1～5は黒曜石製。6は石斧。側縁は敲打および剥離調整、刃部は剥離によって調整されている。未製品と思われる。泥岩製。7は砥石。両面に凹状の重複したすり面をもつ。砂岩製。8はすり石。断面三角形状礫の稜をすり面とするもの。すり面の断面形はおよそ平坦である。泥岩製。9は石製品。全面研磨された丸玉である。およそ中心部が両面から穿孔されている。石材はヒスイと推定される。詳細はⅧ章－2をご覧いただきたい。

時期　床面の土器と、遺構の形態から縄文時代後期前葉と考えられる。（皆川洋一）

LH-101（図Ⅳ-9／図版-12・39，40，107～123，79～106，126～130）

位置：W0-295-c,W0-295-d,W0-296-a,W0-296-b　規模：(4.16)×4.70／4.34×(3.85)／0.50m

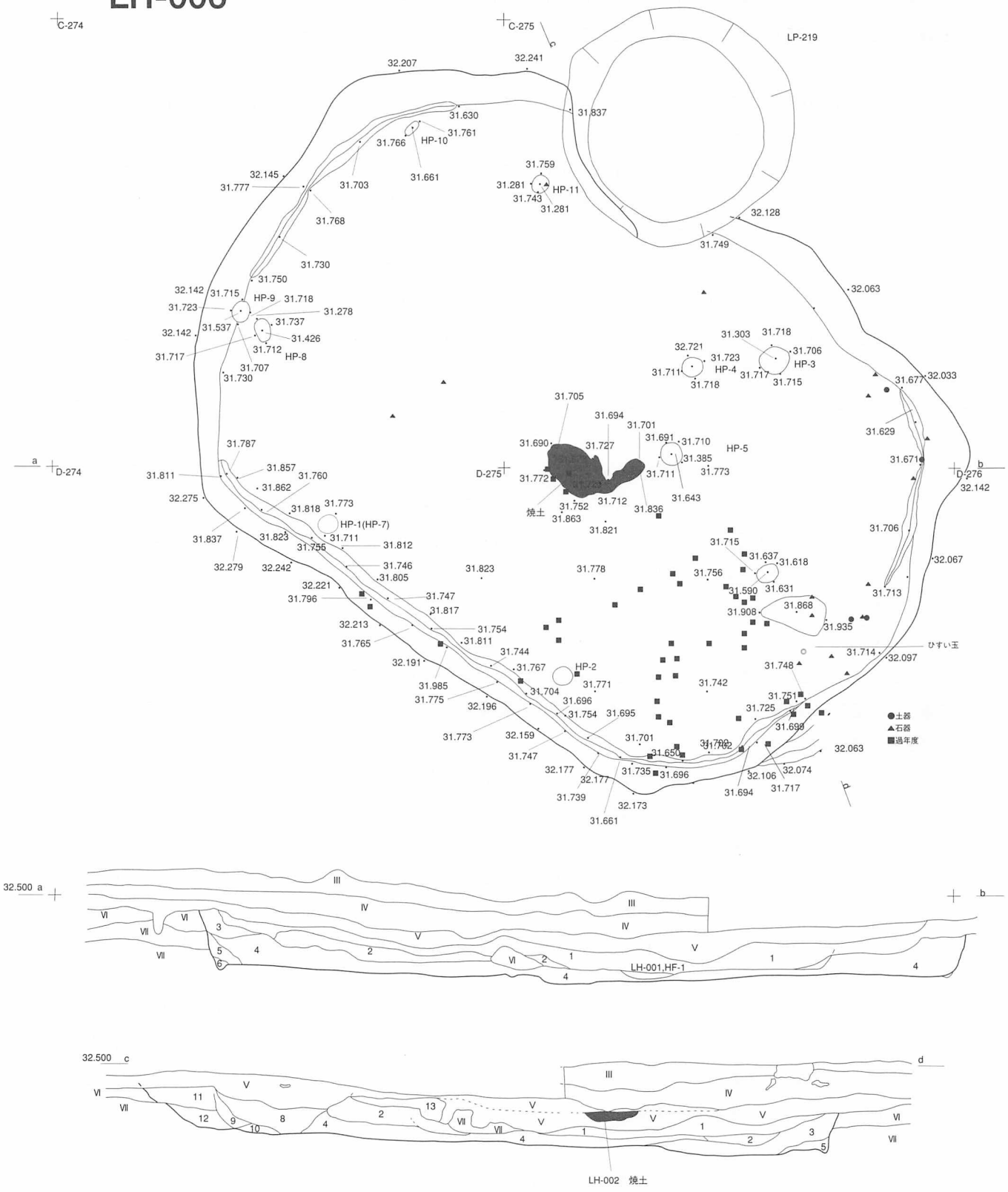
長軸方向：N-65°-E

特徴　Ⅴ層下位で黒色土のプランを確認した。南西側の壁は撹乱のため壊されており明瞭ではないが、平面は多角形（五角形？）で、壁は床面から急に立ち上がる。床面はやや北側が高くなるがほぼ平坦である。堆積状況はレンズ状を呈し自然堆積と考えられる。堆積状況から掘込み面はⅤ層中と考えられる。床面には焼土がなく、HP-1のみが見つかっている。深さは約42㎝で、この遺構に伴う柱穴と考えられる。床面はさらに5㎝程掘り下げて確認に努めたが、柱穴等は確認出来なかった。周囲には同一層位で確認した掘り方を持つ柱穴と考えられるLP-110があるが、関係は不明である。規模、形態から住居跡と考えたが、性格不明の遺構である。

遺物　すべて覆土中の出土である。2003,2004,2008はⅡ群a類の深鉢形土器、3043,3044はⅢ群a類の深鉢形土器、4539はⅣ群b類の深鉢形土器、0117はⅤ群c類の浅鉢形土器である。1・2は石鏃。1は無茎平基の三角形鏃。頁岩製。2は有茎凸基のもの。3・4はつまみ付ナイフ。いずれも周縁加工のもので、直線的な刃部をもつ。4は主剥離面の下部も剥離調整されている。バルブ部分の厚みを除去するためと考えられる。2～4は黒曜石製。5はたたき石。両面の中央部および側縁部にたたき痕をもつ。中央部のものはあばた状になっており、若干窪んでいる。蛇文岩製。

時期　覆土中の遺物から、縄文時代前期以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

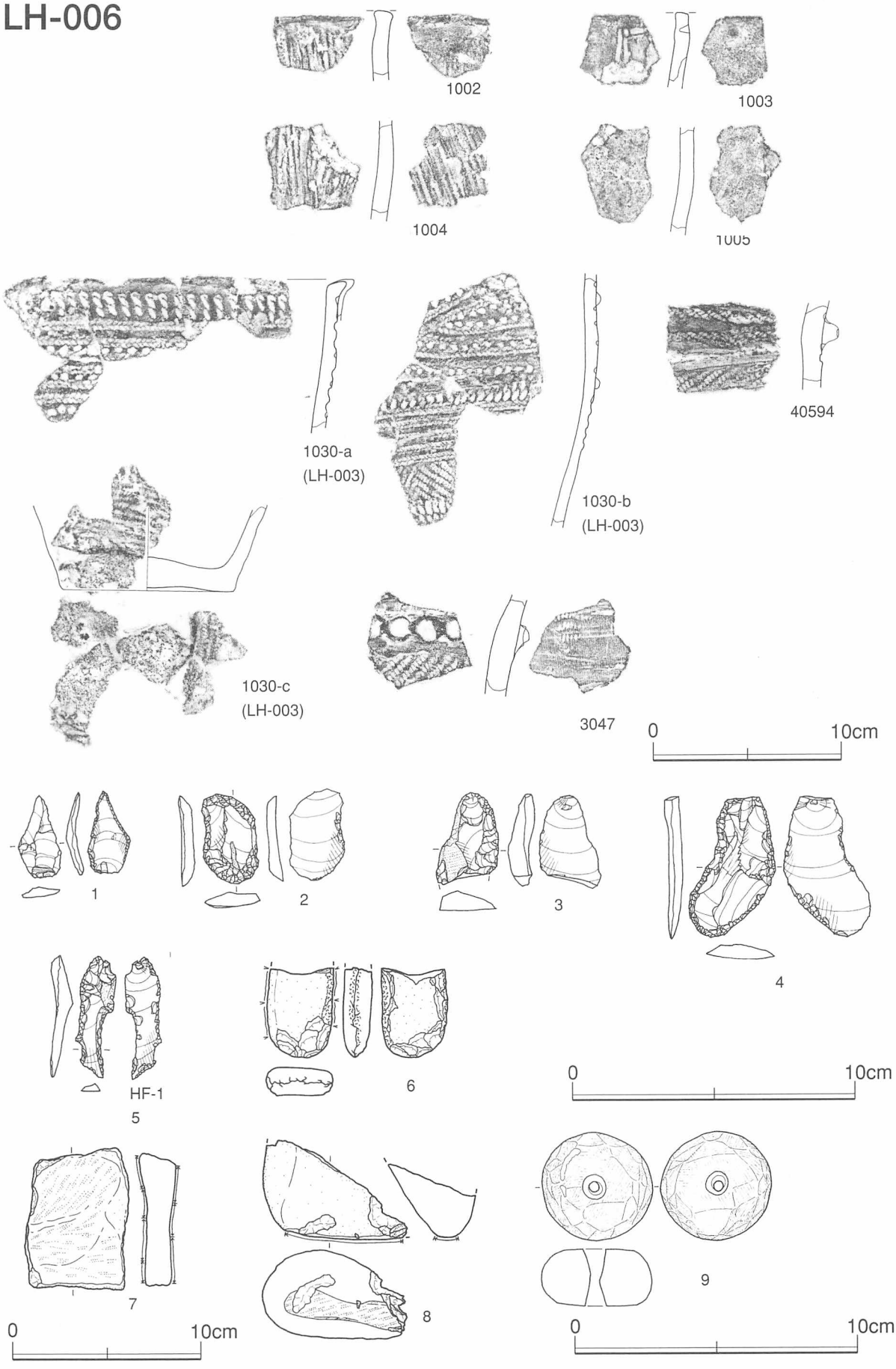
LH-006



LH-001,002,006土層説明
1.暗褐(Hue10YR3/4)Ⅳ
2.黒　(Hue10YR1,7/1)Ⅴ
3.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅵ＞Ⅴ≫Ⅵ
4.黒褐(HueYR2/2)Ⅴ＞Ⅴ＞Ⅵ
*3.4層は埋め戻されていると考えられる。

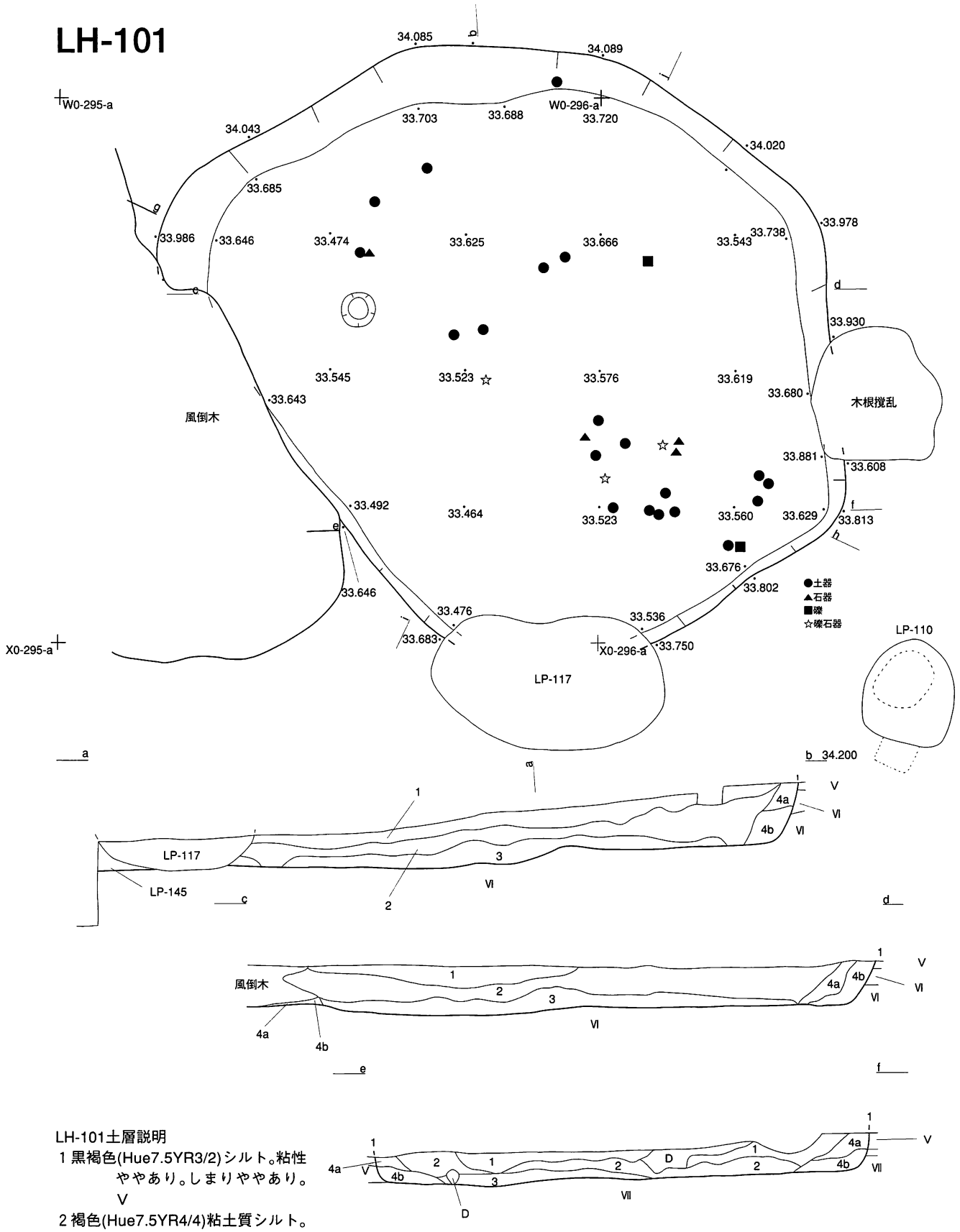
図Ⅳ-7　LH-006

LH-006



図Ⅳ-8　LH-006 の遺物

LH-101



LH-101土層説明

1 黒褐色(Hue7.5YR3/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V

2 褐色(Hue7.5YR4/4)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V≫VI、VII＞En-P

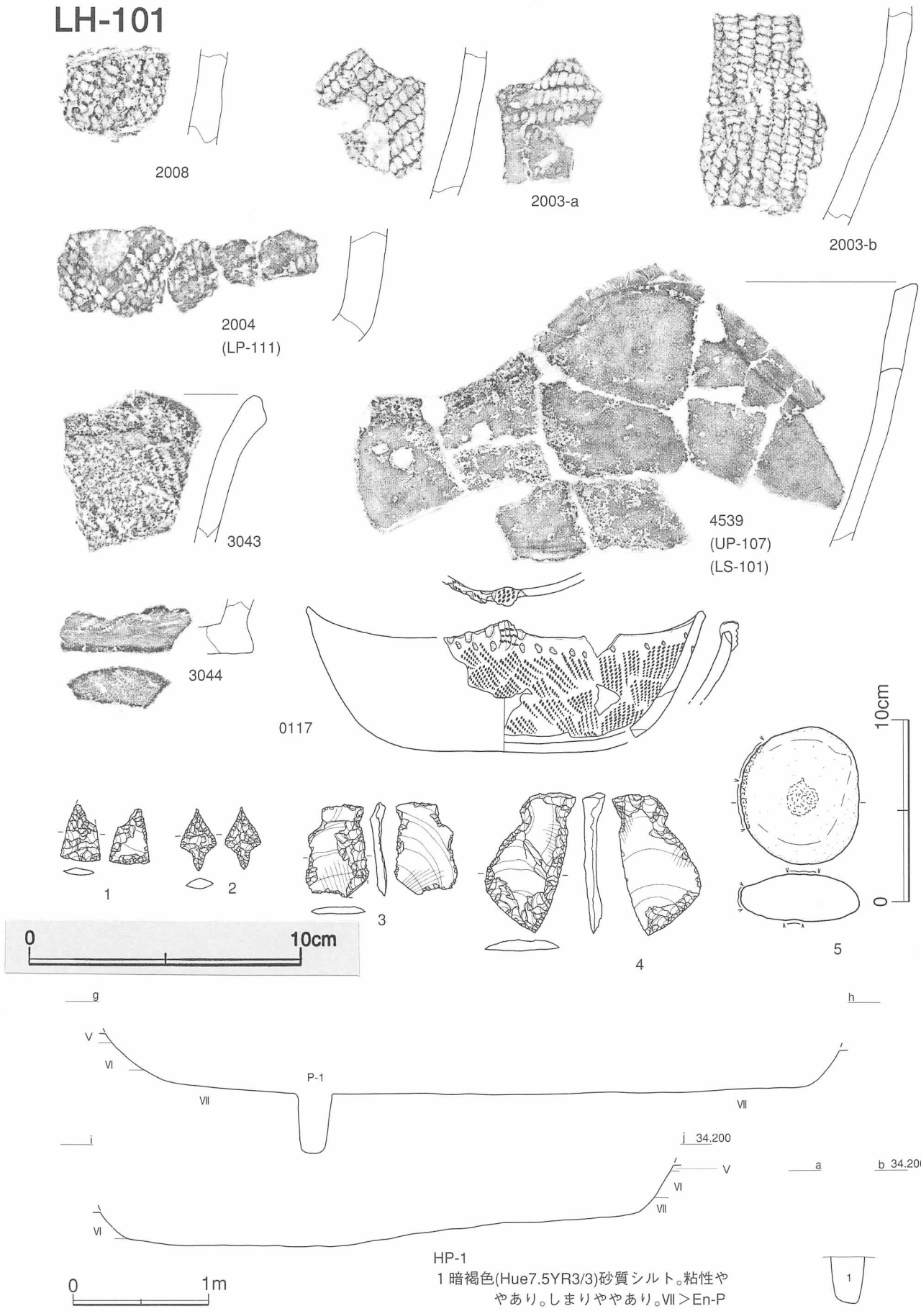
3 褐色(Hue7.5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V＞VII＞VI、En-P

4 a褐色(Hue7.5YR4/3)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V＞VI、VII＞En-P

4 b明褐色(Hue7.5YR5/6)砂質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。VII、VI≫V、En-P

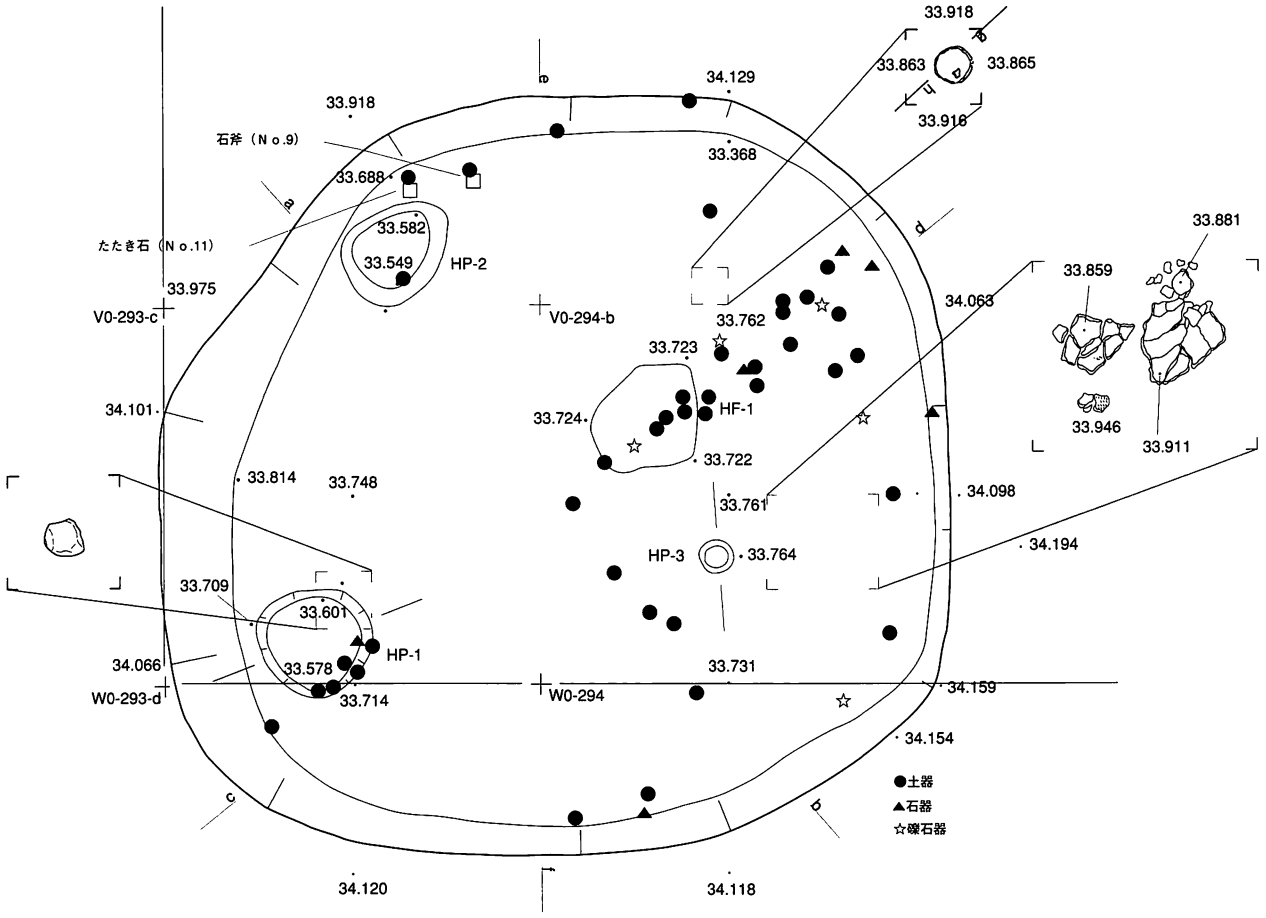
0　1m

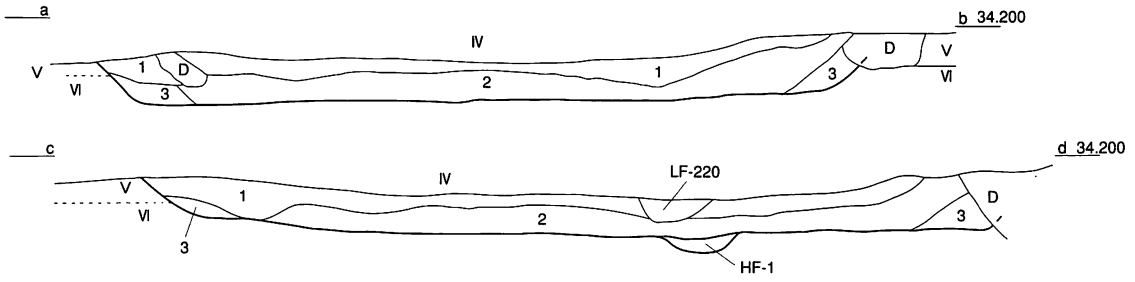
図Ⅳ-9　LH-101



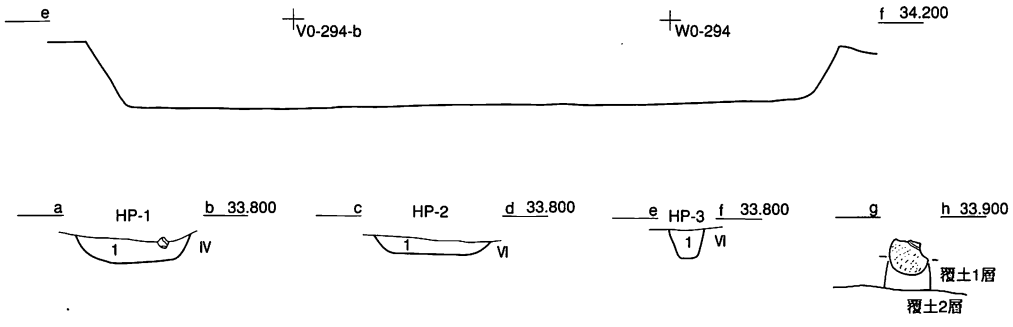
図Ⅳ-10　LH-101 と遺物

LH-102





LH-102土層説明
1　黒色(10YR1.7/1)土
2　暗褐色(10YR3/3)土　En-a パミス混ざる
3　暗褐色(10YR2/2)土　En-a パミス混ざる



図Ⅳ-11　LH-102

LH-102（図Ⅳ-11／図版-13・39，40，107～123，79～106，126～130）

位置：V0-293-c,V0-293-d,V0-294-a,V0-294-b　規模：4.59×4.16／3.78×4.12／0.30m

長軸方向：N-57°-E

特徴　この住居跡は東側台地上の北東側から流れ込む沢（通称西の沢）に落ちていく緩斜面上に立地する。V0-293、V0-294区域調査時に、Ⅴ層上面で約3m四方のⅣ層がたまる窪みとして確認された。検出面上には遺物が集中して出土する状況が認められた。検出面の周囲には堀上げ土の存在を認識できたが、南側は撹乱が多くみられたこと、東側は調査範囲外であったこと等から、広がりは明確に捉えられなかった。壁面の傾斜はやや急で、床面は平坦である。床面上から不整楕円形状の焼土を検出している。これは先行するトレンチ調査の段階で確認したものである。炉跡と考えられる。付属するピットの可能性があるものは3基あり、床面上で褐色土の落ち込みとして確認した。HP-1、2は床面から10cmほどの深さで、径約60cm程度である。壁際に位置している。HP-1からは数点の遺物とともに、拳大程の礫が出土している。HP-3は径約20cmの小ピットで焼土に近接する。遺物は土器片、石斧片、たたき石、フレイク（黒曜石）、礫が出土している。床面出土の遺物は2点のみで、ほとんどが覆土中のものである。出土分布の傾向として、土器及び剥片石器類は東側に偏りがみられる。また注目すべき遺物として、覆土中から赤色顔料が入った小型の土器（0238）が1個体出土している。

遺物　2006,2007はⅡ群a類の深鉢形土器胴部、3041はⅢ群b類の深鉢形土器口縁部である。0216,4020,40363,40529～40530,40531,40364はⅣ群b類の深鉢形土器、0238は内部にベンガラの入った小型の瓶形土器である。0246はⅣ群c類の深鉢形土器、0188は浅鉢形のⅤ群a･b類土器である。0171,5010,5030はⅤ群c類の深鉢形土器である。1はたたき石。断面三角形状の棒状礫を素材とする。礫の稜部および下端部にたたき痕をもつ。砂岩製。2は全面研磨された半円状の小玉。およそ中心部が両面から穿孔されている。

時期　床面出土の土器などから縄文時代後期中葉と考えられる。（澤田　健）

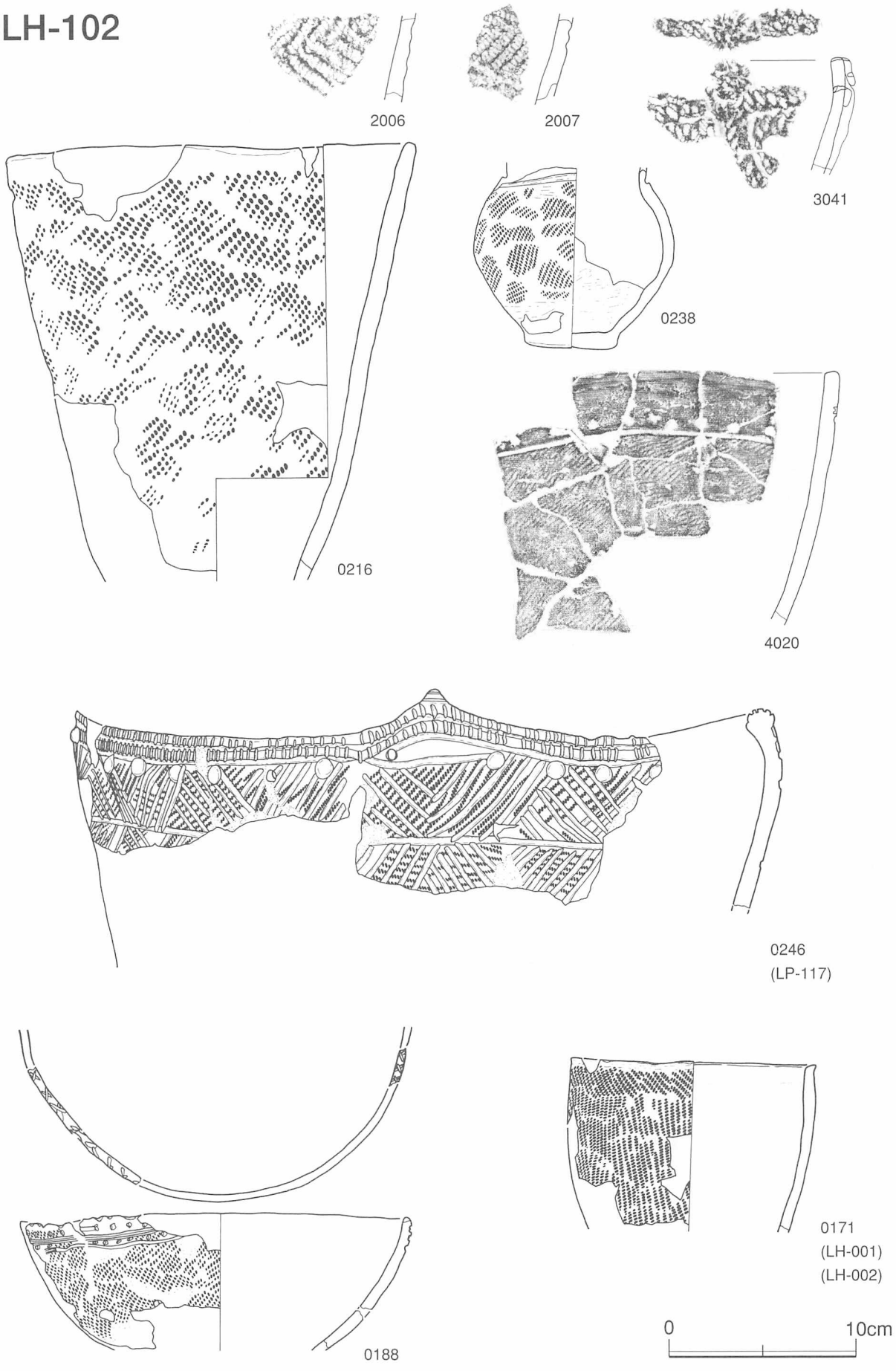
LH-103（図Ⅳ-14／図版-14・107～123，79～106）

位置：W0-279-c,W0-280-b,X0-279-d,X0-280-a　規模：4.04×3.24／2.76×3.62／0.39m

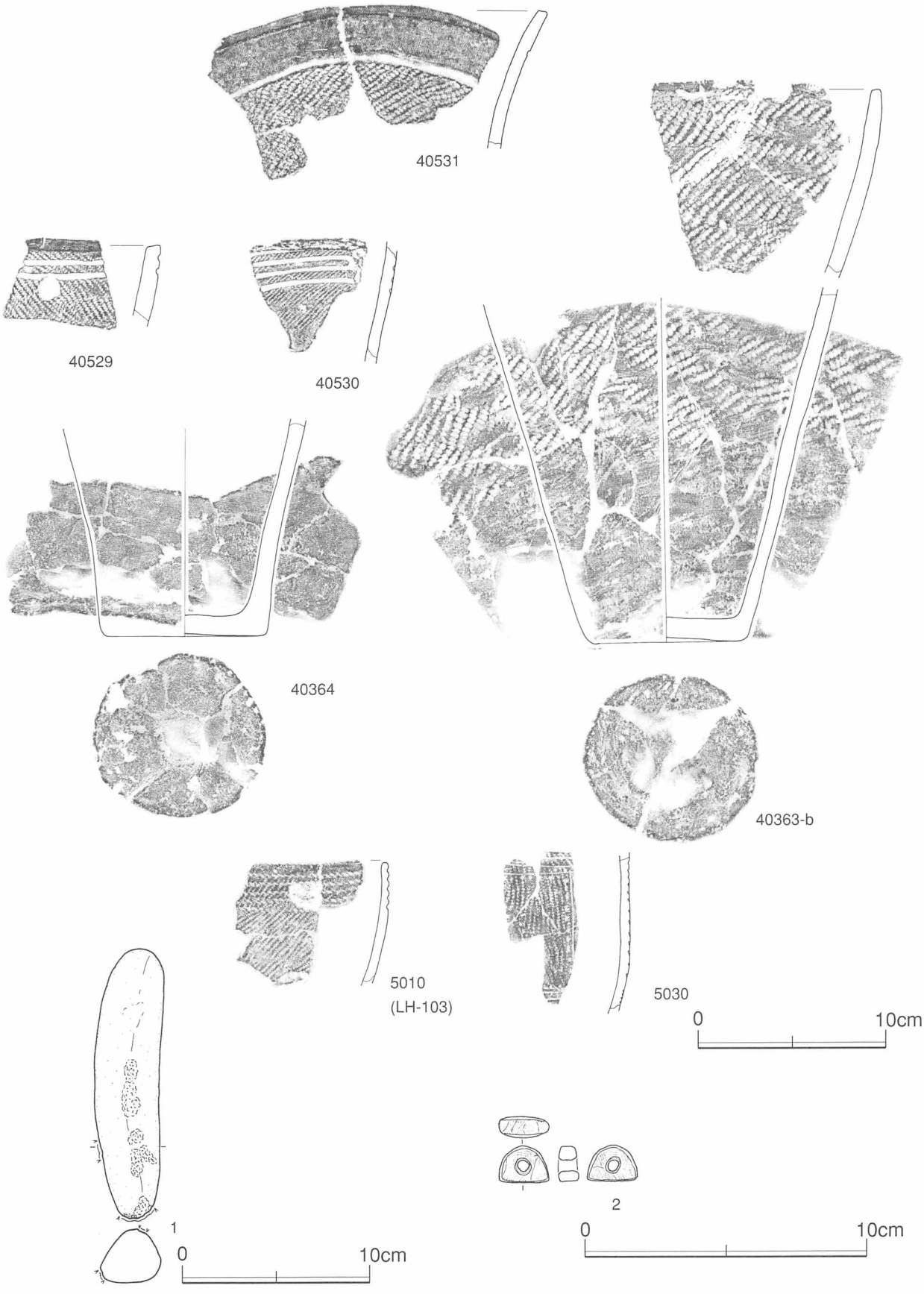
長軸方向：N-12°-E

特徴　X0-279区域調査時にⅥ層上面を精査したところ、黒色土の落ち込みが北東方向へ広がる状況を認識できたため、遺構の存在が予想された。そのため十字に土層観察用のベルトを残しながら調査し、確認したものである。先行してⅥ層上面まで掘り下げていたX0-279区域以外は、Ⅴ層上面で壁の立ち上がりを確認した。ただし北側の壁の一部分はUP-140によって壊されているため不明である。また本住居跡の南側周辺ではLH-104、105、107を検出しており、そのうちLH-104に近接している。平面形は不整楕円形で、南側がやや張り出している。出入り口の可能性も考えられるが、周辺から柱穴と考えられるピットは検出できなかったこと等から、定かではない。張り出した部分はダラダラと緩やかに立ち上がるが、全体的には壁の立ち上がりは明瞭である。UP-140と切り合い関係にあり、北側の壁の一部が不明である。床面から炭化物を含む焼土を検出している。竪穴内のおよそ中心部に位置し、炉跡と考えられる。付属するピットと考えられるものは、床面上で検出されたものが3基、また周辺からⅥ層上面で1基検出している。さらに竪穴内は5cm程、また周辺もⅦ層上面まで掘り下げて確認に努めたが、まとまりや規則性のあるピットは検出できなかった。いずれも楕円形状で、HP-1、3、4は径10～15cm、HP-2は径30cm程である。深さが最大のものはHP-3で床面から31cmを計る。HP-1は北側の壁際から検出され、竪穴の中心方向に

LH-102

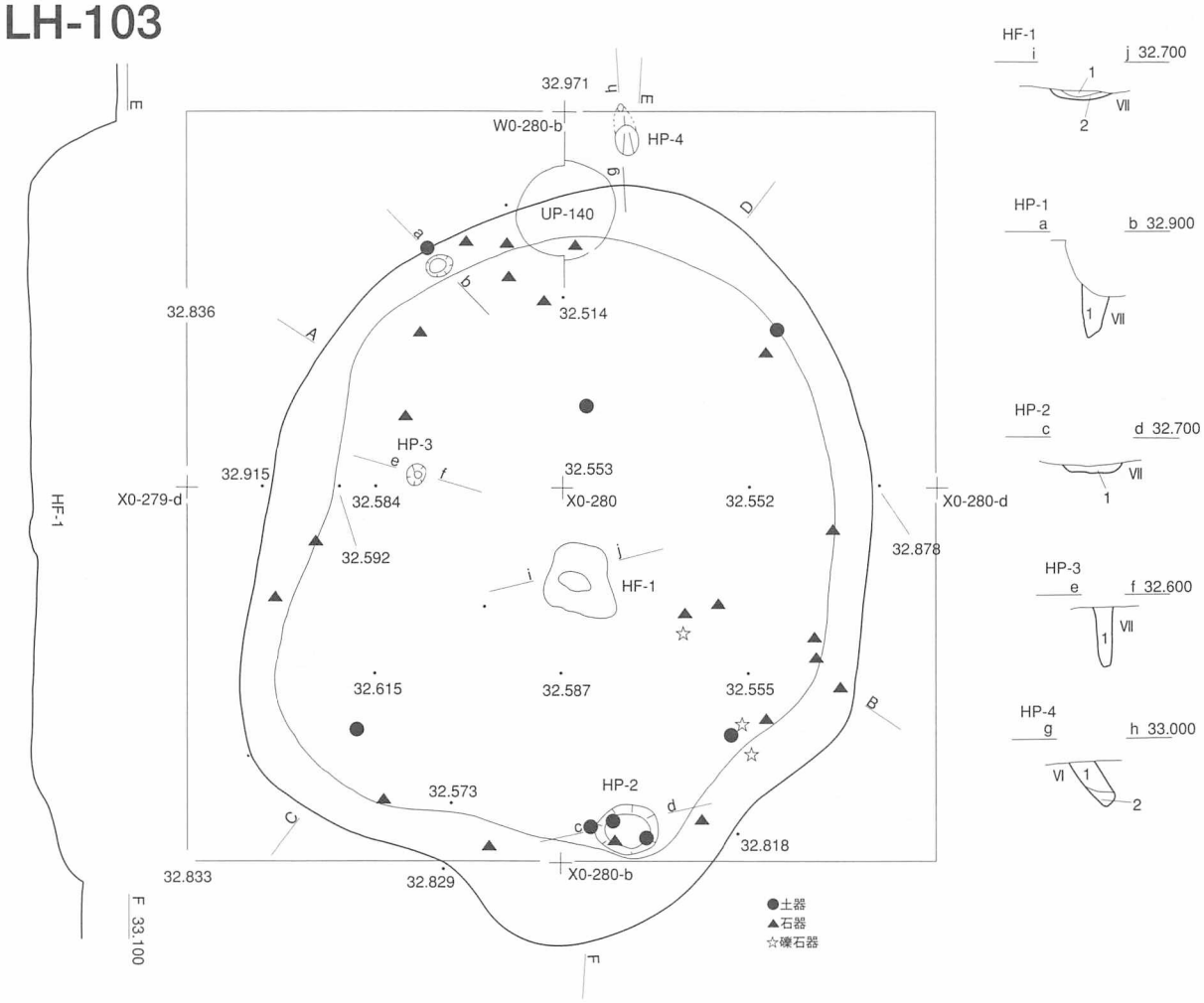


図Ⅳ-12　LH-102の遺物（1）



図Ⅳ-13　LH-102 の遺物（2）

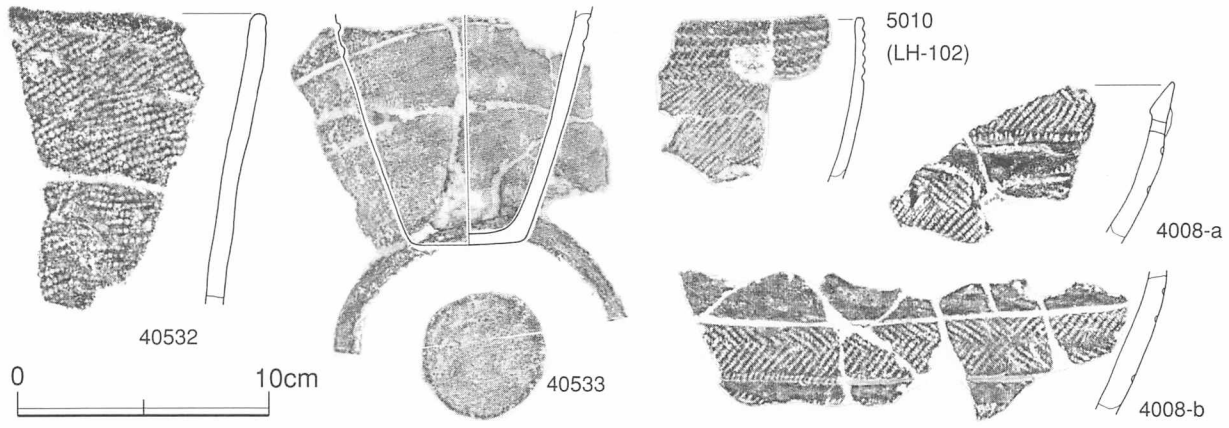
LH-103



LH-103土層説明

1　黒色(7.5YR2/1)土　En-a パミス混ざる
2　暗褐色(10YR3/3)土　En-a パミス混ざる
3　褐色(10YR4/4)土　En-aパミス混ざる

LH-103



図Ⅳ-14　LH-103と遺物

若干傾斜する。HP-2は張り出した部分の壁際に位置し、検出面から土器1点、黒曜石のフレイク1点が出土している。HP-4は南側に傾くが、竪穴の中心部とは若干異なる方向を向くため、異質なものと考えられる。 遺物は土器片、フレイク（黒曜石）、礫が出土している。床面出土の遺物は、土器2点、黒曜石のフレイク9点で、ほとんどが覆土1層から出土したものである。なお明瞭な石器は出土していない。出土分布の傾向として、中心部よりも壁際に若干偏りがみられるが、まとまりは認識できなかった。

遺物　40532,40533はⅣ群b類の深鉢形土器、4008はⅣ群c類の深鉢形土器、5010はⅤ群c類の深鉢形土器である。

時期　床面出土の土器等から縄文時代後期中葉と考えられる。（澤田　健）

LH-104（図Ⅳ-15／図版-15・16・107～123，126～130）

位置：Y0-280,Y0-281　規模：4.73×4.41／4.14×4.48／0.48m

長軸方向：N-30.5°-E

特徴　調査区西側の緩斜面で検出された平面が不整の円形を呈す住居跡である。床面は緩斜面の傾斜と同じ方向に傾いており、壁はそこから緩やかに立ち上がる。中央南よりに炉跡と考えられる焼土が検出されている。また北東側には壁際に沿って深さ約5㎝の溝状の掘り込みが見つかっている。柱穴状の小ピットが床面から8箇所見つかっているが、いづれも深度の浅いものが多い。遺物は、床面に近い覆土中から一括の深鉢型土器（No.40535）が出土している。

遺物　0218,0233,4548,40535は古い段階のⅣ群b類深鉢形土器である。1はスクレイパー。両側縁に外湾した刃部をもつ。頁岩製。2は砥石。片面および側面に凹状の重複したすり面をもつ。右側面のものは割れ面を利用したものと考えられる。 砂岩製の板状礫を素材とする。

時期　土器から縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

LH-106（図Ⅳ-17／図版-16・37，38，107～123，126～130）

位置：Z0-278-c,Z0-278-d　規模：4.82×3.94／3.53×4.98／0.23m

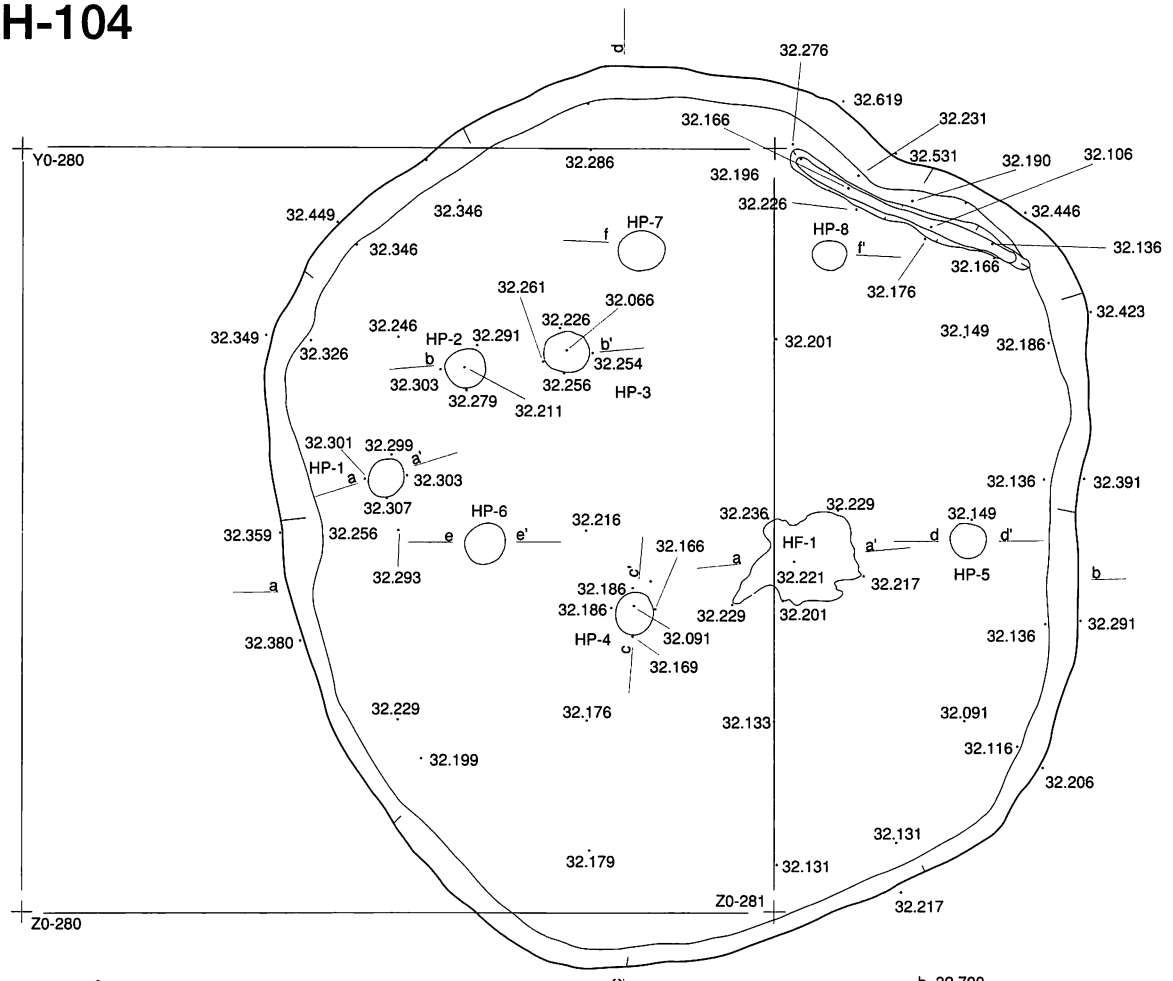
長軸方向：N-85.0°-E

特徴　調査区西側の緩斜面で検出された不整楕円形を呈す住居跡である。床面は斜面に沿って若干の傾斜を見せ、壁はそこから緩やかに立ち上がる。南側の壁の一部はLP-196,220との重複で失われたが、この内LP-220は本遺構に伴う可能性がある。床面中央やや南よりの位置に削出された浅い窪みの内側に炉跡と考えられる焼土が検出されている。柱穴状の小ピットは20箇所検出されたがe-fラインのエレベーションで記録したもの以外はおおよそ10㎝程の深度にとどまるものが多い。床面の直上もしくはそこに近い覆土中には焼土粒と炭化物が広く検出されており、消失住居の可能性が高い。炭化物は採取し、炭素年代測定の鑑定を行っている。 遺物は床面に近い覆土中からⅣ群b類土器とRフレイク、石斧、たたき石、すり石などが出土している。

遺物　1021はⅠ群b-3類の深鉢形土器胴部、0256,40536,40537はⅣ群b類の深鉢形土器である。 1・2は石斧。1は全面研磨されている。刃縁は長軸方向、それ以外は長軸方向に斜交した研磨痕が認められる。片岩製。2は刃部および身部とも著しく欠損しており、2点が接合している。泥岩製。3はすり石。両面および下部にすり面をもつ。下部は剥離調整されている。幅の狭いすり面を作出するためと考えられる。凝灰岩製。

時期　遺物と炭素年代測定の結果から縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

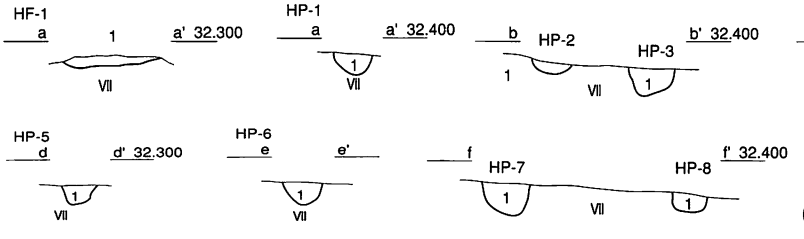
LH-104



LH-104セクション

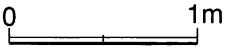
1.黒　(Hue 10YR 1,7/1)腐植土(V層)流れ込み
2.黒　(Hue 7,5YR 2/1)腐植土(V層)流れ込み
3.黒褐(Hue10YR2/3)V>>VI
4.暗褐(Hue10YR3/3)　V+VI
5.黒褐(Hue7,5YR 3/2)V+VI>>VI掘り上げ土流れ込み
6.暗　褐(Hue 10YR3/3)　V+VI>>VI(パミス)掘り上げ土流れ込み
7.　暗　褐(Hue 10YR3/4)　V+VI>VI掘り上げ土流れ込み
8.　黒　褐(Hue 7,5YR 3/2)V>VI
9.　黒　褐(Hue 7,5YR 2/2)V
10.　極暗褐(Hue 7,5YR2/3)V
11.　暗　褐(Hue 10YR3/3)　V+VI
12.　黒　褐(Hue 10YR3/2)V>>VI

※1～6層はLP-191覆土



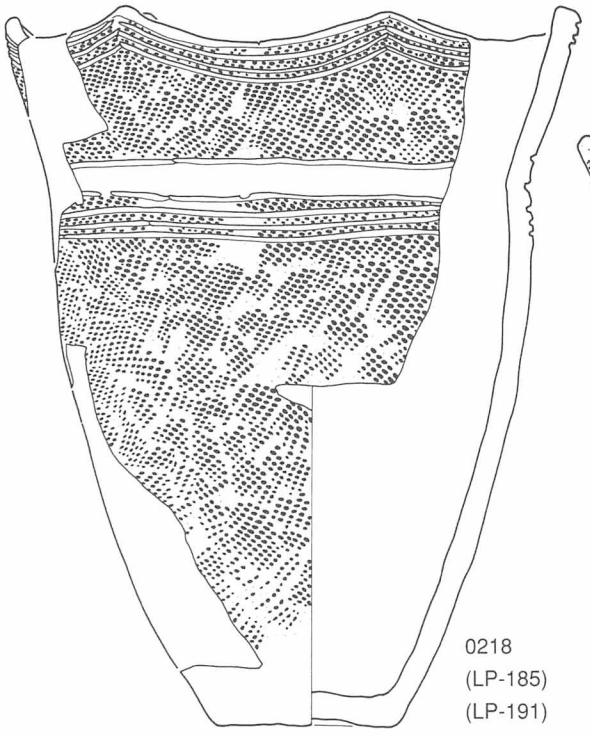
LH-104土層説明

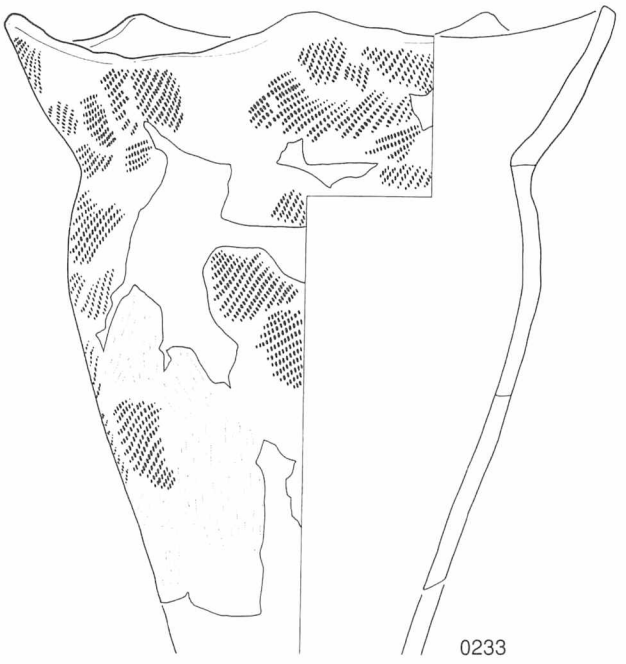
1.黒褐 (Hue10YR2/2)V>VI

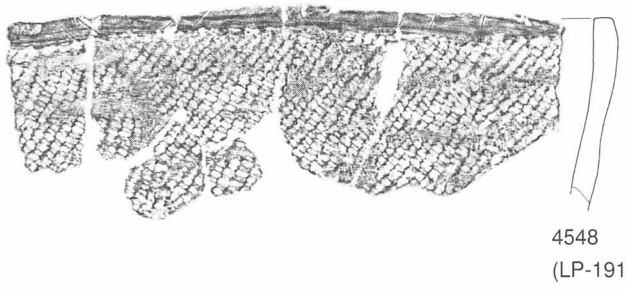


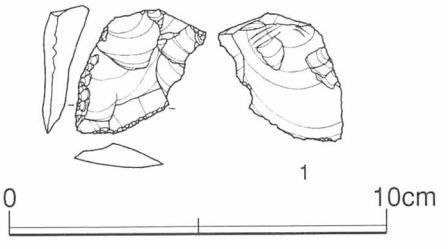
図Ⅳ-15　LH-104

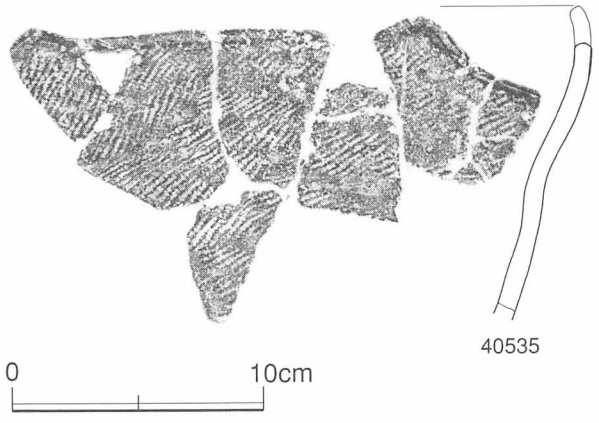
LH-104

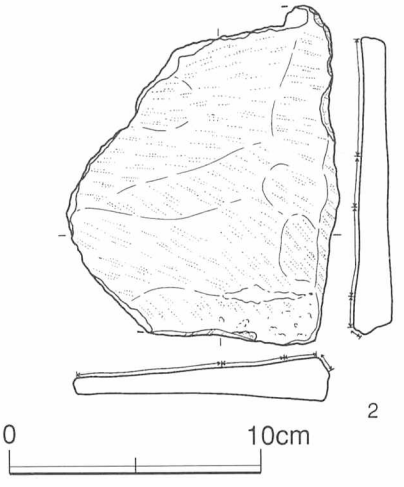






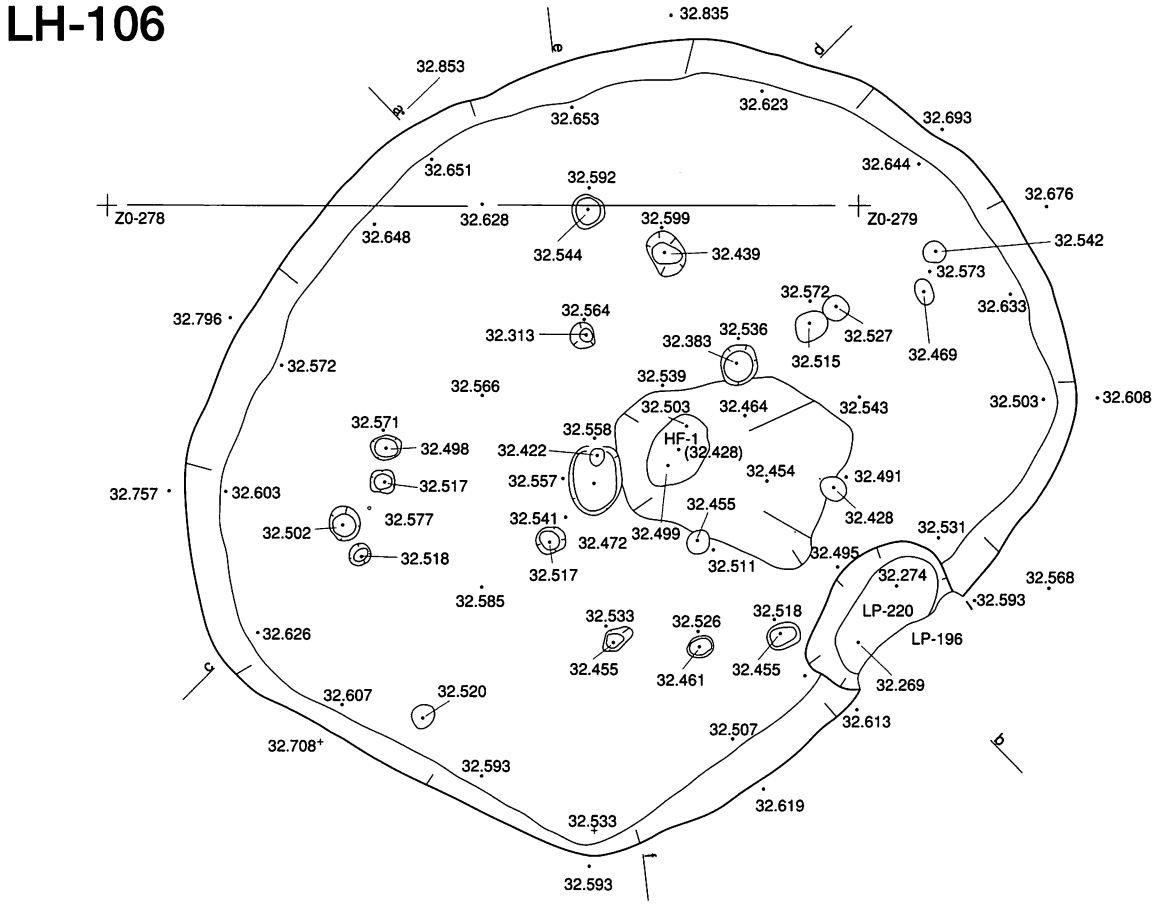


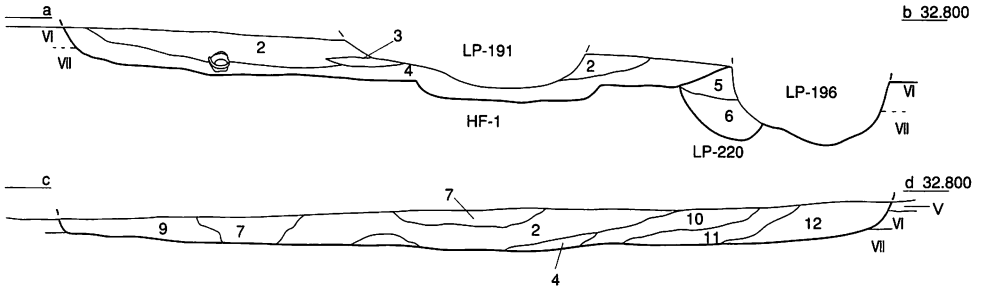




図Ⅳ-16　LH-104 の遺物

LH-106



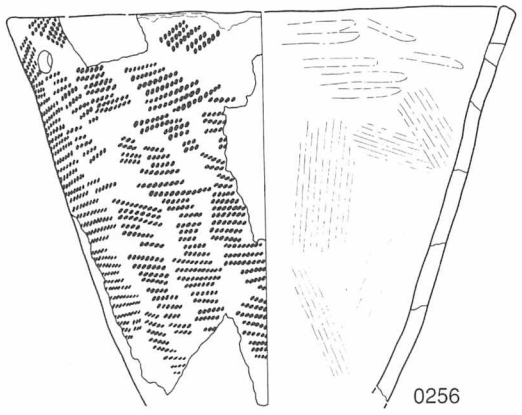


LH-105土層説明
1. LP-191フク土
2.極暗褐(Hue7.5YR2/3)Ⅴ≫Ⅵ
3.暗褐　(Hue10YR3/3)Ⅴ+Ⅶ
4.暗赤褐(Hue5YR3/6)Ⅴ+Ⅶ+焼土
5.黒褐　(Hue10YR2/2)Ⅴ＞Ⅵ
6.黒褐　(Hue10YR3/2)Ⅴ+Ⅶ＞Ⅵ
7.黒　　(Hue7.5YR2/1)Ⅴ層腐植土
8.黒　　(Hue7.5YR2/1)Ⅴ層腐植土
9.極暗褐(Hue7.5YR2/3)Ⅴ≫Ⅵ
10.黒　　(Hue7.5YR2/1)Ⅴ層腐植土
11.にぶい黄褐(Hue10YR4/3)Ⅵ＞Ⅶ
12.極暗褐(Hue7.5YR2/3)Ⅴ≫Ⅵ

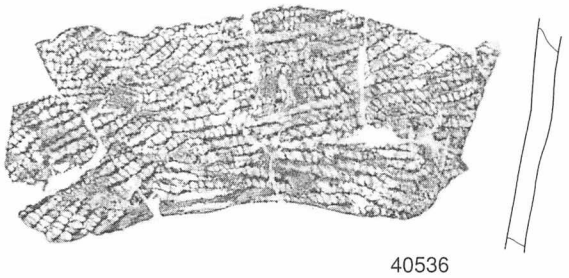


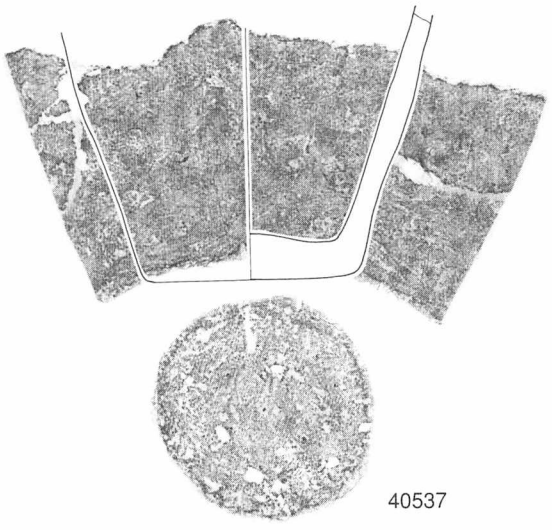
図Ⅳ-17　LH-106

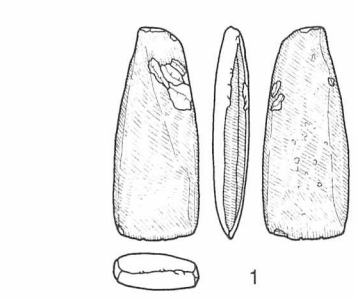
LH-106

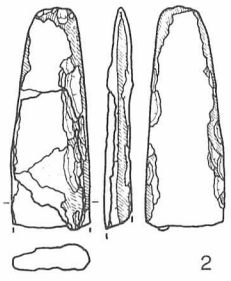


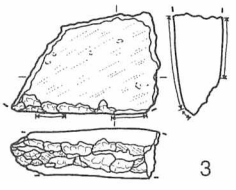






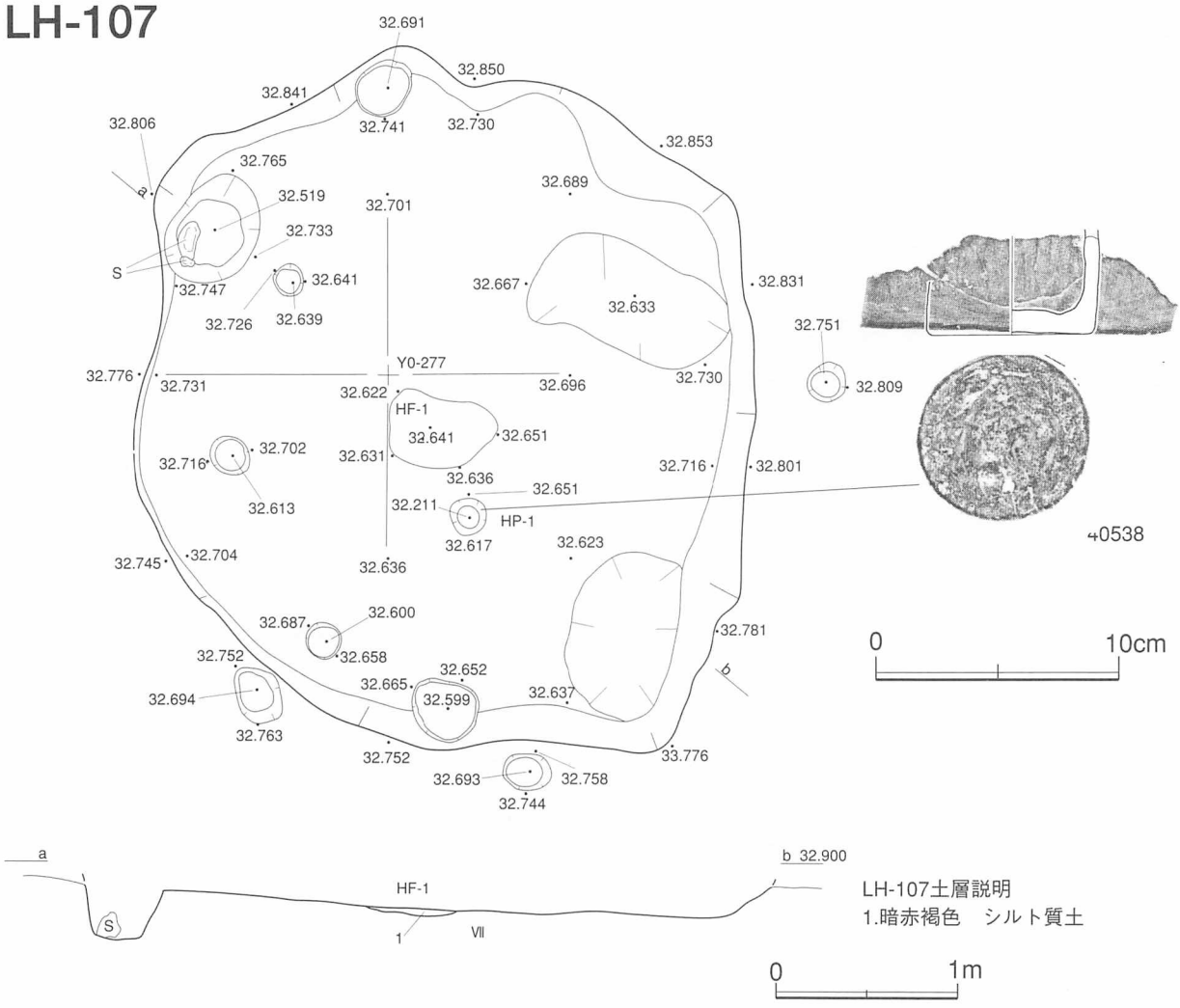








図Ⅳ-18　LH-106 の遺物



図Ⅳ-19　LH-107と遺物

LH-107（図Ⅳ-19／図版-16・107～123）

位置：X0-277,YO-277　規模：4.18×3.62／3.39×3.83／0.31m

長軸方向：N-19.0°-W

特徴　調査区西側の緩斜面で検出された不整の円形を呈す住居跡である。覆土は褐色の汚れたEn-aローム質土であったためプランの確認が難しくⅥ層まで掘り下げてからの調査となった。　傾斜に沿って僅かに傾く床の中央付近には炉跡と考えられる焼土が位置している。その南側の壁際あたりには僅かな窪みが二カ所認められるがこの性格は不明である。柱穴と考えられる小ピットは全部で10カ所見つかったが、屋内のものは壁際を巡る比較的大型ものとその内側を巡ると考えられる比較的小径のものとが認められる。エレベーションにかかる柱穴状ピット内には2個の円礫が見つかっている。遺物は覆土からⅠ群b類、Ⅳ群b類土器、砥石、フレイク、玉などが出土している。

遺物　40538はHP-1から出土したⅣ群b類の底部である。

時期　覆土と遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

2．土壙

LP-101（図Ⅳ-20 ／ 図版-37・38）

位置：W0-292-b,W0-292-c,X0-292-a,X0-292-d　規模：0.72 × 0.68 ／ 0.44 × 0.44 ／ 0.32m

長軸方向：N-47° -W

特徴　Ⅴ層上面で、Ⅳ層が落ち込む円形の窪みとして確認した。平面形は円形を呈し、壙底はおよそ平坦で、壁面の傾斜は急である。覆土は流れ込みによる自然堆積と考えられる。覆土1層から3cm大程の自然礫が出土している。性格は不明である。

遺物　1029はⅠ群b-1類の深鉢形土器口縁部である。

時期　確認した層位と確認面周辺の土器から、縄文時代晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

LP-102（図Ⅳ-20）

位置：C-291-a　規模：0.91 × 0.50 ／ 0.19 × 0.24 ／ 0.19m

長軸方向：N-63° -W

特徴　Ⅵ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は楕円形で、壁は底面からなだらかに立ち上がる。底面は中心部が少し窪むが、掘りすぎの可能性もある。堆積状況は、埋め戻しの可能性がある。堆積状況から、掘込み面はⅤ層中と考えられる。同時に確認したLP-103が近くにある。平面形や覆土の状況等も似ており、関係性が考えられる。

遺物　遺物は出土しなかった。

時期　遺物が出土していないため不明であるが、縄文時代前期から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-103（図Ⅳ-20）

位置：C-291-a,C-291-d　規模：(1.05) × 0.66 ／ 0.22 × (0.56) ／ 0.26m

長軸方向：N-78° -W

特徴　Ⅵ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は楕円形で、壁はなだらかに立ち上がる。底面はやや丸みを帯びるが、ほぼ平坦である。堆積状況は埋め戻しの可能性があり、掘込み面はⅤ層中と考えられる。同時に確認したLP-102が近くにある。平面形や覆土の状況等も似ており、関係性が考えられる。覆土中から礫片が1点出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　遺物が出土していないため不明であるが、縄文時代前期から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-104（図Ⅳ-20）

位置：D-287-c　規模：1.28 × 0.85 ／ 0.42 × 0.61 ／ 0.34m

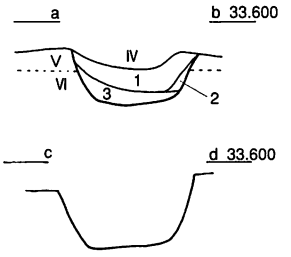
長軸方向：N-52° -W

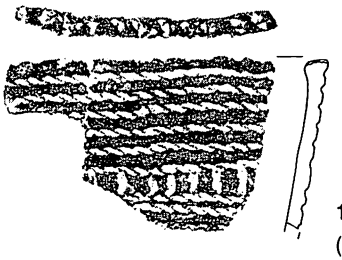
特徴　Ⅵ層中位で褐色土のプランを確認した。平面は縦長の不整多角形で、壁は長軸方向はなだらかに、短軸方向はやや急に立ち上がる。底面はやや平坦であるがボウル状である。堆積状況は自然堆積と考えられ、掘込み面はⅥ層中と考えられる。近くの包含層からは、フレイク・チップの出土が多ことから、石器製作に関係する遺構の可能性もある。

遺物　覆土中から遺物は出土しなかった。

時期　Ⅵ層中の遺構と考えられることから、縄文時代早期の可能性がある。（佐藤　剛）

LP-101





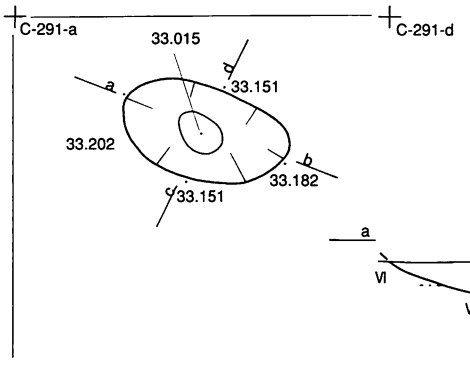
1029
(LP-111)

LP-101土層説明
1　黒色(7.5YR1.7/1)土
2　黒褐色(7.5YR3/2)土
3　黒褐色(7.5YR2/2)土

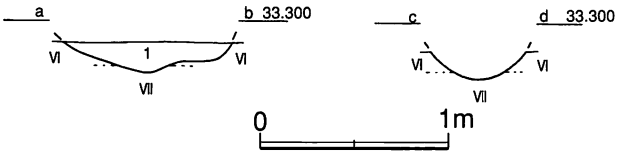
0　1m

0　10cm

LP-102

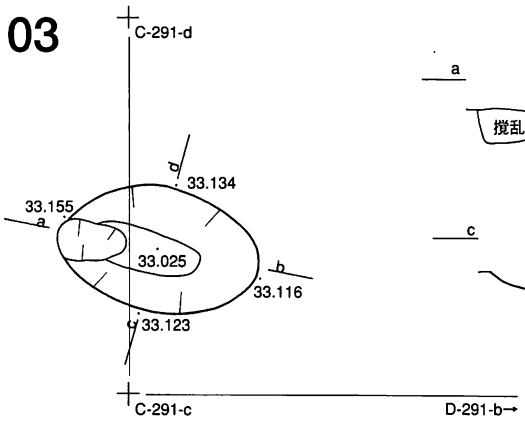


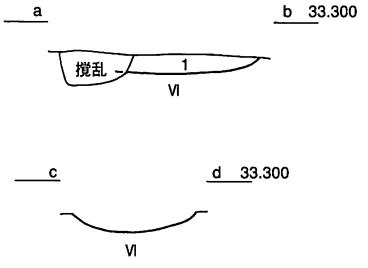
LP-102土層説明
1 黒褐色(Hue10YR2/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ＞Ⅵ＞En-P
En-pが均一に少量混じる。



0　1m

LP-103

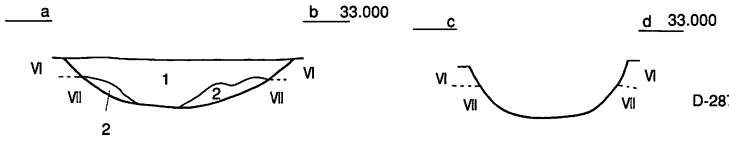


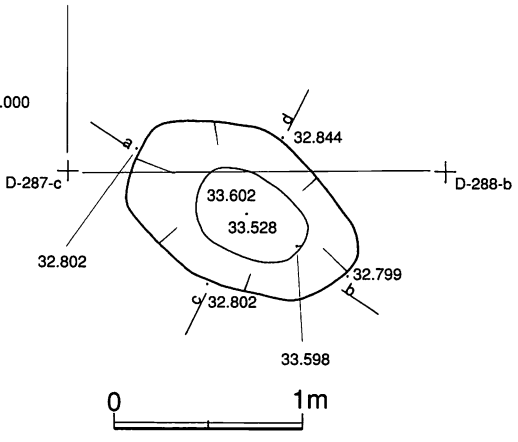


LP-103土層説明
1 黒褐色(Hue10YR2/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ＞Ⅵ＞En-P
En-pが均一に少量混じる。

0　1m

LP-104





LP-104d襲う説明
1 褐色(Hue7.5YR4/3)シルト。粘性あり。しまりあまりなし。Ⅶ＞Ⅵ≫En-P
En-Pが微量混じる。
2 褐色(Hue10YR4/6)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりやや やあり。Ⅶ＞Ⅵ

0　1m

図Ⅳ-20　LP-101・102・103・104と遺物

LP-105（図Ⅳ-21／図版-107～123，126～130）

位置：Y0-299-b　規模：1.20×0.63／0.43×0.63／0.22m

特徴　Ⅴ層上位でⅣ層の落ち込むプランを確認した。Ⅳ層を除去すると土器の集中が黒色土とともに落ち込んでいた。覆土上面の土器は。平面は卵形で、壁はなだらかに立ち上がる。底面はやや丸みを帯びる。浅い皿状の土壙である。堆積状況は埋め戻しと考えられ、掘込み面はⅤ層上位である。LF-140は土壙に伴う可能性がある。LF-141を切っている。覆土上面の土器は堂林式。楔形石器は伴わない。

遺物　0083,4011,4641は深鉢形土器、4031は注口形土器である。いずれもⅣ群c類である。1は楔形石器。上下に対向した剥離痕が両面に認められる。黒曜石製。

時期　覆土上面の土器から縄文時代後期末葉、堂林式の時期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-106（図Ⅳ-22／図版-17・37，38，79～106，126～130）

位置：Z0-299-b　規模：0.76×0.76／0.46×0.58／0.29m

長軸方向：N-21°-W

特徴　Ⅴ層上位でTa-cのプランを確認した。LP-107を切っている。平面は円形で、壁は急に立ち上がる。底面は傾斜があるがほぼ平坦である。堆積状況は埋め戻しと考えられ、掘込み面はⅤ層上位と考えられる。覆土1層中に炭化物を含んでいる。

遺物　1027はⅠ群b-3類の深鉢形土器胴部、0121はⅤ群c類併行大洞C2式の鉢形土器である。1はスクレイパー。上端および下端部に外湾した急角度の刃部をもつ。黒曜石製。

時期　覆土中の遺物から、縄文時代晩期の遺構の可能性がある。（佐藤　剛）

LP-107（図Ⅳ-22／図版-107～123）

位置：Z0-299-b　規模：0.80×0.69／0.24×0.40／0.34m

特徴　Ⅴ層上面でTa-cのプランを確認した。LP-106に切られている。平面はほぼ円形で、壁は急に立ち上がる。底面はやや丸みを帯びる。堆積状況は埋め戻しの可能性があり、掘込み面はⅤ層上位と考えられる。覆土中に炭化物粒、焼土粒を含んでいる。

遺物　40606はⅣ群b類の深鉢形土器口縁部に付く突起部分である。表面はすり消されて黒く光沢を帯びており、胎土は緻密で硬質感がある。

時期　LP-106に切られていることから縄文時代晩期以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-109（図Ⅳ-23／図版-107～123，126～130）

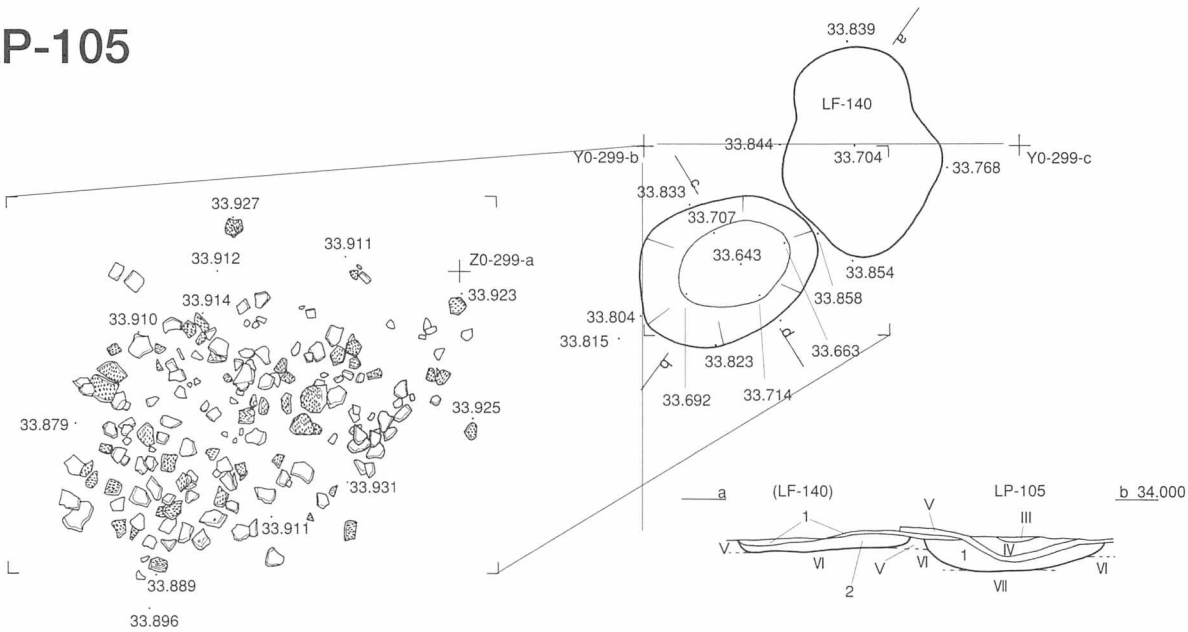
位置：V0-301-c,V0-302-c,W0-301-d,W0-302-a　規模：1.62×1.56／1.10×1.15／0.44m

長軸方向：N-56°-E

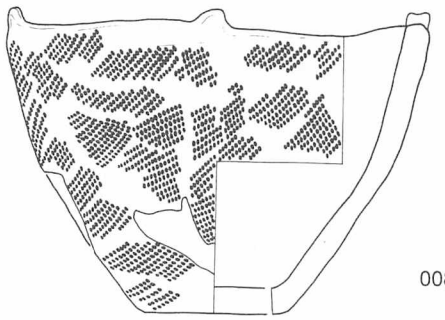
特徴　Ⅴ層上面で、楕円形状にⅣ層が落ち込む窪みとして確認した。平面形は南側の一部が撹乱によって不明であるが、隅丸の三角形状を呈する。壙底はやや凹凸があり、壁面は緩やかに立ち上がる。壙底から黒色土が混ざったしまりのない焼土を検出しているが、二次的な堆積によるものと思われる。土器片、つまみ付ナイフ、スクレイパー、砥石、土製品、フレイク（黒曜石）、礫が出土している。出土分布の傾向は土器・石器とも南東側に若干集中している。性格は不明である。

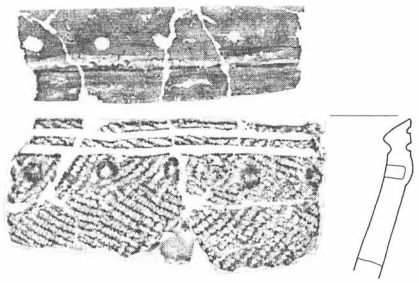
遺物　0240,40540はⅣ群b類の深鉢形土器、0191は同じく注口形土器である。1はドリル。素材の一部に機能部を作り出したもの。黒曜石製。2はつまみ付ナイフ。側縁、下部を欠損している。つまみ部の形状は棒状である。3はスクレイパー。側縁に外湾～直線的な刃部をもち、下端が尖った形状である。上端部はつまみ状にすぼまる。2、3は頁岩製。4は楔形石器。黒曜石製。5は砥石。表裏面に凹状の重複したすり面をもつ。欠損しており、4点が接合している。砂岩製。6は

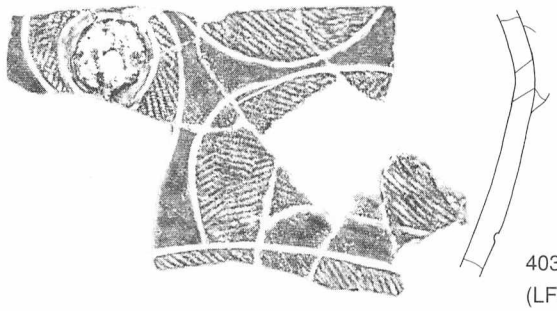
LP-105

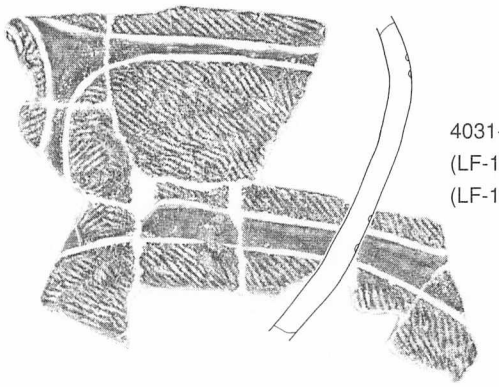


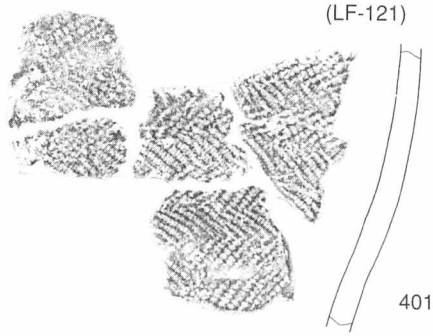
LP-105/土層説明
1 黒褐色(Hue7.5YR2/2)シルト。粘性あり。しまりあり。Ⅴ＞Ⅵ
炭化物直径５㎜程度含む。

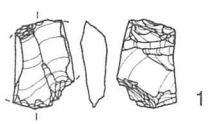

0083


4641


4031-a
(LF-116)
(LF-121)


4031-b
(LF-116)
(LF-121)

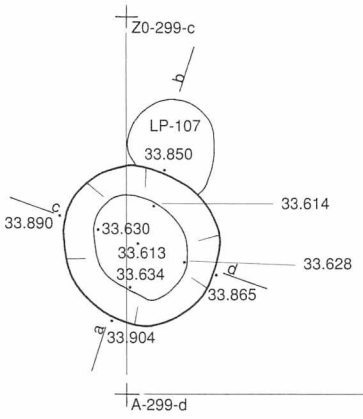

4011

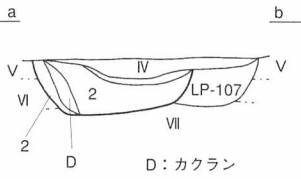

1

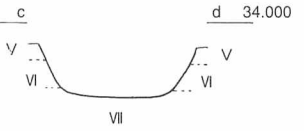
0　5cm

図Ⅳ-21　LP-105と遺物

LP-106

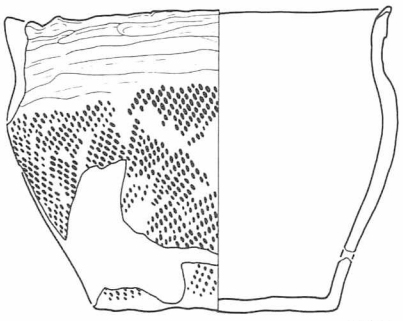




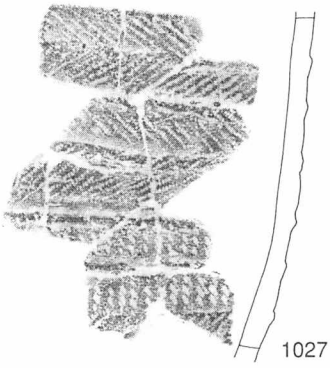


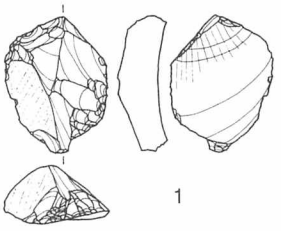
LP-106土層説明
1 黒褐色土(Hue7.5YR2/2)砂質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ
炭化物直径 3 ～ 6 ㎜含む。
2 暗褐色(Hue10YR3/3)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ＋Ⅵ＞Ⅶ
ローム質土がブロック状に混じる。

0　1m


0121

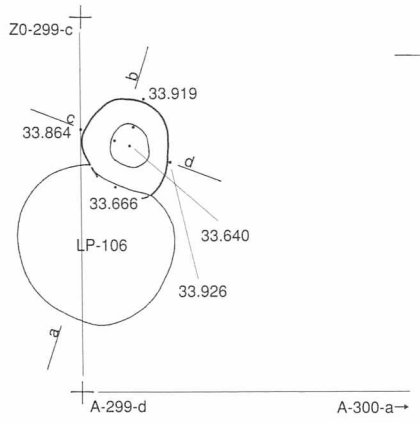
0　10cm

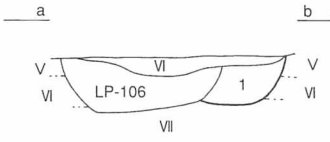

1027
(LF-134)
(LP-118)

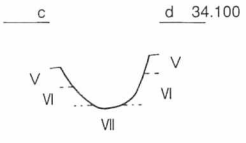

1

0　10cm

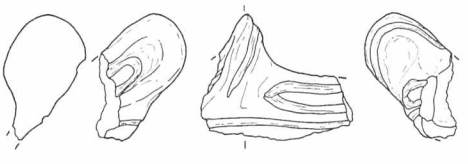
LP-107







LP-107土層説明
1 黒褐色(Hue10YR2/2)シルト。粘性あり。しまりあまりなし。Ⅴ＞Ⅵ
炭化物粒直径 1 ～ 3 ㎜、焼土粒直径 1 ～ 3 ㎜含む。


40606

0　1m

0　5cm

図Ⅳ-22　LP-106・107 と遺物

たたき石。片面の下半部および縁辺にたたき痕が集中している。長楕円礫を素材とする。凝灰岩製。

時期　覆土出土の土器から縄文時代後期中葉～末葉の可能性がある。（澤田　健）

LP-110（図Ⅳ-23）

位置：X0-286-d　規模：0.76×0.70／0.40×0.43／0.53m

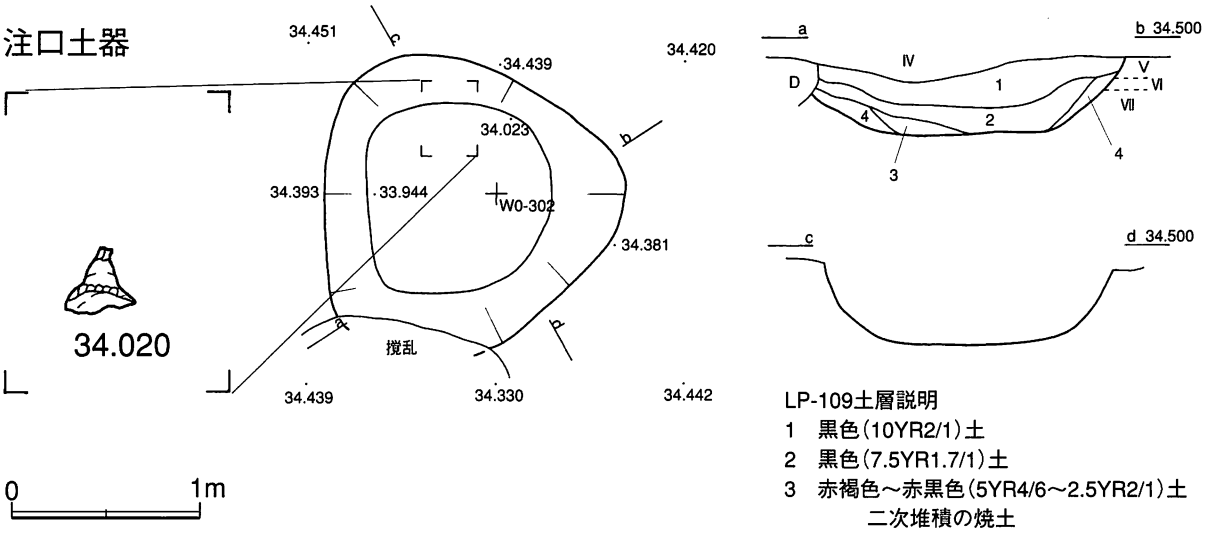
長軸方向：N-27°-E

特徴　Ⅴ層下位で黒色土のプランを確認した。黒色土は円形であった。その後セクションに黒色土の周囲の褐色土と底面から南に続く黒色土のプランを確認した。平面は五角形で、柱跡と考えられる部分が伸びる方向とはややずれている。柱跡と考えられる部分は、直径約28cmで約34°の傾きで上方に伸びる。掘り方をもつ柱穴と考えられる。掘込み面はⅤ層中でも下位と考えられる。同一層位でLH-101を確認しているが、その関係は不明である。近くにLP-111がある。

遺物　掲載遺物なし

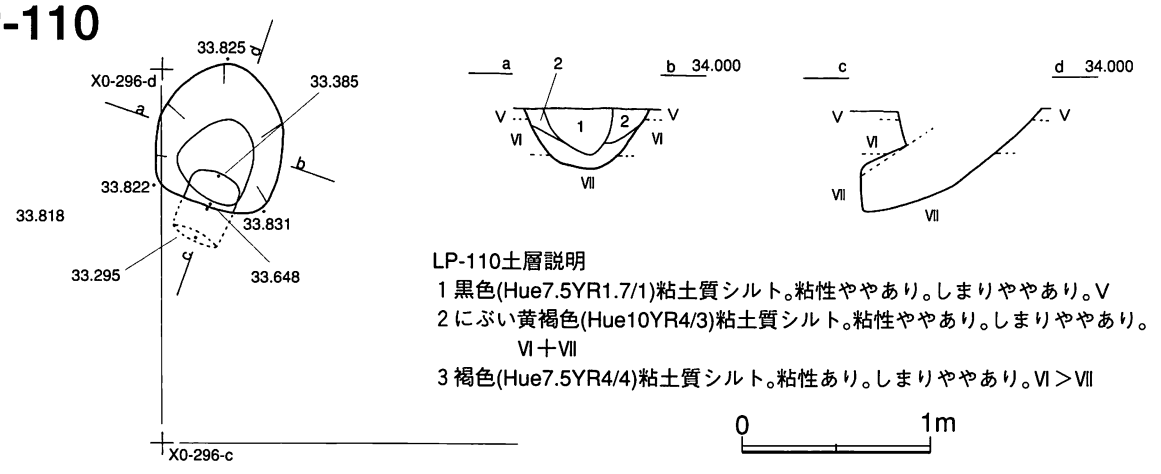
時期　不明である。（佐藤　剛）

LP-109



LP-109土層説明
1　黒色(10YR2/1)土
2　黒色(7.5YR1.7/1)土
3　赤褐色～赤黒色(5YR4/6～2.5YR2/1)土
　　二次堆積の焼土
4　褐色～黒褐色(10YR4/6～10YR2/2)土

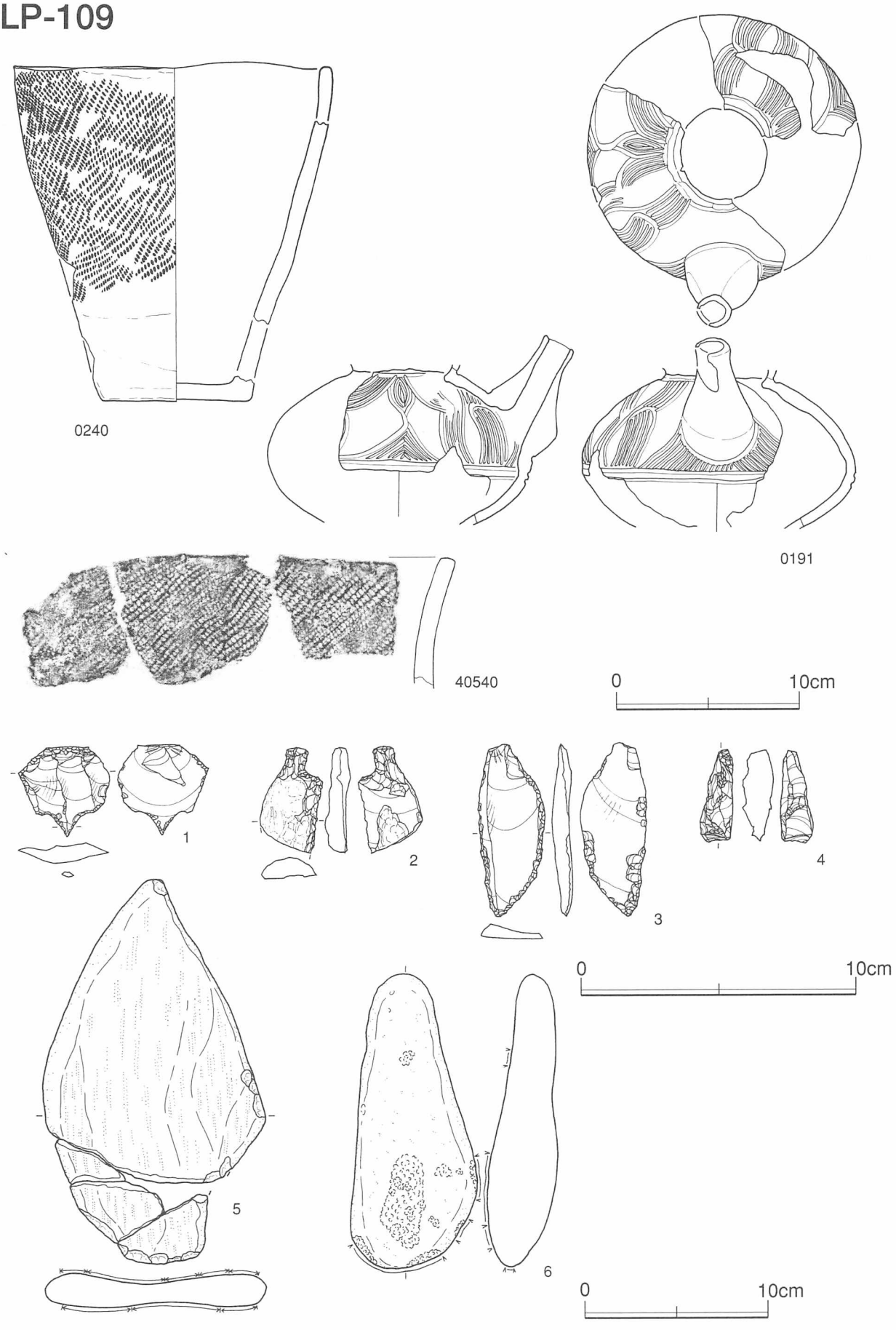
LP-110



LP-110土層説明
1 黒色(Hue7.5YR1.7/1)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ
2 にぶい黄褐色(Hue10YR4/3)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅵ＋Ⅶ
3 褐色(Hue7.5YR4/4)粘土質シルト。粘性あり。しまりややあり。Ⅵ＞Ⅶ

図Ⅳ23　LP-109・110

LP-109



図Ⅳ-24　LP-109 の遺物

LP-111（図Ⅳ-25／図版-37，38，39，126～130）

位置：X0-286-a　規模：1.32×0.46／0.44×0.36／0.39m

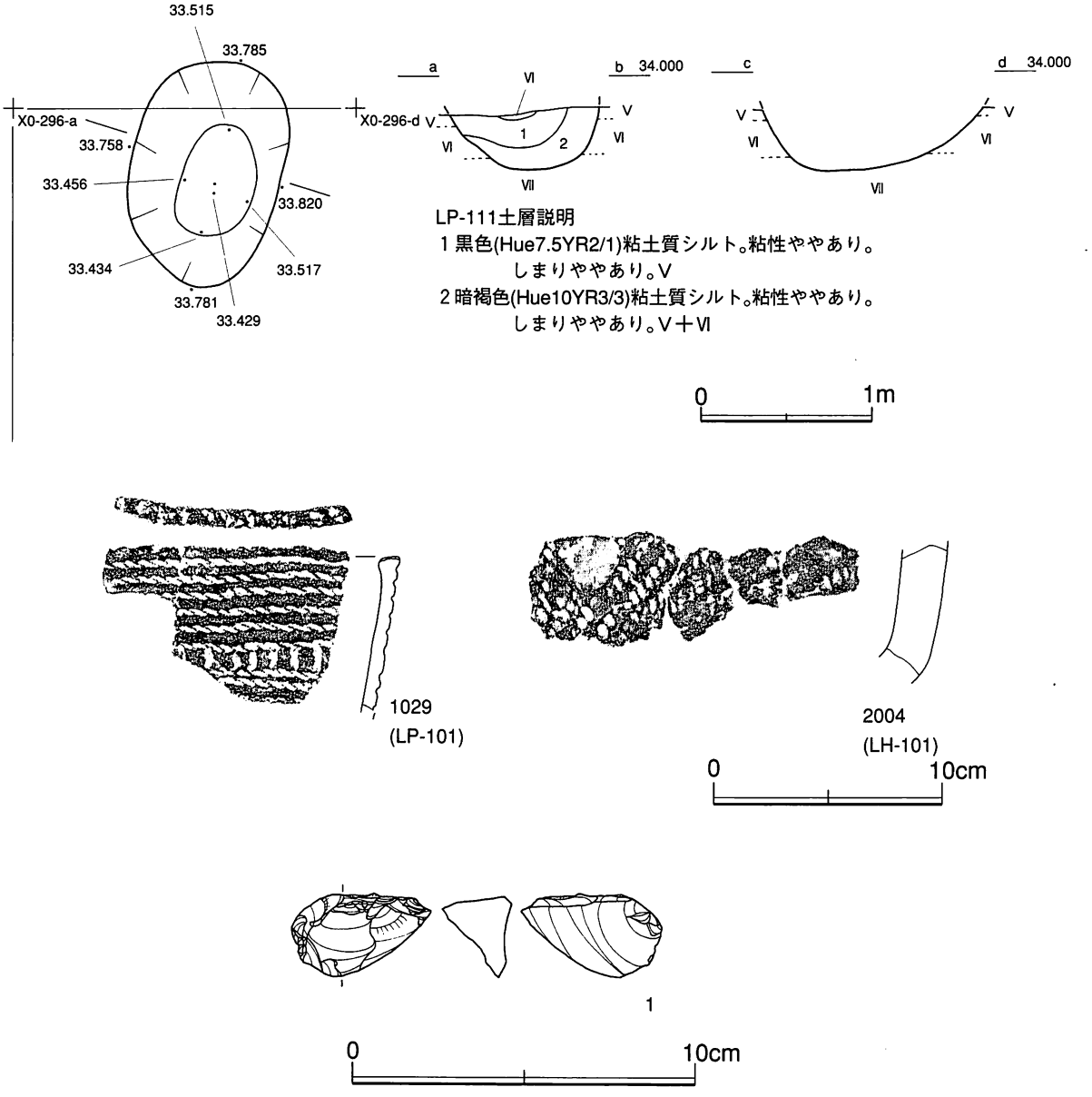
長軸方向：N-2°-E

特徴　Ⅴ層下位で黒色土のプランを確認した。平面はやや長方形に近い楕円形で、壁は北から西側でなだらかに、南から東側で急に立ち上がる。底面はやや丸みを帯びる。堆積状況は自然堆積と考えられ、掘込み面はTa-cが残っていたことから、Ⅴ層上位の可能性が高い。覆土1層中の堂林は遺構には伴わない。

遺物　1029はⅠ群b-1類の深鉢形土器、2004はⅡ群a類の深鉢形土器である。1は石核。表面に上下方向からの剥離痕がみられる。頁岩製。

時期　覆土中の遺物から縄文時代後期末葉、堂林式以前と考えられる。（佐藤　剛）

LP-111



図Ⅳ-25　LP-111と遺物

LP-112（図Ⅳ-26／図版-17・79～106）

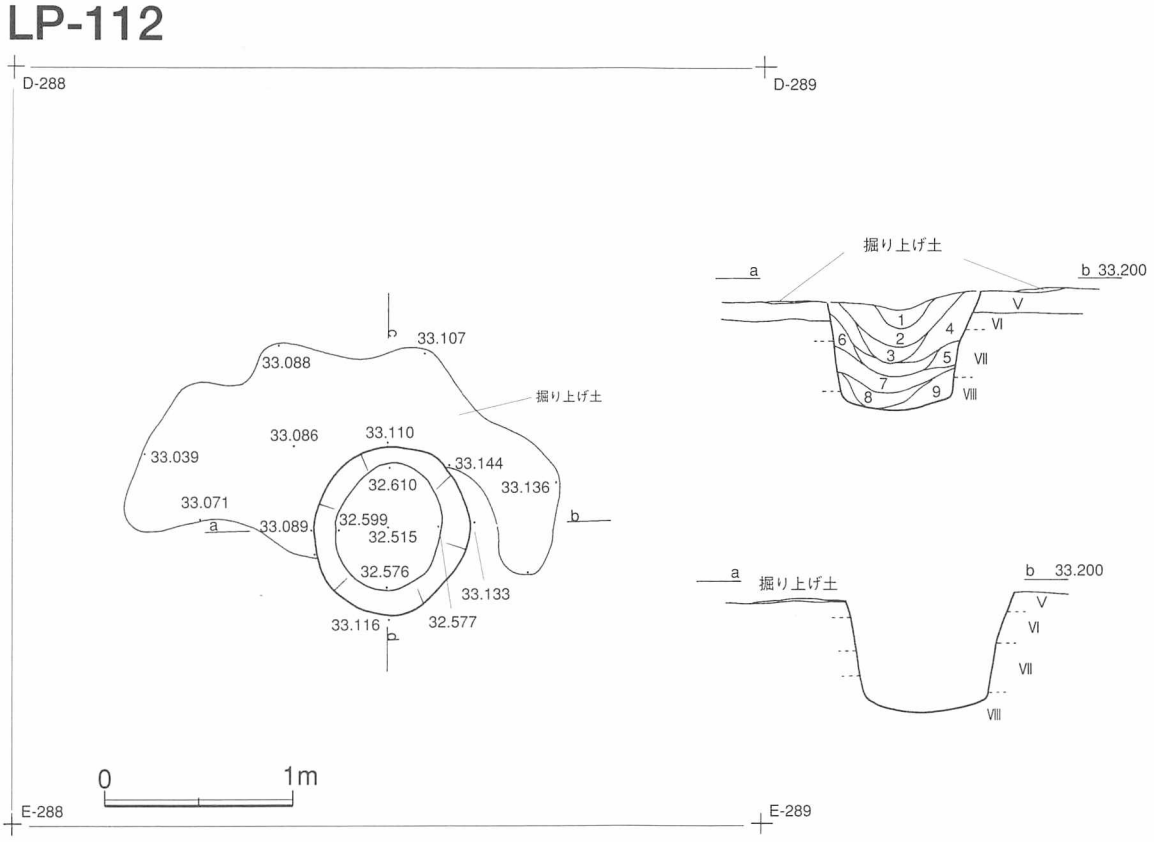
位置：D-288-　規模：0.89×0.82／0.46×0.68／0.64m

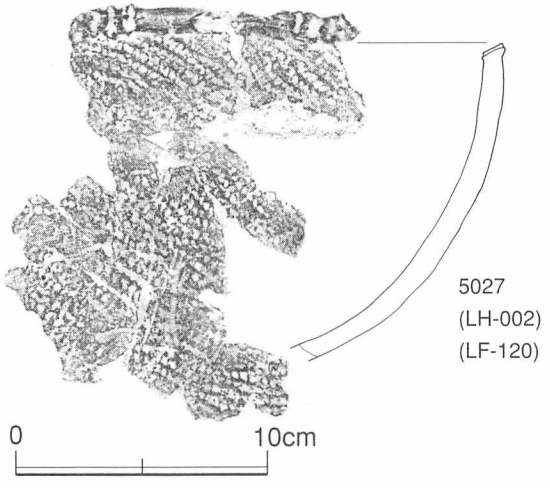
長軸方向：N-21°-E

特徴　Ⅳ層上面で既にTa-cが窪んでいることを確認した。Ⅴ層中の遺構であると想定してⅣ層を除去すると、窪みにたまったTa-cの周囲に堀上げ土と思われるローム質土が混じった黒褐色土が検出された。平面プランは円形に近い楕円形で、壁は垂直気味に立ち上がる。堆積状況は人為的な埋め戻しと考えられ、土壙墓の可能性が想定できる。また、近くにはLP-147がある。

遺物　5027はⅤ群c類の浅鉢形土器である。

時期　検出された層位および周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）





LP-112土層説明

1黒褐色土(Hue7.5YR2/2)Ta-cが少量混じる。Ⅲ≫Ⅳ

2Ta-cⅣ

3黒褐色土(Hue7.5YR3/2)Ta-cが混じる。Ⅴ＋Ⅳ

4黒色土(Hue7.5YR2/1)シルト質Ⅴ

5黒色土(Hue7.5YR1.7/1)シルト質Ⅴ

6極暗褐色土(Hue7.5YR2/3)。ロームブロックが混じり、しまりは弱い。Ⅴ≫Ⅶ

7黒褐色土(Hue7.5YR2/2)。6よりもロームブロックが多く混じる。Ⅴ＞Ⅶ

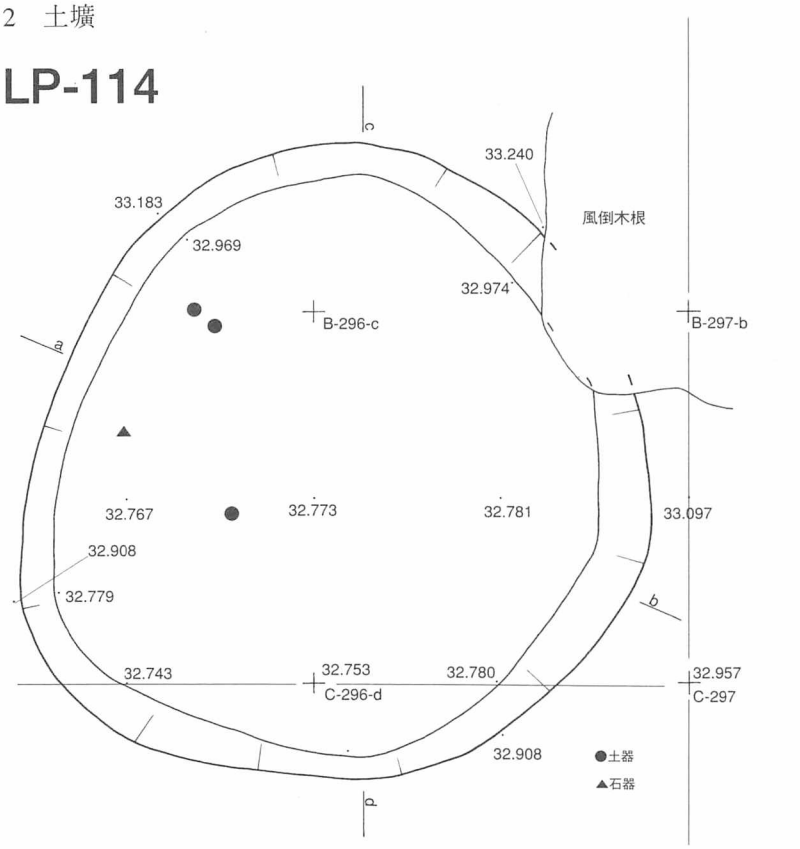
8黒色土(Hue7.5YR2/1)シルト質。しまりは弱い。Ⅴ

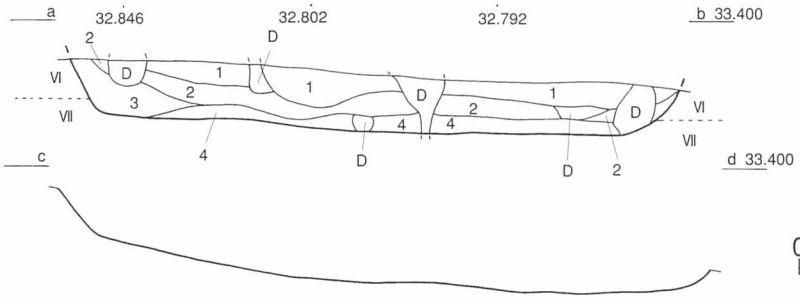
9暗褐色土(Hue7.5YR3/3)シルト質。ロームブロックが混じり、ボソボソしている。Ⅴ＋Ⅶ

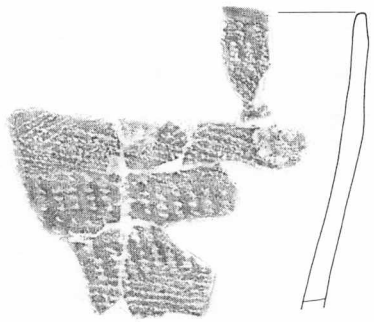
堀上げ土、黒褐色土(Hue7.5YR2/2)ロームブロックが混じる。Ⅴ＋Ⅶ

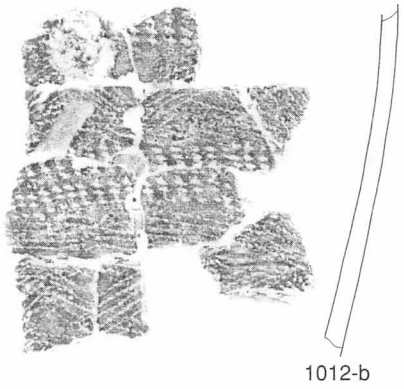
図Ⅳ-26　LP-112と遺物

LP-114







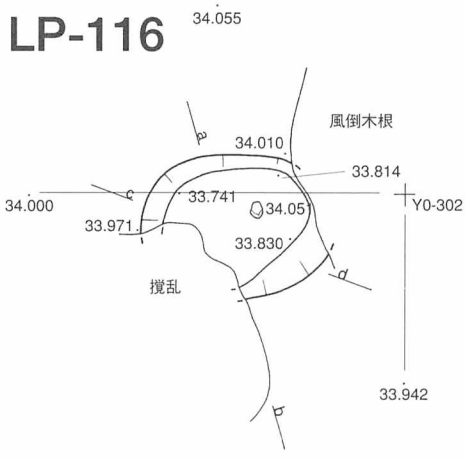


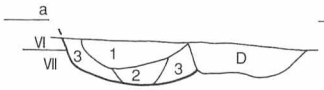


LP-114土層説明
1　黒褐色(10YR2/2)土　En-aパミス混ざる
2　褐色(10YR4/4)土
3　褐色(10YR4/6)土
4　黄褐色(10YR5/6)土



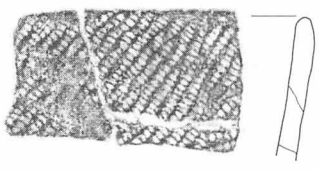
LP-116





LP-116土層説明
1　黒褐色(7.5YR2/2)土
2　暗褐色(7.5YR3/3)土
3　暗褐色(10YR3/4)土

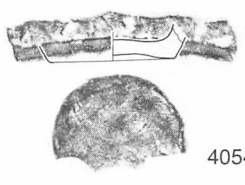




40542



40543



40544



図Ⅳ-27　LP-114・116と遺物

LP-114（図Ⅳ-27／図版-17・37，38）

位置：B-296-a,B-296-b,B-296-c,B-296-d　規模：3.52×3.24／2.86×3.04／0.30m

長軸方向：N-55°-E

特徴　南側の低湿部へ傾斜していく緩斜面上に立置する。Ⅵ層上面で円形状の黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は不整な円形を呈し、北東側の一部は撹乱されている。竪穴住居跡様の規模だが、床面に炉跡と考えられる焼土が検出できなかったこと、壙底が斜面の傾斜と同じ南側に傾斜していることなどから、住居跡とは区別した。覆土中は撹乱を受けている部分が多かったため、壁の検出は困難であった。そのため土の締まり具合などを考慮しつつ壁を確認した。覆土中には撹乱が多くみられた。遺構かどうか、疑問が残る。また調査時には、壙底及び周囲のⅥ層上面をさらに5cm程掘り下げて、本遺構に関連するピットの確認に努めたが、検出できなかった。覆土上部から土器片、フレイク（黒曜石）が数点出土している。

遺物　1012はⅠ群b-4類の深鉢形土器である。

時期　不明（澤田　健）

LP-116（図Ⅳ-28／図版-107～123）

位置：X0-301-c,Y0-301-d　規模：（0.88）×0.76／0.62×（0.76）／0.23m

長軸方向：N-84°-W

特徴　台地上の最東端に位置し、Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は東側及び西側が撹乱されているが、およそ楕円形を呈する。壙底は若干窪み、壁面は緩やかである。覆土上部から自然礫が1点出土している。また壙口部付近から土器片、オロシガネ状石製品が出土している。性格は不明である。

遺物　40542～40544はⅣ群b類の深鉢形土器である。

時期　不明（澤田　健）

LP-117（図Ⅳ-28／図版-107～123）

位置：X0-296-a　規模：1.74×1.16／0.77×1.12／0.31m

長軸方向：N-7°-E

特徴　Ⅴ層下位でLH-101とLP-145の共通のセクション中で確認した。LH-101とLP-145の両方よりも新しい。平面は楕円形で、壁は北から東側でやや急に、それ以外ではなだらかに立ち上がる。底面は平坦である。堆積状況は自然堆積と考えられ、掘込み面はⅤ層下位と考えられる。覆土1層中のⅣbは伴わない。

遺物　40599はⅣ群a類、40545はⅣ群b類、0246はⅣ群c類の深鉢形土器である。1はドリル。上下両端とも尖った形状を呈する。機能部と思われる下端は断面形がおよそ三角形状になっている。有茎凸基の石鏃の可能性もある。頁岩製。

時期　覆土中の遺物から縄文時代後期中葉以前と考えられる。（佐藤　剛）

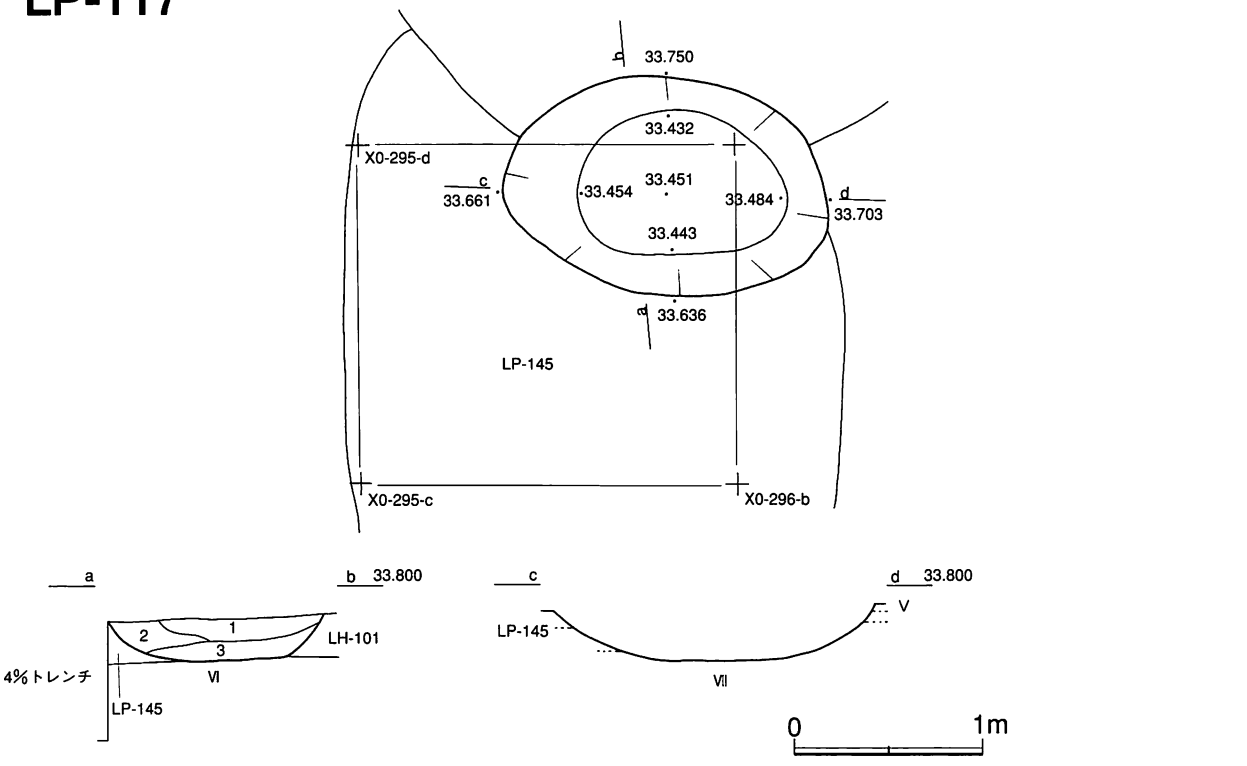
LP-118（図Ⅳ-29／図版-18・107～123，79～106，126～130）

位置：Z0-299-a,Z0-299-d　規模：2.80×2.52／1.97×2.50／0.33m

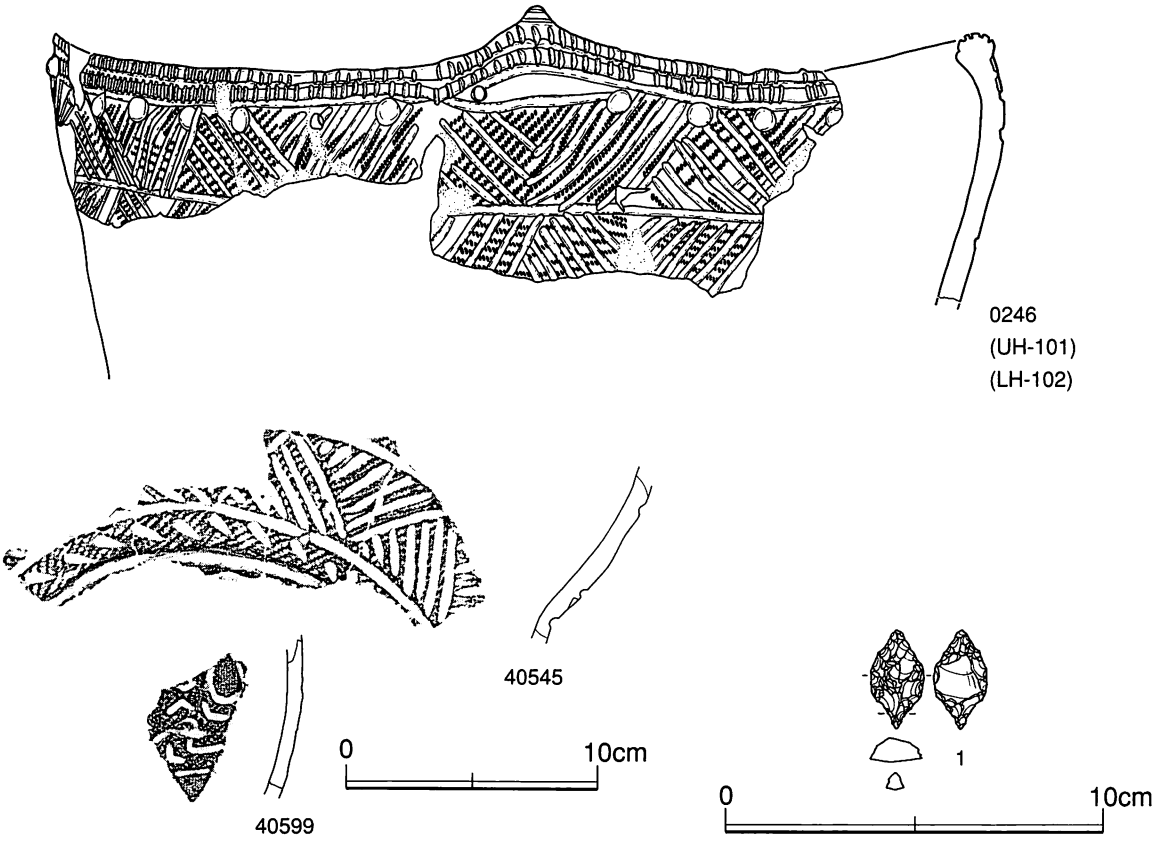
長軸方向：N-33°-W

特徴　Ⅴ層下位で黒色土のプランを確認した。平面は不整多角形もしくは五角形で、壁はやや垂直ぎみに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積状況は自然堆積で、掘込み面はⅤ層下位と考えられる。底面はさらに5cm程下げて焼土、柱穴等の確認に努めたが、見つからなかった。中心部の覆土1層中のⅠb4は他の遺構の掘り上げ土の流れ込み、点No2の周囲の土はやや暗めの褐色土で

LP-117



LP-117土層説明
1 黒褐色(Hue7.5YR2/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V＋VI
2 極暗褐色(Hue7.5YR2/3)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。VI＞V
3 褐色(Hue10YR4/3)シルト質粘土。粘性あり。しまりややあり。VI＋VII



図Ⅳ-28　LP-117と遺物

あったため、遺構がないか周りの土を残して掘り下げたが、確認出来ず、近くに撹乱があったためその影響と判断した。

遺物　0221,40546,40547はⅣ群b類、4617はⅣ群c類の深鉢形土器である。5025はⅤ群c類の深鉢形土器胴部と考えられる。1はドリル。三角形状のつまみ部をもつ棒状のもの。下端は欠損している。断面形は菱形を呈する。石鏃的な用途もしくは石製品とも考えられる。黒曜石製。2はすり石。断面三角形状礫の稜をすり面とするもの。すり面の断面形は若干凸状になる。この機能部縁辺の礫凸部にも部分的に擦痕が認められる。3はたたき石。円礫を素材とし、表裏面およびおよそ周縁にたたき痕をもつ。また表裏面にはたたき痕よりは時間的に古い擦痕が認められる。4はたたき石。バナナ状に湾曲した偏平な礫を素材とし、表裏面の一部にあばた状に窪んだたたき痕をもつ。2、3は砂岩製、4は泥岩製。

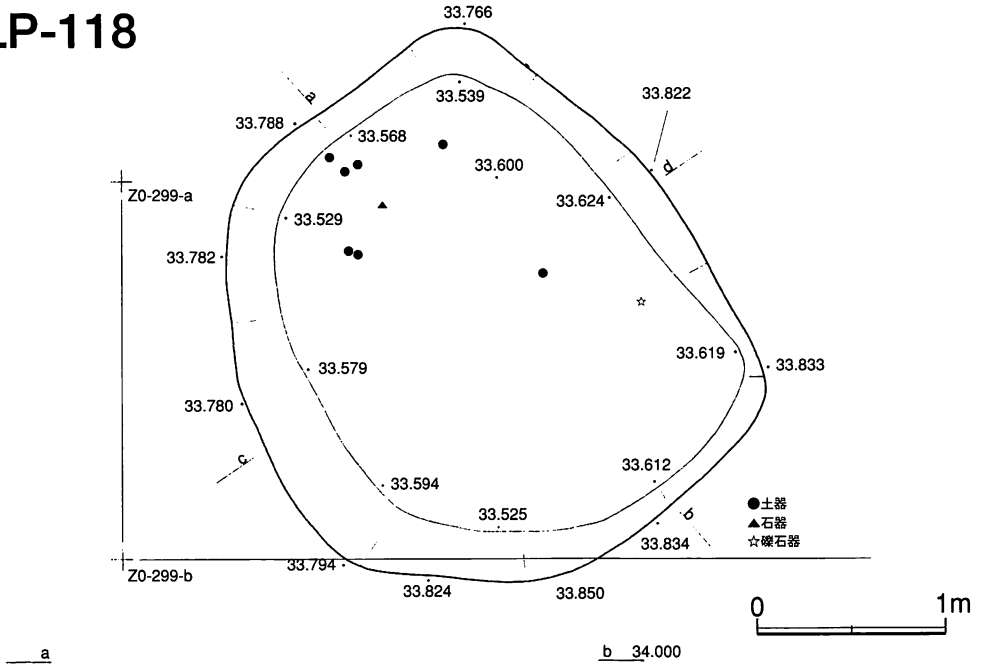
時期　覆土中の遺物および堆積状況から縄文時代後期中葉以前のの遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-119（図Ⅳ-31／図版-18・107～123）

位置：X0-299-c,X0-299-d,X0-300-a,X0-300-b　規模：3.28×3.10／2.60×2.89／0.26m

長軸方向：N-66°-W

特徴　Ⅵ層上面で円形状の黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は不整な円形を呈し、北西側の一部は撹乱されている。LP-114同様に竪穴住居跡様の規模だが、炉跡と考えられる焼土が検出できなかったことなどから住居跡とは区別した。覆土中は撹乱を受けている部分が多かったため、壁



LP-118土層説明

1 黒褐色(Hue5YR2/2)シルト。粘性あまりなし。しまりあり。Ⅴ＞Ⅵ

2 褐色(Hue7.5YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅵ＞Ⅴ≫En-P

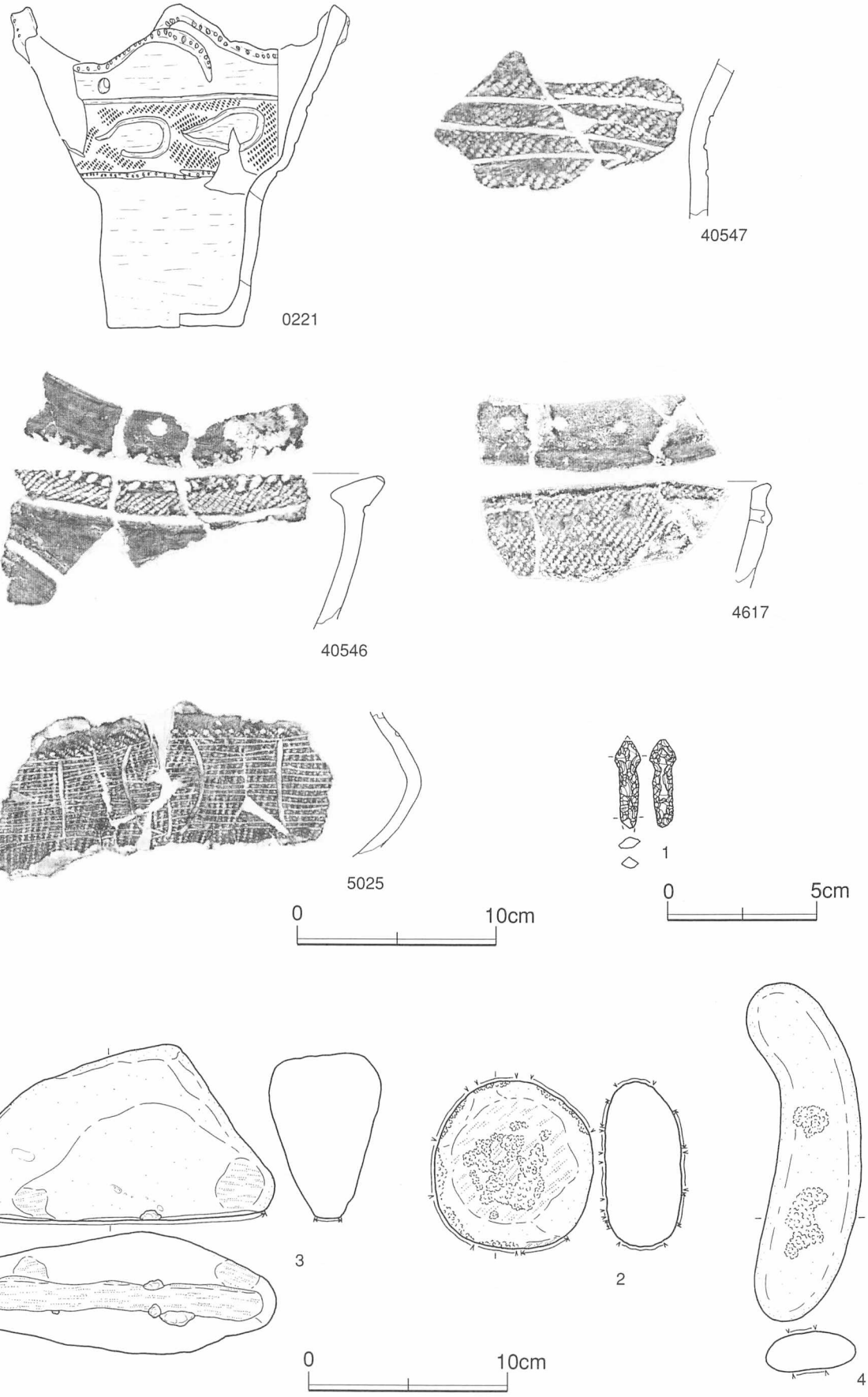
3 褐色(Hue7.5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅵ≫Ⅴ≫En-P

4 a暗褐色(Hue10YR3/4)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅵ≫En-P

4 b褐色(Hue10YR4/6)粘土質シルト。粘性あり。しまりなし。Ⅵ

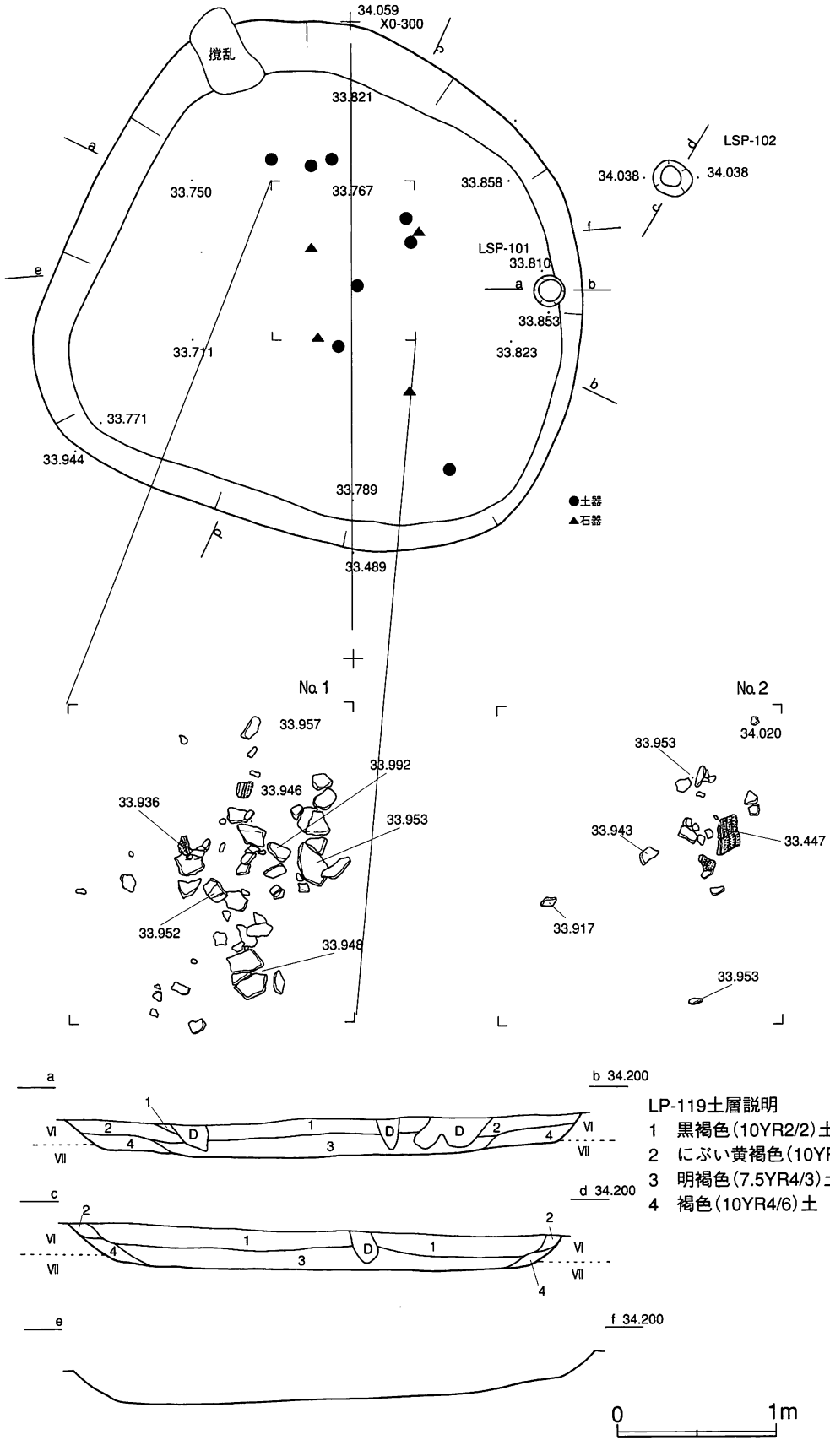
図Ⅳ-29　LP-118

LP-118



図Ⅳ-30　LP-118の遺物

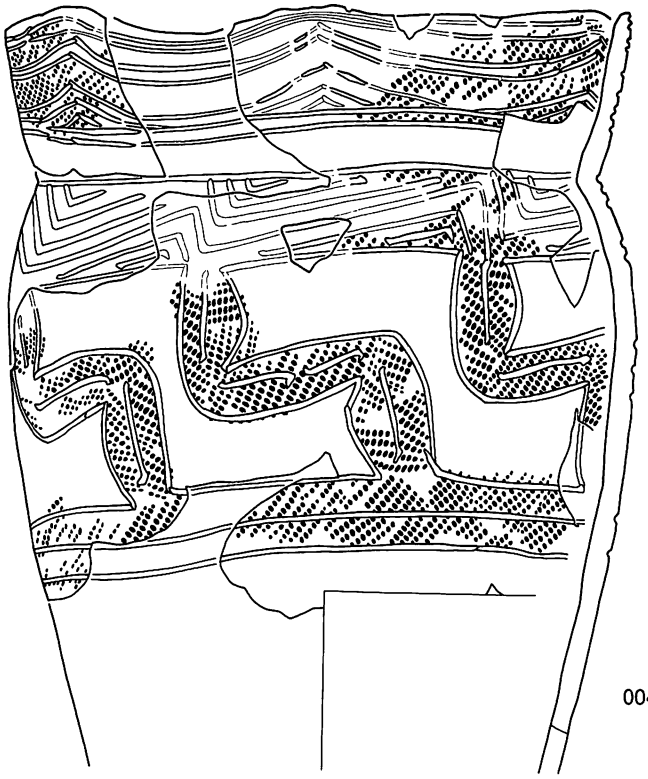
LP-119

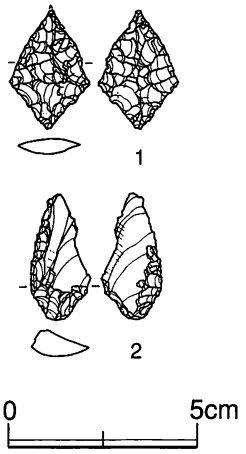


LP-119土層説明
1　黒褐色(10YR2/2)土　En-aパミス混ざる
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)土
3　明褐色(7.5YR4/3)土
4　褐色(10YR4/6)土

図Ⅳ-31　LP-119

LP-119

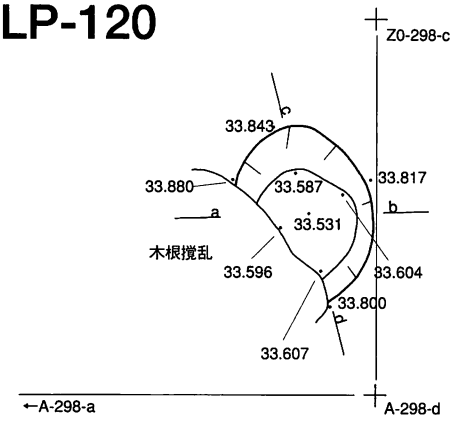


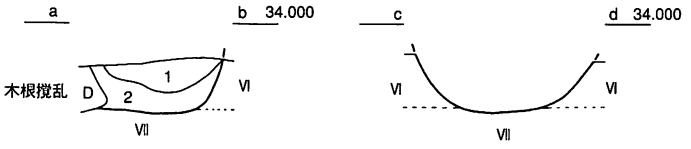


0041

0　10cm

LP-120

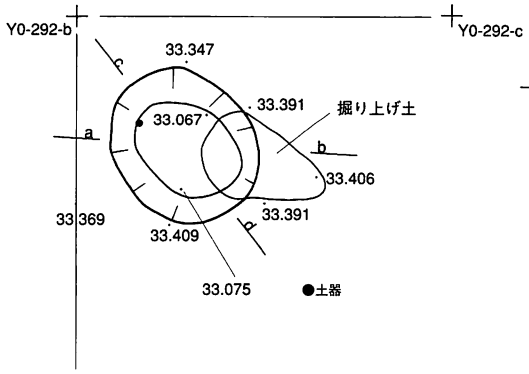


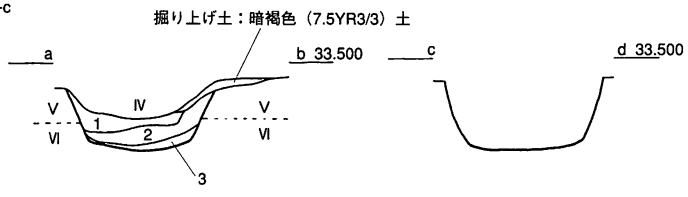


LP-120土層説明
1 黒色(Hue7.5YR2/2)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅴ≫En-P
2 極暗褐色(Hue7.5YR2/3)粘土質シルト。粘性あり。しまりあまりなし。Ⅴ＞Ⅵ＞En-P

0　1m

LP-121





0　1m

LP-121土層説明
1　黒色(7.5YR2/1)土
2　褐色(7.5YR4/3)土
3　黒褐色(10YR2/2)土
堀り上げ土　暗褐色(7.5YR3/3)土

図Ⅳ-32　LP-119・120・121と遺物

の検出は困難であった。そのため土の締まり具合などを考慮しつつ壁を確認している。付属するピットの可能性があるものは2つ検出している。いずれも確認面から20cmほどの深さである。LSP-101は東側の壁際に位置する。LSP-102は東側の壁口付近に位置する。すべて覆土上部から出土したものである。土器が集中して出土した部分を図示している。

遺物　0041はⅣ群b類の深鉢形土器である。1・2は石鏃。1は菱形のもの。不純物混ざりの黒曜石製。2は左側縁部のみ剥離調整された未製品と思われるもの。頁岩製。

時期　不明である。あるいは覆土出土の土器から縄文時代後期中葉～末葉の可能性がある。(澤田　健)

LP-120（図Ⅳ-32）

位置：Z0-298-b　規模：(0.95)×(0.70)／(0.52)×(0.60)／0.35m

長軸方向：N-1°-W

特徴　Ⅵ層上面で木痕で撹乱された黒色土のプランを確認した。平面は南西側で撹乱を受けているため不明であるが、楕円形と推定され、壁はやや急に立ち上がる。底面はやや丸みを帯びるが、平坦である。堆積状況は埋め戻しの可能性がある。掘込み面はⅤ層中の可能性が高い。周囲にはⅥ層上面で同規模のLP-123、124、LF-185があるが関係は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土中の遺物が少量なので不明であるが、縄文時代後期以前の遺構であると考えられる。(佐藤　剛)

LP-121（図Ⅳ-32）

位置：Y0-292-b　規模：0.84×0.72／0.44×0.59／0.33m

長軸方向：N-27°-W

特徴　Ⅴ層上面で、Ⅳ層が落ち込む円形の窪みとして確認した。また東側の窪み中及び壙口付近から、褐色を呈する堀り上げ土を検出している。平面形は楕円形を呈し、壙底はやや窪み、壁面の傾斜は急である。覆土は流れ込みによる自然堆積と考えられる。覆土2層から土器が1点出土している。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土および検出面周辺の土器から縄文時代後期後葉と考えられる。(澤田　健)

LP-122（図Ⅳ-33／図版-18・107～123）

位置：A-297-a　規模：1.20×1.03／0.61×0.90／0.52m

長軸方向：N-53°-W

特徴　Ⅵ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は隅丸長方形で、壁は開きながら直線的に立ち上がる。北西側の壁はやや掘りすぎてしまった所がある。底面はやや丸みを帯びるがほぼ平坦である。堆積状況は、埋め戻しの可能性が高く、掘込み面はⅤ層中が考えられる。土壙墓の可能性が高い。

遺物　0229,4587,4588は深鉢形、0217は瓶形を呈するⅣ群b類土器である。0299は覆土の上位で出土している。

時期　縄文時代後期中葉の時期の遺構と考えられる。(佐藤　剛)

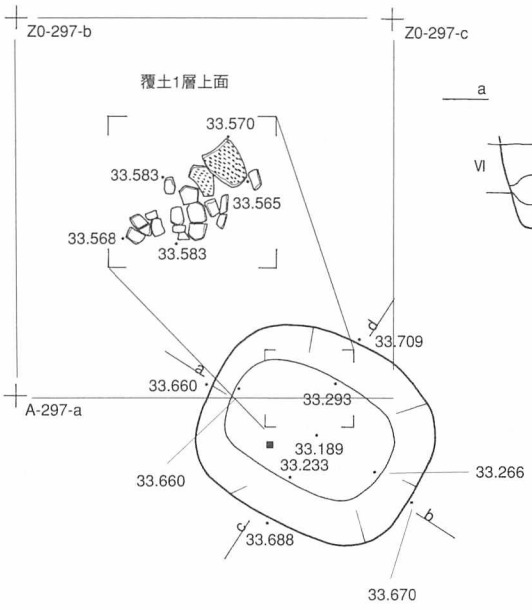
LP-123（図Ⅳ-34／図版-107～123）

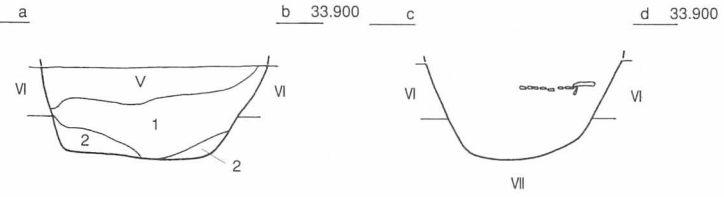
位置：A-298-a　規模：0.78×(0.62)／0.35×0.50／0.22m

長軸方向：N-59°-W

特徴　Ⅵ層上面で風倒木に壊された黒色土のプランを確認した。平面は丸みを帯びた楕円形で、壁は残りの良い南側でやや急に立ち上がる。底面はやや傾斜があるが、ほぼ平坦である。堆積状況は自

LP-122

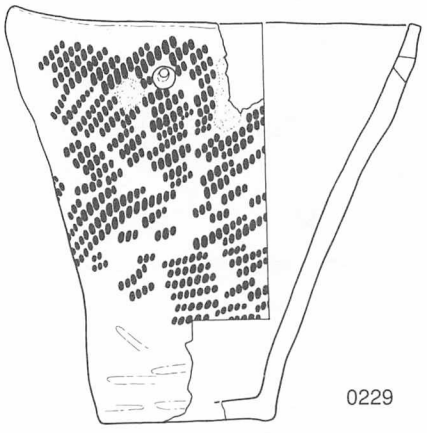


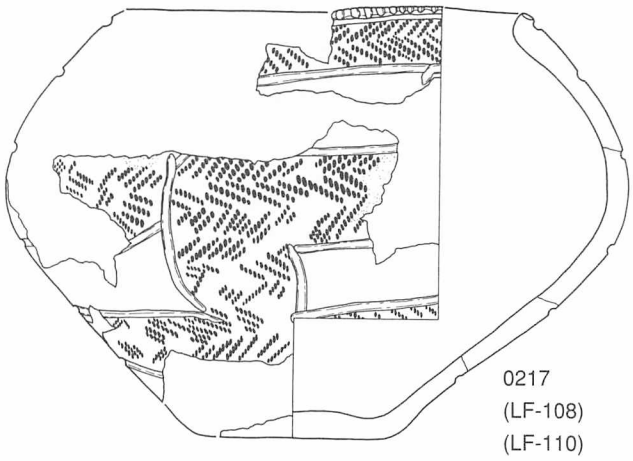


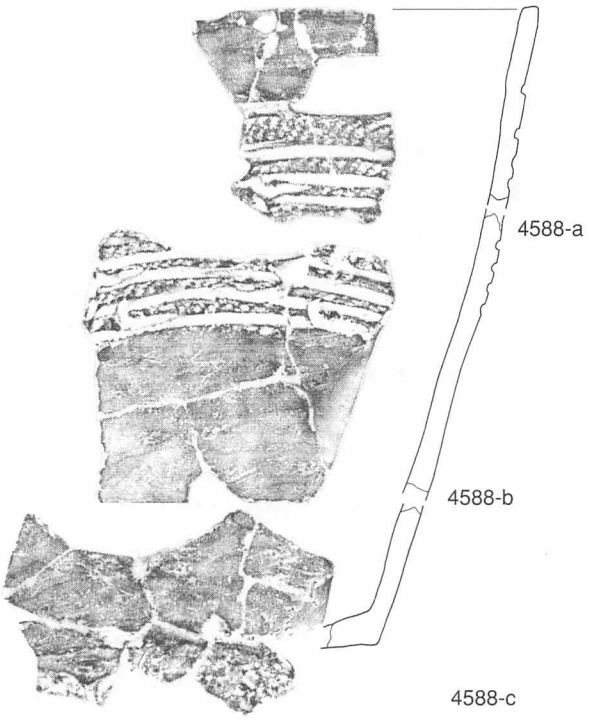
LP-122土層説明

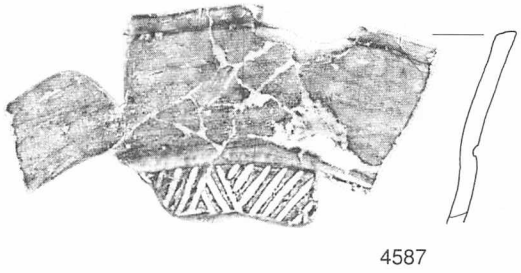
1 暗赤褐色(Hue5YR3/4)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ＋Ⅵ＋Ⅶ
鉄分を多く含むため赤化していると考えられる。

2 暗褐色(Hue7.5YR3/3)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅵ＞Ⅴ





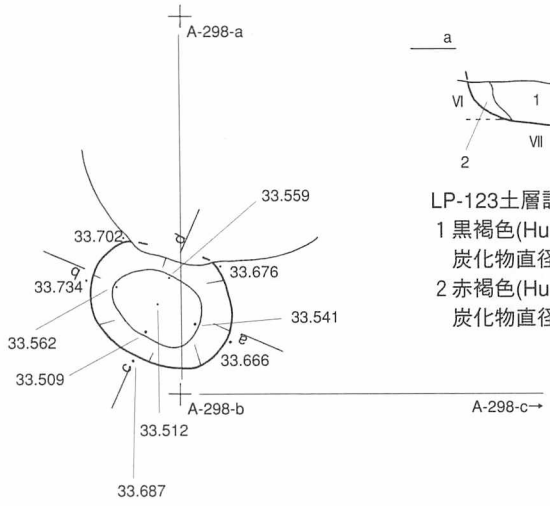


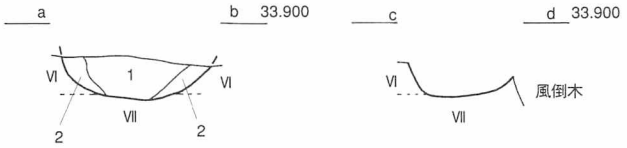


0　10cm

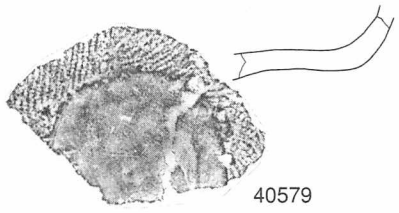
図Ⅳ-33　LP-122と遺物

LP-123



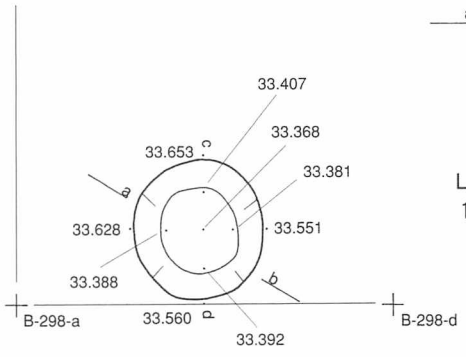


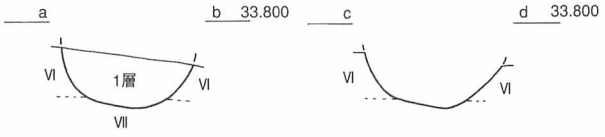
LP-123土層説明
1 黒褐色(Hue7.5YR2/2)シルト質粘土。粘性あり。しまりややあり。Ⅴ＞Ⅵ＞En-P
炭化物直径 5 ㎜含む。
2 赤褐色(Hue5YR3/6)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ＞Ⅵ＞En-P
炭化物直径 5 ㎜含む。鉄分を多く含むため赤色化していると考えられる。



0　10cm

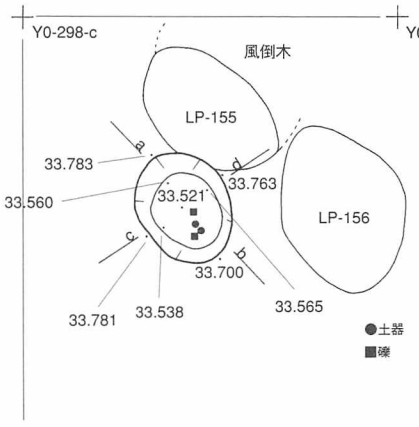
LP-124

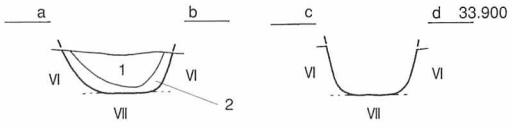




LP-124土層説明
1 黒褐色(Hue10YR43/1)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあまりなし。
Ⅴ＋Ⅵ≫En-P

LP-125





LP-125土層説明
1 極暗褐色(Hue7.5YR2/3)シルト質粘土。粘性あり。しまりややあり。Ⅴ＞Ⅵ
2 褐色(Hue7.5YR4/3)シルト質粘土。粘性あり。しまりあり。Ⅵ＞Ⅴ

0　1m

図Ⅳ-34　LP-123・124・125 と遺物

然堆積と考えられるが埋め戻しの可能性もあり、掘込み面はⅤ層中と考えられる。覆土中に炭化物が均一に見られたが、焼土は検出されなかった。

遺物　40579はⅣ群c類の深鉢形土器底部である。

時期　覆土中の遺物から縄文時代後期末葉以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-124（図Ⅳ-34）

位置：A-298-b　規模：0.73×0.69／0.41×0.45／0.29m

長軸方向：N-9°-W

特徴　Ⅵ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は円形で、壁はなだらかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。堆積状況は埋め戻しの可能性が高く、掘込み面はⅤ層中と考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　遺物が少なく不明であるが、縄文時代後期中葉以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-125（図Ⅳ-34）

位置：Y0-298-c　規模：0.31×0.24／0.17×0.21／0.26m

長軸方向：N-25°-W

特徴　Ⅵ層上面で褐色土のプランを確認した。平面はほぼ円形で、壁はなだらかに立ち上がる北西側を除いて、垂直ぎみに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積状況は自然堆積と考えられ、掘込み面は、Ⅴ層中と考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土中の遺物が少ないため不明であるが、周囲の包含層中からも遺物が出土している縄文時代中期後半以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-128（図Ⅳ-35）

位置：V0-300-b,V0-300-c,W0-300-a,W0-300-d　規模：1.54×0.79／0.63×1.28／0.13m

長軸方向：N-89°-E

特徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は長軸と短軸の比がおよそ2:1の長楕円形を呈する。壙底は皿状で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は壙底付近にEn-aロームがブロック状に入っていた。堆積状況から埋め戻しの可能性が考えられる。また南西方向に1.5m程離れたところでLP-129を検出している。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LP-129（図Ⅳ-35）

位置：W0-299-d,W0-300-a　規模：1.08×0.80／0.37×0.80／0.17m

長軸方向：N-6°-E

特徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面形は不整な長楕円形を呈し、長軸と短軸の比はおよそ1.4：1である。覆土は流れ込みによる自然堆積と考えられる。南側にLSP-115が隣接するが、関連するものかどうかは不明である。

遺物　掲載遺物なし

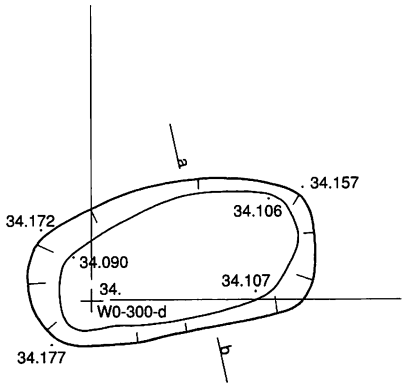
時期　不明（澤田　健）

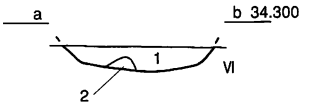
LP-130（図Ⅳ-35）

位置：X0-301-d　規模：(0,70)×(0.42)/×(0.29)/0,24m

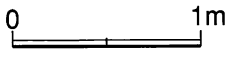
長軸方向：N-72°-E

LP-128

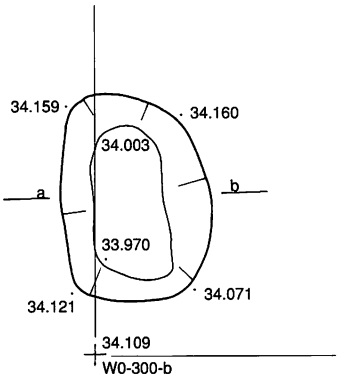


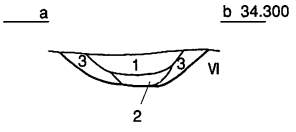


LP-128土層説明
1　黒色(10YR2/1)土
2　黄褐色土(10YR5/6)土　ブロック状のEnL



LP-129

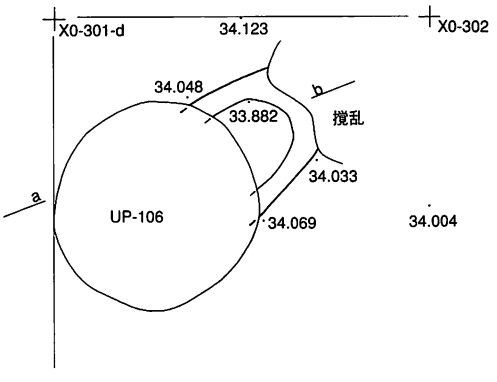


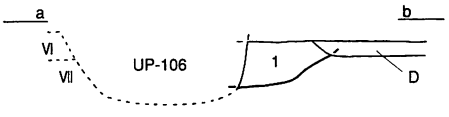


LP-129土層説明
1　黒色(7.5YR2/1)土
2　黒褐色(7.5YR3/1)土
3　明褐色(7.5YR5/6)土

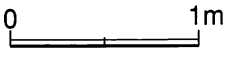


LP-130

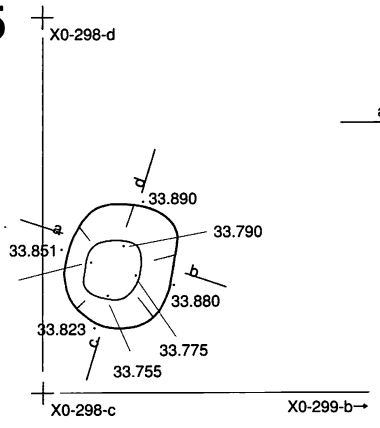


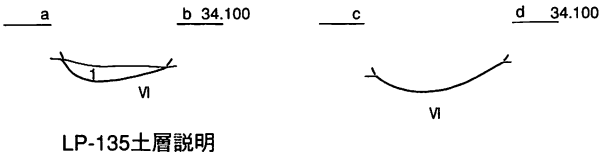


LP-130土層説明
1　黒褐色土(7.5YR2/2)土

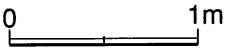


LP-135



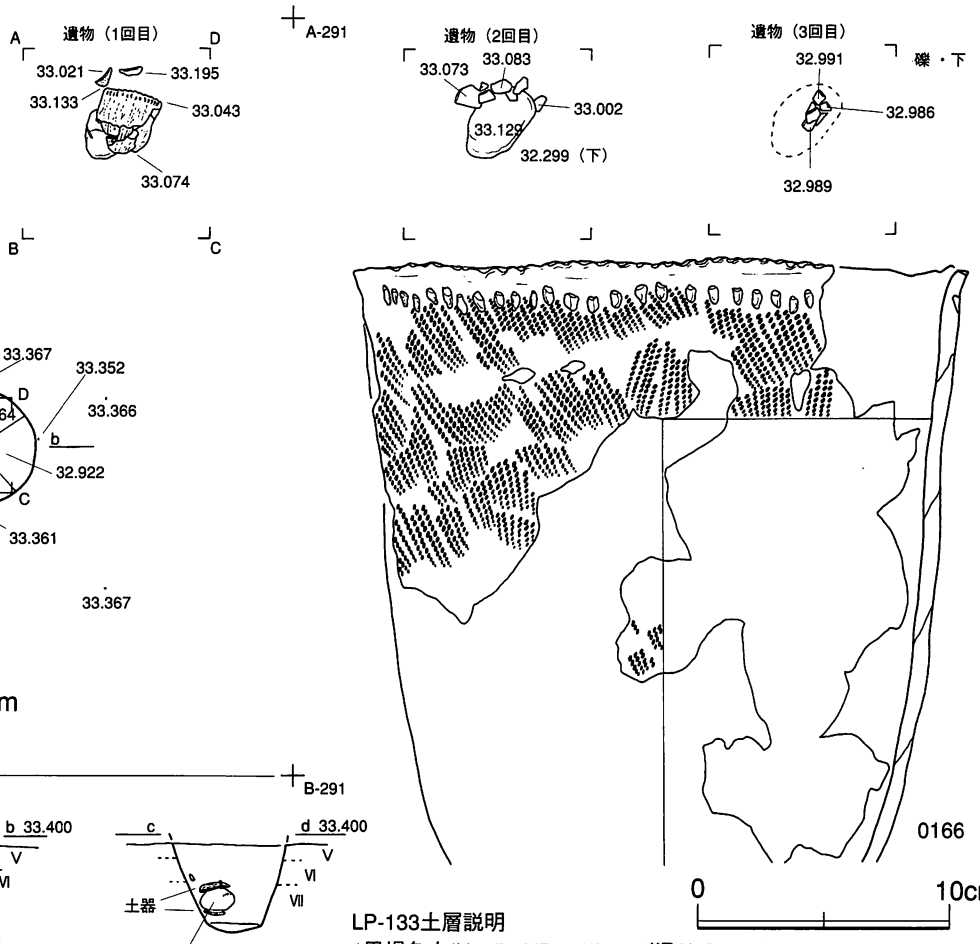


LP-135土層説明
1 黒褐色(Hue10YR2/2)シルト質粘土。粘性あり。しまりあり。Ⅵ＞Ⅴ
焼土粒直径２～５㎜微量含む。



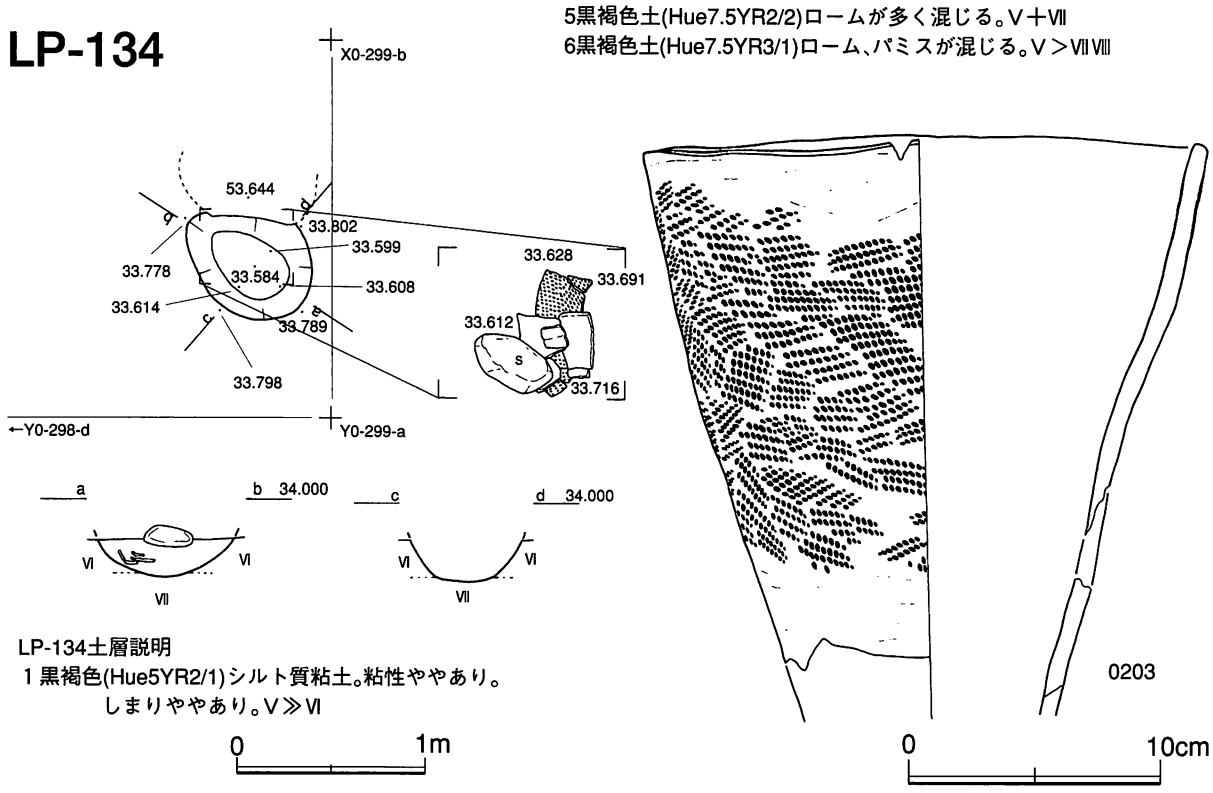
図Ⅳ-35　LP-128・129・130・135

LP-133



LP-133土層説明
1黒褐色土(Hue7.5YR2/2)Ta-cが混じる。III＜IV
2暗褐色土(Hue7.5YR3/4)Ta-c。IV
3黒色土(Hue7.5YR2/1)シルト質。V
4極暗褐色土(Hue7.5YR2/3)ロームが混じる。V＞VII
5黒褐色土(Hue7.5YR2/2)ロームが多く混じる。V＋VII
6黒褐色土(Hue7.5YR3/1)ローム、パミスが混じる。V＞VII VIII

LP-134



LP-134土層説明
1黒褐色(Hue5YR2/1)シルト質粘土。粘性ややあり。
しまりややあり。V≫VI

図IV-36　LP-133・134と遺物

特徴　Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。南側はUP-106に切られており、北側は撹乱を受けているため、全体の形状は不明である。残存している部分の壁面は緩やかであった。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LP-133（図Ⅳ-36／図版-19・41）

位置：A-290-　規模：(0.70)×(0.60)／0.29×0.29／0.48m

長軸方向：N-75°-W

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいにTa-cがまとまってたまっているのが確認された。更に掘り下げると大狩部式に相当する土器がTa-cの下位からつぶれた状態でまとまって出土した。更に、大きな礫がその下に確認できた。土器の破片は礫の下からも出土している。また、口縁部の一部はまとまりより上位にもあり、ずり落ちたように壁に沿った状態で出土した。平面プランは卵形に近く、やや尖り気味の床面から壁が斜めに立ち上がる。堆積状況は人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物　0166はⅥ群a類と考えられる深鉢形土器である。底部は欠失しており、意図的に取り去られたと考えられる。

時期　検出された層位およびまとまって出土した土器が大狩部式であることから、縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

LP-134（図Ⅳ-36／図版-19・107～123）

位置：X0-298-c　規模：0.75×(0.58)／0.30×0.45／0.22m

長軸方向：N-46°-W

特徴　Ⅵ層上面で大型の礫とUP-109に切られた黒色土のプランを確認した。平面は北側で壊されているが卵形で、壁は残りのいい部分から、やや急に立ち上がると考えられる。底面はやや丸みを帯びている。堆積状況は埋め戻しと考えられ、掘込み面はⅤ層中と考えられる。

遺物　0203はⅣ群b類の深鉢形土器である。底部の欠失は意図的なものと考えられる。

時期　土壙に伴っている底面から出土した土器から、縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。（佐藤剛）

LP-135（図Ⅳ-35／図版）

位置：X0-298-d　規模：0.67×0.57／0.29×0.32／0.15m

長軸方向：N-24°-E

特徴　Ⅵ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は円形に近い方形で、壁はほとんど確認出来なかったが、なだらかに立ち上がると推定される。底面は丸みを帯びている。堆積状況は覆土の1層が確認されているのみである。堆積状況と焼土粒が確認されていることから、埋め戻しの可能性もある。掘込み面はⅤ層中と考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　遺物が少なく不明であるが、縄文時代中期以後の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

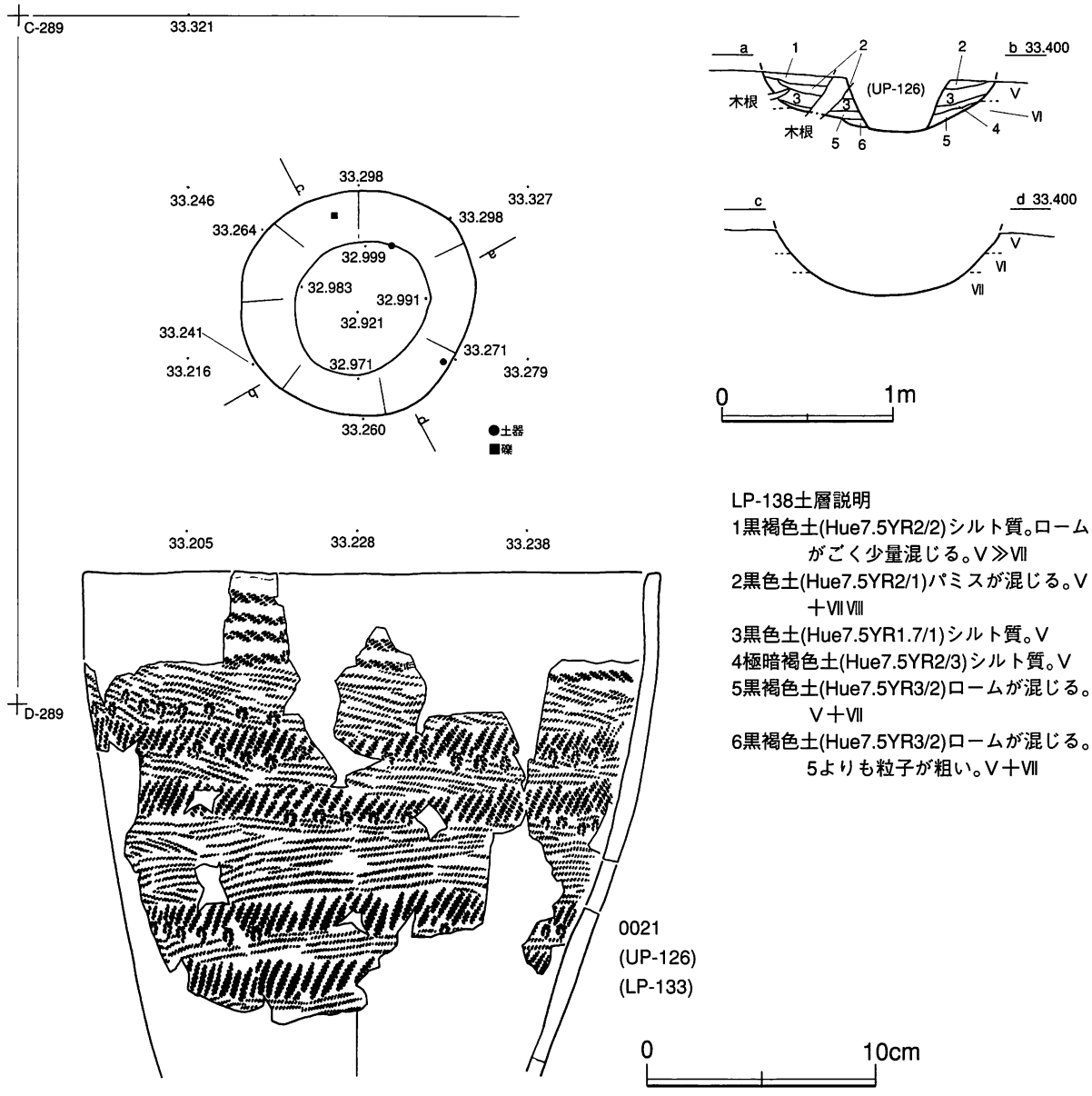
LP-138（図Ⅳ-37／図版-37，38）

位置：c-289-　規模：(1.40)×(1.32)／0.74×0.82／(0.35)m

長軸方向：(N-70.5°-E)

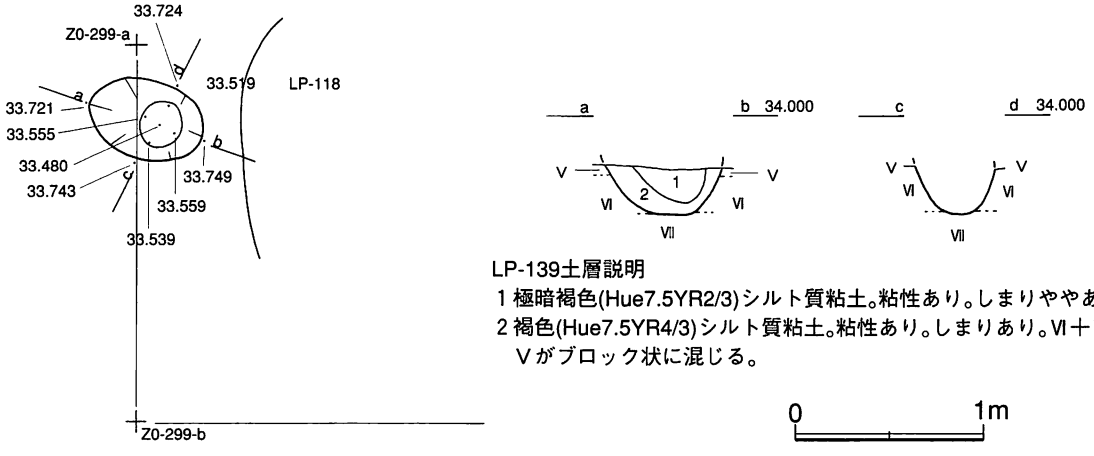
特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに黒褐色土のまとまりを確認した。UP-126を検出したさいのトレンチを伸ばして見ると、木根撹乱などにより非常に不明瞭ではあったが緩やかに壁が立ち上がったた

LP-138



LP-138土層説明
1黒褐色土(Hue7.5YR2/2)シルト質。ロームがごく少量混じる。V≫VII
2黒色土(Hue7.5YR2/1)パミスが混じる。V＋VII VIII
3黒色土(Hue7.5YR1.7/1)シルト質。V
4極暗褐色土(Hue7.5YR2/3)シルト質。V
5黒褐色土(Hue7.5YR3/2)ロームが混じる。V＋VII
6黒褐色土(Hue7.5YR3/2)ロームが混じる。5よりも粒子が粗い。V＋VII

LP-139



LP-139土層説明
1極暗褐色(Hue7.5YR2/3)シルト質粘土。粘性あり。しまりややあり。V＞VI
2褐色(Hue7.5YR4/3)シルト質粘土。粘性あり。しまりあり。VI＋V
Vがブロック状に混じる。

図Ⅳ-37　LP-138・139と遺物

め、遺構と認定した。UP-126により、中央よりの部分が切られている。平面プランはほぼ円形で、皿状の土壙である。床面から縄文時代早期のコッタロ式土器の破片が出土している。

遺物　0021はⅠ群b-1類の深鉢形土器である。

時期　床面出土の土器から、縄文時代早期後半の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

LP-139（図Ⅳ-37）

位置：Z0-299-a　規模：0.62×0.41／0.26×0.22／0.27m

長軸方向：N-65°-W

特徴　Ⅴ層下位でLP-118の周囲を精査中に褐色土のプランを確認した。平面は楕円形で、壁はやや垂直ぎみに立ち上がる。底面は確認面での平面形の中心から長軸方向の東側にずれ、やや丸みを帯びる。堆積状況は自然堆積と考えられるが、掘り方を持つ柱痕の可能性もある。掘込み面はⅤ層中と考えられる。堆積状況から、柱痕としてもLP-118の外側に向いているため関係は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　遺物が出土していないため不明であるが、LP-118の柱穴とすれば縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-140（図Ⅳ-38／図版-37，38，107～123）

位置：W0-299-b　規模：3.26×3.04／1.96×2.46／0.32m

長軸方向：N-23°-W

特徴　Ⅵ層上面で中心が褐色土で周囲が黒色土のプランを確認した。全体的に木根によるものと思われる層位の乱れがあった。平面は隅丸五角形で、壁はなだらかに立ち上がる。底面は平坦であるが、東側で窪み、南側で木根により撹乱を受けている。確認面の中心部の褐色土は撹乱を受けているため、その影響なのかそれとも特定は出来なかったが周囲の遺構の掘り上げ土なのかは不明である。炉跡は確認されなかったが、覆土中に焼土の混じる土があるため木根により巻き上げられている可能性もある。付属する土壙はP-1～5である。P-1～4は柱穴の可能性があるが、P-1が深くしっかりしているほかは、あまり明瞭ではない。P-1の周囲はややしまっており踏み固めている可能性がある。P-5は浅い皿状である。

遺物　1020はⅠ群b-3類の深鉢形土器口縁部、40548はⅣ群b類の深鉢形土器胴部である。

時期　覆土中の遺物から縄文時代早期後葉から後期中葉の時期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-141（図Ⅳ-38）

位置：B-291-b,B-291-c　規模：(0.72)×(0.62)／0.39×0.48／(0.26)m

長軸方向：N-79°-W

特徴　Ⅵ層まで掘り下げてから黒色土のまとまりを確認した。平面プランは卵形で、平坦な床面からやや斜めに壁が立ち上がった。堆積状況は人為的な埋め戻しと推測できる。遺物は確認されなかった。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。あるいは周辺の遺物から縄文時代後期中葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

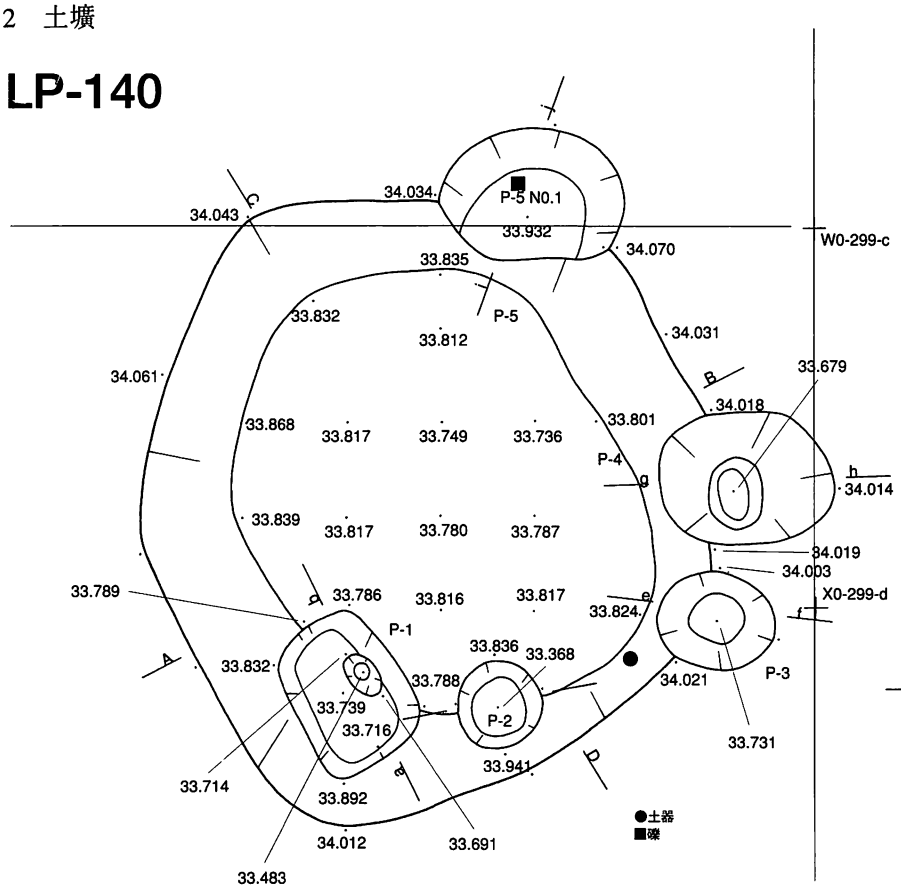
LP-142（図Ⅳ-39／図版-19・79～106）

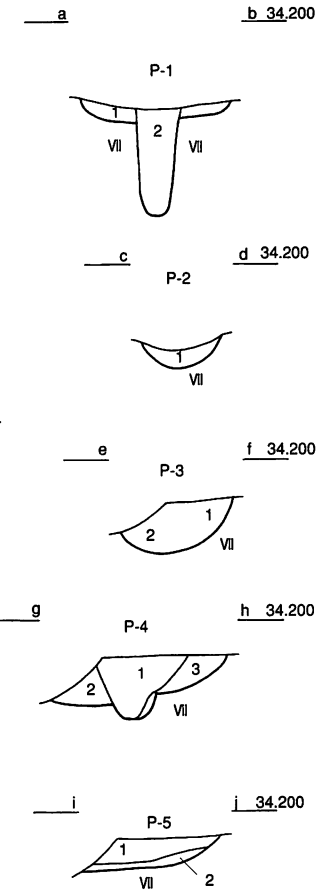
位置：A-289-b,A-289-c,B-289-a,B-289-d　規模：3.08×1.72／1.27×2.46／0.36m

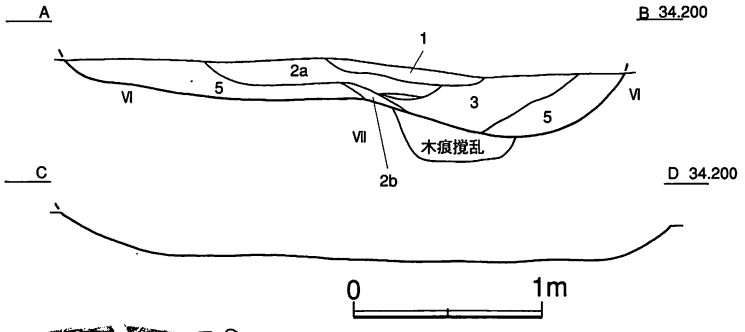
長軸方向：N-50.5°-E

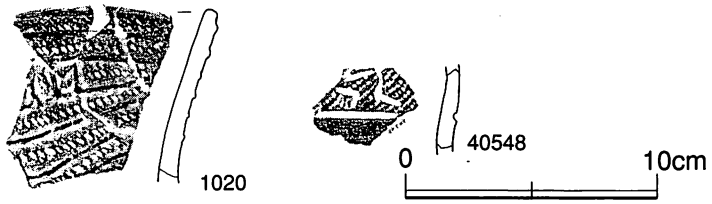
特徴　Ⅴ層上面においてTa-cが広い範囲にまとまってたまっているのが確認された。ベルトを残して掘り進めたものの、南半の壁の立ち上がりが明瞭でなく、北側には風倒木痕の影響があり、窪地で

LP-140



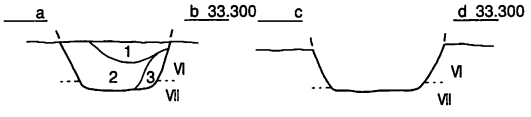


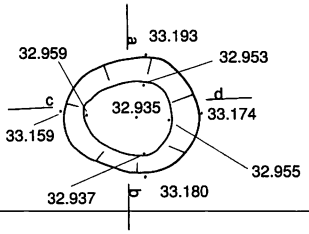




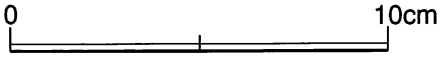
LP-140土層説明
1 褐色(Hue7.5YR4/4)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅵ十Ⅶ
掘り上げ土の流れ込み？
2 a黒褐色(Hue10YR3/1)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅴ＞Ⅵ
2 bにぶい赤褐色(Hue5YR4/4)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅴ＞Ⅵ
3 黒褐色(Hue7.5YR3/1)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ＞Ⅵ
4 黒褐色(Hue7.5YR3/2)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅴ十Ⅵ
5 褐色(Hue7.5YR4/4)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅵ＞Ⅴ

LP-141



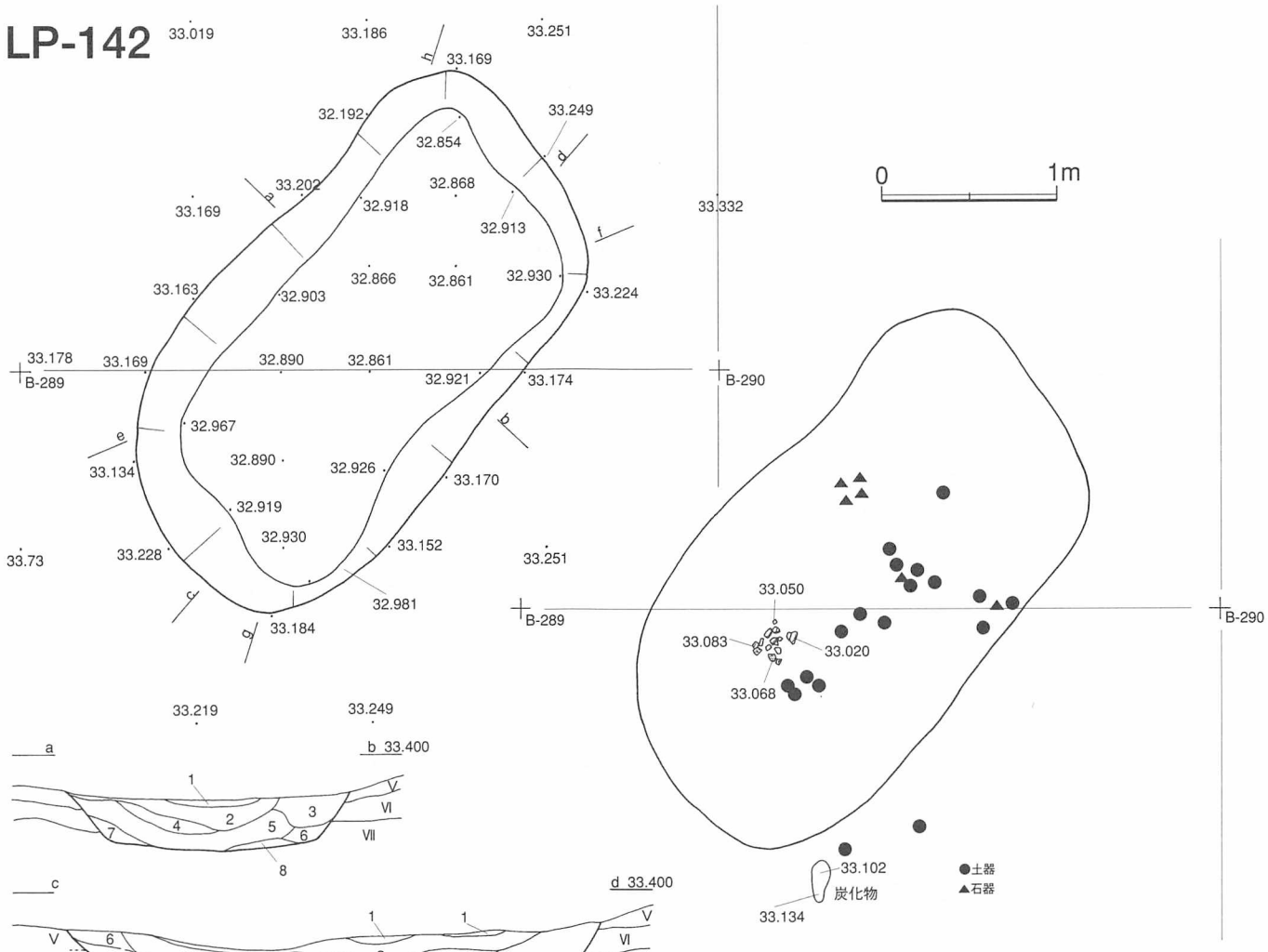


LP-141土層説明
1黒色土(Hue7.5YR1.7/1)シルト質。Ⅴ
2黒色土(Hue7.5YR2/1)パミス、ロームが所所に混じる。Ⅴ≫ⅥⅦ
3黒色土(Hue7.5YR2/1)ロームが混じる。Ⅴ≫Ⅵ



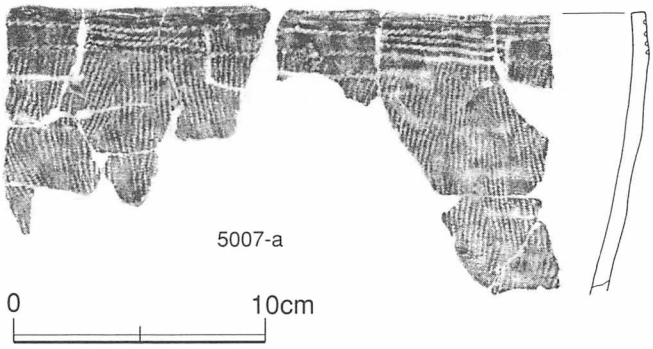
C-291

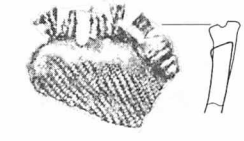
図Ⅳ-38　LP-140・141と遺物

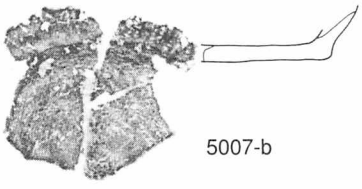


LP-142土層説明

1暗褐色土(Hue7.5YR3/4)Ta-cが多く混じり、非常に固い。Ⅲ≪Ⅳ
2Ta-cⅣ
3黒褐色土(Hue7.5YR2/2)Ta-cが少量混じる。Ⅴ＞Ⅳ
4黒褐色土(Hue5YR2/2)焼土(LF-214)Ta-cがごく少量混じる。Ⅴ≫Ⅳ
5黒色土(Hue7.5YR1.7/1)シルト質。Ⅴ
6黒褐色土(Hue7.5YR3/2)ロームが少量混じる。Ⅴ≫ⅥⅦ
7暗褐色土(Hue10YR3/4)パミス、ロームが混じる。Ⅴ＋Ⅵ、Ⅶ
8褐色土(Hue7.5YR4/4)ロームにパミス、黒色土が少量混じる。ⅥⅦ≫Ⅴ







図Ⅳ-39　LP-142 と遺構

はあるものの遺構であるかは疑問が残る。床面は平坦ではなくなだらかに南側に昇っており、炉や柱穴等は確認できなかった。覆土中には窪地を利用したと思われる焼土(LF-214)がある。遺物は主に覆土５層から出土しており、中には土器集中も見られた。ただし、出土位置や層位、レベル等を勘案するとLP-142ではなく覆土中の焼土に伴うものと推測できる。

遺物　5007は深鉢形土器、5648は浅鉢形土器口縁部である。いずれもⅤ群ｃ類である。

時期　遺構であるとすると、覆土中からは縄文時代晩期末葉の土器がまとまって出土していることからそれよりも古く、床面より少し浮いて出土した土器からあるいは縄文時代後期中葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LP-143（図Ⅳ-40）

位置：C-288-b,C-288-c　規模：0.68×0.64／0.38×0.42／0.40m

長軸方向：(N-29.5°-W)

特徴　Ⅴ層上面において、Ta-cがまとまってたまっているのが確認された。周辺にはローム質土が混じった堀上げ土があった。平面プランは円形で南側に傾斜している床面から東西方向は垂直気味に、南北方向はやや斜めに、壁が立ち上がっている。堆積状況は人為的な埋め戻しと推測できる。遺物は出土しなかった。西側に隣接してLP-144がある。また、北側ではLF-180が、LP-143の堀上げ土の上にある。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位や、Ta-cの堆積状況および周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

LP-144（図Ⅳ-40／図版-20）

位置：C-288-b,C-287-c　規模：0.92×(0.68)／0.38×0.59／0.49m

長軸方向：N-9°-E

特徴　Ⅴ層上面でTa-cがまとあってたまっているのが確認された。また、周辺には堀上げ土と思われるローム質土が少量混じった土もあった。西側の一部は調査の過程で少し掘り下げてしまった。平面プランは小判形で、北半の壁はやや急角度で立ち上がり、南半は緩やかである。堆積状況は人為的な埋め戻しと考えられる。東側に隣接してLP-143がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位およびTa-cの堆積状況、覆土中の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

LP-145（図Ⅳ-40）

位置：X0-295-c,X0-295-d　規模：(3.84)×(2.67)／(2.33)×(3.62)／(0.24)m

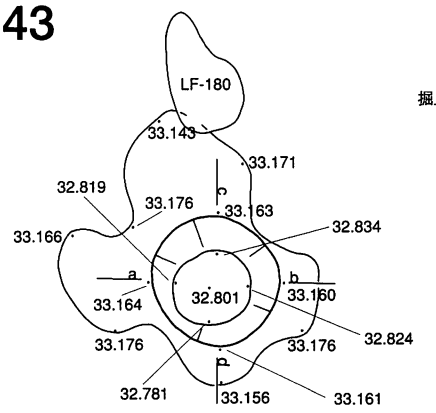
長軸方向：N-9°-E

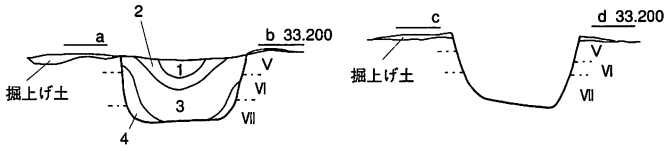
特徴　Ⅵ層上面で褐色土のプランを確認した。平面は隅丸長方形で、壁はなだらかに立ち上がる。底面は平坦である。底面はさらに５cm程下げて柱穴等の確認を行ったが見つからなかった。堆積状況は自然堆積と考えられ、掘込み面はⅥ層上面と考えられる。LH-101、LP-117に切られている。

遺物　掲載遺物なし

時期　縄文時代早期頃か？（佐藤　剛）

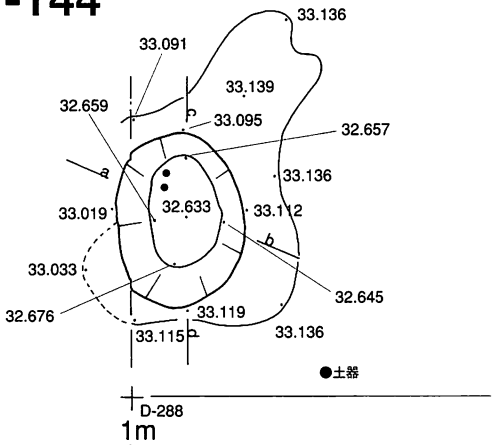
LP-143

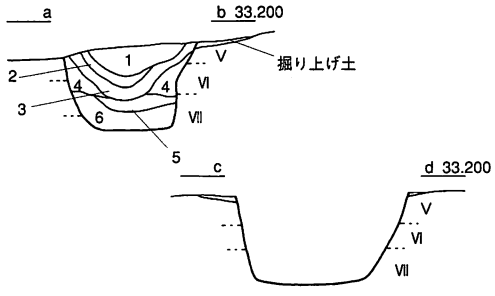




LP-143土層説明
1暗褐色土(Hue7.5YR3/4)粒子の細かいTa-cで、非常に固い。III≪Ⅳ
2Ta-cⅣ
3黒褐色土(Hue7.5YR2/2)シルト質。炭化物が混じる。V
4暗赤褐色土(Hue5YR3/3)粘土質シルト。赤みを帯びたロームブロックが混じる。V＋VII
5褐色土(Hue7.5YR4/4)粘土質シルト。ロームブロックが混じる。V＋VI VII
堀上げ土、黒褐色土(Hue7.5YR3/2) V≫VII

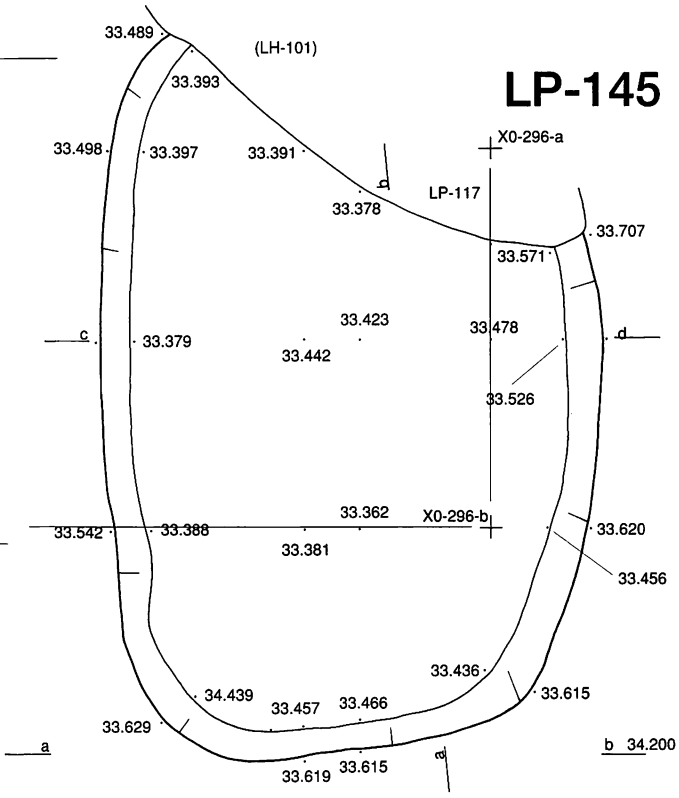
LP-144





LP-144土層説明
1黒色土(Hue7.5YR1.7/1)Ta-cが混じる。III＋Ⅳ
2暗褐色土(Hue7.5YR3/4)粒子の細かいTa-cで、非常に固い。Ⅳ
3Ta-cⅣ
4黒色土(Hue7.5YR2/1)シルト質。V
5黒褐色土(Hue7.5YR2/2)ごく少量のロームが混じる。V≫VI VII
6黒褐色土(Hue7.5YR3/2)パミスが混じる。炭化物が散在する。V＞VI VII

LP-145



LP-145土層説明
1暗褐色(Hue7.5YR3/3)シルト質粘土。粘性あり。しまりあまりなし。VI＞En-P
炭化物粒直径3～5㎜含む。
2褐色(Hue10YR4/6)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりややあり。VI＋VII＞En-P
3褐色(Hue7.5YR4/4)シルト質粘土。粘性あり。しまりあり。VI＋VII＞En-P

図Ⅳ-40　LP-143・145

LP-146（図Ⅳ-41／図版-107～123，126～130）

位置：V0-297-c,W0-297-d　規模：(1.28)×(0.94)／0.62×0.89／0.28m

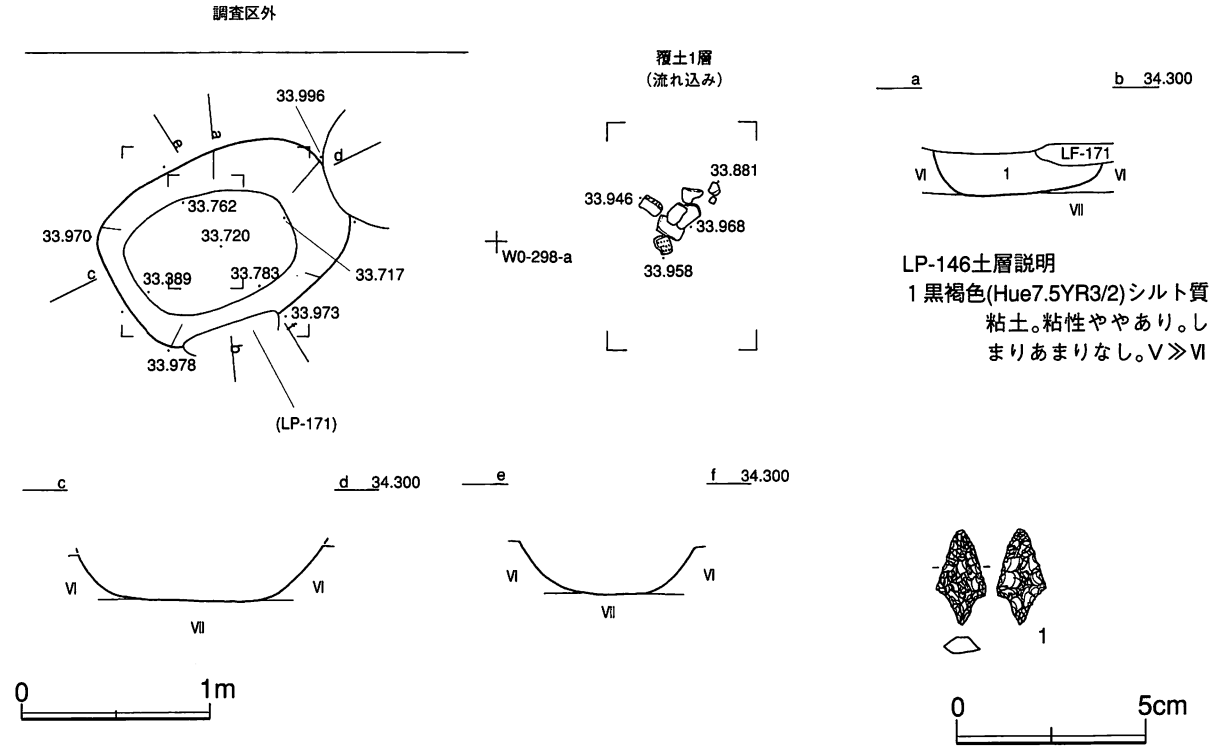
長軸方向：N-73°-E

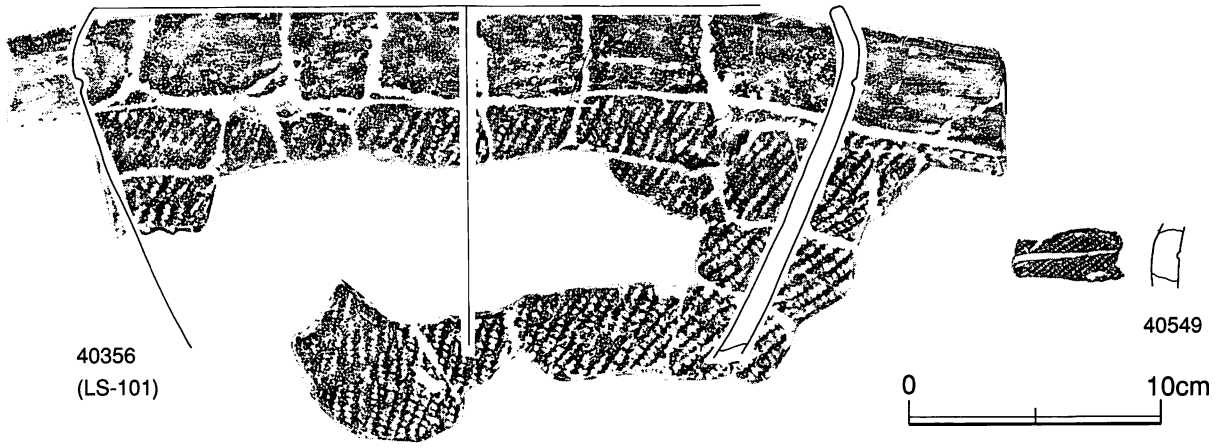
特徴　Ⅵ層上面でLP-171、173に切られた黒色土のプランを確認した。平面は隅丸長方形と推定され、壁はやや急に立ち上がる。底面は平坦である。堆積状況は覆土中の土器が近くの包含層とLS-101出土の土器と接合しているおり1つのパターンとしては認識できなかったため自然堆積と考えられる。掘込み面はⅤ層中と考えられる。覆土中の土器は体部破片10点であるが、近くの包含層中とLS-101出土の口縁部や体部と接合している。

遺物　40356,40549はⅣ群b類の深鉢形土器である。1は有茎凸基の石鏃。黒曜石製。

時期　覆土中の遺物から、縄文時代後期中葉以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-146





図Ⅳ-41　LP-146と遺物

LP-147（図Ⅳ-42）

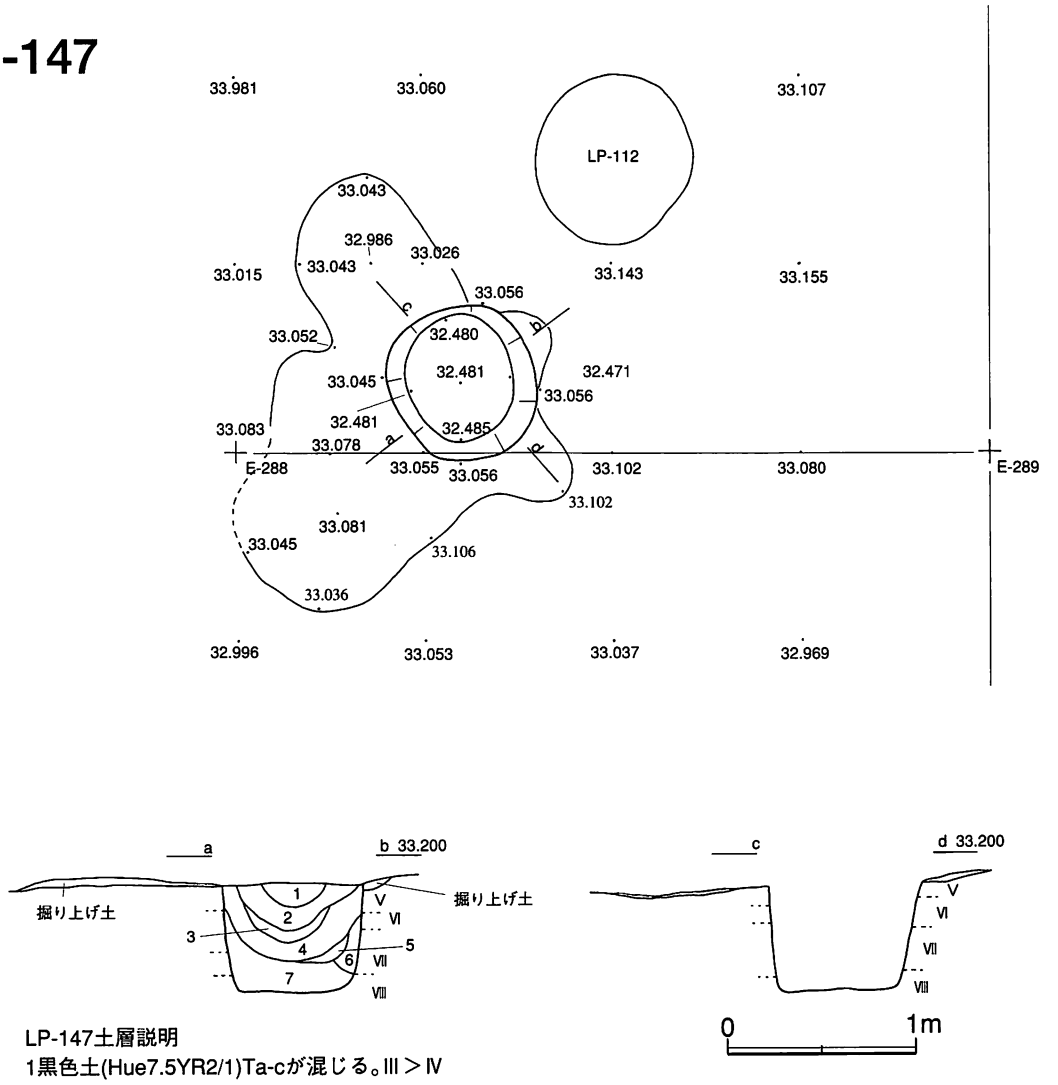
位置：D-288-b,E-288-a　規模：0.82×0.76／0.46×0.64／0.59m

長軸方向：N-20.5°-W

特徴　Ⅴ層上面においてTa-cがまとまってたまっているのが確認された。周辺にはローム質土の混じった堀上げ土もあった。平面プランは楕円形で平坦な床面からほぼ垂直に壁が立ち上がった。堆積状況は人為的な埋め戻しと考えられ、土壙墓の可能性が想定できる。遺物は出土しなかった。近くにはLP-112があり、北側に少し離れてLP-143・144がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位およびTa-cの堆積状況、周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）



LP-147土層説明

1黒色土(Hue7.5YR2/1)Ta-cが混じる。Ⅲ＞Ⅳ

2Ta-cⅣ

3暗褐色土(Hue10YR3/3)シルト質。やや黄味を帯びる。Ⅴ≫Ⅵ

4黒色土(Hue7.5YR1.7/1)シルト質。Ⅴ

5黒褐色土(Hue10YR2/2)シルト質。しまりは弱い。Ⅴ≫ⅥⅦ

6黄褐色土(Hue10YR5/8)シルト質粘土。しまりは弱い。Ⅶ

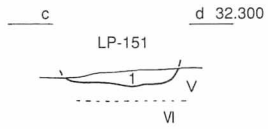
7黒褐色土(Hue7.5YR3/2)シルト質粘土。ロームブロック、パミスが混じる。Ⅴ＞ⅦⅧ

堀上げ土(Hue7.5YR2/2)ロームブロックが所所に混じる。Ⅴ＞Ⅶ

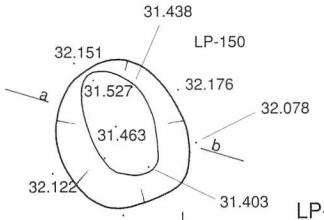
図Ⅳ-42　LP-147

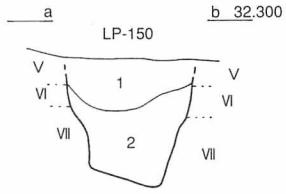
LP-150（図Ⅳ-43／図版-107～123，126～130）
位置：X0-283-c　規模：0.77×0.69／0.36×0.55／0.66m
長軸方向：N-41.0°-E
特徴　調査区西側の住居群が存在する区域で検出された平面が楕円形を呈する土壙である。確認面はⅥ層上面であるが覆土の埋没状況から掘り込み面はⅤ層中と考えられる。壙底面は傾斜し、立ち上がる壁にも凹凸が認められ土壙の整形には意を用いていない。覆土も掘り上げ土が再度流れ込んだと判断されるもので、一時的な使用が目的の性格不明の土壙と考えられる。周囲の包含層からはⅣ群b類土器を主体とする遺物が多数出土しており、覆土から出土した遺物も周囲から流れ込んだと考えられる。Ⅳ群b類土器と石斧が出土している。
遺物　40550,40600はⅣ群b類の深鉢形土器である。40550は波状の口縁部である。1は石斧。刃部および基部の一部を欠損している。側面のみ研磨されている。泥岩製。
時期　覆土の遺物と周囲の状況から縄文時代後期中葉と思われる。（皆川洋一）
LP-151（図Ⅳ-43）
位置：Y0-283-d　規模：0.67×0.58／0.42×0.50／0.08m
長軸方向：N-29.5°-W
特徴　調査区西側の住居群が存在する区域で検出された平面が楕円形を呈する深度の浅い土壙である。掘り込み面はⅤ層中で壙底面には多少の凹凸が見られ壁はそこから緩やかに広がると推定される。覆土は特に黒色の強いもので上位には僅かにⅣ層が混入する。覆土からはⅤ群c類土器の小片が出土しており、近接した南西方向にはLP-150が位置している。性格不明の土壙である。
遺物　掲載遺物なし
時期　周囲の状況から縄文時代後期中葉の可能性がある。（皆川洋一）
LP-154（図Ⅳ-43）
位置：A-294-c　規模：0.72×0.62／0.27×0.45／0.20m
長軸方向：N-58°-E
特徴　Ⅴ層上面で、楕円形状にⅣ層が落ち込む窪みとして確認した。平面形は楕円形状を呈し、壙底は平坦で、壁面の傾斜ははやや急である。覆土は黒色から黒褐色を呈する、流れ込みによる自然堆積と考えられる。覆土上部から土器片、フレイク、礫が数点出土している。性格は不明である。
遺物　掲載遺物なし
時期　覆土出土および周辺から出土している土器から、縄文時代晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）
LP-155（図Ⅳ-43）
位置：Y0-298-c　規模：(0.84)×(0.55)／0.31×0.65／(0.15)m
長軸方向：N-42°-W
特徴　Ⅵ層上面で大型の礫と褐色土のプランを確認した。LP-125と切り合っている。平面は撹乱で北東側が壊されているが、長楕円形と推定される。壁は残っているところではなだらかに立ち上がる。底面は短軸方向で傾斜があるが、平坦である。堆積状況は埋め戻しの可能性が高く、掘込み面はⅤ層中と考えられる。
遺物　掲載遺物なし
時期　覆土中から遺物が出土していないが、LP-125に切られていることから縄文時代中期後半以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-150,151

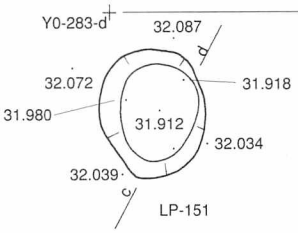


LP-151土層説明
1.暗褐(Hue10YR3/3)Ⅳ+Ⅴ

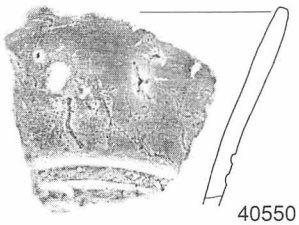




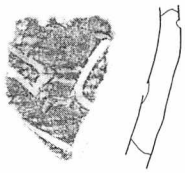
LP-150土層説明
1.黒褐(Hue7.5YR2/1)Ⅴ層
2.淡黄褐(Hue10YR4/2)Ⅴ+Ⅵ+Ⅶ





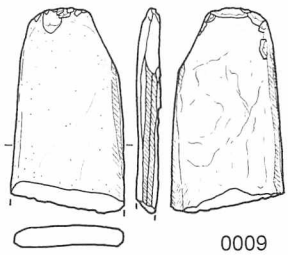


40550
(LP-150)



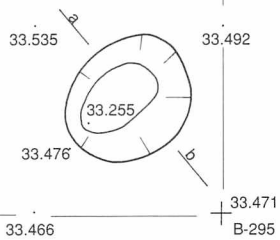
40600
(LP-150)

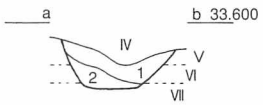




0009
(LP-150)

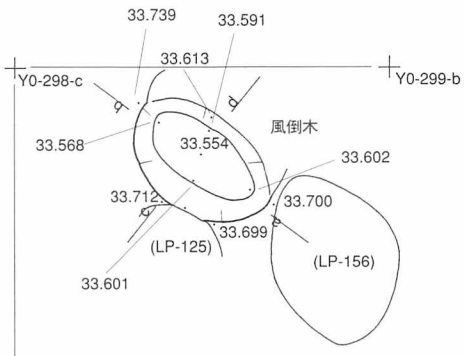
LP-154

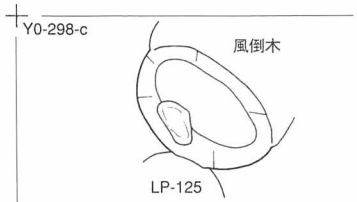


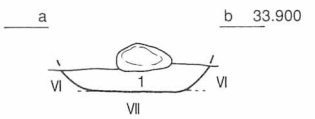


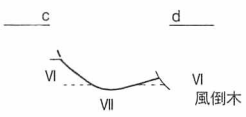
LP-154土層説明
1　黒色(7.5YR1.7/1)土
2　黒褐色(10YR2/3)土

LP-155











LP-155土層説明
1 暗褐色(Hue7.5YR3/3)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ+Ⅵ

図Ⅳ-43　LP-150・151・154・155と遺物

LP-156（図Ⅳ-44／図版-126～130）

位置：Y0-298-c　規模：0.93×0.68／0.44×0.58／0.24m

長軸方向：N-13°-W

特徴　Ⅵ層上面で黒色土のプランを確認した。平面はやや短軸方向に広がる楕円形で、壁は北側でなだらかに立ち上がる以外は、急に立ち上がる。底面は平坦である。堆積状況は埋め戻しの可能性が高く、掘込み面はⅤ層中と考えられる。すぐ近くにLP-125、155があるが、関係は不明である。

遺物　1は砥石。両面および側面に凹状に窪んだ重複したすり面をもつ。両面の中央部は大きく窪んでいる。砂岩製。

時期　時期を特定できる遺物がないため不明であるが、縄文時代晩期以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-157（図Ⅳ-44／図版-37，38）

位置：W0-298-d　規模：(1.04)×(0.60)／(0.45)×(0.80)／0.12m

長軸方向：N-27°-E

特徴　Ⅴ層下位で黒色土のプランを確認した。平面は撹乱を受けているため不明であるが、隅丸方形に近いと推定される。壁は東側でほとんど残っていないが、それ以外ではなだらかに立ち上がる。底面は平坦である。堆積状況は自然堆積と考えられるが、埋め戻しの可能性もある。掘込み面は確認面と同じⅤ層下位と考えられる。

遺物　1024,1026はⅠ群b-3類の深鉢形土器である。

時期　覆土中の遺物から縄文時代早期後半の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-158（図Ⅳ-45／図版-107～123）

位置：W0-298-a　規模：1.13×0.98／0.70×0.90／0.42m

長軸方向：N-28°-E

特徴　Ⅴ層下位で黒色土のプランを確認した。平面形は円形で、壁は西側では急に、東側では垂直に近く立ち上がる。底面は平坦である。堆積状況は埋め戻しの可能性があり、掘込み面はⅤ層上位か中位と考えられる。底面ではないが覆土2層中から縄文時代後期中葉の土器がまとまって出土している。

遺物　40551はⅣ群b類の深鉢形土器胴部である。覆土上位で出土したものは、ほとんど接合しなかった。

時期　覆土中の遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LP-159（図Ⅳ-45）

位置：W0-296-d　規模：(0.70)×(0.56)／0.46×0.58／0.47m

長軸方向：N-40°-W

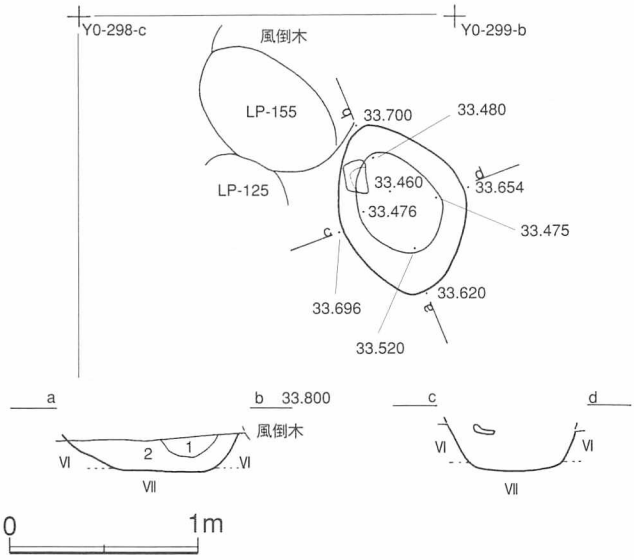
特徴　Ⅵ層上面で初め土壙と認識していた風倒木に切られた黒色土のプランを確認した。平面は撹乱を受けており半分は不明であるが長楕円形と推定され、壁はなだらかに立ち上がる。底面は窪み、全体的にすり鉢形を呈する。堆積状況はレンズ状を呈し自然堆積と考えられ、掘込み面はⅤ層中と考えられる。

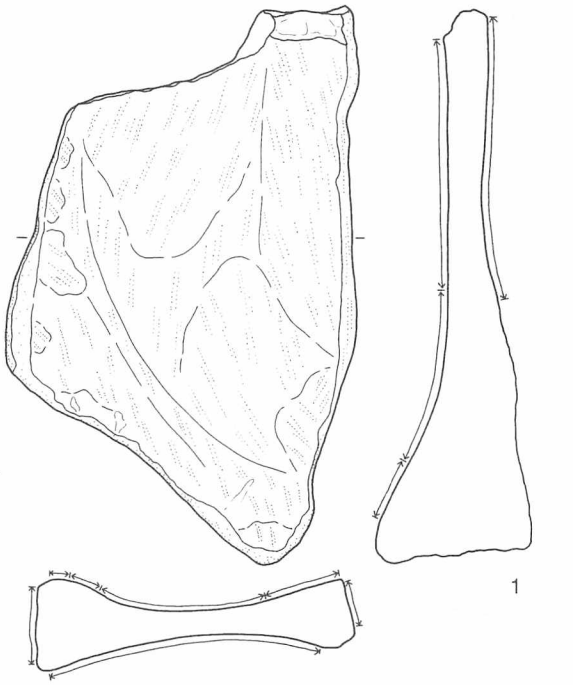
遺物　掲載遺物なし

時期　遺物が出土していないので不明であるが、縄文時代晩期以前で包含層の主体的な遺物である、縄文時代後期中葉を中心とした遺構であると考えられる。（佐藤　剛）

LP-162（図Ⅳ-45）

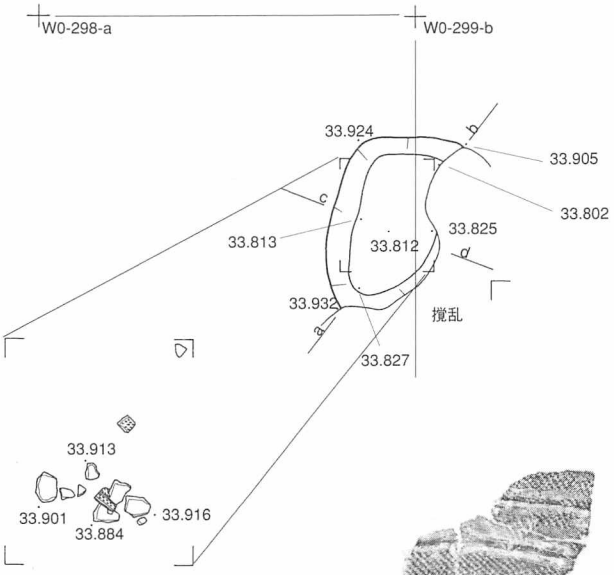
LP-156

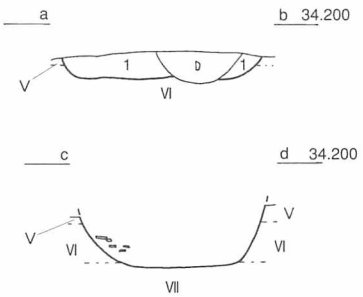




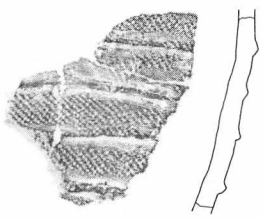
LP-156土層説明
1 黒褐色(Hue7.5YR2/2)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅴ≫Ⅵ
炭化物粒直径 2 ～ 4 ㎜少量含む。
2 暗褐色(Hue7.5YR3/3)シルト質粘土。粘性あり。しまりあまりなし。Ⅴ＞Ⅵ
Ⅵがブロック状に混じる。

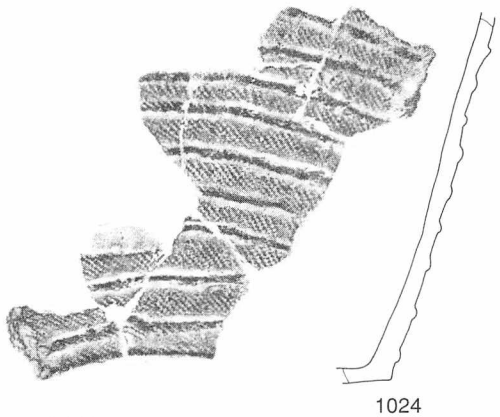
LP-157





LP-157土層説明
1 黒褐色(Hue7.5YR3/2)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあり。Ⅵ＞Ⅴ

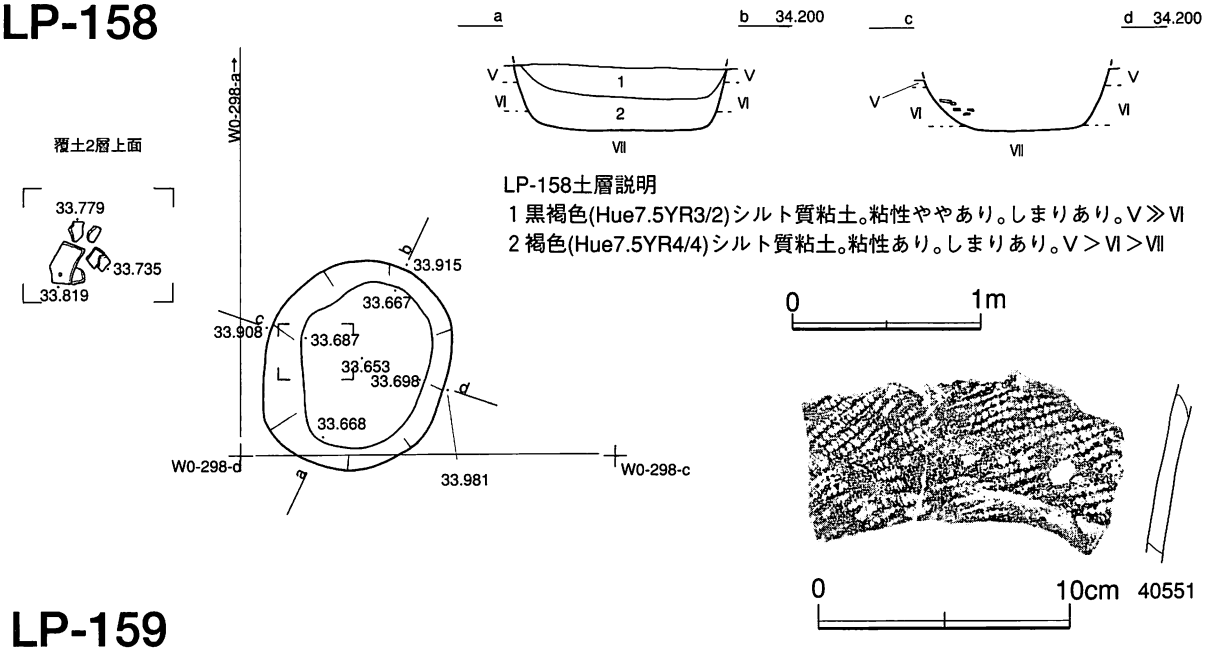






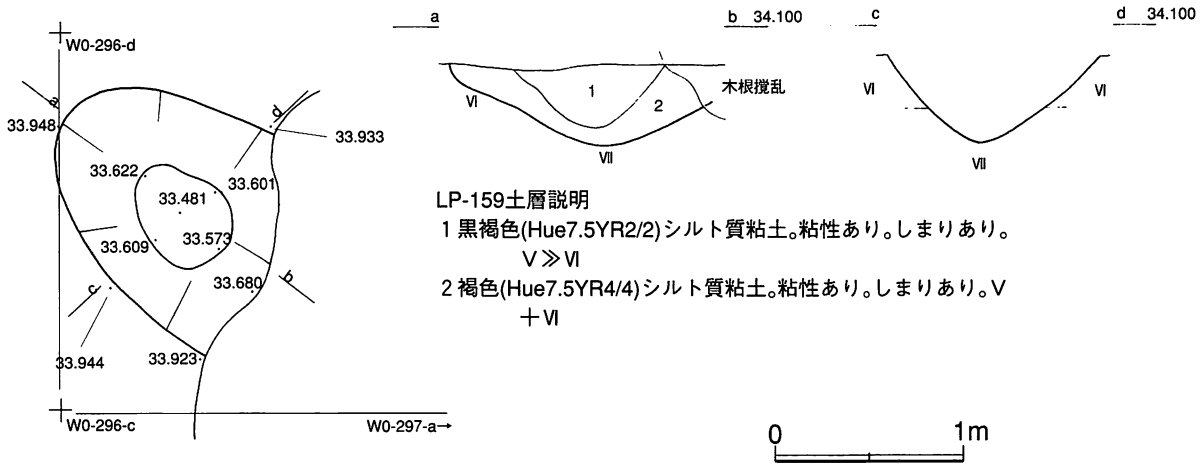
図Ⅳ-44　LP-156・157 と遺物

LP-158



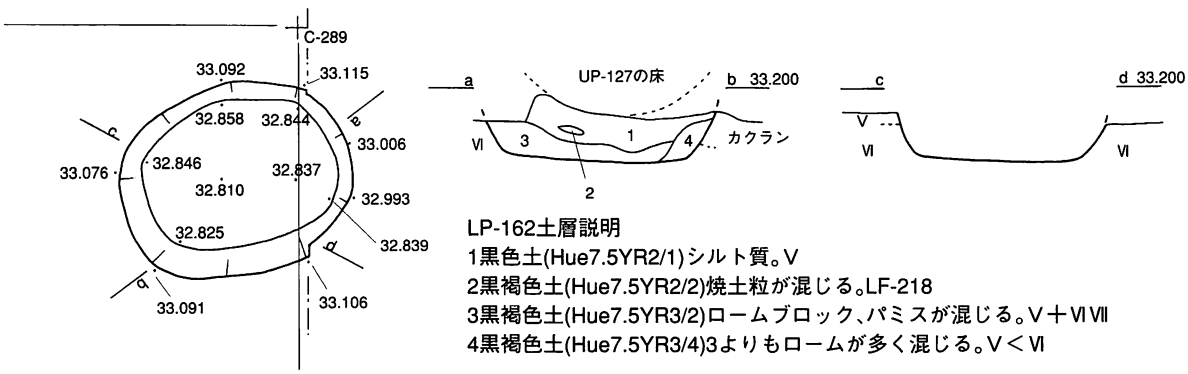
LP-158土層説明
1 黒褐色(Hue7.5YR3/2)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあり。V≫VI
2 褐色(Hue7.5YR4/4)シルト質粘土。粘性あり。しまりあり。V＞VI＞VII

LP-159



LP-159土層説明
1 黒褐色(Hue7.5YR2/2)シルト質粘土。粘性あり。しまりあり。
V≫VI
2 褐色(Hue7.5YR4/4)シルト質粘土。粘性あり。しまりあり。V
＋VI

LP-162



LP-162土層説明
1黒色土(Hue7.5YR2/1)シルト質。V
2黒褐色土(Hue7.5YR2/2)焼土粒が混じる。LF-218
3黒褐色土(Hue7.5YR3/2)ロームブロック、パミスが混じる。V＋VI VII
4黒褐色土(Hue7.5YR3/4)3よりもロームが多く混じる。V＜VI

図Ⅳ-45　LP-158・159・162と遺物

位置：C-288-d,C-289-a　規模：(1.24)×(1.02)／0.78×1.02／(0.27)m

長軸方向：N-84°-E

特徴　Ⅴ層を約15㎝程掘り下げたさいに黒色土のまとまりを確認した。平面プランは楕円形で平坦な床面からやや斜めに壁が立ち上がった。覆土中に焼土(LF-218)があった。覆土1層はUP-127の床面にあたる。両者の位置関係やUP-127の覆土の堆積状況を考えると、LP-162の覆土をUP-127とした可能性もある。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。ただし、UP-127を覆土と考えるならば、そのTa-cの堆積状況や周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LP-163（図Ⅳ-46）

位置：B-294-d　規模：0.84×0.67／0.43×0.63／0.31m

長軸方向：N-40°-E

特徴　Ⅵ層上面で楕円形状の黒色土の落ち込みとして確認した。壙底は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は流れ込みによる自然堆積と考えられ、部分的に撹乱を受けている。覆土上部から黒曜石製のフレイク、原石が数点出土している。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LP-164（図Ⅳ-46）

位置：C-293-d　規模：1.00×0.68／0.42×0.63／0.32m

長軸方向：N-45°-E

特徴　Ⅵ層上面で長楕円形状のⅣ層が混在する黒色土の落ち込みで確認した。壙底は窪んでおり、壁面の傾斜は南側が緩やかで、他は急である。覆土は上部にⅣ層がたまっており、その直下には炭化物の集中が検出された。覆土に焼けた状況はみられなかったので、二次的な堆積によるものと考えられる。覆土中から土器片及び礫片が数点出土している。なお、本遺構の性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土の土器から、縄文時代晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

LP-165（図Ⅳ-46／図版-20）

位置：W0-293-c,W0-294-b　規模：（0.94）×0.80／0.62×0.55／0.32m

長軸方向：N-58°-W

特徴　Ⅵ層中で円形状の黒色土の落ち込みとして確認した。平面形はW0-293区域を調査中に認識できなかったため、西側の一部が不明であるが、不整な円形を呈すると思われる。壙底は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土上部から注口形土器の注口部（図版有り）を含む土器片が数点出土している。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土の土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）

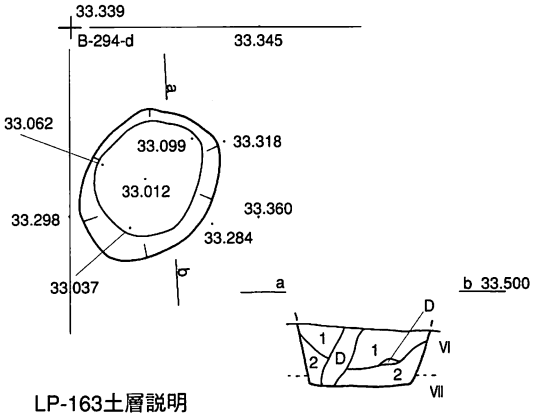
LP-166（図Ⅳ-46／図版-126～130）

位置：X0-281-a,X0-281-b,X0-281-c,x0-281-d　規模：1.94×1.64／1.43×1.79／0.28m

長軸方向：N-14°-E

特徴　X0-281区域のⅤ層上面を精査中に若干の地形的な窪みを検出した。そこで南北に土層観察用のベルトを設定し、Ⅴ層を5cmほど掘り下げたところ、楕円形状の黒色土の落ち込みとして確認した。

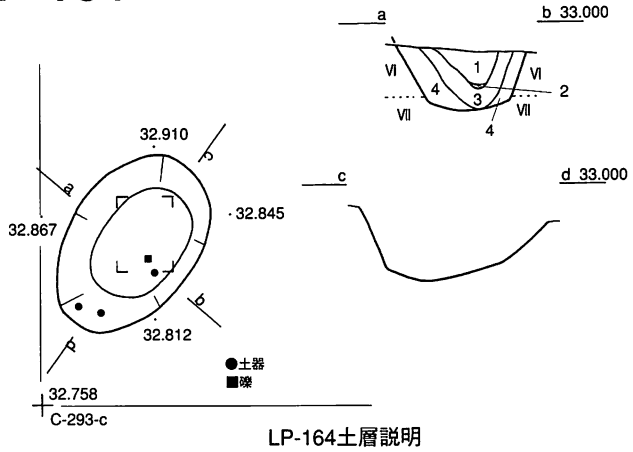
LP163



LP-163土層説明
1　黒色(10YR1.7/1)土
2　暗褐色(10YR3/4)土

0　1m

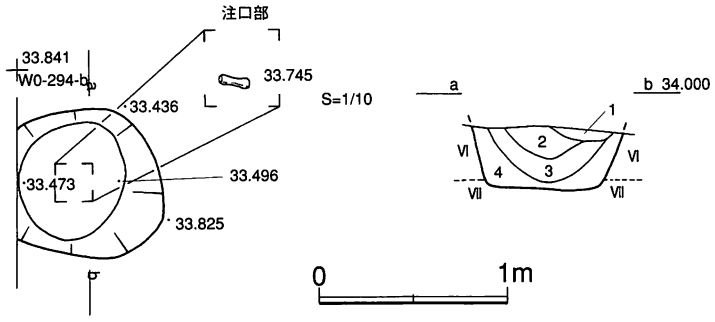
LP-164



LP-164土層説明
1　Ⅳ+黒色(10YR2/1)土　(Ⅳ＞Ⅴ)
2　炭化物
3　黒色(7.5YR1.7/1)土
4　黒褐色(10YR2/3)土

0　1m

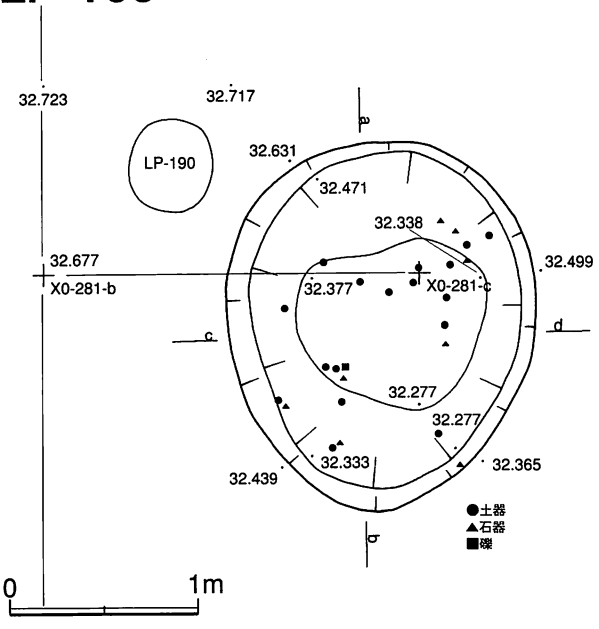
LP-165

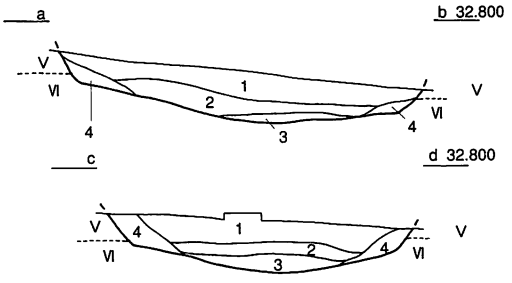


0　1m

LP-165土層説明
1　黒色(10YR1.7/1)土
2　黒色(7.5YR2/1)土　En-aパミス混ざる
3　黒色(10YR2/1)土　En-aパミス混ざる
4　黒褐色(10YR3/2)土　En-aパミス混ざる

LP-166





LP-166土層説明
1　黒色(10YR2/1)土　En-aパミス混ざる
2　黒色(7.5YR2/1)土　En-aパミス混ざる
3　黒褐色(10YR3/4)土
4　暗褐色(10YR3/4)土



1

0　1m

0　5cm

図Ⅳ-46　LP-163・164・165・166と遺物

南側の低湿部へ落ちていく緩斜面上に立地する。本遺跡で検出された住居跡よりも2回りほど小さい規模である。西側の台地上では、同様な規模のものが数基検出されている。壙底は中央部が窪む形状で、斜面と同じ南側に傾斜している。北西側に隣接してLP-190を検出しているが、付属するものかどうかは不明である。覆土は堆積状況から、流れ込みによる自然堆積と考えられる。覆土中及び壙底付近から、Ⅲ群b類、Ⅳ群b類、Ⅳ群b類土器、楔形石器、フレイク・チップ、礫などが出土している。そのうちのⅣ群b類土器が主体と考えられる。性格は不明である。

遺物　1は楔形石器。上下に対向する剥離痕が両面に認められる。全体の大きさに比して厚みがある。黒曜石製。

時期　出土した土器から縄文時代後期中葉～末葉と考えられる。（澤田　健）

LP-167（図Ⅳ-47／図版-20・107～123，126～130）

位置：Y0-278-a,Y0-278-b,Y0-278-c,Y0-278-d　規模：0.79×1.53／1.43×1.67／0.19m

長軸方向：N-81.0°-E

特徴　調査区西側の住居群が存在する区域周辺で検出された平面が楕円形を呈する深度の浅い土壙である。確認面はⅥ層上面であるが覆土の埋没状況から掘り込み面はⅤ層中と考えられる。壙底面は極めて緩やかな丸味を帯びたもので、壁の立ち上がりは不明瞭である。覆土には検出面と同じレベルには色調の淡い小規模な焼土とⅣ群b類土器などが検出されている。周囲包含層からはⅣ群b類土器を主体とする遺物が多数出土しており、近接した南西方向にはLP-150が位置している。性格不明の土壙である。

遺物　0228,4542はⅣ群b類の深鉢形土器である。1はドリル。上部を欠損している。2はスクレイパー。下端部に外湾した刃部をもつ。1・2は黒曜石製。3～5はすり石。3は礫の縁辺および両面におよそ平坦なすり面をもつ。縁辺の両側にはすり面より時間的に古い剥離痕が認められる。すり面の作出もしくは再生を目的としたものとも考えられる。両端は欠損している。砂岩製。4・5は円礫を素材とするもので、両面およびおよそ周縁に凸～平坦なすり面をもつ。またすり面よりも時間的に新しいたたき痕が認められる。凝灰岩製。

時期　覆土上位で検出されたⅣ群b類土器から考えて、縄文時代後期中葉の可能性が考えられる。（皆川洋一）

LP-168（図Ⅳ-48／図版-37，38）

位置：V0-298-b　規模：0.68×0.53／0.28×0.38／0.14m

長軸方向：N-85°-E

特徴　Ⅵ層上面で土器のまとまりと褐色土のプランを確認した。平面は楕円形で、壁はなだらかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。堆積状況はレンズ状を呈し自然堆積と考えられ、掘込み面は確認面と同じⅥ層上面と考えられるが、Ⅴ層下位の可能性もある。確認面の遺物は流れ込みと考えられる。

遺物　1013,1019,1037,1038はⅠ群b-4類の深鉢形土器である。

時期　縄文時代早期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

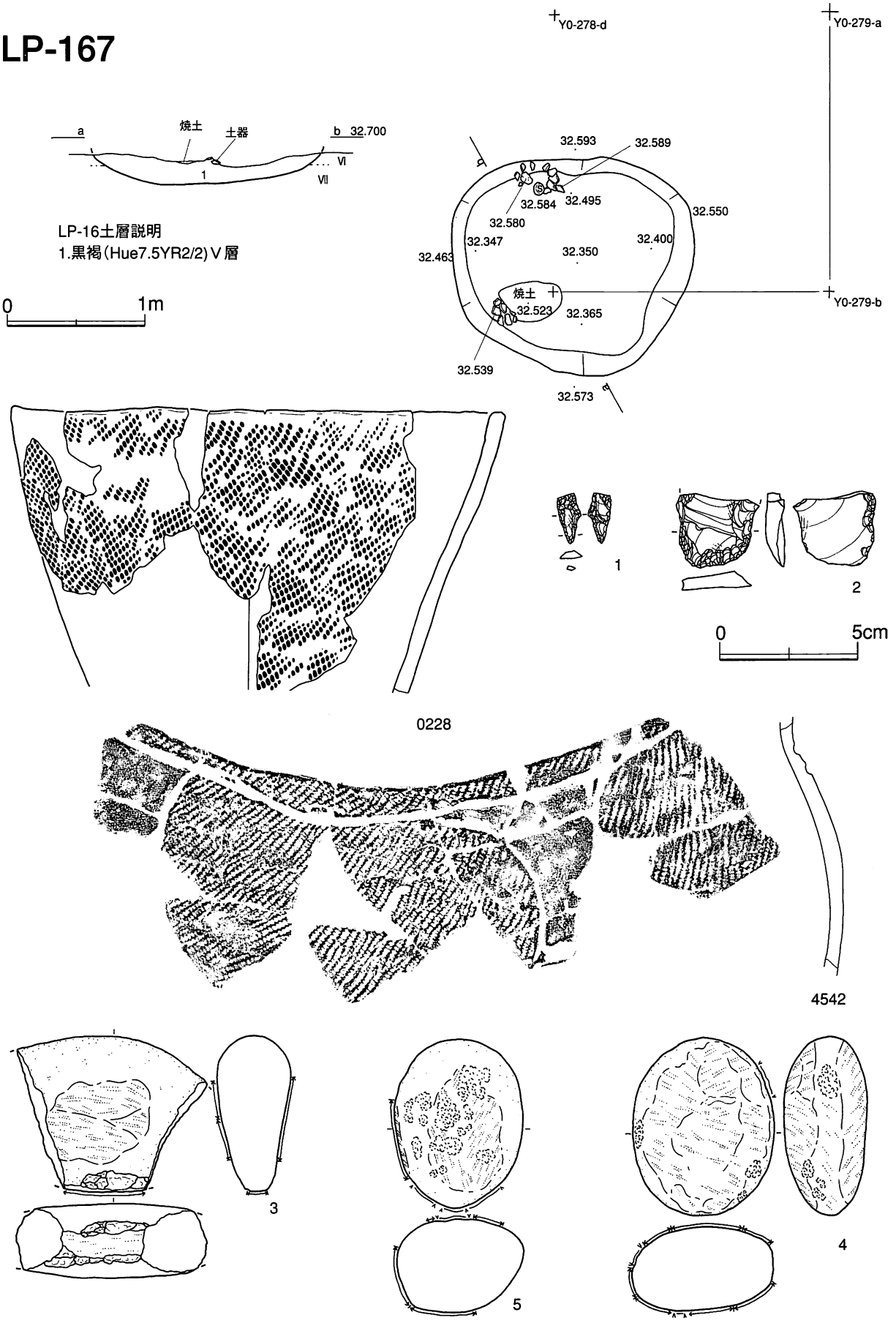
LP-169（図Ⅳ-48）

位置：Y0-295-c,Y0-295-d,Y0-296-a,Y0-296-b　規模：1.66×0.99／0.90×0.51／0.17m

長軸方向：N-39.0°-E

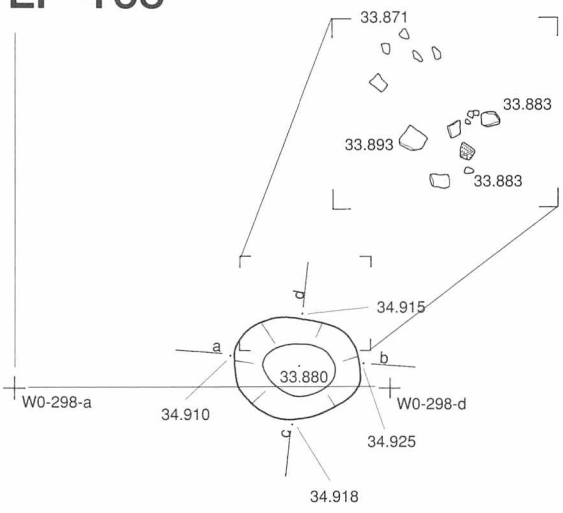
特徴　調査区東側の段丘中央部で見つかったTP-105と重複する平面が楕円形の土壙である。検出された位置は微地形で見た場合、浅い皿状の窪みの底部にあたる部分に位置している。Ⅶ層中に掘り

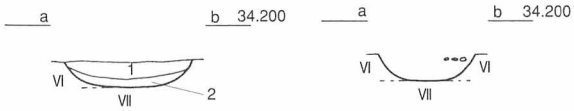
LP-167



図Ⅳ-47　LP-167と遺物

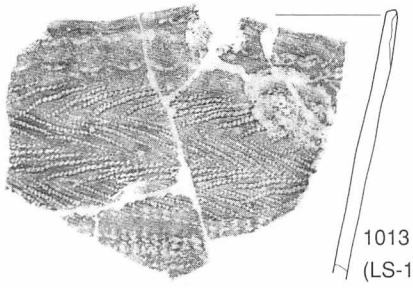
LP-168



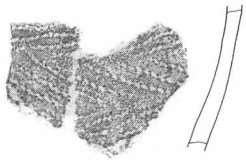


LP-168土層説明
1 暗褐色(Hue7.5YR3/3)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ十Ⅵ
2 褐色(Hue7.5YR4/4)シルト混じり粘土。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅵ

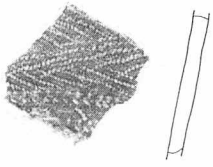
0　1m



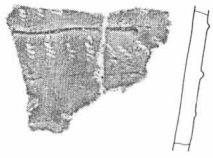
1013
(LS-101)



1019
(LP-118)



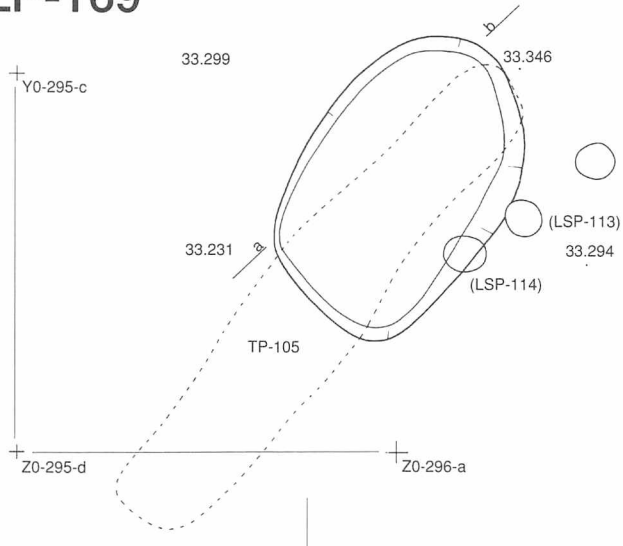
1037

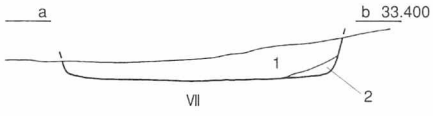


1038

0　10cm

LP-169

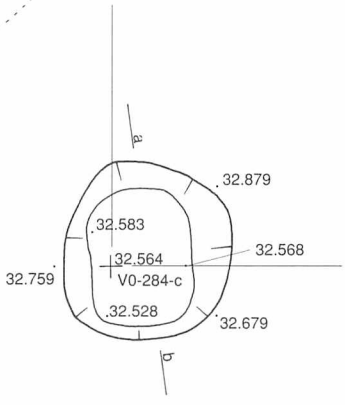


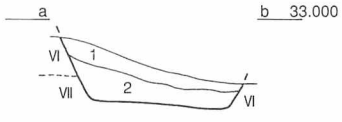


LP-169土層説明
1.黒褐(Hue7.5YR3/1)
2.黒　Hue7.5YR1.7/1)Ⅴ+炭化物

0　1m

LP-170





LP-170土層説明
1　黒褐色(7.5YR3/2)土　En-aパミス混ざる
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)土　En-aパミス混ざる

0　1m

図Ⅳ-48　LP-168・169・170と遺物

込んだ壙底面は平坦で丁寧な作出が行われている。壁へのつながりは比較的急な角度で立ち上がっていおり、検出面からの深度は浅いが掘り込み面はⅤ層中と考えられ図の深度に20～30㎝ほどが加わるものと推定される。覆土はⅤ層の腐植土が主体で、図の2層の部分に雲母の様に薄くはがれる炭化物が見つかっている。これらは、遺構の位置する地形からみて意図的に腐植土を埋め戻した可能性がある。遺物は覆土からⅢ群b類と考えられる土器が出土しているが、TP-105の調査時に出土したⅣ群b類土器も本土壙に伴う可能性がある。TP-105の調査を先行したため重複の先後はやや不明瞭であるが、遺物から見てLP-169が古いと思われる。遺構の性格は、TP-105で欠失した部分が多く判然としないものの形態・規模・覆土などから墓の可能性もあると思われる。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物から縄文時代中期後半～後期中葉のTP-105より古い時期と考えられる。（皆川洋一）

LP-170（図Ⅳ-48）

位置：V0-284-a,V0-284-b,v0-284-c,v0-284-d　規模：0.93×0.89／0.54×0.74／0.28m

長軸方向：N-16°-E

特徴　Ⅵ層上面で円形状の黒褐色土の落ち込みとして確認した。壙底はおよそ平坦で、壁面の傾斜は急である。覆土は堆積状況から、流れ込みによる自然堆積と考えられる。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LP-171（図Ⅳ-49／図版-21・107～123）

位置：V0-285-cV0-286-b,W0-285-d,W0-286-a　規模：1.52×1.40／1.16×1.30／0.24m

長軸方向：N-9°-E

特徴　Ⅵ層上面で円形状の暗褐色土の落ち込みとして確認した。平面形はW0-285区域を調査中に認識できなかったため、南西側の一部が不明であるが、円形状を呈すると思われる。壙底は凹凸があり、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は付近の湧水面が高いためか、粘質で締まりがある。覆土下部から土器がつぶれた状態で1個体出土している。

遺物　0227はⅣ群b類の深鉢形土器である。

時期　出土した土器から、縄文時代後期中葉と思われる。（澤田　健）

LP-172（図Ⅳ-49／図版-107～123）

位置：Y0-279-a,Y0-279-b　規模：1.23×1.10／0.64×0.78／0.25m

長軸方向：N-50.0°-E

特徴　調査区西側の段丘上に位置する平面が不整楕円形の浅い土壙である。壙底面は周囲地形の傾斜と同じ傾きを見せており、壁へのつながりも不明瞭である。覆土は2・3層が掘り上げ土の流れ込みと考えられる。遺物は覆土からⅣ群b類土器が多数出土している。性格は不明である。

遺物　4545,4625はⅣ群b類の深鉢形土器である。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉の比較的古手の土器期と考えられる。（皆川洋一）

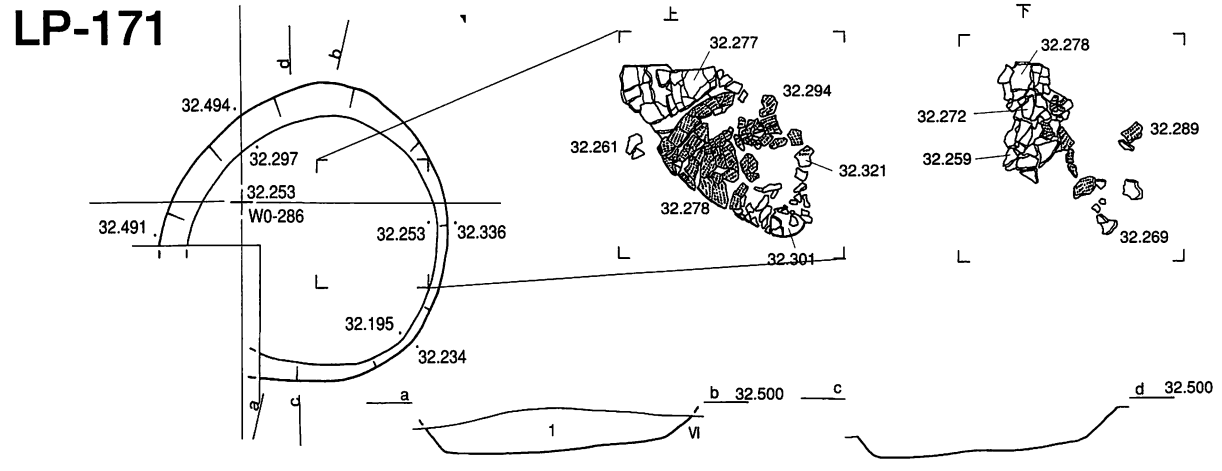
LP-173（図Ⅳ-49）

位置：Y0-277-d　規模：0.64×0.57／0.23×0.20／0.36m

長軸方向：N-69.0°-E

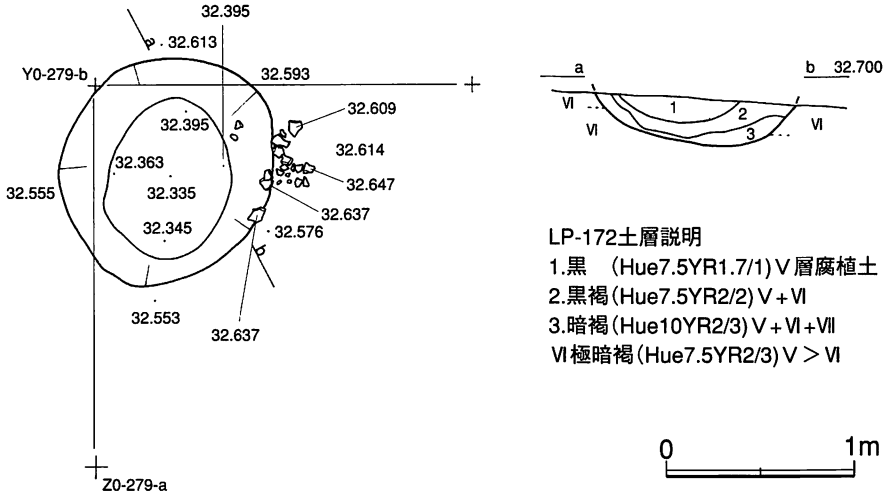
特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の円形を呈する小型の土壙である。壙底は丸味を帯びた尖底で、壁は開きながら立ち上がっている。覆土は流れ込みと考えられるⅤ・Ⅵ層が主体なことから、掘り込み面はⅤ層中と考えられる。周辺の近接した位置にはLP-186が検出されている。

LP-171



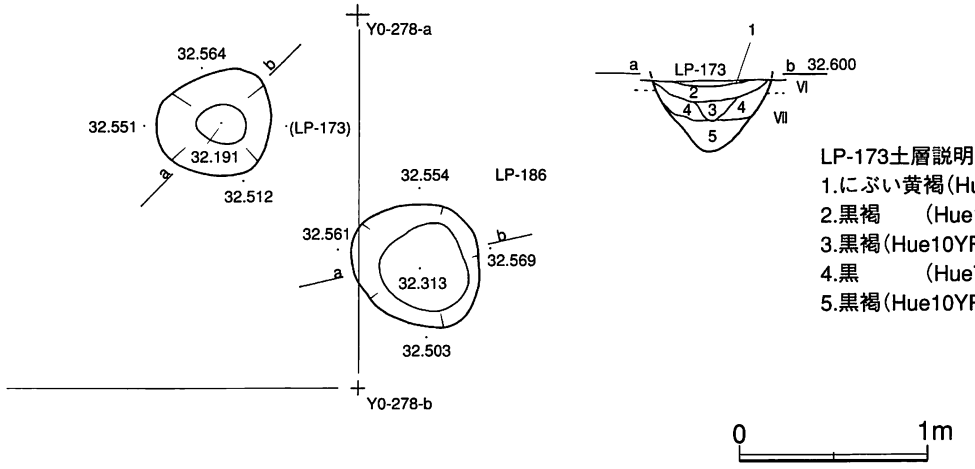
LP-171土層説明
1　暗褐色(10YR3/3)土　粘質・締まり有り

LP-172



LP-172土層説明
1.黒　(Hue7.5YR1.7/1)Ⅴ層腐植土
2.黒褐(Hue7.5YR2/2)Ⅴ+Ⅵ
3.暗褐(Hue10YR2/3)Ⅴ+Ⅵ+Ⅶ
Ⅵ極暗褐(Hue7.5YR2/3)Ⅴ＞Ⅵ

LP-173



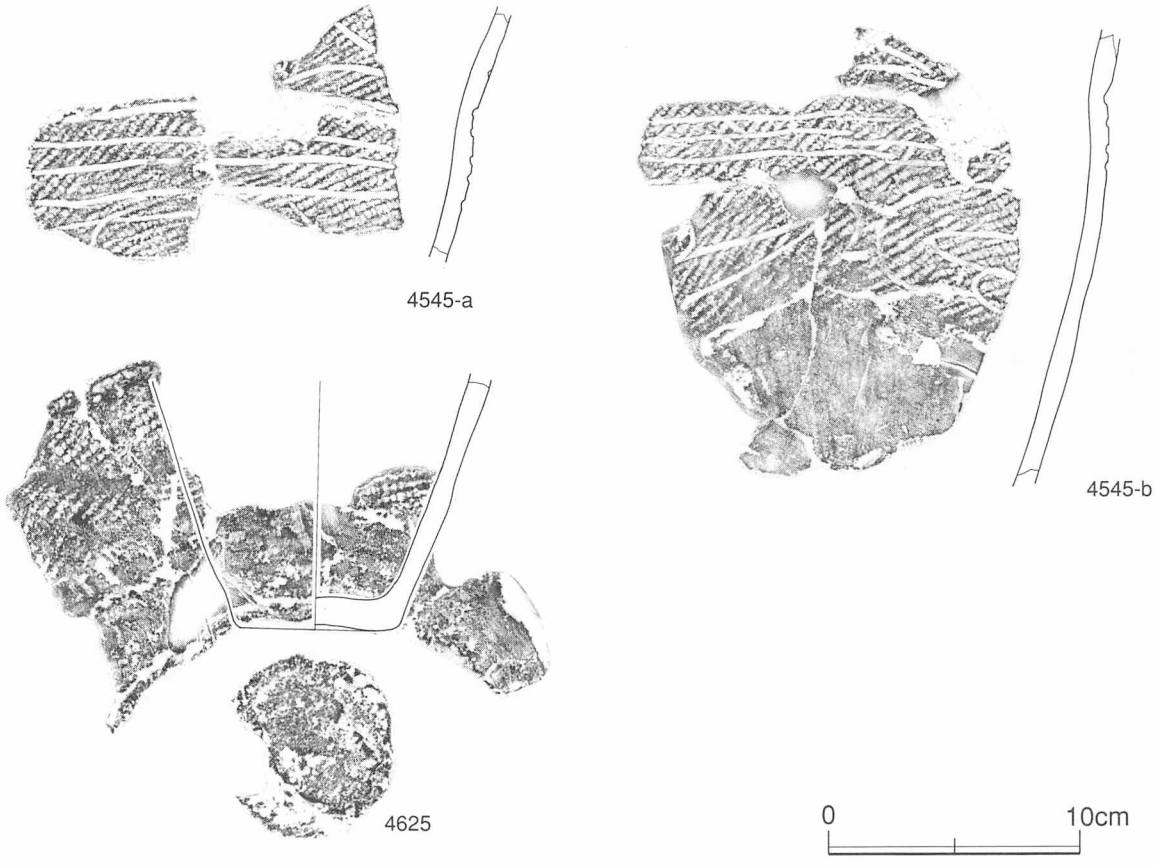
LP-173土層説明
1.にぶい黄褐(Hue10YR5/3)Ⅳ
2.黒褐　(Hue10YR2/2)Ⅴ
3.黒褐(Hue10YR3/2)Ⅴ＞Ⅵ
4.黒　(Hue7.5YR2/1)Ⅴ
5.黒褐(Hue10YR2/3)Ⅴ+Ⅵ＞Ⅶ

図Ⅳ-49　LP-171・172・173

LP-171



LP-172



図Ⅳ-50　LP-171・172の遺物

遺物は覆土からⅤ群b類土器が出土している。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-174（図Ⅳ-51／図版-107～123）

位置：Y0-277,Z0-277　規模：1.37×1.11／0.58×0.46／0.17m

長軸方向：N-38.0°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された不整楕円形を呈する深度の浅い土壙である。壙底は緩やかな丸味を帯びた面で壁につながる立ち上がりも緩やかに広がる。覆土は流れ込みと考えられるが埋め戻しの可能性も考えられる。そこからⅣ群b類土器が多数とRフレイク・礫などが出土しているが、図の注口土器は特に覆土から周囲の掘り込み面と考えられるⅤ層中にかけて破砕された状況で出土している。土壙の規模と比較して覆土中の遺物量が多い性格不明の土壙である。

遺物　40552,40553は深鉢形、0239は注口形のⅣ群b類土器である。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-175（図Ⅳ-52／図版21・107～123，126～130）

位置：W0-284-a,W0-283-d　規模：0.96×0.73／0.53×0.84／0.32m

長軸方向：N-67°-W

特徴　Ⅵ層上面で楕円形状の暗褐色土の落ち込みとして確認した。壙底はおよそ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は覆土中及び壙底から、土器片、たたき石、礫、フレイクが出土している。土器片は数個体分の破片が混在した状態で出土している。捨て穴的な性格の土壙の可能性がある。

遺物　0225,0231,4538,4586,4546はⅣ群b類の深鉢形土器である。1はたたき石。球礫を素材とするもので、部分的に集中したたたき痕をもつ。凝灰岩製。

時期　覆土出土の土器から、縄文時代後期中葉と考えられる。（澤田　健）

LP-176（図Ⅳ-51／図版-107～123）

位置：W0-282-c,W0-283-b　規模：0.72×（0.39）／（0.32）×0.51／0.18m

長軸方向：N-81°-W

特徴　Ⅴ層上面で、楕円形状にⅣ層が落ち込む窪みとして確認した。包含層調査中にプランの認識を誤ったため、平面形は南側半分が不明であるが、楕円形状を呈すると思われる。壙底はおよそ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は堆積状況から、流れ込みによる自然堆積と考えられる。覆土中から土器片、フレイク（泥岩）、礫が出土している。性格は不明である。

遺物　40414はⅣ群b類の深鉢形土器である。

時期　出土した遺物から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）

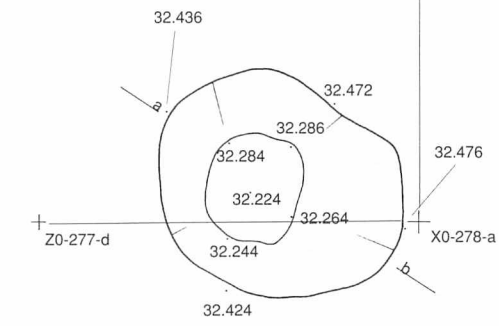
LP-177（図Ⅳ-53／図版-107～123）

位置：A-278-d,A-279-a,　規模：0.89×0.71／0.45×0.40／0.37m

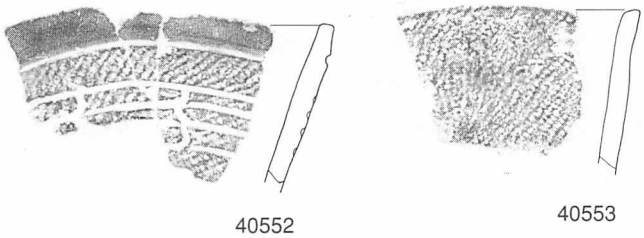
長軸方向：N-58.5°-E

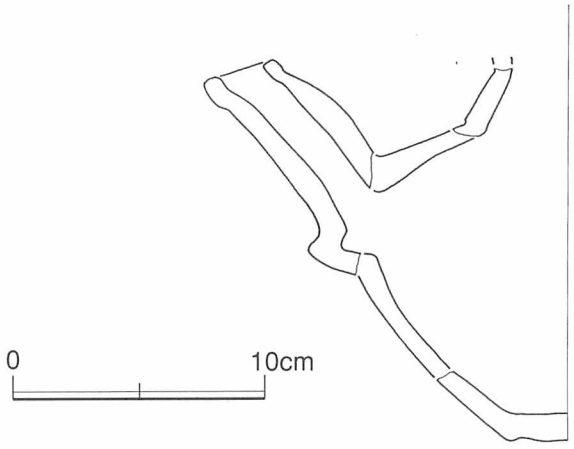
特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が楕円形の土壙である。壙底は深さの異なる二段の面を持ち壁への立ち上がりも不明瞭である。覆土は流れ込みと考えられるもので掘り込み面はⅤ層中である。遺物は覆土からⅣ群a類、Ⅳ群b類土器、チップなどが出土している。図のⅣ群b類土器は口縁部の多くが覆土中から出土しており、胴部は周辺のLP-200の覆土から出土している。この出土状態は意図的なものと考えられ両者の関連が伺える土壙である。

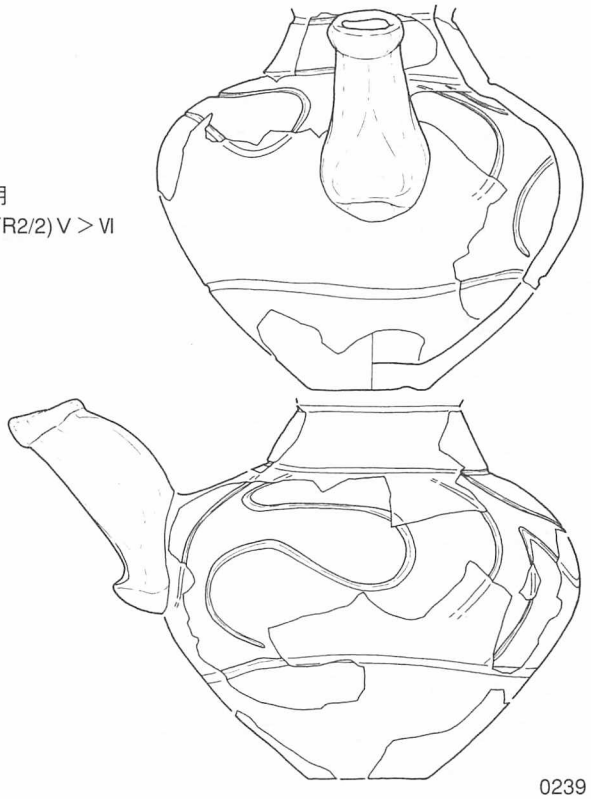
LP-174



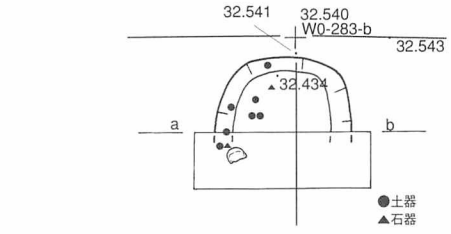
LP-174土層説明
1.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅴ＞Ⅵ







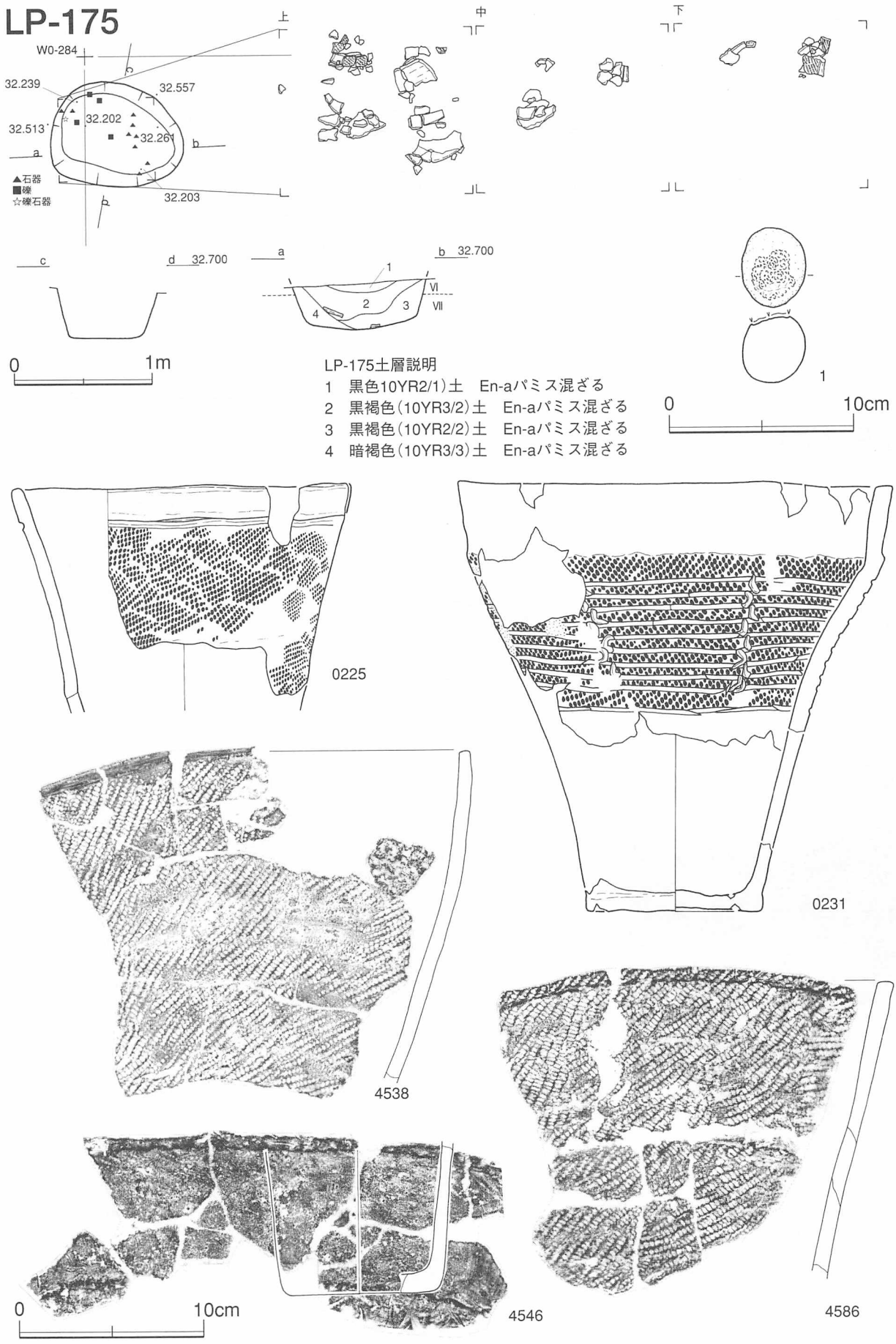
LP-176



LP-176土層説明
1　黒色(10YR2/1)土
2　暗褐色(10YR3/3)土

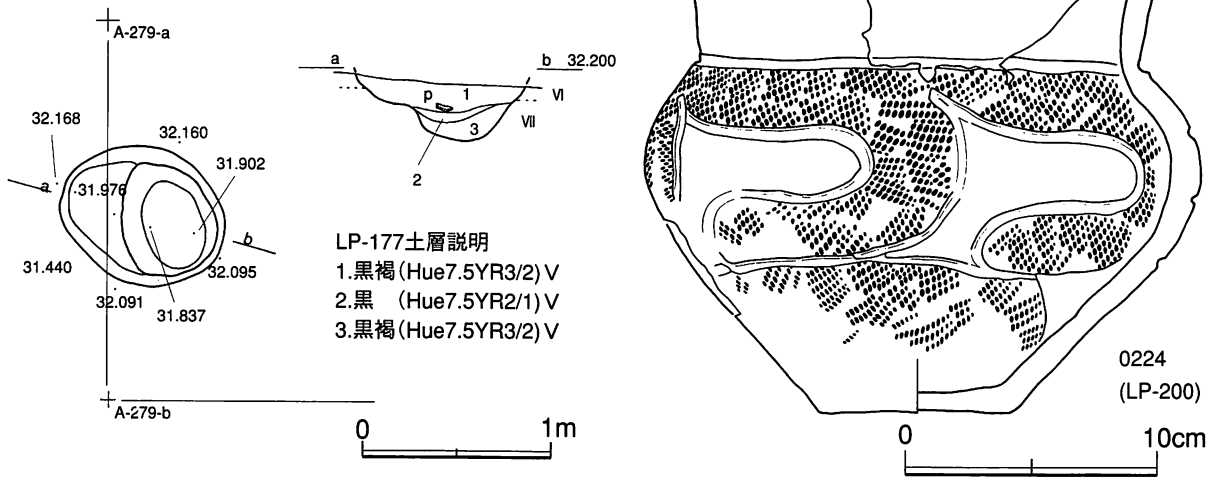


図Ⅳ-51　LP-174・176と遺物

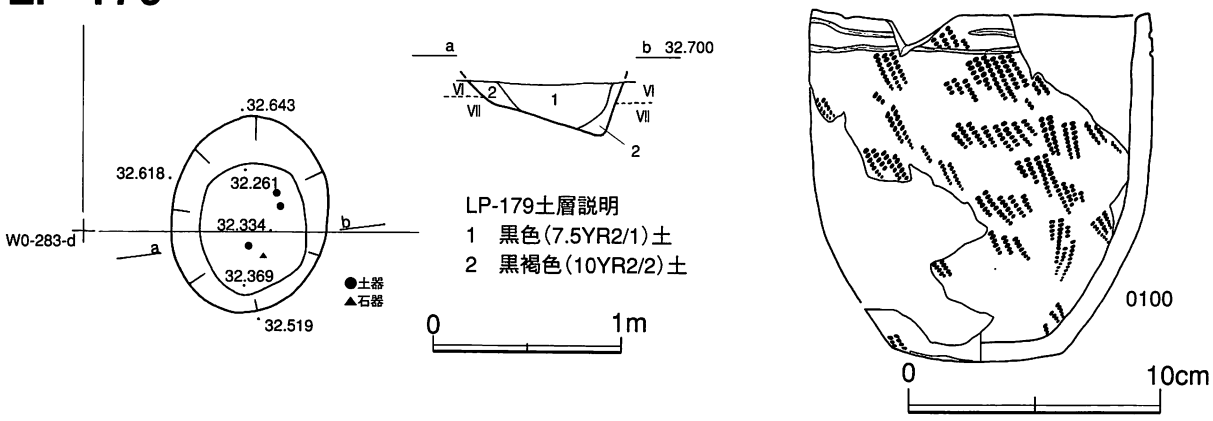


図Ⅳ-52　LP-175 と遺物

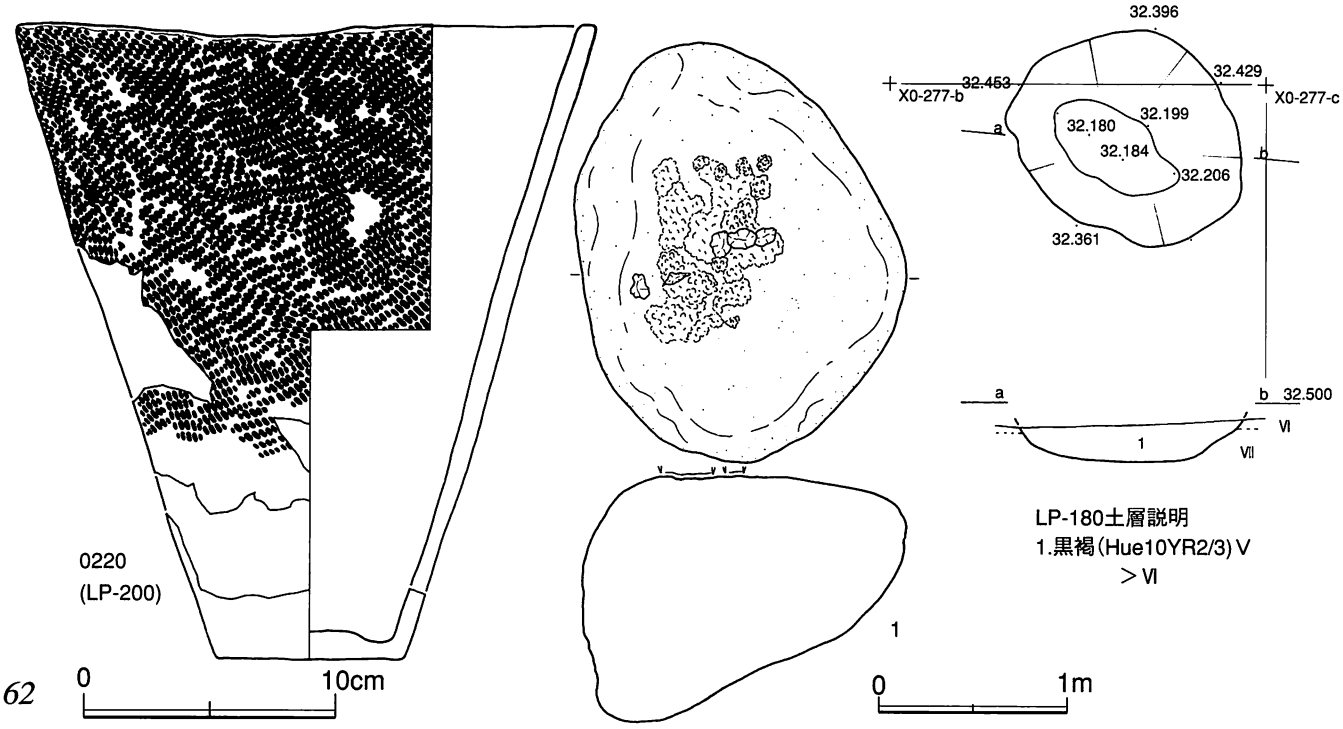
LP-177



LP-179



LP-180



図Ⅳ-53 LP-177・179・180と遺物

遺物　0224 はⅣ群 b 類の瓶形土器である。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-179（図Ⅳ -53 ／図版 -107 ～ 123）

位置：V0-283-c,W0-283-d　規模：1.03 × 0.83 ／ 0.57 × 0.68 ／ 0.28m

長軸方向：N-9°-E

特徴　Ⅵ層上面で楕円形状の黒色土の落ち込みで確認した。壙底は東側に傾斜し、壁面は東側はほぼ垂直に、西側は緩やかに立ち上がる。覆土は堆積状況から、流れ込みによる自然堆積と考えられる。覆土上部から、土器片、フレイク（黒曜石）が数点出土している。性格は不明である。

遺物　0100 は包含層出土したものと接合したⅣ群 c 類の深鉢形土器である。

時期　出土した土器から、縄文時代後期末葉の可能性がある。（澤田　健）

LP-180（図Ⅳ -53 ／図版 -107 ～ 123、126 ～ 130）

位置：Z0-277-b　規模：1.29 × 0.55 ／ 0.34 × 0.45 ／ 0.20m

長軸方向：N-36.5°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整楕円形の土壙である。壙底は丸味を帯びた深度の浅いもので、不明瞭な立ち上がりから壁は緩やかに立ち上がる。覆土は流れ込みと考えられるもので掘り込み面はⅤ層中である。遺物は覆土からⅣ群 b 類、Ⅴ群 c 類土器、台石、加工痕のある礫、礫などが出土しているが、これらも流れ込みによるものと思われる。覆土上位の掘り込み面に相当すると考えられるレベルから礫・礫片が集中的に出土している。性格不明の土壙である。

遺物　0220 はⅣ群 b 類の深鉢形土器である。1 は台石。片面の一部にあばた状に窪んだたたき痕が集中している。泥岩製。

時期　覆土中の遺物の大半を占める遺物から、縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-181（図Ⅳ -54）

位置：V0-282-c　規模：0.64 × 0.60 ／ 0.37 × 0.38 ／ 0.16m

長軸方向：N-37°-E

特徴　Ⅴ層上面から 10cm ほど掘り下げたところで、楕円形状の黒色土の落ち込みとして確認した。調査当初は楕円形状のプランを想定していたが、北側の壁面調査中に別の土壙（LP-188）と切り合関係にあることに気付いた。新旧関係は本土壙の方が旧かったため、結果的に LP-188 の南側半分を欠失し、不明である。よって本土壙の北側の壁も不明であるが、平面形はおよそ円形を呈するものである。壙底はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は堆積状況から、流れ込みによる自然堆積と考えられる。また明確ではないが、覆土 1 層は LP-188 の覆土と考えられる。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

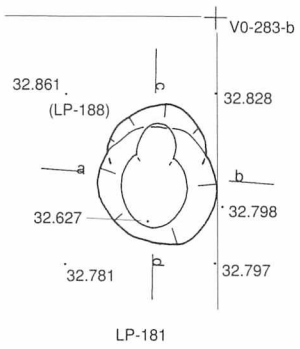
LP-182（図Ⅳ -54 ／図版 -21・107 ～ 123、126 ～ 130）

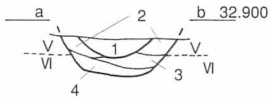
位置：Y0-279-c,Y0-279-d,Y0-280-a,Y0-280-b　規模：2.94 × 1.73 ／ 1.44 × 2.48 ／ 0.27m

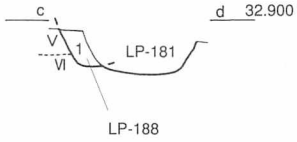
長軸方向：N-38.5°-E

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の長楕円形の土壙である。壙底は緩斜面に沿って緩やかに傾斜する平滑な面を形成し、壁への立ち上がりは緩やかで壁は開き気味で立ち上がっている。壙底面には五カ所の柱穴状ピットが検出されている。覆土は流れ込みと考えられるもので掘り込み面はⅤ層中である。遺物は覆土からⅠ・Ⅲ・Ⅳ群の土器、ドリル、石斧、石製品、フレイ

LP-181





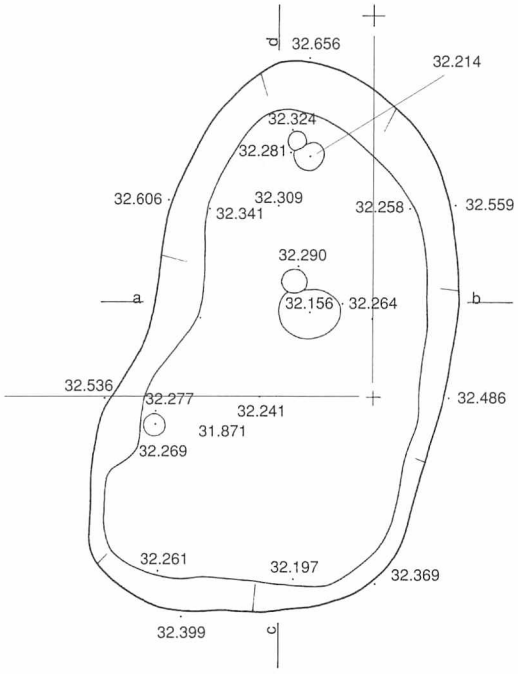


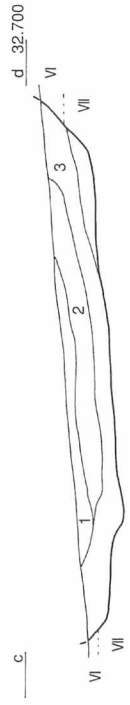


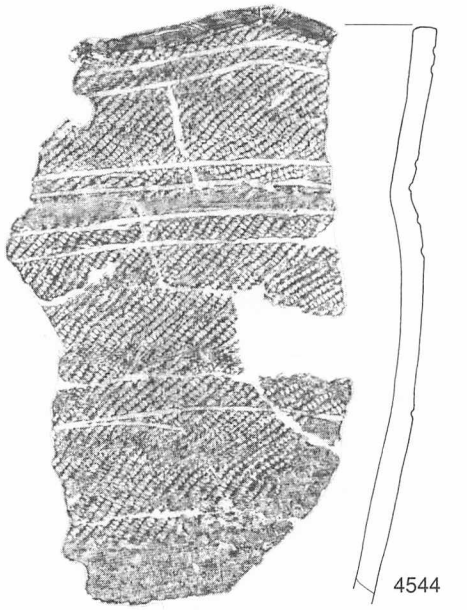
LP-181土層説明
1　黒色(10YR2/1)土　LP-188の覆土
2　黒褐色(10YR2/2)土
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)土　En-aパミス混ざる
4　褐色(7.5YR4/4)土　En-aパミス混ざる

(LP-188)土層説明
1　黒色(10YR2/1)土

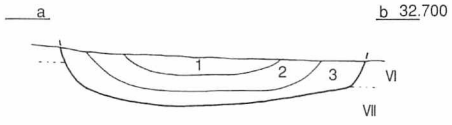
LP-182



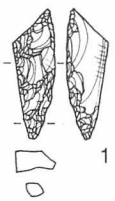


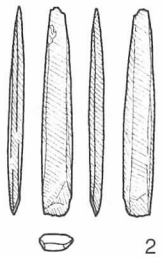


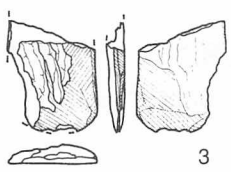




LP-182土層説明
1.黒褐(Hue7.5YR2/2)Ⅴ≫Ⅵ　他の遺構の掘り上げ土？
2.黒　(Hue7.5YR1.7/1)Ⅴ≫Ⅶ(パミス)
3.黒褐(Hue7.5YR2/2)Ⅴ＞Ⅵ≫Ⅶ(パミス)
4.黒褐(Hue7.5YR3/2)Ⅴ＋Ⅵ＞Ⅶ(パミス)













図Ⅳ-54　LP-181・182と遺物

ク・チップなどが出土しているが、主体となるのはⅣ群b類土器でこれらも流れ込みによるものと思われる。すぐ東側に近接してLH-104が位置しておりセットとなる遺構の可能性がある。性格不明の土壙である。

遺物　4544はⅣ群b類の深鉢形土器である。1はドリル。棒状のもので、機能部の断面形は菱形を呈する。黒曜石製。2・3は石斧。2は細身小型ののみ形石斧。刃部の形態は直刃。泥岩製。3は上半部および刃部の一部が欠損している。比較的薄身のもの。片岩製。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。(皆川洋一)

LP-183（図Ⅳ-55／図版-126～130）

位置：W0-283-a,W0-283-B　規模：0.85×0.78／0.52×0.60／0.32m

長軸方向：N-15°-W

特徴　Ⅵ層上面で楕円形状の黒色土の落ち込みとして確認した。壙底は緩やかに窪み、壁面の傾斜は急である。遺物は覆土上部から出土している。覆土上部から、土器片、つまみ付ナイフ、石斧、フレイク、礫が出土している。性格は不明である。

遺物　1はつまみ付ナイフ。周縁加工のもの。裏面の周縁も若干調整されている。2は石斧。刃部が両刃状のもので、平面形は円刃である。中央部で欠損しており、2点が接合している。側縁部の調整中に、欠損したものと考えられる。また基端部には敲打痕が認められる。泥岩製。

時期　覆土出土の土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。(澤田　健)

LP-184（図Ⅳ-55／図版-126～130）

位置：V0-281-c,V0-282-b　規模：0.88×0.78／0.53×0.58／0.33m

長軸方向：N-2°-W

特徴　Ⅴ層上面から5cmほど掘り下げたところで、楕円形状の黒色土の落ち込みとして確認した。確認面では人頭大弱の礫を検出している。壙底は緩やかに窪み、壁面は東側に凹凸がみられるが、他は急な傾斜である。覆土はEnLが若干ブロック状に、入っていることから埋め戻しと考えられる。覆土上部から、土器片、礫が出土している。遺物の出土状況もあわせて、土壙墓の可能性も考えられる。

遺物　1は石皿。凝灰岩を素材とし、周縁が敲打によって楕円形状に整形されている。両面に凹状～平坦なすり面をもつ。長軸方向の断面形は片面が若干内湾気味となる。同様なものはＬＰ－１９６からも出土している。

時期　出土した土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。(澤田　健)

LP-185（図Ⅳ-56／図版-21・107～123，126～130）

位置：Y0-276-d,Y0-277-a　規模：2.41×1.51／1.29×2.13／0.20m

長軸方向：N-34.5°-W

特徴　調査区西側の段丘上に位置する平面が不整の楕円形を呈する深度の浅い土壙である。LH-107の壁の一部を切って掘り込んだもので、平坦に作られた壙底はLH-107とほぼ同じ高さである。壁は開きながら立ち上がっており床とのつながりは緩やかである。覆土は混じりのないⅤ層腐植土であるが上位に0219の復元土器が横倒しの状態で出土しており、これが本遺構に伴う遺物とした場合に覆土は意図して腐植土だけを埋め戻した可能性がある。掘り込み面はⅤ層中のLH-107より上位である。遺物は覆土からⅣ群b類土器が多数出土しており、これが主体である。その他はⅠ群b類、Ⅳ群a・c類土器が僅かに出土している。石器は石斧、台石、石核、フレイク・チップ、礫なども出土している。覆土が埋め戻され、0219の復元土器が副葬されたと考える場合、墓的な性

格を有する土壙の可能性がある。

遺物　0219は平面で図示したもの、0218は覆土と包含層のものが接合したⅣ群b類の深鉢形土器である。1は石斧。全面研磨されている。刃部は片刃で、形態は円刃である。片岩製。2は石皿。両面に平坦なすり面をもつ。砂岩製。

時期　覆土の遺物の出土状況から縄文時代後期中葉の可能性が高い。（皆川洋一）

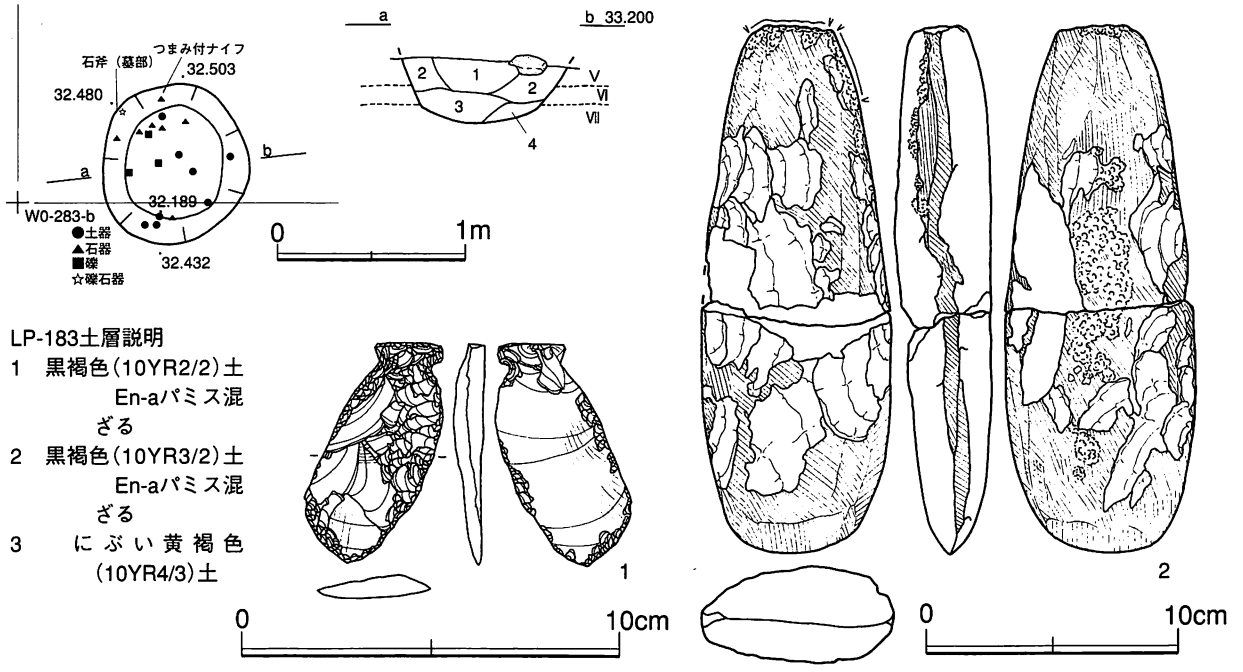
LP-186（図Ⅳ-57）

位置：Y0-278-a　規模：0.73×0.64／0.44×0.47／0.20m

長軸方向：N-31.0°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の円形を呈す小型の土壙である。LP-173と近接しており、これらは規模、形態などの類似点が認められる。明瞭な壙底面はなく広がりながら立ち上

LP-183



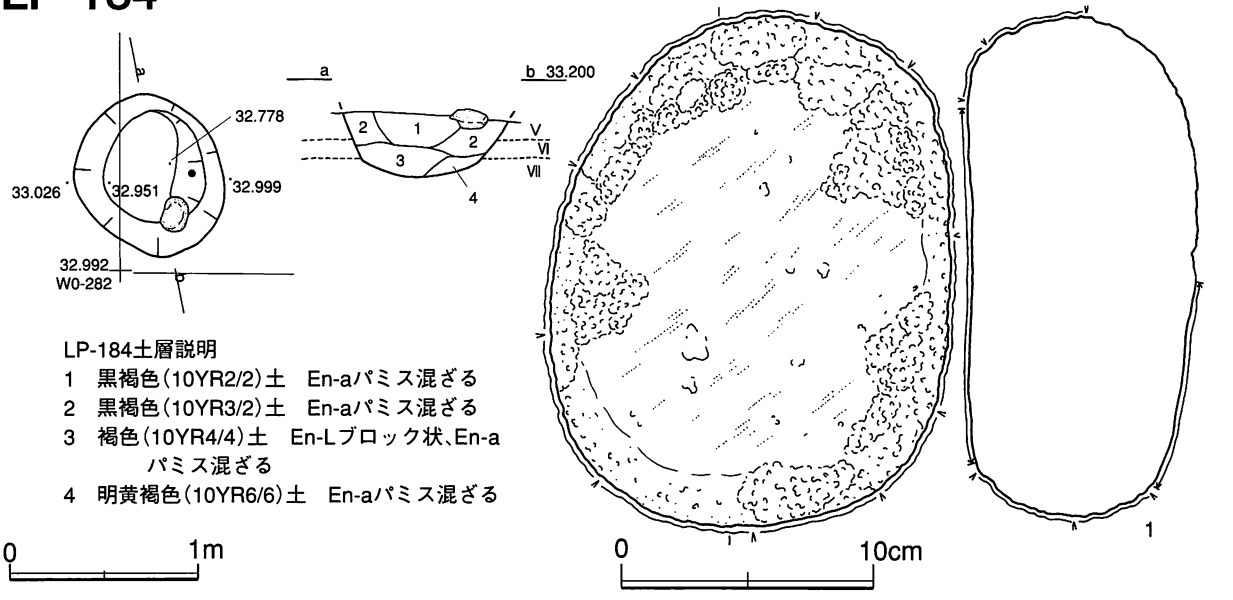
LP-183土層説明

1　黒褐色(10YR2/2)土　En-aパミス混ざる

2　黒褐色(10YR3/2)土　En-aパミス混ざる

3　にぶい黄褐色(10YR4/3)土

LP-184



LP-184土層説明

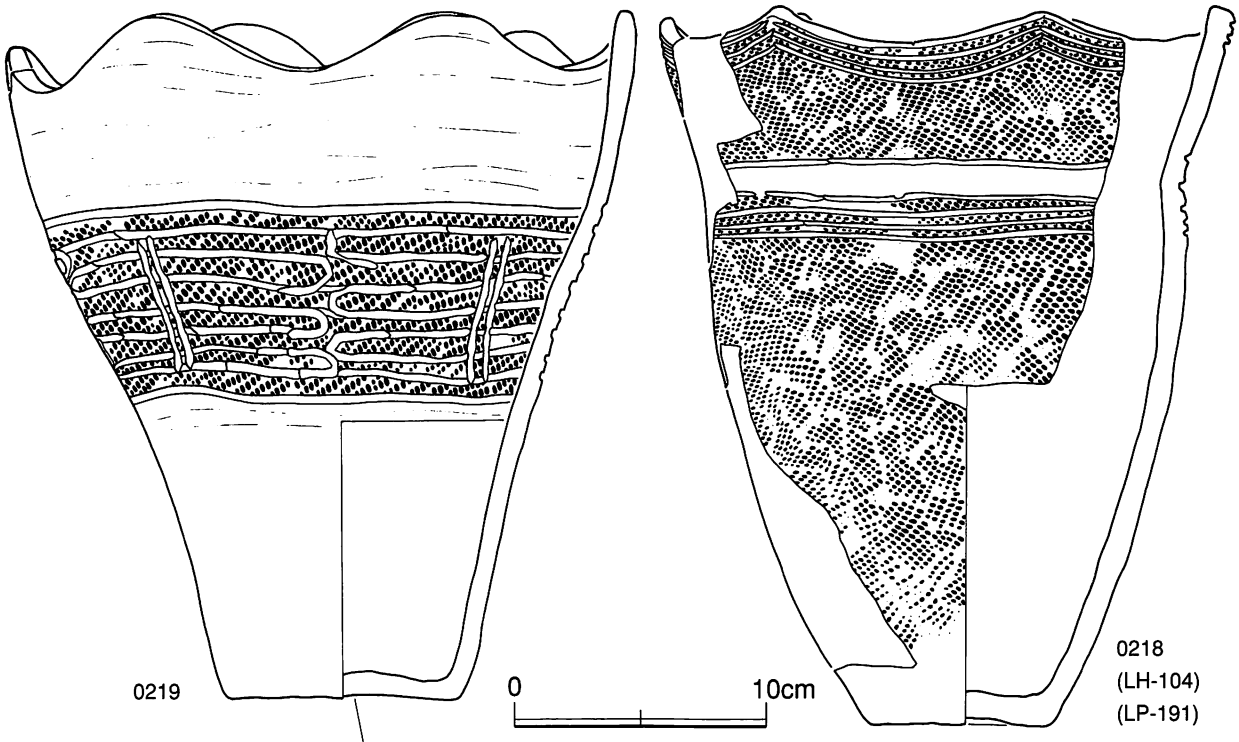
1　黒褐色(10YR2/2)土　En-aパミス混ざる

2　黒褐色(10YR3/2)土　En-aパミス混ざる

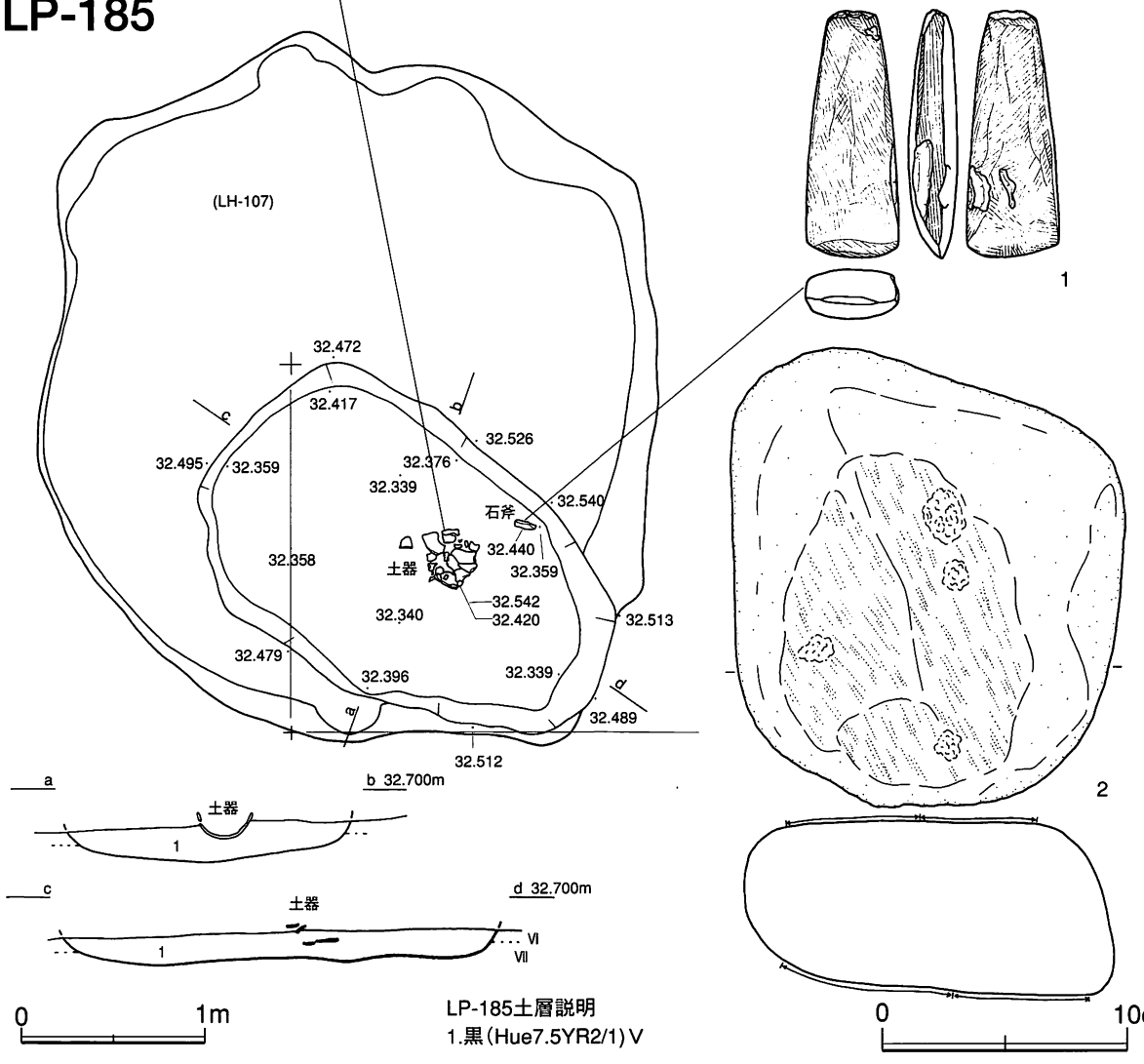
3　褐色(10YR4/4)土　En-Lブロック状、En-aパミス混ざる

4　明黄褐色(10YR6/6)土　En-aパミス混ざる

図Ⅳ-55　LP-183・184と遺物



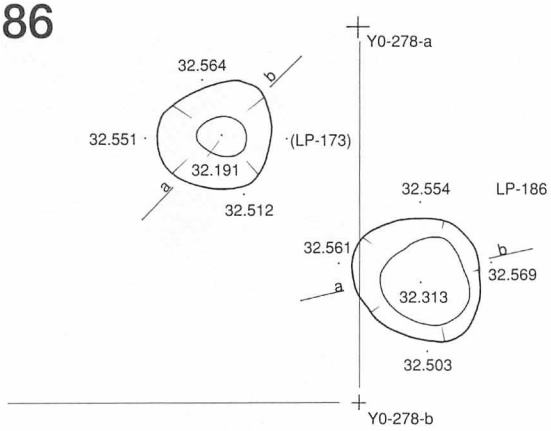
LP-185

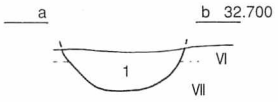


LP-185土層説明
1.黒(Hue7.5YR2/1)Ⅴ

図Ⅳ LP-185 と遺物

LP-186

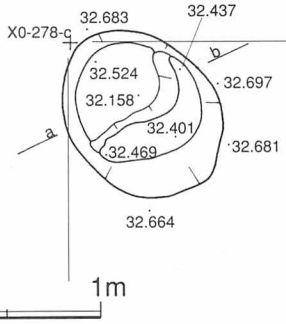




LP-186土層説明
1.黒(Hue7.5YR1.7/1)Ⅴ

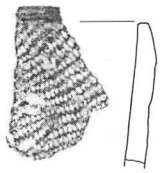


LP-187





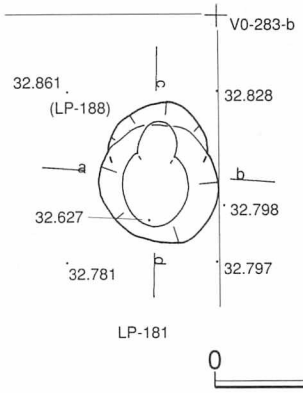
LP-187土層説明
1.黒(Hue5YR1.7/1)Ⅴ

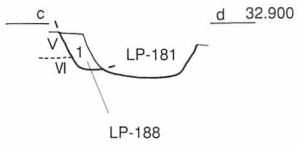


40557



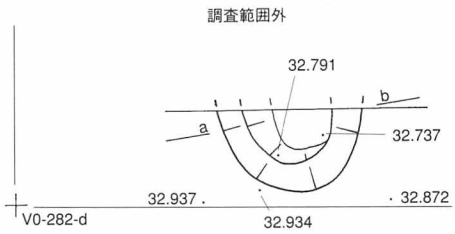
LP-188

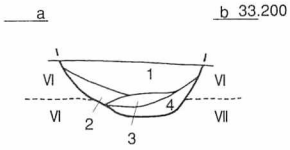




LP-188 土層説明
1　黒色（10YR2/1）土

LP-189

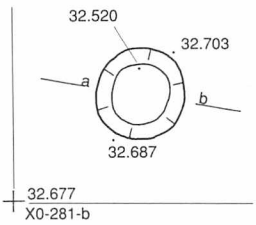


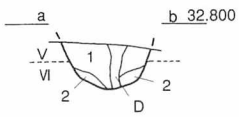


LP-189 土層説明
1　黒褐色（10YR2/3）土
2　暗褐色（10YR3/4）土
3　黒褐色（10YR2/2）土
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）土



LP-190





LP-190 土層説明
1　黒褐色（10YR2/3）土
　　En-aパミス混ざる
2　暗褐色（10YR3/3）土



図Ⅳ-57　LP-186・187・188・189・190

がる壁へのつながりも緩やかなカーブを描く。覆土は流れ込みと考えられるⅤ層腐植土で、掘り込み面はⅤ層中である。遺物は覆土中からⅣ群a・b類土器が出土しているが主体は後者と考えられる。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。(皆川洋一)

LP-187（図Ⅳ-57／図版-107～123）

位置：X0-278-c　規模：0.97×0.73／0.64×0.67／0.17m　長軸方向：N-25.0°－W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の惰円形を呈す小型の土壙である。壙底は南側が一段低くなる変速の凹凸面を呈し、広がりながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかなカーブを描く。覆土は流れ込みと考えられるⅤ層腐植土で、掘り込み面はⅤ層中である。遺物は覆土中からⅣ群b類土器、フレイク、礫が出土している。性格は不明である。

遺物　40557はⅣ群b類の深鉢形土器口縁部である。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。(皆川洋一)

LP-188（図Ⅳ-57）

位置：V0-282-c　規模：(0.50)×(0.24)／(0.14)×(0.20)／(0.18)m

長軸方向：(N-79°-W)

特徴　LP-181の北側の壁面を調査中に、黒色土の落ち込みによって検出した。LP-181と切り合い関係にあることを認識できなかったため、南側半分を欠失してしまった。本土壙の方が旧いものである。残存部分の壁面は急な傾斜である。全体の平面形、壙底の形状、覆土、性格については不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LP-189（図Ⅳ-57）

位置：V0-282-a　規模：(0.78)×(0.42)／(0.24)×(0.48)／(0.28)m

長軸方向：N-81°-W

特徴　Ⅵ層上面で半円形の黒褐色土の落ち込みとして確認した。北側のプランは調査範囲外へ広がるため、全体の形状は不明である。壁は西側は凹凸のある緩やかな傾斜で、東側は急である。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LP-190（図Ⅳ-57）

位置：X0-281-a　規模：0.49×0.44／0.30×0.32／0.24m　長軸方向：N-26°-E

特徴　Ⅴ層上面から10cmほど掘り下げたところで、楕円形状の黒色土の落ち込みとして確認した。壙底は中央部が窪む形状で、壁面はやや急である。覆土には部分的に撹乱がみられる。LP-166に隣接するが、性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

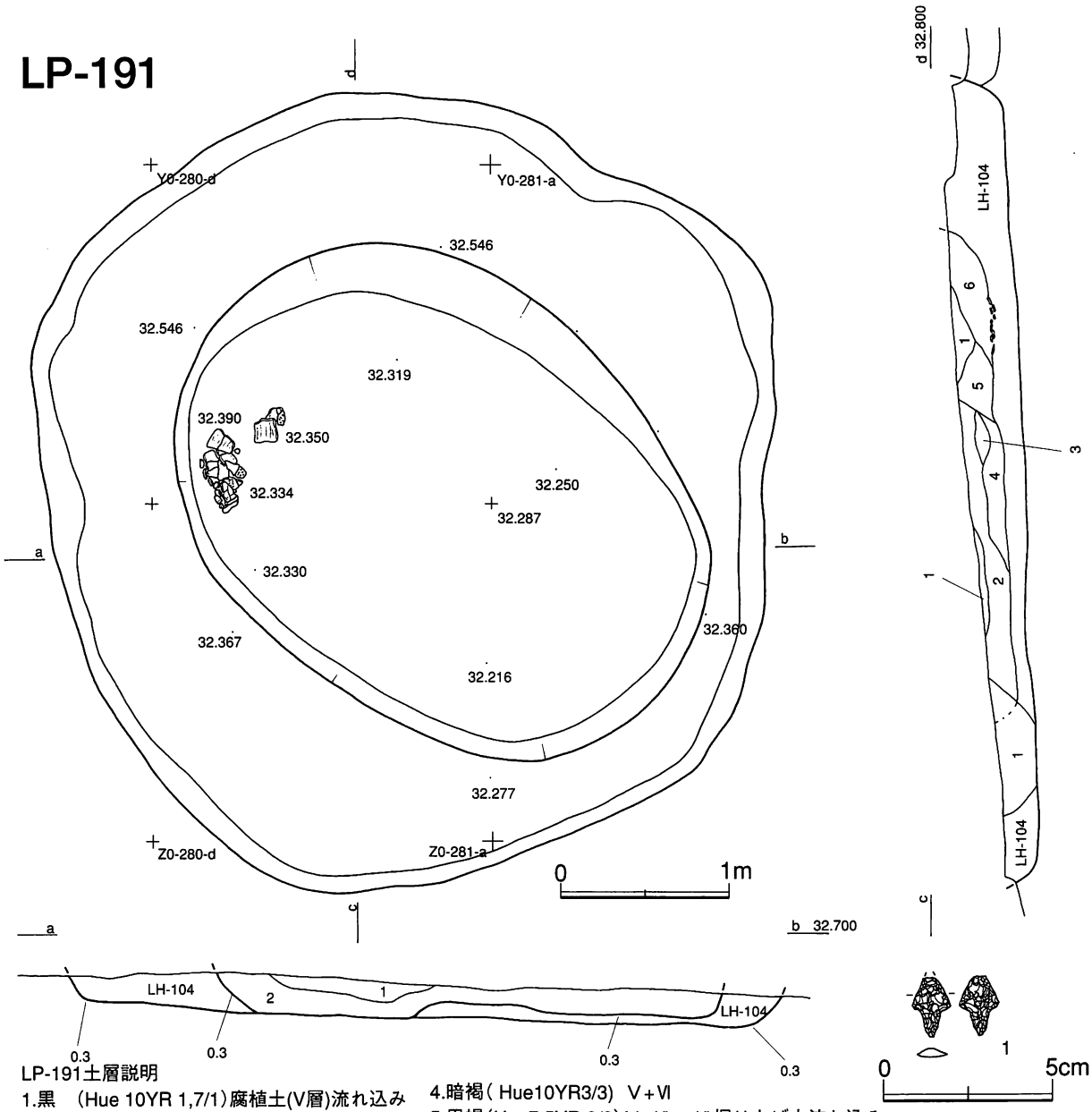
LP-191（図Ⅳ-58／図版-107～123，126～130）

位置：Y0-280-c,Y0-280-d,Y0-281-a　規模：3.17×2.12／×／0.11／m　長軸方向：N-33°-E

特徴　調査区西側のキウス川に向かう緩斜面で検出された平面が不整の惰円形を呈す土壙で、LH-104の覆土中に掘り込んでいる。壙底面は緩斜面の傾斜に沿って南側が低くなるもので、広がりながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかなカーブを描いている。覆土は上位に流れ込みと考えられるV層腐植土層、下位はVI・VII層の土が混じるV層で埋め戻しの可能性がある。下位の覆土に乗る形で0226の復元土器が横倒しの状態で出土している。掘り込み面はLH-104より上位のV層中である。遺物は全て覆土中からのもので、土器はIII群b類、IV群a・b類土器が出土しており主体は大量に出土したIV群b類土器である。石器は石鏃、フレイク・チップ、礫が出土している。覆土と遺物の出土状況から墓的な性格を有すると考えられる。

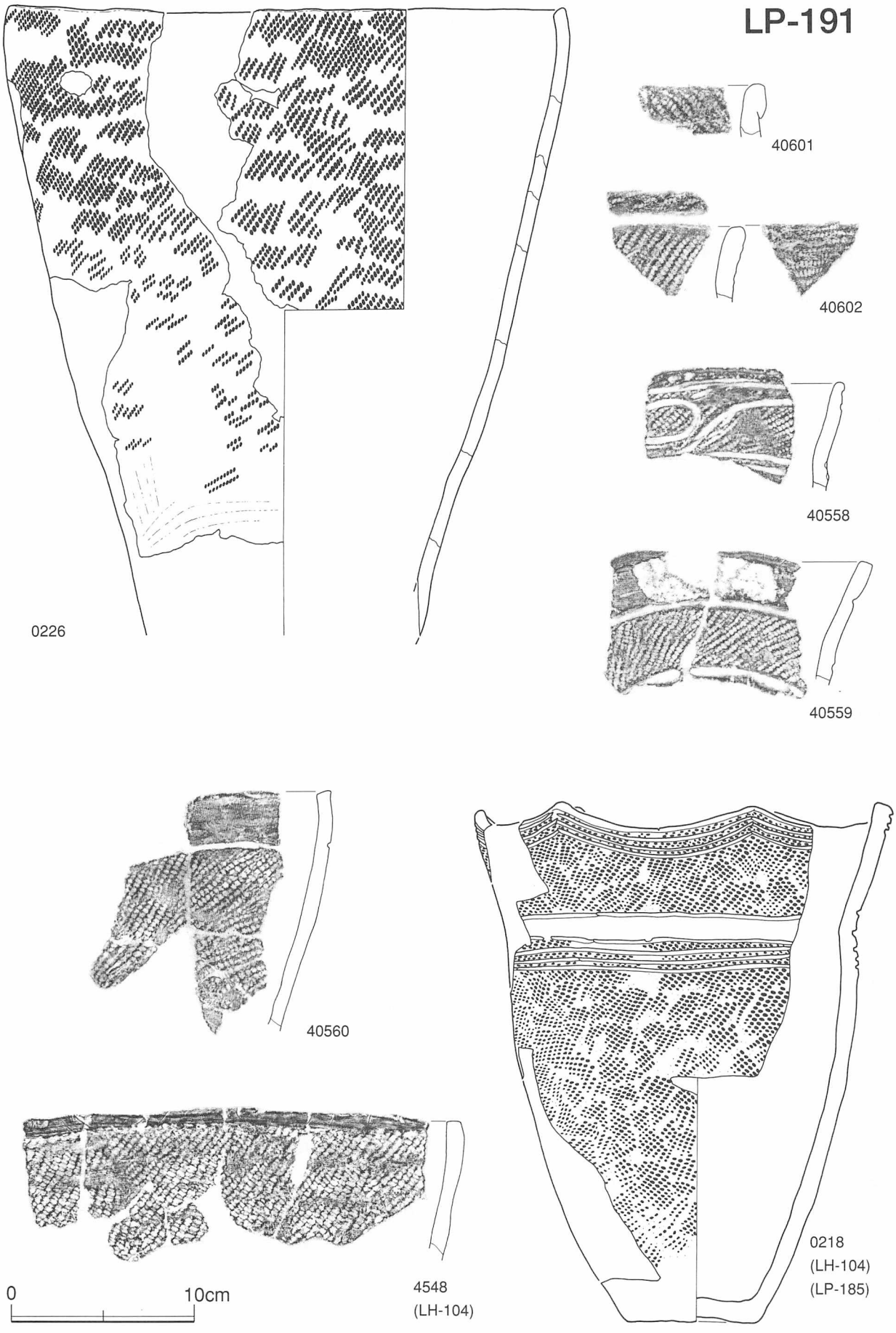
遺物　40601,40602はIV群a類の深鉢形土器口縁部である。0218,0226,4548,40558～40560はIV群b類の深鉢形土器である。1は有茎凸基の石鏃。黒曜石製。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。(皆川洋一)



LP-191土層説明
1.黒　(Hue 10YR 1,7/1)腐植土(V層)流れ込み
2.黒　(Hue 7,5YR 2/1)腐植土(V層)流れ込み
3.黒褐(Hue10YR2/3)V>>VI
4.暗褐(Hue10YR3/3)　V+VI
5.黒褐(Hue7,5YR 3/2)V+VI>>VI掘り上げ土流れ込み
6.暗　褐(Hue 10YR3/3)　V+VI>>VI(パミス)掘り上げ土流れ込み

図IV-58　LP-191と遺物



図Ⅳ-59　LP-191 の遺物

LP-193（図Ⅳ-60／図版-107～123，126～130）

位置：V0-285-b,V0-285-c　規模：1.24×0.94／0.67×0.88／0.28m

長軸方向：N-75°-W

特徴　Ⅵ層上面で楕円形状の黒褐色土の落ち込みとして確認した。壙底は凹凸がみられ、壁面はやや急である。覆土は堆積状況から、流れ込みによる自然堆積と考えられる。覆土上部から、土器片及び石斧が出土している。出土した石斧の基部と2～3mほど離れた包含層から出土した刃部が接合している。性格は不明である。

遺物　40561はⅣ群b類の深鉢形土器胴部である。1は細身小型ののみ形石斧。中央部付近で欠損しており、2点が接合している。全面研磨されている。刃部は片刃で、刃部の形態はおよそ円刃である。全体が黒ずんだ色調であり、欠損部分には黒い付着物が認められる。焼けを受けた可能性もある。泥岩製。

時期　出土した土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）

LP-194（図Ⅳ-60／図版-107～123）

位置：A-295-b　規模：0.70×0.29／0.22×0.53／0.13m

長軸方向：N-9°-E

特徴　Ⅵ層上面で半円形状の黒褐色土の落ち込みとして確認した。東側半分は295ライン沿いに土層観察用に設定したトレンチによって欠失している。壙底は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。覆土は下部の黒褐色土以外は認識できず、掘込み面も認識できなかった。　土器の小破片、フレイク（黒曜石）が出土している。全体の平面形、性格については不明である。

遺物　40562はⅣ群b類の深鉢形土器口縁部である。

時期　出土した土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）

LP-196（図Ⅳ-60／図版-22・107～123，126～130）

位置：Z0-278-c,Z0-279-b　規模：0.87×0.78／0.69×0.68／0.42m

長軸方向：N-75.0°-E

特徴　調査区西側のキウス川に向かう緩斜面で検出された平面が小型の円形を呈す土壙である。LP-220を切って掘り込んでいる。壙底は明瞭な面を持たない円底で、壁はやや広がりながら立ち上がる。覆土は検出面までⅥ・Ⅶ層の土が混じる埋め戻し土である。掘り込み面はⅤ層中である。遺物はⅣ群b類土器、石斧、石皿が覆土上位で出土しおり、これらは副葬品と考えられる。覆土と遺物の出土状況から墓的な性格を有すると考えられる。

遺物　0236はⅣ群b類の小型の深鉢形土器である。1は石斧。刃部および基部が部分的に欠損している。主に刃部、側面が研磨されている。片岩製。2は石皿。粗粒の砂岩を素材とし、周縁が敲打によって楕円形状に整形されている。表面にほぼ平坦なすり面をもつ。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

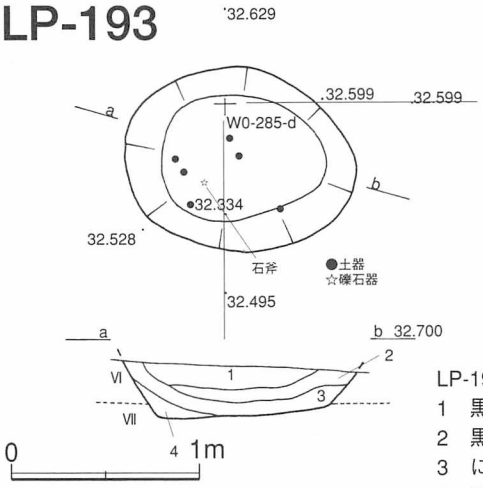
LP-197（図Ⅳ-61／図版-126～130）

位置：B-277-b,B-277-c　規模：1.23×1.07／0.86×0.86／0.31m

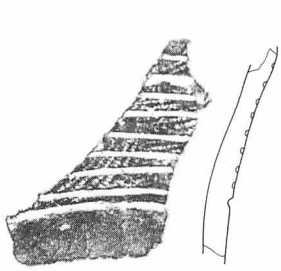
長軸方向：N-81.5°-W

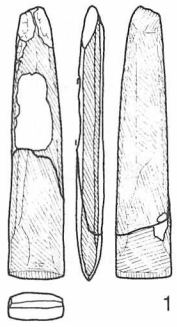
特徴　調査区西側のキウス川に向かう緩斜面で検出された平面が円形を呈す土壙である。壙底面は平坦に作られており、上方に向かう壁へのつながり部分はカーブがきつい。覆土はⅤ・Ⅵ層を主体とする流れ込みと考えられるもので掘り込み面はⅤ層中である。　遺物はⅢ群b類、Ⅳ群b類土器、石皿、フレイク、礫などが出土した。図示した石皿は北側壁際の覆土上位から出土したものであ

LP-193



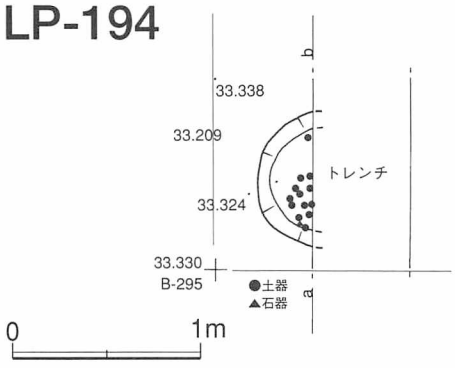
LP-193土層説明
1　黒褐色(10YR2/2)土
2　黒褐色(10YR3/2)土　En-aパミス混ざる、粘性有り
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)土　En-aパミス混ざる、粘性有り
4　にぶい黄褐色(10YR3/4)土　En-aパミス混ざる

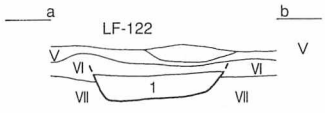




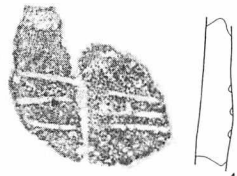


LP-194



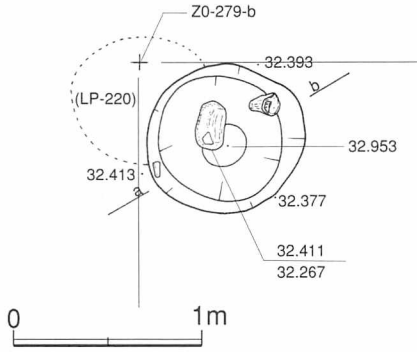


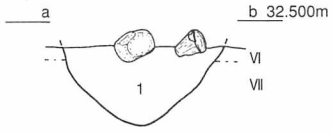
LP-194土層説明
1　黒褐色(10YR2/2)土



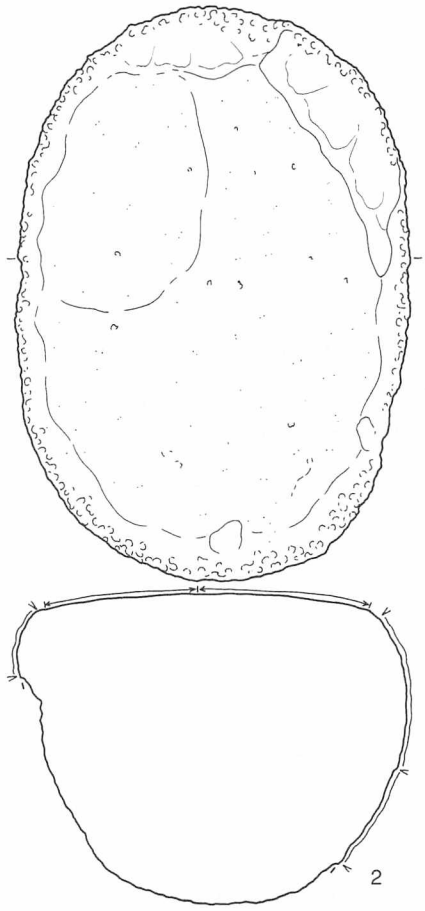


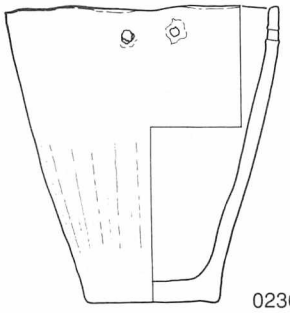
LP-196

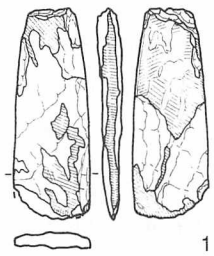




LP-196土層説明
1.黒褐(Hue10YR3/2)Ⅵ＞Ⅴ＞Ⅶ







図Ⅳ-60　LP-193・194・196と遺物

る。性格不明の土壙である。

遺物　1は石皿。表面の一部に凸～平坦なすり面をもつ。欠損している。凝灰岩製。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉の可能性がある。（皆川洋一）

LP-198（図Ⅳ-61／図版-22・107～123）

位置：X0-280-c　規模：1.50×0.95／0.81×0.81／0.45m

長軸方向：N-67.5°-W

特徴　調査区西側のキウス川に向かう緩斜面で検出された平面が円形を呈す土壙である。LH-104の北側に位置しており、切り合いは不明瞭ではあるがLH-104に切られていると判断した。また、更に北側に位置するLP-233にも切られている。壙底面は平坦に作られており、上方に向かう壁へのつながり部分はカーブがきつい。覆土はⅤ・Ⅵ層を主体とするもので埋め戻しと思われ、覆土1・2層中から多くの遺物が出土している。掘り込み面はⅤ層中である。遺物はⅣ群a・b類土器、石鏃、フレイク、礫などが出土しており、主体はⅣ群b類の時期のものと考えられる。図示した土器などは同一個体であっても大きな高低差が認められ、覆土に陥没が生じたことが伺える。覆土と遺物の出土状態から、墓的な性格を有する土壙と考えられる。

遺物　0223,40563,40564はⅣ群b類の深鉢形土器である。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-199（図Ⅳ-62／図版-107～123）

位置：Z0-278-c,Z0-278-d　規模：2.01×1.09／0.62×1.44／0.24m

長軸方向：N-19.5°-W

特徴　調査区西側のキウス川に向かう緩斜面で検出された平面が不整の惰円形を呈す土壙である。LP-200と重複し新旧はやや不明瞭であったがLP-199が新しいと判断した。壙底は緩斜面に沿って傾斜する不安定な面である。広がる壁の立ち上がりは緩やかなカーブを描くもので壙底面から壁への変換点不明瞭である。覆土はⅤ層腐植土が主体で掘り込み面はⅤ層中である。覆土の上位には図の1/2程復元されたⅣ群b類土器などが出土しており、覆土中段にはセクションに示した炭化物の葉層が認められた。これらから、覆土が意図的に腐植土で埋められた可能性がある。遺物はⅣ群b類土器、フレイク、礫などが出土している。覆土と遺物の出土状態から、墓的な特徴の見られる性格不明の土壙である。

遺物　40534,40565はⅣ群b類土器である。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

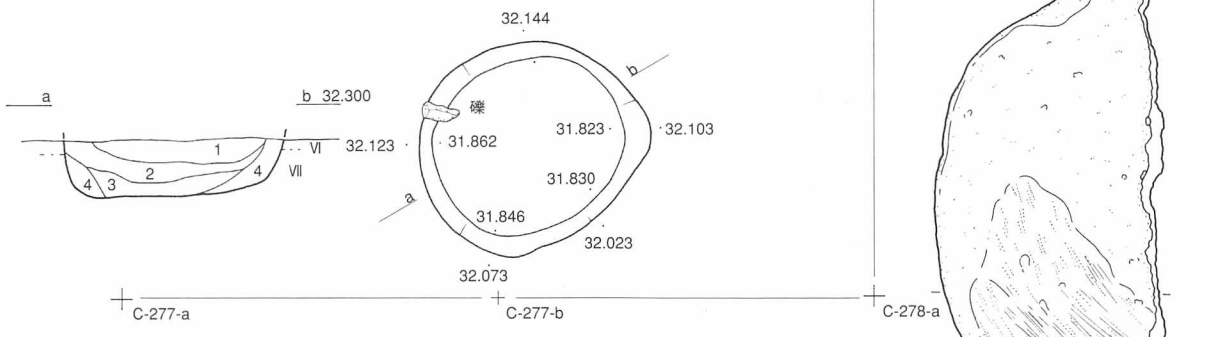
LP-200（図Ⅳ-62／図版-22・107～123）

位置：A-278-a　規模：2.43×1.34／1.28×2.05／0.21m

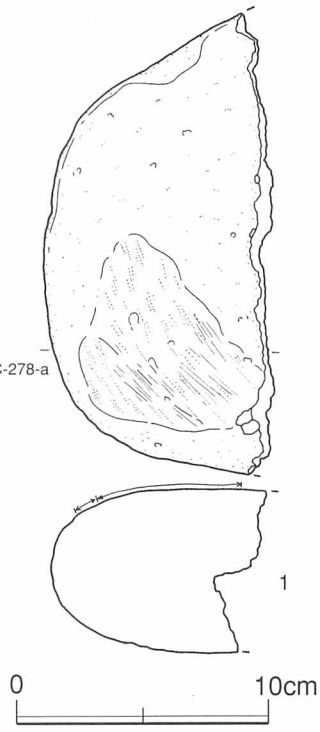
長軸方向：N-77.0°-W

特徴　調査区西側のキウス川に向かう緩斜面で検出された平面が不整の惰円形を呈す土壙である。LP-199と重複し新旧はやや不明瞭であったがLP-199が新しいと判断した。壙底は比較的平坦なもので広がる壁の立ち上がりは緩やかなカーブを描く。覆土はⅤ層腐植土が主体で掘り込み面はⅤ層中である。覆土の上位には図の復元されたⅣ群b類土器の破片が混在した状態で出土しており、覆土が意図的に腐植土で埋められた可能性も残る。特に図の0224Ⅳ群b類土器は口縁部の多くがLP-177の覆土中から出土しており、この出土状態は意図的なものと考えられ両者の関連が伺える。遺物はⅣ群a・b類土器、Rフレイク、フレイク、オロシガネ状土製品の破片などが出土している。覆土と遺物の出土状態から、墓的な特徴の見られる性格不明の土壙である。

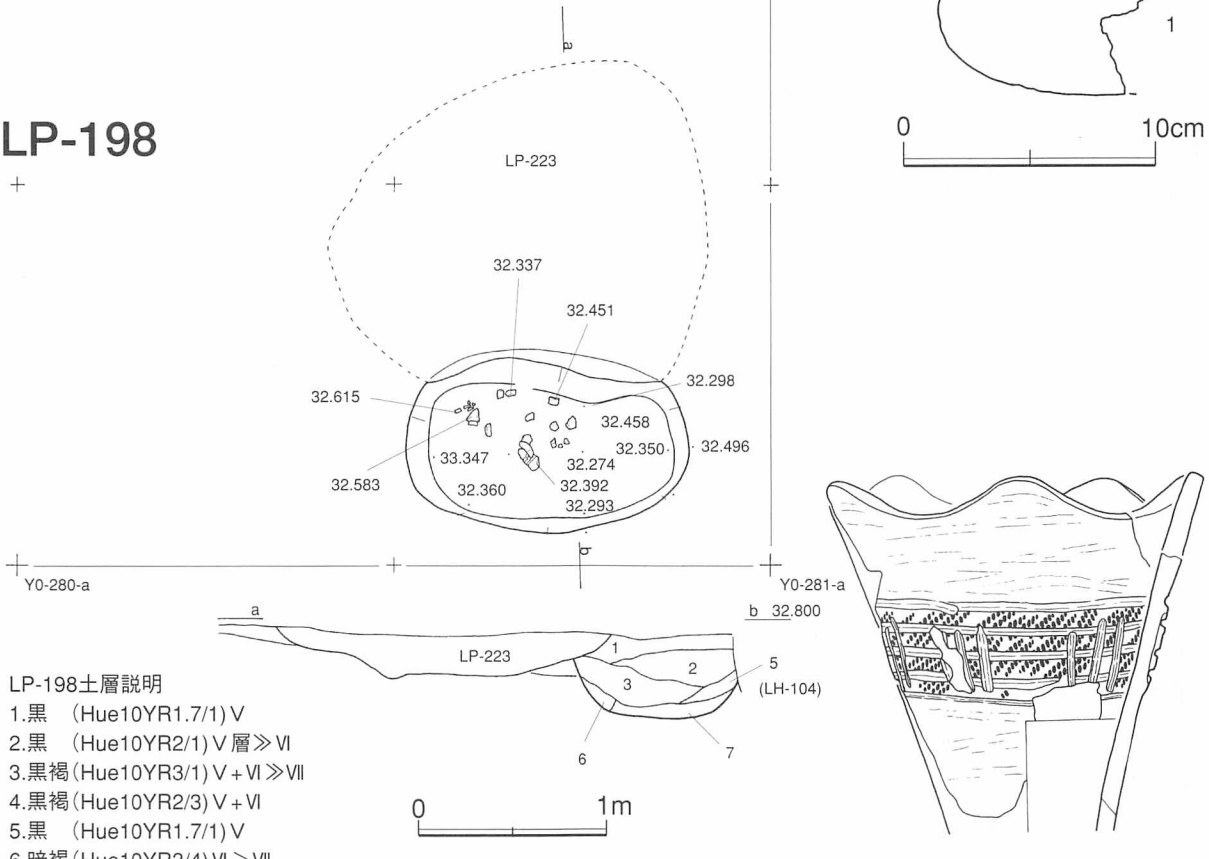
LP-197



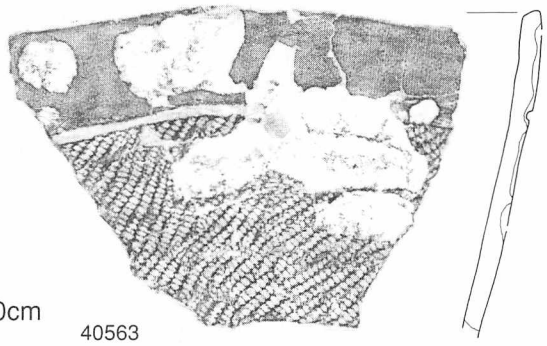
LP-197土層説明
1.黒　(Hue7.5YR1.7/1) V
2.暗褐 (Hue10YR3/4) Ⅵ＞Ⅶ
3.黒　(Hue10YR2/1)) V
4.褐　(Hue10YR4/4) Ⅵ＋V

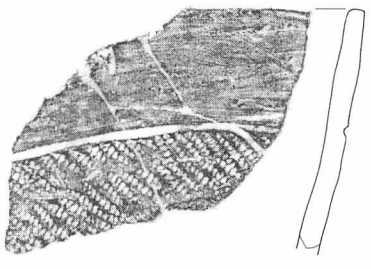


LP-198



LP-198土層説明
1.黒　(Hue10YR1.7/1) V
2.黒　(Hue10YR2/1) V 層≫Ⅵ
3.黒褐 (Hue10YR3/1) V＋Ⅵ≫Ⅶ
4.黒褐 (Hue10YR2/3) V＋Ⅵ
5.黒　(Hue10YR1.7/1) V
6.暗褐 (Hue10YR3/4) Ⅵ＞Ⅶ
7.黒褐 (Hue10YR2/2) V＋Ⅵ＞Ⅶ





図Ⅳ-61　LP-197・198 と遺物

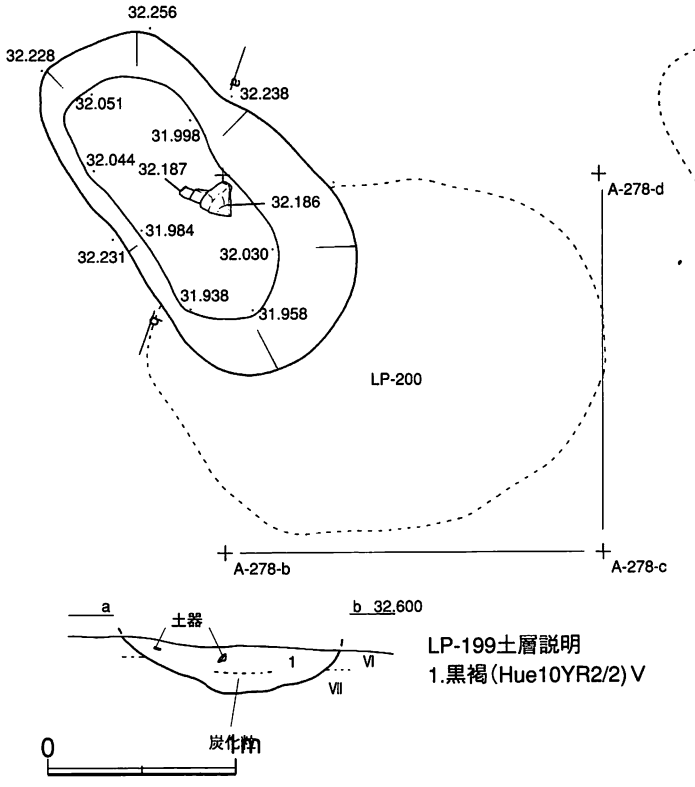
遺物　0220,0230,40566,40567,40568,4541 は深鉢形、0224 は瓶形を呈するⅣ群ｂ類土器である。
時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-201（図Ⅳ-62 ／ 図版-23）
位置：Z0-276-b　規模：1.05 × 1.00 ／ 0.50 × 0.49 ／ 0.43m
長軸方向：N-71.0° -E
特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の円形を呈す土壙である。LP-201 ～ 207,213 ～ 218 からなる土壙群の一つである。壙底は丸味を帯びた平坦なもので、やや開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかなカーブを描いている。覆土は上位に陥没の痕跡が見られる埋め戻し土と考えられるものでⅤ、Ⅵ、Ⅶ層が色調別に埋め戻された可能性がある。Ⅴ層上面から約 5 ㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は覆土中からⅤ群ｃ類土器とフレイクが出土しているがこれは覆土を埋め戻した際に紛れ込んだものと考えられる。覆土の状態は墓的であるが、規模から見て成人の体躯を被葬するのは難しい。貯蔵穴あるいは墓的な特徴を有する土壙である。
遺物　掲載遺物なし
時期　覆土の遺物と検出面から縄文晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-202（図Ⅳ-62 ／ 図版-23）
位置：Z0-275-c　規模：0.89 × 0.84 ／ 0.47 × 0.52 ／ 0.42m
長軸方向：N-80.0° -E
特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の円形を呈す土壙である。LP-201 ～ 207,213 ～ 218 からなる土壙群の一つである。壙底は丸味を帯びたもので、僅かに開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかなカーブを描いている。覆土は上位に陥没の痕跡が見られる埋め戻し土と考えられるものでⅤ、Ⅵ層が色調別に埋め戻された可能性がある。Ⅴ層上面から約 5 ㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は出土していない。覆土の状態は貯蔵穴あるいは墓的であるが、規模から見て成人の体躯を被葬するのは難しい。貯蔵穴あるいは墓的な特徴を有する土壙である。
遺物　掲載遺物なし
時期　検出面と周辺遺構との類似から縄文晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

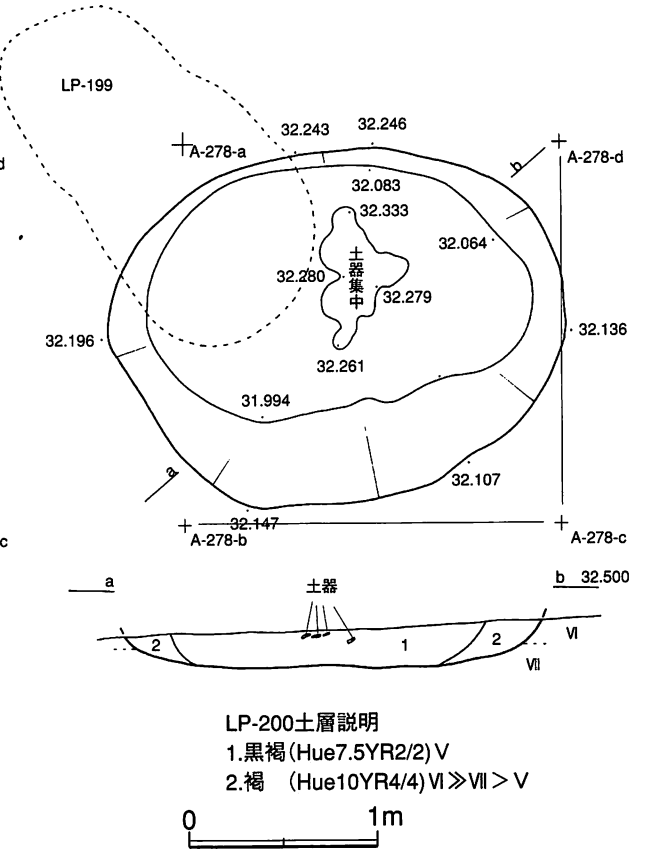
LP-203（図Ⅳ-62 ／ 図版-23）
位置：Z0-275-d　規模：0.85 × 0.75 ／ 0.41 × 0.41 ／ 0.38m
長軸方向：N-67.0° -W
特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の円形を呈す土壙である。LP-201 ～ 207,213 ～ 218 からなる土壙群の一つである。壙底は丸味を帯びた平坦なもので、やや開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかなカーブを描いている。覆土は上位に陥没の痕跡が見られる埋め戻し土と考えられるものでⅤ、Ⅵ層が色調別に埋め戻された可能性がある。Ⅴ層上面から約 5 ㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は壙底からは礫が出土している。覆土中からはⅤ群ｃ類土器が出土しているがこれは覆土を埋め戻した際に紛れ込んだものと考えられる。覆土の状態は墓的であるが、規模から見て成人の体躯を被葬するのは難しい。貯蔵穴あるいは墓的な特徴を有する土壙である。
遺物　掲載遺物なし
時期　覆土の遺物と検出面から縄文晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-199



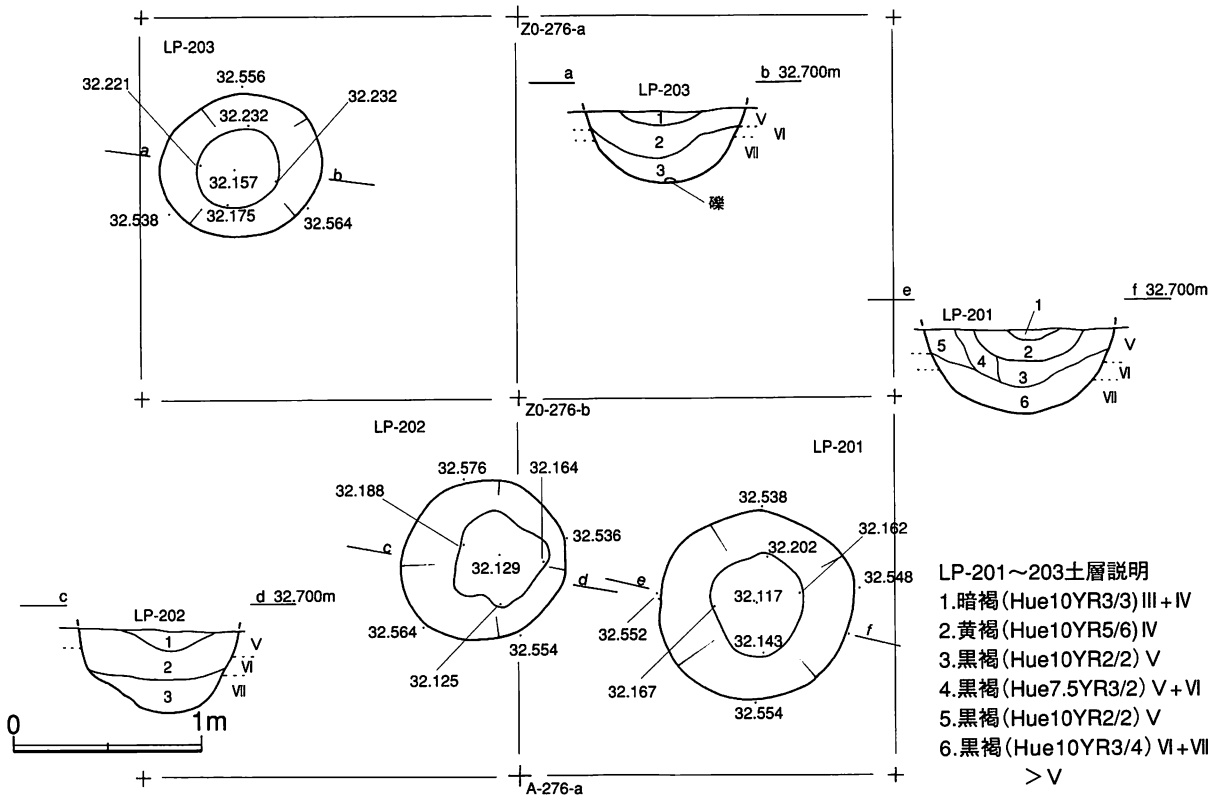
LP-199土層説明
1.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅴ

LP-200



LP-200土層説明
1.黒褐(Hue7.5YR2/2)Ⅴ
2.褐　(Hue10YR4/4)Ⅵ≫Ⅶ＞Ⅴ

LP-201 ～ 203

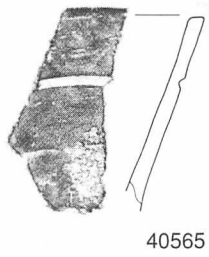


LP-201～203土層説明
1.暗褐(Hue10YR3/3)Ⅲ＋Ⅳ
2.黄褐(Hue10YR5/6)Ⅳ
3.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅴ
4.黒褐(Hue7.5YR3/2)Ⅴ＋Ⅵ
5.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅴ
6.黒褐(Hue10YR3/4)Ⅵ＋Ⅶ＞Ⅴ

図Ⅳ-62　LP-199・200・201～203

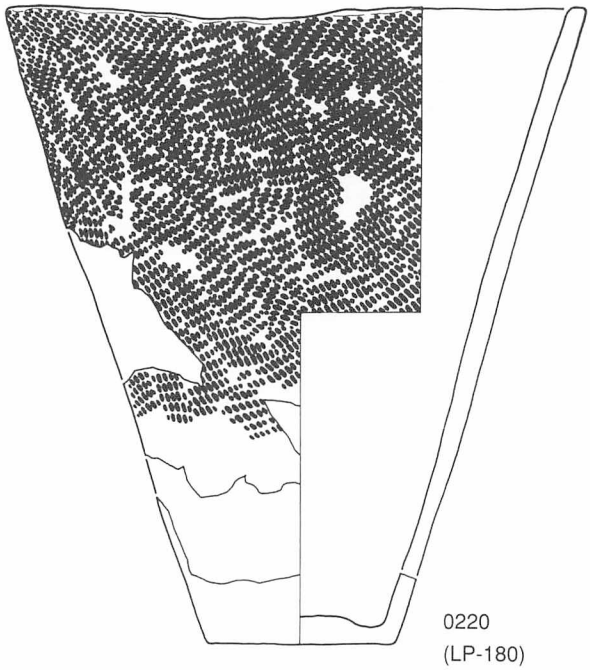
LP-199

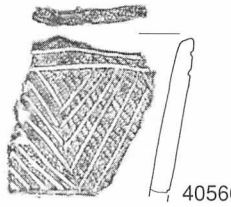


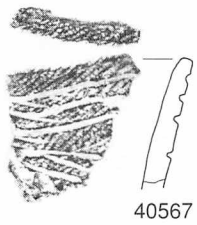


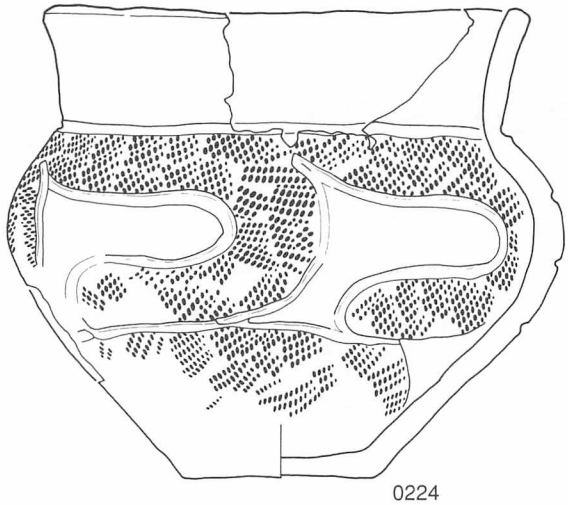


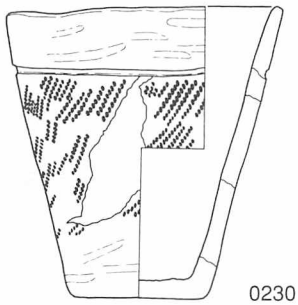
LP-200



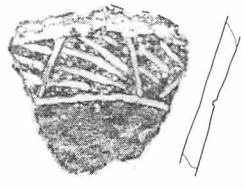














図Ⅳ-63　LP-199・200の遺物

LP-204（図Ⅳ-64）

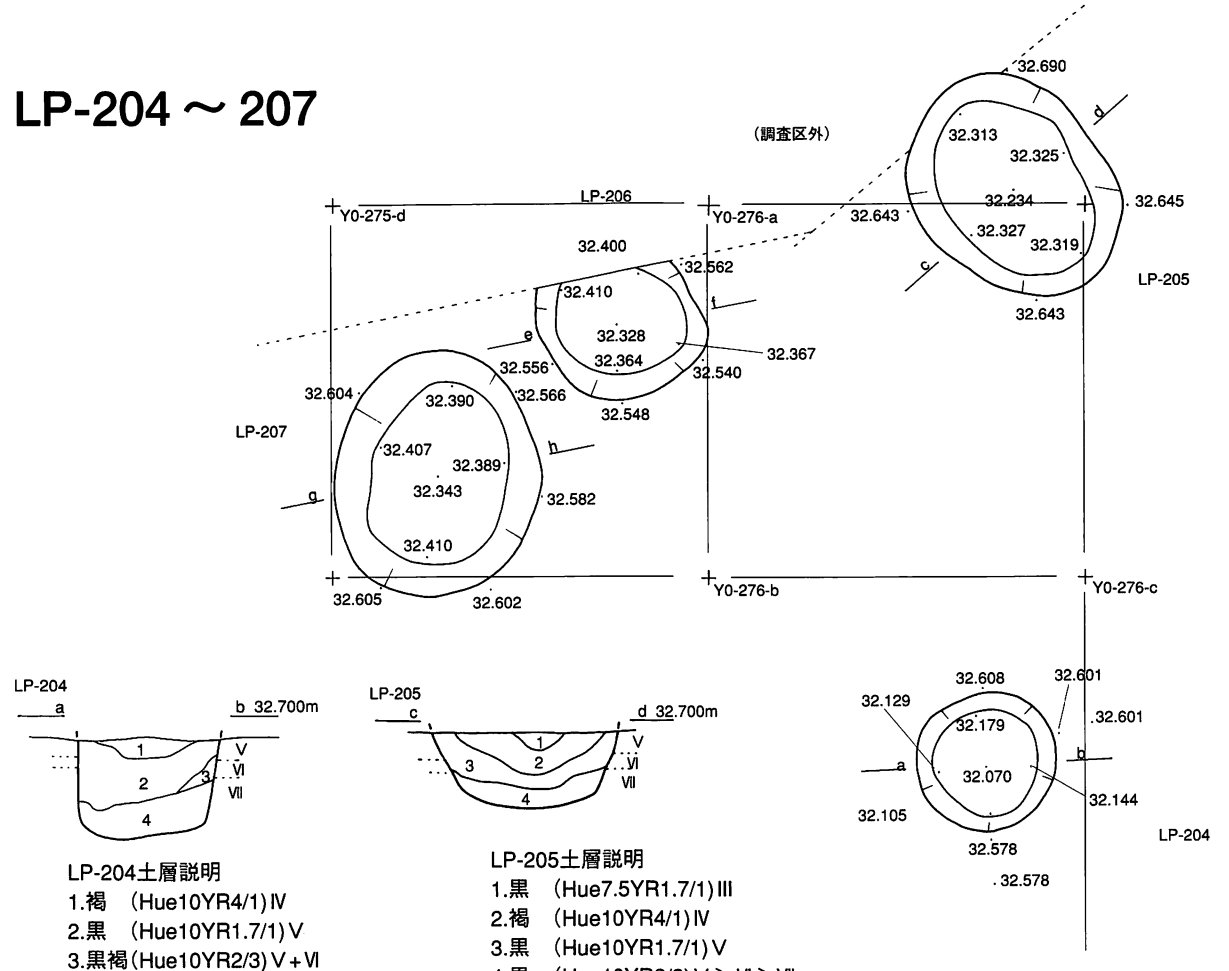
位置：Y0-276-b　規模：0.75×0.72／0.56×0.55／0.52m

長軸方向：N-65.5°-E

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が円形を呈す土壙である。LP-201～207,213～218からなる土壙群の一つである。壙底は平坦なもので、垂直に近い角度で立ち上がる壁へのつながりは急角度である。覆土は上位に陥没の痕跡が見られるもので3･4層は埋め戻されていると考えられる。Ⅴ層上面から約5㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は出土していない。覆土の状態は墓的であるが、規模から見て成人の体躯を被葬するのは難しい。貯蔵穴あるいは墓的な特徴を持つ土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物と検出面から縄文晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）



LP-204土層説明
1.褐　(Hue10YR4/1)Ⅳ
2.黒　(Hue10YR1.7/1)Ⅴ
3.黒褐(Hue10YR2/3)Ⅴ+Ⅵ
4.黒褐(Hue10yr3/4)Ⅴ+Ⅵ+Ⅶ
＊3.4層は埋め戻されている可能性がある。

LP-205土層説明
1.黒　(Hue7.5YR1.7/1)Ⅲ
2.褐　(Hue10YR4/1)Ⅳ
3.黒　(Hue10YR1.7/1)Ⅴ
4.黒　(Hue10YR2/2)Ⅴ＞Ⅵ＞Ⅶ

LP-206土層説明
1.褐　(Hue10YR4/1)Ⅳ
2.黒　(Hue10YR1.7/1)Ⅴ
3.黒褐(Hue10YR2/3)Ⅴ＞Ⅵ≫Ⅶ

LP-207土層説明
1.黒褐(Hue7.5YR3/1)Ⅲ
2.褐(Hue10YR4/6)Ⅳ
3.黒(Hue10YR1.7/1)Ⅴ
4.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅴ+Ⅵ＞Ⅶ

図Ⅳ-64　LP-204～207

LP-205（図Ⅳ-64）

位置：X0-276-c,V0-276-d　規模：1.27×0.99／0.72×1.03／0.39m

長軸方向：N-15.0°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の楕円形を呈す土壙である。LP-201～207,213～218からなる土壙群の一つである。壙底は僅かに丸味を帯びる平坦な面で、開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかである。覆土は上位に陥没状の痕跡が見られるもので3・4層は埋め戻し土の可能性がある。Ⅴ層上面から約5㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は覆土からⅣ群a・b類土器が出土したが、掘り上げた遺物が混入したと考えられる。覆土の状態は墓的であるが、規模から見て成人の体躯を被葬するのは難しい。貯蔵穴あるいは墓的な特徴を有する土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物と検出面から縄文晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-206（図-Ⅳ-64）

位置：Y0-275-d　規模：0.94×0.78／0.53×0.72／0.26m

長軸方向：N-52.0°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の楕円形を呈すと推定される土壙である。LP-201～207,213～218からなる土壙群の一つ、一部が調査区外に位置していた。壙底は僅かに丸味を帯びる平坦な面で、開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかである。覆土は上位に陥没状の痕跡が見られるもので3・4層は埋め戻し土の可能性がある。Ⅴ層上面から約5㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は覆土からⅣ群b類土器が出土したが、掘り上げた遺物が混入したと考えられる。覆土の状態は墓的であるが、規模から見て成人の体躯を被葬するのは難しい。貯蔵穴あるいは墓的な特徴を有する土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物と検出面から縄文晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-207（図Ⅳ-64）

位置：Y0-275-d,Z0-279-b　規模：1.30×1.08／0.72×0.98／0.30m

長軸方向：N-22.5°-E

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の楕円形を呈す土壙である。LP-201～207,213～218からなる土壙群の一つである。壙底面は平坦で、開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかである。覆土は上位に陥没状の痕跡が見られるもので4層は埋め戻し土の可能性がある。Ⅴ層上面から約5㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は出土していない。覆土の一部は埋め戻されているが、規模から見て成人の体躯を被葬するのは難しい。貯蔵穴あるいは墓的な特徴を有する土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物と検出面から縄文晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

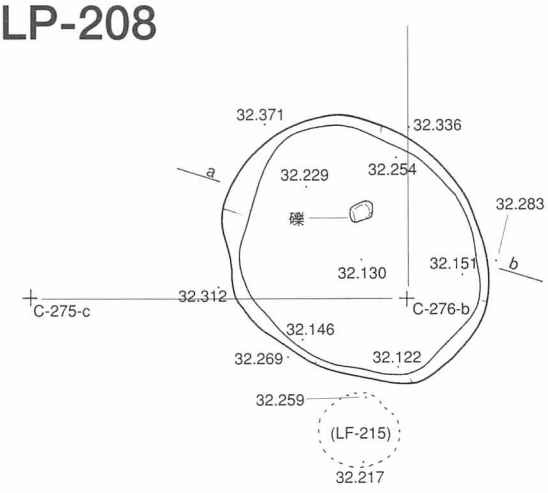
LP-208（図Ⅳ-65／図版-126～130）

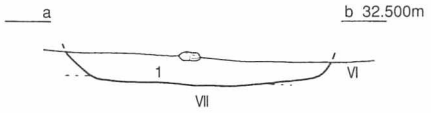
位置：C-275-c,C-275-d,C-276a,C-276-b　規模：1.49×1.32／1.21×1.38／0.15m

長軸方向：N-6.0°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の円形を呈す深度の浅い土壙である。LH-

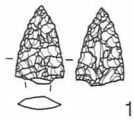
LP-208



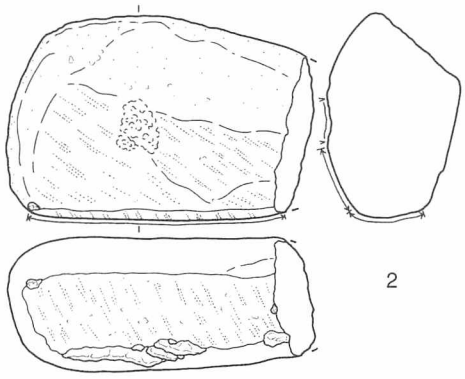


LP-208土層説明
1.黒　(Hue7.5YR2/1)Ⅴ



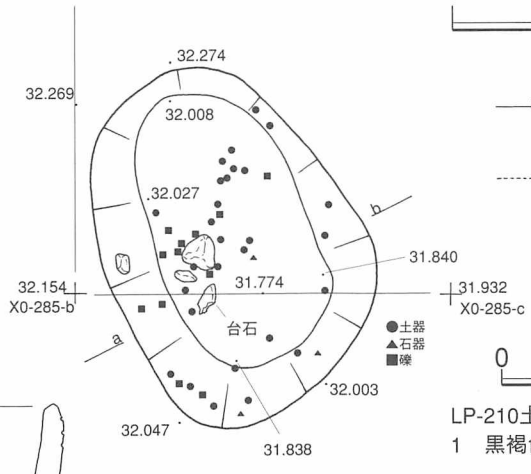








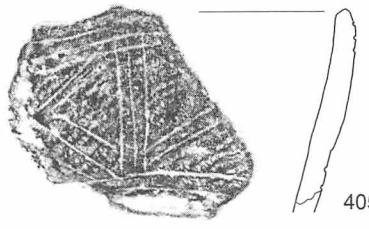
LP-210

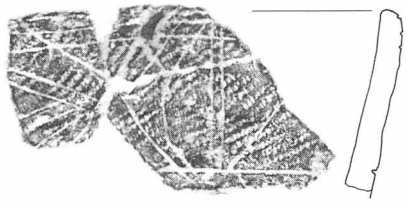




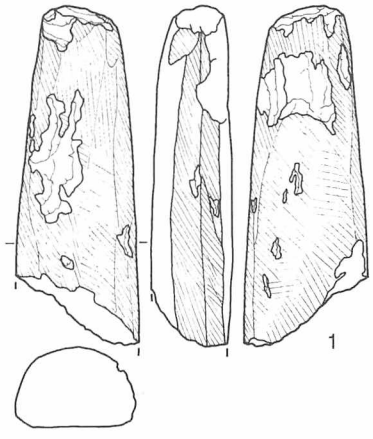


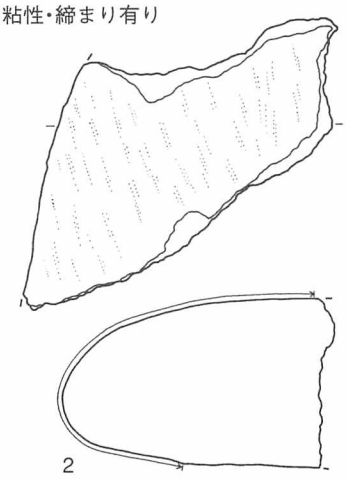
LP-210土層説明
1　黒褐色(10YR3/2)土　En-aパミス混ざる、粘性・締まり有り
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)土　En-aパミス混ざる、粘性・締まり有り











図Ⅳ-65　LP-208・210と遺物

001,002,006、LP-219、LF-215が位置している。壙底面は平坦で開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかである。覆土はⅤ層腐植土の埋没土と考えられ、掘り込み面はⅤ層中である。遺物は覆土上位から図のすり石が出土しているが意図された可能性がある。覆土中からはⅣ群b類、Ⅴ群c類土器、石鏃、フレイク・チップが出土している。性格不明の土壙である。

遺物　1は有茎平基の石鏃。茎部を欠損している。黒曜石製。2はすり石。礫の稜に断面形が凸状になるすり面をもつ。擦痕は長軸方向におよそ直行している。この機能部縁辺にも部分的に擦痕が認められる。また片面にあばた状に窪んだたたき痕ももつ。凝灰岩製。

時期　覆土の遺物から縄文時代晩期後葉の可能性がある。(皆川洋一)

LP-210（図Ⅳ-65／図版-107～123，126～130）

位置：X0-285-a,X0-285-b　規模：1.86×1.32／0.83×1.50／0.32m

長軸方向：N-15°-W

特徴　Ⅵ層上面で長楕円形状の黒褐色土の落ち込みとして確認した。壙底は西側に若干窪む凹凸のある形状で、壁面の傾斜は緩やかである。覆土は湧水面が高い場所のためか、粘質で締まっている。覆土は流れ込みによる自然堆積とも考えられるが、全体の形状から本遺構自体、木根等撹乱の可能性も考えられる。遺物はすべて検出面及び覆土上部から出土している。土器片、台石、フレイク(黒曜石)、人頭大の礫が出土している。性格は不明である。

遺物　40570はⅣ群b類の深鉢形土器口縁部である1は石斧。刃部を欠損している。横断面形はかまぼこ形を呈する比較的肉厚のもの。片岩製。2は欠損した石皿。両面および側縁に凸状のすり面をもつ。凝灰岩製。

時期　出土した土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。(澤田　健)

LP-211（図Ⅳ-66／図版-79～106，41）

位置：C-276-c,C-276-d,C-277-a,C-277-b　規模：2.23×2.16／1.73×1.63／0.35m

長軸方向：N-29.5°-E

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の円形を呈す土壙である。LH-001,002,006、LP-219、LF-215東側の近接した位置に掘り込まれている。壙底面は平坦でやや開きながら立ち上がる壁へのつながりは多くの部分で急に変化している。覆土はⅤ層腐植土と周囲に排土された掘り上げ土の流れ込みと考えられるもので埋没している。掘り込み面はⅤ層中である。遺物は覆土中からⅣ群b・c類、Ⅴ群c類土器、フレイク・チップ、礫が出土しており、その多くは覆土2層中から出土している。性格不明の土壙である。

遺物　0090は深鉢形、5035は浅鉢形を呈すると思われるⅤ群c類土器である。6130はⅥ群a類の鉢あるいは深鉢形土器である。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期後葉～晩期後葉と考えられる。(皆川洋一)

LP-212（図-67／図版-79～106）

位置：B-275-c,B-275-d,B-276-a,B-276-b　規模：2.03×1.55／1.01×1.33／0.33m

長軸方向：N-32.0°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の楕円形を呈す土壙である。壙底は北側に平坦部があり、南側は徐々にカーブを描いて立ち上がっている。覆土はⅤ層腐植土と周囲に排土された掘り上げ土の流れ込みと考えられるもので層中からは炭化物が少量出土している。掘り込み面はⅤ層中である。遺物は覆土中からⅠ群a類、Ⅴ群c類土器、砥石、フレイク、原石、礫が出土している。性格不明の土壙である。

遺物　0185 は深鉢形、5004 は浅鉢形を呈するⅤ群 c 類土器である。

時期　覆土の遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

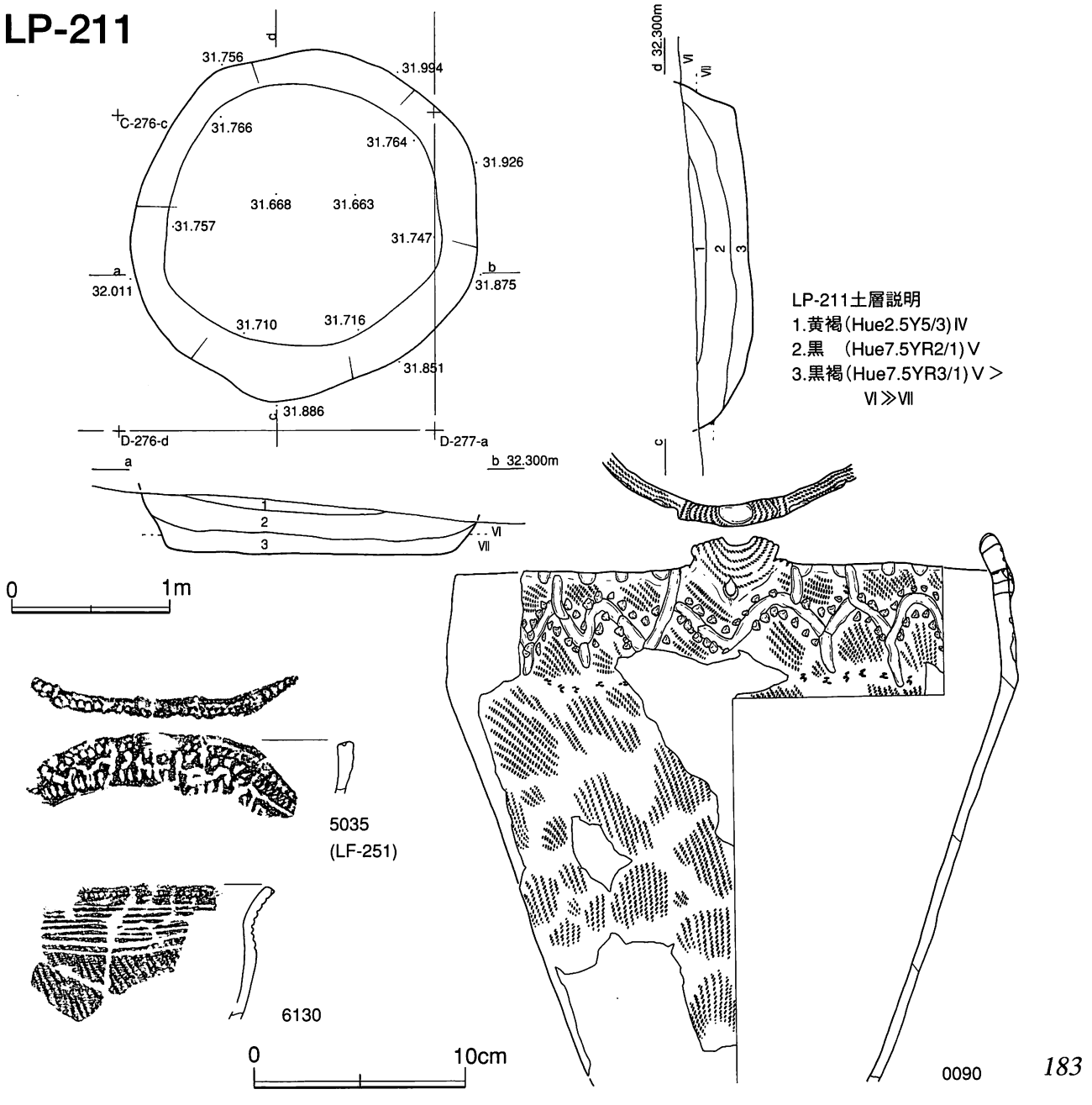
LP-213（図Ⅳ -67）

位置：Y0-274-a,Y0-274-d　規模：1.11 × 0.84 ／ 0.67 × 0.83 ／ 0.61m

長軸方向：N-77.0° -E

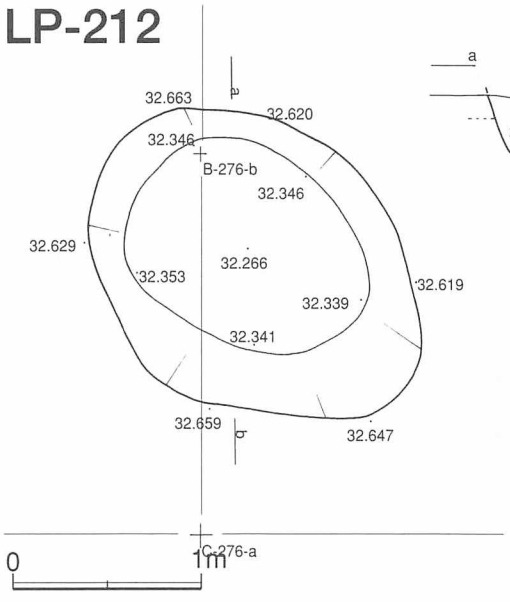
特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の楕円形を呈すと推定される土壙である。LP-201 ～ 207,213 ～ 218 からなる土壙群の一つで、北側の一部が調査区外にのびている。壙底は僅かに丸味を帯びる平坦な面で、開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかである。覆土は 4 ～ 7 層が埋め戻し土と考えられる。Ⅴ層上面から約5㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は覆土からⅤ群c類土器と礫が出土している。

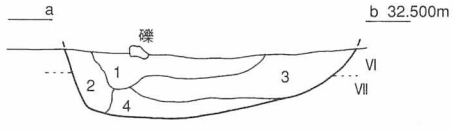
覆土の状態は墓的であるが、規模から見て成人の体躯を被葬するのは難しい。貯蔵穴あるいは墓



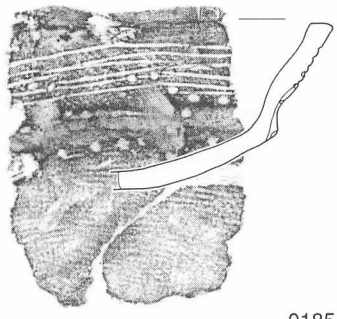
図Ⅳ -66　LP-211 と遺物

LP-212





LP-212土層説明
1.黒　(Hue10YR1.7/1) Ⅴ
2.黒褐(Hue10YR2/2) Ⅴ＞Ⅵ
3.黒褐(Hue10YR2/2) Ⅴ＞Ⅵ
4.褐　(Hue10YR4/4) Ⅵ+Ⅶ＞Ⅴ



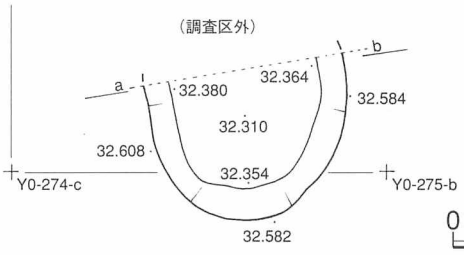
5004
(LF-254)

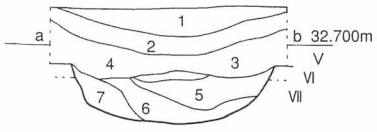


0185

0　10cm

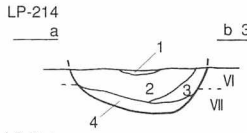
LP-213



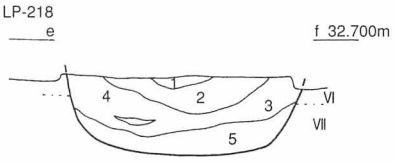


LP-213土層説明
1.黒　(Hue7.5YR1.7/1) Ⅲ
2.暗褐(Hue7.5YR3/4) Ⅳ
3.黒　(Hue7.5YR2/1) Ⅴ
4.暗褐(Hue10YR3/3) Ⅴ+Ⅵ+Ⅶ
5.黒　(Hue7.5YR2/2) Ⅴ＞Ⅵ≫Ⅶ
6.黒褐(Hue7.5YR3/2) Ⅴ+Ⅶ≫Ⅶ
7.暗褐(Hue10YR3/2) Ⅵ+Ⅶ＞Ⅴ

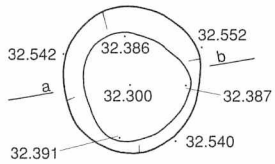
LP-214,217,218

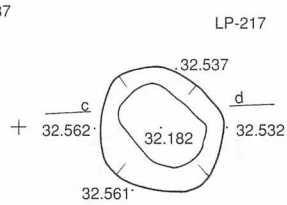


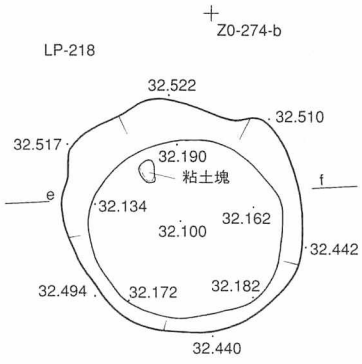
LP-214土層説明
1.暗褐(Hue7.5YR3/4) Ⅳ
2.黒　(Hue7.5YR1.7/1) Ⅴ
3.黒褐(Hue7.5YR3/2) Ⅴ+Ⅵ
4.黒褐(Hue10YR3/2) Ⅴ+Ⅵ≫Ⅶ

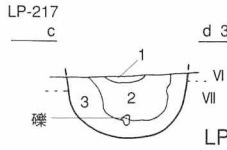


LP-218土層説明
1.黒　(Hue7.5YR2/1) Ⅲ
2.黒　(Hue7.5YR4/4) Ⅳ
3.黒　(Hue7.5YR1.7/1) Ⅴ
4.黒褐(Hue7.5YR2/2) Ⅴ≫Ⅶ
5.黒褐(Hue7.5YR2/2) Ⅵ＞Ⅵ

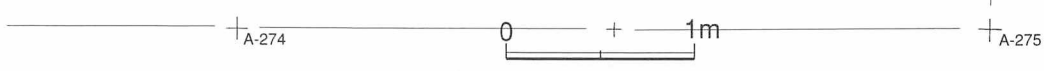








LP-217土層説明
1.褐　(Hue7.5YR4/4) Ⅳ
2.黒　(Hue7.5YR1.7/1) Ⅴ
3.黒褐(Hue10YR2/2) Ⅴ＞Ⅵ



図Ⅳ-67　LP-212・213・214・217・218と異物

的な特徴を有する土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の類似遺構の傾向から縄文時代晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-214（図Ⅳ-67／図版-24）

位置：Z0-274-a　規模：0.77×0.72／0.57×0.57／0.23m

長軸方向：N-18.5°-E

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の円形を呈す土壙である。LP-201～207,213～218からなる土壙群の一つである。壙底は丸味を帯び、開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかである。覆土は3・4層に掘り上げ土の流れ込みと考えるものがみられその上位はⅤ層の腐植土で埋没している。Ⅴ層上面から約5㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は覆土からⅣ群c類土器が出土している。貯蔵穴的な特徴を有する土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の類似遺構の傾向から縄文時代晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-215（図Ⅳ-68／図版-79～106）

位置：A-273-d　規模：1.24×1.18／1.02×0.92／0.26m

長軸方向：N-36.5°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の円形を呈す土壙である。LP-201～207,213～218からなる土壙群の一つである。壙底は丸味を帯び、開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかである。覆土は3層が埋め戻し土と考えられ、その上位はⅤ層の腐植土で埋没している。Ⅴ層上面から約5㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は覆土からⅣ群b類、Ⅴ群c類土器、フレイク・チップが出土している。貯蔵穴あるいは墓的な的な特徴を有する土壙である。

遺物　5650は深鉢形、0175は小型の浅鉢形を呈するⅤ群c類土器である。

時期　覆土の遺物と周囲の類似遺構の傾向から縄文時代晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-216（図Ⅳ-68）

位置：Y0-274-b　規模：1.52×1.07／0.96×1.25／0.26m

長軸方向：N-74.0°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の楕円形を呈す土壙である。LP-201～207,213～218からなる土壙群の一つである。壙底はほぼ平坦で、開きながら立ち上がる壁へのつながりは緩やかである。覆土は3～5層に埋め戻し土の可能性がある。Ⅴ層上面から約5㎝掘り下げた面でⅣ層の入る窪みを検出し調査を行っているので、掘り込み面はⅤ層の上位である。遺物は覆土からⅣ群b・c類、Ⅴ群c類土器、フレイク、礫が出土している。貯蔵穴あるいは墓的な的な特徴を有する土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物と周囲の類似遺構の傾向から縄文時代晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

LP-217（図Ⅳ-67／図版-24）

位置：Z0-274-c,Z0-274-d　規模：0.71×0.54／0.33×0.47／0.32m

長軸方向：N-24.0°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の楕円形を呈す小型の土壙である。LP-201～207,213

～218からなる土壙群の一つである。壙底は丸味を帯びたもので、ほぼ真っ直ぐに立ち上がる壁へのつながりも緩やかである。覆土は3層に埋め戻し土の可能性があり、2層の腐植土は陥没したように堆積している。掘り込み面は土壙群の傾向からⅤ層の上位と考えられる。遺物は覆土からⅠ群b-2類土器、礫が出土している。前者は流れ込みと考えられる。貯蔵穴あるいは墓的な的な特徴を有する土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物と周囲の類似遺構の傾向から縄文時代晩期後葉と考えられる。(皆川洋一)

LP-218（図Ⅳ-67／図版-22，24）

位置：A-273-c,A-274-d　規模：1.36×1.26／0.95×1.00／0.42m

長軸方向：N-42.5°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が円形を呈す土壙である。LP-201～207,213～218からなる土壙群の一つである。壙底面は僅かに丸味をおびたもので、広がり気味に立ち上がる壁へのつながりは急なカーブを描いている。覆土は5層が埋め戻し土と考えられるものである。掘り込み面は土壙群の傾向からⅤ層と考えられる。遺物は覆土中からⅣ群b・c類、Ⅴ群c類土器が出土しており、覆土下位の床面近くからはフレイク、礫、粘土塊が出土している。粘土塊は混じりのない黄褐色の細かい粒子からなるしっとりとした手触りのもので、寝かして置いた土器を制作する精製粘土を推定させる。これは意図して壙底近くに置かれたと考えられる。貯蔵穴あるいは墓的な的な特徴を有する土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物と周囲の類似遺構の傾向から縄文時代晩期後葉と考えられる。(皆川洋一)

LP-219（図Ⅳ-69／図版-126～130）

位置：C-275-a　規模：2.13×2.05／1.55×1.65／0.54m

長軸方向：N-28.5°-E

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が円形を呈すと推定される大型の土壙である。LH-006を切って掘り込まれており、周辺にはLH-001,002,LP-208,LF-238,251などが位置している。壙底面は平坦を意図したもので、広がり気味に立ち上がる壁へのつながりは急なカーブを描いている。西側の壁はLHの調査時に欠失している。覆土は2層以下が埋め戻し土と考えられるもので、1層は陥没状の落ち込みに流れ込んだ腐植土である。掘り込み面はLH-006より上位のⅤ層中と考えられる。遺物は覆土中からⅣ群a・b類土器、Rフレイク、フレイク、チップ、石核、原石、礫、石製品などが出土している。特にRフレイク、フレイク、チップ、石核、原石などは平面中央やや北側よりの1層下位に集中して出土しておりフレイク類も大型のものも多いことから、これらを意図的に据え置いた可能性が高い。貯蔵穴あるいは墓的な的な特徴を有する土壙である。

遺物　1は石核。横断面形はおよそ三角形状を呈する。多方向から礫表皮が剥離されている。2は石製品。平面形は台形状に整形されている。平面形状および厚さから石鏃を再加工したものとも考えられる。いずれも黒曜石製。

時期　覆土上位から出土した大型のフレイク類から縄文時代晩期後半と考えられる。(皆川洋一)

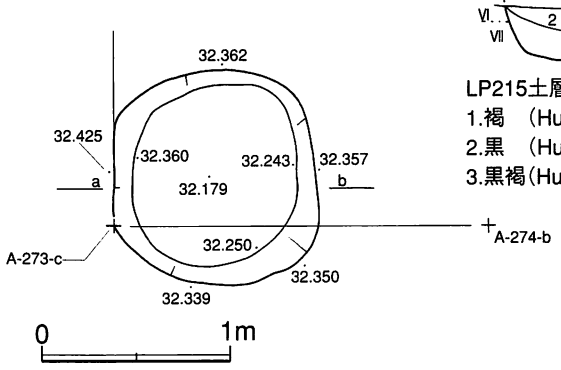
LP-220（図Ⅳ-68）

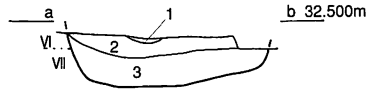
位置：Z0-279-b　規模：0.74×0.69／0.33×0.39／0.38m

長軸方向：N-34.0°-W

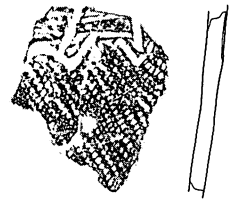
特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が楕円形と推定される小型の土壙である。LH-105とLP-196

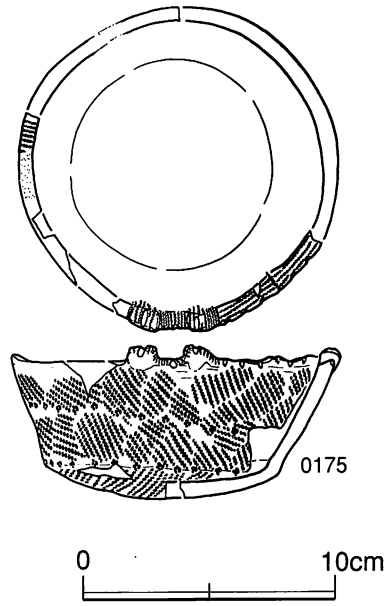
LP-215



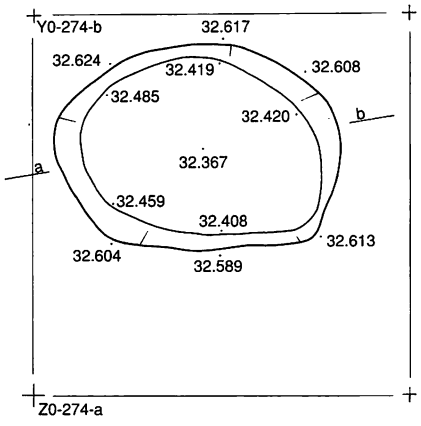


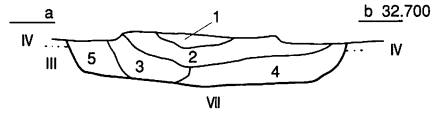
LP215土層説明
1.褐　(Hue7.5YR4/4)Ⅳ
2.黒　(Hue7.5YR1.7/1)Ⅴ
3.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅴ＞Ⅵ＞Ⅶ



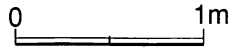


LP-216

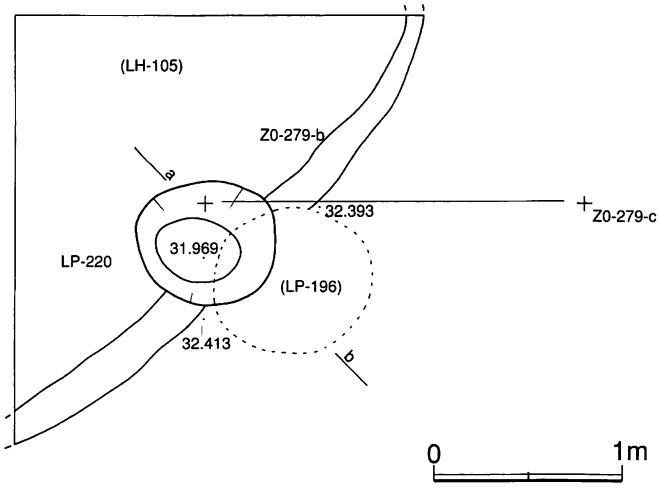


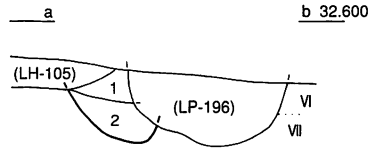


LP-216土層説明
1.褐　(Hue7.5YR4/4)Ⅳ
2.黒　(Hue7.5YR2/1)Ⅴ
3黒褐(Hue10YR2/2)Ⅵ≫Ⅵ
4.黒褐(Hue10YR3/1)Ⅴ≫Ⅶ
5.黒褐(Hue10YR3/2)Ⅵ＞Ⅴ



LP-220





LP-220土層説明
1.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅴ＞Ⅵ
2.黒褐(Hue100YR3/2)Ⅴ+Ⅶ＞Ⅵ
＊1.2層は埋め戻しか？

図Ⅳ-68　LP-215・216・220と遺物

に切られていると判断するが、LH-105の付属ピットの可能性もある。壙底面は円く、壁は広がりながら立ち上がる。覆土は埋め戻し土と考えられ、掘り込み面はⅤ層中、あるいはLH-104の床と考えられる。遺物は出土しておらず、LH-105の付属ピットの可能性を有する性格不明の土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　LP-196に切られており、縄文時代後期中葉以前と考えられる。(皆川洋一)

LP-223（図Ⅳ-69）

位置：C-270-b　規模：2.01×1.90／1.78×1.70／0.23m

長軸方向：N-55.5°-E

特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整形の土壙である。LH-105の北側に位置しておりとLP-198を切っている。明瞭な壙底面はなく、壁もだらだらと広がりながら立ち上がるもので掘り込みも不明瞭である。覆土はⅤ層腐植土が入っており、掘り込み面はⅤ層中と考えられるが、重複するLF-252は覆土上位で検出されており、覆土の腐植土が埋め戻されている可能性も残る。遺物は覆土中からⅣ群b類土器、フレイク、礫が出土している。性格不明の土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　LP-198を切っていることから、縄文時代後期中葉～晩期後葉と考えられる。(皆川洋一)

LP-224（図Ⅳ-70）

位置：Z0-280-a　規模：1.28×1.07／0.76×1.02／0.17m

長軸方向：N-18.5°-E

特徴　調査区西側の緩斜面で検出された平面が楕円形の土壙である。壙底面は斜面に沿って弱く傾斜しており、壁は広がりながら立ち上がる。壁と壙底とのつながりは緩やかなカーブを描いている。覆土はⅤ層腐植土が入っており、掘り込み面はⅤ層中と考えられる。遺物は覆土中からⅠ群b-2類、Ⅳ群b類土器、礫が出土している。性格不明の土壙である。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉～晩期後葉と考えられる。(皆川洋一)

LP-225（図Ⅳ-70／図版-107～123，126～130）

位置：C-290-b　規模：1.14×0.72／0.68×0.68／0.38m　長軸方向：N-69°-E

特徴　調査区東側の段丘上で検出された平面が不整の隅円長方形を呈する土壙である。南側に近接してLF-258が位置している。壙底面は平坦で、壁は広がりながら立ち上がる。壁と壙底とのつながりは比較的急である。覆土は3・4層が埋め戻されていると考えられる。掘り込み面はⅤ層中である。遺物は覆土中からⅣ群b類土器、石斧、礫、動物遺体が出土している。図中の土器と礫は壙底より僅かに上のレベルで出土しており、埋納された可能性がある。規模がやや小さいが墓的な性格を有す土壙である。

遺物　40571はⅣ群b類の深鉢形土器胴部である。1は石斧の未製破損品。表面には全面敲打痕が認められる。裏面の側縁は部分的に打ち欠き調整されている。泥岩製。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。(皆川洋一)

LP-226（図Ⅳ-70）

位置：A-277-a　規模：1.67×1.64／1.40×1.29／0.12m　長軸方向：N-73.0°-W

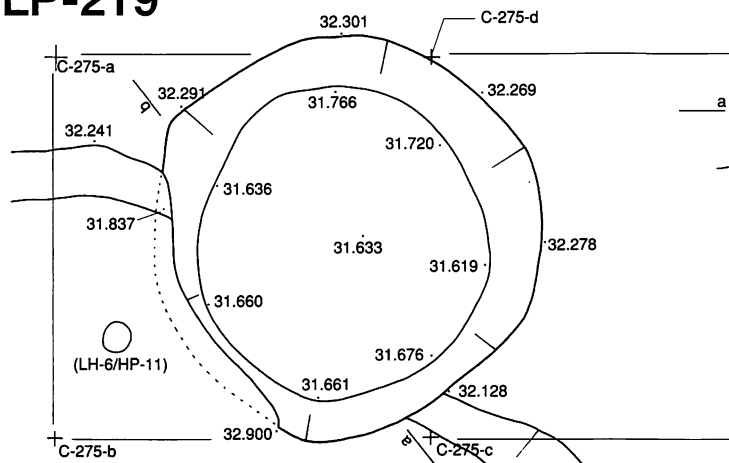
特徴　調査区西側の段丘上で検出された平面が不整の円形を呈する深度の浅い土壙である。壙底は平坦で壁は広がりながら立ち上がる。壁と壙底とのつながりは緩やかである。覆土はⅤ層腐植土主体

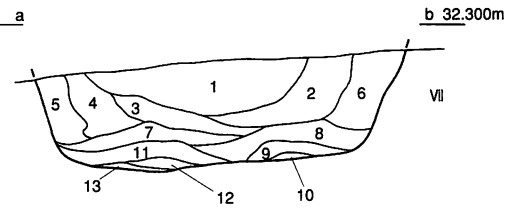
の流れ込みで、掘り込み面はⅤ層中である。遺物は覆土中からスクレイパーが出土している。性格不明の土壙である。

遺物　掲載遺物なし

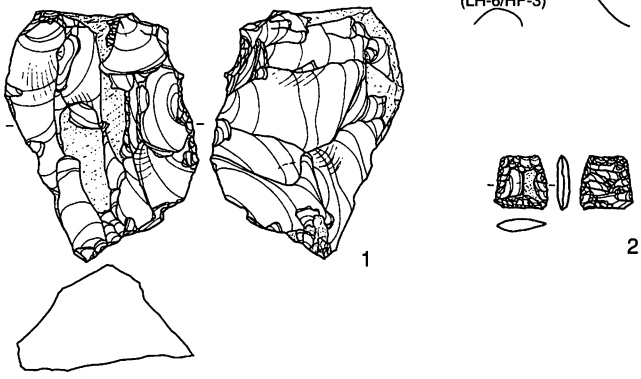
時期　周囲の遺構・遺物から縄文時代後期中葉の可能性がある。（皆川洋一）

LP-219

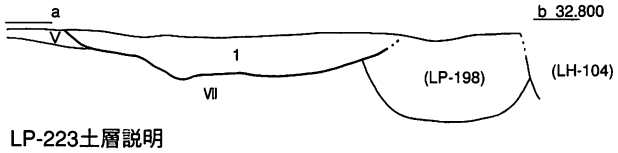




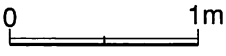
LP-219土層説明
1.黒　(Hue7.5YR2/1)Ⅴ≫Ⅵ
2.黒褐(Hue7.5YR3/2)Ⅴ+Ⅵ
3.褐　(Hue10YR4/4)Ⅵ+Ⅶ
4.暗褐(Hue10YR3/3)Ⅴ＞Ⅵ
5.褐　(Hue10YR4/4)Ⅵ+Ⅶ
6.褐　(Hue10YR4/4)Ⅵ+Ⅶ
7.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅴ＞Ⅶ
8.黒褐(Hue10YR3/2)Ⅴ+Ⅵ+Ⅶ
9.黄褐(Hue10YR5/8)Ⅶ≫Ⅵ
10.黒褐(Hue10YR3/2)Ⅴ+Ⅵ+Ⅶ
11.褐　(Hue10YR4/4)Ⅵ+Ⅶ
12.褐　(Hue10YR4/4)Ⅶ＞Ⅵ
13.黒褐(Hue10YR3/1)Ⅴ＞Ⅵ
＊3～13層は埋め戻されている。

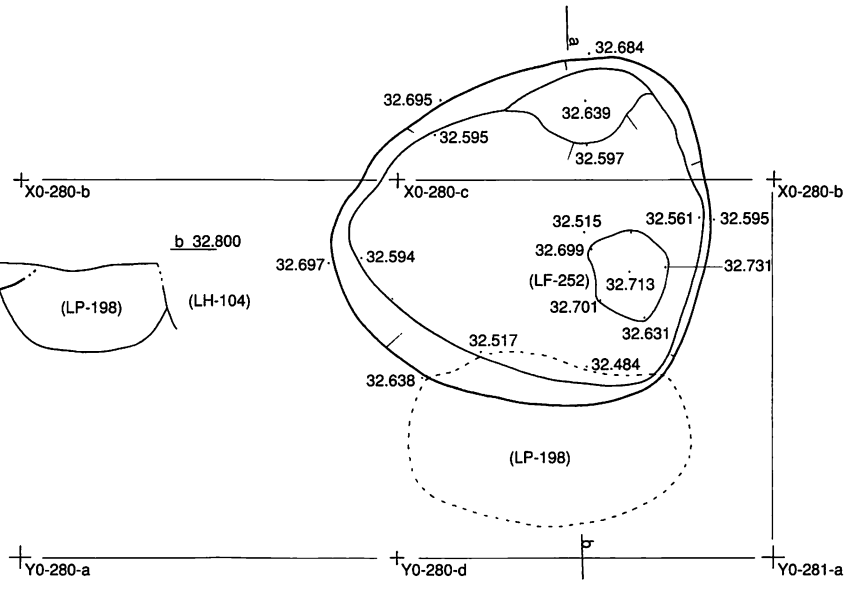


LP-223



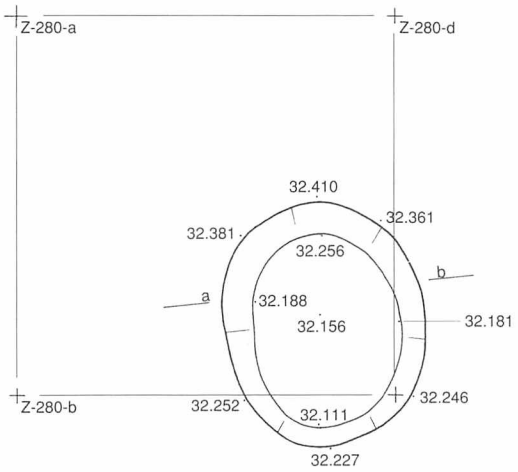
LP-223土層説明
1.黒　(Hue10YR1.7/1)Ⅴ

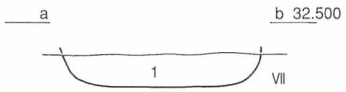




図Ⅳ-69　LP219・223と遺物

LP-224

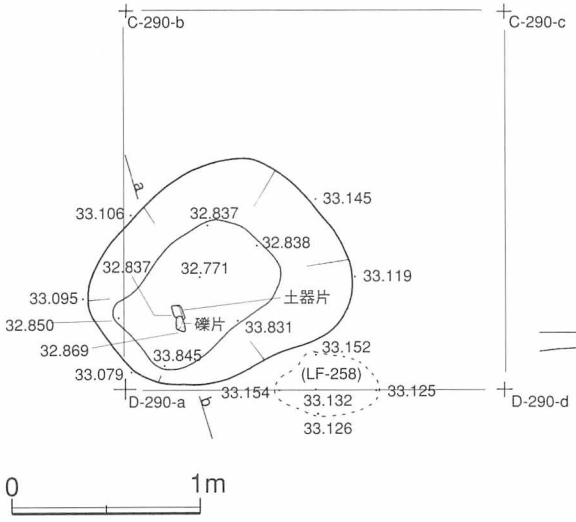


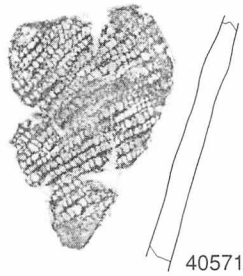


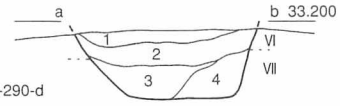
LP-224土層説明
1.黒(Hue5YR2/1)Ⅴ≫Ⅶ

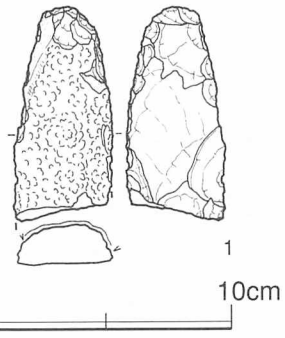


LP-225



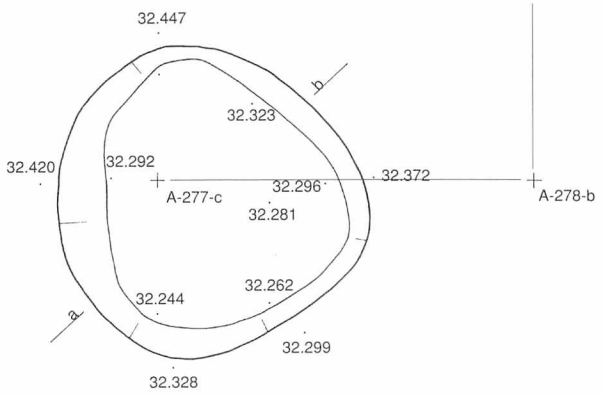


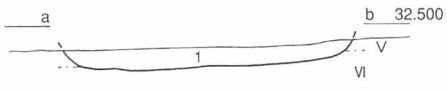




LP-225土層説明
1.暗褐(Hue10YR3/4)Ⅳ
2.黒　(Hue10YR1,7/1)Ⅴ
3.黒褐(Hue10YR2/2)Ⅵ＞Ⅴ≫Ⅵ
4.黒褐(HueYR2/2)Ⅴ＞Ⅴ＞Ⅵ
*3.4層は埋め戻されていると考えられる。

LP-226







図Ⅳ-70　Lp-224・225

3．Tピット

TP-101（図Ⅳ-71）

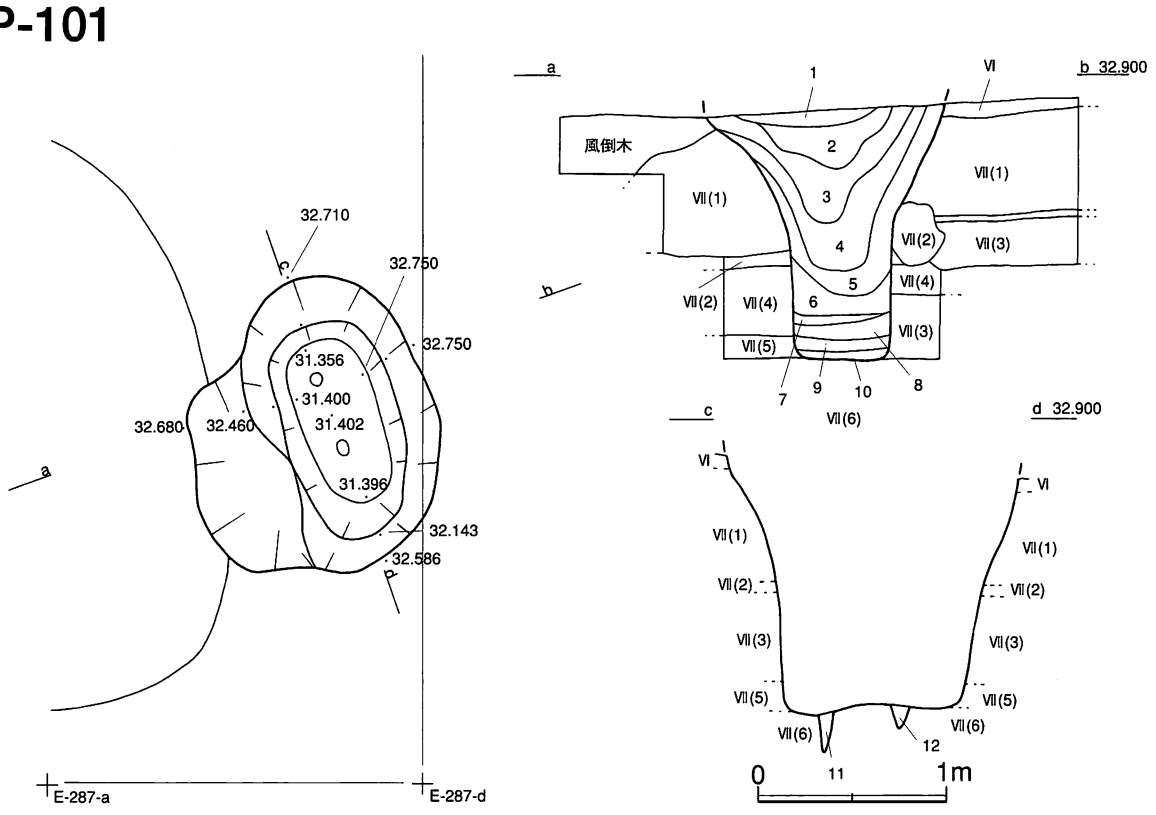
位置：D-287-a,D-287-b　規模：1.54×1.26／0.43×0.89／1.35m

長軸方向：N-10°-W

特徴　時期的に古いV層の風倒木の一部と考えていたため、Ⅵ層上位の黒色土のプランでの確認となった。地形的には等高線に斜行する。平面は西側で崩落が著しいが小判形で、壁は垂直に立ち上がるが、ほぼⅦ層から壙口部に向かい崩落のため開く。底面はほぼ平坦であるが、長軸北側でやや窪む。杭跡は2ヶ所あり、北側はしっかりしているが、南側は浅い。堆積状況はレンズ状を呈し自然堆積と考えられ、掘込み面はV層中と考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが縄文時代晩期以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）



TP-101土層説明

1 暗褐色(Hue10YR3/3)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。V＞Ⅵ

2 黒褐色(Hue10YR2/2)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V

3 褐色(Hue10YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V＋Ⅵ
ローム質土をブロック状に含む。

4 褐色(Hue10YR4/6)シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V＞Ⅵ
ローム質土をブロック状に含む。

5 黄褐色(Hue10YR5/6)シルト。粘性あり。しまりあまりなし。Ⅵ＋Ⅶ

6 にぶい黄橙色(Hue10YR7/2)粘土。粘性あり。しまりあり。Ⅶ(粘土)≫V

7 にぶい黄褐色(Hue10YR5/4)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅵ＞Ⅶ

8 にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅵ＋Ⅶ(粘土)≫V

9 にぶい黄褐色(Hue10YR5/4)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅵ＞Ⅶ
7と同質の土。

10 にぶい黄褐色(Hue10YR6/3)砂混じりシルト質粘土。粘性あまりなし。しまりあまりなし。Ⅶ

(杭跡)

11 明赤褐色(Hue5YR5/8)シルト質粘土。粘性あり。しまりほとんどなし。木質？＞Ⅶ

12 赤褐色(Hue5YR4/8)シルト質粘土。粘性あり。しまりなし。木質？＞Ⅶ

図Ⅳ-71　TP-101

TP-102（図Ⅳ-72）

位置：E-282,E-284,F-283,F-284　規模：2.09×1.11／0.43×1.56／0.86m

長軸方向：N-84.0°-E

特徴　調査区東側の段丘西端で検出されたTピットである。舌状地形の32.100mのコンタに沿って位置しており、キウス川に面した段丘縁辺に沿って作られたものの一つと推定される。平面は長楕円形を呈しているが、北側の壁の崩落が著しく本来的な平面形は止めていない。壙底の杭跡は検出されていない。遺物は覆土の上位からⅣ群b類土器、石鏃、礫が出土している。

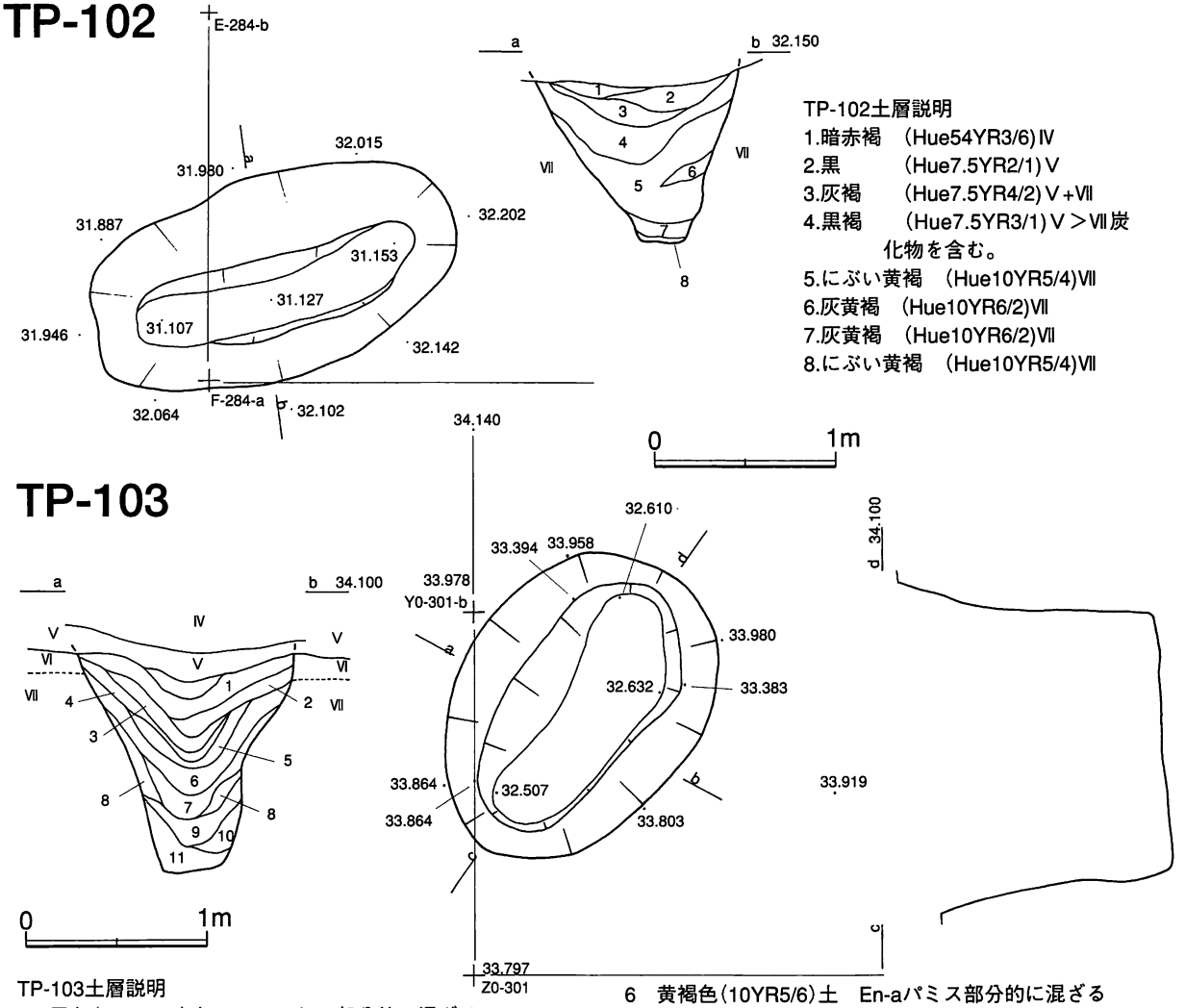
遺物　掲載遺物なし

時期　覆土の上位からはⅣ群b類土器が出土しており、縄文時代後期中葉以前に作られたと考えられる。（皆川洋一）

TP-103（図Ⅳ-72）

位置：Y0-300-c,Y0-301-a,Y0-301-b　規模：1.82×1.24／0.64×1.42／1.22m

長軸方向：N-45°-E



TP-103土層説明

1　黒色(10YR2/1)土　En-aパミス部分的に混ざる
2　黒色(7.5YR1.7/1)土　En-aパミス部分的に混ざる
3　黒色(10YR1.7/1)土+黄褐色(10YR5/6)土　En-aパミス部分的に混ざる
4　黒色(7.5YR2/1)土　En-aパミス部分的に混ざる
5　暗褐色(10YR3/4)土　En-aパミス部分的に混ざる
6　黄褐色(10YR5/6)土　En-aパミス部分的に混ざる
7　褐色(10YR4/4)土+黒色(10YR2/2)土　En-aパミス部分的に混ざる
8　明褐色(10YR6/6)粘質土　En-aパミス多く含む
9　暗褐色(10YR3/3)粘質土　En-aパミス部分的に混ざる
10　黄褐色(10YR5/6)粘質砂　En-aパミス部分的に混ざる
11　にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土　EnL

図Ⅳ-72　TP-102・103

特徴　南側の低湿部へ落ちていく台地上東端の縁辺部に位置し、等高線とは斜交する。Ⅴ層上面で、楕円形状にⅣ層が落ち込む窪みとして確認した。壁面は長軸方向南側の下部が若干オーバー・ハングしている。短軸の断面形は波打つようなU字状である。柱痕は壙底からさらに5cm掘り下げて確認に努めたが、検出できなかった。なお覆土上部には埋積過程の窪み上に形成された焼土（LF-150）を検出している。覆土上部から土器片、フレイク、礫が数点出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田 健）

TP-104（図Ⅳ-73）

位置：Z0-300-a　規模：(1.88)×(0.95)／0.35×1.43／1.56m

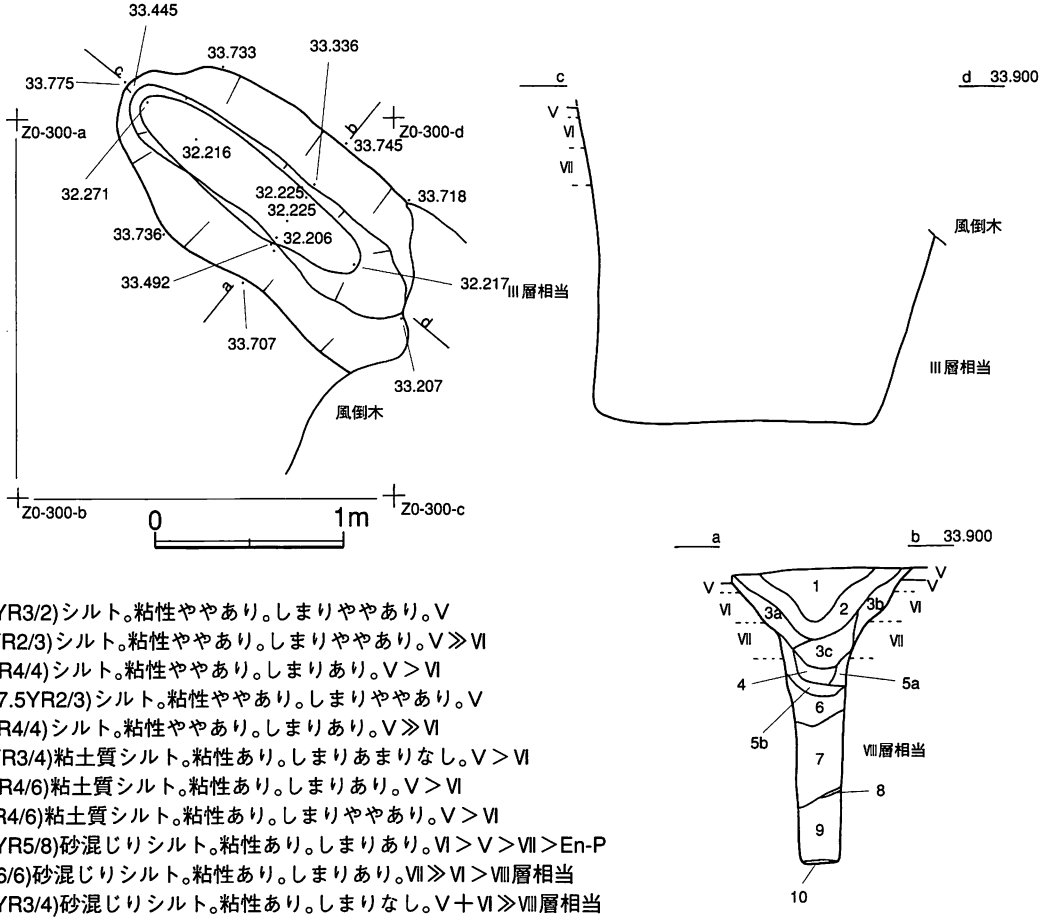
長軸方向：N-42°-W

特徴　Ⅴ層中位で黒色土のプランを確認したがはっきりしなかったので、ベルトを残して掘り下げた。平面は溝状で、壁は南西、北東側で崩落がやや著しいが垂直に立ち上がり、Ⅶ層から壙口部に向かい開く。底面は長軸方向でやや凹凸がある。底面はさらに5cm程下げて杭跡等の確認に努めたが、見つからなかった。堆積状況はレンズ状を呈し自然堆積と考えられ、掘込み面は確認面と同じⅤ層中位と考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　遺物の出土が少なく不明であるが、覆土中の遺物から縄文時代中期後半以前と考えられる。（佐藤　剛）

TP-104



TP-104土層説明

1 黒褐色(Hue7.5YR3/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ
2 黒褐色(Hue10YR2/3)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ≫Ⅵ
3 a褐色(Hue7.5YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりあり。Ⅴ＞Ⅵ
3 b極暗褐色(Hue7.5YR2/3)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ
3 c褐色(Hue7.5YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりあり。Ⅴ≫Ⅵ
4 暗褐色(Hue10YR3/4)粘土質シルト。粘性あり。しまりあまりなし。Ⅴ＞Ⅵ
5 a褐色(Hue7.5YR4/6)粘土質シルト。粘性あり。しまりあり。Ⅴ＞Ⅵ
5 b褐色(Hue10YR4/6)粘土質シルト。粘性あり。しまりややあり。Ⅴ＞Ⅵ
6 明褐色(Hue7.5YR5/8)砂混じりシルト。粘性あり。しまりあり。Ⅵ＞Ⅴ＞Ⅶ＞En-P
7 橙色(Hue10YR6/6)砂混じりシルト。粘性あり。しまりあり。Ⅶ≫Ⅵ＞Ⅷ層相当
8 暗褐色(Hue7.5YR3/4)砂混じりシルト。粘性あり。しまりなし。Ⅴ＋Ⅵ≫Ⅷ層相当
9 褐色(Hue7.5YR4/4)粘土・砂混じりシルト。粘性あり。しまりあまりなし。Ⅶ＋Ⅵ＋Ⅷ層相当
10暗褐色(Hue7.5YR3/4)砂混じりシルト。粘性あり。しまりなし。Ⅴ≫Ⅷ層相当

図Ⅳ-73　TP-104

TP-105（図-74 ／ 図版-107 ～ 123,126 ～ 130）

位置：Y0-295-c　規模：3.02 × 0.61 ／ 0.45 × 2.18 ／ 1.25m

長軸方向：N-59.5° -E

特徴　調査区東側の段丘上で検出された平面が所謂「溝型」のTピットである。TP-105と重複するがTPの調査を先行したため新旧はやや不明瞭である。遺物から見た場合LP-169が古い可能性が僅かにある。調査では壙底で激しい勇水が生じ調査が困難な状況であったが壙底面は非常にしっかりしたもので、当時は勇水がなかったのであろう。遺物は覆土上位からⅢ群b類、Ⅳ群b類土器、砥石、フレイク、礫が出土している。Ⅲ群b類土器はLP-169との重複で混入した可能性がある。

遺物　40576はⅣ群b類の深鉢形土器胴部である。1はスクレイパー。一側縁に直線的な刃部をもつ。礫表皮を残す。黒曜石の転礫を素材とする。

時期　覆土の遺物から縄文時代後期中葉以前と考えられる。（皆川洋一）

TP-106（図Ⅳ-75 ／ 図版-24・107 ～ 123）

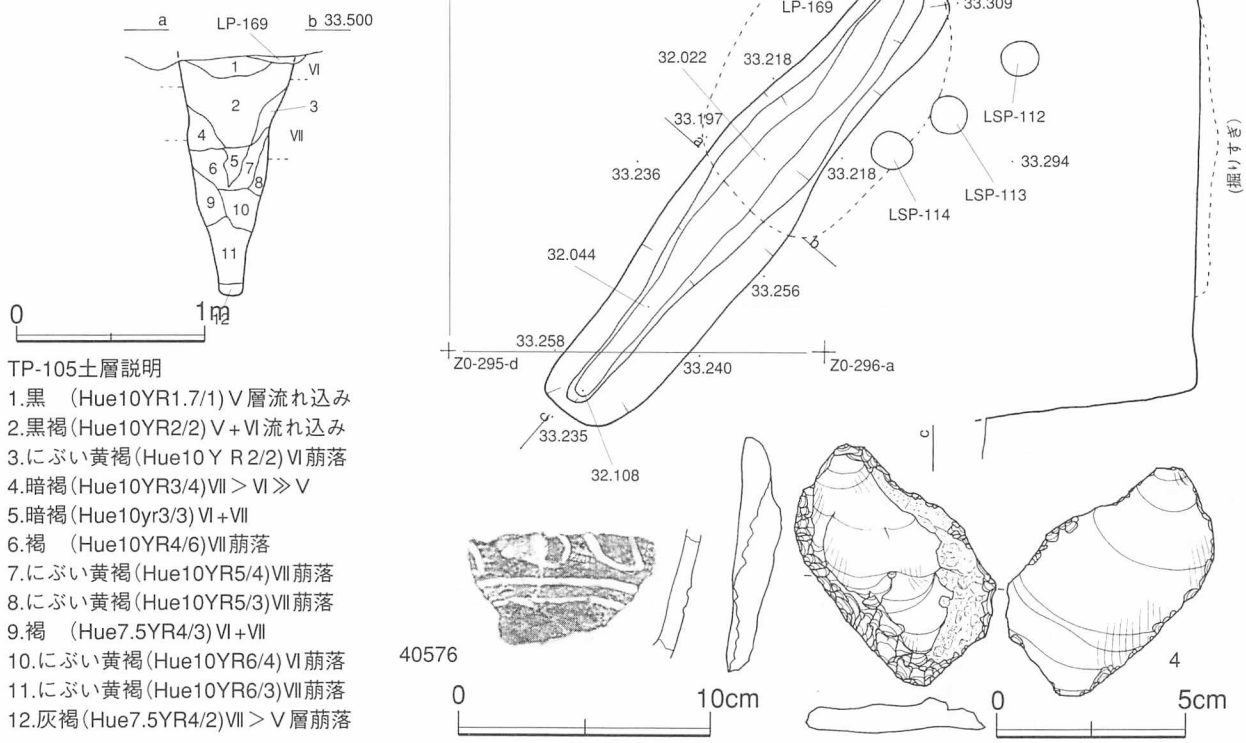
位置：W0-298-　規模：1.90 ×(1.43)／ 0.40 × 1.33 ／ 1.02m

長軸方向：N-42° -E

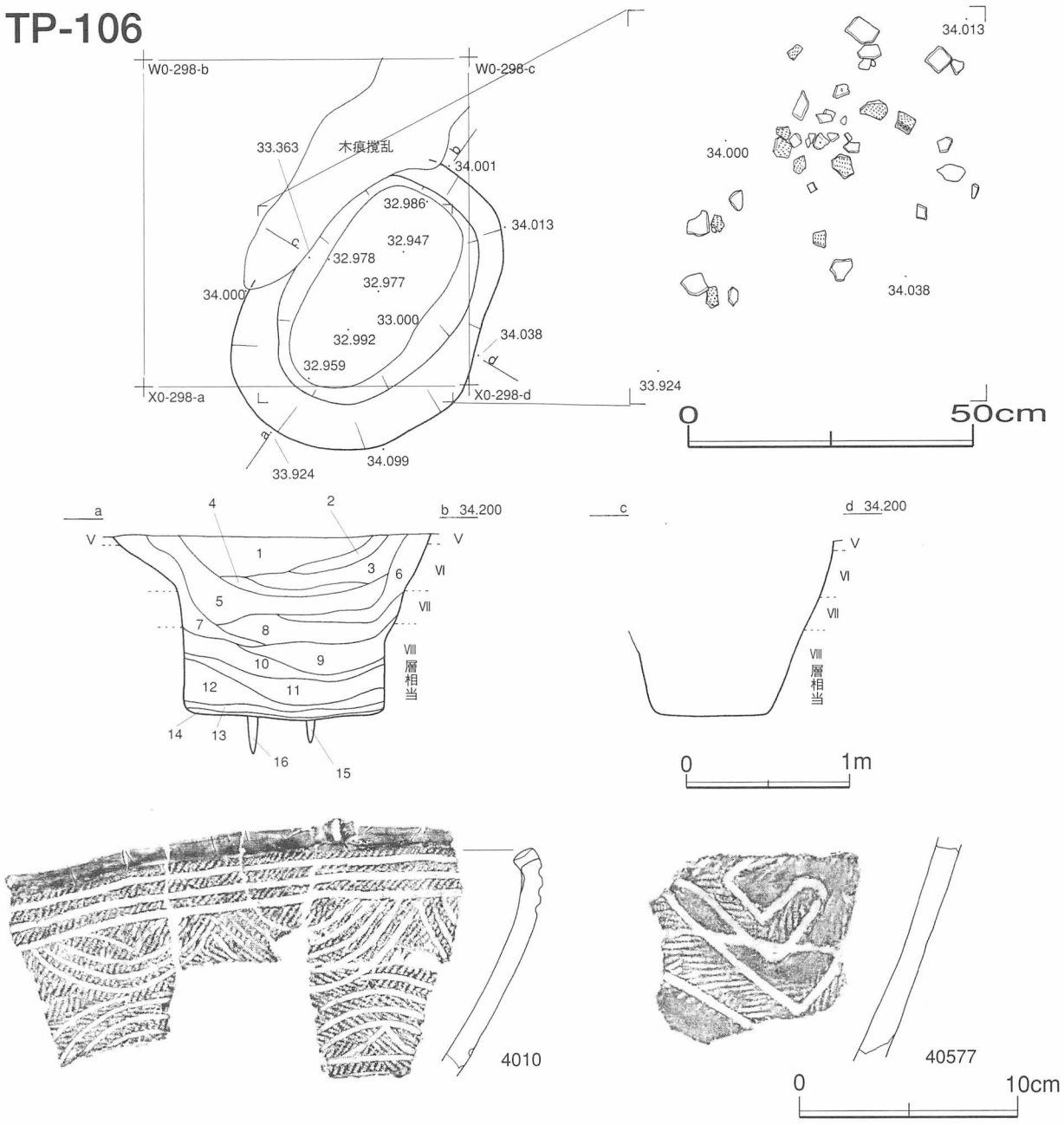
特徴　Ⅴ層下位で土器のまとまりと黒色土のプランを確認した。平面は撹乱を受けているが、やや方形に近い小判形と推定される。壁は垂直に立ち上がるが、長軸方向の北東側でⅧ層相当から、南西側でⅥ層から、短軸方向の南東側でⅦ層からそれぞれ壙口部に向かい開く。底面はほぼ平坦である。杭跡は長軸上に2ヶ所あり、南側ではしっかり残っているが、北側ではやや残りが悪い。堆積状況はレンズ上を呈し自然堆積と考えられ、掘込み面はⅤ層中と考えられる。

遺物　4010,40577はⅣ群c類の深鉢形土器である。

時期　確認面の遺物から縄文時代後期後葉以前と考えられる。（佐藤　剛）



図Ⅳ-74　TP-105と遺物



1 黒色(Hue10YR1.7/1)シルト。粘性ややあり。しまりあり。V
2 黒褐色(Hue10YR2/2)シルト。粘性ややあり。しまりあり。V＋VI
3 黒色(Hue7.5Yr2/1)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V＋VI
4 黒褐色(Hue7.5YR2/2)シルト。粘性ややあり。しまりあり。V＋VI
5 黒色(Hue7.5YR2/1)シルト質粘土。粘性あり。しまりややあり。V＋VI
6 褐色(Hue7.5YR4/4)シルト質粘土。粘性あり。しまりあまりなし。VI＞V≫En-P
7 明褐色(Hue7.5YR5/6)シルト質粘土。粘性あり。しまりややあり。VII＞VI＞V≫En-P
8 にぶい黄褐色(Hue10YR4/3)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあまりなし。VI≫En-p
9 褐色(Hue7.5YR4/6)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。VI＞VII≫En-P
10褐色(Hue7.5YR4/3)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりややあり。VI＋VII＋Ⅷ層相当≫En-p
11明褐色(Hue7.5YR5/8)粘土混じりシルト。粘性ややあり。しまりややあり。VII＋Ⅷ層相当≫En-p
12明褐色(Hue10YR3/3)粘土混じりシルト。粘性あり。しまりあり。VII＋Ⅷ層相当≫En-p
13明褐色(Hue7.5YR5/8)粘土混じりシルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。VII＋Ⅷ層相当≫En-p
14黒褐色(Hue7.5YR3/1)粘土混じりシルト。粘性ややあり。しまりなし。V＋Ⅷ層相当≫En-p
(杭跡)
15にぶい黄橙色(Hue10YR7/4)粘土。粘性あり。しまりなし。Ⅷ層相当
16褐色(Hue7.5YR4/6)砂混じり粘土。粘性あり。しまりなし。Ⅷ層相当

図Ⅳ-74　TP-106 と遺物

TP-107（図Ⅳ-76／図版-107～123）

位置：W0-281-a,W0-281-b,W0-281-c,W0-281-d　規模：1.76×1.06／0.34×1.06／1.12m

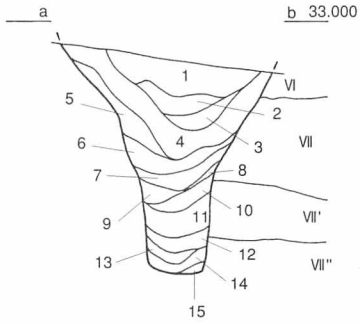
長軸方向：N-71°-W

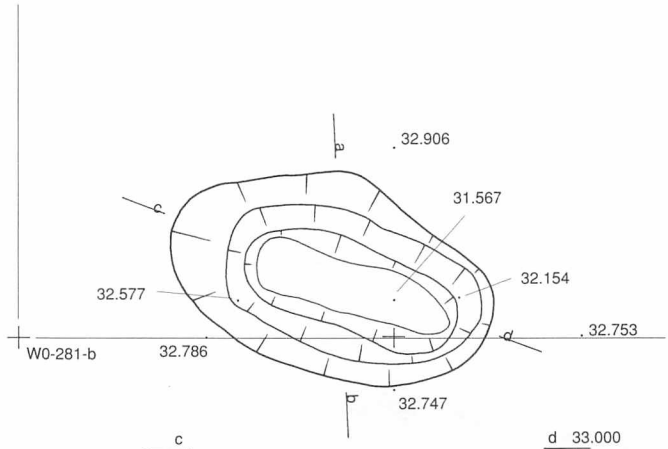
特徴　西側台地上の南側の低湿部へ落ちていく緩斜面に立置し、等高線とは斜交する。Ⅵ層上面で、長楕円形状の黒色土の落ち込みとして確認した。調査は検出面より約80cm下から湧水が激しくなったため、南側に隣接して排水用のカマ場を設定し、電動ポンプで排水しながら行った。北東方向の壙口は崩落のためか開いた形状である。短軸の断面形は波打つようなY字状である。柱痕は湧水により認識が困難であったため、検出できなかった。覆土上部から、土器片、フレイク、礫が数十点出土している。

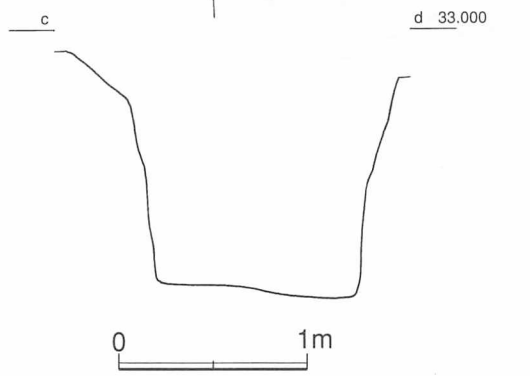
遺物　4547はⅣ群b類の壺形土器口縁部である。

時期　不明（澤田　健）

TP-107

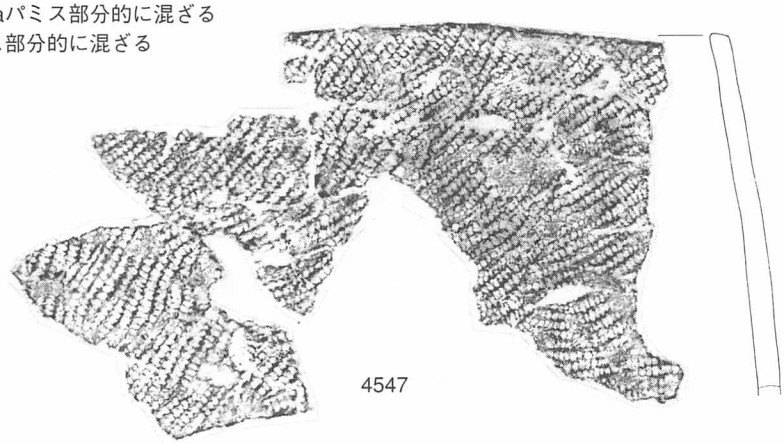






TP-107土層説明

1　黒色(10YR1.7/1)土　En-aパミス部分的に混ざる
2　黒褐色(10YR3/2)土　En-aパミス部分的に混ざる
3　黒褐色(10YR2/2)土　En-aパミス部分的に混ざる
4　黒色(10YR2/1)土　En-aパミス部分的に混ざる
5　明褐色(75YR5/8)土　En-aパミス部分的に混ざる
6　暗褐色(10YR3/4)土　En-aパミス部分的に混ざる
7　黒褐色(7.5YR3/1)土　En-aパミス部分的に混ざる
8　黄褐色(10YR5/6)土　En-aパミス部分的に混ざる
9　にぶい黄褐色(10YR5/4)土　En-aパミス部分的に混ざる
10　黒褐色(10YR2/2)土　En-aパミス部分的に混ざる
11　明褐色(7.5YR5/6)粘質土　En-aパミス多く含む・鉄分のたまり有り（湧水面）
12　明黄褐色(10YR7/6)粘質土　En-aパミス部分的に混ざる
13　灰黄褐色(10YR5/2)粘質土　En-aパミス部分的に混ざる
14　にぶい黄橙色(10YR7/4)粘質土　En-aパミス部分的に混ざる
15　暗褐色(10YR3/3)粘質土　En-aパミス部分的に混ざる





図Ⅳ-76　TP-107と遺物

4．小ピット

LSP-101（図Ⅳ-77 ／ 図版-25）

位置：X0-300-a　規模：0.18 × 0.18 ／ 0.13 × 0.14 ／ 0.21m　長軸方向：N-81° -W

特徴　LP-119 の壁際で検出された小ピット。ただし掘り込み面は不明で、掘り込みはⅦ層に達している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。LP-119 に伴うものかどうかは不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LSP-102（図Ⅳ-77 ／ 図版-25）

位置：X0-300-a　X0-300-d　規模：0.24 × 0.21 ／ 0.12 × 0.13 ／ 0.25m　長軸方向：N-49° -W

特徴　Ⅵ層で検出された小ピットで掘り込みはⅦ層まで達する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。西側にLP-119 が隣接するが関連するものかどうかは不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期

不明　（澤田　健）

LSP-103（図 Ⅳ-77 ／ 図版-25）

位置：Y0-293-d　規模：0.10 × 0.09 ／ 0.02 × 0.04 ／ 0.12m　長軸方向：N-2° -W

特徴　ほぼ同規模で、平面形が円～楕円形状を呈する 3 基の小ピットが約 40cm 四方にまとまって検出されている（LSP-103 ～ 105）。すべてⅥ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。ただし傾きに統一性がみられないこと、また時期も不明であることから、相互に関係するものかどうかは不明である。その中でも平面形が若干小さい円形状を呈し、検出面からの深さも最も浅いものである。木根の可能性もある。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LSP-104（図 Ⅳ-77 ／ 図版-25）

位置：Y0-293-d　規模：0.14 × 0.11 ／ 0.05 × 0.06 ／ 0.36m　長軸方向：N-3° -E

特徴　平面形は楕円形状を呈し、壁面は長軸方向南側に傾斜する。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LSP-105（図 Ⅳ-77）

位置：Y0-293-d　規模：0.14 × 0.12 ／ 0.05 × 0.06 ／ 0.31m　長軸方向：N-83° -E

特徴　平面形は楕円形状を呈し、壁面は垂直に立ち上がる。長軸方向はおよそ東西である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LSP-106（図 Ⅳ-77 ／ 図版-107 ～ 123）

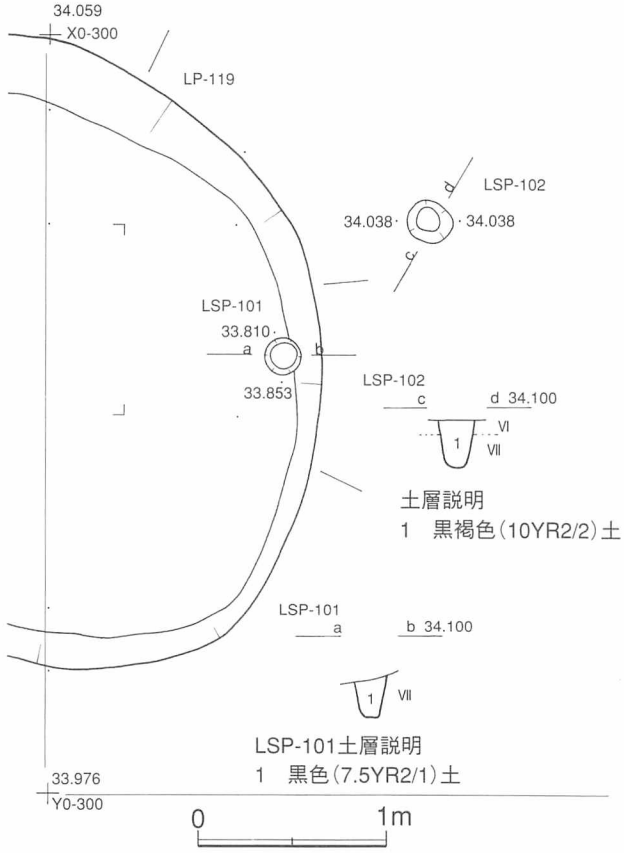
位置：X0-297-b　規模：0.25 × 0.25 ／ 0.14 × 0.16 ／ 0.31m　長軸方向：不明

特徴　Ⅵ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや丸みを帯びる。LSP-106 と関係する可能性がある。柱跡と考えられる。

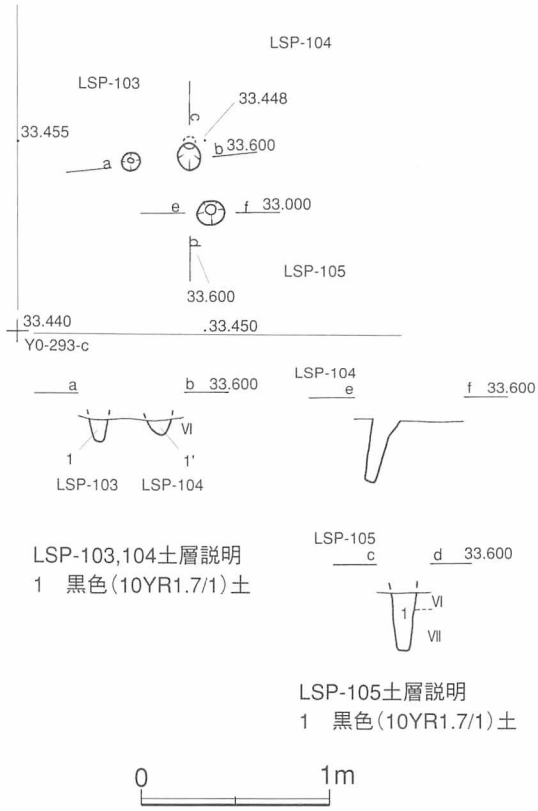
遺物　0178 はⅣ群 c 類の鉢形土器である。

時期　覆土中の遺物が少ないため不明であるが、縄文時代後期以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

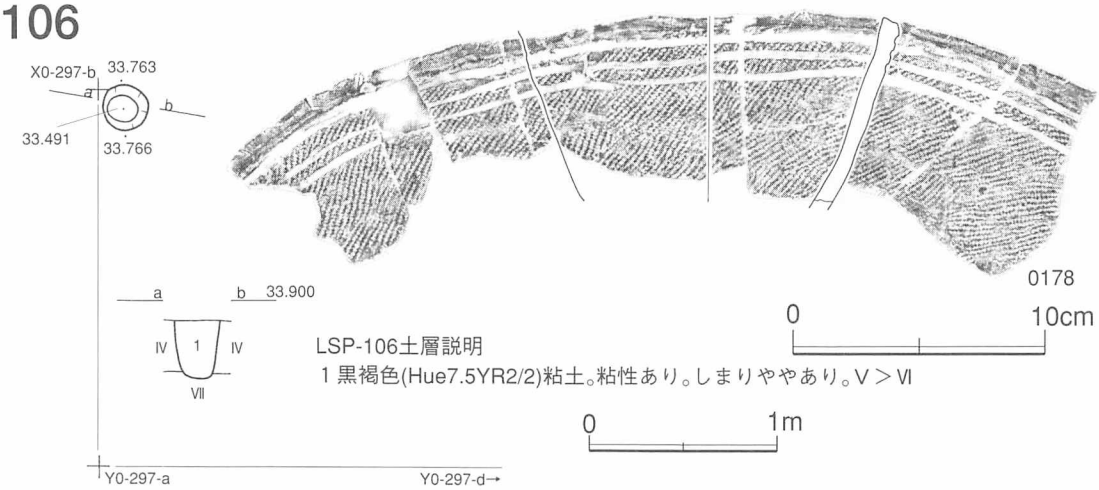
LSP-101,102



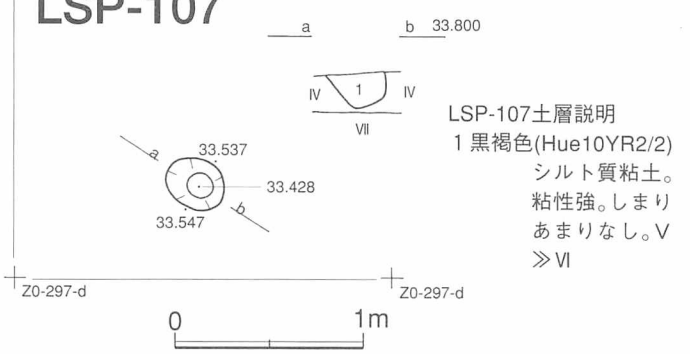
LSP-103～105



LSP-106



LSP-107



LSP-108



図Ⅳ-77　V層の小ピット（1）と遺物

LSP-107（図Ⅳ-77）
位置：Y0-297-b　規模：0.33×0.27／0.13×0.14／0.20m　長軸方向：N-46°-W
特徴　Ⅵ層上面で黒色土のプランを確認した。平面は円形で、壁は北西側で斜め上方（仰角３６°）に伸びる。底面は傾斜があるが平坦である。LSP-106と関係する可能性がある。柱跡と考えられる。
遺物　掲載遺物なし
時期　覆土中の遺物が少ないため不明であるが、縄文時代後期以前の遺構と考えられる。（佐藤　剛）
LSP-108（図Ⅳ-77）
位置：A-292-b　規模：0.15×0.11／0.70×0.90／0.16m　長軸方向：N-35°-E
特徴　Ⅵ層上面で楕円形の黒色土の落ち込みとして確認した。付近に同様な形状の小ピットは検出できなかった。性格は不明である。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明（澤田　健）
LSP-109（図Ⅳ-78／図版-25）
位置：D-288-a　規模：(0.12)×(0.12)／×／(0.36)m
特徴　Ⅵ層上面で暗褐色土のまとまりを確認した。掘り下げると先端の尖った杭状のものを差し込んだ跡であると推測できる。LSP-109～111は３本並んでいるが同時期のものであるかは特定できなかった。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明である。（藤原秀樹）
LSP-110（図Ⅳ-78／図版-25）
位置：D-288-a　規模：(0.10)×(0.10)／×／(0.36)m
特徴　Ⅵ層上面で確認した。先端の尖った杭状のものを差し込んだ跡であると推測できる。LSP-109～111は３本が並んでいる。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明である。（藤原秀樹）
LSP-111（図Ⅳ-78／図版-25）
位置：D-288-a　規模：(0.16)×(0.16)／×／(0.28)m
特徴　Ⅵ層上面で確認した。先端の尖った杭状のものを差し込んだ跡であると推測できる。LSP-109～111は３本が並んでいる。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明である。（藤原秀樹）
LSP-112（図Ⅳ-78／図版-25）
位置：Y0-296-b　規模：0.19×0.19／0.12×0.12／0.18m　長軸方向：N-22°-W
LSP-113（図Ⅳ-78／図版-25）
位置：Y0-296-b　規模：0.21×0.19／0.16×0.19／0.11m　長軸方向：N-28.5°-W
LSP-114（図Ⅳ-78／図版-25）
位置：Y0-296-b　規模：0.22×0.19／0.15×0.18／0.13m　長軸方向：N-72.0°-W
特徴　調査区東側の段丘上で検出された柱穴様のピットである。これらは近接した列をなしており、規模、深度とも同じ様な傾向を示すことから、同時期に作られたと考えられる。また、微地形的には、段丘上の窪みの底部付近に位置することから、この地形を利用した構築物の可能性もある。

遺物　掲載遺物なし

時期　LSP-114がLP-169を切っていることから、縄文時代中期後半～晩期末葉の可能性がある。（皆川洋一）

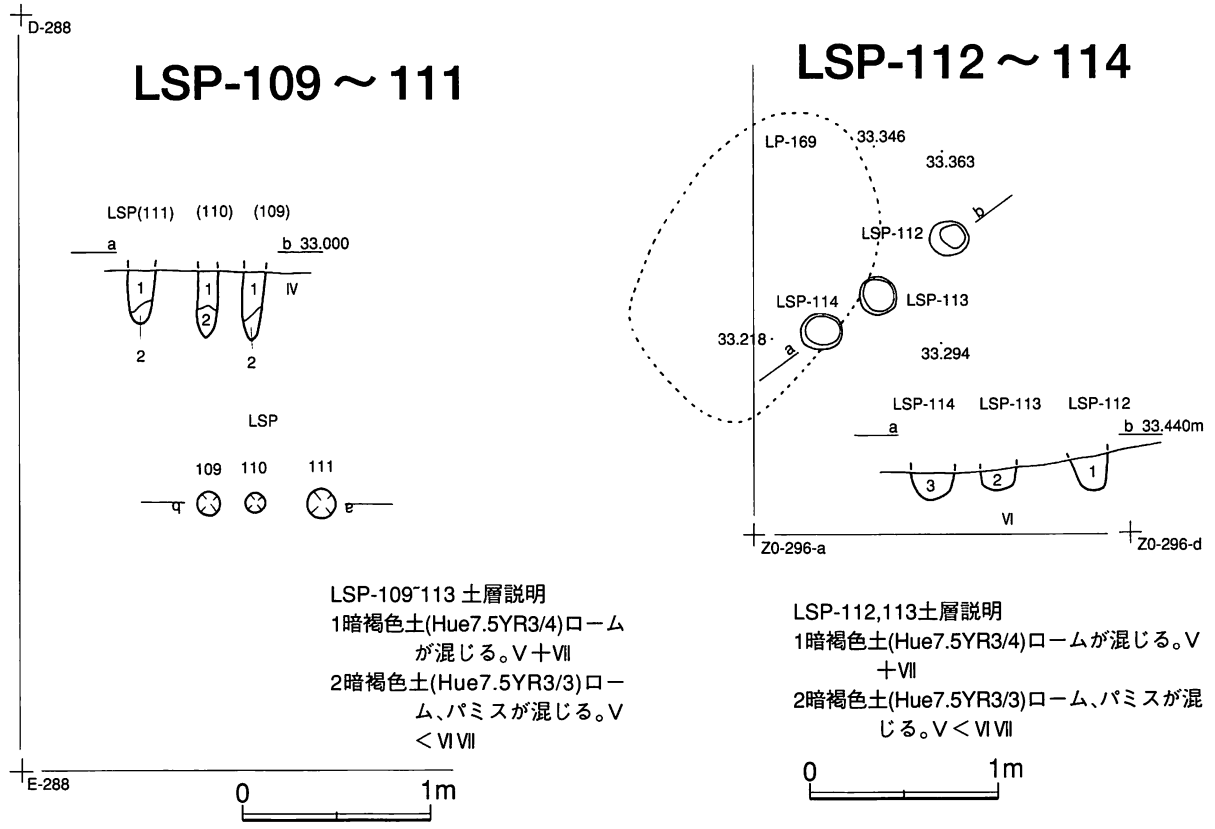
LSP-115（図Ⅳ-78）

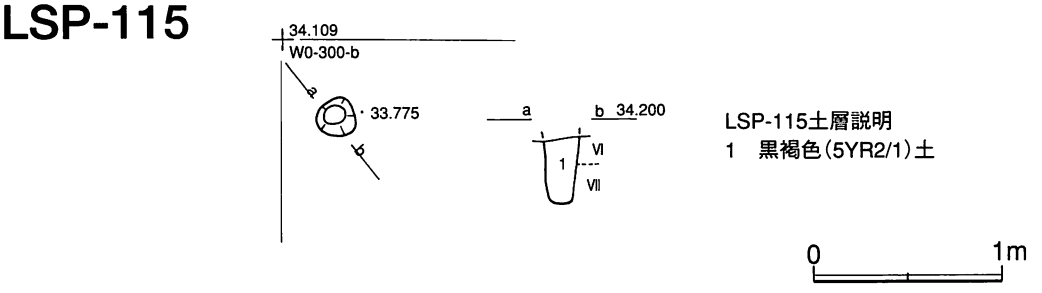
位置：W0-300-b　規模：0.21×0.19／0.10×0.10／0.34m　長軸方向：N-47°-E

特徴　Ⅵ層上面で楕円形状の黒褐色土の落ち込みとして確認した。南側の壁が若干南東方向に傾いている。北側にLP-129が隣接するが、関連するものかどうかは不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田 健）





図Ⅳ-78　Ⅴ層の小ピット（2）

5．焼土

LF-101（図 Ⅳ-79／図版-126～130）

位置：W0-295-b　W0-295-c　X0-295-a　X0-295-d　規模：（0.52）×0.38／×／0.12m

長軸方向：N-81°-W

特徴　Ⅴ層を10cm程掘り下げたところで確認した。覆土中には骨片、炭化物が混在していた。覆土はすべて採取して抽出作業を行った。土器片、石鏃が出土している。また採取した覆土から骨片、炭化物を抽出している。

遺物　1は有茎凸基の石鏃。上端は短軸方向に直線的に整形され、平坦である。欠損後に再加工されたものと思われる。黒曜石製。

時期　覆土出土の土器及び周辺の遺物から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-102（図Ⅳ-79／図版-69～78）

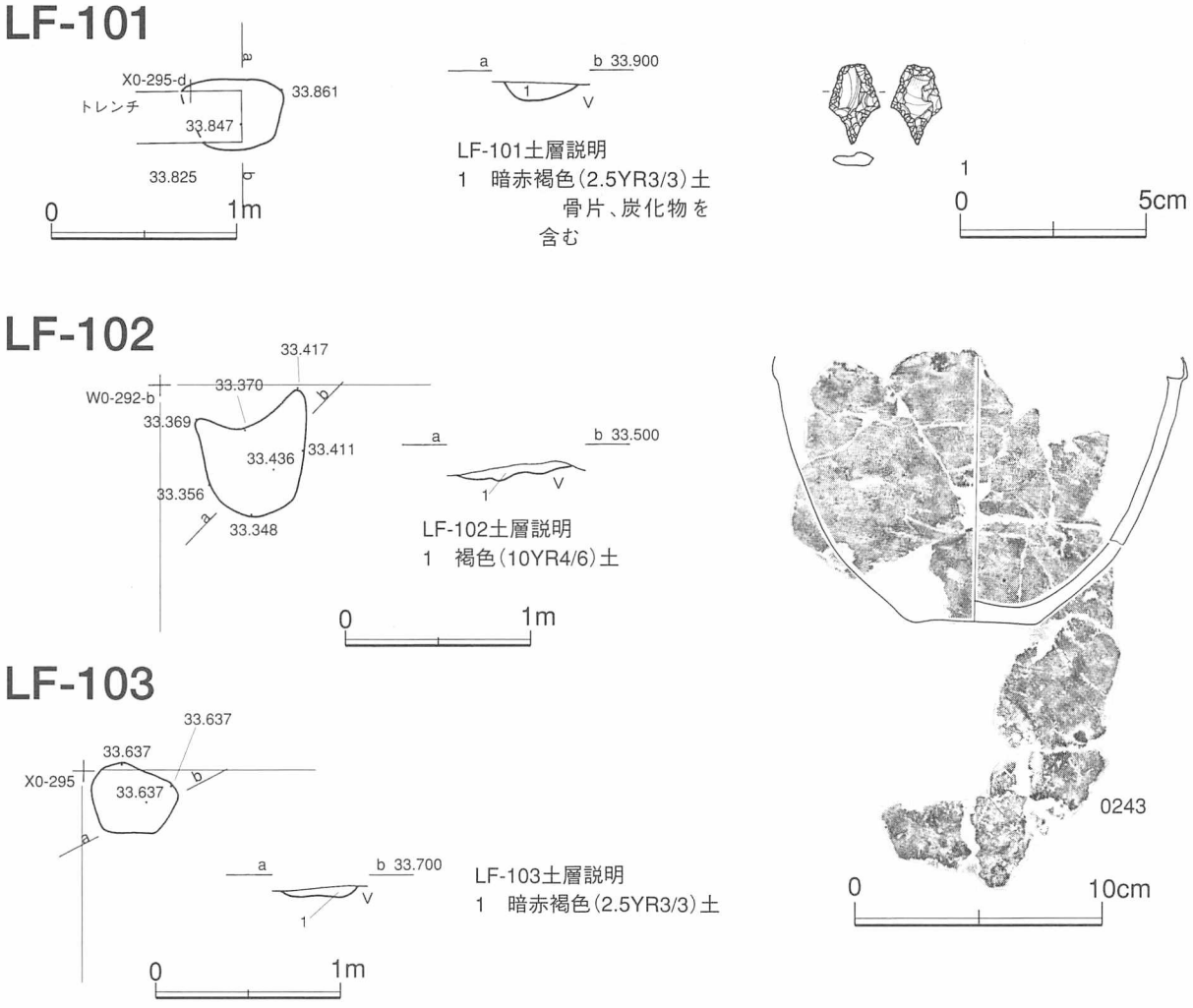
位置：W0-292-b　規模：0.70×0.66／×／0.07m

長軸方向：N-42°-E

特徴　Ⅴ層を10cm程掘り下げたところで確認した。覆土中には炭化物が含まれていた。土器片、焼けたフレイク（黒曜石）、礫が出土している。

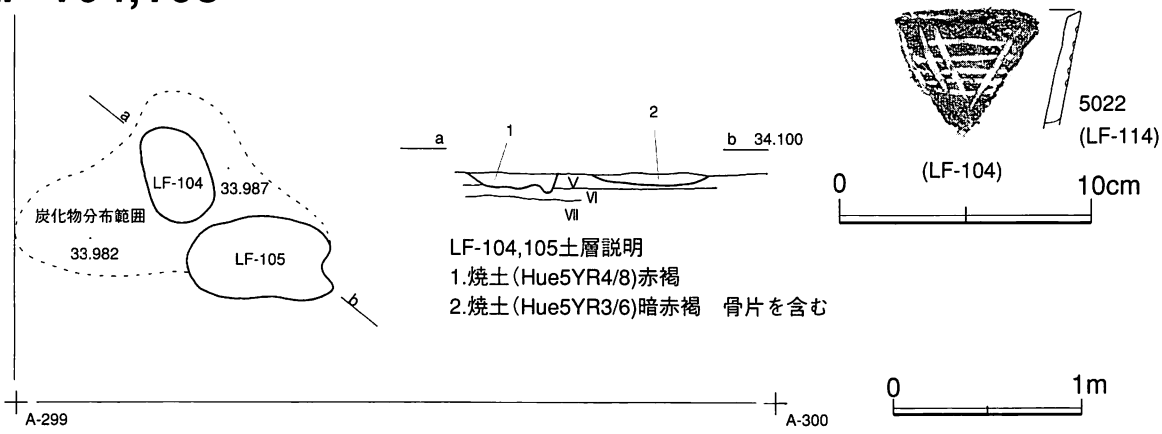
遺物　0243は口縁部に内面からに刺突列が施された無文のⅣ群c類鉢形土器である。

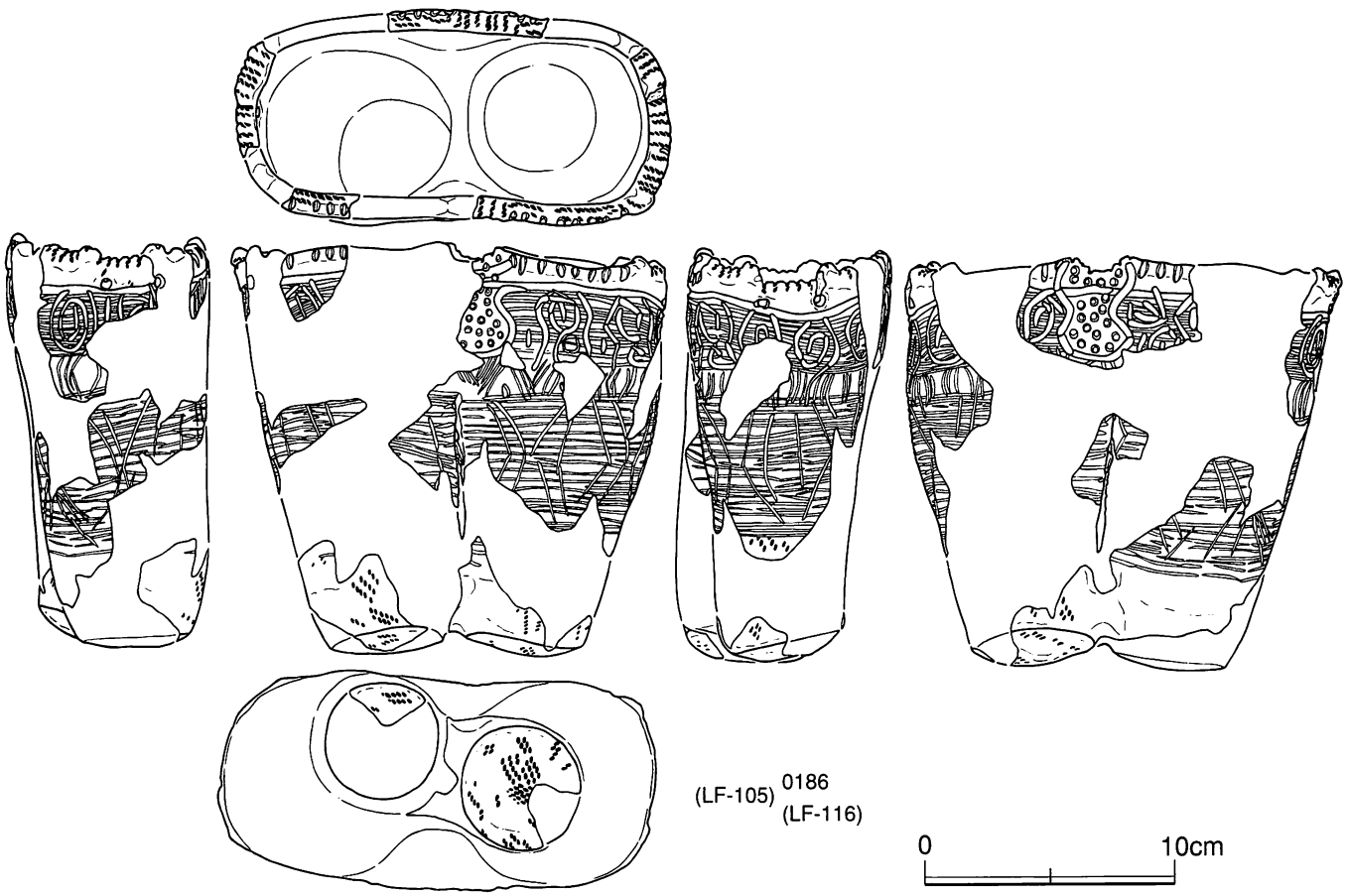
時期　出土した土器から、縄文時代後期中葉～末葉と思われる。（澤田　健）

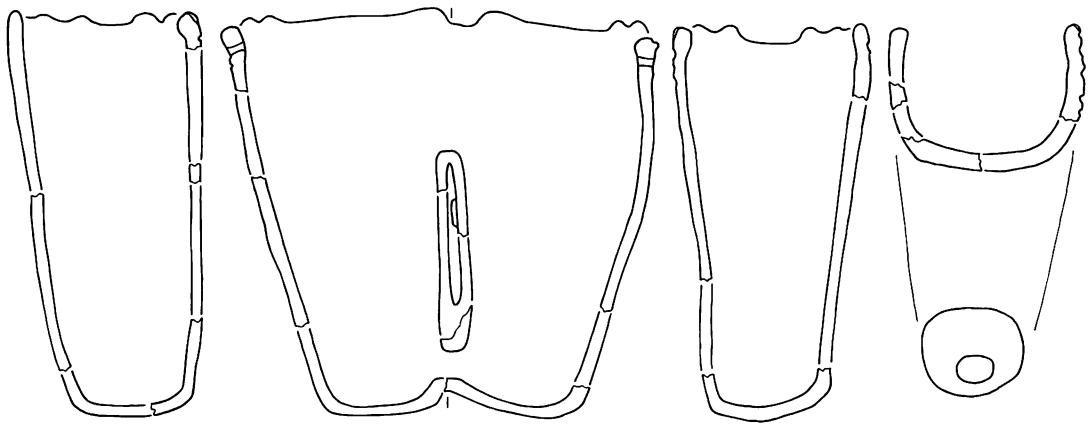


図Ⅳ-79　Ⅴ層の焼土（1）

LF-104,105







図Ⅳ-80　Ⅴ層の焼土（2）

LF-103（図Ⅳ-79）

位置：W0-295-b　X0-295-a　規模：0.45×0.42／×／0.06m

長軸方向：N-34°-W

特徴　Ⅴ層を15cm程掘り下げたところで確認した。覆土はすべて採取して抽出作業を行った。土器片、フレイク（黒曜石）が出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土の土器及び周辺の遺物から、縄文時代中期～後期中葉と思われる。（澤田　健）

LF-104（図Ⅳ-80／図版-79～106）

位置：Z0-299-b　規模：0.52×0.33／×／0.10m

長軸方向：N-5.0°-W

特徴　調査区東側の段丘縁辺Ⅴ群c類土器集中区でLF-105と並んで検出された焼土である。両者の周囲には炭化物が散布しており、これらの焼土はほぼ同時に生成されたと考えられる。赤化の度合いは強く、遺物は散点的な出土状況で、Ⅴ群c類土器、フレイク・チップ、焼成粘土塊、炭化物、動物遺体が出土している。

遺物　5022はⅤ群c類の深鉢形土器口縁部である。

時期　遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

LF-105（図Ⅳ-80／図版-79～106）

位置：Z0-299-b　規模：0.75×0.47／×／0.06m

長軸方向：N-48.0°-W

特徴　調査区東側の段丘縁辺Ⅴ群c類土器集中区でLF-10 4と並んで検出された焼土である。両者の周囲には炭化物が散布しており、これらの焼土はほぼ同時に生成されたと考えられるが本焼土の方が赤化の度合いは弱い。遺物は散点的な出土状況で、Ⅳ群c類、Ⅴ群c類土器、チップ、動物遺体が出土している。

遺物　0186はⅤ群c類で双口の異形土器である。この土器の破片はLF-116や広い範囲の包含層からも出土している。

時期　遺物から縄文時代晩期後葉と考えられる。（皆川洋一）

LF-106（図Ⅳ-81／図版-25・79～106）

位置：B-297-a　規模：0.52×0.34／×／0.15m

特徴　Ⅴ層上面でLF-106～111のまとまりで確認した。周囲には土器が散在していた。骨片・炭化物が検出された。明瞭な掘込みは持たない。

遺物　0168,0169,5032はⅤ群c類の深鉢形土器である。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-107（図Ⅳ-81／図版-26）

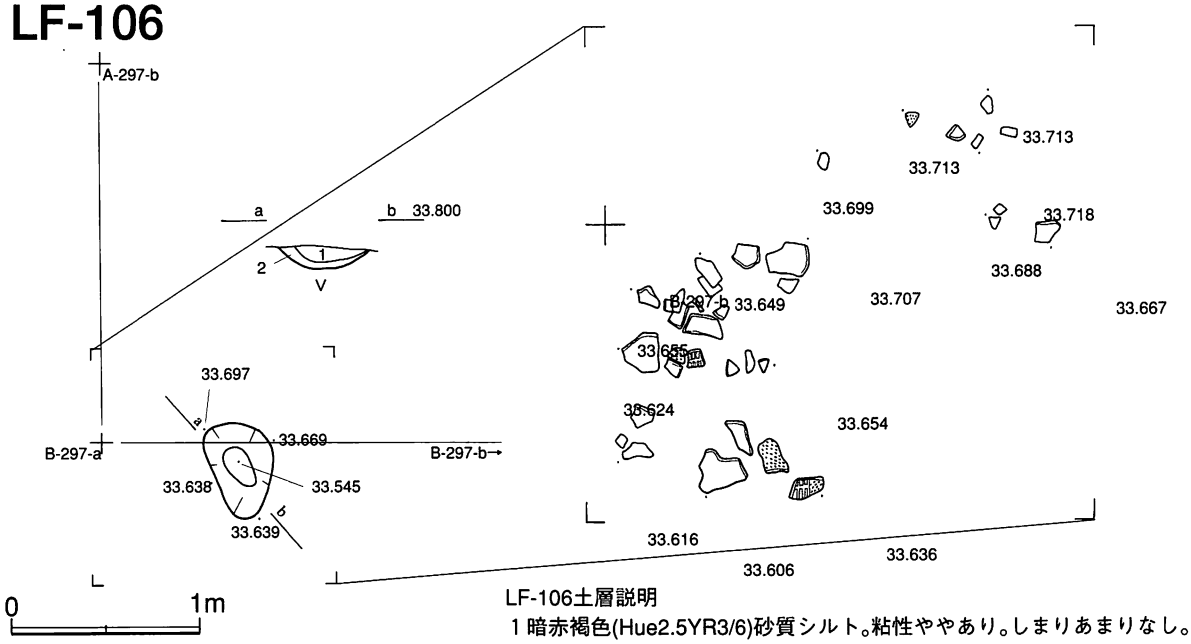
位置：A-297-b　規模：0.65×0.65／×／0.18m

特徴　Ⅴ層上面でLF-106～111のまとまりで確認した。周囲には土器が散在していた。明瞭な掘込みは持たない。

遺物　掲載遺物なし

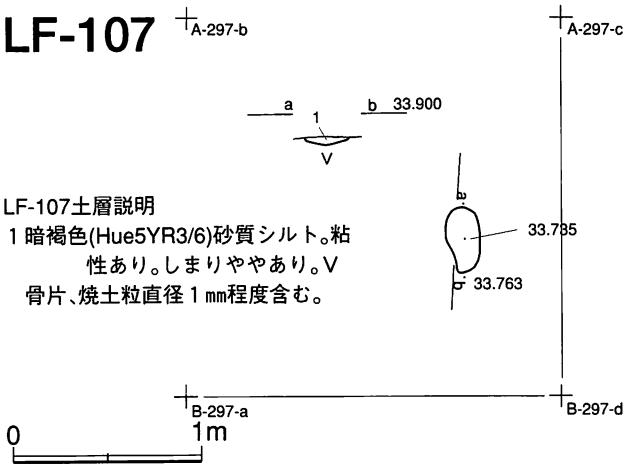
時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-106



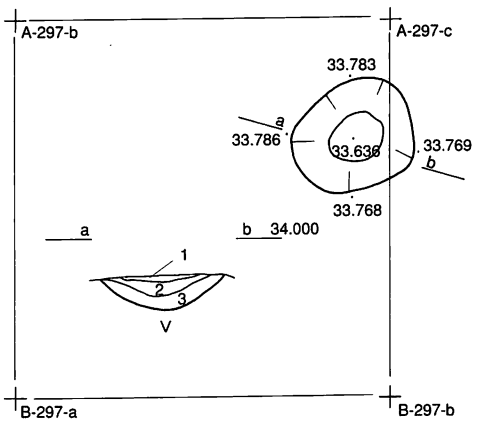
LF-106土層説明
1 暗赤褐色(Hue2.5YR3/6)砂質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V
2 暗褐色(Hue5YR3/4)シルト。粘性あり。しまりあまりなし。V

LF-107



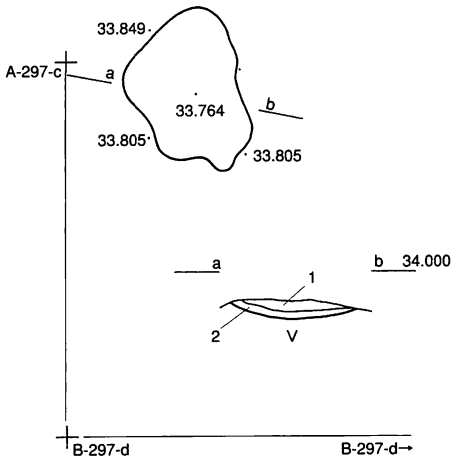
LF-107土層説明
1 暗褐色(Hue5YR3/6)砂質シルト。粘性あり。しまりややあり。V
骨片、焼土粒直径1㎜程度含む。

LF-108



LF-108土層説明
1 にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)シルト。粘性あり。しまりややあり。V
骨片、炭化物直径3～5㎜多く含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR4/8)シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V
3 暗褐色(Hue7.5YR3/4)粘土質シルト。粘性あまりなし。しまりなし。V
炭化物含む。モザイク様。

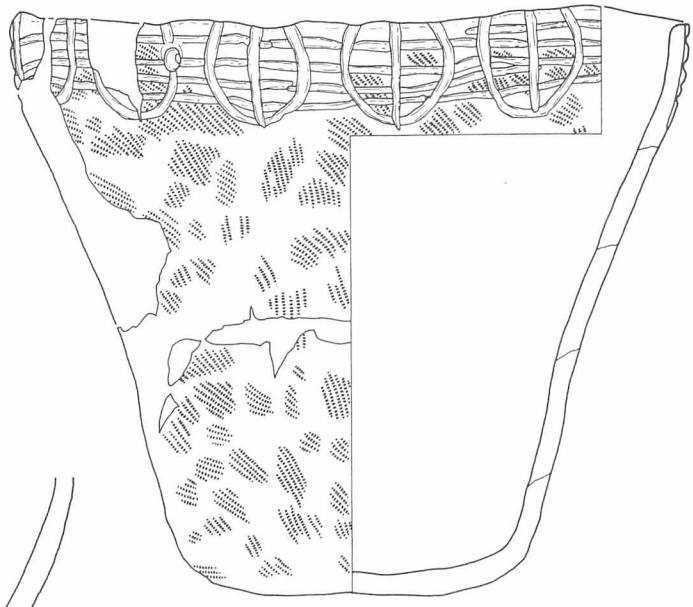
LF-109



LF-109土層説明
1 鈍い赤褐色(Hue5YR4/9)シルト。粘性あり。しまりややあり。V
骨片、炭化物直径5㎜多く含む。焼土粒直径2～3㎜含む。
2 黒褐色(Hue5YR2/2)シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。V
炭化物直径2～3㎜含む。

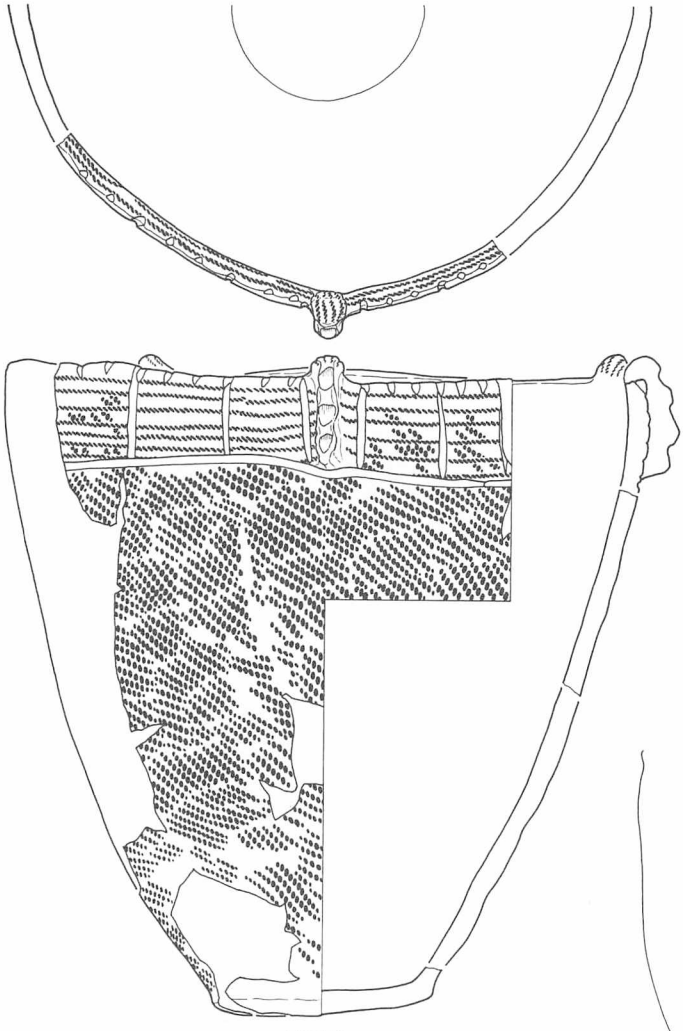
図Ⅳ-81 V層の焼土（3）

LF-106



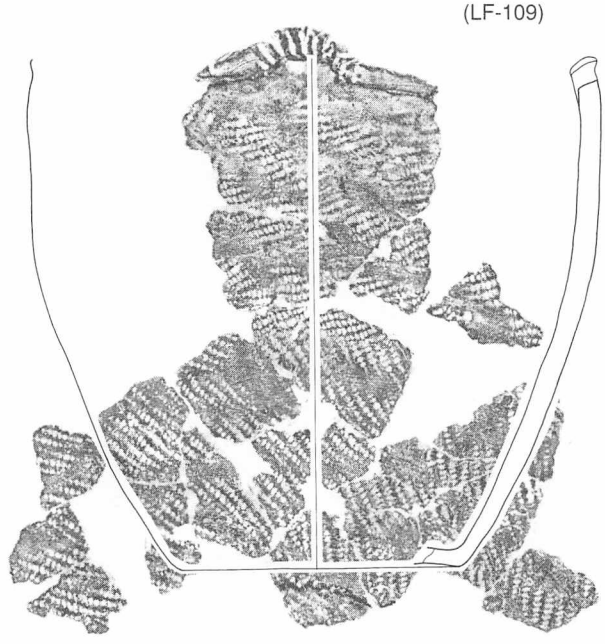
0168
(LF-112)





0169

5032
(LF-108)
(LF-109)





図Ⅳ-82　Ⅴ層の焼土（4）

LF-108（図Ⅳ-81 ／ 図版-26・47～68，79～106）

位置：Z0-297-b　規模：0.65×0.65 ／×／ 0.18m

特徴　Ⅴ層上面でLF-106～111のまとまりで確認した。周囲には土器が散在していた。骨片・炭化物が検出された。明瞭な掘込みは持たない。

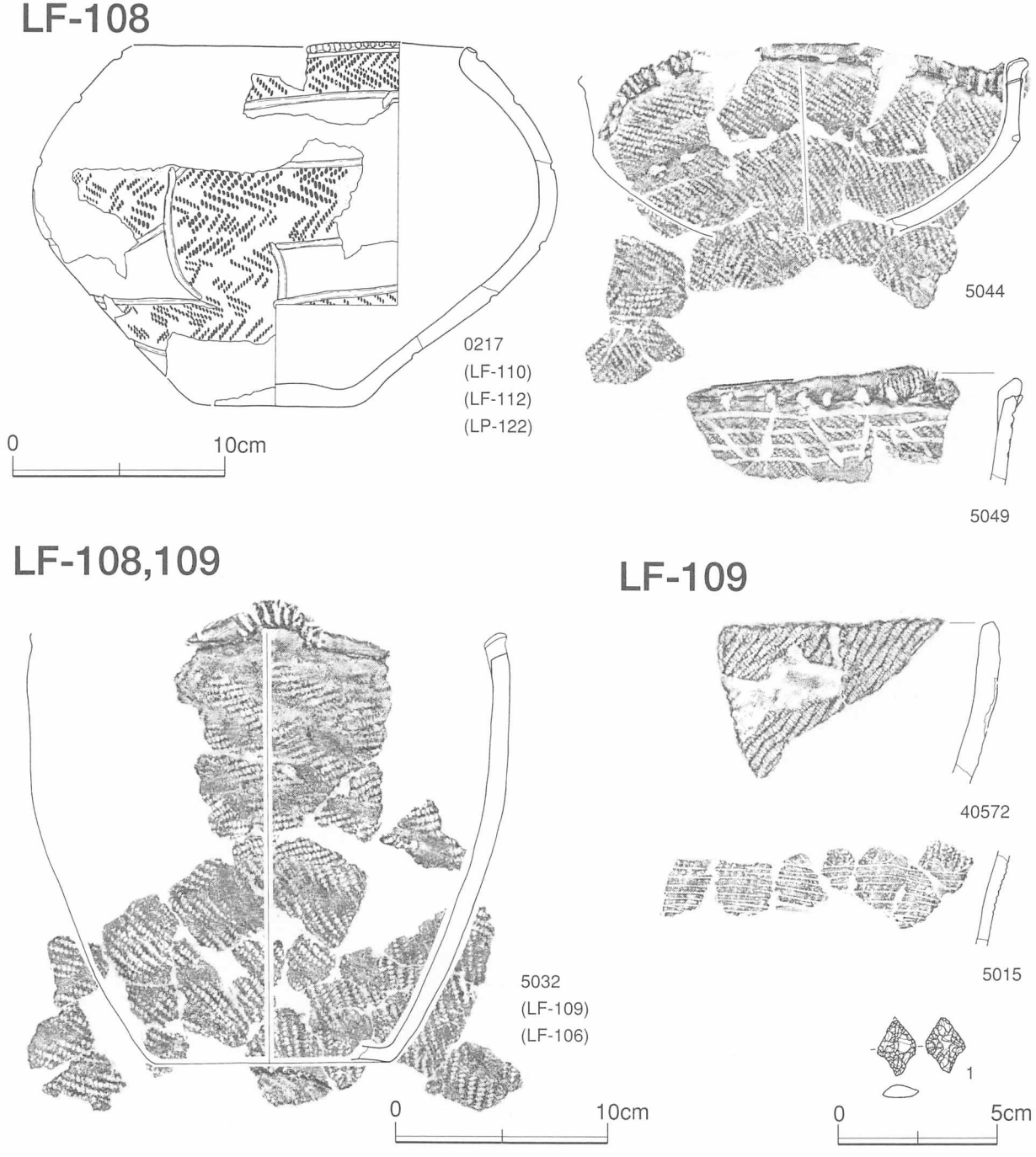
遺物　0217はⅣ群b類の瓶形土器である。5032は深鉢形、5044,5049は浅鉢形をそれぞれ呈するⅤ群c類土器である。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-109（図Ⅳ-81 ／ 図版-26・41～68，79～106，126～130）

位置：A-297-c　規模：0.88×0.65 ／×／ 0.09m

特徴　Ⅴ層上面でLF-106～111のまとまりで確認した。周囲には土器が散在していた。骨片・炭化物が



図Ⅳ-83　Ⅴ層の焼土（5）

検出された。明瞭な掘込みは持たない。

遺物　40572はⅣ群b類の深鉢形土器口縁部である。5015,5032はⅤ群c類の深鉢形土器である。1は有茎凸基の石鏃。黒曜石製。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-110（図Ⅳ-84／図版-126～130，41～68）

位置：A-297-a　A-297-b　規模：0.90×0.67／×／0.18m

特徴　Ⅴ層上面でLF-106～111のまとまりで確認した。周囲には土器が散在していた。骨片・炭化物が検出された。明瞭な掘込みは持たない。

遺物　0217はⅣ群b類の瓶形土器である。1は柳葉形の石鏃。下部を欠損している。黒曜石製。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-111（図Ⅳ-84）

位置：A-297-a　規模：0.60×0.36／×／0.13m

特徴　Ⅴ層上面でLF-106～111のまとまりで確認した。周囲には土器が散在していた。骨片・炭化物が検出された。明瞭な掘込みは持たない。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが、周囲の遺構と遺物から縄文時代晩期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-112（図Ⅳ-84／図版-41～68，79～106）

位置：A-297-d　規模：(0.50)×0.53／×／0.13m

特徴　Ⅴ層上面でLF-112～114のまとまりで確認した。

遺物　0217はⅣ群b類の瓶形土器である。0168はⅤ群c類の深鉢形土器である。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-113（図Ⅳ-84）

位置：Z0-297-c　規模：(0.62)×0.55／×／0.28m

特徴　Ⅴ層上面でLF-112～114のまとまりで確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物から縄文時代後期後葉または晩期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-114（図Ⅳ-85／図版-41～68，79～106，126～130）

位置：Z0-298-b　規模：0.62×0.46／×／0.10m

特徴　Ⅴ層上面でLF-112～114のまとまりで確認した。

遺物　40573はⅣ群b類の深鉢形土器胴部である。5014,5022はⅤ群c類の深鉢形土器である。1は有茎凸基の石鏃。黒曜石製。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-115（図Ⅳ-86／図版-69～78，126～130）

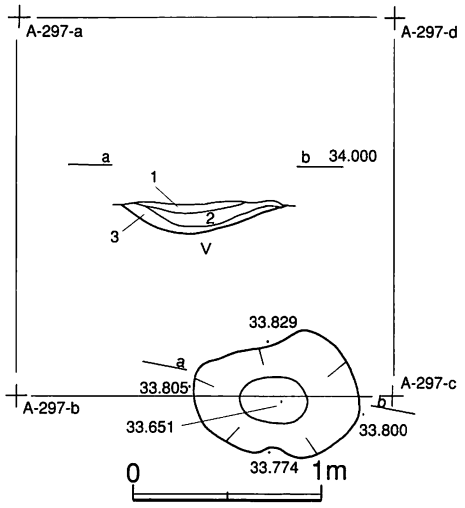
位置：Y0-297-c　規模：0.63×0.41／×／0.16m

特徴　Ⅴ層上面でLF-115～117のまとまりで確認した。

遺物　0214はⅣ群c類の深鉢形土器である。1はスクレイパー。およそ周縁に外湾した刃部をもつ。焼けている。黒曜石製。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期と考えられる。（佐藤　剛）

LF-110



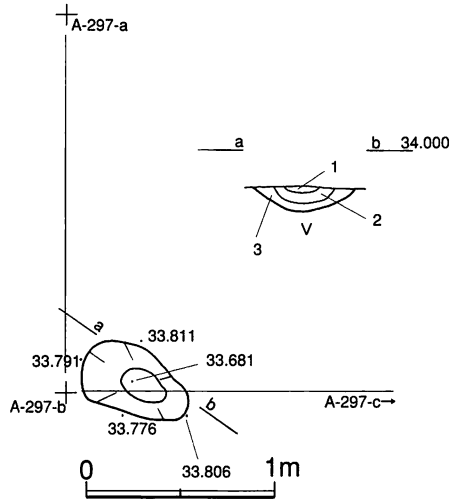
LF-110土層説明

1 にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)シルト。粘性あり。しまりややあり。V
骨片、炭化物直径5㎜程度多く含む。焼土直径2～10㎜含む。

2 明赤褐色(Hue2.5YR5/8)シルト。粘性あまりなし。しまりあり。V
Vがブロック状に混じる。

3 明赤褐色(Hue5YR3/4)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりなし。V
モザイク様。

LF-111



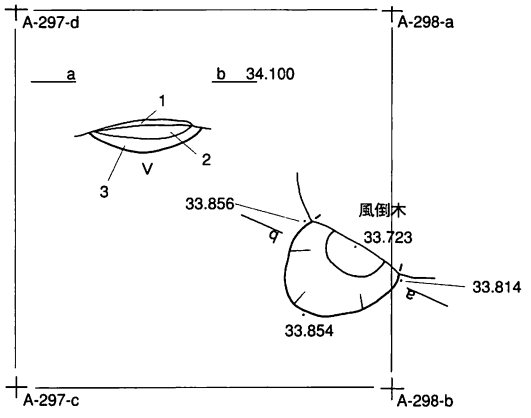
LF-111土層説明

1 赤褐色(Hue5YR3/4)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
炭化物直径2～3㎜程度、焼土粒直径2～3㎜含む。

2 赤褐色(Hue5YR4/8)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
炭化物直径2～3㎜程度若干含む。

3 暗褐色(Hue7.5YR3/4)シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V
炭化物直径2～3㎜程度含む。

LF-112



LF-112土層説明

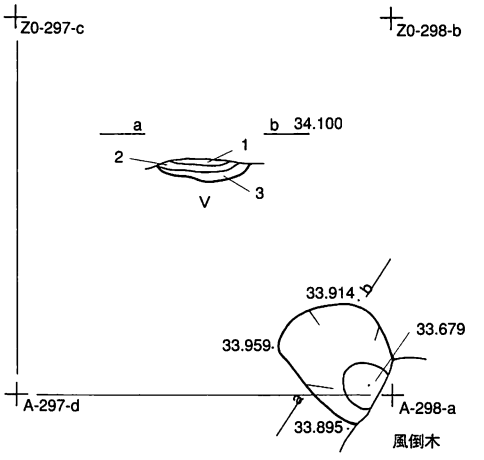
1 暗赤褐色(Hue5YR3/6)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V
骨片、炭化物直径2㎜程度、焼土粒直径2㎜程度含む。

2 暗褐色(Hue2.5YR3/6)シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。V
骨片含む。Vがブロック状に混じる。

3 黒褐色(Hue5YR2/2)シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。V
焼土粒直径2～3㎜程度含む。

0 1m

LF-113



LF-113土層説明

1 暗赤褐色(Hue7.5YR3/4)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V
骨片、炭化物直径2～3㎜、焼土粒直径2～3㎜含む。

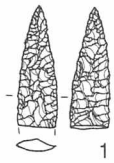
2 赤褐色(Hue2.5YR4/8)シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V

3 黒褐色(Hue7.5YR3/2)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V

0 1m

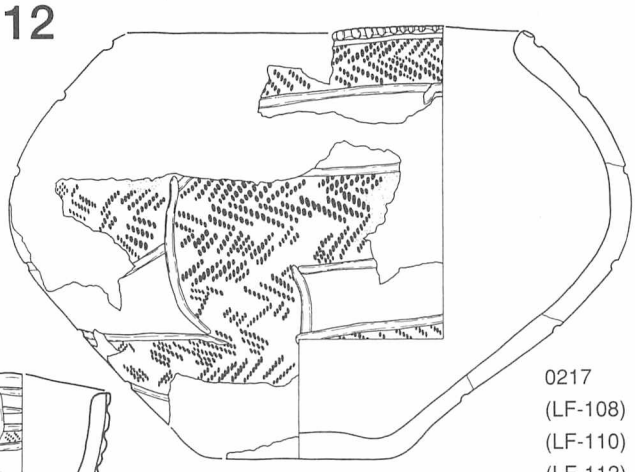
図Ⅳ-84 V層の焼土（6）

LF-110





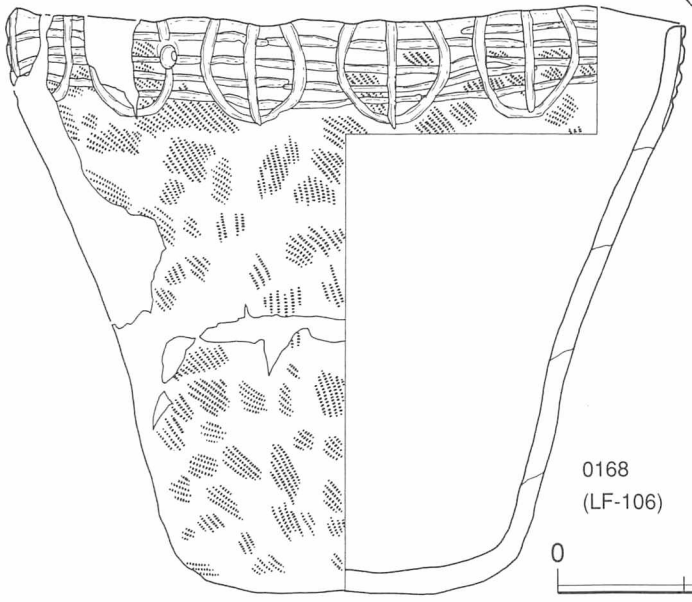
LF-110,112



0217
(LF-108)
(LF-110)
(LF-112)
(LP-122)



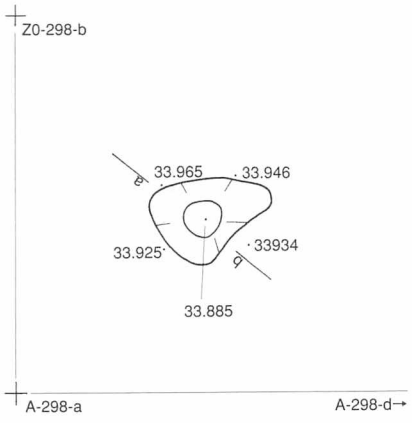
LF-112

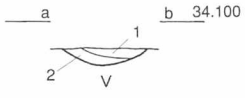


0168
(LF-106)



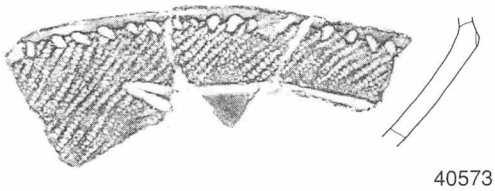
LF-114



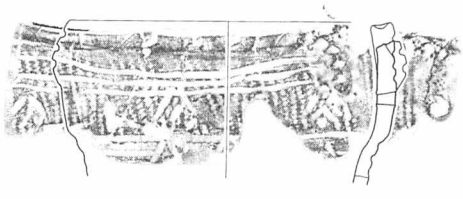


LF-114土層説明
1 暗褐色(Hue5YR3/6)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V
　骨片、炭化物直径 3 ～ 5 ㎜、焼土粒直径 3 ～ 5 ㎜含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR4/6)シルト。粘性なし。しまりあまりなし。V
　Vがブロック状に混じる。

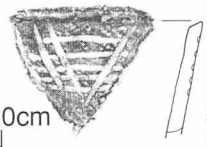




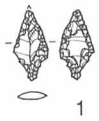
40573



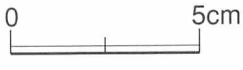
5014



5022
(LF-104)







図Ⅳ-85　V層の焼土（7）

LF-116（図Ⅳ-86／図版-69～78，79～106）

位置：Y0-298-a　規模：0.64×0.48／×／0.12m

特徴　Ⅴ層上面でLF-115～117のまとまりで確認した。周囲には遺物が散在していた。

遺物　4031はⅣ群c類の注口形土器胴部、0186はⅤ群c類の双口を有する異形土器である。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

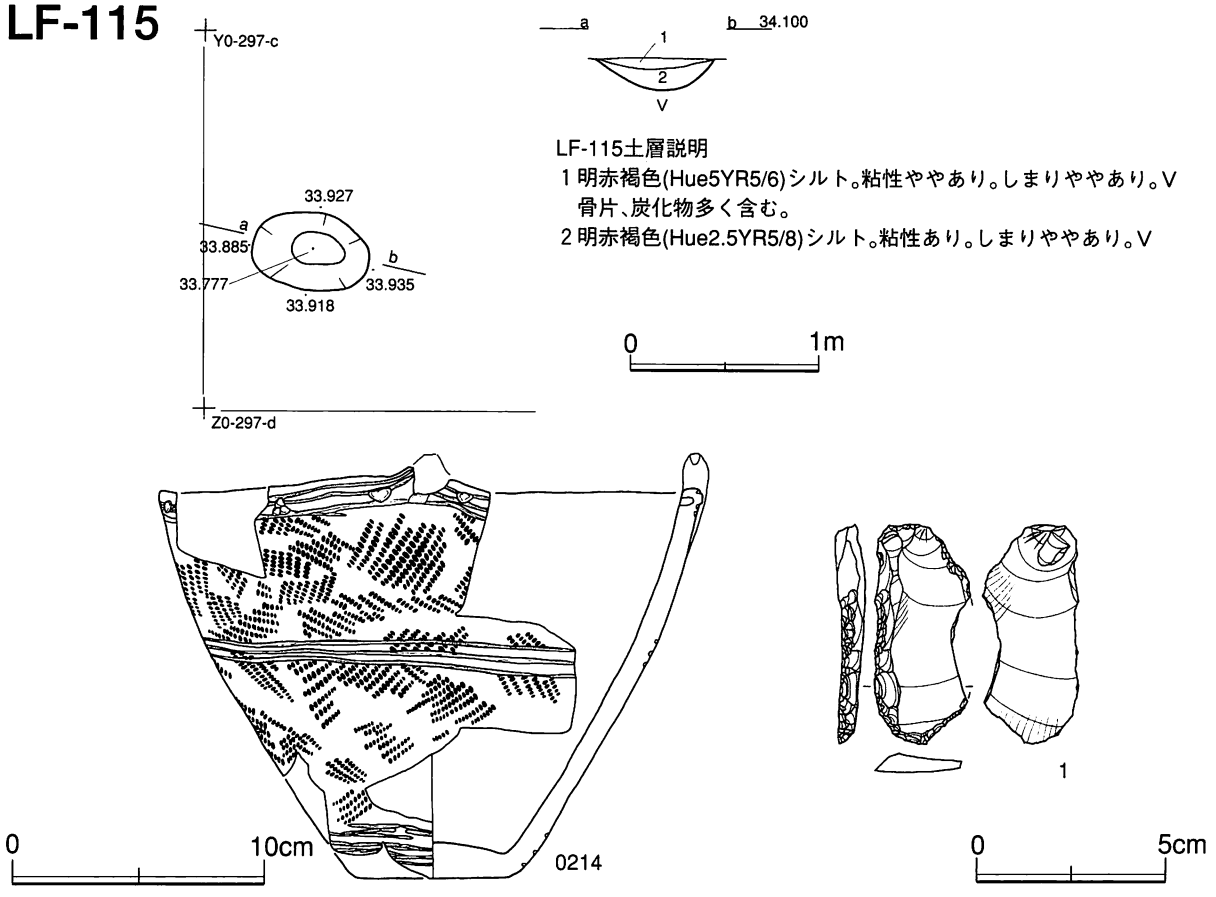
LF-117（図Ⅳ-88）

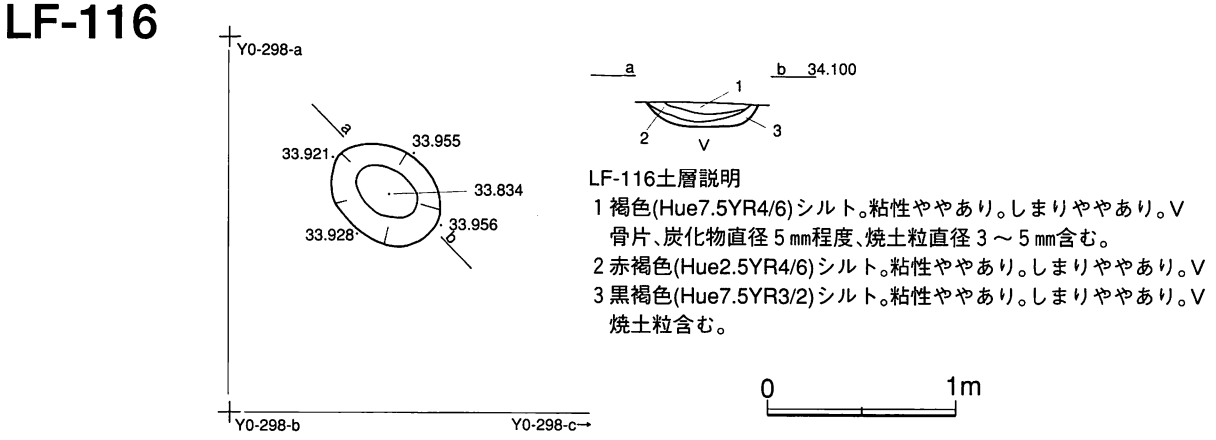
位置：Y0-298-d　規模：0.73×0.55／×／0.13m

特徴　Ⅴ層上面でLF-115～117のまとまりで確認した。周囲には遺物が散在していた。

遺物　0232はⅣ群c類の深鉢形土器である。1は有茎凸基の石鏃。黒曜石製。2は石斧。泥岩製。

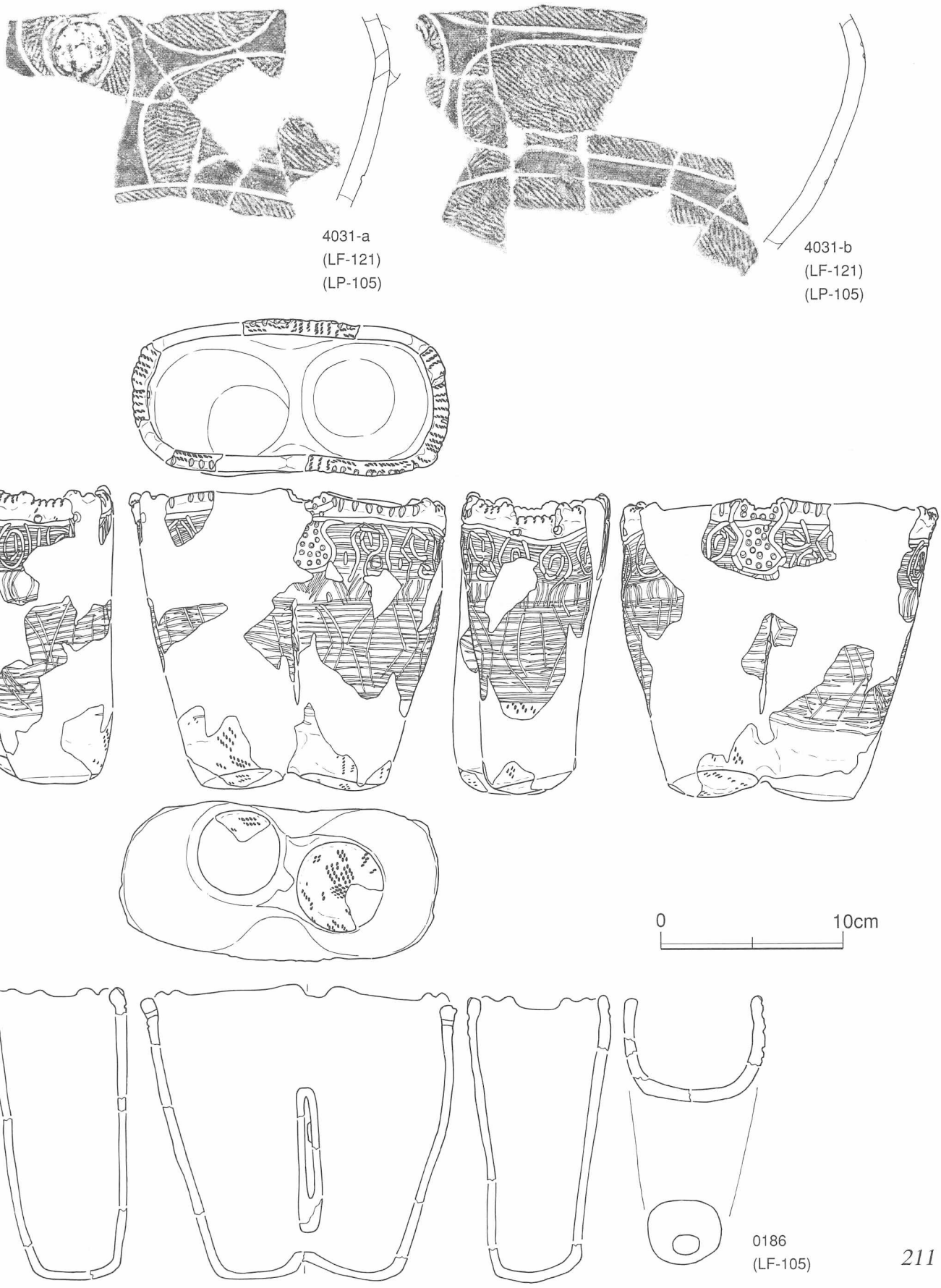
時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）





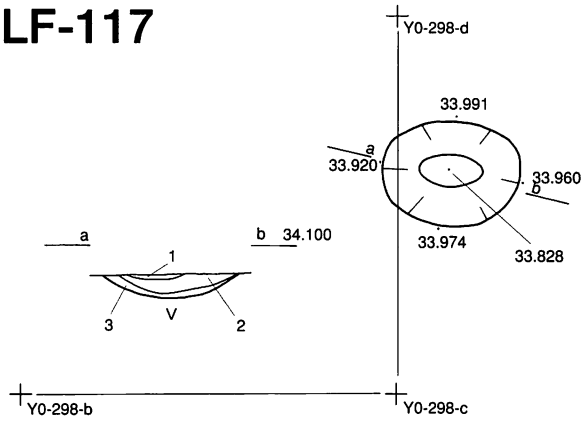
図Ⅳ-86　Ⅴ層の焼土（8）

LF-116

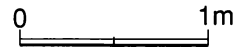


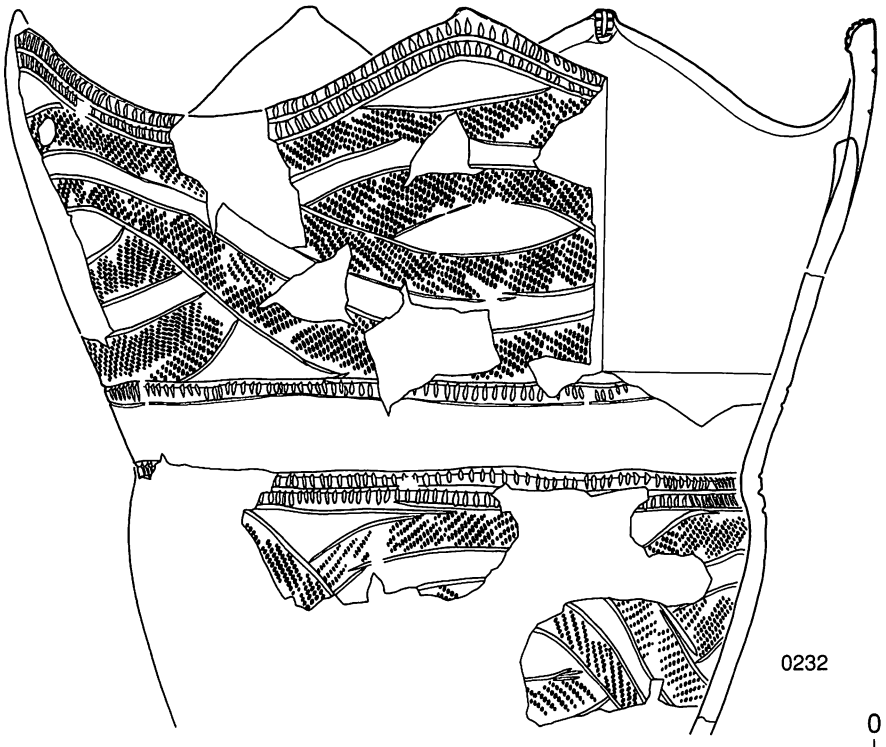
図Ⅳ-87　Ⅴ層の焼土（9）

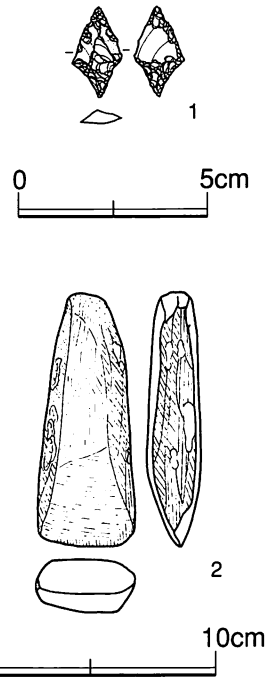
LF-117



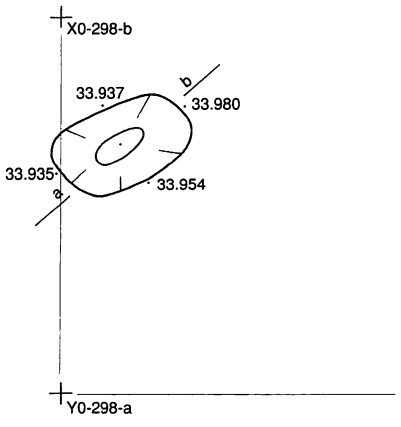
LF-117土層説明
1 褐色(Hue7.5YR4/6)砂質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
骨片、炭化物直径2～3㎜程度含む。
2 明赤褐色(Hue2.5YR5/8)砂質シルト。粘性ほとんどなし。しまりあり。V
3 暗褐色(Hue7.5YR3/3)砂質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
焼土粒含む。

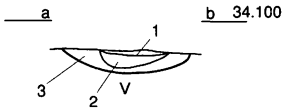




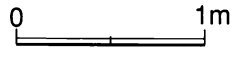


LF-118





LF-118土層説明
1 褐色(Hue7.5YR4/3)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりややあり。V
焼土直径10㎜程度含む。
2 明赤褐色(Hue5YR5/8)シルト。粘性強い。しまりなし。V
3 暗赤褐色(Hue5YR3/2)シルト質粘土。粘性あり。しまりややあり。V



図Ⅳ-88 V層の焼土（10）

LF-118（図Ⅳ-88）

位置：X0-298-b　規模：0.72×0.47／×／0.15m

特徴　Ⅴ層上面で確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から周囲の遺物から縄文時代後期中葉から晩期にかけての遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-119（図Ⅳ-89／図版-126～130，69～78，79～106）

位置：Y0-299-a　規模：0.90×0.62／×／0.26m

特徴　Ⅴ層上面で確認した。堆積状況から掘込みを持つ可能性がある。

遺物　4543はⅣ群c類の深鉢形土器、0102はⅤ群c類の深鉢形土器である。1は有茎凸基の石鏃。茎部を欠損している。黒曜石製。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期と考えられる。（佐藤　剛）

LF-120（図Ⅳ-89／図版-126～130，79～106）

位置：Y0-299-b　規模：0.41×0.32／×／0.10m

特徴　Ⅴ層上面で確認した。

遺物　5027はⅤ群c類の浅鉢形土器である。1は菱形の石鏃。黒曜石製。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-121（図Ⅳ-90／図版-79～106，69～78）

位置：Y0-298-c　規模：(0.58)×0.49／×／0.09m

特徴　Ⅴ層上面で確認した。

遺物　4031はⅣ群c類の注口形土器胴部である。0180は深鉢形、0183は浅鉢形、0176,5018は小型の浅鉢形を呈するⅤ群c類土器である。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期または続縄文時代の遺構の可能性が高いと考えられる。(佐藤　剛)

LF-122（図Ⅳ-91／図版-26・126～130）

位置：A-295-b　規模：0.85×0.68／0.28×0.39／0.19m

特徴　Ⅴ層上面でLF-122～124のまとまりで確認した。周囲には遺物がまとまっていた。

遺物　1は石斧。刃部は片刃で、刃部の形態は円刃である。およそ全面研磨されているが、身部には部分的に敲打痕を残す。刃縁には剥離痕が認められる。2はおよそ全面にたたき痕が認められる。長短軸比が2：1の長楕円礫を素材とする。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-123（図Ⅳ-91／図版-26）

位置：A-295-b　A-295-c　規模：0.82×0.71／0.50×0.51／0.16m

特徴　Ⅴ層上面でLF-122～124のまとまりで確認した。周囲には遺物がまとまっていた。周囲の遺構の掘り上げ土をかぶっているか、掘込みを持つ可能性がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

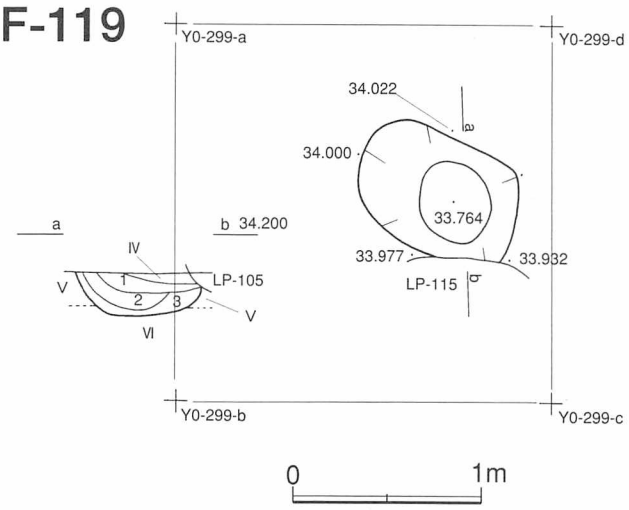
LF-124（図Ⅳ-91／図版-26・79～106）

位置：B-295-d　規模：0.89×0.73／×／0.13m

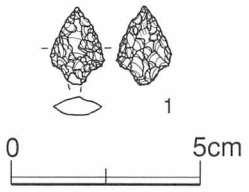
特徴　Ⅴ層上面でLF-122～124のまとまりで確認した。

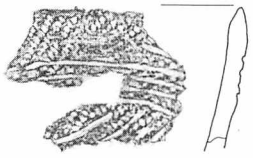
遺物　0177,0179はⅤ群c類の浅鉢形土器である。時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えら

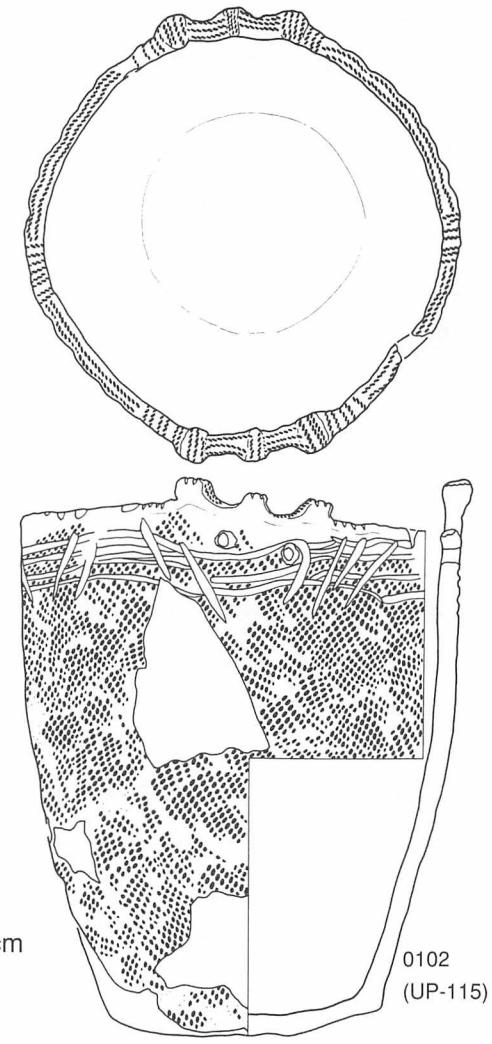
LF-119



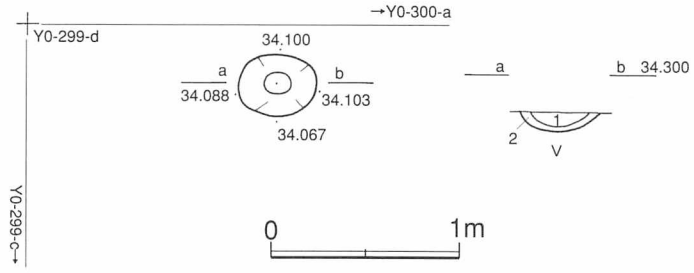
LF-119土層説明
1 暗褐色(Hue7.5YR3/3)シルト質砂。粘性なし。しまりややあり。V
骨片多く含む。炭化物含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
3 暗赤褐色(Hue5YR3/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V



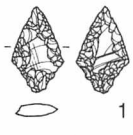


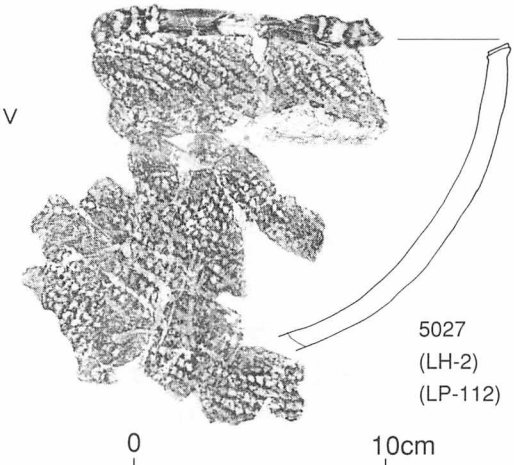


LF-120



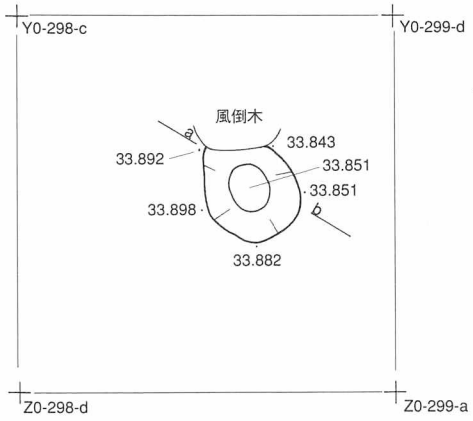
LF-120土層説明
1 にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
Vがブロック状に混じる。
2 暗赤褐色(Hue5YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
焼土粒直径 2 ～ 3 ㎜含む。

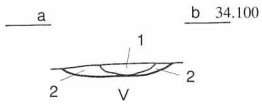




図Ⅳ-89　V層の焼土（11）

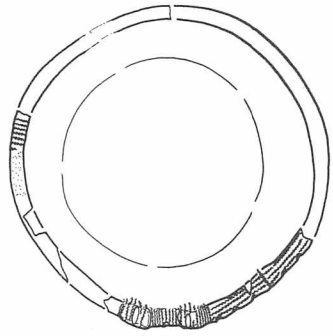
LF-121

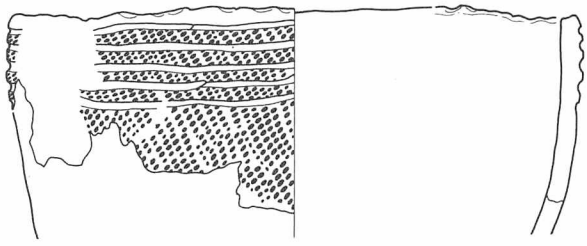




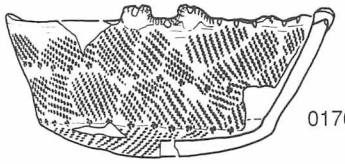
LF-121土層説明
1 赤褐色(Hue2.5YR4/8)シルト質砂。粘性あまりなし。しまりなし。V
骨片含む。
2 黒褐色(Hue5YR2/2)シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V
焼土粒直径 2 ～ 4 ㎜含む。



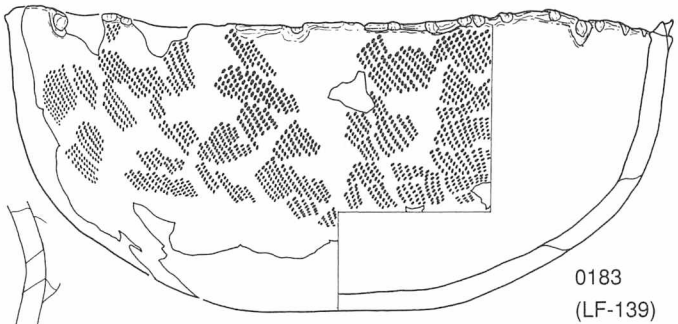




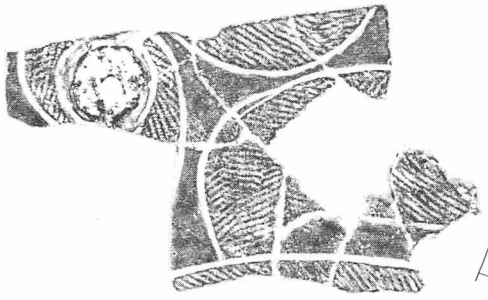
0180



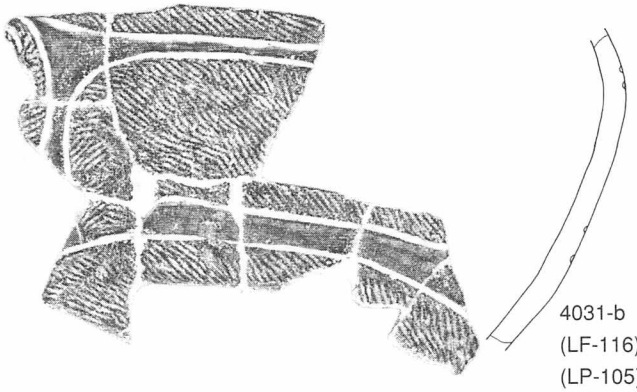
0176



0183
(LF-139)



4031-a
(LF-116)
(LP-105)



4031-b
(LF-116)
(LP-105)

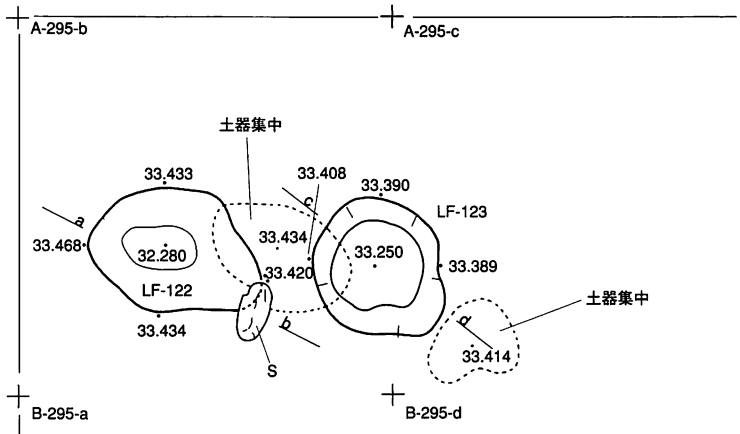


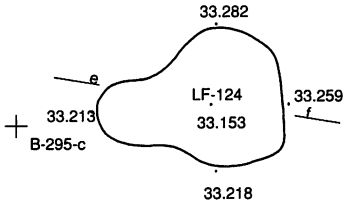
5018

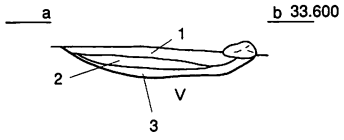


図Ⅳ-90　V層の焼土（12）

LF-122～124



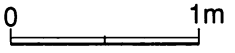


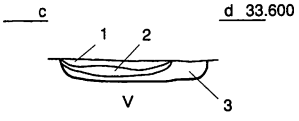


B-295-b

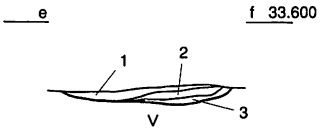
LF-122土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V≫Ⅵ
骨片、炭化物直径2～5㎜、焼土粒直径2～5㎜含む。
2 明赤褐色(Hue2.5YR5/8)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
3 黒褐色(Hue7.5YR2/2)シルト。粘性ほとんどなし。しまりなし。V
モザイク様。







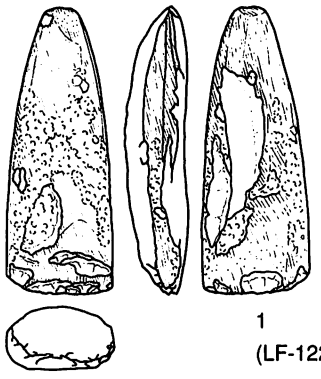
LF-123土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V≫Ⅵ
骨片、炭化物直径2～5㎜焼土粒直径2～5㎜含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR5/8)シルト。粘性あり。しまりあまりなし。V
3 黒褐色(Hue7.5YR3/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
モザイク様。



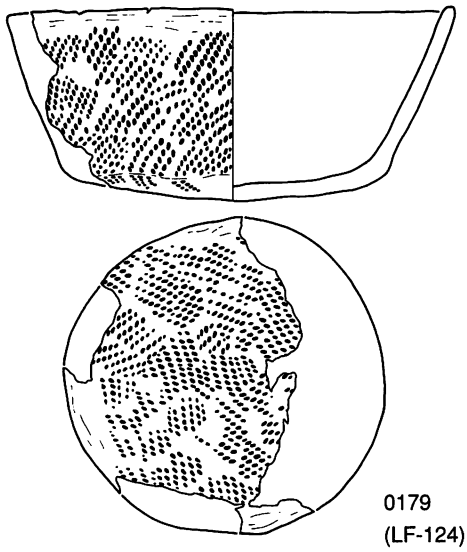
LF-124土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V≫Ⅵ
骨片、炭化物直径2～5㎜、焼土粒2～5㎜含む。
2 明赤褐色(Hue2.5YR5/8)シルト。粘性あり。しまりあり。V
3 黒褐色(Hue7.5YR3/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V

図Ⅳ-91　V層の焼土（13）

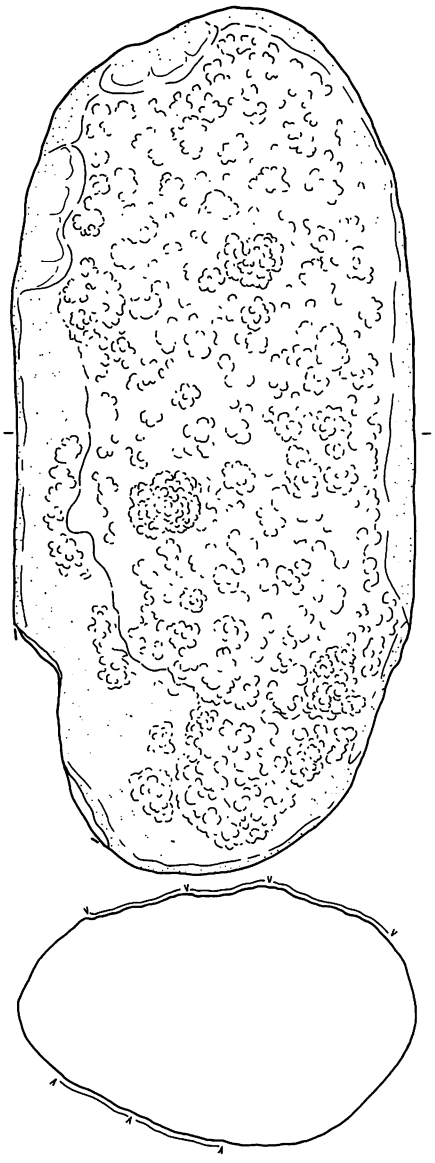
LF-122～124

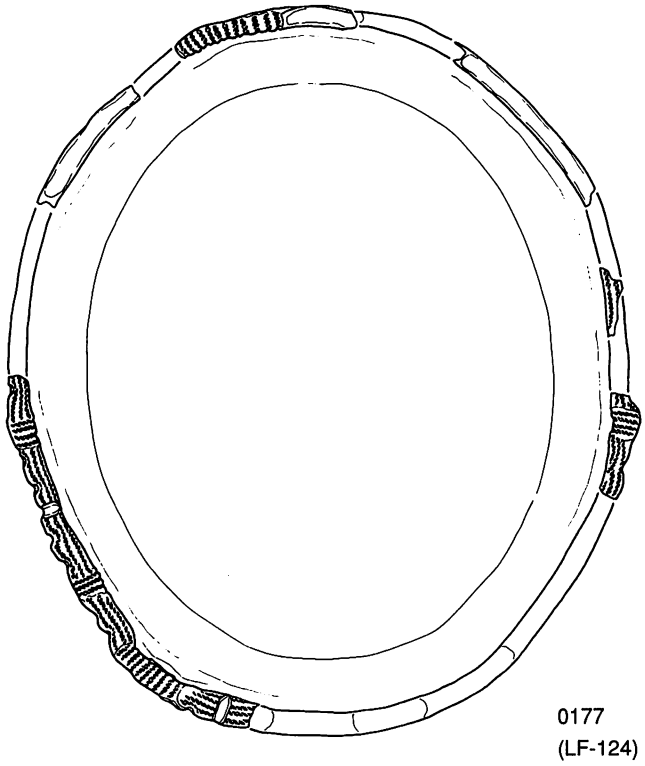


1
(LF-122)



0179
(LF-124)

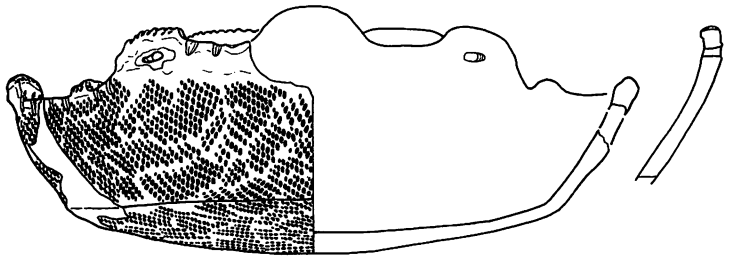




0177
(LF-124)

0　　10cm

2
(LF-122)



図Ⅳ-92　Ⅴ層の焼土（14）

れる。（佐藤　剛）

LF-125（図Ⅳ-93／図版-79～106，126～130）

位置：X0-299-c　規模：0.66×0.57／0.24×0.32／0.12m

特徴　Ⅴ層上面でLF-125～130のまとまりで確認した。

遺物　5645は深鉢形、0181,5026は浅鉢形を呈するⅤ群c類土器である。0181は台付の大洞A式併行と考えられる。1は有茎平基の石鏃。黒曜石製。2はドリル。素材の一部に機能部を作り出したもの。尖頭部は欠損している。頁岩製。3はスクレイパー。両側縁に直線的な急角度の刃部をもつ。下端が尖る形状からドリル的な用途も考えられる。黒曜石製。4は石斧未製品。刃部未作出のもの。素材を部分的に研磨した後、全面が敲打によって整形されている。下端には剥離痕が認められる。刃部を作り出す粗整形と考えられる。泥岩製。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-126（図Ⅳ-94）

位置：X0-299-a　X0-299-b　規模：（0.80）×（0.52）／0.52×0.30／0.16m

特徴　Ⅴ層上面でLF-125～130のまとまりで確認した。周囲には遺物がまとまっていた。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-127（図Ⅳ-94／図版-69～78，126～130）

位置：X0-299-a　規模：0.60×0.26／0.11×0.46／0.16m

特徴　Ⅴ層上面でLF-125～130のまとまりで確認した。

遺物　4543はⅣ群c類の深鉢形土器口縁部である。1は有茎凸基の石鏃。黒曜石製。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-128（図Ⅳ-94）

位置：W0-298-d　規模：0.41×0.32／×／0.08m

特徴　Ⅴ層上面でLF-125～130のまとまりで確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-129（図Ⅳ-94／図版-79～106）

位置：W0-295-d　規模：0.49×0.37／×／0.13m

特徴　Ⅴ層上面でLF-125～130のまとまりで確認した。

遺物　5001はⅤ群c類の深鉢形土器である。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-130（図Ⅳ-95／図版-69～78，79～106）

位置：Y0-300-a　規模：0.61×0.46／×／0.13m

特徴　Ⅴ層上面でLF-125～130のまとまりで確認した。

遺物　0244はⅣ群c類の鉢もしくは深鉢形土器である。5651,5652はⅤ群c類の浅鉢形土器口縁部である。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-131（図Ⅳ-96／図版-27・41～68）

位置：E-295-d　E-295-a　規模：0.33×0.22／×／0.03m

特徴　調査区南側の段丘下のⅤ-3層中を調査中に確認した。周辺には土器片や炭化物、流木が散在して

いた。検出状況や断面などから 2 次堆積の焼土と考えられる。

遺物　4585 はウサクマイ C 式、0234,0051 は手稲式のⅣ群 b 類深鉢形土器である。

時期　検出された層位および焼土上面・周辺の遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

LF-132（図Ⅳ -95 ／図版 -126 ～ 130 ）

位置：Y0-300-a　規模：0.39 × 0.26 ／×／ 0.15m

特徴　Ⅴ層上位で LF-132 ～ 133 のまとまりで確認した。周囲には遺物が散在していた。

遺物　1 は無茎凹基の三角形鏃。黒曜石製。2 は砥石。両面におよそ平坦なすり面をもつ。欠損している。砂岩製。

時期　周囲の遺物から縄文時代後期末葉の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-133（図 Ⅳ -97 ）

位置：Y0-300-a　規模：(0.47)×(0.38)／×／ 0.14m

特徴　Ⅴ層上位で LF-132 ～ 133 のまとまりで確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-134（図Ⅳ -97 ／図版 -37，38 ）

位置：Y0-299-c　規模：0.57 × 0.43 ／×／ 0.14m

特徴　Ⅴ層上位で LF-134 ～ 135 のまとまりで確認した。掘込みを持つ可能性がある。

遺物　1027 はⅠ群 b-3 類の深鉢形土器胴部である。

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期以降の遺構の可能性が考えられる。（佐藤　剛）

LF-135（図 Ⅳ -97 ）

位置：Y0-299-d　規模：(0.33)×(0.31)／×／(0.17)m

特徴　Ⅴ層上位で LF-134 ～ 135 のまとまりで確認した。

遺物　掲載遺物なし。

時期　周囲の遺物から縄文時代後期中葉から晩期の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-136（図 Ⅳ -97 ）

位置：W0-298-a　規模：0.90 × 0.87 ／ 0.42 × 0.54 ／ 0.22m

特徴　Ⅴ層中位で確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物から縄文時代晩期の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LF-137（図 Ⅳ -97 ）

位置：X0-297-c　規模：0.59 × 0.37 ／×／ 0.08m

特徴　Ⅴ層中位で確認した。

遺物　掲載遺物なし

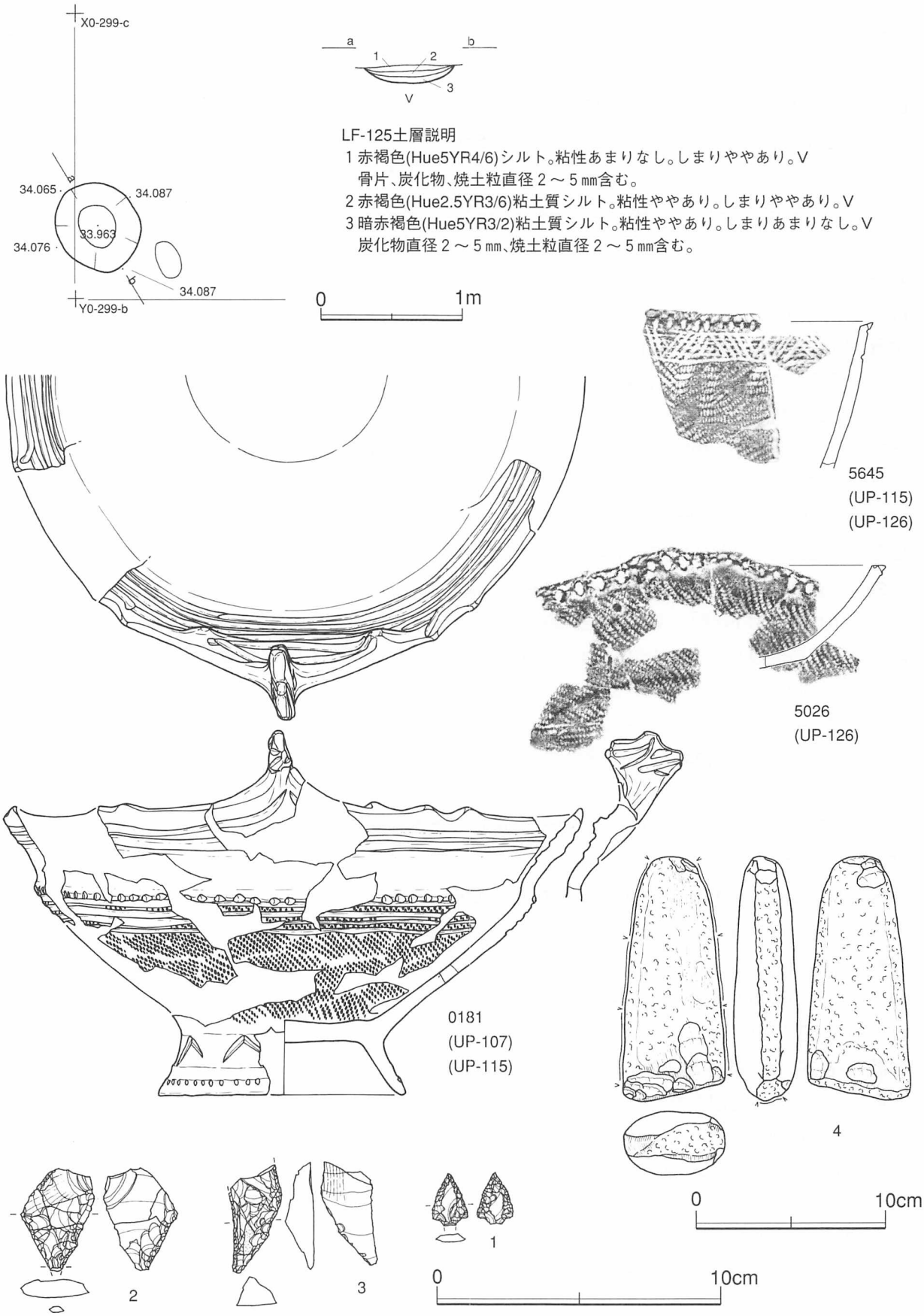
時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が考えられる。（佐藤　剛）

LF-138（図 Ⅳ -98 ／図版 -126 ～ 130 ）

位置：W0-295-c　規模：0.56 × 0.50 ／×／ 0.10m

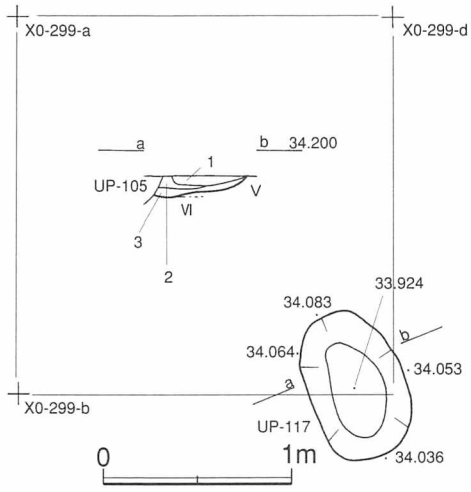
特徴　Ⅴ層上位で確認した。

LF-125



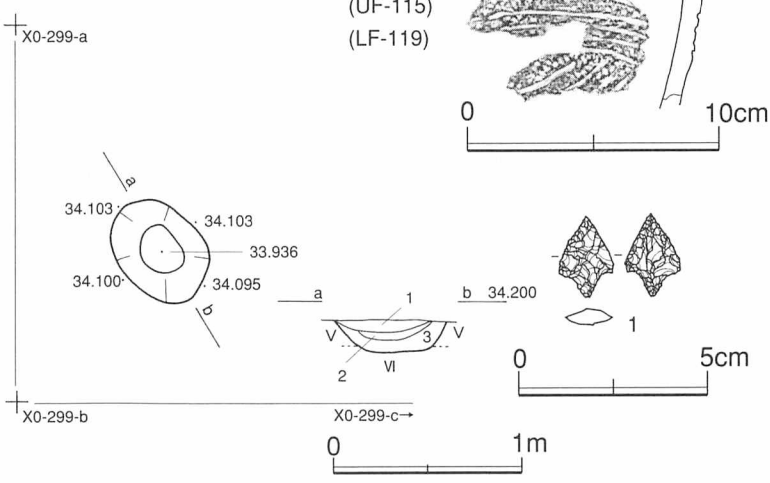
図Ⅳ-93　V層の焼土（15）

LF-126



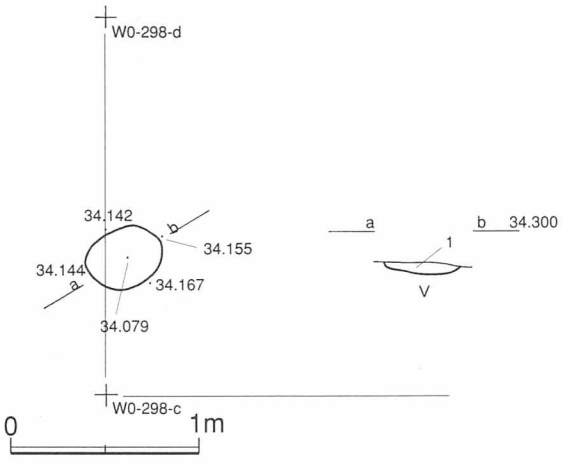
LF-126土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅴ
骨片、炭化物、焼土粒直径 2 ～ 5 ㎜含む。
2 明赤褐色(Hue2.5YR5/8)シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。Ⅴ
3 にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ
炭化物直径 2 ～ 5 ㎜、焼土粒直径 2 ～ 5 ㎜含む。

LF-127



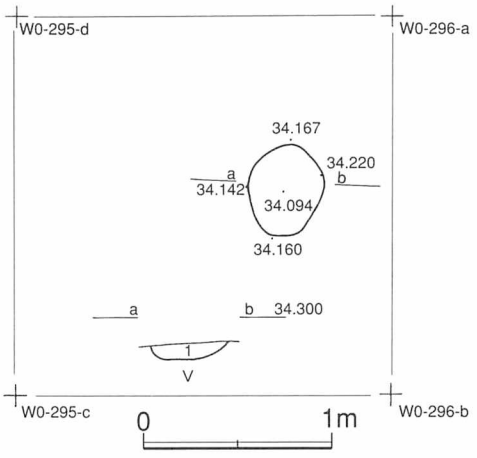
LF-127土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/6)シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。Ⅴ≫Ⅵ
骨片、炭化物、焼土粒直径 2 ～ 5 ㎜含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR3/6)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。Ⅴ
3 暗赤褐色(Hue5YR3/2)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅴ

LF-128

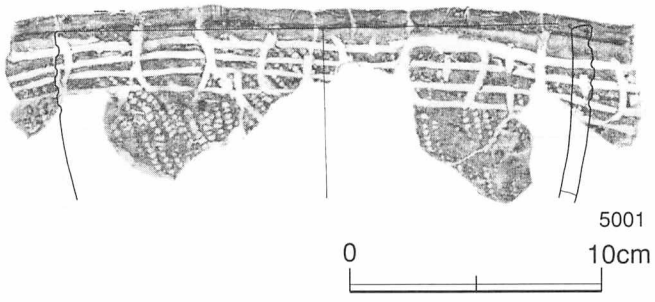


LF-128土層説明
1 暗褐色(Hue7.5YR3/3)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあり。Ⅴ
骨片、炭化物、焼土粒直径 2 ㎜程度含む。

LF-129

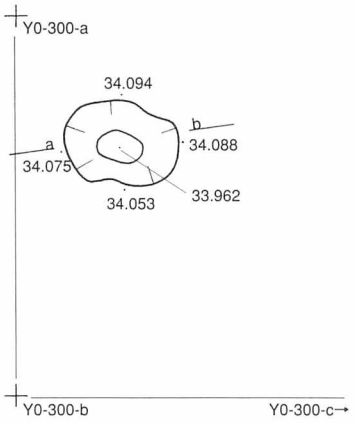


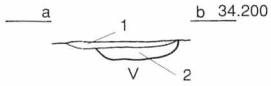
LF-129土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/2)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあり。Ⅴ
骨片少量、炭化物少量含む。焼土粒直径 2 ㎜程度含む。



図Ⅳ-94　Ⅴ層の焼土（16）

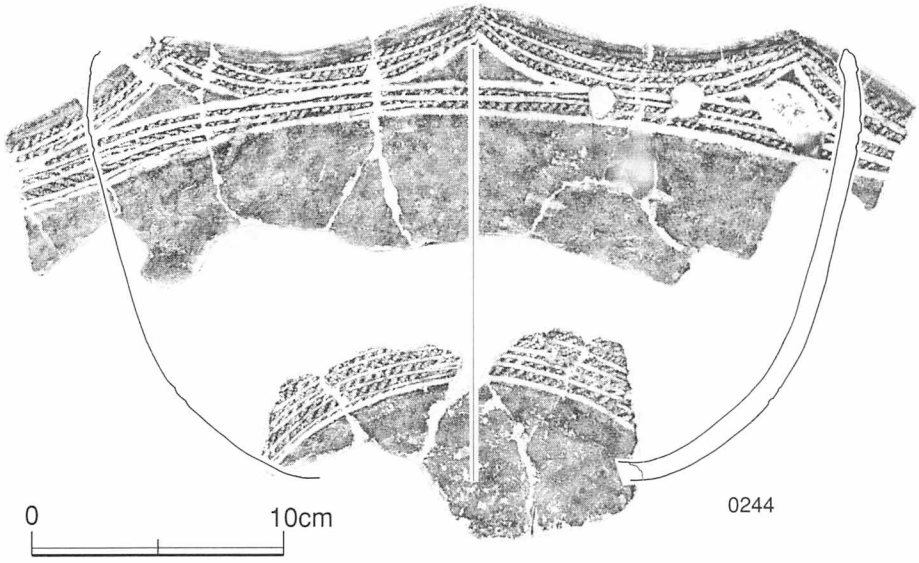
LF-130

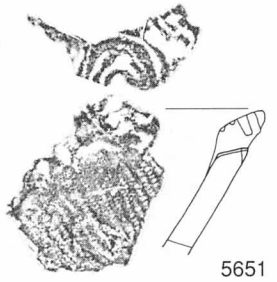


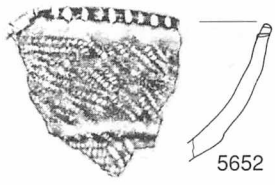


LF-130土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/6)砂質シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。V
骨片、炭化物、焼土粒直径 2 ～ 5 ㎜含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR3/6)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V

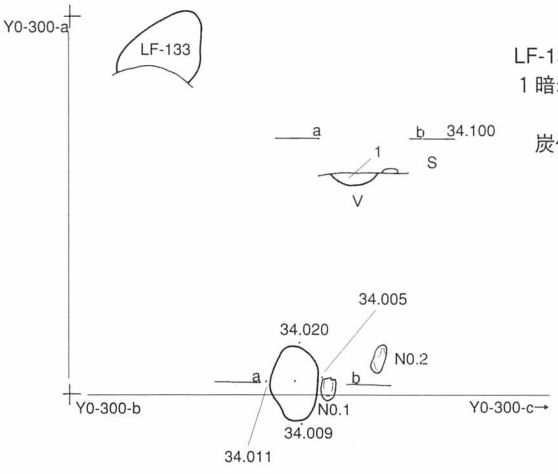






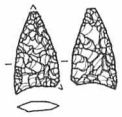


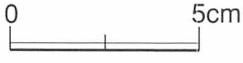
LF-132

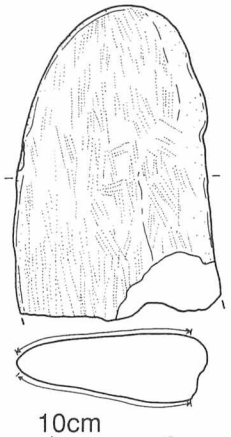


LF-132土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/6)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあり。V
炭化物直径 2 ～ 4 ㎜、焼土粒直径 2 ～ 4 ㎜含む。





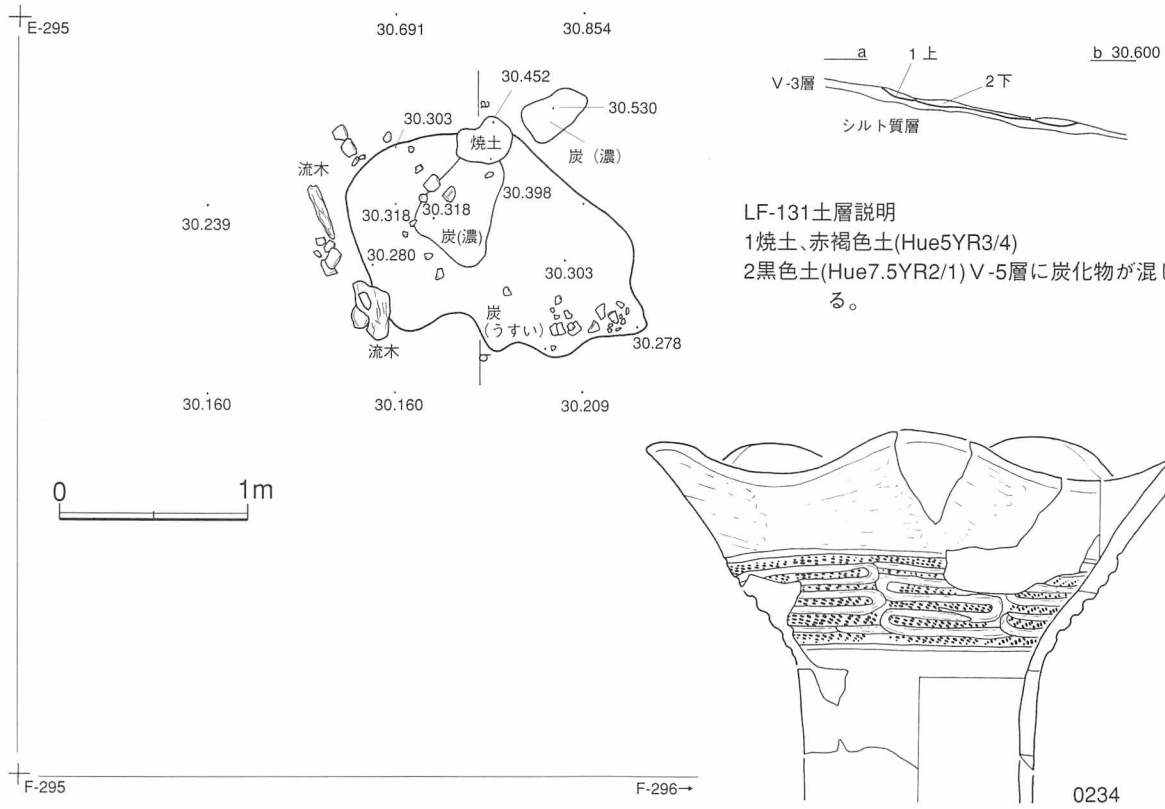




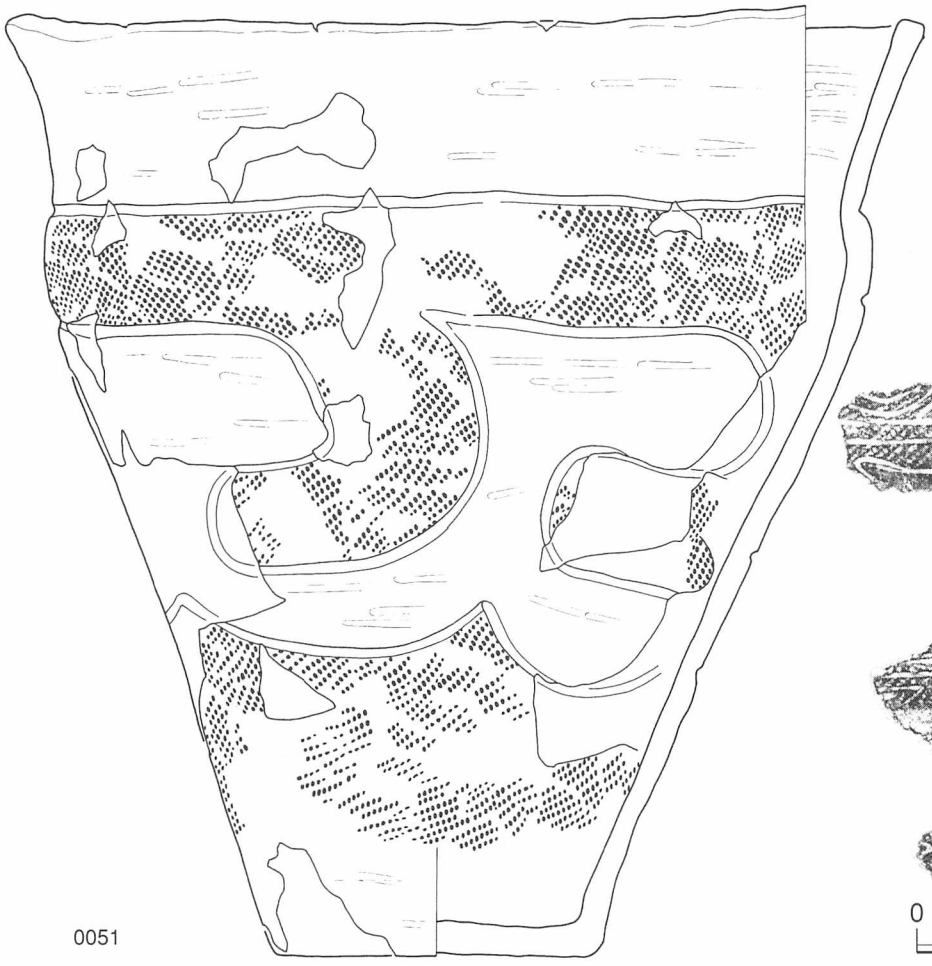


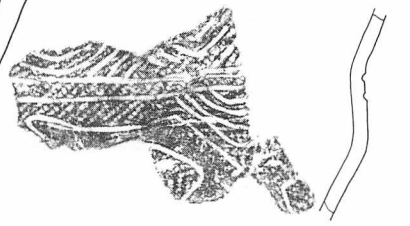
図Ⅳ-95　V層の焼土（17）

LF-131



LF-131土層説明
1焼土、赤褐色土(Hue5YR3/4)
2黒色土(Hue7.5YR2/1) V-5層に炭化物が混じる。









図Ⅳ-96　V層の焼土（18）

遺物　1は有茎凸基の石鏃。茎部に白っぽくざらついた焼け部分が認められる。黒曜石製。2はスクレイパー。右側縁に直線的な刃部をもつ。礫表皮を残す。黒曜石の転礫を素材とする。

時期　周囲の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が高いと考えられる。(佐藤　剛)

LF-139（図Ⅳ-98／図版-69～78）

位置：Y0-297-b　規模：(0.43)×(0.40)／×／0.06m

特徴　Ⅴ層上位で風倒木に切られて確認した。周囲には遺物がまとまっていた。

遺物　4647はⅣ群c類の深鉢形土器である。

時期　周囲の遺物から縄文時代後期末葉の可能性が高いと考えられる。(佐藤　剛)

LF-140（図Ⅳ-99／図版-69～78）

位置：Y0-299-b　規模：1.12×0.85／×／0.15m

特徴　Ⅴ層上位でLP-105とともに確認した。LP-105に伴う可能性がある。

遺物　0232はⅣ群c類の深鉢形土器である。

時期　周囲の遺物から縄文時代後期末葉の遺構と考えられる。(佐藤　剛)

LF-141（図Ⅳ-99／図版-69～78）

位置：Y0-299-b　規模：1.03×0.60／×／0.15m

特徴　Ⅴ層上位でLP-105に切られて確認した。

遺物　0232,4651はⅣ群c類の深鉢形土器である。

時期　周囲の遺物から縄文時代後期末葉の遺構と考えられる。(佐藤　剛)

LF-142（図Ⅳ-99）

位置：Z0-298-d　規模：0.44×0.36／×／0.10m

特徴　Ⅴ層上位で確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが、周囲の遺物から縄文時代後期末葉または晩期の遺構と考えられる。(佐藤　剛)

LF-143（図Ⅳ-100／図版-69～78）

位置：W0-301-b　規模：0.41×0.35／×／0.04m

長軸方向：N-78.0°-E

特徴　調査区東側の段丘縁辺で検出された焼土である。近接してLF-145,184が位置している。遺物は散点的な出土状況で、Ⅳ群b・c類土器が出土している。また、周辺の同レベルからは多数のⅣ群c類土器が出土している。

遺物　4652はⅣ群c類の深鉢形土器口縁部である。

時期　遺物から縄文時代後期中～後葉と考えられる。(皆川洋一)

LF-144（図Ⅳ-100）

位置：W0-301-d　規模：0.74×0.52／×／0.14m

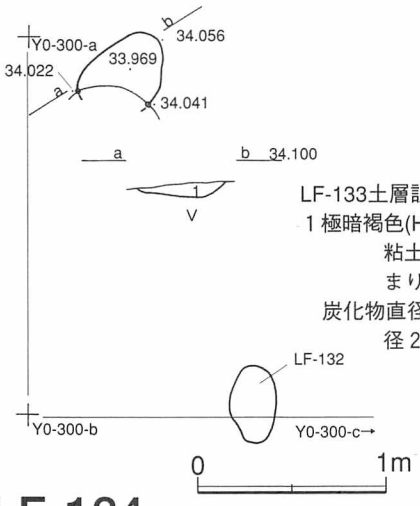
長軸方向：N-71°-W

特徴　Ⅴ層上面で確認した。覆土上部と下部が撹乱されている。覆土上部の撹乱はⅢ・Ⅳ層及び炭化物が混ざっていた。南西側にLF-145が隣接する。覆土はすべて採取して抽出作業を行った。スクレイパー、フレイク（黒曜石）、礫が出土している。

遺物　1はスクレイパー。左側縁には内湾した刃部、また右側縁には外湾～直線的な刃部をもつ。黒曜石製。

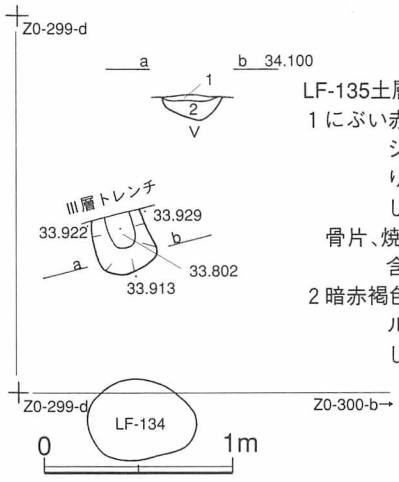
時期　周辺から出土した土器から、縄文時代後期末葉の可能性がある。(澤田　健)

LF-133



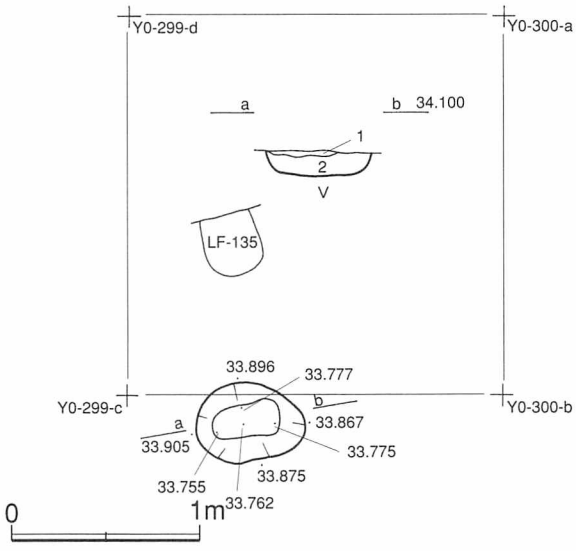
LF-133土層説明
1 極暗褐色(Hue5YR2/4)シルト質粘土。粘性あり。しまりあまりなし。V
炭化物直径 2 ～ 5 ㎜、焼土粒直径 2 ～ 5 ㎜含む。

LF-135

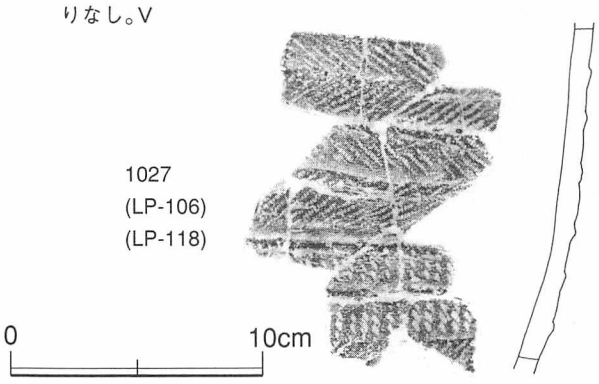


LF-135土層説明
1 にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V
骨片、焼土粒直径 2 ～ 4 ㎜含む。
2 暗赤褐色(Hue2.5YR3/6)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V

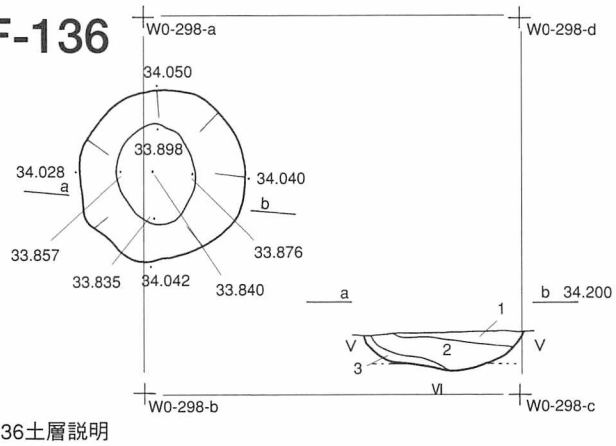
LF-134



LF-134土層説明
1 極暗赤褐色(Hue5YR2/3)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V
焼土粒直径 1 ～ 2 ㎜含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR4/6)シルト。粘性あり。しまりなし。V



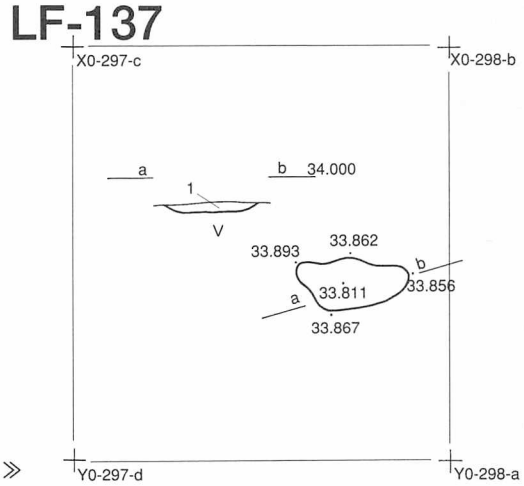
LF-136



LF-136土層説明
1 極暗赤褐色(Hue5YR2/3)砂質シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V≫Ⅵ
炭化物、焼土粒直径 2 ～ 4 ㎜含む。
2 明赤褐色(Hue2.5YR5/8)粘土質シルト。粘性あり。しまりあまりなし。V
3 暗赤褐色(Hue5YR3/4)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V
焼土粒直径 5 ～ 8 ㎜含む。

0　1m

LF-137



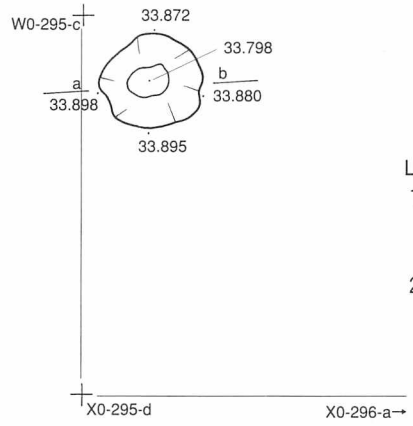
LF-137土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/6)粘土質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V
骨片、焼土粒直径 1 ～ 2 ㎜含む。

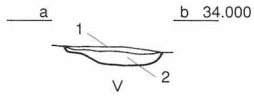
0　1m

図Ⅳ-97　V層の焼土（19）

LF-145（図Ⅳ-100）
位置：W0-301-d　規模：0.34×0.26／×／0.12m
長軸方向：N-72°-W
特徴　Ⅴ層上面で確認した。還元によるものか、下位の覆土は上位に比べて赤色の色調が薄い。
遺物　掲載遺物なし
時期　周辺から出土した土器から、縄文時代後期末葉の可能性がある。（澤田　健）
LF-149（図Ⅳ-100）
位置：V0-300-b　規模：（0.36）×（0.47）／×／0.08m
長軸方向：N-39°-E
特徴　Ⅴ層を15cm程掘り下げたところで確認した。北側の調査範囲外にのびていくため、全体の形状は把握できていない。
遺物　掲載遺物なし
時期　周辺から出土した土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）
LF-150（図Ⅳ-100）
位置：Y0-300-c　Y0-301-a Y0-301-b　規模：0.46×0.24／×／0.10m
長軸方向：N-53°-W
特徴　TP-103の半裁調査中に覆土上部で確認した。調査中に認識できなかったため、セクションラインに沿って南側を欠失している。TP-103の埋積過程の窪み中に形成されたものである。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明（澤田　健）
LF-153（図Ⅳ-101）
位置：X0-300-d　規模：0.30×0.30／×／0.11m
長軸方向：N-9°-E
特徴　Ⅴ層を15cm程掘り下げたところで確認した。南東側におよそ90cm程離れた位置にLF-154が隣接する。
遺物　掲載遺物なし
時期　周辺から出土した土器から、縄文時代中期中葉～後期中葉と思われる。（澤田　健）
LF-154（図Ⅳ-101）
位置：Y0-300-d　規模：0.20×0.19／×／0.03m
長軸方向：N-49°-E
特徴　Ⅴ層を15cm程掘り下げたところで確認した。約20cm大の規模の小さいものである。北西側におよそ90cm程離れた位置にLF-154が隣接する。
遺物　掲載遺物なし
時期　周辺から出土した土器から、縄文時代中期中葉～後期中葉と思われる。（澤田　健）
LF-155（図Ⅳ-101）
位置：W0-300-c　規模：0.24×0.23／×／0.04m
長軸方向：N-29°-W
特徴　Ⅴ層を15cm程掘り下げたところで確認した。20cm大程の規模の小さいものである。
遺物　掲載遺物なし
時期　周辺から出土した土器から、縄文時代中期中葉～後期中葉と思われる。（澤田　健）

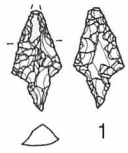
LF-138

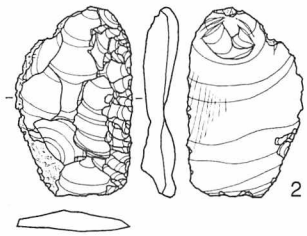


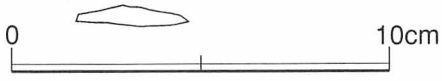


LF-138土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/4)シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。V
骨片、炭化物直径 5 ㎜程度、焼土粒直径 5 ㎜程度含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V

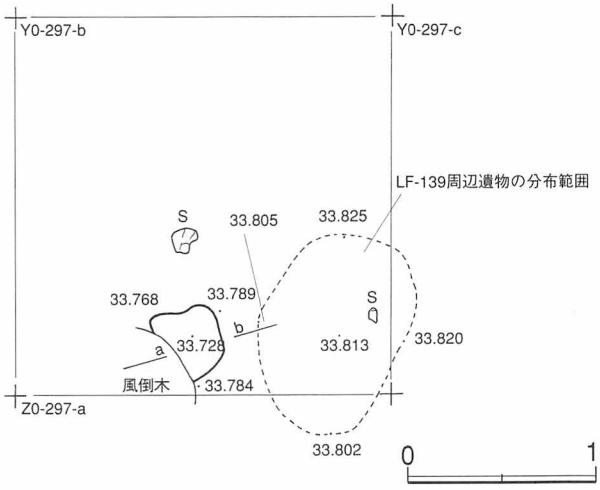


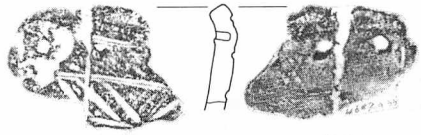


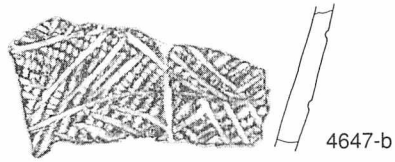


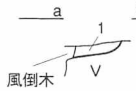


LF-139

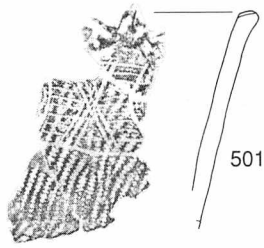


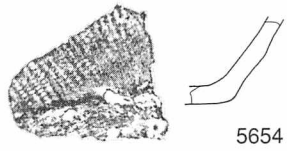




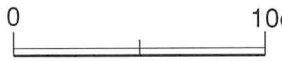


LF-139土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりなし。V
焼土粒直径0.5～1 ㎜含む。



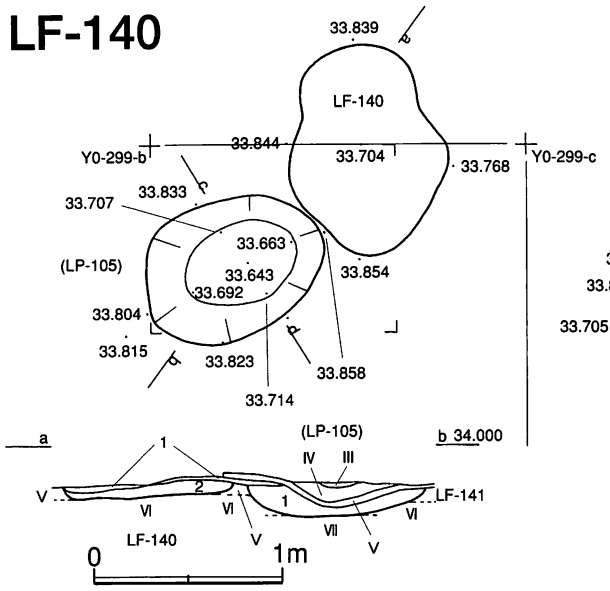






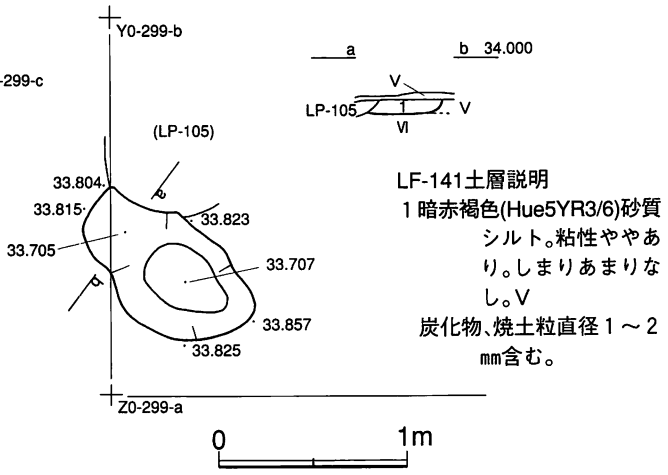
図Ⅳ-98　V層の焼土（20）

LF-140



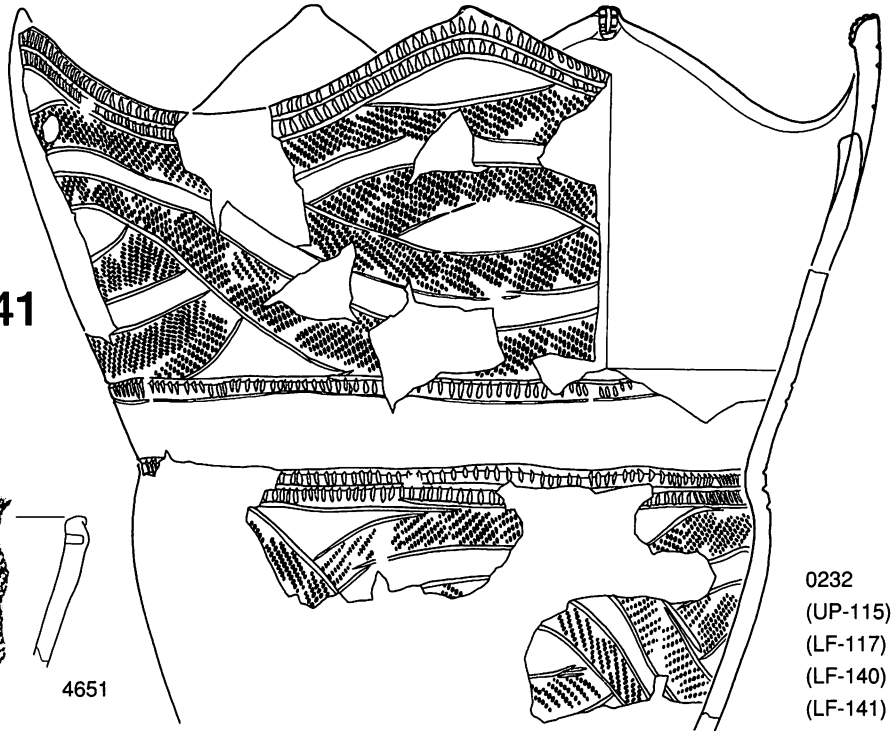
LF-140土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/6)
シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
炭化物、焼土粒直径1～2㎜含む。

LF-141



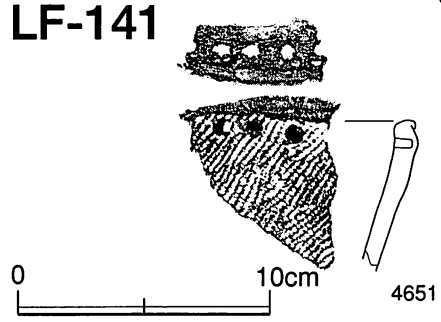
LF-141土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/6)砂質シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V
炭化物、焼土粒直径1～2㎜含む。

LF-140,141



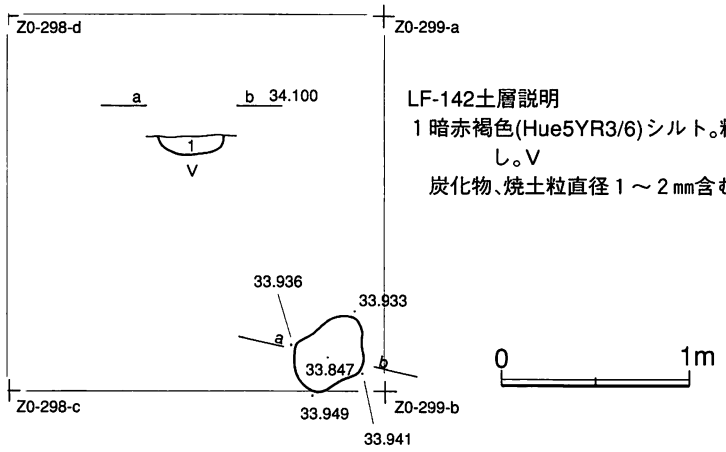
0232
(UP-115)
(LF-117)
(LF-140)
(LF-141)

LF-141



4651

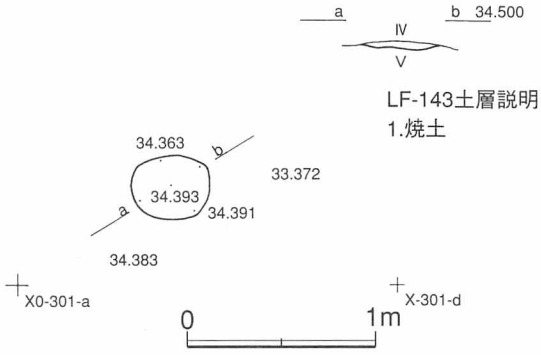
LF-142

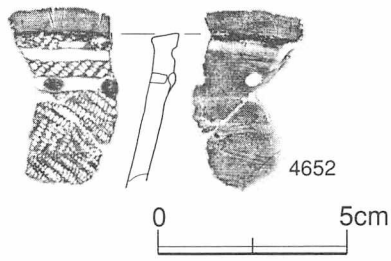


LF-142土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/6)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V
炭化物、焼土粒直径1～2㎜含む。

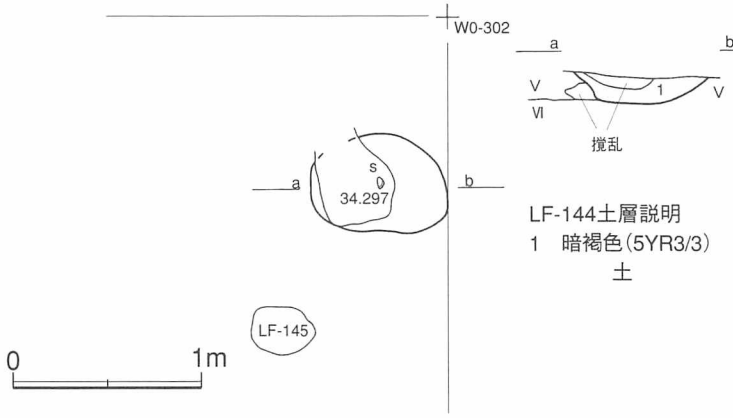
図Ⅳ-99 V層の焼土（21）

LF-143

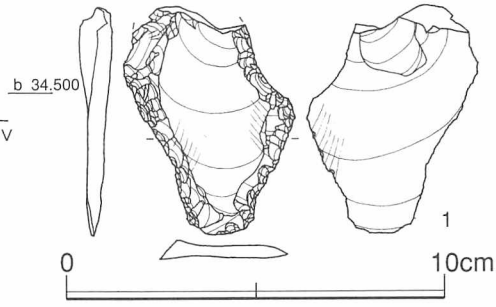




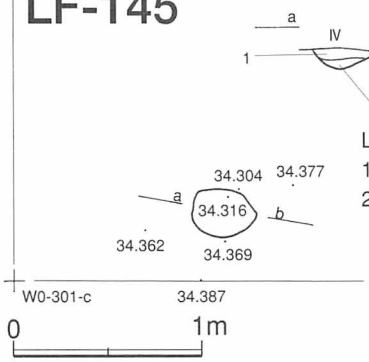
LF-144



LF-144土層説明
1　暗褐色(5YR3/3)土

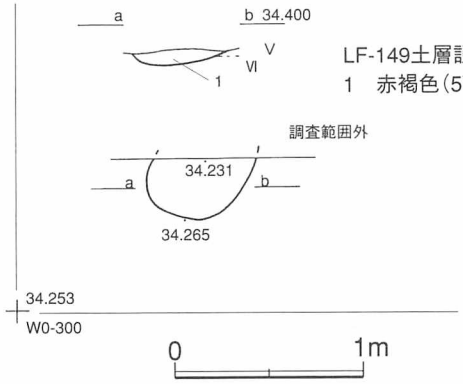


LF-145



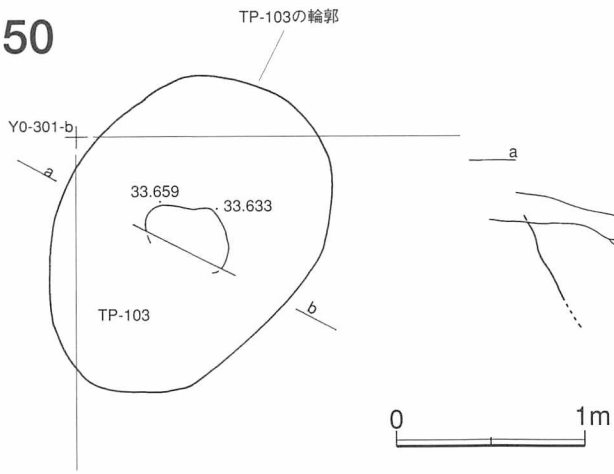
LF-145土層説明
1　暗赤褐色(5YR3/4)土
2　極暗褐色(7.5YR2/3)土

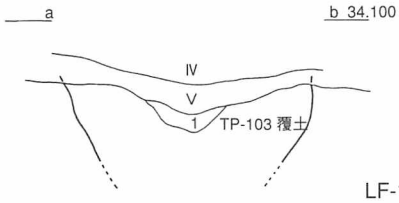
LF-149



LF-149土層説明
1　赤褐色(5YR4/8)土

LF-150

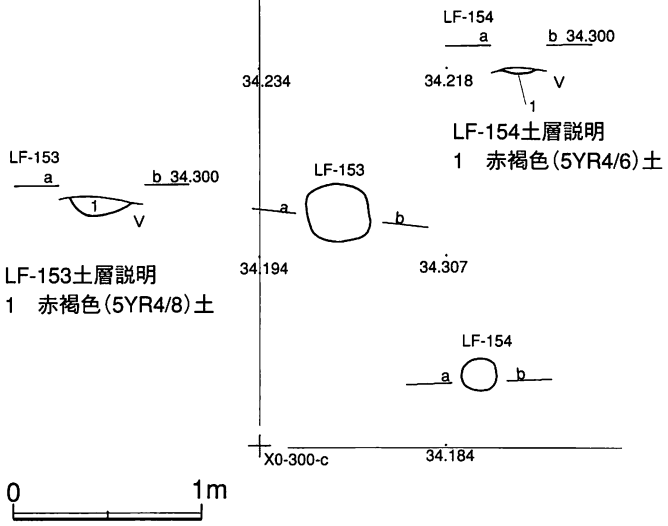




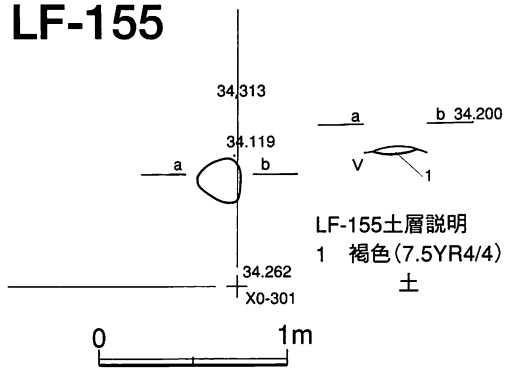
LF-150土層説明
1　赤褐色(5YR4/6)土

図Ⅳ-100　Ⅴ層の焼土（22）

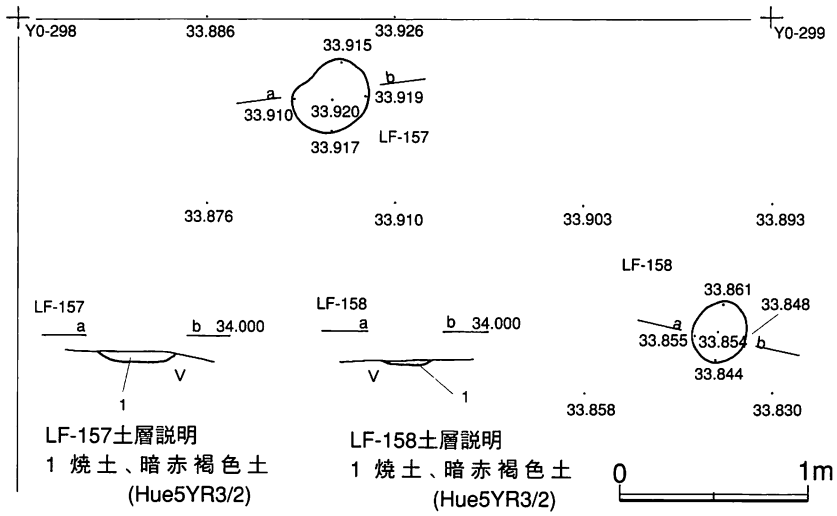
LF-153,154



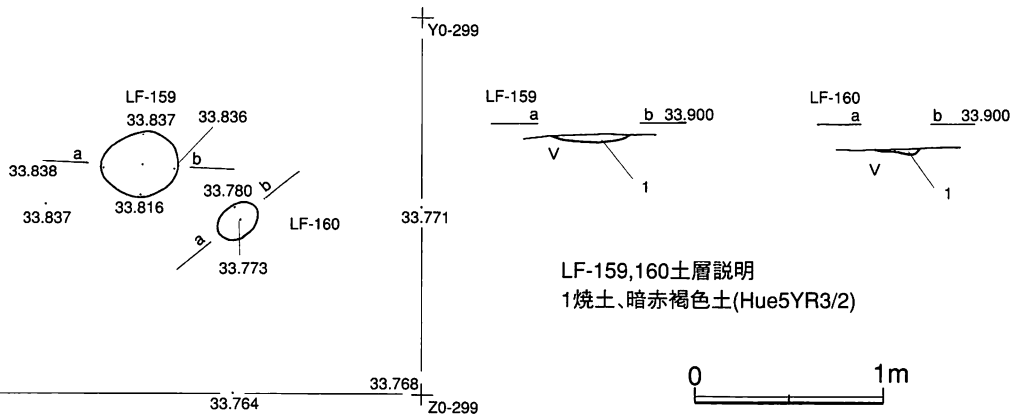
LF-155



LF-157,158



LF-159,160



図Ⅳ-101 Ⅴ層の焼土 (23)

LF-157（図Ⅳ-101）
位置：Y0-298-a　規模：0.42 × 0.33 ／×／ 0.06m
特徴　Ⅴ層を約 10 ㎝程掘り下げた際に確認した。周辺には LF-158 がある。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明である。あるいは検出された層位および周辺の遺物から縄文時代後期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-158（図 Ⅳ-101）
位置：Y0-298-d　規模：0.33 × 0.29 ／×／ 0.02m
特徴　Ⅴ層を約 10 ㎝程掘り下げたさいに確認した。非常に薄く散漫な焼土である。周辺には LF-157 がある。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明である。あるいは検出された層位および周辺の遺物から縄文時代後期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-159（図 Ⅳ-101）
位置：Y0-298-c　規模：0.41 × 0.35 ／×／ 0.04m
特徴　Ⅴ層を約 15 ㎝程掘り下げたさいに確認した。すぐそばに LF-160 がある。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明である。あるいは検出された層位および周辺の遺物から縄文時代後期中葉もしくは末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

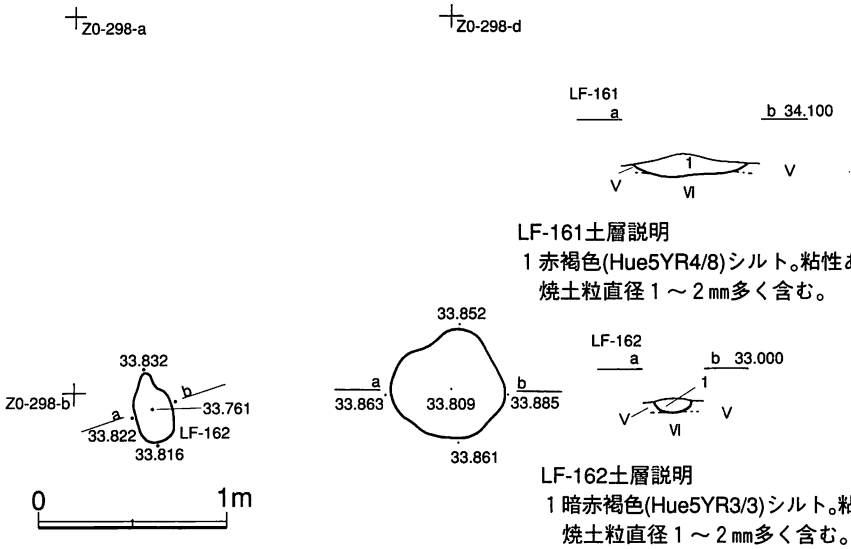
LF-160（図Ⅳ-101）
位置：Y0-298-c　規模：0.24 × 0.18 ／×／ 0.03m
特徴　Ⅴ層を約 15 ㎝程掘り下げたさいに確認した。非常に薄く散漫な焼土である。すぐ近くに LF-159 がある。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明である。あるいは検出された層位および周辺の遺物から縄文時代後期中葉もしくは末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-161（図 Ⅳ-102）
位置：Z0-298-a　Z0-298-d　規模：0.61 × 0.57 ／×／ 0.12m
特徴　Ⅴ層下位で LF-161 ～ 162 のまとまりで確認した。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明であるが、周囲の遺物から縄文時代中期初頭から晩期の遺構の可能性が考えられる。（佐藤剛）

LF-162（図 Ⅳ-102）
位置：Z0-298-b　規模：0.37 × 0.20 ／×／ 0.07m
特徴　Ⅴ層下位で LF-161 ～ 162 のまとまりで確認した。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明であるが、周囲の遺物から縄文時代中期初頭から晩期の遺構の可能性が考えられる。（佐藤剛）

LF-163（図Ⅳ-102）
位置：Z0-298-d　規模：0.48 × 0.36 ／×／ 0.07m

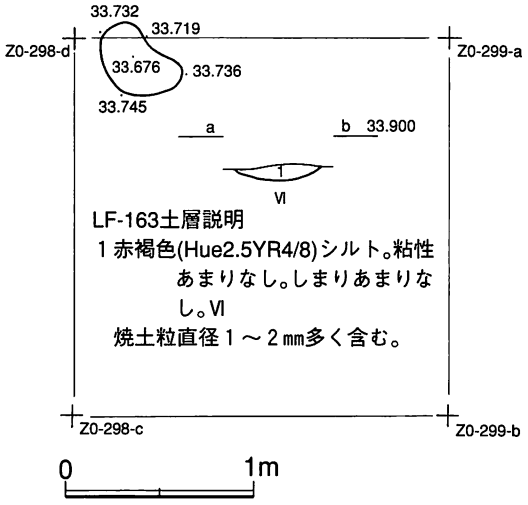
LF-161,162



LF-161土層説明
1 赤褐色(Hue5YR4/8)シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。V≫VI
焼土粒直径1～2㎜多く含む。

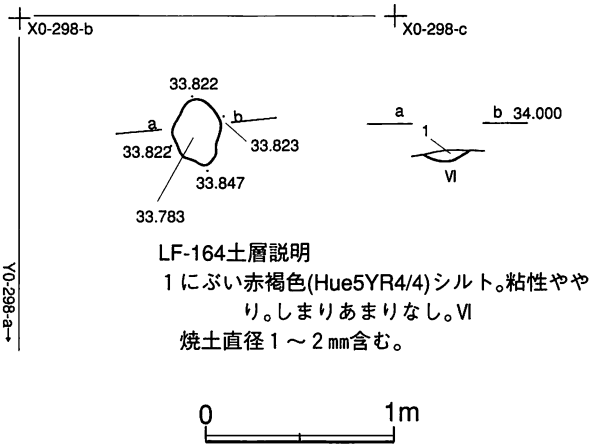
LF-162土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/3)シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。V
焼土粒直径1～2㎜多く含む。

LF-163



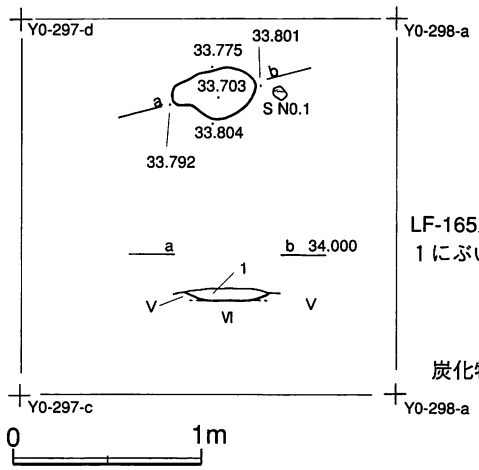
LF-163土層説明
1 赤褐色(Hue2.5YR4/8)シルト。粘性あまりなし。しまりあまりなし。VI
焼土粒直径1～2㎜多く含む。

LF-164



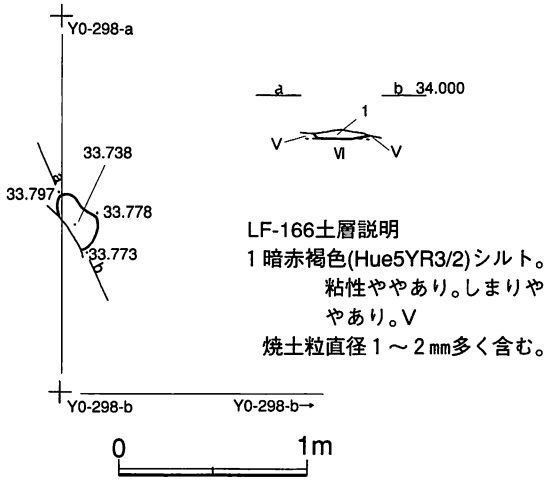
LF-164土層説明
1 にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。VI
焼土直径1～2㎜含む。

LF-165



LF-165土層説明
1 にぶい赤褐色(Hue5YR4/4)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V
炭化物直径5㎜程度、焼土粒直径2～3㎜多く含む。

LF-166



LF-166土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/2)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。V
焼土粒直径1～2㎜多く含む。

図Ⅳ-102 V層の焼土 (24)

特徴　Ⅵ層上面で確認した。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明であるが、周囲の遺物から縄文時代中期初頭から晩期の遺構の可能性が考えられる。（佐藤　剛）

LF-164（図Ⅳ-102）
位置：X0-298-b　規模：0.34×0.24／×／0.06m
特徴　Ⅵ層上面で確認した。近くにはLF-137があるが関係は不明である。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期末葉の遺構の可能性が考えられる。（佐藤　剛）

LF-165（図Ⅳ-102）
位置：Y0-297-d　規模：0.45×0.27／×／0.10m
特徴　Ⅴ層下位でLF-165～167のまとまりで確認した。
遺物　掲載遺物なし
時期　周囲の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-166（図Ⅳ-102）
位置：Y0-298-a　規模：0.21×(0.16)／×／0.06m
特徴　Ⅴ層下位でLF-165～167のまとまりで確認した。
遺物　掲載遺物なし
時期　周囲の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

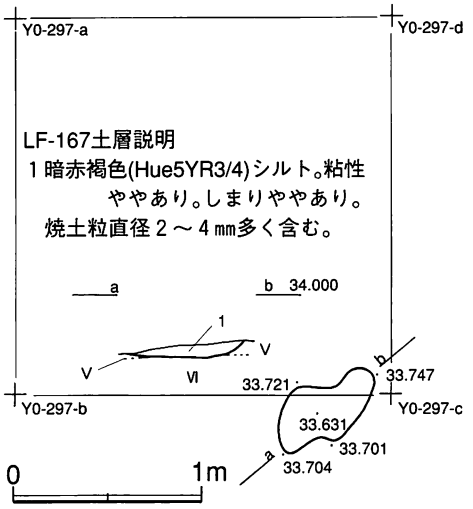
LF-167（図Ⅳ-103）
位置：Y0-297-b　規模：0.62×0.37／×／0.12m
特徴　Ⅴ層下位でLF-165～167のまとまりで確認した。
遺物　掲載遺物なし
時期　周囲の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-168（図Ⅳ-103）
位置：W0-296-d　規模：0.52×0.30／×／0.08m
特徴　Ⅴ層下位でLF-168～170のまとまりで確認した。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-169（図Ⅳ-103）
位置：V0-297-b　規模：(0.49)×(0.16)／×／0.10m
特徴　Ⅴ層下位でLF-168～170のまとまりで確認した。
遺物　掲載遺物なし
時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

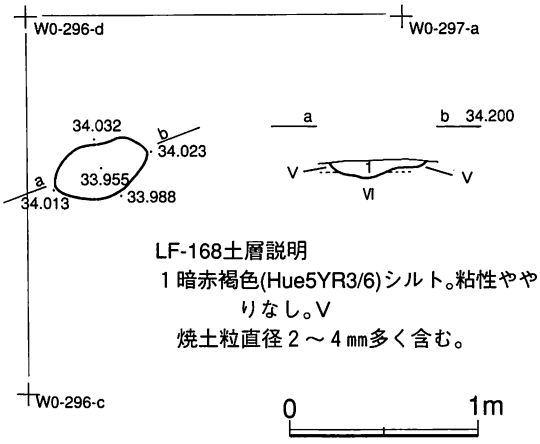
LF-170（図Ⅳ-103）
位置：V0-296-c　V0-297-b　規模：0.44×0.33／×／0.09m
特徴　Ⅴ層下位でLF-168～170のまとまりで確認した。

LF-167



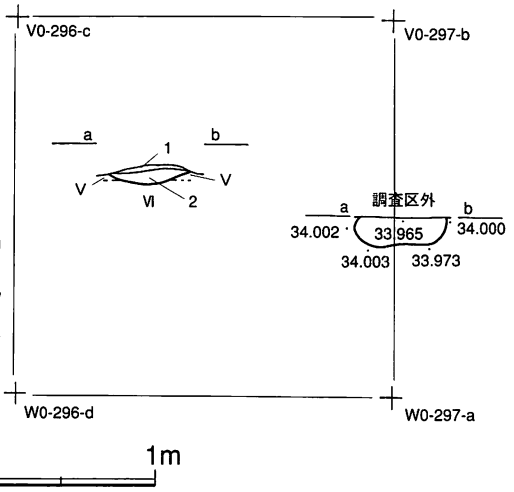
LF-167土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/4)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。
焼土粒直径 2 ～ 4 ㎜多く含む。

LF-168



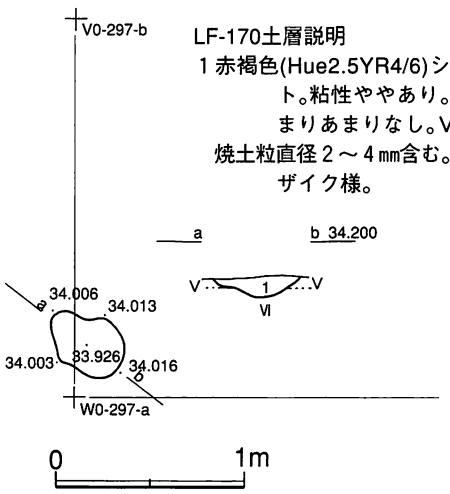
LF-168土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/6)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V
焼土粒直径 2 ～ 4 ㎜多く含む。

LF-169



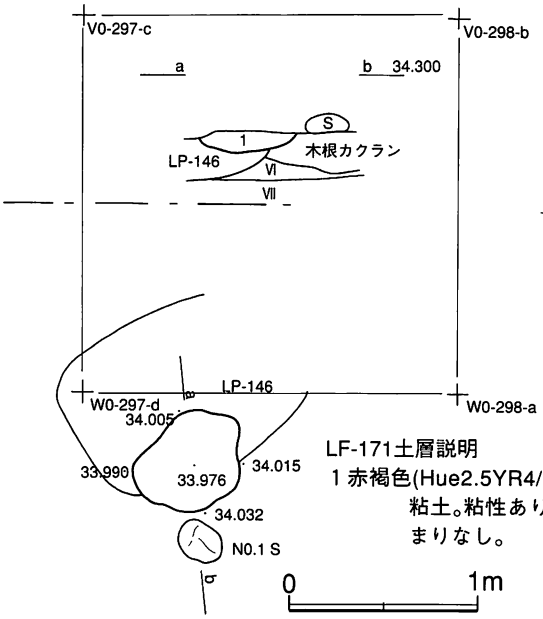
LF-169土層説明
1 黒褐色(Hue5YR3/1)シルト。粘性あり。しまりあまりなし。V
焼土粒直径 2 ～ 5 ㎜含む。
2 暗赤褐色(Hue5YR3/4)シルト。粘性あり。しまりややあり。V
モザイク様。

LF-170



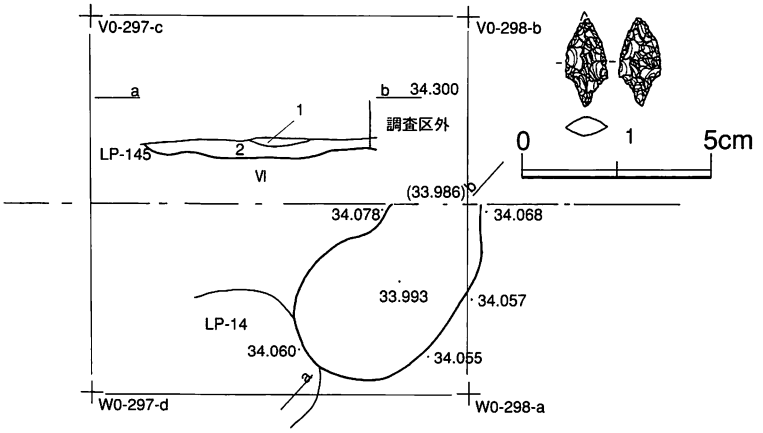
LF-170土層説明
1 赤褐色(Hue2.5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V
焼土粒直径 2 ～ 4 ㎜含む。モザイク様。

LF-171



LF-171土層説明
1 赤褐色(Hue2.5YR4/6)シルト質粘土。粘性あり。しまりあまりなし。

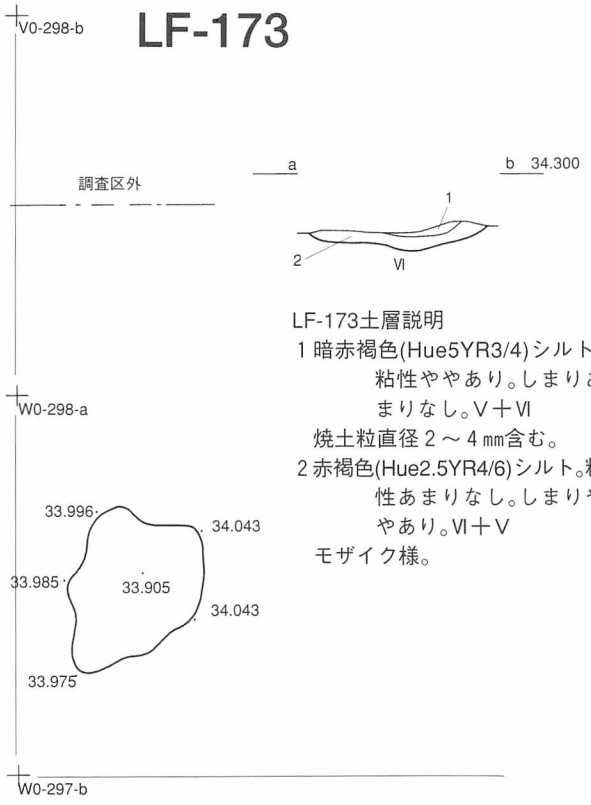
LF-172



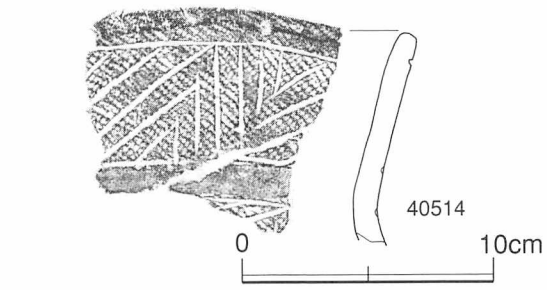
LF-172土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/4)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。V＋VI
焼土粒直径 2 ～ 4 ㎜含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR4/6)シルト。粘性ややあり。しまりややあり。VI＋V
モザイク様。

図Ⅳ-103 V層の焼土（25）

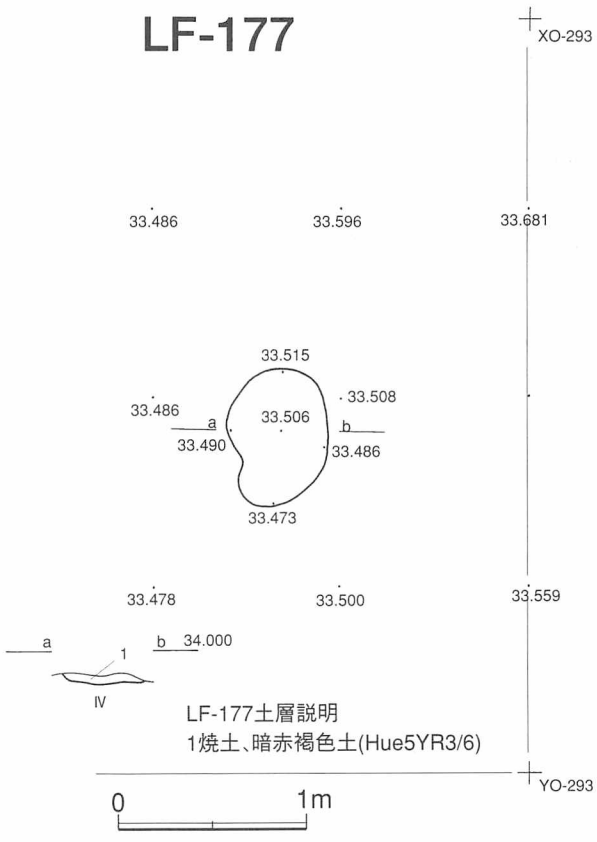
LF-173



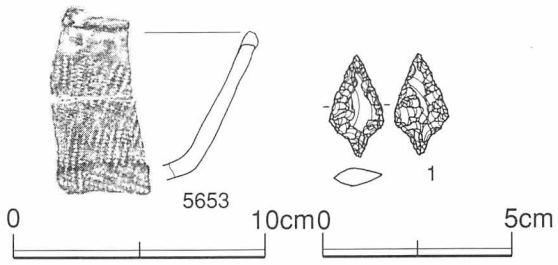
LF-173土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/4)シルト。粘性ややあり。しまりあまりなし。Ⅴ＋Ⅵ
焼土粒直径２～４㎜含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR4/6)シルト。粘性あまりなし。しまりややあり。Ⅵ＋Ⅴ
モザイク様。



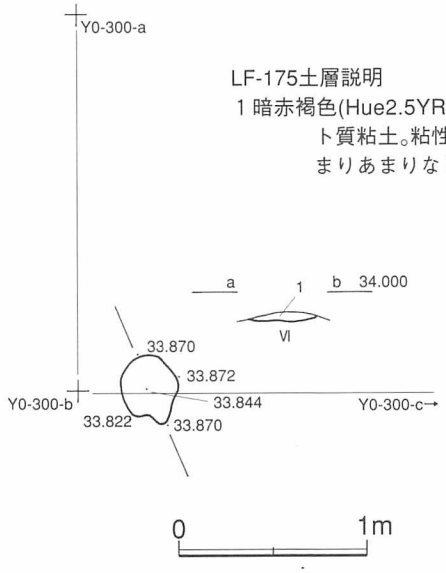
LF-177



LF-177土層説明
1焼土、暗赤褐色土(Hue5YR3/6)

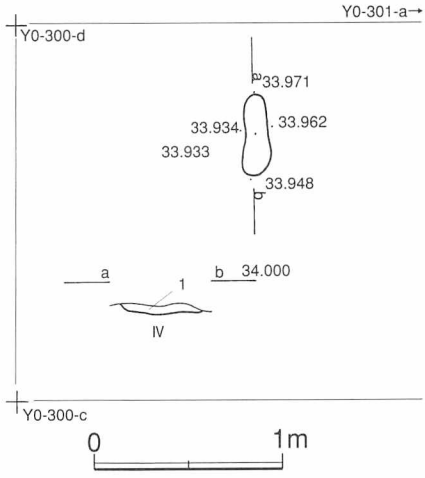


LF-175



LF-175土層説明
1 暗赤褐色(Hue2.5YR3/6)シルト質粘土。粘性あり。しまりあまりなし。Ⅵ

LF-176



LF-176土層説明
1 暗赤褐色(Hue2.5YR3/2)シルト質粘土。粘性あり。しまりややあり。Ⅵ

図Ⅳ-104　Ⅴ層の焼土（26）

5　焼土

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-171（図Ⅳ-103）

位置：W0-297-d　規模：0.64×0.50／×／0.06m

特徴　Ⅵ層上面でLF-171～173のまとまりで確認した。すぐ近くには大型の礫があったが遺構に伴うかは不明である。Ⅴ層下位の遺構の可能性がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物から縄文時代後期中葉から末葉の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-172（図Ⅳ-103／図版-126～130）

位置：V0-297-c　規模：1.22×0.74／×／0.09m

特徴　Ⅵ層上面でLF-171～173のまとまりで確認した。Ⅴ層下位の遺構の可能性がある。

遺物　1は有茎凸基の石鏃。黒曜石製。

時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-173（図Ⅳ-104／図版-41～68）

位置：W0-298-a　規模：0.96×0.72／×／0.15m

特徴　Ⅵ層上面でLF-171～173のまとまりで確認した。Ⅴ層下位の遺構の可能性がある。

遺物　40514はⅣ群b類ウサクマイC式の深鉢形土器口縁部である。

時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が高いと考えられる。（佐藤　剛）

LF-175（図Ⅳ-104）

位置：Y0-300-b　規模：0.37×0.31／×／0.09m

特徴　Ⅵ層上面でLF-175～176のまとまりで確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期中葉から末葉の遺構の可能性が考えられる。（佐藤　剛）

LF-176（図Ⅳ-104）

位置：Y0-300-d　規模：0.42×0.16／×／0.05m

特徴　Ⅵ層上面でLF-175～176のまとまりで確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期中葉から末葉の遺構の可能性が考えられる。（佐藤　剛）

LF-177（図Ⅳ-104／図版-79～106，126～130）

位置：X0-292-c　X0-292-d　規模：0.73×0.54／×／0.10m

特徴　Ta-cを除去したさいに確認した。焼土中には炭化物が混じっている。

遺物　5653はⅤ群c類の鉢形もしくは浅鉢形土器の口縁～底部である。1は有茎凸基の石鏃。黒曜石製。

時期　検出された層位および焼土中・周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-178（図Ⅳ-105）

位置：X0-293-d　X0-293-c　規模：0.43×0.38／×／0.04m

特徴　Ta-cを除去したさいに確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および焼土中・周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-179（図Ⅳ-105）

位置：Y0-293-a　規模：0.63×0.58／×／0.11m

特徴　Ta-cを除去したさいに確認した。焼土中には肉眼でもわかるほど獣骨が多く混じっていた。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および焼土中・周辺の遺物から、縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-180（図Ⅳ-105）

位置：C-288-a　規模：0.65×0.37／×／0.05m

特徴　Ta-cを除去したさいに確認した。周辺にはLF-181・182がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および焼土中・周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-181（図Ⅳ-105）

位置：C-288-d　規模：0.61×0.56／×／0.08m

特徴　Ta-cを除去したさいに確認した。周辺にはLF-180・182がある。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および周辺の遺物から、縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-182（図Ⅳ-105／図版-79～106）

位置：C-288-a　規模：0.54×0.46／×／(0.09)m

特徴　Ta-cを除去したさいに確認した。周辺にはLF-180・181がある。

遺物　5655は鉢形と考えられるⅤ群c類土器である。

時期　検出された層位および焼土中・周辺の遺物から、縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-183（図Ⅳ-106）

位置：A-292-b　A-292-c　規模：0.54×0.48／×／0.12m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。やや厚い焼土であり、掘込みを持つかと推測できる。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および焼土中・周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-184（図Ⅳ-106）

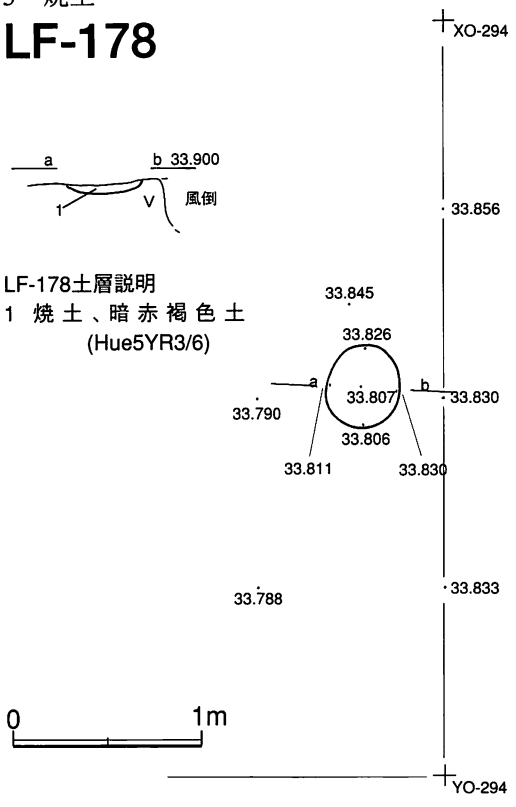
位置：X0-300-d　X0-301-a　規模：（0.36）×（0.16）／×／（0.05）m

長軸方向：N-62°-W

特徴　Ⅵ層上面で確認した。UP-104に南側を切られているため、全体の形状は不明である。

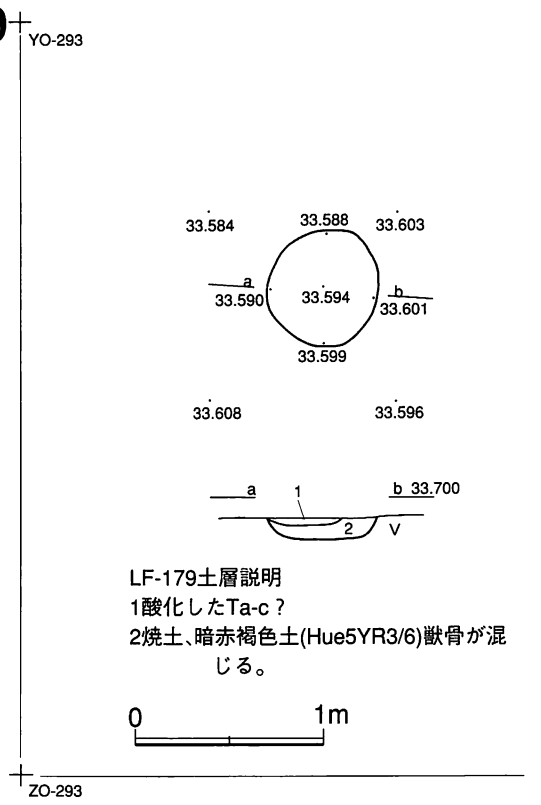
遺物　掲載遺物なし

LF-178



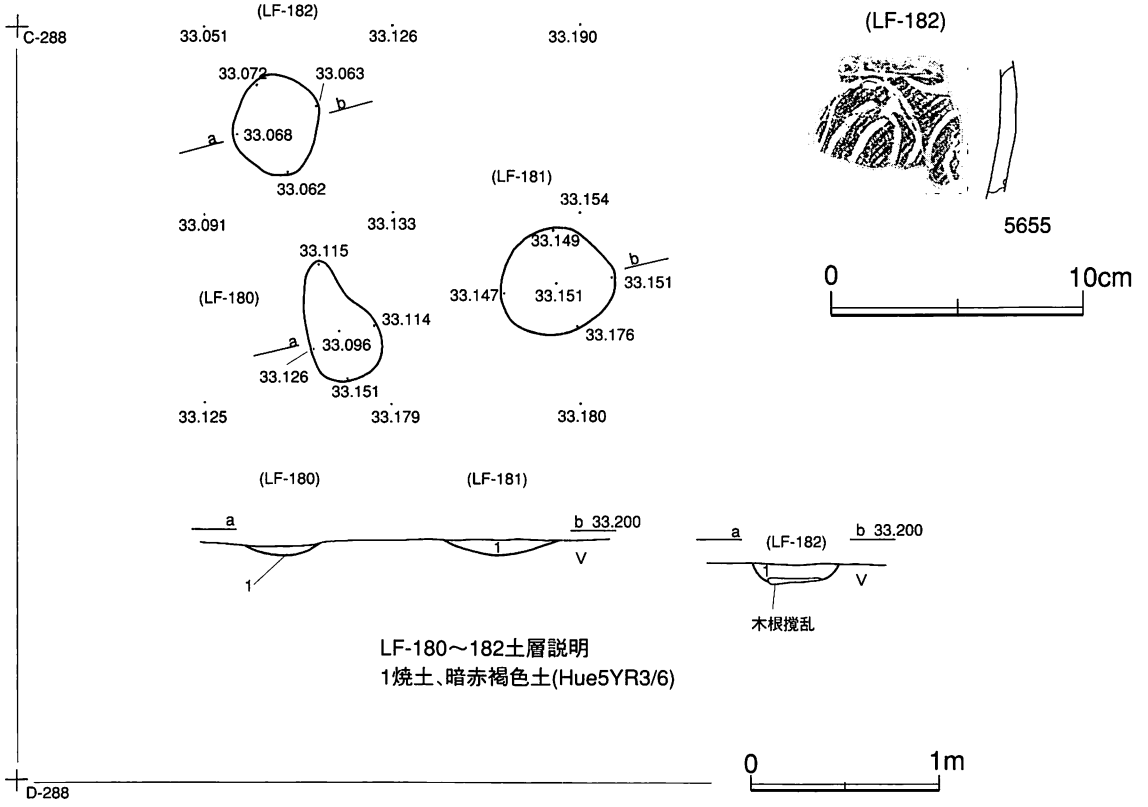
LF-178土層説明
1 焼土、暗赤褐色土
(Hue5YR3/6)

LF-179



LF-179土層説明
1酸化したTa-c？
2焼土、暗赤褐色土(Hue5YR3/6)獣骨が混じる。

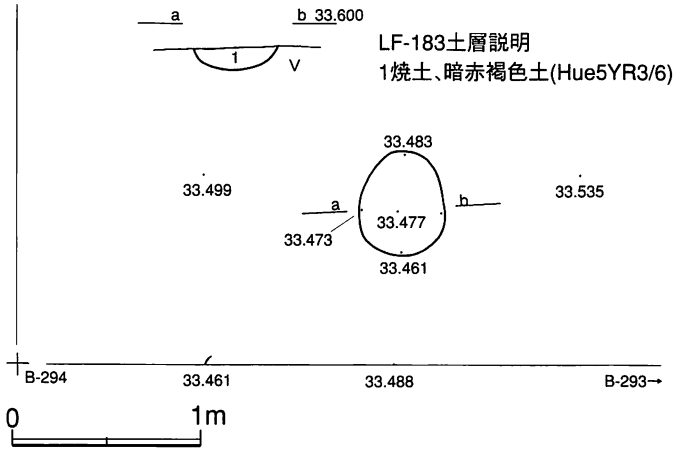
LF-180～182



LF-180～182土層説明
1焼土、暗赤褐色土(Hue5YR3/6)

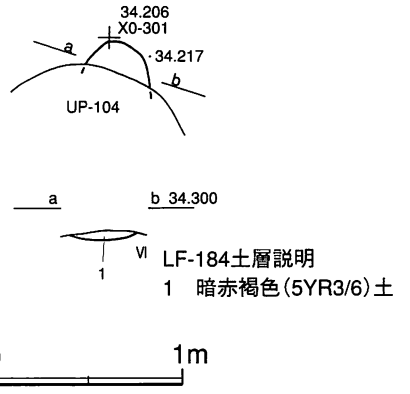
図Ⅳ-105 V層の焼土（27）

LF-183



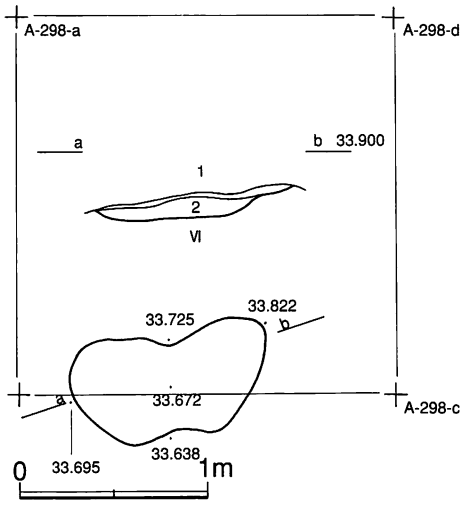
LF-183土層説明
1焼土、暗赤褐色土(Hue5YR3/6)

LF-184



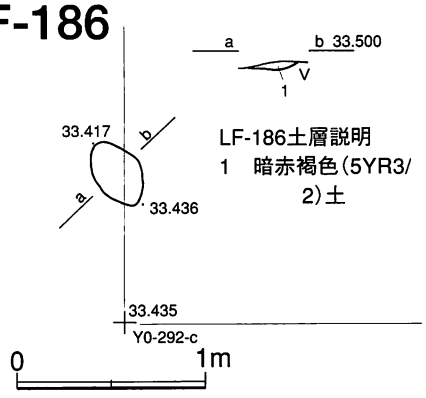
LF-184土層説明
1　暗赤褐色(5YR3/6)土

LF-185



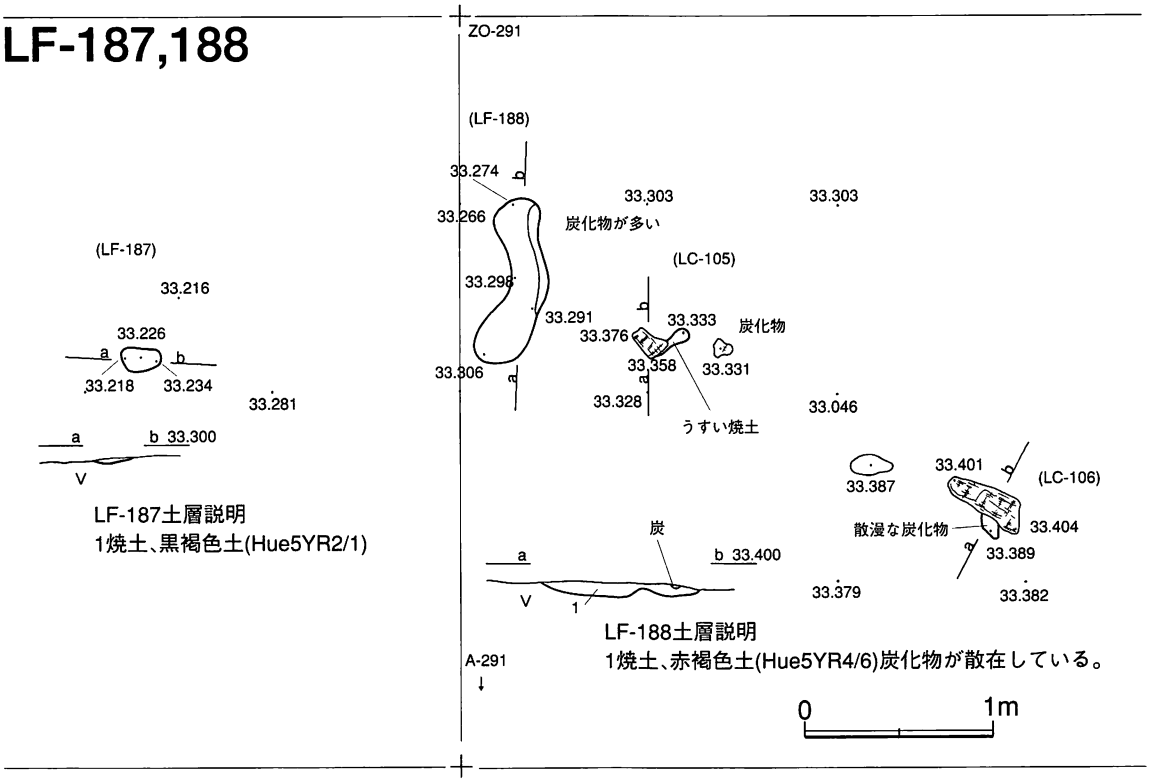
LF-185土層説明
1 暗赤褐色(Hue5YR3/6)粘土質シルト。粘性あり。しまりあまりなし。Ⅵ
焼土粒非常に多く含む。
2 赤褐色(Hue2.5YR4/6)シルト。粘性あり。しまりあまりなし。Ⅵ

LF-186



LF-186土層説明
1　暗赤褐色(5YR3/2)土

LF-187,188



LF-187土層説明
1焼土、黒褐色土(Hue5YR2/1)

LF-188土層説明
1焼土、赤褐色土(Hue5YR4/6)炭化物が散在している。

図Ⅳ-106　V層の焼土（28）

5　焼土

時期　周辺から出土した土器および検出された層位から、縄文時代中期中葉の可能性がある。(澤田健)

LF-185（図Ⅳ-106）

位置：A-298-a　規模：1.05×0.67／×／0.15m

特徴　Ⅵ層上面で確認した。焼土粒の残りがよかった。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期中葉の遺構の可能性が考えられる。(佐藤剛)

LF-186（図Ⅳ-106）

位置：Y0-292-a　Y0-292-d　規模：0.38×0.24／×／0.04m

長軸方向：N-27°-W

特徴　Ⅴ層を5cm程掘り下げたところで確認した。平面の形状は不整な楕円形である。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土した土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。(澤田　健)

LF-187（図Ⅳ-106）

位置：Z0-290-d　規模：0.21×0.12／×／0.03m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。不明瞭で散漫な焼土である。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。(藤原秀樹)

LF-188（図Ⅳ-106）

位置：Z0-291-a　規模：0.90×0.26／×／0.08m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。東半には炭化物が集中していた。断面から大きく2つの焼土に分けられる可能性も想定できる。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および焼土中・周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。(藤原秀樹)

LF-189（図Ⅳ-107）

位置：Y0-296-c　規模：0.43×0.31／×／0.06m

長軸方向：N-4.5°-E

特徴　調査区東側段丘上から検出された小規模な焼土である。Ⅴ層上面より約10㎝掘り込んだレベルで見つけたもので、赤化の度合いは弱い。遺物は伴わなかったが、周囲にはⅢ群b類土器の小片が出土しており、1m程東の上位レベルからは後期末葉と考えられる焼土が見つかっている。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物と土層レベルから縄文時代中期後半～後期末葉の可能性が高い。(皆川洋一)

LF-190（図Ⅳ-107）

位置：X0-293-c　X0-294-b　規模：0.34×0.26／×／0.07m

長軸方向：N-9°-E

特徴　Ⅴ層を5cm程掘り下げたところで確認した。平面の形状は不整な楕円形である。覆土下部から土器片が数点出土している。検出面周辺の土器よりも古いものであること及び出土したレベルから、本遺構が形成された時期の遺物とは考え難い。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺の遺物から、縄文時代後期中葉～末葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-191（図Ⅳ-107）

位置：X0-294-c　規模：0.43×0.24／×／0.14m

長軸方向：N-6°-E

特徴　Ⅴ層を10cm程掘り下げたところで確認した。平面の形状は南北に長い不整な楕円形である。覆土中には炭化物を含む。覆土の一部を採取して、抽出作業を行っている。覆土中から炭化物を抽出している。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺の遺物から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-192（図Ⅳ-107）

位置：Z0-296-a　規模：0.49×0.42／×／0.07m

長軸方向：N-86.0°-W

特徴　調査区東側段丘上のⅤ層上面より約5cm掘り込んだレベルで検出された小規模な焼土である。赤化の度合いは弱く遺物は伴なっていない。周囲の同レベルからはⅣ群b類土器が出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺物出土状況から縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

LF-193（図Ⅳ-107）

位置：X0-293-a　規模：0.48×0.38／×／0.09m

長軸方向：N-84°-W

特徴　Ⅴ層を15cm程掘り下げたところで確認した。東側2mにほど離れた位置にLF-195が近接する。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土した土器から、縄文時代中期の可能性がある。（澤田　健）

LF-194（図Ⅳ-108／図版-69～78，126～130）

位置：X0-292-a　規模：0.57×0.36／×／0.03m

長軸方向：N-3°-E

特徴　Ⅴ層を15cm程掘り下げたところで、2m四方の範囲に4基の焼土を確認した。焼土直上、覆土及び周辺から土器片、石鏃、礫が散在して出土している。LF-205以外は長軸方向がおよそ南北を向く。LF-205は最も規模が小さい。東側のLF-204、205と比較して、西側のLF-194、205は浅い堆積状況を示す。検出状況および遺物出土状況から、ほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

遺物　0085はⅣ群c類の深鉢形土器である。1は有茎凸基の石鏃。尖頭部側縁が内湾している。黒曜石製。

時期　覆土出土の土器及び周辺の遺物から、縄文時代後期末葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-195（図Ⅳ-107）

位置：X0-293-d　規模：0.33×0.30／×／0.05m

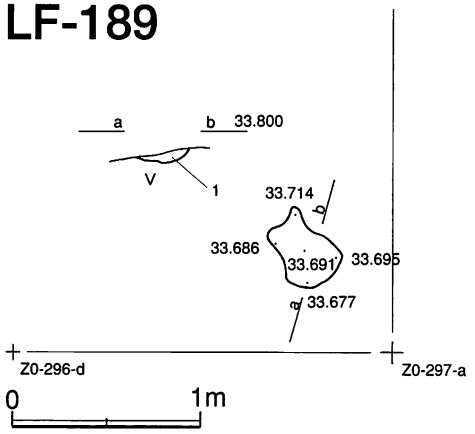
長軸方向：N-7°-W

特徴　Ⅴ層を15cm程掘り下げたところで確認した。西側に2mほど離れた位置にLF-193が近接する。

遺物　掲載遺物なし

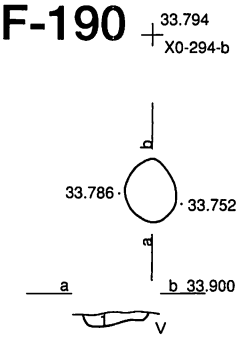
時期　周辺から出土した土器から、縄文時代中期中葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-189



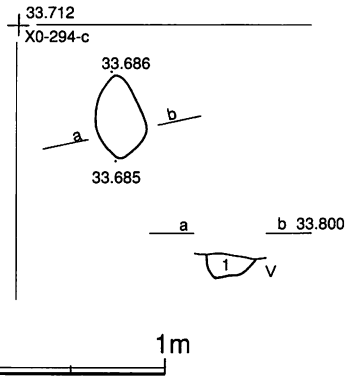
LF-189土層説明
1.焼土　にぶい赤褐(Hue5YR4/4)
*周辺にⅢbの遺物少々あり。

LF-190



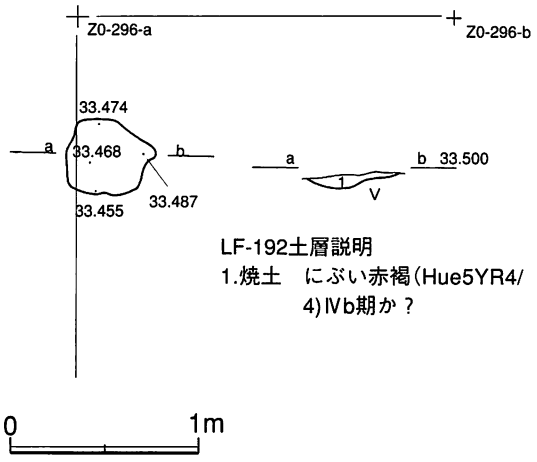
LF-190土層説明
1　暗褐色(7.5YR3/4)土

LF-191



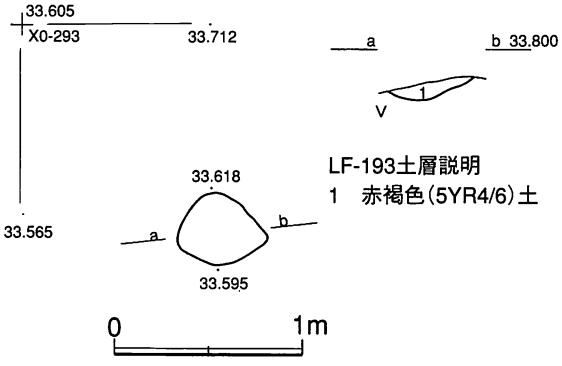
LF-191土層説明
1　赤褐色(5YR4/8)土　炭化物含む

LF-192



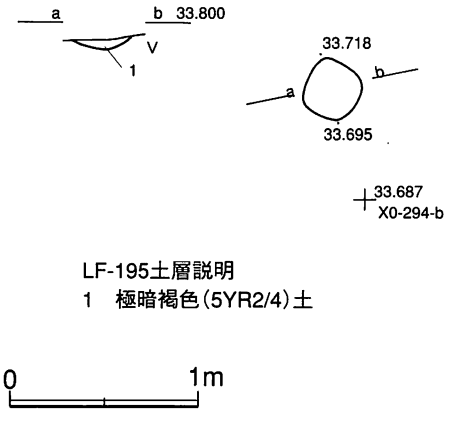
LF-192土層説明
1.焼土　にぶい赤褐(Hue5YR4/4)Ⅳb期か？

LF-193



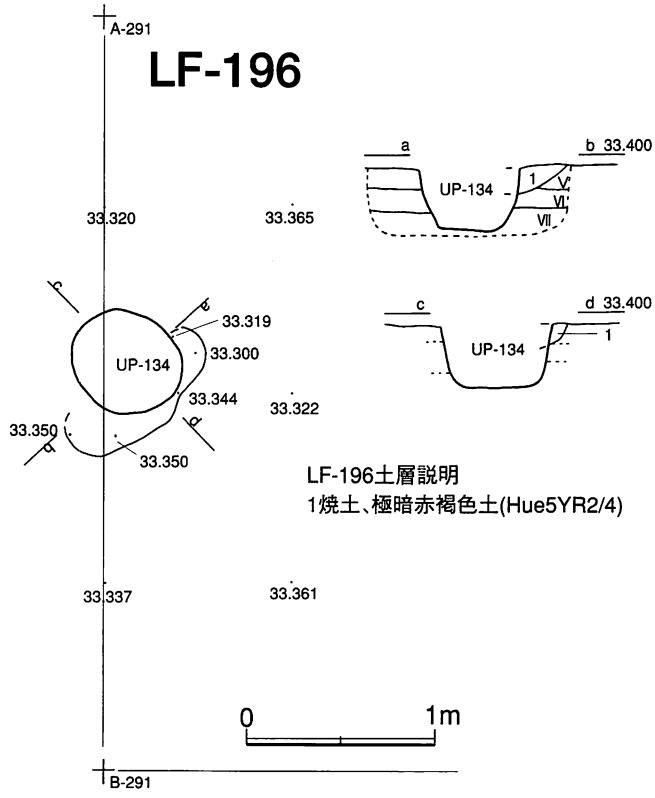
LF-193土層説明
1　赤褐色(5YR4/6)土

LF-195



LF-195土層説明
1　極暗褐色(5YR2/4)土

LF-196



LF-196土層説明
1焼土、極暗赤褐色土(Hue5YR2/4)

図Ⅳ-107　V層の焼土（29）

LF-196（図Ⅳ-107）

位置：A-290-c　A-291-a　A-291-b　規模：0.88×(0.34)／×／(0.13)m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。UP-134に切られている。厚い焼土で、掘込みを持つかと推測できる。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位、および周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-197（図Ⅳ-108）

位置：A-291-b　B-291-a　規模：0.38×0.31／×／0.08m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げた段階で薄い焼土の拡がりが見られた。更に掘り下げ、Ⅴ層を合せて約10cm程下げたさいに明瞭に確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　焼土中からは縄文時代後期末葉の土器が出土している。しかし掘込みを持つ焼土とは思われないため、検出された層位および周辺の遺物から推測して縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

LF-198（図Ⅳ-108）

位置：W-300-a　規模：0.30×0.24／×／0.03m

長軸方向：N-37°-E

特徴　Ⅵ層上面で確認した。平面の形状は楕円形を呈する。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土した土器から、縄文時代早期後葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-199（図Ⅳ-108／図版-27）

位置：B-292-a　規模：0.40×0.32／×／0.06m

長軸方向：N-2.0°-W

特徴　調査区東側段丘上のⅤ層上面で検出された小規模な焼土である。赤化の度合いは弱く遺物はⅤ群c類土器、フレイク、礫が焼土の範囲内から出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　伴う遺物と検出レベルから縄文時代晩期末葉と考えられる。（皆川洋一）

LF-200（図Ⅳ-109／図版-79～106）

位置：C-290-d　規模：0.37×0.31／×／0.06m

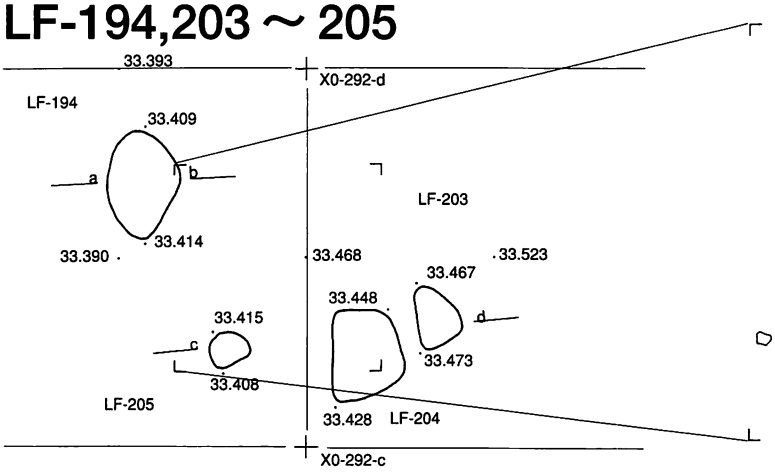
特徴　調査区東側段丘上のⅤ層上面で検出された焼土である。赤化の度合いが強く、長時間もしくは強い火力で生成されたと考えられる。遺物はⅤ群c類土器、石斧片、礫が範囲内から出土している。

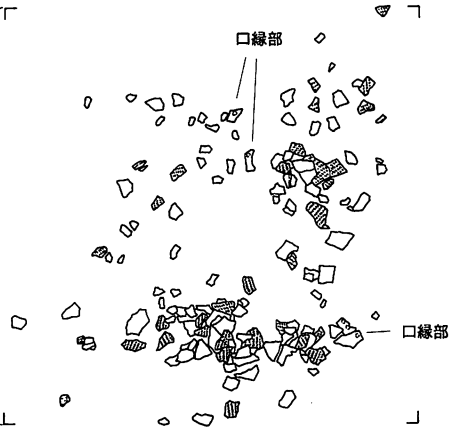
遺物　5656は凸部の上に撚糸が渦巻きの形に施されたⅤ群c類土器の装飾部である。器壁は薄く、焼成良好で硬質な胎土を有している。器形は不明である。

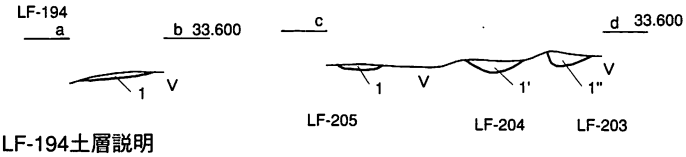
時期　伴うと考えられる遺物から縄文時代晩期末葉と考えられる。（皆川洋一）

5　焼土

LF-194,203～205





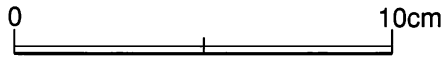


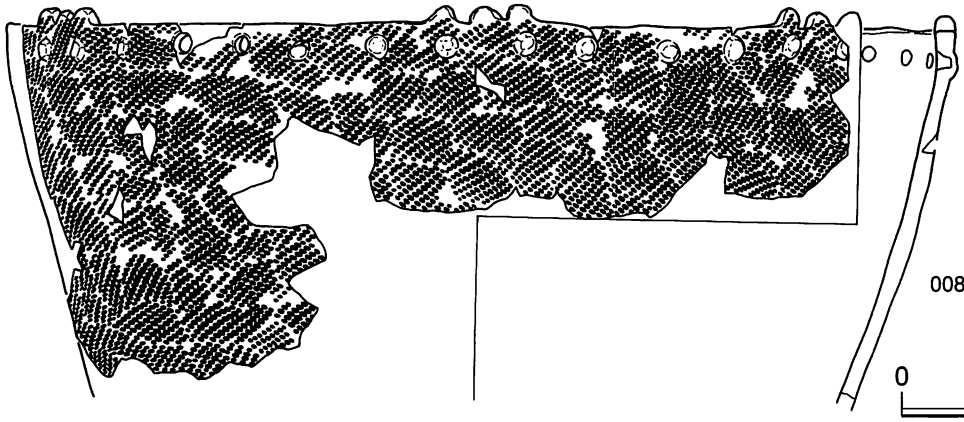
LF-194土層説明
1　褐色(7.5YR4/4)土

LF-203～205土層説明
1　暗褐色(7.5YR4/3)土

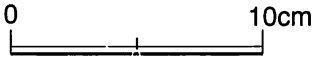


1
(LF203~205)

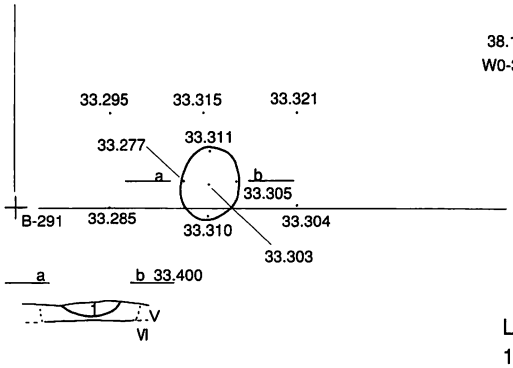




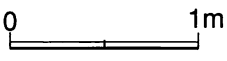
0085



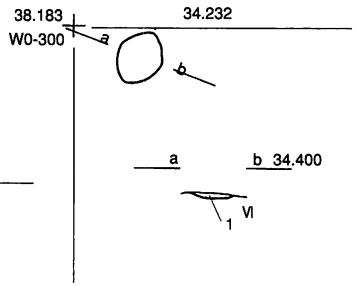
LF-197



LF-197土層説明
1焼土、暗赤褐色土(Hue5YR3/4)

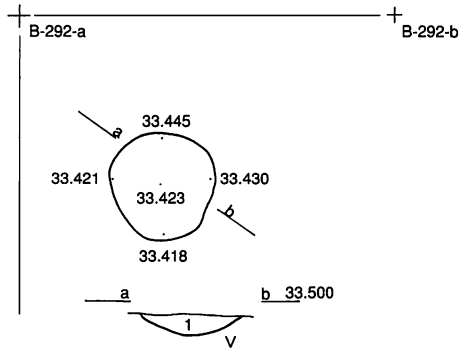


LF-198

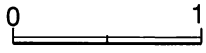


LF-198土層説明
1　赤褐色(5YR4/8)土

LF-199



LF-199土層説明
1.焼土



図Ⅳ-108　Ⅴ層の焼土（30）

LF-201（図Ⅳ-109）

位置：Z0-295-c　Z0-295-d　規模：0.98×0.33／×／0.06m

長軸方向：N-57.0°-E

特徴　調査区東側段丘上のⅤ層上面で検出された焼土である。赤化の度合いは弱く、廃棄などの二次的な要素も考えられる。遺物は伴わない。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出されたレベルから縄文時代後期～晩期末葉と思われる。（皆川洋一）

LF-202（図Ⅳ-109）

位置：B-291-a　B-291-b　規模：0.91×0.63／×／0.02m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。非常に薄く、不明瞭な焼土である。すぐ北側に隣接して手稲式土器がまとまって出土した。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および周辺の遺物から、縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

LF-206（図Ⅳ-109／図版-126～130）

位置：Y0-294-a　規模：0.42×0.36／×／0.07m

長軸方向：N-10°-W

特徴　Ⅴ層を10cm程掘り下げたところで確認した。覆土上部には炭化物が混在した黒色土が認められた。覆土中からは、焼けた痕跡のある黒曜石のフレイクが十数点出土している。

遺物　1は有茎凸基の石鏃。黒曜石製。

時期　覆土出土の土器及び周辺の遺物から、縄文時代後期中葉～末葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-207（図Ⅳ-110／図版-79～106）

位置：D-289-c　規模：0.48×0.40／×／0.10m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。北側は撹乱を受けており、全体像は判然としない。焼土上面から縄文時代晩期末葉の土器が検出された。

遺物　0192は口縁部に装飾の施された大型のⅤ群c類浅鉢形土器である。

時期　検出された層位および焼土上面・周辺の遺物から、縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

LF-208（図Ⅳ-111）

位置：Z0-292-a　規模：0.44×0.33／×／0.02m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。薄く、不明瞭でブロック状の焼土が散在していることから2次堆積の焼土と考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。あるいは検出された層位および焼土中・周辺の遺物から、縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

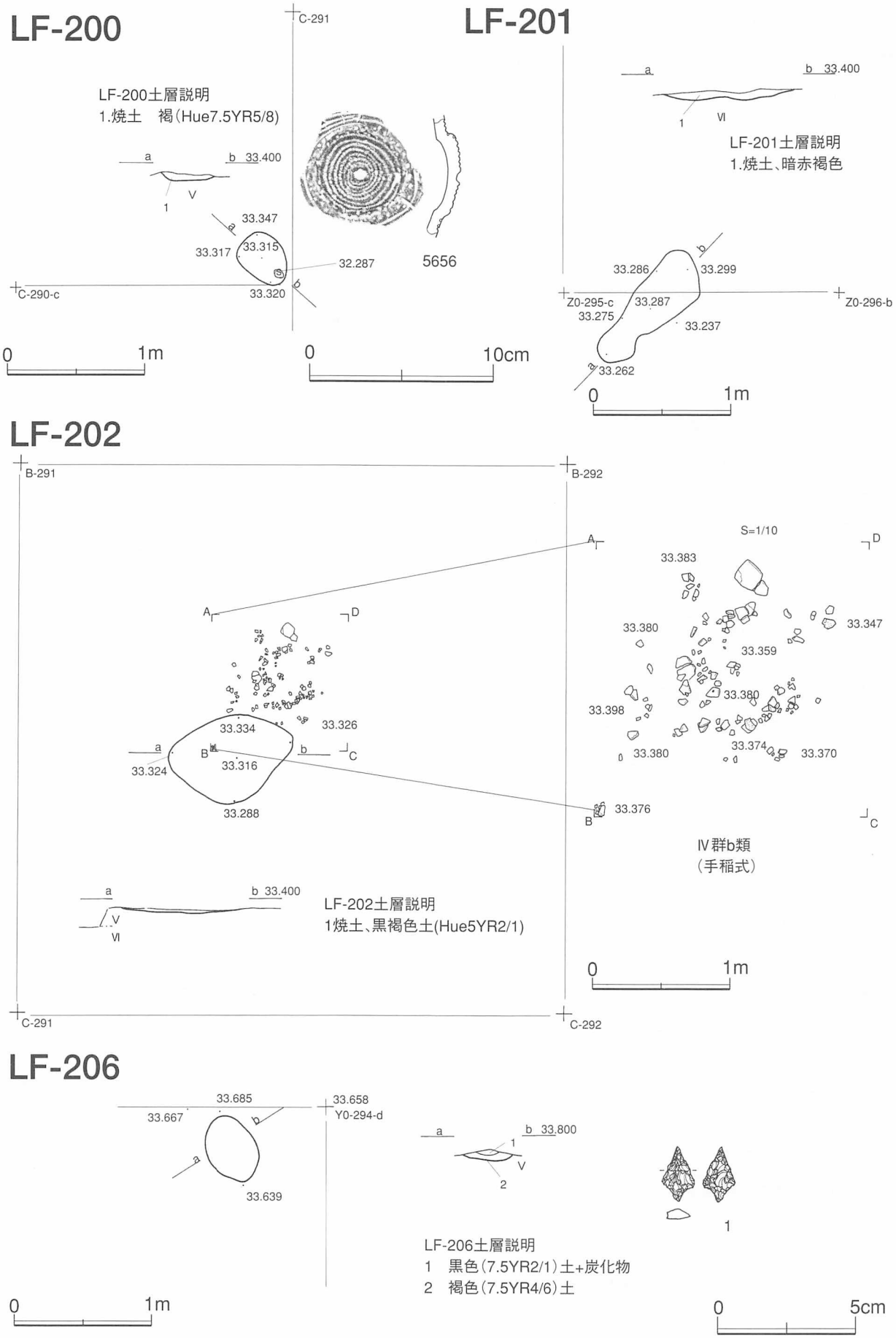
LF-209（図Ⅳ-111）

位置：Z0-292-c　規模：0.41×0.27／×／0.02m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。非常に薄く不明瞭な焼土である。

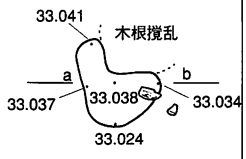
遺物　掲載遺物なし

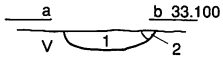
時期　検出された層位、および周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）



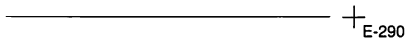
図Ⅳ-109　Ⅴ層の焼土（31）

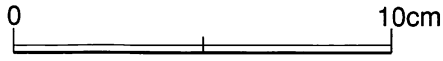
LF-207

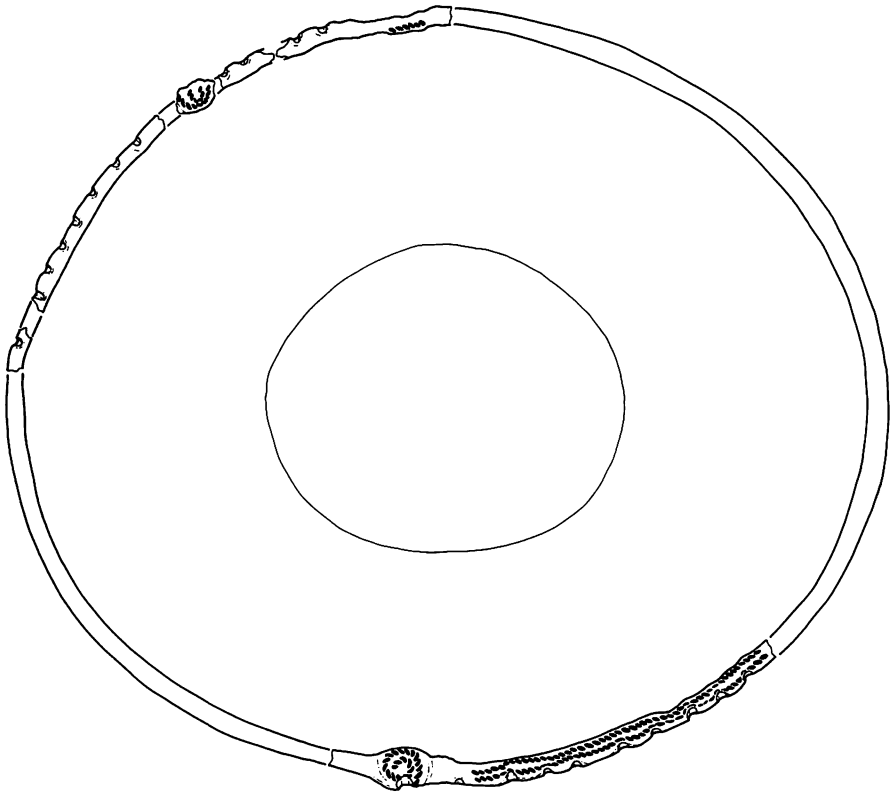


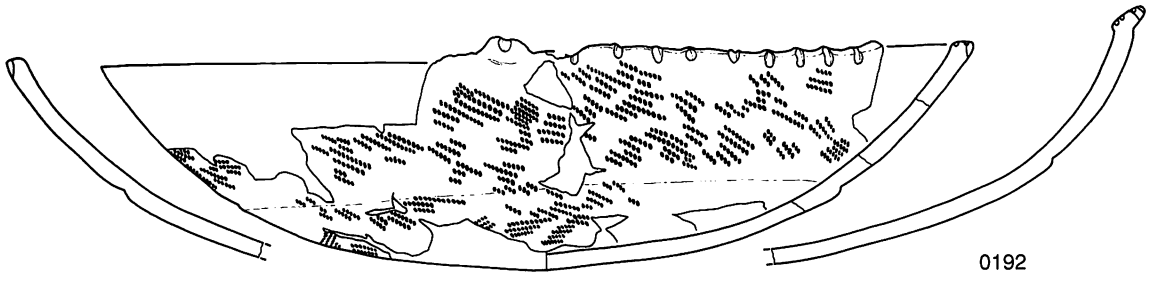


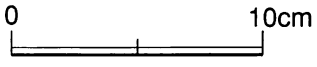
LF-207土層説明
1焼土、赤褐色土(Hue5YR4/6)
2黒褐色土(Hue5YR3/1)焼土粒が混じる。木根撹乱の影響と思われる。











図Ⅳ-110　Ⅴ層の焼土（32）

5　焼土

LF-210（図Ⅳ-111）

位置：Z0-293-c　規模：0.25×0.11／×／0.03m

長軸方向：N-81°-W

特徴　Ⅴ層を5cm程掘り下げたところで確認した。平面形が長楕円形状を呈する規模の小さいものである。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-211（図Ⅳ-111）

位置：A-292-b　規模：0.35×0.15／×／0.04m

長軸方向：N-71°-W

特徴　Ⅴ層を5cm程掘り下げたところで、近接した2基の焼土を確認した。南北方向に約1m程離れている。いずれも35cm大程で、平面形は楕円形状を呈する。また覆土も5cm程の浅いものである。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉～晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-212（図Ⅳ-111）

位置：A-292-b　規模：0.34×0.27／×／0.05m

長軸方向：N-66°-W

特徴　土器片、砥石片が数点出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉～晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-213（図Ⅳ-111／図版-27）

位置：B-293-d　B-294-a　規模：0.84×0.43／×／0.13m

長軸方向：N-82°-E

特徴　Ⅴ層上面で確認した。平面形は長楕円形で、覆土は下部のほうが赤みがかった強い色調を呈する。覆土上部から、焼けた黒曜石のフレイクが数点出土している。南西方向に2m程離れたところに、LF-216が近接する。覆土上部から、土器片、焼けた黒曜石のフレイク、礫片が数十点出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土及び周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉～晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

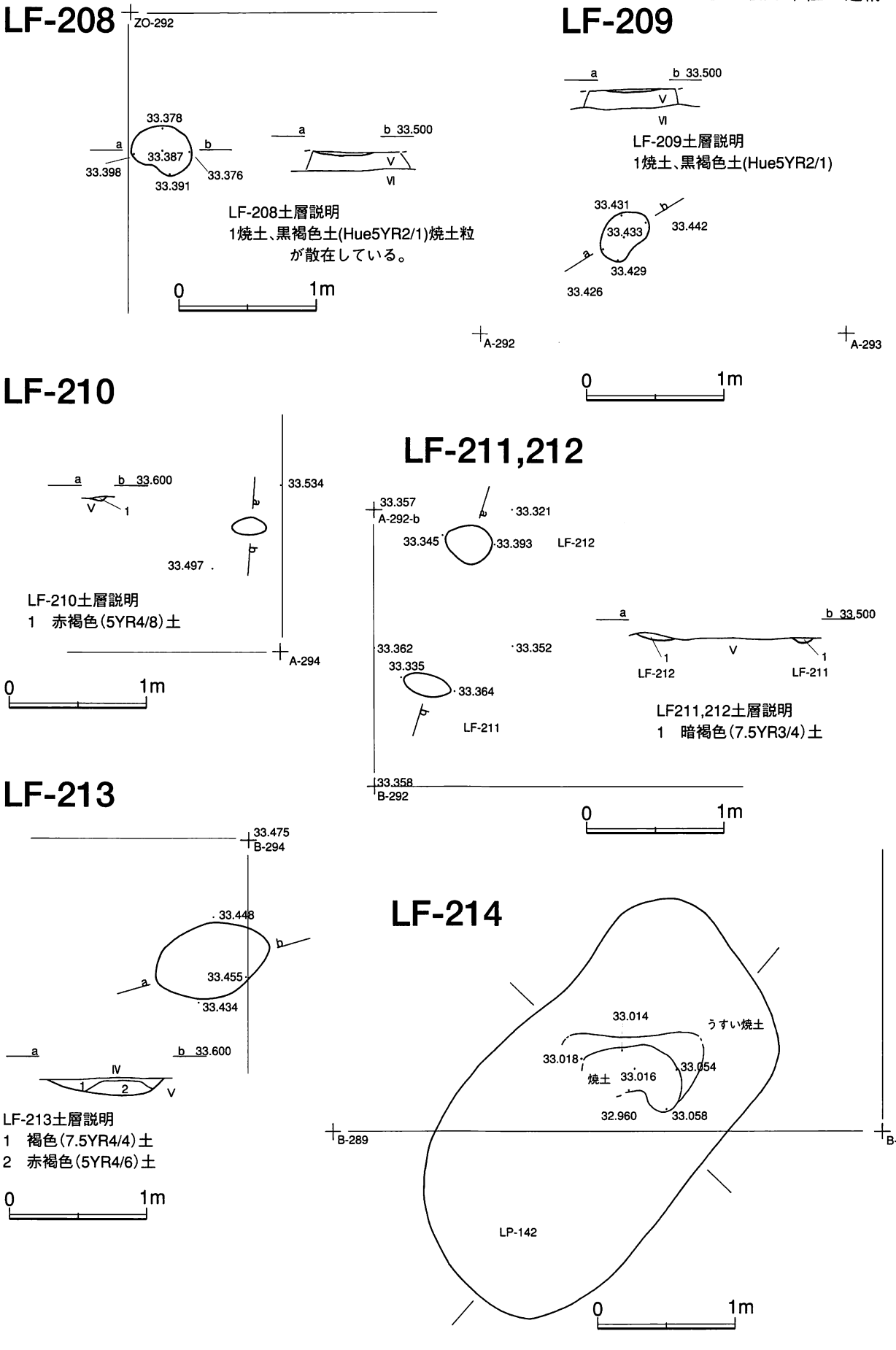
LF-214（図Ⅳ-111）

位置：A-289-b　A-289-c　規模：0.74×(0.37)／×／0.10m

特徴　LP-142調査中に赤みを帯びた黒褐色土を確認した。トレンチにより南側の一部は掘り下げてしまった。Ta-cの直下でLP-142の覆土5層上面にあり、埋り切る前の窪地を利用した焼土と考えられる。周辺を精査したが柱穴等は確認できなかった。LP-142覆土中として取り上げた遺物の殆どはこの焼土に伴うものと思われる。

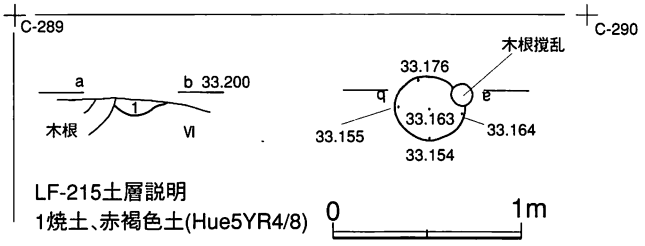
遺物　掲載遺物なし

時期　Ta-cの直下から検出されたこと、およびLF-214に伴うものと思われるLP-142覆土中の遺物から、縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）



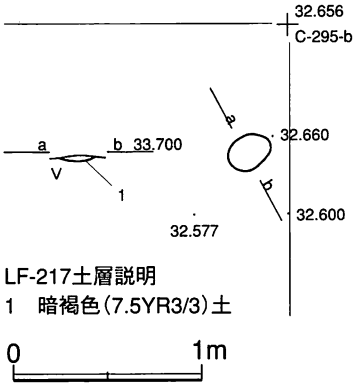
図Ⅳ-111　Ⅴ層の焼土（33）

LF-215



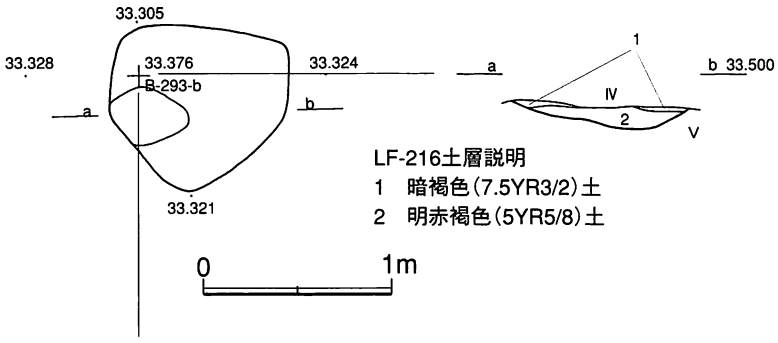
LF-215土層説明
1焼土、赤褐色土(Hue5YR4/8)

LF-217



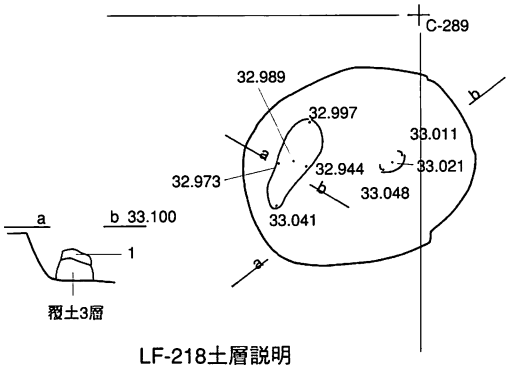
LF-217土層説明
1 暗褐色(7.5YR3/3)土

LF-216



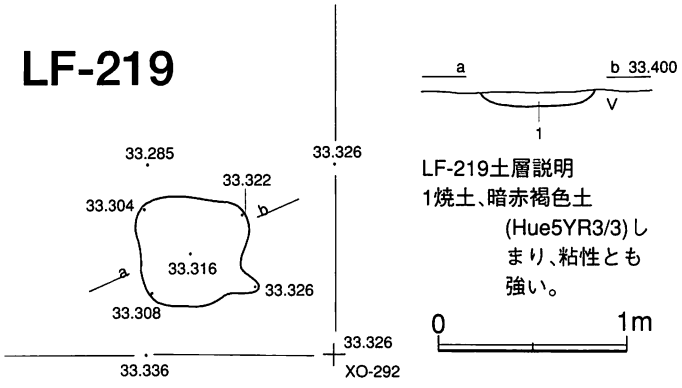
LF-216土層説明
1 暗褐色(7.5YR3/2)土
2 明赤褐色(5YR5/8)土

LF-218



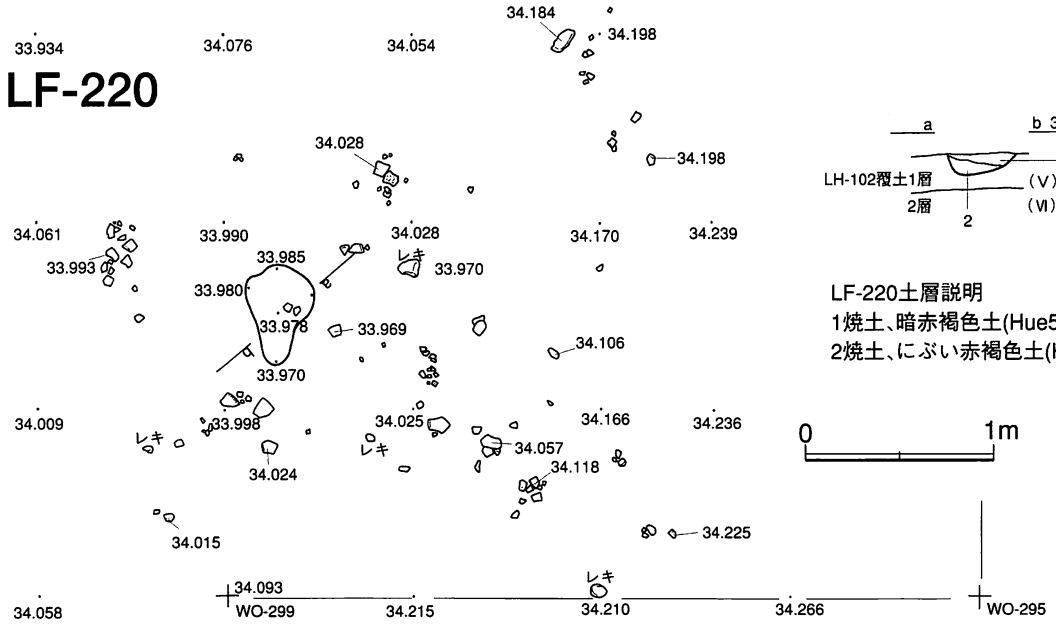
LF-218土層説明
1焼土、にぶい赤褐色土
(Hue5YR4/4)

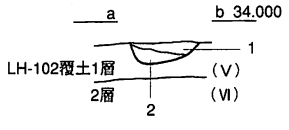
LF-219



LF-219土層説明
1焼土、暗赤褐色土
(Hue5YR3/3)し
まり、粘性とも
強い。

LF-220





LF-220土層説明
1焼土、暗赤褐色土(Hue5YR3/2)
2焼土、にぶい赤褐色土(Hue5YR4/4)

図Ⅳ-112 V層の焼土 (34)

LF-215（図Ⅳ-112）

位置：C-289-d　規模：0.37×0.33／×／0.08m

特徴　Ⅵ層上面において確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位、および周辺の遺物から縄文時代早期後半の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-216（図Ⅳ-112）

位置：B-292-c　B-292-d　B-293-a　B-293-b　規模：0.96×0.89／×／0.12m

長軸方向：N-56°-W

特徴　Ⅴ層上面で確認した。覆土上部には骨片が混在しており、特に西側に集中して認められた。また覆土中からは、焼けた黒曜石のフレイクが数点出土している。北東方向に2m程離れたところに、LF-213が近接する。覆土中から、土器片、焼けた黒曜石のフレイク、焼けた礫片があわせて数十点出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土及び周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉～晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-217（図Ⅳ-112）

位置：C-294-c　規模：0.24×0.18／×／0.03m

長軸方向：N-63°-E

特徴　Ⅴ層を10cm程掘り下げたところで確認した。平面形は楕円形を呈し、20cm大程の規模が小さいものである。また層厚も浅い。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉～晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-218（図Ⅳ-112）

位置：C-288-d　規模：0.51×0.20／×／0.05m

特徴　LP-162を調査している際に、その覆土1層中で確認した。LP-162がまだ埋り切らないうちに流れ込んだ2次堆積の焼土と考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　LP-162よりも新しい焼土である。LP-162の時期が縄文時代晩期末葉であるとの推測が成り立つならば、それよりも新しくTa-c降下以前の縄文時代晩期末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LF-219（図Ⅳ-112）

位置：W0-291-c　規模：0.75×0.65／×／0.07m

特徴　Ⅴ層上面において確認した。焼土上面および焼土中から細かい破片となった堂林式土器が出土している。周辺には炭化物が散在している。

遺物　掲載遺物なし

時期　焼土上面および周辺の遺物から、縄文時代後期末葉の遺構と考えられる。（藤原秀樹）

LF-220（図Ⅳ-112）

位置：V0-294-b　規模：0.53×0.37／×／0.10m

特徴　Ta-cを取り除くと窪みがあり、その中央に焼土が確認された。後の調査によりLH-102の埋り切らない窪みを利用したものとわかった。周囲を精査したが柱穴等は検出できなかった。確認面はLH-102覆土1層上面となる。周辺には縄文時代晩期末葉の土器がまとまって大量に出土し、その

他に土製品・石鏃等もあった。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および周辺の遺物から縄文時代晩期末葉の遺構と考えられる。(藤原秀樹)

LF-221（図Ⅳ-113）

位置：W0-291-c　W0-291-d　規模：0.44×0.34／×／0.06m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。周辺には焼土粒、炭化物が散在している。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および周辺の遺物から縄文時代後期末葉の遺構と推測できる。(藤原秀樹)

LF-223（図Ⅳ-113）

位置：W0-293-b　規模：0.37×0.33／×／0.06m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明である。あるいは検出された層位および周辺の遺物から、縄文時代後期中葉もしくは末葉の遺構と推測できる。(藤原秀樹)

LF-224（図Ⅳ-113）

位置：V0-285-b　規模：0.68×0.56／×／0.11m

長軸方向：N-74°-E

特徴　Ⅴ層上面で、近接した2基の焼土を確認した。東西方向に約1m程離れている。いずれも覆土はピット状に窪んで形成されている。上面及び覆土中から土器片、黒曜石のフレイク、礫等が出土している。LF-226からは焼けた痕跡のあるフレイクが出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土及び周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉～晩期末葉の可能性がある。(澤田　健)

LF-225（図Ⅳ-113）

位置：V0-285-c　規模：0.55×0.41／×／0.05m

長軸方向：N-16°-W

特徴　Ⅵ層上面で確認した。平面形は楕円形状を呈し、層厚は浅い。覆土中から礫が1点出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明（澤田　健）

LF-226（図Ⅳ-113）

位置：V0-284-c　規模：0.40×0.39／×／0.08m

長軸方向：N-18°-E

特徴　Ⅴ層上面で、LF-224と伴に確認した焼土である。覆土からはフレイクが出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　覆土出土及び周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉～晩期末葉の可能性がある。(澤田　健)

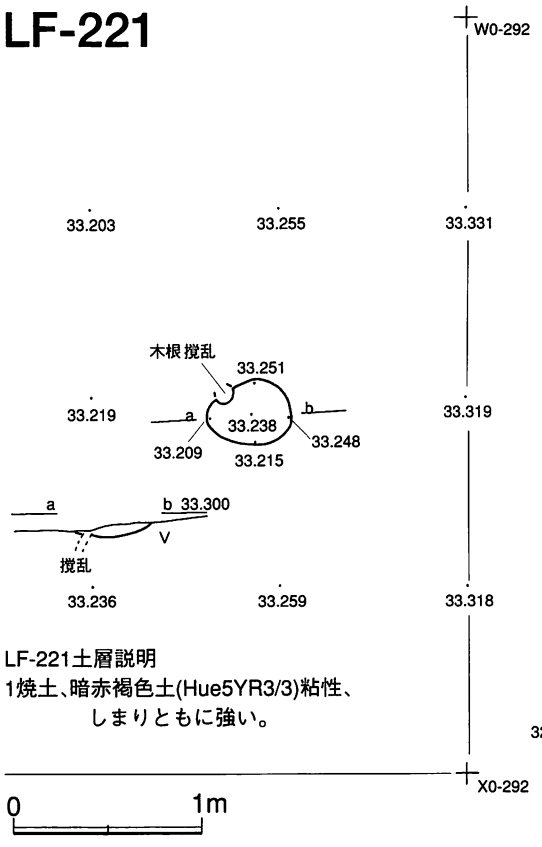
LF-227（図Ⅳ-113）

位置：V0-284-b　W0-284-a　規模：0.37×0.27／×／0.03m

長軸方向：N-89°-E

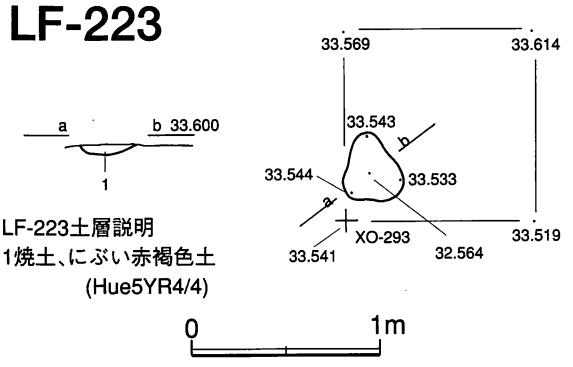
特徴　Ⅵ層上面で確認した。平面形は楕円形状を呈し、層厚は浅い。

LF-221



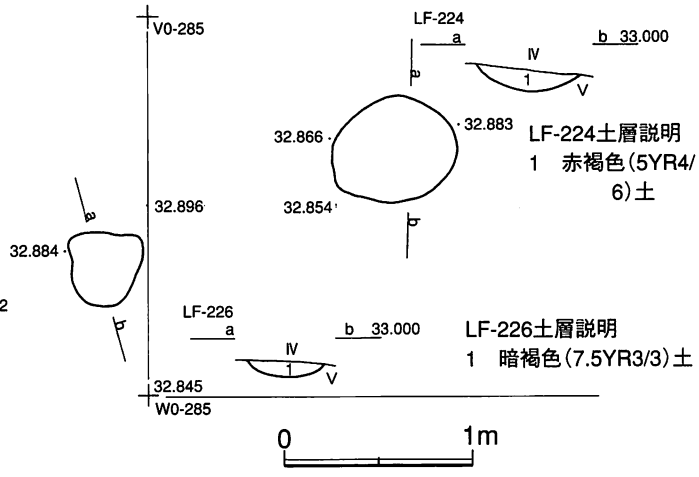
LF-221土層説明
1焼土、暗赤褐色土(Hue5YR3/3)粘性、
しまりともに強い。

LF-223



LF-223土層説明
1焼土、にぶい赤褐色土
(Hue5YR4/4)

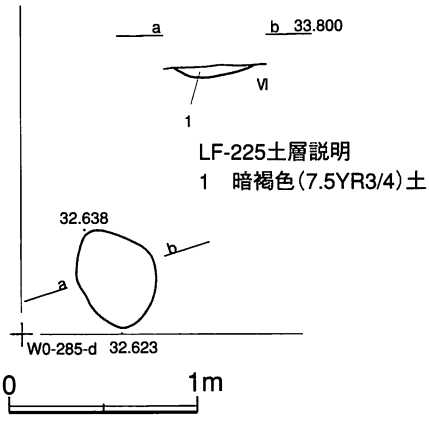
LF-224,226



LF-224土層説明
1　赤褐色(5YR4/6)土

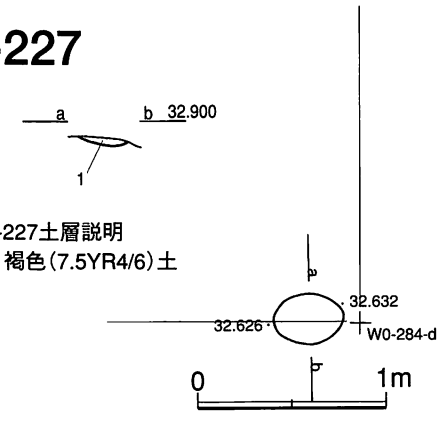
LF-226土層説明
1　暗褐色(7.5YR3/3)土

LF-225



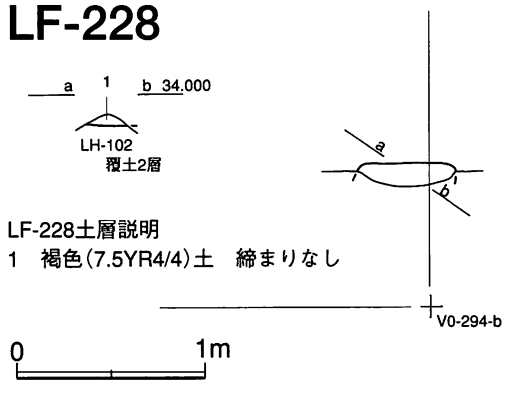
LF-225土層説明
1　暗褐色(7.5YR3/4)土

LF-227



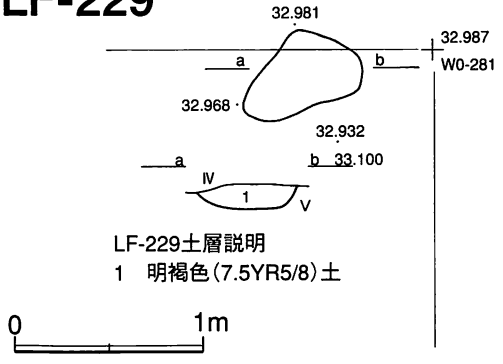
LF-227土層説明
1　褐色(7.5YR4/6)土

LF-228



LF-228土層説明
1　褐色(7.5YR4/4)土　締まりなし

LF-229



LF-229土層説明
1　明褐色(7.5YR5/8)土

図Ⅳ-113　Ⅴ層の焼土（35）

遺物　掲載遺物なし 時期　不明（澤田　健）

LF-228（図Ⅳ-113）

位置：V0-293-c　V0-294-a　規模：（0.51）×（0.12）／×／（0.06）m

長軸方向：N-81°-W

特徴　LH-102調査中に覆土2層の上面で確認した。当初、焼土と認識できなかったため、南側を掘り下げてしまい、欠失している。覆土は締まりのないもので、色調はぼやけたものである。二次的に堆積したものと考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　LH-102の覆土出土の土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-229（図Ⅳ-113）

位置：V0-280-c　W0-280-d　規模：0.66×0.41／×／0.13m

長軸方向：N-74°-E

特徴　Ⅴ層上面で確認した。平面形は不整な長楕円形状を呈し、覆土はピット状に窪んで形成されている。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉～晩期末葉の可能性がある。（澤田　健）

LF-231（図Ⅳ-114）

位置：X0-277-c　Y0-277-d　規模：0.58×0.44／×／0.09m 長軸方向：N-47.5°-W

LF-232（図Ⅳ-114）

位置：Y0-277-a　Y0-277-d　規模：0.40×0.31／×／0.08m 長軸方向：N-78.0°-W

LF-233（図Ⅳ-114／図版-79～106）

位置：Y0-277-a　Y0-277-b　規模：0.72×0.53／×／0.13m 長軸方向：N-43.0°-E

LF-234（図Ⅳ-114／図版-79～106）

位置：Y0-277-b　Y0-277-a　規模：0.71×0.52／×／0.06m 長軸方向：N-42.0°-E

LF-235（図Ⅳ-114）

位置：Z0-277-a　規模：0.47×0.38／×／0.10m 長軸方向：N-62.0°-E

特徴　調査区西側段丘上のⅤ層上面で検出された直列をなす焼土群である。群は五つの焼土からなり、列をなす方向は北東－南西を向く傾向にある。規模はLF-231,233,234が比較的大型で赤化の度合いも大きいなど、いくつかの差異を見いだせるもののこれらは同時期に生成されたものと考えられる。遺物は周辺の同レベルでものと同じ出土状況を見せており、多数のⅤ群c類土器、石斧、フレイク、チップ、礫、焼成粘土塊などがが出土している。周辺包含層のⅤ群c類土器はこの焼土群と同じ方向性を有しながら帯状に分布するなど関連が密である。また、これらはやや西側に位置するLP-201～207,213～218の土壙群を大きく囲う様な位置関係にあり、それとの関連も考えられる。

遺物　5008はLF-233内で検出されたⅤ群c類の深鉢形土器で胴部に横冠すると考えられる四本の縄線が施されている。5657はLF-234内で検出されたⅤ群c類の浅鉢形土器口縁部である。

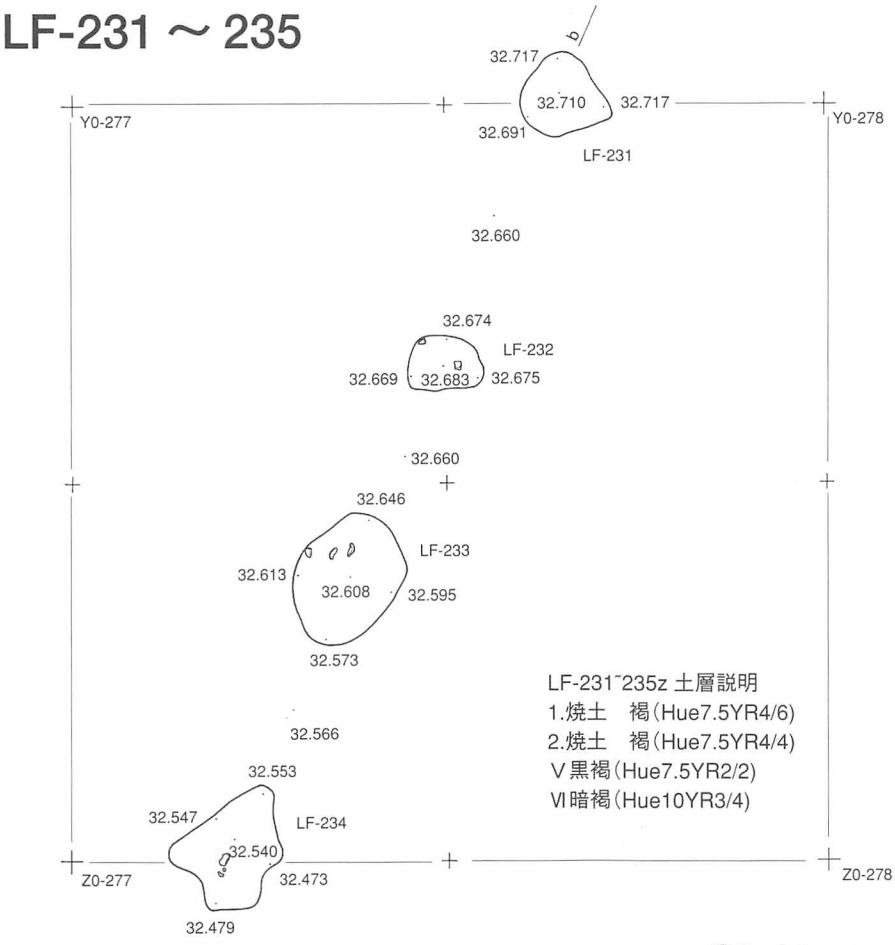
時期　縄文時代晩期末葉である。（皆川洋一）

LF-236（図Ⅳ-114）

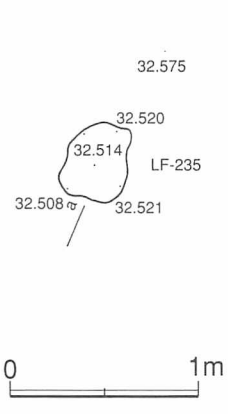
位置：V0-282-c　規模：0.31×0.20／×／0.03m

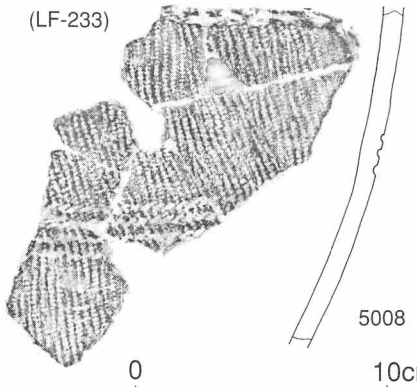
長軸方向：N-5°-E

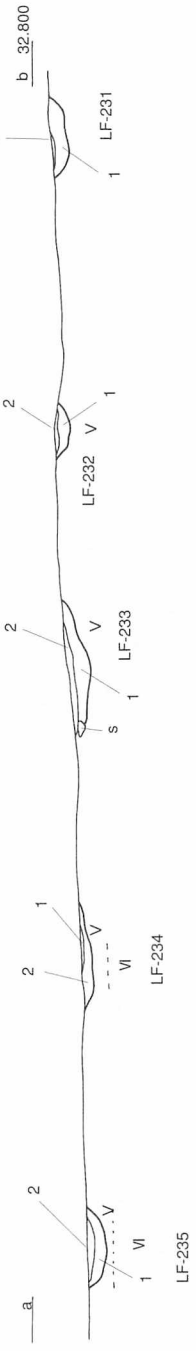
LF-231 ～ 235



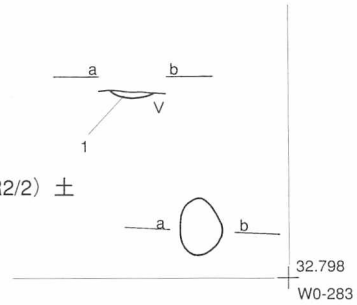
LF-231~235z 土層説明
1.焼土　褐(Hue7.5YR4/6)
2.焼土　褐(Hue7.5YR4/4)
Ⅴ黒褐(Hue7.5YR2/2)
Ⅵ暗褐(Hue10YR3/4)



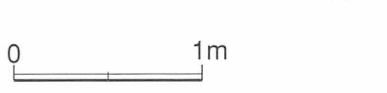




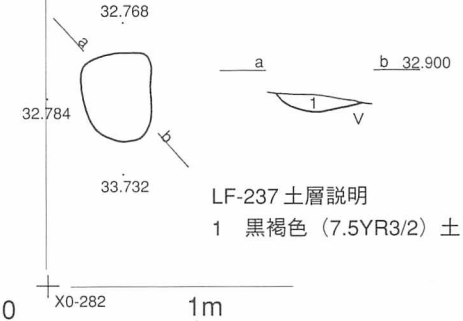
LF-236



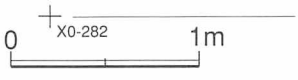
LF-236 土層説明
1　黒褐色（7.5YR2/2）土



LF-237



LF-237 土層説明
1　黒褐色（7.5YR3/2）土



特徴　Ⅴ層を5cm程掘り下げたところで確認した。平面形は楕円形状を呈し、30cm大程の規模が小さいものである。また層厚も浅い。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。(澤田　健)

LF-237（図Ⅳ-114）

位置：W0-282-b　規模：0.48×0.38／×／0.09m

長軸方向：N-4°-E

特徴　Ⅴ層を5cm程掘り下げたところで確認した。平面形は不整な楕円形を呈し、覆土は若干ピット状に窪んで形成されている。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。(澤田　健)

LF-238（図Ⅳ-115）

位置：B-275-c　C-275-d　規模：0.48×0.40／×／0.05m 長軸方向：N-24.5°-E

LF-239（図Ⅳ-115）

位置：C-275-a　規模：0.53×0.51／×／0.10m 長軸方向：N-86.0°-W

LF-240（図Ⅳ-115）

位置：C-275-b　規模：0.41×0.40／×／0.09m 長軸方向：N-58.5°-W

特徴　調査区西側段丘上のⅤ層上面で検出された列をなす焼土群である。群は三つの焼土からなりLF-239はLP-219の上位に位置しており、LP-240はLH-001,002,006が原因となる窪み内に位置している。列をなす方向は北東ー南西を向く傾向にあり、規模はほぼ同じで赤化の度合いがいずれも弱い。これらは同時期に生成もしくは廃棄されたものと考えられる。遺物は少なくⅣ群c類土器、細片のため分類の出来ない土器、チップ、礫、炭化物などがが出土しているが、他の列をなす焼土群と比較して周辺の同レベルで出土する遺物も少ない。また、やや北側に位置するLF-246,247,249,253の列をなす焼土群と連結する可能性もある。

遺物　掲載遺物なし

時期　土層の出土レベルから縄文時代晩期末葉と思われる。(皆川洋一)

LF-241（図Ⅳ-115）

位置：B-277-d　規模：0.48×0.37／×／0.05m 長軸方向：N-20.0°-E

LF-242（図Ⅳ-115）

位置：B-277-c　規模：0.43×0.28／×／0.03m 長軸方向：N-49.0°-E

特徴　調査区西側の段丘縁辺で検出された焼土である。これらはⅤ層上面で見つかり、LF-241はUP-145に約半分を切られている。規模はどちらもほぼ同じと考えられ、赤化の度合いもいずれも弱い。伴う遺物はなく周囲の包含層の遺物も薄い。これらは同時期に生成もしくは廃棄されたと考えられる。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺構・遺物から縄文時代後期中葉～晩期末葉の可能性がある。(皆川洋一)

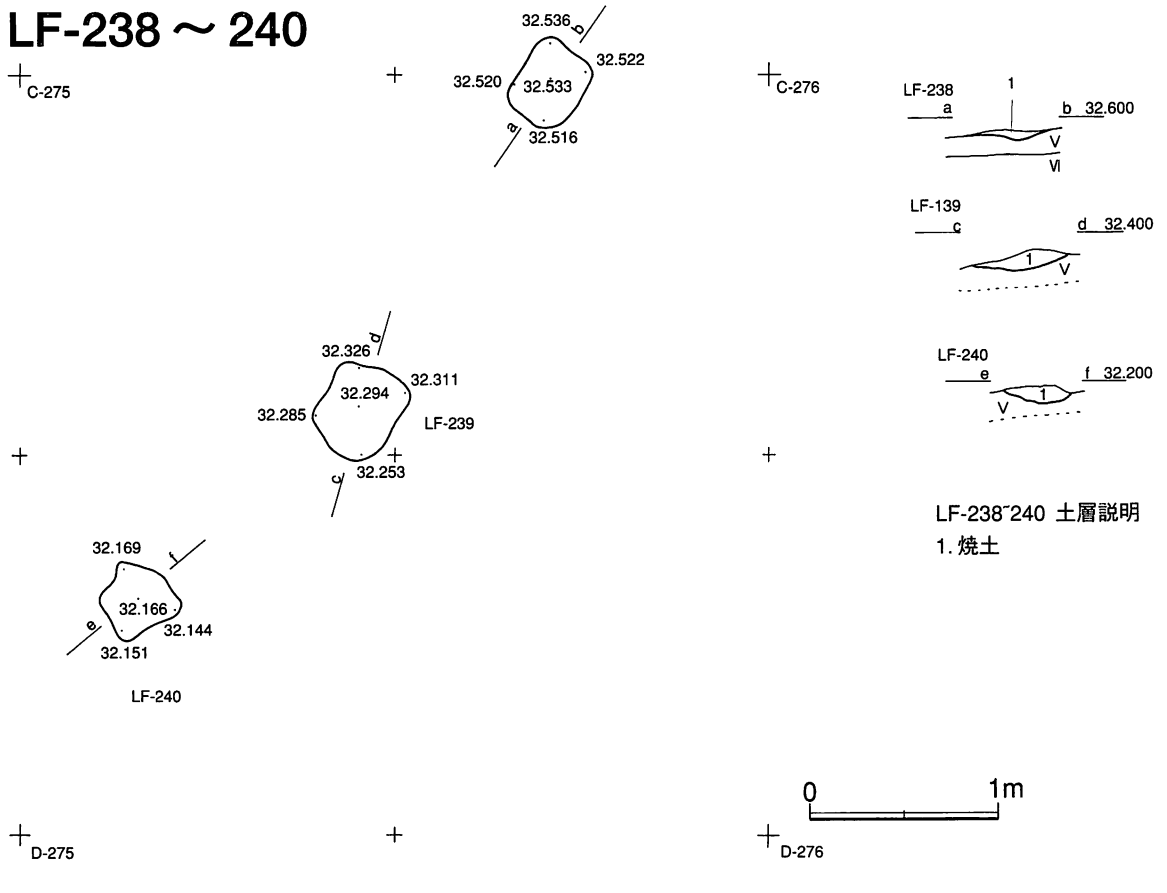
LF-243（図Ⅳ-115）

位置：Y0-279-a　規模：0.42×0.36／×／0.04m

長軸方向：N-7.5°-W

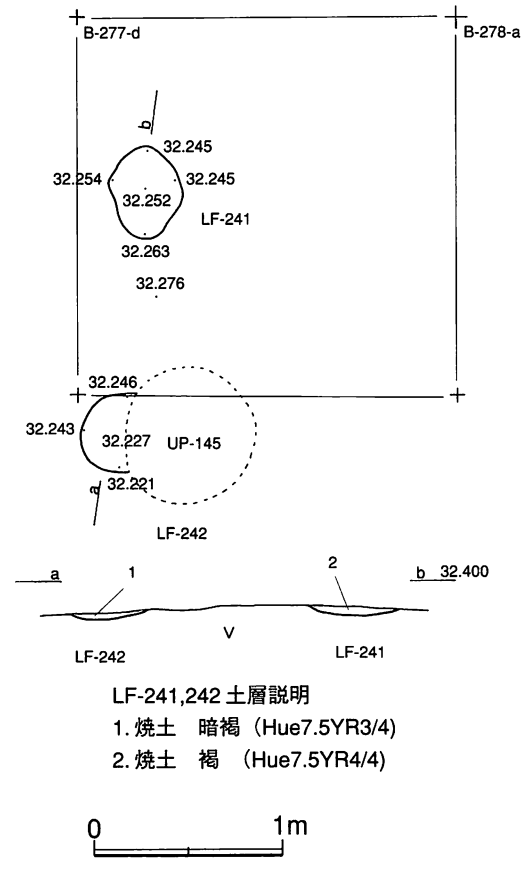
特徴　調査区西側の段丘上で検出された焼土である。Ⅴ層上面から5cmほど掘り込んだ面でで見つかっ

LF-238～240



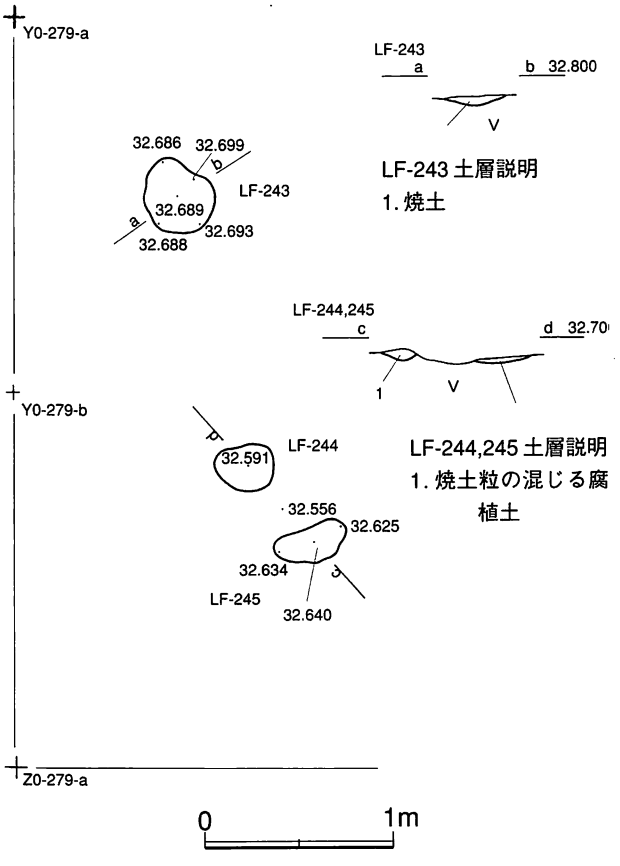
LF-238~240 土層説明
1. 焼土

LF-241,242



LF-241,242 土層説明
1. 焼土　暗褐（Hue7.5YR3/4）
2. 焼土　褐　（Hue7.5YR4/4）

LF-243~245



LF-243 土層説明
1. 焼土

LF-244,245 土層説明
1. 焼土粒の混じる腐植土

図Ⅳ-115　V層の焼土（37）

ている。規模は小さく、赤化の度合いは比較的弱い。短時間に生成され放置されたと考えられる。遺物は礫が出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺構・遺物から縄文時代後期中葉の可能性がある。（皆川洋一）

LF-244（図Ⅳ-115）

位置：Y0-279-b　規模：0.31×0.23／×／0.02m 長軸方向：N-80.5°-W

LF-245（図Ⅳ-115）

位置：Y0-279-b　規模：0.40×0.19／×／0.06m 長軸方向：N-88.5°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された二つの焼土である。これらはⅤ層上面から5cmほど掘り込んだ面でで見つかっている。規模はどちらも小さく、赤化の度合いは非常に弱い。短時間に生成され放置されたか、廃棄など二次的要因が考えられる。遺物は礫が出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺構・遺物から縄文時代後期中葉の可能性がある。（皆川洋一）

LF-246（図Ⅳ-116／図版-79～106）

位置：A-275-b　規模：0.73×0.52／×／0.13m 長軸方向：N-26.5°-W

LF-247（図Ⅳ-116／図版-79～106）

位置：B-275-a　規模：0.75×0.48／×／0.13m 長軸方向：N-9.5°-W

LF-249（図Ⅳ-116／図版-79～106）

位置：B-275-c　規模：0.86×0.80／×／0.17m 長軸方向：N-13.5°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された列をなす焼土群である。これらはⅤ層上面で見つかったもので、列は北－南を向いている。南側に位置するLF-249が規模的に大きく赤化の度合いも著しい。他は北側に向かって規模も小さく赤化も弱くなっていく。伴う遺物の量もそれに比例してLF-249が最も多い。これらはⅤ群c類土器を主体とする遺物の出土状況から見てほぼ同時に生成されたと考えられる。遺物はⅤ群c類土器、スクレイパー、Rフレイク、フレイク・チップ、礫などが出土している。周辺の包含層はⅤ群c類土器の密度が高くそれらはこの焼土群に伴うと考えられる。

遺物　5659はLF-246から、5649はLF-247から検出されたⅤ群c類の深鉢形土器である。5011は深鉢形、5658は小型の浅鉢形を呈するⅤ群c類土器でともにLF-249から検出されている。

時期　伴う遺物から縄文時代晩期末葉と考えられる。（皆川洋一）

LF-250（図Ⅳ-117）

位置：W0-293-d　W0-294-a　規模：（0.28）×（0.26）／×／0.02m

長軸方向：N-81°-W

特徴　Ⅴ層を10cm程掘り下げたところで確認した。W0-294区域調査中に焼土の存在を認識できなかったため、294ラインに沿って東側を掘り下げてしまい、欠失している。全体の平面形は不明であるが、小規模で、層厚の浅いものと思われる。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）

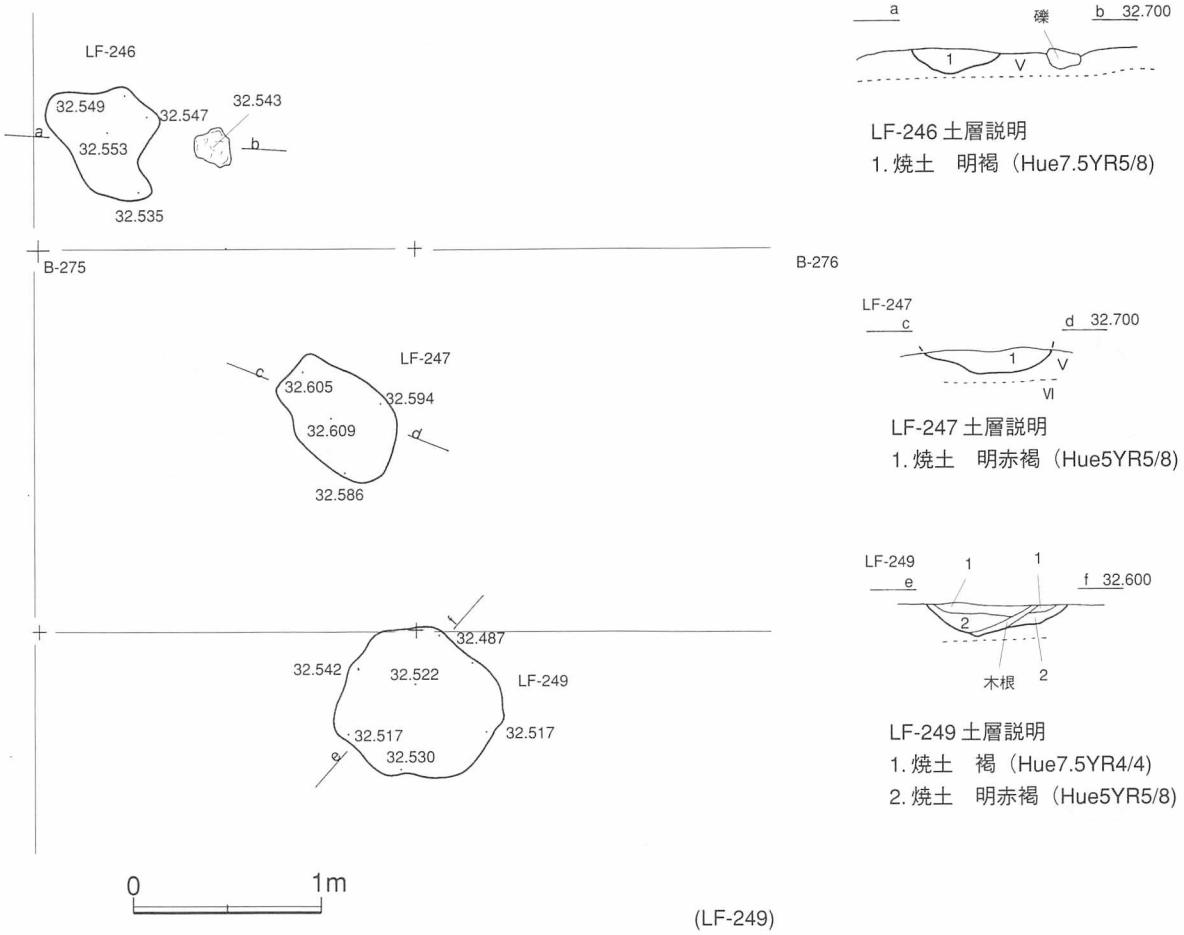
LF-251（図Ⅳ-117／図版-79～106）

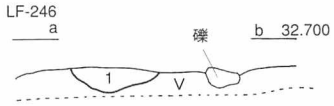
位置：C-275-c　規模：0.43×0.39／×／0.09m

長軸方向：N-47.5°-W

特徴　調査区西側の段丘上で検出された焼土である。Ⅴ層上面で見つかったもので、近接してLP-208が

LF-246,247,249



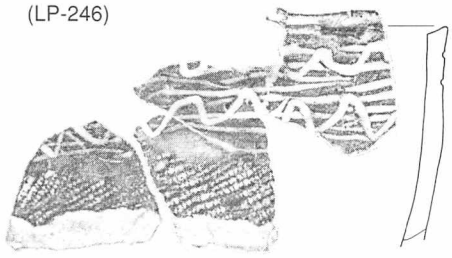


LF-246 土層説明
1. 焼土　明褐（Hue7.5YR5/8）

LF-247 土層説明
1. 焼土　明赤褐（Hue5YR5/8）

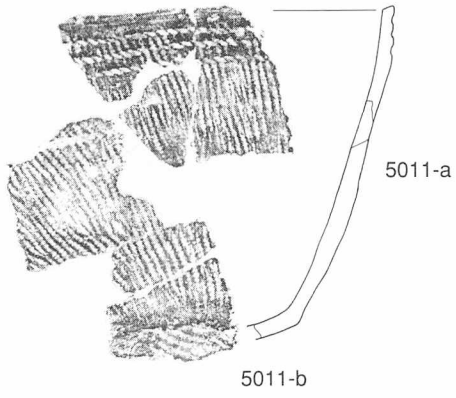
LF-249 土層説明
1. 焼土　褐（Hue7.5YR4/4）
2. 焼土　明赤褐（Hue5YR5/8）

(LP-246)

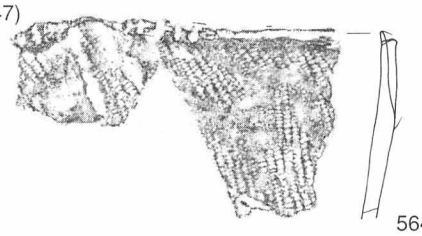


5659

(LF-249)

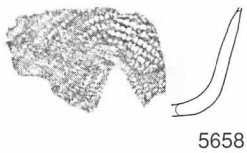


(LP-247)



5649

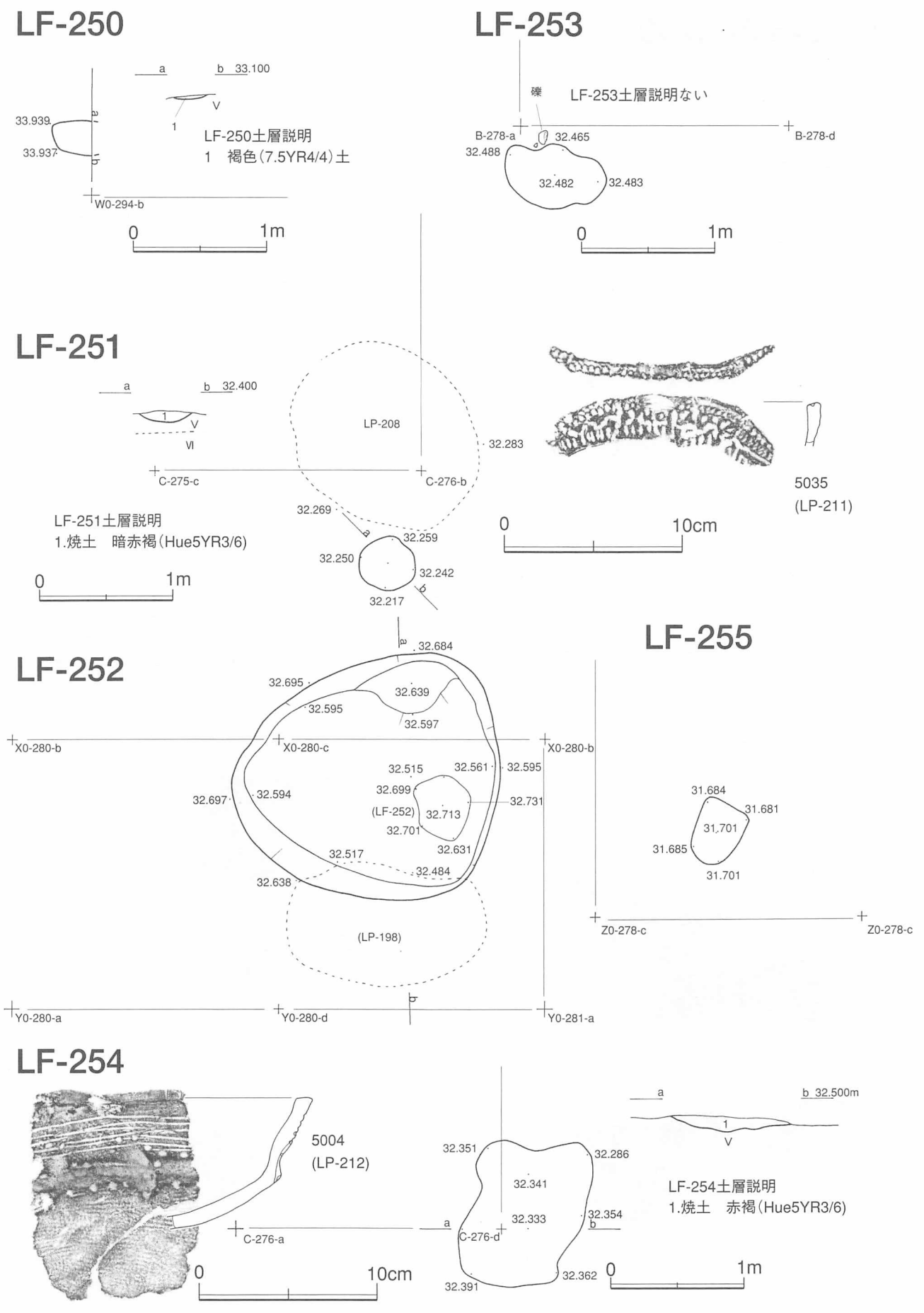
(LF-249)



5658



図Ⅳ-116　V層の焼土（38）



図Ⅳ-117　V層の焼土（39）

位置している。規模は小さく赤化の度合いは非常に弱い。短時間に生成され放置されたか、廃棄など二次的要因が考えられる。遺物はⅤ群c類土器、フレイク・チップ、炭化物が出土している。

遺物　5035はⅤ群c類の小型の浅鉢形土器口縁部である。

時期　遺物から縄文時代晩期末葉と考えられる。(皆川洋一)

LF-252（図Ⅳ-117）

位置：X0-280-c　規模：0.48×0.41／×／m

特徴　調査区西側の段丘上で検出された焼土である。Ⅴ層上面から10㎝程掘り下げた面で検出されたもので、重複するLP-223の覆土上部に位置している。規模は小さく赤化の度合いも弱い。短時間に生成され放置されたか、廃棄など二次的要因が考えられる。遺物はⅣ群b類土器、石斧、フレイク・チップが出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　伴う遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。(皆川洋一)

LF-253（図Ⅳ-117）

位置：B-278-d　B-279-a　規模：0.76×0.49／×／m

長軸方向：N-62.0°-W

特徴　調査区西側の段丘縁辺で検出された焼土である。Ⅵ層上面で検出されており、規模はやや大型であるものの赤化の度合いが弱い。短時間に生成され放置されたか、廃棄など二次的要因が考えられる。遺物は礫が出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　縄文時代後期中葉と考えられる土壙が周囲に位置している。そのことから、この焼土も同じ時期の可能性がある。(皆川洋一)

LF-254（図Ⅳ-117／図版-27・79～106）

位置：B-276-b　B-276-c　C-276-a　C-276-d　規模：1.28×0.94／×／0.12m

長軸方向：N-57.0°-E

特徴　調査区西側の段丘縁辺で検出された焼土である。Ⅴ層下位で検出されており、規模は大型で赤化の度合いも強い。LP-212に近接しており関連する可能性がある。遺物はⅤ群c類土器、フレイク、チップが出土している。

遺物　5004はⅤ群c類の浅鉢形土器である。

時期　遺物から縄文時代晩期末葉と考えられる。(皆川洋一)

LF-255（図Ⅳ-117）

位置：Z0-278-a　規模：0.49×0.38／×／m

長軸方向：N-20.0°-E

特徴　調査区西側の段丘上で検出された焼土である。LH-105の覆土上位で検出されており、規模は小型で赤化の度合いも弱い。短時間に生成され放置されたか、廃棄など二次的要因が考えられる。遺物は出土していない。

遺物　掲載遺物なし

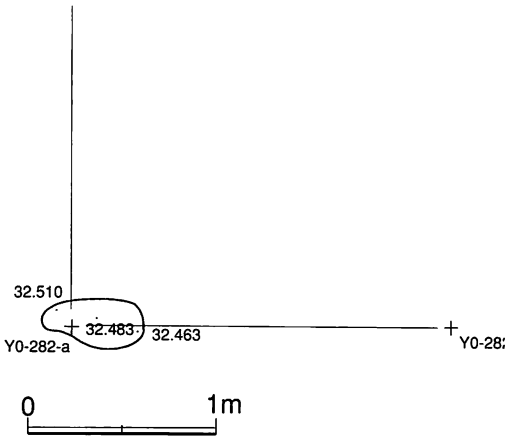
時期　LH-105覆土上位に位置していることから、縄文時代後期中葉～晩期末葉と思われる。(皆川洋一)

LF-257（図Ⅳ-118）

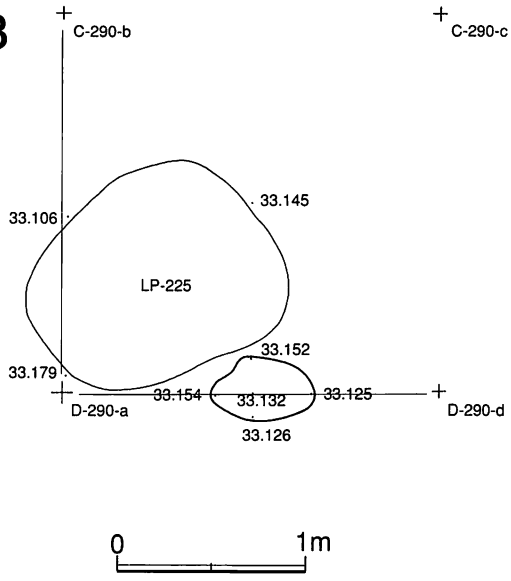
位置：X0-281-c　X0-282-b　Y0-281-d　Y0-282-a　規模：0.52×0.27／×／m

長軸方向：N-55.0°-W

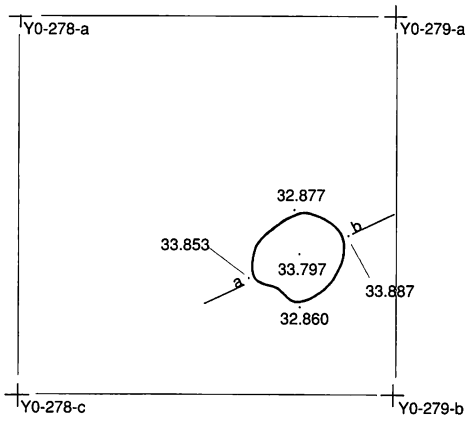
LF-257

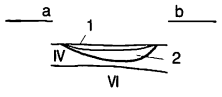


LF-258

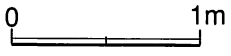


LF-259

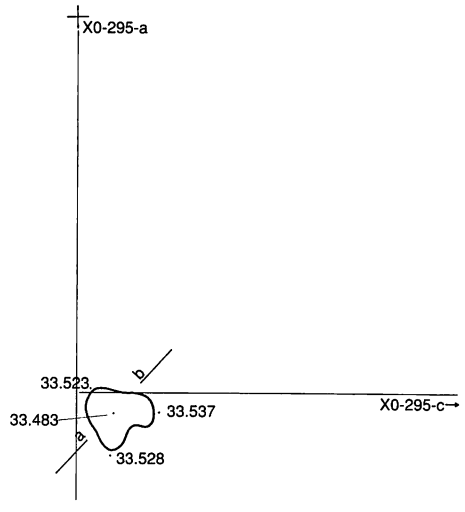


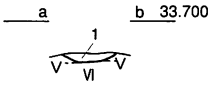


1 暗赤褐色(Hue5YR3/3)シルト質粘土。粘性あり。しまりややあり。VI
炭化物直径 2 ～ 4 ㎜多く含む。焼土粒直径 2 ～ 3 ㎜含む。
2 赤褐色(Hue5YR4/6)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりあり。VI
炭化物直径 2 ～ 4 ㎜含む。焼土粒直径 2 ～ 6 ㎜多く含む。
二次堆積の可能性有。

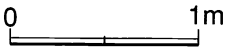


LF-260





1 黒褐色(Hue7.5YR3/2)シルト質粘土。粘性ややあり。しまりややあり。V
焼土粒若干含む。二次堆積の可能性有。



図Ⅳ-118　V層の焼土（40）

特徴　調査区西側の緩斜面で検出された焼土である。Ⅵ層上面で検出されており、規模は小型で赤化の度合いも弱い。短時間に生成され放置されたか、廃棄など二次的要因が考えられる。遺物は出土していない。

遺物　掲載遺物なし

時期　周囲の遺構・遺物と検出レベルから縄文時代後期中葉と考えられる。（皆川洋一）

LF-258（図Ⅳ-118）

位置：C-290-b　D-290-a　規模：0.55×0.34／×／m

長軸方向：N-76.5°-W

特徴　調査区東側の段丘上で検出された焼土である。Ⅵ層上面で検出されたもので、LP-225が近接した位置にある。規模は小型で赤化の度合いも弱い。遺物は出土していないが周囲の同じレベルからは縄文時代早期の頁岩を使用したつまみ付ナイフが出土している。

遺物　掲載遺物なし

時期　つまみ付ナイフから縄文時代早期と考えられる。（皆川洋一）

LF-259（図Ⅳ-118）

位置：Y0-278-d　規模：0.52×0.44／×／0.09m

特徴　Ⅵ層上面で確認した。同一層位ではLH-?を検出しているが、関係は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代後期中葉から末葉の遺構の可能性が考えられる。（佐藤　剛）

LF-260（図Ⅳ-118）

位置：X0-295-b　規模：0.35×0.33／×／0.05m

特徴　Ⅴ層下位で確認した。同一層位ではLH-101を検出しているが、関係は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　不明であるが、周囲の包含層の遺物から縄文時代中期中葉から後期中葉の遺構の可能性が考えられる。（佐藤　剛）

6．炭化物集中

LC-101（図Ⅳ-119）

位置：W0-310-b　規模：0.72×0.42／×／不明m　長軸方向：N-86°-W

特徴　東側の低湿部で検出したもので、Ⅴ-5層中で確認している。周辺では流木・木根の間から土器片、石斧及び昆虫遺体等の自然遺物が出土している。周辺の遺物の出土状況から二次的な堆積によるものと思われる。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉～末葉の可能性がある。（澤田　健）

LC-102（図Ⅳ-119）

位置：D-298-b　規模：0.53×0.21／×／0.02m

特徴　調査区南側断丘下のⅤ-3層調査中に、流木とともに検出された。周辺には少量の炭化物が散在していた。検出状況および断面から2次堆積の炭化物と思われる。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および周辺の遺物から縄文時代後期中葉もしくは末葉の遺構と推測できる。（藤原秀樹）

LC-103（図Ⅳ-119）

位置：B-296-c　規模：0.78×0.70／×／0.07m　長軸方向：N-36°-W

特徴　南側の低湿部へ傾斜する緩斜面状に位置する。Ⅴ層を10cm程掘り下げたところで確認した。緩斜面状に立地するため、二次的に堆積した可能性が大きい。

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代後期中葉の可能性がある。（澤田　健）

LC-105（図Ⅳ-119）

位置：Z0-291-a　規模：0.16×0.12／×／0.01m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げた際に確認した。木の幹がそのまま炭化したような状態であり、周囲に非常に不明瞭な焼土もあった。近くにあるLC-106とした炭化木と方向が一致している。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および周辺の遺物から、縄文時代晩期末葉の遺構と想定できる。（藤原秀樹）

LC-106（図Ⅳ-119）

位置：Z0-291-c　規模：0.44×0.18／×／0.02m

特徴　Ⅴ層を少し掘り下げたさいに確認した。木の幹がそのまま炭化したような状態である。周辺にも炭化物が薄く広がっている。

遺物　掲載遺物なし

時期　検出された層位および周辺の遺物から、縄文時代晩期末葉の遺構と想定できる。（藤原秀樹）

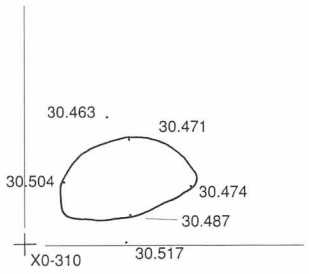
LC-107（図Ⅳ-120）

位置：C-293-c,C293-d　規模：1.38×0.63／×／不明m　長軸方向：N-25°-W

特徴　南側の低湿部へ傾斜する緩斜面状に位置する。Ⅴ層上面で1.5m程離れて近接した、2か所の炭化物集中を確認した。緩斜面状に立地するため、二次的に堆積した可能性が大きい。

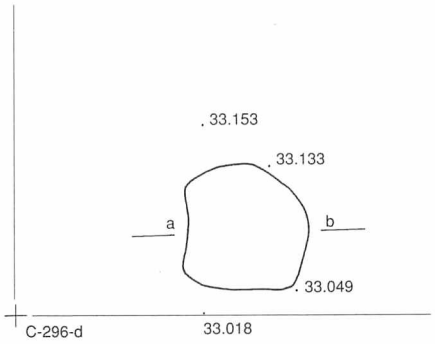
遺物　掲載遺物なし

LC-101





LC-103

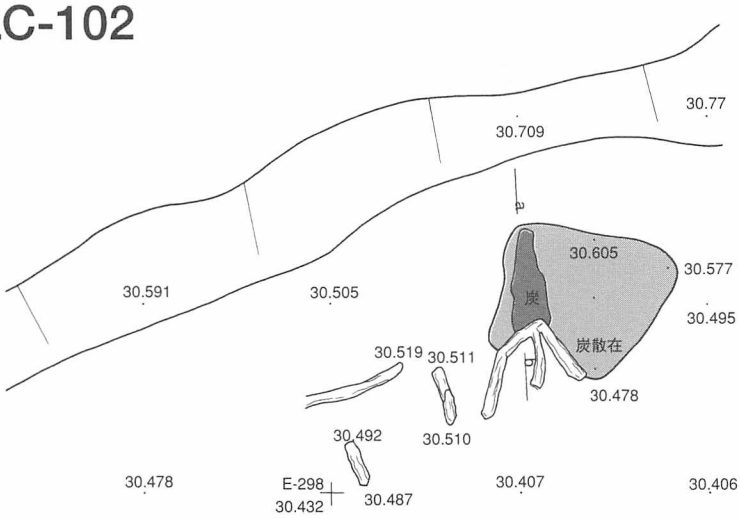


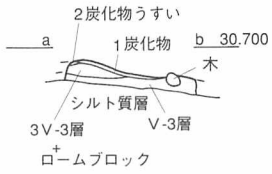


LC-103土層説明なし



LC-102

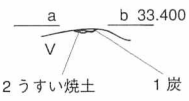




LC-102土層説明
1炭化物
2薄い炭化物
3V-5層十ロームブロック



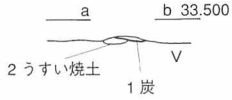
LC-105



LC-105土層説明
1炭化物
2薄い焼土



LC-106



LC-106土層説明
1炭化物
2薄い焼土



図Ⅳ-119　LC-101,102,103,105,106

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代晩期中葉の可能性がある。（澤田　健）

LC-108（図Ⅳ-120）

位置：C-293-b　規模：0.85×0.28／×／不明m　長軸方向：N-70°-E

特徴

遺物　掲載遺物なし

時期　周辺から出土している土器から、縄文時代晩期中葉の可能性がある。（澤田　健）

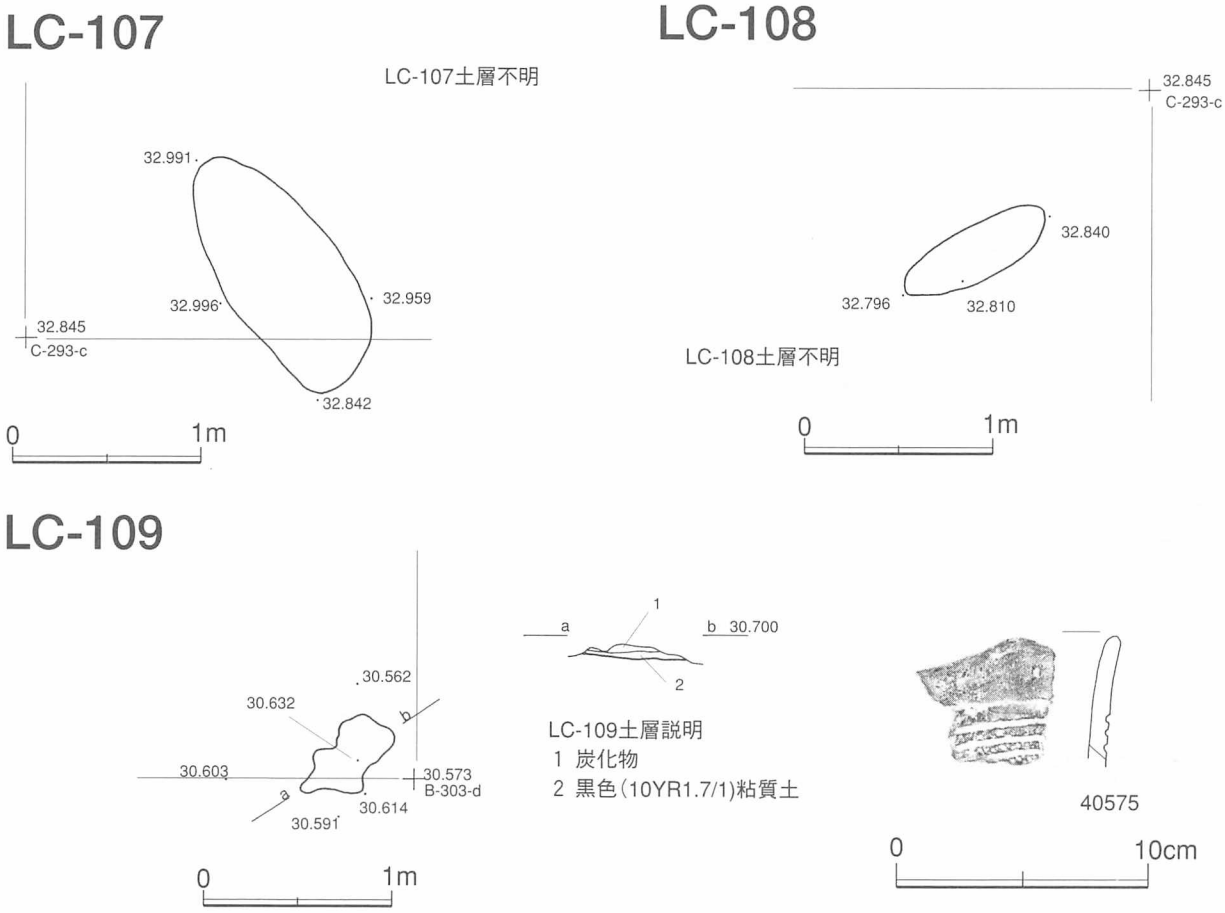
LC-109（図Ⅳ-120-41～68）

位置：A-303-b,B-303-a　規模：0.57×0.28／×／0.07m　長軸方向：N-87 - E

特徴　東側低湿部Ⅴ-3層調査中に段丘崖下付近で確認した。本層中からは同様な炭化物が散点的に出土している。中でもまとまりが見られたため、遺構の可能性があるものとして扱った。土器片2点出土。

遺物　40575はⅣ群b類の深鉢形土器口縁部である。

時期　周辺の遺物から、縄文時代後期中葉～末葉の可能性が高い。（沢田　健）



図Ⅳ-120　LC-107・108・109と遺物

7．集石

LS-101（図Ⅳ-121／図版-27・37，38，41～68）

位置：W0-297-a　規模：1.32×1.25／×／m

特徴　Ⅴ層下位で小礫と土器のまとまりを確認した。周囲には他にまとまりをもつ遺物等は検出されなかった。土壙等は検出できなかった。

遺物　1013はⅠ群b-4類の深鉢形土器口縁部である。40574,4539,40356はⅣ群b類の深鉢形土器である。

時期　同時に確認した遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考えられる。（佐藤　剛）

LS-102（図Ⅳ121／図版-27）

位置：W0-278-c,W0-278-d,X0-278-d,X0-278-a,X0-278-b　規模：1,28×0.63／×／m

特徴　調査区西側の段丘上で検出された小規模な集石である。径3～8㎝の円礫がほとんどである。性格は不明である。

遺物　掲載遺物なし

時期　縄文時代早期～晩期末葉と考えられる。（皆川洋一）

8．フレイク・チップ集中

LFC-101（図Ⅳ-122／図版-37，38）

位置：D-287-d　規模：0.30×0.30／×／m

特徴　Ⅴ層上面でフレイク・チップの集中を確認した。一部に撹乱を受けていたが集中の範囲は、直径0.3mでほぼ円形に広がっていた。掘り込みはなかった。近くにはⅥ層土面が掘り込み面と考えられるＬＰ－104がある。Ib-3が抽出されている。

遺物　1022はⅠ群b-3類の深鉢形土器胴～底部である。

時期　抽出された遺物から縄文時代早期後葉の時期と考えられる。（佐藤　剛）

LFC-102（図Ⅳ-122／図版-126～130）

位置：V0-295-c,W0-295-d　規模：3.09×2.07／×／m

特徴　Ⅴ層中位でフレイク・チップの集中を確認した。全体にまんべんなく広がっていた。石器の製品が出土しているが、包含層と異なる出土状況ではないため遺構に伴う遺物かは明らかではない。

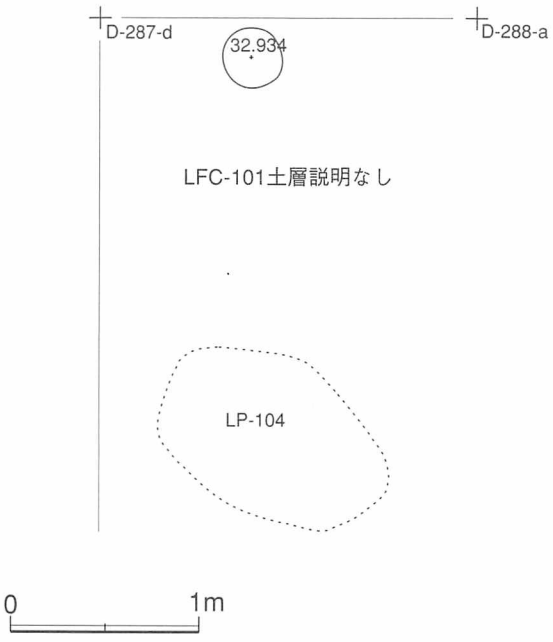
遺物　1～4は石鏃。1は有茎平基鏃。尖頭部側縁が内湾している。2～4は有茎凸基鏃。4は先端および茎部を欠損している。1～3は黒曜石製、4はメノウ製。

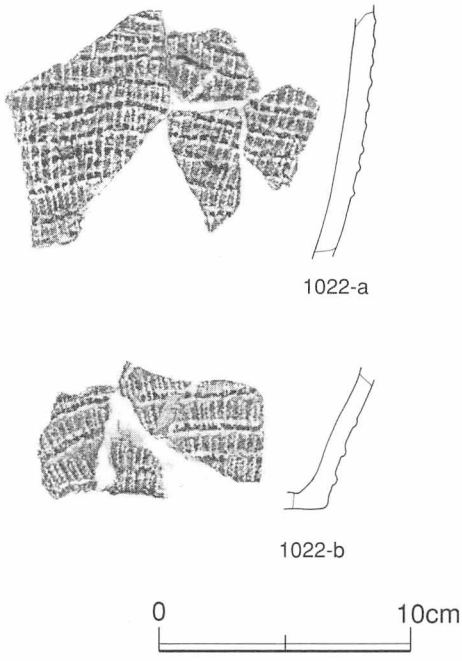
時期　接合関係がないため不明であるが、包含層での遺物の出土状況から縄文時代晩期の遺構の可能性が高い。（佐藤　剛）



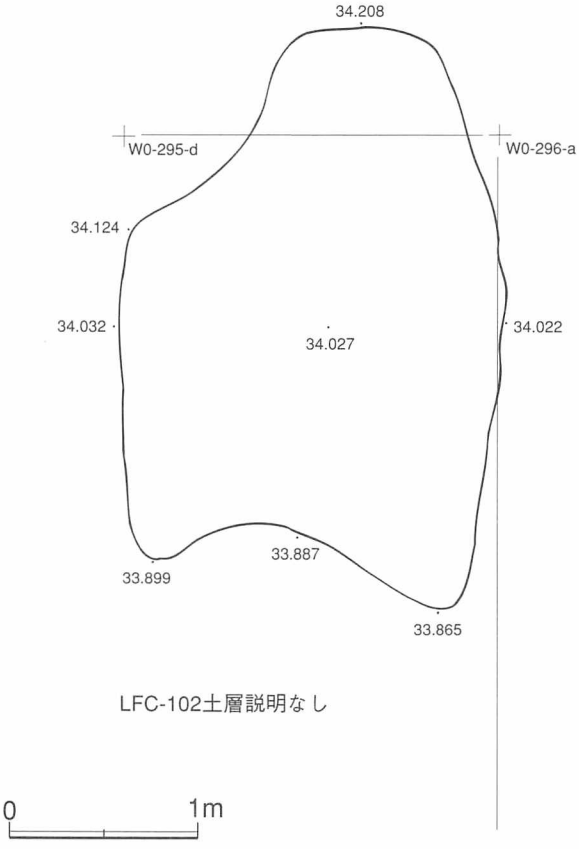
図Ⅳ-121　LS-101・102と遺物

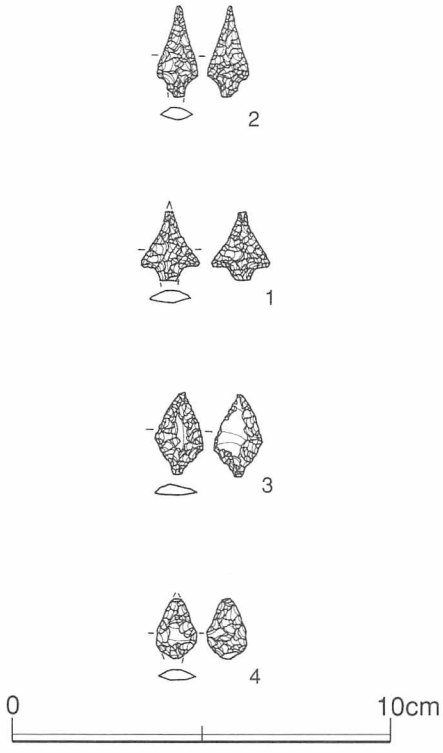
LFC-101





LFC-102





図Ⅳ-122　LS-101・102 と遺物

Ⅴ　低位段丘の調査

本遺跡調査範囲の東端から台地上の段丘崖に沿って、282ライン付近の突端部まで形成される低位の段丘を「東の沢」と呼称した。また調査区北側の290ライン付近から南西方向に流れ込み、台地上を二分する沢を「西の沢」と呼称し、区分して調査した。両者は突端部の段丘崖下で合流し、国道337号線方向の沖積低地へ注いでいたものと思われる。東の沢は花岡のいう「段丘面Ⅲ」にあたり、西の沢は「未分類」としたものである（1994、北埋調報92）。

1 「東の沢」の調査（図Ⅴ-1～図Ⅴ-9／図版-33・34・35）

調査範囲に接して、南側には馬追丘陵の西斜面から南西方向に現行のキウス川が流れており、低位段丘の地表面との比高差は2～3mをはかる。この低位段丘はキウス川の氾濫原と思われるもので、およそ河成堆積物によって形成されている。

調査は平成7年度と8年度にわたって行っている。平成7年度はW0・X0ラインおよびA-304グリッドを手堀によって調査し、主に土層の堆積状況、遺物包含層の確認に努め、キウス川の流路切り替え工事に伴う範囲（Z0ライン以北）と295～300ラインの間を終了した。8年度は残りの部分について調査し、終了している。なお295ライン以西については調査範囲対象外であったが、重機によるトレンチ調査を行って、遺物包含層が比較的新しい年代の河成堆積物によって削られていることを確認している。

また、平成8年度の調査終了間際に、駄目押しとして東西に15m程の長さのトレンチを重機によって掘削したところ、Ⅴ-5層の中礫層約50㎝下位からおよそ120万年前と推定される貝化石層とそれよりも新しい時期の逆断層の痕跡を確認している。現地において、北海道開拓記念館の赤松守雄氏、山田悟郎氏他に指導していただきながら、貝化石および土層のサンプルを採取している。また、断層に関しては、工業技術院地質調査所の羽坂俊一氏にご教示を賜った。その詳細については、本報告書では時間的猶予から触れることはできないため、後日他稿にて報告される予定である。

a　土層

調査境界線の北壁の土層断面の観察から、Ta-c降下軽石、岩片層を挟んでⅢおよびⅤ層に相当する時期の泥炭質および腐植質土と数本の旧河道による無機物の河成堆積物の互層が約1.5～2m程の厚さで堆積していた。

主に人為的な遺物が認められた土層は、Ta-c上位ではⅢ-1、Ⅲ-2層、下位ではⅤ-1、Ⅴ-3層である。調査は、主たる遺物包含層に関しては手堀り調査を、それ以外はW0・X0ラインを除いて、重機による掘削を行った。なお実質的に調査を行ったのはⅤ-3層までである。それよりも下位の層では、Ⅴ-5a・b層から遺物が数点出土しているが、本層は現行のキウス川の水位よりも大幅に低いレベルに急傾斜で落ちていく堆積状況であったため、全面的な調査は困難であると認識し、トレンチ調査および部分的な調査で終了している。平成7年度調査で確認したⅤ-1およびⅤ-3層と8度調査のⅤ-1およびⅤ-3層は、出土遺物、堆積状況から時期的におよそ対比できるものと考えられる。

Ⅲ層から下位の土層については、旧河道および泥炭層の堆積状況から、以下のように分層した。なお、先行して遺物包含層の確認を行ったW0・X0ラインおよびA-304調査区における状況についても、若干触れる。

Ⅲ-1層：色調、粒度に幅がある。Ta-a直下の暗褐色シルト質粘土および下位の褐色～黒褐色を呈するシルト、細砂、細礫、東側の褐色粘土を総称する。東側については、下層の自然堤防状の盛り上がりによって分かれているため、連続するものかどうか不明であるが、およそ東の沢全体に分布する。段丘崖寄りに比較的厚く堆積し、層厚はおよそ5～70cm。Ta-a直下の層は若干腐植が発達していることお

よび堆積状況から河川が比較的安定した時期に発達したものと思われる。この層から主に続縄文時代の遺物および焼土、炭化物が検出されている。遺物は段丘崖付近に散点的に出土し、離れるにしたがってほとんど出土しなくなる。下位の細礫、細砂の層では人工遺物・大型の生物遺体は認められない。

Ⅲ-2層：上位の黒褐色粘土および下位の暗褐色粗砂を総称する。上層のⅢ-1層に削られており、段丘崖付近にのみ分布する。層厚は10～50cm。黒褐色粘土層からは続縄文時代の遺物を主として、中期後半～晩期末葉の土器が出土しており、また二次的な堆積と思われる炭化物、集石が検出されている。大型の生物遺体は認められない。

Ⅲ-3a層：色調、粒度に幅がある。灰褐色、暗褐色～黒褐色を呈する砂、粘土、腐植泥を総称する。河成堆積物である。層厚は10～60cm。段丘崖寄りに堆積するが、全体の分布は不明である。下位の腐植泥質の層からは流木が大量に出土するが、木製品は認識できなかった。遺物は下底付近から流木とともに土器が数点出土している。また、昆虫遺体も出土している。

Ⅲ-3b層：色調、粒度に幅がある。黄褐色、褐色～黒褐色を呈する砂、シルト、粘土を総称する。河成堆積物である。層厚は20～80cm。Ⅲ-3a層に切られているため、段丘崖から離れた範囲に堆積するが、全体の分布は不明である。人工遺物・大型の生物遺体は認められない。

Ⅲ-3c層：色調、粒度に幅がある。黄褐色、灰色、褐色～黒褐色を呈する砂、シルト、粘土、腐植泥を総称する。旧河道の氾濫堆積物である。流路はWo-306付近の調査区北壁から段丘崖下を通り、南側の調査区外へ続いていく。層厚は5～100cmで、Ⅳ層からⅤ-3層以下を削って堆積する。河床付近からは多量の流木が出土して上部の腐植泥質の層は流木を多量に含み、推定で10m程の長さの倒木も出土している。また河床付近からは縄文時代後期、晩期の遺物も散見できた。

Ⅳ層：東の沢全体に分布し、段丘崖下では約30cm程堆積する。6年度調査で確認されたとおり、上部にはにぶい黄褐色を呈する軽石を主とした細礫、下部には赤褐色～褐色を呈する岩片を主とする細礫質砂が認められ、両者の境に灰褐色の砂質シルトが介在していた。上部の層はTa-c1、下部の層はTa-c2にあたる可能性があり、類似した状況は、恵庭市ユカンボシE9遺跡でも確認されている（恵庭市教育委員会、1993）。

Ⅴ-1層：オリーブ黒色粘土。若干腐植が発達している。東の沢全体に分布する。層厚は約5～20cm。段丘崖から離れた地点で、上面から株を検出しており、根はⅤ-2c層まで発達していた（図-に一括して掲載）。木が生育している状況および若干腐植が発達した層であることから、河川が安定した時期に形成されたものと思われる。また段丘崖直下に限って、縄文時代晩期後葉の遺物が散点的に出土する。層位的にみて台地上の遺物出土状況と一致しており、当該期に形成されたものと思われる。

Ⅴ-2a層：暗オリーブ灰色シルト。306ライン付近から比較的厚く堆積するもので、段丘崖下では認められない。ただし全体の分布は不明である。層厚は5～10cm。人工遺物は稀に出土する程度で、大型の生物遺体は認められない。

Ⅴ-2b層：オリーブ黒色シルト質粘土。北壁の土層断面では、段丘崖下から308ライン付近まで堆積するが、全体の分布は不明である。層厚は5～15cm。人工遺物・大型の生物遺体は認められない。

Ⅴ-2c層：暗赤褐色、暗灰黄色を呈するシルト質粘土～シルト。およそ東の沢全体に分布する。下位のⅤ-3層を削って厚く堆積した部分が数ヵ所認められる。特に段丘崖から離れた範囲で厚く堆積し、東端では下位にシルト層が堆積する。層厚は約10～60cm。上部の層は腐植泥質であり、厚く堆積した範囲では流木が多量に出土する。また本層下底では、Ⅴ-1層から伸びた株根が広がる状況が認められた。人工遺物は認められない。

Ⅴ-3層：黒色～黒褐色腐植泥および旧河道中の堆積物を総称する。黒色～黒褐色腐植泥は東の沢の調査においてメインとなる遺物包含層である。段丘崖下に厚く堆積し、およそ東の沢全体に分布する。層厚は約5～60cm。段丘崖寄りでは色調の濃い黒色を呈して層厚は厚く、段丘から離れていくと色調は薄く、堆積も浅くなる。本層からは、主に縄文時代後期中葉～末葉の遺物（Ⅳ群b類、c類）が出土する。土器、石器などは段丘崖下から集中して出土する傾向があり、動物遺存体、植物遺体、昆虫遺体等も散点的に含む。出土遺物から西の沢のⅤ-3層に対比でき、およそ同時期に形成された可能性がある。

段丘崖から離れた北東～南西側では、黒色～黒褐色腐植泥が形成された時期と時間差の小さいものと考えられる旧河道を検出している。旧河道の中位および下部から多量の流木、焼け材に混ざって木製品が数点出土しており、周辺では縄文時代後期（主にⅣ群c類）の遺物が散見できた。

Ⅴ-4層：色調、粒度に幅がある。暗オリーブ灰、暗緑灰、黒褐色等を呈する細礫～シルト、粘土。遺物包含層であるⅤ-3層とⅤ-5層の間に介在するものを総称する。層厚は確認できた部分でおよそ50～100cm。人工遺物・大型の生物遺体は認められない。

Ⅴ-5a・b層：色調、粒度に幅がある。暗オリーブ灰、黒褐色～黒色等を呈する細礫～シルト、粘土。腐植の発達した黒色粘土および黒褐色シルト質粘土層とその間層を総称する。この腐植層から縄文時代前期前半・中期の遺物が数点出土している。段丘崖付近に分布することは確認しているが、全体の分布に関しては不明である。また下限についても不明である。

b　Ta-c上位の調査

Ta-c上位では、数本の旧河道跡が段丘崖に沿って流路を変えながら、堆積した状況が認められた。層厚はおよそ50～200cm強で、一部下限は不明である。遺物包含層は主にⅢ-1層、Ⅲ-2層である。包含層については、およそ手堀調査を主体に行い、その他については遺物出土分布の確認調査後に、重機による掘削を行った。以下には、遺物包含層であるⅢ-1・2層と流木を多量に含んでいたⅢ-3a・3c層について説明する。

Ⅲ-1層

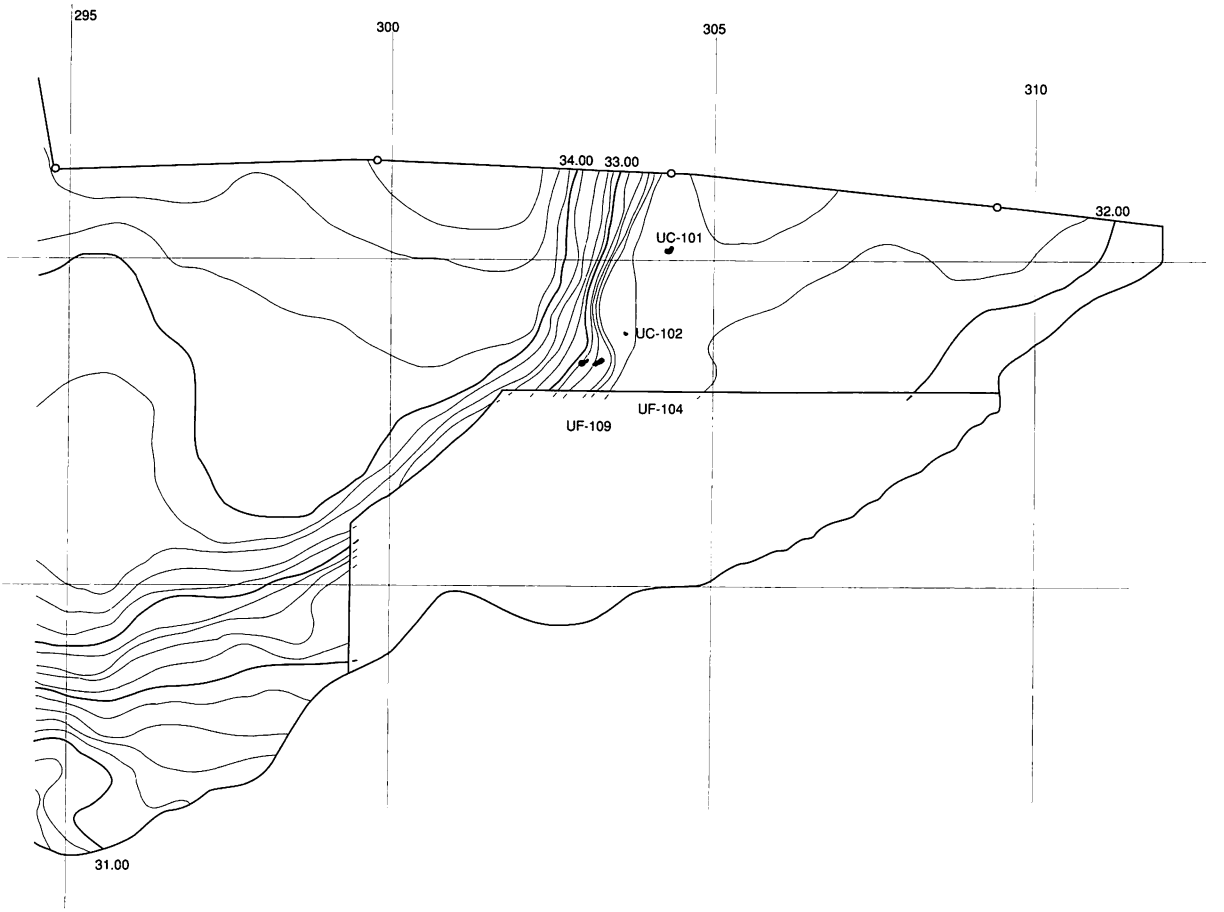
Ta-a直下に堆積するもので、およそ東の沢全体に分布する。上部は若干腐植が発達した暗褐色を呈し、旧河道が安定した時期に発達したものと思われる。

確認調査により、上部の腐植土層が遺物包含層であることを認識できた。ただし段丘崖直下に限られ、高位段丘から離れるにしたがって出土しなくなるため、調査は段丘崖直下に限って行った。遺物はほとんどが土器であり、続縄文時代のものが主体を占める。遺構は段丘崖直下のY0-303調査区から、二次的に堆積したものと思われる焼土1基、炭化物1基が検出されている。本層は認識できた範囲では生活面としての痕跡は希薄である。流木などの大型の生物遺体は認められなかった。

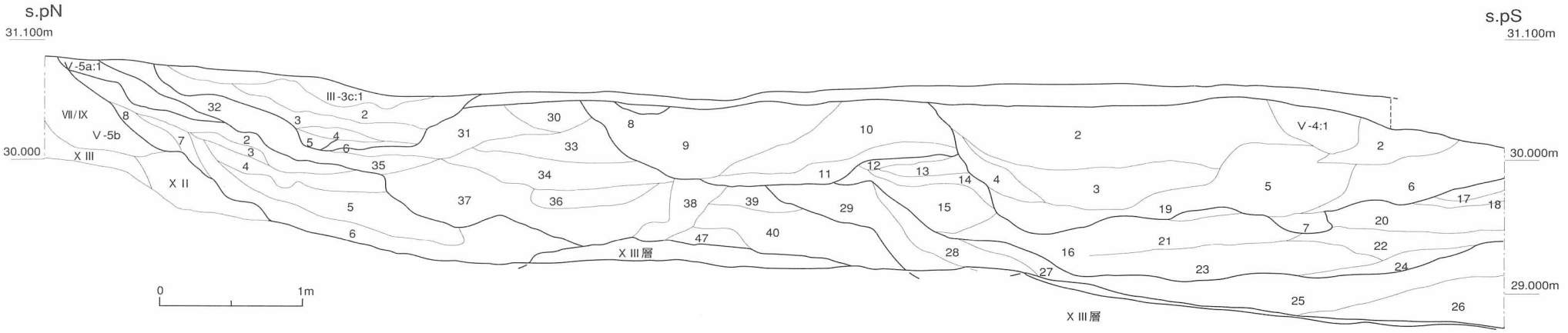
Ⅲ-2層

上層のⅢ-1層の旧河道に削られており、段丘崖直下の300～305ライン付近にのみ分布する。Ⅲ-1層同様、上部は腐植が発達した層であり、旧河道が安定した時期に発達したものと思われる。

上部の腐植土層から遺物・遺構を検出している。遺物は土器、石器および礫が出土している。土器は続縄文時代のものが主体を占め、部分的に集中して出土する状況が認められた。Ⅲ-1層出土のものと、

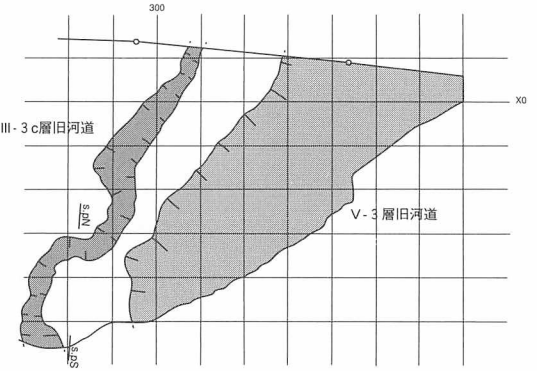


図Ⅴ-1　東の沢Ⅲ層上面の地形と遺構位置図



Ⅲ-3c層：1　暗褐色（5YR3/4）腐植泥＋オリーブ黒色（5Y3/2）砂の互層
2　オリーブ黒色（7.5Y3/2）火山灰　パミス（0.2~1cm）を少量含む
3　灰オリーブ色（7.5Y4/2）中礫　パミス（0.2~1cm）を少量含む
4　黒色（2.5Y2/1）細砂＋暗褐色（7.5YR3/4）腐植泥の互層
5　オリーブ黒色（7.5Y3/1）細砂　パミス（0.2~3cm）を上位に含む
6　黒色（5Y2/1）細礫
V-3層　黒色（10YR2/1）粘土　縄文時代後期中葉～末葉の遺物包含層
V-4層：1　灰オリーブ色（7.5Y5/2）パミス
2　緑灰色（10GY5/1）シルト＋オリーブ黒色（10Y3/1）腐植泥の互層
3　オリーブ黒色（5Y2/2）腐植泥＋緑灰色（7.5GY5/1）シルトの互層
4　オリーブ黒色（5Y3/1）腐植泥＋緑灰色（7.5GY5/1）シルトの互層
5　オリーブ黒色（10Y3/2）中礫　黒褐色粘土のブロックが見られる　パミス（0.1~2cm）を多量に含む
6　緑灰色（10G5/1）シルト＋オリーブ黒色（5Y3/2）腐植泥の互層
7　黒色（2.5Y2/1）中礫＋暗緑灰色（7.5GY4/1）シルトの互層
8　暗オリーブ色（7.5Y4/3）細砂　オリーブ黒色粘土のブロックが見られる　パミス（0.2~2cm）を多量に含む
9　オリーブ黒色（10Y3/1）腐植泥＋オリーブ灰色（5GY5/1）シルトの互層
10　オリーブ黒色（5Y3/1）腐植泥＋緑灰色（7.5GY5/1）シルトの互層
11　オリーブ黒色（5Y3/2）粘土の互層　パミス（0.1~1cm）を多量に含む
12　黒色（7.5Y2/1)粘土　パミス（0.1~1cm）を少量含む
13　オリーブ黒色（5Y2/2）腐植泥＋緑灰色（7.5GY5/1）シルトの互層
14　暗緑灰色（7.5GY4/1）粘土　細砂をブロック状に含む
15　暗緑灰色（10GY4/1）シルト＋オリーブ黒色（7.5Y3/2）腐植泥の互層　パミス（0.1~3cm）を多量に含む
16　黒色（10Y2/1）細砂　中礫（1~2cm）を下位に含む
17　黒褐色（5YR3/1）粘土　パミス（0.1~1cm）を少量含む
18　暗緑灰色（5YG4/1）粘土
19　オリーブ黒色（5Y3/1）粘土　細砂を少量含む
20　暗緑灰色（10GY4/1）シルト
21　暗緑灰色（5G4/1）シルト＋オリーブ黒色（7.5Y3/2）腐植泥の互層　中礫（1~3cm）を含む
22　緑灰色（10GY5/1）シルト＋黒色（N2/0）腐植泥の互層
23　黒色（10Y2/1）粗砂　下位に中礫（1~3cm）を含む
24　緑灰色（10GY5/1）シルト＋黒色（N2/0）腐植泥の互層　２２と同質だが腐植泥の部分が薄い
25　黒色（7.5Y2/1）細礫～中礫（0.2~3cm）
26　黒色（2.5GY2/1）中礫（1~5cm）
27　黒色（2.5GY2/1）腐植泥　パミス（0.1~1cm）を含む
28　オリーブ黒色（5Y3/2）粘土＋暗緑灰色（10GY3/1）シルトの互層
29　灰色（10Y4/1）細砂　パミス（1~2cm）を多量に含む
30　暗オリーブ色（7.5Y4/3）細砂　オリーブ黒色（5Y3/2）粘土のブロックが見られる　パミス（0.2~2cm）を多量に含む
31　暗褐色（10YR3/3) 腐植泥＋灰色（10Y4/1）細砂の互層
32　黒褐色（7.5YR3/2）腐植泥＋オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘土の互層
33　黒色（10Y2/1）腐植泥＋オリーブ灰色（5GY5/1）シルトの互層
34　暗オリーブ灰色（5GY4/1）細砂　オリーブ黒色（5Y3/1）腐植泥のブロックが見られる　パミス（0.2~2cm）を多量に含む
35　灰オリーブ色（5Y4/2）シルト＋灰色（7.5Y4/1）細砂の互層
36　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）腐植泥　細礫（0.2~1cm）を含む
37　オリーブ黒色（5Y3/1）腐植泥　パミス（0.1~1cm）を少量含む
38　オリーブ黒色（5Y3/1）腐植泥　パミス（0.1~1cm）を若干含む
39　暗緑灰色（10G4/1）シルト
40　暗青灰色（5BG4/1）細砂　中礫（1~2cm）パミス（1~3cm）を多量に含む
41　灰オリーブ色（5Y4/2）粗砂　中礫（1~5cm）を多量に含む

V-5a層：1　黒褐色（7.5YR3/2）粘土　縄文時代前期後半、中期後半の遺物包含層
2　オリーブ黒色（5Y2/2）シルト　パミス（1~2cm）を含む
3　暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト
4　オリーブ灰色（5GY5/1）細砂＋黒褐色（2.5Y3/1）腐植泥の互層
5　緑灰色（7.5GY5/1）粗砂＋黒色（2.5YR1.7/1）腐植泥の互層
6　黒色（N2/0）中礫　（1~4cm）
7　緑黒色（10Y2/1）細砂　パミス（1~2cm）を含む
8　黒色（5Y2/1）シルト＋黒色（2.5GY2/1）細砂の互層
V-5b層　暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト 縄文時代前期後半、中期後半の遺物包含層
Ⅶ／Ⅸ　緑灰色（10GY5/1）粘土　パミス（1~2cm）を含む
Ⅹ Ⅱ？　オリーブ黒色（10Y3/2）粘土＋暗緑灰色（10GY4/1）細砂の互層　パミス（1~2cm）を含む
Ⅹ Ⅲ　暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト　基盤層



図Ⅴ-2　平成8年度調査区域南北土層断面図

図Ⅴ-3　旧河道位置図

ほとんど時期差は無い。縄文時代後期中葉～末葉の土器も点数的に目立つが、層位的な面から対応しない時期の遺物であり、台地上から崩落・廃棄されたものと考えられる。遺構は二次的に堆積した炭化物1基、集石1基が検出されている。集石としたものは、周辺から礫が散点的に出土する状況のなかで、まとまっていたものを扱った。原位置を保ったものか、崩落・廃棄されたものかは不明である。「東の沢」寄りの高位段丘で検出された、続縄文時代の土壙墓出土の礫と同様な礫であることが注意される。流木などの大型の生物遺体は認められなかった。

Ⅲ-3a層

段丘崖下に堆積し、Ⅲ-3b層に切られている。河成堆積物によって充填されるが、流木を多量に含む泥炭質の部層が大きな幅を占める。調査時には流木によって足の踏場に困る程であった。上部からは比較的小型のもの、炭化したもの、樹皮および昆虫遺体などが出土し、下底からは比較的大型のものおよび土器が数点出土した。遺物の比重が影響したものと考えられる。流木の長軸方向は平均して、段丘崖に沿った旧河道の流水方向に沿ったものが多い。取り上げ後、水洗作業を行って加工痕等の人為的な痕跡の確認に努めたが、木製品は認められなかった。

Ⅲ-3c層（図Ⅴ-4）

北壁のセクションでは段丘崖寄りの306ライン付近に層厚のピークを持ち、確認できた範囲ではⅢ相当層中で最も厚く堆積する。特にピーク部分はⅤ相当層を大きく削っている。Zo-304、A-303調査区付近で段丘崖下に寄り添って通り、南側へ流れていく状況が認められた。

厚く堆積した旧河道の河床からは多量の流木と縄文時代後期、晩期（Ⅳ群b類、Ⅴ群c類）の遺物が若干出土している。流木の長軸方向はおおよそ旧河道の流水方向を向く。全点取り上げて観察したが、木製品と思われるものは認められなかった。旧河道の周辺から株を検出しているが、本層の河成堆積物によって充填される以前のものと考えられる。また大型の長さ10m以上、径約80cm程の倒木が出土しており、注意される。Y0-306付近にあった大型の株に対応するものと思われ、本旧河道の氾濫時とほぼ同時期に倒壊した可能性が考えられる。

c　Ta-c下位の調査

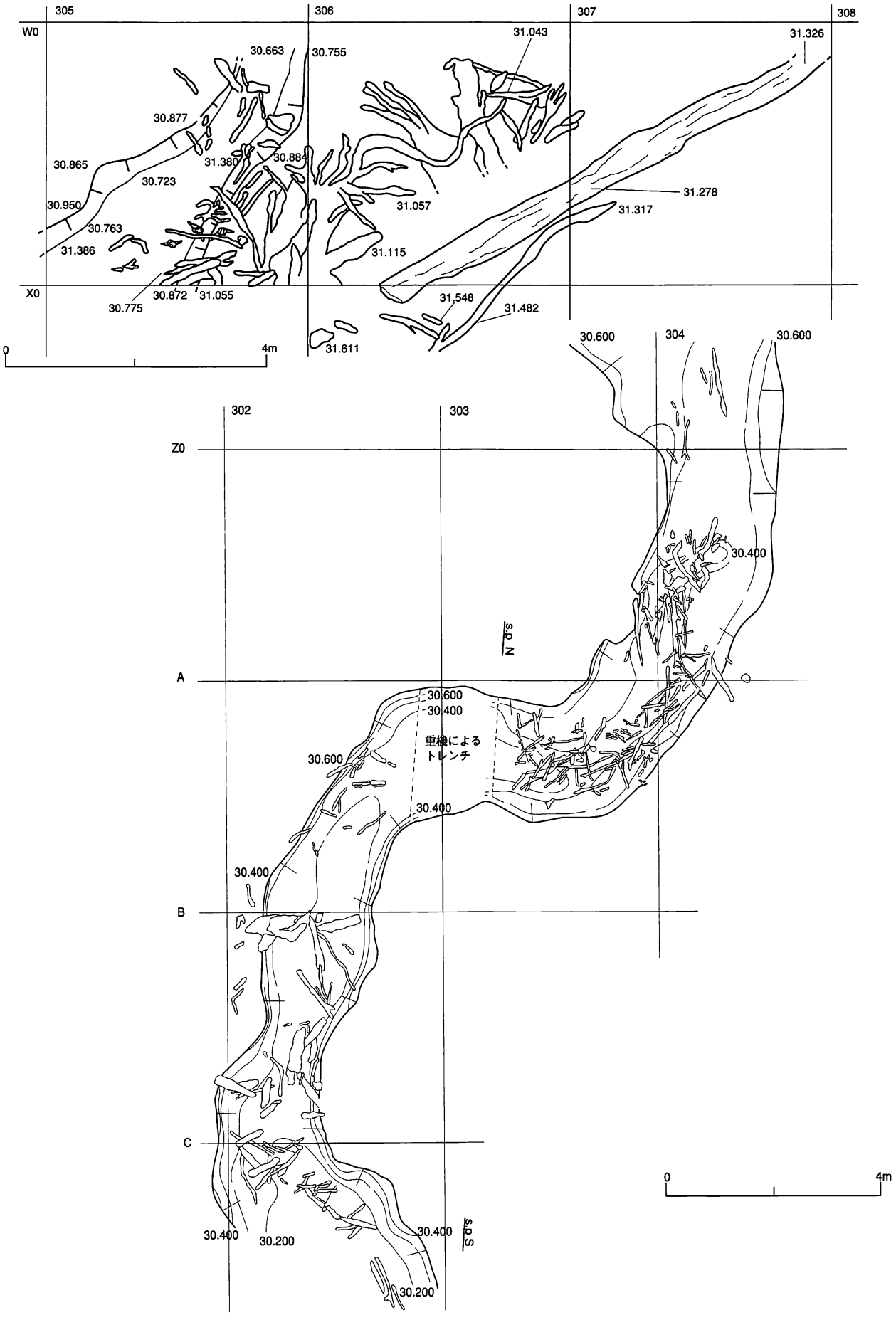
Ta-c下位でも、河川が安定した時期の腐植粘土層とシルトを主体とする河成堆積物層によって形成されている。調査は主な遺物包含層であるⅤ-3層およびⅤ-3層の旧河道跡を中心に、手堀りによる調査を行った。Ⅴ-3層以下については、トレンチ等による確認調査を行ない、遺物が出土する部分に限って調査している。段丘崖直下に限り分布するⅤ-5a・b層については、無遺物層であるⅤ-4層を重機で掘削した後に手掘り調査を行なっている。なお遺物包含層の名称に限っては、平成6年度調査のものと出土遺物、堆積状況から時期的におよそ対比できるものと考え、統一してある。以下には、主な調査対象としたⅤ-3層、Ⅴ-5a・b層について説明する。

Ⅴ-3層（図Ⅴ-5～9）

黒色腐植泥の調査

Ⅲ-3c層旧河道跡に削流された部分および本層旧河道跡部分以外は、東の沢全体にほぼ分布し、先行するトレンチ調査の段階で本層が主たる遺物包含層と認識した。層厚は段丘崖直下に厚く堆積し、離れるにしたがって薄くなる。特に295ライン付近では土質、色調によって3枚に分層できる部分もあったが、出土遺物による明確な時間差は不明である。

本層からは主に縄文時代後期中葉・末葉の遺物（Ⅳ群b類、c類）が出土する。土器、石器等は段丘崖直下から集中して出土する傾向があり、動物遺存体、植物遺体、昆虫遺体等も散点的に含む。中でも



図Ⅴ - 4　Ⅲ -3c 層旧河道焼け材・流木出土状況図

（上図：平成 7 年度調査、下図：平成 8 年度調査）

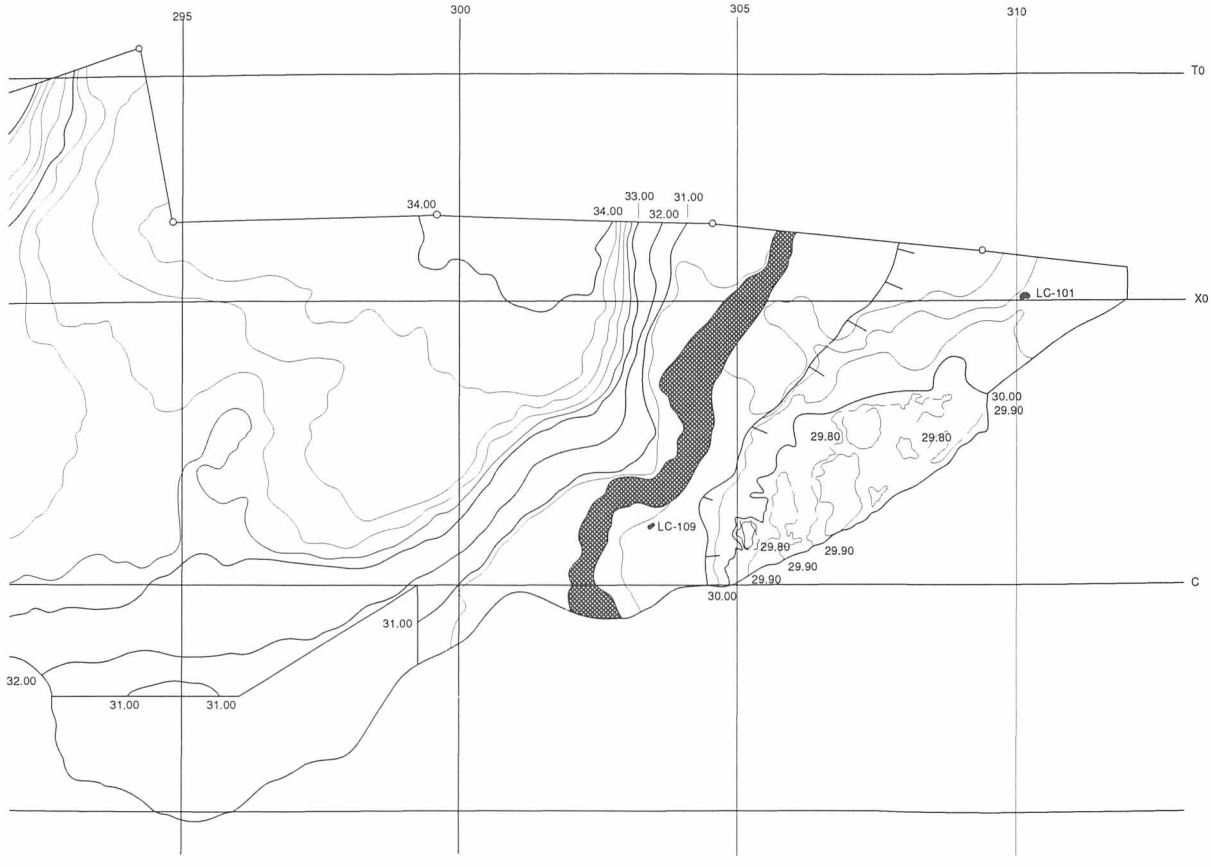
土器片が多量に出土していることが注意される。これら出土遺物から、本層は西の沢のⅤ-3層とほぼ同時期に形成されたものと考えられる。

段丘崖から離れた平坦面からは、炭化物の集中が2か所認められた。周辺からはⅣ群c類の土器片が若干出土している。本層中には同様な炭化物を散点的に含んでいるため、人為的なものかどうかは不明である。

d　旧河道跡の調査

調査区北壁のWo-308区付近からA-304区付近より東側に旧河道跡を検出している。調査区域内では、右岸の肩部と河床の一部を確認している。土層の堆積状況および出土遺物の比較から、黒色腐植泥が形成された時期と本河の氾濫した時期と時間差は小さいものと考えられる。

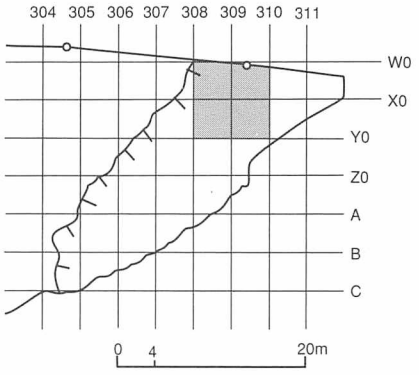
河床付近の礫層および直上のシルト層から木製品が5点出土している。流路が若干内湾した部分で確認されたものである。周辺からは、多量の流木、焼け材およびⅣ群b類、c類の遺物が散点的に出土している。ただし、木製品相互の出土位置には関連性は認められなかった。このうち明瞭な加工痕をもつものは、舟形状の容器と、槌状木製品、両端が尖頭状に加工された棒である。このうち尖頭加工の棒が平成8年度調査区出土で、他は7年度出土である。舟形容器は底部から検出し、横を向いた状態で出土した。鎚状のものは柄部を欠いた状態で出土している。平成6年度調査でも同様なものが3点出土しており、これで4例目となる。他に板材と思われるもの、若干炭化した割材が出土している。（Ⅵ章－4）

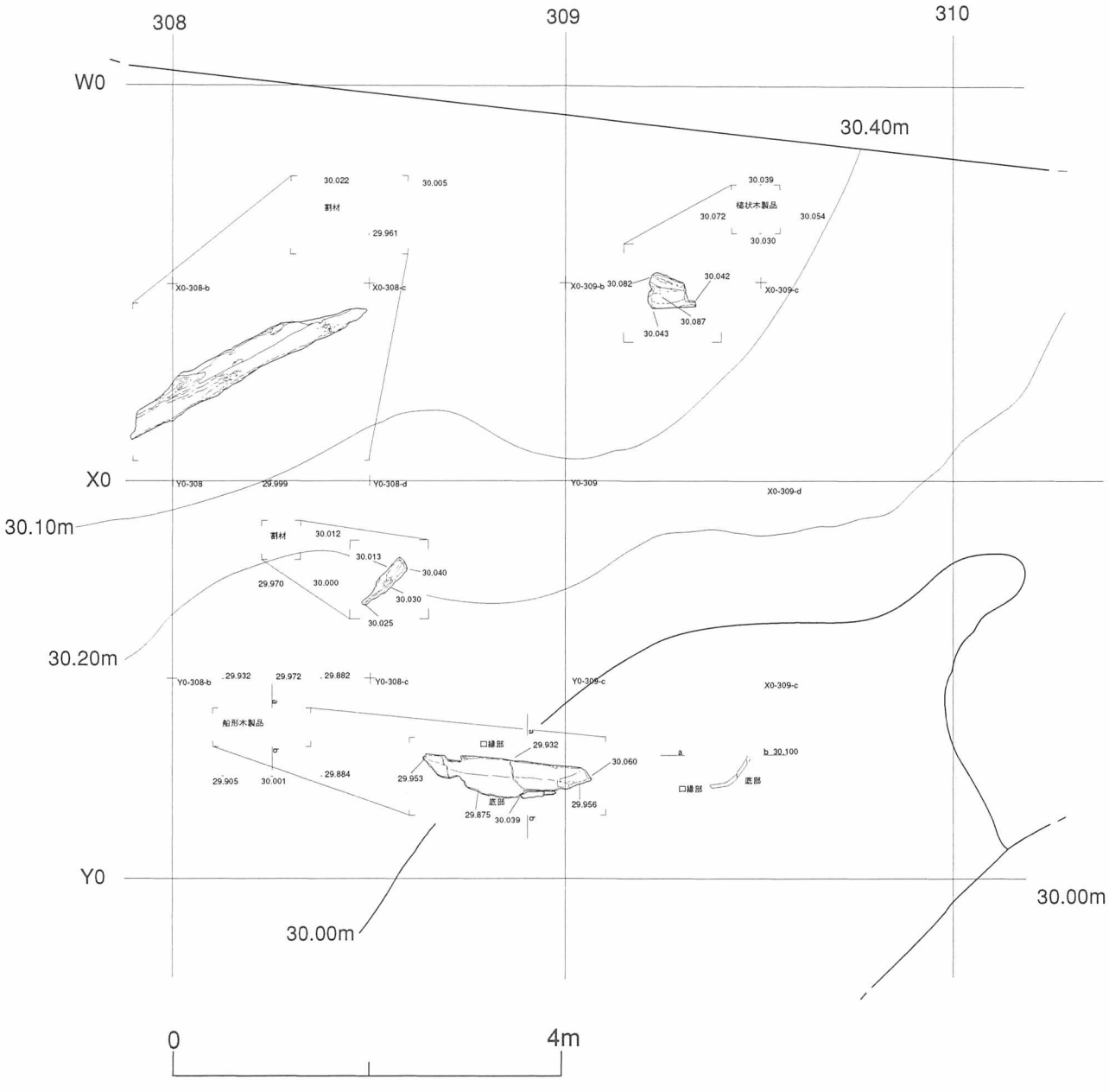


図Ⅴ-5　Ⅴ-3層下面の地形

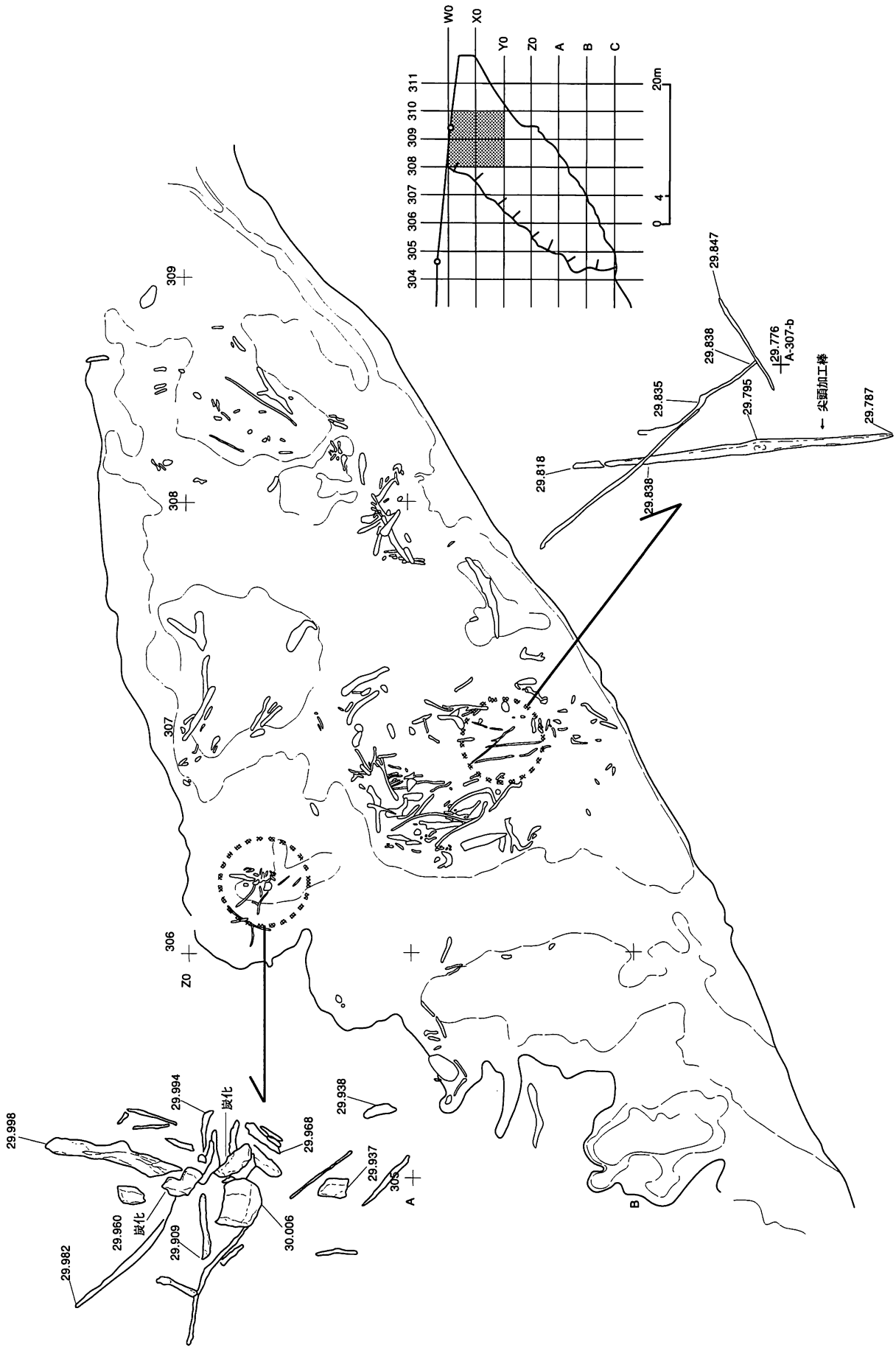
Ⅴ-5a、5b層

黒色～黒褐色の腐植泥およびシルト質粘土。段丘崖直下に限りおよそ東の沢全体に分布する。それ以外の部分は主にⅤ-4層の氾濫堆積物によって削流されたものと考えられる。 調査は無遺物層であるⅤ-4層を重機によって掘削・除去した後、分布している部分のみ手掘りで行なった。土層断面から5aと5bの間には細砂～シルトの間層が認められる。いずれも縄文時代前期、中期（Ⅱ群a類、Ⅲ群b類）の遺物が散点的に出土している。また大型の植物遺体等は出土していない。





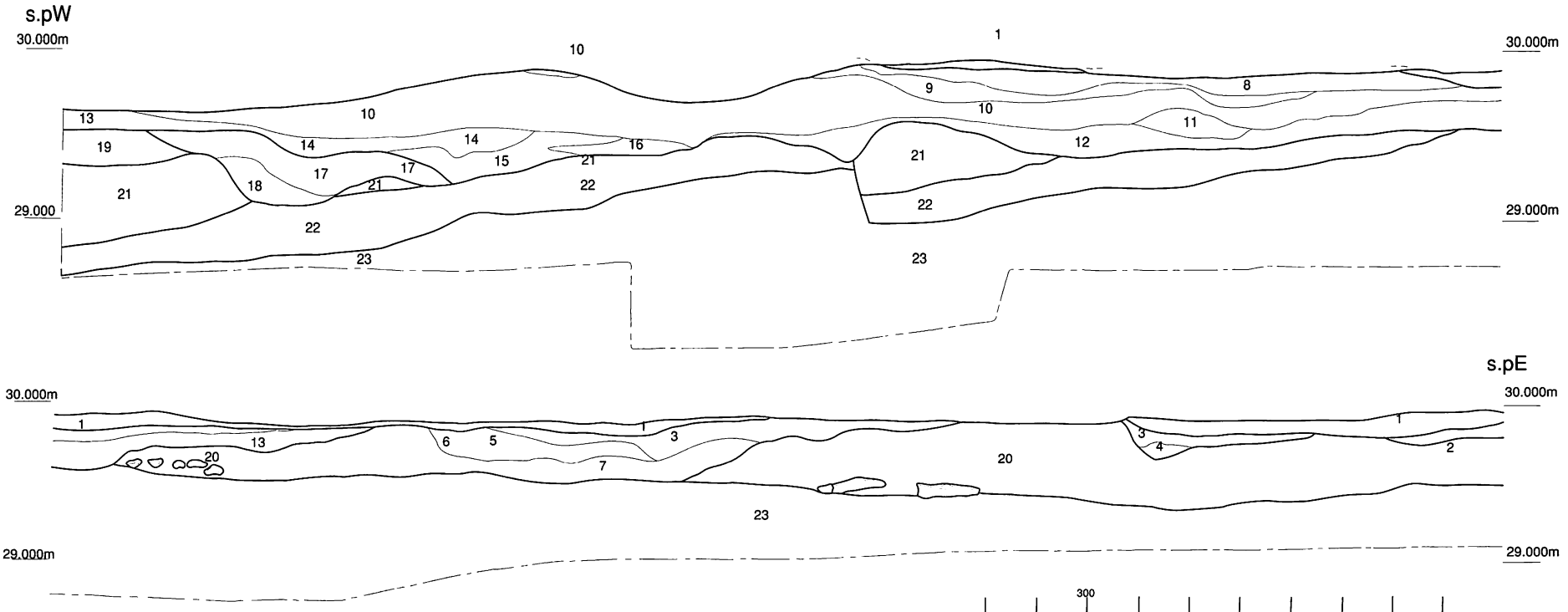
図Ⅴ-6　平成7年度調査区域Ⅴ-3層旧河道木製品出土状況図



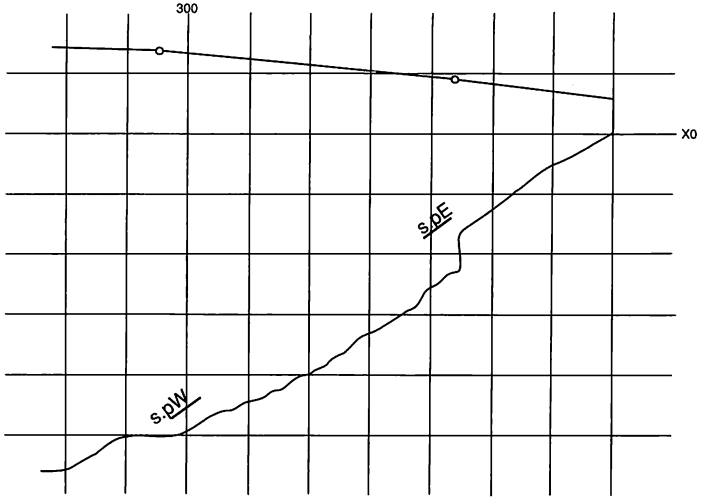
図Ⅴ-7　平成8年度調査区域Ⅴ-3層旧河道木製品・焼け材・流木出土状況図



図Ⅴ-8　平成8年度調査区域最終面の地形



1　中礫（0.5~2cm）　主に縄文時代後期末葉の土器および木製遺物も若干出土
2　暗緑灰色（10GY3/1）細砂
3　暗オリーブ灰色（2。5GY4/1）シルト
4　中礫（約1cm）
5　暗オリーブ灰色（2。5GY4/1）細砂
6　暗オリーブ灰色（2。5GY3/1）シルト
7　中礫（1~2cm）
8　暗オリーブ灰色（2。5GY3/1）砂質シルト
9　暗緑灰色（7.5GY3/1）粘土
10　オリーブ黒色（5Y3/1）粘土
11　オリーブ黒色（7。5Y3/1）腐植泥
12　中礫（1~5cm）
13　暗オリーブ灰色（5GY3/1）砂質シルト
14　暗オリーブ灰色（2。5GY4/1）粗砂
15　中礫（0.5~2cm）
16　オリーブ黒色（10Y3/1）砂質シルト
17　オリーブ黒色（10Y3/1）砂質シルト　流木多量に含む
18　中礫（0.5~2cm）流木若干含む
19　中礫（1~3cm）
20　暗緑灰色（10GY3/1）シルト
21　暗緑灰色（10GY4/1）シルト　硬質
22　中礫（貝化石を含む）　下野幌層上部に位置付けられる
23　暗オリーブ灰色（2。5GY4/1）シルト　硬質



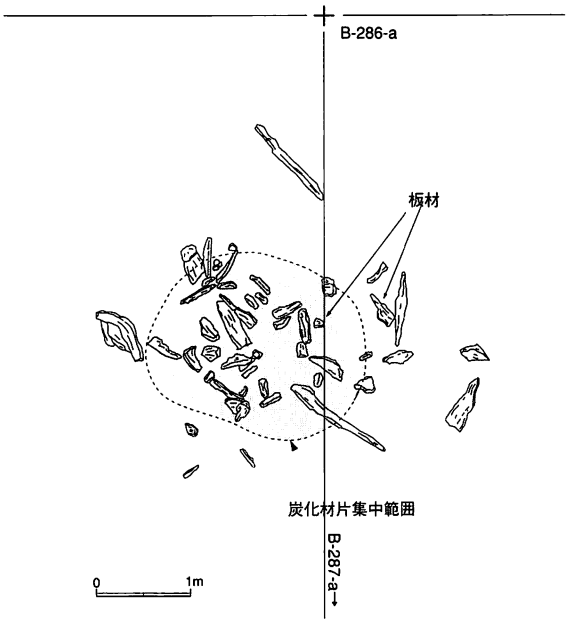
図Ⅴ-9　平成8年度調査東西土層断面図

2「西の沢」の調査（図Ⅴ-11・12／図版-36）

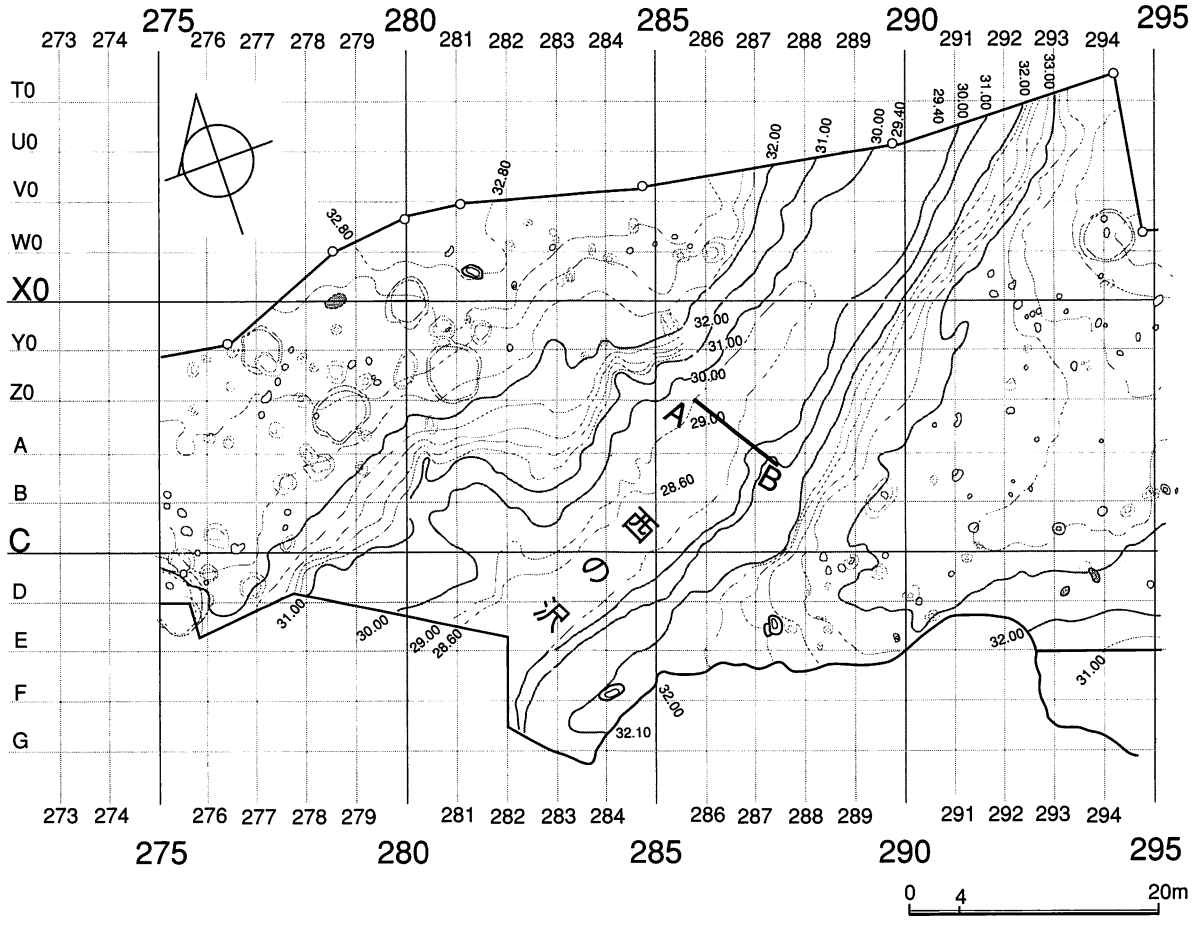
調査区内のほぼ中央に現在も小さな流れが認められる無名沢が位置しており、これを「西の沢」とし調査を行った。現時点では調査区のすぐ北側に位置する湧水点を源とする小河川であるが、段丘上との比高差が4～5m程あり沢へは急激に落ち込んでいる。

土層は重機のアームが届く限りの範囲で調査を行ったが水流による崩落のため十分なものではない。各層は水性の堆積物で構成されているが、包含する遺物の新旧に乱れがなく大きく氾濫することは希であったようだ。8・9層から縄文時代晩期末葉、13層から後期中葉、21層からは中期前半の遺物が出土しており、それぞれ基本層序のⅤ-1層、Ⅴ-3層、Ⅴ-5層に対比されると考えられる。

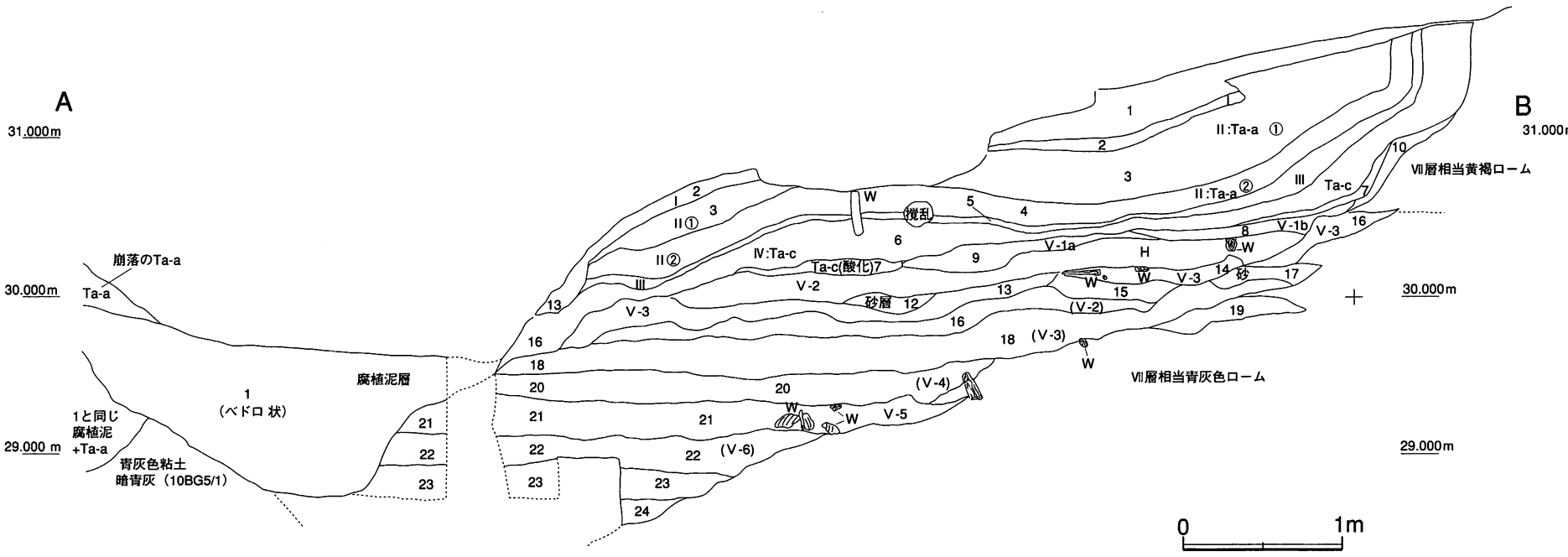
遺物は後期中葉のⅣ群b類のものが多く、それを包含する13（Ⅴ-3）層中からは板材が混じる炭化材の集中が検出されており沢底付近での作業が行われていたと考えられる。沢周辺の遺物分布を見てもⅣ群b類土器が両方の段丘縁辺で出土するが、それ以外の時期はこの水流で遺物分布が分断される傾向にある。



図Ⅴ-10　炭化材集中の出土状況



図Ⅴ-11「西の沢」の地形と土層断面の位置



土層説明

1. 極暗褐（Hue 7,5YR 2/3）V層に相当する腐植泥
2. 黒　褐（Hue 10YR3/1）腐植泥に多数の軽石が混入する
   この軽石はEn-aか？
3. 黒　（Hue 10YR 2/1）腐植土
4. 極暗褐（Hue 7,5YR2/3）植物センイ・小さな流木が混入する
   腐植泥層
5. 灰（Hue 10Y 4/1）細砂層に流木が混じるさらに小径の軽石も入る
6. 黒　褐（Hue 7,5YR 2/2）腐植泥＞シルト
7. 黒　褐（Hue 7,5YR 3/2）腐植泥層
8. 黒　褐（Hue 10YR3/2）腐植泥＋シルト
9. 緑灰（Hue 10YR5/1）粘土層
10. 極暗赤褐（Hue 5YR2/4）腐植泥層しまりがなくやわい
11. 褐灰（Hue 5YR4/1）V+シルト
12. 極暗赤褐（Hue 5YR2/4）腐植泥＞シルト 流木(大型)含む
13. 黄褐（Hue 2,5YR 5/3）細に軽石が少量混じる
14. 黒　褐（Hue 7,5YR 2/2）腐植泥＞軽石
15. 暗オリーブ褐（Hue 2,5YR3/3）砂＞シルト＞腐植泥
16. 黒　褐（Hue 10YR2/2）腐植泥＋シルト
17. 極暗褐（Hue 7,5YR2/3）腐植泥＋シルト＞軽石(小粒) 植物センイを多く含む
18. 黒　（Hue 7,5YR 2/1）腐植泥
19. 極暗褐（Hue 7,5YR2/3）腐植泥＋シルト＞軽石(小粒) 植物センイを多く含む
20. 極暗褐（Hue 7,5YR2/3）腐植泥＋シルト＞軽石(小粒) 植物センイを多く含む

図V-12 「西の沢」土層断面図

Ⅵ　包含層の遺物

1　土器

(1) Ⅰ群土器（図Ⅵ-1-1・2～／図版-37，38）

縄文時代早期は中葉～末葉と考えられるⅠ群a類、b-1～4類土器が出土した。

Ⅰ群a類土器（1002～1006、1034）

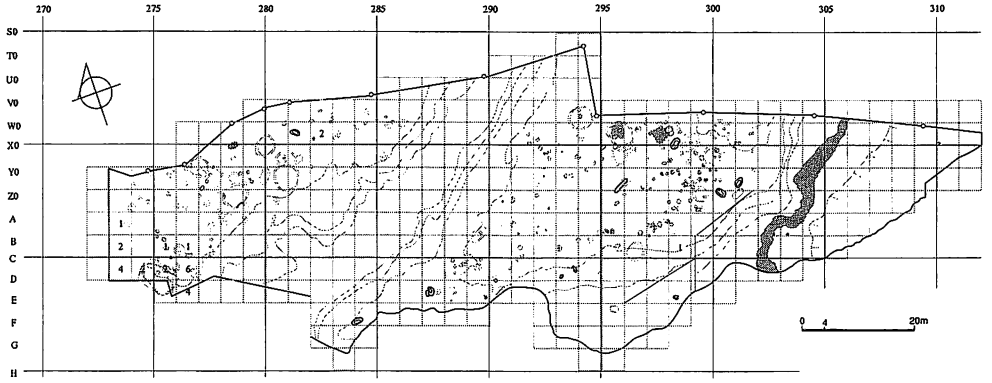
平成6年度調査に引き続いて出土した所謂「暁式」に相当する土器群で、出土地点もその時期の竪穴住居LH-3に近いLH-006の覆土中からそのほとんどが出土している。器形は全て深鉢形と考えられ、文様は無文もしくは貝殻条痕文様の模様だけのものが多く、少量のものには先述の器面に沈線や刺突が施されている。

表Ⅵ-1　包含層土器層一覧

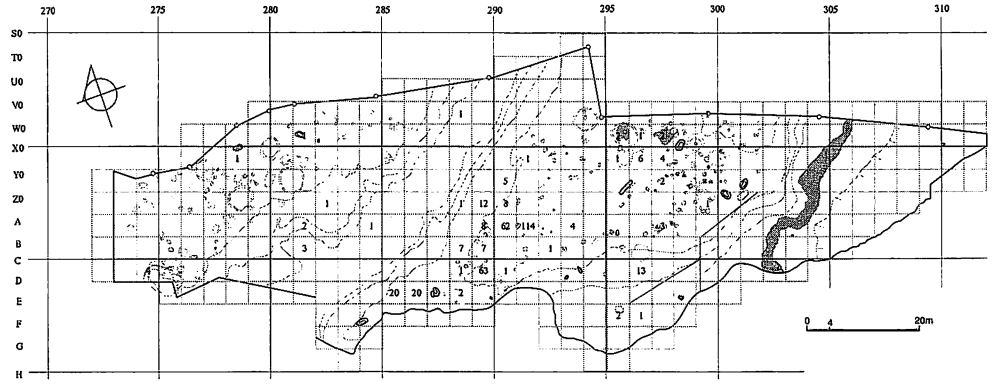
時期	縄文早期				前期		中期		
分類	Ⅰa	Ⅰb-1・2	Ⅰb-3	Ⅰb-4	Ⅱa	Ⅱb	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲ
Ⅲ層	5	17	31	46	3		20	64	
Ⅲ-2層									
Ⅲ-3c層					1		1		
Ⅳ層		6	2	2	25		11	81	
Ⅴ層	26	378	505	519	298	17	348	1,663	2
Ⅴ-1層								1	
Ⅴ-2層							5		
Ⅴ-3層		3	7	2			27	30	1
Ⅴ-4層							1		
Ⅴ-5層		4	32	15	5		120	135	180
Ⅴ-6層					1		2	2	
Ⅴ-7層							2	33	37
Ⅵ層	16	12	71	31	34		3	39	4
Ⅶ層							3		
撹乱	6	6	14	33	7		13	79	
表採・排土	2	2					5	9	
層不明		1	2		11	2		8	
点数	55	429	664	648	385	19	561	2,144	223

時期	縄文後期				晩期			不明土器	続縄文	擦文	陶磁器
分類	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	Ⅳ	Ⅴa	Ⅴb	Ⅴc		Ⅵ	Ⅶ	
Ⅲ層	27	1,751	783				3,199	40	6,953	161	1
Ⅲ-2層								6	1		
Ⅲ-3c層	1	75	15				4				
Ⅳ層	3	1,547	721	7			1,847	126	239		
Ⅴ層	316	31,548	14,008		20	2	17,261		1,603		
Ⅴ-1層		17					62	1	2		
Ⅴ-2層	6	480	28		1		1				
Ⅴ-3層	46	2,904	141		2		27	1			
Ⅴ-4層		23	8								
Ⅴ-5層	22	2,211	472				24	5	1		
Ⅴ-6層											
Ⅴ-7層											
Ⅵ層	4	375	139		6		111	8	20		
Ⅶ層		6									
撹乱	14	372	310				282	2	127		
表採・排土	1	117	20		2		23	4	83		
層不明		450	53				297		45		1
点数	440	41,876	16,698	7	31		23,138	193	9,074	161	2

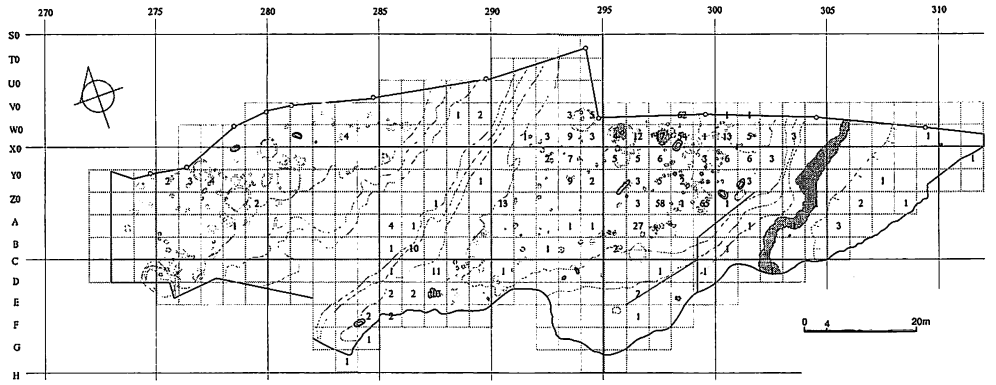
V層　1.1:Ia



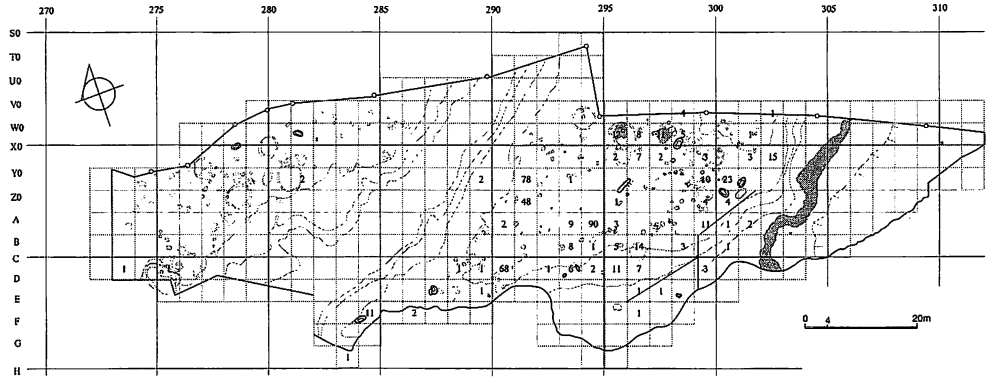
V層　1.22:Ib-2



V層　1.23:Ib-3

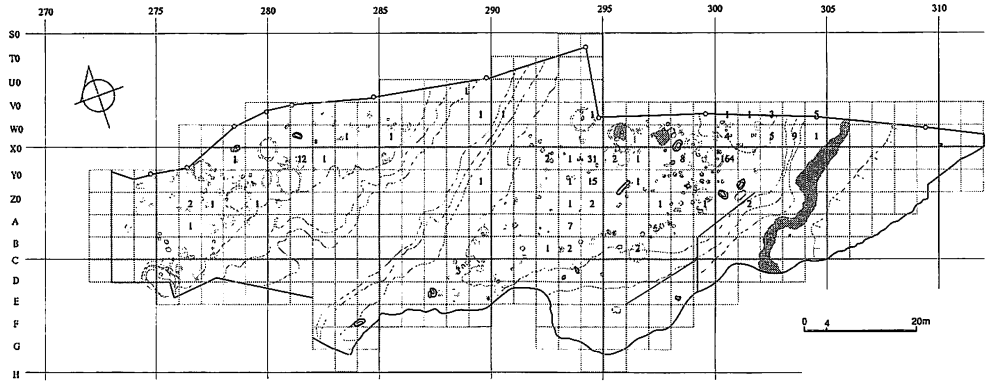


V層　1.24:Ib-4

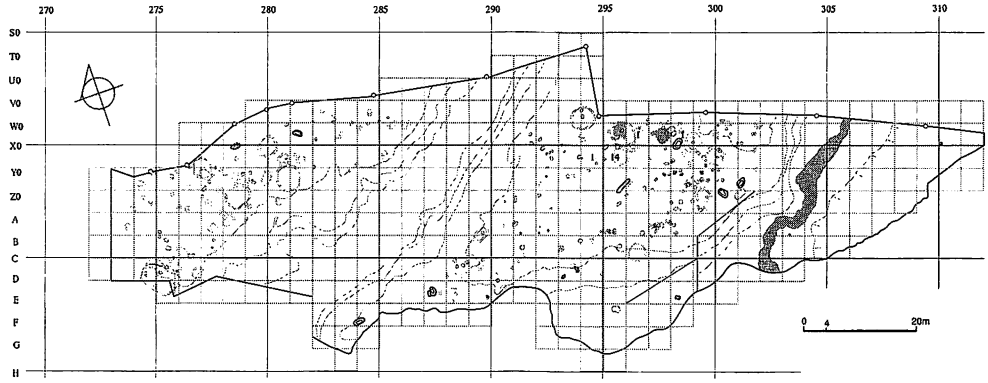


図Ⅵ-1-1　Ⅰ群土器分布図

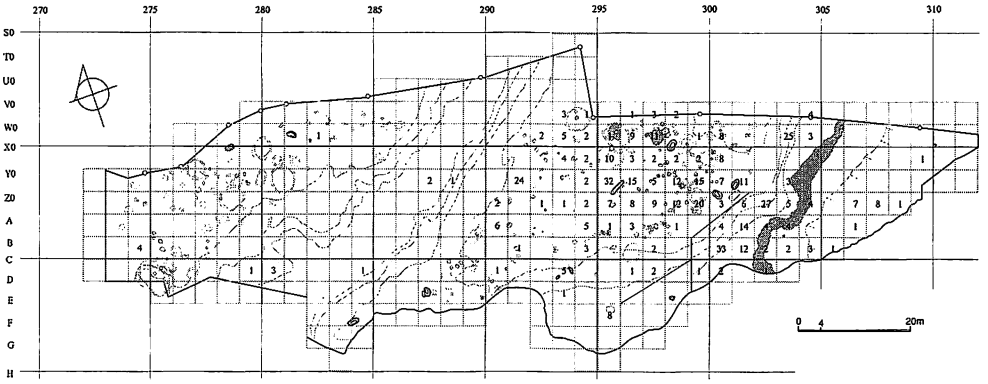
Ⅴ層　2.1:Ⅱa



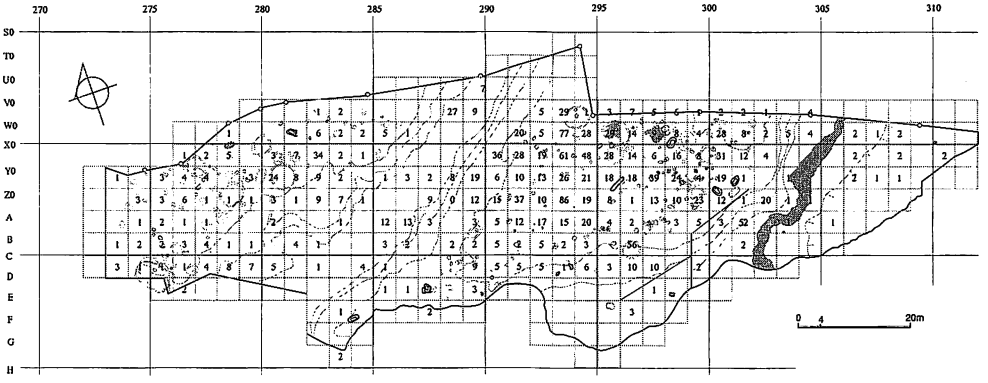
Ⅴ層　2.2:Ⅱb



Ⅴ層　3.1:Ⅲa

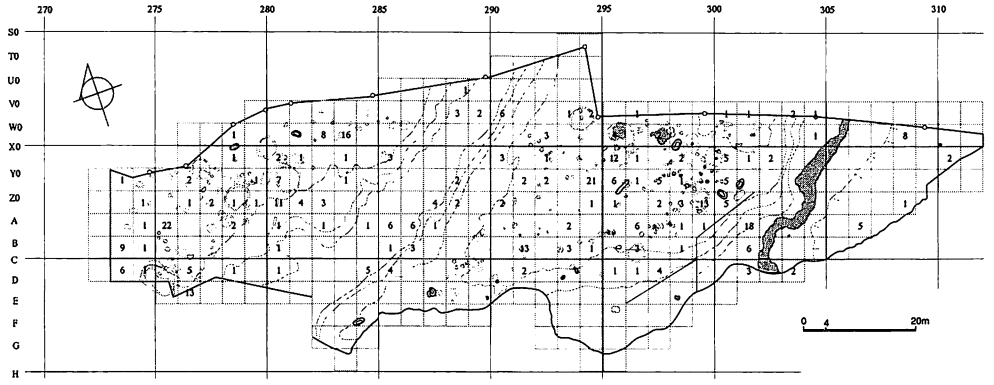


Ⅴ層　3.2:Ⅲb

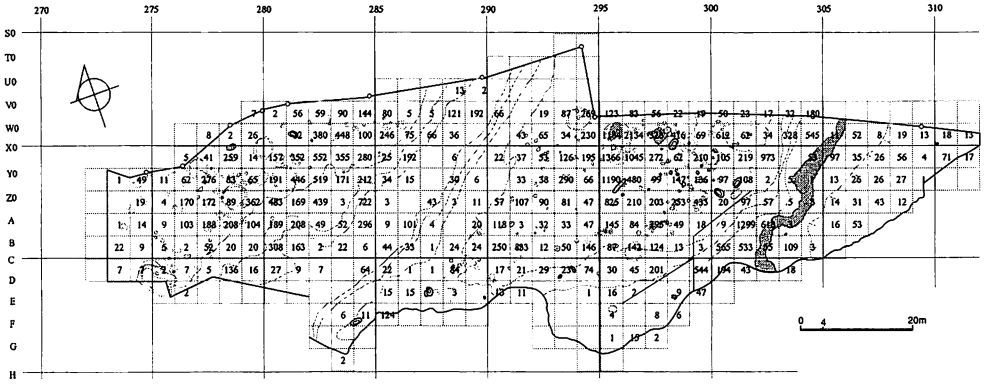


図Ⅵ-1-2　Ⅱ・Ⅲ群土器分布図

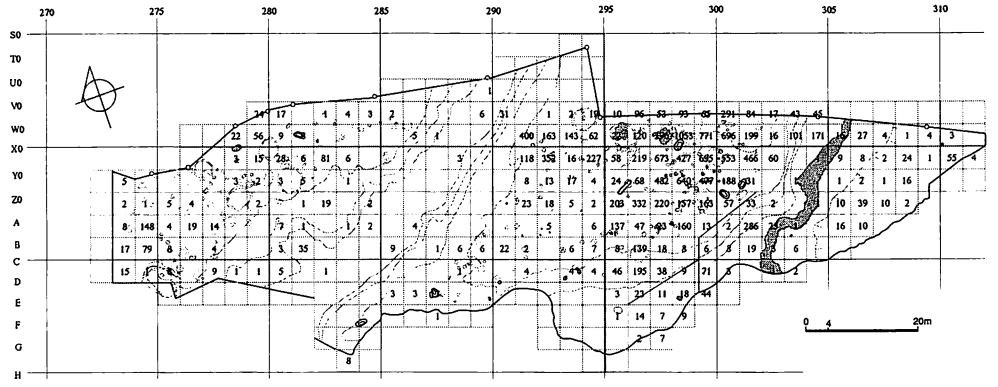
V層　4.1:Ⅳa



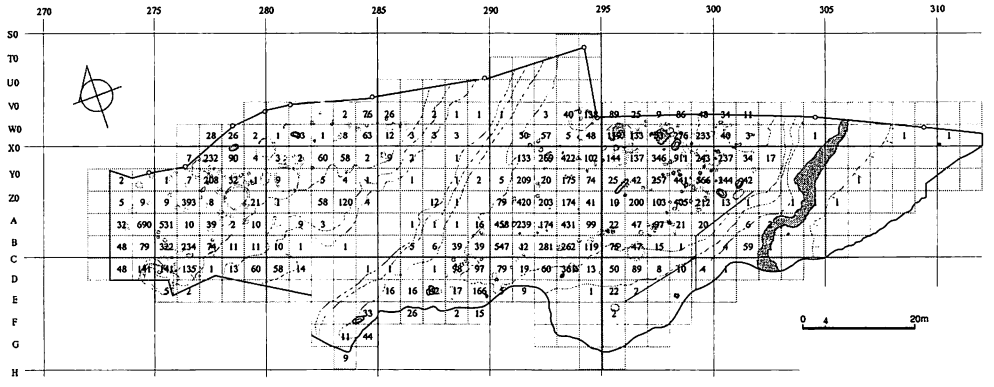
V層　4.2:Ⅳb



V層　4.3:Ⅳc

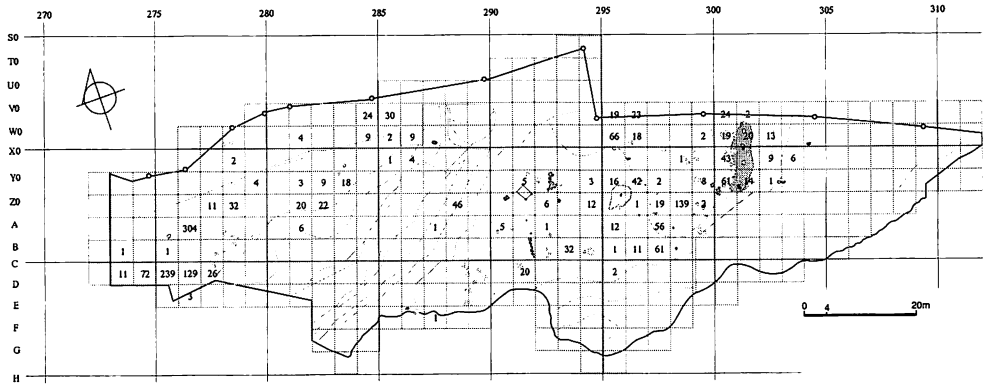


V層　5.3:Vc

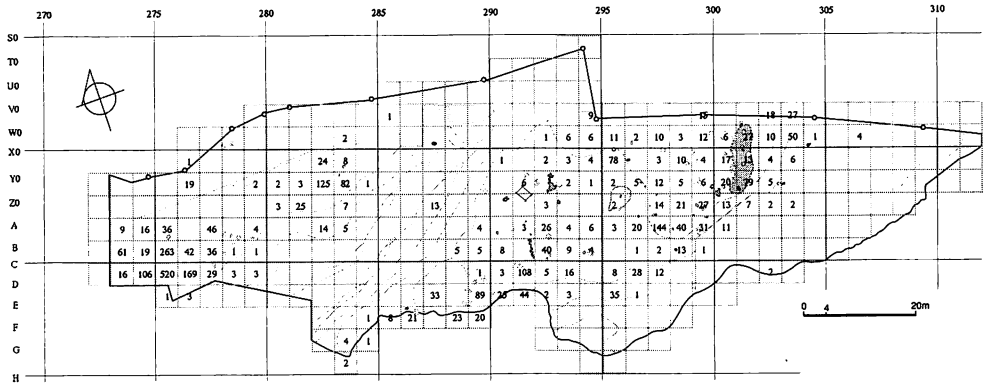


図Ⅵ-1-3　Ⅳ・V群土器分布図

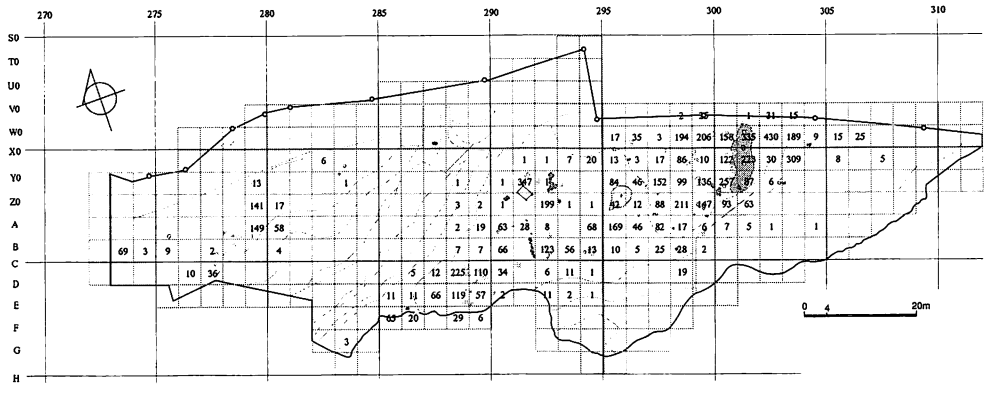
Ⅳ層　5.3:Vc



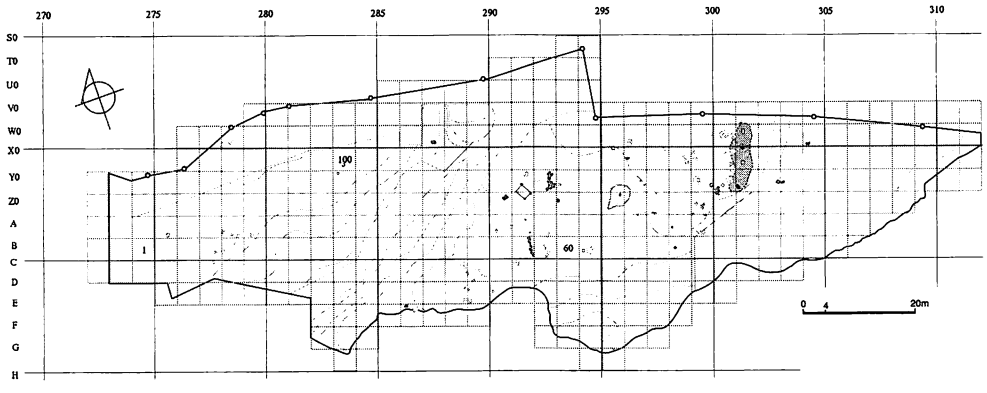
Ⅲ層　5.3:Vc



Ⅲ層　6.1:Ⅵ



Ⅲ層　7.1:Ⅶ



図Ⅵ-1-4　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ群土器分布図

1002,1003は口縁部である。1002と1004の胴部は表裏の両面に貝殻条痕様の模様が見られるもので同一個体の可能性がある。1003は表面からの刺突とそこを始点にのびる沈線が施される。1005は無文の胴部、1006,1034は平底の底部と考えられる。

Ⅰ群b-1、2類土器（0021、1028～1032、1033）

東釧路Ⅱ、Ⅲ式、コッタロ式に相当する土器である。東釧路Ⅱ式は西の沢を挟んだ東側の段丘上で出土する傾向にある。器形は全て深鉢形と考えられ、文様は多条の縄を用いた縄線文や斜行縄文、短縄文、縄端刺突文、押圧文、組紐圧痕文などが見られる。

0021は深鉢形の土器で底部は欠失している。口縁部は平縁で、表面には上から縄線文、斜行縄文、折り曲げた縄の押圧などが施文されている。1030は口唇の外側部が張り出す特徴を持つ深鉢形土器で、平成6年度でも報告されたものである。細かい破片が広範囲で出土している。1028,1029は深鉢形土器の口縁部である。1028は斜行縄文と折り曲げた縄の圧痕文、1029は縄線文と短縄文が施され、口唇にも縄の刻みが施される。1032は深鉢形土器胴部で施文されるのは斜行縄文と折り曲げた縄の圧痕文である。1033は底部の下端部上に短縄文が施される底部である。

Ⅰ群b-3類土器（1020～1022、1026、1027）

中茶路式に相当する土器である。主に調査区東側の段丘上で出土する。器形は全て深鉢形と考えられ、文様は微隆起線の間に短縄文や斜行縄文が施されるものが多く、少量のものに絡条体圧痕文も見られる。

絡条体圧痕文の施された1014以外は全て微隆起線をもつもので、1020～1022は微隆起線で区画した面に短縄文を、1024、1026は斜行縄文、1027はその両者が施されている。

Ⅰ群b-4類土器（1007、1009～1014、1019、1037、1038）

東釧路Ⅳ式に相当する土器で、主に調査区東側の段丘上で出土する。器形は全て深鉢形と考えられ、一部に口縁が波状を呈したり底部が小径もしくは丸底を呈すると推察されるものも見られる。文様は撚糸文様の羽条縄文や絡条体様の縄の圧痕、綾絡文などの他に微隆起線の間に短縄文や斜行縄文が施される古い段階のものも見られる。

1009、1010、1038は微隆起線と絡条体様の文様を有する口縁及び胴部である。1011～1013は絡条体様の文様と撚糸文様の羽状縄文が施されるもので、1013の口縁には綾絡文も見られる。

(2) Ⅱ群土器（図Ⅵ-1-5／図版-39）

縄文時代前期は前半と考えられるⅡ群a類土器が出土している。

Ⅱ群a類土器（2001、2003～2009）

綱文式、静内中野式、花積下層式併行に相当する土器である。出土地点は調査区東側の段丘上に偏る傾向が見られる。器形は深鉢形を呈すと推定され、胎土には多少の繊維が含まれている。

2001、2005は綱文式土器である。2001は条が比較的細く節が僅かに観察できる。2005は条が深く太いもので節は不明瞭である。2003～2004は静内中野式に相当する。2003は表裏に太い原体による縄文が施される。2004は底部に近い胴部と考えられる。縄文は粗密である。2006、2007、2009は太く短い原体を用いた縄文が羽状に施されるもので花積下層式に併行するものと考えられる。

(3) Ⅲ群土器（図Ⅵ-1-8・9／図版39・40）

縄文時代中期に相当するものでa類とb類が出土した。

Ⅲ群a類土器（3002、3006、3043、3045、3048、3052、3055、3056）

円筒上層式に相当する深鉢形土器である。口唇部に小振りな突起を持つものや、器面に貼付文などが

施される。地紋は結束羽状縄文が多い。出土地点は主に調査区東側段丘上である。3006は貼付のある突起をもつもので、口縁にはその他に縄の連続した押圧や半裁竹管様の道具による平行沈線が施される。3052は肥厚する口縁部に連続した縄の刻みを施している。3002、3048は粘土紐の貼付文が施される。3043は口縁が僅かに肥厚する口縁部、3045はその胴部と考えられる。3055と3056はアーチ状に口縁部に付されると考えられる大振りな貼付である。表側と考えられる面に3055は斜行縄文、3056には貼付文と斜行縄文が施される。3056は3043の一部をなす可能性がある。

Ⅲ群ｂ類土器（3001、3004、3005、3007、3009、3013、3017、3029、3035、3040、3041、3044、3046、3047）

萩ヶ岡式、天神山式、柏木川式などに相当するもので2,144点が出土した。接合するものは少なく、多くが小破片で出土している。器形は大型の山形突起を有する深鉢形を呈し、多くのものに貼付文が施されている。文様は結束の羽状縄文や斜行縄文を地紋に施し貼付文上に縄や半裁竹管のような道具で施文を行うものが多い。

3005、3007、3009、3029、3041は萩ヶ岡式に相当すると考えられるもの、貼付文の上は縄で刻みが施される。3004、3015、3035、3046は天神山式に相当するものである。貼付文の上は縄の他に半裁された竹管状の工具で連続した刻みが施される。器面には沈線文の様な施文も見られる。3046は口唇と貼付文に沿った部分に爪状の刻みが見られる。3004は山形突起の口唇部にも刻みが施されている。3001、3013、3047は柏木川式に相当するものである。3013は口唇に刺突文、器面には沈線が施される。3047は貼付文の上に指状の施文具による大振りな刻みが施される。3001は口唇に細かい連続した刻みを有するもので、器面の文様は縄の撚りが戻りかけた結束縄文が施されている。

3040は羽状縄文の施された深鉢形土器の胴部である。3044は底部である。

(4) Ⅳ群土器（図Ⅳ-1-10～49）

縄文時代後期と考えられる土器群で、前葉のａ類土器、中葉のｂ類土器、末葉のｃ類土器が出土している。数量が多いのはｂ類で、これは今回の遺物の中で最も多い。また、これに伴う遺構も多数出土している。

Ⅳ群ａ類土器（図Ⅳ-1-10／図版41／40598、40601、40602、40592、40594、40548、40599）

Ⅳ群の中では一番出土点数の少ない440点が出土している。余市式が大半を占め、それ以外には仮称「手稲砂山式」、入江式などに相当するものが見られる。伴う遺構も少なく余市式と考えられるLH-006が調査区西側で見つかっている。

40598、40601は余市式に相当するもので口縁に肥厚帯を持つものである。肥厚帯は地紋の斜行縄文を施した後に折り重ねられており、40598には裏面にも地紋が施文されている。40592、40594、40602は仮称「手稲砂山式」に相当するものである。40592、40602は口唇の断面が丸形の深鉢形土器口縁部である。40594は胴部の器面に横位の貼付文が施されるもので、貼付文の頂部には縄線文が施される。40584、40599は入江式に相当するものである。器壁の薄い深鉢形土器胴部片で、斜行縄文を施した後に比較的直線的な沈線で幾何学模様を描いている。

Ⅳ群ｂ類土器（図Ⅳ-1-10～38／図版41～68）

今回出土した遺物のなかで最も多数をしめた土器群で41,876点が出土した。ウサクマイＣ式、手稲式、加曽利B1式相当と考えられる土器が出土しており、手稲式がその大半を占めている。これらは西の沢を挟む東西両側の調査区で多数出土しているが、傾向としてはウサクマイC式が東側、手稲式古手が西側、手稲式の新し手が東側で出土している。遺構は手稲式に伴うものが多く、調査区東側は竪穴住

居跡(LH-102)、土壙、焼土など、西側は竪穴住居跡(LH-103、104、106)、多数の土壙、焼土などがそれに相当する。

ウサクマイＣ式相当のもの（図Ⅳ-1-10～12）

土器口縁からやや下の胴部に括れる部分（頚部）を有する深鉢形土器からなるもので、口縁の多くが起伏の弱い波状を呈すか小型の山形突起を有している。文様は断面が角形の口唇部上と器面に施される地紋の斜行縄文（LR)と沈線文が施されるものが大半を占める。沈線文はこれに続く手稲式のもの比較して、深く明瞭なものが多い。これらの一部には刺突文の施されるものも見られる。器面の施文は横環する沈線の描かれる頚部の上位と下位で意匠が異なっており、上位では地紋の斜行縄文に平行する沈線文が施され、下位には斜行縄文、沈線文、無文を組み合わせたパターンを有する幾何学的な施文がなされる。その施文順位は縄文→沈線文の順で区画した部分に縄文を施したと考えられるものも見られる。また、沈線文を主体とするものは、そのありようで大きく二つのグループに分かれると考えられる。

一つは0254、0255、0222、4545、40600、4581、40577、4585などに見られるような器面に施される沈線文が、大胆かつ豪快なタッチで描かれるグループで、これらは前段階の大津式などの影響を残すものと考えられる。0254、0255、0222、4585は口縁部に鋸歯状になる平行沈線文が施されるものである。0254は胴部にも鋸歯状の沈線紋が施される。0222の胴部は縦方向の整形痕が残る無文であるが頚部直下には一部がＳ字状になる沈線文が見られる。器壁は特に厚目で胎土中には角の取れた小円礫が目立って観察される。4858は胴部の幾何学的な沈線文が曲線を主体に描かれている。4545、40600、4581、40577はその胴部である。4545は地紋の縄文が胴部下半に及んでおりその上から粗雑な沈線文が描かれている。他の個体に見られる無文部とのバランスがいっさい意識されていない。これは次のグループに属する可能性もある。

もう一つのグループは40514、40566、40543、40547、40549、40513、4604、40508、40567、0041などの様に口縁部に描かれる鋸歯状になる平行沈線文が横環する沈線のバンドに閉じこめられて洗練･単純化されているグループである。これらに施される文様は手稲式に続く意匠を強く伺わせている。これらは胎土が緻密で硬質であると言った特徴を有しており、この部分で前者のグループとの差異は明瞭である。4051、40566、40513、4604は口縁部に描かれる鋸歯状の沈線文が上下の横環する沈線の間に収まるものである。これらは0041も含めて、頚部直下の胴部にも同様の沈線文が施される文様帯を持つ。40508、0041には口縁部に平行する沈線文が施されている。

図Ⅳ-1-12に掲載したものは、この二つのグループに属さないがこれらと併行すると考えられるものである。0038は口縁部に沈線の意匠で刺突列を施したものである。頚部直下の胴部には一部がＳ字状をなす沈線文も施されている。40509は頚部を有する器形だが文様的な上下位の分割を行っていないもので、全面に鋸歯状の崩れた様な沈線文が施されている。40595、40596は口唇断面が角形の深鉢形土器口縁部で、器面に一部がＳ字状を呈する沈線文が施されている。沈線の有り様は太く明瞭なものでおそらく前者のグループに属すると考えられる。40570は小さな山形突起を有する口縁部である。器面には細い沈線でやや粗雑な文様が描かれている。0050は器全面に四歯ある櫛状の施文具で蛇行する平行沈線文だけを描いたものである。40597の口縁部は表面から棒状の工具で深い刺突を施したものである。この破片だけの出土であるが、胎土が類似していることからこのグループに含めた。40520は稲妻状に下降するような沈線文の施された胴部である。内面には横方向に施された条痕様の整形の跡が認められた。40484、40483は区画する沈線に沿って刺突列が施されるものである。十腰内Ⅰ・Ⅱ式土器などに類似資料が多く、ウサクマイＣ式～手稲式土器に併行するものと考えられる。

手稲式（図Ⅳ-1-13～36）

深鉢形土器（1）（図Ⅳ-1-13～15）

胴部に括れを有し径がやや狭い深鉢形土器で古手と考えられるものである。ほとんどの口縁部は4～6カ所の山を持つ波状を呈しており、文様は地紋となるＬＲ二段単節の原体を用いた斜行縄文に平行沈線様のものを基調とする沈線文が頸部の上下位に施されるものが多く、地紋だけのものも見られる。口唇部は無文となり、口唇部とそれに続く口縁部、頸部の無文部分の一部には研磨のような器面調整がなされたものも見られる。

0064、0065、0250、40590、4603、40362、4624は平行沈線様のものを基調とする沈線文の施されるものである。これらの多くは一定の幅の間を蛇行しながら垂下する沈線が連なっている意匠が強い。0065は波状口縁の山形突起が他より尖るもので、口唇の内面側が肥厚している。地紋の縄文には三段複節LRLの原体が用いられている。

4544、0218、40529、40556、40562は口縁部や頸部の形状に沿って数条の沈線が描かれるものである。4544、0218、4636、40529の口唇は断面が角形で上面が磨かれた様な状態である。器壁は厚めで胎土は硬質感がある。4636の胴部下位には平行沈線様の施文がなされていると考えられる。40535、0233は弱い波状口縁の深鉢形土器に地紋の斜行縄文だけを施したものである。0073は弱い括れの頸部を有したもので、地紋の縄文はＲＬである。

深鉢形土器（2）（図Ⅳ-1-16～21）

平縁の深鉢形土器で沈線による施文がなされるものである。口縁部には幅をもつ研磨部分が顕著で、文様は地紋となるＬＲ二段単節の原体を用いた斜行縄文に平行沈線様のものを基調とする。文様は区画された文様帯に施文される傾向が強まり、それらと研磨の施される無文部の組み合わせが文様意匠を司どる。このほか沈線文の施されたものもここに含めた。

0231には器壁が厚く胎土中に角の円い小礫が含まれる。胴部の沈線文は、平行沈線とその線の間を繋ぐように描かれた弧を描く沈線で構成されている。0048は口縁部に丁寧な研磨がなされた小型の深鉢形土器である。色調は暗赤褐色を呈しており、横走する沈線下の胴部には一段無節（Ｒ）の原体を転がした地紋に下方に向かって大きく三つの弧を描く四本の細い平行沈線が描かれている。この土器は全体的な意匠が他と一線を画す。0051は胴部に研磨部と縄文部によるパターンを持つ文様が巡る大型の深鉢形土器で、研磨部は磨消が行われた可能性がある。底部の近くまで施された縄文部も沈線で区画され胴部の文様パターンに沿ったものとなっており、一つの傾向として底部周辺にまで及ぶ文様意匠は手稲式の古手に見られる特徴として捉えられる。

0046、40420、4703、4588、40552、40561、40569、40530、0039は平行沈線の施されるものである。0046、40420、4703、4588、40552、40561、40530、0039には平行沈線を結ぶ弧を描く沈線文が施される。0251、40504は斜行縄文を施した後に平行沈線と弧を描く沈線文が施されたもので、磨消部は見られない。沈線文は比較的雑に施されている。

4129はキャリパー形の器形を呈すると考えられる深鉢形土器口縁部である。口縁部の最上部と口唇部は丁寧に研磨されており、器面には緩く弧を描いた三条の沈線文が施されている。胎土も肌理の細かな粘土が使用されるなど器形、文様を含めて異質な点が多い。

40414、4030、40558、40373、40576は沈線文、縄文、磨消などで器面に曲線的で不規則な文様パターンを施したものである。

40414の縄文部は研磨された部分よりも一段高くなっている。4030は口縁に幅広の研磨部を持つもので、胴部文様帯との境には連続したハの字もしくは逆ハの字状の短い沈線文が施されている。40558、

40373は幅の狭い研磨部を口唇直下に持つ口縁部である。その下位の胴部には比較的粗雑な沈線を用いた文様が施される。40573は同じタイプの胴部と考えられる。研磨部は磨消縄文が不完全になされている。

4587、4621、40545、40568は鋸歯状の沈線文が施された文様帯を有するものである。

4549、40559、40541、40531、0225、0230、0056、4020、40560、40564、40563、40356、40574、40369、4541、4631は口縁の研磨部と胴部の斜行縄文を横還する沈線文で区画するものである。4549、40559、40541、40531、0225は研磨される幅が狭く口縁部は外に向けて開き気味となる。これらの沈線文は太く明瞭なもので研磨も丁寧である。胎土的にも硬質感のある肌理の細かいもので、これらはやや古手のものと考えられる。0225、0235、0056は口唇の断面が丸味を帯びたものとなっている。4020、40565、40560、40564、40563、40356、40574、40369、4541は口縁部が僅かに内側に片むくものである。4020は口縁の研磨部下位に刺突列が巡るもので、この特徴を有するのは本個体に限られる。40565は全面に研磨が施された小型の深鉢もしくは鉢形土器である。40356は口縁が特に内側に傾くもので、器形は鉢形を呈す可能性がある。

4631、40398、40581、4683は口縁下位に括れを持つものである。4631、40398は研磨部を有するもので、4631はその境に沈線文が横冠する。4683は器壁が厚く胎土内に小礫を含んでいる。断面が角形の口唇上には地紋と同じＬＲの縄文が施されており、より古い段階の特徴が見られる。

深鉢形土器（３）（図Ⅳ-1-22～28）

40581、4683、0220、0256、0253、0049、0067、0063、0227、0216、0203、40363、0240、0226、0229、0241、0228、40540、40553、40542、4689、4586、40527、40532、40557、40536、40571、40551、40411、4538、4548、40572、4625、40534は地紋の斜行縄文のみが施されたものである。特にこれらのなかでは底部から逆さの二等辺三角形の様に直線的な器壁の立ち上がりを呈する平縁の深鉢形土器が目を引く。

0220、0203の地紋はＲＬの原体でＬＲ風の斜行縄文を施している。0256は口縁下位に僅かな括れが見られる。0216は器壁が厚く器壁の角度が変化し底部に向かってやや絞り込まれている特徴を有し、胎土中には角の取れた小礫が認められる。この胎土的な特徴は0240、40540、4689、4586、40551などにも見られるもので比較的古手と考えられるものに見られる傾向にある。4586は口唇にも地紋と同じ施文がなされている。

0236、0245は無文の小型深鉢である。0236は墓と考えられる土壙（LP-196）の覆土上面から出土したもので、薄い器壁と焼成前に口縁に穿たれた二カ所の貫通孔などの特徴は遺跡内に類例が乏しく、副葬の目的で作成された可能性がある。

40411の口縁部には研磨された部分が見られるが、これは縄文の施文前のものである。

40538、40537、40533、40440、40364、40544、40441、4546、0045、0060、4021は深鉢底部である。40538は特に丁寧な研磨が全体になされている。40361は土器の台部分と考えられる。

深鉢形土器（４）（図Ⅳ-1-29～31）

波状口縁の深鉢形土器である。山が４～６カ所ある波状口縁部の多くは研磨されており、一部には大きく貼付されたものも見られる。胴部には斜行縄文と沈線による文様帯を有し、その下位から底部にかけて再度研磨がなされている。0052は胴部から口縁部が外に向かって反りながら開く器形のものである。0234、0070は胴部の文様帯が他の器面より一段高みになるもので、施される沈線は蛇行しながら降下するものが巡っている。0070は底部付近の胴部にも地紋が施されている。4688は波状口縁の研磨部に大きめの貼付がなされるものである。4615は４条の平行沈線で口縁の研磨部と胴部の縄文帯を区画している。4784は胴部文様帯に４条一組が縦位に描かれる沈線文が繰り返し施されるもので、類似のものは少

なく0219、0223に見られるだけである。40402は文様帯にハの字状の沈線が巡るものである。4602の文様帯は、明瞭な平行沈線に弧を描く浅く不安定な沈線が施されるものである。0219は文様帯の平行沈線様の蛇行沈線を描いてから2条一組の縦位沈線文を施している。0248、0221は口縁部に貼付がなされるもので、胴部文様帯に見られる沈線で涙滴状に区画された無文部は磨消縄文である。40555は地紋の施された波状口縁部である。

鉢・浅鉢形土器（図Ⅳ-1-32）

平縁で口縁部に研磨の施される無文部が、胴部には斜行縄文と沈線文による文様帯が見られる。4633、40417は口縁部下位に僅かな括れを有するもので、胴部文様帯には4633が鋸歯状の沈線文、40417が力強い縄文が施される。4655は口縁の研磨された部分が内側に入る器形のものである。胴部には蛇行しながら降下する意匠の沈線文が施されている。40300は胴部の横位沈線から折れ曲がった口縁部がほぼ垂直に立ち上がっている。0207は胴部よりも口縁部とみなされる研磨部分の比率が大きい器形を呈している。胴部に見られる幅の狭い紋様帯には鋸歯状の沈線文が施されている。0252は皿状の器形を呈すもので斜行縄文は底部にも施される。0249は台の付く器形のものである。口縁には往還する細目の沈線文が施されている。

壺形土器等（図Ⅳ-1-33・34）

口径が胴部の径より小さくなる器形のものをここに含めた。個体数は少なく、掲載されたものが全てである。しっかりと丁寧に作られたものがほとんどで、全体的にはほぼ同時期に作られた可能性がある。

0058は口縁部に縄文が施されるものである。胴部には沈線文で区画された縄文と無文の研磨部による曲線的な文様が描かれる。底部付近は欠失しているがその間際まで縄文が施されていると考えられる。研磨は丁寧な作業がなされているが、磨石縄文かは不明である。口縁部下位の無文部の一部には黒色の部分が見られ漆状の可能性がある。40415も同様の意匠で作られていたと思われる。0224、0044は口縁部の文様が研磨の施された無文のものである。0224の胴部の縄文は沈線文で区画された後に施されると考えられる。4547は大型の壺もしくは瓶形土器の口縁部と考えられる。器面全体にやや粗雑な斜行縄文が施される。0237、0238は小型の瓶形土器と考えられるものである。比較的粗雑な作りで制作時の指の凹凸が随所に見られる。0238はLH-102の覆土から出土したもので器の中には ベニガラと考えられる赤色の粒子が入っていた。

注口形土器（図Ⅳ-1-35・36）

0057、0061、0239は胴部の高さに幅を持つ膨らみのあるもので、40305、0191は胴部がやや扁平気味になるものである。注口部は立ち気味のものが多い。

0191は非常に丁寧な作りがなされた他と一線を画すもので所謂「精製土器」の部類に入る。口縁部は欠失しているがその痕跡からドーム状の膨らみを持ない開き気味の口縁が備わっていたと推定される。胴部は僅かに扁平がかったもので、底部も胴部下位の器壁角度からみてそれほど明瞭な角を持っていなかったであろう。また、注口部は注ぎ口の肥厚を持たず、付け根近くに特徴的な突起を持っていない。器壁は薄く制作時の粘土の輪積みも粘土紐同士の接合が見事になされているためその部分の破損が目立って少ない。全面に丁寧な研磨が施されており、胴部上位には串状の工具による洗練された沈線文が描かれている。胎土には粒子の細かい粘土が使用されており小礫などの混ざりがほとんど見られず、厳選された素材が使われているようだ。焼成も良好で器面には焼成による色調の変化と考えられるものが見られない。その色調は全面に均一な色合いが出された渋い柿色を呈したもので同時期の土器の中では極めて異質である。やや得意な存在であり搬入品と考えたい。周辺には類似資料が乏しいが、文様の意匠に称名寺式、加曽利Ⅰ式土器などに見られる特徴が伺われことからそれらとの縁が強いと考えられる。

異形土器等（図Ⅳ-1-36）

0066は筒状の器形を呈するものである。口縁部と底部付近の一部が欠失しているが、器の上端が外側に向かって開く傾向が見らることから、本土器は底部付近の器壁に貫通孔のある「下部単孔土器」と考えられる。沈線による木の葉状の区画内に節の小さなLRの縄文が施されている。無文部は研磨を受けたもので色調は光沢を帯びる黒色である。平らな底部には「あじろ」の跡が見られ、このあじろ底の見られる個体は本体だけである。40526、40385は無文の小型土器である。

刻み列を有するもの（図Ⅳ-1-36～38）

口唇あるいは口縁部や文様帯を区画する沈線文に沿って、棒状の工具で連続する刻みを施したものである。個体数は少なく掲載したものに限られる。器形は深鉢形、瓶形がある。多くはホッケマ式、エリモB式などの土器に相当すると考えられる。

0217は瓶形を呈する土器である。刻みは口唇の角に施されている。全面が沈線で区画された羽状縄文と研磨を受けた無文で施文されており、羽状縄文は沈線で区画された跡に施されている。胎土には特徴的な岩片が含まれている。40546、40458、40486、40491、0037、0232、40591は波状口縁を有する深鉢形土器である。40546は口縁部が大きく肥厚し刻みはその頂部に施されている。幅広の口唇には光沢のある研磨が施され、刻みの下位にはLRの縄文が施されている。

0037は大型の深鉢形土器である。刻みは口縁と頚部の横走沈線文に沿って二重に施されている。研磨された無文部が頚部にあり、それ以外には撚りの異なる2本の二段単節の原体を使った羽状縄文が施されている。羽状の構成は上位から下位に向かって徐々に幅の広がる特徴的なものである。内面は全てくすんだ黒色をなしており、観察では内面の胎土を還元したかの状況が考えられ塗布などによる着色は想定し難い。これは突瘤のないエリモB式土器に相当すると考えられる。0232は口縁と頚部無文帯の上下とに刻みが施された深鉢形土器である。その刻みを施した施文具は先端が尖る竹べら状のものが使用されている。口唇の断面は内側に傾斜する傾向があり、波状口縁頂部の口唇には縦位沈線が程こされる。器面に施される文様のうち沈線文は施文具の先端が尖り気味のものが使われており、それによって沈線文も線の幅が細目で一定しないものとなっている。これの特徴は器面に描かれる文様が比較的複雑な様相をなすことも併せてより次の堂林式土器の特徴に近いといえる。40591は胴部文様帯の上辺に刻みが施されたものである。やや斜めに施される刻みは4～5箇所単位でその傾きを交互に変化させている。文様帯の縄文は沈線文で区画後に施文している。40573も同じ刻みの特徴を有するもので同一個体の可能性もある。

Ⅳ群c類土器（図Ⅳ-1-39～49／図版69～78）

時期が縄文時代後期末葉、所謂「堂林式土器」に相当すると考えられるもので包含層からは16,698点が出土している。ほぼ調査範囲全域で出土するがその大半が東側に集中しており、また東の沢からも出土していることから更に上流の地域にも分布していると考えられる。

器形は深鉢形、鉢形、注口形のものが出土しており、鉢類の器形の口縁は波状を呈するもの、突起を有するもの平縁のものとがある。口唇断面は角形や丸形、先端が尖り気味になるもの、切り出しナイフ形のものなどがある。文様は堂林式の大きな特徴である内面からの刺突文とともに斜行縄文、沈線文、刻み列などが見られる。突瘤はドーム形の形状をもつもの以外に楕円形や指で摘んだような縦長のものも見られる。斜行縄文は地紋で施されるものが多く、LR二段単節のものと撚りの異なる二本の原体を使った羽状縄文とがある。沈線文には、横走するものや弧線を描くもの、鋸歯状に描くものなどがある。底部は小径のもが多く、平底か僅かに中央部が盛り上がる上げ底気味のものが多い。

1 深鉢・鉢形土器（図Ⅳ-1-39～48）

口縁は波状を呈するもの、突起を有するもの平縁のものとがあり、それらの断面の形状には内側に向かって緩くカーブするものや直線的に開きながら立ち上がるもの、途中に括れを有するものなどがある。

a. 波状口縁を有するもの（図Ⅳ-1-39～40）

0087は口縁の波が8カ所見られるもので、胴部の括れには軽く研磨された無文帯が備わっている。器壁は薄く全体的には丁寧な作りがなされており、口縁には間隔の狭い刺突文が施されている。40582は胴部に縄文と沈線文と研磨跡の見られる無文部で曲線的な文様構成を描いている。0076は口縁の波状に沿って三条の沈線が施されるもので、刺突は沈線の施文後に施されている。0214は山の小さなもので各山の頂部には棒状の工具で刺突が施される。0244は口縁部と底部付近に横走沈線文が施されるものである。突瘤は見られず縄文は横走沈線文で区画された部分にだけ施文されており、胴部の多くは軽い研磨が施された無文である。口縁の波は6カ所と推定される。0246は多数の直線的な沈線文を全面に施した比較的大型の器形を呈するものである。口縁部の波は起伏の少ない緩やかなもので頂部には棒状の施文具による刻みが施される。4008も起伏の少ない波状の口縁部を持ったたもので器形は鉢に近いと考えられる。器面には羽状縄文と研磨された無文で横位を意識した文様帯が施されている。文様帯の区画には沈線文や先端が鋭利な施文具による刻み列が用いられている。口唇断面は切り出しナイフに似た形状で、器面の突瘤は指で摘まれた様な縦型を呈した瘤である。4601は胴部に括れを持つ個体の口縁部である。ほぼ全面が研磨の施された無文部である。突瘤はないものの口唇断面が切り出し形を呈することから本分類に含めた。

b. 口縁に突起を有するもの（図Ⅳ-1-41・42）

0080は口唇に径約1㎝ほどの粒状の突起が付く。器面には地紋のRL二段単節による斜行縄文を転がしてから横走沈線文と弧線文とが施されている。突瘤は見られない。0085は口唇部に三つがセットになる突起を6カ所持つ比較的大型の個体である。口唇断面は角形である。0215はやや大きめの突起を6カ所持つもので、突起の上部は擂り鉢のように窪んでいる。胴部には括れを有しており、その器面の無文部を挟む上下には横走沈線文と斜行縄文が施される。径の小さな底部はやや上げ底気味である。0083に付く4カ所の突起上部もやや窪んでいる。4002の突起上部には棒状の施文具で刺突が施されている。4005は2つの突起がセットになるもので、突起上部には沈線文が施されている。器壁は薄い。

4003、4010、4085、4006は羽状縄文の施されるものである。4003の突起断面は口縁の器壁より厚い。4010、4006は突起の上部に縦の沈線が施される。4010に刺突文はなく器面には横走沈線文と弧線文が施され、口唇部は丁寧な研磨がなされている。4006の地紋には2本の原体の施文方向を変化させ条が菱形を描く部分が見られる。4085は突起上に刻みが施されている。

c. 平縁のもの他（図Ⅳ-1-43～47）

0077～0079、0210、4044、4048、4535、4641、4652、4647、4004は突瘤文と供に沈線文の施されるものである。施文の順位はいづれも沈線文→突瘤文である。0077は口縁部と胴部に刻み列を伴う横走沈線文と弧線文が施されている。地紋には羽状縄文が施文され、胴部の括れ部分の器面には無文帯が巡る。0078、0079、4044、4641、4652、4004は口縁部に2～4条の横走する沈線文が施されるものである。口唇部は大半が無文であるが、4044の口唇には指による刻みのような凹凸が巡っている。0210は胴部に括れとその部分の器面に無文帯を有し、口縁部には横走沈線文と供に組み合わせの弧線文が巡っている。40487、4647には鋸歯状の沈線文が全面に施される。4535は沈線文で区画した部分に羽状縄文と無文を施し曲線的な文様を描いたものである。

0082、0086、4017、0211、4617、4012、4651は突瘤文と斜行縄文が施されるものである。0082は器

壁の薄い大型の深鉢である。0085は出土地点もほぼ同じで文様意匠た胎土の様子も近似していることから同一作者の可能性がある。底部は径の小さな上げ底を呈したものである。0086は底部が角に丸味を帯びた平底のもので全面に羽状縄文が施される。4012は内面側の口唇部が円く肥厚する。

4225は内面の底部中央が盛り上がる平底を持つ。4009は胴部下半に研磨された無文部と沈線文、撚りの異なる2種類の二段単節原体とで構成される文様帯をもつものである。大型の器形にもかかわらず器壁は薄く、全体的に丁寧な作りが目を引く。4011は羽状縄文が施される胴部片、4527は弱い沈線文の区画に沿って刻み列が施される底部付近の胴部片である。4498は全面に横走沈線文と斜めの沈線文の施される胴部片である。

0084、4543、4235、0178、4014、4001、0209は平縁で突瘤文を持たないものである。0084、0178は口縁部に横走する沈線文が施されるもので、0084の底部は角に丸味を帯びた平底である。4543は口唇断面が尖り気味で、口縁のやや下位の面には横走沈線文と弧線文とが施される。4235は器面に菱形状の文様を構成する沈線文が施される。4014は全面に粗雑な方向性の異なる沈線列を施すものである。4001は口唇断面が切り出しナイフ形で口唇には指で付したような凹凸が見られる。文様は沈線文、羽状縄文、研磨された無文などで構成されたものである。0209は全面に節の小さなRLの斜行縄文が施されたものである。底部の角が丸味を帯び、その内側がやや盛り上がることなどから本分類に含めている。

d. 爪形状の文様などが付すもの（図Ⅳ-1-48）

0081は4カ所の山を持つ波状口縁の鉢形土器である。径の小さな底部は縁が明瞭に盛り上がる上げ底になっている。内面の底も盛り上がりが顕著である。爪形状の施文は波状の山の部分に刻みの施される口縁直下と胴部に巡らされており、その間には横走沈線文が施される。胎土には硬質感があり作りは比較的丁寧である。爪形状の施文は箆状の施文具を使用していると考えられる。0208は口縁の突瘤文の下位列に爪形様の文様が施されている。4013は突瘤文と横走沈線文の間に棒状の施文具で横斜めの方向からの刺突列とボタン状の貼付文とが施されるものである。0188は横走沈線文の間に小さな爪形状の施文がなされる浅鉢形の土器である。口唇部には刻み状の沈線を交差させたり連続して施したりしたものが見られる。この特徴は晩期のⅤ群b類土器にも見られ、それに相当する可能性もある。

0213、4228、4838、40579、4244は底部である。0213、4838は平底、4228、40579、4244は上げ底のものである。

3注口・壺形土器（図Ⅳ-1-49）

4013は比較的大型の器形が想定される注口形土器胴部である。胴部のやや上に突く注口部は付け根の痕跡から見て小型のものが装着されていたと考えられる。4659は注口もしくは壺形を呈するものである。肩の部分が張り出す器形で胴部には沈線文、刻み、節の小さな斜行縄文などで「木の葉」の様な文様パターンを描かれている。無文部には丁寧な研磨が施されている。40604は注口もしくは壺形土器の口縁部と考えられるもので幅の細い横走沈線の上に粘土粒の貼り付けがなされている。Ⅳ群c類のなかではやや新しい段階のものと考えられる。

(5) Ⅴ群土器（図Ⅳ-1-50～86／図版79～106）

縄文時代晩期と考えられる土器群で、主に末葉のc類土器が出土している。また、これに伴う遺構も多数出土している。

Ⅴ群c類土器（図Ⅳ-1-50～86／図版79～106）

東西調査区の段丘上から総点数23,138点が出土した。主に樽前c降下軽石（Ta-c）を間に挟むⅢ～Ⅴ層で出土しており、Ⅲ層3,203点、Ⅳ層1,847点、それ以外はⅤ・Ⅵ層である。

これらの土器群の器形は、占める割合の多い順に浅鉢形、深鉢形、片口形、注口形、壺形、異形土器などがあり、特に主体となるⅤ層出土のものは大小の浅鉢形を呈する土器のしめる割合が大きい。形式的には少量の大洞C2～A式に相当する土器を伴うものでタンネトウ遺跡やママチ遺跡出土のものと類似点が多い。

これらの土器に伴って住居跡、土壙、焼土などの遺構が見つかっており、この中では焼土が最も多く検出されている。

1大洞系の土器（図Ⅳ-1-50～52）

Ⅲ～Ⅴ層から大洞C2～A式に相当するものが7個体出土した。いずれも制作方法や胎土などが他と比べて異質なため持ち込まれた可能性がある。0181、0157は遺構に伴って出土している。

0164はⅢ～Ⅴ層で出土した大型の壺形土器である。頚部には沈線文と貼り付け文で構成される文様が巡っており、胴部のRL斜行縄文は下位に向かって条痕文様の文様へと変わっていく。0120はⅤ層出土のやや小型の壺形土器である。胴部の肩から上位には沈線文と貼り付け文による施されており、それより下位には雲形状の文様が描かれている。口唇には縄線文が巡っている。0121はⅤ層で出土した鉢形土器である。口唇部には二つで一対の貼り付け文が見られる。口縁の無文部は往還する浅い幅広の沈線による。0156は平成6年度報告で掲載されたものを補完して復元したⅤ層出土の壺形土器である。多くの破片が今回調査の西地区段丘上で出土しており、平成6年度出土のものはそこから流れ落ちたものである。0181はⅢ～Ⅴ層で出土した台付の浅鉢形土器である。口唇部には大型の突起が装着され、胎土中には「海面骨針」状の物質が多数含まれる。5675はⅤ層出土の浅鉢形土器胴部でおそらく台付のものと考えられる。良く研磨された器面に沈線による変形工字文と二つが対になる小突起が施されている。0157はⅢ層で出土した鉢もしくは深鉢形土器である。口縁がやや内向し、胴下半部から底部は欠失している。口縁部無文帯の下位には幅の広い浅めの沈線が巡らされている。器壁は薄く胎土には硬質感があり焼成も良好である。

2深鉢形土器（図Ⅳ-1-53～65）

Ⅲ層出土のもの（図Ⅳ-1-53）

調査区全域で出土するが特に調査区西側のLH-002、001周辺で比較的多く出土する傾向が見られる。これらの遺構は検出層位が異なるため直接の原因とは考えづらく、Ⅲ層中の同じ位置に未検出の遺構が存在した可能性がある。また、その土器は接合するものが少ない小破片のものが多く、下位の土層から掘り上げられた可能性が高い。他の区域のものも後続する時期の遺構によって上層に上がっているものが多く良好な資料は乏しい。

器形は深鉢形で胴の部分に器壁の角度が変化するものや粘土紐を巡らせて稜線を作り出したものも存在する。底部は下端部に角を持つものもがある。文様は縄文、縄線文、沈線文、刺突文などが見られ、地紋となる縄文はLRが斜行縄文、RLが条が縦に走る縄文に使い分けられる傾向にある。

5002、5009は縄線文の施された深鉢形土器口縁部である。5009の口唇部には指の様な施文具で連続した刻みが施され、縄線文の原体は地紋のものと同一と考えられる。5017は口唇に突起を有する深鉢形土器口縁部である。突起上には刻み状の沈線文、口縁部には幅の細い沈線で横走するものと格子状のものとが描かれている。5006は横走沈線の施された深鉢形土器で口唇部には指の様な施文具で連続した刻みが施されている。5159は口縁部下位に一段低い無文部を持つ深鉢形土器口縁部である。断面が角形の口唇部には撚糸文と刺突文が施される。口縁部の細沈線は串状の施文具によるものである。0242は胴部に一段高い稜線を備えた深鉢形土器である。口唇の一部が肥厚しその直下には、焼成前に表から穿たれた貫通孔がある。胴部の稜線上位の器面には沈線文で描かれた山状の文様が巡らされている。

5091も胴部に稜線を持つ深鉢形土器胴部である。同一の原体で稜線上位には状が横に走るもの、下位には縦に走る縄文が施されている。やや背の高い器形が推定されるため、文様と併せてⅥ群土器の初頭に相当する可能性もある。

5132、0158は深鉢形土器底部である。5132は底部が丸味を帯びて張り出す小型の器形のもので、底部と胴部の変換点には明確な領が作られている。0158底部下端の角が明瞭でやや上げ底気味になると考えられる。

0235はミニチュアの土器である。猪口のような小型の容器と考えられ、欠損する底部には台が付いていた可能性がある。器面には細い沈線で弧線や山形を描いている。

Ⅲ～Ⅴ層出土のもの（図Ⅳ-1-54～56）

正確にはⅣ層より上位で確認しⅤ層の上面にいたる土層から出土したもので、主体はⅤ層である。深鉢形の器形が多く口縁部が僅かに内向する傾向にある。底部は下端部が円のものと角を持つものもがある。地紋となる縄文はLRとRLがあり比重は後者が多い。口縁部には沈線文が施される文様帯をもつものが多く、それらとともに刺突文、撚糸文なども施文されている。

0090は口縁部が器面の稜線部から明瞭に内向するものである。突起部と断面角形の口唇部には撚糸文が施されており、口縁部の文様帯には崩れた円弧文状の沈線文と刺突列が施される。器面の稜線部にも刺突列が見られる。0092は口唇から口縁部にかけて対になる貼り付け文が施されたものである。この土器は平成六年度報告で掲載されたものを補完して復元したものである。多くの破片が今回調査の西地区段丘上で出土した。0130は口唇部の突起の下位に貫通孔を有するものである。突起とその周辺には一段無節Rの原体による刻み、口唇部には同じ原体による撚糸文が施されている。文様帯には櫛状の施文具で曲線主体の沈線文が描かれている。また、底部と胴部との境になる位置には沈線が巡らされている。0165は状が縦に走る深鉢形土器胴部である。0091は口唇部に二つが対になる突起を有する深鉢形土器である。突起状には一段の縄を押捺しており、文様帯には横走沈線文とやや形の崩れた円弧文が描かれている。底部は胴部下位の形状から小径のものが備わっていたと考えられる。0168は文様帯に横走沈線文と円弧文が描かれた深鉢形土器である。5029は口唇断面が尖り気味の深鉢形土器口縁部である。口唇部には指の様なものを連続して押捺している。5036は口唇部にLRの縄を連続して押捺した深鉢形土器口縁部である。口縁には同じ縄の折り返し部分を使った押捺も見られる。5049は口唇部に縄の押捺がなされる口縁部である。文様帯には横走するものと山状に施したものとが沈線で描かれている。5032は口唇に突起を有す深鉢形土器で、径の大きな底部はやや上げ底気味である。突起上には縄の押捺がなされ、器面には胴上半部にLR、下半部にRLの斜行縄文が施されている。

Ⅴ層出土のもの（図Ⅳ-1-56～86）

調査区全域で大量に出土しており、特に調査区西側のLH-002、001や焼土周辺、東側はUH-101や焼土の周辺に集中する傾向にある。東側のUH-101の遺構は検出層位が異なるため直接の原因とは考えづらく、Ⅴ層中の同じ位置に未検出の遺構が存在した可能性もある。また、これらの土器は周辺のものと良く接合し復元されるものも多い。器形は深鉢形、鉢・浅鉢形、片口形、双口土器や舟形土器、ミニチュア土器などの異形の土器が見られる。これらには縄線文、沈線文、刺突文、貼付文、刻みなどの文様が施さるが、部位別に見た場合、口縁部には沈線文を多用するものが多く次いで縄線文、刺突文、撚糸文などが用いられる。口唇部には撚糸文と刻みの両方もしくはどちらか一方がほとんどのものに施される。刻みには縄と棒状の工具を用いたものとが見られる。

a)撚糸の施されたもの（図Ⅳ-1-56・61）

撚糸文は口縁部と口唇部に施文されるものがあり、ここでは主に口縁部に付加されるものを対象とす

る。いずれも深鉢もしくは鉢形と考えられる器形のものである。縄線文は主に口縁部周辺の文様帯に施文される傾向が強く沈線文の横走するタイプに近い意匠である。

0094は器壁の薄いやや小型の深鉢形土器である。口縁の径は長短のある楕円形のもので長径の両端には粘土を貼付て肥厚させ貫通孔を穿った装飾部が備わっている。胴部下位で器壁は外に大きく広がっており、その変換点には沈線線文が巡る。底部は丸味が著しく自立には不安定である。撚糸文は二条がともに横走しながら一部曲線を描くものである。0096は口唇部と口縁部に突起と鉢付がなされるものである。胴部の中位には幅広の不明瞭な沈線文が巡っている。5053は口縁部に沈線の円弧文が施される口縁部である。撚糸文はその円弧文の下地として縦横に施文される。5186は口唇部に二つが対になる突起を有した口縁部である。撚糸文は口縁部に巡る無文帯の上位に施文されている0169（図Ⅳ-1-61）は格子文の下に撚糸文が施されている。口唇部から垂下する貼付文を有しその頂部には指先を想定させる道具で凹凸を作り出している。底部はやや丸味を帯びた地紋の施文されるものであるが、胴部との変換点には明瞭な角が備わっている。

b)縄線の施されたもの（図Ⅳ-1-57）

いずれも深鉢もしくは鉢形と考えられる器形のものである。縄線文は主に口縁部周辺の文様帯に施文される傾向が強く沈線文の横走するタイプに近い意匠で、沈線文や刺突文と組み合わされるものもある。

0201は地紋に使われたRLの縄を口縁部に押捺している。口唇の刻みは棒状の工具による。5011は鉢形に近い器形のもので、底部は端部の角が明瞭で底面にも地紋が施される。縄線文には地紋と異なるLRの縄を使用している。5007は口縁の無文部に細い縄線で横走するものと縦走するのものとを施している。5023は縄線文以外に外側から棒状工具の先端で刺突を加えたものである。縄線文の原体は地紋と同じである。5008は胴部の中位に縄線文を施している。施文された縄文と胎土から本分類に含めたが類例はⅥ群に多い。5085は縄線文の上から沈線で崩れた円弧文もしくは格子文を施文したものである。口唇には二つが対になる突起が見られる。

c)沈線の施されたもの（図Ⅳ-1-58～62）

主に口縁部文様帯に施されるもので、円弧文、格子文、山形あるいは鋸歯状のもの（以下、山形）、横走するもの、蛇行するものなどがある。

0112、5001、0101、5077、5025は円弧文もしくはそれに類似する施文がなされるもので、これらの文様からは粗雑で崩れた印象を受ける。0112は口縁文様帯に円弧文類似の複雑な沈線文様を描いたものである。文様帯中位には一段低い無文部が点在する。口唇部には撚糸文、地紋には羽状縄文が施される。5025は胴部が膨らむタイプのもので破片上部の無文帯上位にはもう一段同じ形態のものが続くと考えられる。

0172、0200、0102、5012、5022、0185、5075、5650、5645は山形の沈線文が施されるものである。山形を構成する沈線には単線のもの（0172、5012、0195）と複数線によるもの（0102、5022、5075、5645）とがあり、前者の山形で区画された面には短い縦位委の沈線も加わえて施文される。0172、0200は口縁に垂下する貼付文が施されており、0172の貼付文の頂部には指先を想定させる道具で凹凸が施される。0200は貼付文を挟む器面の両側に貫通孔が穿たれている。底部は極端に円く張り出しており、胴部と底部の変換点には張り出しが巡る。0102は口唇に三つでセットになる突起の装飾部を有するものである。装飾部下位の口縁部には表から二つの貫通孔が穿たれており、文様帯の山形は酷く崩れている。0195は口径の軸線上の口唇部に二つの突起を有するもので、突起下位の口縁部には各貫通孔が備わっている。胴部には器面より一段低い無文帯が巡っており、底部に近い胴部には同じ一段低い無文部が断続的に施されている。5075、5650は山形の沈線文直下に蛇行する沈線文が施されている。5645はこの中でも細

かい施文がなされるもので、器形は器面の曲がり具合から少なくとも口の形状が楕円形になると推定される。

0169は格子文と垂下する貼付文が施されたものである。貼付文の頂部には指先を想定させる道具で凹凸を作り出している。底部はやや丸味を帯びた地紋の施文されるものであるが、胴部との変換点には明瞭な角が備わっている。

5659、0180、0199、0100、5092、5055、5050、5030、5014は横走沈線の備わるものである。沈線文は一見して粗雑なものが多く円弧文や格子文、山形の沈線文の未製品である可能性は低いと考えられる。5659、5050は横走沈線に加えて蛇行する沈線も施されるものである。0180は断面角形の口唇上に指のような道具で浅い凹凸を、0199は口唇に縄の刻みが施されている。5055の横走沈線は工字文の意匠を意識した可能性がある。5050の器形はやや口が内向する可能性もある。5030は小型の器形を呈する胴部である。器壁は薄く、器面には横と縦に走る沈線とそれに沿って縄の端を押捺している。

d)刺突の施されたもの（図Ⅳ-1-63）

0113は口径に軸線に両端に山形の突起と貫通孔を備えたものである。刺突文は半裁した細い竹状の道具で斜め下方向から施文されている。0166は口縁部は僅かに外に向かって開く器形の土器である。口唇部には棒状の道具による刻みが施される。刺突文は口縁部上位の狭い無文部分にやはり半裁した細い竹状の道具で斜め下方向から施文されている。5056は波状の口縁部に垂下する貼付文が施されるものである。刺突文の道具は細い竹状の道具で斜め下方向から施文している。また、垂下する貼付文には横水平に貫く孔が穿たれている。

e)貼付の施されたもの（図Ⅳ-1-63）

貼付は多くの個体に見られる特徴の一つであるが、器形に関わらず貼付がなされる施文の順位は地紋の施された後、沈線、縄線文などの施される前の段階である。5014は口縁部の器壁が膨らむ器形のものである。垂下する二つの貼付が対になって器面に装着されている。おそらく口径を貫く軸線のもう一方にも同様の貼付がなされると考えられる。器面には横走沈線と山形の沈線状のものが施されている。0122の貼付には上から下に向かう貫通孔が穿たれている。5649は器面の貼付が剥落したものである。

f)その他（図Ⅳ-1-64・65）

0099、5648、5657は口唇部に刻みや施文具の押捺が施されるものである。0099は口唇部に棒状の工具で斜めの刻みが間隔を開けて施されている。

5658は「指ぬき」状のミニチュア土器である。

0171は口縁部の上端部に意図した無文部を作出していると考えられるものである。口唇の端が外に向かって張り出し器壁は薄い。

0114、5034、5654、0123、0105は底部である。0114は胴部に指状の刺突が施される貼付の帯が巡っている。5034は作りのしっかりしたもので大洞式土器の可能性がある。

鉢・浅鉢形土器（図Ⅳ-1-66～81）

Ⅴ群c類土器のうち約過半数の個体が浅鉢形を呈しており、平成6年度の成果とともにキウス5遺跡縄文時代晩期末の特徴である。

器形は約20㎝の口径を境に大型と小型の二種類の規模に大きく分かれ、占める割合は大型1に対して小型が2～3程度である。大型のものは口形が涙滴に近い楕円で長軸の一方の口唇部に文様を施した突起を配置する「装飾部」を持つ傾向にある。装飾部下位の器面には貫通孔が穿たれるものもまま見られる。口唇部の文様には先述の装飾部も含めて撚糸文、撚糸を押捺した刻み、棒状の工具による刻み、沈線文、刺突文などあり、それらが多くの意匠で施されている。この反面、口縁や胴部には地紋のRL

斜行縄文以外の施文がなされるものはあまり見られない。小型の器形のものにも口形が楕円になる傾向や「装飾部」の付加が見られるも、大型のものほどではなく簡略化されたものも多い。大型と異なり口縁～胴部に横走沈線文や円弧文などが施されるものもあるが、これらはやや特殊な位置づけのものが多いようだ。

Ⅲ～Ⅴ層出土のもの（図Ⅳ-1-66～70）

ここでは主体がⅢ層で出土したものやⅢ～Ⅴ層に分かれて出土したものを報告する。

0104、5013、0190、5661、0106は大型の器形のものである。0104の装飾部は縦につぶれたUの字形の貼付に撚糸文と刺突文を施したもので、口唇の文様も装飾部周辺に偏って施されている。5013は装飾部と内面に傾斜する口唇部に沈線文と撚糸の押捺が施されたものである。0190は目立った突起こそ見られないが、長軸の一方の口唇部が緩やかに盛り上がるなど装飾部の意匠を備えている。口唇部に施されているのは地紋と同じ原体による縄線文である。5661は装飾部が外に向かって張り出したものである。突起上には渦巻き状の撚糸文とその中心には刺突文が施される。胴部の下位には粘土を盛った横位の稜線が巡っており、これが胴部と底部との境界であると考えられる。0106の装飾部は内面にまで届く逆三角形所の貼付によって構成されている。その上には撚糸文と沈線文が施文されている。

0187は浅鉢の底部でおそらくこれも大型の部類に入るであろう。焼成は良好で器壁が薄いにも関わらず硬質感のある仕上がりである。内面は黒色でこれが炭化物の付着によるものかは不明である。

0173、0107、5277、0115、5031、5647、0143、0005、0016、5044、5027は小型と考えられるものである。

0173は台付のものである。口唇部には二つが対になる突起が四カ所付加されており、台部には貫通孔が穿たれている。文様は口縁部に円弧文と縦の細沈線が施されている。LH-002とその周辺で出土しており台付の器形は他に見られないことから、やや特殊な位置づけのものと推定される。0107は一際小型のものに大きな装飾部を有したものである。撚糸の施された装飾部下位の器面には貫通孔が穿たれている。5277は装飾部の口縁である。主に貼付は口縁の器面に対して行われておりその下位にはやはり貫通孔が見られる。0115は長軸の両端がやや盛り上がるだけのものである。胴と底部の稜線に沿って工具不明の刺突文が巡っている。器面には炭化物が厚く付着しており、頻繁に煮沸などが行われていたと推定される。5647は小型の器形で過度な装飾部を有している。突起状には撚糸文と刺突文が施されている。0143は口縁部に山形に似た沈線文を施したものである。内面側にやや傾斜する口唇部には地紋と同じ縄文が施される。0005は口唇部に突起が配置される丸底のものである。0016は口唇に低い二つの突起を備えている。

0155は装飾部を有する小型の鉢形土器である。装飾部の突起には撚糸文と刺突文、その下位の器面には貫通孔と沈線文が施されている。口縁部には円弧文状の施文がなされる文様帯を有し、底部と胴部の稜線に沿って細い竹状の工具による刺突文が巡っている。

Ⅴ層出土のもの（図Ⅳ-1-71～81）

0194、5686、0109、0116、0124、0128、0103、0177、0183、0192、5040、5045、5065、5090は大型のものである。

0194、5686は装飾部の丸味を帯びた貼付に撚糸の押捺を施している。0109は口唇の断面が尖り気味になるもので、おそらく装飾部は持たない。胴部を巡る稜線に沿って縄の輪を押捺させている。0116は口唇部のなだらかな高まりに棒状の工具で刻みを施したものである。口形は円に近く装飾も簡略化されているようだ。0124は装飾部の突起が外に張り出すものである。三つの突起には撚糸の押捺と刺突文が施されている。0128は口縁部に施された貼付で区切られた部分に撚糸文と刻みが施されている。0103、

0177 はは底の浅い器形である。0103 は口唇には小さな突起とそこを境に撚糸の押捺が施されている。0177 の装飾部の突起には内側からの貫通孔が穿たれている。0183 は口形が円に近いものである。口唇部には棒状の工具を使った一定間隔の刻みが施される。0192は底の浅い器形で主な装飾部は欠失している。残存する突起上には渦巻きの撚糸文が施される。5040 は装飾部に垂下する貼付を持つものである。貼付と口唇には棒状の工具による刻みが、口縁部には縄線文が施される。5045、5065 の突起には撚糸が押捺されている。5090 の装飾部は内面に及ぶもので撚糸文と円弧文、刺突文などが施される。中央の突起の下位には貫通孔が穿たれている。0118、0119、0129、0175、0155、0179、0109、0111、0117、0110、0093、0182、0193、0198、0202、0204、0206、0205、5004、5018、5035、5026、5059、5061、5153、5173、5223、5651、5652、5653、5655 は小型のものである。

0118、0175 は突起部と口唇部に撚糸が施文されるもので、0118 は口形が楕円、0175 は円形を呈する。胴部や底部の稜線に沿って 0118 が棒状工具の斜めの刺突、0175 には縄端が押捺されている。0119 の胴部下位には浅い窪みの無文部が巡っている。0129、0179 は口形が円を呈する。0179 の口縁部の無文帯は意図的に作出していると思われる。0109 は欠失した突起部に貫通孔が穿たれている。0111、0117 は短く垂下した貼付が施されるものである。いずれも口形は楕円と考えられ口唇部には撚糸が施文されている。0117 の口縁部には棒状の工具による刺突文が巡っている。0110 は表面に指の整形痕が多数ある無文の土器である。0193は底部の輪郭に沈線文と刺突文が施されるもので、これらの意匠は大洞式系統の影響であろう。0198 は口縁部に刺突文が施される。0202 の胴部と底部の稜線に沿って巡るのは縄の圧痕である。0205 は口形が楕円を呈するもので、装飾部下位の器面には二つの貫通孔が穿たれている。右側の短軸の口唇部には片口状の貼付がなされていた形跡が認められる。5004、5018、5061、5655 は沈線文の施されるものである。5018、5061 は円弧文状のものが施されており、5018 は異形土器、5061 は注口形土器の可能性がある。5035 は口唇部と口縁部とに縄を押捺している。5153、5173、5223 は口縁部に刺突文の施されたものである。5153 は縄の端部、5173 は棒状の工具、5223 は先端が尖る扁平の工具によるものである。

注口・片口形土器など（図Ⅳ -1-82 ～ 84）

0170はLH-002で出土した小型の注口で、平成 6 年度報告で掲載されたものを補完し再復元を行った。口形は円を呈し胴部には細い横走沈線と刺突が巡っている。底部にはLR の斜行縄文と中心付近に胴部と同じ意匠の沈線文と刺突文が施されている。

0018 は口形が楕円で長軸に片口が備わる土器である。片口部の両脇には二つの貫通孔が穿たれており、比較的平坦な作り底部は胴部との変換点が明瞭である。口唇部には突起を有しそれらの上には撚糸が施文されている。胴部のほぼ全域には沈線文と刺突文による文様が描かれており、その意匠は今回出土の中で異質といえる。底部のかすれた地紋は RL の斜行縄文である。

0088は大型の注口部を持つ土器である。口形は楕円を呈し注口はその短軸に備わっており、底部は丸味を帯びてやや張り出す。口唇部と注口部周辺には撚糸が施されている。胴部の沈線は横走するものと蛇行するものとがあり、注口の付け根にはボタン状の貼付を中心とする同心円状のものが施されている。底部の輪郭には棒状の工具による斜めからの刺突文が巡っている。地紋は RL の斜行縄文である。

0196は楕円の口径の長軸に注口が備わる土器である。底部は比較的平坦で、注口部付け根の両脇には二つの貫通孔が穿たれている。注口の注ぎ口付近と口唇部には撚糸が施文されており、胴部と底部には横走する沈線文と弧を描く沈線文とが施されている。地紋は RL の斜行縄文である。

その他の土器（図Ⅳ -1-85・86）

0186は異形の所謂「双口土器」である。二つの筒形の土器を合体させた形状で、内部は口部と底近く

の胴部で繋がっている。口径の長軸方向にある両方の口縁部には二つが対になる貫通孔が穿たれている。小さな突起を持つ口唇部には撚糸が施文され、胴部には細い横走沈線文を下地に円弧状もしくは渦巻き状とも捉えられる複雑なパターンの沈線文と刺突文とが施されている。底部周辺の斜行縄文はRLの原体によるものである。焼成は良好で胎土の色調は明るい赤褐色を呈している。再焼成もしくは特殊な制作方法が使われている可能性もある。

0098は舟形を呈する土器である。口径長軸の口縁部は大きく突起しており、そこから垂下する貼付がなされている。突起と口唇部には撚糸が施文され、貼付には指のようなもので連続する凹凸が作られている。胴部上半部の器面には浅く不安定な沈線文とそれに沿う刺突文とが施されている。地紋はRLの斜行縄文で底部にも同様の施文がなされる。5656は円く浮き上がった面に同心円上の撚糸文を施した胴部の破片である。浮いた面の外側には細い串状の道具による刺突文、その更に外側には細沈線文が巡っている。0176は口形が楕円の小型土器である。胴部には横走する細沈線と刺突が施文されている。底部の縄文は節の細かいRLの原体を使っている。

(6) Ⅵ群土器（図Ⅳ-1-87～108／図版107～123）

続縄文時代と考えられる土器群で総数9,074点が出土した。前半と後半のものとが出土しており、主体となるのは前者である。これらに伴って土壙墓、土壙、焼土、集石、炭化物集中などの遺構が検出されている。基本的にはⅢ層に包含される遺物であるが、Ⅴ層からも約1,600点が出土している。これはⅤ群c類土器との破片レベルでの区別が難しく分類が混乱したことが要因と考えられるが、反面Ⅵ群への変化の兆しが縄文時代晩期末葉の土器に生じていたとも考えられる。そのことから、表の掲載に際しては数字の操作を行わずままに報告することとした。

1 a類／前半のもの（図Ⅳ-1-87～106）

所謂「大狩部式」に相当するもの、あるいはそれと併行するものである。恵山式の影響を受けたものも出土しているが時期的には大狩部式に伴うと考えられる。主に調査区東側の段丘上で出土しており、同時期の土壙墓や周辺の焼土などの遺構も土器の出土区域と重なる傾向にある。

土器の器形は深鉢形、鉢形が主体でこれらが組成を構成している。それ以外の器形は少なく、恵山式の影響を受けたものに瓶形や壺形のようなものが見られる程度である。全般的に器壁の立ち上がりが外に向かって開いていく変化や底部の小径化や上げ底化などの傾向は強まり最終形態にまで変化したものも見られる。また、一部の土器にはある種の特徴的な歪みが備わっており、この歪みからは粗雑とは異なるいわば「計算された崩し」と言った印象を受けるもので一つの特徴をなしている。

口縁部は平縁で一部のものには突起類が付加される。口唇上には縄や棒状の工具、爪などによる刻みが単独もしくは組み合わせで施されている。口縁部に縄線文や沈線文、貼付文などが施される文様帯を持つものも多いが地紋だけのものも少なくなく、文様はⅤ群c類と比較して全体的に簡素化しているといえよう。地紋は二段単節と二段多条の原体が使われており、縄文の条が縦位になるもの以外に横位のものや両者が上と下の段に分かれて施文されるものも見られる。全般的に統一された意匠は感知されず雑多なものが混在するイメージが強い。

a)深鉢形土器（図Ⅳ-1-87～101）

深鉢形で大型のものは高さがあり幅がやや狭いものが多い。

縄線の施されたもの（図Ⅳ-1-87・88）

0001、6005、6185、0152、0013、0137は口縁部の文様帯に縄線文が施されたものである。

0001は口縁の地紋を施していない部分に2～3条の縄線文を施したもので底部は上げ底である。口唇部には部分的に縄による刻みが施されており、地紋はLRの縄で条が横位になる縄文である。6005は4

条の横走する縄線文が施されたもので、口唇部の外側が外に向かって飛び出す特徴を持つ。その口唇部には棒状の工具で等間隔の刻みが施される。縄線文の原体はRLの縄でこれは地紋に使われたものと同じと推定される。6185は小型のもので文様帯の縄線文は曲線的なものが描かれている。口唇部と胴部の縄文はLRの原体によるもので、縄線文も同じ原体と推定される。

0152、0013、0137は縄線文と沈線で描かれた曲線模様とが併用されるものである。0152は横走する細い縄もしくは撚糸が施されている。丸味を帯びた底部は輪郭部がやや張り出したもので底厚も厚みがある。0013は口縁部の相対する位置に貫通孔のある肥厚部分を有した土器ある。文様帯には類似した意匠の縄線文と沈線文が施されており、地紋は多条のRL縦走縄文である。底部は底厚が厚く上げ底気味のもので縄文は施されていない。明褐色の胎土は硬質感のあるもので他とは異質である。0137は縄線文を施した後に沈線で複雑な曲線模様を描いた大型の土器である。口唇部には地紋と同じLRの斜行縄文が施されている。

沈線の施されたもの（図Ⅳ-1-88～90）

0132、6179、6159、6094、6126、6122、6095、0015、6167、6120、6145、6088、6160、0074は沈線文の施されたものである。

0132、6179、6159、6094、6126、6122、6095、0015、6167は曲線的な文様が描かれるもので、0132、6159、6094、6167の口唇部には地紋と同じ縄文が施されている。6162、0015の口唇部には指及び指先状の道具で刻みが施されている。使用されている縄文原体は0132、6094、6126、6095、0015がRLの二段多条、6122がLRの二段多条、6167がRLの二段単節のものである。0132、6095は口唇に緩やかな山状の突起認められる。

6120、6145、6088、6160、0074は直線的な文様が描かれたもので、6120は横走する細沈線に沿って竹串状の道具で表からの刺突が施されるもので、地紋は施されていない。6145は文様帯の沈線の下位に竹管状の工具で斜め下からの刺突列が施されている。地紋はRLの二段多条である。

6088、6160、0074は地紋の施されない口縁部に沈線文、刺突文、貼付文で近似の意匠による文様を施したもので、これらは極近い出土区から出土している。地紋と口唇部に施されている縄文原体は、いずれもRLの二段単節である。これらの器形は0074と同様に器高の割合から見てスリムな胴部と小径の底部を有したやや特殊なものと推定される。0074の口唇部には二つが対になる突起が4カ所あり、突起の上と口唇上には竹串状の工具による刺突文と刻みが施されている。口縁文様帯の刺突文は約1/2周で施文が終わっており、貼付文には十の字や下駄の歯状など種類の異なる刻みが施されている。小径の底部は上げ底で底厚が薄い。

口唇部に刻みの施されたもの（図Ⅳ-1-91～96）

口唇部の施文は縄線文や沈線文のものも含めてほとんどのものに見られるもので、その施文具は棒状の工具、指先や爪、先端が鋭利な工具、縄などがある。

0145、0144、6100、6161は棒状の工具を使って口唇部に刻みを施したものである。0145は口縁部の下位が内側へ括れる器形のもので、その角度変換部に巡る稜線には口唇部と同じ工具で刻みが施されている。土器の規模と比べて径が小さい底部は上げ底の中央が逆さのドーム状に張り出すもので、この底面にも地紋が施されている。地紋は0145がRL、0144、6100がLRの二段単節である。

0002、0003、6125、0163、6002は指の様な形状の工具を使って口唇部に刻みを施している。0002の地紋はRL二段多条の縦走縄文である。0003はLR二段単節の横走縄文が施されており器壁が厚い。6125の地紋はRL二段単節の斜行縄文である。0163は小型のもので地紋はLR二段単節の斜行縄文である。6002は底部の下端が少し張り出しており、地紋にはRL二段多条の縦走縄文が施されている。

6118の口唇部には爪状の工具で二つの方向から交互に刻みが施されており、口縁部には幅の狭い無文部が巡っている。地紋はLR二段多条の縦走縄文である。

0133、0141、0150、0212、0160、6146は口唇部に縄の刻みが施されるものである。全て地紋の施文と同じ原体が使われており、RL二段単節が0133、LR二段単節が0212、6146、RL二段多条が6002、LR二段多条が0141、0150、0160の施文に使われている。

0151は半裁した竹管状の工具を使った刻みが口唇部に施されており、地紋はRL二段多条の縦走縄文である。6117は先端が鋭利な工具による三角形の刻みが施されるもので地紋RL二段単節の縄文である。0141、0151、0212、0160は逆さのドーム状の底部が備わっている。

口唇部に縄文の施されたもの（図Ⅳ-1-97・98）

0135、0004、0136、0140、6138は口唇部に縄文が施されるものである。施文原体は地紋と同じものが使われており、0135、0004はLR二段単節、0136がRL二段単節、0140、6138はLR二段多条の原体が施文されている。0135は大型で平縁、上げ底のものである。やや外に向かって広がる断面角形の口唇部には縄文以外に棒状の工具による刺突も見られる。底部は径の小さな上げ底のもので底厚は薄い。0004は口形と胴部の横断面形が隅円方形を呈している。0136は口唇部の外側がめくれたように張り出すもので、口唇部の大型の突起は地紋の施文後に装着されている。

その他のもの（図Ⅳ-1-99・100・106）

0008、0167、0012、0149、0139、0148、6076、6079、6066、6073、6084、6080、6067、6091、6057、6128、6129は底部である。完全な上げ底になっているものは少なく底部の輪郭に角が付く段階のものが多い。また、上げ底のものの底には指の整形痕が認められるものが多い。0008は条が横に走るLRの地紋に底部近くの胴部で条が縦に走る縄文が加わる。0167の底部は中央がドーム状に少し外に張り出す。0012は内側の底面がやや張り出す。0148は底厚が厚い径の小さな無文の土器である。0146は口縁部、6124、0127は胴部である。施文原体はLR二段単節が0008、0167、0146、RL二段単節が0012、0149、RL二段多条が0139、6124、LR二段多条が0127で使われている。

6166は台付の容器と考えられるもので無文である。

b)鉢・浅鉢形土器

全体的に小型で口唇部の装飾や地紋などは簡素なものが多く、全体的には深鉢形土器の特徴をほぼ踏襲している。0006、0007は口唇部には棒状の工具による刻みが施されている。0006は口縁部に無文帯が巡るもので地紋はLR二段単節、0007は沈線による文様帯が描かれるもので地紋はRL二段多条である。0009は口唇部に爪状の工具による刻みの施されるもので、この土器の口形は楕円を呈している。地紋はLR二段多条である。0011は口唇部に突起を持つもので断面が角形の口唇上には地紋と同じRL二段多条の縄文が施されている。この土器は0014などとともに歪みのある器形が一つの特徴と言える。0014は内面の口縁部に地紋と同じRL二段多条の縄文が施された小型の土器である。口唇部の断面は外側の棒状の工具による刻みと内側の縄文とでたた尖り気味の丸形を呈している。底部は輪郭がやや張り出す軽い上げ底である。0019は器面に工字文の様な沈線が施されるものである。口唇部には低い突起が備わっておりその下には大きさの不揃いな貫通孔が三つ穿たれている。0161は口唇部の断面が切り出し形で先端部には緩やかな凹凸が施されている。0174は口形が楕円を呈するもので、その長軸の口唇部には貫通孔を有した突起が備わっている。口唇部には地紋と同じRL二段多条の縄文が施される。底部は台の形状であるが中央が円く張り出し座りが悪い。6007、6147、6008、6127は口唇部に棒状の工具による刻みが施されるもので、地紋は全てRL二段多条である。6127の口形は楕円を呈すると推定される。6150は口唇部に地紋と同じ縄文が施されるもので原体はLR二段多条である。6022の地紋はLR二段多

条である。0154、6123は無文の土器で0154の器壁は薄く6123は厚い。

c)その他の土器

撚糸文の施されたもの（図Ⅳ-1-101）

0035、0184、6134、6131、6133、6132、6135、6136は調査区西側の段丘上から纏まって出土した撚糸文の施された土器である。器形と組成は大型の深鉢形土器と小型の鉢形土器からなるもので、口縁は平縁で断面丸形の口唇部には棒状の工具、爪、縄などで刻みが施される。底部は径の小さな上げ底気味のもので、底面に施文されたものはない。器面に施された撚糸文の原体はすべてRのものが使われている。

0035は大型の深鉢形土器である。断面が丸形の口唇部には棒状の工具による刻みが施されている。器面の剥落が著しく、底部は欠失している。0184、6134は小型の鉢形土器である。0184は口唇には爪状の工具による刻みが施されており、口縁部には内側からの貫通孔が一カ所穿たれている。底部は径の小さなもので、僅かに中心部が逆さのドーム状に張り出している。6134の口縁部には無文帯を有しており、底部は下端が外に向かって張り出す。6131は深鉢形土器の口縁部である。断面丸形の口唇部には爪先による刻みが施されている。6133、6135、6136は鉢形土器、6132は深鉢形土器の底部である。6133は極めて径の小さな上げ底である。6132の底は僅かに中心部が逆さのドーム状に張り出している。6135の底部下端には刻みが施される。6136の底部は下端が張り出す。

恵山式の影響を受けるもの（図Ⅳ-1-104・105）

口縁部が外に開き胴部がやや張り出す器形は恵山式の影響を受けたと考えられる。胎土や作りはここで言う大狩部式に類似する。また、恵山式的な意匠を持つと考えられるものをここに含める。

0075、0134、0142、0147、0159、6137、6092、6130は口縁部が外に開き胴部がやや張り出すもので0147、0159の底部は上げ底になる。0075は胴部中段で縄文の施文方向を変化させたもので、原体は同一のRL二段多条である。0134は口唇部に竹管状のものを半裁した工具による刺突文が施されている。0142は口縁部に横走沈線と蛇行する沈線文が施されるものでそれにボタン状の貼付文が加わえられている。破片のいくつかはⅤ層中からの出土なのでⅤ群c類の可能性もある。0147、0159は条が横走するもので、0147は底部の径がやや小さく、0159の口縁部には内側からの貫通孔が穿たれている。6137も胴部中段で縄文の施文方向を変化させたものである。口唇部には篦状の工具で後北式類似の刻みが施されている。6092は口縁部に無文帯を有し、6130は横走する沈線が施されている。

6139、6144、6140、6142、6141、0138は恵山式的な意匠を持つと考えられるものである。6139、6140は口縁部に細沈線を巡らせたもので口唇部には指状の工具による刻みが施されている。焼成は良好である。6144は器壁の薄い胴部の破片である。横走する細沈線が施されている。6142は壺の口縁部、6141は頚部、0138は胴部である。

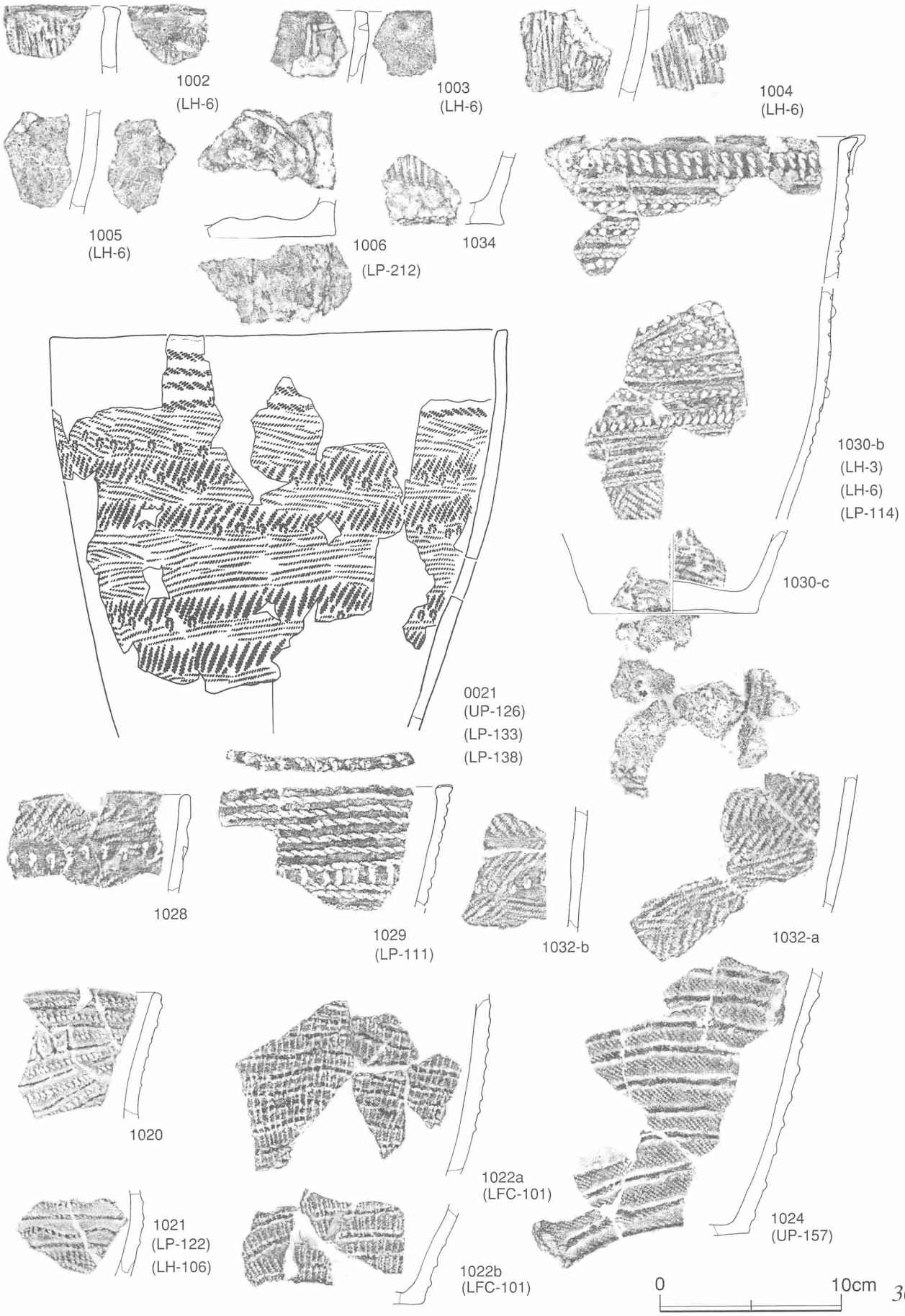
２ｂ類／後半のものも（図Ⅳ-1-107・108）

続縄文時代末葉の後北C2-D式が少量出土している。調査区東側の段丘から旧河道部で出土するものが多く、土壙墓群に関連する可能性がある。

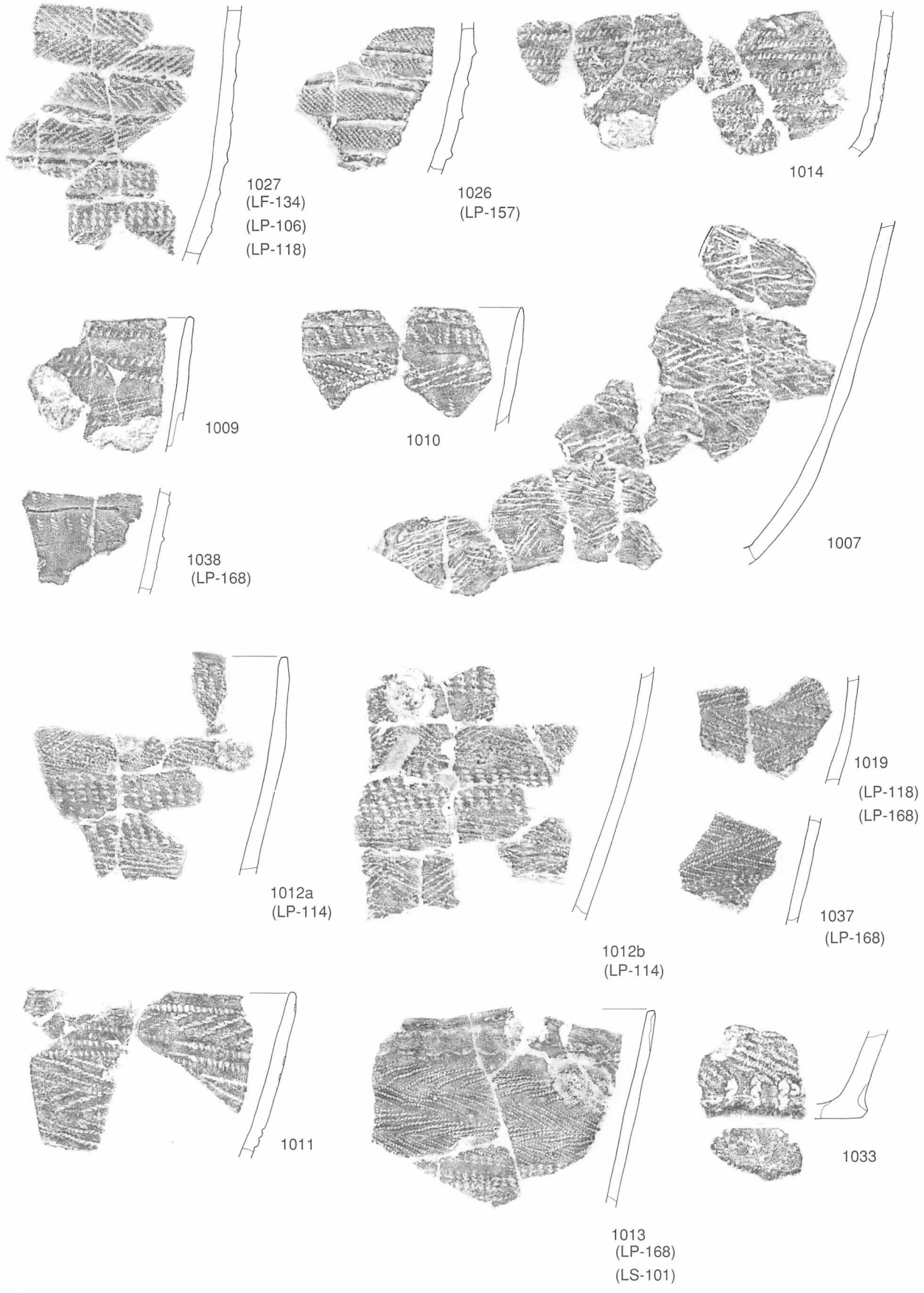
0017、6101、6105は帯縄文に沿って微隆起線が施される深鉢形土器である。0017が波状を呈する口縁部の一つの山に貼付と貫通孔による顔状の装飾が施されている。6103、6102、6104、0153は帯縄文の施される深鉢形土器である。0010、6111、0162は注口部を持つ土器である。

(7) Ⅶ群土器（図Ⅳ-1-109／図版123）

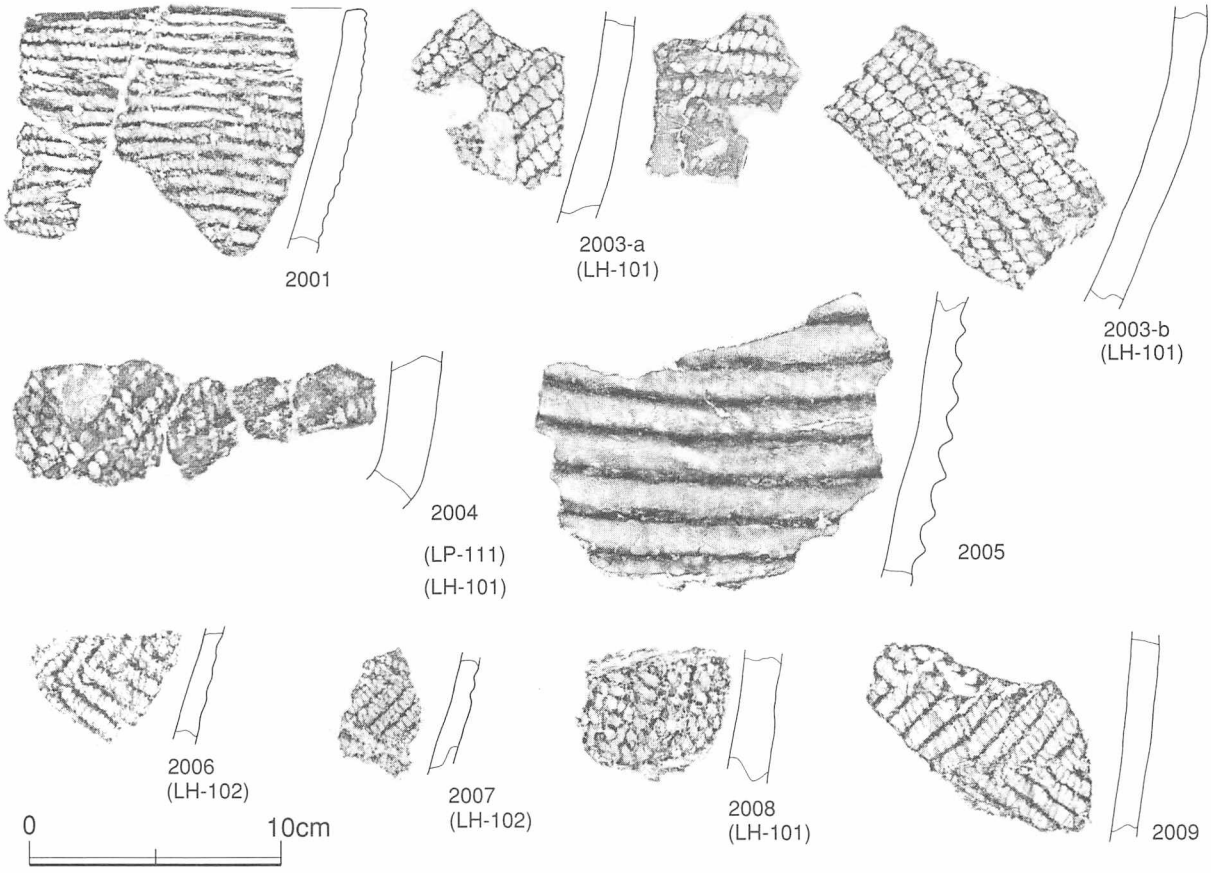
3個体が出土している。0036、0197は器面に刷毛状の調整痕が見られるものである。0022は沈線による文様帯を有している。


1002
(LH-6)
1003
(LH-6)
1004
(LH-6)
1005
(LH-6)
1006
(LP-212)
1034
1030-b
(LH-3)
(LH-6)
(LP-114)
1030-c
0021
(UP-126)
(LP-133)
(LP-138)
1028
1029
(LP-111)
1032-b
1032-a
1020
1022a
(LFC-101)
1021
(LP-122)
(LH-106)
1022b
(LFC-101)
1024
(UP-157)
0
10cm

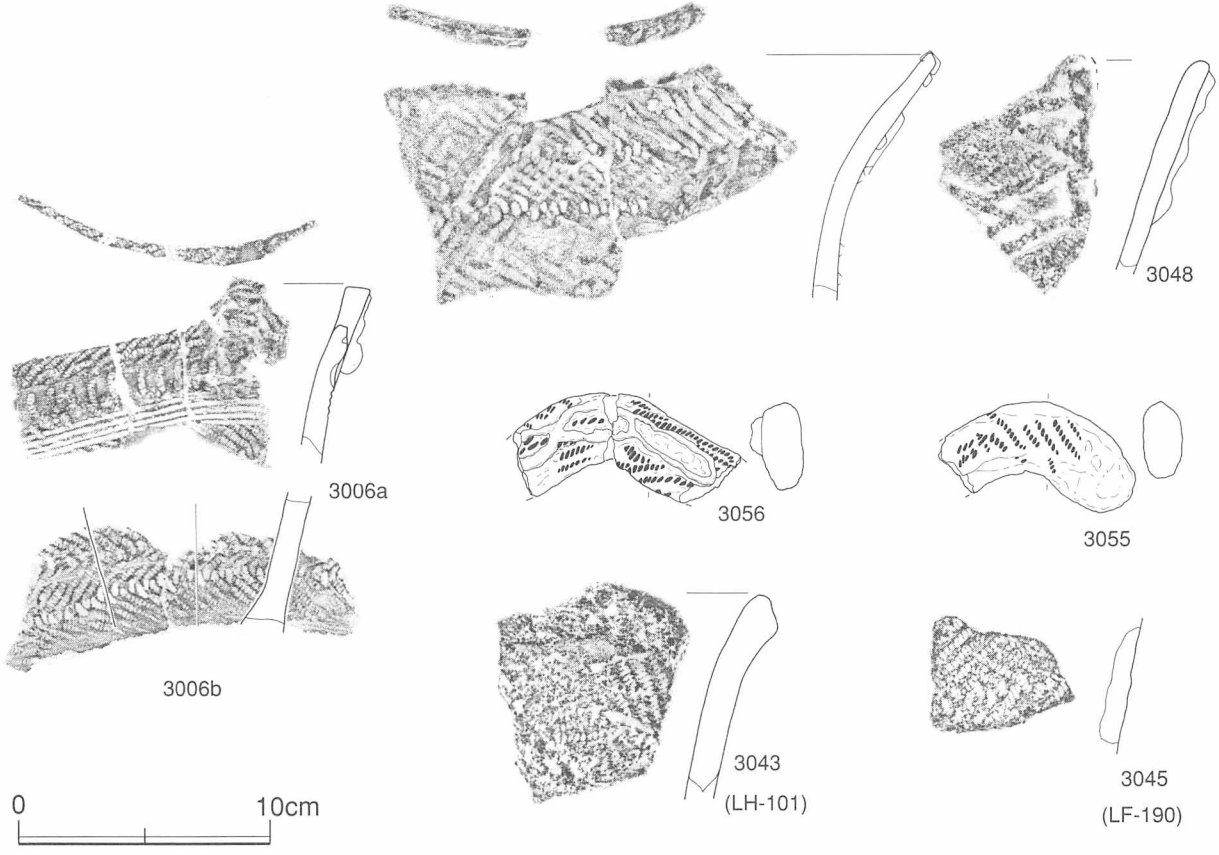
図Ⅵ-1-5　Ⅰ群土器（1）


1027
(LF-134)
(LP-106)
(LP-118)
1026
(LP-157)
1014
1009
1010
1007
1038
(LP-168)
1012a
(LP-114)
1012b
(LP-114)
1019
(LP-118)
(LP-168)
1037
(LP-168)
1011
1033
1013
(LP-168)
(LS-101)
0
10cm

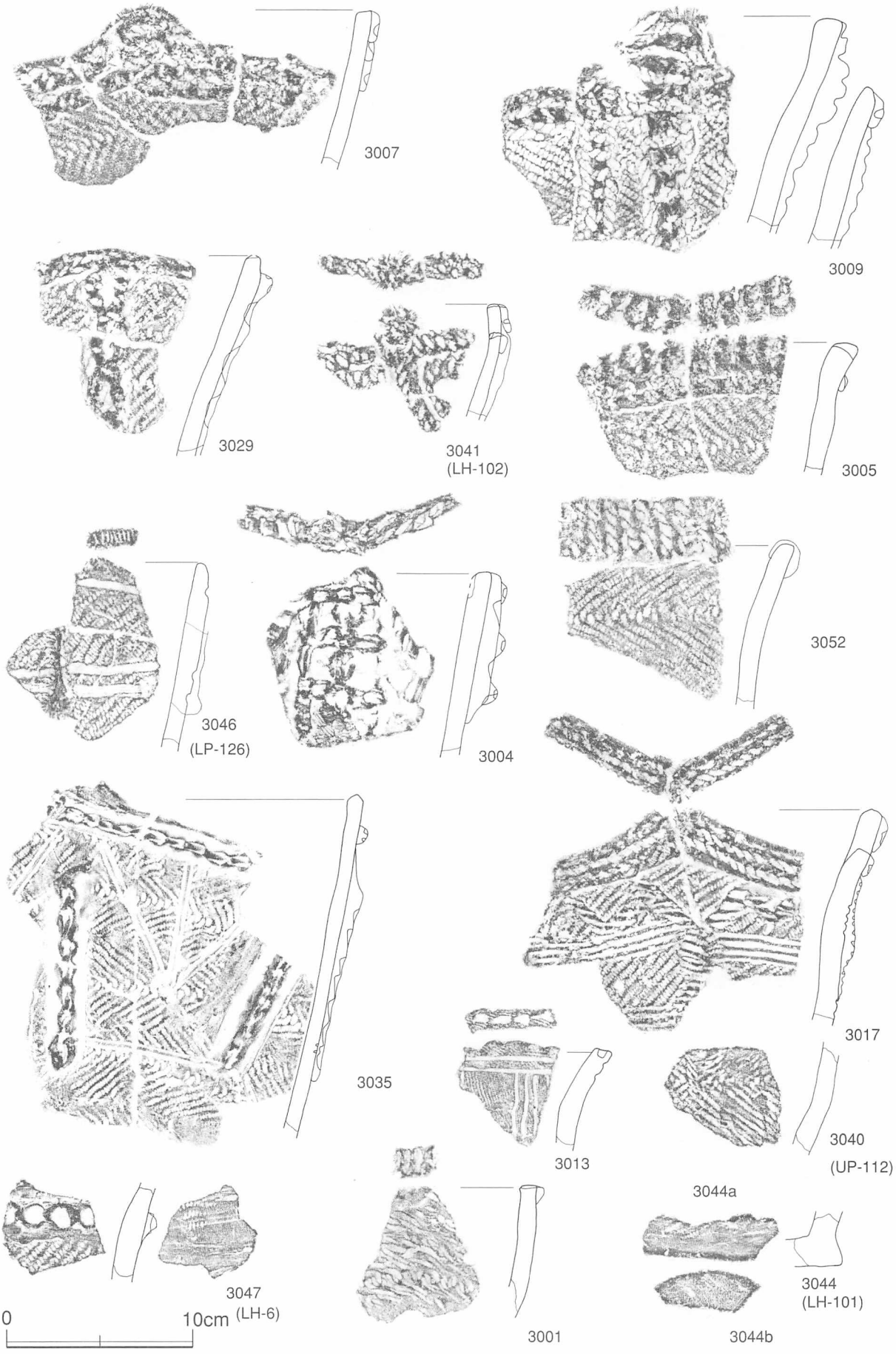
図Ⅵ-1-6　Ⅰ群土器（2）



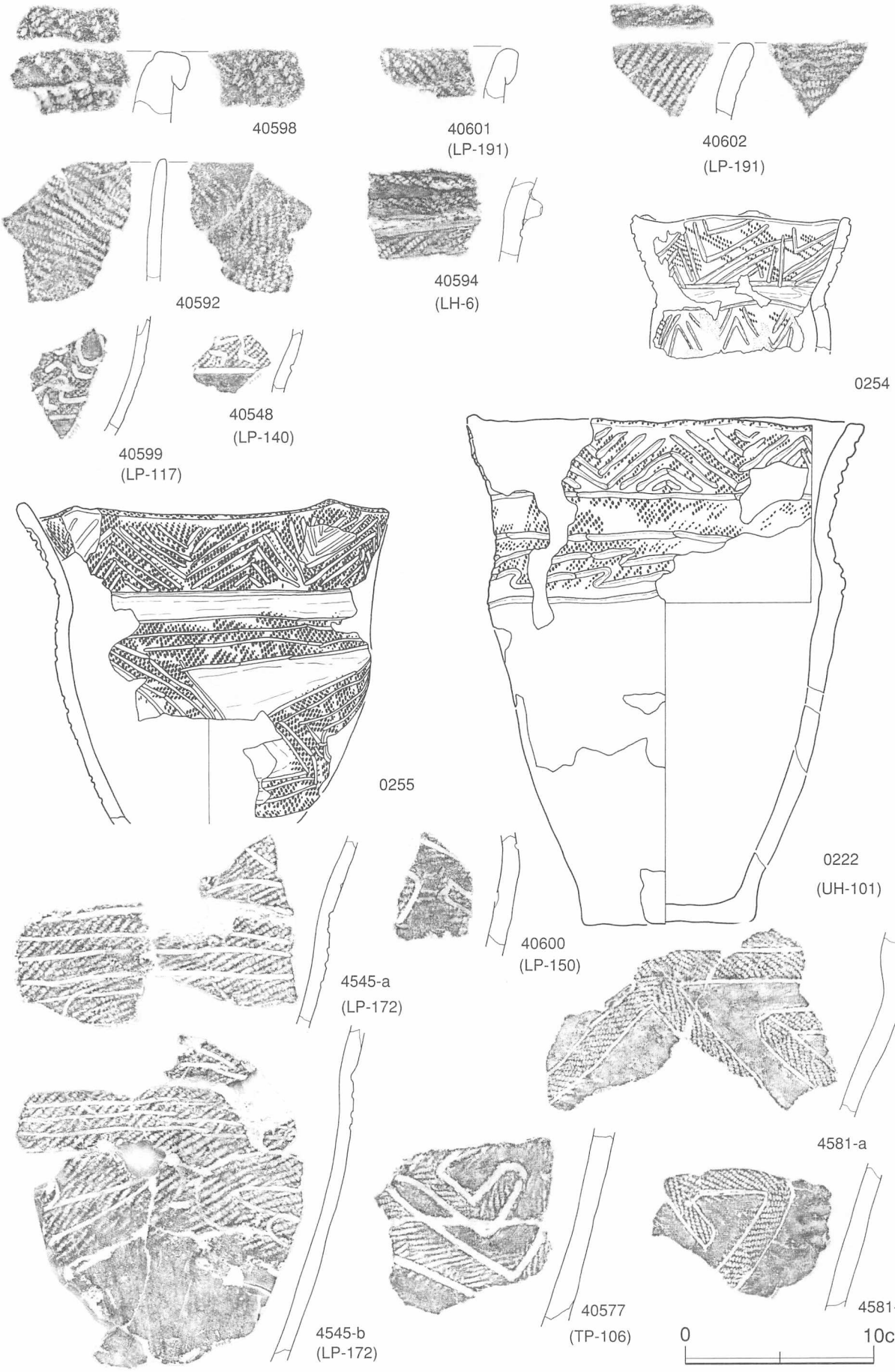
図Ⅳ-1-7　Ⅱ群土器



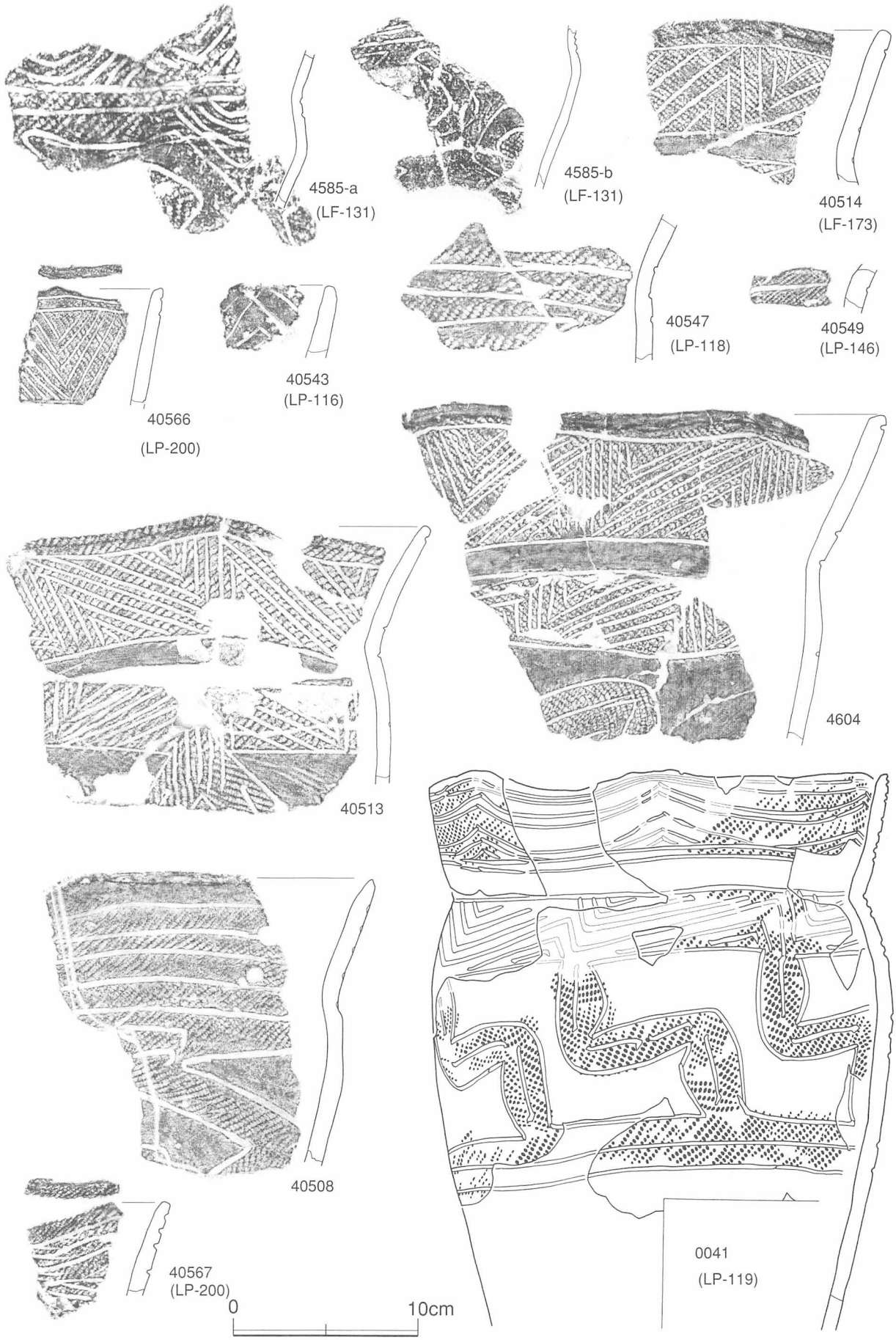
図Ⅵ-1-8　Ⅲ群土器（1）


3007
3009
3029
3041
(LH-102)
3005
3046
(LP-126)
3004
3052
3035
3017
3013
3040
(UP-112)
3044a
3047
(LH-6)
3001
3044
(LH-101)
3044b
0
10cm

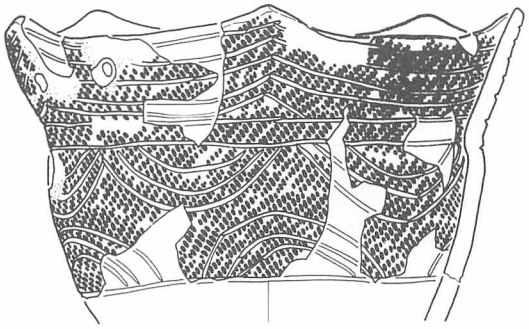
図Ⅵ-1-9　Ⅲ群土器（2）



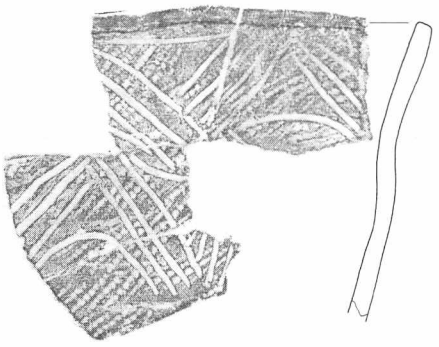
図Ⅵ-1-10　Ⅳ群ａ類・Ⅳ群ｂ類土器（1）



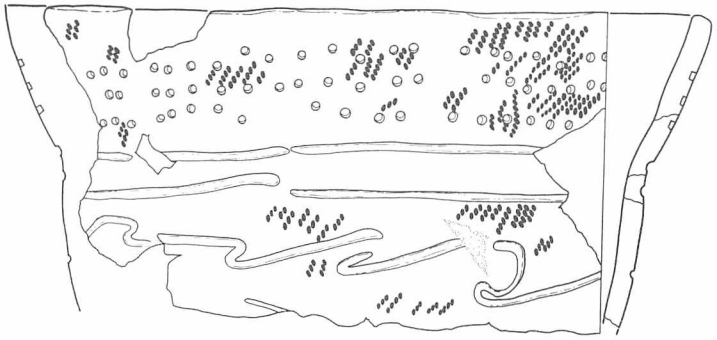
図Ⅵ-1-11　Ⅳ群ｂ類土器（2）



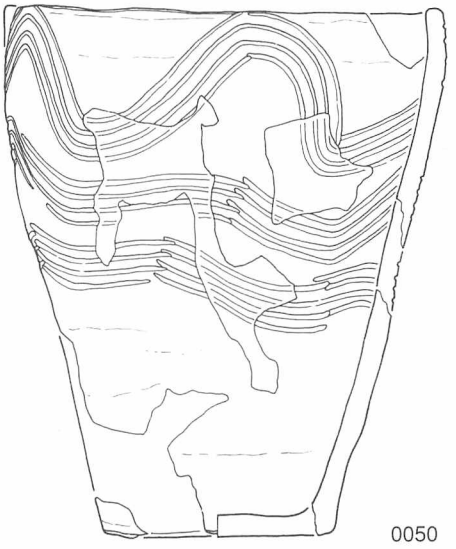
0043



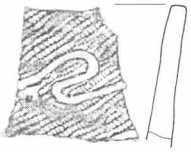
40509



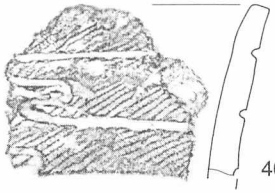
0038



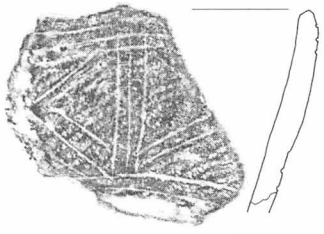
0050



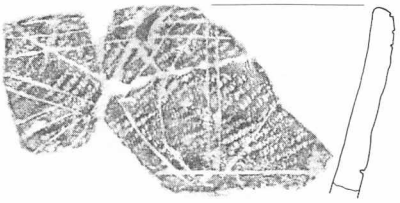
40595



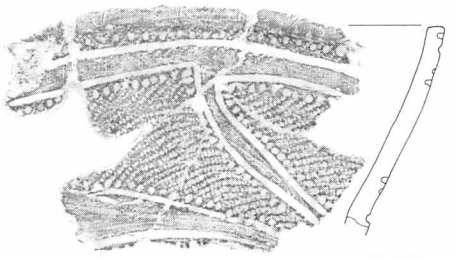
40596



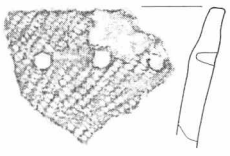
40570-a
(LP-210)



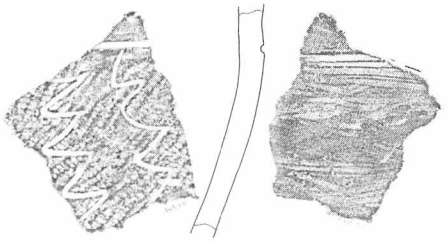
40570-b
(LP-210)



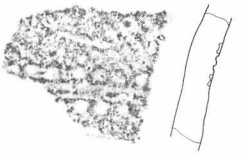
40483



40597



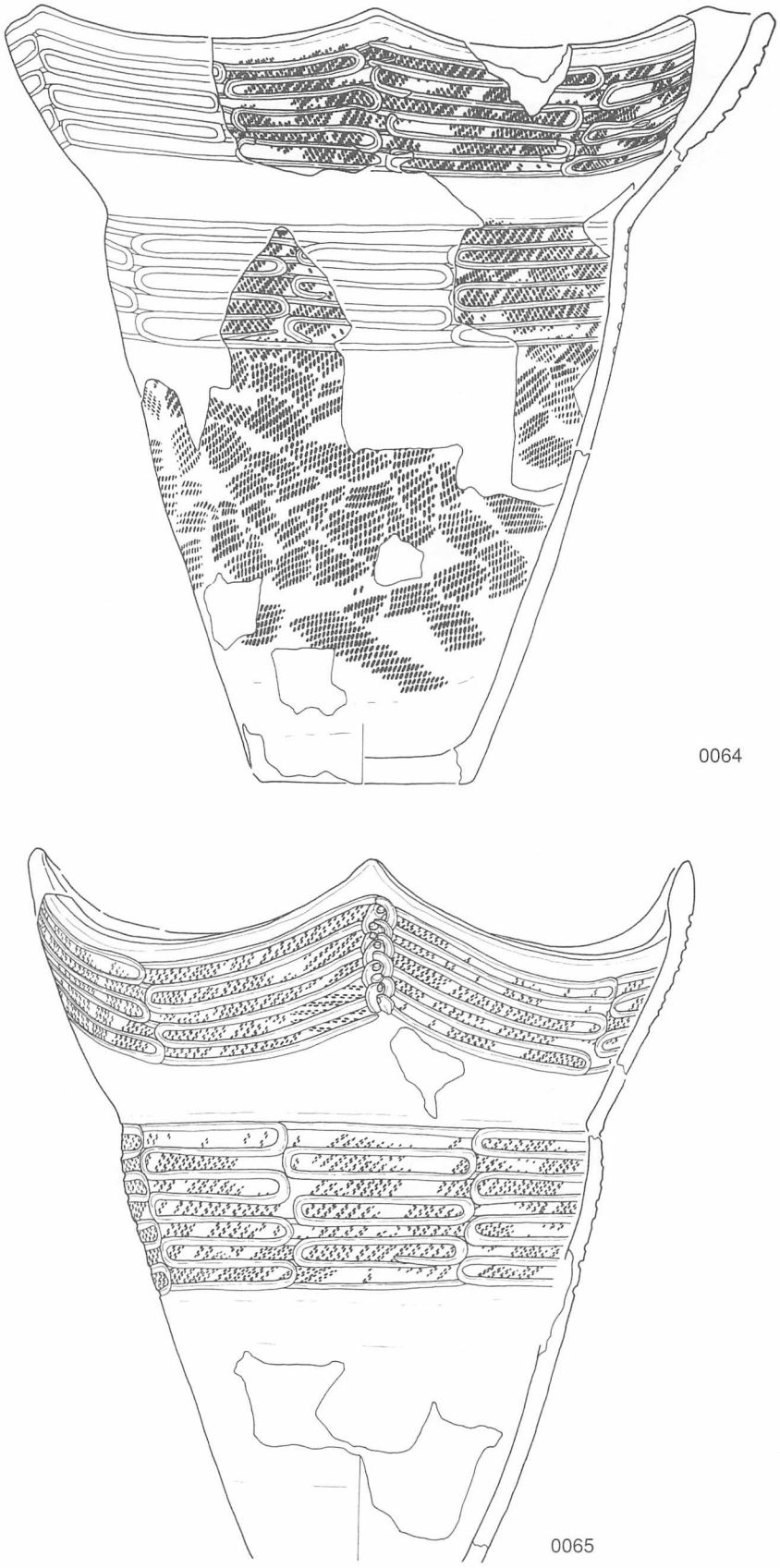
40520



40484

0　10cm

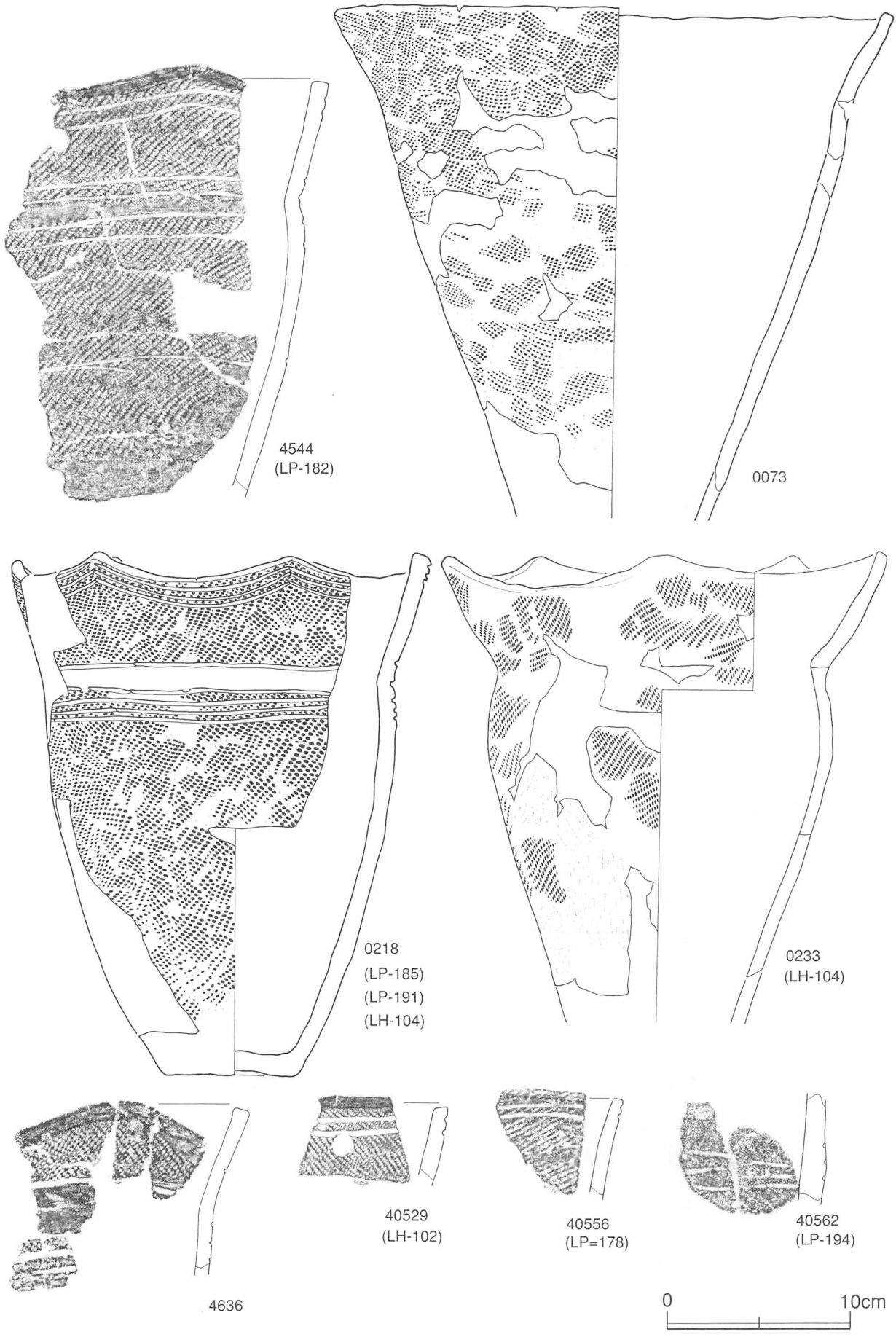
図Ⅵ-1-12　Ⅳ群ｂ類土器（3）



図Ⅵ-1-13　Ⅳ群ｂ類土器（4）

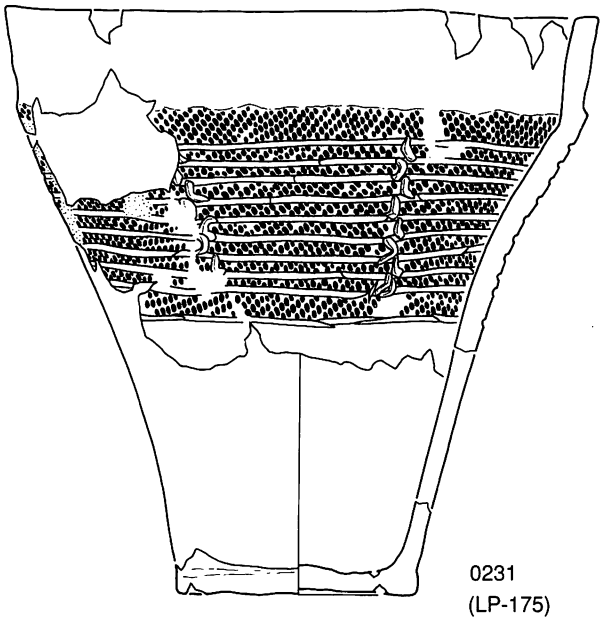


図Ⅵ-1-14　Ⅳ群ｂ類土器（5）

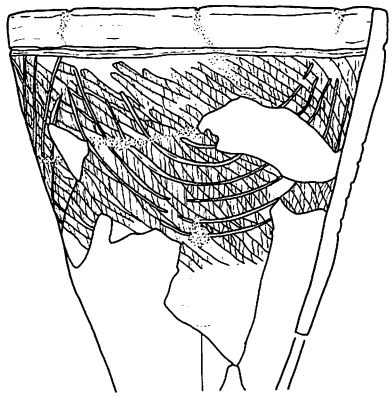


図Ⅵ-1-15　Ⅳ群ｂ類土器（6）

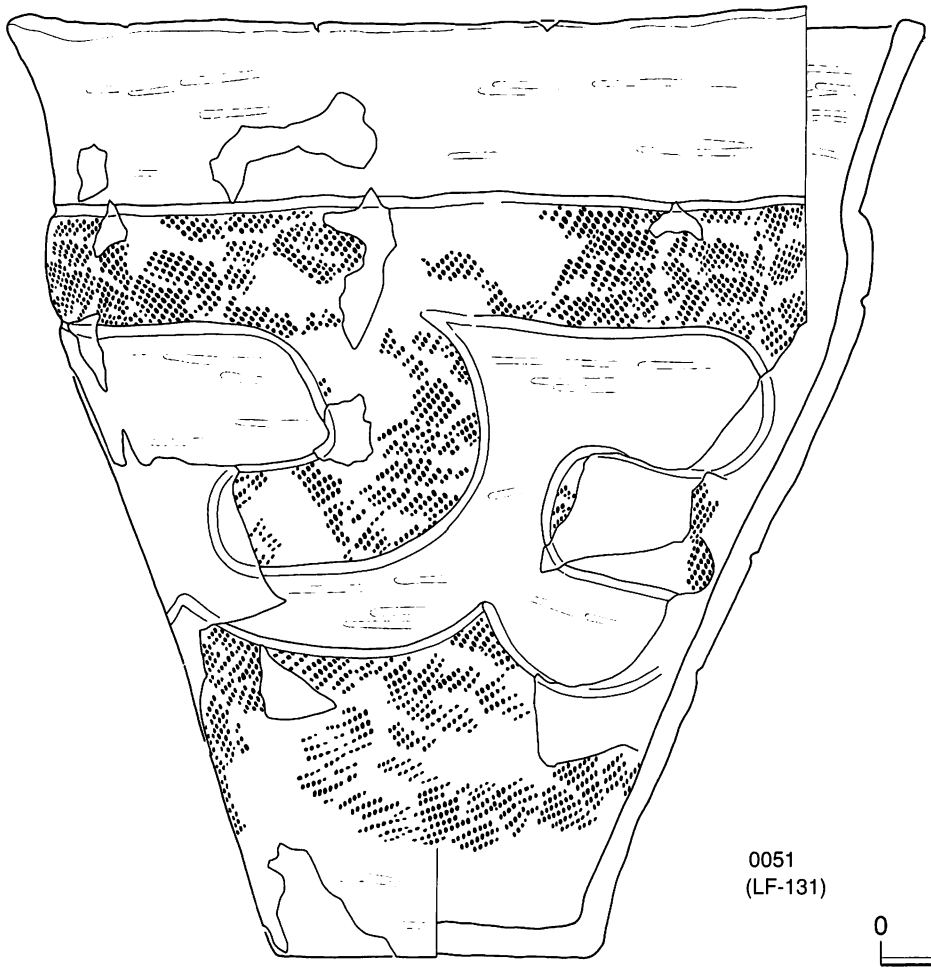
手稲式土器（新1類）
深鉢型土器



0231
(LP-175)



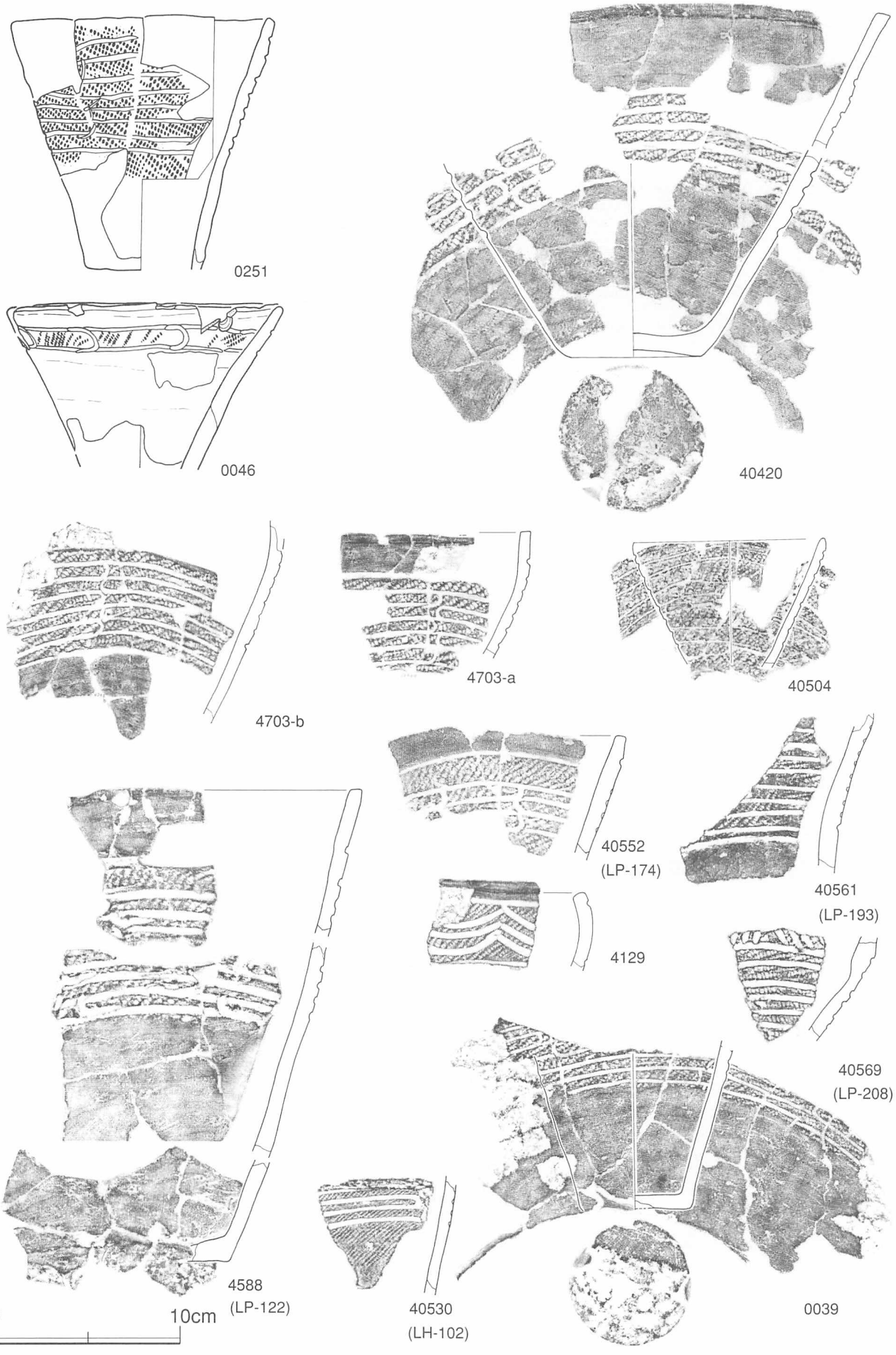
0048



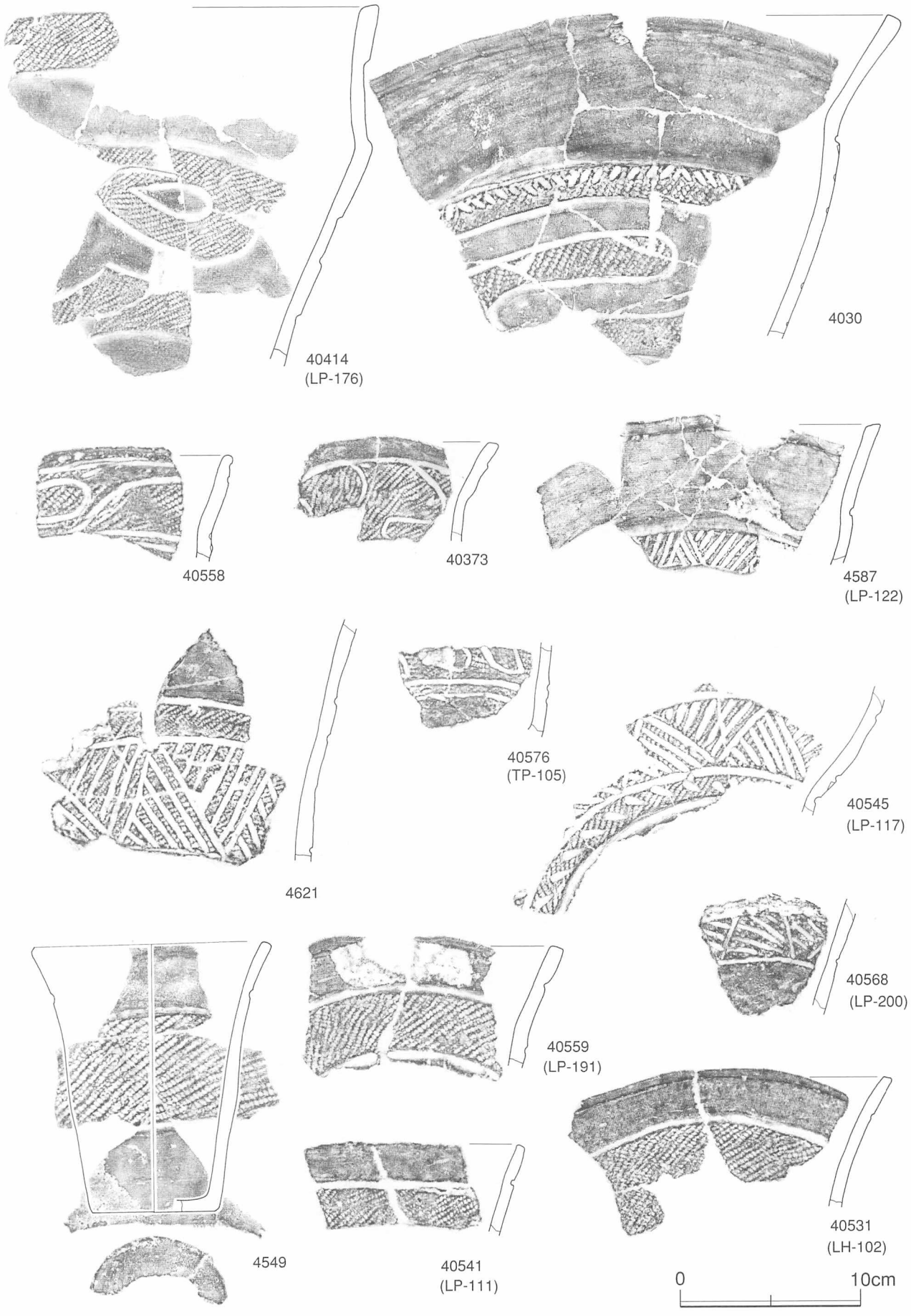
0051
(LF-131)

0　10cm

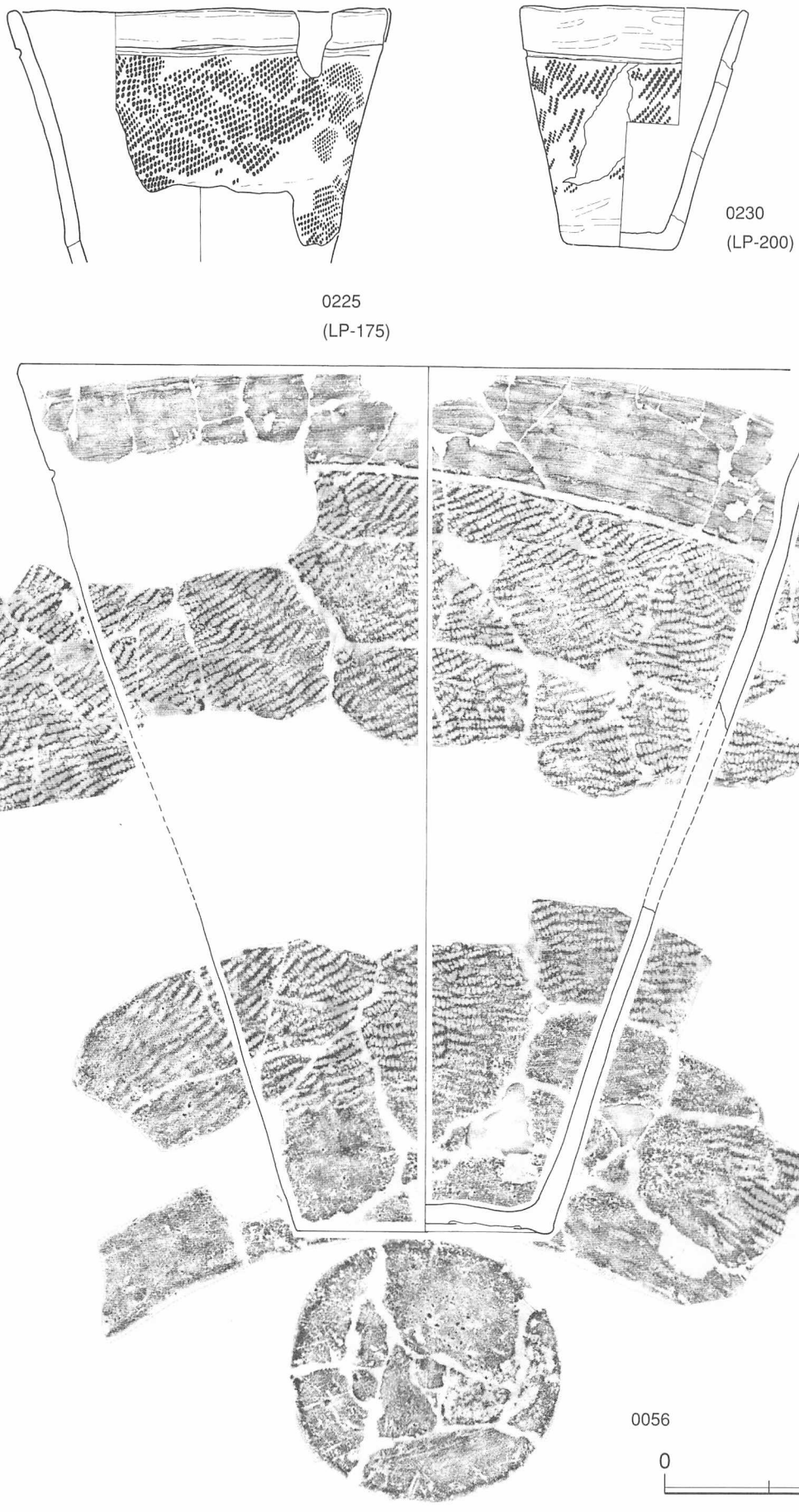
図Ⅵ-1-16　Ⅳ群ｂ類土器（7）



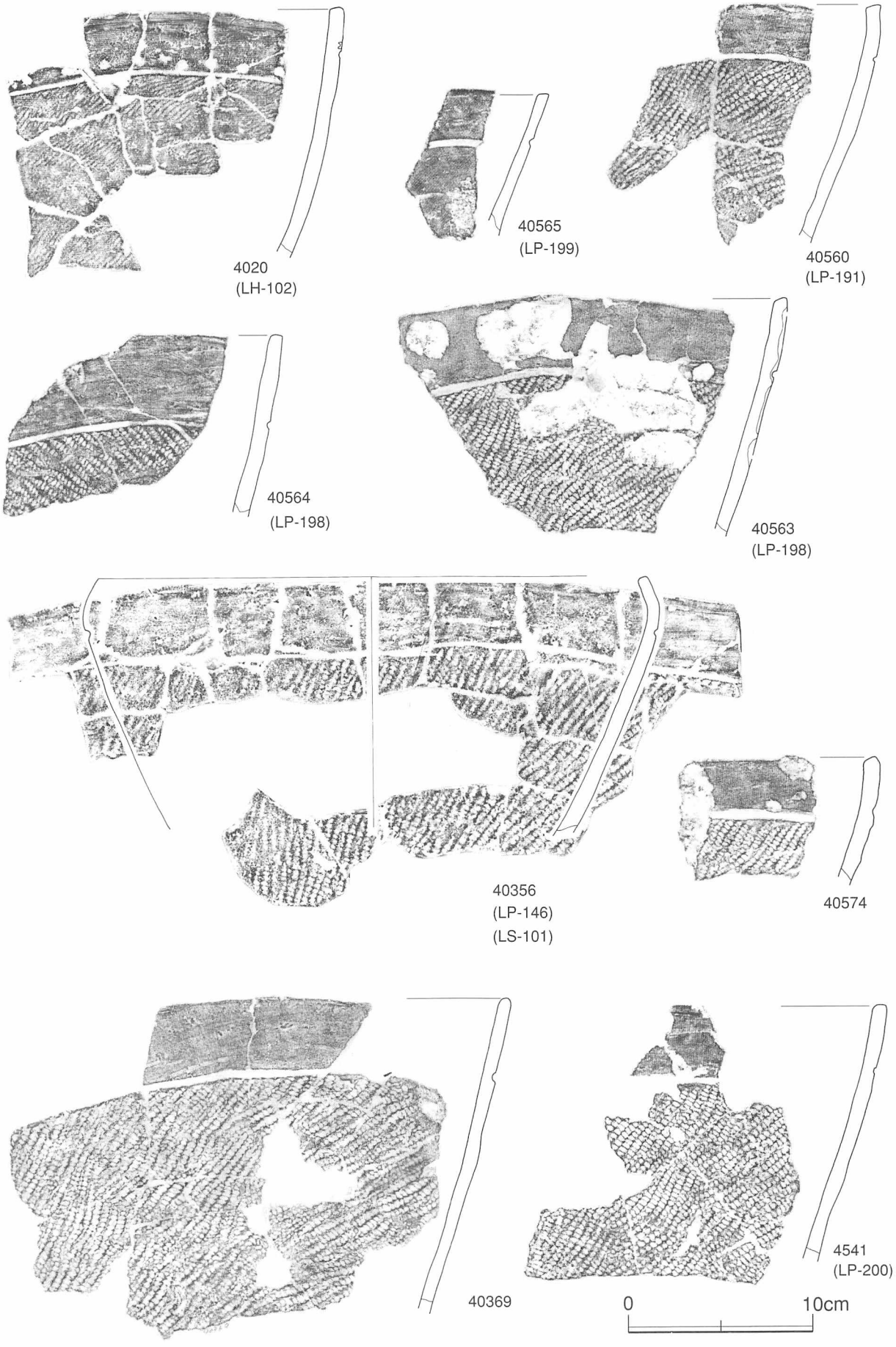
図Ⅵ-1-17　Ⅳ群ｂ類土器（8）



図Ⅵ-1-18　Ⅳ群ｂ類土器（9）



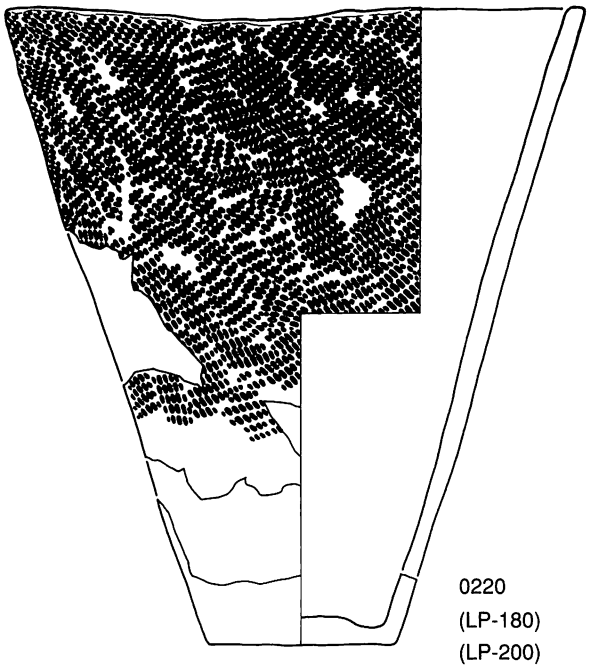
図Ⅵ-1-19　Ⅳ群ｂ類土器（10）



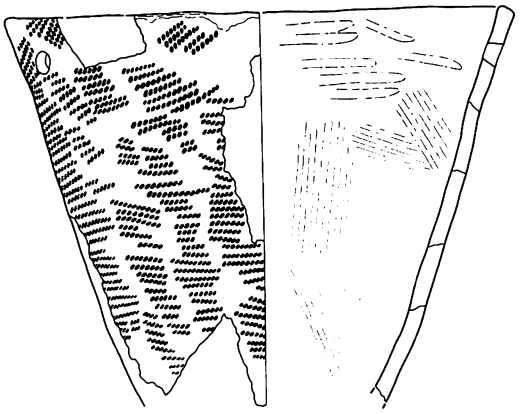
図Ⅵ-1-20　Ⅳ群ｂ類土器（11）



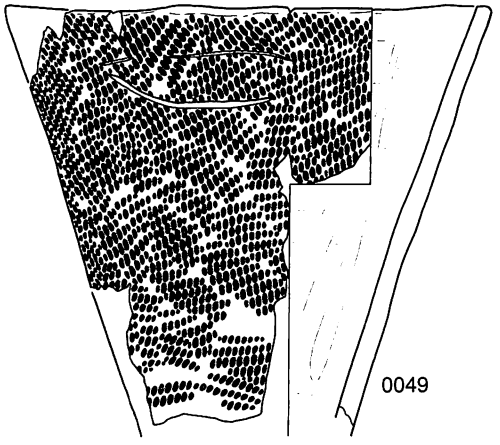
図Ⅵ-1-21　Ⅳ群ｂ類土器（12）



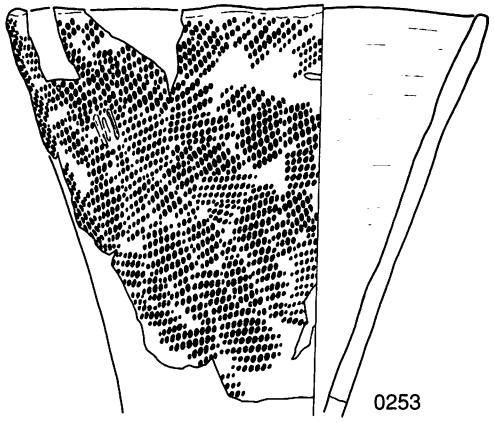
0220
(LP-180)
(LP-200)



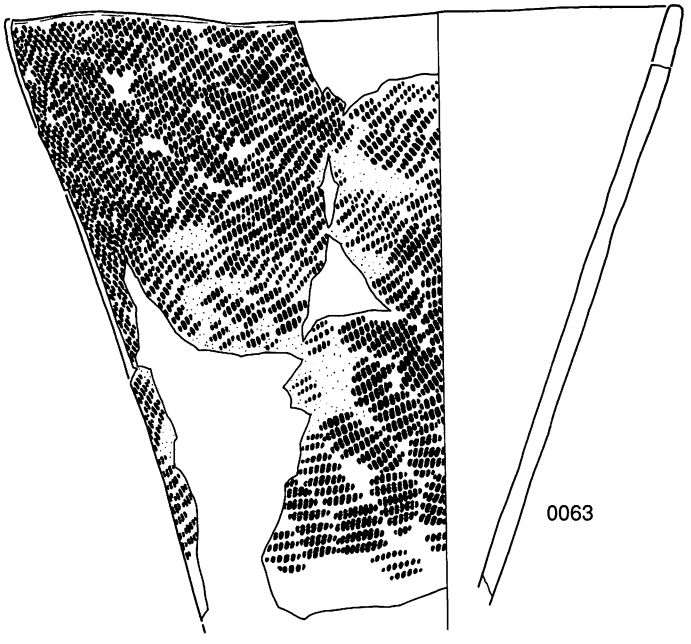
0256
(LH-106)



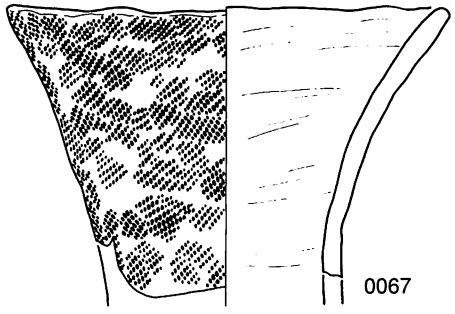
0049



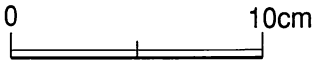
0253



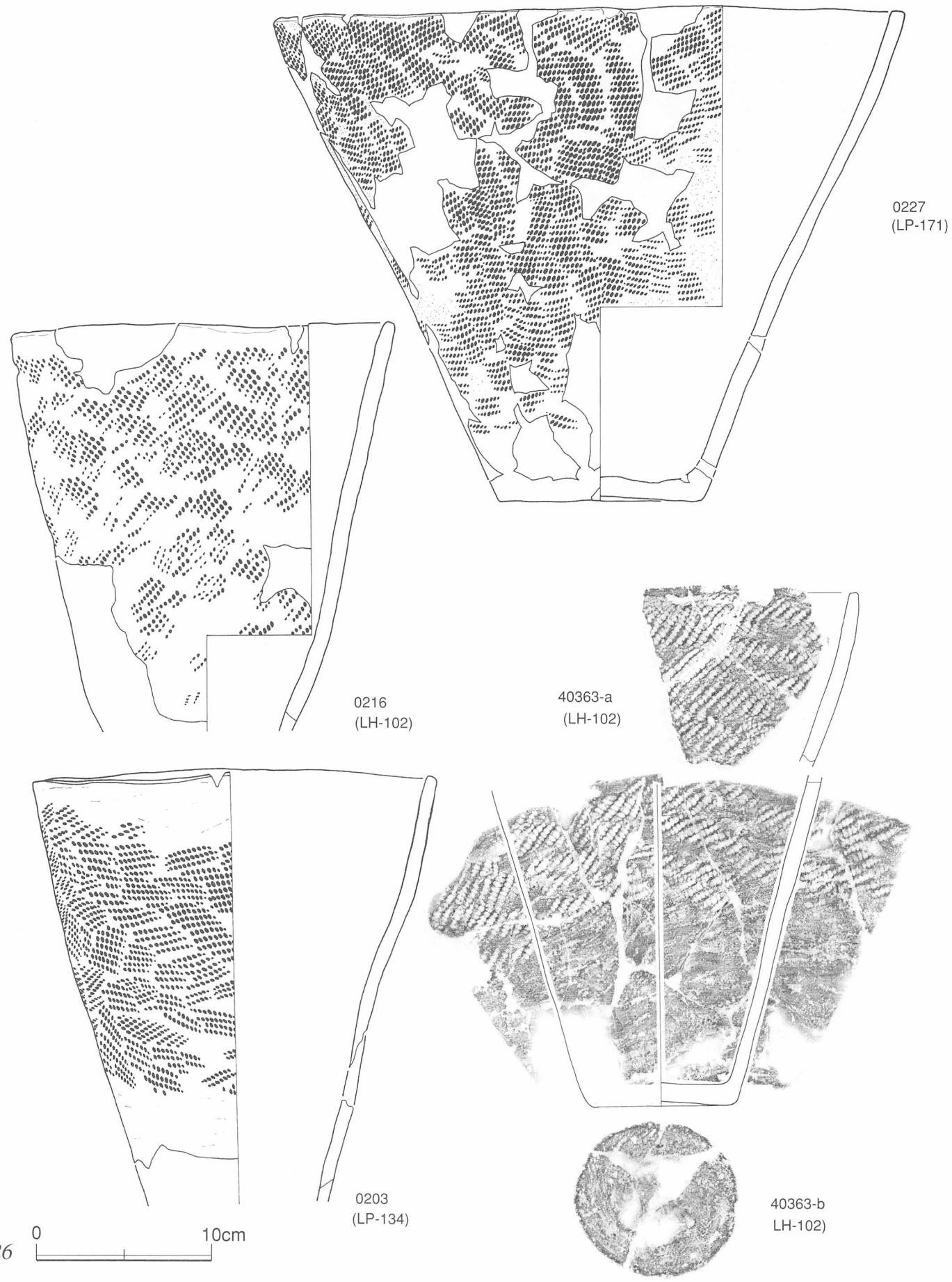
0063



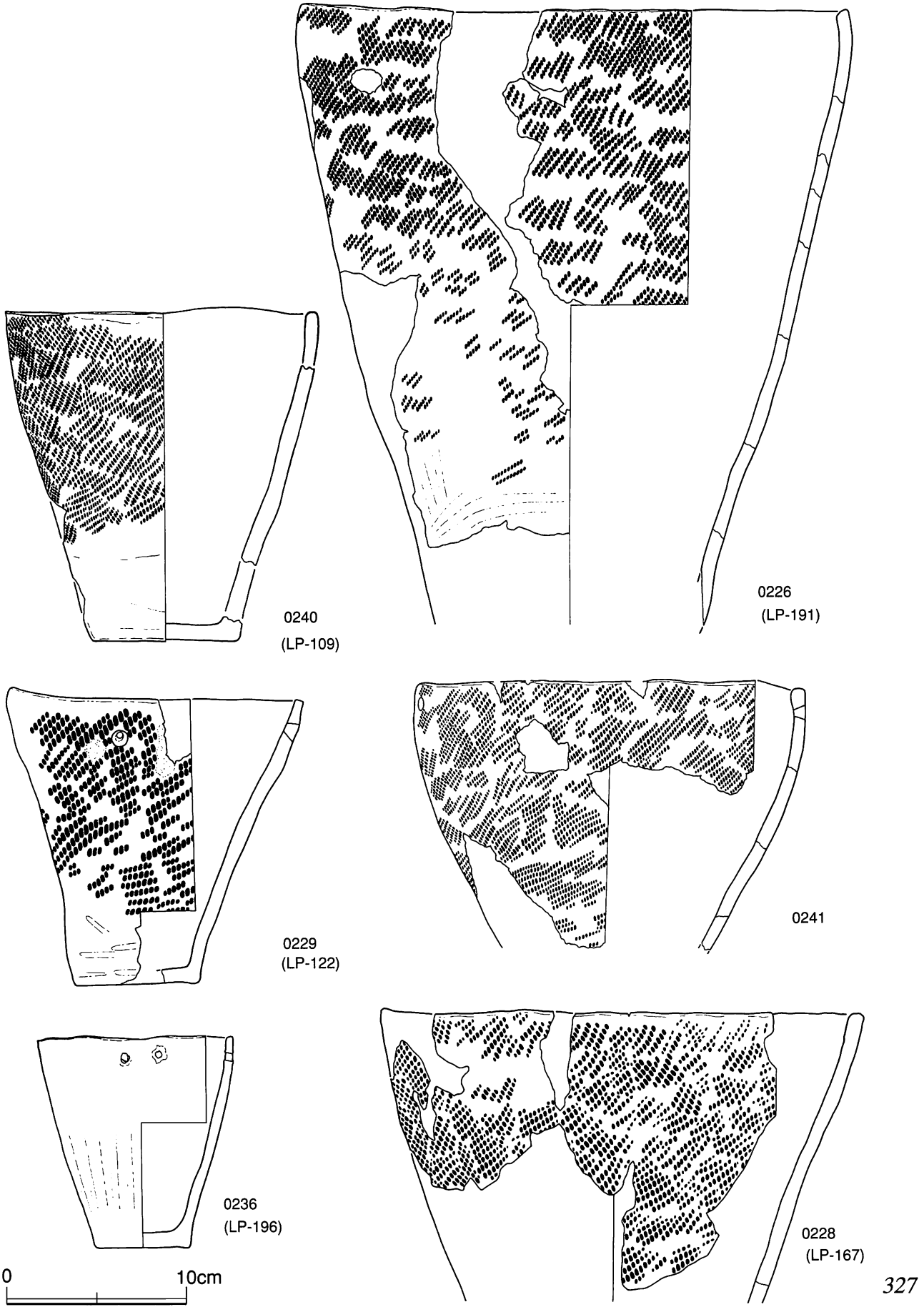
0067



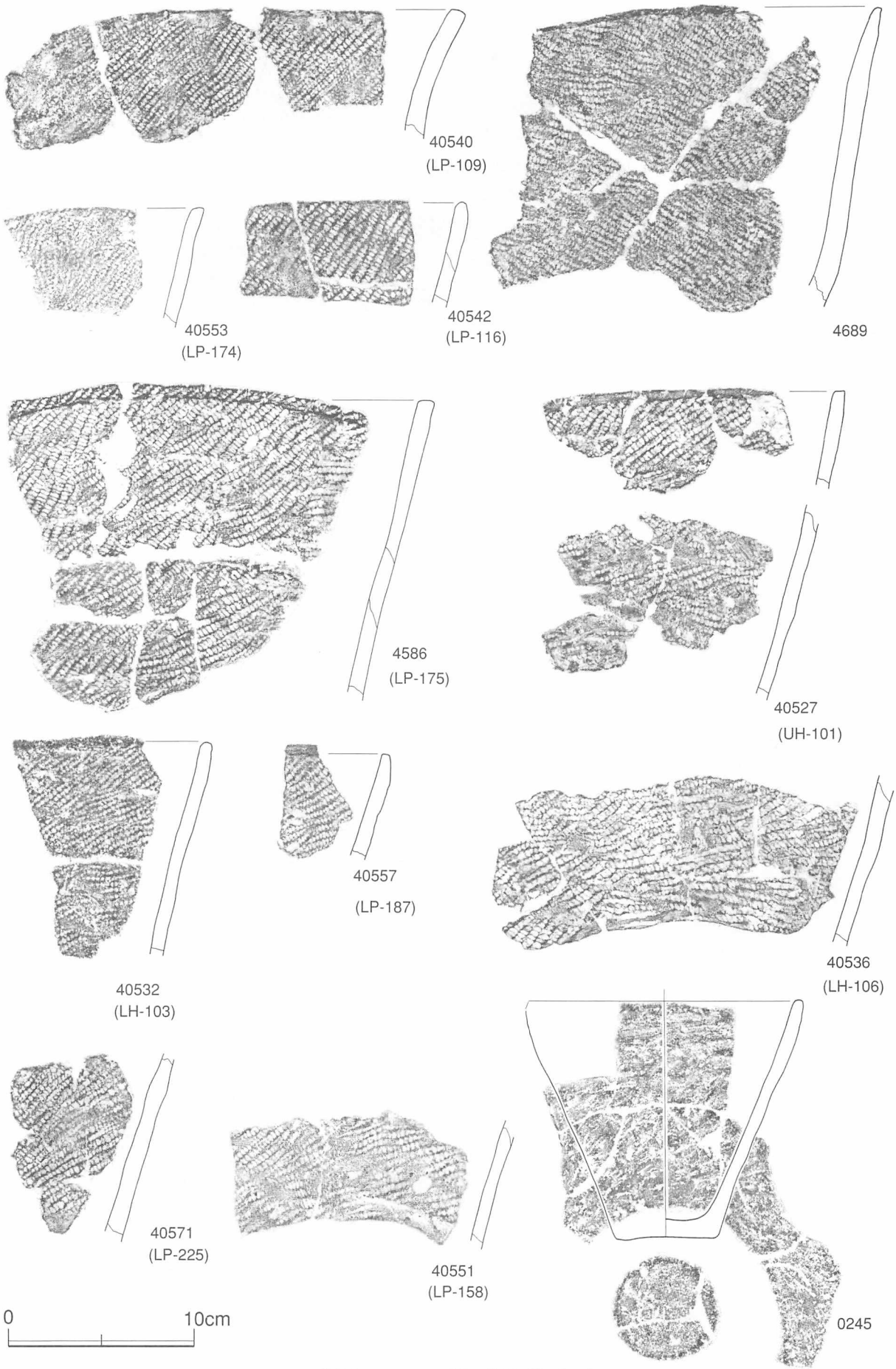
図Ⅵ-1-22　Ⅳ群ｂ類土器（13）



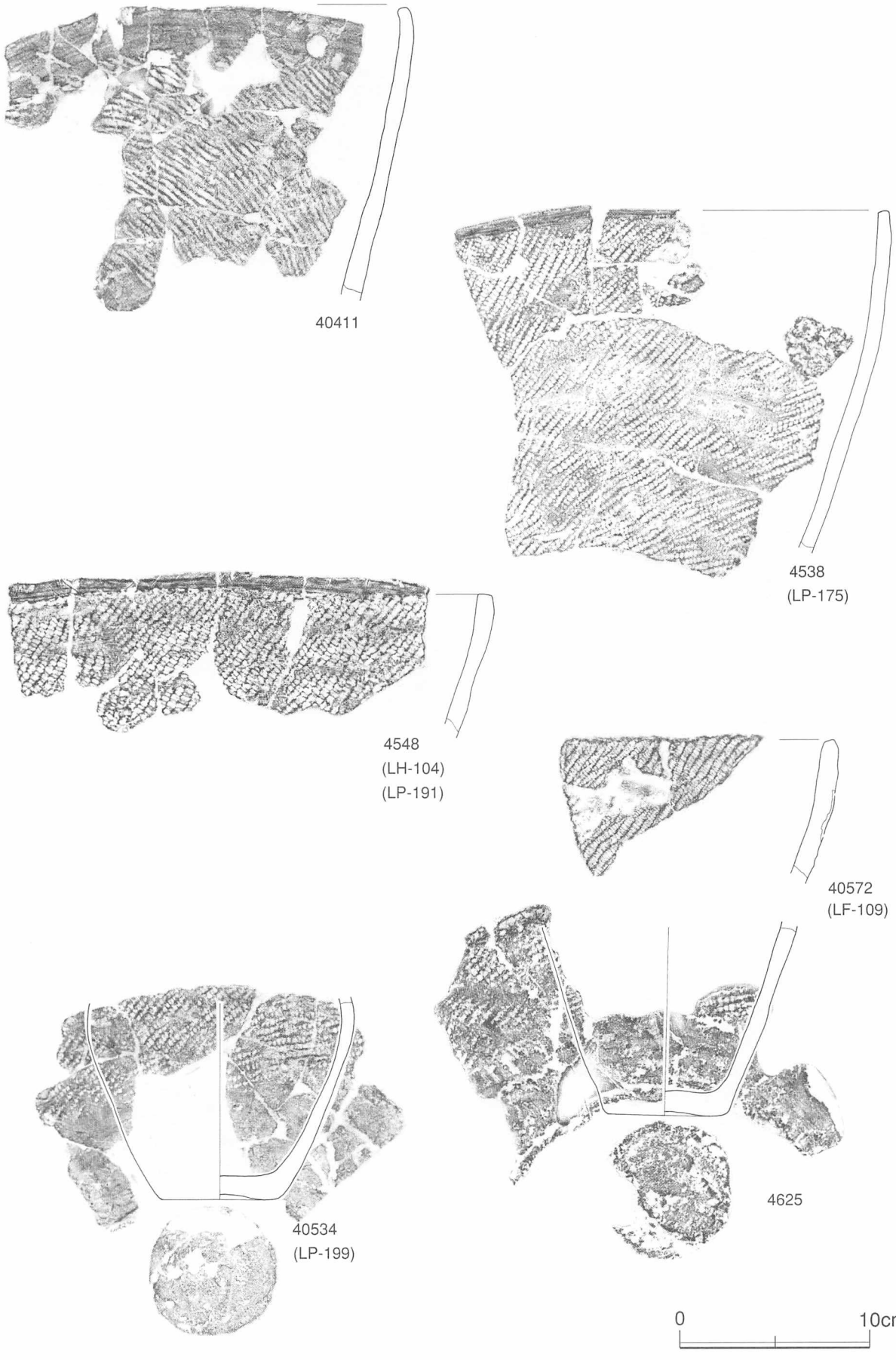
図Ⅵ-1-23　Ⅳ群ｂ類土器（14）



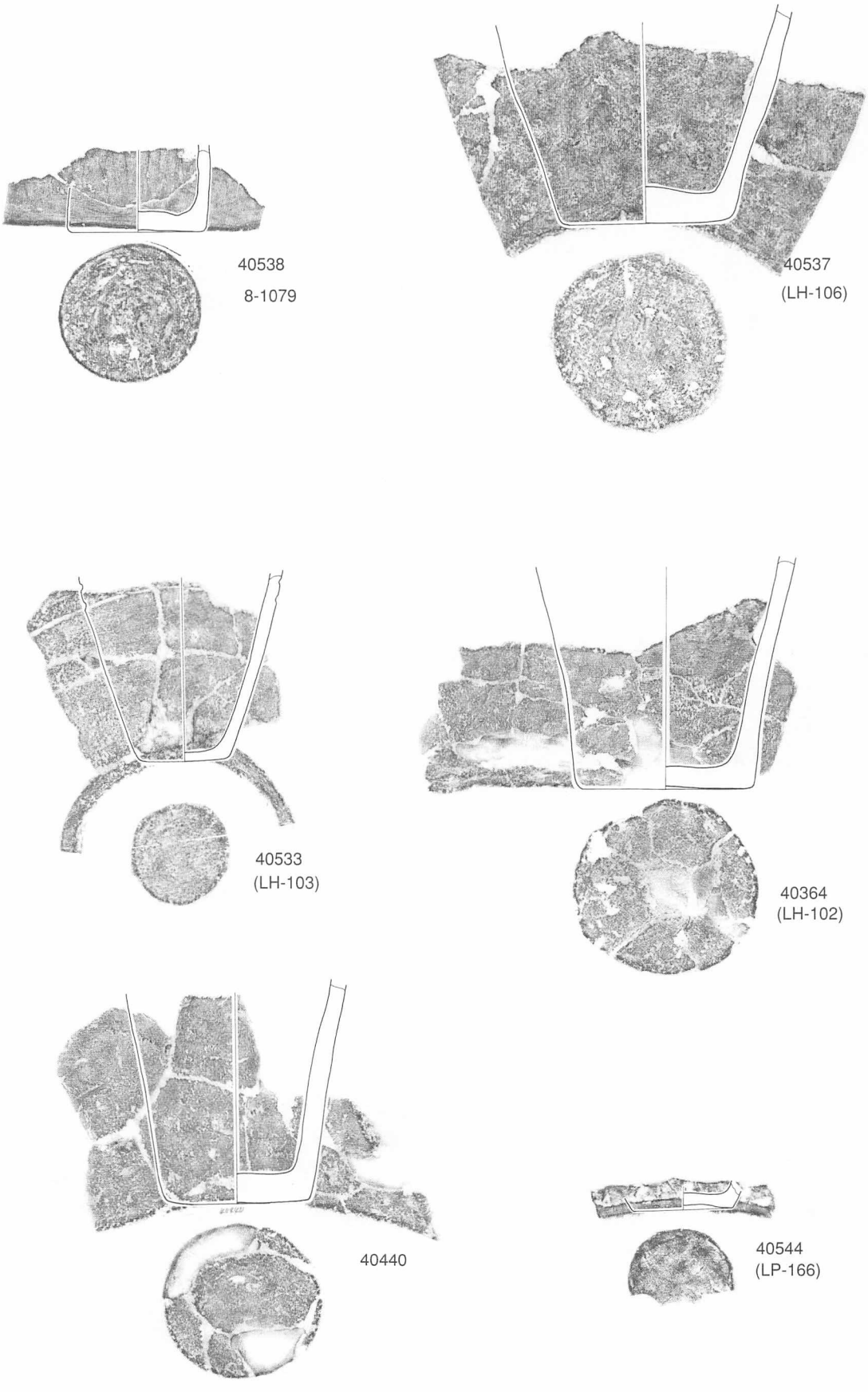
図Ⅵ-1-24　Ⅳ群ｂ類土器（15）



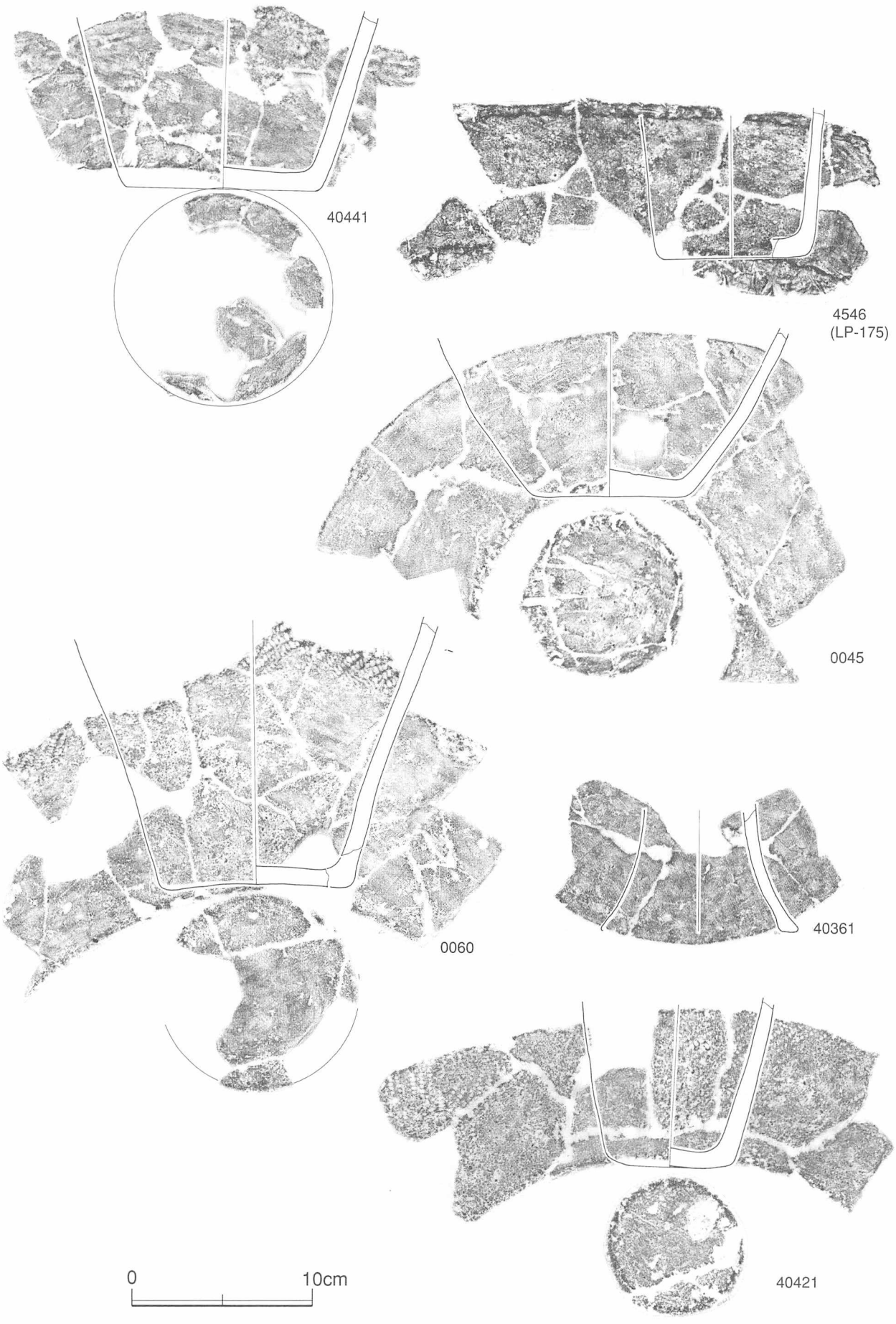
図Ⅵ-1-25　Ⅳ群ｂ類土器（16）



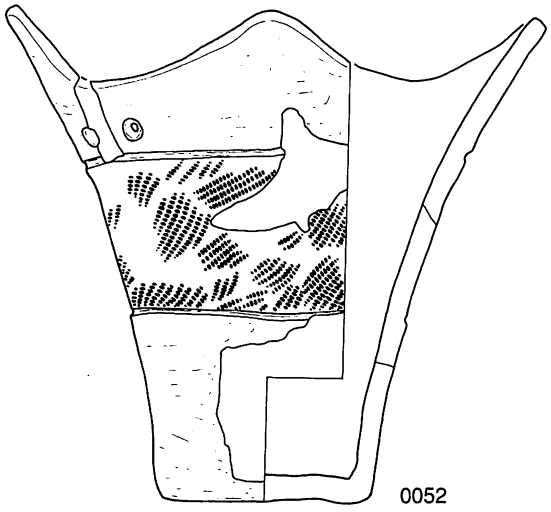
図Ⅵ-1-26　Ⅳ群ｂ類土器（17）



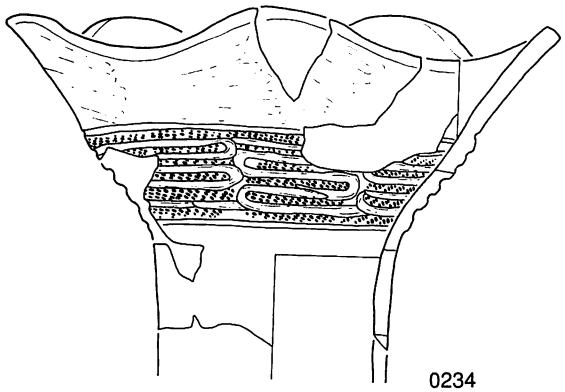
図Ⅵ-1-27　Ⅳ群ｂ類土器（18）



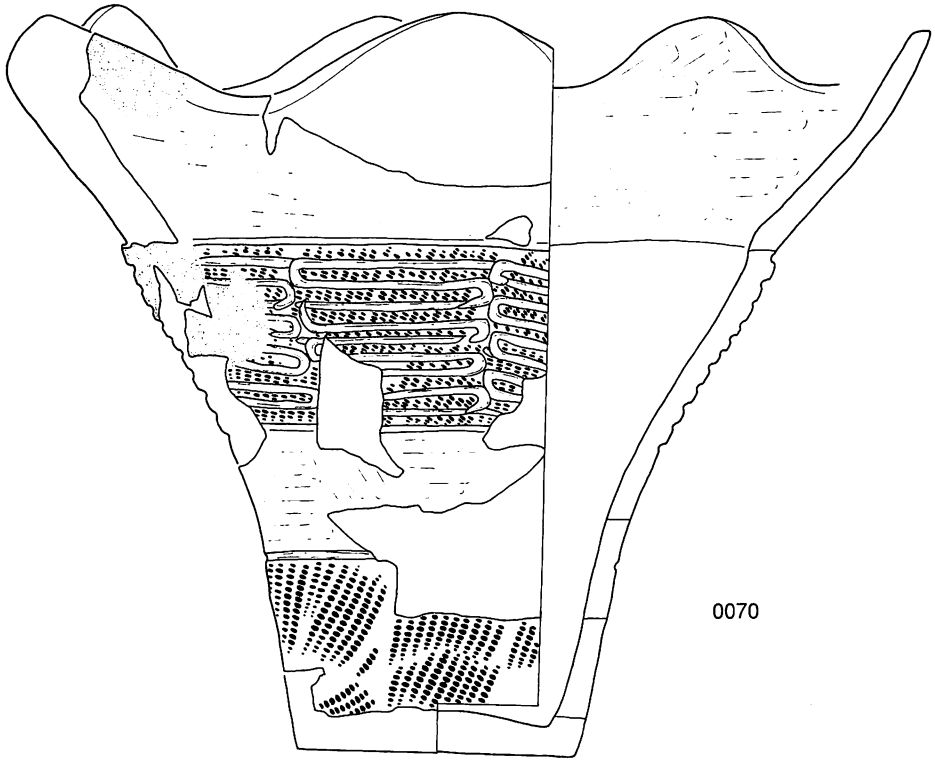
図Ⅵ-1-28　Ⅳ群ｂ類土器（19）



0052



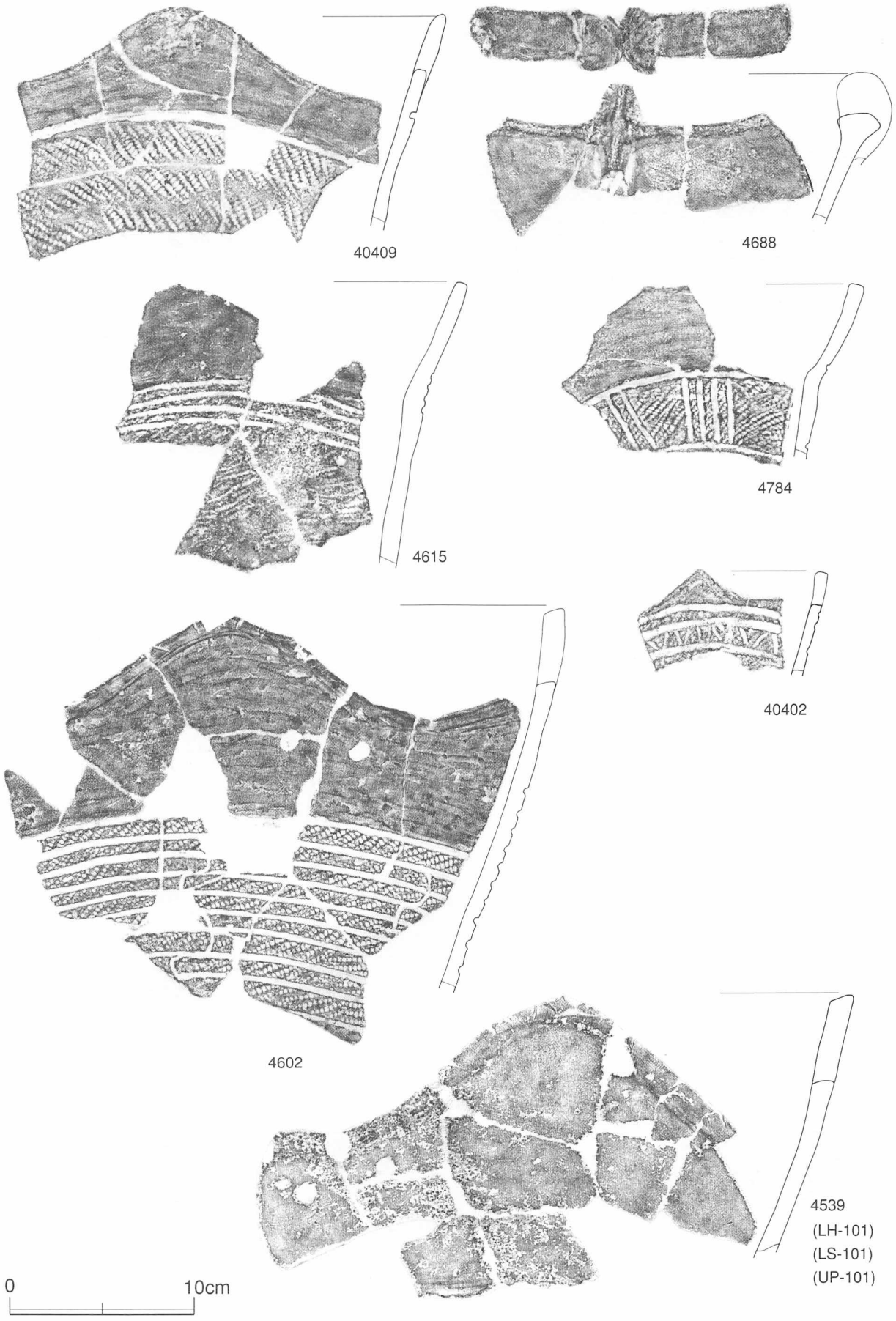
0234
(LF-131)



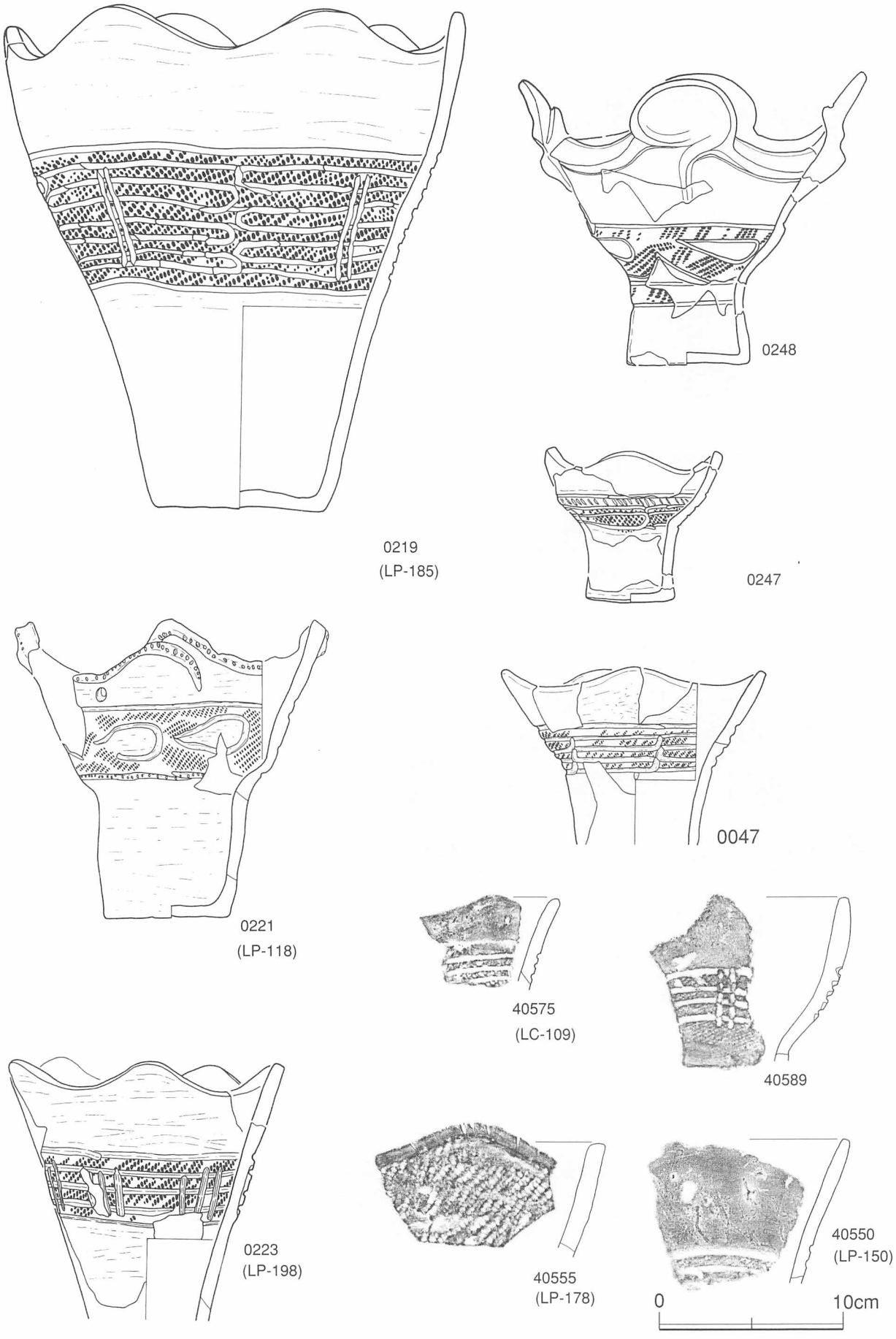
0070

0　10cm

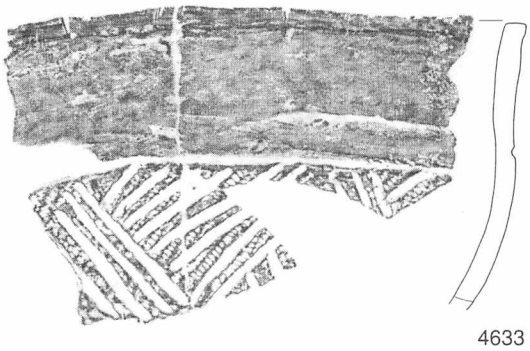
図Ⅵ-1-29　Ⅳ群ｂ類土器（20）



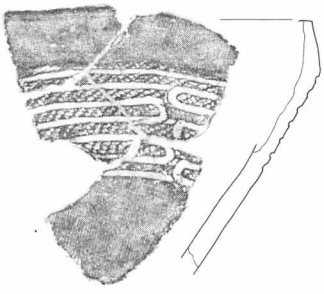
図Ⅵ-1-30　Ⅳ群ｂ類土器（21）

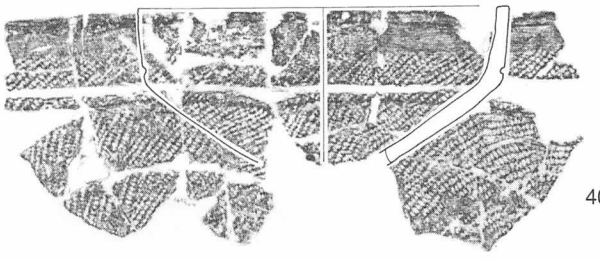


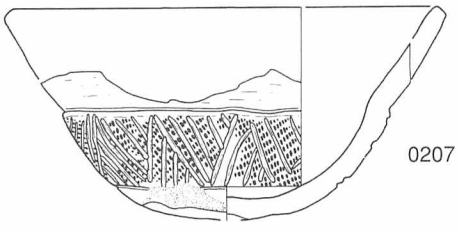
図Ⅵ-1-31　Ⅳ群ｂ類土器（22）

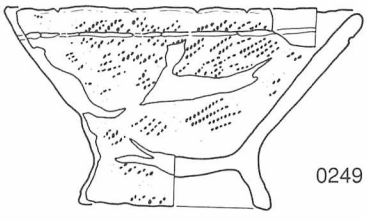

4633

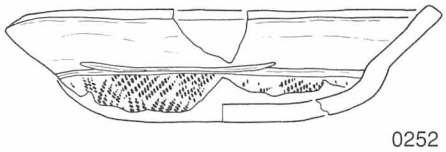

40417


4655


40300


0207


0249

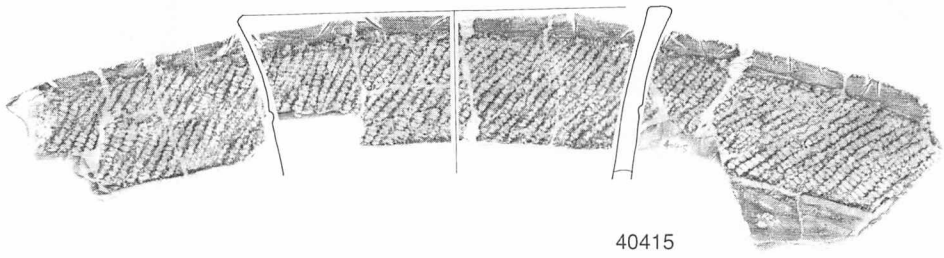

0252

0　10cm

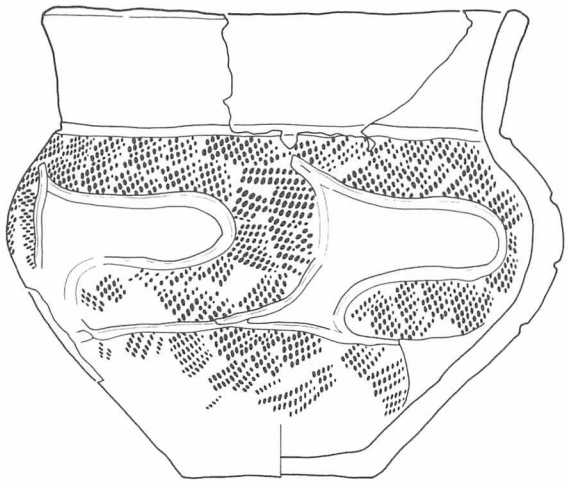
図Ⅵ-1-32　Ⅳ群ｂ類土器（23）



0058



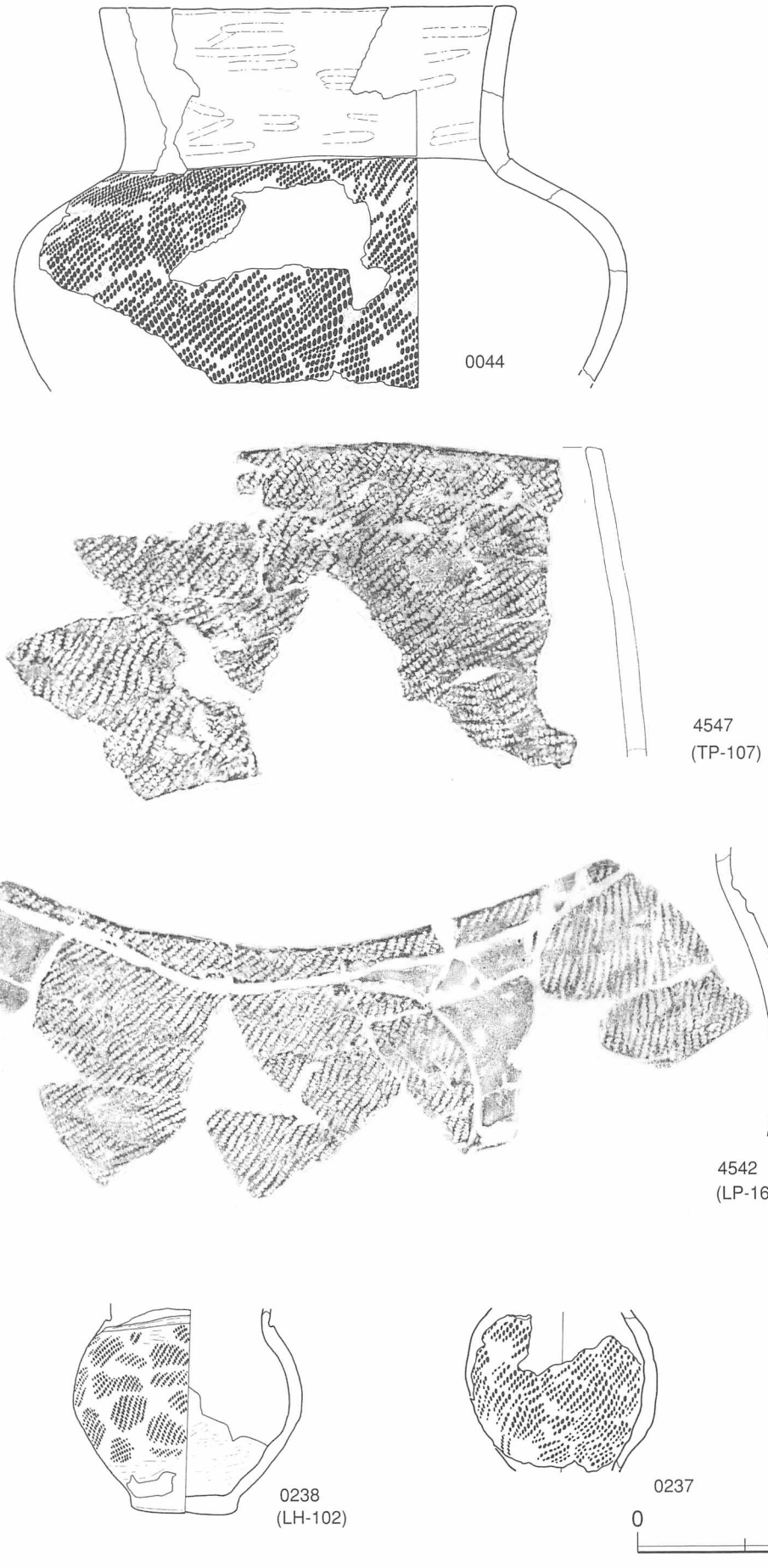
40415



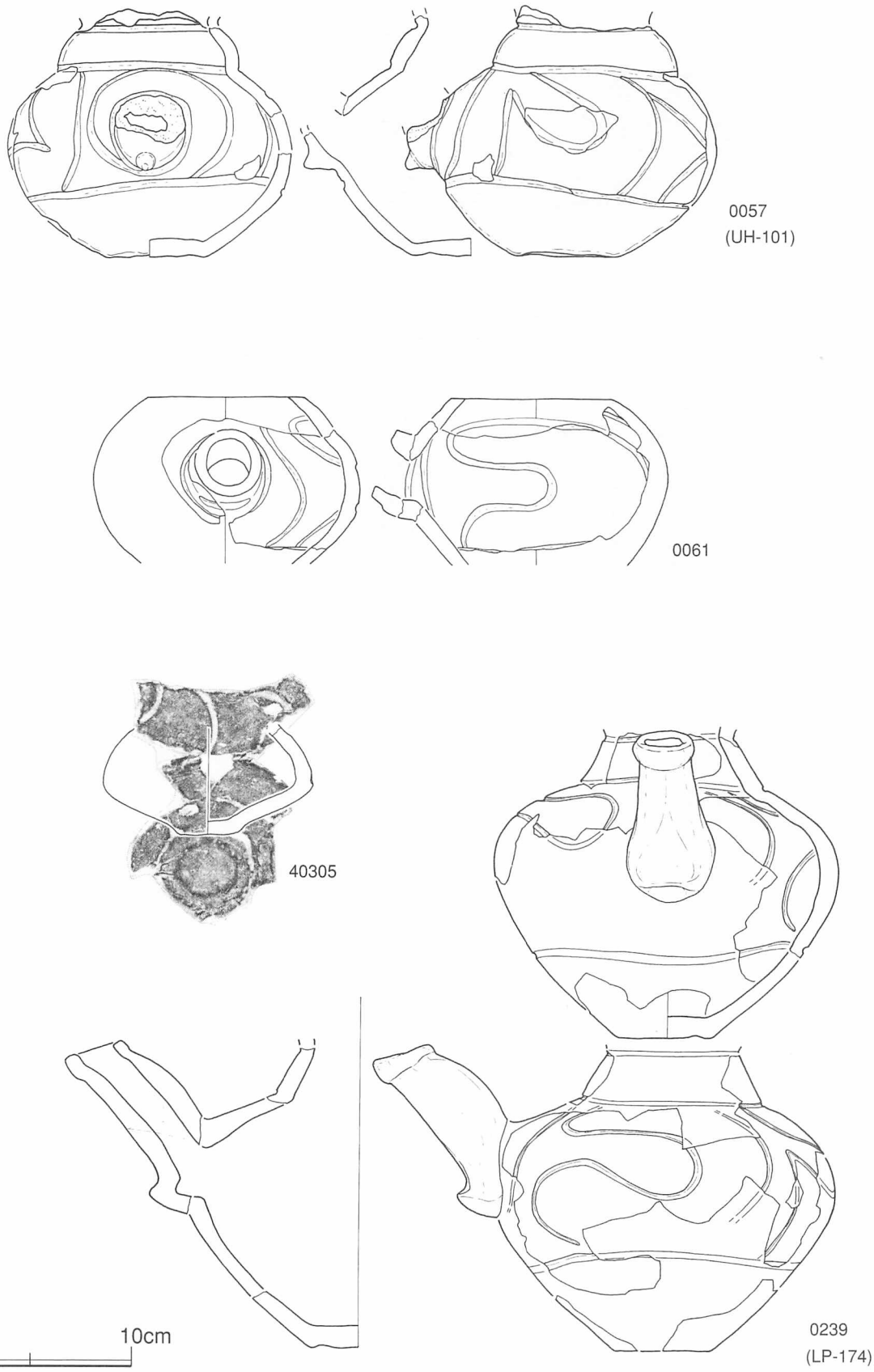
0224
(LP-177)
(LP-200)

0　10cm

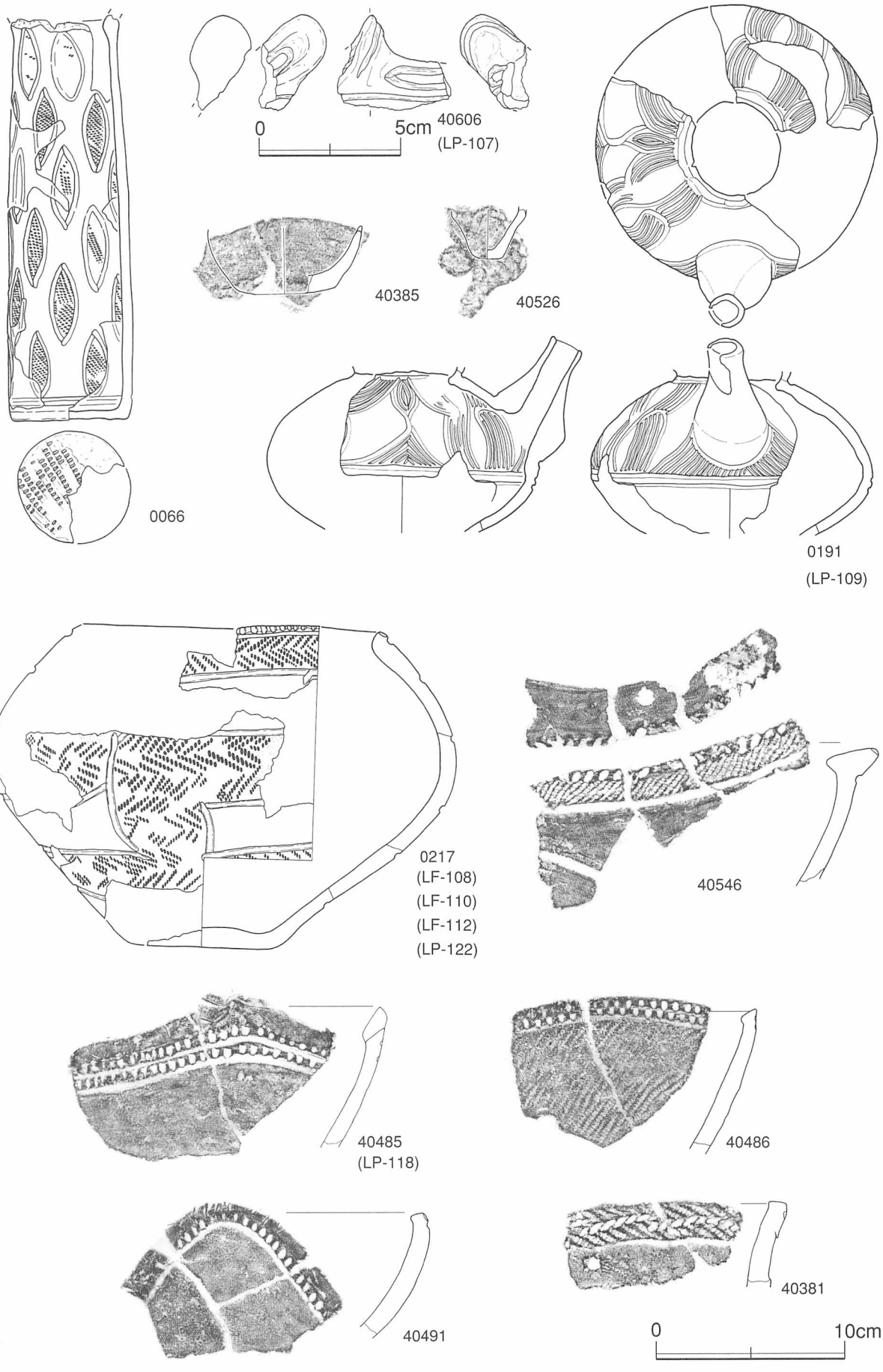
図Ⅵ-1-33　Ⅳ群ｂ類土器（24）



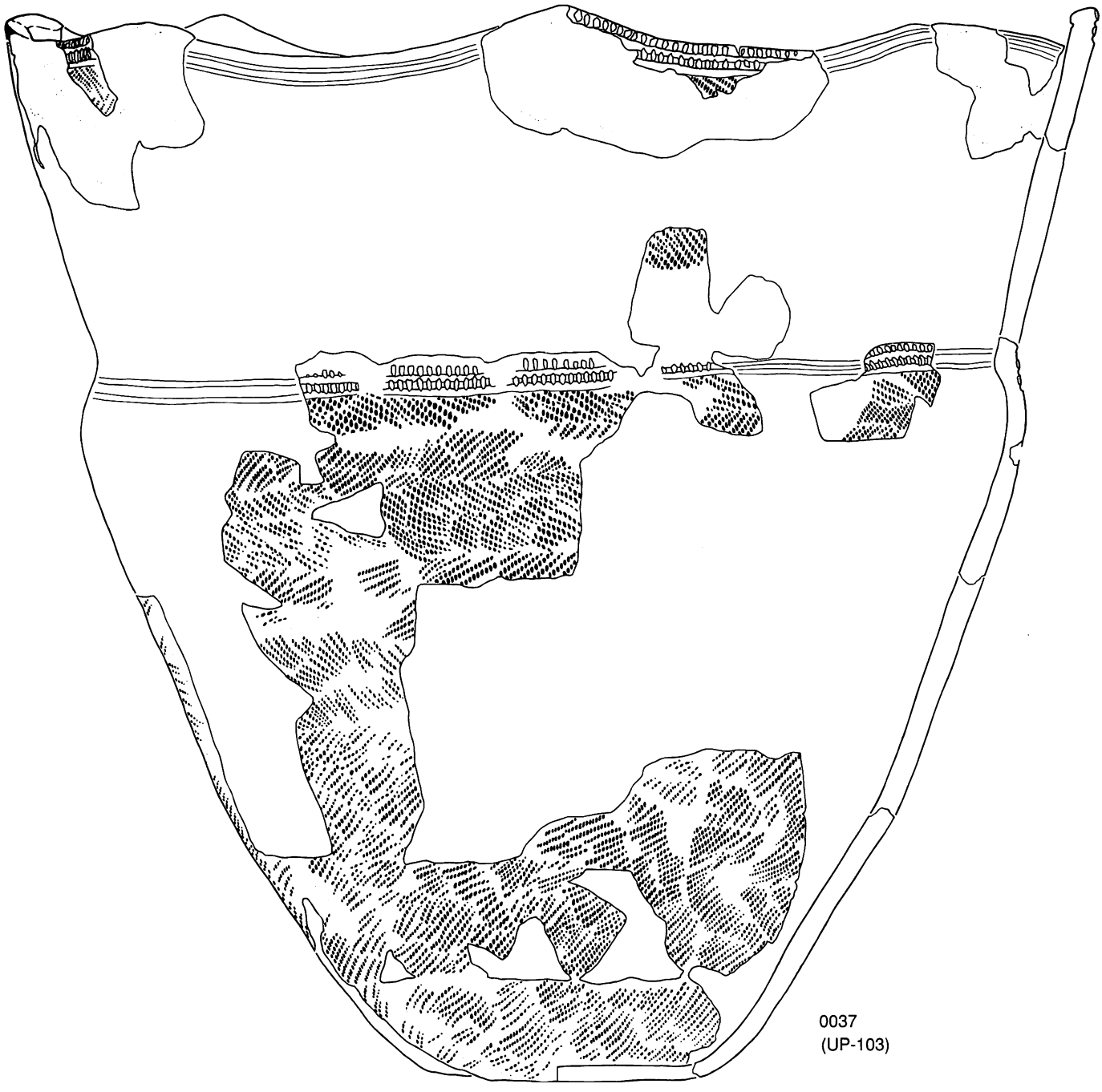
図Ⅵ-1-34　Ⅳ群ｂ類土器（25）



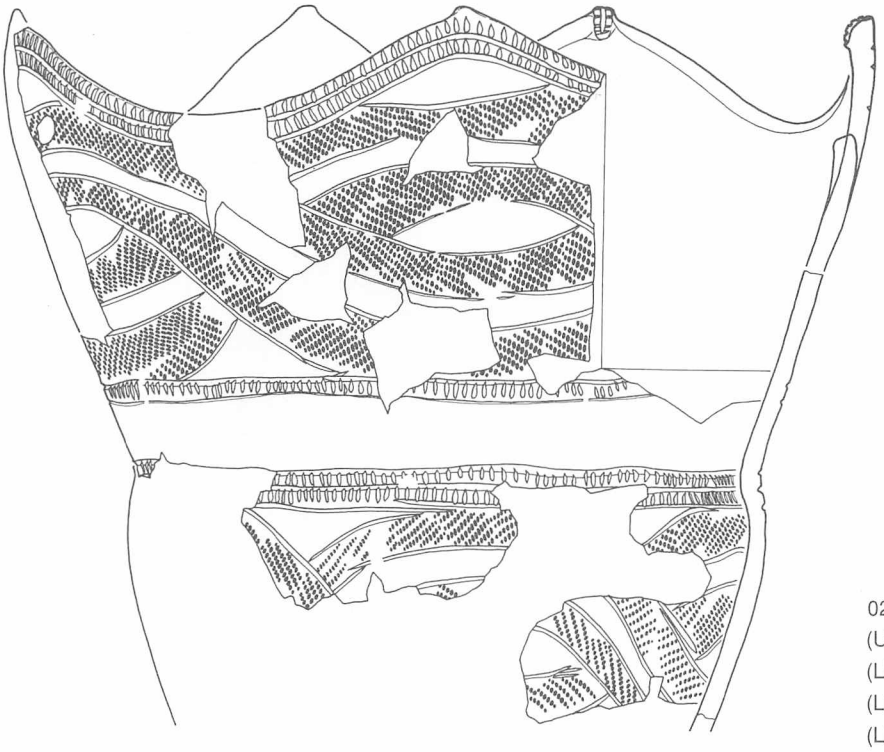
図Ⅵ-1-35　Ⅳ群ｂ類土器（26）



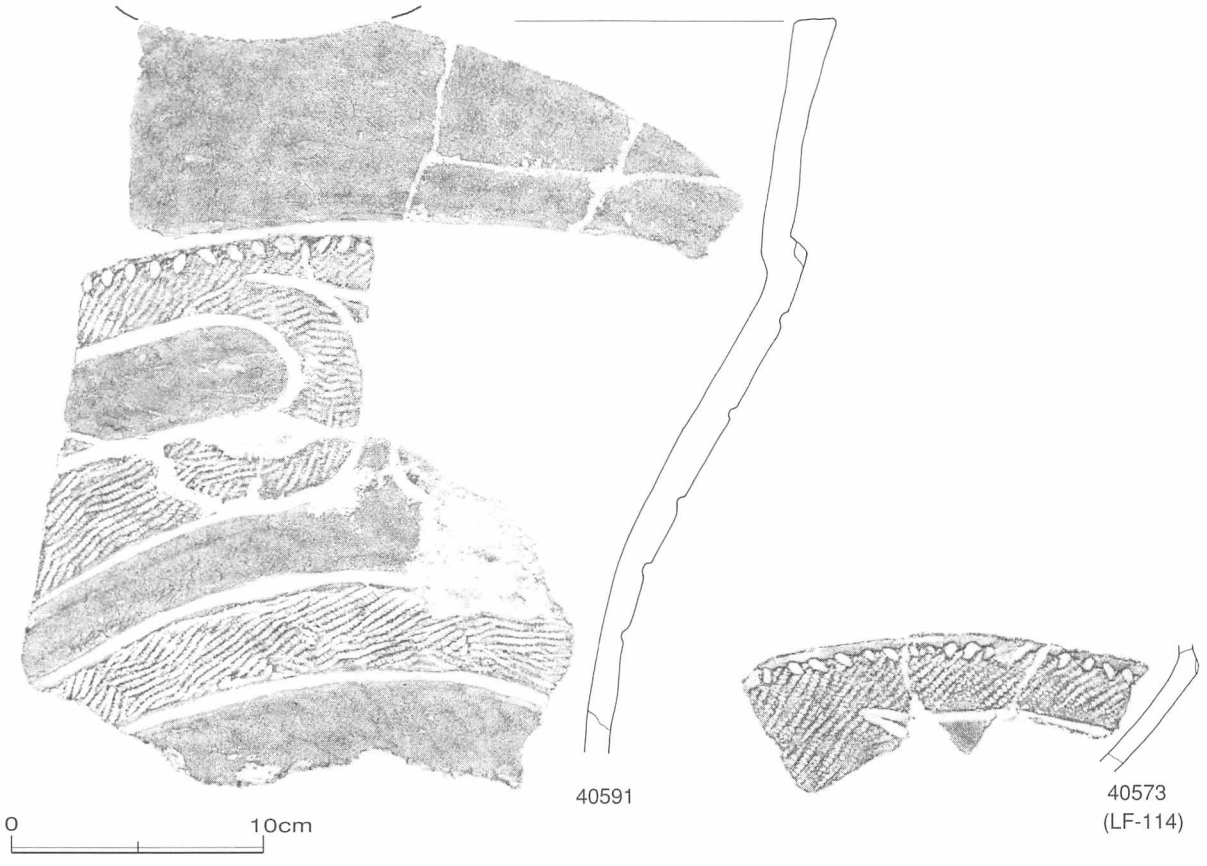
図Ⅵ-1-36　Ⅳ群ｂ類土器（27）



図Ⅵ-1-37　Ⅳ群ｂ類土器（28）



0232
(UP-115)
(LF-117)
(LF-140)
(LF-141)

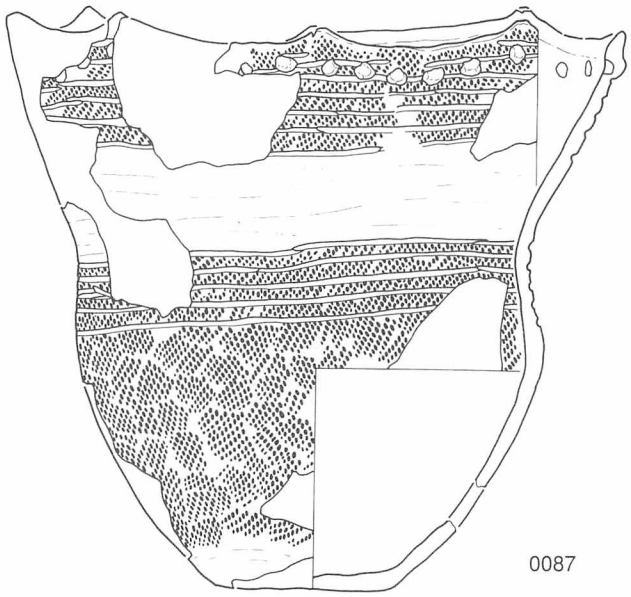


40591

40573
(LF-114)

0　10cm

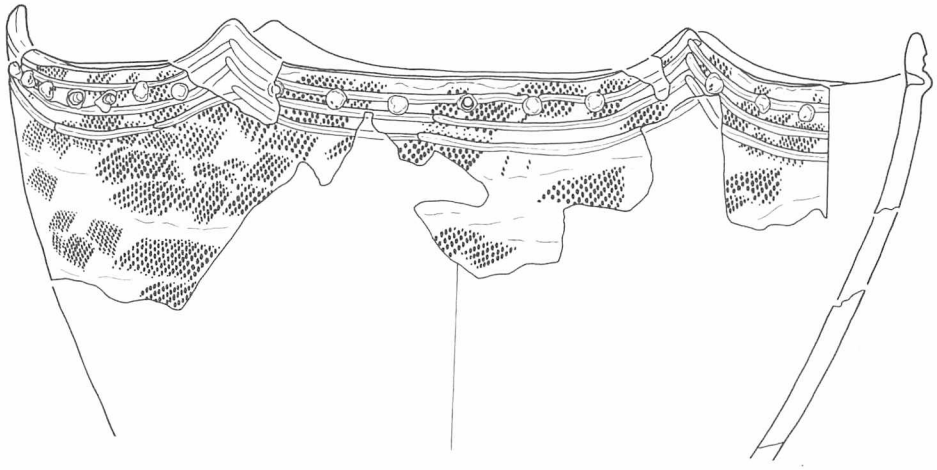
図Ⅵ-1-38　Ⅳ群ｂ類土器（29）



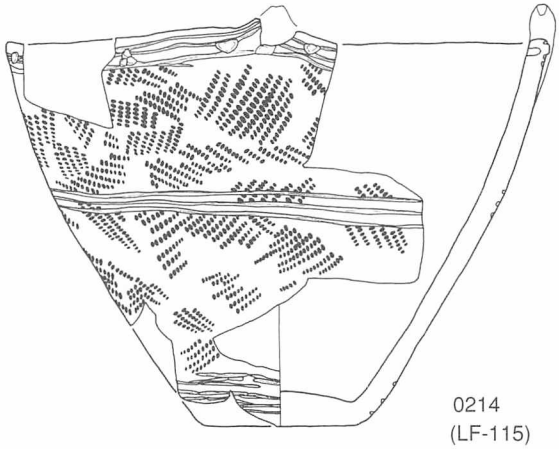
0087



40582



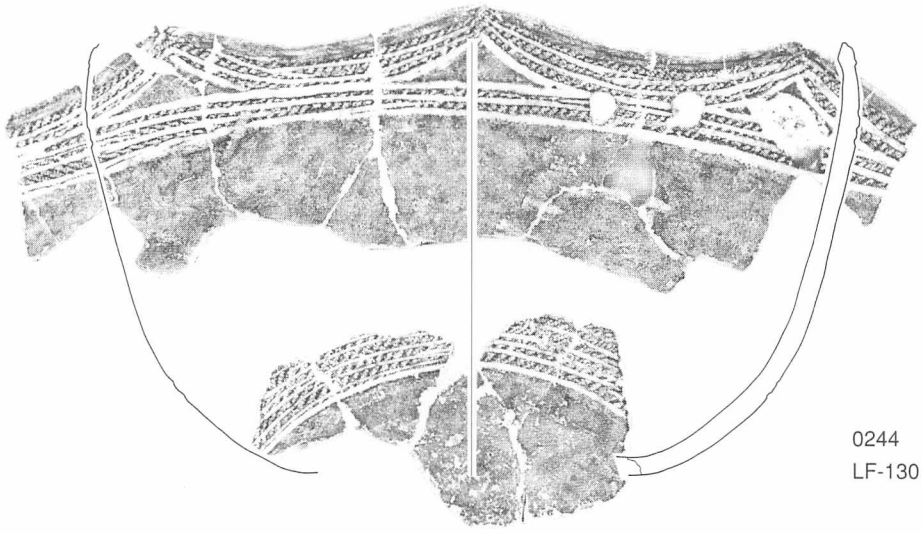
0076



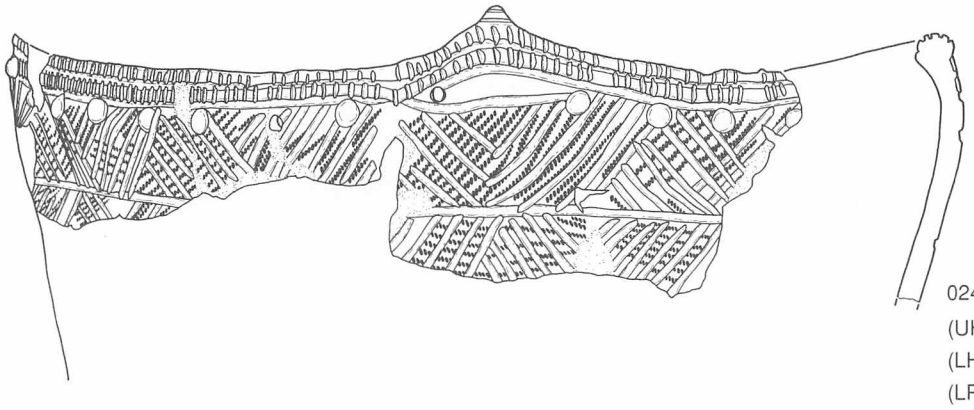
0214
(LF-115)

0　10cm

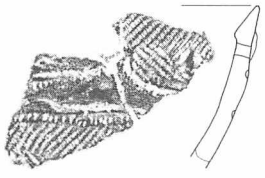
図Ⅵ-1-39　Ⅳ群ｃ類土器（1）



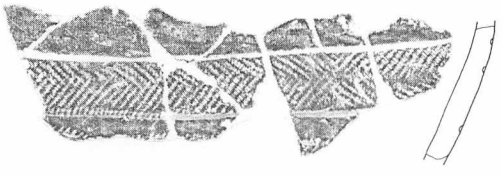
0244
LF-130



0246
(UH-101)
(LH-102)
(LP-117)

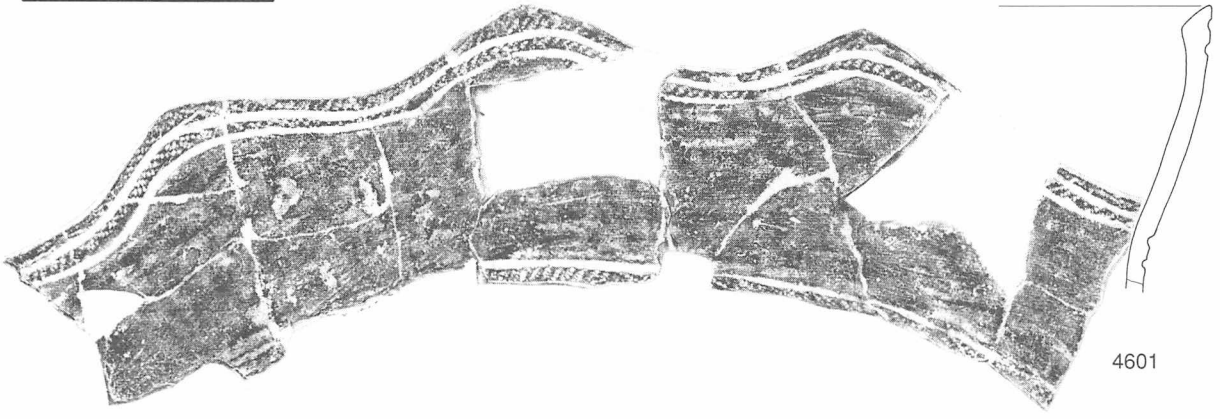


4008-a
(LH-103)



4008-b
(LH-103)

0　10cm

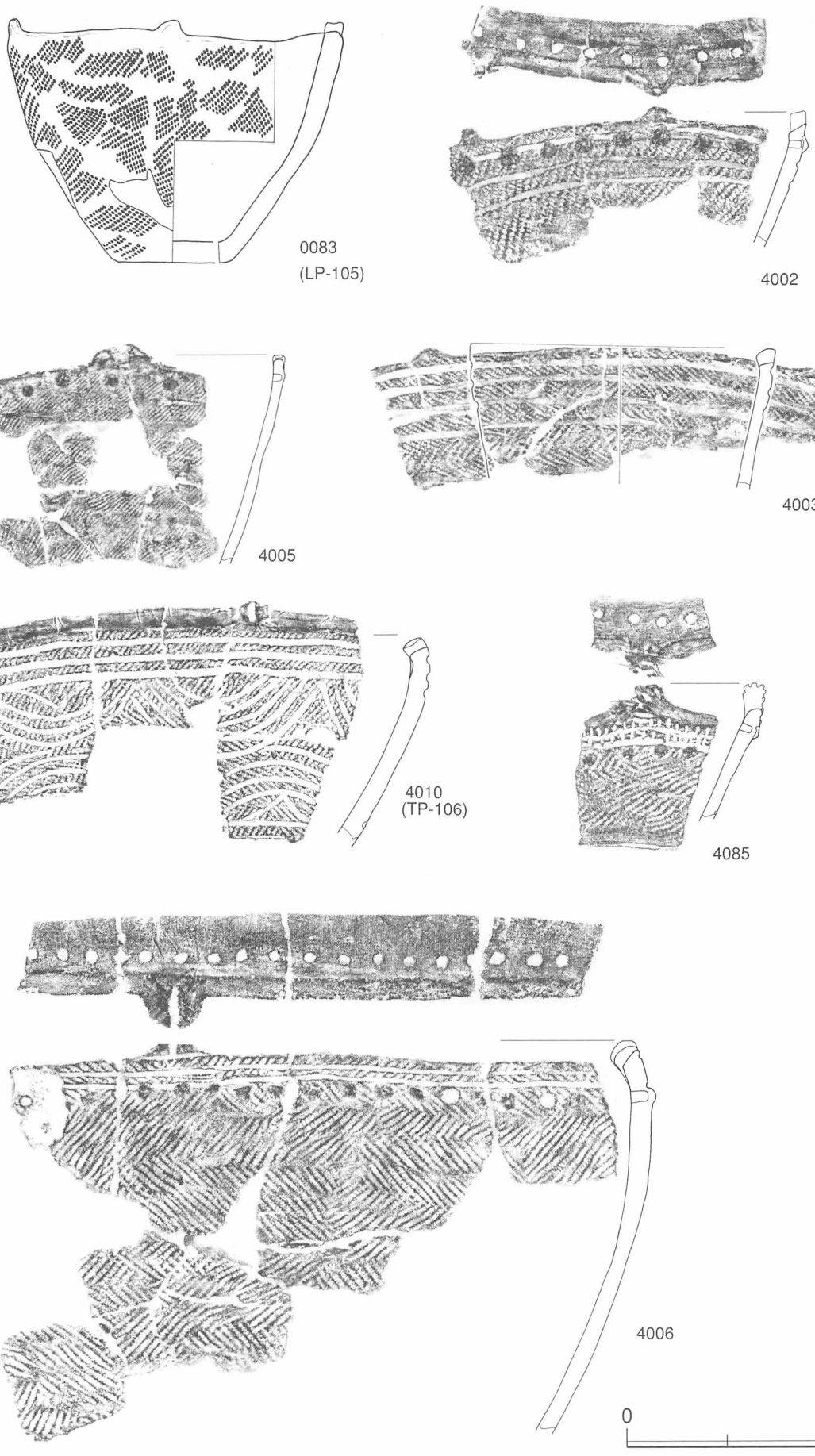


4601

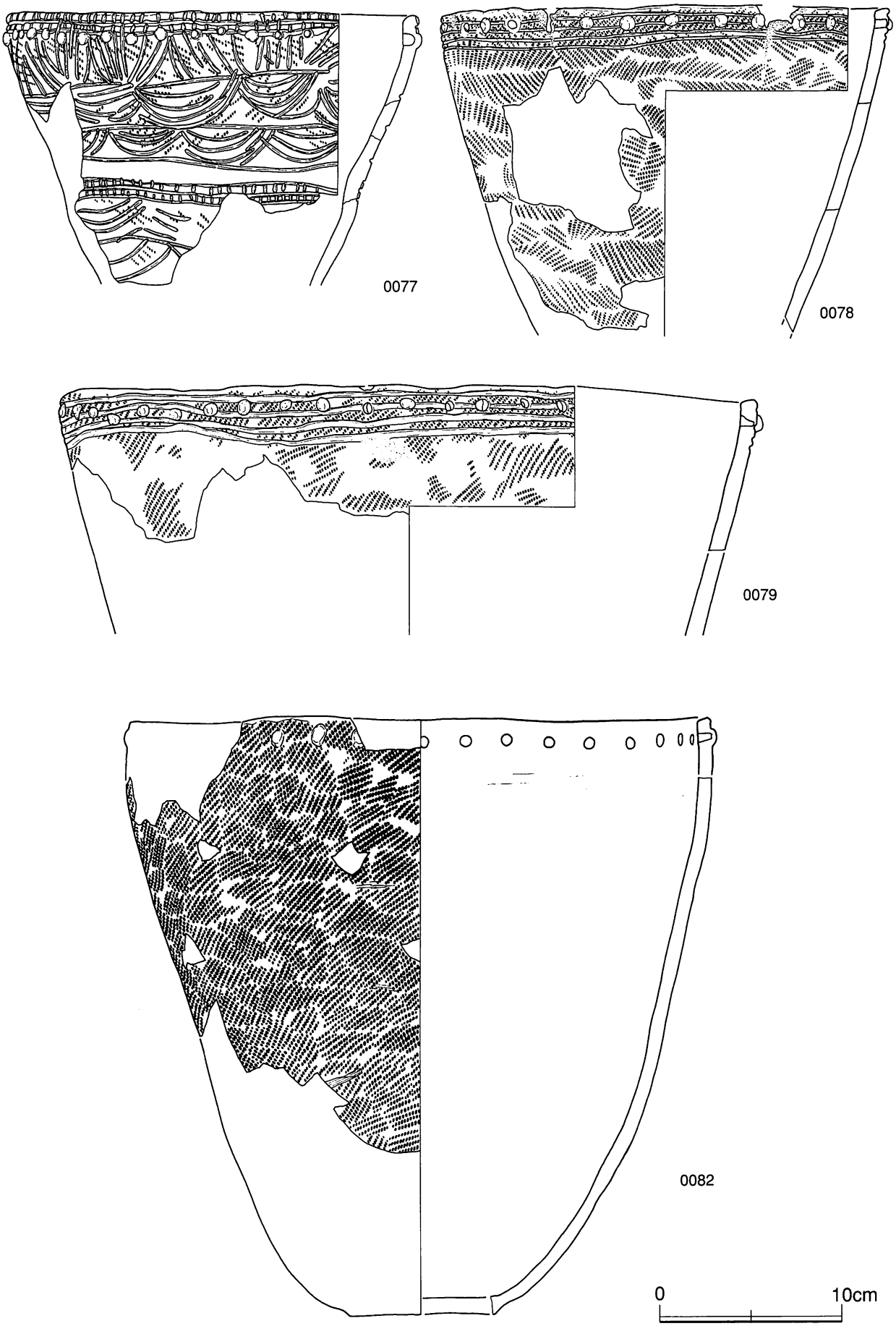
図Ⅵ-1-40　Ⅳ群ｃ類土器（2）



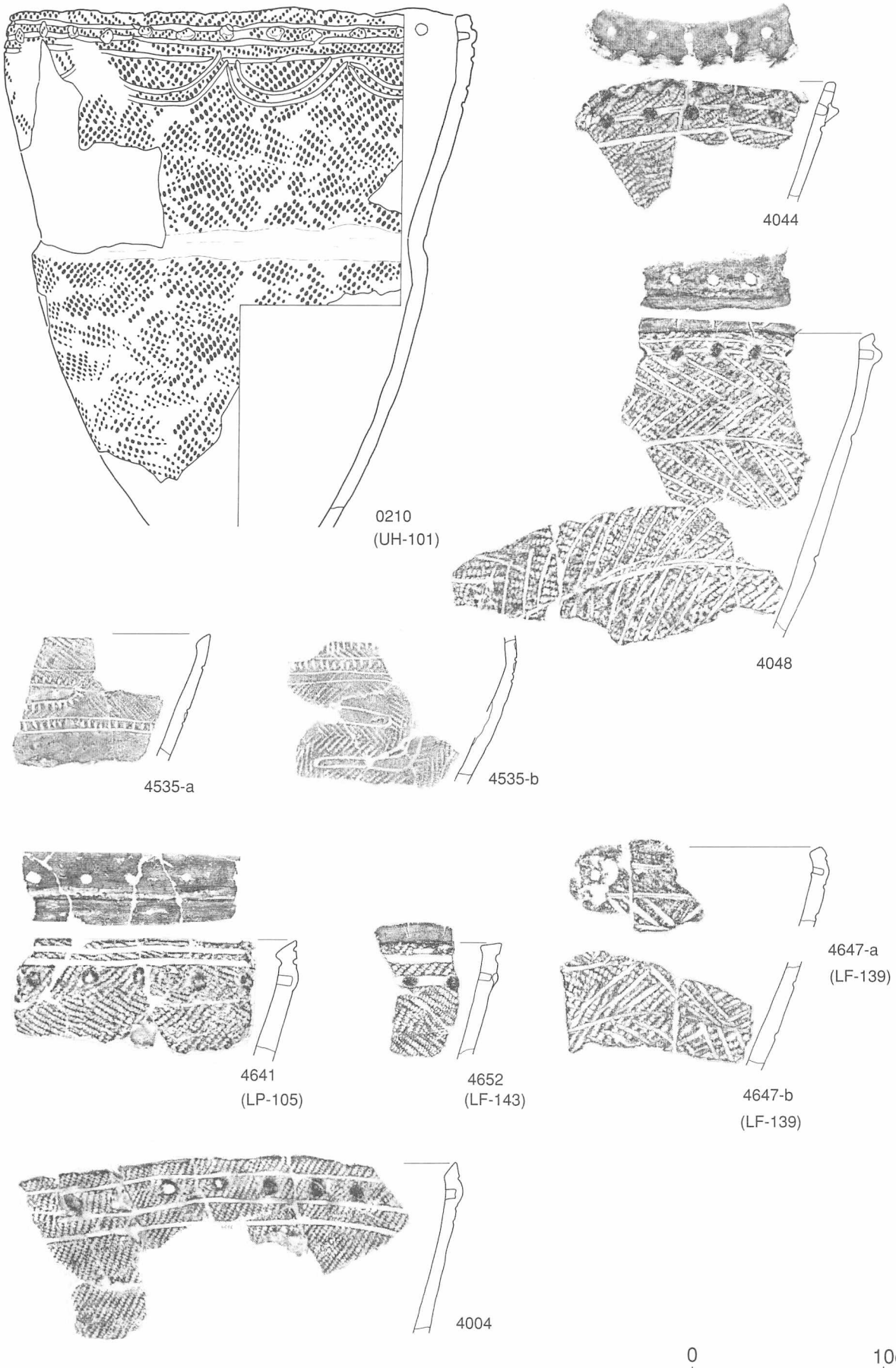
図Ⅵ-1-41　Ⅳ群ｃ類土器（3）



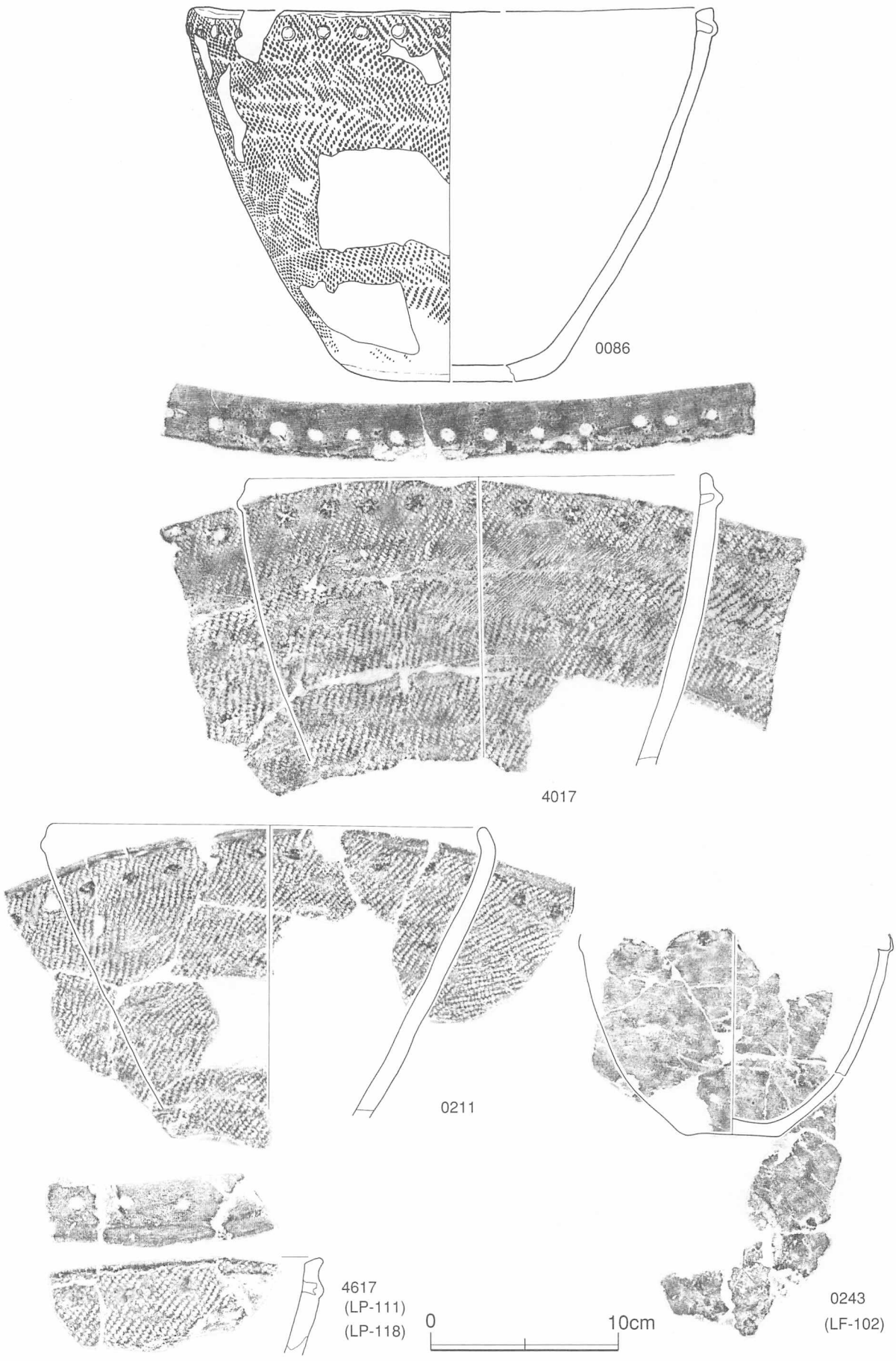
図Ⅵ-1-42　Ⅳ群ｃ類土器（4）



図Ⅵ-1-43　Ⅳ群ｃ類土器（5）



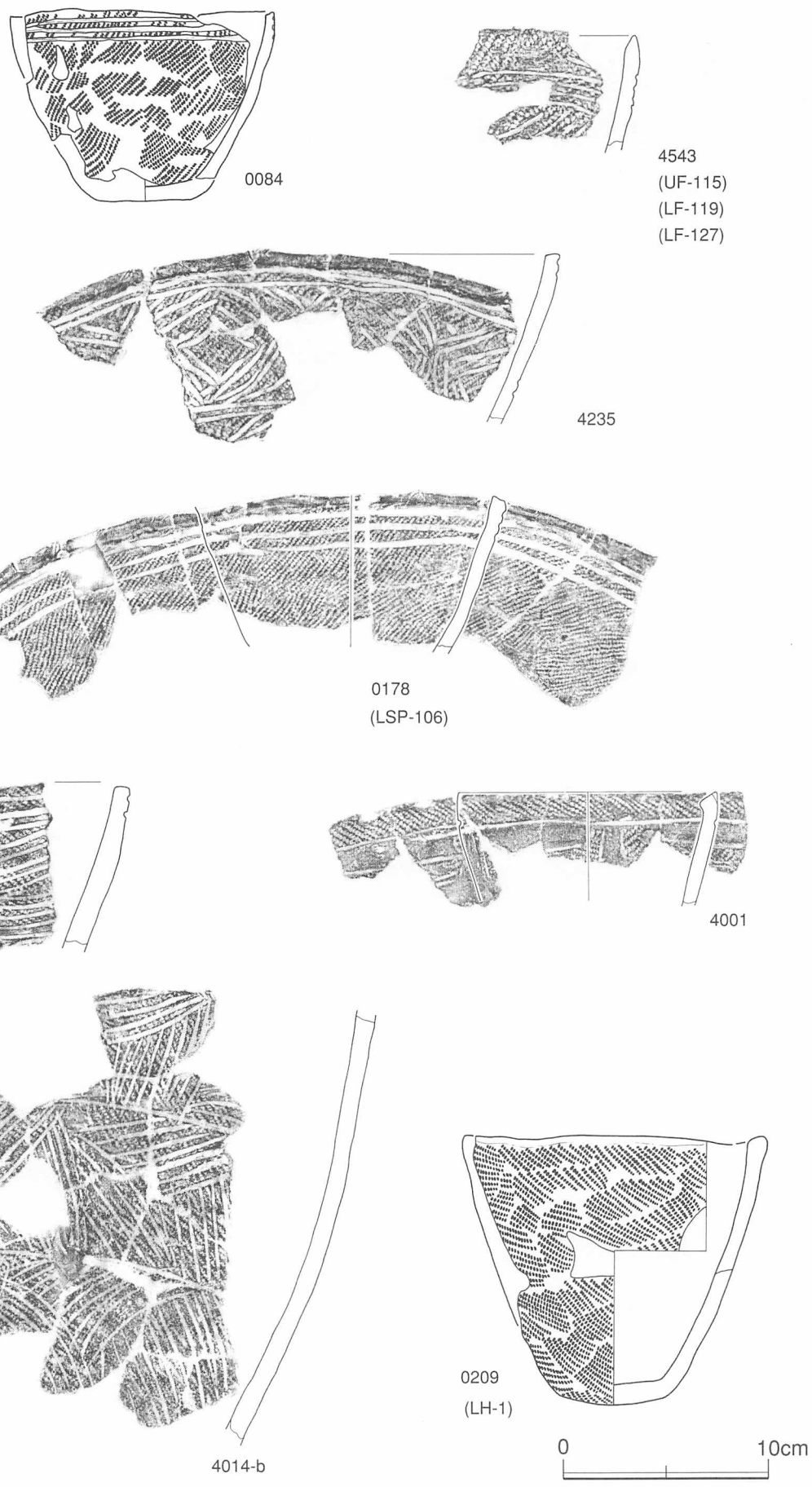
図Ⅵ-1-44　Ⅳ群ｃ類土器（6）



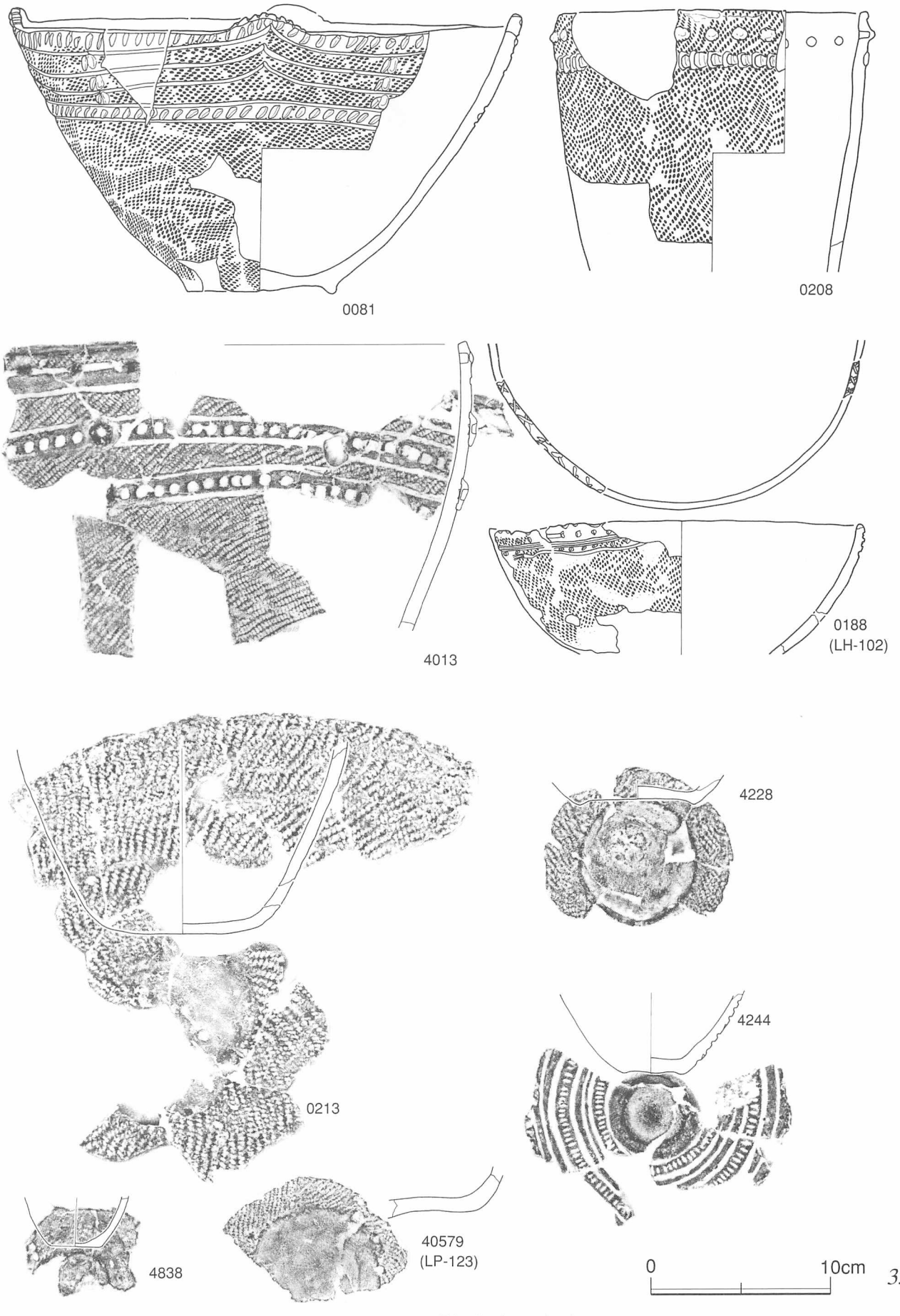
図Ⅵ-1-45　Ⅳ群ｃ類土器（7）



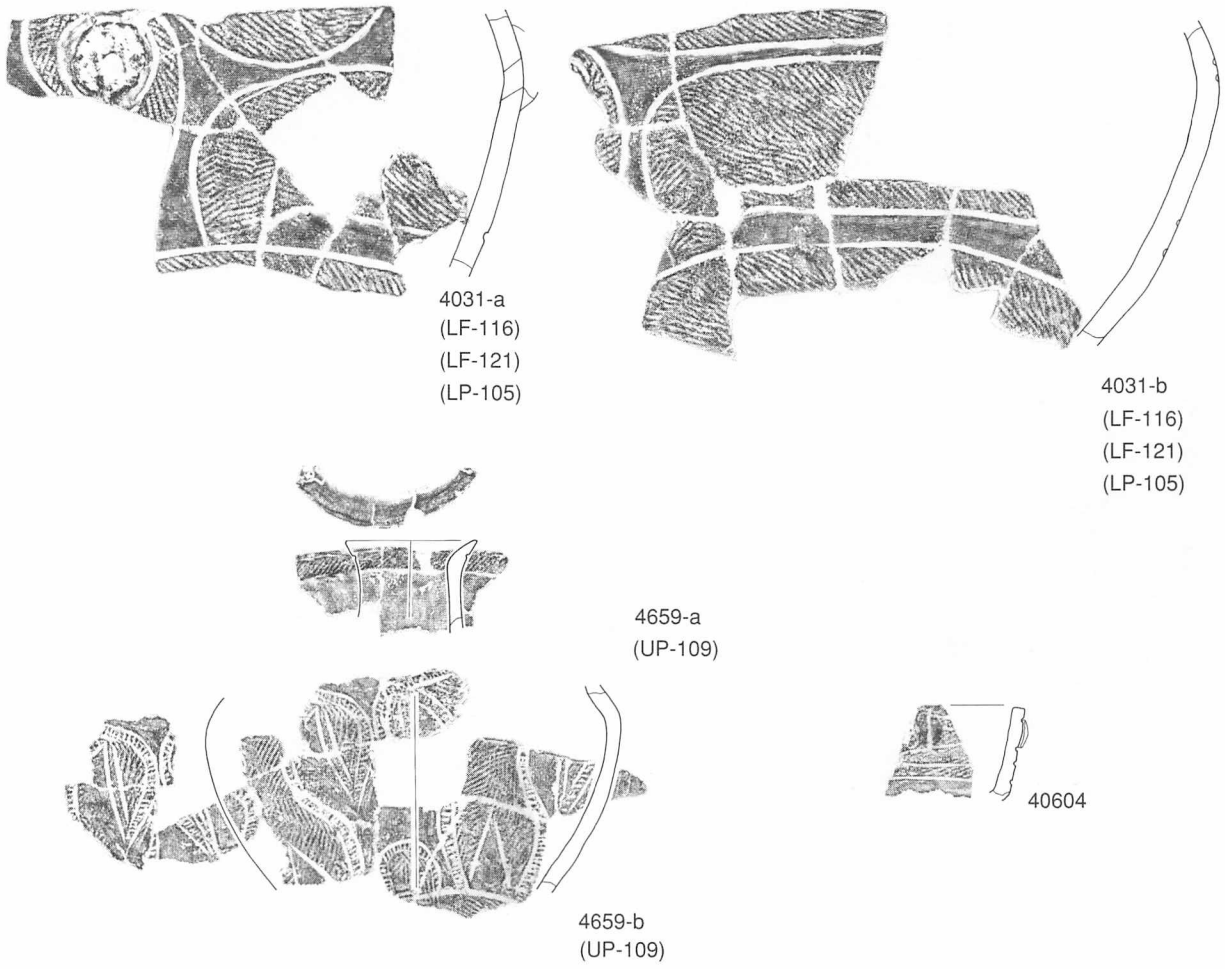
図Ⅵ-1-46　Ⅳ群ｃ類土器（8）



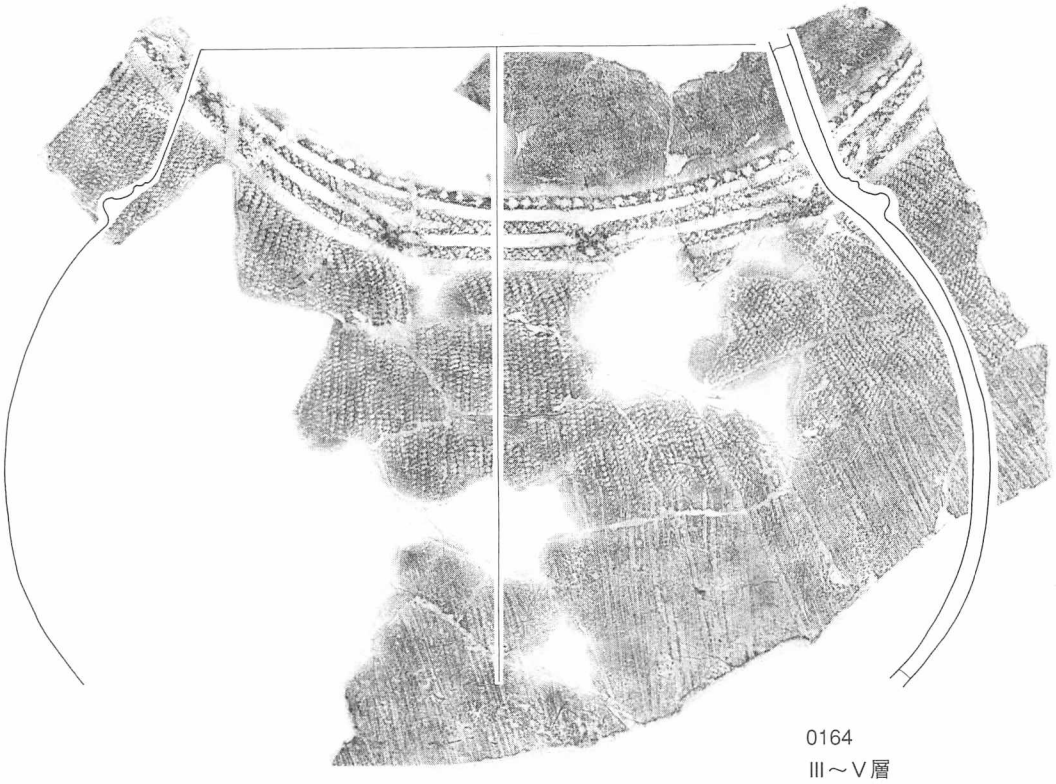
図Ⅵ-1-47　Ⅳ群ｃ類土器（9）

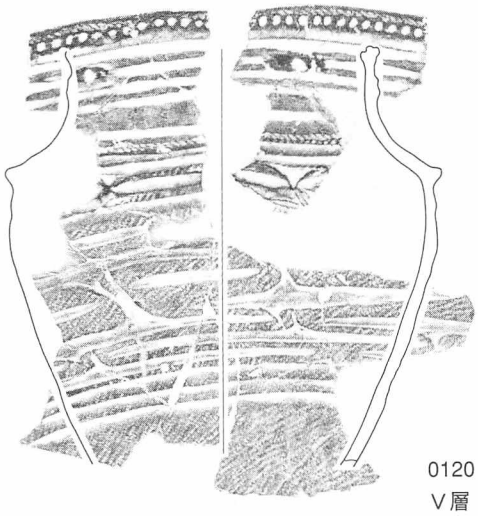


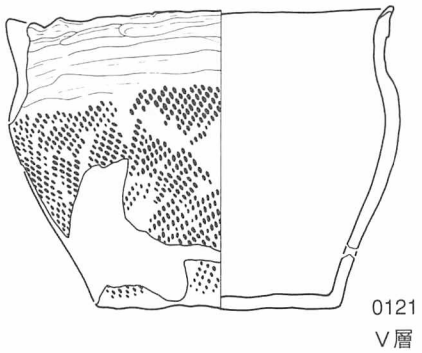
図Ⅵ-1-48　Ⅳ群ｃ類土器（10）



図Ⅵ-1-49　Ⅳ群ｃ類土器（11）





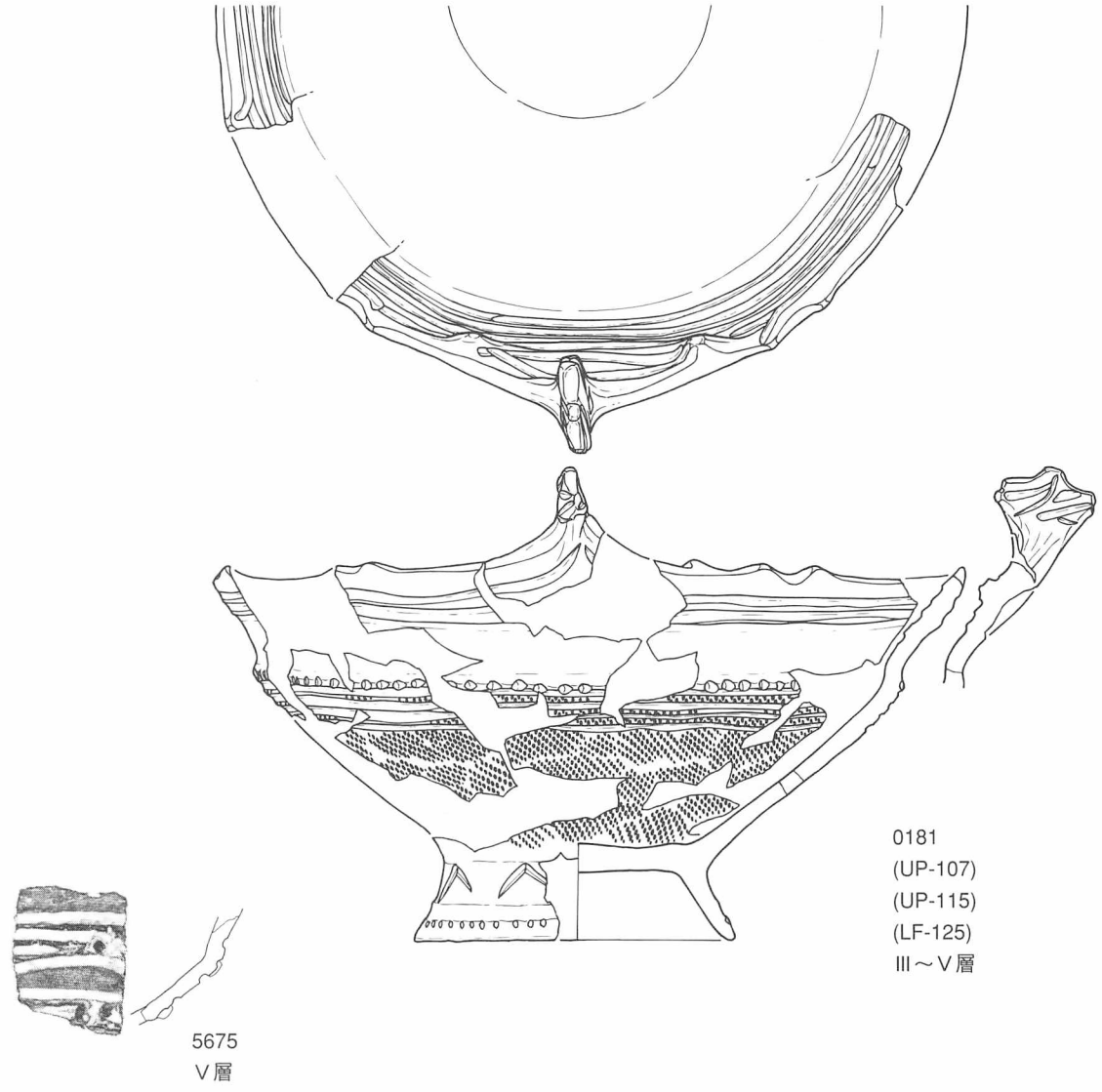




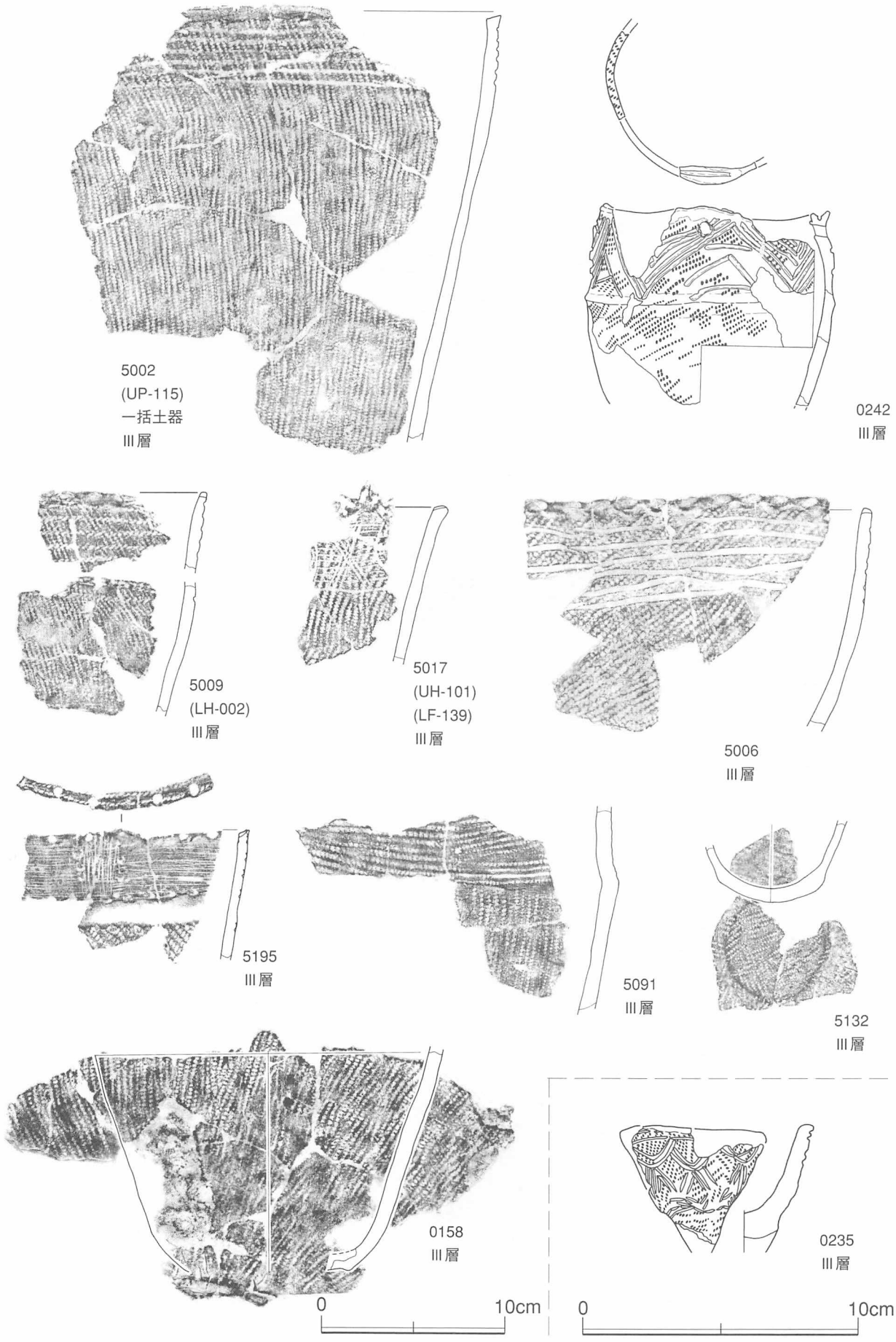
図Ⅵ-1-50　Ⅴ群ｃ類土器（1）



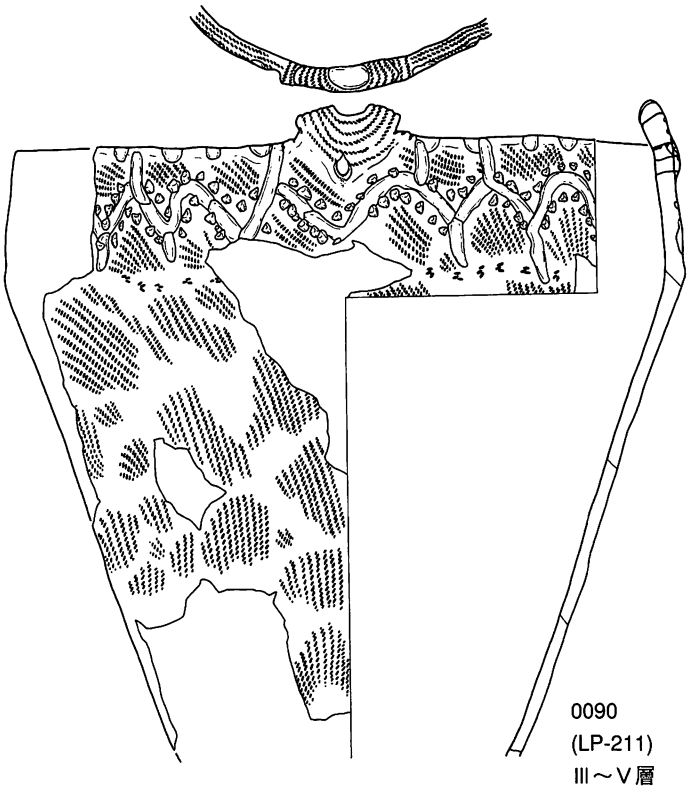
図Ⅵ-1-51　V群c類土器（2）



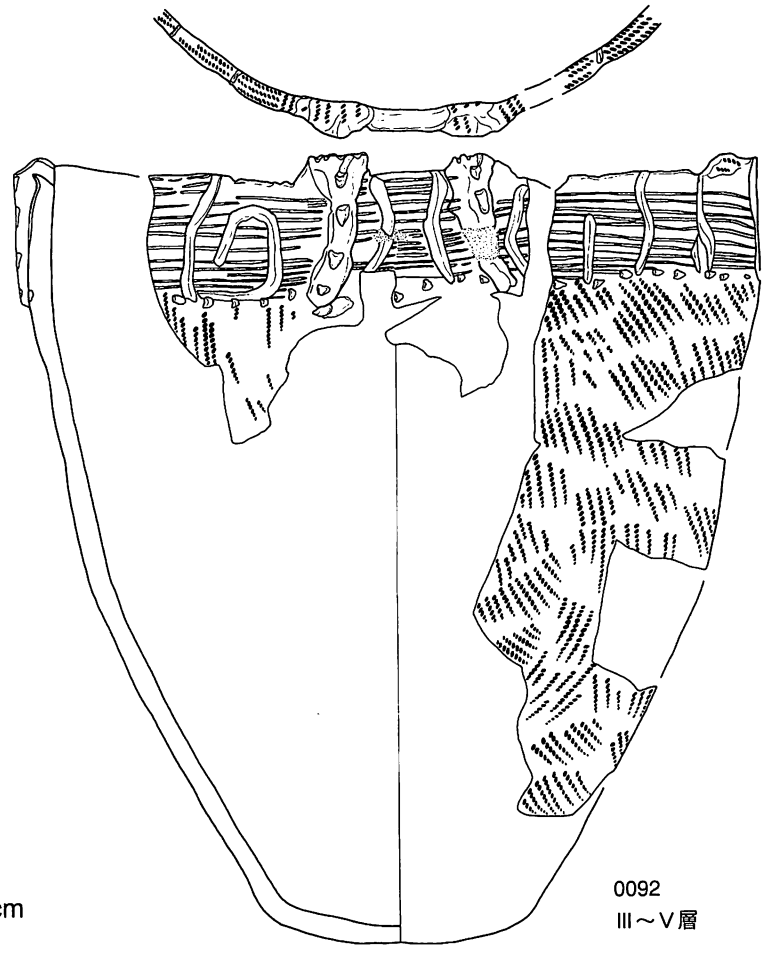
図Ⅵ-1-52　Ⅴ群c類土器（3）



図Ⅵ-1-53　Ⅴ群c類土器（4）



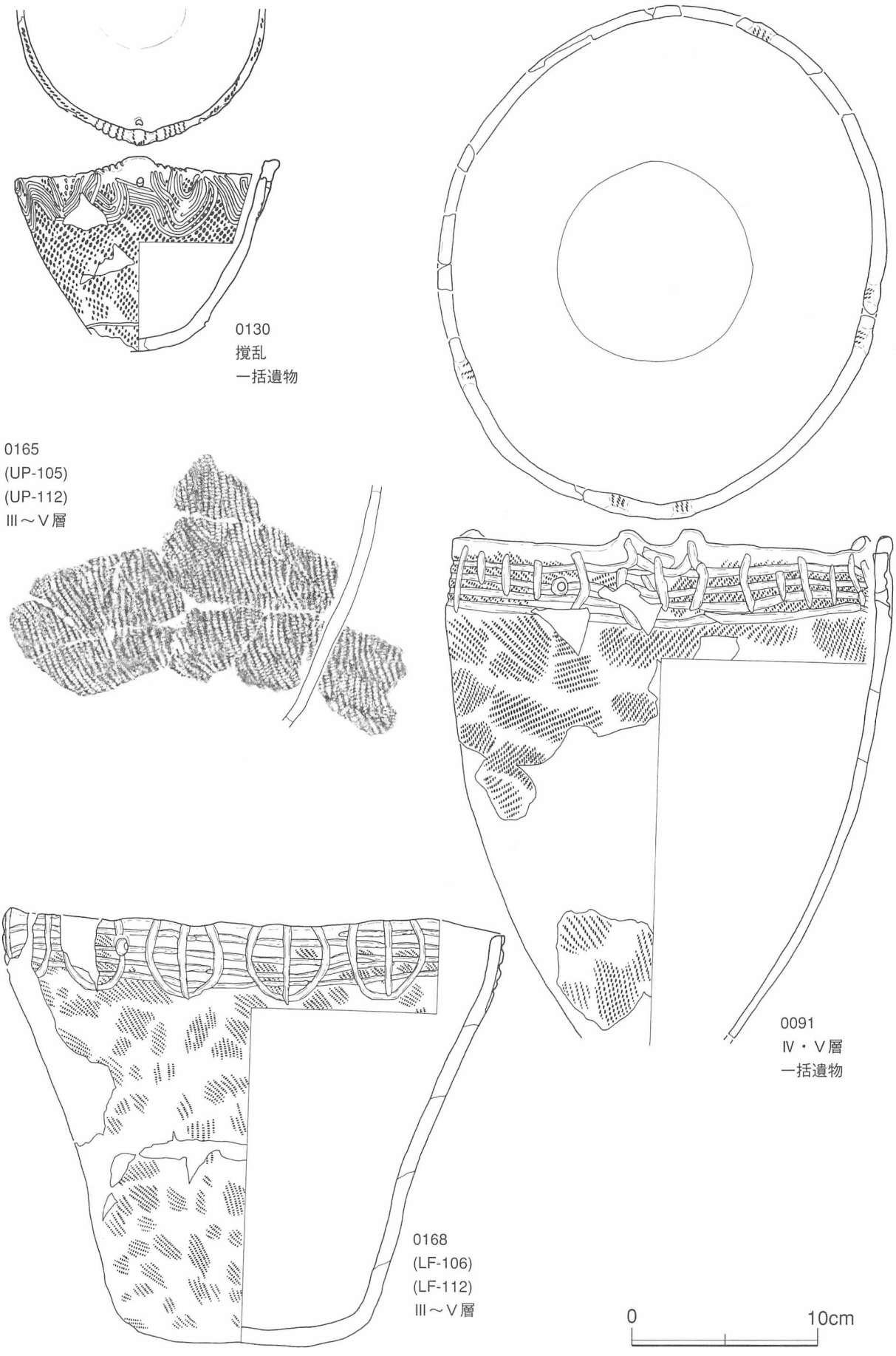
0090
(LP-211)
Ⅲ～Ⅴ層



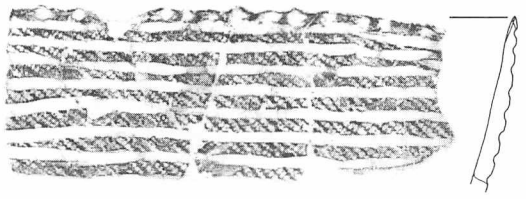
0092
Ⅲ～Ⅴ層

0　10cm

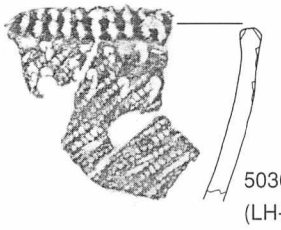
図Ⅵ-1-54　Ⅴ群ｃ類土器（5）



図Ⅵ-1-55　Ⅴ群c類土器（6）



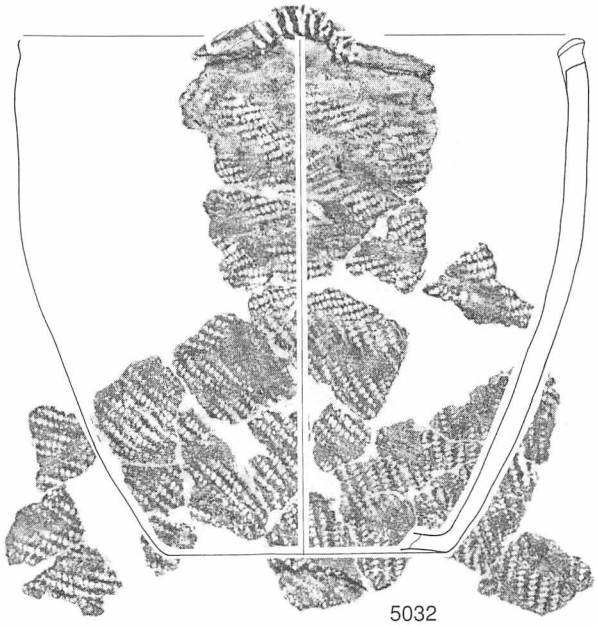
5029
(LH-002)
Ⅲ～Ⅳ層



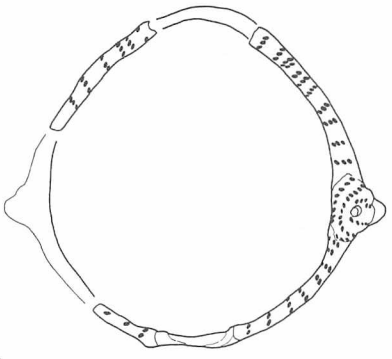
5036
(LH-002)
Ⅲ～Ⅳ層

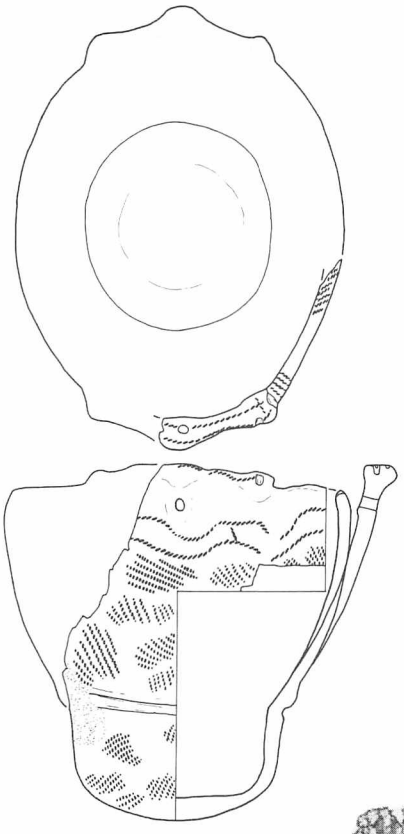


5049
(LF-108)
Ⅲ～Ⅴ層

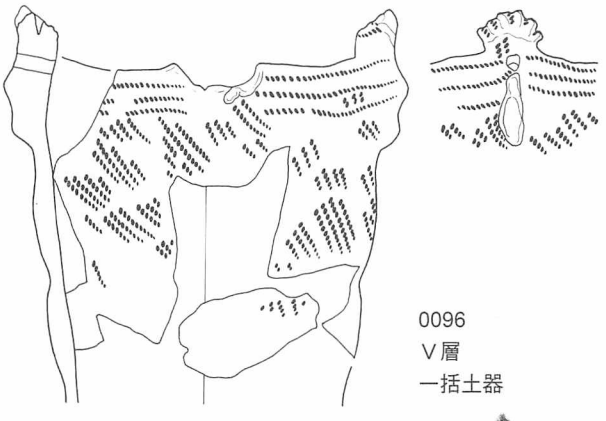


5032
(LF-106)
(LF-108)
(LF-109)
Ⅲ～Ⅳ層
一括土器

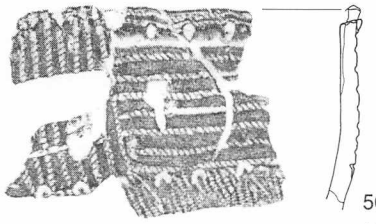




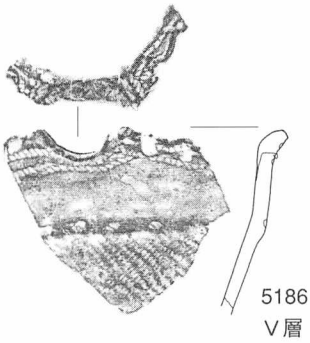
0094
Ⅴ層



0096
Ⅴ層
一括土器



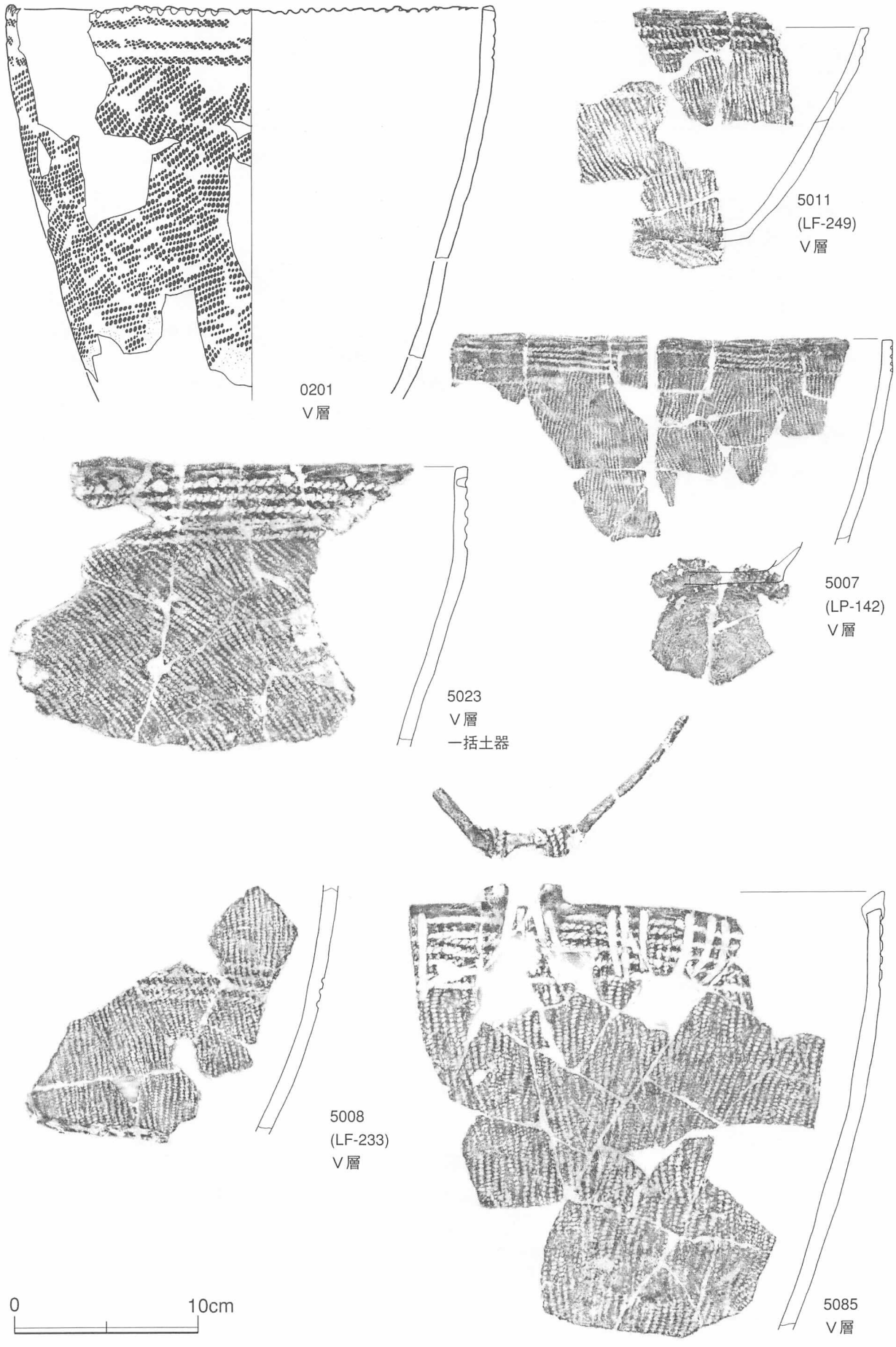
5053
Ⅴ層



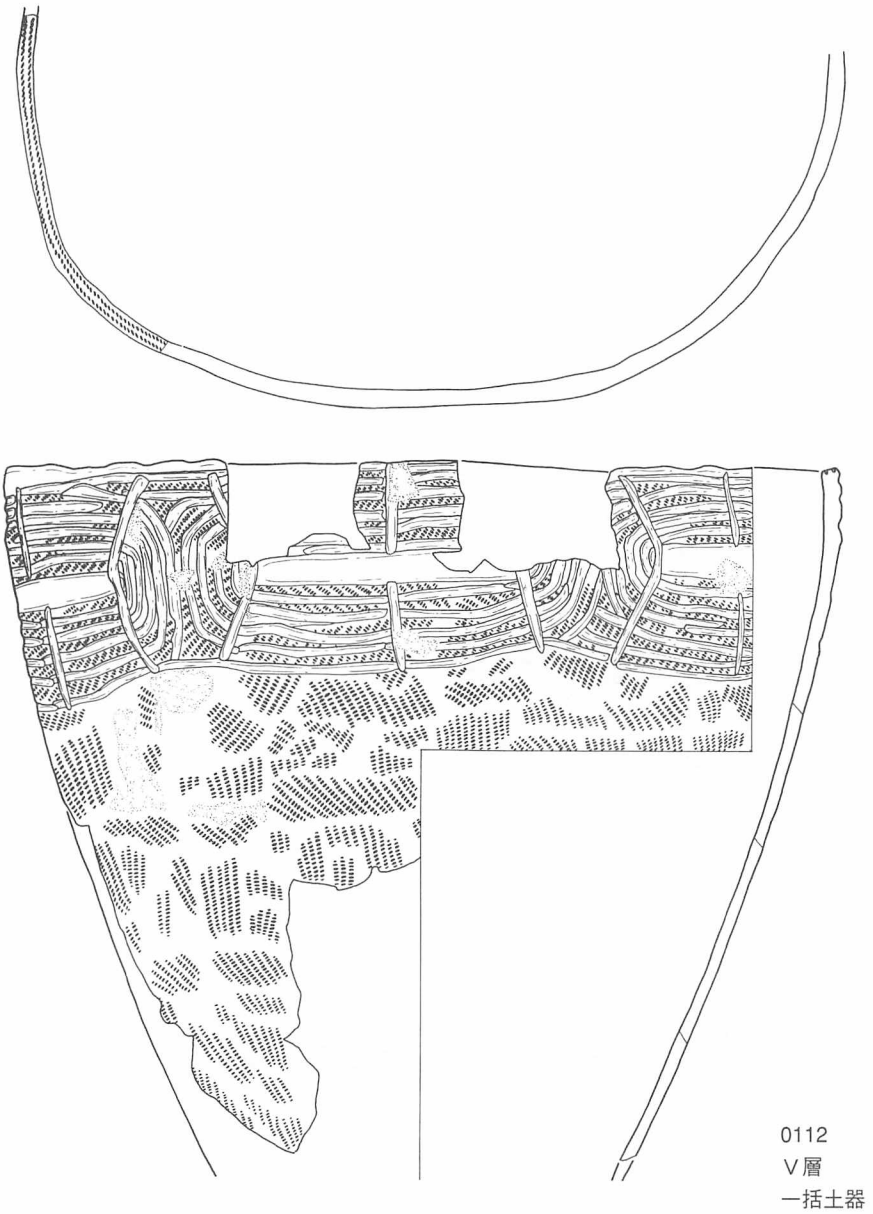
5186
Ⅴ層



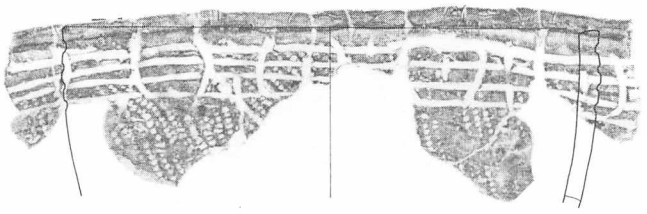
図Ⅵ-1-56　Ⅴ群ｃ類土器（7）



図Ⅵ-1-57　V群c類土器（8）



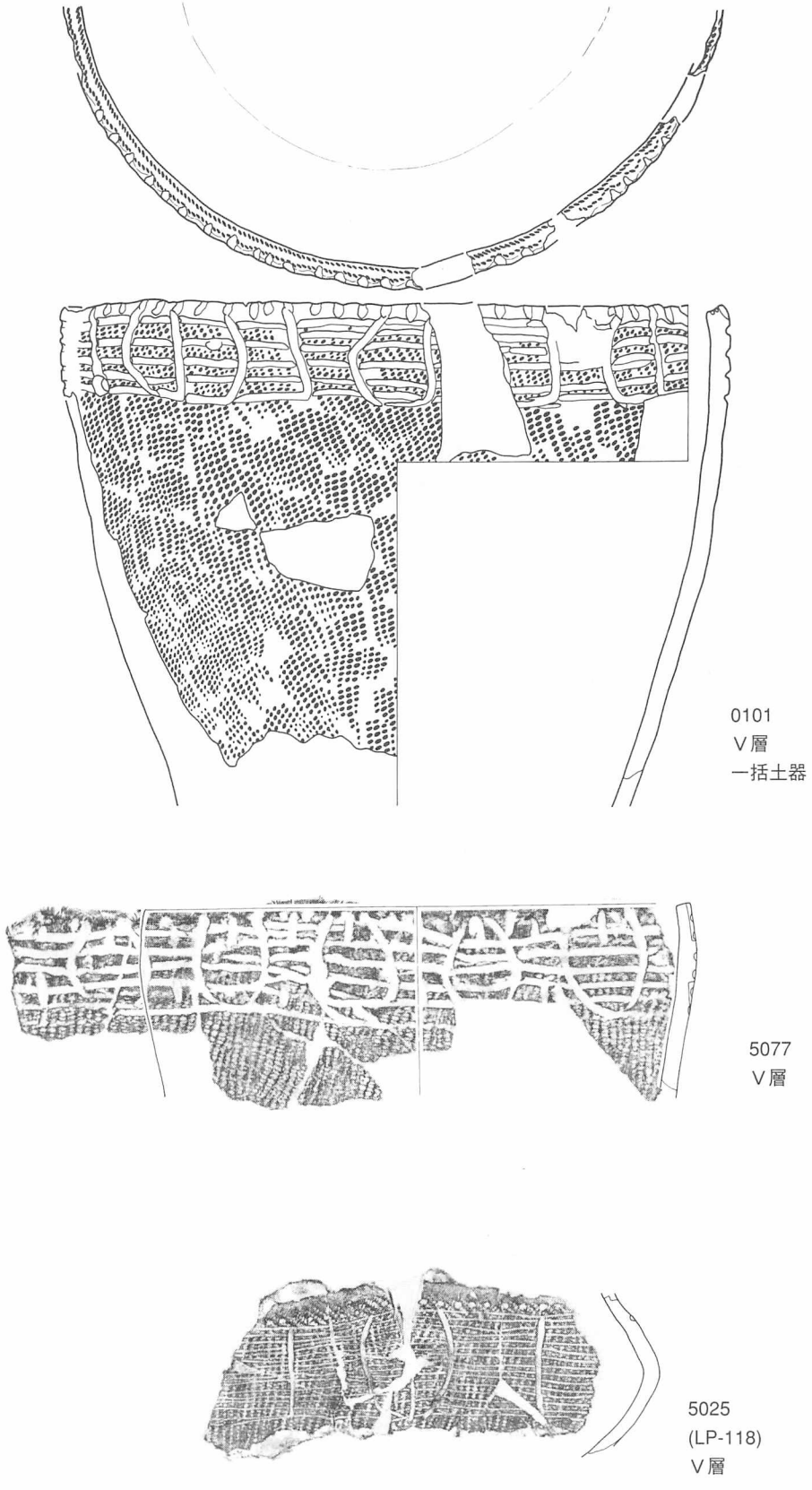
0112
Ⅴ層
一括土器



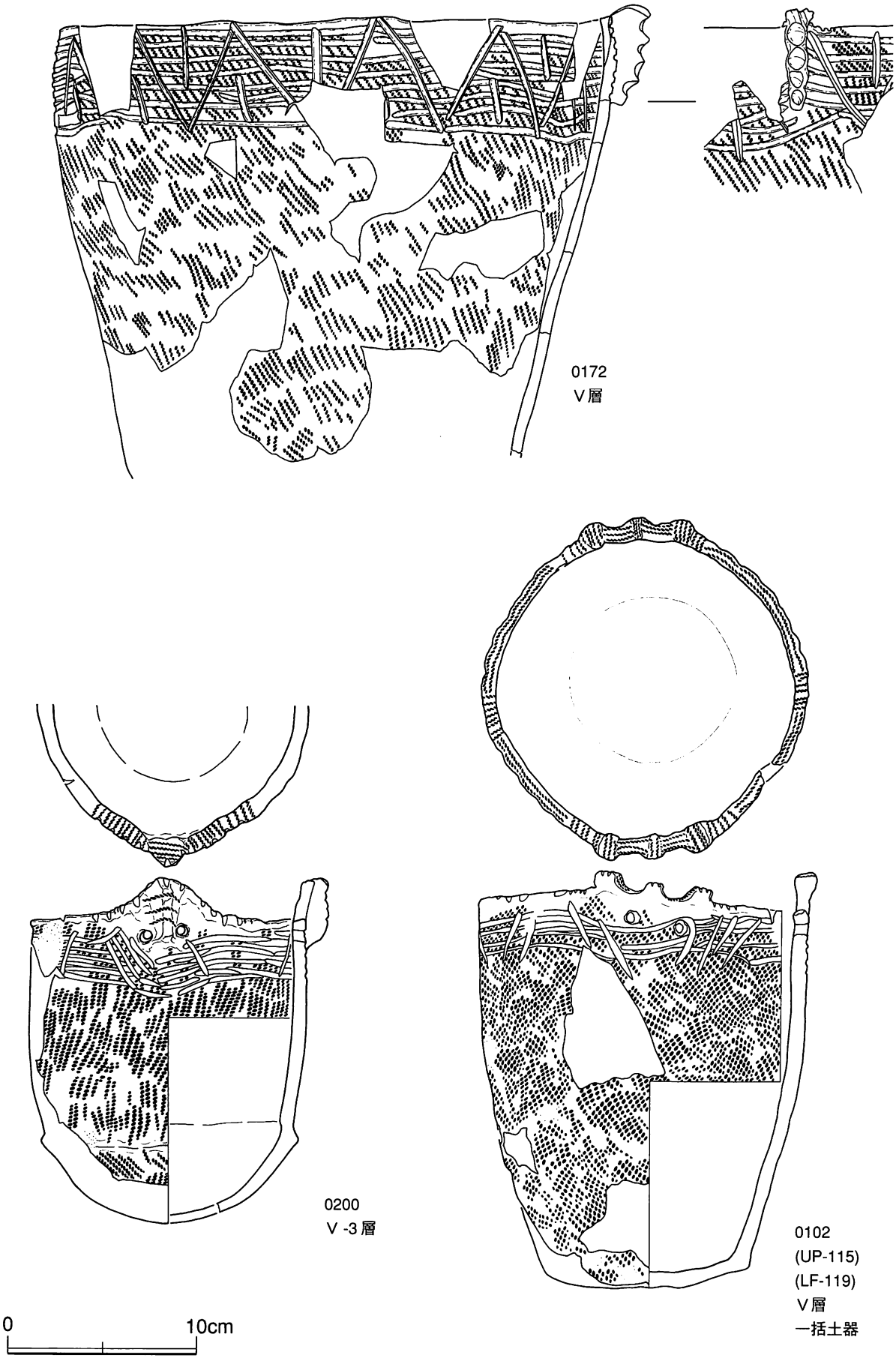
5001
(LH-101)
(LH-129)
Ⅴ層

0　10cm

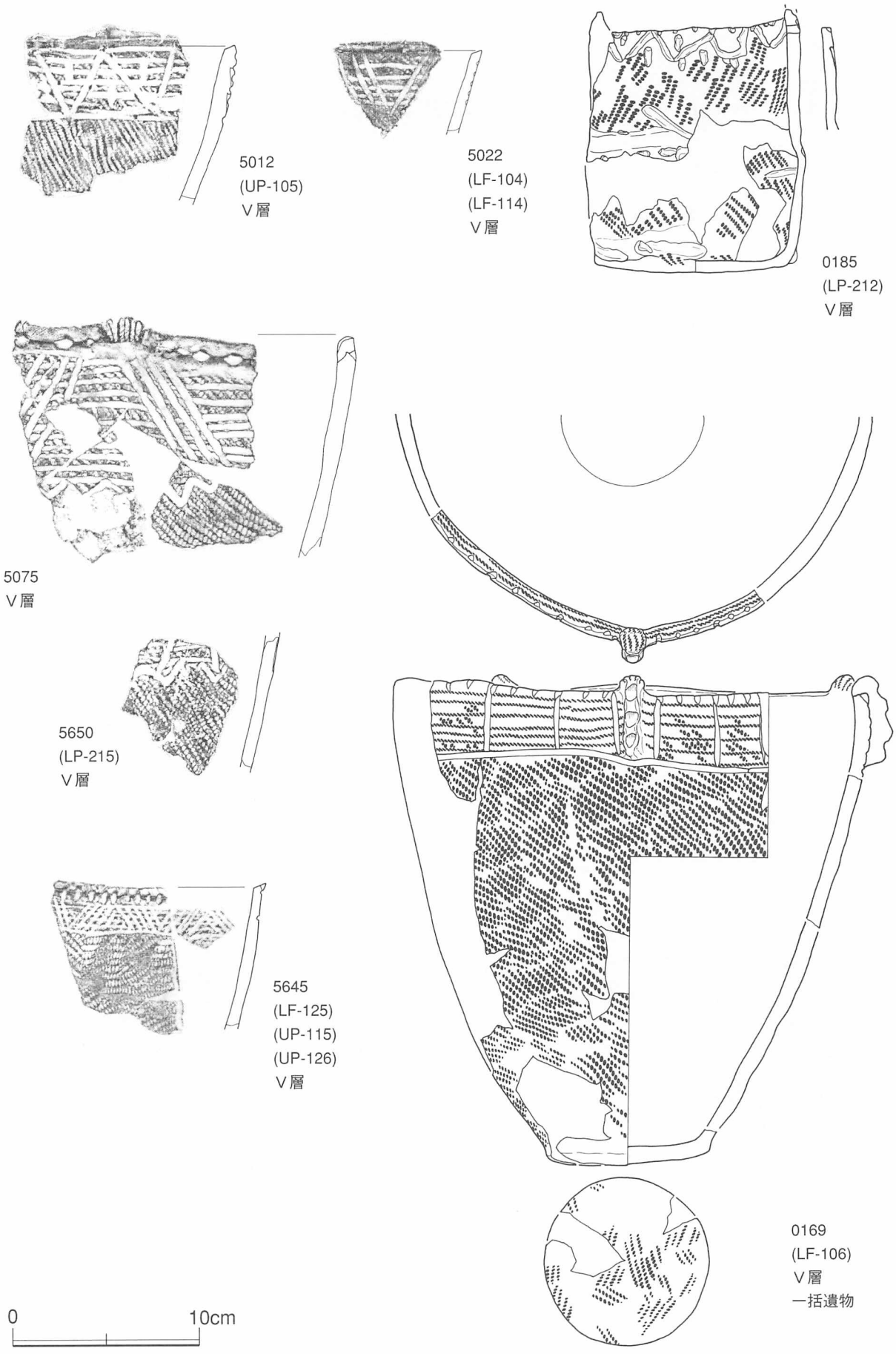
図Ⅵ-1-58　Ⅴ群ｃ類土器（9）



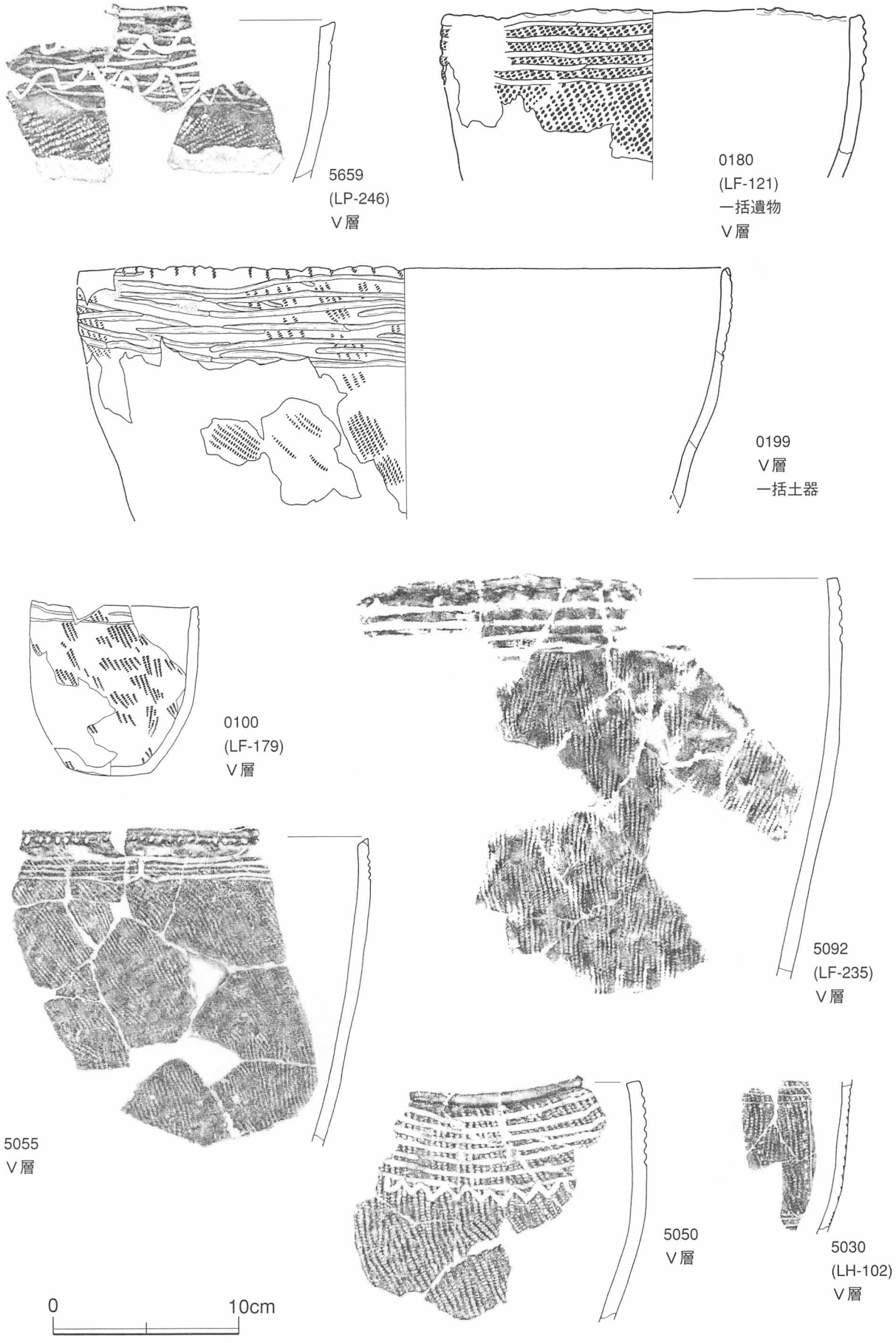
図Ⅵ-1-59　Ⅴ群ｃ類土器（10）



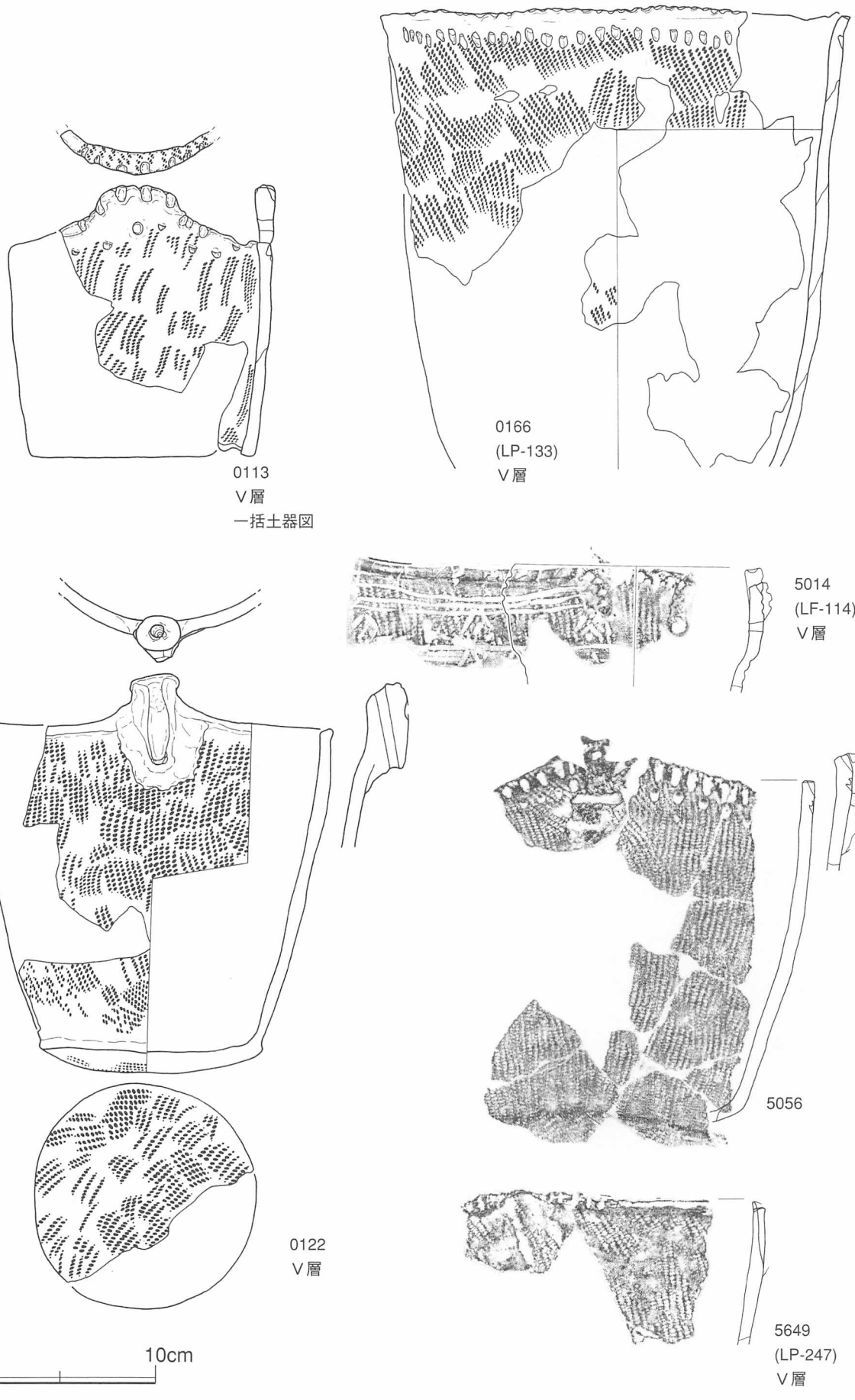
図Ⅵ-1-60　Ⅴ群c類土器（11）



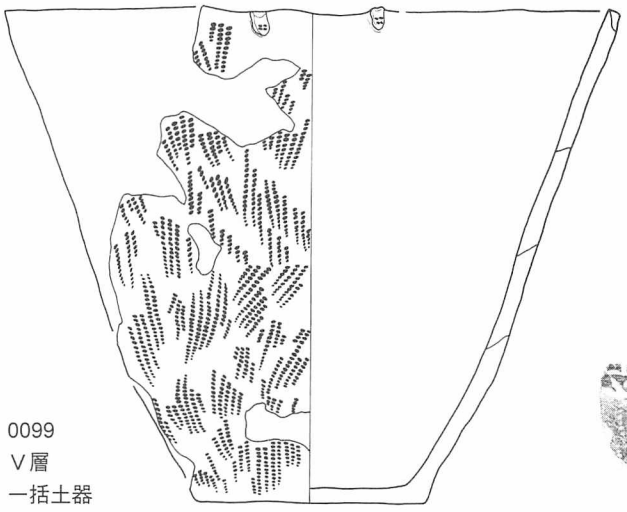
図Ⅵ-1-61　Ⅴ群c類土器（12）



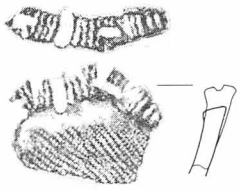
図Ⅵ-1-62　Ⅴ群ｃ類土器（13）



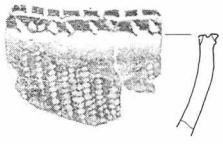
図Ⅵ-1-63　Ⅴ群ｃ類土器（14）



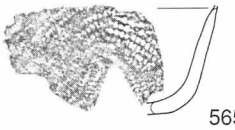
0099
Ⅴ層
一括土器



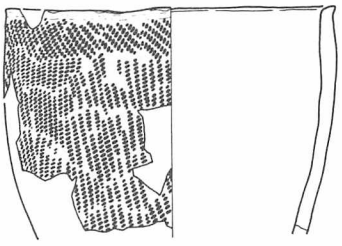
5648
(LP-142)
Ⅴ層



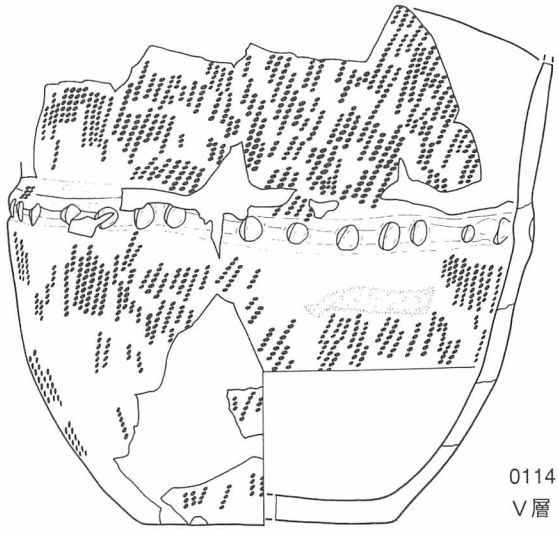
5657
(LF-234)
Ⅴ層



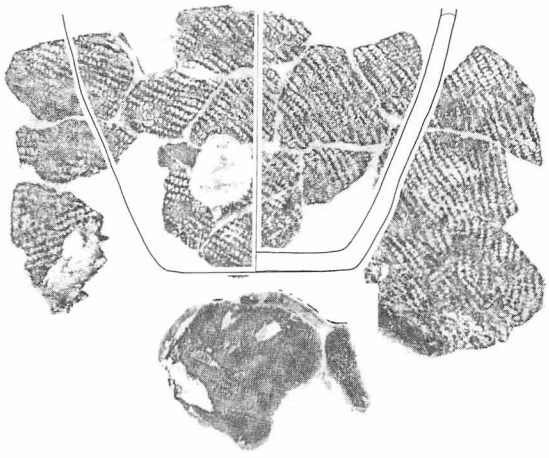
5658
(LF-249)
Ⅴ層



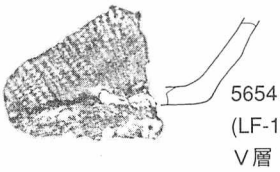
0171
(LH-001)
(LH-002)
(LH-102)
Ⅴ層



0114
Ⅴ層



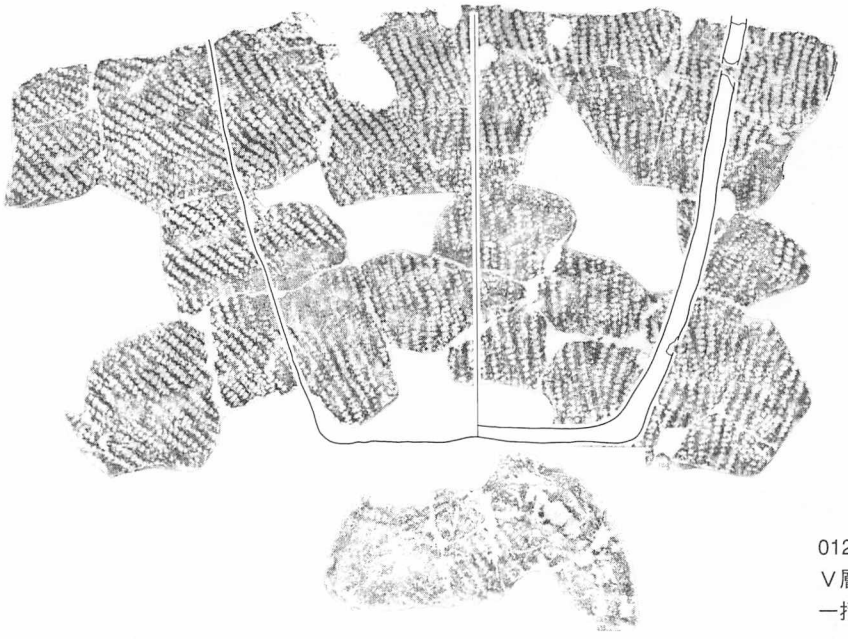
5034
Ⅴ層



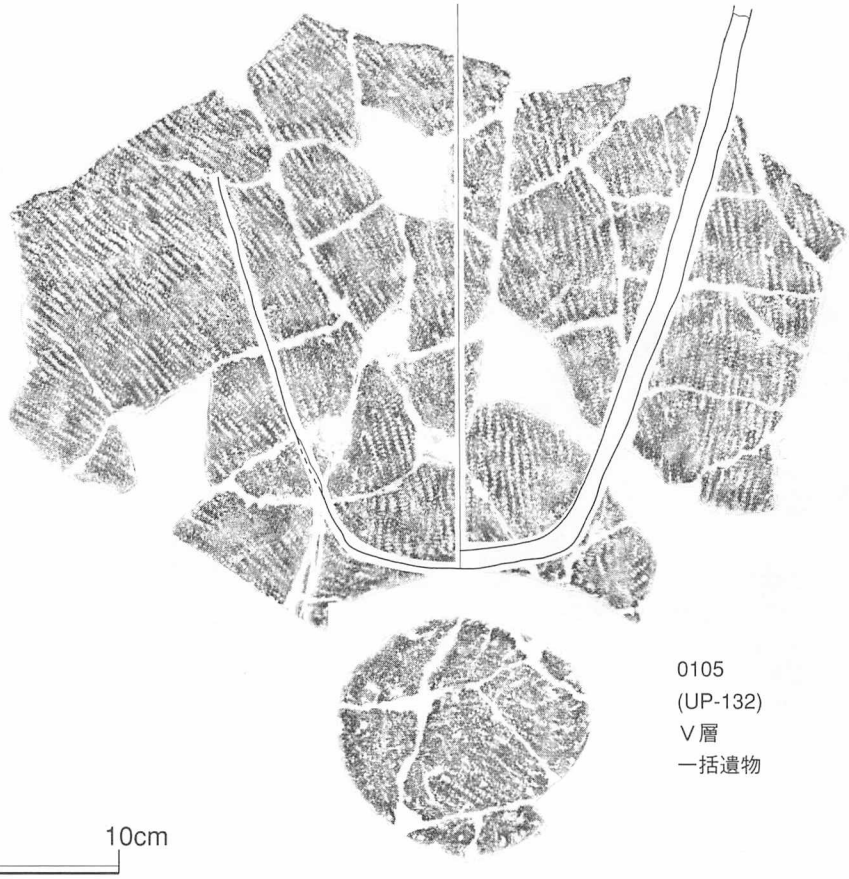
5654
(LF-139)
Ⅴ層



図Ⅵ-1-64　Ⅴ群ｃ類土器（15）



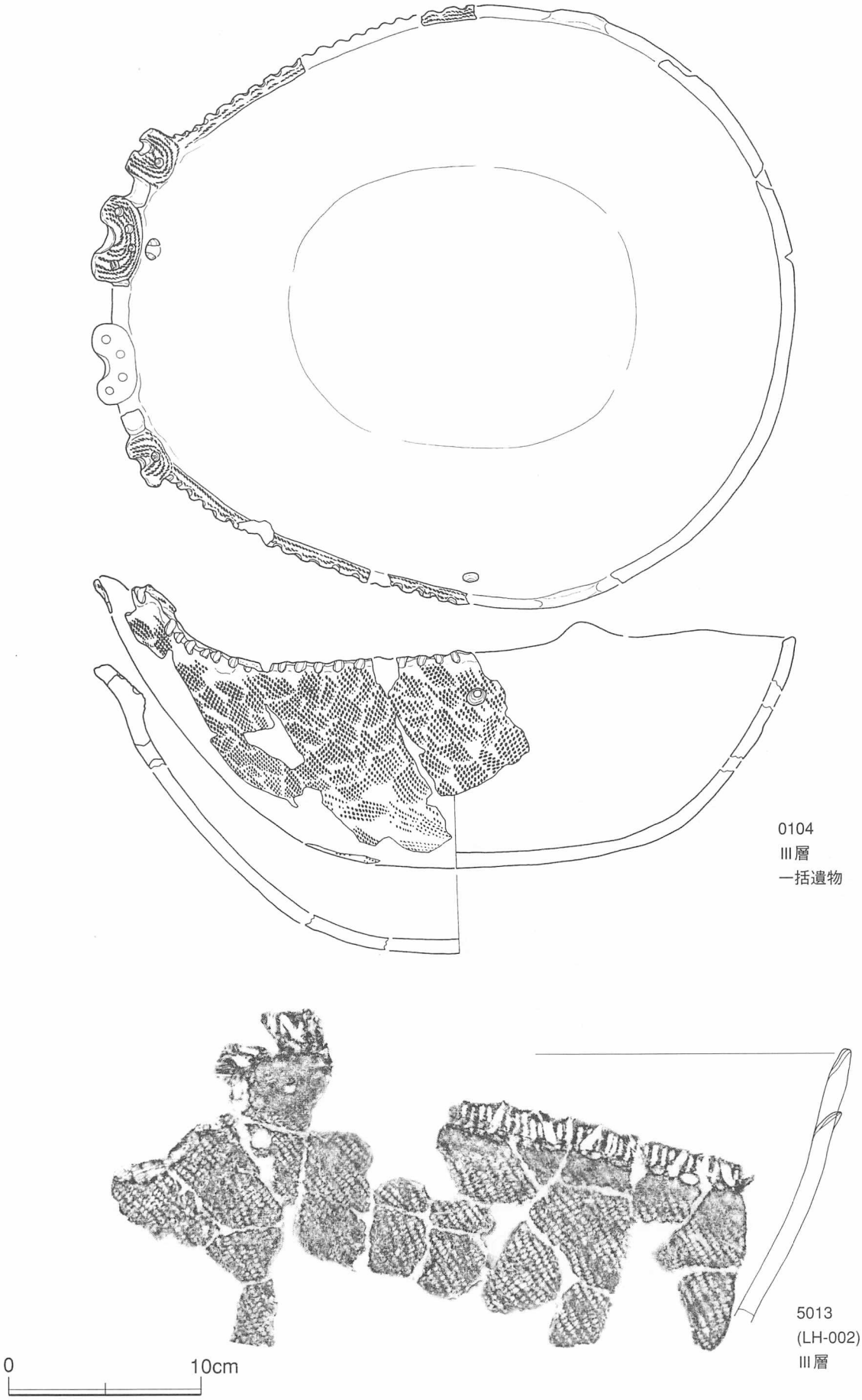
0123
Ⅴ層
一括土器



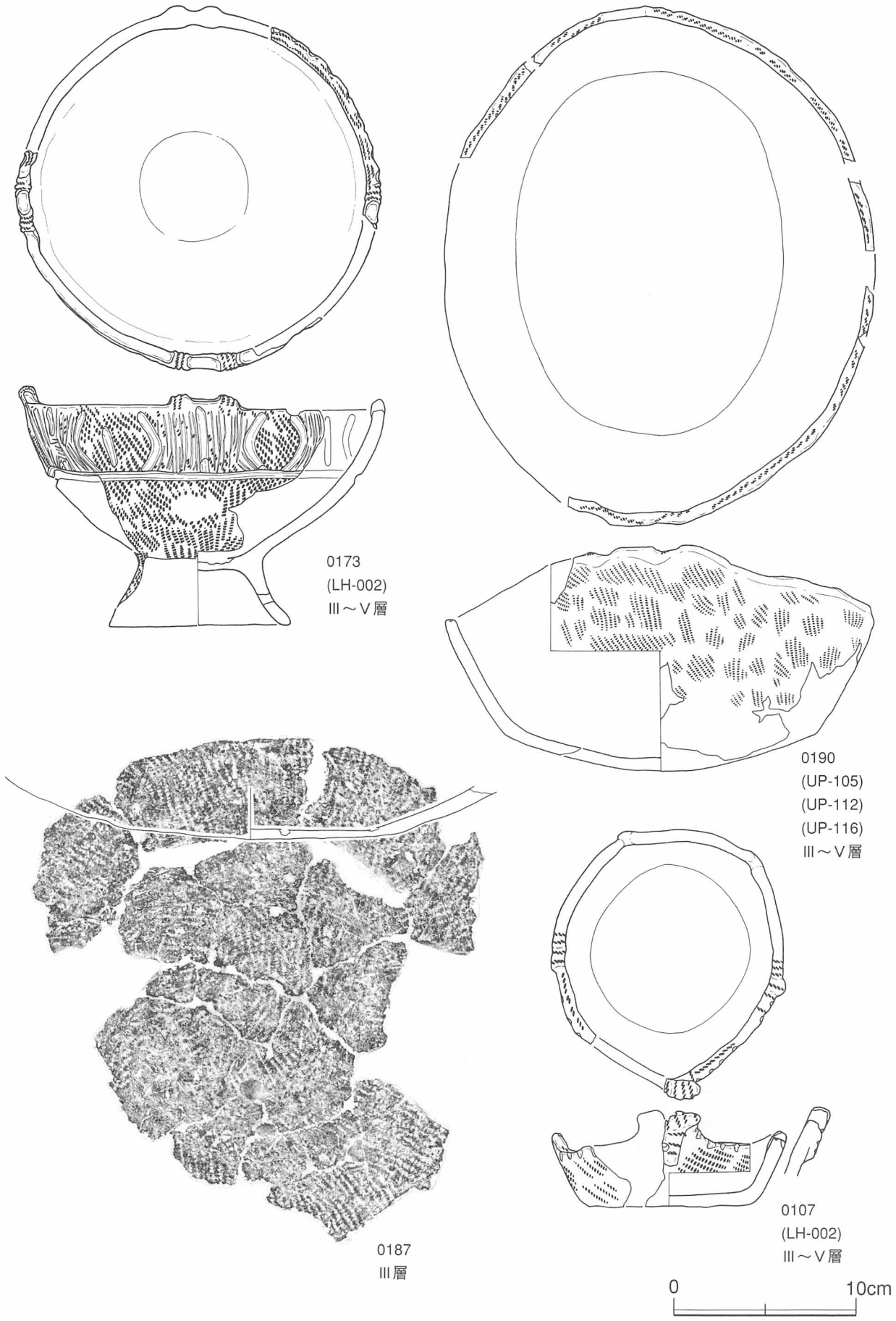
0105
(UP-132)
Ⅴ層
一括遺物

0　10cm

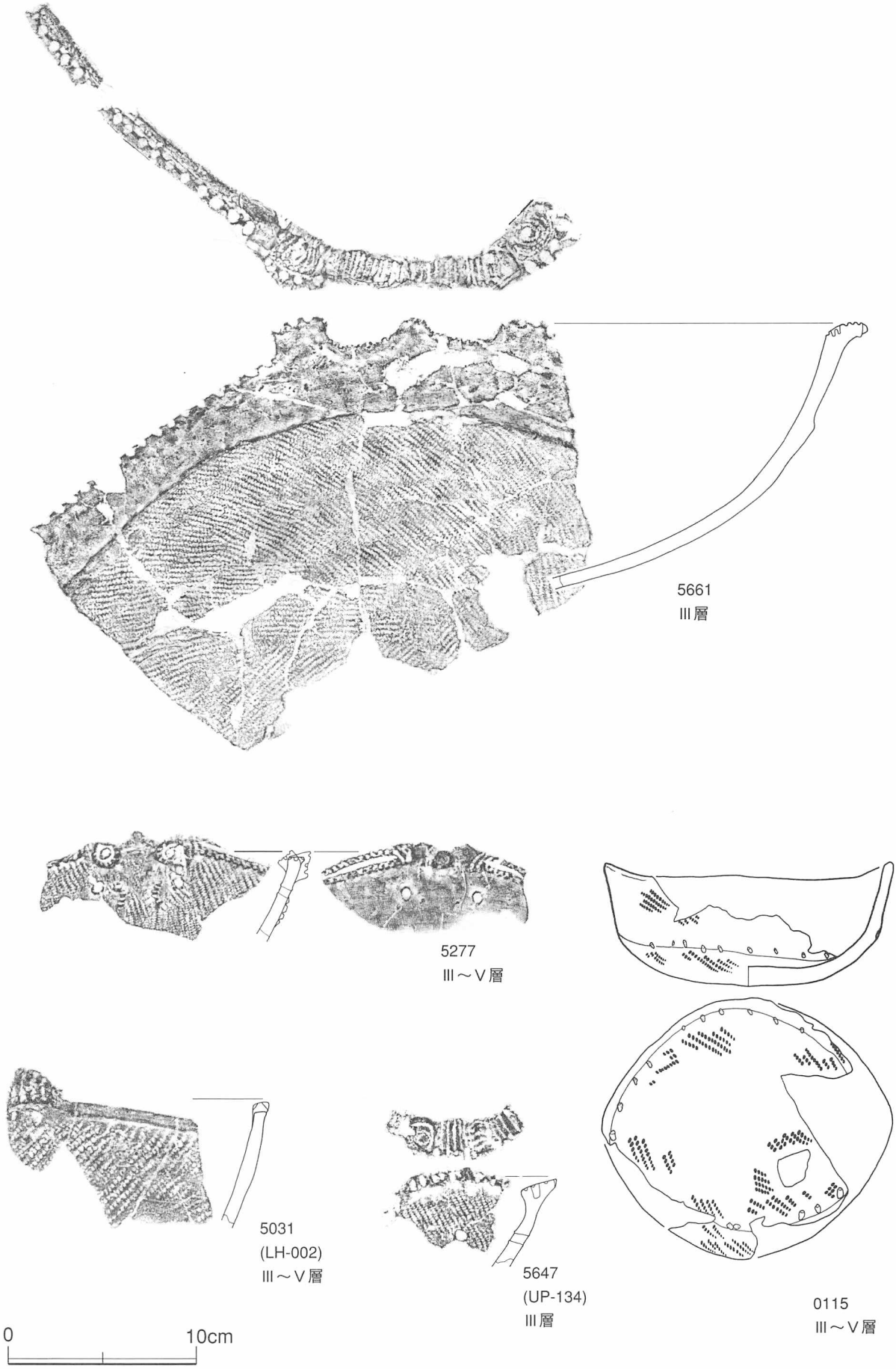
図Ⅵ-1-65　Ⅴ群ｃ類土器（16）



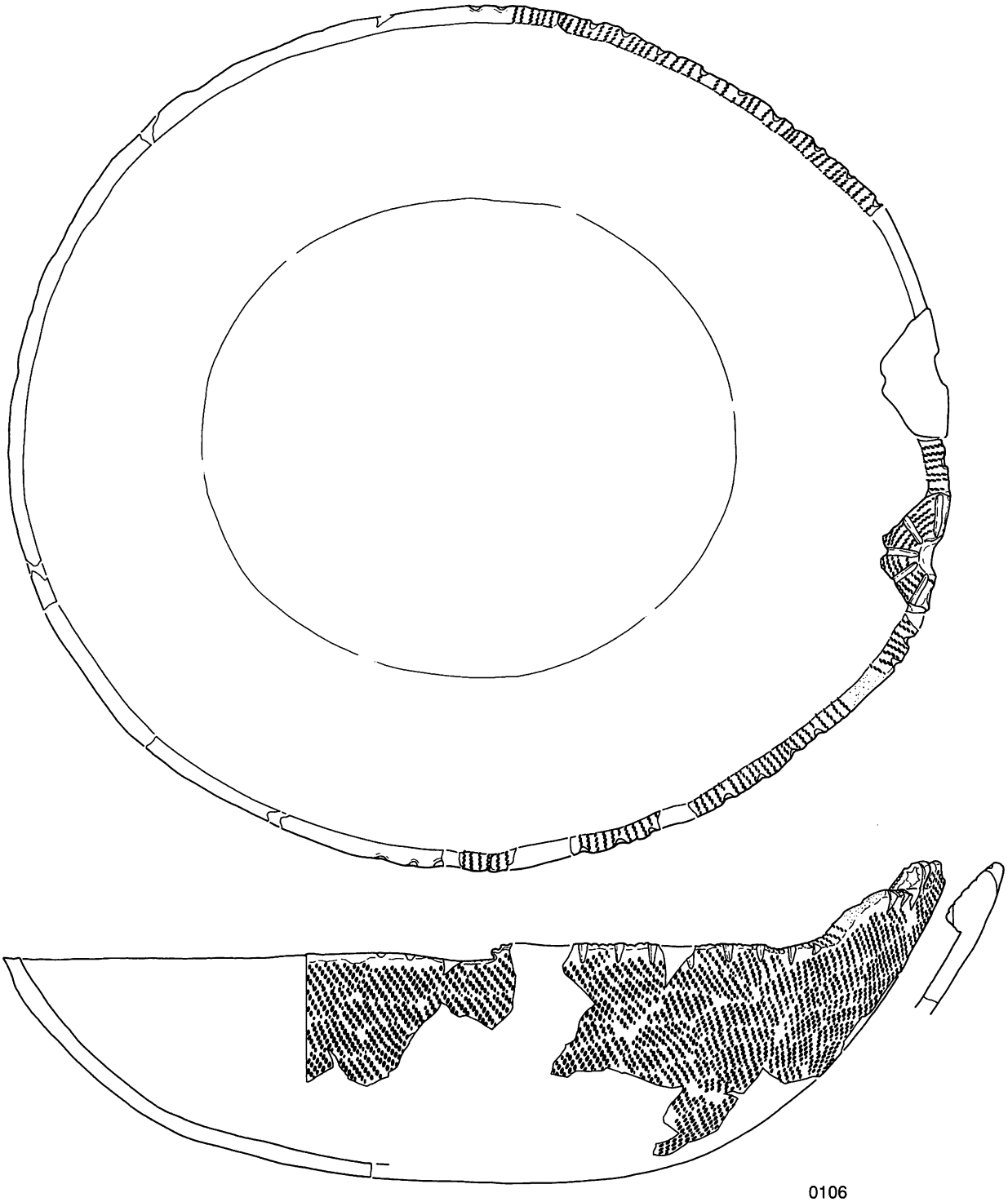
図Ⅵ-1-66　Ⅴ群ｃ類土器（17）



図Ⅵ-1-67　Ⅴ群ｃ類土器（18）



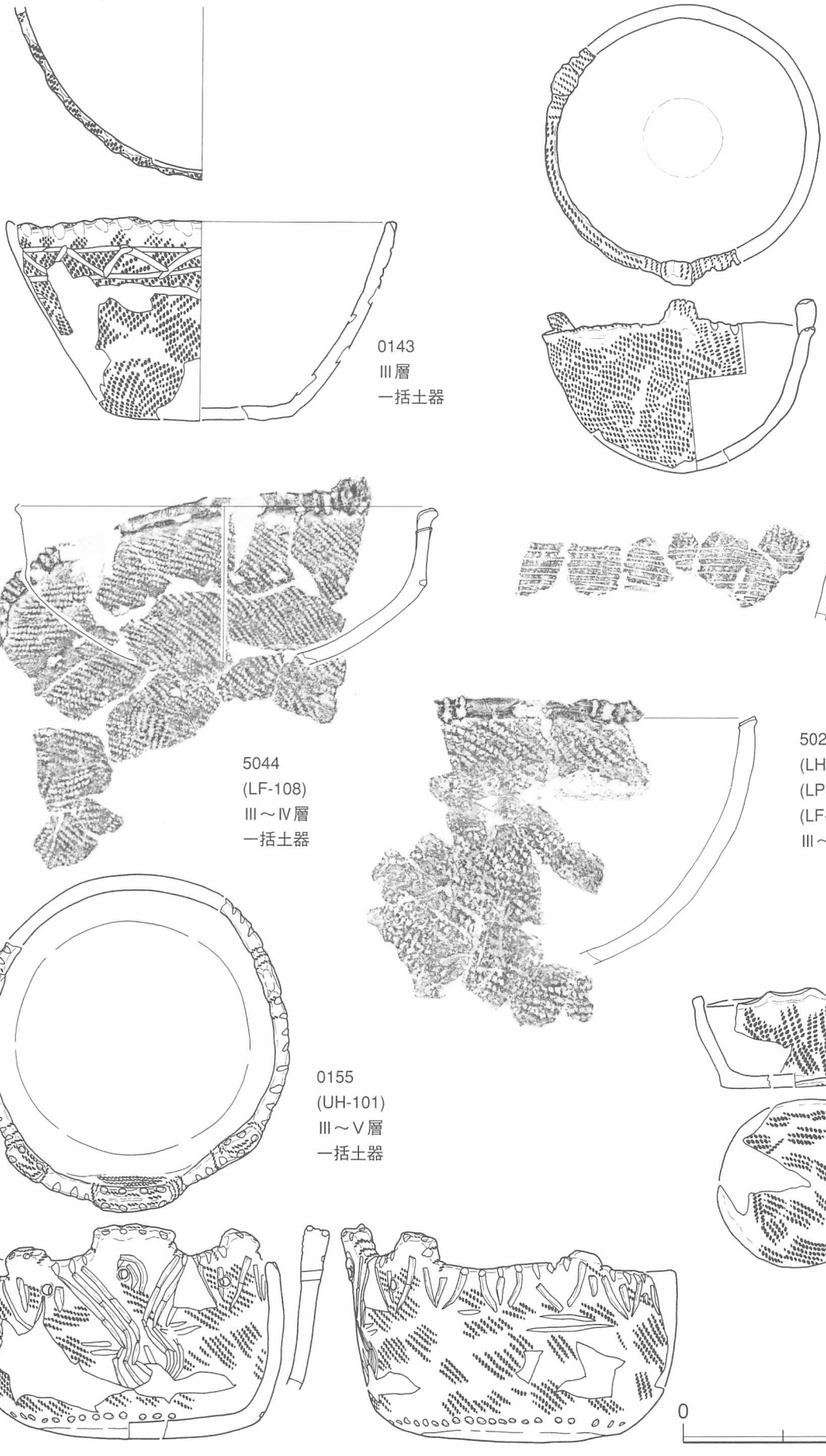
図Ⅵ-1-68　Ⅴ群ｃ類土器（19）



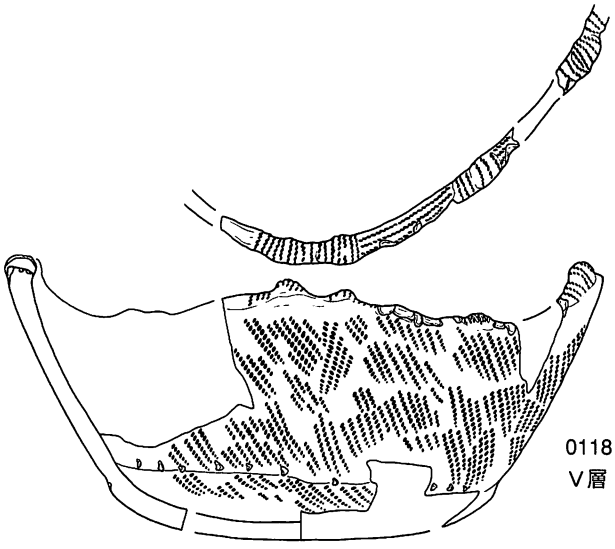
0106
Ⅲ～Ⅴ層
一括遺物図有り
113/124/166

0　10cm

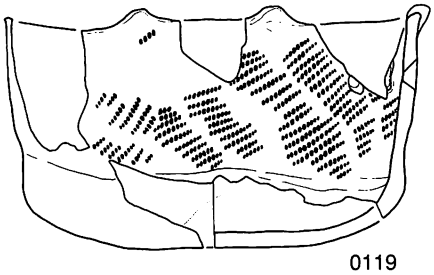
図Ⅵ-1-69　Ⅴ群ｃ類土器（20）



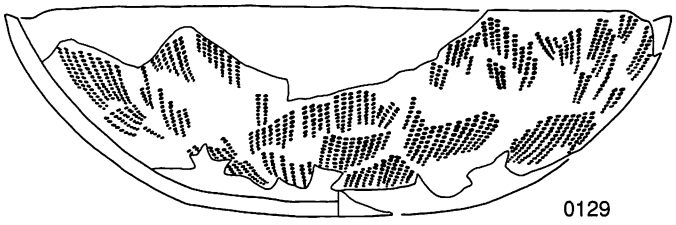
図Ⅵ-1-70　Ⅴ群ｃ類土器（21）



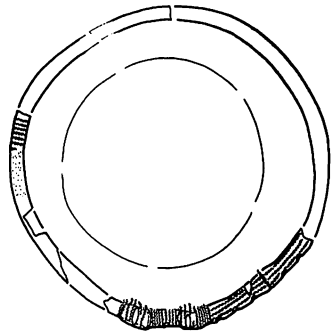
0118
V層



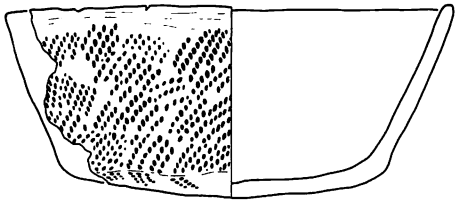
0119
V層

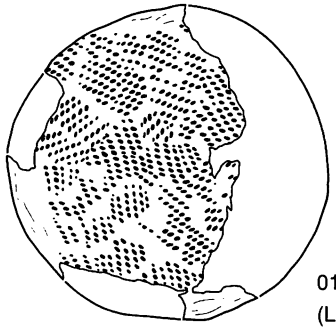


0129
V層

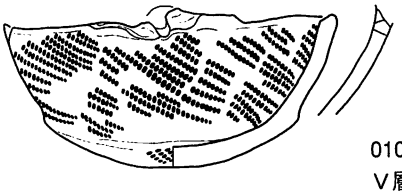


0175
(LP-215)
V層





0179
(LF-124)
V層



0108
V層

0　10cm

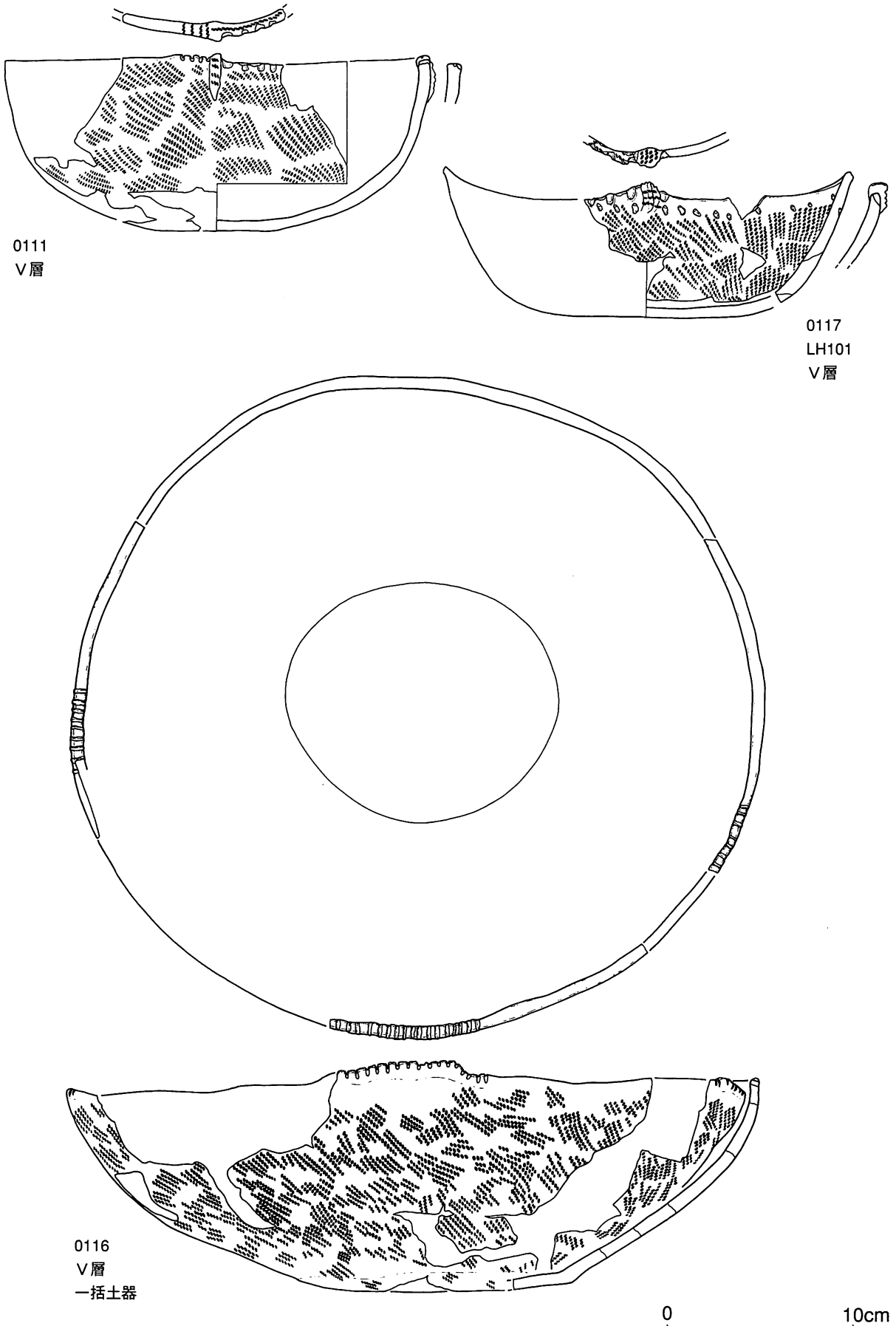
図Ⅵ-1-71　V群c類土器（22）



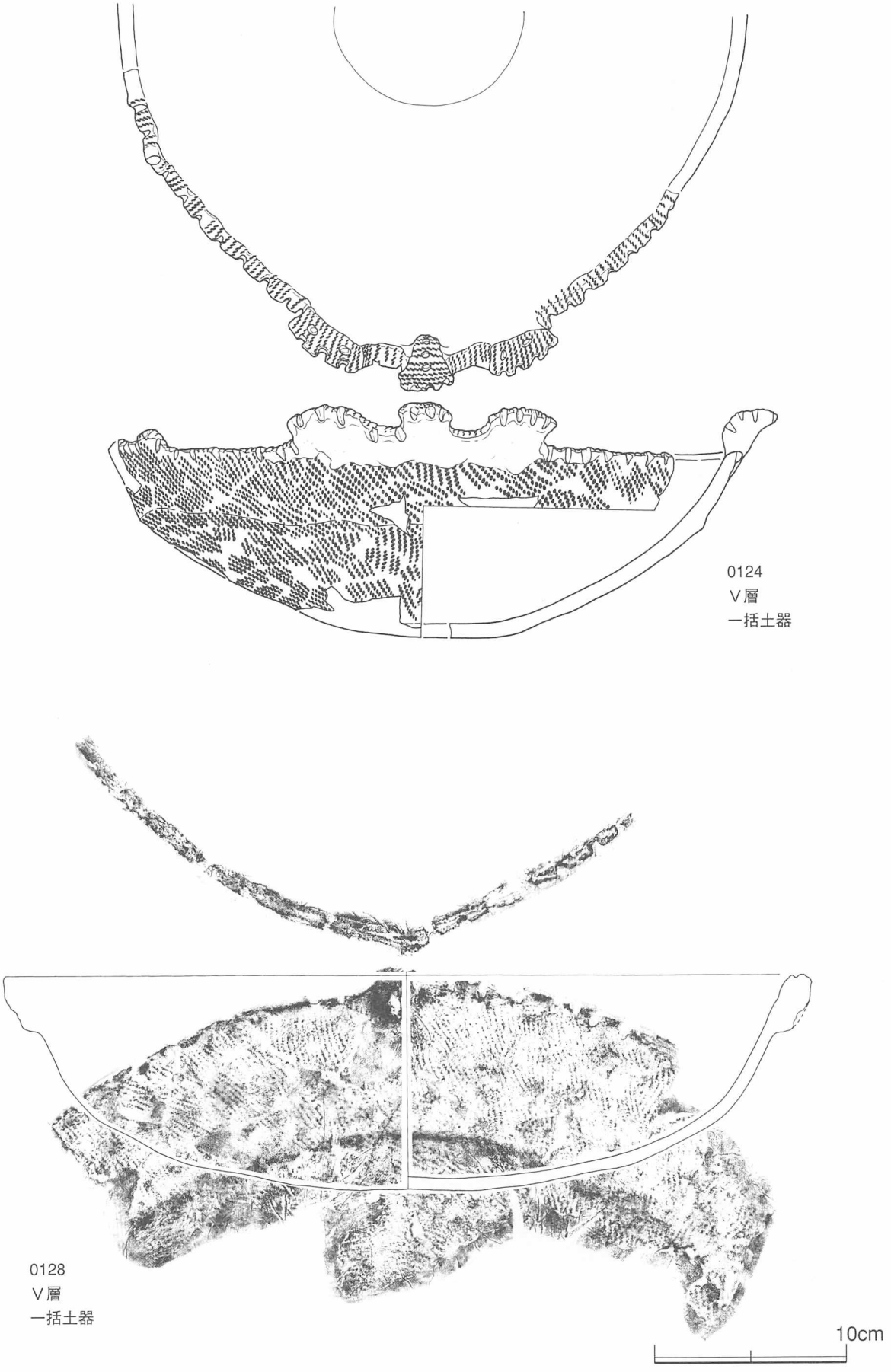
図Ⅵ-1-72　Ⅴ群ｃ類土器（23）



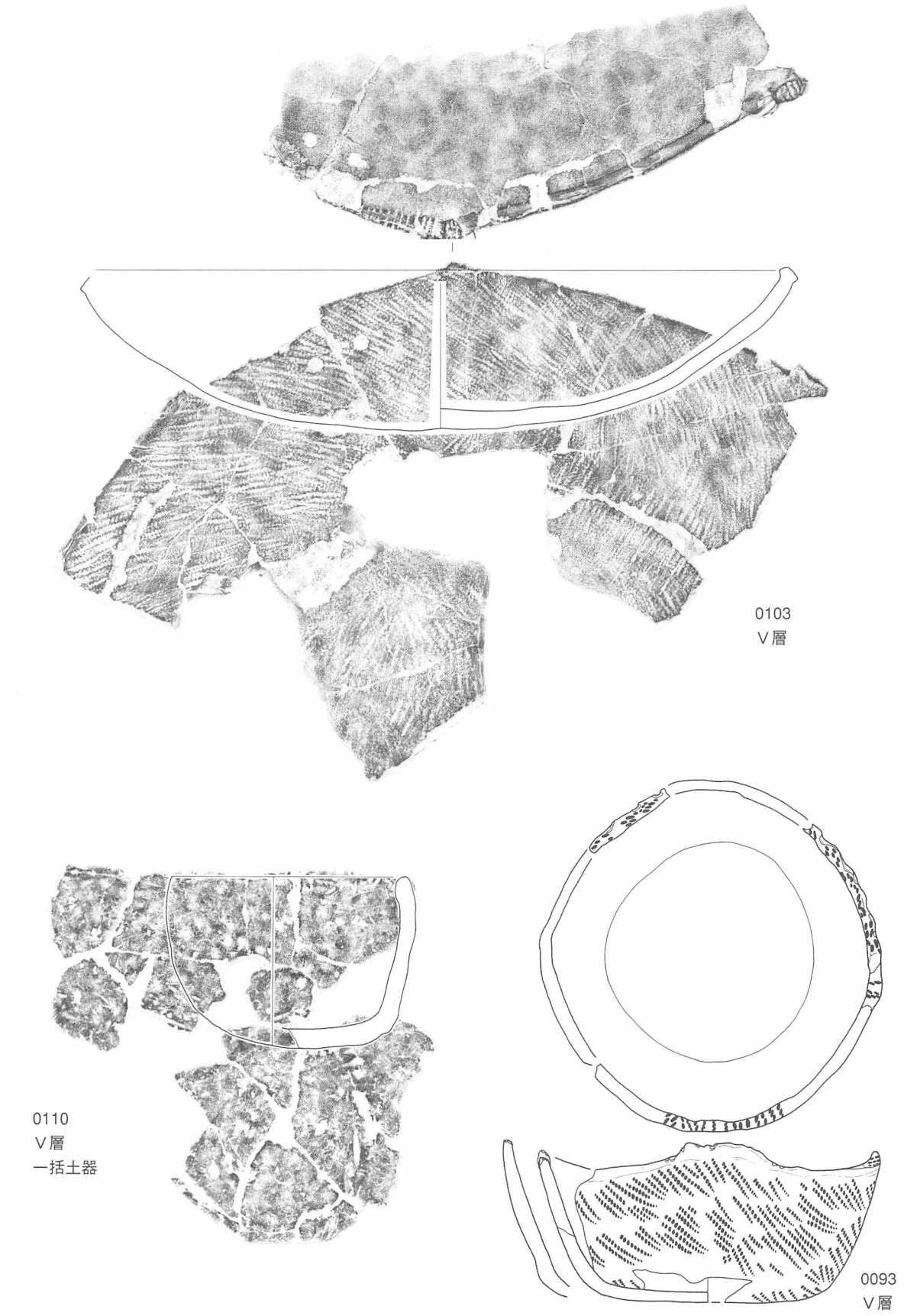
図Ⅵ-1-73　V群c類土器（24）



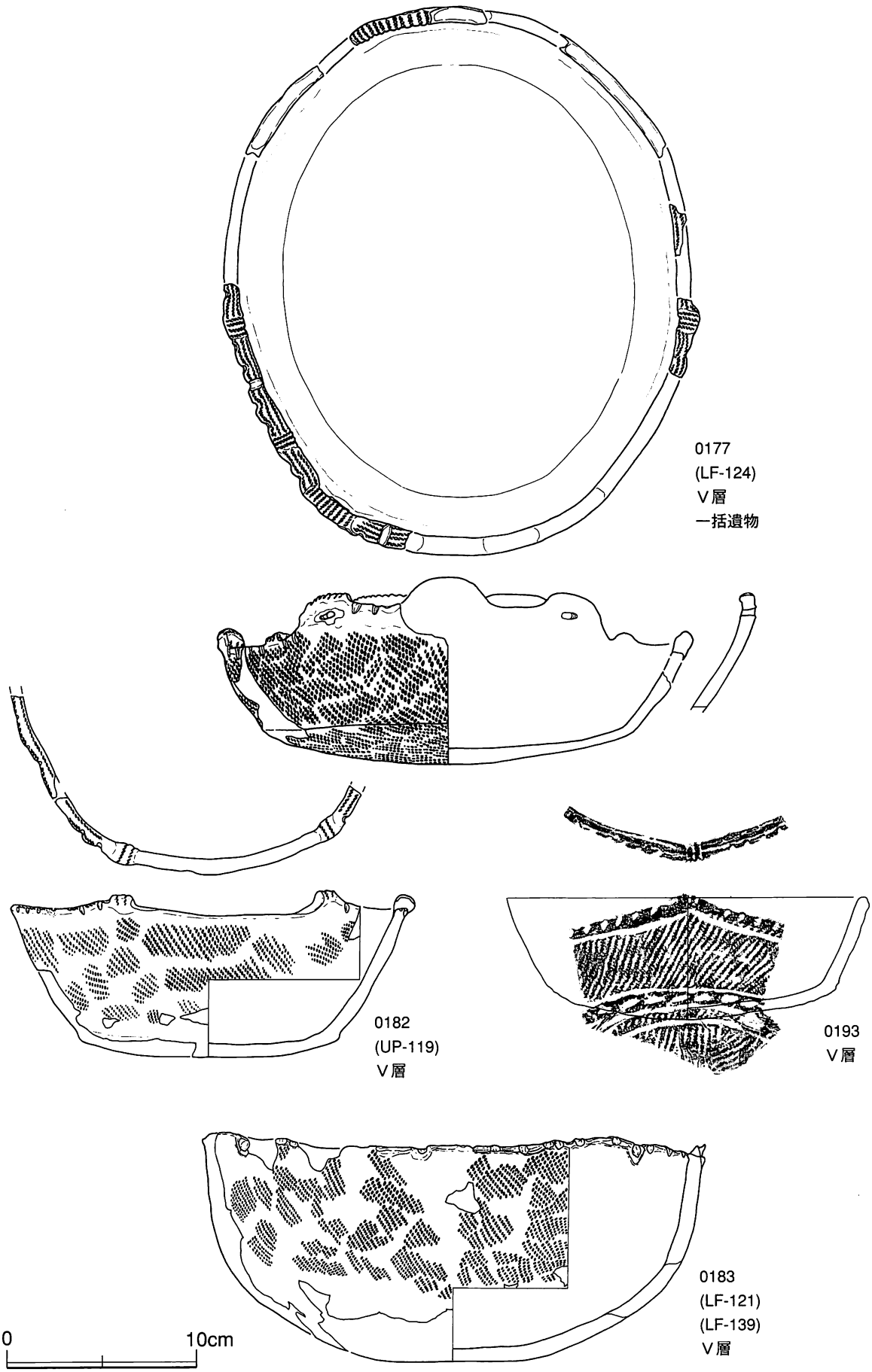
図Ⅵ 1-74　Ⅴ群ｃ類土器（25）



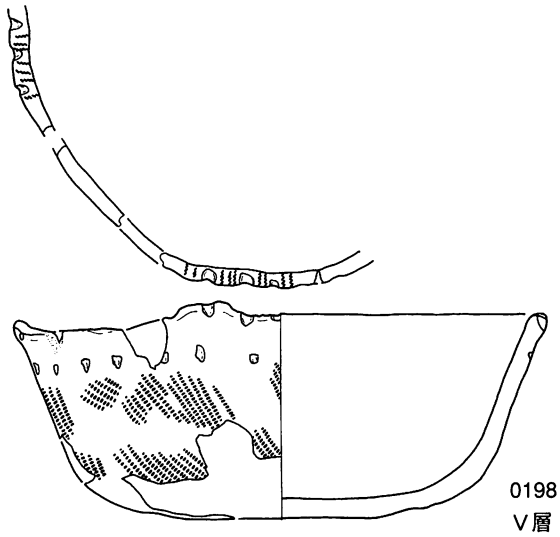
図Ⅵ-1-75　Ⅴ群c類土器（26）



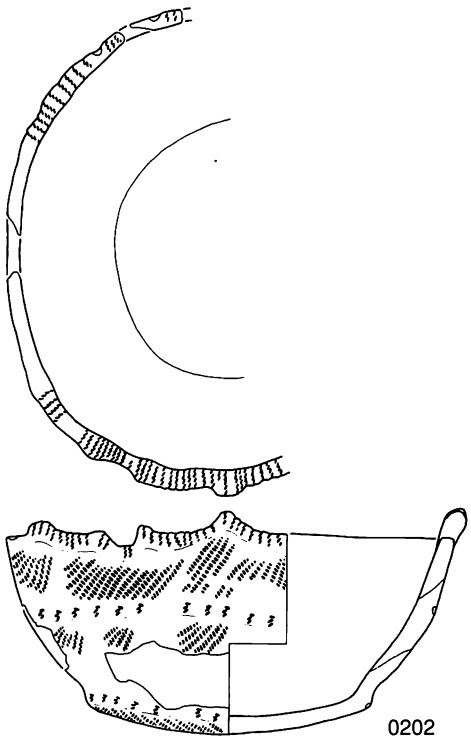
図Ⅵ-1-76　Ⅴ群ｃ類土器（27）



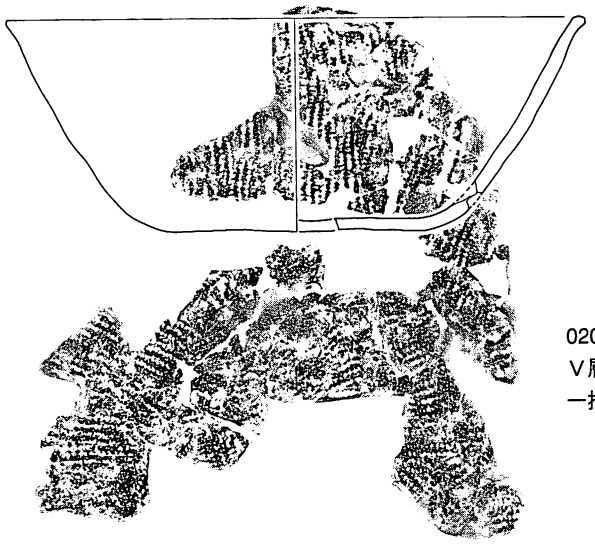
図Ⅵ-1-77　V群c類土器（28）



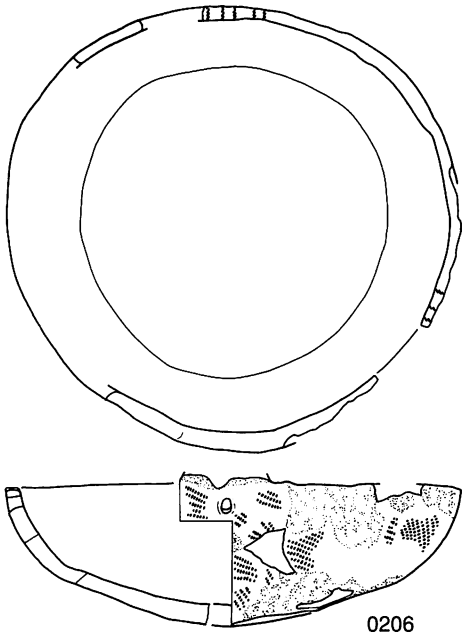
0198
Ⅴ層
一括土器



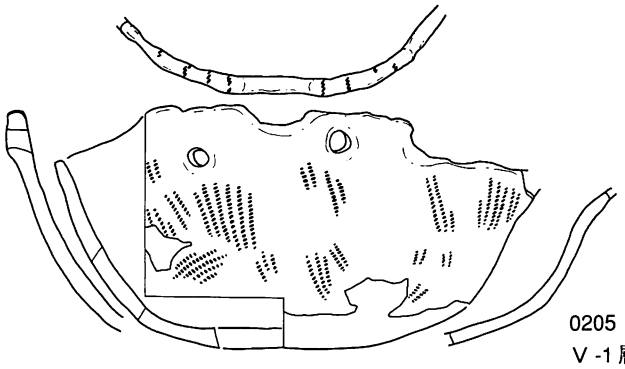
0202
Ⅴ層



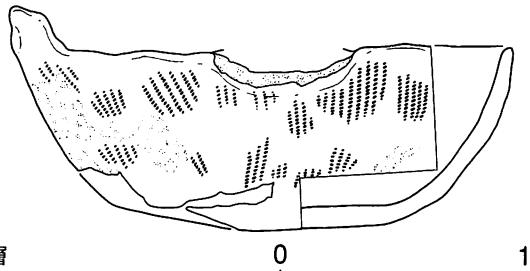
0204
Ⅴ層
一括土器

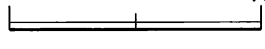


0206
Ⅴ層

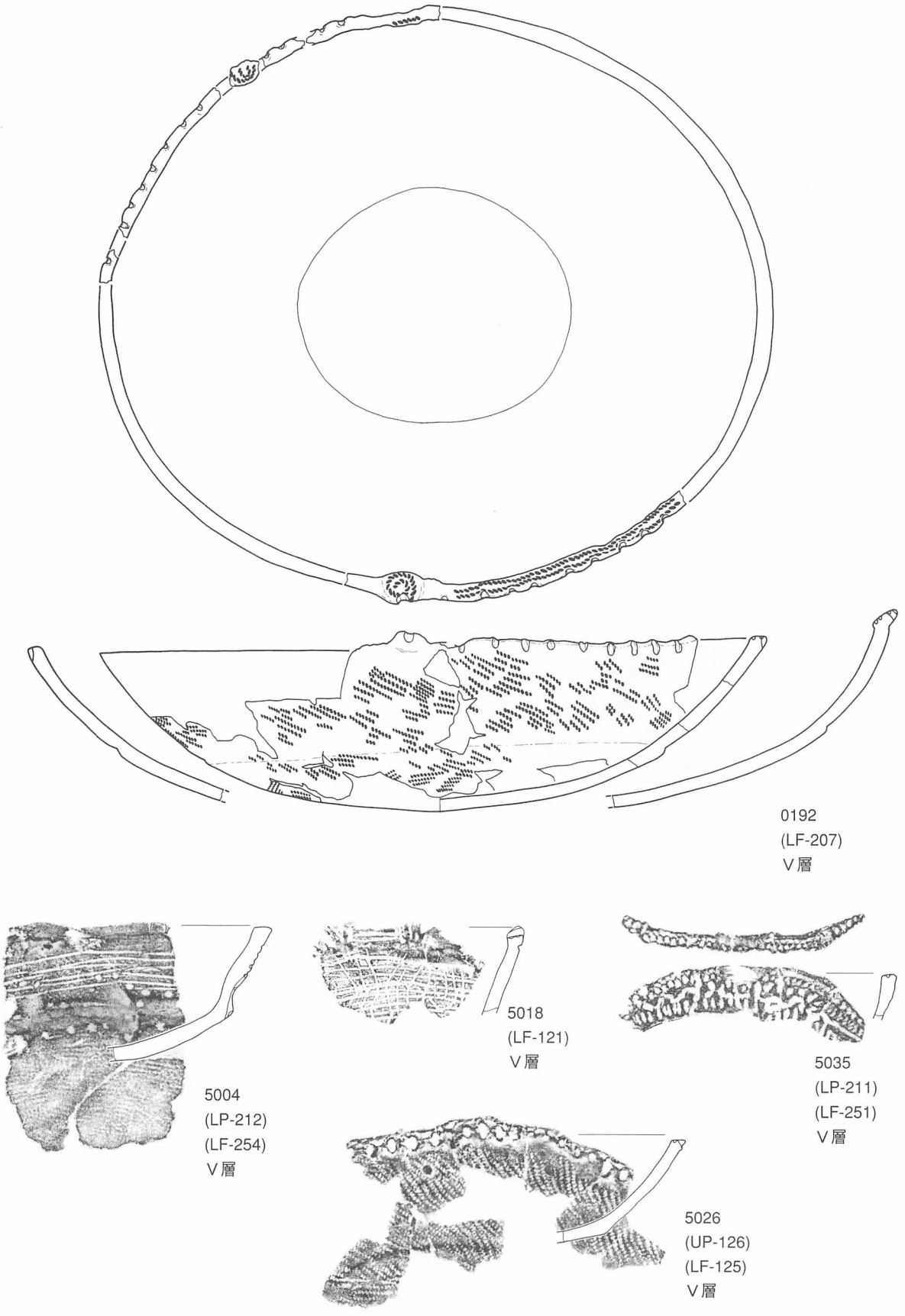


0205
Ⅴ-1層

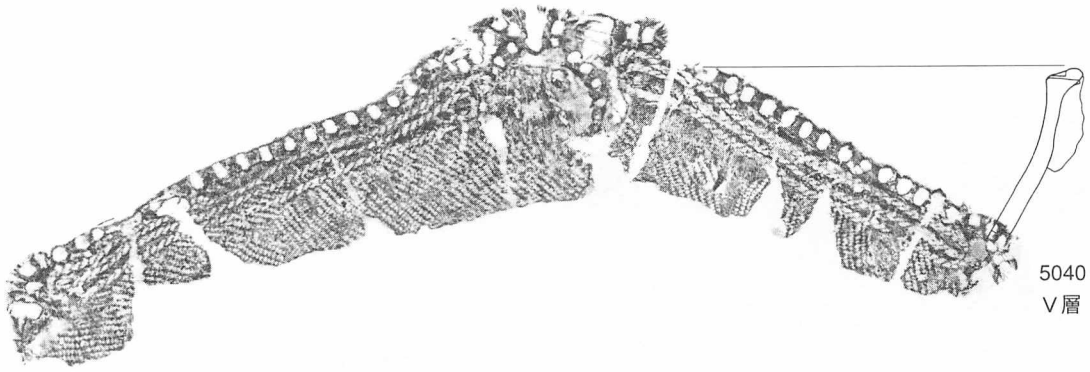




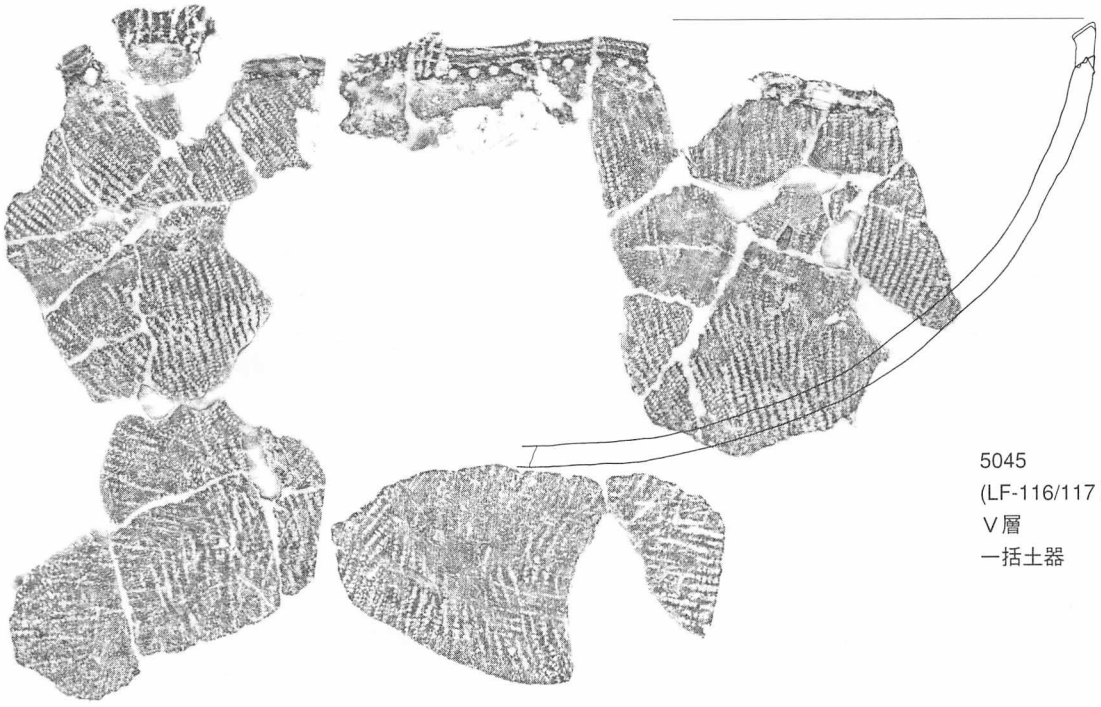
図Ⅵ-1-78　Ⅴ群c類土器（29）



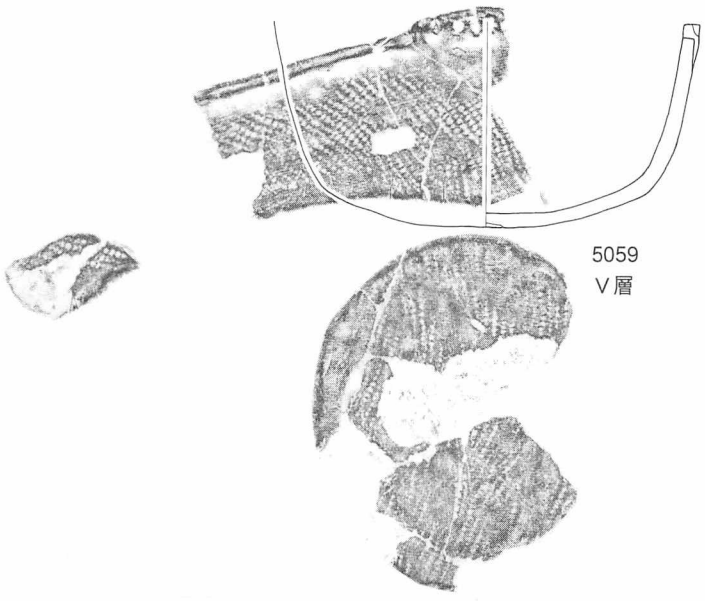
図Ⅵ-1-79　Ⅴ群ｃ類土器（30）



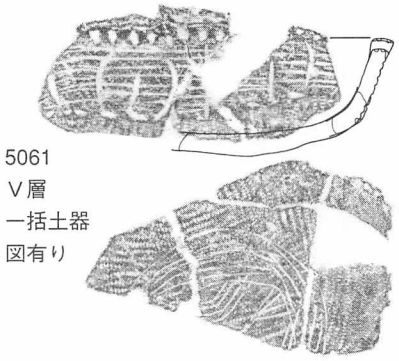
5040
Ⅴ層



5045
(LF-116/117 周辺)
Ⅴ層
一括土器



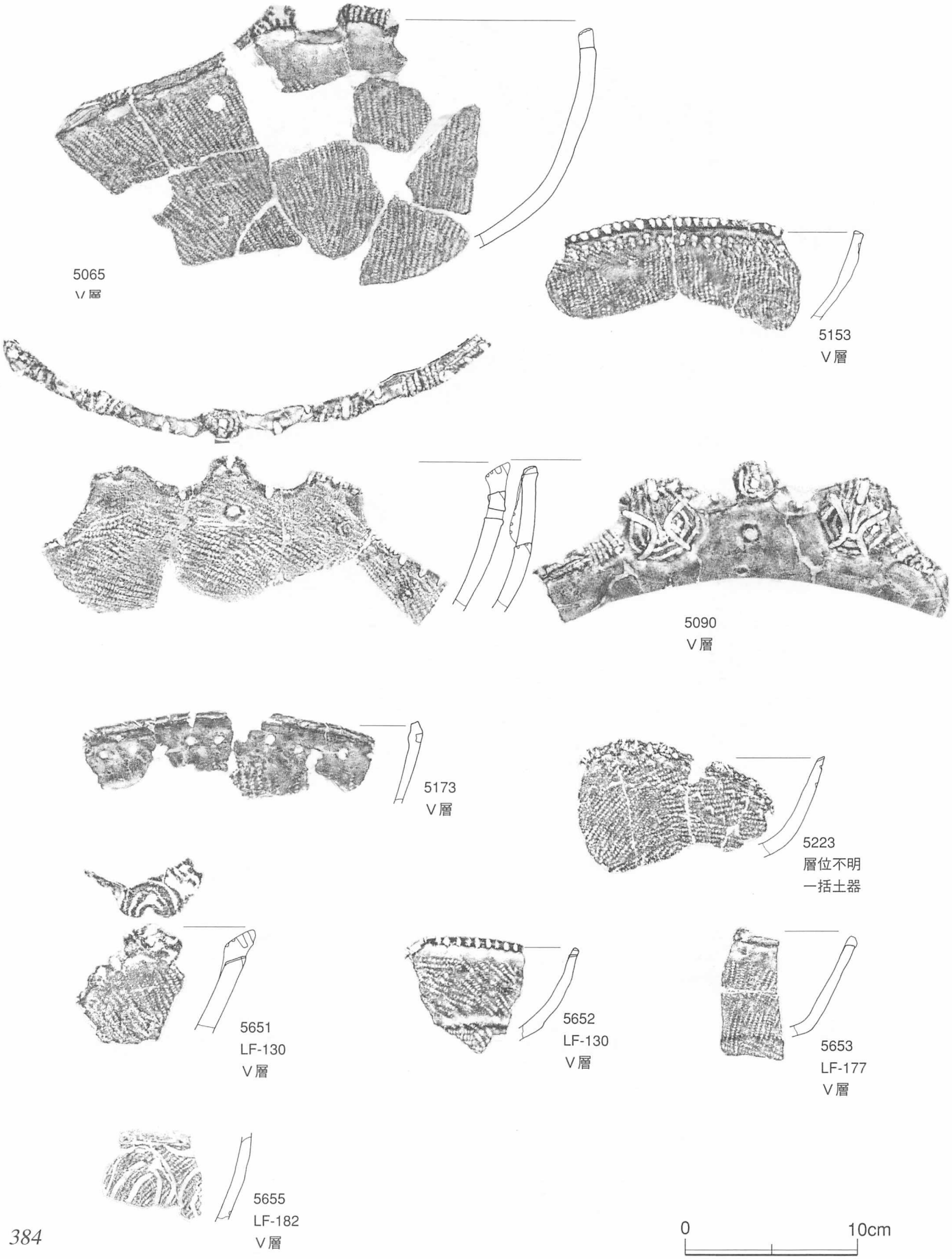
5059
Ⅴ層



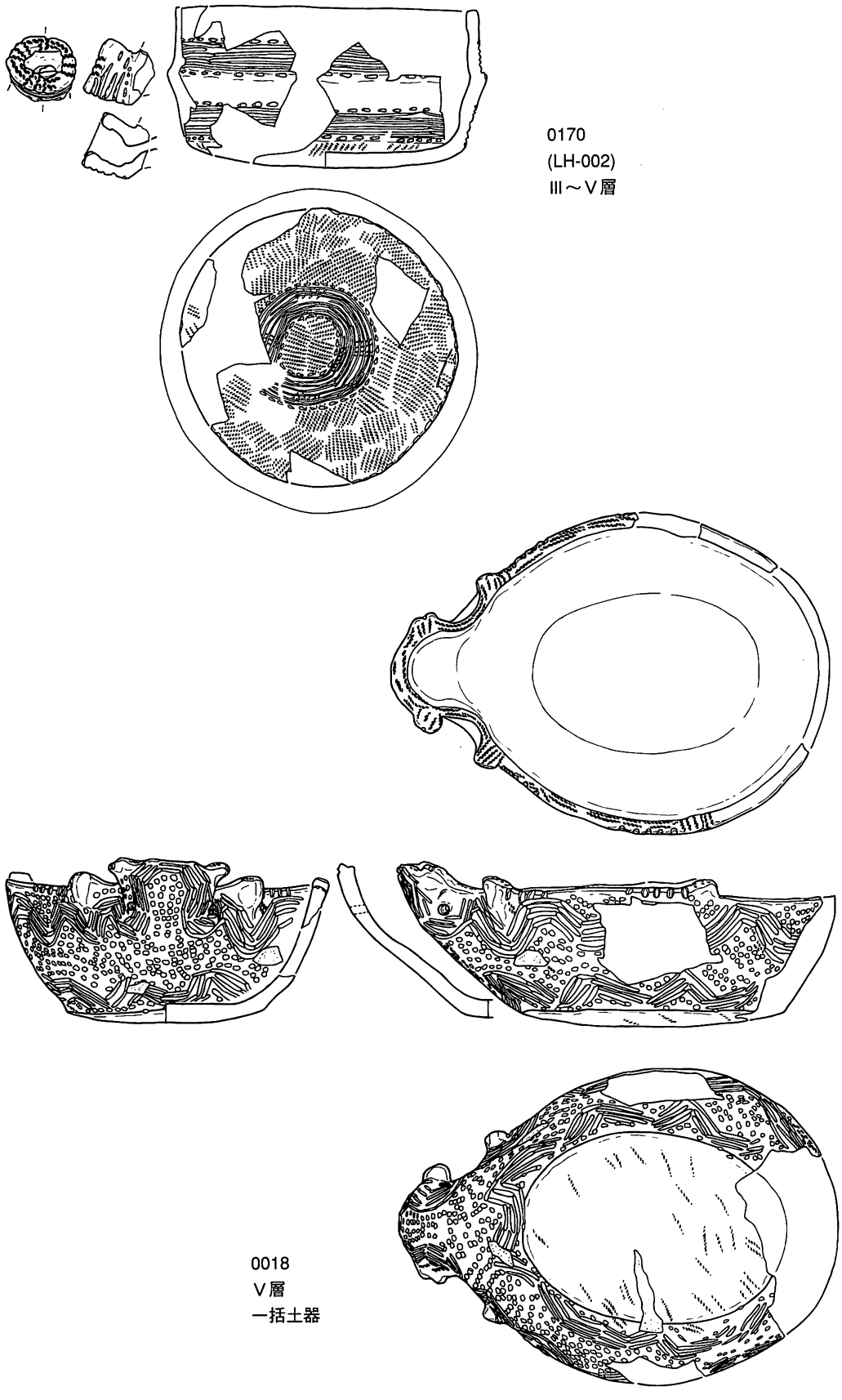
5061
Ⅴ層
一括土器
図有り

0　10cm

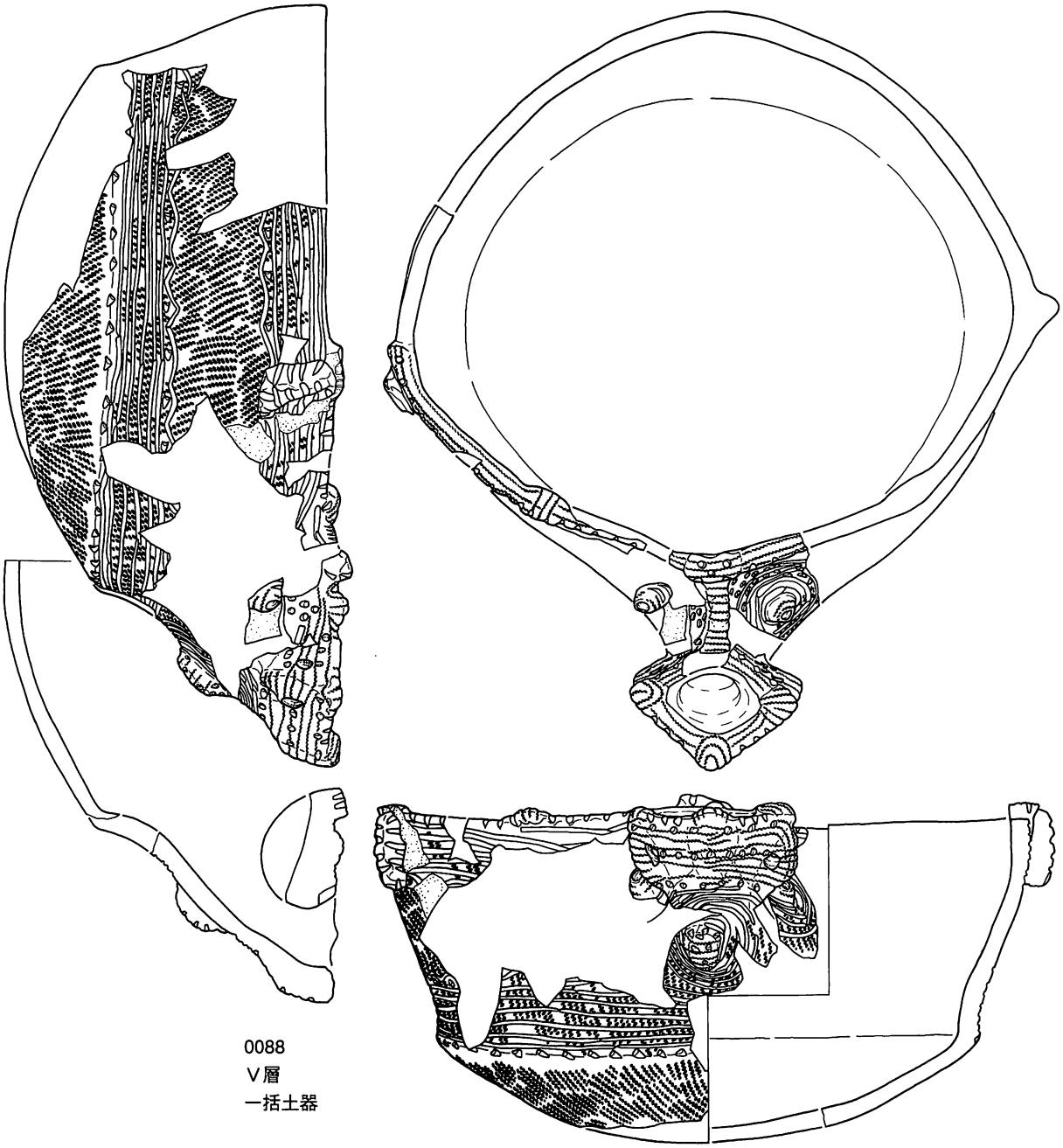
図Ⅵ-1-80　Ⅴ群ｃ類土器（31）



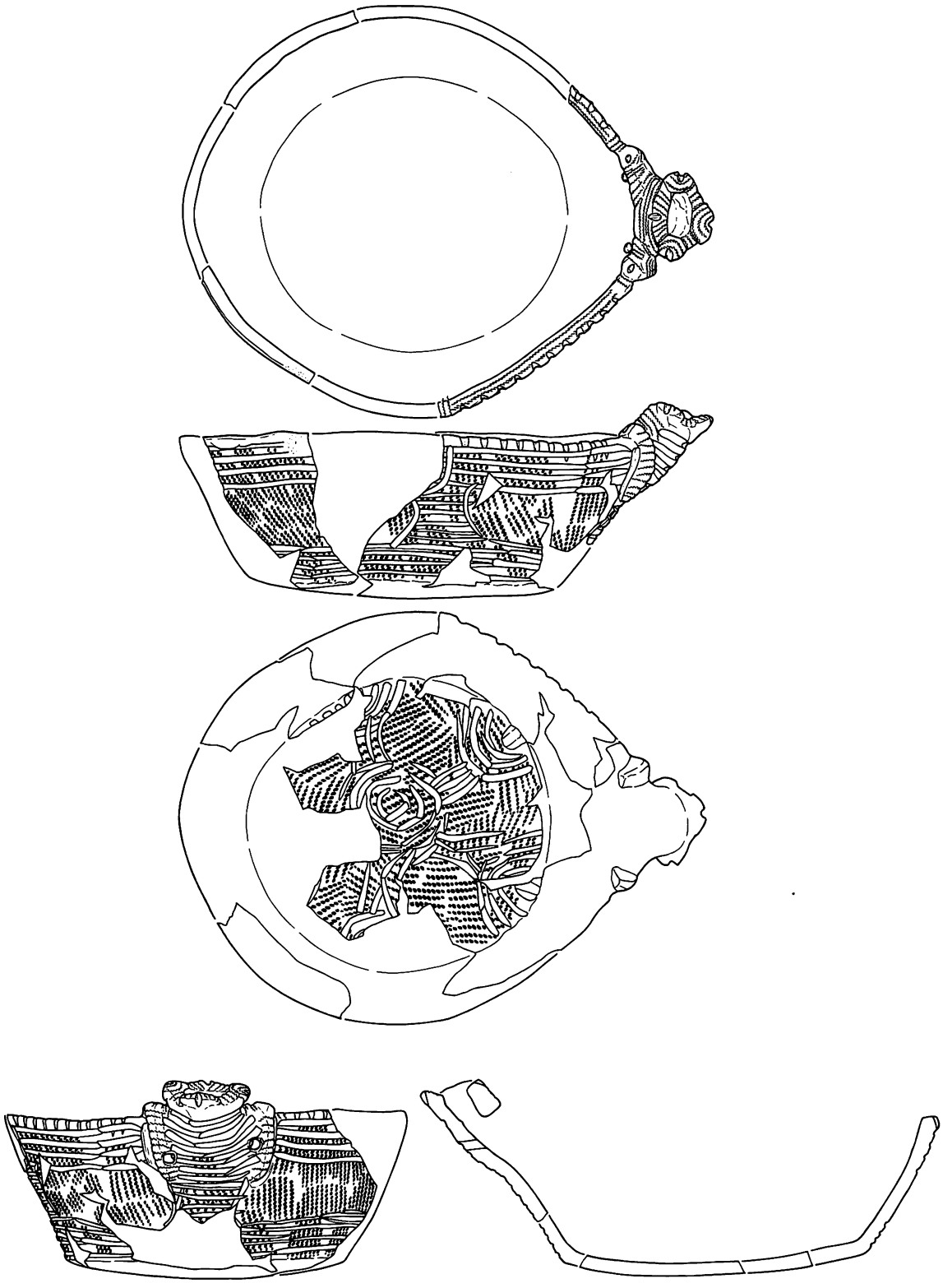
図Ⅵ-1-87　V群c類土器（32）



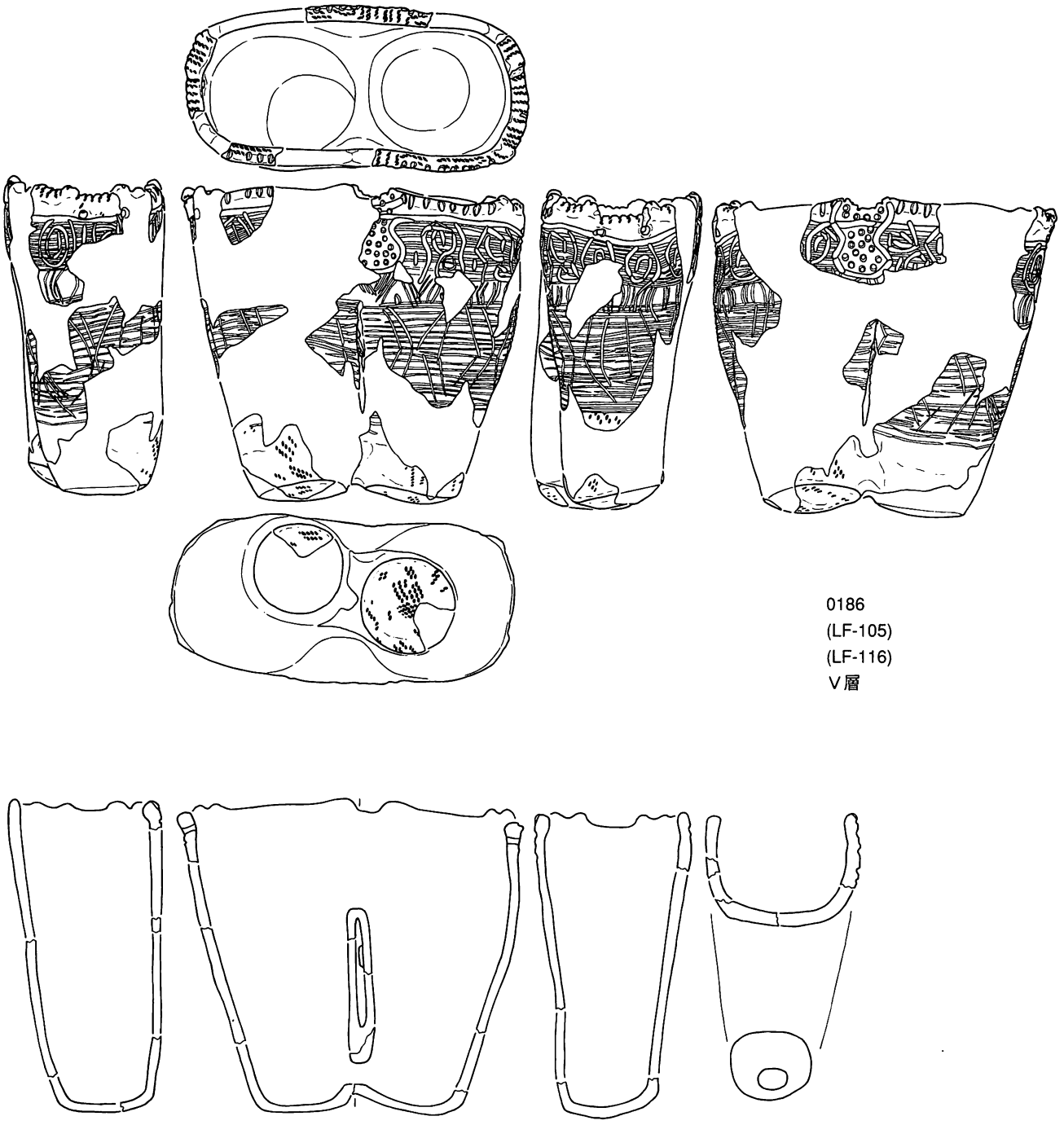
図Ⅵ-1-82　Ⅴ群ｃ類土器（33）



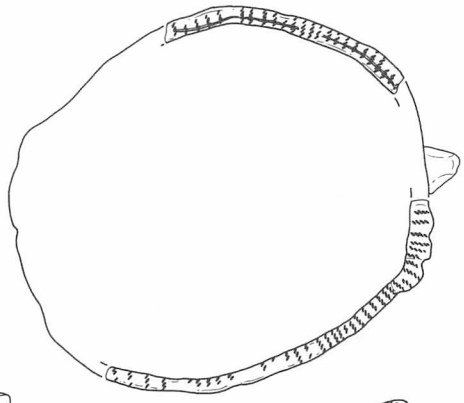
図Ⅵ-1-83　Ⅴ群ｃ類土器（34）



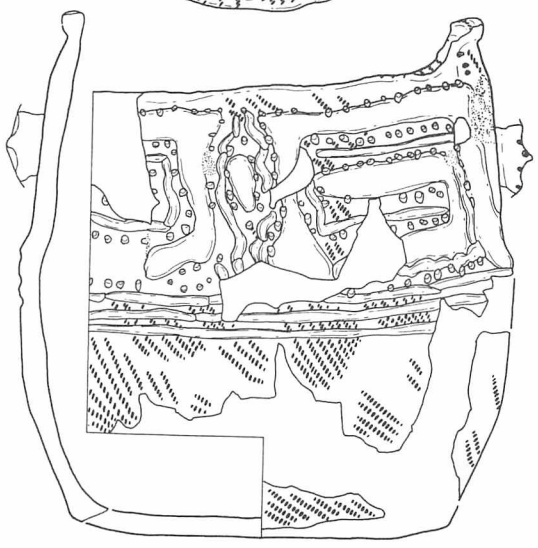
図Ⅵ-1-84　Ⅴ群ｃ類土器（35）

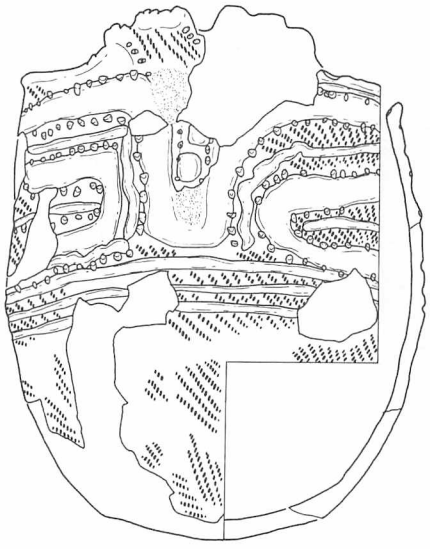


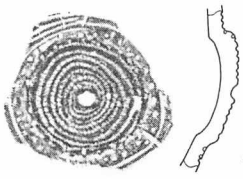
図Ⅵ-1-85　Ⅴ群ｃ類土器（36）



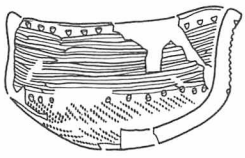
0098
Ⅴ層
一括土器







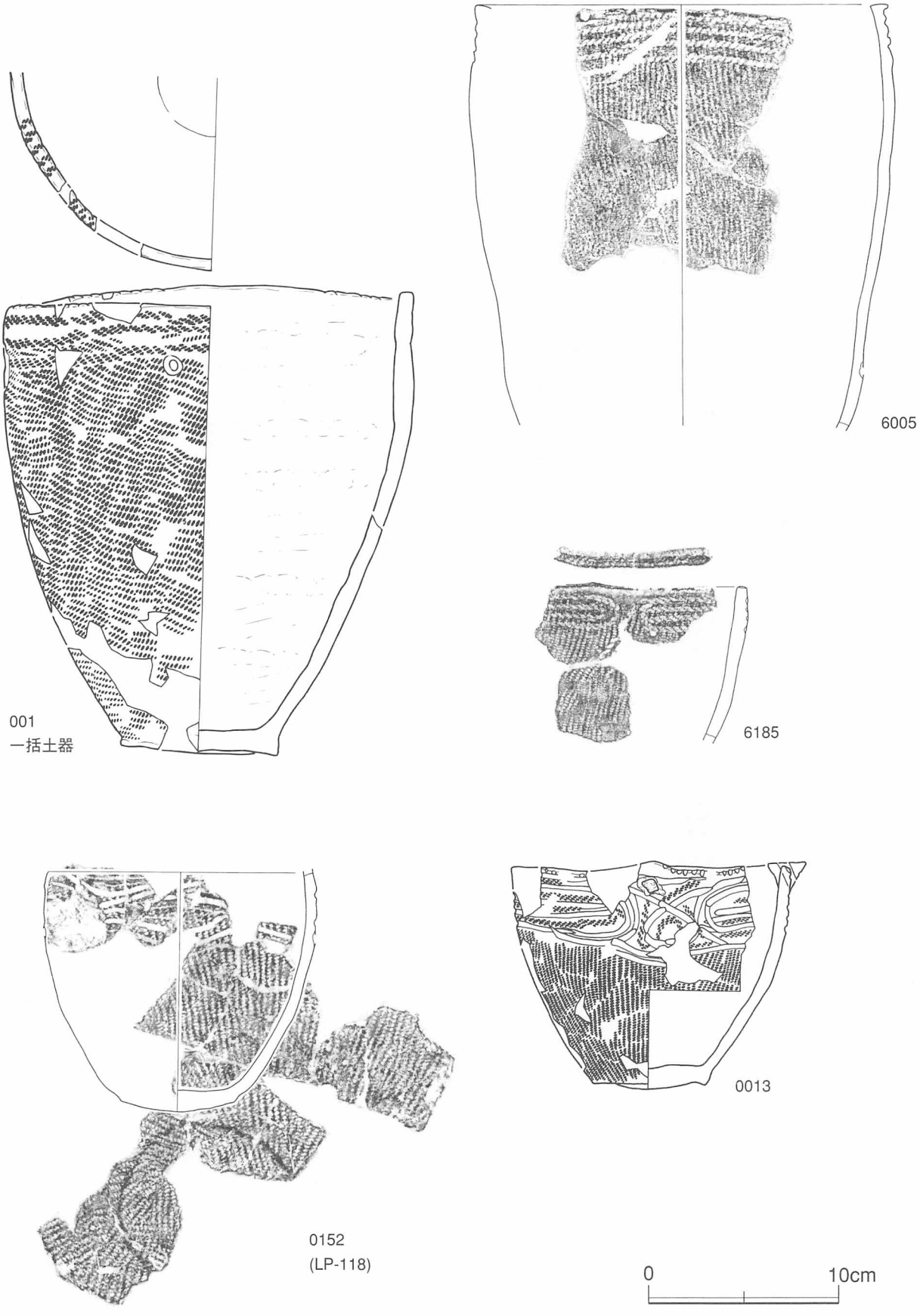
5656
(LF-200)
Ⅴ層



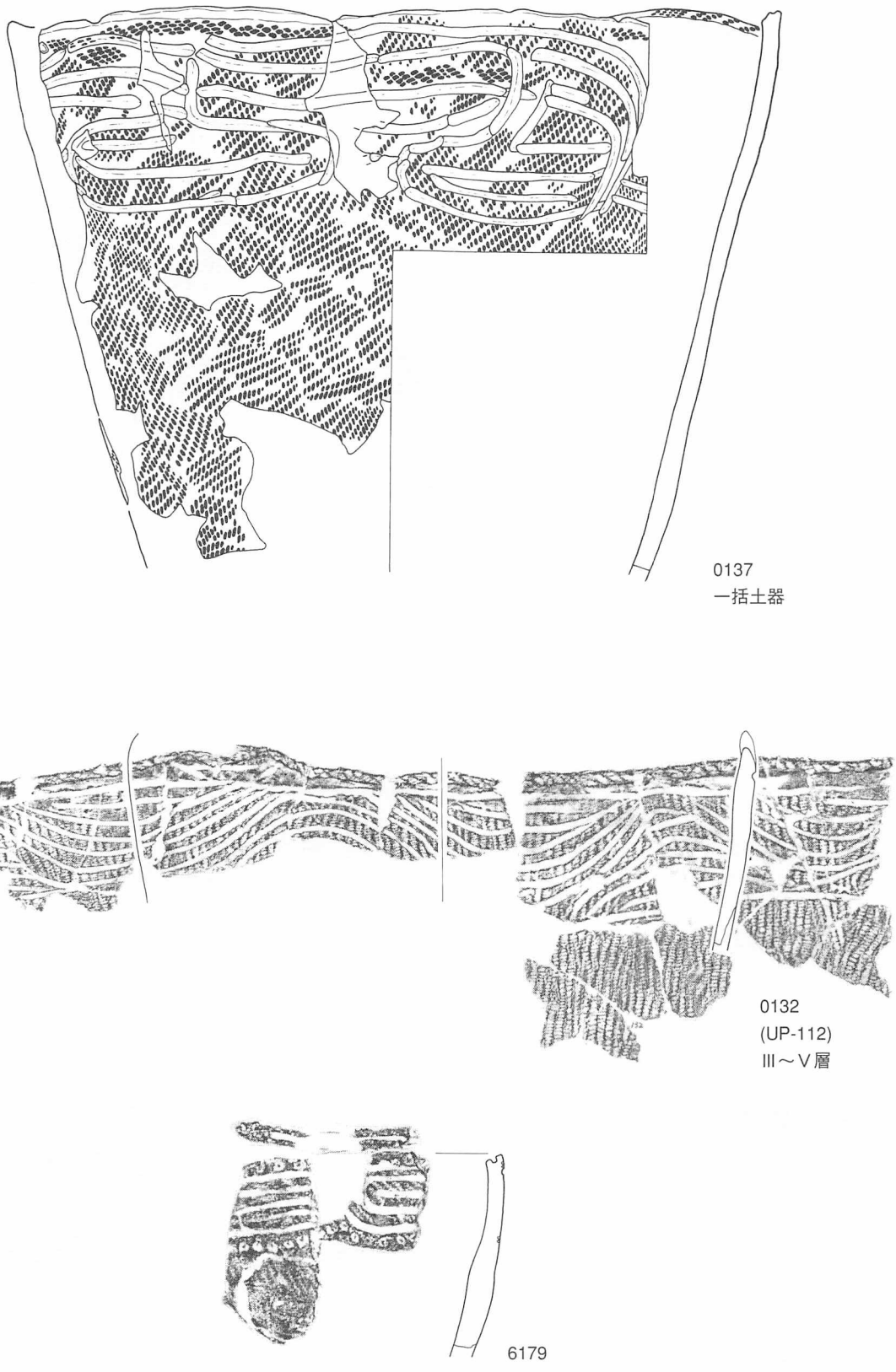
0176
(LF-121)
Ⅴ層

0　10cm

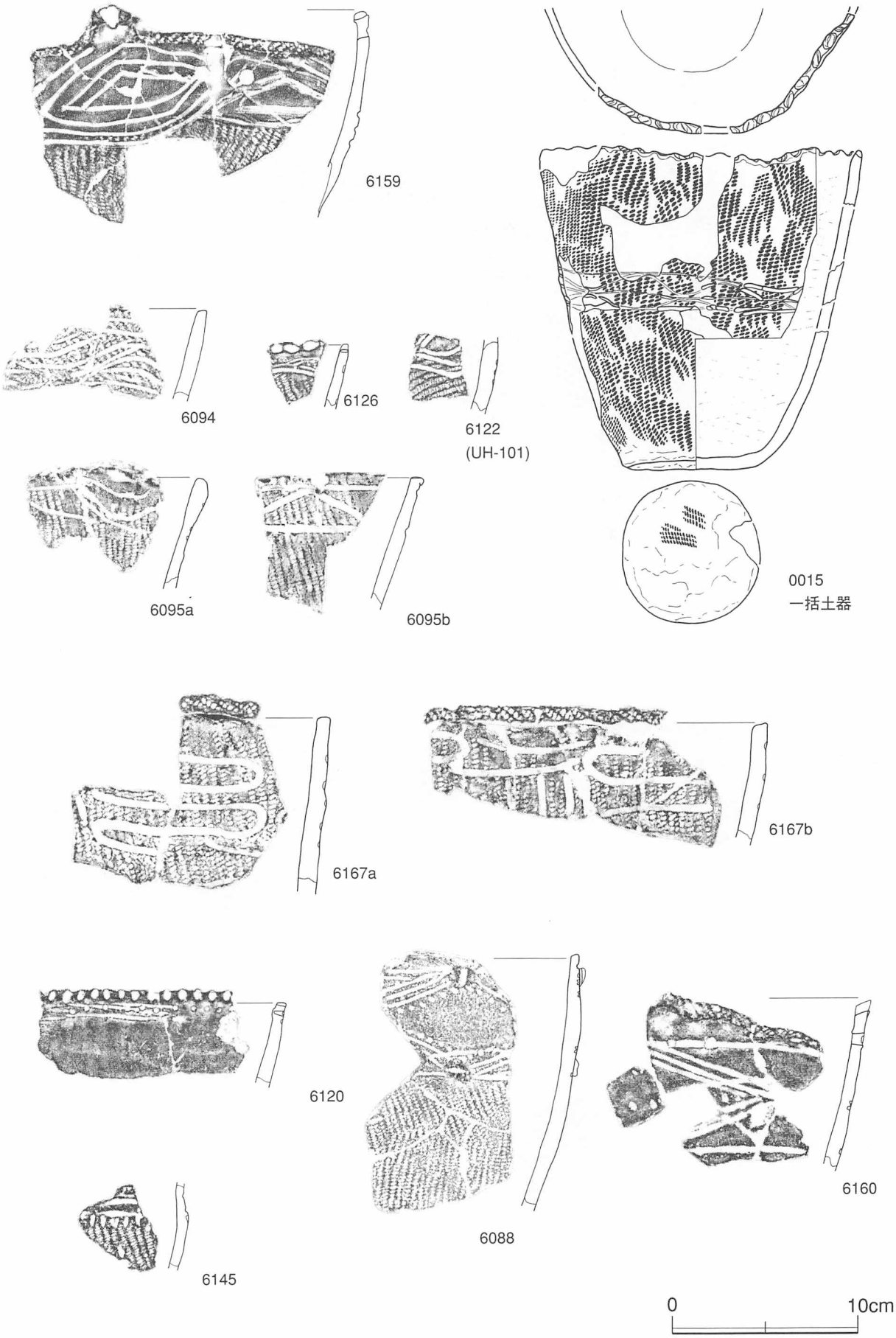
図Ⅵ-1-86　Ⅴ群ｃ類土器（37）



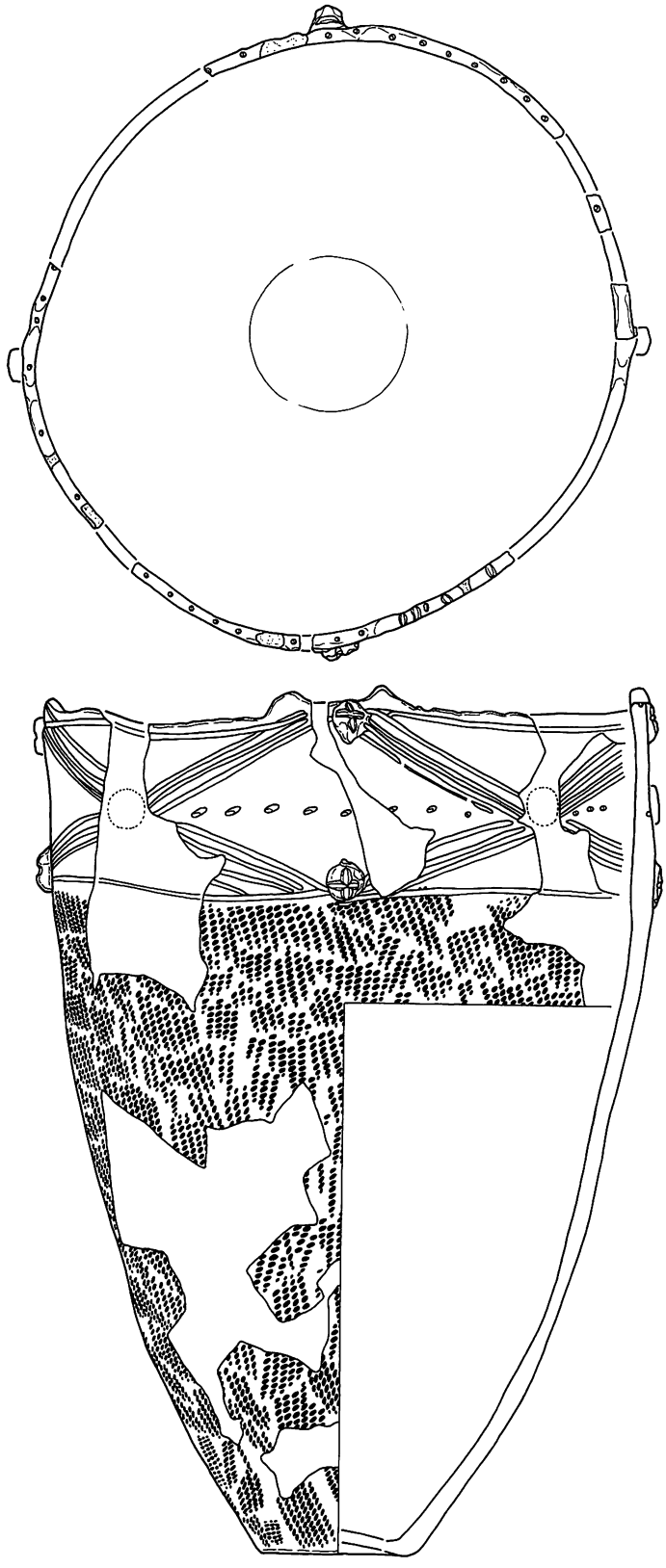
図Ⅵ-1-87　Ⅵ群深鉢型土器（1）



図Ⅵ-1-88　Ⅵ群土器（2）


6159
6094
6126
6122
(UH-101)
6095a
6095b
0015
一括土器
6167a
6167b
6120
6088
6160
6145
0
10cm

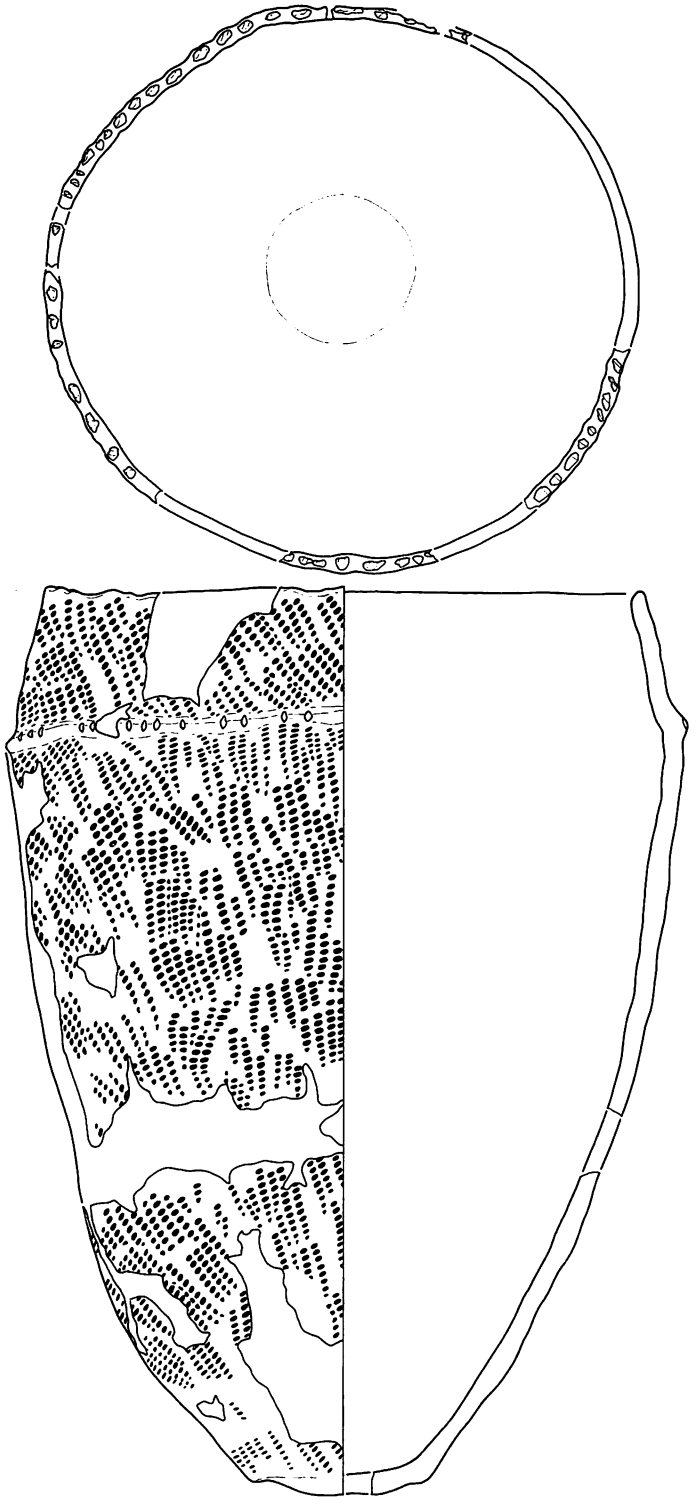
図Ⅵ-1-89　Ⅵ群土器（3）



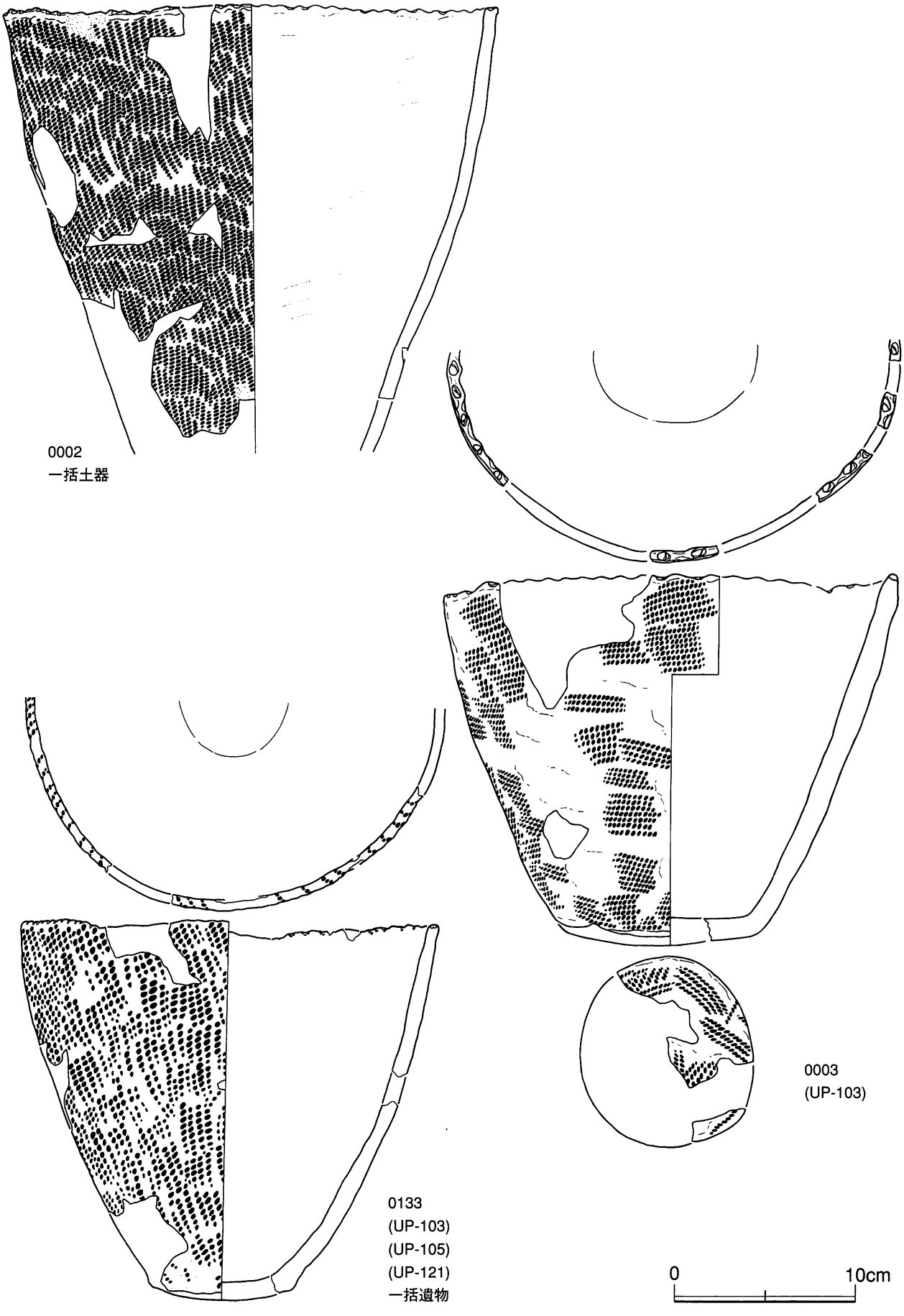
0074
一括土器

0　10cm

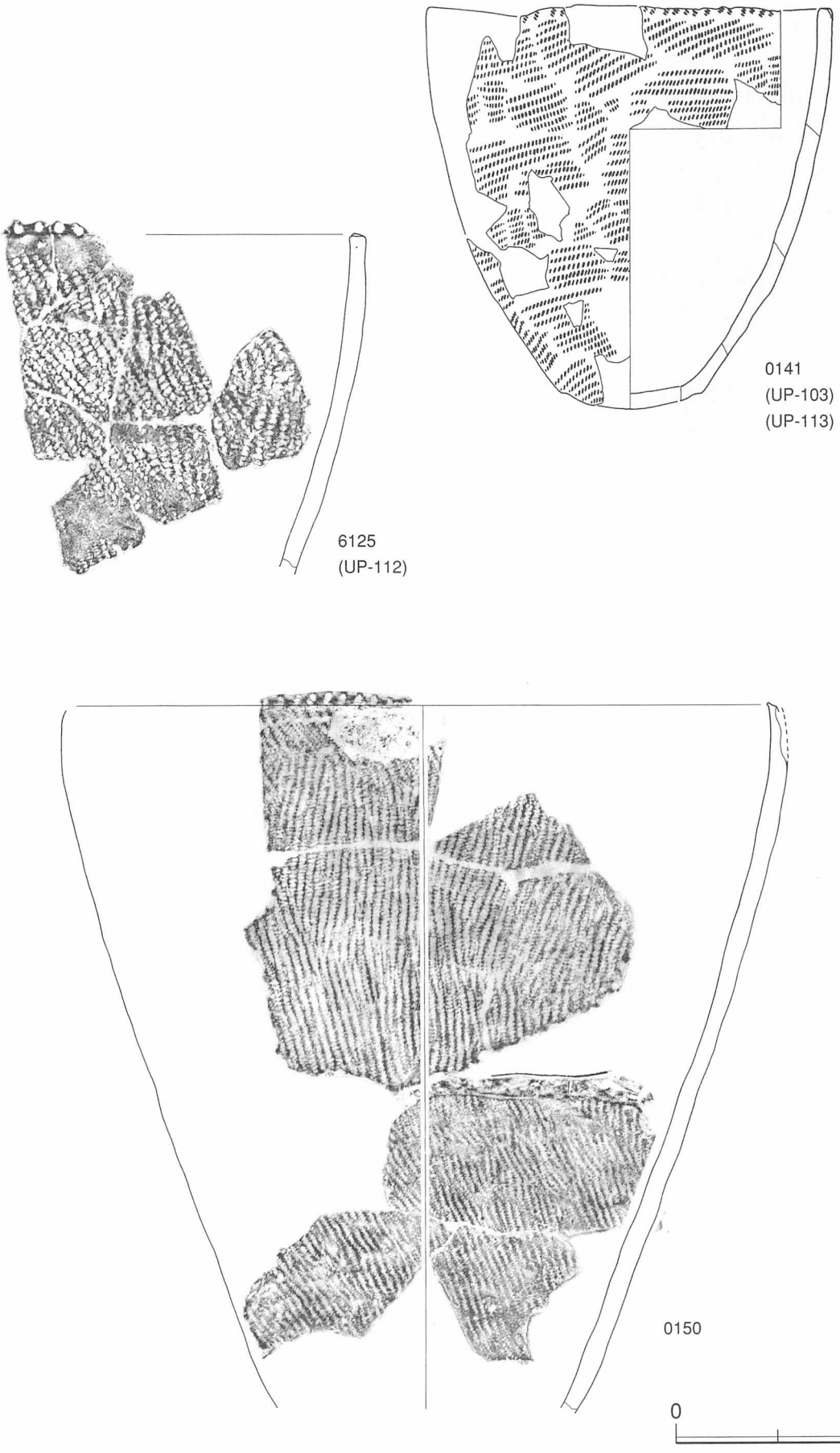
図Ⅵ-1-90　Ⅵ群土器（4）



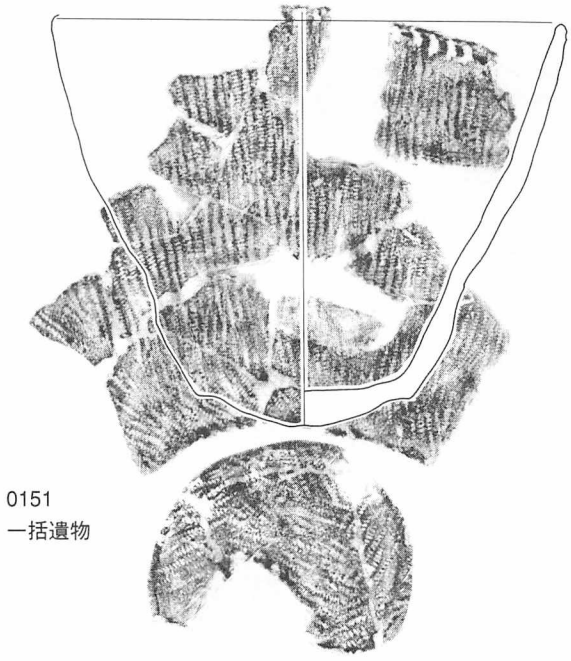
図Ⅵ-1-91　Ⅵ群土器（5）



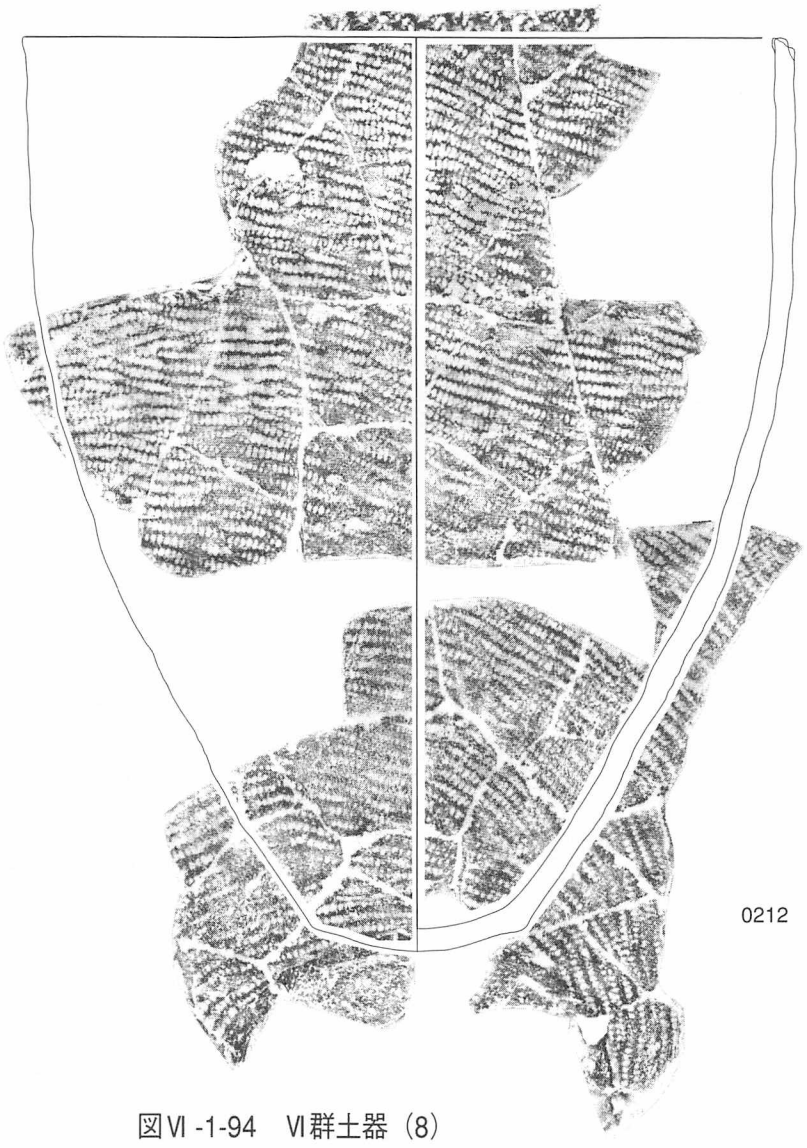
図Ⅵ-1-92　Ⅵ群土器（6）



図Ⅵ-1-93　Ⅵ群土器（7）



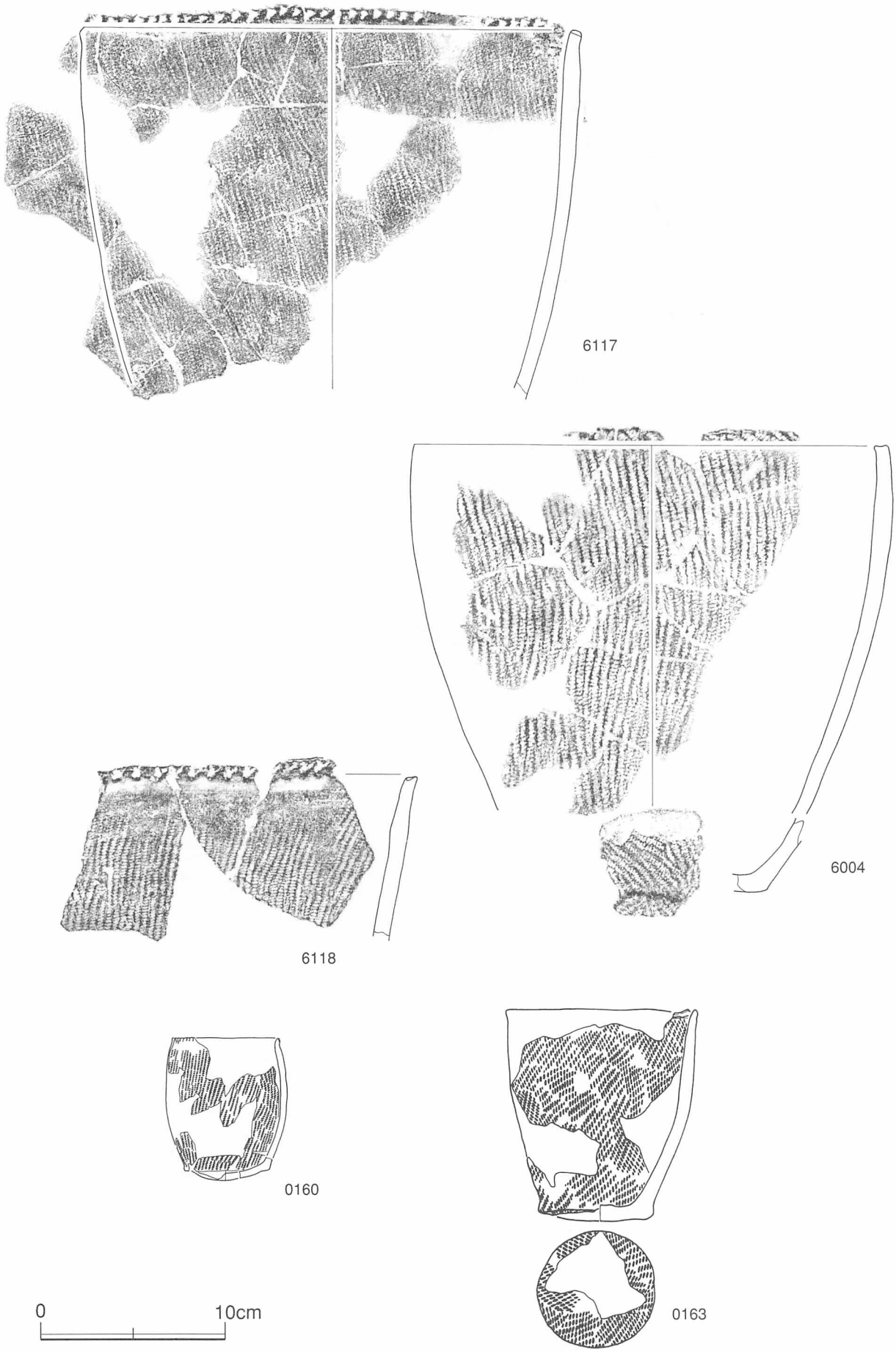
0151
一括遺物



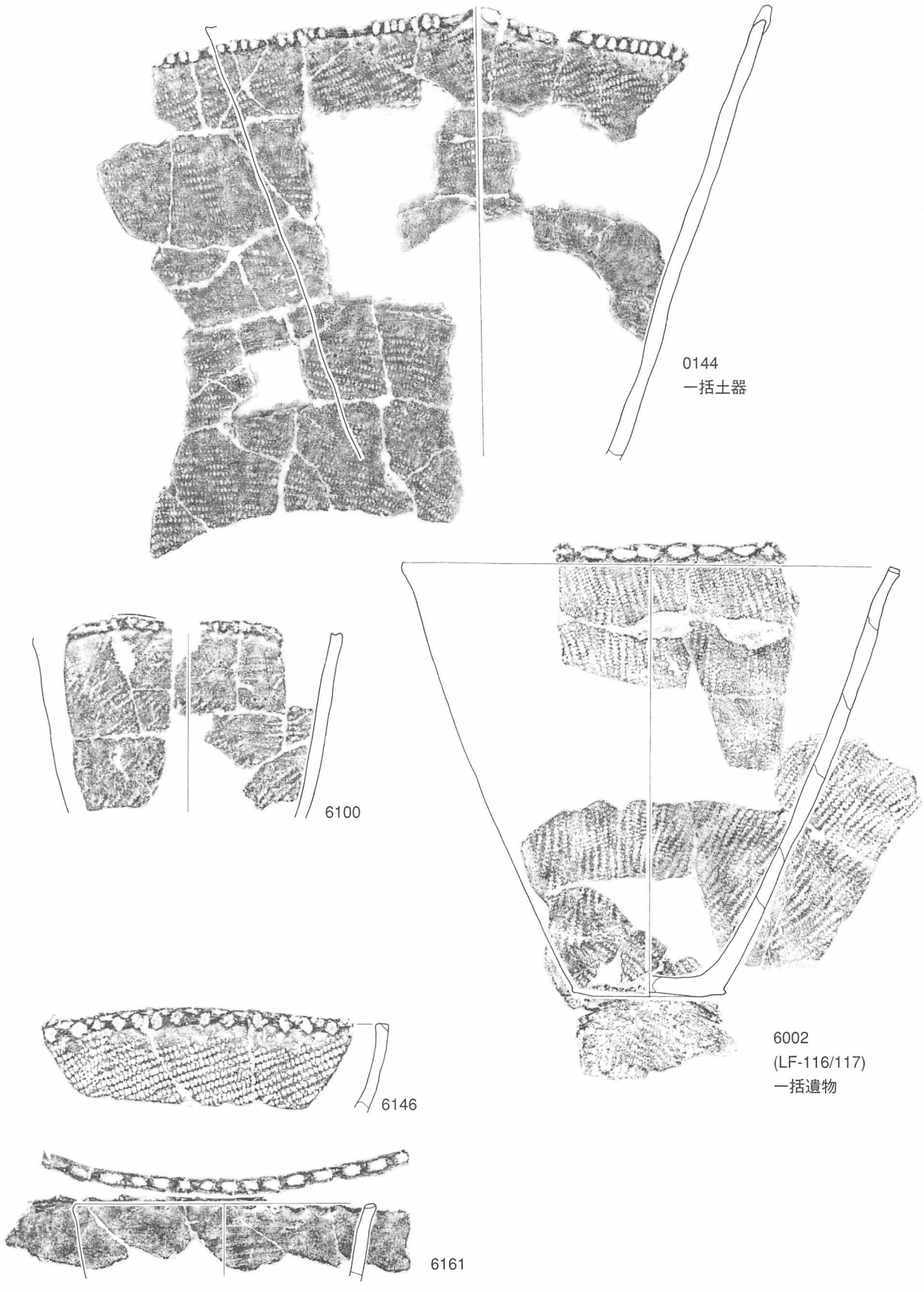
0212

0　10cm

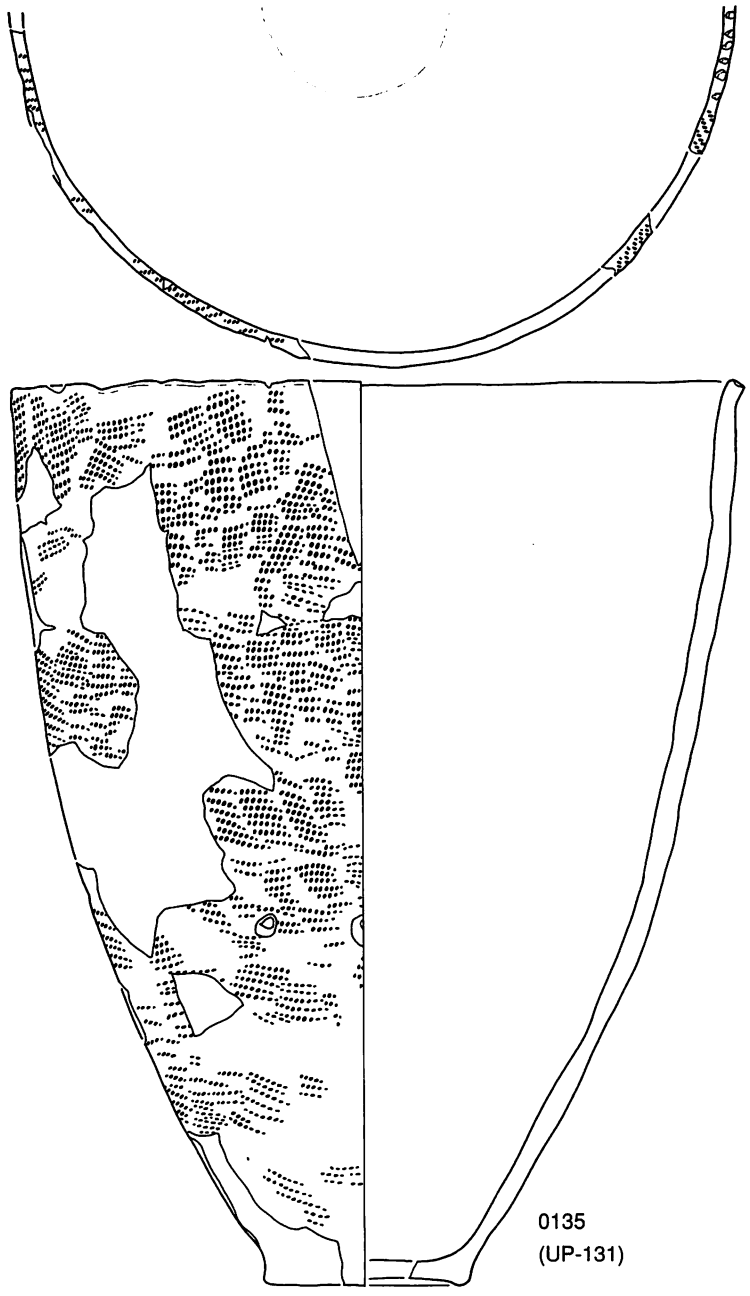
図Ⅵ-1-94　Ⅵ群土器（8）



図Ⅵ-1-95　Ⅵ群土器（9）

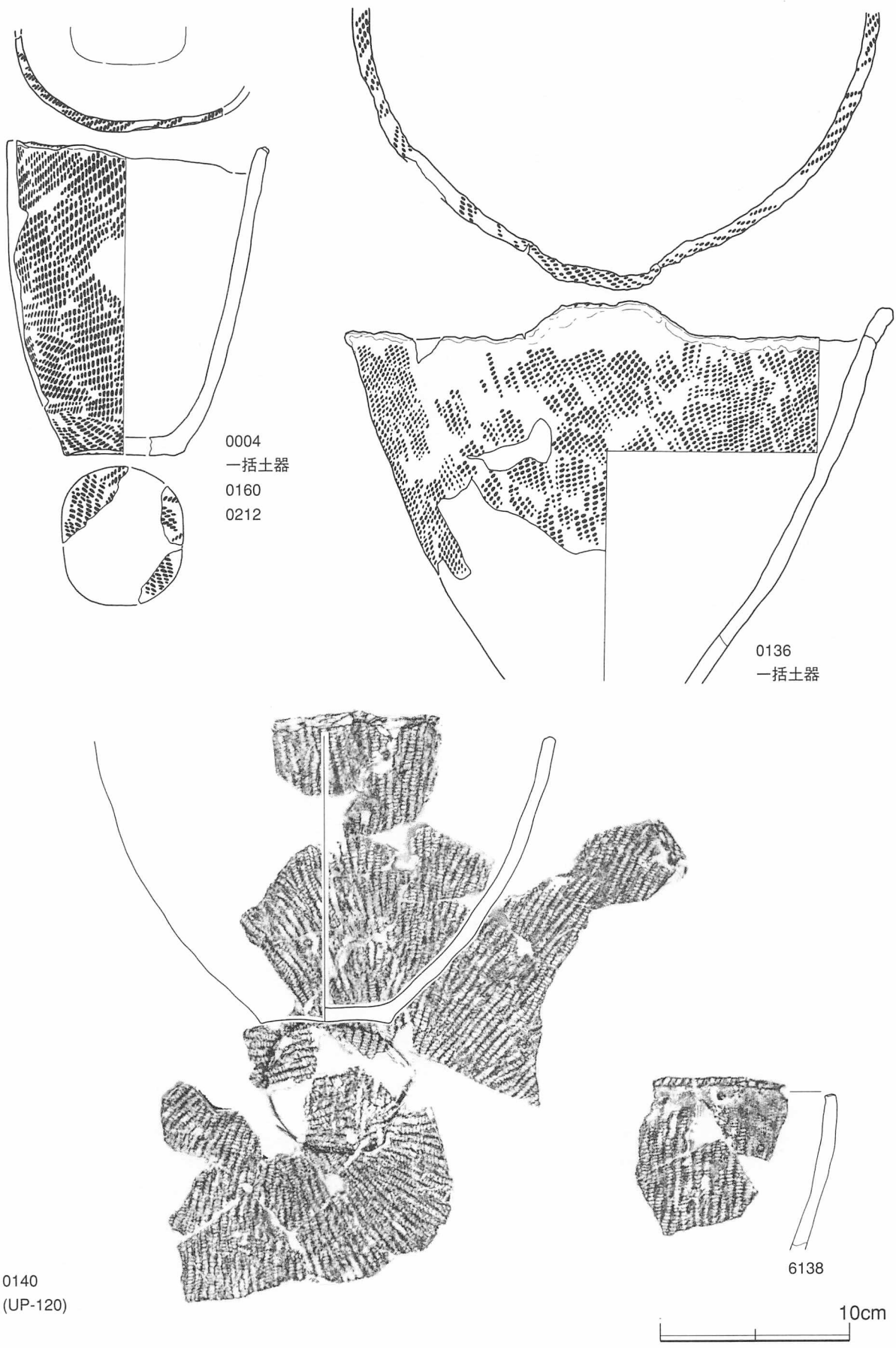


図Ⅵ-1-96　Ⅵ群土器（10）

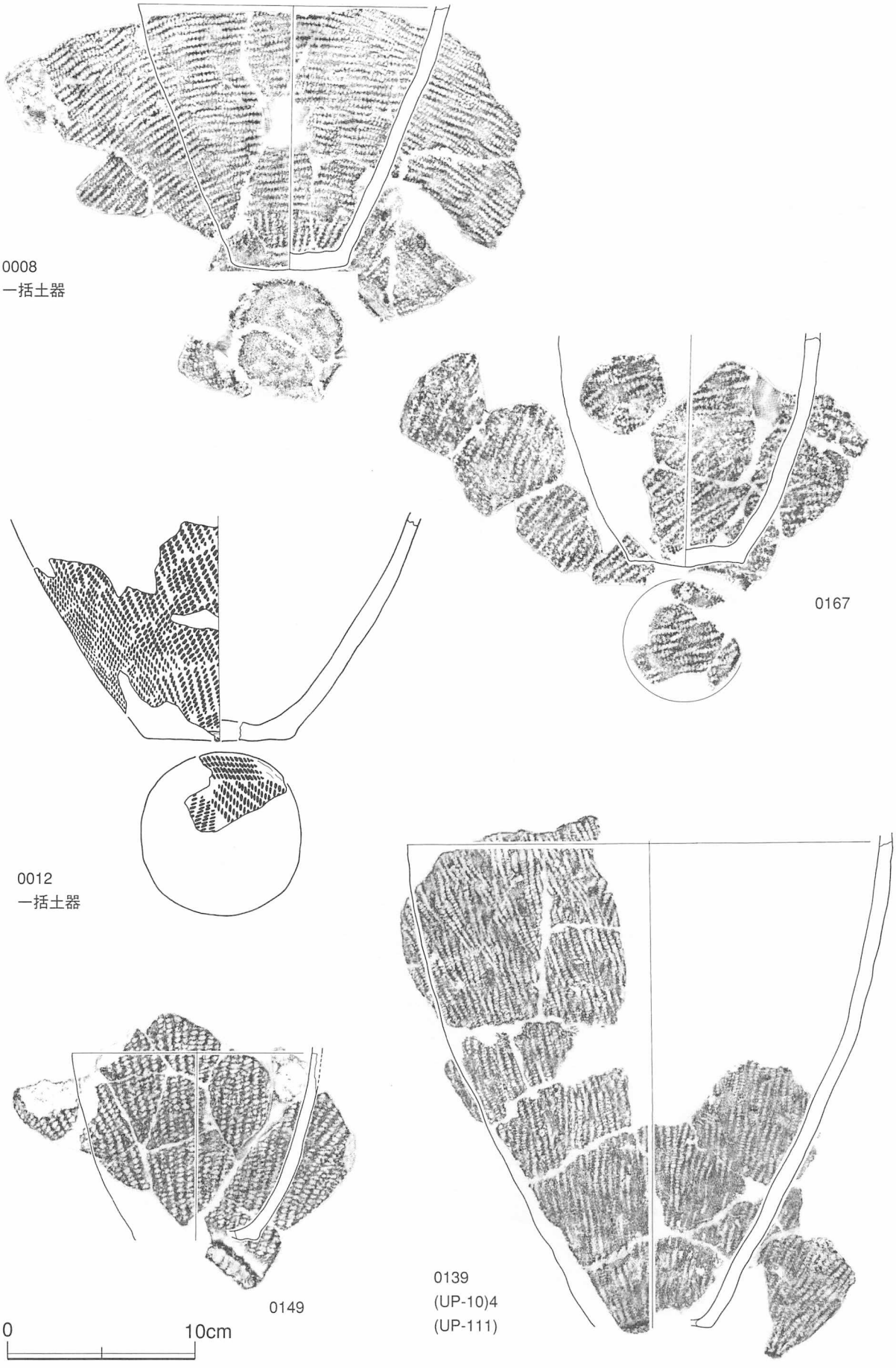


0　10cm

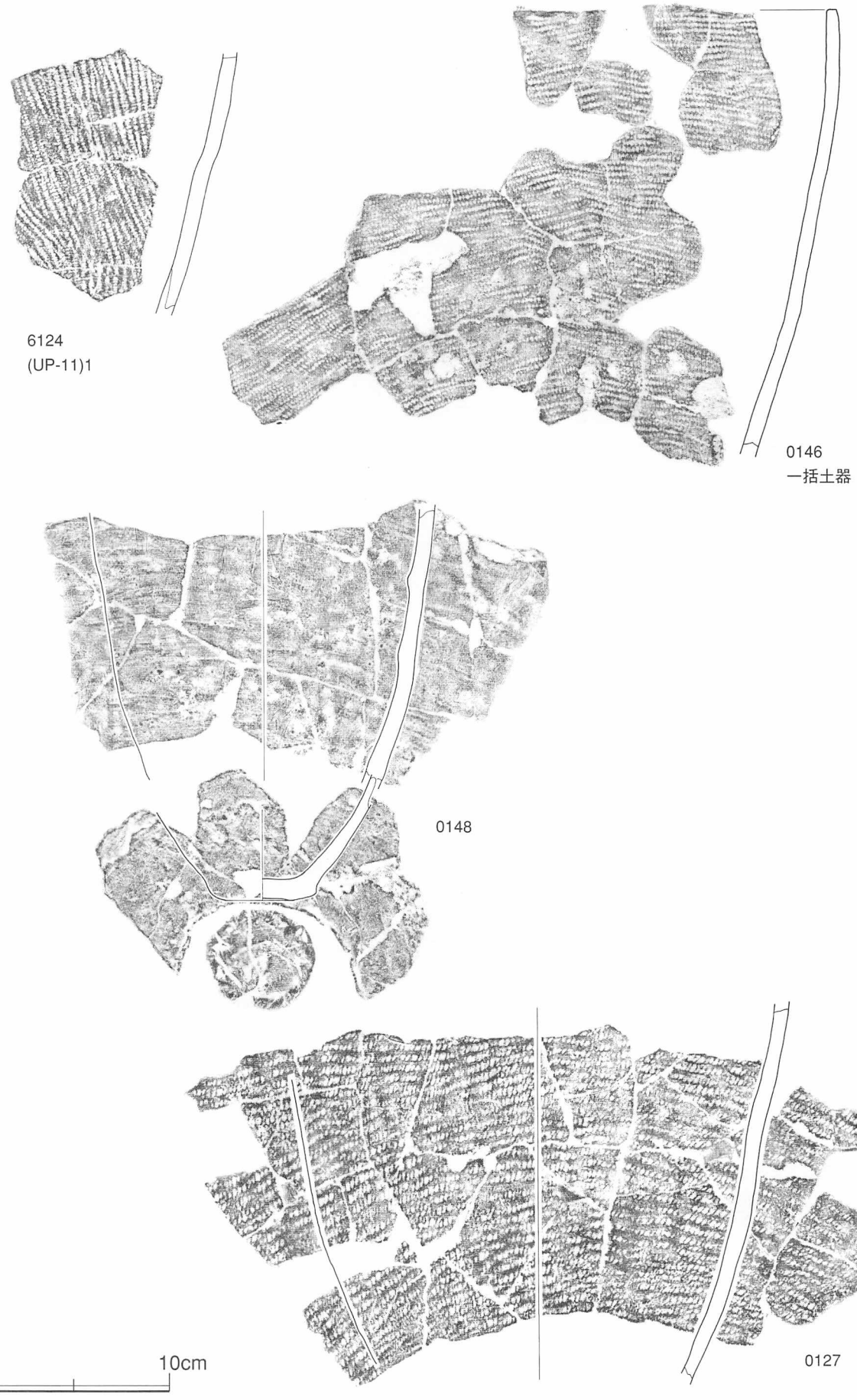
図Ⅵ-1-97　Ⅵ群土器（11）



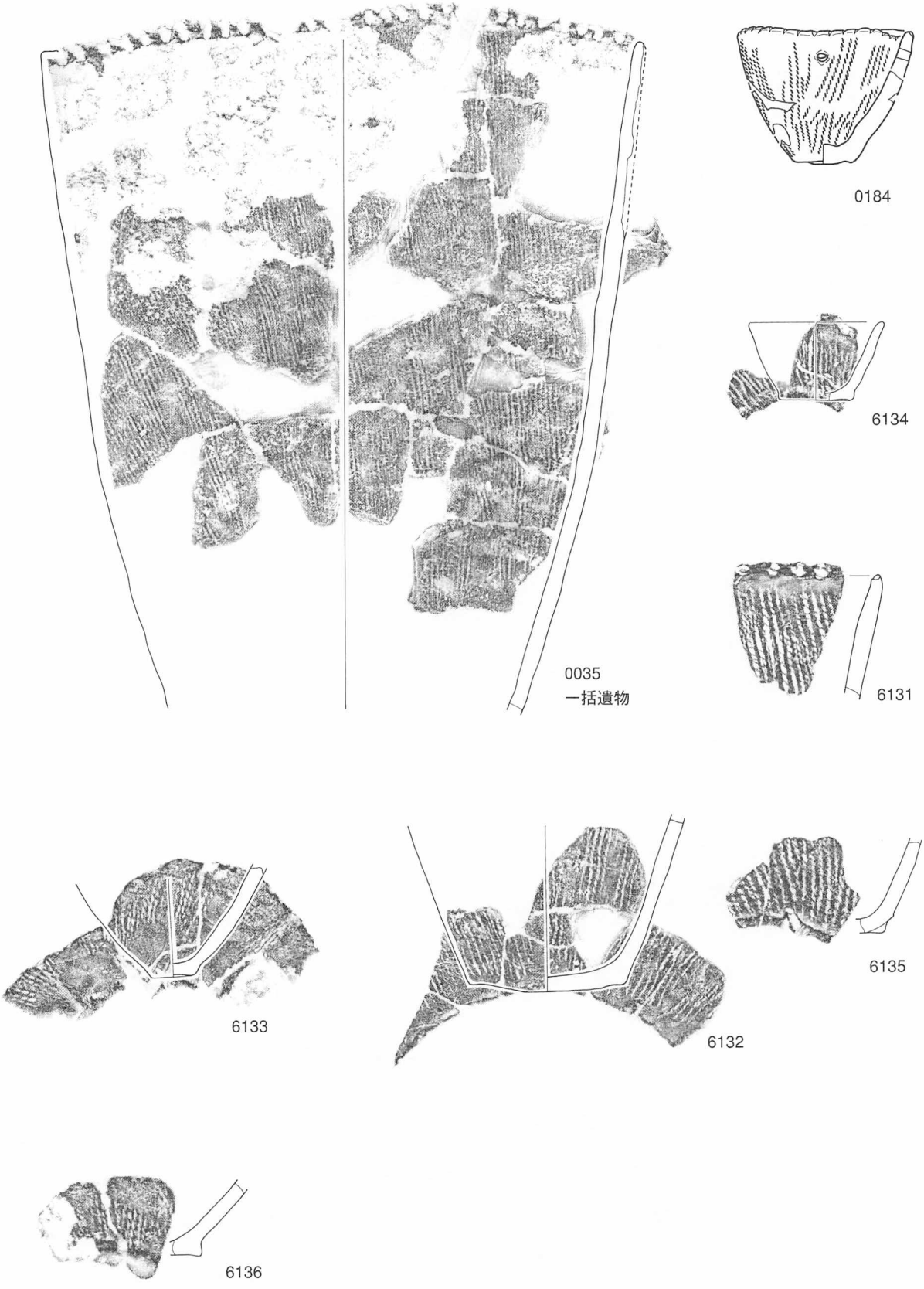
図Ⅵ-1-98　Ⅵ群土器（12）



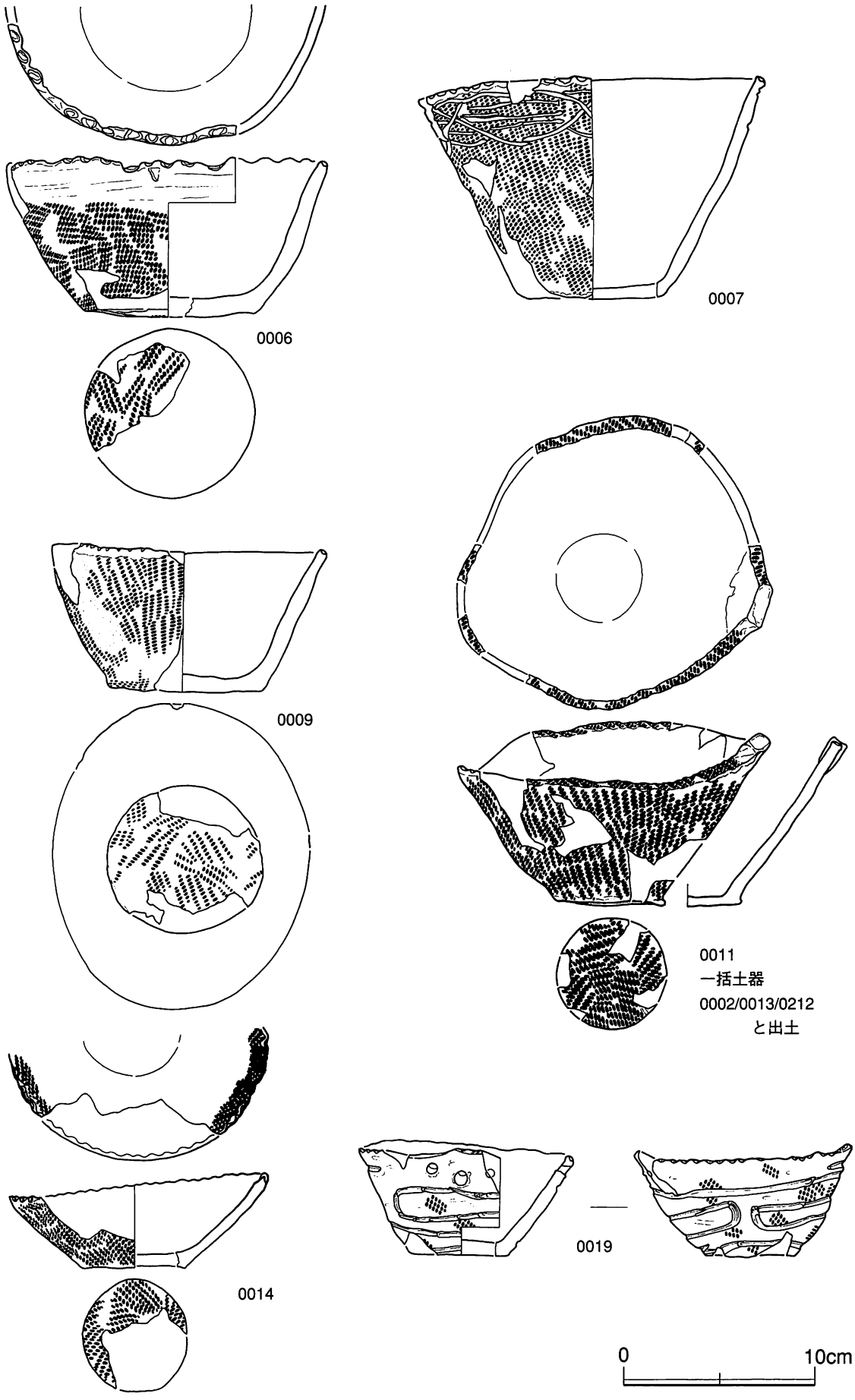
図Ⅵ-1-99　Ⅵ群土器（13）



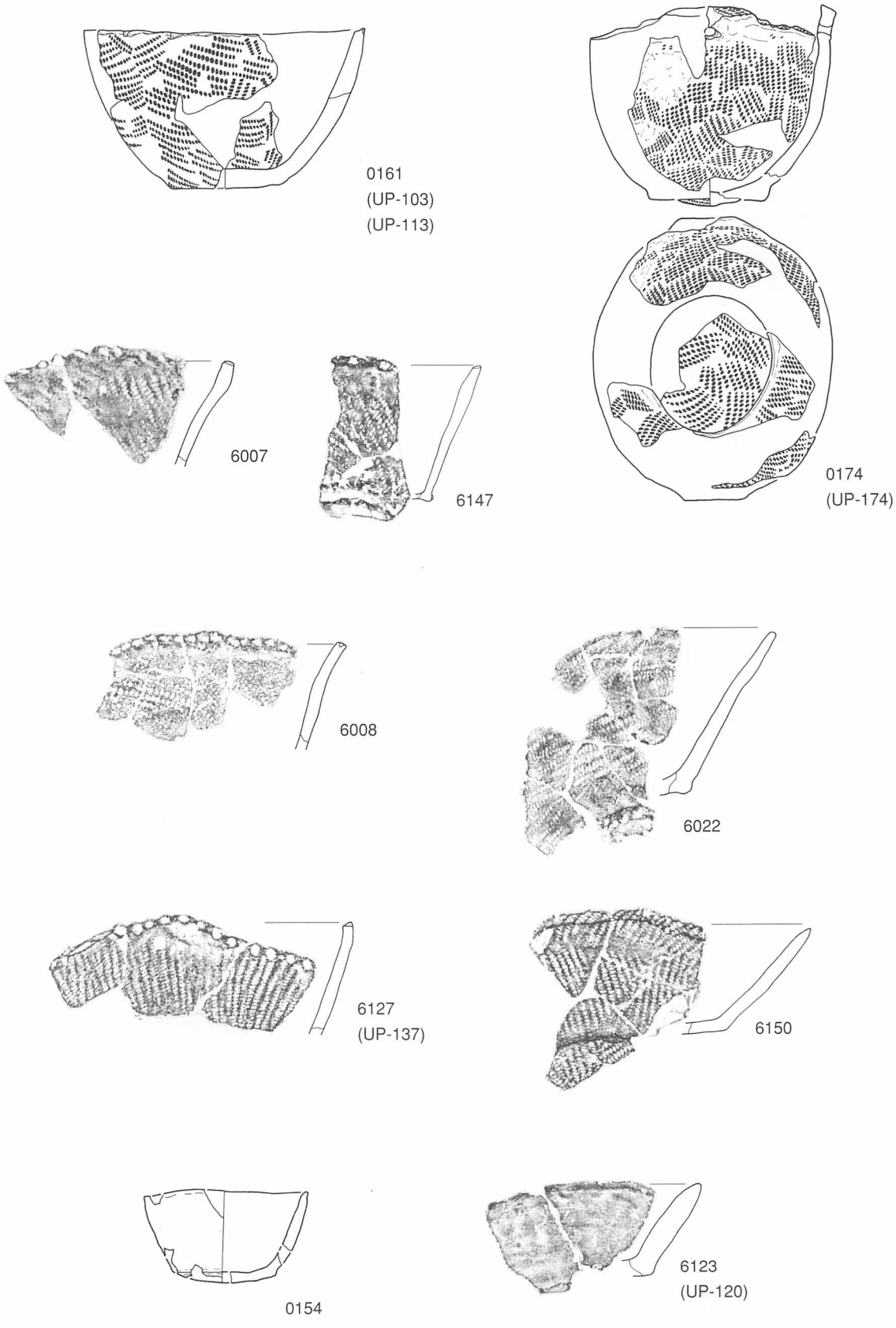
図Ⅵ-1-100　Ⅵ群土器（14）



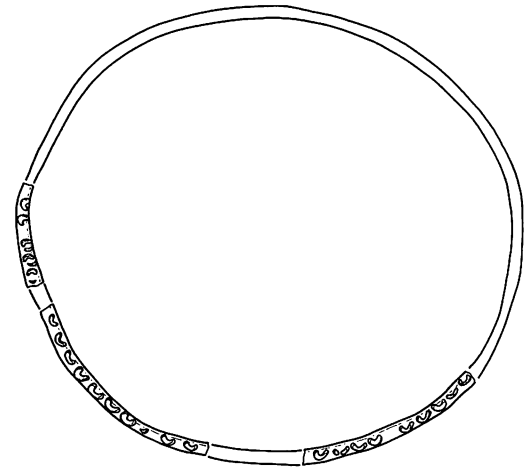
図Ⅵ-1-101　Ⅵ群土器（15）

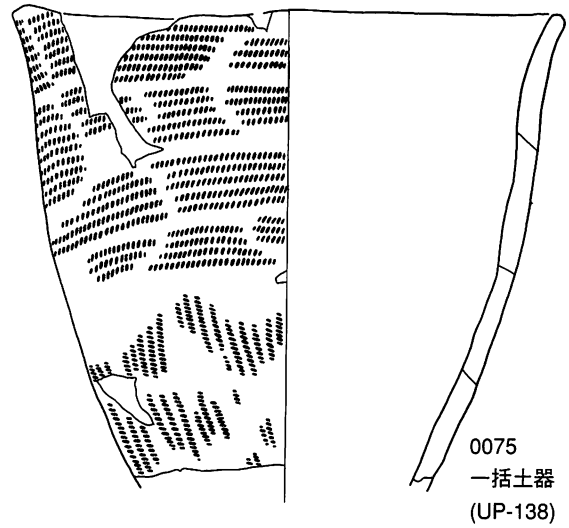


図Ⅵ-1-102　Ⅵ群土器（16）

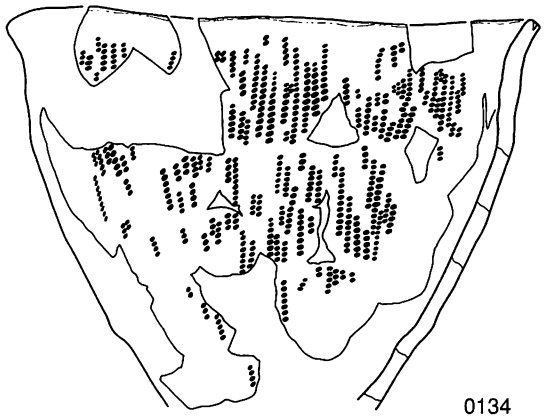


図Ⅵ-1-103　Ⅵ群土器（17）





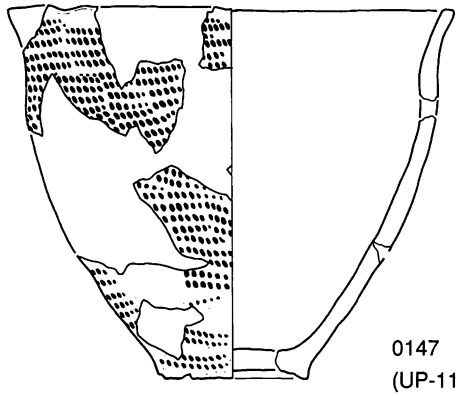
0075
一括土器
(UP-138)



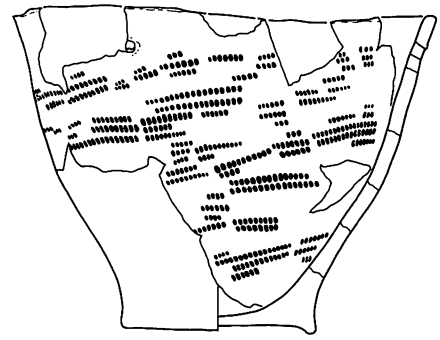
0134
(UP-138)
一括土器



0142



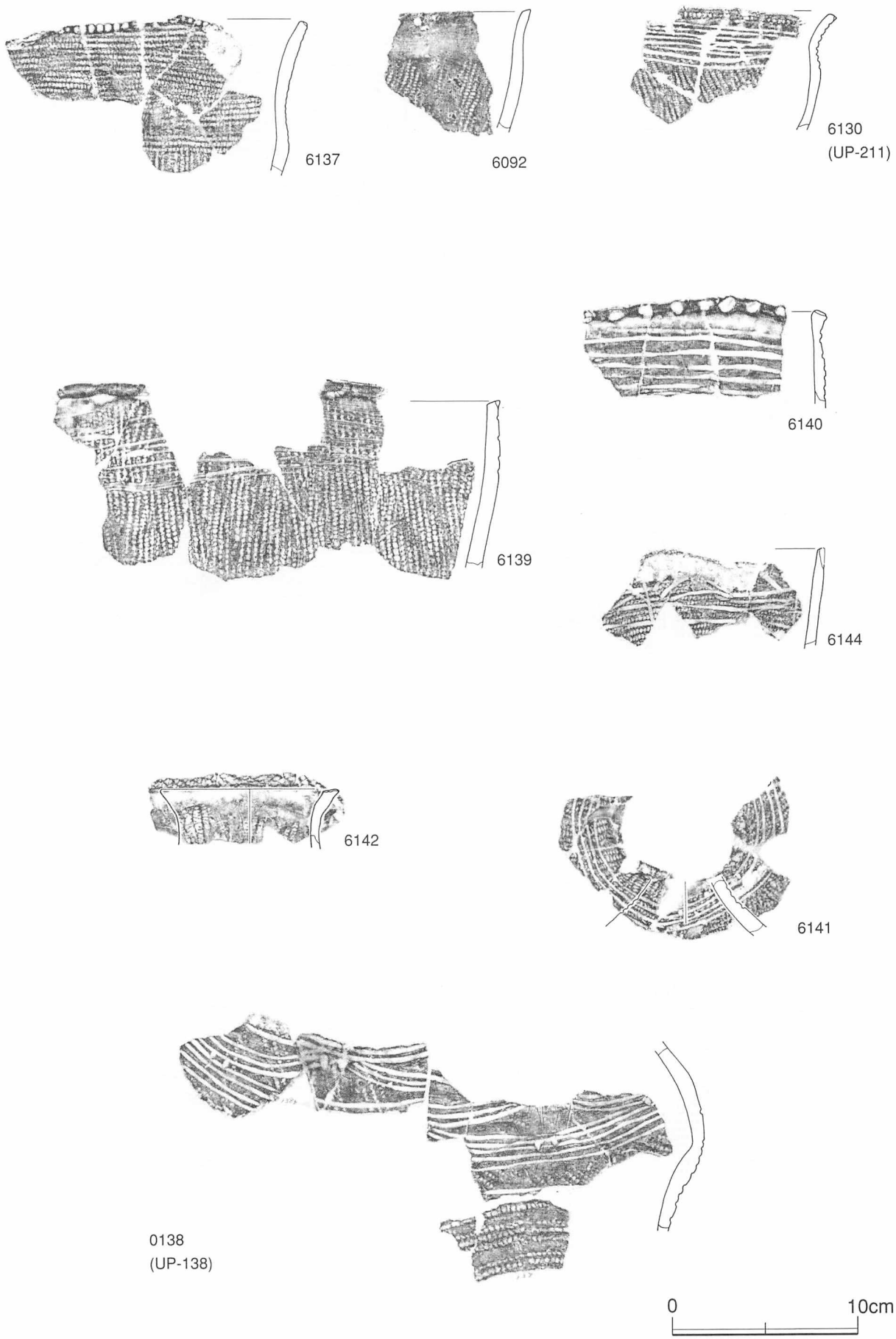
0147
(UP-116)
一括土器



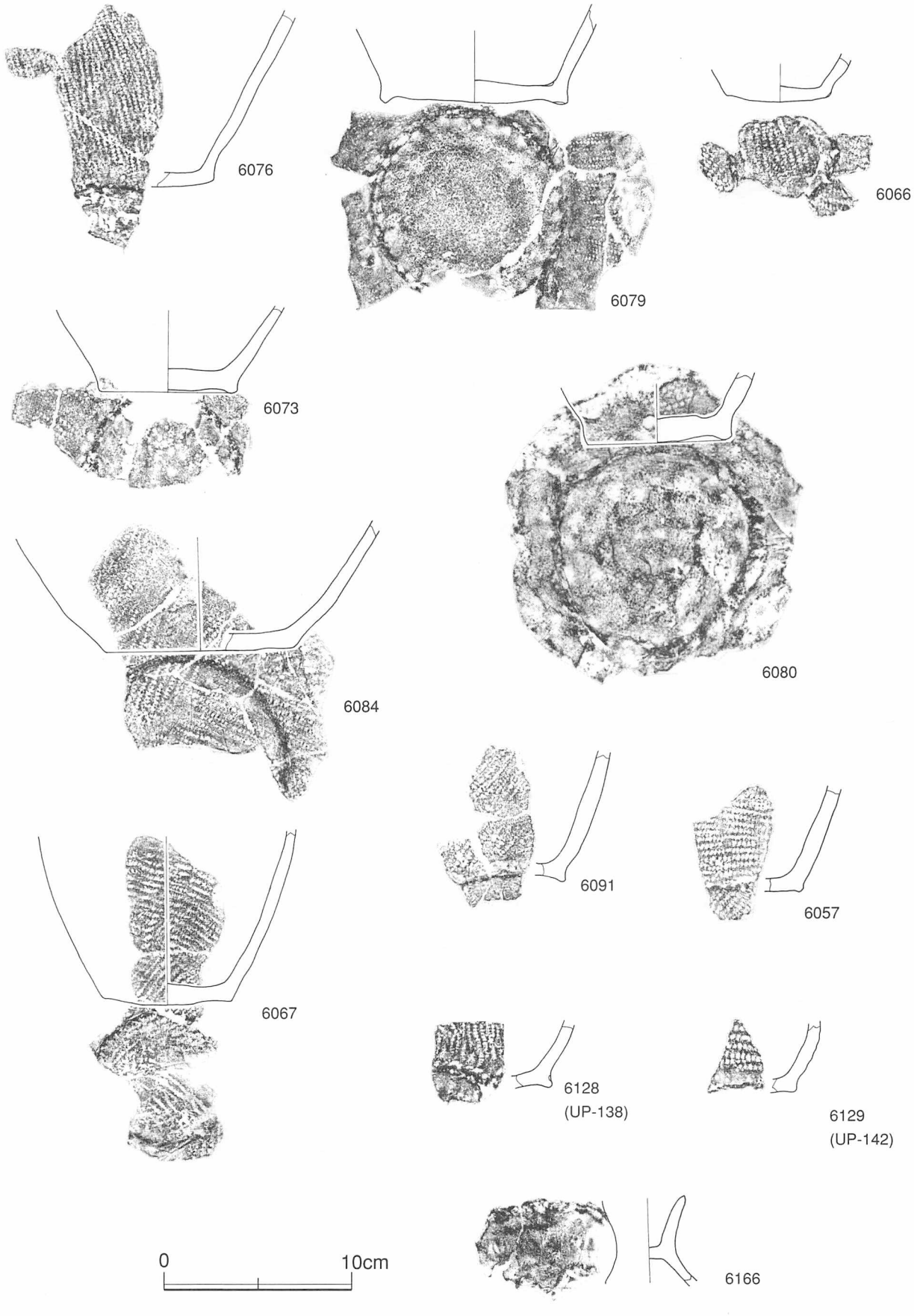
0159

0　10cm

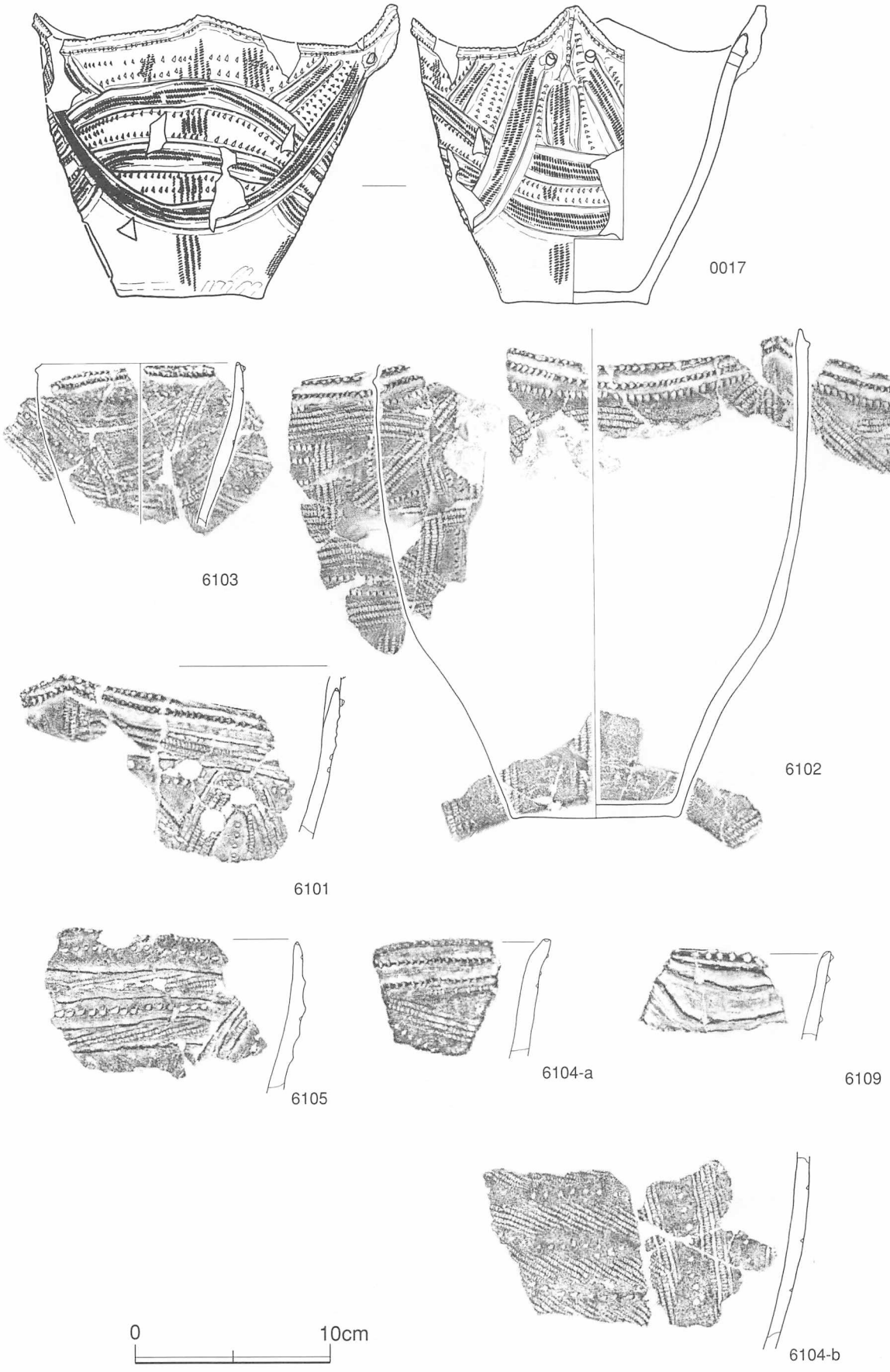
図Ⅵ-1-104　Ⅵ群土器（18）



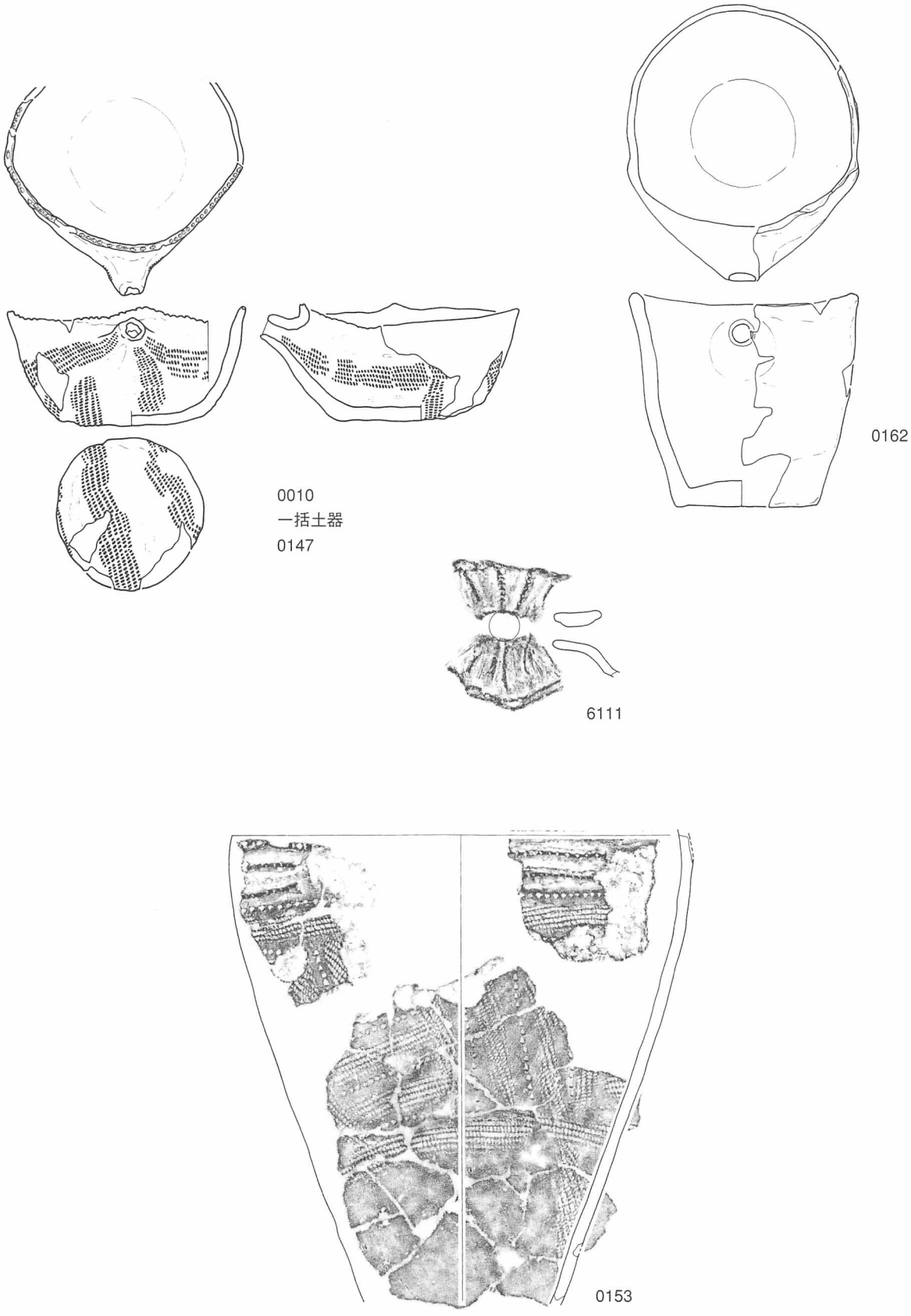
図Ⅵ-1-105　Ⅵ群深土器（19）



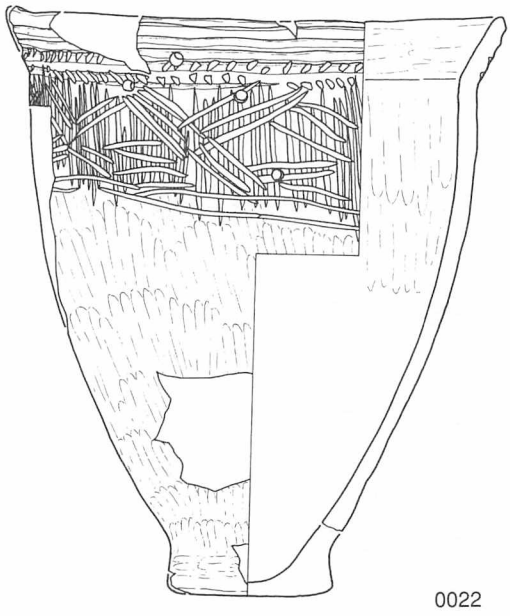
図Ⅵ-1-106　Ⅵ群土器（20）

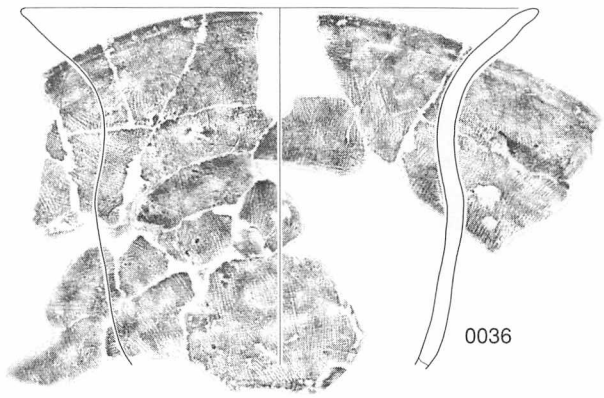


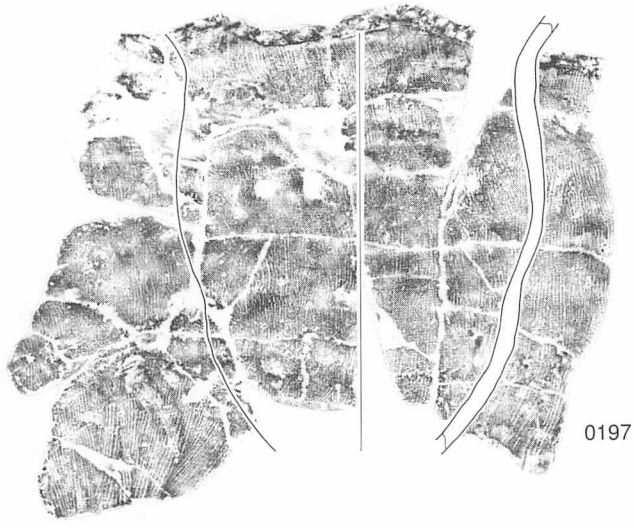
図Ⅵ-1-107　Ⅵ群土器（21）



図Ⅵ-1-108　Ⅵ土器（22）







0　10cm

図Ⅵ-1-109　Ⅶ群土器

2．石器・石製品

（1）Ⅲ・Ⅳ層（図Ⅵ-2-1～3／図版-131～134）

石鏃（図Ⅵ-2-1-1～34／図版-131）

1～6は無茎凹基の三角形鏃。1～4は尖頭部側縁が外湾し、5、6は直線的である。7は基部が外湾した無茎の三角形鏃。8～11は無茎平基の三角形鏃。10は基部が長軸に対して斜交している。12～16は有茎平基の石鏃。14～16は長身細身のもの。17～34は有茎凸基の石鏃。本形態が点数的に卓越している。18、26、31、32は尖頭部側縁が内湾する。34は基部の長さに比して尖頭部長が寸詰まりのもの。また基部の幅が比較的大きい。

石材は9、14～16、23、33は頁岩製で、27は玄武岩製、その他は黒曜石製。

ポイント（図Ⅵ-2-1-35～39／図版-131）

35、36は有茎のもの。35は未製品。36は尖頭部側縁が内湾しており、先端を欠損している。37は木葉形のもの。38・39は菱形のもの。39は玄武岩を素材とする大型のもので、尖頭部を欠損している。周縁部のみ調整されている。

石材は39が玄武岩製で、その他は黒曜石製。

表Ⅵ-2　包含層石器等一覧

	剥片石器								剥片・石屑等		石核類
分類	石鏃	ポイント	ドリル	つまみ付ナイフ	スクレイパー	くさび形石器	異形石器	Rフレイク	フレイク	チップ	石核
Ⅲ層	81	4	8	5	50	14		60	902	773	6
Ⅲ-2層											
Ⅲ-3c層				2	1				4		
Ⅳ層	27	1	1		16	1		19	327	302	2
Ⅴ層	354	12	42	46	180	29	1	191	4,624	7,866	26
Ⅴ-1層	2								1	5	
Ⅴ-2層									9	2	
Ⅴ-3層	7	1		3	7			7	100	94	1
Ⅴ-4層									4	1	
Ⅴ-5層	6	3		3	9			13	129	72	
Ⅴ-6層									1		
Ⅴ-7層									3		
Ⅵ層	13		3		4			7	113	110	2
撹乱	7		1		5	3		7	78	31	1
表採・排土	2		1					1	37	30	1
層不明	3			1	5				24	16	
点数	502	21	56	60	277	47	1	305	6,356	9,302	39

	礫石器										礫・礫片等				
分類	石斧	たたき石	すり石	砥石	台石	石皿	礫器	擦切残片	石斧原石	研磨石材	礫	原石	軽石	加工痕礫	砂岩
Ⅲ層	23	15	13	20	5	1	1				803	13			
Ⅲ-2層	1										20				
Ⅲ-3c層	2	1	1								9				
Ⅳ層	19	2	3	11							276	8			
Ⅴ層	254	80	66	258	54	9	1	3	3	2	4,880	98		2	3
Ⅴ-1層	1	1									55				
Ⅴ-2層	2										33	1			
Ⅴ-3層	6	3	4	13	21	1					1,295		1		
Ⅴ-4層											1				
Ⅴ-5層	16	8	5	8		1					1,261	6			
Ⅴ-6層	1										155				
Ⅴ-7層											11				
Ⅵ層	14	10	4	6	2	1					68	5			
撹乱	5	4	1	3							75	2			
表採・排土	7										14				
層不明	6	1	1	6	2	1			13		735	1			
点数	357	125	98	325	84	14	2	3	16	2	9,691	134	1	2	3

ドリル（図Ⅵ-2-1-40～45／図版-131）

４０、４１は素材の一部に機能部が作り出されたもの。４２はつまみ部をもつ棒状のもの。先端部を欠損している。４３・４４は棒状のもの。機能部の横断面形は多角形状を呈する。４５は両面が調整されているもの。

石材は４１は石英岩製、４５は黒曜石製で、その他は頁岩製。

つまみ付ナイフ（図Ⅵ-2-1-46～48／図版-132）

すべて片面周縁加工のもの。４６は小型のもの。４７、４８は一側縁が急角度になっている。４８以外は下端が尖った形状である。石材は４６が黒曜石製で、他は頁岩製。

スクレイパー（図Ⅵ-2-2-49～63／図版-132）

４９、５０は下端に急角度の刃部をもつもの。いずれも刃縁は外湾している。４９は両側縁が内湾している。５１～５６は周縁に急角度の刃部をもつもの。５１～５３の刃縁は部分的に内湾する。５５以外は片面加工で、そのうち５１、５２、５４は周縁のみ加工されている。５７～６１は側縁に外湾した刃部をもつもの。５７、５８は下端が尖った形状である。５９、６０は下部に外湾した刃部をもつ。６１は一側縁に刃部をもつ。上部は若干内湾している。６２、６３は一側縁に直線的な刃部をもつ。６２は側縁のみ調整されている。６３は礫表皮を残す。

石材は４９、５６、５８、５９は頁岩製、６２は玄武岩製で、その他は黒曜石製。

楔形石器（図Ⅵ-2-2-64～66／図版-132）

いずれも上下両端に対向する剥離痕をもつ。すべて黒曜石製。

石核（図Ⅵ-2-2-67／図版-132）

長軸方向に対向する剥離痕をもつ。黒曜石製。

石斧（図Ⅵ-2-2-68～70／図版-132）

６８、６９は小型薄身ののみ形石斧。６８は刃部のみ研磨され、全体的に礫面を残す。偏平な小型礫を素材とする。６９は全面研磨されている。刃部は片刃で、平面形は円刃である。７０は未成破損品で、３点が接合している。両側縁が打ち欠かれている。また下端が部分的に研磨されている。

石材はすべて泥岩製。

砥石（図Ⅵ-2-3-71～74／図版-133）

７１～７３は片面に凹状～平坦なすり面をもつもの。７１は側面にも凹状のすり面をもつ。７２は左側面に凸状のすり面ももつ。また右側縁には剥離痕が認められる。７３は右側面にも凹状のすり面をもつ。欠損しており、３点が接合している。７４は平坦なすり面をもつもの。欠損しており、２点が接合している。

石材は７２が玄武岩製、７２が砂岩製で、７３は安山岩製で、７１は石材不明である。

すり石（図Ⅵ-2-3-75～77／図版-133）

７５、７６は偏平な楕円礫を素材とするもの。両面に凸状の滑らかなすり面をもつ。７７はやや肉厚な円礫を素材とするもの。全面に凸状のすり面が認められ、特に表裏面が滑らかになっている。石材は７５が安山岩製で、７６は片麻岩製、７７は砂岩製。

たたき石（図Ⅵ-2-3-78～82／図版-133）

７８～８１は円・楕円礫を素材とするもの。７８は比較的肉厚な礫を素材とし、両面の凸部にたたき痕が認められる。７９、８０は縁辺につぶれたたたき痕をもち、周囲には剥離痕も認められる。８１は全面にあばた状のたたき痕をもつ。８２はあばた状に窪んだたたき痕をもつ、いわゆるくぼみ石である。

角礫を素材とし、欠損している。

石材は７８、８１は安山岩製、７９は泥岩製、８２は砂岩製で、８０は石材不明である。

台石（図Ⅵ-2-3-83／図版-133）

大型の楕円礫を素材とするもので、片面にたたき痕をもつ。砂岩製。

石製品（図Ⅵ-2-3-84～86／図版-134）

８４は全面研磨された小玉。両側から穿孔されている。蛇紋岩製。８５、８６は有孔の垂飾。８５は全面研磨されており、一方の側縁が外湾している。穿孔部側面には１条の、また両面から側面にかけて２条の溝が刻まれている。両側穿孔である。カンラン岩製。８６は自然礫をそのまま利用したもので、部分的に研磨痕が認められる。上端の有孔部は２度の穿孔により作られている。蛇紋岩製。

（２）Ⅴ・Ⅵ層（図Ⅵ-2-4～16／図版-134～142・145）

石鏃（図Ⅵ-2-4-1～58／図版-134）

有茎鏃、特に７ｃ類が圧倒的に多く出土している。石材はほとんどが黒曜石製である。

１～４は柳葉形鏃。４は下端が若干内湾している。５～８は五角形鏃。９～１２は無茎凹基の三角形鏃。１３～２１は無茎平基の三角形鏃。１３、１８は側縁が直線的で、二等辺三角形状を呈する。２２～２７は菱形鏃。２２～２４は正菱、その他は偏菱状である。２５は側縁が内湾している。２８、２９は木葉形鏃。２８は一側縁が抉れており、有茎鏃未成品の可能性がある。３０～３８は有茎平基のもの。そのうち３０～３４は側縁が内湾気味になり、尖頭部先端がすぼまった形状である。３３は尖頭部先端および茎部のみ加工されている。３８は比較的茎部の長いもの。３９～５８は有茎凸基のもの。４６～５０は尖頭部側縁が内湾気味のもの。５１、５２はスペード状である。５４～５８は尖頭部幅に比べ、比較的茎部幅が大きい。

石材は、４、８、１８、４１、４４、４５が頁岩製、その他は黒曜石製。

ポイント（図Ⅵ-2-4-59～61・Ⅵ-2-5-62～65／図版-135）

５９～６１は有茎のもの。５９は比較的肉厚のもので、尖頭部は片面加工。６０は両面加工である。６１は両面ともおよそ周縁が加工されている。６２は菱形のもので、両面加工である。６３、６４は未成品と思われるもので、木葉形を呈する。６５は大型で、両面が加工されている。平面形は棒状を呈する。上部、下部とも側縁が微妙にふくらんで両頭状にもみえ、先端は丸みを帯びる。豊浦町高岡１遺跡出土例に似る（1994、高岡１遺跡）。

石材は、５９～６１が頁岩製。他は黒曜石製。

ドリル（図Ⅵ-2-5-66～79／図版-135）

６６～６８は素材の一部に機能部を作り出したもの。６８は剥片の形状をそのまま利用したもの。６９～７２は棒状のものにつまみ部が作り出されたもの。７０～７２は比較的幅のあるつまみ部をもつ。７３～７６は棒状のもの。７４は両頭のもの。７６は先端がすぼまった形状である。７７～７９は周縁もしくは両面が加工されているもの。７８は先端がすぼまった形状である。７９はスクレイパー的な用途も考えられる。

尖頭部の横断面形は、６６、６７、７３は三角形状、その他は菱形～多角形状である。

石材は、６８が石英岩製、６９、７２、７３、７６、７８、７９が頁岩製で、その他は黒曜石製。

つまみ付ナイフ（図Ⅵ-2-5-80～85・Ⅵ-2-6-86～99・Ⅵ-2-7-100～102／図版135・136）

縦形のものと横形のものが出土しており、前者が圧倒的である。石材は頁岩製のものが多い。

８０～９９は縦形のもの。８０～８８は片面全面加工のもので、そのうち８０～８５は裏面の側縁部

にも剥離痕が認められる。８１の裏面の加工はバルブ部分の厚みを除去するためと思われる。８５、８６、８７は長軸方向に比較的大きく湾曲した素材が用いられている。８７は両側縁が直線的で平行に近い。８８はつまみ部の抉りが不明瞭なもので、裏面にバルブを残す。８９～９６は片面周縁加工のもの。９３のつまみ部は幅が狭く尖った形状である。９４は裏面の下部も調整されている。バルブ部分の厚みを除去するためと思われる。両側縁とも部分的に抉れている。９５は片面の一側縁のみに刃部をもつ。棒状の原石を素材とするもので、両面に原石面が認められる。９６は一側縁に両面から加工された刃部をもつ。９７～９９は両面加工のもの。９９は刃部横断面形がプロペラ状を呈する。１００～１０２は横形のもの。１００は表面が全面加工、裏面は周縁が加工されている。１０１は片面周縁加工。１０２は表面周縁加工、裏面一側縁加工である。身部は三角形状を呈する。

つまみ部の形状は、８０、８１、８５、９３、９６は側縁が直線的な棒状を呈し、８８、９８、１０２は丸みを帯びたものである。また刃部の形状は８１、８３、９６が一側縁に内湾した刃部をもち、その他は外湾もしくは直線的な刃部である。

石材は、８１、９２、９４、９５、９７、９９、１００が黒曜石製で、他は頁岩製である。

スクレイパー（図Ⅵ-2-7-103～113・Ⅵ-2-8-114～129・Ⅵ-2-9-130～131／図版-136・137）

１０３～１１３は下端に外湾した急角度の刃部をもつもの。長軸方向に湾曲した素材もしくは比較的肉厚な素材が用いられている。１０７は下端から左側縁部に刃部をもつ。１０９は下端のみ調整されている。１１０は周縁が加工されている。１１１～１１３は平面形が箆状を呈する。１１１は下端のみ両面から加工されている。１１２、１１３は両面加工で、刃部は急角度である。１１４～１１９は円～楕円形状で周縁に急角度の刃部をもつもの。本分類は裏面にバルブを残すものがほとんどで、打面を残すものも多く認められる。１１７～１１９は若干内湾した刃部が連続している。１２０～１２２は外湾した刃部をもつもの。１２０・１２２は一側縁に両面から加工された刃部をもつ。１２０は片面のみ全面加工されている。１２１は片面のみ全面加工されている。上端部は尖っており、つまみ部とも考えられる形状を呈する。１２３～１２５は直線的な刃部をもつもの。１２３は一側縁に両面から加工された刃部をもつ。礫皮を残す。１２４、１２５は下端が尖った形状で片面の側縁が加工されている。１２６～１３０は内湾した刃部をもつもの。１２６、１２９は両側縁に、１２８、１３０は一側縁に刃部をもつ。１２７は外湾した刃部も認められる。１３１は抉りのある刃部をもつもの。

石材は、１０４、１１３、１２１、１２２、１２５、１２９、１３０が頁岩製、１０９は石英岩製、１１０は玄武岩製で、その他は黒曜石製である。

楔形石器（図Ⅵ-2-9-132～133／図版-137）

上下両端に対向する剥離痕が認められる。黒曜石製。

石核（図Ⅵ-2-9-134～136／図版-137）

いずれも転礫を素材とするもの。１３４、１３５は礫表皮を部分的に残す。１３６は肉厚の剥片を素材とし、上下両方向から剥離されている。

石材は、１３５が頁岩製、その他は黒曜石製。

石斧（図Ⅵ-2-9-137～146・Ⅵ-2-10-147～157／図版-137・138）

刃部が残存しているもののうち図示した２点を除いて、すべて片刃である。石材は泥岩が圧倒的に多い。

１３７～１４７は片刃のもの。そのうち１３７～１４３は平面形が短冊状で、その他は撥形を呈する。刃部の平面形は１３７が直刃、１４８が斜刃でほかは円刃である。１３７は比較的小型で、基端部に敲打痕が認められる。１３８、１３９は長さに比して、比較的幅がある。１３９は擦り切り技法によるも

の。片縁に擦り切り痕が認められ、部分的に切断面の形状を残す。１４０は打ち欠きおよび敲打整形後に研磨されている。表面に原石の形状を残す。１４１は打ち欠き整形後に研磨されている。刃先が磨滅している。１４２は比較的大型のもので、身部で割れた２点が接合している。身部は打ち欠きおよび敲打によって整形されており、刃部、側縁のみ研磨されている。１４３は比較的薄身のもの。１４４は刃部付近のみ研磨されている。身部は打ち欠き後に敲打整形されている。刃部は部分的に欠損している。１４５は両側面上部に剥離面の形状を残す。基端部には敲打痕が若干認められる。１４６は片面に敲打痕を残す。基端部には原石の自然面が認められる。１４７は基部を欠損している。左側面に素材割れ面の直線的な形状が認められる。１４８は刃部を欠損している。横断面形は楕円形状を呈する肉厚のもの。１４９～１５２は薄身細身ののみ形のもの。１４９は刃部がすぼまった形状を呈する。１５０は剥片を素材とするもので、身部に主剥離面の形状を残す。１５１は幅に比して長さが小さい。刃面の角度から判断して、再生品の可能性が高い。１５２は刃縁に長軸方向に走る明瞭な数本の条が認められる。使用痕と推定される。

１５３～１５９は石斧未成品。直線的な両側縁および刃部形状が成品に近い段階ものを未成品とした。１５３は打ち欠き整形後に、両側縁および身部が研磨されている。１５４は両面とも打ち欠き整形されている。１５５は打ち欠き整形中に破損したと考えられるもの。２点が接合している。１５６は周縁が打ち欠き整形されている。両面とも自然面の形状を残すが、部分的に研磨痕が認められる。１５７は擦り切り技法によるもの。のみ形の未成品と思われ、一側縁に擦り切り痕を残す。切断後の打ち欠き整形中に破損したものと考えられ、２点が接合している。両面とも研磨されている。

石材は１３９が蛇紋岩製、１３８、１４１、１４３、１４８、１４９、１５６が片岩製で、その他は泥岩製。

石斧原材（図Ⅵ-1-10-158～162／図版-138）

１５８は両側縁、１５９は右側縁および上下端に打ち欠きが認められる。いずれも偏平礫を素材とする。１６０は片面の左半身のみ研磨され、その後打ち欠きによって左側縁が整形されている。１６１、１６２は両面の素材凸部のみ部分的に研磨されている。１６１は部分的に欠損している。大型の楕円礫を素材とする。１６２は右側縁のみ打ち欠き整形されている。偏平礫を素材とする。

石材は１５８が泥岩製、１５９は片岩製、他は蛇紋岩製。

擦り切り残片（図Ⅵ-2-10-163～164／図版-138）

いずれも欠損している。両面が研磨されており、側面には礫の形状を残す。素材の凸状部もしくはカーブした部分が切断されたものと思われる。石材は１６３が蛇紋岩製、１６４が泥岩製。

砥石（図Ⅵ-2-11-165～175・Ⅵ-2-12-176／図版-139・140）

１６５～１６７は溝状のすり面をもつもの。１６５は両面に重複した溝状のすり面が認められる。１６６はサイコロ状の角礫を素材とし、２面に溝状のすり面をもつ。１６７は板状礫を素材とし、片面および側面に凹状～平坦なすり面も認められる。１６８～１７１はU字状に窪んだすり面をもつもの。１６８～１７０はいわゆる四面砥石。擦痕は主に長軸方向に走っている。１６８、１６９は溝状に若干窪んだすり面も認められる。１７０は全面がU字状に窪む。１７１は３面にすり面をもち、うち表面のものは連続してU字状に窪んでいる。側面のものは凹状～平坦なすり面である。また表面には部分的にたたき痕も認められる。１７２～１７６は凹状～平坦なすり面をもつもの。１７２は板状礫を素材とし、片面および側面にすり面が認められる。また表面の周縁には、たたき痕も認められる。欠損しており、７点が接合している。１７３、１７４は上下面に外湾したU字状のすり面をもつ。１７３の下面のすり面は片縁が窪んで段になっている。石鋸的に使用された可能性がある。１７５は両面に平坦なすり面が

認められる。下面を除いた縁辺が打ち欠かれている。欠損しているが、平面形は半円状を呈すると思われる。１７６は板状礫を素材とし、片面および側面にすり面をもつ。部分的にたたき痕も認められる。

石材はすべて砂岩製で、そのうち１６６、１７１は比較的粗粒のものである。

すり石（図Ⅵ-2-12-177～183・Ⅵ-2-13-184～187／図版-140）

１７７、１７８は北海道式石冠と称されるもの。１７７のすり面は凸状、１７８は平坦である。１７９は半円状扁平打製石器と称されるもの。下部にやや外湾したＵ字状のすり面をもつ。また両面にも擦痕が認められる。１８０～１８２は断面三角形状礫の稜にすり面をもつもの。１８０のすり面は２面に分かれており、稜が認められる。１８１は稜の縁辺に剥離痕が認められる。１８２はすり面縁辺にたたき痕が認められる。１８３、１８４は円・楕円礫を素材とするもの。１８３は両面に凸状のすり面をもつ。裏面下部にたたき痕が集中している。１８４は全面にすり面が認められ、特に中心部は滑らかになっている。１８５～１８７は球状礫を素材とするもの。１８５、１８６は全面にすり面が認められる。１８７は下部に窪んだたたき痕をもつ。

１７９が安山岩製、１８１が泥岩製、１８３は不明で、その他は砂岩製である。

たたき石（図Ⅵ-2-13-188～199・Ⅵ-2-14-200～203／図版-141）

１８８、１８９は球状礫を素材とするもの。１８８はつぶれたたたき痕が全面に認められ、部分的にあばた状を呈する。１９０～１９９は円・楕円礫を素材とするもの。１９０～１９２は周縁につぶれたたたき痕が認められる。１９１は両面のおよそ中心部にあばた状に窪んだたたき痕も認められる。１９２は周縁部にはつぶれ状の、また片面の中心部には窪んだたたき痕をもつ。１９５、１９６は下端部および周辺にたたき痕が集中している。１９８はいわゆるくぼみ石である。両面にあばた状に窪んだたたき痕が認められる。１９９は周縁にたたき痕が認められる。平面形状および素材が泥岩であることから、石斧未成品の可能性もある。２００、２０１は棒状礫を素材とするもの。片面の端部付近にたたき痕をもつ。２００は端部に剥離痕が、また２０１はたたき痕が認められる。２０２は角礫を素材とするもの。片面および側面につぶれたたたき痕をもつ。側面は敲打のため内湾した形状となっている。２０３は両面に擦り切り切断痕をもつ。転用品と考えられる。上下端にたたき痕が認められる。

石材は、１８８、１９０、１９９、２０２、２０３が泥岩製、１８９、１９３、１９６、１９７は安山岩製、１９４が不明で、その他は砂岩製。

石皿（図Ⅵ-2-14-204～205・Ⅵ-2-15-206／図版-142）

２０４は片面および両側面にすり面をもつ。表面のすり面は中央部がＵ字状に窪んでいる。左側面のすり面は割れ面を利用したものである。２０５は両面に平坦なすり面をもつ。２０６は多孔質の礫を素材とするもので、周縁が敲打整形され、楕円形状になっている。片面にほぼ平坦なすり面をもつ。同様なものはＬＰ－１８０、１９５から出土している。

石材は２０６が安山岩製で、その他は砂岩製。

台石（図Ⅵ-2-15-207、208／図版-142）

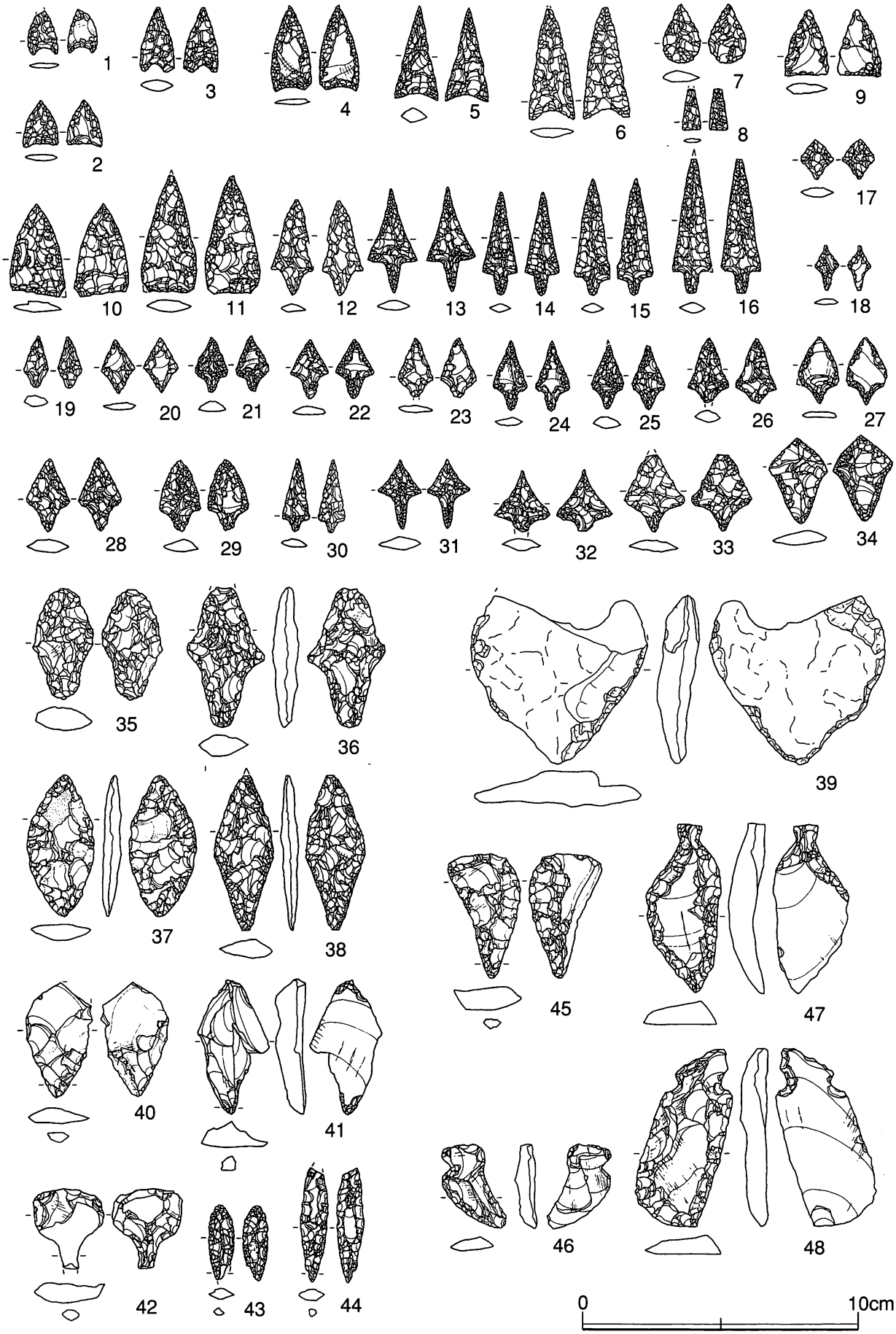
２０７、２０８は片面にたたき痕が散在する。２０８は焼けを受けて割れており、内面にも焼けた痕跡が認められる。２点が接合している。いずれも砂岩製。

石製品（図Ⅵ-2-15-209～216・Ⅵ-2-16-217～222／図版-145）

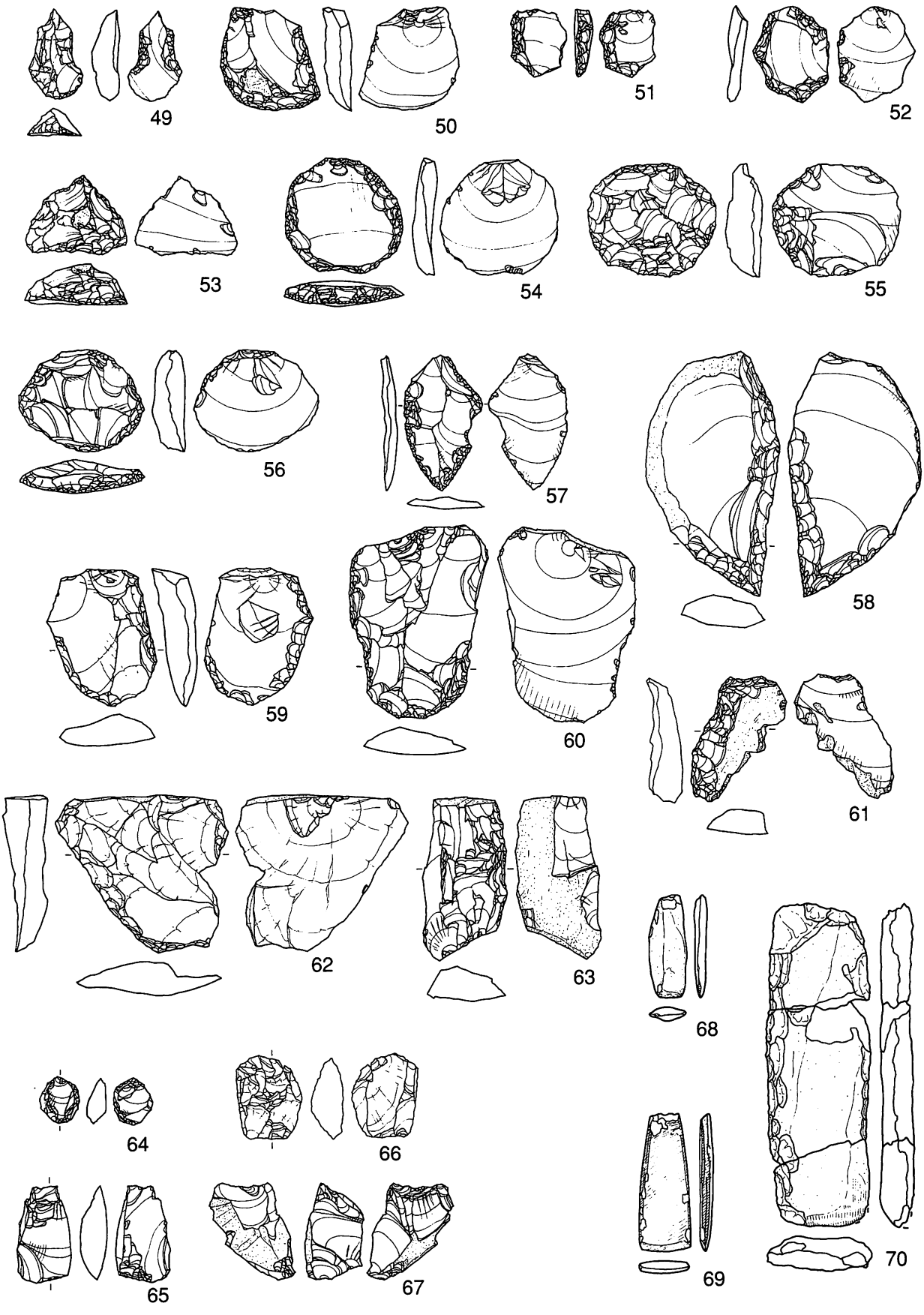
２０９～２１１は有孔の垂飾。全面研磨されている。側縁の一方は外湾し、一方は直線的である。両面穿孔によるものと思われる。２１１は上部を欠損している。２１２、２１３は垂飾未成品と思われるもの。裏面のみ研磨されていない。２０９～２１１に平面形状および厚さ、石質等が近似することから、未成品とした。２１４、２１５は丸玉。２１４は全面研磨されており、穿孔部は両面穿孔と思われる。

片面には有孔部を中心とした渦巻き状の線刻が施されている。２１５は一部欠損している。穿孔部内面には、長軸方向に走る擦痕が認められる。２１６は丸玉の未成品と思われるもの。欠損しており、数点が接合している。一部分のみ研磨されており、素材の形状を残す。２１７は上下端が尖った有茎鏃様のもの。両側縁が抉られて、両頭状となる。下端を欠損している。２１８は両面調整されており、平面形は長方形状を呈する。２１９はいわゆる三ケ月形石器。両面調整されている。２２０は三脚石器と称されるもの。側縁はいずれも内湾している。２２１、２２２はオロシガネ状石製品と称されるもの。周縁は敲打および研磨によって、整形されている。両面とも研磨されているが、多孔質の礫を素材とするため、擦痕は不明瞭である。２２１は上部に角形の突起が作り出され、中心部が穿孔されている。また身部の両側縁上部に若干抉りが認められる。縦・横断面形は湾曲している。２２２は未成破損品と思われるもの。２点が接合している。断面形は平坦である。

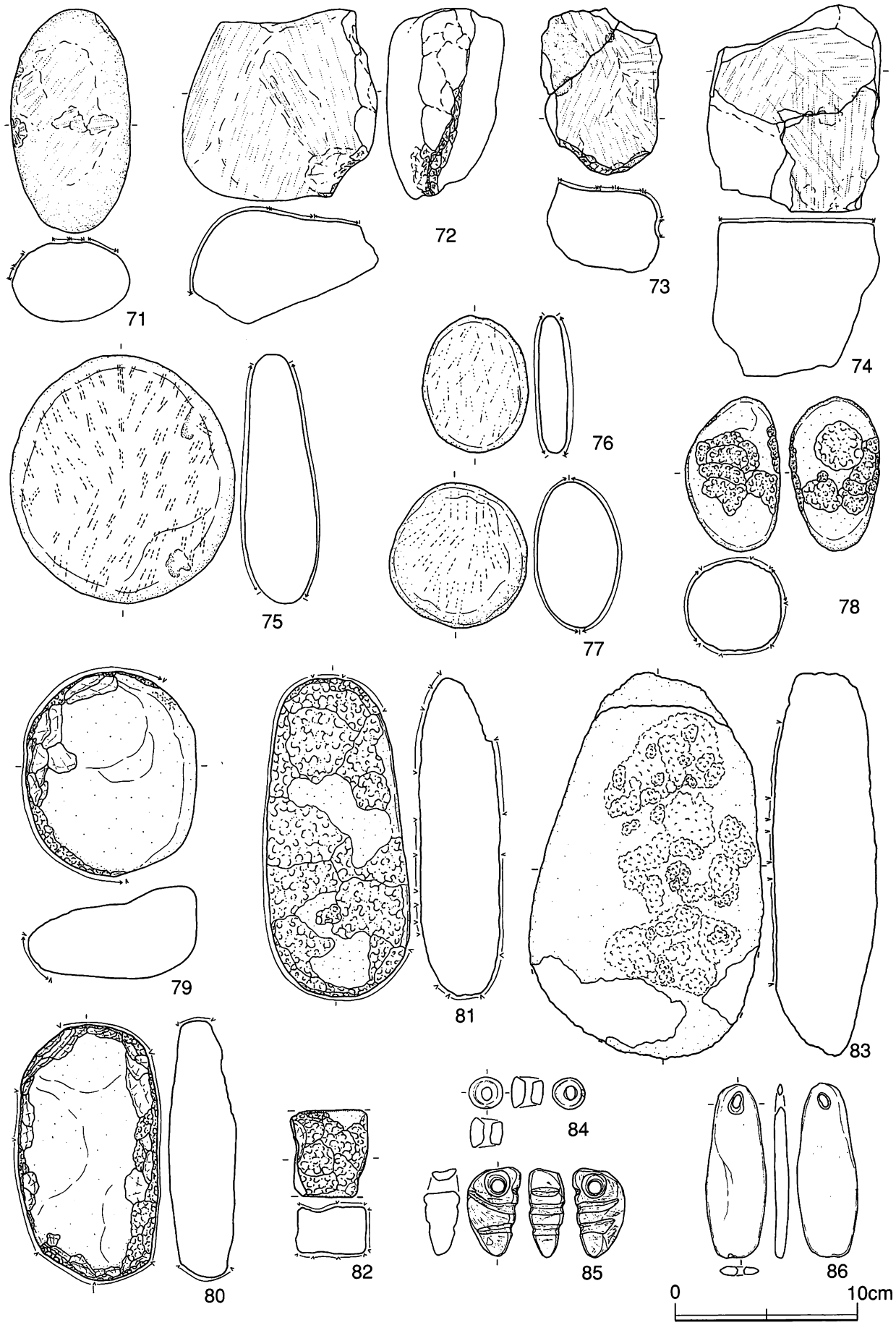
石材は、２０９、２１２、２１３、２１５、２１６が蛇紋岩製、２１０、２１１、２１４はカンラン岩製、２１７～２２０が黒曜石製、２２１、２２２が安山岩製。



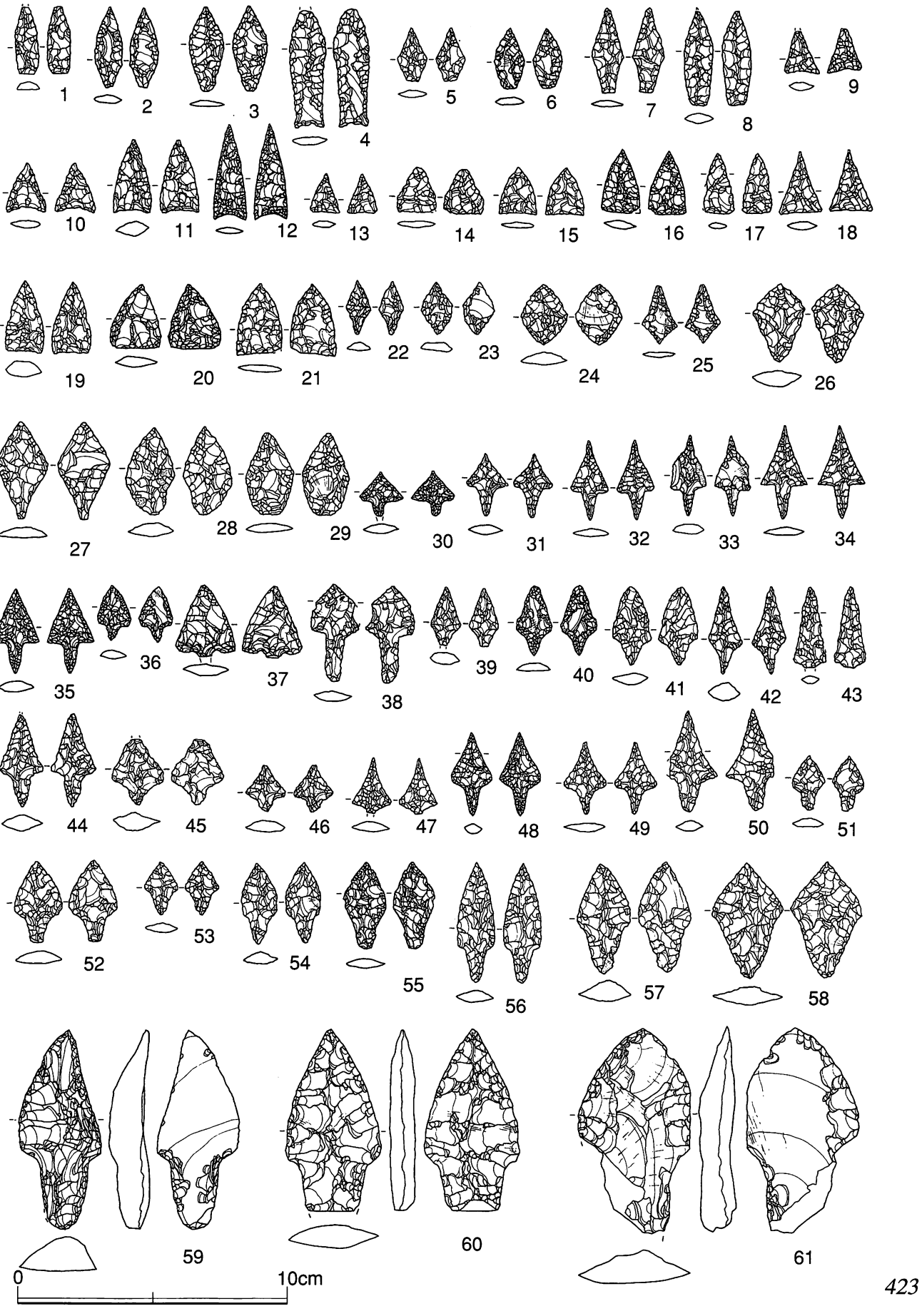
図Ⅵ-2-1　Ⅲ・Ⅳ層の石器（1）



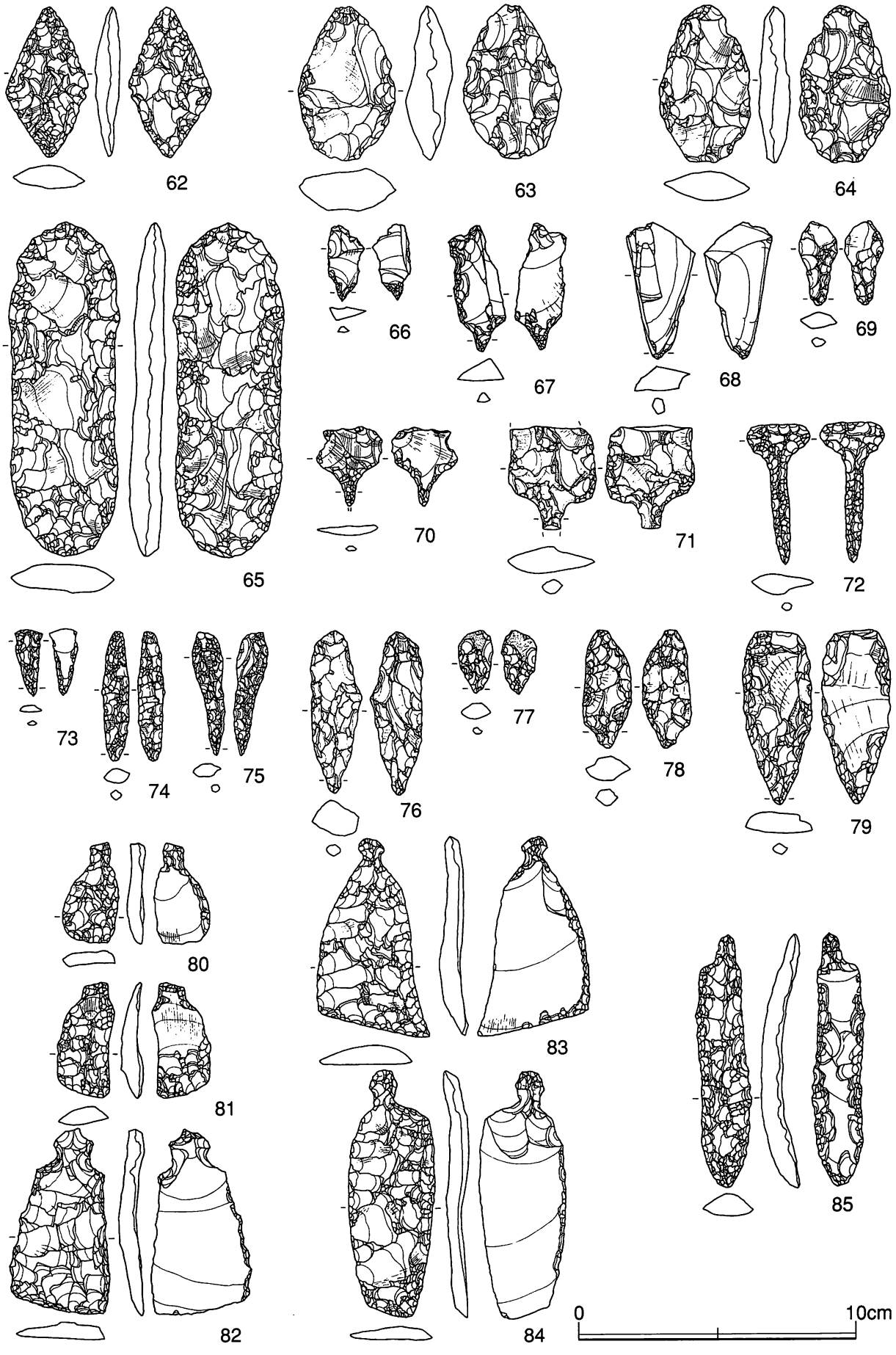
図Ⅵ-2-2　Ⅲ・Ⅳ層の石器（2）



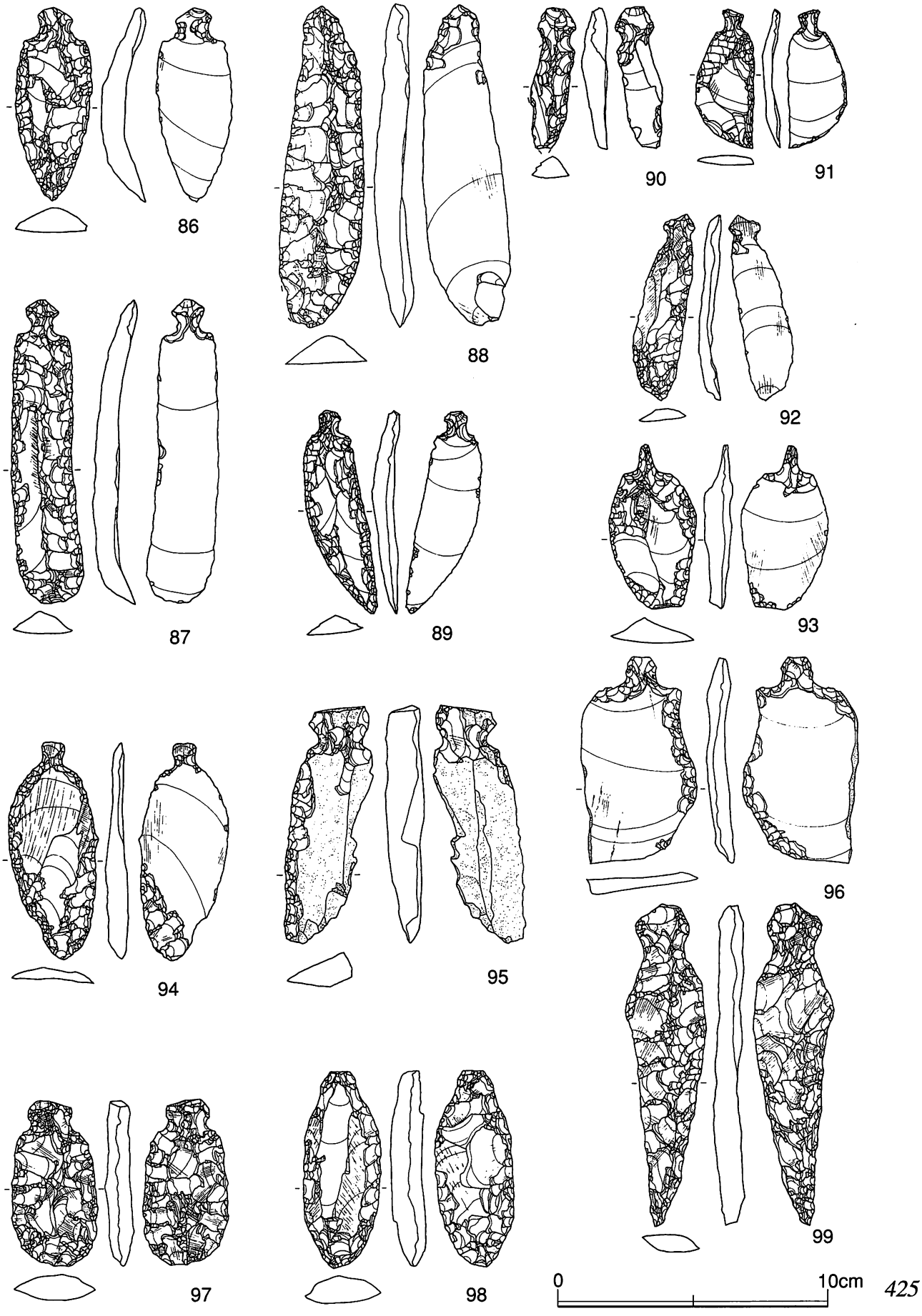
図Ⅵ-2-3　Ⅲ・Ⅳ層の石器（3）・石製品



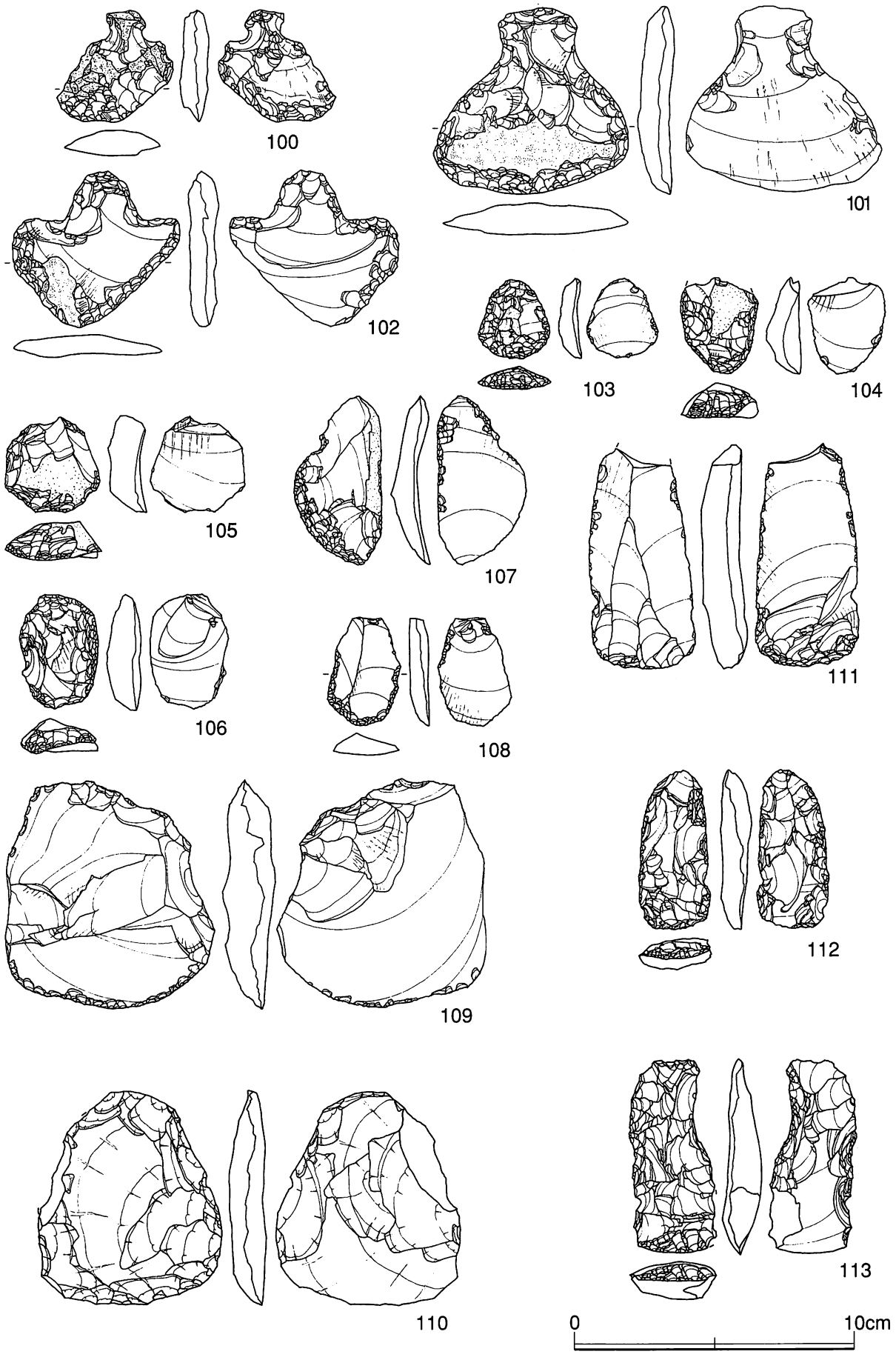
図Ⅵ-2-4　Ⅴ・Ⅵ層の石器（1）



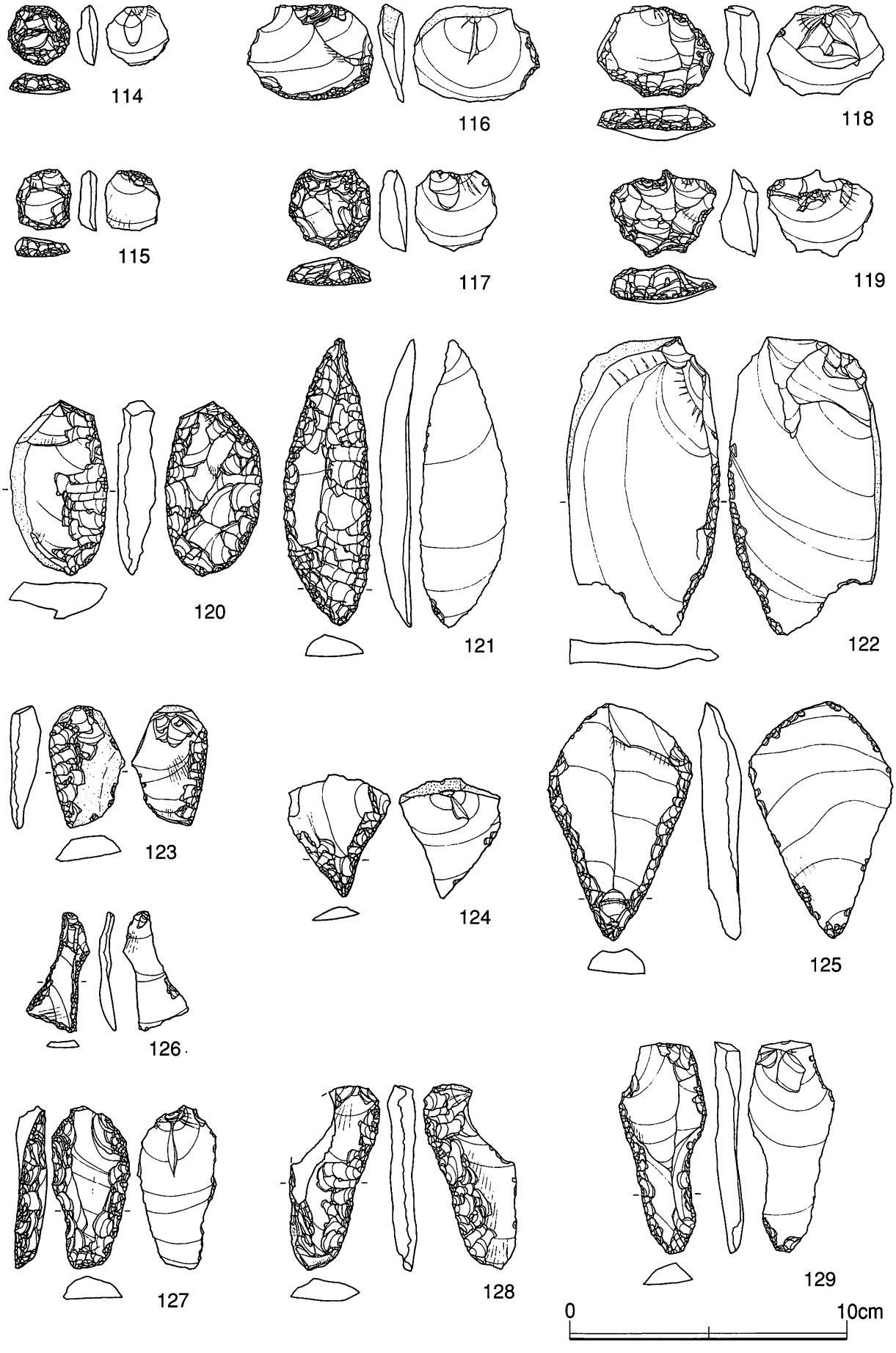
図Ⅵ-2-5　Ⅴ・Ⅵ層の石器（2）



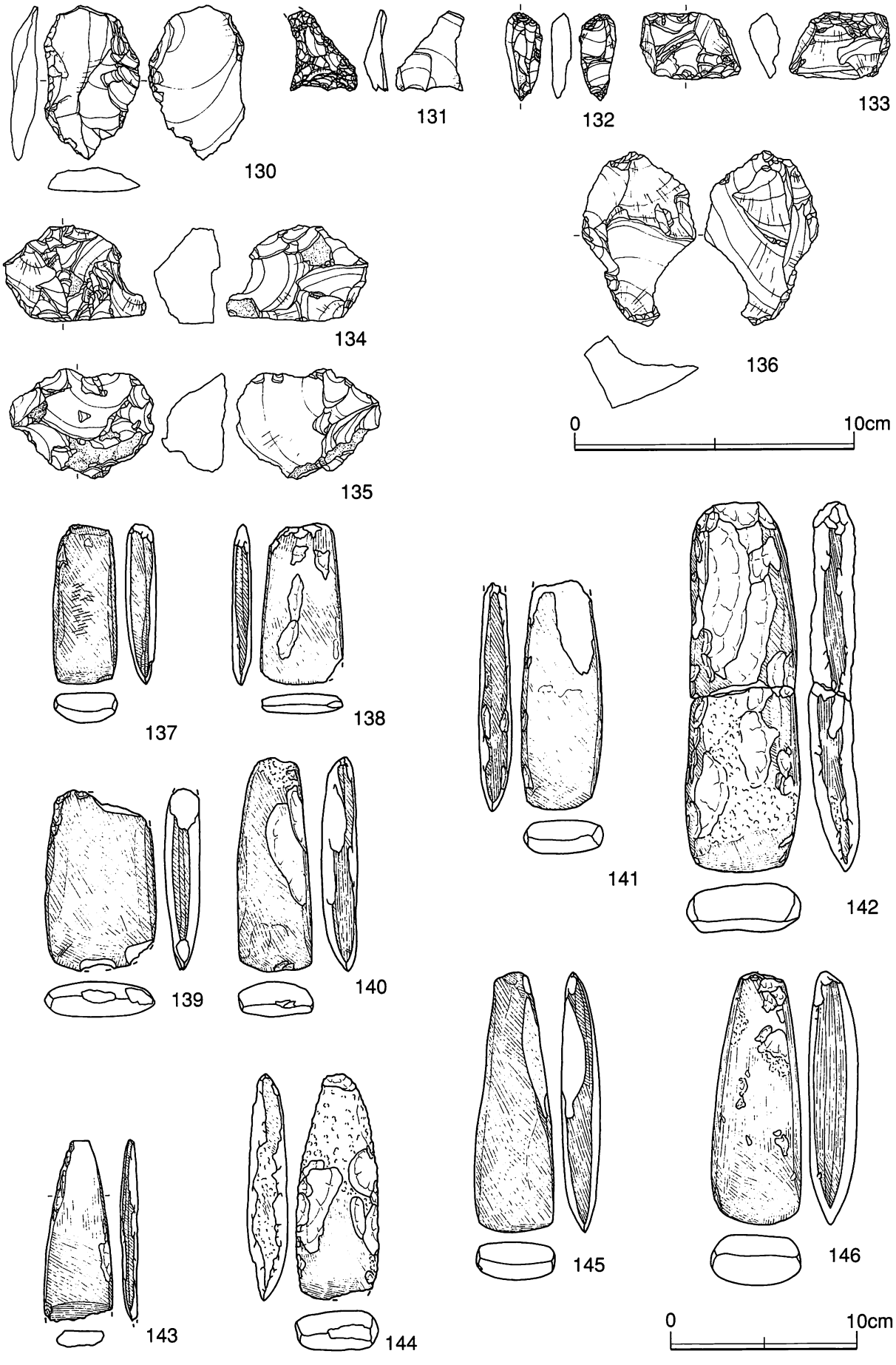
図Ⅵ-2-6　Ⅴ・Ⅵ層の石器（3）



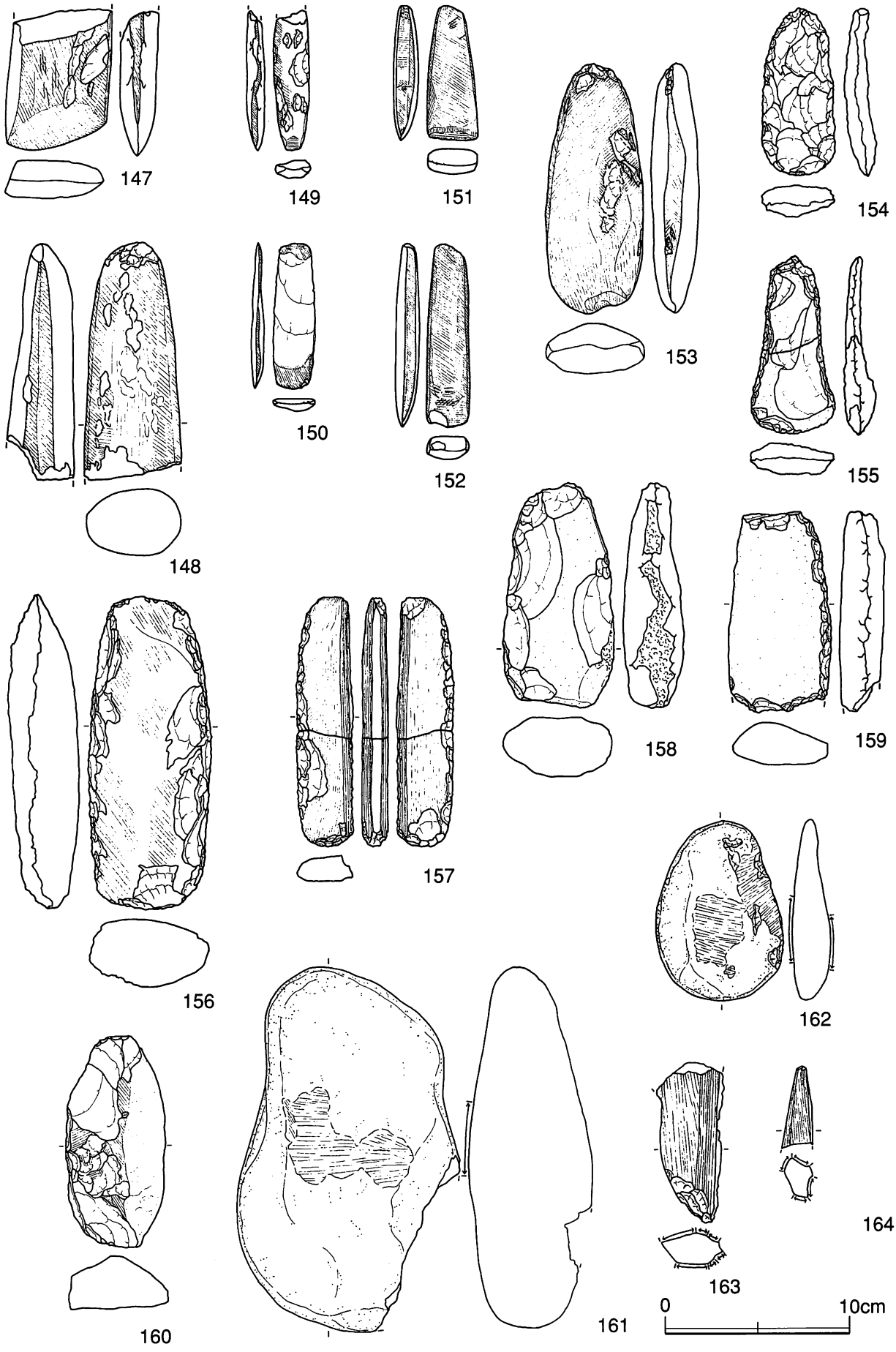
図Ⅵ-2-7　Ⅴ・Ⅵ層の石器（4）



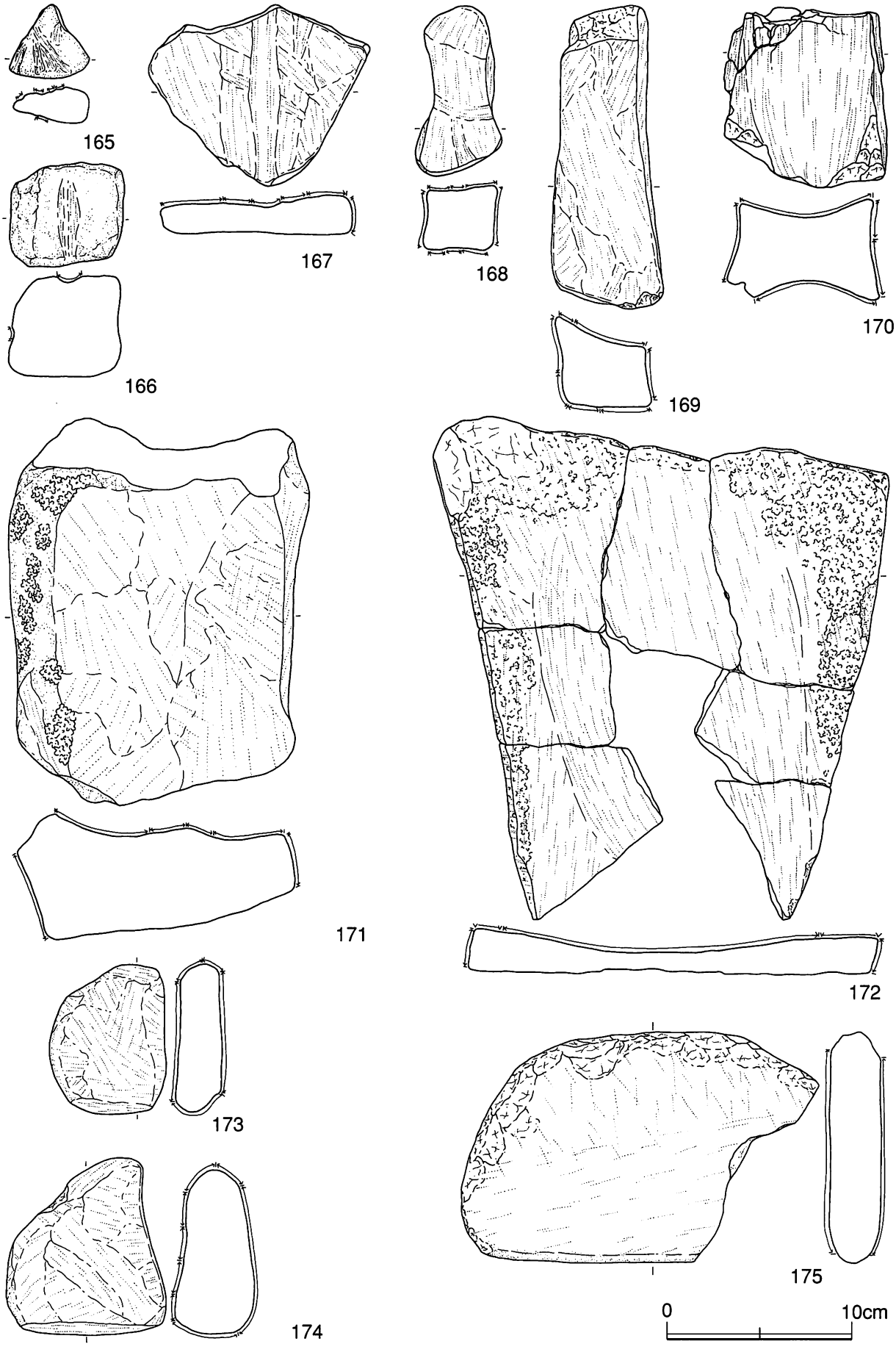
図Ⅵ-2-8　Ⅴ・Ⅵ層の石器（5）



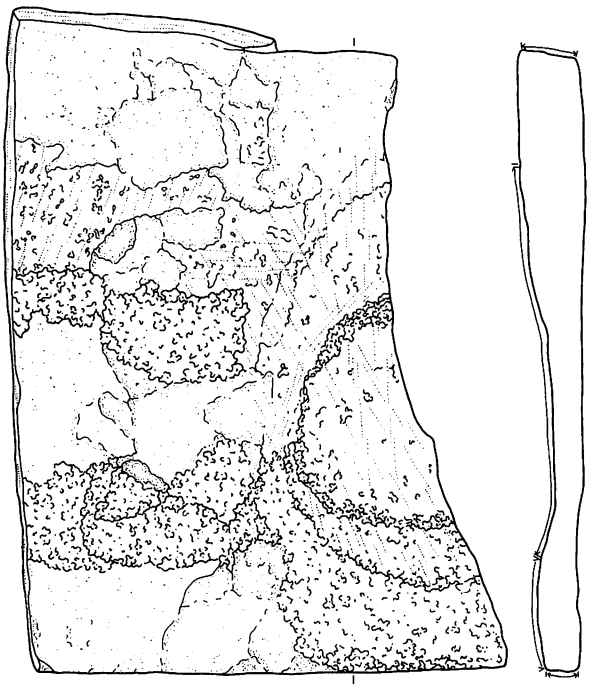
図Ⅵ-2-9　Ⅴ・Ⅵ層の石器（6）

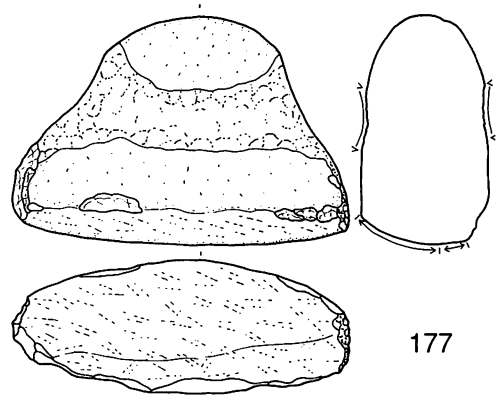


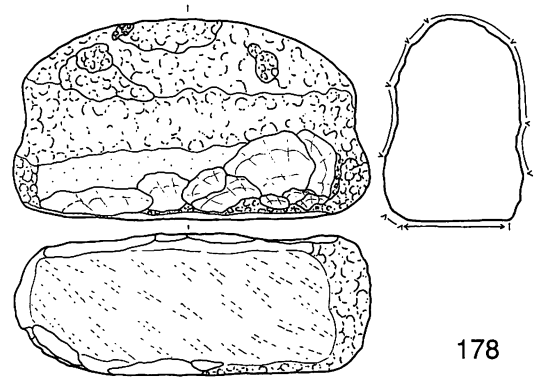
図Ⅵ-2-10　Ⅴ・Ⅵ層の石器（7）

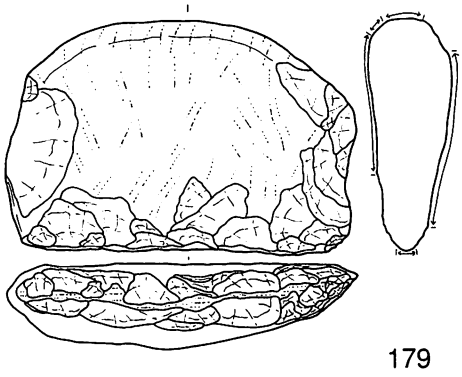


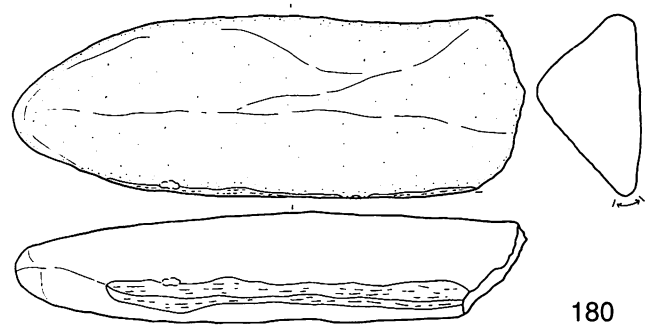
図Ⅵ-2-11　Ⅴ・Ⅵ層の石器（8）

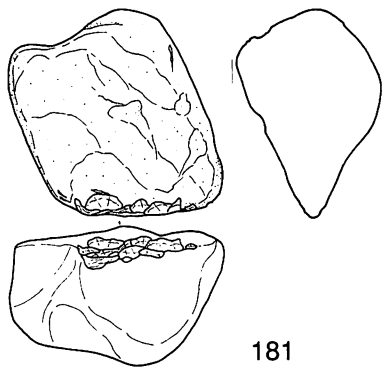


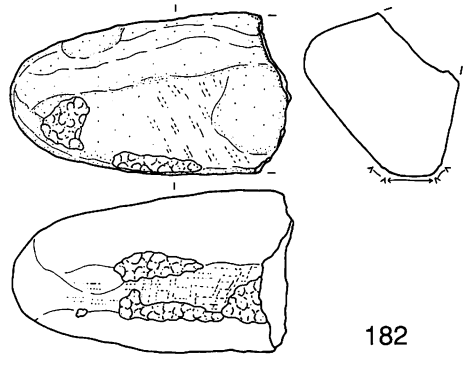


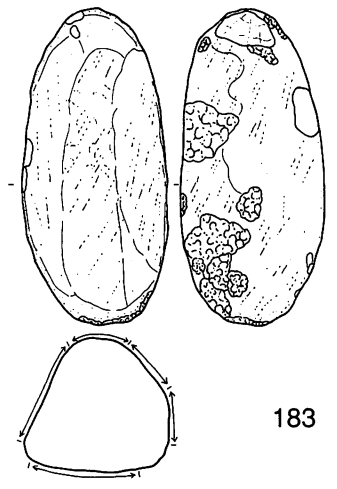


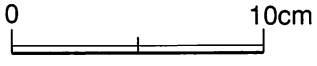




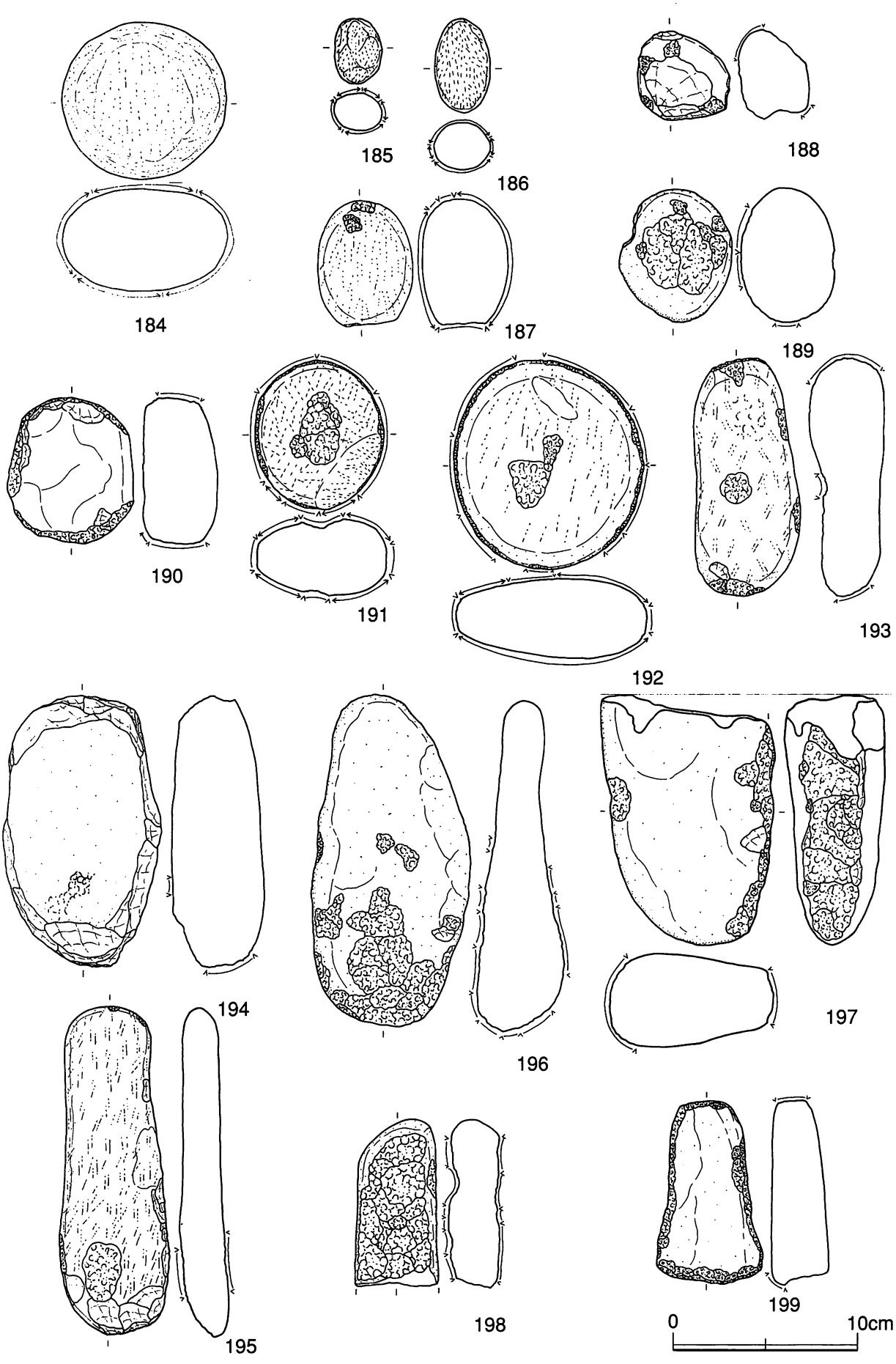




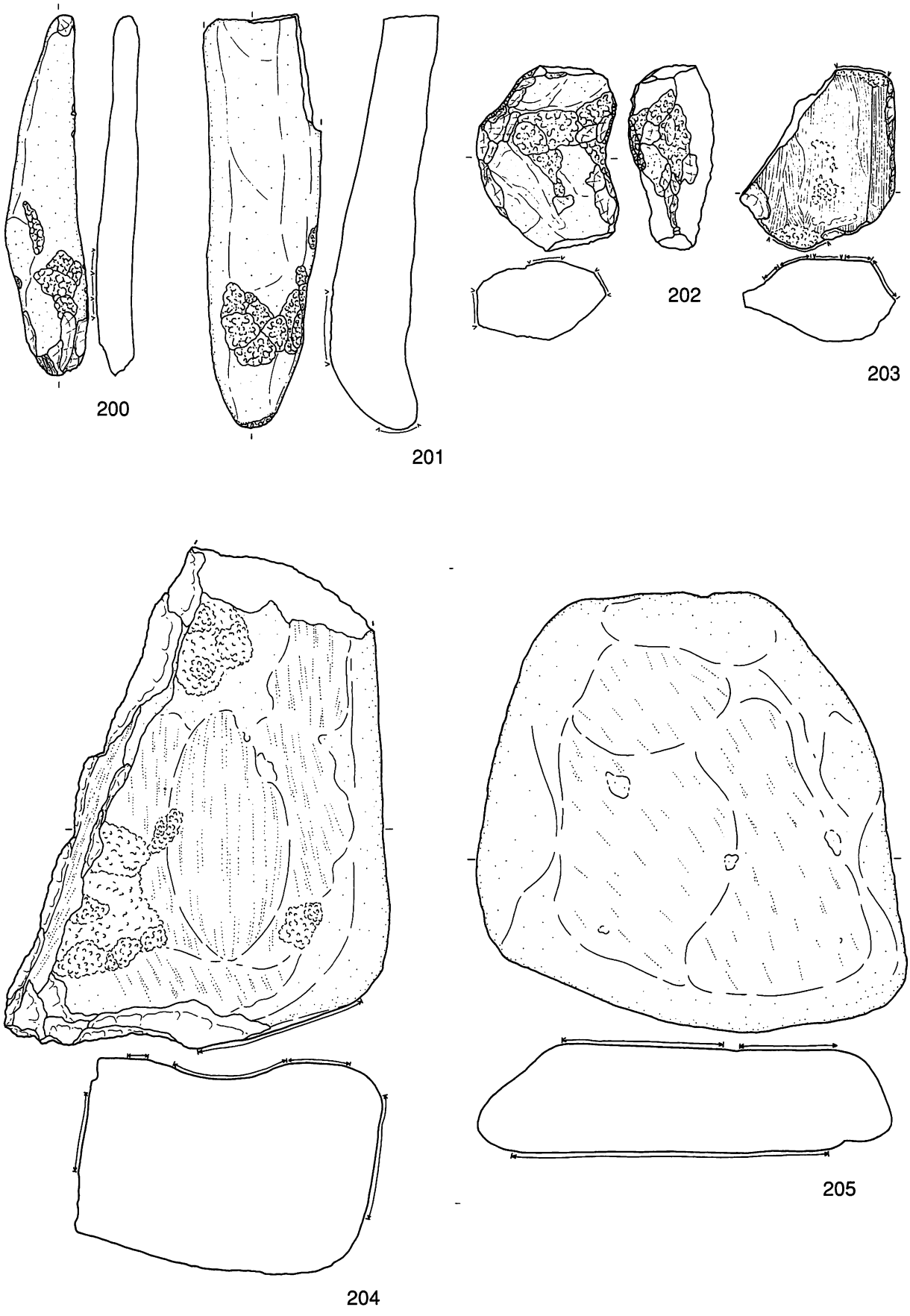




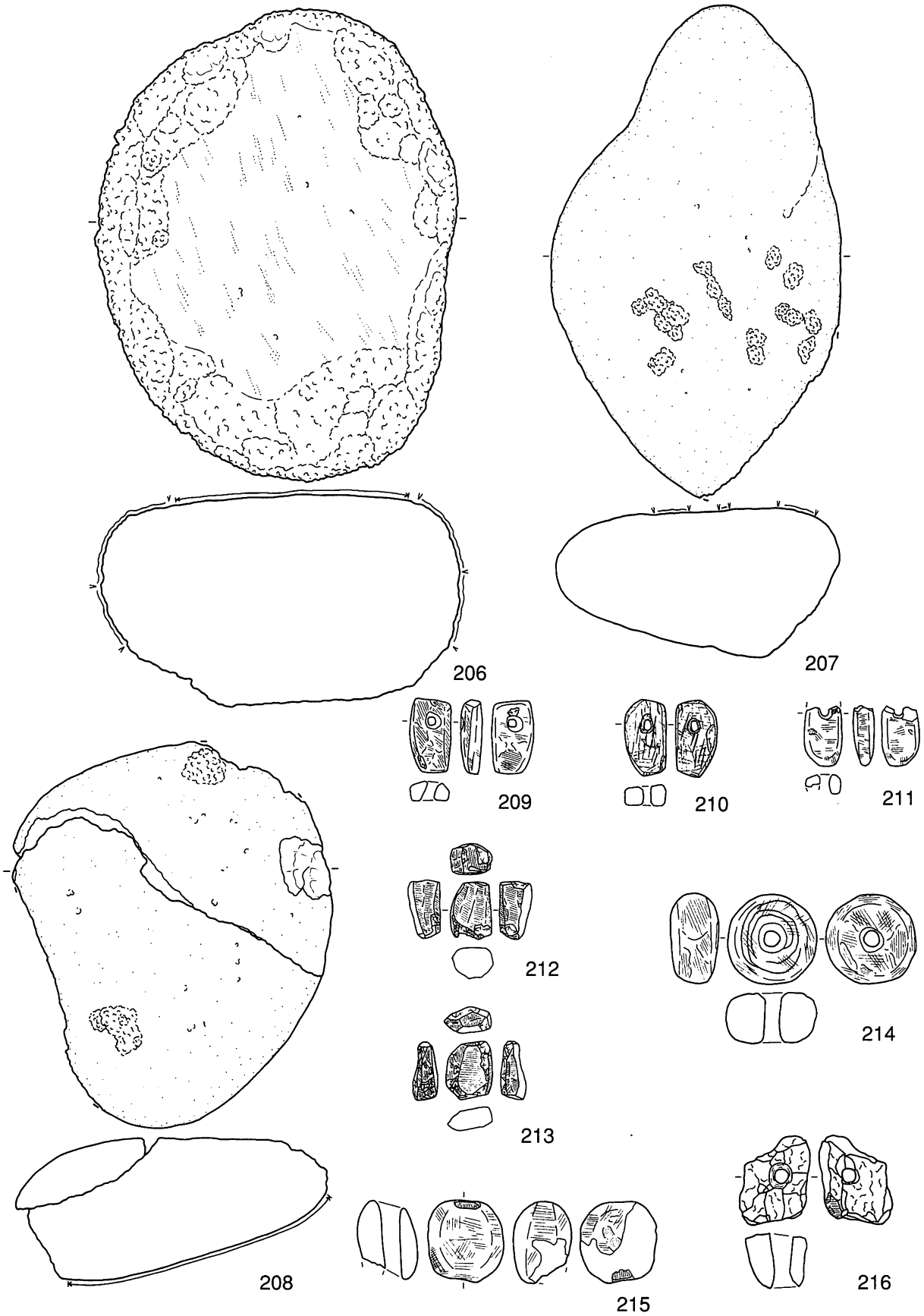
図Ⅵ-2-12　Ⅴ・Ⅵ層の石器（9）



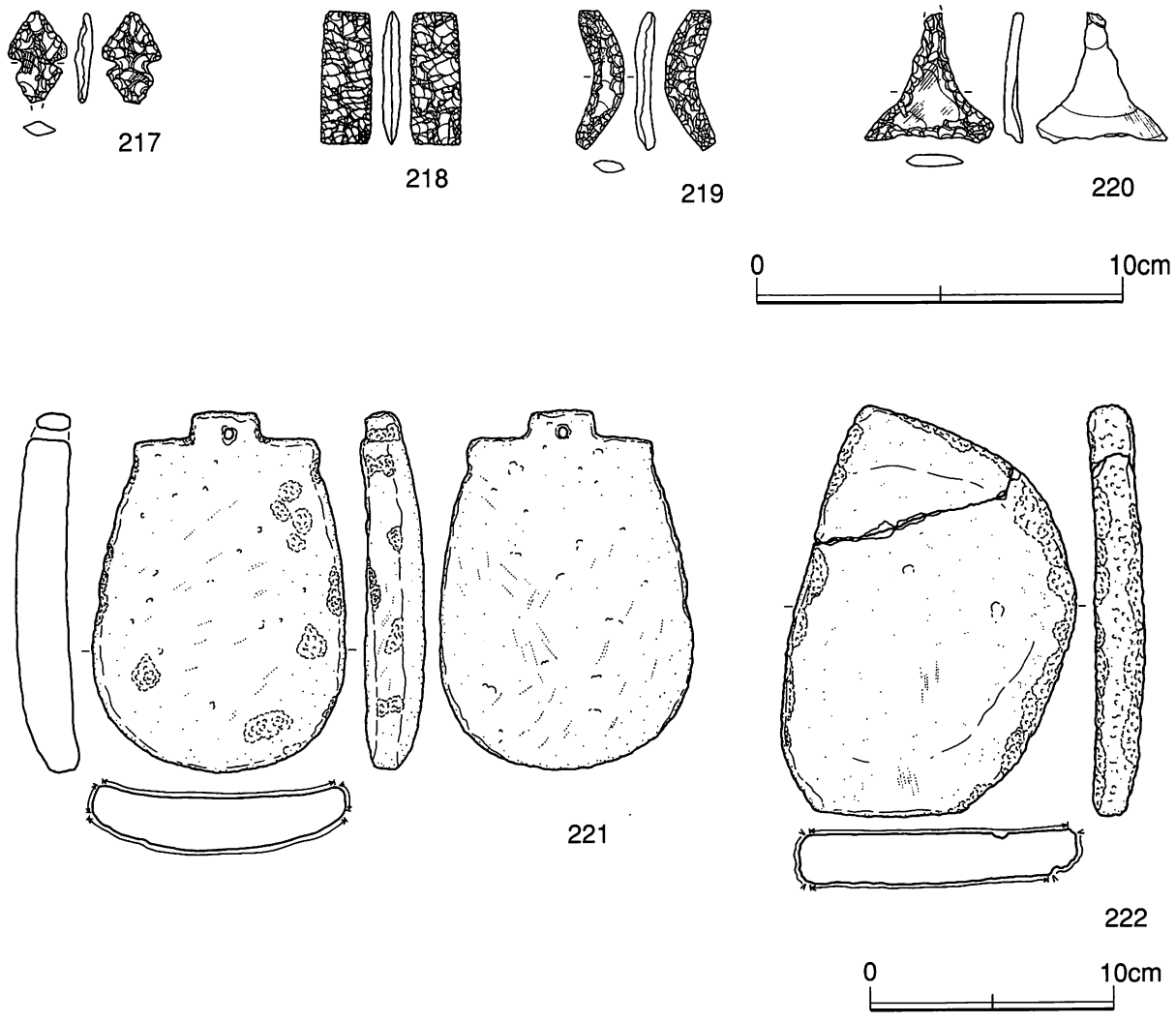
図Ⅵ-2-13　Ⅴ・Ⅵ層の石器（10）



図Ⅵ-2-13　Ⅴ・Ⅵ層の石器（11）

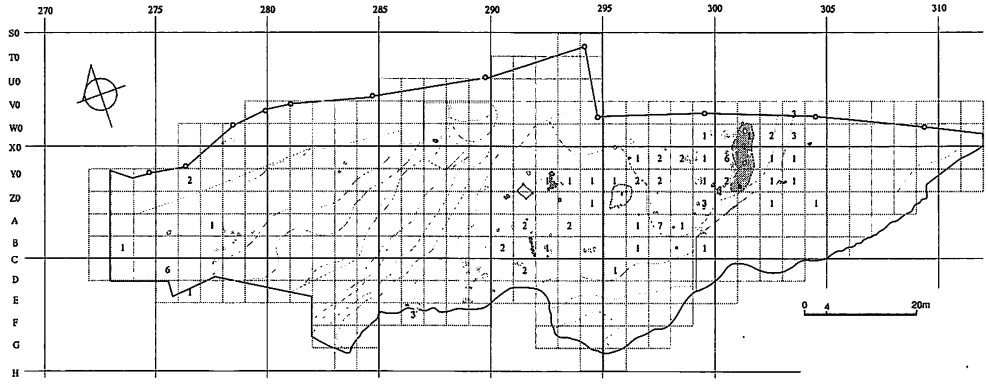


図Ⅵ-2-15　Ⅴ・Ⅵ層の石器（12）・石製品（1）

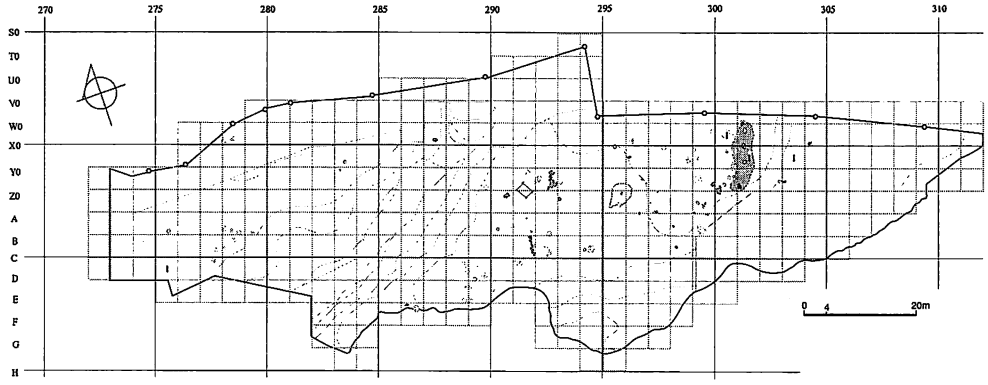


図Ⅵ-2-16　Ⅴ・Ⅵ層の石器（13）・石製品（2）

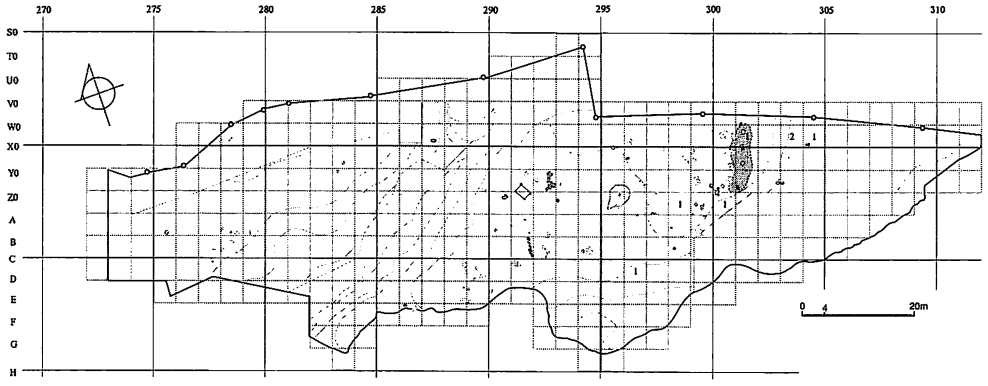
Ⅲ層　石鏃



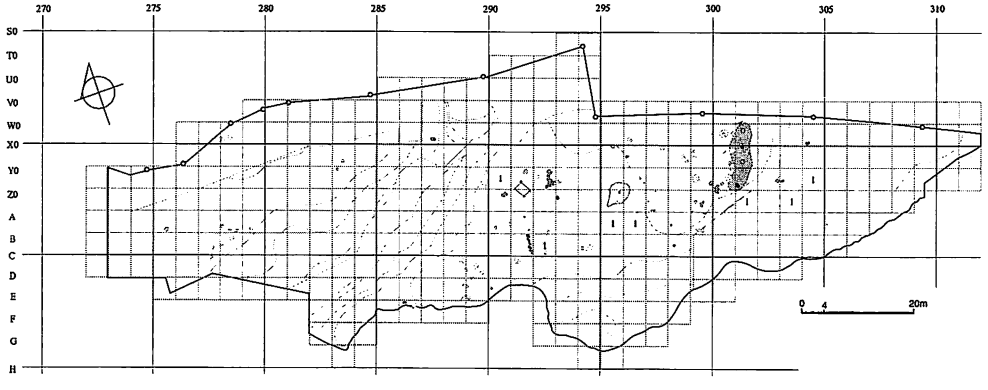
Ⅲ層　ポイント



Ⅲ層　ドリル

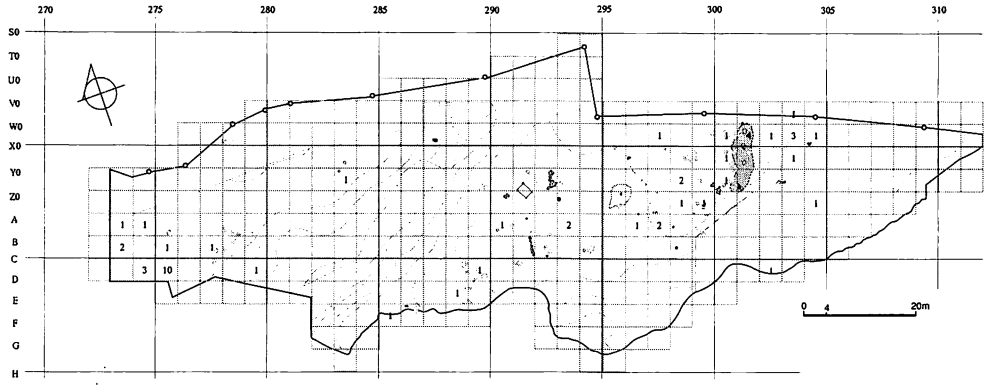


Ⅲ層　つまみ付ナイフ

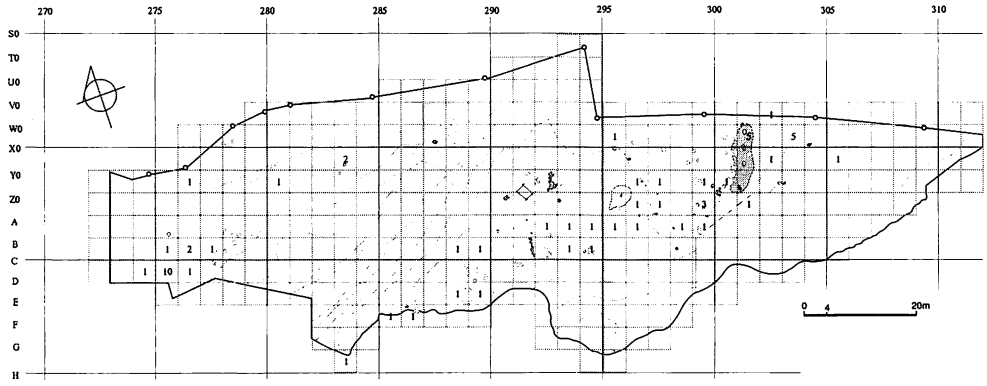


図Ⅵ-2-17　Ⅲ層の石器分布図（1）

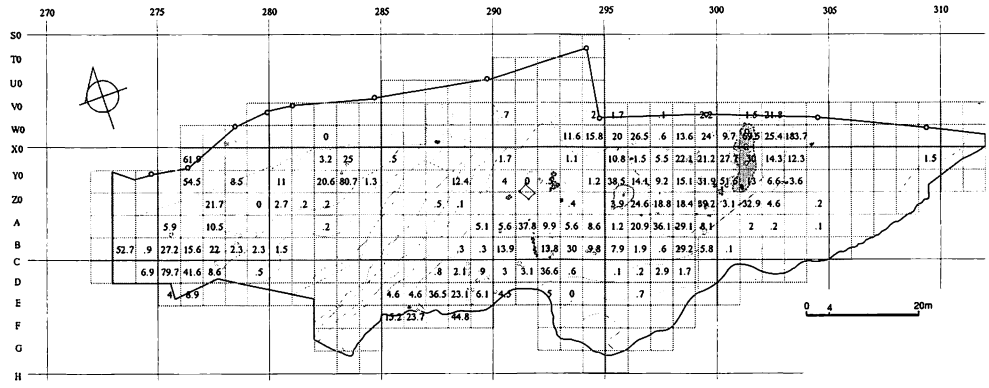
Ⅲ層　スクレイパー



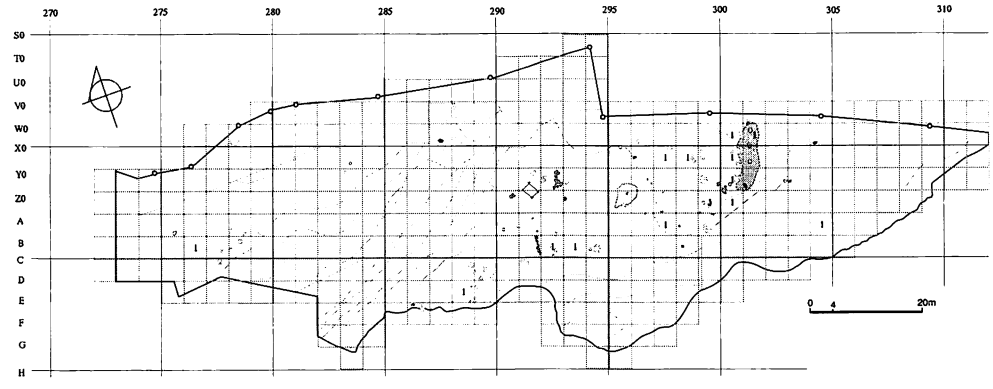
Ⅲ層　Rフレイク



Ⅲ層　フレイク

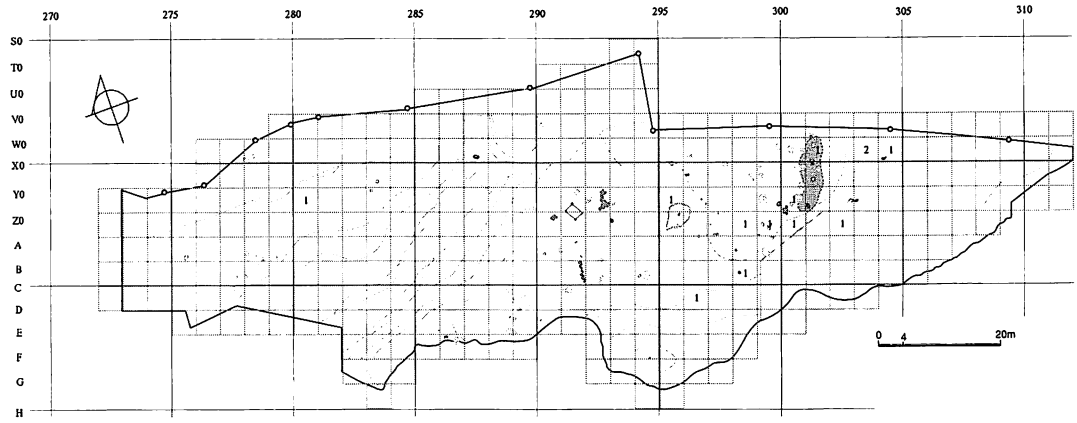


Ⅲ層　くさび形石器

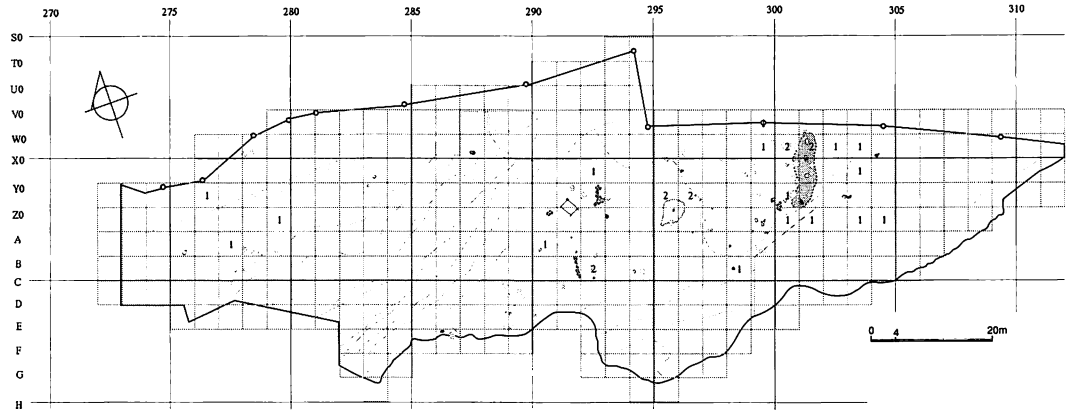


図Ⅵ-2-18　Ⅲ層の石器分布図（2）

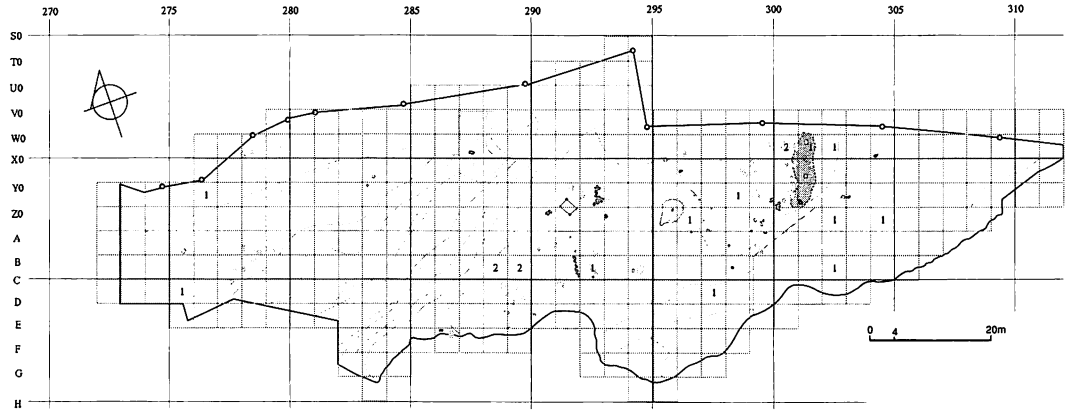
Ⅲ層　石核



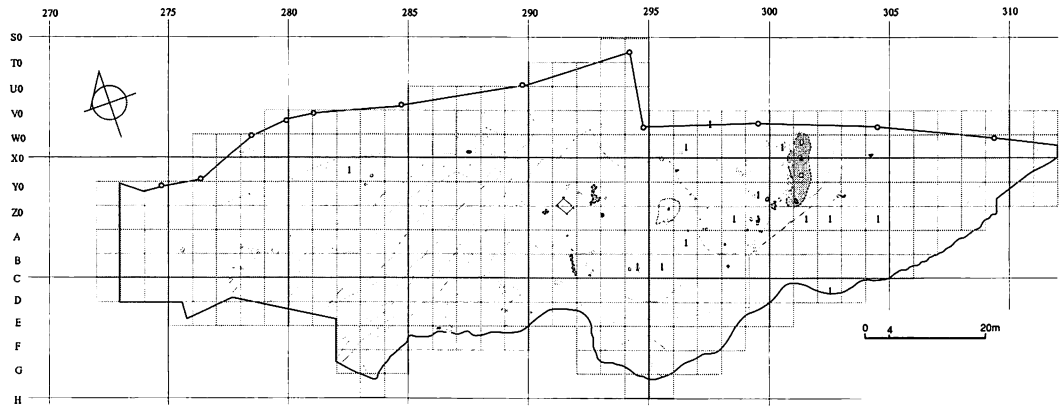
Ⅲ層　石斧



Ⅲ層　たたき石

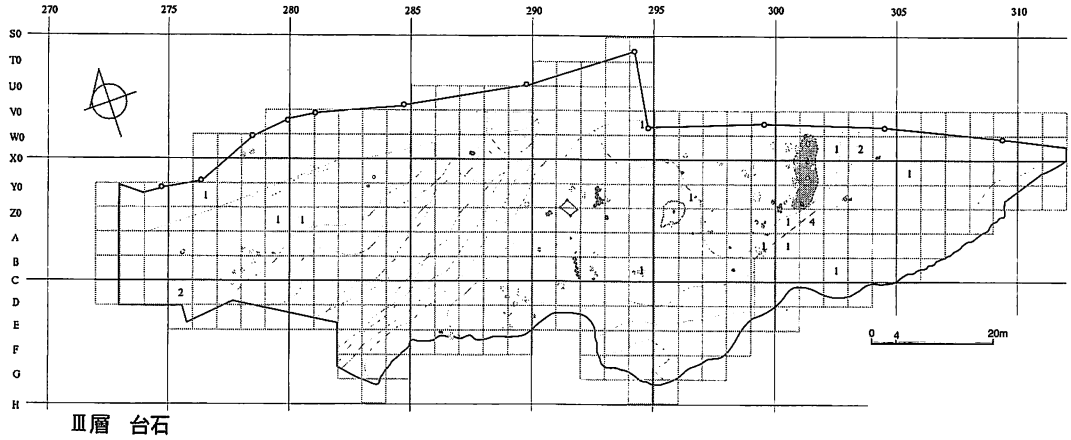


Ⅲ層　すり石

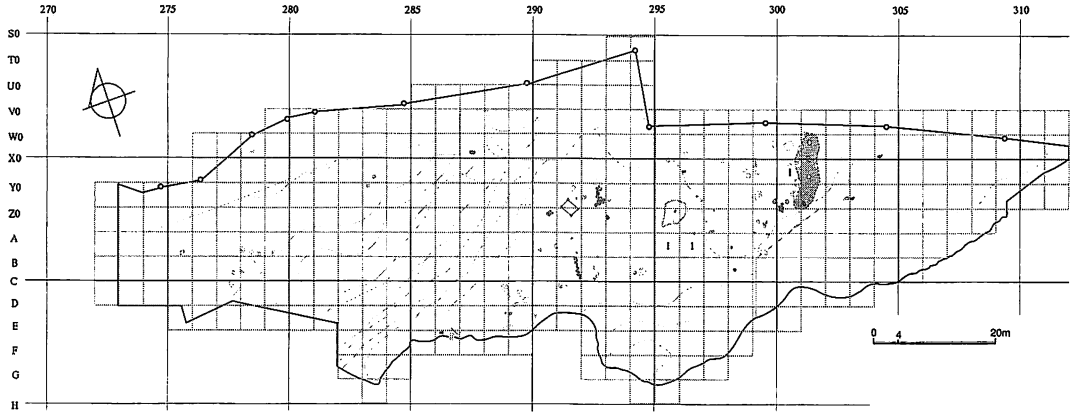


図Ⅵ-2-19　Ⅲ層の石器分布図（3）

Ⅲ層　砥石

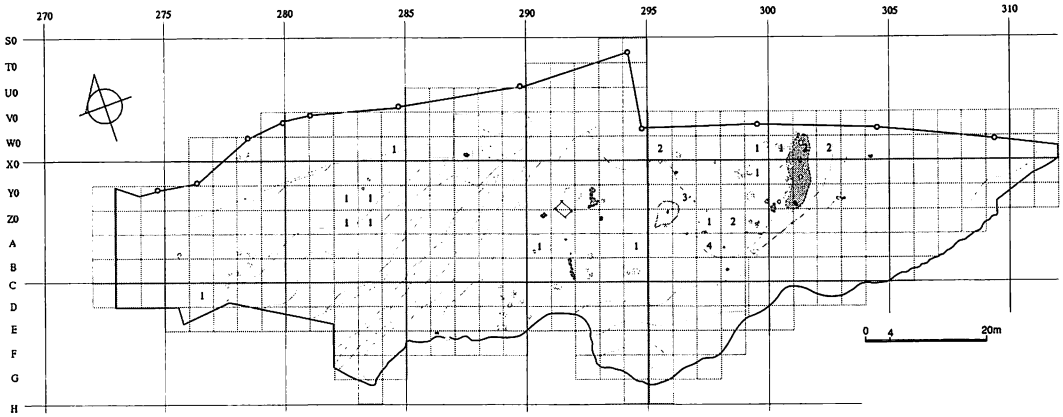


Ⅲ層　台石

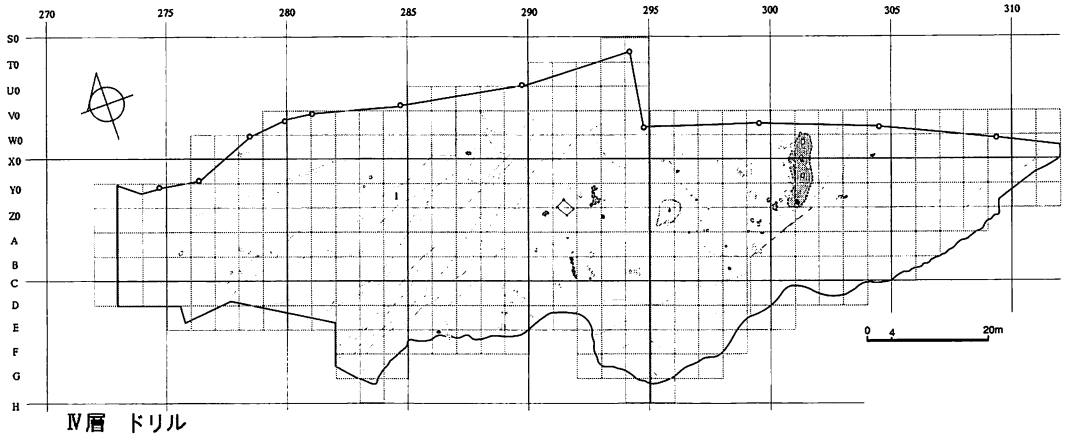


図Ⅵ-2-20　Ⅲ層の石器分布図（4）

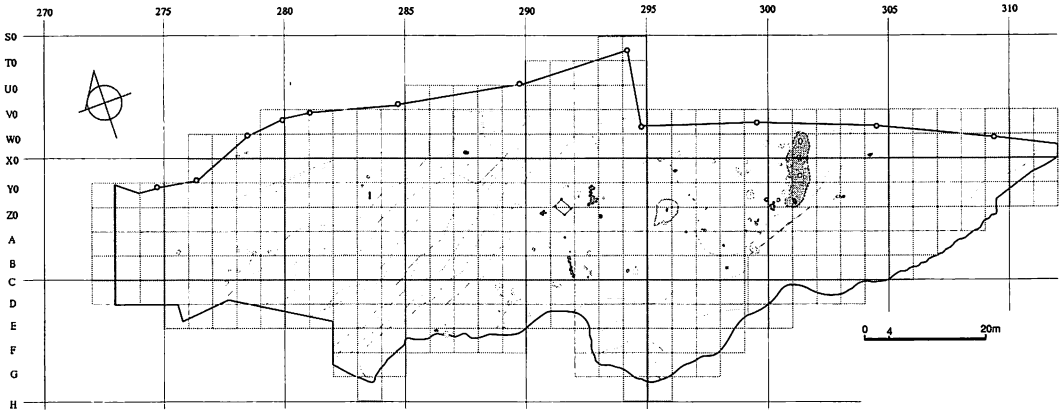
Ⅳ層　石鏃



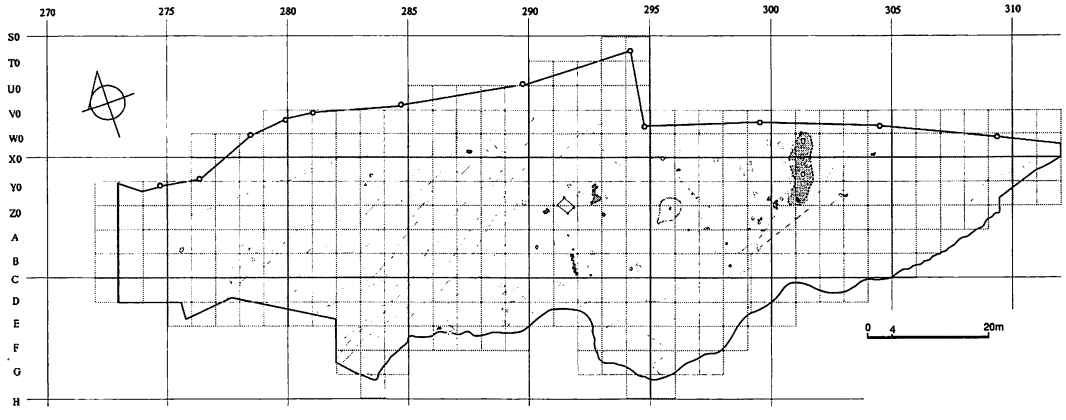
Ⅳ層　ポイント



Ⅳ層　ドリル

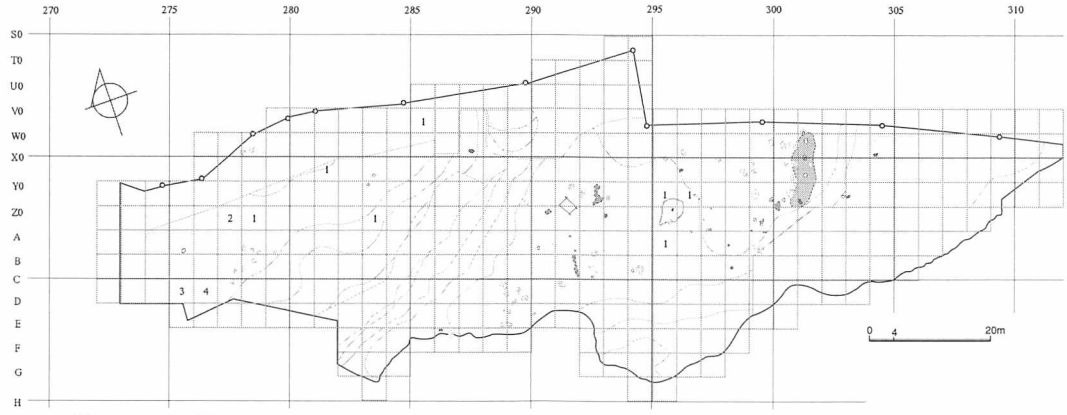


Ⅳ層　つまみ付ナイフ

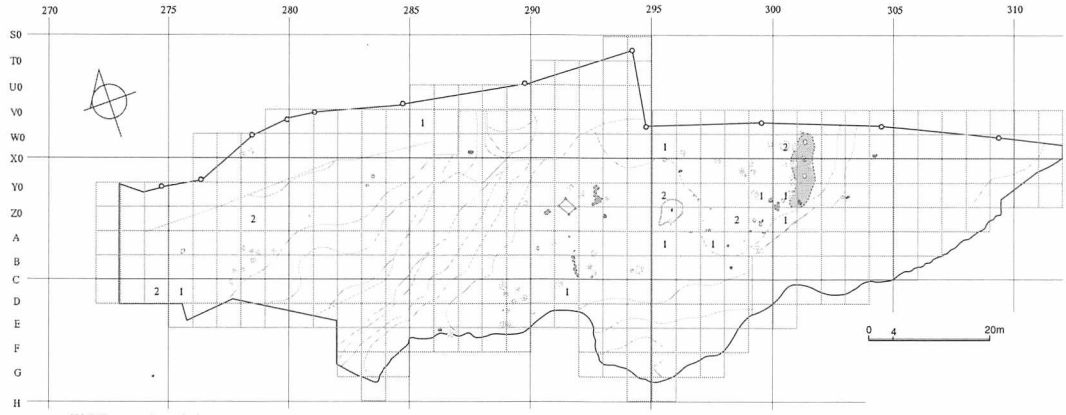


図Ⅵ-2-21　Ⅳ層の石器分布図（1）

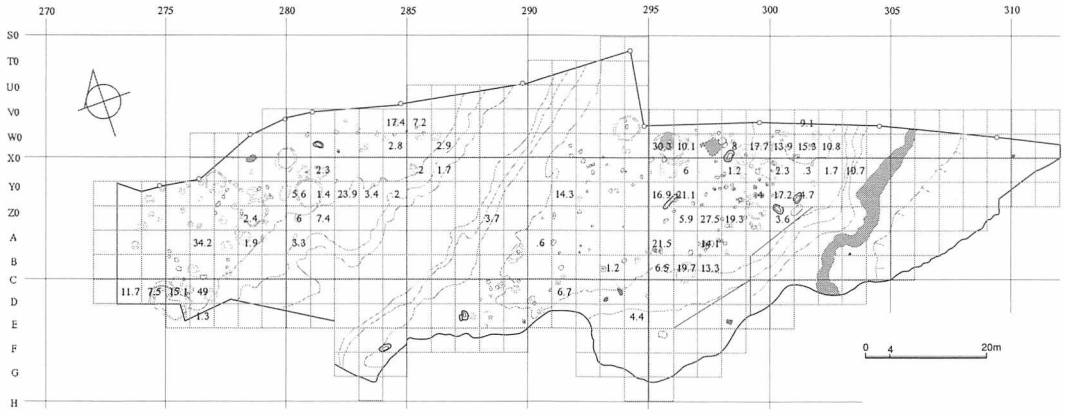
Ⅳ層　スクレイパー



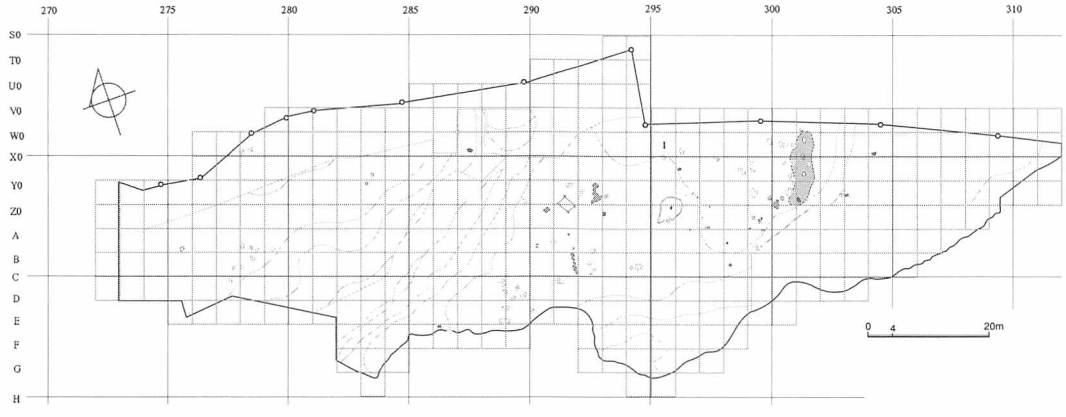
Ⅳ層　Rフレイク



Ⅳ層　フレイク

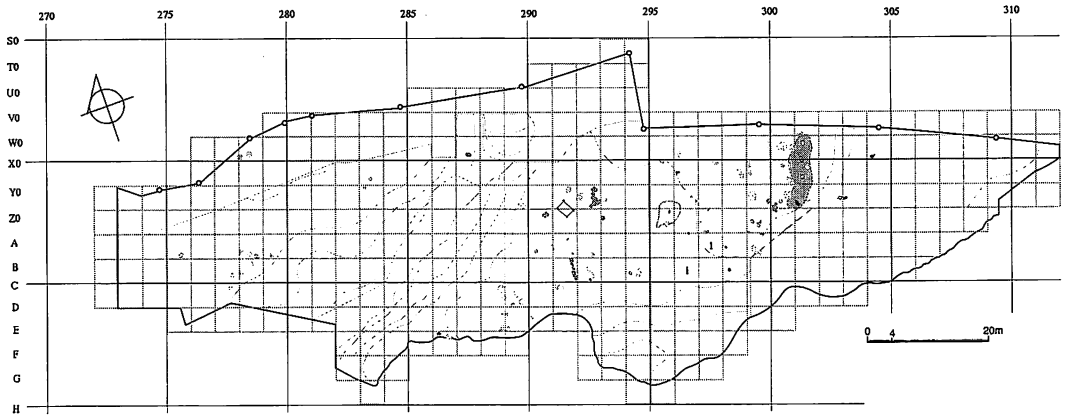


Ⅳ層　くさび形石器

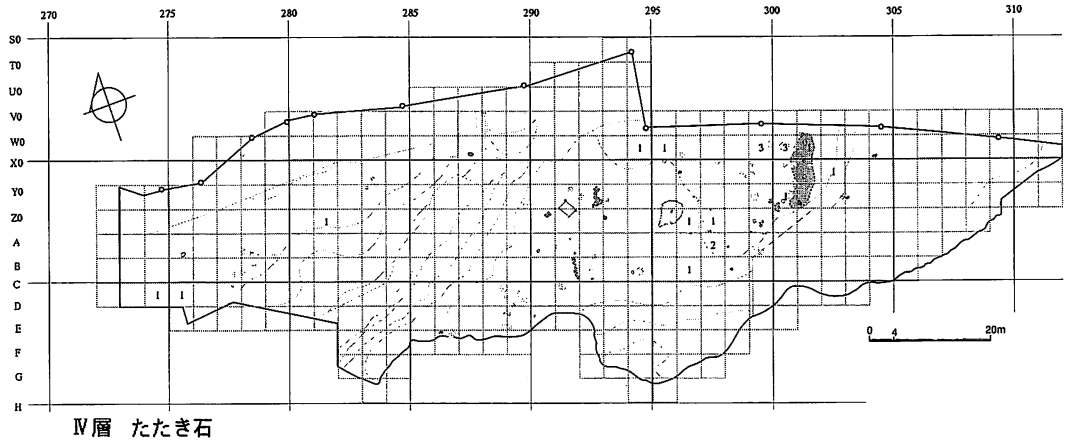


図Ⅵ-2-22　Ⅳ層の石器分布図（2）

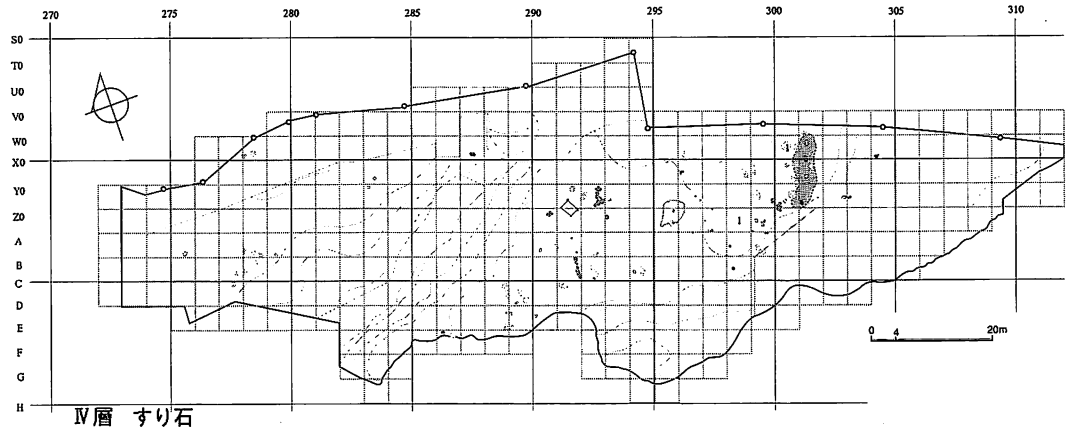
Ⅳ層　石核



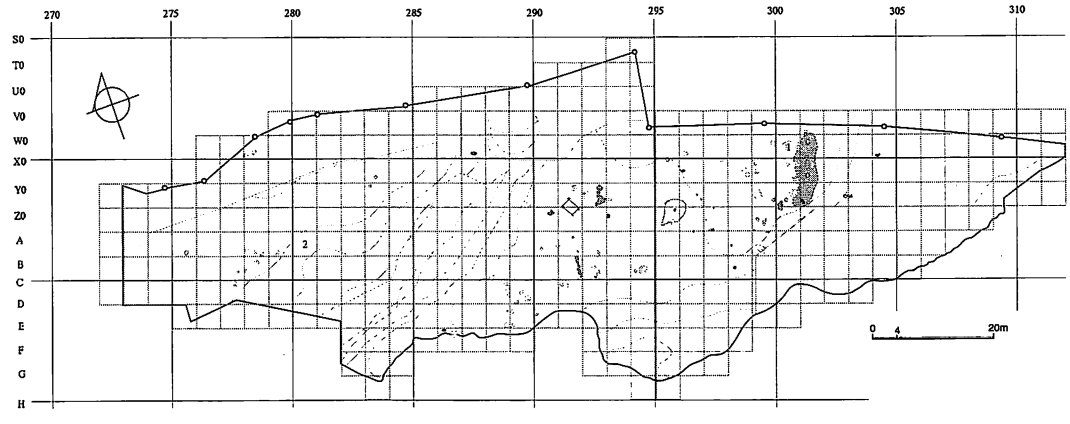
Ⅳ層　石斧



Ⅳ層　たたき石

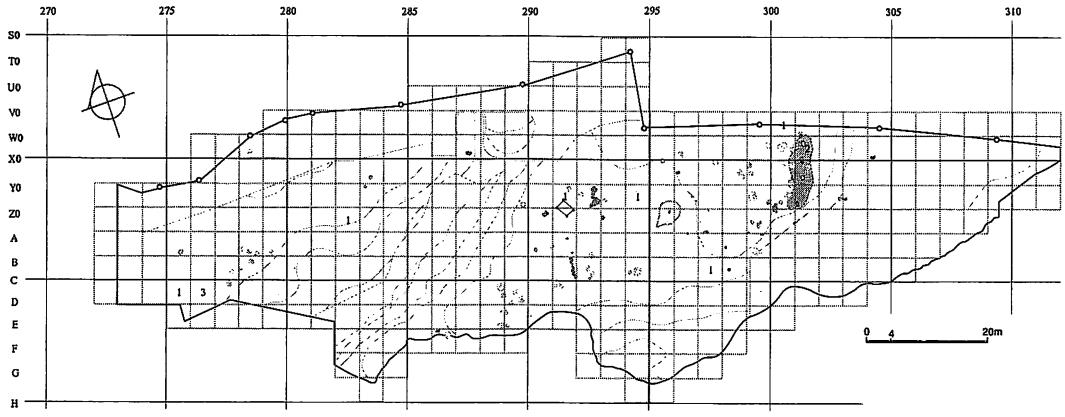


Ⅳ層　すり石



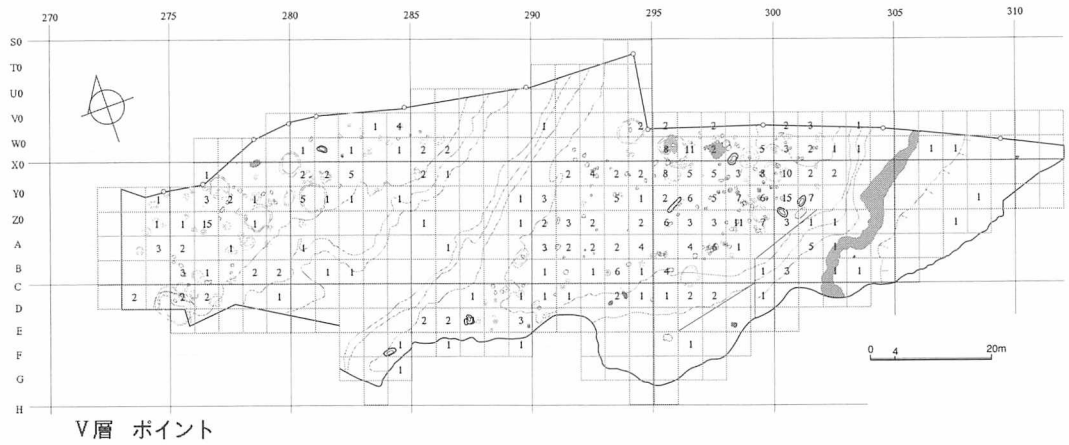
図Ⅵ-2-23　Ⅳ層の石器分布図（3）

Ⅳ層　砥石

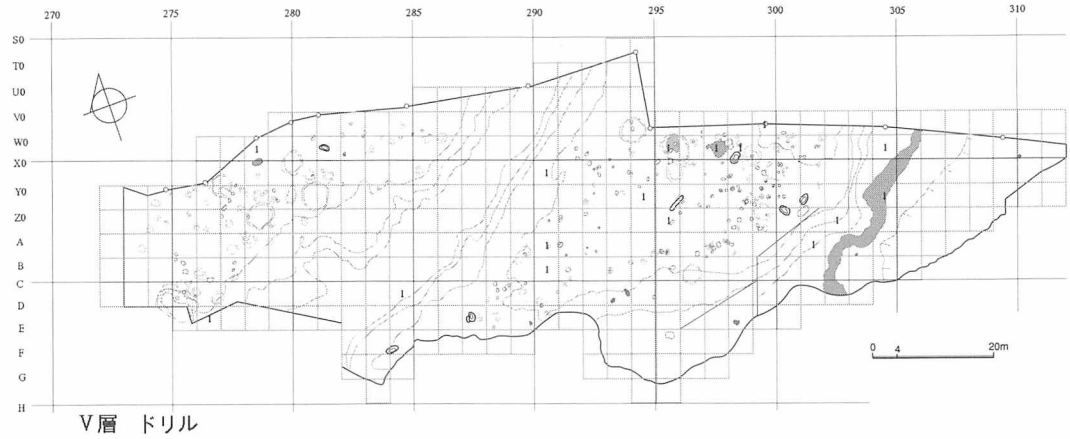


図Ⅵ-2-24　Ⅳ層の石器分布図（4）

V層　石鏃



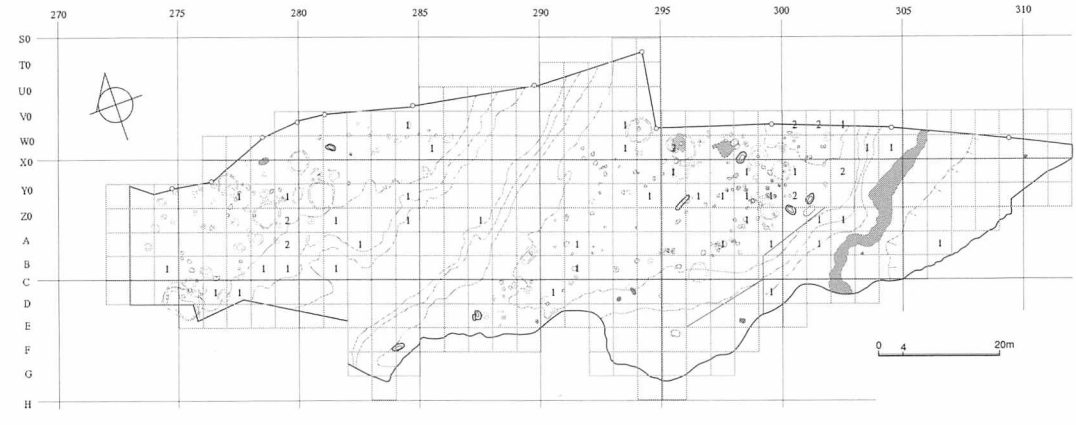
V層　ポイント



V層　ドリル

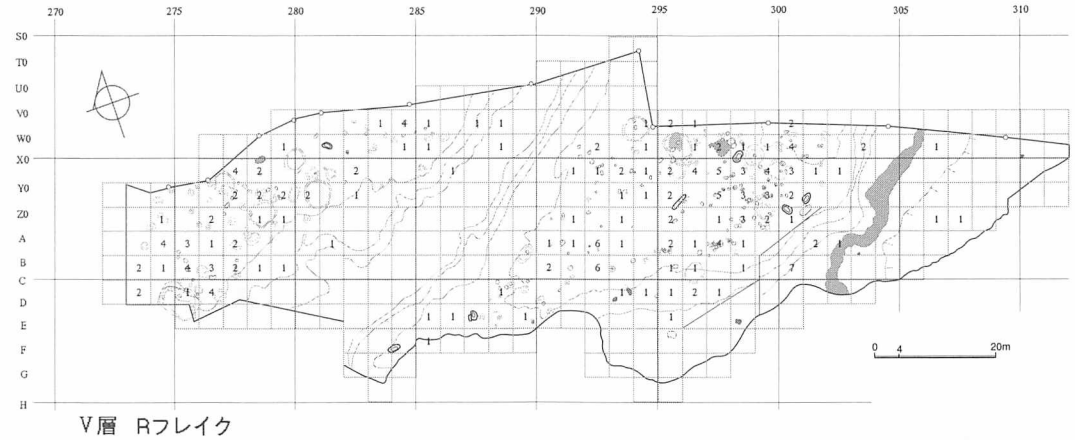


V層　つまみ付ナイフ

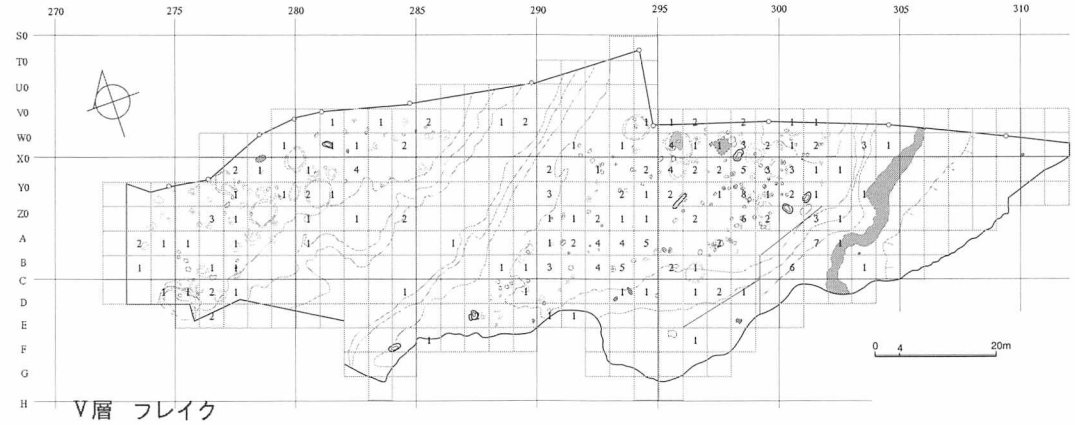


図Ⅵ-2-25　V層の石器分布図（1）

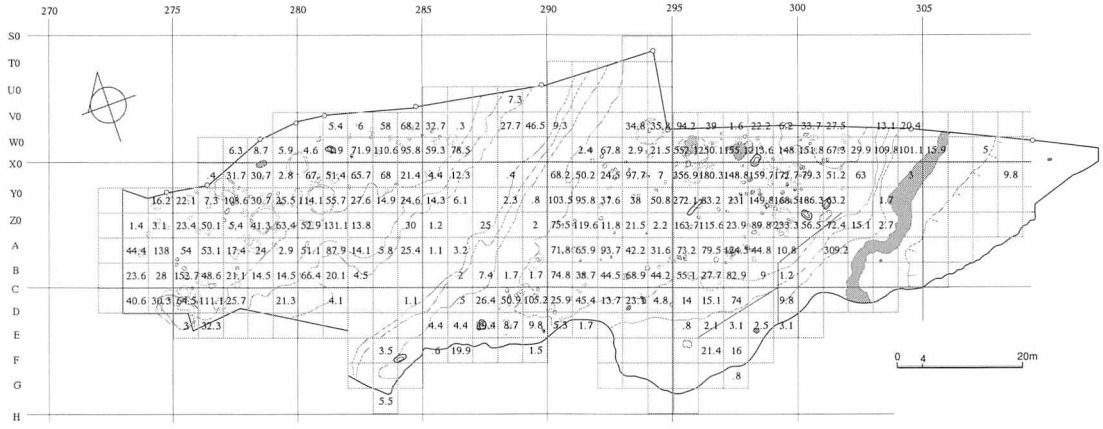
Ⅴ層　スクレイパー



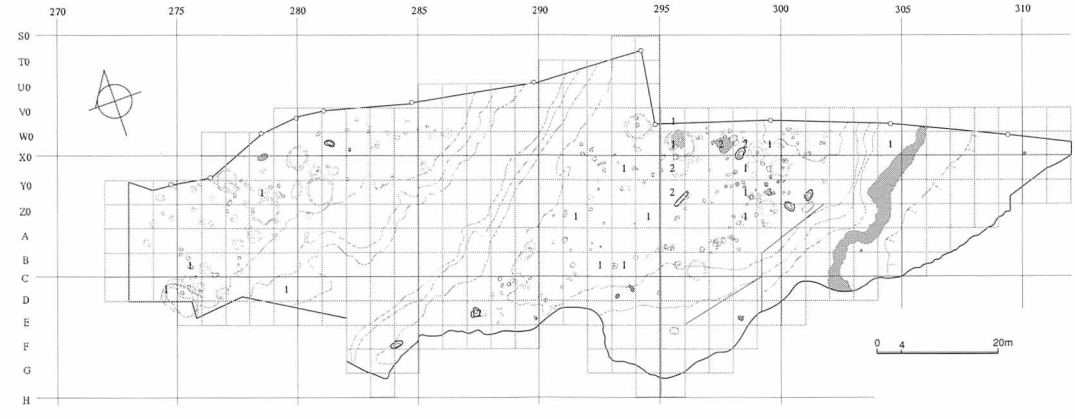
Ⅴ層　Rフレイク



Ⅴ層　フレイク

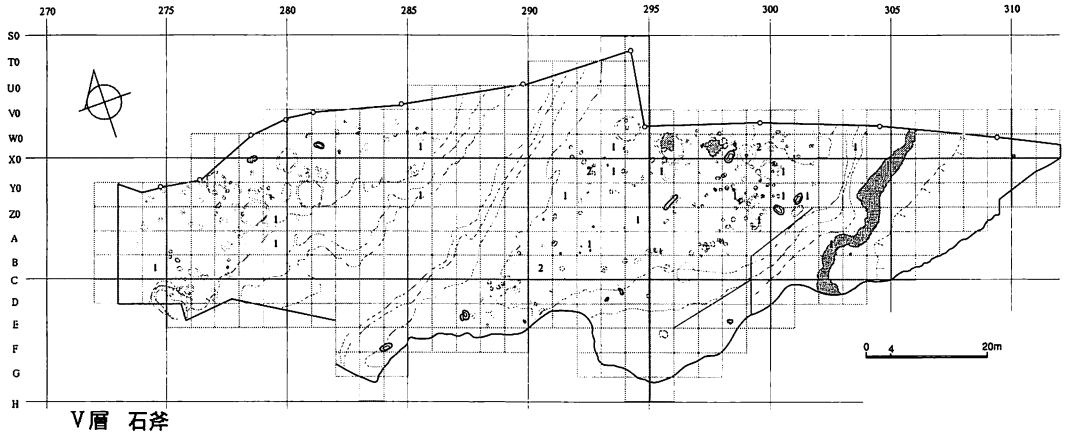


Ⅴ層　くさび形石器

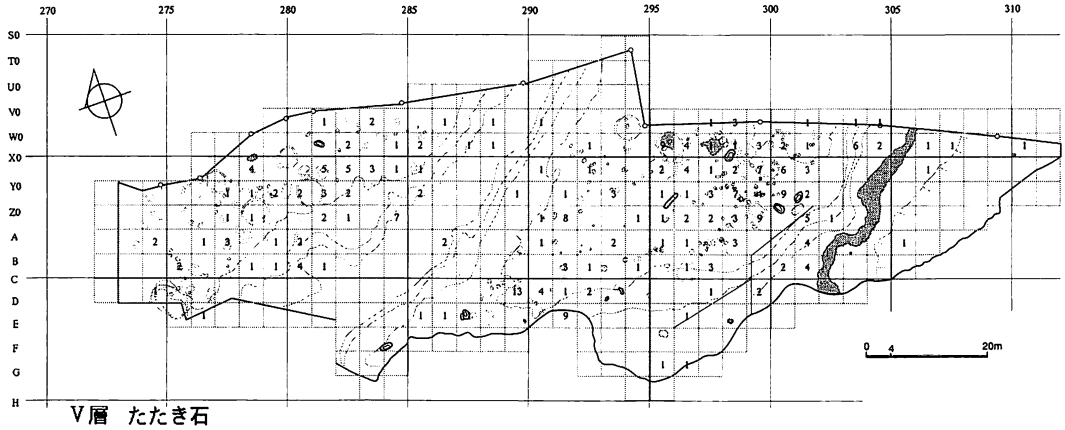


図Ⅵ-2-26　Ⅴ層の石器分布図（2）

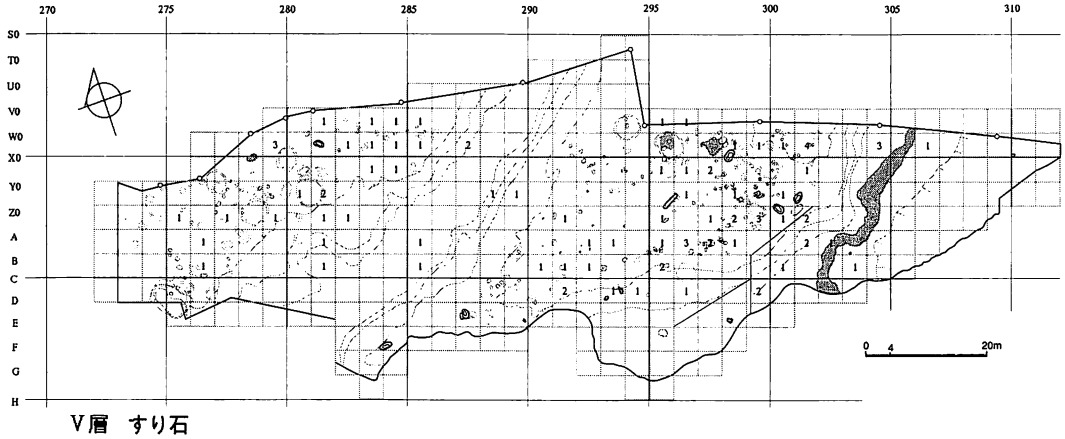
V層　石核



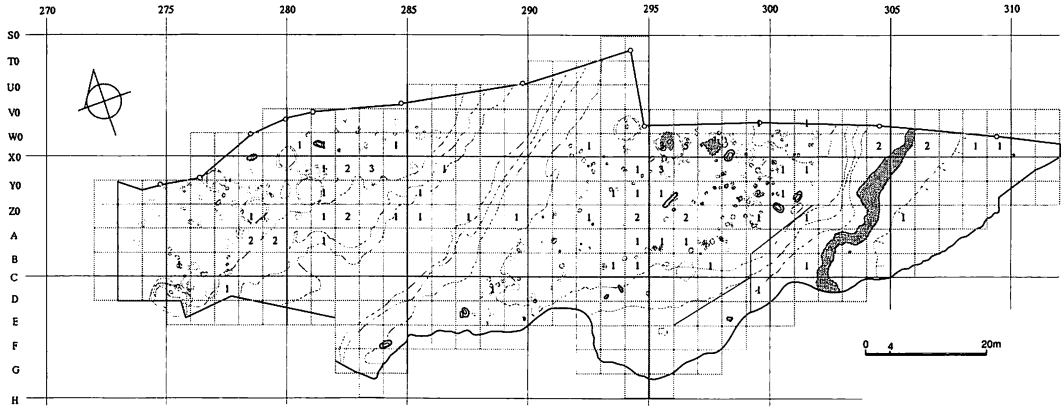
V層　石斧



V層　たたき石

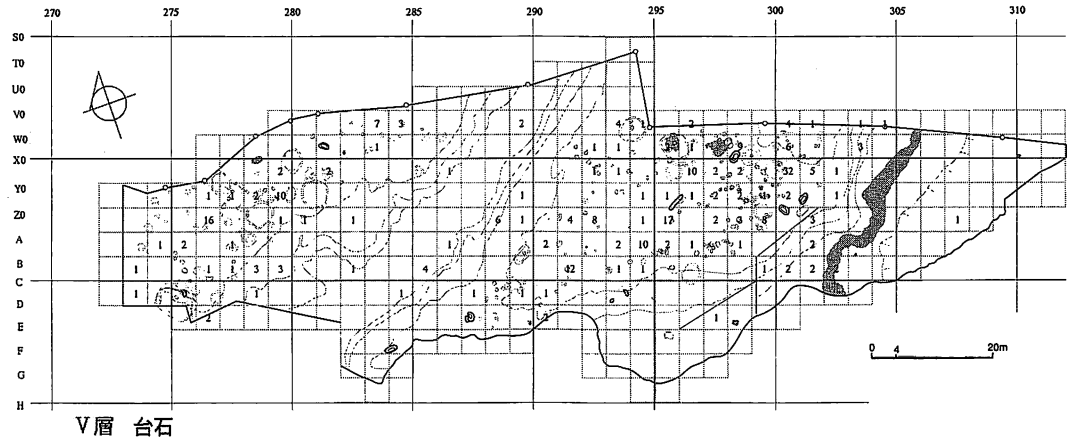


V層　すり石

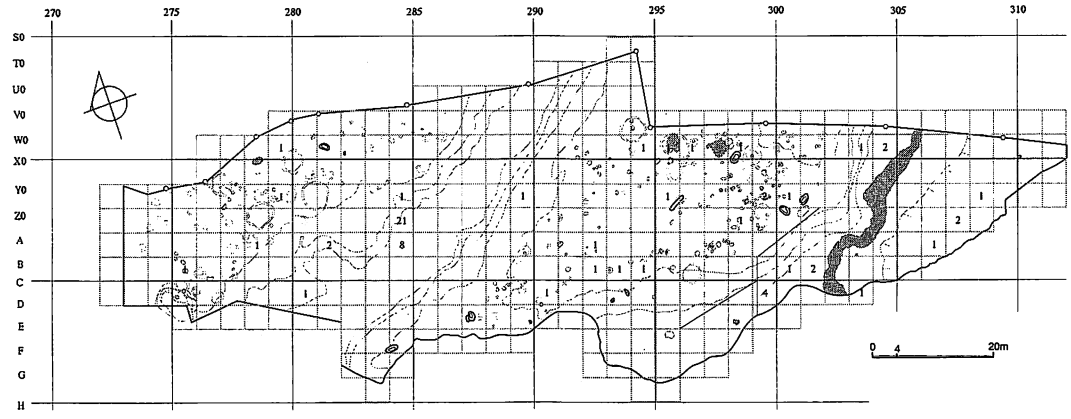


図Ⅵ-2-27　V層の石器分布図（3）

Ⅴ層　砥石



Ⅴ層　台石



図Ⅵ-2-28　Ⅴ層の石器分布図（3）

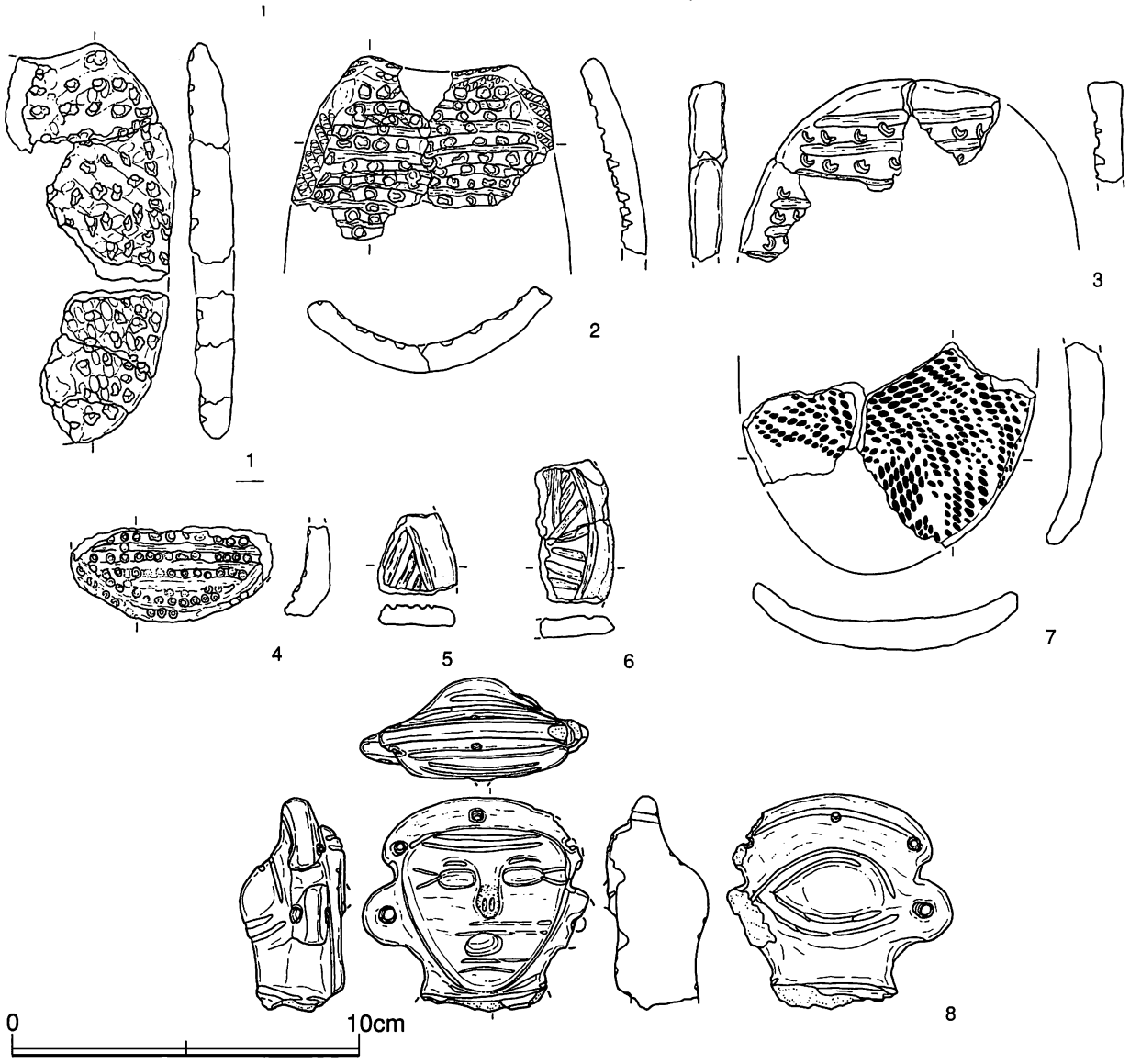
3 土製品（図Ⅳ-3-1・2／図版-143・144）

主に縄文時代後期を中心とする土製品が出土した。種類は土偶、オロシガネ状土製品、耳栓、スタンプ形土製品、土玉、土製円盤などである。

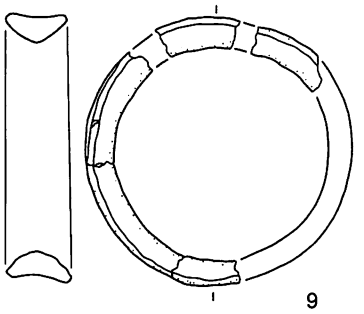
1～7はオロシガネ状土製品である。1は串状の工具による刺突が片面に施された板状のものである。2は反りのあるタイプで、片面には沈線の間に刺突を施したものが見られる。縁には縄文が施されている。3は沈線の間に半裁竹管状の工具で刺突を施している。4も沈線の間に刺突を施している。5・6は沈線が施されるもの、7は縄文が施されている。これらは全て縄文時代後期中葉のものである。

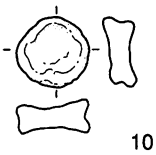
8は土偶の首部である。包含層から出土しており胴体や他の部分は見つかっていない。顔の輪郭は角の丸い逆三角形で平坦な顔面の目と口は落ち込み鼻には貼付がなされている。顔面には入れ墨を思わせる細い沈線文が描かれており、耳や髪の毛にあたる部分には貫通孔が穿たれている。9・10は耳栓、11はスタンプ形土製品である。これらも縄文時代後期末葉と考えられる。

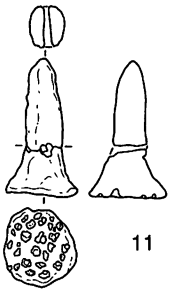
12は表面に沈線が施されてた土玉である。13～15は扁平の土製品で、13、14の片面には細かな斜行縄文が施されている。13には直線的に貫かれた極小径の貫通孔が認められる。12・15は縄文時代晩期末葉で他のものも同じ時期の可能性がある。16～18の土製品は円盤形のものである。いずれも円筒上層式の土器片を使用して加工している。19は土玉の破片と推定される。

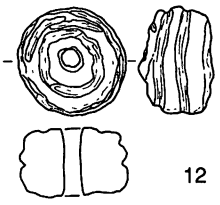


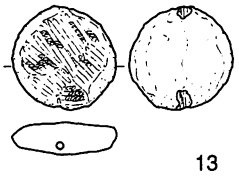
図Ⅵ-3-1　土製品（1）

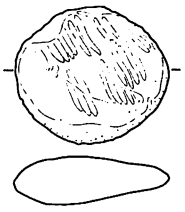

9

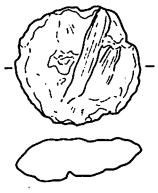

10

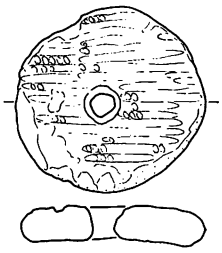

11

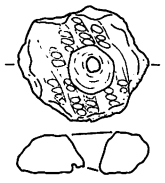

12

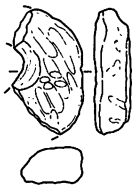

13

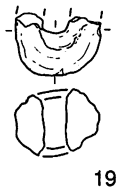

14

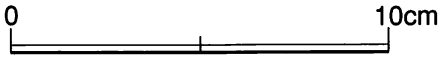

15


16


17


18


19



表Ⅵ-4　掲載土製品一覧

番号	遺物名	位置	層位	長径cm	短径	幅	重さg
1	オロシガネ状土製品	V0-283-d-002	Ⅴ層	11.6	(5.0)	1.5	50.5
2	オロシガネ状土製品	A-301-d-011	Ⅴ-5層	(5.6)	7.6	1.9	89.2
3	オロシガネ状土製品	X0-296-a-010	Ⅴ層	(5.2)	(7.8)	1.3	25.3
4	オロシガネ状土製品	A-301-d-027	Ⅴ-5層	(2.6)	(5.9)	1.5	17
5	オロシガネ状土製品	Y0-282-b-013	Ⅴ層	(2.4)	(2.3)	0.6	3.4
6	オロシガネ状土製品	Z0-281-b-008	Ⅴ層	(4.2)	(2.0)	0.6	—
7	オロシガネ状土製品	A-302-a-016	Ⅴ層	(6.0)	8.5	1.7	48.5
8	土偶	C-292-d-008	Ⅴ層	(6.2)	6.4	3.0	76.2
9	土製品	Z0-299-a-040	Ⅴ層	7.1	7.2	1.7	26.4
10	土製品	W0-300-a-086	Ⅴ層	1.9	2	0.9	2.6
11	スタンプ型土製品	X0-297-d-007	Ⅴ層	3.6	2	2.1	5.7
12	土玉	B-274-a-017	Ⅴ層	2.9	3	2	14.3
13	土製品	E-226-c-003	Ⅴ層	2.8	2.9	0.9	6
14	土製品	W0-292-b-008	Ⅴ層	3.7	4.2	1.3	15.5
15	土玉	A-290-c-002	Ⅴ層	3.2	3.4	1.1	9.4
16	土製品	X0-296-c-026	Ⅴ層	5	5.1	1.1	22.2
17	土製品	W0-281-c-011	Ⅴ層	3.1	3.5	1.1	8.8
18	土製品	A-281-a-011	Ⅴ層	3.3	2	1	5
19	土玉片	X0-278-a-015	Ⅴ層	1.7	2.3	1.8	4.8

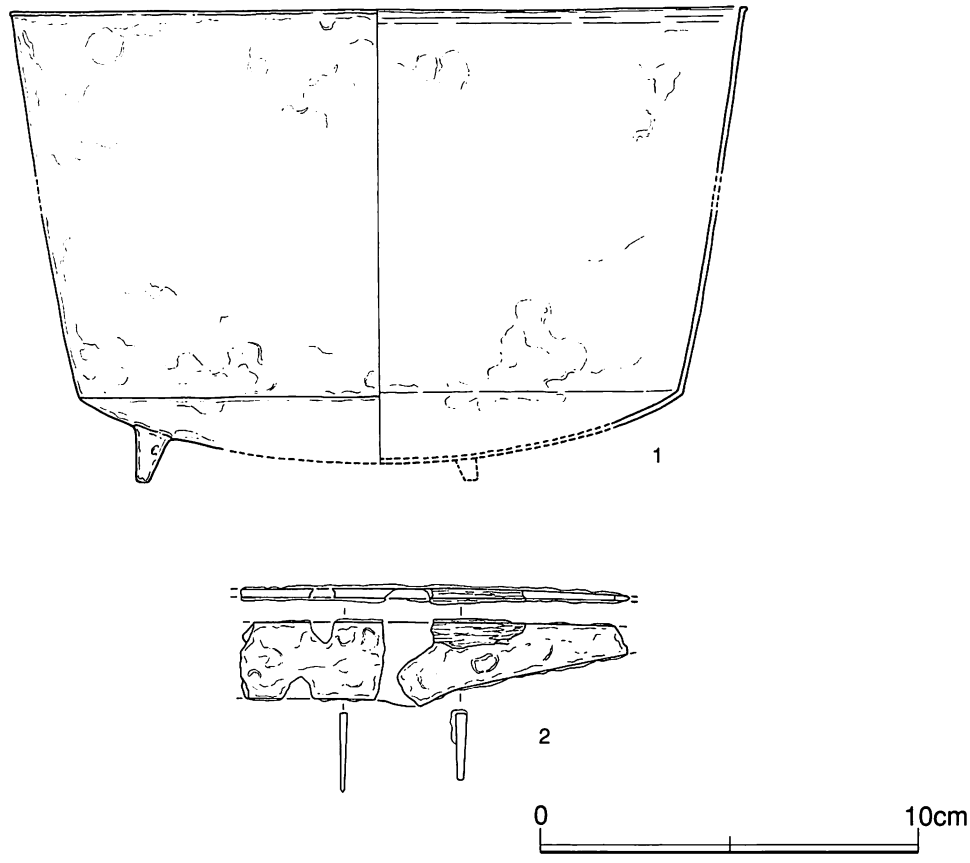
表Ⅵ-3　包含層石製品・土製品一覧

	石製品					土製品						金属製品	
分類	垂飾	勾玉	玉	オロシガネ状	その他	土偶	土玉	オロシガネ状	スタンプ型	焼成粘土塊	その他	鉄製品	鉄鍋
Ⅲ層	1	1	1							1	3		
Ⅳ層			10							1	1		
Ⅴ層			4	4	1	1	2	18	2	7	19		
Ⅴ-3層								2					
Ⅴ-5層			1		1			3					
Ⅵ層											1		
撹乱					3						1		
表採・排土													1
層不明												1	
点数	1	1	16	4	5	1	2	23	2	9	25	1	1

図Ⅵ-3-2　土製品（2）

4．包含層出土の鉄製品（図Ⅵ-4-1-1、2／図版-148）

1は鉄鍋。接合した口縁部破片が3点、底部破片が3点である。いずれも表採、排土、Ⅲ層中の撹乱から検出されたもので、層位的に不明瞭なものである。ただし、それぞれの厚さ、底部からの立ち上がりの角度、質感が同様であること、また赤沼氏の分析結果から判断して、同一個体の可能性が大きい。よって図上復元としてあわせて掲載した。口縁部と胴部の境目は不明瞭だが、底部からの立ち上がりは明瞭で、稜線がはっきりと認められる。口縁部は平縁で、内面には2段の横走するケズリらしき痕跡が認められる。底部破片のうち1点は脚を一つもつ。同様に図上復元されたものであるが、瀬田内チャシ跡遺跡出土資料等から、3脚のものと考えられる。また推測の域を出ないが、吊耳鉄鍋と思われる。平成6年度調査区域から出土したもので、保存処理等のため当年度報告書には未掲載だったものである。2は刀子。刃部破損品である。平棟平造りで、緩やかな刃区が認められる。茎の棟縁辺に木質が残る。目釘孔は認められない。刃部は幅が狭くなっており、使い減りによるものと思われる。



表Ⅵ-5　包含層掲載鉄製品

図番号	図版番号	遺物名	発掘区・遺構名		層位	長径	幅	厚さ	重量(g)	材質		破片	備考	保存処理
		鏃先	UP-119	7	周辺	21.5	19	1.7	416.9	鉄	1		表面に木質付着	NAD10
		刀	UP-138	9	覆土	61.8	元幅3.2	木質2.5刀身0.8	693.6	鉄	1		鞘．柄の木質残存付着	B72.NAD10
		刀子	US-110	2	覆土	(5.4)	1.8	0.5	(8.4)	鉄	1		柄部のみ．木質一部付着	NAD10
1		鉄鍋	表土．排土．撹乱		Ⅲ層撹乱他	高さ（24．7）	口径（39.2）	0.4	(693.6)	鉄	1	6	部分的に接合．推定復元図掲載	NAD10
2		刀子	C-274-a	4	Ⅲ層1回目	(10.3)	2.2	0.3	(17.2)	鉄	1	2	接合復元．柄部に木質付着	NAD10

図Ⅵ-4-1　鉄製品

5　木製品（図Ⅵ-5-1～4／図版-149～154）

Ⅴ－3層旧河道出土の木製品

地点は若干異なるが、昨年度に引き続いて低位段丘から、木製品が数点出土している。平成8年度には6年度未調査の低位段丘部分を主体的に調査しており、引き続いて木製品が数十点出土している。なお8年度調査報告書は平成9年度刊行予定である。当地区出土の木製品についてはそちらであわせて考察することとし、以下にはそれぞれの特徴のみを記載する。

舟形容器（図Ⅵ-5-1-1／図版-149～151）

丸木舟状の浅鉢と考えられるもので、6割程欠損している。残存部で最大長86.3cm、器高11.5cmをはかる。半割材を横木取りでくりぬいたものである。痕を明瞭に残し、口唇部以外ほとんど研磨されていない点が特徴的である。平面形は残存部の形状から、先端が緩やかに湾曲した隅丸の六角形～長楕円形を呈するものであろう。底部は短辺（木目直交方向）、長辺（木目方向）とも外湾した丸みを帯びた形状で、側面形は緩やかに反り上った形状となる。器壁の厚さは一定ではなく、短辺の立ち上がり部分および底部中央付近に特に厚みをもつ。また口縁部は短辺が厚く、長辺は薄く仕上げられている。口唇部の断面形は一方の短辺とその屈曲部周辺は幅のある平縁で、それ以外は丸みを帯びたものである。屈曲部にはそれぞれL字状の抉込みが認められ、欠損した反対側にも存在していたものと思われる。

痕は、内外面とも明瞭で、特に底部は凹凸が著しく残り、断面形状にも表われる。底部内面には焼け痕が認められることから、焦がし削りがなされたものと考えられる。加痕の単位は約2～3 cm径が主体である。底部からの立ち上がり部分や口縁部付近は、さらに細かい約1.5cm径の加工痕が認められる。樹種はトネリコ属。

槌状木製品（図Ⅵ-5-2／図版-152）

横断面がおよそ楔形を呈する槌状の木製品。身部の平面形は頭部方向に広がる形状である。柄部は一側面の延長線上に作り出されており、身の最大幅に比して細い。下端は欠損している。側面は一方が湾曲した凸状で幅広く、もう一方はおよそ直線的で前者に比して幅は狭い。痕は身の頭部および下部で明瞭に認められる。それ以外は曖昧な稜線が認識できる程度である。表面の段のついた凹みは、加工時の整形もしくは欠損と思われる。使用痕および用途は不明である。木取りは枝分かれ部を利用した心持材である。樹種はカエデ属。

平成6年度調査時に出土した例から4例目で、Ⅳ群b～c類時期に位置付けられるⅤ－3層旧河道出土例としては2点目となる。2例とも、およそ形状が似ており、木取りの点でも共通する。Ⅴ群c類時期所産のものと形態・木取りが異なるのは、時期差もしくは用途の違いに因るものであろうか。

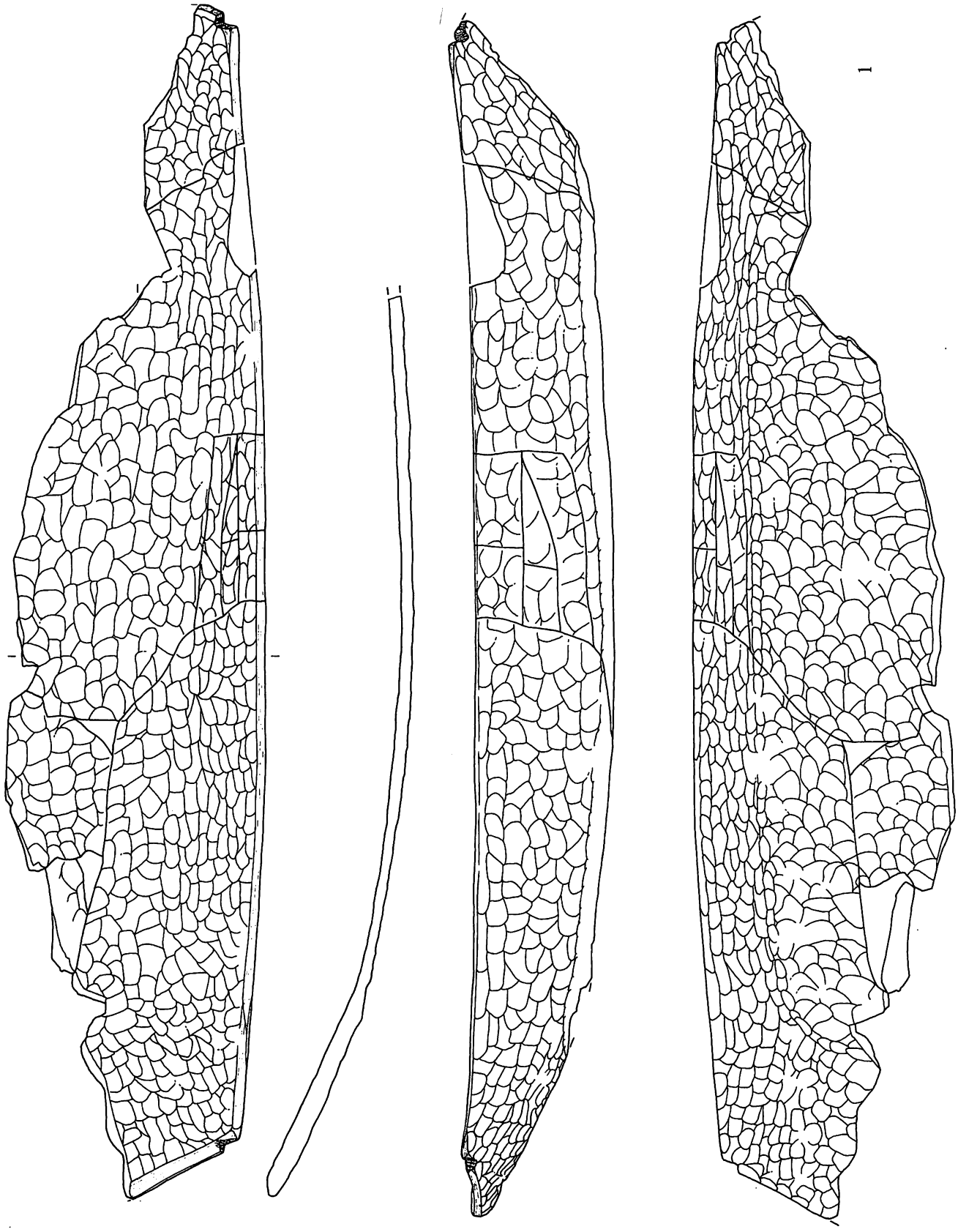
尖頭加工棒（図Ⅵ-5-3／図版-153）

両端部が尖頭状に加工された棒状の木製品。中央付近の節部分で最大幅となる。断面形は、この節部を境に上下互いにおよそ90度ねじれた長楕円形を呈する。

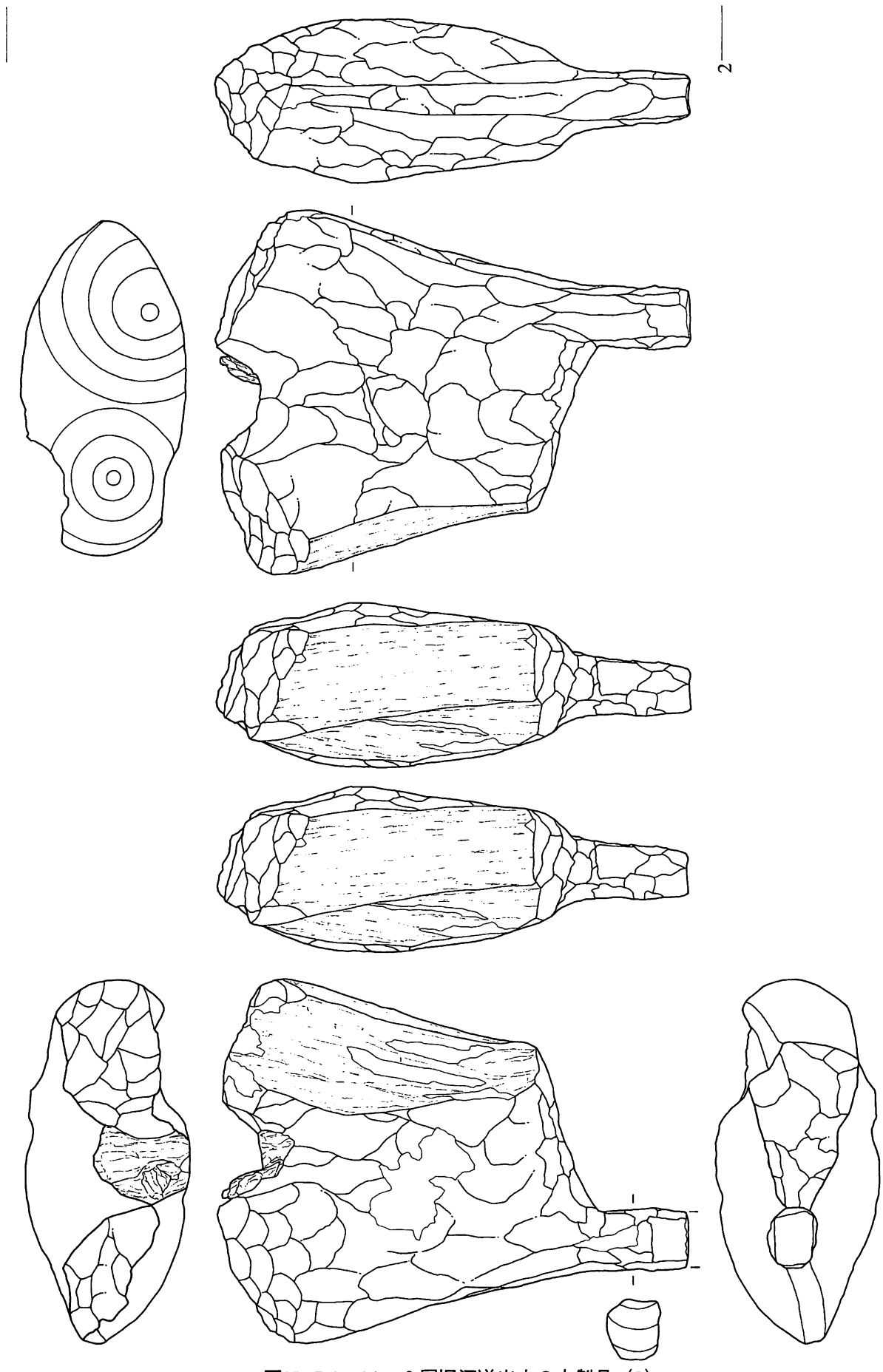
上部先端は若干欠損している。痕は節付近および両端部は明瞭だが、それ以外は部分的に稜線が認識できる程度である。使用痕、用途は不明である。木取りは分割材で、樹種はコナラ属。

表Ⅵ-6　包含層掲載木製品

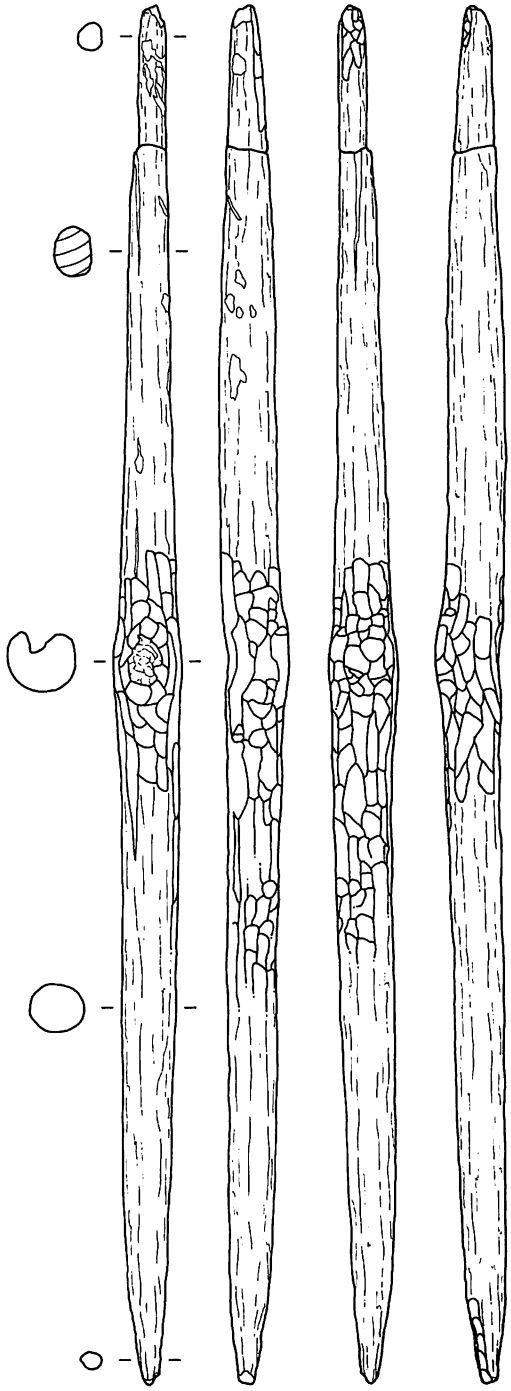
図番号	図版番号	遺物名	発掘区・遺構名	層位	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	長さ	幅	厚さ	湿重量	乾重量		破片	備考
1	1	舟形容器	Y0-308-c ,Y0-309-b	V-3層旧河道	L-37	横木取り	－	○	トネリコ属	(86.3)	(18.7)	(1.6)	－	(816.6)	1	5	器高11.5cm 保存処理後に実測
2	2	槌状木製品	X0-309-a.b	V-3層旧河道	L-40	心持材(設木)	－	○	カエデ属	25.3	19.5	8.8	(1620.4)	－	1		
3	3	尖頭加工棒	A-306-a.b	V-3層旧河道	L-154	分割材	－		コナラ属	109.5	5.5	5.6	(1420.4)	－	1	1	
4	4	加工材	A-305-a	V-3層	L-140	板目	－			60	32.6	10.1	9340.7	－	1	13	
5	5	加工材	A-286-b	V-3層	L-3	板目	－	○		46	10.9	5	722.3	－	1		
－	6	加工材	X0-308-a	V-3層旧河道	L-39	板目	－		カツラ	－	－	－	(3840.0)	－	1	多数	写真図半のみ掲載
6	7	板	B-286-a	V-3層	L-15	板目	－		カツラ	44.7	8.8	1.6	341	－	1	4	
7	8	割材	Y0-308-d	V-3層旧河道	L-36	分割材	－		コナラ属	31.7	7.2	4.3	337.4	－	1		
8	9	泥炭製品	A305-d	V-3層旧河道	L-43		－		－	6.3	5.5	4.5	84	－	1	4	泥炭塊を加工したもの



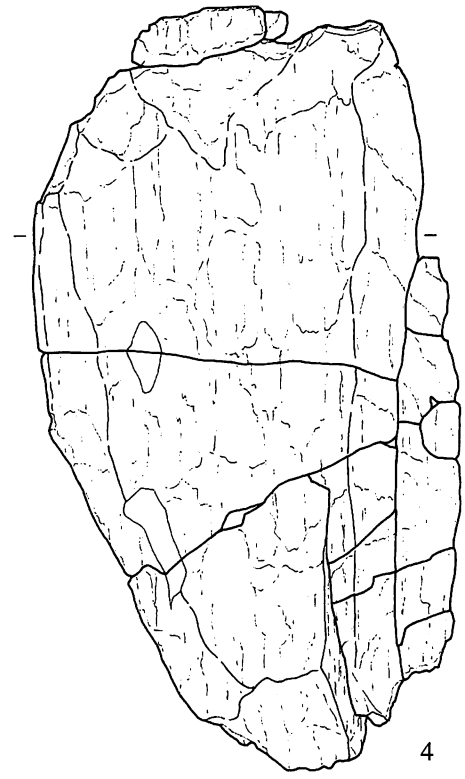
図Ⅵ-5-1　Ⅴ－3層旧河道出土の木製品（1）



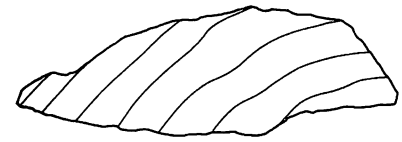
図Ⅵ-5-2　Ⅴ－3層旧河道出土の木製品（2）

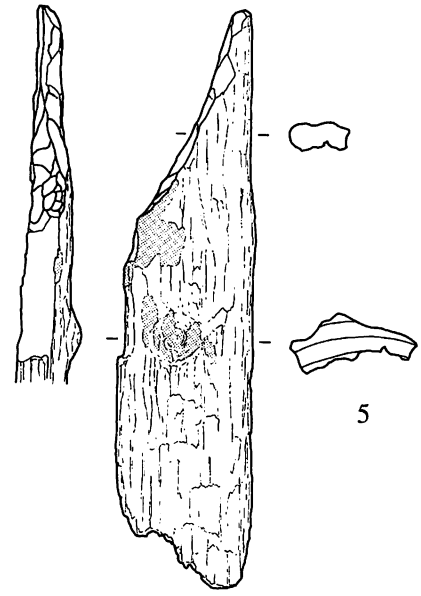


3



4





5

図Ⅵ-5-3　Ⅴ－3相当層・Ⅴ－3層旧河道出土の木製品（3）

加工材（図Ⅵ-5-3-4～5／図版-153）

部分的に加工痕および加工面が認められるものを加工材とした。4は長さ60cm、幅32.6cm、厚10.1cmをはかる比較的大型のもの。表面の下部に明瞭な稜線が認められ、縦断面形は急角度をなす。打ち削り、もしくは切断加工による痕跡と推定される。5は上部側縁に、削り痕が認められる。表面に節部を残す。図版－6は樹皮付きのもので、樹皮の一部に3つの方形のオーゾ穴状のものが認められる。加工痕の可能性が考えられるものとして、写真のみ掲載した。木取りはすべて板目で、樹種は4がトリネコ属で、5と図版－6がカツラ属。

板（図Ⅵ-5-4-6／図版-154）

板状の材。下部側縁の一部に削り痕が認められる。また摩耗しているため明らかではないが、上部の内湾した側縁も形状から判断して、加工による可能性が考えられる。樹種はカツラ属。

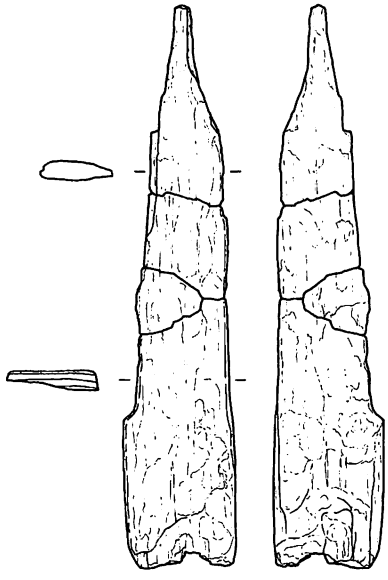
割材（図Ⅵ-5-4-7／図版-154）

断面三角形状のいわゆるみかん割りによる分割材と思われるもの。削り痕は認められない。樹種はコナラ属。

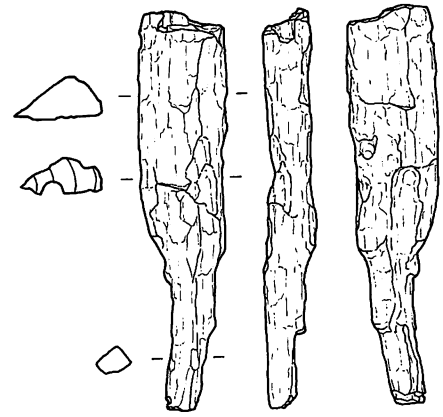
泥炭製品（図Ⅵ-5-4-8／図版-154）

泥炭の塊を素材とするボール状の加工品。比較的硬質である。割れ面から直接切片を採取し、生物顕微鏡で観察したところ、無数の草本植物遺体を確認できたため、素材は泥炭であろうと判断した。また鉱物が含まれていることも確認している。(*1)Ⅴ－3層旧河道下床より30cmほど下位、約120万年前の貝化石層上部から、搾流されてきたと思われる泥炭の塊が出土している。本遺跡上流のどこかに、比較的古い時代の泥炭層が存在する可能性があるらしく（*2)、本遺物もこの泥炭層に関連したものと推定される。

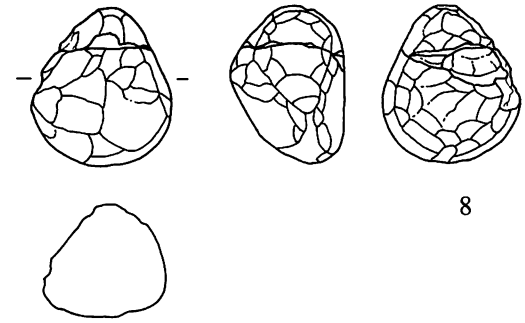
平面および断面形は、ローリングを受けたためか丸味のある三角形状を呈し、中央部に厚みがある。



6



7



8

図Ⅵ-5-4　Ⅴ－3相当層・Ⅴ－3層旧河道出土の木製品（4）

加工痕は比較的明瞭で、特に表面は顕著である。下端部に長軸方向と斜交する溝状の凹みが認められる。

(*1) 北海道埋蔵文化財センター資料調査課長　花岡正光氏のご教示による。
(*2) 北海道開拓記念館調査収集課長　赤松守雄氏、同資料管理課学芸員　山田悟郎氏のご教示による。

恵庭市教育委員会（1992）『ユカンボシＥ３遺跡Ｂ地点』
恵庭市教育委員会（1993）『ユカンボシＥ９遺跡　ユカンボシＥ３遺跡』
越田賢一郎（1984）「北海道の鉄鍋について」『物質文化４２』
（財）北海道埋蔵文化財センター（1983、1984、1985）『ユオイチャシ跡　ポロモイチャシ跡　二風谷遺跡』北埋調報２６
〃（1985、1986、1987、1988）『小樽市忍路土場遺跡、忍路５遺跡』５分冊北埋調報５３
〃（1987）『深川市納内３遺跡』北埋調報６０
〃（1992）「美々８遺跡低湿部」２分冊『美沢川流域の遺跡群』ＸⅣ北埋調報７７
〃（1993）『豊浦町高岡１遺跡』北埋調報８８
〃（1993）「美沢３遺跡　美々８遺跡」『美沢川流域の遺跡群』ＸⅦ北埋調報８９
〃（1993）『』
〃（1994）『千歳市キウス５遺跡　キウス７遺跡（２）ケネフチ８遺跡』北埋調報９２
〃（1994）「芦別市滝里４遺跡（１）」『滝里遺跡群Ⅴ』北埋調報８５
〃（1995）「千歳市美々８遺跡低湿部　美々８遺跡」『美沢川流域の遺跡群』ⅩⅧ北埋調報102
佐藤寒山　編「刀剣」『日本の美術Ｎｏ．６'66』
瀬棚町教育委員会（1980）『瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書』
福島県立博物館（1988）『日本刀の起源展－直刀から彎刀へ－』
福島県立博物館（1996）『企画展　いにしえの木の匠－出土木製品は語る－』

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちとせしきうす５いせき（３）
書名	千歳市　キウス５遺跡（３）
副書名	北海道横断自動車道（千歳～夕張）建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第１１５集
編著者名	皆川洋一
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒064 札幌市中央区南２６条西１１丁目
発行年月日	平成９年３月２８日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
キウス５	北海道千歳市 中央852ほか	01234	93	42°52′33″	141°43′45″	19950510 ～1025 19960507 ～1026	4,100 300	道路建設に伴う事前発掘調査。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
キウス５	・集落跡 ・墓地	・縄文時代早～晩期 ・続縄文時代 ・擦文時代 ・アイヌ文化期	竪穴住居跡　7軒 土壙(墓を含む)157基 小ピット　25基 Tピット　6基 焼土　165か所 集石　16か所 炭化物集中地点 18か所 フレイク集中地点 2か所	・土器（手稲式、堂林式、タンネトウL式、大狩部式ほか） ・石器（各種剥片石器、礫石器） ・石製品（垂飾、玉ほか） ・土製品（土偶、土玉、オロシガネ状土製品ほか） ・木製品（槌状木製品、舟形木製品ほか） ・鉄製品	・縄文時代全般から続縄文時代の集落跡及び墓地。さらに、擦文時代、アイヌ文化期の土壙墓を検出。 ・旧河道より縄文時代後期～晩期の木製品が出土。

（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第115集

千歳市　キウス５遺跡（３）

北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

平成９年３月28日発行

編集　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒064　札幌市中央区南26条西11丁目
TEL（011）561－3131
FAX（011）561－0458
印刷　株式会社　総北海　札幌支社
〒001　札幌市北区北30条西５丁目
TEL（011）757－6995